

# 南 玉 埋 堀 遺 跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備  
(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群 馬 県 伊 勢 崎 土 木 事 務 所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 南玉埋堀遺跡

国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備  
(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

群馬県伊勢崎土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団





1. 3区第1面全景(南上空から)



2. 2区第2面西側全景(東上空から)





3. 3区第2面全景(上が北)



4. 4区第4面全景(西上空から)



5. 2区矢川の旧河道から出土した木製品漆碗の外側



6. 2区矢川の旧河道から出土した木製品漆碗の内側

5・6ともに上段左から第34図19～23、中段左から第35図24～27、下段左から 第35図28～30、第36図31





7. 3区27号竪穴住居から出土した銅製巡方(表面)



8. 3区27号竪穴住居から出土した銅製巡方(裏面)



9. 銅製巡方の裏面の一部を外した状態

銅製巡方の内部には、鋳の他、革帯や縫り紐とみられる有機物が残存する。有機物の種類については不明である。



10. 銅製巡方の内部拡大写真

銅製巡方の内部の上端には、革帯を補強するために縫い込まれた縫り糸が確認できる。革帯とみられる有機物は袋状に縫い合わされ、螺旋状に通された糸の一部が残存する。

# 序

国道354号玉村伊勢崎バイパスは、「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」の一つとして、これまで整備が推進されています。平成26年8月に開通した国道354号玉村伊勢崎バイパスは、群馬県内において東西の各地域を連携させる東毛広域幹線道路整備事業の一翼を担っております。開通によって、周辺道路の渋滞緩和はもとより、観光地へのアクセス向上、防災および医療搬送の充実、農業や商工業における物流の効率化などが図られています。また、利便性の高い道路として周辺住民をはじめ多くの県民から期待されています。

南玉埋堀遺跡は、国道354号玉村伊勢崎バイパスの整備に伴い、群馬県伊勢崎土木事務所の委託を受け、平成24年度に発掘調査事業、平成26・27年度に整理事業を行いました。そして、本報告書は、発掘調査、整理事業の成果をまとめました。

玉村町では、これまでに遺跡の発掘調査が数多く行われています。本遺跡の周辺地域につきましても、特に古墳時代から江戸時代に至る濃密な埋蔵文化財包蔵地であることから、各所において発掘調査が行われています。

南玉埋堀遺跡からは、古墳時代から平安時代までの竪穴住居群が発見され、当地域における古代集落の様相が明らかとなりつつあります。また、天明三(1783)年の浅間山噴火によって被災した畠の他に、天明泥流によって埋没した矢川の旧河道を発見するなど、大きな成果がありました。

発掘調査から本報告書の刊行に至るまで、群馬県伊勢崎土木事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、玉村町教育委員会をはじめとする関係諸機関及び地元関係者の皆様には多大なる御指導・御協力を賜りました。ここに心より感謝を申し上げます。そして、本報告書が周辺地域の歴史を解明するため、新たな資料として多くの方々に活用されることを願い、序といたします。

平成28年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 中野三智男



# 例 言

1. 本書は、国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴い、事前調査が行われた南玉埋堀遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。平成24年度に行われた発掘調査の成果を報告する。
2. 遺跡の所在地 群馬県佐波郡玉村町大字南玉951、952、953、957-1、958-1、958-2、959-1、960、988、1030、1031、1032、1034、1035、1052、1054-1、1055-1
3. 事業主体 群馬県伊勢崎土木事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)
5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査体制及び調査期間は以下のとおりである。















平成23年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財の発掘調査委託  
調査担当 井川達雄(上席専門員)、田村 博(主任調査研究員)、飯島義雄(専門調査役)、山下歳信(専門調査役)  
遺跡掘削請負工事 株式会社測研  
遺構測量・デジタル編集業務 アコン測量設計株式会社  
航空測量・空中写真撮影業務 株式会社シン技術コンサル  
遺物洗滌・注記業務 有限会社高澤考古学研究所  
履行期間 平成24年3月30日～平成25年3月31日 調査期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日  
調査面積 13,880㎡
7. 整理事業の期間及び体制は以下のとおりである。

平成25年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財の整理委託  
整理担当 長澤典子(主任調査研究員) 平成26年8月1日～平成27年3月31日  
佐藤元彦(補佐(統括)) 平成26年8月1日～平成26年10月31日  
徳江秀夫(上席専門員) 平成27年1月1日～平成27年3月31日  
履行期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日 整理期間 平成26年8月1日～平成27年3月31日  
平成26年度国道354号玉村伊勢崎バイパス社会資本総合整備(活力創出基盤整備)に伴う埋蔵文化財の整理委託  
整理担当 宮下 寛(主任調査研究員) 平成27年4月1日～平成28年3月31日  
佐藤元彦 平成27年4月1日～平成27年7月31日  
大木紳一郎(専門調査役) 平成27年4月1日～平成27年4月31日  
履行期間 平成27年3月31日～平成28年3月31日 整理期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日
8. 本報告書作成の担当者は以下のとおりである。

編集：宮下 寛、長澤典子  
本文執筆：第1章第1・2節・第2章 大木紳一郎  
第1章第3～7節・第3～7章・第8章第1節・第9章 宮下 寛  
デジタル編集：齊田智彦(主任調査研究員)  
遺構写真：発掘調査担当者  
遺物保存処理：関 邦一(補佐(総括))  
遺物実測・観察表執筆 石器・石製品：津島秀章(専門員(総括))、縄文土器・弥生土器：石坂 茂(専門調査役)、土師器・須恵器：神谷佳明(専門調査役)、陶磁器：大西雅広(上席専門員・調査統括)、金属製品・木製品：関 邦一  
遺物写真：津島秀章、石坂 茂、大西雅広、関 邦一、長澤典子、佐藤元彦
9. 発掘調査及び整理事業での分析委託  
テフラ分析、プラント・オパール分析：株式会社火山灰考古学研究所(第8章第2・3節)  
有機物分析・蛍光X線分析・電子顕微鏡写真撮影：株式会社パレオ・ラボ(第8章第4節)
10. 石材同定は、飯島静男氏(群馬県地質研究所会員)に依頼した。
11. 記録資料および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。
12. 発掘調査及び整理事業・本報告書の作成には次の方々には有益なご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。(五十音順、敬称略)  
群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県玉村町教育委員会、南坊城光興(道明寺天満宮 宮司)



# 凡 例

1. 本書で使用した座標値は、国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を用いた。遺構図中に記した座標値については、国家座標値X・Y値の下3桁のみを用いて表記した。
2. 遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北であり、真北方向角は、+0° 24' 48.17" (東偏)である。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物実測図と遺物写真は原則として同縮率であり、縮率1/3以外のものは明記した。
4. 遺構平面図や遺構断面図に表示した数値は標高であり、単位はメートルである。
5. 本書の図版で使用したスクリーンパターン及びマークは、以下のとおりである。木製品黒漆・赤漆は第28図に示した。  
遺構平面図 焼土  攪乱  粘土  灰面  硬化面   
遺物実測図 スス  灰釉  黒色  赤色  粘土  摩滅  燻   
石器実測図 火打石…  炭化物 
6. 遺構平面図中の遺物記号は、次のことを示す。旧河道の出土遺物については、第32図の凡例に示した。  
● 土師器・須恵器・土製品    ▲ 石器・石製品・石造物    ■ 鉄・金属製品
7. 遺構の主軸方向・走行は、長軸方向で北から東西90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合はN-○°-Eとした。竪穴住居の主軸方向については、カマドの設置された方向を主軸と捉えた。カマドが確認できない竪穴住居については長軸方向を主軸とした。遺構の面積は上端を計測し、計測はプランメーターで3回行いその平均値を採用した。遺構の計測値は、縮尺1/20の図面を用いて計測し、m単位で表した。( )は残存値を表した。
8. 掘立柱建物の柱間寸法は、柱筋に沿った柱穴心々間をメートル法計測した。
9. 遺構土層注記及び土器・陶磁器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に準拠している。
10. 遺物観察表の記載方法は、以下のとおりである。
  - ・計測値の( )は残存値を表す。
  - ・計測値は、口:口径、底:底径、台:高台径、高:器高、稜:稜径、摘:摘みの最大径、孔:孔径、脚:脚部径、頸:頸部径、胴:胴部の最大径、鏝:鏝の径、最:内湾杯の最大径、径:外形の径、長:長さ、厚:厚さ(以上単位はcm)、重:重量(単位はg)と略記した。
  - ・胎土観察における砂粒の表現は、0.2mm以下を細砂粒、0.2～2.0mmを粗砂粒、2.0mm以上を小礫とした。
  - ・縄文土器の胎土分類で、Aは「多量の石英、赤・灰白色礫粗砂を含むやや緻密な胎土。」、Bは「多量の灰白色粗細砂と少量の石英、角閃石粗砂を含むやや緻密な胎土。」、Cは「多量の石英・結晶片岩・灰白色礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。」であり、各分類は肉眼観察による相対的なものである。
11. 整理作業によって遺構名・遺構番号の変更、欠番が生じたため、第2表に記した。
12. テフラについては、以下の略称を用いた。  
浅間Cテフラ=As-C    4世紀初頭    浅間Bテフラ=As-B    天仁元(1108)年  
浅間Aテフラ=As-A    天明三(1783)年    榛名二ツ岳渋川テフラ=Hr-FA    6世紀初頭
13. 本書で使用した地図は、以下のものを使用した。  
国土地理院 地勢図1:200,000 「宇都宮」(平成23年6月1日発行)  
国土地理院 地勢図1:50,000 「深谷」(平成10年9月1日発行)  
国土地理院 地勢図1:25,000 「伊勢崎」(平成15年2月1日発行)  
国土地理院 地勢図1:25,000 「高崎」「前橋」「大胡」(平成22年12月1日発行)  
伊勢崎市現況図1:10,000 No. 1・3 (平成22年10月)  
玉村町全図1:10,000 (平成6年8月)    玉村町都市計画区域図1:2,500 8・9 (平成19年12月)



# 目次

口絵	5 集石	100
序	6 道	101
例言	7 遺構外の出土遺物	103
凡例	第5節 4区の遺構と遺物	105
目次	1 畠	105
挿図目次	2 復旧溝群	118
表目次	3 道	130
写真図版目次	4 遺構外の出土遺物	131
	第6節 5区の遺構と遺物	132
第1章 発掘調査に至る経緯と経過	1 復旧溝群	132
第1節 発掘調査に至る経緯	2 畠	136
第2節 発掘調査の経過	3 溝	137
第3節 調査日誌	4 遺構外の出土遺物	138
第4節 調査区の設定	第4章 中世以降の遺構と遺物	
第5節 調査の方法	第1節 調査の概要	139
第6節 基本土層	第2節 1区の遺構と遺物	139
第7節 整理作業の経過	1 掘立柱建物	139
	2 土坑	142
第2章 地理的及び歴史的環境	3 井戸	142
第1節 遺跡の位置と周辺の地形	4 溝	144
第2節 歴史的環境	5 遺構外の出土遺物	146
	第3節 2区の遺構と遺物	146
第3章 近世の遺構と遺物	1 水田	146
第1節 調査の概要	2 溝	153
第2節 1区の遺構と遺物	3 遺構外の出土遺物	154
1 復旧溝群・復旧溝	第4節 3区の遺構と遺物	154
2 畠	1 土坑・ピット	154
3 土坑	2 井戸	166
4 溝	3 溝	169
5 遺構外の出土遺物	4 遺構外の出土遺物	179
第3節 2区の遺構と遺物	第5節 4区の遺構と遺物	181
1 復旧溝群	1 土坑	181
2 土坑	2 溝	181
3 溝	3 遺構外の出土遺物	184
4 旧河道	第6節 5区の遺構と遺物	185
5 遺構外の出土遺物	1 土坑	185
第4節 3区の遺構と遺物	2 井戸	187
1 復旧溝群	3 溝	187
2 畠	4 遺構外の出土遺物	190
3 井戸		
4 溝		

第5章 奈良・平安時代の遺構と遺物	
第1節 調査の概要	191
第2節 1区の遺構と遺物	191
1 土坑	191
2 水田	191
3 遺構外の出土遺物	195
第3節 3区の遺構と遺物	195
1 竪穴住居	195
2 土坑・ピット	214
3 溝	226
4 水田	227
5 遺構外の出土遺物	229
第4節 4区の遺構と遺物	231
1 竪穴住居	231
2 土坑	235
3 水田	235
4 遺構外の出土遺物	236
第5節 5区の遺構と遺物	240
1 竪穴住居	240
2 水田	242
3 遺構外の出土遺物	243
第6章 古墳時代の遺構と遺物	
第1節 調査の概要	244
第2節 1区の遺構と遺物	244
1 土坑	244
2 遺構外の出土遺物	244
第3節 3区の遺構と遺物	246
1 竪穴住居	246
2 土坑・ピット	300
3 溝	316
4 土器集積	318
5 遺構外の出土遺物	322
第4節 4区の遺構と遺物	325
1 土坑	325
2 溝	327
3 粘土採掘坑	331
4 遺構外の出土遺物	332
第5節 5区の遺構と遺物	333
1 土坑・ピット	333
2 遺構外の出土遺物	335
第7章 縄文時代・弥生時代の遺物	
第1節 調査の概要	336
第2節 1区遺構外の出土遺物	336
第3節 3区遺構外の出土遺物	336
第4節 5区遺構外の出土遺物	336
第8章 自然科学分析	
第1節 概要	337
第2節 南玉埋堀遺跡の土層とテフラ	338
第3節 南玉埋堀遺跡におけるプラント・オパール分 析	343
第4節 銅製巡方の材質分析	346
第9章 総括	
第1節 調査の成果	352
第2節 南玉埋堀遺跡で確認した矢川の旧河道につい て	353
第3節 矢川の旧河道から出土した下駄について	360
第4節 竪穴住居の時代別変遷と分布状況について	365
第5節 南玉埋堀遺跡から出土した銅製巡方につい て	373
土坑・ピット計測表	378
出土遺物観察表	381
写真図版	
発掘調査報告書抄録	
付図	



第121図	3区第2面拡張部(中世以降)全体図	156	第179図	3区第2面水田	228
第122図	3区1・3・5号土坑	161	第180図	3区遺構外の出土遺物	230
第123図	3区11・12号土坑と出土遺物・14・15・17・18・19号土坑・24号土坑と出土遺物・36号土坑	162	第181図	4区第4面(奈良・平安時代)全体図	232
第124図	3区38～42・44～48号土坑	163	第182図	4区1号竪穴住居と出土遺物(1)	233
第125図	3区49～52・56～58・60号土坑	164	第183図	4区1号竪穴住居出土遺物(2)、2号竪穴住居と出土遺物	234
第126図	3区63号土坑と出土遺物・66号土坑・70号土坑と出土遺物・73号土坑、14・20～24号ピット	165	第184図	4区2号土坑	235
第127図	3区3～7号井戸	167	第185図	4区第4面水田全体図	237
第128図	3区5号井戸出土遺物	168	第186図	4区第4面水田(1)	238
第129図	3区5・11号溝	169	第187図	4区第4面水田(2)	239
第130図	3区5・11号溝土層断面図と出土遺物	170	第188図	5区1号竪穴住居	240
第131図	3区7号溝と出土遺物・8号溝	172	第189図	5区第2面(奈良・平安時代)全体図	241
第132図	3区9号溝と出土遺物	173	第190図	5区1号竪穴住居カマドと出土遺物	242
第133図	3区10号溝	174	第191図	5区第2面水田	243
第134図	3区12号溝と出土遺物	175	第192図	5区遺構外の出土遺物	243
第135図	3区13号溝	176	第193図	1区8号土坑	244
第136図	3区14号溝出土遺物	177	第194図	1区第2面(古墳時代)全体図	245
第137図	3区14号溝	178	第195図	3区第2面(古墳時代)全体図	247
第138図	3区16号溝	179	第196図	3区第2面拡張部(古墳時代)全体図	248
第139図	3区遺構外の出土遺物	179	第197図	3区1号竪穴住居	249
第140図	3区17号溝	180	第198図	3区1号竪穴住居出土遺物	250
第141図	4区4号土坑	181	第199図	3区2号竪穴住居と出土遺物	251
第142図	4区第4面(中世以降)全体図	182	第200図	3区3号竪穴住居と出土遺物(1)	252
第143図	4区1号溝と出土遺物	183	第201図	3区3号竪穴住居出土遺物(2)	253
第144図	4区8号溝	184	第202図	3区5号竪穴住居	255
第145図	5区1・2号土坑	185	第203図	3区5号竪穴住居出土遺物	256
第146図	5区第2面(中世以降)全体図	186	第204図	3区6号竪穴住居	257
第147図	5区1号井戸と出土遺物	187	第205図	3区6号竪穴住居掘り方・カマド	258
第148図	5区1・2号溝	188	第206図	3区6号竪穴住居出土遺物	259
第149図	5区3～6号溝	190	第207図	3区7号竪穴住居と出土遺物	261
第150図	5区遺構外の出土遺物	190	第208図	3区8号竪穴住居	262
第151図	1区第2面(奈良・平安時代)全体図	192	第209図	3区8号竪穴住居出土遺物(1)	263
第152図	1区9号土坑と出土遺物・11号土坑	193	第210図	3区8号竪穴住居出土遺物(2)	264
第153図	1区第2面水田	194	第211図	3区9号竪穴住居	266
第154図	3区第2面(奈良・平安時代)全体図	196	第212図	3区9号竪穴住居出土遺物	267
第155図	3区第2面拡張部(奈良・平安時代)全体図	197	第213図	3区10号竪穴住居	268
第156図	3区4号竪穴住居	198	第214図	3区10号竪穴住居カマドと出土遺物	269
第157図	3区4号竪穴住居出土遺物	199	第215図	3区12号竪穴住居	271
第158図	3区11号竪穴住居	200	第216図	3区12号竪穴住居カマド	272
第159図	3区11号竪穴住居カマドと出土遺物(1)	201	第217図	3区12号竪穴住居出土遺物	273
第160図	3区11号竪穴住居出土遺物(2)	202	第218図	3区13号竪穴住居	275
第161図	3区11号竪穴住居出土遺物(3)	203	第219図	3区13号竪穴住居カマドと出土遺物	276
第162図	3区25号竪穴住居	205	第220図	3区14号竪穴住居と出土遺物	277
第163図	3区25号竪穴住居出土遺物	206	第221図	3区15号竪穴住居	279
第164図	3区26号竪穴住居	207	第222図	3区15号竪穴住居出土遺物	280
第165図	3区27号竪穴住居	208	第223図	3区16号竪穴住居	281
第166図	3区27号竪穴住居出土遺物	209	第224図	3区17号竪穴住居	282
第167図	3区28号竪穴住居と出土遺物	210	第225図	3区17号竪穴住居カマドと出土遺物	283
第168図	3区32号竪穴住居と出土遺物	211	第226図	3区18号竪穴住居	284
第169図	3区39号竪穴住居と出土遺物	212	第227図	3区18号竪穴住居出土遺物	285
第170図	3区40号竪穴住居と出土遺物	213	第228図	3区19号竪穴住居	286
第171図	3区41号竪穴住居と出土遺物	214	第229図	3区19号竪穴住居出土遺物	287
第172図	3区2号土坑・4・6・7号土坑と出土遺物・8号土坑・13号土坑と出土遺物	221	第230図	3区20号竪穴住居と出土遺物	289
第173図	3区10号土坑と出土遺物・16号土坑・20号土坑と出土遺物・21・30・31号土坑・34号土坑と出土遺物	222	第231図	3区21号竪穴住居	290
第174図	3区29・35・54号土坑と出土遺物・59・67・68・71・72号土坑	223	第232図	3区22号竪穴住居と出土遺物	291
第175図	3区75土坑・76号土坑と出土遺物・82・87・88土坑・89号土坑と出土遺物・90～92号土坑	224	第233図	3区23号竪穴住居と出土遺物	292
第176図	3区93・95・96号土坑、5号ピットと出土遺物・6・7号ピット・8・9・18号ピットと出土遺物	225	第234図	3区24号竪穴住居と出土遺物	293
第177図	3区19号ピットと出土遺物・42号ピット・45号ピットと出土遺物・46～48・50・51・53～55号ピット	226	第235図	3区30号竪穴住居	294
第178図	3区19号溝と出土遺物	227	第236図	3区30号竪穴住居出土遺物(1)	295
			第237図	3区30号竪穴住居出土遺物(2)	296
			第238図	3区31・35号竪穴住居と出土遺物	298
			第239図	3区36号竪穴住居と出土遺物・37号竪穴住居	299
			第240図	3区38号竪穴住居	300
			第241図	3区38号竪穴住居出土遺物	301
			第242図	3区9・22・23・25～27号土坑・28号土坑と出土遺物・32号土坑	309
			第243図	3区33・37・43・55号土坑・61・62・64号土坑と出土遺物	309

号土坑	310	
第244図	3区65号土坑と出土遺物・74号土坑・77・78号土坑と出土遺物・79号土坑	311
第245図	3区80号土坑・81号土坑と出土遺物・83・84号土坑・85号土坑と出土遺物	312
第246図	3区86号土坑と出土遺物・94号土坑、1号ピット・2号ピットと出土遺物・3・4・10・11・13・15・16号ピット	313
第247図	3区17号ピットと出土遺物・25～38号ピット	314
第248図	3区39～41・43・44・49・52号ピット	315
第249図	3区15号溝と出土遺物	316
第250図	3区18・20号溝	317
第251図	3区21・22号溝	318
第252図	3区1号土器集積と出土遺物	319
第253図	3区2号土器集積と出土遺物(1)	320
第254図	3区2号土器集積出土遺物(2)	321
第255図	3区2号土器集積出土遺物(3)	322
第256図	3区遺構外の出土遺物(1)	323
第257図	3区遺構外の出土遺物(2)	324
第258図	4区1・3・5・6号土坑	325
第259図	4区第4・5面(古墳時代)全体図	326
第260図	4区3号溝出土遺物	328
第261図	4区2～6号溝	329
第262図	4区7号溝	330
第263図	4区1号粘土採掘坑	331
第264図	4区遺構外の出土遺物	332
第265図	5区第2面(古墳時代)全体図	334
第266図	5区3号土坑と出土遺物・4号土坑、1～5号ピット	335
第267図	5区遺構外の出土遺物	335
第268図	1・3・5区縄文時代・弥生時代の遺構外の出土遺物	336
第269図	南玉埋堀遺跡テフラ分析、プラント・オパール分析試料採取地点	340
第270図	南玉埋堀遺跡4区基本土層断面の土層柱状図(●：テフラ分析資料、数字：資料番号)	340

第271図	南玉埋堀遺跡4区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果	344
第272図	植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真	345
第273図	巡方とその内部および分析試料(3a～4b：実体顕微鏡写真)1 a. 巡方の表面 1 b. 巡方の裏面 2. 断面模式図(a-a断面) 3 a. 内部拡大 3 b. b層の表面 4 a・4 b. 分析試料の表面と裏面(a層とb層)	349
第274図	b層の電子顕微鏡写真(X線分析位置)と黄白色付着物の赤外線分光スペクトル図 1 a. b層表面(黄白色付着物) 1 b. b層(黒色部) 2 a. b層断面 2 b. b層断面の拡大 3. b層表面の黄白色付着物の赤外線分光分析(数字は主な吸収、縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber(cm <sup>-1</sup> );カイザー)	350
第275図	金属部の蛍光X線分析位置 1. 表金具表面 2. 鋳付け根破断面(小楕円)と裏金具内面	351
第276図	旧河道と天明泥流到達範囲と周辺遺跡図(関・中島2005より作成。この地図の作成にあたっては玉村町長の了承を得て、同町発行の2,500分の1の地形図を使用して複製したものである。)	354
第277図	キャサリン台風(昭和22(1947)年9月)発生後の旧地形図(米空軍による航空写真をもとに作成。)	356
第278図	天明泥流到達範囲図(関・中島2005より作成。この地図の作成にあたっては伊勢崎市長・玉村町長の了承を得て、同市・同町発行の10,000分の1の地形図を使用して複製したものである。)	357
第279図	南玉埋堀遺跡1～5区全体図(近世)と遺構確認面の断面図	359
第280図	旧河道の下駄出土状況(番号は第36～41図と一致する。)	361
第281図	下駄のX線写真(第38図36)	363
第282図	旧河道から出土した焼印のある下駄と桶	364
第283図	古墳時代初頭と5世紀前半の竪穴住居分布図	367
第284図	6世紀代の竪穴住居分布図	368
第285図	8世紀代の竪穴住居分布図	369
第286図	9世紀代の竪穴住居分布図	371
第287図	10世紀代の竪穴住居分布図	372
第288図	道明寺天満宮所蔵の銀装革帯(この図は、道明寺天満宮の許可を得て「道明寺天満宮宝物選」9頁図版4から転載したものである。)	374
第289図	銅製巡方の内部	377

## 表 目 次

第1表	遺構確認面一覧表	6
第2表	遺構名・遺構番号変更、欠番の遺構一覧表	10
第3表	南玉埋堀遺跡 周辺遺跡一覧表	23
第4表	1区1号掘立柱建物計測表	141
第5表	南玉埋堀遺跡におけるテフラ検出分析結果	341
第6表	屈折率測定結果	341
第7表	南玉埋堀遺跡におけるプラント・オパール分析結果	343
第8表	分析試料とその詳細	347
第9表	破片のX線分析結果(単位：%)	348

第10表	金属部の蛍光X線分析結果(単位：%)	348
第11表	南玉埋堀遺跡で確認した旧河道周辺に所在する遺跡(番号は第276図と一致する。)	355
第12表	旧河道から出土した下駄一覧表	362
第13表	竪穴住居の時期別軒数	365
第14表	群馬県内出土金属製巡方一覧表(石田2013より作成。)	375
第15表	土坑計測表	378
第16表	ピット計測表	380
第17表	出土遺物観察表	381

## 写真図版目次

口絵1	1. 3区第1面全景(南上空から) 2. 2区第2面西側全景(東上空から)	3. 1区1号復旧溝群土層断面(東から)
口絵2	3. 3区第2面全景(上が北) 4. 4区第4面全景(西上空から)	4. 1区1号復旧溝群全景(西から)
口絵3	5. 2区矢川の旧河道から出土した木製品漆碗の外側 6. 2区矢川の旧河道から出土した木製品漆碗の内側	5. 1区2号復旧溝群土層断面(南から)
口絵4	7. 3区27号竪穴住居から出土した銅製巡方(表面) 8. 3区27号竪穴住居から出土した銅製巡方(裏面) 9. 銅製巡方の裏面の一部を外した状態 10. 銅製巡方の内部拡大写真	P L . 3 1. 1区2号復旧溝群全景(南から) 2. 1区2・3号復旧溝群全景(東から) 3. 1区3号復旧溝群土層断面(東から) 4. 1区4号復旧溝群土層断面(東から) 5. 1区4号復旧溝群土層断面(東から) 6. 1区5号復旧溝群土層断面(南から) 7. 1区5号復旧溝群土層断面(南から) 8. 1区5号復旧溝群・6号復旧溝全景(南から)
P L . 1	1. 1区第1面西側全景(東から) 2. 1区第1面西側全景(西から)	P L . 4 1. 1区7号復旧溝群土層断面(南から) 2. 1区7号復旧溝群土層断面(南から) 3. 1区7号復旧溝群全景(北から)
P L . 2	1. 1区第1面東側全景(東から) 2. 1区1号復旧溝群土層断面(東から)	



- |         |                          |         |                               |
|---------|--------------------------|---------|-------------------------------|
|         | 4. 1区復旧溝群調査風景(南から)       |         | 6. 3区7号復旧溝群全景(南から)            |
|         | 5. 1区1号島土層断面(南から)        |         | 7. 3区8号復旧溝群土層断面(西から)          |
|         | 6. 1区2号島土層断面(南から)        |         | 8. 3区9号復旧溝群土層断面(東から)          |
|         | 7. 1区3号島土層断面と掘削痕(西から)    | P L. 16 | 1. 3区10号復旧溝群土層断面(東から)         |
|         | 8. 1区3号島全景(東から)          |         | 2. 3区11号復旧溝群全景(南から)           |
| P L. 5  | 1. 1区6号土坑土層断面(南から)       |         | 3. 3区12号復旧溝群全景(北から)           |
|         | 2. 1区6号土坑全景(南から)         |         | 4. 3区13号復旧溝群土層断面(東から)         |
|         | 3. 1区7号土坑土層断面(西から)       |         | 5. 3区14号復旧溝群全景(西から)           |
|         | 4. 1区7号土坑全景(東から)         |         | 6. 3区15～18号復旧溝群全景(北から)        |
|         | 5. 1区4号溝土層断面(南から)        |         | 7. 3区15号復旧溝群全景(南から)           |
|         | 6. 1区4号溝礫出土状況(北から)       | P L. 17 | 1. 3区16号復旧溝群全景(南東から)          |
|         | 7. 1区4号溝礫出土状況(北から)       |         | 2. 3区17号復旧溝群全景(北から)           |
|         | 8. 1区4号溝礫出土状況(東から)       |         | 3. 3区1号島土層断面(西から)             |
| P L. 6  | 1. 1区4号溝全景(南から)          |         | 4. 3区1号島全景(西から)               |
|         | 2. 1区4号溝全景(北から)          |         | 5. 3区2号島土層断面(西から)             |
|         | 3. 2区第1面全景(東から)          |         | 6. 3区2号島全景(西から)               |
| P L. 7  | 1. 2区1号復旧溝群全景(南から)       |         | 7. 3区3号島土層断面(南から)             |
|         | 2. 2区1・2号復旧溝群全景(東から)     |         | 8. 3区4号島土層断面(南から)             |
|         | 3. 2区2号復旧溝群全景(南東から)      | P L. 18 | 1. 3区4号島全景(南から)               |
|         | 4. 2区3号復旧溝群全景(東から)       |         | 2. 3区5号島土層断面(南から)             |
|         | 5. 2区1・4号土坑全景(北から)       |         | 3. 3区5号島と1号復旧溝群全景(南から)        |
|         | 6. 2区2号土坑全景(南から)         |         | 4. 3区6号島土層断面(東から)             |
|         | 7. 2区3号土坑全景(南西から)        |         | 5. 3区6号島全景(西から)               |
|         | 8. 2区6号土坑全景(北から)         |         | 6. 3区7号島土層断面(東から)             |
| P L. 8  | 1. 2区7号土坑全景(北から)         |         | 7. 3区7号島土層断面(東から)             |
|         | 2. 2区8～11号土坑土層断面(南東から)   |         | 8. 3区7号島全景(西から)               |
|         | 3. 2区8～11号土坑全景(西から)      | P L. 19 | 1. 3区8号島全景(西から)               |
|         | 4. 2区12号土坑土層断面(南から)      |         | 2. 3区9・10号島全景(北から)            |
|         | 5. 2区12号土坑全景(南西から)       |         | 3. 3区10号島土層断面(南から)            |
|         | 6. 2区13号土坑遺物出土状況(東から)    |         | 4. 3区1号井戸土層断面(南から)            |
|         | 7. 2区13号土坑遺物出土状況(東から)    |         | 5. 3区1号井戸石積み出土状況(東から)         |
|         | 8. 2区14号土坑全景(南から)        |         | 6. 3区1号井戸石積み出土状況(南から)         |
| P L. 9  | 1. 2区15～17号土坑全景(南から)     |         | 7. 3区1号井戸掘り方全景(南から)           |
|         | 2. 2区1・2号溝全景(北から)        |         | 8. 3区2号井戸石積み出土状況(西から)         |
|         | 3. 2区3号溝全景(南から)          | P L. 20 | 1. 3区2号井戸石積み出土状況と掘り方土層断面(南から) |
|         | 4. 2区旧河道全景(南東から)         |         | 2. 3区2号井戸掘り方全景(南から)           |
| P L. 10 | 1. 2区旧河道土層断面(北西から)       |         | 3. 3区1号溝全景(北から)               |
|         | 2. 2区旧河道全景(南から)          |         | 4. 3区2号溝と1号道全景(南から)           |
|         | 3. 2区旧河道全景(北から)          |         | 5. 3区3号溝全景(東から)               |
|         | 4. 2区旧河道全景(西から)          |         | 6. 3区4号溝全景(東から)               |
| P L. 11 | 1. 3区旧河道確認状況(南東から)       |         | 7. 3区1号集石遺物出土状況(南から)          |
|         | 2. 3区旧河道全景(南東から)         |         | 8. 3区1号集石遺物出土状況(南から)          |
|         | 3. 3区旧河道調査風景(南東から)       | P L. 21 | 1. 4区1号島土層断面(北から)             |
|         | 4. 3区旧河道調査風景(西から)        |         | 2. 4区1号島土層断面(北から)             |
|         | 5. 2区旧河道遺物出土状況(西から)      |         | 3. 4区1号島全景(西から)               |
|         | 6. 2区旧河道遺物出土状況(東から)      |         | 4. 4区1号島全景(西から)               |
|         | 7. 2区旧河道遺物出土状況(西から)      |         | 5. 4区2号島全景(東から)               |
| P L. 12 | 1. 2区旧河道遺物出土状況(東から)      |         | 6. 4区3号島全景(東から)               |
|         | 2. 2区旧河道遺物出土状況(東から)      |         | 7. 4区4号島土層断面(東から)             |
|         | 3. 2区旧河道遺物出土状況(南から)      |         | 8. 4区4号島全景(東から)               |
|         | 4. 2区旧河道遺物出土状況(東から)      | P L. 22 | 1. 4区第2面全景(上が北)               |
|         | 5. 2区旧河道遺物出土状況(南東から)     |         | 2. 4区第2面全景(西上空から)             |
|         | 6. 2区旧河道遺物出土状況(西から)      | P L. 23 | 1. 4区5号島と3号復旧溝群全景(東から)        |
|         | 7. 2区旧河道遺物出土状況(南東から)     |         | 2. 4区6号島全景(南から)               |
|         | 8. 2区旧河道遺物出土状況(北東から)     |         | 3. 4区6号島全景(東から)               |
| P L. 13 | 1. 3区第1面全景(東上空から)        |         | 4. 4区7号島土層断面(東から)             |
|         | 2. 3区第1面全景(上が北)          |         | 5. 4区7号島土層断面(南東から)            |
| P L. 14 | 1. 3区第1面東側全景(上が西)        |         | 6. 4区8号島全景(北から)               |
|         | 2. 3区1号復旧溝群全景(南から)       |         | 7. 4区9・10号島と7・8号復旧溝群全景(南から)   |
|         | 3. 3区2号復旧溝群全景(西から)       |         | 8. 4区11号島と5号復旧溝群全景(西から)       |
|         | 4. 3区3号復旧溝群全景(西から)       | P L. 24 | 1. 4区12号島全景(南から)              |
|         | 5. 3区4号復旧溝群土層断面(南から)     |         | 2. 4区13号島と16号復旧溝群全景(北から)      |
| P L. 15 | 1. 3区4・5号復旧溝群全景(南から)     |         | 3. 4区13号島土層断面(東から)            |
|         | 2. 3区4・5・7～9号復旧溝群全景(西から) |         | 4. 4区14号島全景(北から)              |
|         | 3. 3区6号復旧溝群土層断面(南から)     |         | 5. 4区15号島と9・12号復旧溝群全景(東から)    |
|         | 4. 3区4～7・19号復旧溝群全景(南から)  |         | 6. 4区島調査風景(北から)               |
|         | 5. 3区7号復旧溝群土層断面(南から)     |         | 7. 4区島調査風景(東から)               |

8. 4区1号復旧溝群土層断面(南西から)
- P L. 25 1. 4区1号復旧溝群土層断面(南から)  
2. 4区1・2・6・17号復旧溝群全景(西から)  
3. 4区2・17・18号復旧溝群全景(上が南)  
4. 4区17・18号復旧溝群土層断面(南から)  
5. 4区2・17・18号復旧溝群土層断面(南西から)  
6. 4区4号復旧溝群土層断面(南から)  
7. 4区4号復旧溝群全景(東から)  
8. 4区5号復旧溝群土層断面(北東から)
- P L. 26 1. 4区第2面東側復旧溝群全景(上が北)  
2. 4区6号復旧溝群土層断面(北東から)  
3. 4区6号復旧溝群と6号畠全景(東から)  
4. 4区7号復旧溝群土層断面(北から)  
5. 4区第3面全景(西から)
- P L. 27 1. 4区9号復旧溝群土層断面(南から)  
2. 4区9号復旧溝群と11～15号畠全景(北西から)  
3. 4区11号復旧溝群土層断面(西から)  
4. 4区12号復旧溝群土層断面(南から)  
5. 4区12・13号復旧溝群全景(南から)  
6. 4区14号復旧溝群土層断面(南から)  
7. 4区15号復旧溝群土層断面(南から)  
8. 4区14・15号復旧溝群全景(北西から)
- P L. 28 1. 4区1号道土層断面(南から)  
2. 4区1号道全景(北から)  
3. 4区1号道全景(南東から)  
4. 5区第1面西側北半部全景(東から)
- P L. 29 1. 5区第1面西側南半部全景(西から)  
2. 5区第1面東側全景(東から)
- P L. 30 1. 5区1号復旧溝群土層断面(南から)  
2. 5区1・2号復旧溝群全景(西から)  
3. 5区3・4号復旧溝群全景(西から)  
4. 5区3・4号復旧溝群全景(西から)  
5. 5区5号復旧溝群と1号畠全景(西から)  
6. 5区復旧溝群調査風景(西から)  
7. 5区7号溝全景(西から)
- P L. 31 1. 1区1号掘立柱建物全景(東から)  
2. 1区1号掘立柱建物P1土層断面(東から)  
3. 1区1号掘立柱建物P2土層断面(西から)  
4. 1区1号掘立柱建物P3土層断面(南西から)  
5. 1区1号掘立柱建物P4土層断面(西から)
- P L. 32 1. 1区1号掘立柱建物P5土層断面(南から)  
2. 1区1号掘立柱建物P6土層断面(南から)  
3. 1区1号土坑土層断面(南から)  
4. 1区1号土坑全景(南から)  
5. 1区2号土坑土層断面(南から)  
6. 1区2号土坑全景(南から)  
7. 1区3号土坑土層断面(南から)  
8. 1区3号土坑全景(南から)
- P L. 33 1. 1区4号土坑土層断面(南から)  
2. 1区4号土坑全景(北東から)  
3. 1区5号土坑土層断面(南から)  
4. 1区5号土坑全景(東から)  
5. 1区10号土坑土層断面(東から)  
6. 1区10号土坑全景(北から)  
7. 1区1号井戸土層断面(南から)  
8. 1区1号井戸全景(南から)
- P L. 34 1. 1区1号溝土層断面(北から)  
2. 1区2号溝土層断面(北から)  
3. 1区1・2号溝全景(南から)  
4. 1区1・2号溝全景(北から)  
5. 1区3号溝全景(北から)  
6. 1区3号溝土層断面(北から)
- P L. 35 1. 2区第2面水田全景(上が北)  
2. 2区第2面水田1号畦全景(南から)  
3. 2区第2面水田2号畦全景(南から)  
4. 2区第2面水田3号畦全景(南から)  
5. 2区第2面水田10号畦全景(西から)
- P L. 36 1. 2区第2面水田1・4～8号畦全景(西から)  
2. 2区第2面水田3～7号畦全景(東から)  
3. 2区第2面水田5・8・10号畦全景(南から)  
4. 2区第2面水田8～10号畦全景(東から)
- P L. 37 1. 2区第2面水田1号水口全景(南西から)  
2. 2区第2面水田2号水口全景(南から)  
3. 2区第2面水田3号水口全景(南から)  
4. 2区第2面水田1号水田全景(東から)  
5. 2区第2面水田2号水田全景(南から)  
6. 2区第2面水田3・6号水田全景(北から)  
7. 2区第2面水田調査風景(西から)  
8. 2区第3面水田全景(西から)
- P L. 38 1. 2区第3面水田9・11号水田と13号畦全景(西から)  
2. 2区第3面水田9・11・13号水田全景(西から)  
3. 2区第3面水田11～13号水田と15～17号畦全景(西から)  
4. 2区第3面水田16号畦全景(北から)  
5. 2区第3面水田12～14・17号畦全景(北から)  
6. 2区第4面水田全景(東から)  
7. 2区第4面水田全景(東から)  
8. 2区第4面水田と4号溝全景(南から)
- P L. 39 1. 2区第4面水田と5号溝全景(東から)  
2. 2区第4面水田18号畦全景(東から)  
3. 2区第4面水田18号畦土層断面(東から)  
4. 2区第4面水田18号畦土層断面(東から)  
5. 2区第4面水田18号畦土層断面(東から)  
6. 2区第4面水田18号畦土層断面(東から)  
7. 2区第4面水田土層断面(南から)  
8. 2区第4面水田土層断面(南から)
- P L. 40 1. 3区第2面全景(東上空から)  
2. 3区1号土坑全景(西から)  
3. 3区3号土坑全景(北から)  
4. 3区5～8号土坑全景(西から)  
5. 3区10・11・16号土坑全景(南から)
- P L. 41 1. 3区14・15号土坑全景(南から)  
2. 3区17号土坑全景(南から)  
3. 3区18号土坑全景(北から)  
4. 3区19・24号土坑全景(南から)  
5. 3区24号土坑土層断面(南から)  
6. 3区36号土坑全景(東から)  
7. 3区38号土坑全景(西から)  
8. 3区39号土坑全景(北から)
- P L. 42 1. 3区40～42号土坑全景(東から)  
2. 3区44号土坑全景(北から)  
3. 3区45号土坑全景(北から)  
4. 3区46～48号土坑全景(東から)  
5. 3区49・50号土坑全景(東から)  
6. 3区51号土坑全景(北から)  
7. 3区52号土坑全景(西から)  
8. 3区9・21・25・33・54～56号土坑全景(東から)
- P L. 43 1. 3区57号土坑全景(西から)  
2. 3区58・59号土坑土層断面(東から)  
3. 3区58・59号土坑全景(東から)  
4. 3区60号土坑全景(南から)  
5. 3区63号土坑全景(南から)  
6. 3区66号土坑全景(南から)  
7. 3区70号土坑全景(東から)  
8. 3区14号ピット土層断面(西から)
- P L. 44 1. 3区20号ピット全景(南から)  
2. 3区21号ピット全景(南から)  
3. 3区22号ピット全景(南から)  
4. 3区23号ピット全景(南東から)  
5. 3区24号ピット全景(南から)  
6. 3区3号井戸土層断面(南から)  
7. 3区3号井戸石積み出土状況(北から)  
8. 3区4号井戸土層断面(南西から)
- P L. 45 1. 3区4号井戸全景(北東から)  
2. 3区5号井戸石積み出土状況(東から)

3. 3区5号井戸石積み出土状況と掘り方土層断面(南から)  
4. 3区5号井戸掘り方全景(西から)  
5. 3区6号井戸と63号土坑土層断面(南から)  
6. 3区6号井戸と63号土坑全景(南から)  
7. 3区7号井戸と43・44号ピット土層断面(南東から)  
8. 3区5・11号溝全景(南から)
- P L. 46 1. 3区7・8号溝全景(西から)  
2. 3区9号溝全景(南から)  
3. 3区10号溝全景(南東から)  
4. 3区13号溝全景(南西から)  
5. 3区12号溝全景(北東から)  
6. 3区14号溝全景(東から)
- P L. 47 1. 3区16号溝全景(北東から)  
2. 3区17号溝全景(南東から)  
3. 4区4号土坑と1・3号溝土層断面(東から)  
4. 4区4号土坑と1～3号溝土層断面(南東から)  
5. 4区4号土坑全景(南東から)  
6. 4区1号溝全景(南東から)
- P L. 48 1. 5区第2面西側全景(東から)  
2. 5区第2面東側全景(西から)
- P L. 49 1. 5区1号土坑土層断面(南東から)  
2. 5区1号土坑全景(南西から)  
3. 5区2号土坑土層断面(南から)  
4. 5区2号土坑全景(北から)  
5. 5区1号井戸土層断面(東から)  
6. 5区1号井戸石積み出土状況(東から)  
7. 5区1号溝土層断面(南から)  
8. 5区1・2号溝と1・2号土坑全景(北から)
- P L. 50 1. 5区3号溝土層断面(南から)  
2. 5区3・4号溝全景(北から)  
3. 5区5号溝土層断面(北から)  
4. 5区5号溝全景(北から)  
5. 5区6号溝全景(北東から)  
6. 1区8・11号土坑全景(北から)  
7. 1区9号土坑全景(北から)
- P L. 51 1. 1区第2面水田西側全景(東から)  
2. 1区第2面水田東側全景(東から)
- P L. 52 1. 1区第2面水田畦全景(南から)  
2. 1区第2面水田畦全景(南から)  
3. 1区第2面水田畦全景(西から)  
4. 1区第2面水田畦全景(北西から)  
5. 1区第2面水田17号畦全景(北西から)  
6. 3区4号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
7. 3区4号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
8. 3区4号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)
- P L. 53 1. 3区11号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
2. 3区11号竪穴住居貯蔵穴土層断面(西から)  
3. 3区11号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状況(西から)  
4. 3区11号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)  
5. 3区11号竪穴住居カマド土層断面(西から)
- P L. 54 1. 3区11号竪穴住居焼土土層断面(北西から)  
2. 3区11号竪穴住居焼土全景(西から)  
3. 3区25号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
4. 3区25・28・27号竪穴住居全景(西から)  
5. 3区25・28号竪穴住居土層断面(南から)  
6. 3区25・28号竪穴住居土層断面(東から)  
7. 3区25号竪穴住居貯蔵穴土層断面(東から)  
8. 3区25号竪穴住居P1土層断面(南東から)
- P L. 55 1. 3区25号竪穴住居P2・3土層断面(南東から)  
2. 3区25号竪穴住居P4土層断面(東から)  
3. 3区25号竪穴住居P5土層断面(東から)  
4. 3区26号竪穴住居全景(南から)  
5. 3区27号竪穴住居全景(西から)  
6. 3区27号竪穴住居カマド全景(西から)  
7. 3区27号竪穴住居カマド土層断面(北から)  
8. 3区27・28・25号竪穴住居全景(南から)
- P L. 56 1. 3区28号竪穴住居P1土層断面(東から)
2. 3区28号竪穴住居P2土層断面(東から)  
3. 3区32号竪穴住居カマド土層断面(南から)  
4. 3区39・40号竪穴住居全景(北から)  
5. 3区39・40号竪穴住居土層断面(南東から)  
6. 3区40号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
7. 3区41号竪穴住居全景と89号土坑遺物出土状況(西から)  
8. 3区2号土坑全景(西から)
- P L. 57 1. 3区2・4～8・10・15・16号土坑全景(南から)  
2. 3区4号土坑全景(西から)  
3. 3区13号土坑全景(西から)  
4. 3区20号土坑全景(北から)  
5. 3区21号土坑全景(西から)
- P L. 58 1. 3区29号土坑全景(北西から)  
2. 3区31・30号土坑全景(西から)  
3. 3区34号土坑全景(西から)  
4. 3区35号土坑と5・11号溝土層断面(南から)  
5. 3区67・68号土坑全景(西から)  
6. 3区71号土坑全景(南から)  
7. 3区72号土坑土層断面(南西から)  
8. 3区76号土坑全景(南西から)
- P L. 59 1. 3区82号土坑全景(南東から)  
2. 3区86～88・89・91・92号土坑全景(南東から)  
3. 3区88・90号土坑全景(北東から)  
4. 3区89・92号土坑全景(北西から)  
5. 3区93号土坑全景(南西から)  
6. 3区95号土坑遺物出土状況(北から)  
7. 3区95号土坑土層断面(南から)  
8. 3区5号ピット土層断面(東から)
- P L. 60 1. 3区6号ピット土層断面(東から)  
2. 3区7号ピット土層断面(南西から)  
3. 3区8号ピット土層断面(北西から)  
4. 3区9号ピット土層断面(南西から)  
5. 3区18号ピット土層断面(南から)  
6. 3区19号ピット土層断面(東から)  
7. 3区45・46号ピット土層断面(南西から)  
8. 3区19号溝遺物出土状況(東から)
- P L. 61 1. 3区第2面水田西側全景(上が西)  
2. 3区第2面水田畦全景(南から)  
3. 3区第2面水田東側全景(上が西)  
4. 3区第2面水田畦全景(東から)  
5. 3区第2面水田畦全景(南西から)  
6. 3区第2面水田1号トレンチ土層断面(東から)  
7. 3区第2面水田2号トレンチ土層断面(西から)  
8. 4区第4面西側全景(上が東)
- P L. 62 1. 4区1号竪穴住居遺物出土状況(南から)  
2. 4区1号竪穴住居遺物出土状況(南から)  
3. 4区1号竪穴住居土層断面(西から)  
4. 4区1号竪穴住居土層断面(東から)  
5. 4区1号竪穴住居全景(西から)  
6. 4区2号竪穴住居全景(西から)  
7. 4区2号土坑全景(南から)  
8. 4区第4面全景(上が北)
- P L. 63 1. 4区第4面水田西側全景(上が北)  
2. 4区第4面水田東側全景(上が北)  
3. 5区1号竪穴住居全景(西から)  
4. 5区1号竪穴住居カマド土層断面(西から)  
5. 5区1号竪穴住居掘り方全景(西から)  
6. 5区第2面西側全景(東から)  
7. 5区第2面水田畔全景(東から)  
8. 5区第2面水田畔全景(西から)
- P L. 64 1. 1区第2面1～3号トレンチ全景(東から)  
2. 1区第2面4～6号トレンチ全景(東から)  
3. 1区基本土層1(東から)  
4. 1区基本土層2(南から)  
5. 3区第2面中央部全景(上が西)  
6. 3区第2面東側全景(上が北)
- P L. 65 1. 3区第2面拡張部北側全景(南から)



2. 3区第2面拡張部南側全景(南から)
- P L. 66 1. 3区1号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
2. 3区1号竪穴住居遺物出土状況(南東から)  
3. 3区1号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
4. 3区1号竪穴住居土層断面(北から)  
5. 3区1号竪穴住居土層断面(南西から)
- P L. 67 1. 3区1号竪穴住居P1土層断面(南西から)  
2. 3区1号竪穴住居掘り方土層断面(南西から)  
3. 3区1号竪穴住居掘り方全景(南西から)  
4. 3区2号竪穴住居カマド遺物出土状況(南西から)  
5. 3区2号竪穴住居カマド掘り方土層断面(南東から)  
6. 3区2号竪穴住居掘り方全景(南西から)  
7. 3区3号竪穴住居遺物出土状況(南から)  
8. 3区3号竪穴住居カマド遺物出土状況(北から)
- P L. 68 1. 3区5号竪穴住居全景(南西から)  
2. 3区5号竪穴住居貯蔵穴土層断面(北東から)  
3. 3区5号竪穴住居P1土層断面(南西から)  
4. 3区5号竪穴住居P1全景(北東から)  
5. 3区5号竪穴住居P2土層断面(南西から)
- P L. 69 1. 3区5号竪穴住居P2全景(北東から)  
2. 3区5号竪穴住居P3土層断面(北東から)  
3. 3区5号竪穴住居P3全景(東から)  
4. 3区5号竪穴住居P4土層断面(北東から)  
5. 3区5号竪穴住居P4全景(東から)  
6. 3区5号竪穴住居P5土層断面(東から)  
7. 3区5号竪穴住居P5全景(東から)  
8. 3区5号竪穴住居P6土層断面(東から)
- P L. 70 1. 3区5号竪穴住居P6全景(東から)  
2. 3区5号竪穴住居P7土層断面(東から)  
3. 3区5号竪穴住居P8土層断面(北東から)  
4. 3区5号竪穴住居P8遺物出土状況(東から)  
5. 3区6号竪穴住居遺物出土状況(西から)
- P L. 71 1. 3区6号竪穴住居土層断面(南から)  
2. 3区6号竪穴住居土層断面(東から)  
3. 3区6号竪穴住居土層断面(西から)  
4. 3区6号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)  
5. 3区6号竪穴住居P1土層断面(西から)  
6. 3区6号竪穴住居P2土層断面(西から)  
7. 3区7号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
8. 3区7号竪穴住居全景(西から)
- P L. 72 1. 3区8号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
2. 3区8号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南から)  
3. 3区8号竪穴住居遺物出土状況(北から)  
4. 3区8号竪穴住居カマドと貯蔵穴遺物出土状況(西から)  
5. 3区8号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)
- P L. 73 1. 3区8号竪穴住居カマド全景(西から)  
2. 3区8号竪穴住居カマド土層断面(西から)  
3. 3区9号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
4. 3区9号竪穴住居遺物出土状況(北から)  
5. 3区9号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)  
6. 3区9号竪穴住居カマド土層断面(南から)  
7. 3区9号竪穴住居カマド土層断面(西から)  
8. 3区9号竪穴住居1号床下土坑土層断面(西から)
- P L. 74 1. 3区10号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
2. 3区10号竪穴住居カマド周辺遺物出土状況(南西から)  
3. 3区10号竪穴住居1号床下土坑土層断面(南から)  
4. 3区10号竪穴住居1号床下土坑全景(西から)  
5. 3区10号竪穴住居P1土層断面(南から)
- P L. 75 1. 3区10号竪穴住居P2土層断面(南から)  
2. 3区10号竪穴住居カマド掘り方土層断面(西から)  
3. 3区12号竪穴住居遺物出土状況(南東から)  
4. 3区12号竪穴住居土層断面(南東から)  
5. 3区12号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南東から)
- P L. 76 1. 3区12号竪穴住居遺物出土状況(南東から)  
2. 3区12号竪穴住居遺物出土状況(北東から)  
3. 3区12号竪穴住居カマド遺物出土状況(南東から)  
4. 3区12号竪穴住居カマド土層断面(北東から)
5. 3区12号竪穴住居カマド全景(南東から)  
6. 3区12号竪穴住居P1土層断面(南西から)  
7. 3区12号竪穴住居P1全景(南東から)  
8. 3区12号竪穴住居P2土層断面(南西から)
- P L. 77 1. 3区12号竪穴住居P2全景(南東から)  
2. 3区12号竪穴住居P3土層断面(北東から)  
3. 3区12号竪穴住居P3全景(南から)  
4. 3区12号竪穴住居P3と貯蔵穴全景(南東から)  
5. 3区12号竪穴住居P4全景(南東から)  
6. 3区12号竪穴住居焼土出土状況(南東から)  
7. 3区12号竪穴住居カマド掘り方土層断面(北東から)  
8. 3区12号竪穴住居カマド掘り方土層断面(南東から)
- P L. 78 1. 3区13号竪穴住居遺物出土状況(北東から)  
2. 3区13号竪穴住居カマド遺物出土状況(北東から)  
3. 3区14・31号竪穴住居遺物出土状況と5号井戸全景(西から)  
4. 3区14号竪穴住居カマド遺物出土状況(西から)  
5. 3区14号竪穴住居カマド土層断面(南から)
- P L. 79 1. 3区15号竪穴住居遺物出土状況(北西から)  
2. 3区15号竪穴住居礫出土状況(北東から)  
3. 3区15号竪穴住居カマド遺物出土状況(北西から)  
4. 3区15号竪穴住居カマド土層断面(南西から)  
5. 3区15号竪穴住居カマド土層断面(北西から)
- P L. 80 1. 3区15号竪穴住居カマド掘り方土層断面(北西から)  
2. 3区15号竪穴住居P1土層断面(北西から)  
3. 3区16号竪穴住居土層断面(南から)  
4. 3区16号竪穴住居土層断面(南から)  
5. 3区17号竪穴住居全景(西から)
- P L. 81 1. 3区17号竪穴住居貯蔵穴全景(西から)  
2. 3区17号竪穴住居カマド全景(西から)  
3. 3区17号竪穴住居カマド土層断面(南から)  
4. 3区17号竪穴住居カマド土層断面(西から)  
5. 3区17号竪穴住居カマド掘り方土層断面(南から)  
6. 3区17号竪穴住居カマド掘り方土層断面(西から)  
7. 3区18号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
8. 3区18号竪穴住居土層断面(南東から)
- P L. 82 1. 3区18号竪穴住居土層断面(北東から)  
2. 3区18号竪穴住居土層断面(北東から)  
3. 3区18号竪穴住居貯蔵穴土層断面(南西から)  
4. 3区18号竪穴住居カマド遺物出土状況(南西から)  
5. 3区18号竪穴住居カマド土層断面(南から)  
6. 3区18号竪穴住居カマド土層断面(南西から)  
7. 3区18号竪穴住居P1土層断面(南東から)  
8. 3区18号竪穴住居P2土層断面(南東から)
- P L. 83 1. 3区18号竪穴住居P3土層断面(南東から)  
2. 3区18号竪穴住居P4土層断面(南東から)  
3. 3区19号竪穴住居遺物出土状況(北から)  
4. 3区19号竪穴住居遺物出土状況(東から)  
4. 3区19号竪穴住居遺物出土状況(北から)
- P L. 84 1. 3区19号竪穴住居土層断面(南から)  
2. 3区19号竪穴住居貯蔵穴土層断面(北から)  
3. 3区19号竪穴住居焼土遺物出土状況(東から)  
4. 3区19号竪穴住居P1土層断面(西から)  
5. 3区19号竪穴住居P2土層断面(西から)  
6. 3区19号竪穴住居P3土層断面(西から)  
7. 3区19号竪穴住居P4土層断面(西から)  
8. 3区20号竪穴住居全景(南西から)
- P L. 85 1. 3区20号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
2. 3区20号竪穴住居カマド土層断面全景(南東から)  
3. 3区22号竪穴住居土層断面(東から)  
4. 3区22号竪穴住居P1土層断面(東から)  
5. 3区22号竪穴住居P2土層断面(東から)  
6. 3区23号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
7. 3区23号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
8. 3区24号竪穴住居遺物出土状況(北西から)
- P L. 86 1. 3区24号竪穴住居遺物出土状況(北東から)  
2. 3区24号竪穴住居P1土層断面(南から)  
3. 3区24号竪穴住居P2土層断面(南から)

4. 3区24号竪穴住居P3土層断面(南東から)  
5. 3区30号竪穴住居遺物出土状況(南西から)  
P L. 87 1. 3区30号竪穴住居遺物出土状況(北西から)  
2. 3区30号竪穴住居遺物出土状況(北東から)  
3. 3区30号竪穴住居遺物出土状況(南東から)  
4. 3区30号竪穴住居カマド全景(南から)  
5. 3区30号竪穴住居カマド土層断面(東から)  
6. 3区31号竪穴住居遺物出土状況(西から)  
7. 3区35・36号竪穴住居全景(西から)  
8. 3区35・36号竪穴住居土層断面(北西から)  
P L. 88 1. 3区35号竪穴住居カマド土層断面(南から)  
2. 3区37号竪穴住居全景(南西から)  
3. 3区38号竪穴住居遺物出土状況(東から)  
4. 3区9号土坑全景(北から)  
5. 3区22・23号土坑全景(北から)  
6. 3区25号土坑全景(西から)  
7. 3区26号土坑全景(西から)  
8. 3区27号土坑全景(南から)  
P L. 89 1. 3区28号土坑全景(西から)  
2. 3区32号土坑全景(南から)  
3. 3区33号土坑全景(西から)  
4. 3区37号土坑全景(南から)  
5. 3区43号土坑全景(東から)  
6. 3区61・62号土坑全景(西から)  
7. 3区64号土坑土層断面(東から)  
8. 3区65号土坑遺物出土状況(南東から)  
P L. 90 1. 3区69号土坑全景(北から)  
2. 3区77号土坑遺物出土状況(南西から)  
3. 3区78号土坑遺物出土状況(西から)  
4. 3区78号土坑全景(南から)  
5. 3区79号土坑全景(西から)  
6. 3区80号土坑全景(南から)  
7. 3区81号土坑遺物出土状況(北から)  
8. 3区83号土坑全景(南から)  
P L. 91 1. 3区84号土坑と28・29号ピット全景(西から)  
2. 3区86号土坑土層断面(南東から)  
3. 3区1号ピット土層断面(北西から)  
4. 3区2号ピット土層断面(北西から)  
5. 3区3号ピット土層断面(西から)  
6. 3区4号ピット土層断面(東から)  
7. 3区15号ピット土層断面(西から)  
8. 3区16号ピット土層断面(西から)  
P L. 92 1. 3区17号ピット土層断面(南から)  
2. 3区25号ピット土層断面(東から)  
3. 3区26号ピット全景(西から)  
4. 3区28・29号ピット全景(西から)  
5. 3区33号ピット土層断面(南から)  
6. 3区37号ピット土層断面(南東から)  
7. 3区第2面拡張部北側ピット群全景(南から)  
8. 3区第2面拡張部南側調査風景(北から)  
P L. 93 1. 3区15号溝全景(北西から)  
2. 3区20～22号溝全景(東から)  
3. 3区1号土器集積遺物出土状況(南東から)  
4. 3区1号土器集積遺物出土状況(南東から)  
5. 3区2号土器集積遺物出土状況(東から)  
P L. 94 1. 3区2号土器集積遺物出土状況(東から)  
2. 3区2号土器集積遺物出土状況(南から)  
3. 3区2号土器集積遺物出土状況(南東から)  
4. 3区第2面拡張部北側遺物出土状況(北から)  
5. 3区第2面拡張部北側調査風景(南から)  
6. 4区1号土坑全景(南から)  
7. 4区3号土坑全景(東から)  
P L. 95 1. 4区5号土坑土層断面(南西から)  
2. 4区2・3号溝全景(南から)  
3. 4区3号溝土層断面(南から)  
4. 4区3号溝土層断面(北から)  
5. 4区3号溝遺物出土状況(北から)  
6. 4区4～6号溝土層断面(南東から)  
7. 4区7号溝土層断面(南から)  
P L. 96 1. 4区7号溝全景(西から)  
2. 4区1号粘土採掘坑全景(西から)  
3. 4区1号トレンチ全景(東から)  
4. 4区2号トレンチ全景(東から)  
5. 4区3号トレンチ全景(東から)  
6. 5区3号土坑土層断面(西から)  
7. 5区3号土坑全景(西から)  
P L. 97 1. 5区4号土坑と3・4号ピット全景(西から)  
2. 5区1号ピット土層断面(南から)  
3. 5区2号ピット全景(南西から)  
4. 5区5号ピット全景(西から)  
5. 5区第2面1～6号トレンチ全景(東から)  
6. 5区第2面7号トレンチ全景(東から)  
7. 5区第2面8号トレンチ全景(東から)  
8. 5区基本土層9(南から)  
P L. 98 1区3・7号復旧溝群・1・2号畠・4号溝出土遺物  
P L. 99 1区遺構外の出土遺物・2区3・4・10・11・12号土坑出土遺物  
P L. 100 2区13号土坑・2区旧河道出土遺物  
P L. 101 2区旧河道出土遺物  
P L. 102 2区旧河道出土遺物  
P L. 103 2区旧河道出土遺物  
P L. 104 2区旧河道出土遺物  
P L. 105 2区旧河道出土遺物  
P L. 106 2区旧河道出土遺物  
P L. 107 2区旧河道出土遺物  
P L. 108 2区旧河道出土遺物  
P L. 109 2区旧河道出土遺物  
P L. 110 2区旧河道出土遺物  
P L. 111 2区旧河道出土遺物  
P L. 112 2区旧河道出土遺物  
P L. 113 2区旧河道出土遺物  
P L. 114 2区遺構外の出土遺物・3区8・10号復旧溝群・3区4・7号畠・3区3号溝・3区1号集石出土遺物  
P L. 115 3区1号道・3区遺構外の出土遺物  
P L. 116 4区5・6号復旧溝群・5区1号復旧溝群・5区遺構外の出土遺物・1区遺構外の出土遺物・2区第2～4面水田出土遺物・2区遺構外の出土遺物  
P L. 117 3区11・63・70号土坑・5・6号井戸・7・9・12号溝出土遺物  
P L. 118 3区14号溝・3区遺構外の出土遺物・4区1号溝・5区遺構外の出土遺物・3区4号竪穴住居出土遺物  
P L. 119 3区11号竪穴住居出土遺物  
P L. 120 3区25・27・28号竪穴住居出土遺物  
P L. 121 3区40・41号竪穴住居・4・76・89号土坑・18号ピット・19号溝出土遺物・3区遺構外の出土遺物  
P L. 122 4区1・2号竪穴住居出土遺物  
P L. 123 5区遺構外の出土遺物・3区1・2号竪穴住居出土遺物  
P L. 124 3区3・5号竪穴住居出土遺物  
P L. 125 3区6・7・8号竪穴住居出土遺物  
P L. 126 3区8号竪穴住居出土遺物  
P L. 127 3区9・10号竪穴住居出土遺物  
P L. 128 3区12・13号竪穴住居出土遺物  
P L. 129 3区14・15・17号竪穴住居出土遺物  
P L. 130 3区18・19・20・22・23号竪穴住居出土遺物  
P L. 131 3区24・30号竪穴住居出土遺物  
P L. 132 3区30・31・35・38号竪穴住居出土遺物  
P L. 133 3区28・78・81・85号土坑・17号ピット・15号溝出土遺物  
P L. 134 3区1・2号土器集積出土遺物  
P L. 135 3区2号土器集積出土遺物  
P L. 136 3区2号土器集積出土遺物・3区遺構外の出土遺物  
P L. 137 4区3号溝出土遺物・1・3～5区遺構外の出土遺物



# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

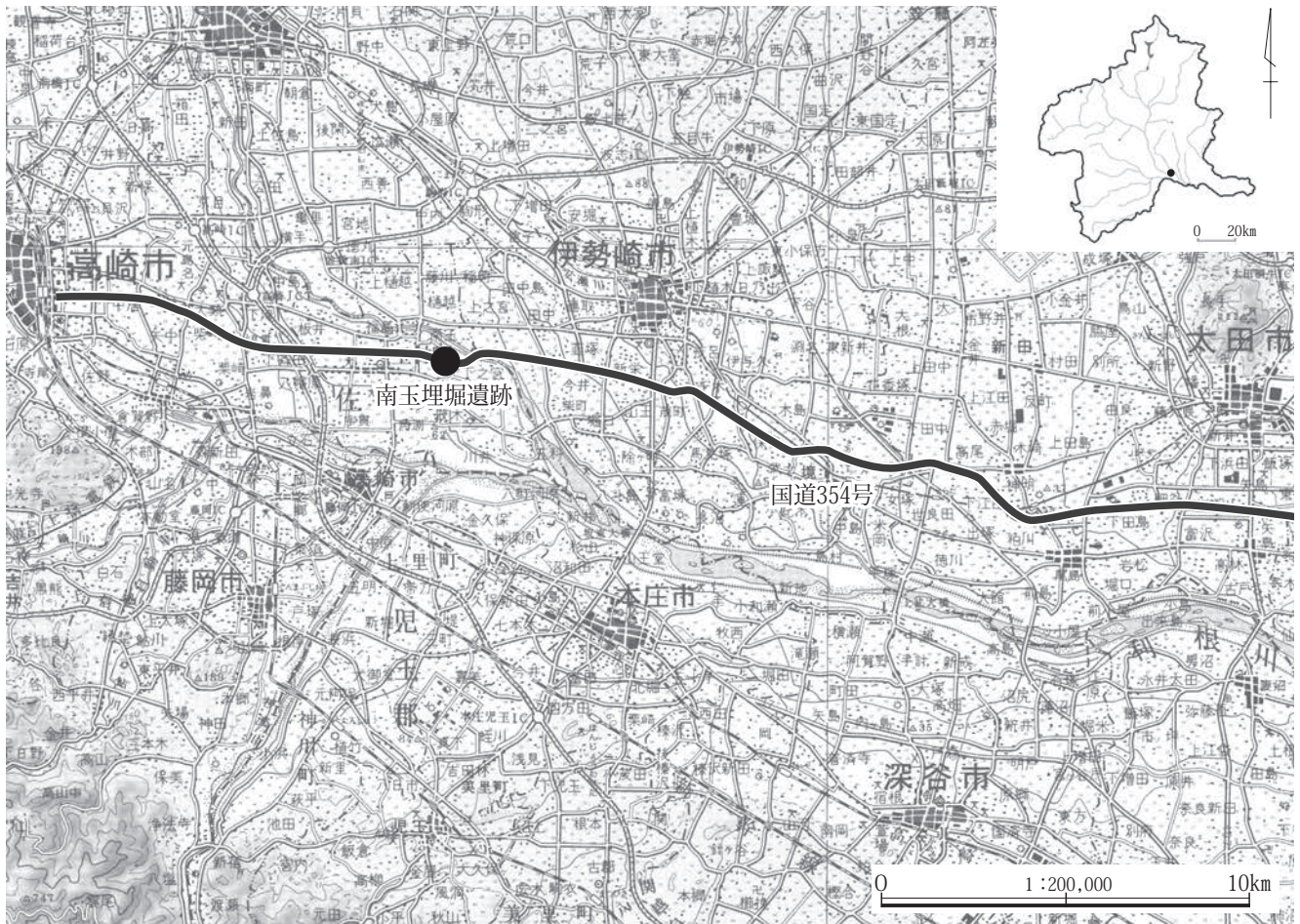
## 第1節 発掘調査に至る経緯

南玉埋堀遺跡は、群馬県佐波郡玉村町に位置する埋蔵文化財包蔵地として知られ、周辺には南玉二丁町遺跡、下之宮高俣遺跡などの包蔵地が隣接する。現在の景観はほぼ平坦であるが、度重なる利根川の洪水堆積物によって地表が覆われており、旧来の地形を視認することはなかなか難しい。

発掘調査の原因は、国道354号玉村伊勢崎バイパスの建設工事である。群馬県では「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」として、各地域の自立促進と活性化の支援のため、県内の高速交通網の効果を隅々まで生かすべく、高速交通網を補完する役割の交通軸を整備することとした。このうち「東毛軸」では、高崎市から玉村町、

伊勢崎市、太田市、大泉町、邑楽町、館林市、板倉町といった県東南部の市町を東西に結ぶ国道354号を主要道路軸とし、「東毛広域幹線道路」として整備が図られることとなった。この東毛広域幹線道路は、高崎市栄町を起点とし、県の南東端に位置する板倉町板倉までを結ぶ総延長58.61km、標準幅員は25.0mで設計されている。国道354号玉村伊勢崎バイパスは、この東毛広域幹線道路のうち、西は主要地方道藤岡大胡線との交差点から、東は一般県道駒形柴町線との交差点までの間3.03kmを対象としており、事業期間は平成20年度から始まり29年度の完了を予定している。東毛広域幹線道路は、平成26年8月31日に玉村伊勢崎バイパスの暫定2車線の完成をもって全線開通し、平成27年度においては、全線4車線化とこれに伴う橋桁工事が進められている。

平成21年5月8日、事業主体である群馬県県土整備部



第1図 南玉埋堀遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」平成23年6月1日発行)

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

伊勢崎土木事務所からの照会をうけた群馬県教育委員会文化財保護課(以下、県保護課と略す)は、バイパス予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地を通過することから、本調査是非の判定と調査を実施する場合の面積等の確定を行うために試掘調査が必要である旨を回答した。

県保護課では、県伊勢崎土木事務所からの試掘依頼を受け、「平成22年度国道354号社会資本総合整備(活力創出基盤)事業」に対応する佐波郡玉村町大字福島から利根川右岸の同町下之宮までの地域(約67,000㎡)を対象にして、平成22年5月20日から同年6月4日までの間で試掘調査を実施した。南玉埋堀遺跡の試掘については、約440mの路線予定地内に7本のトレンチ(1m幅)を設定して、遺構と遺物の有無及び調査範囲の確認を行った。試掘の結果、古墳時代から平安時代にかけての住居跡、古代の水田跡、中世から近世にかけての水田・畠跡が重層して確認され、工区の全域が本調査の対象となることが確定した。

試掘では、天明三(1783)年の浅間Aテフラ(As-A)と天明泥流堆積物、天仁元(1108)年の浅間Bテフラ(As-B)混土層、As-B層を主な鍵層として、古墳時代から近世までの遺構検出面が2～3面存在することが想定された。また、地山までの深さは調査区西側では1m前後、調査区中央では1.3m前後、東端では2.3m前後であり、全体的に西半地区は微高地状、東半地区では東方に傾斜して次第に厚くなる洪水起源と思われる堆積物に覆われた状況が把握された。なお、全域にわたって天明三(1783)年の天明泥流堆積物に覆われた田畠を復旧した溝群(耕地復旧遺構)が確認されており、最上位に位置する調査面となることが想定された。

本調査が必要との通知を受けた県伊勢崎土木事務所では、県保護課との協議を経て、発掘調査主体となる財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団と発掘調査実施のための契約準備行為にはいった。平成23年3月31日に県伊勢崎土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で契約が締結され、南玉埋堀遺跡は調査面積6,446㎡、調査期間は西に隣接する南玉二丁町遺跡と併せて平成23年9月～平成24年1月の計画で調査が実施されることに決定した。この当初契約は、平成22年度予算によるため事業名称には「平成22年度」を冠してあるが、実質的な発掘調査は平成23年度に入ってから実施す

ることとなった。なお、この平成22年度国道354号(玉村伊勢崎バイパス)事業関連の発掘調査は、福島味噌袋遺跡・南玉二丁町遺跡・南玉埋堀遺跡・下之宮中沖遺跡・下之宮高低遺跡・東上之宮遺跡の6遺跡が対象であり、契約はこれらの発掘調査を総括して締結された。

平成23年4月から開始した発掘調査は、6遺跡の中で西端に位置する福島味噌袋遺跡、利根川の右岸に位置する下之宮中沖遺跡・下之宮高低遺跡、利根川左岸に位置する東上之宮遺跡から着手することとなり、中央に位置する南玉埋堀遺跡と南玉二丁町遺跡は年度後半からの着手で計画が進められた。

平成23年度途中に玉村伊勢崎バイパスの工事工程と発掘調査工程の調整が図られ、隣接する南玉二丁町遺跡の調査面積を増やし、代替として南玉埋堀遺跡の発掘調査そのものが次年度に見送られることとなった。この調査対象遺跡の変更に伴う変更契約は平成24年1月30日に締結され、併せて発掘調査期間も平成24年3月31日まで延長されることとなった。

平成23年度事業から見送られた南玉埋堀遺跡の発掘調査は、平成24年度に実施することが決定となり、群馬県伊勢崎土木事務所長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で、平成24年3月30日付けで発掘調査委託契約が締結された。この契約では、南玉埋堀遺跡のほか南玉二丁町遺跡・下之宮中沖遺跡・下之宮高低遺跡の4遺跡が対象となり、平成23年度の発掘調査業務を継続して実施することとした。このうち、南玉埋堀遺跡の発掘調査対象面積は13,880㎡、調査区の東西長は約440mであり、同バイパス建設事業の工事路線内において西に南玉二丁町遺跡、東に下之宮中沖遺跡が隣接する中間地域にあたる。

なお、平成24年4月1日、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団は「公益財団法人」の認定を受けて、「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団」と名称を変更した。



## 第2節 発掘調査の経過

南玉埋堀遺跡の発掘調査は、平成24年4月に着手し、10日ほどの準備期間を経て調査区西端に位置する1区(西半)と5区(南半)の表土掘削から始まった。この地点では表土下20cm前後で近世の畠と復旧溝群のほか土坑・溝を検出し、この調査面を第1面として5月上旬まで調査を実施した。一方、調査区中央に設定した3区は4月中旬から調査を開始し、1区・5区と同様に近世の畠・復旧溝群・井戸・溝・道を検出し、遺構精査を実施した。なお、3区西半で天明三(1783)年の浅間山の噴火に伴う泥石流による埋没した河川である旧矢川の左岸を検出している。3区では東半を中心に古墳時代～平安時代の住居群が検出された居住域が占め、西半ではAs-Bに覆われた水田の存在が判明した。なお、この水田跡は西側を旧矢川に侵食されていることから、As-Bを降らせた天仁元(1108)年の浅間山噴火以後に旧矢川の流路がこの地点

を縦貫していたことが明らかとなった。5月中旬までは1区・3区・5区を同時並行して調査を進めていたが、調査工程の都合により3区の調査を優先させることとなり、7月中旬まで3区の調査に主体をおくこととなった。

調査区東端に位置する4区は、近世から古墳時代遺構確認面まで都合4面の調査面を想定して、3区の調査終了とともに7月下旬から着手、9月いっぱいまで調査を実施した。4区では近世の畠・復旧溝群、奈良時代住居跡とAs-Bに覆われた水田面を検出している。3区の南側に本線工区と直交して南側に延びる道路拡張部分について、本線と同時に発掘対象となったため、10月上旬から11月いっぱいまで発掘調査を実施した。この部分については、古墳時代主体の集落や土器集中箇所が検出されており、本線部分の3区で検出された集落居住域の範囲が南方に広がることを明確にした。

12月中旬からは、調査工程上で最終段階に位置づけていた2区の発掘調査を実施し、3月末までで終了することとなった。2区では近世の復旧溝群・土坑・溝、中世



第2図 南玉埋堀遺跡の位置(国土地理院2万5千分の1地形図「伊勢崎」平成15年2月1日発行使用)

の水田を検出した。また2区東半部では3区で確認されていた旧矢川の右岸部分を確認している。旧矢川は天明三(1783)年の浅間山の噴火に伴う泥流で埋没したと推測されたため、河川内埋没土の調査を実施している。ここでは、板材・漆椀などの木製品の出土をみている。

### 第3節 調査日誌

平成24年度の発掘調査日誌からおもな記録を抜粋して掲載した。

平成24 (2012)年

- 4. 1～6 発掘調査打ち合わせ、調査前現地視察、届け出など
- 4. 9 5区南半部の重機による表土掘削と遺構確認作業開始
- 4.11 1区西半部の重機による表土掘削と遺構確認作業開始
- 4.12 5区南半部の近世の畠・復旧溝群の調査開始
- 4.18 3区重機による表土掘削と遺構確認作業開始
- 4.19 1区近世の畠・復旧溝群の調査開始
- 5. 1 5区南半部の近世畠・復旧溝群の調査終了
- 5. 8 1区西半部の近世畠・復旧溝群の調査終了
- 5.31 1区西半部の浅間Bテフラ(As-B)下面の調査開始
- 6. 4 3区近世の井戸・道・畠・復旧溝群などの調査終了
- 6. 5 3区古代以前の竪穴住居の確認作業開始
- 6. 7 5区南半部の古代以前の竪穴住居などの調査開始
- 6.20 玉村町立南中学校生徒4名の発掘体験学習
- 7.18 5区南半部の浅間Bテフラ(As-B)下面の調査開始
- 7.19 3区調査終了
- 7.27 4区表土掘削、第1面の遺構確認
- 7.30 4区近世の畠・復旧溝群の調査
- 8. 2 5区南半部の調査終了
- 8. 7 5区北半部の表土掘削開始
- 8. 9 1区東半部の表土掘削開始
- 8.20 1区東半部で第1面の調査
- 9. 7 5区北半部で古代以前の竪穴住居・土坑などの調査開始
- 9.14 4区浅間Bテフラ(As-B)下面の調査開始、5区北

半部の調査終了

- 9.18 1区東半部で浅間Bテフラ(As-B)下面の調査開始
  - 9.20 4区古代以前の竪穴住居・土坑などの調査開始
  - 9.26 1区東半部の調査終了、1区の調査完了
  - 10.9 3区拡張部の表土掘削
  - 10.25 3区拡張部の竪穴住居・土坑などの調査
  - 11.26 3区拡張部の調査終了
  - 12.11 調査区内で現場事務所移転
  - 12.12 2区西半部の表土掘削開始
  - 12.18 2区西半部の近世畠・復旧溝群の調査
- 平成25 (2013)年
- 1. 8 2区西半部の中世の遺構確認
  - 1.10 2区西半部の中世の水田調査
  - 2. 1 2区西半部の水田面調査
  - 2.14 2区西半部の調査終了
  - 2.20 2区東半部の表土掘削開始
  - 2.25 2区東半部で埋没河川(矢川)の調査開始
  - 2.26 2区東半部の矢川より木製品など近世遺物出土
  - 3. 6 2区東半部の矢川出土遺物の取り上げ、古代水田調査
  - 3. 18 2区調査終了、南玉埋堀遺跡の調査完了

### 第4節 調査区の設定

南玉埋堀遺跡における調査区の設定については、東西や南北に走行する道路や農業用排水路などを調査区の境界として便宜的に調査区名を付けた。バイパス建設部分の西側から東側にかけて1区から4区とし、東西に走行する市道を挟み1区北側の略三角形の調査区を5区とした。1区から4区までの調査区の長さは約430m、幅約30mである。3区と4区を分ける南北方向に走行する排水路西側の長さ約50m、幅5mを調査した。3区南側に位置することから、発掘調査では3区拡張部と呼称している(第3図)。

遺構測量については、国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を用いた。平成24年度の南玉埋堀遺跡の基準点については、1区及び5区西端に位置する、平面直角 $X=34180.796$ 、 $Y=-62697.023$ を使用した。





第3図 南玉埋堀遺跡の調査区(この地図の作成にあたっては、玉村町長の了承を得て、同町発行の「玉村町都市計画区域図8・9平成19年12月修正」2,500分の1の地形図を使用し複製したものである。)

## 第5節 調査の方法

平成24年度の南玉埋堀遺跡の発掘調査では、「記録保存のための発掘調査に関する基準」（平成19年12月28日県教育長通知）にもとづいて調査を実施した。土木機械等賃貸借契約を締結した委託業者の大型掘削重機を使用した表土掘削、クローラーなどを使用した排土運搬を調査工程に沿って行った。掘削した表土などについては、調査区内に一時的に置く場所を確保しながら発掘調査を実施し、調査が終了した調査区は埋め戻しを行った。大型掘削重機による表土掘削の後は、現場作業員による鋤簾や移植ごてなどを使用した手作業によって掘り下げながら遺構確認作業を行った。

南玉埋堀遺跡では、時代ごとに遺構確認面が複数面あり、遺構の残存状況などによって遺構確認面の数が調査区によって異なっている。1区・3区・5区では、近世の遺構確認面と古墳時代から平安時代の遺構確認面の2面の発掘調査が行われた。2区では、近世の遺構確認面の他、中世から近世とみられる遺構が確認され4面の調査を行った。4区では、中世から近世の遺構の残存状況が良好であったため遺構確認面が4面となり、古墳時代から平安時代の遺構確認面と合わせて5面の調査を実施した。

3区拡張部の中央部に農業用配水管が埋設されていたため、調査区は北側と南側に分かれている。また、5区北側に位置する水田の進入路及び農業用排水路があるため、調査区が東側と西側に分断されている。遺構の残存状況などによって調査面数が調査区によって異なり、1区2面と4区2面のように確認面の名称が同じでも調査区によって時代が一致しない。調査区面の呼称を変更すると混乱が生じる可能性があるため整理作業によって変更は行っていない。第1表の遺構確認面一覧表を参照されたい。

発掘調査によって1区から5区で確認したすべての遺構は、竪穴住居41軒、掘立柱建物1棟、土坑133基、ピット59基、溝47条、井戸9基、集石1基、道2条、土器集積2ヶ所、復旧溝群50ヶ所、復旧溝1ヶ所、畠29ヶ所、水田7、旧河道1条、粘土採掘坑1基である。

確認できた遺構の番号については、調査区ごとにそれ

第1表 遺構確認面一覧表

時代/調査区	1区・5区	2区	3区	4区
近世	1面	1面	1面	1～3面
中世から近世	2面	2～4面	2面	4面
古墳時代から平安時代	2面		2面	4・5面

ぞれ遺構番号をNo.1から付番した。

発掘調査によって確認した遺構については、それぞれセクションベルトなどを適宜設定し、土層断面観察と写真撮影を行った。遺構断面測量は、発掘現場作業員による手実測及び測量委託業者によって行われた。遺構平面測量について、測量委託業者がトータルステーションで行った。

出土遺物については、測量委託業者による遺構地点別取り上げ及び調査区一括取り上げを適宜行った。

遺構写真については、35mmデジタルカメラとプロローニーモノクロフィルムを使用した6×7版銀塩カメラを併用し、発掘調査担当者が地上撮影及びフォトエレベーター、ローリングタワーなどを使用して写真撮影を行った。

測量委託業者による空中写真撮影については、2区西半部2面、3区1面、3区2面、4区2面、4区4面において合わせて5回実施した。

## 第6節 基本土層

(第4・5図 P.L. 64・97)

南玉埋堀遺跡の基本土層については、1区から5区ごとに調査区壁面による土層断面観察及び実測を行い、第4・5図のとおり基本土層を設定した。1区西壁面-1と北壁面-2、2区南壁面-3、3区南壁面-4と拡張部北壁面-5、4区南壁面-6・7・8、5区北壁面-9の9ヶ所であり、基本土層の土層断面観察及び実測地点については、第4図に●で図示した。

発掘調査前の調査区の状況については、ほとんどが水田などの耕作地であった。発掘調査前から矢川の旧河道が調査区内を流れていたと想定されていたが、2区東部及び3区西部では、幅約40mの規模となる旧河道を確認することができた。この旧河道を挟み右岸となる1区・2区・5区(第4図-1～3)と左岸となる3区・4区(第4図-4～8)では土壌の堆積状況の差異が若干認められ、第3・6・9層は、中近世の洪水堆積物と考えられ



るが、時期の特定はできなかった。矢川の旧河道の埋没土には天明三年の泥流が堆積し、1・2・5区では確認できなかったが、3区北壁東寄りと4区8の観察地点では泥流堆積物が確認された。土層断面の観察によって、現表土である第1層から第28層に分層することができた。第4・5図を参照されたい。

1区は2面の調査を行い、第1面の調査は、As-A塊を含むにぶい黄褐色土である第4層上面が近世の遺構確認面である。1区東半部(第4図-2)は、第1a層下面から第14層上面までが攪拌され、第3'層としたが1区西端(第1図-1)の第3層、第4層、第6c層に相当する。このため西端では近世の遺構は確認できなかった。第2面の調査は、As-Bの堆積が認められた第16層の下面を古墳時代から平安時代の遺構確認面とした。As-Bの堆積が確認できた調査区は、1区と4区である。

2区は4面の調査を行い、第1面の調査は、As-A塊を含むにぶい黄褐色土である第4層上面を近世の遺構確認面とした。第2面は中世から近世の遺構確認面であるが、西半部は第6c層上面を遺構確認面として第2面、東半部では第6c層上面で遺構が確認できず、第6c層中を第3面として中世以降の水田の痕跡を確認した。さらに第6d面上面が第4面となり水田を確認することができた。第14層の下層には、As-Bの堆積が認められず、古墳時代から平安時代の遺構については2区で確認できなかった。

3区は2面の調査を行い、第1面の調査は、現表土下層の第9a層上面を近世の遺構確認面とした。第2面は、As-Bを含む暗褐色砂質土である第15層下面を遺構確認面としたが、中世から近世、古墳時代から平安時代の遺構が混在した状況である。

4区は現表土下の第5層がAs-Aであり、調査区の最東端(第4・5図-8)で唯一堆積が認められた。第5層の下面及び表土下を近世第1面、にぶい黄褐色砂質土である第7層及び第9a層上面を近世第2面、褐色土である第13層上面を近世第3面として遺構を確認した。第4面は、As-Bを含む暗褐色土である第15層下面及びAs-Bの堆積層である第16層の下面を古墳時代から平安時代の遺構確認面とした。さらに、第26層下面が第5面の遺構確認面である。

5区は2面の調査を行い、第1面の調査は第4層上面

が近世の遺構確認面である。第2面の調査は、As-Bを多量に含む褐灰色砂質土となる第14層下面を古墳時代から平安時代の遺構確認面とした。

南玉埋堀遺跡4区では、自然科学分析(テフラ分析)を実施した。自然科学分析の結果、基本土層の第5層や第16層でも確認したようにAs-AとAs-Bのテフラが認められた。また、As-C、Hr-FAに由来する粒子を検出した。このため、基本土層で確認した第17層のテフラはHr-FA、第18層のテフラはAs-Cの可能性が高いと考えられる。詳細については、第8章第2節を参照されたい。

## 第7節 整理作業の経過

整理事業については、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団において平成26年度と平成27年度に延べ28ヶ月実施した。各年度の内訳は以下のとおりである。

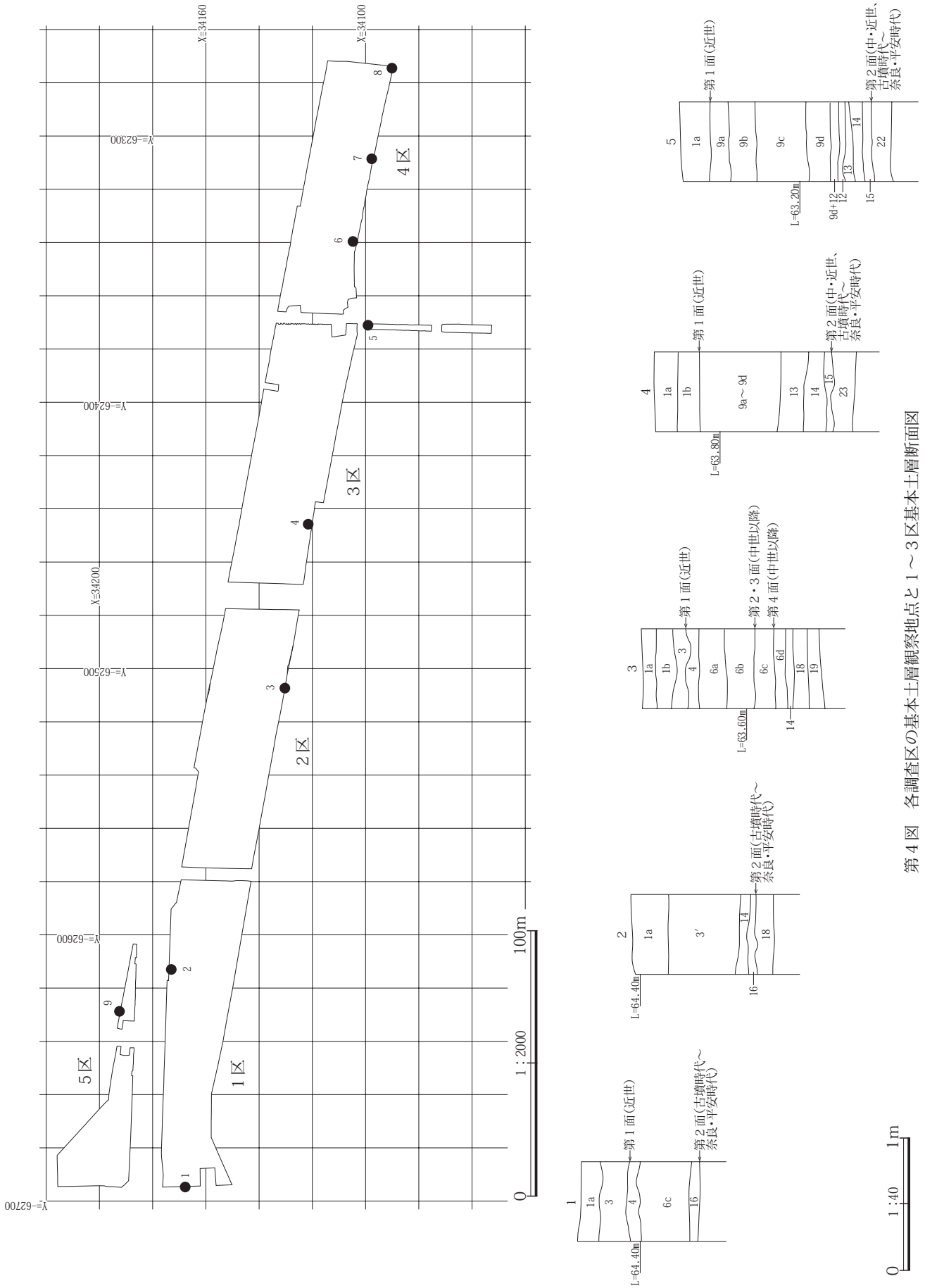
平成26年度は、平成26年8月1日～平成27年3月31日までの実施であるが、平成27年1月5日～平成27年3月31日は2班となったため、延べ11ヶ月となった。平成27年度は、平成27年4月1日～平成28年3月31日までの実施であるが、平成27年4月1日～平成27年4月30日まででは3班、平成27年5月1日～平成27年7月31日まで2班、平成27年8月1日～平成28年3月31日まで1班での体制となり、延べ17ヶ月の実施となった。

発掘調査によって出土した土器や石器などの遺物については、発掘調査終了後に外部委託によって遺物洗滌と遺物注記作業を行った。

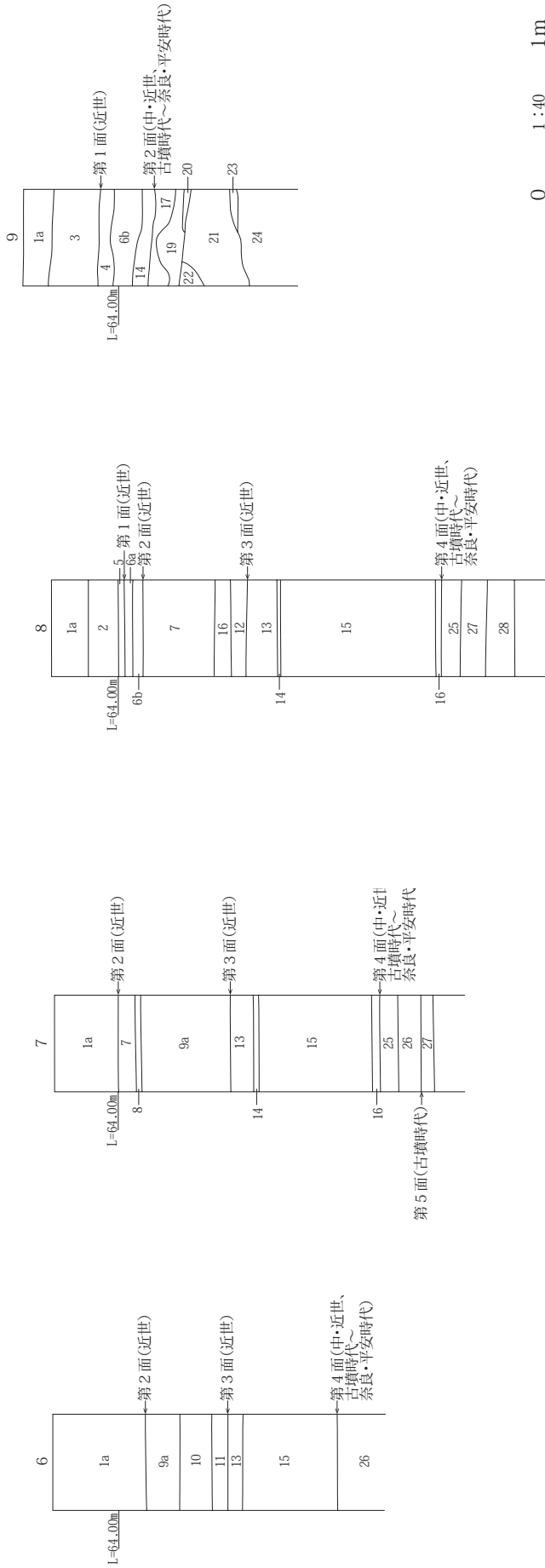
土器、石製品、金属製品、木製品などの遺物については、接合、復元、保存処理などを施した後、報告書に掲載する遺物の選別を行い、遺物実測、トレース図作成、拓影などを作成し、遺物写真撮影及び遺物観察表の作成を行った。

2区及び3区で確認した旧河道から出土した木製品については、整理作業によって分類や選別、プレパラートを作成し、樹種同定を行った。有機物の一部が残存していた金属遺物の巡方については、外部委託によって分析を行った。詳細については、第8章第4節を参照されたい。

遺構図については、発掘調査において外部委託による測量で作成した図面を用いて報告書掲載のための編集作



第4図 各調査区の基本土層観察地点と1～3区基本土層断面図



基本土層 ●は基本土層観察地点

- 1 a 現表土、耕作土
- 1 b 橙色土 砂質土、耕作土、硬く締まる
- 2 暗灰色土 泥流堆積物、礫を含む
- 3 褐灰色土 砂質土、As-A以降の洪水層、As-Aを含む
- 3' 3・4・6 c 層の攪拌
- 4 にぶい褐色土 As-A塊を含む
- 5 As-A
- 6 a 褐灰色土 砂質土
- 6 b 褐灰色土砂質土、鉄分の沈着あり
- 6 c 褐灰色土 砂質土、As-A以前の洪水層、鉄分沈着あり
- 6 d 褐灰色土 砂質土、6 c層より粗粒、色調は淡い
- 7 にぶい黄褐色土 砂質土、締まりあり
- 8 灰黄褐色土 粗粒、鉄分沈着多量
- 9 a にぶい黄褐色土 砂質土、中近世の洪水層
- 9 b にぶい黄褐色土 やや締まりあり
- 9 c にぶい黄褐色土 やや締まりあり、9 b層より色調は暗い
- 9 d にぶい黄褐色土 やや粘性あり、浅黄橙色・灰白色塊を含む
- 10 暗褐色土と褐灰色砂粒の混土 およそ3:1
- 11 暗褐色土 灰白色シルト質土と褐色土を含む、第9層から第12層の漸移帯
- 12 灰白色土 シルト質土
- 13 褐色土 炭化物粒を含む、耕作土か
- 14 褐灰色土 砂質土、As-B多量
- 15 暗褐色土 粘質土、As-Bを含む
- 16 As-B
- 17 黒褐色土 上面にHr-FAを含む
- 18 黒褐色土 粘質土、As-C少量
- 19 黒褐色土 にぶい黄褐色土塊を含む
- 20 灰白色土 砂質土、細粒
- 21 にぶい黄褐色土 暗褐色土塊少量
- 22 暗褐色土 やや砂質、にぶい橙色土小塊を含む
- 23 灰黄褐色土 やや砂質
- 24 灰白色土 やや粘質、浅黄橙色塊少量、鉄分の沈着あり
- 25 黒褐色土 粘質土
- 26 にぶい黄褐色土 粘質土
- 27 褐灰色土 粘質土
- 28 黒褐色土 粘質土、締まりあり

第5図 4・5区基本土層断面

## 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

業などを行ったのち、デジタル編集データをもとにレイアウトの作成を行った。発掘調査によって撮影した遺構写真は、報告書掲載のために選別し、遺物写真とともにレイアウトを作成し、デジタル図版を作成した。遺物についても選別したのち、実測を行い、トレース図を作成し、拓影とともにデジタルトレースによって遺物デジタル図版を作成した。

上記の作業と並行しながら報告書の本文原稿の執筆や印刷のための校正作業を行い、平成28年3月に報告書刊行に至った。

南玉埋堀遺跡の出土遺物、測量図面、遺構写真などのす

べての資料については、群馬県埋蔵文化財調査センターに収納した。

整理作業によって、検討した結果、名称及び番号を変更した遺構がある。遺構名及び遺構番号については、第2表の遺構名・遺構番号変更、欠番の遺構一覧表を参照されたい。なお、外部委託業者から納品された地上測量図面と遺物に注記された遺構名及び番号の書き換えは行っていない。

第2表 遺構名・遺構番号変更、欠番の遺構一覧表

変更前	変更後
1区1号復旧坑	1区1号復旧溝群
1区2号復旧坑	1区2号復旧溝群
1区3号復旧坑	1区3号復旧溝群
1区4号復旧坑	1区4号復旧溝群
1区5号復旧坑	1区5号復旧溝群
1区6号復旧坑	1区6号復旧溝
2区1号復旧坑	2区1号復旧溝群
2区2号復旧坑	2区2号復旧溝群
2区3号復旧坑	2区3号復旧溝群
3区1号復旧坑	3区1号復旧溝群
3区2号復旧坑	3区2号復旧溝群
3区3号復旧坑	3区3号復旧溝群
3区4号復旧坑	3区4号復旧溝群
3区5号復旧坑	3区5号復旧溝群
3区6号復旧坑	3区6号復旧溝群
3区7号復旧坑	3区7号復旧溝群
3区8号復旧坑	3区8号復旧溝群
3区9号復旧坑	3区9号復旧溝群
3区10号復旧坑	3区10号復旧溝群
3区11号復旧坑	3区11号復旧溝群
3区12号復旧坑	3区12号復旧溝群
3区13号復旧坑	3区13号復旧溝群
3区14号復旧坑	3区14号復旧溝群
3区15号復旧坑	3区15号復旧溝群
3区16号復旧坑	3区16号復旧溝群
3区17号復旧坑	3区17号復旧溝群
3区18号復旧坑	3区18号復旧溝群
3区19号復旧坑	3区19号復旧溝群
3区30号ピット	3区43号ピット
3区31号ピット	3区44号ピット
3区32 - 1号ピット	3区45号ピット
3区32 - 2号ピット	3区46号ピット
3区32 - 3号ピット	3区47号ピット
3区32 - 4号ピット	3区48号ピット
3区33号ピット	3区49号ピット

変更前	変更後
3区36号ピット	3区50号ピット
3区39号ピット	3区51号ピット
3区1号土器溜まり	3区1号土器集積
4区1号復旧坑	4区1号復旧溝群
4区2号復旧坑	4区2号復旧溝群
4区3号復旧坑	4区3号復旧溝群
4区4号復旧坑	4区4号復旧溝群
4区5号復旧坑	4区5号復旧溝群
4区6号復旧坑	4区6号復旧溝群
4区7号復旧坑	4区7号復旧溝群
4区8号復旧坑	4区8号復旧溝群
4区9号復旧坑	4区9号復旧溝群
4区10号復旧坑	4区10号復旧溝群
4区11号復旧坑	4区11号復旧溝群
4区12号復旧坑	4区12号復旧溝群
4区13号復旧坑	4区13号復旧溝群
4区14号復旧坑	4区14号復旧溝群
4区15号復旧坑	4区15号復旧溝群
5区1号復旧坑	5区1号復旧溝群
5区2号復旧坑	5区2号復旧溝群
5区3号復旧坑	5区3号復旧溝群
5区4号復旧坑	5区4号復旧溝群
5区5号復旧坑	5区5号復旧溝群
4区9号畠A	4区8号畠
4区9号畠B	4区9号畠
4区9号畠C	4区10号畠
3区11号畠	欠番
3区29号竪穴住居	欠番
3区33号竪穴住居	欠番
3区34号竪穴住居	欠番
3区53号土坑	欠番
3区12号ピット	欠番
3区6号溝	欠番
4区10号復旧坑	欠番

## 第2章 地理的及び歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と周辺の地形

南玉埋堀遺跡の地理的位置は、現利根川が前橋市南部から玉村町域にかけて東南東に流下する流路右岸にある。遺跡の存する佐波郡玉村町は、北に赤城山、北西に榛名山、南を藤岡台地に囲まれた前橋台地(新井1962)の南東部にあたる。

南玉埋堀遺跡をのせる前橋台地は、今から約2万年前に浅間山で爆発があり、そのときの大規模な山体崩壊によって発生した泥流が吾妻川を下って前橋市域に至り、泥流堆積物が厚く堆積したことで形成されたと考えられる。この前橋泥流堆積物は大小の安山岩質角礫と細粒基質からなり、かなり固結している。ときに径数メートル以上の巨大岩塊をふくみ、またところにより河成の礫層を挟んでいる地層であり(新井1967)、ボーリングデータによれば玉村町域ではおおむね20～17mの層厚を示す(澤口1995)。なお、この泥流堆積物の上には一部で板鼻黄色軽石層(As-YP)を挟む上部ローム層を載せている。このローム層は、南東方向へ樹枝状に延びる小支谷によって侵食されており、そのうちの多くは古墳時代以前に埋没していることが北関東自動車道関連の発掘調査等で判明している。

前橋台地の南部にあたる玉村町の景観は、ほとんど起伏のない平坦な地形にみえる。明治18年測量の迅速図によれば、前橋台地南部は北西から南東にかけて緩い傾斜面を形成しており、標高は町北西部の板井では75mほど、南東端にある沼之上では55mほどとなっている。南端を画する烏川の南岸には藤岡台地と低地が迫っていて、巨視的には前橋台地のなかで最も低い窪地状の地形となっている。このことから、関東構造盆地の西端との見方(澤口1995)がなされている。

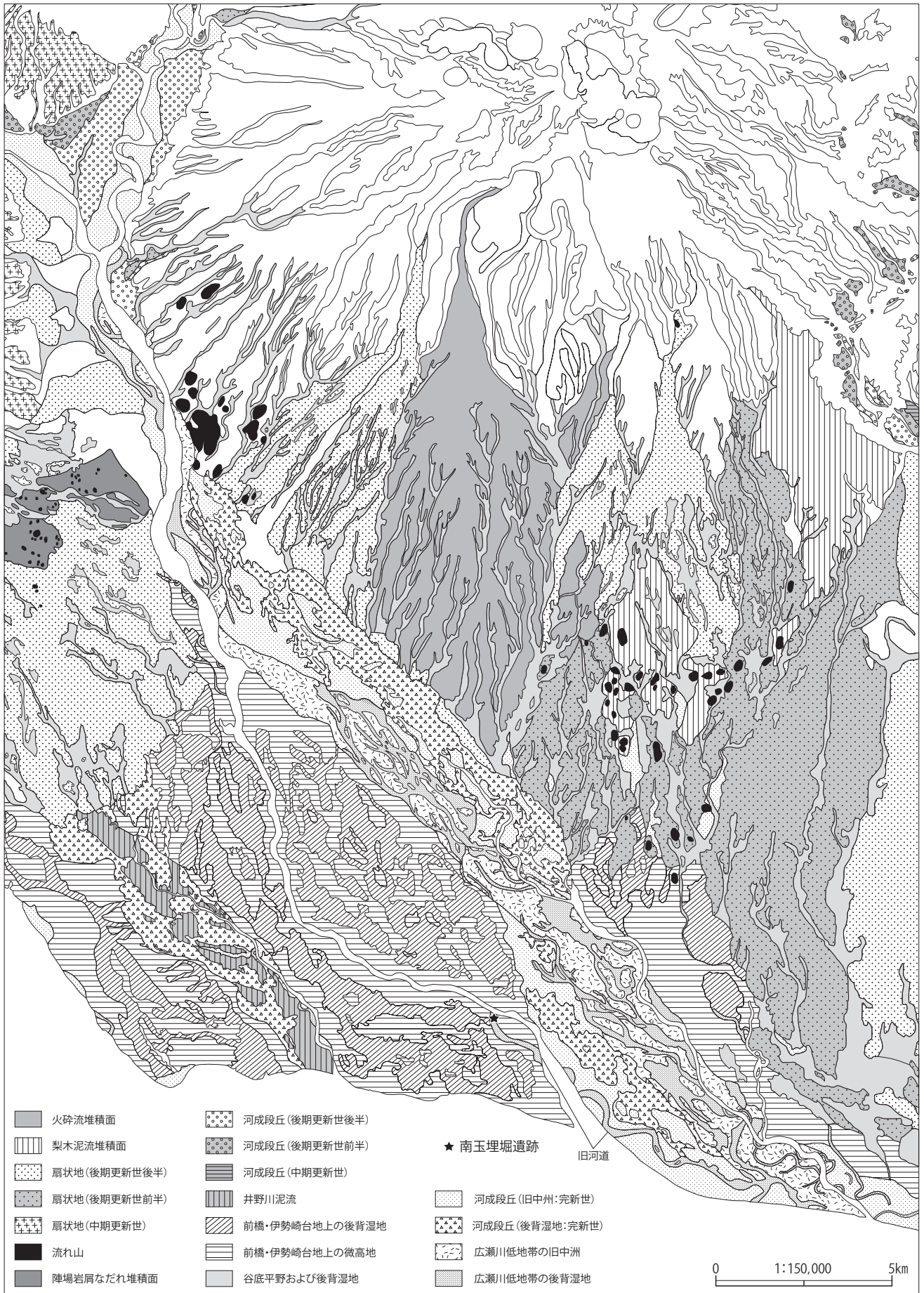
現在、玉村町域を横断する流路をとる利根川は、この前橋台地を貫流する大河川でもある。かつては、前橋台地の北東辺にあたる赤城山南西麓との境、すなわち現在の広瀬川が流れる低地帯を流下していたと考えられており、その頃の玉村町附近は数条の小河川が流下する台地

であったらしい。利根川が現在の流路に変流した時期と要因については、15世紀代に築かれたとされる「石倉城」が、その後の洪水で流路を替えて押し寄せた利根川の流水によって流されてしまい、かろうじて東岸に三の廓だけが残ったという伝承(『上毛伝説雑記』)に基づき、天文八(1539)年と天文十二(1543)年の洪水と結びつけた説が知られる(澤口2000)。近世以降の利根川はおおむね現流路を流れていたようであるが、絵図や現在も地形上に残された河道から、玉村町南東端の対岸にあたる伊勢崎市側に蛇行・分岐した流路をとっていたことが知られる。ちなみにこれは七分川・三分川と呼称されていた。

玉村町域での現利根川は、約150～200mの幅を有し、河床から3～10mの崖を形成している。台地地形は北西から南東方向へ緩く傾斜しているため、崖高は南東ほど低い。南玉埋堀遺跡付近では6～7mの高さを測る。

前述したように、前橋台地上には中小河川が北西から南東方向に幾筋も流れていたと考えられ、埋没して現在は確認できない状態とよい。これらの埋没河川は、南玉埋堀遺跡から北方ないし北西方約4km前後のあたりを東西に横断する北関東自動車道路の発掘調査で存在が確認されている。これらは榛名山麓を起源とする小河川と考えられ、台地には小規模な侵食谷が樹枝状に展開していたと推測される。その多くは、縄文時代から浅間Cテフラの堆積する3世紀後半～4世紀初頭までの間には堆積作用がまさり埋没したらしい。前橋市徳丸仲田遺跡(111)の旧藤川流路や同市西善尺司遺跡(112)で検出された河川跡では、河道に古墳時代前期から中期の土器や木製品類が廃棄され、一部には杭の出土もみられることから、水路等にも利用可能な小河川として残っていたものも存在したようだ。ただしこれらも、6世紀初頭の榛名山の噴火による榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)に覆われた水田が確認できることから、5世紀のうちにはほとんどが埋没してしまったと考えてよいだろう。そのなかで、いくつかの水流を集めて現代まで遺存し続けたと考えられるのが、前橋南部から玉村町域を流れる端気川や藤川である。この両河川は人工的に流路変更されて現況に至っているが、かつては蛇行しながら北西から南東





第6図 遺跡周辺の地形分類図(「群馬県史」通史編1 付図2から作成)

への流路をとる古墳時代以前から続く河川であると考えられよう。現利根川以南の地に当たる玉村町域でも、埋没した矢川の流路が想定されている。南玉埋堀遺跡の調査範囲と関わる位置に想定される矢川は、現在は利根川右岸の南玉から箱石を経て飯倉まで南流する用水路である。自然河川としての矢川は、藤川や端気川と平行するように東南流して利根川及び烏川に注ぐ流路をとっていたようであるが、その河道について現在はほとんど遺存していない。この矢川旧河道の復原は、明治18年測量の迅速図や航空写真(1947年米軍撮影)、地区境と小字地名を参考におおよそ復原が可能である。また、これに発掘調査の埋没河川調査例を加えた復原流路も提示されている(中島1999 関・中島2005)。南玉の東部には「矢川池」と称する用水池が存在したと『上野国群村誌』(明治8(1875)年編纂)に記されており、これがおそらく矢川旧河道の一部だったと考えられる。南玉埋堀遺跡の名称とした小字名の「埋堀」、その東に隣接する「矢川向」の字名なども流路復原の参考になろう。なお矢川旧河道は中間点の箱石で東方に分岐して利根川に注いでいたことが絵図等で判明している。これは「裏矢川」と呼ばれ、現在は旧河道に沿った小規模な自然堤防状の微高地に住宅が立ち並んでおり、当時の流路をうかがうことができる。

矢川旧河道の形成がいつ頃かについては、現在のところ明確ではない。天仁元(1108)年の浅間山の噴火以降との説(澤口1995)もあるが、現利根川の対岸にあたる北側を東南流する藤川と流路方向がほぼ平行していることから、現利根川の北側から藤川や端気川と平行して流下していた小河川の存在も可能性として考えておきたい。その場合には、矢川旧河道の時代を示す埋没土の調査や矢川上流部延長上での埋没河川の存否が鍵となる。

ところで、この自然河川としての矢川旧河道は、天明三(1783)年の浅間山の噴火の際に発生した泥流に襲われ、泥流堆積物で埋没してしまったことが記録に残されている。現在の玉村東南域はこの泥流堆積物(以下「天明泥流堆積物」と呼ぶ)が厚く覆っていて、微妙な地形の凹凸を隠している。天明泥流は利根川から溢れ出して両岸の低い部分を襲っており、特に矢川旧河道に沿った地域は被害がひどく、利根川までの間約1.5kmの広範囲に及んでいる(関・中島2005)。なお、昭和22(1947)年のカスリーン台風のときにも、これとほぼ同様の氾濫被害が

でていることは注目される。利根川が現流路に変流して以来、玉村町南玉・下之宮・小泉・飯倉・沼上の地域は、こういった洪水被害の常襲地域だったといえ、逆に利根川変流以前は比較的安全度の高い地域だったと推察される。このことは、縄文時代以降の遺跡立地との関係を考えるうえで、最も重要な地形条件と考えておくべきだろう。

玉村町南東部を襲った天明泥流堆積物の層厚は深いところで2m前後を測る。この地域に高い密度で存在した古墳群は埋没しているものも多く、また当時の水田や畠などの耕作地も泥流堆積物に覆われてほぼ平坦になってしまっている。

この凄まじい被害をもたらした天明泥流は、西方に離れた長野県境にある浅間山の噴火に起因する。浅間山はこれより遡る3世紀後半～4世紀初の間、天仁元(1108)年の2回にわたって噴火がおき、このとき広範囲に亘って住民の生活環境に多大な影響を与えたと考えられている。また、前橋台地北西にそびえる榛名山は、古墳時代の6世紀に2回の大きな噴火があり、県中央～東部に甚大な被害を与えたことが知られる。これらの火山噴火被害について、玉村地域においては降下火山灰のほか、榛名山の2度の噴火時に発生した洪水や泥流に覆われたことが判明している。さらに、年代や要因は特定できないが、中世に発生した洪水被害の痕跡も遺跡調査では明瞭に残されている。これらは、天明泥流のように甚大ではないにしろ、少なくとも農作物への被害は大きかったであろうと推察される。

玉村町域の歴史的な自然環境について、前橋台地東南部を主体に利根川の変流以後と以前で概述してきた。なお、前橋台地の南限を画する烏川は玉村町の南界ともなっており、対岸には藤岡市、埼玉県上里町がある。烏川は榛名山南西麓を流下して前橋台地の西側を画し、玉村町の南側では東流して南方から北流してくる神流川と合流、そこから約3km下流で現利根川を合わせている。16世紀代以前は玉村町の対岸で現流路のやや南側を流れ、利根川との合流点が尾島あたりまで至る以外、烏川の流路自体は大きな変化はなく、当地域における人類史のなかで確定的な地理的境界あるいは交流・交易ルートとしての役割を果たしてきた。このことから、烏川の存在が利根川変流以前の玉村町域の遺跡分布のあり方に一



定の条件を与えていることは充分予測されるところである。

南玉埋堀遺跡の周辺地域における過去の植生については、いくつかの遺跡発掘調査に伴う花粉分析結果によって大まかな推定が可能である。それによれば、古墳時代の4～6世紀代では、集落のある遺跡近辺では概ね草本花粉と木本花粉がほぼ同量あり、草本ではイネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属が優勢で、木本ではコナラ属コナラ亜属・コナラ属アカガシ亜属が優勢との結果が出ている(西田遺跡・徳丸仲田遺跡(111)・横手湯田遺跡・砂町遺跡(67)・斉田中耕地遺跡(100)など)。このことから、遺跡周囲では水田を含む湿地及びやや乾燥地からなる草地と広葉樹林が相半ばする景観が推測される。また浅間Bテフラに覆われた12世紀初頭の地層からは、木本より草本花粉が大きく上回り、草本ではイネ科・ヨモギ属・カヤツリグサ科が、木本ではクレーシイ属-マテバシイ属とコナラ属コナラ亜属が優勢で、湿地もあるが比較的乾燥気味の開けた土地の周囲に広葉樹林が存在する景観が推測される(玉村町若王子遺跡(89)・柄田添遺跡(102)など)。更に砂町遺跡(67)では、6世紀初頭の榛名山の火山降灰(Hr-FA)は花粉の様相に大きな影響を与えていないとの結果が確認された(砂町遺跡(67))。そして天明三(1783)年の浅間山の噴火に伴う降下火山灰(As-A)と泥流下の土層中の花粉から、遺跡地周辺はかなり開けた乾燥草地の周辺に疎らな広葉樹林が存在する景観であるが、古墳時代や12世紀末の木本花粉相に加えて新たにマツ属が確認されることから、場所によっては人為的な開発の結果生じる二次林の拡散が裏付けられたといえよう(若王子Ⅱ遺跡(87)・往来遺跡(77))。

以上の花粉分析結果は、発掘調査遺跡内の水田や畠土壌、ないしは遺構内に堆積した黒泥土を試料としていることから得られる結果は地点限定的であり、広範囲な自然植生の様相を必ずしも映し出すものではない。それでも、各遺跡における同一地層での分析結果や同一地点での大まかな経年変化の様相を相対化することで、遺跡立地環境を復原する有用な条件を提示することになる。

## 第2節 歴史的環境

南玉埋堀遺跡の形成された歴史的背景および地域史のなかにおける位置づけを考察するために、ここでは玉村町域を中心に、必要に応じて前橋市南部・伊勢崎市南西部を含めた地域について時代毎の遺跡分布について概述したい。

### (1) 旧石器時代

第1節で述べたように、前橋台地は1.5万年前からの上部ローム層をのせており、玉村町域においても後期旧石器時代の遺跡が発見されてもよい条件ではあるが、現在まで明確な遺跡の存在は知られていない。寒冷な湿地的環境であったことがその理由とされる(『玉村町誌 通史編 上巻』p.11)。石器類が発見されないだけで、旧石器時代人の活動域であったことまでも否定するものではないが、前橋台地ではその北東側にある赤城山麓や大間々扇状地での比較的濃密な遺跡分布と全く対照的な状況を示している。

### (2) 縄文時代

約15000年前に晩水期のドリラス期(Oldest Dryas)の終盤から温暖化が始まり、植生をはじめとした自然環境の大きな転換が、狩猟・採集経済を高度に発達させた縄文文化を生み出した大きな要因になったことはよく知られている。前橋台地では、植生を示す花粉分析の結果から、この気候変動が一様ではなく、寒冷地植生が温暖化の影響を受けて緩やかに変化していった例のあることも分かっている。玉村町域とその周辺では、この時期から遺跡の存在が明確になってくる。玉村町向田遺跡(14)では旧石器時代末期まで溯りうる黒曜石製木葉形尖頭器、斉田中耕地遺跡(100)では柳葉形尖頭器、福島曲戸遺跡(30)・上新田中道東遺跡・砂町遺跡(67)・横丹遺跡(103)では有舌尖頭器が出土している。また、南玉埋堀遺跡(1)から北西約3.8km地点には前橋市徳丸仲田遺跡(111)があり、草創期の隆起線文土器のほか磨石や有舌尖頭器・石鏃等がまとまって出土している。この地点での植生分析からは、寒冷地特有のマツ属やトウヒ属が主体でこれにコナラ亜属などの広葉樹類がわずかに加わってくること



が判明しており、急激な温暖期をむかえる直前の段階と考えられている(矢口1999)。このように想定される環境において、徳丸仲田遺跡(111)での磨石類の存在は食用堅果類などの利用も既に行われていたことを示唆する事例として注目される。

縄文時代早期以降、とりわけ群馬県内で各地に集落が形成され遺跡数が激増する前期以降にあっても、玉村町域での遺跡数・遺構検出は希薄である。福島大光坊(24)・上之手石塚Ⅲ・角瀨城(81)・福島曲戸(30)の各遺跡で少数の土坑が検出されているのみで、集落の存在は不明瞭である。福島曲戸遺跡(30)のように少量とはいえ早期から後期までの土器片がまんべんなく出土し、福島大島遺跡(27)では石皿が出土していることから、未確認ながら限られた地点で度々集落が存在したことは想定しておく必要はあろう。ただしその場合でも、遺物量の少なから極めて時間的に短いものであったと考えるべきだろう。その理由を、小河川の多い湿地的環境であったための狩猟対象動物相の貧弱さや有用植物の少なさに求めることも可能だが、そこで収束するのではなく、むしろ少量とは言え出土した石器類の分析や環境復原の結果等を総合的に検討して小規模で限定的な縄文人の生活の有り様を復原すべきだろう。同様に、現在得られる資料から玉村町域における縄文時代遺跡の立地傾向を語るのも時期尚早と考える。立地環境の異なる赤城山麓や大間々扇状地といった縄文遺跡の高密度分布域とは自ずと異なる遺跡立地背景を想定すべきなのだろう。

### (3) 弥生時代

弥生時代の時期区分として前・中・後の3時期区分が永く行われてきたが、稲作農耕の開始を廻る議論や土器編年研究の進展から、近年では更に細分して早期と晩期を加えた5時期区分も行われるようになってきた。また、中期と後期の境界に対する考え方の相違を解消するため、「前中後」の名称を避け「Ⅰ～Ⅴ期」と呼称することも並行して行われている。ここでは、周辺遺跡の紹介に重点を置くため、可能な限り各報告書や文献の記載に従い普遍的な3時期区分名で呼称することにする。

玉村町域での弥生遺跡の分布は、縄文時代と同様に少ない。しかし、その背景については縄文時代と異なる。群馬県において、少なくとも中期の後半からは稲作農耕

本格化のために水田可耕地である低湿地への進出が顕現化するのであって、その点で玉村町域は格好の開墾地だったとの想定は赦されるはずである。しかるに、西側に隣接する井野川流域やこれに続く烏川中流域左岸には中期後半から後期にかけての弥生集落遺跡が多く分布するのと対照的な状況を示すのはなぜであろうか。ここでその理由についての考究は避けるが、既知の弥生遺跡資料によって玉村地域における弥生時代の状況を概観することとしたい。

現状で最も古い段階の弥生土器が出土したのは福島飯塚遺跡(61)である。ここでは東北地方南部の南御山式系と思われる渦文土器がみられ、それ以外にも中期中葉から中期後半頃の在り系土器が出土している。中期後半では上飯島芝根Ⅱ遺跡(22)で中期後半の住居1棟(御新田式か?)、一万田遺跡(34)では中期後半の栗林式土器を用いた土器棺墓が知られており、小規模で短期間と想定されたとしても集落の存在は否定できない。遺構は確認できないが、福島・南玉(7)・上新田中道東・福島大島(27)、現利根川以北では徳丸仲田(111)・砂町(67)・横手南川端・横手湯田の各遺跡で中期後半の土器片が出土している。特徴的なのは、在り系櫛描文の栗林式とともに、北島式ないし御新田式(福島飯塚(61)・上飯島芝根Ⅱ(22)・徳丸仲田遺跡(111)や、東北南部から東関東の渦文系かと思われる土器(砂町(67))が目立つことである。出土総数そのものが少量であるにもかかわらず明瞭な存在を示すことから、比率としては他地域に比べてかなり高い。弥生時代中期後半の関東北西部では、中部高地型櫛描文を特徴とする栗林式土器が群馬県北～西半地域に、烏川と利根川の対岸にあたる埼玉県北部では北島式(吉田2003)、渡良瀬川以東の栃木県側には北島式と類縁性の高い御新田式が分布する。群馬県東部では散在的分布ながらも東北地方南部の影響を受けた渦文系土器の存在が知られている。玉村地域はこれらの主要分布域の間隙地域に相当し、そのことがこのような複数型式の混在状況を示すと考えてよからう。また、この時期に栗林式土器の集団が鐮川や烏川、さらに利根川に沿って埼玉県北部(熊谷市前中西遺跡)まで進出したと推測されることから、玉村地域はその通過地点だったとの想定も赦されよう。弥生時代の後期は県内各地に集落遺跡が拡散する分布動態が知られるが、当地域においては全く異なる。

茂木古墳群(50)内玉村町13号古墳(117)から出土した後期初頭の甕を筆頭に、福島飯塚(61)・福島・南玉(7)・上新田中道東・神人村Ⅱ(36)の各遺跡から少数の樽式土器片が出土しているのみで、遺構の存在はなお不明瞭である。ここでは、群馬県北～西半部でみられるような弥生後期の定住集落の姿は想定しにくい状況といえる。南玉埋堀遺跡(1)から北西に約5km離れた横手早稲田遺跡では、古墳前期土器に混在しながら比較的まとまった量の樽式土器が出土している。その理由が西側の弥生遺跡主分布域に近いからだとするならば、更に南東に展がる前橋南部～玉村地域～伊勢崎南部の低地域への進出が阻まれた何らかの理由があるはずである。それはおそらく、広範囲に及ぶ水利管理と水田開発の可否で理解するのがよいと思う。

なお、時期を限定できないが、おそらく中期後半～後期に伴うと思われる磨製石鏃1点が福島飯塚遺跡(61)から出土していることを付記しておく。

#### (4)古墳時代

玉村町から前橋市南部及び伊勢崎市南部にかけての地域開発史のなかで、最初の大きな画期が古墳時代前期にあるとの理解については、大方の意見が一致するところである。前節で述べたように、この時代は利根川が現広瀬川流路を流下していたので、南玉埋堀遺跡(1)のある地域は西側を井野川、北東を古利根川、南を烏川に区切られた三角形の平坦な地形の単元で捉えることが出来る。まず、この地域内における古墳時代前期の遺跡を俯瞰してみたい。

調査報告で確認できる前期集落遺跡は40ヶ所を越え、古墳や土器出土のみの遺跡も加えれば70ヶ所を越える。このことは、弥生時代後期においても集落遺跡の姿が見えてこない状況に比べて、爆発的ともいえる急激な遺跡の増加を示す。遺跡規模の大小や微妙な時期差を除けば、地域内全体にまんべんなく分布しており、分布密度の濃淡も認めがたい。前橋市南部の朝倉町・後閑町・下佐鳥町・亀里町・西善町などは遺跡分布が希薄であるが、これは発掘調査事例が少ないためであり、同地域を横断する北関東自動車道や南北に縦貫する前橋長瀬線バイパス関連の発掘調査では、長くても500～600m間隔の密度で分布していることが判明している。これは、弥生後期

には何らかの理由で果たし得なかった水田開発を広域にしかも短期間のうちに押し進めた結果と考えてよいだろう。その証左として、南玉埋堀遺跡(1)の北西約1.5kmにある砂町遺跡(67)、そこから更に1.8km離れた徳丸仲田遺跡(111)では、4世紀代の開削と思われる直線的な幅約5mの用水路が確認されている。両遺跡で確認された水路遺構は走向や形状・規模更に出土品の共通性から、現藤川の右岸に沿った大規模な1本の水路と推測されている。また南玉埋堀遺跡(1)の西方約4km地点の下郷遺跡でも幅6mの古墳前期に溯る水路が検出されており、水田開発のための大規模水路が幾筋も開削されたことが推測されるのである。水田跡については、浅間Cテフラ(As-C)(3世紀後半～4世紀初降下)に覆われた検出例は不明だが、6世紀初頭の榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)に覆われた水田耕土下から走向や区画の異なる水田畦畔痕跡が確認されている(斉田中耕地(100)・中内村前遺跡など)ことから、4～5世紀には水田の開発と経営が進められたことは間違いない。集落の規模や継続期間にはばらつきがあり、現利根川左岸にあたる伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡や同市東上之宮遺跡(40)は規模が大きく後期まで継続する拠点集落と位置づけてもよい。水路跡を検出した徳丸仲田遺跡(111)では、少なくとも調査範囲での検出遺構と出土遺物から判断する限り4世紀中葉～後半にほぼ限った集落と捉えることができ、初期水田開発のための開拓者集団であったとの想定も可能と考えている。当該地域においては、このようないくつかの拠点集落と多くの小規模短期集落の組み合わせで分布し、一気に広範囲の水田開発を進めたと理解したい。

前期の古墳については、南玉埋堀遺跡(1)の南東約1.3km離れた箱石浅間山古墳(12)、南南東約2kmの位置にある川井稲荷山古墳(綜覧一芝根村第7号)(118)、南西約1.5kmにある軍配山古墳(綜覧一玉村町第1号)(119)、西南西約4.5kmにある下郷天神塚古墳などが近隣のものとして掲げられる。なお、北北西に約7km離れて低平地形の三角形の頂点にあたる位置に、前橋天神山古墳と前橋八幡山古墳が存在する。さらに西北西約7km地点には高崎市元島名将軍塚古墳が存在する。前橋八幡山古墳は全長130m、元島名将軍塚古墳は全長91mに及ぶ大型前方後方墳であり、前橋天神山古墳は全長129mの前方後円墳で銅鏡5面を含む豊富な副葬品からも当該地域の盟

主墳であったことがうかがえる。南玉埋堀遺跡(1)に近い箱石浅間山古墳(12)や川井稲荷山古墳(118)は2次の埋葬のための墳丘改変で墳形や規模は不明だが、初期の段階では4世紀代の前期古墳であったことが判明している。川井稲荷山古墳(118)ではこの初期埋葬に伴ったと考えられる三角縁神獣鏡1面が出土している。前述したように、当該地域は古墳時代前期にいたって一気に広範囲な水田開発が行われたのであり、その背景には大土木工事を施工できる技術力と労働力、更にこれらを統括する組織力が前提であったと考えたい。そしてこれらを統べる有力被葬者層の墓が前述の前期古墳群であったとの想定は無理のないところであろう。そして、街道南・上新田中道東・福島飯塚(61)・赤城・上之手石塚・下郷・御門等の遺跡から周溝墓が検出されており、集落と一体で各地に分布していた様相を示している。住居跡では上之手八王子遺跡で住居の周囲に浅い溝を廻らす形態が確認され、現利根川以北にある前橋市側の横手湯田遺跡や横手早稲田遺跡及び中内村前遺跡等の同例とともに、地下水位の高い低地域での水はけを意図した住居形態かと注目される。なお、近似する例は東海地方東部の遺跡でも知られるが、北陸地方では弥生時代に溯る例もあることから、地域タイプではなく低湿な立地条件への一般的な適応と考えられよう。

ところで、当該地域の古墳時代前期集落遺跡から出土する土器群のうち、大部分は東海西部系が大半を占めている。そのなかに、客体的な存在として北陸系土器が知られている。砂町遺跡(67)では北陸北東部系の甕(「千種型」)、斉田竹之内遺跡(99)では北陸南西部系の甕(「月影式」)か、前橋市側の横手早稲田遺跡では器受け部と脚部に稜をもつ装飾器台や高杯がみられ、東海西部系の所謂「石田川式」を主体とするか否かに関わりなく、県内各地に少数分布している状況といてよい。このことは、同じ外来系であっても東海西部系と北陸系では流入の規模はもちろん、その背景に何らかの差異があったと想定しておく必要があるだろう。

古墳時代中期(5世紀代)は、前期に比べると遺跡数が減少する傾向がうかがわれ、現利根川左岸の伊勢崎市阿弥大寺本郷遺跡のように後期まで継続する集落と前期で一旦終息する集落の両者がみられる。梨ノ木山古墳(120)や横堀遺跡、若宮(9)・八幡原古墳群などの中期古墳が

存在すること、前述のように6世紀初頭に噴火した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)で覆われた水田が玉村町域～前橋市南部の各地で検出されていることから、5世紀代を通じて継続した地域経営が行われていたことは間違いないだろう。ただし、この時期の古墳としては5世紀後半の梨ノ木山古墳(綜覧芝根3号)(120)や、若宮(9)・八幡原古墳群、角淵城遺跡(81)での5世紀後半から6世紀にかけての初期群集墳の存在が判明しているのみで、5世紀前半に比定できる古墳については不明確なままである。5世紀前半は、群馬県東部の地で東日本最大の前方後円墳である太田天神山古墳が築かれ、一時的に群馬県内の東西勢力により「共立」されたとの解釈がある(土生田2008、若狭2011)。玉村地域周辺では北東の広瀬川左岸で長持形石棺をもつ前方後円墳である御富士山古墳が知られる。地域開発の水利システム管掌との関係で、水源に近く標高の高い地域に比重を移すとの解釈(若狭2002)を肯んずるならば、5世紀前半から中葉にかけての玉村地域の様相は、農業生産域として継続しつつ支配中枢基盤はより北部に移ったためとも理解することができよう。なお、松原Ⅲ遺跡(72)では5世紀前半の滑石製模造品の工房跡が検出されており、比較的早い段階で模造品による祭祀システムの一部を担う地域として機能していたことが知られる。

古墳時代後期(6～7世紀)には、烏川左岸に若宮(9)・八幡原古墳群、角淵古墳群(84)、茂木古墳群(50)、川井古墳群(78)が、現利根川右岸にそって箱石古墳群(11)、小泉古墳群(42)がそれぞれ展開するようになる。そのうち川井古墳群(78)のなかの芝根16号古墳(121)は昭和44年に群馬大学の手で発掘調査が行われ、残されていた石室構造から群馬県内でも最古段階に含まれる横穴式石室であると考えられている(右島2009)。小泉古墳群(42)では全長46mの前方後円墳である小泉大塚越3号墳(44)がほぼ全面調査され、金銅製冠片・単鳳環頭大刀・馬具等の豊富な副葬品や多彩な形象埴輪等が出土している。同じく小泉大塚越7号墳(44)からは稀少な人面付円筒埴輪が出土した。茂木古墳群(50)の中枢であるオトカ塚古墳(49)は全長86mを越える前方後円墳であり、日本最大級の馬形埴輪を出土したことで知られる。これらはいずれも6世紀中頃～後半の古墳と考えられ、玉村地区における古墳築造最盛期を代表する例といえよう。



玉村地区における6～7世紀代の古墳の密な分布状況に比べ、集落遺跡の存在は限られている。土器などの遺物については各所で散見できるが、集落としての姿を示すのは福島飯塚遺跡(61)などわずかである。福島飯塚遺跡(61)では6世紀中頃の榛名山噴火に伴うHr-FP泥流に覆われた水田跡が確認されているので、集落域と農業生産域、墓域が小単位でセットになっているのではなく、玉村町～前橋南西部域の広範囲のなかで、烏川左岸に古墳群が分布するように、集落域も集中立地している可能性も考えておくべきではないか。憶測にすぎないとはいえ、玉村町内で比較的標高の高い位置にある福島飯塚遺跡(61)で集落の一端が判明したことは、集落占地がかなり限定された地形を選んでいることを示唆しているように思われる。

玉村町～前橋市南西部域は、6世紀の初頭と中頃に噴火した榛名山の降下テフラの直接的な被害は少なかったようだが、その二次的災害ともいえる泥流が広範囲に堆積しており、これによって埋もれた田畠の分布が知られる。同様に、現利根川の左岸にあたる伊勢崎域においても東上之宮遺跡(40)や阿弥大寺本郷遺跡で泥流埋没畠が検出されている。

特殊な遺構・遺物例としては、天神巡りⅢ遺跡(86)で土器焼成土坑が検出され、福島飯塚遺跡(61)で琴柱形石製品、上新田中道東遺跡では棒状に固結した漆塊が出土している。

### (5)奈良・平安時代

律令期の<sup>上野国</sup>には13の郡が置かれ、更にその下に郷が置かれた。10世紀の『倭名類聚抄』に記載された「那波郡」には朝倉・鞆田・田後・佐味・倭文・池田・葦束の7郷が属しており、このうち佐味・鞆田郷が現在の玉村町域に概ね推定されている(尾崎1976)。またそのなかで、上毛野君一族であった佐味君の在所として、烏川左岸を有力候補地とし、更に角淵の小字名「御門(みかど)」から那波郡衙所在地の候補との考え方もある(尾崎1967)。

この地域における集落遺跡は7世紀後半あたりから顕在化してきて、平安時代の9世紀代には分布密度がかなり高くなり、分布範囲もほぼ全域にひろがるようである。上之手八王子遺跡は7世紀後半から11世紀前半にいたるまでの163棟の竪穴住居が確認され、長期安定型集落の

現出をうかがうことができる。全容は把握できていないが、柄田添(102)、上之手石塚、福島稲荷木遺跡(60)なども同様であろう。平安時代主体の集落でも齊田竹之内(99)、福島飯塚(61)、行人塚、上飯島芝根遺跡(22)など多くの遺跡が挙げられ、佐味・鞆田郷の姿を垣間見るようである。

集落遺跡以外では、現利根川左岸にある砂町、上福島尾柄町(69)、中之坊遺跡(70)では東西に走る推定東山道駅路(牛堀一矢ノ原ルート)が判明している。これは、側溝心々距離約9～10mで、7世紀後半から8世紀にかけて利用されたと推定されている。また、この推定駅路と関連して、南に250mほど離れて官衙的施設と目される一万田遺跡(34)がある。ここでは、南北方向の条里地割に合致する柵列(中島・吉澤2004)や瓦、「舎」の墨書土器等が出土している。

本地域では、天仁元(1108)年に噴火した浅間山の火山灰に比定される浅間Bテフラ(As-B)に覆われた水田跡の検出が広範囲に見られる。これらは平均幅1.3mほどの大畦の走向から、ほぼ律令期の条里地割に沿ったものと理解されている。部分的に条里プランから外れた地形優先の区画や、異なる基準線を用いたらしい区画の存在なども判明している(中島・吉澤2004)。As-Bに覆われた水田条里地割の成立年代については、耕土下位から出土する土器の年代から8世紀後葉(中里2000)、前橋台地南部の調査例をもとに9世紀初頭以降(新井2001)といった見解がある。今後における大畦畔を主とした水田耕土下位の遺構や出土土器の年代比定、東山道駅路年代との整合性などの検討が進むことで、自ずと明確になってこよう。

ところで、南玉埋堀遺跡(1)の東方約1.2kmの下之宮には延喜式内社である火雷神社(115)が鎮座する。現本殿は18世紀中頃の建物だが、縁起によれば御諸別王の創建で、延暦十五(796)年に官社に列せられたと『日本後紀』にみえる。また、現利根川を越えた伊勢崎市側には倭文神社(116)が鎮座する。この両社は上野国の12座のうちの2座であり、地名の「上之宮」「下之宮」と呼応して南北に並んだ位置関係にあることが注目される。いずれも8世紀には存在していたことが想定され、火雷神社(115)は農耕神、倭文神社(116)は織物・養蚕の神の信仰とし、古代集落の展開と関連づける考え方もある(井上1992)。

なお注目される出土遺物として、福島曲戸遺跡(30)か

ら「上野国」ほかの刻書紡輪や緑釉陶器、福島飯塚遺跡(61)や福島稲荷木IV遺跡からは「家」と書かれた墨書土器多数、上福島芝根II遺跡(22)では「影」文字の銅印、また現利根川左岸の神人村遺跡(35)からは瑞花双鳳八稜鏡が出土している。

### (6)中・近世

本地域における発掘調査では、天仁元(1108)年噴火による浅間Bテフラを鍵層として調査面を分け、これより上層で確認される遺構や出土遺物を中世及び近世に帰属するとして扱うことが多い。また、天明三(1783)年の浅間Aテフラを鍵層に近世遺構であることを認定することができる。ただし、このような鍵層となるテフラの認定が不明確で、出土遺物がほとんど見られない場合には、中世と近世を明瞭に分かつことは難しい。また、中世から近世を通じて現代までその痕跡を残す遺構もあることから、ここでは分割せず一括して概観する。

12世紀中頃(長寛年中)に伊勢神宮内宮の「玉村御厨」がこの地におかれたとの記録(『神宮雜記』)が残されている。ここでは、125町(ha)の神田・名田から「布30端」を上納したとされる。この時の在地開発領主が玉村氏であったとも目される。鎌倉幕府の政権下では、それまで上野国奉行人の安達氏に被官していた玉村氏によって支配されていたが、弘安八(1285)年の霜月騒動により、北条得宗家へ支配が移った。これにより、北玉村は円覚寺、これ以外の地は極楽寺に寄進されたと推定されている(唐沢定市1988)。

平安時代後期頃に現伊勢崎市南西部域を支配していたと推定される藤原姓那波氏が、治承・寿永乱(1180～1185)で没落し、替わって中原姓大江氏が那波氏を名乗ったといわれる。この中原姓那波氏は、室町時代に上杉氏守護下で玉村を支配し、戦国期には由良氏、のち後北条氏に属したらしい。この地域は、周辺の有力な豪族や、戦国期には上杉、武田、後北条氏らの動向に大きく影響を受け、河川交通や戦略的な要衝として度重なる戦乱の舞台ともなったため、広い範囲にわたって荒廃したと推測される。

発掘調査からは、玉村町～前橋市南部にかけて多く分布する環濠屋敷が目目される。これの多くは中世に初源をもつ土豪屋敷と考えられ、近世を通して存在した例も

少なくない。成立の経緯は一律でないにせよ、初期の堀の形状等から、当初の目的は濠を四周に廻らす防御性を高めた屋敷との見方が強い。ただし、拡張やプラン変更などを経るなかで次第に濠の性格が変質した可能性も高く、近世の絵図に見られるように河川から引水した水路としての機能も果たしたと考えられることから、一概に防御性のみでは理解できない。むしろ利水や敷地境界を目的とした堀ではないかとの推定(石井榮一2009)もある。

初源が13世紀代まで遡及する可能性のある城郭・屋敷としては、弘長二(1262)年記銘ほか板碑があり玉村太郎邸宅の伝承の残る観照寺屋敷(上之手)(58)のほか、玉村城(6)、南玉館(5)、阿左美館(71)などが知られる(群馬県教育委員会1988)。発掘調査例では、斉田竹之内(99)、斉田中耕地(100)、福島飯玉(98)、福島飯塚(61)、福島大島(27)、福島大光坊(24)、福島久保田(28)・久保田(29)、宇貫(宇貫館)、八幡原赤塚II、上之手石塚、蟹沢、内田屋敷(98)、原屋敷(95)、田口下屋敷(101)、下之宮高低(10)、角淵城(81)、伊勢崎市東上之宮(40)等が列記され、近世まで継続するものもみられる。なお、南玉埋堀遺跡(1)の南方約250mには金蔵寺があり、その開基と伝わる金原氏の屋敷跡と推定される玉村城(南玉村屋敷)(6)が南に隣接する。ここには町重要文化財に指定された2基の五輪塔(文安五・六年銘)が残る。その更に南東に接して南玉館(5)が位置し、那波氏家臣であった原氏の館、あるいは上野国守護安達氏家臣の玉村氏の館との伝承が残る。

農業生産関連の遺構としては、福島久保田遺跡(28)で応永三十四(1427)年と想定される洪水層に覆われた水田跡が検出されている。上之手立野遺跡(92)や福島飯玉遺跡(98)では、浅間Bテフラ降下以降で天明3年以前の水田・畠が判明している。

近世に入ると、この地は徳川幕府代官の伊奈忠次の管掌のもとで再開発が実施された(『玉村町誌』)。伊奈氏は慶長十五(1610)年に滝川用水を完成。このとき、原野開拓の功を祈るため、角淵八幡宮を玉村八幡宮に移したと伝える。玉村八幡宮「三間社流造」の本殿は国の重要文化財に指定されている。滝川用水開削と新田開発により、「新田村」が誕生し、玉村八幡宮を境に上新田と下新田にわかれることとなった。正保四(1647)年以降には、玉村



町を東西に横断する日光例幣使街道の通行が盛んとなって宿場として繁盛し、利根川渡河点の五料には厳しい取り締まりの関所、渡船場が置かれた。現在の玉村町の景観はほぼこの時期に形成されたと考えられる。

近世の埋没遺跡としては、中世から引続く環濠屋敷、天明三(1783)年浅間山噴火に伴う泥流被害の埋没家屋・田畠がある。玉村八幡宮の東に隣接する玉村館(97)は伊奈忠次の陣屋が置かれたとされる。現利根川左岸にある上福島中町遺跡(32)は、天明泥流によって埋没した建物が発見された。ここからは礎石建物10棟、便所6棟、井戸2基、畠、道などの存在が判明し、当時のままの各種生活用具が出土している。また樋越諏訪前遺跡(8)では、埋没家屋や植え込みなどが、利根添遺跡(4)では矢川氾濫を防ぐための堤防遺構が確認されている。この天明泥流で埋没した田畠としては、小泉大塚越(44)、小泉長塚

(43)、川井箱石(13)、柄田添遺跡(102)等が知られており、柄田添遺跡(102)では農作業(草取りか)の足跡列、利根川対岸の伊勢崎市東上之宮遺跡(40)では水田の倒れたイネも発見されている。この天明泥流被災後の復旧田畠の検出も多い。福島治郎前、天神前Ⅱ、下之宮中沖(2)、川井箱石(13)、伊勢崎市東上之宮(40)、福島飯塚(61)、福島大島(27)等の各遺跡では、砂礫の多く混じる泥流堆積物の天地返しによる耕土復旧を行った様子がありありとかがえる。

南玉埋堀遺跡(1)のある南玉地区は、前述の矢川が斜走する地点にあたり、天明泥流の被害を直接被った地域である。その天明泥流に埋没した近世の遺構や遺物を明らかにすることはもとより、その凄まじい被害の実態を明らかにすることも本遺跡発掘調査の重要な目的の一つであることは間違いない。

#### 参考文献

- 新井 仁2001「群馬県における平安時代の水田開発について」研究紀要19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 新井房夫1962『群馬大紀要自然科学編』10 pp. 1-79.
- 井上唯雄1992「第4章 律令時代の玉村町 第5節 古代信仰と神社」『玉村町誌』通史編 上巻
- 尾崎喜左雄1967『上野玉村古墳群発掘調査概報』
- 尾崎喜左雄1976『群馬の地名』
- 唐澤定市1988「玉村御厨」『国史大事典』9 吉川弘文館
- 澤口 宏1995「第三章 地形・地質 第二節 台地」『玉村町誌 通史編 下巻二』pp.1516
- 石井榮一2009「B区4面より検出された建物遺構の建築史的検討」『福島大島遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 玉村町誌編集委員会1992『玉村町誌 通史編 上巻』
- 中里正憲2000「砂町遺跡における大畦畔の調査例」群馬考古学手帳10
- 中島直樹1999「Ⅵまとめ」『沖遺跡』玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会
- 中島直樹・吉澤 学2004「群馬県玉村町における条里地割の復原」『東国史論』19
- 土生田純之2008「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』
- 深澤敦仁2013「玉村周辺の古墳時代のはじまりを考える」『玉村町の前期古墳』平成25年度玉村町歴史資料館 第18回企画展資料
- 右島和夫2009「玉村の古墳群を考える」群大考古資料里帰り展資料 玉村町歴史資料館
- 矢口裕之1999「群馬県徳丸仲田遺跡の縄文時代草創期遺物包含層の層序と古環境」研究紀要17 pp.13-24 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 吉田 稔2003「北島式の提唱」『埼玉考古別冊7 埼玉考古学会シンポジウム 北島式土器とその時代』
- 若狭 徹2002「古墳時代の地域経営」『考古学研究』49-2
- 若狭 徹2011「中期の上毛野」『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001 『西善尺司遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『中内村前遺跡(1)』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『西田遺跡 村中遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『横手南川端遺跡 横手湯田遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『徳丸仲田遺跡(2)』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003 『上福島中町遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007 『福島飯塚遺跡(1)』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008 『福島飯玉遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010 『箱石浅間山古墳 不動山古墳』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010 『斉田中耕地遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011 『斉田竹之内遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015 『東上之宮遺跡』
- 玉村町教育委員会1992 『玉村町の遺跡』
- 玉村町教育委員会1993 『小泉大塚越遺跡』
- 玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会1999 『沖遺跡』
- 玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会2001 『角瀧城遺跡』
- 玉村町教育委員会 玉村町遺跡調査会2003 『一万田遺跡』
- 玉村町歴史資料館2001 「玉村町の古墳時代」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2002 「玉村町の中世屋敷」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2006 「天明三年浅間山焼泥押と玉村町」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2008 「玉村町の地区の歴史Ⅰ 玉村地区編」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2009 「玉村町の地区の歴史Ⅱ 上陽地区編」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2010 「玉村町の地区の歴史Ⅲ 芝根地区編」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2011 「国境河川地域、玉村町の戦国時代」企画展資料
- 玉村町歴史資料館2013 「玉村町の前期古墳」企画展資料
- 群馬県教委1988 『群馬県の中世城館跡』





第7図 周辺の遺跡分布図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「高崎」平成22年12月1日発行、「前橋」平成22年12月1日発行、「大胡」平成22年12月1日発行、「伊勢崎」平成15年2月1日発行使用)



第3表 南玉埋堀遺跡 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	近代	概要	参考文献
1	南玉埋堀遺跡		○	○	○	○	○		本遺跡。	9
2	下之宮中沖遺跡				○	○	○		平安時代の水田、中世の溝、土坑、近世の水田、畠、復旧溝などを調査。	8・9・30
3	南玉二丁町遺跡				○	○	○		古墳周溝、平安時代の住居、中世の水路、近世の水田、復旧溝などを調査。	8・9
4	利根添遺跡						○		近世のAs-A下畠、土手などを調査。	32・43
5	南玉館(原武屋敷)						○		中世居館。2重の堀をもつ館跡。	1・6・32・34
6	玉村城(南玉村屋敷)						○		中世城館。	1・6・32・34
7	福島・南玉遺跡				○	○	○		古墳時代の土坑、溝、平安時代の住居、水田、中・近世の土坑、溝、近世の復旧溝などを調査。	73
8	樋越諏訪前遺跡						○		近世のAs-A下家屋、植え込み、土手、溝、畠などを調査。	66
9	若宮古墳群				○				ドンドン山古墳(宮郷村第15号)をはじめとする古墳群。	1・2
10	下之宮高俣遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、中世の館址、近世の屋敷、礎石建物、復旧溝などを調査。	8・9・30
11	箱石古墳群				○				箱石浅間山古墳、少林山古墳、社宮島古墳をはじめとする古墳群。	78
12	箱石浅間山古墳				○				古墳時代前期構造の一边30m余りの不等辺八角形の多角形墳を調査。	28
13	川井箱石遺跡		○		○	○	○		縄文時代の打製石斧が出土。古墳時代の溝、古墳3基、平安時代の住居、As-B下水田、中・近世の溝、土坑、集石、As-A下水田、畠、復旧溝などを調査。	7
14	向田遺跡		○	○	○	○	○		旧石器時代終末期から縄文時代草創期ころの柳葉形尖頭器が出土。古墳時代の住居、水田、中世の掘立柱建物、敷石地業建物、近世の復旧痕などを調査。	80
15	三境遺跡					○	○		平安時代のAs-B直下水田などを調査。	39
16	三境Ⅱ遺跡					○	○		平安時代のAs-B直下水田、中世の溝などを調査。	39
17	十王堂遺跡					○			平安時代のAs-B下水田などを調査。	32・51
18	十王堂Ⅲ遺跡					○			奈良・平安時代の住居、溝などを調査。	32・69
19	大明神遺跡					○			平安時代のAs-B下水田などを調査。	57
20	茂木館本館(田口屋敷)						○		中世館跡。2重の堀をもつ方形館跡。	6・32・34
21	後箇屋敷						○		中世屋敷跡。2重の堀をもつ屋敷跡。	6・32・34
22	上飯島芝根Ⅱ遺跡			○		○			弥生時代の住居、平安時代の住居、水田などを調査。	56
23	北小路遺跡					○			平安時代のAs-B下水田などを調査。	57
24	福島大光坊遺跡		○		○	○	○		縄文時代の土坑、古墳時代の住居、水田、畠、平安時代の住居、水田、中世の掘立柱建物、水田、畠、近世の災害復旧溝などを調査。	18
25	福島味噌袋遺跡				○	○	○		古墳、平安時代の住居、中世の溝、近世の復旧坑などを調査。	8
26	味噌袋・福島二丁町遺跡					○	○		平安時代の住居、土坑、溝、水田、近世の復旧溝などを調査。	73
27	福島大島遺跡				○	○	○		縄文土器が出土。古墳時代の住居、古代の水田、中世の館、掘立柱建物、近世の畠、復旧溝などを調査。	26
28	福島久保田遺跡				○	○	○		古墳時代、平安時代の住居、中世の掘立柱建物、古墳時代～中世の水田、近世の災害復旧溝などを調査。	18
29	久保田遺跡		○		○	○	○		縄文土器が出土。古墳時代の掘立柱建物、平安時代の土坑、溝、井戸、中世の竪穴状遺構、土坑、溝、近世の耕地復旧溝などを調査。	62
30	福島曲戸遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、掘立柱建物、奈良・平安時代の住居、掘立柱建物、水田、中・近世の水田、災害復旧溝などを調査。	16
31	福島治部前遺跡					○	○		奈良・平安時代の住居、中世の土坑、溝、近世の復旧溝などを調査。	58
32	上福島中町遺跡				○	○	○		古墳時代の土坑、溝、平安時代の住居、As-B下畠、中世の掘立柱建物、火葬墓、近世の建物、井戸、道、畠などを調査。	19
33	上福島遺跡				○	○	○		古墳時代の溝、平安時代のAs-B下水田、近世のAs-A下畠などを調査。	16
34	一万田遺跡			○		○			弥生時代の土坑墓、奈良・平安時代の住居、掘立柱建物、柵列、土坑、溝などを調査。	32・59
35	神人村遺跡					○			平安時代の土坑、溝などを調査。	32・68
36	神人村Ⅱ遺跡					○			奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、水田などを調査。	32・33
37	稲荷山古墳群				○				稲荷山古墳・金毘羅山古墳をはじめとする古墳群。	1・2
38	上ノ宮要害						○		中世要害、那波城の碑。	6
39	東上之宮遺跡(伊勢崎市教育委員会)					○	○		奈良・平安時代の住居、竪穴状遺構、中・近世の土坑、溝、近世後半の水田、河道跡、復旧溝、復旧土坑などを調査。	4
40	東上之宮遺跡(群埋文)				○	○	○		古墳時代前期から平安時代の住居、中・近世の水田、畠、近世の復旧溝などを調査。	8・11
41	宮柴前遺跡						○		近世のAs-A下水田、畠、水路などを調査。	2・3
42	小泉古墳群				○				小泉大塚越古墳、二本櫓古墳をはじめとする古墳群。	78
43	小泉長塚遺跡				○		○		6世紀後半築造の古墳から単鳳環頭大刀、馬具などの副葬品が出土。中・近世の溝、土坑などを調査。	32・70
44	小泉大塚越遺跡					○	○		6世紀後半の前方後円墳1基、円墳3基、平安時代のAs-B直下水田、近世As-A直下の畠などを調査。	32・34・36・74
45	沖遺跡						○		近世のAs-A下畠、溝、旧河川などを調査。	45
46	北田中遺跡						○		近世のAs-A下畠を調査。	53
47	街道南遺跡				○	○	○		古墳時代前期の円形周溝墓、平安時代の溝、近世の井戸、土坑などを調査。	65

第2章 地理的及び歴史的環境

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	近代	概要	参考文献
48	北原遺跡				○	○	○		古墳時代前期の方形周溝墓、円形周溝状遺構、奈良・平安時代の掘立柱建物、中世の土坑、井戸、溝などを調査。	37
49	オトカ塚遺跡				○		○		古墳時代の住居、方形周溝墓、前方後円墳、近世の井戸などを調査。	5・32・60
50	茂木古墳群				○				浄土山古墳、オトカ塚古墳、軍配山古墳、梨ノ木山古墳などの前方後円墳をはじめとする古墳群。	78
51	下茂木屋敷						○		中世城館跡。	6・32
52	神明遺跡					○	○		平安時代の水田、中世以降の溝などを調査。	32・69
53	滝川南遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、平安時代の住居、As-B下水田、中世以降の土坑、溝、用水路(旧河川)などを調査。	32・48
54	五郎作巡遺跡					○		○	平安時代の住居、掘立柱建物、近代の水路などを調査。	41
55	水口遺跡					○		○	平安時代のAs-B直下水田、大畦、近代の溝などを調査。	85
56	角瀨丹土遺跡				○	○			古墳時代の住居、奈良・平安時代の住居などを調査。	86
57	曲田遺跡					○			平安時代の掘立柱建物、井戸、溝、As-B下水田などを調査。	32・46・47
58	観照寺屋敷						○		中世城館跡。	6・32・34
59	八街北圃・八街北区遺跡			○	○	○	○	○	弥生時代から古墳時代の土坑、平安時代の水田、中・近世の溝、近世から近代の溝、土坑などを調査。溝から「玉材宿」と墨書きされた陶磁器などが出土。	79
60	福島稲荷木遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、方形周溝墓、Hr-FP下水田、奈良・平安時代の住居、As-B下水田、溝、中世以降の水田、土坑、溝、近世以降の屋敷などを調査。	32・77・83
61	福島飯塚遺跡		○	○	○	○	○		縄文土器、弥生土器が出土。古墳時代の水田、方形周溝墓、溝、古代の住居、掘立柱建物、水田、中世の館、掘立柱建物、水田、溝、近世の復旧溝、水田、畠などを調査。	23・24
62	屋敷遺跡					○	○		平安時代の住居、掘立柱建物、中・近世の溝などを調査。	44
63	屋敷Ⅱ遺跡				○	○	○		古墳時代のHr-FA下水田、中・近世の竪穴遺構、掘立柱建物、近世土塁などを調査。	75
64	上福島の砦						○		中世砦、那波氏一族の砦。	1・6・32・34
65	宇津木館						○		中世館跡。	1・32
66	金免遺跡					○			平安時代のAs-B下水田などを調査。	31・32
67	砂町遺跡				○	○	○		古墳時代前期の大規模な溝、東山道「牛堀・矢ノ原ルート」、水田、中・近世の水田、溝などを調査。	72
68	尾柄町Ⅲ遺跡					○	○		平安時代の水田、中・近世の溝などを調査。	72
69	上福島尾柄町遺跡					○	○		推定東山道駅路「牛堀・矢ノ原ルート」、平安時代のAs-B下水田、近世の溝などを調査。	14
70	中之坊遺跡				○	○	○		古墳時代の溝、奈良・平安時代の水田、溝、推定東山道駅路「牛堀・矢ノ原ルート」、中近世の溝、土坑などを調査。	72
71	阿左美館(花台寺)						○		中世館跡。	1・6・32・34
72	松原Ⅲ遺跡				○				古墳時代の住居、竪穴状遺構、中期の石製紡錘車及び石製機造品製作跡などを調査。	32・61・69・86
73	原浦遺跡				○	○	○	○	古墳時代の溝、平安時代の住居、近世以降の溝などを調査。	42
74	原浦Ⅱ遺跡				○	○	○		古墳時代前期の溝、平安時代の住居、中世の溝などを調査。	38
75	今村城						○		中世城跡、那波城の枝城か。	1・2・6
76	雉子屋敷						○		一般環濠遺構。	6
77	往来遺跡						○		近世のAs-A下畠を調査。	74
78	川井古墳群				○				川井稲荷山古墳をはじめとする古墳群。	78
79	川井城(霞城)						○		中世城跡。	1・6・32・34
80	深沢遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、3基の古墳、平安時代の水田、近世の土坑、溝などを調査。	84
81	角瀨城遺跡		○		○	○	○		縄文時代の土坑、古墳時代の住居、古墳4基、中世以降の掘立柱建物、角瀨城内の堀などを調査。	6・34・55
82	杉山遺跡						○		中世以降の溝などを調査。	69
83	天神下り遺跡				○				古墳時代の井戸、土坑、溝などを調査。	32・54
84	角瀨古墳群				○				若王子古墳、玉村町第20号古墳をはじめとする古墳群。	78
85	角瀨八反田遺跡				○	○	○	○	古墳時代の土坑、奈良・平安時代の両側に側溝を持つ大畦、As-A以降の溝状遺構、復旧痕などを調査。	67・71・81
86	天神巡りⅢ遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、土坑、平安時代の掘立柱建物、As-B下水田、中世以降の土坑、溝、水田などを調査。	32・50・54・67・71・81
87	若王子Ⅱ遺跡					○	○		平安時代水田、中世以降の畠、溝などを調査。	50
88	宮ノ下遺跡						○		中世以降の溝、As-A下畠遺構などを調査。	50
89	若王子遺跡					○	○		奈良・平安時代の住居、水田、中世の井戸、中近世の溝、復旧溝群などを調査。	86
90	木暮屋敷						○		中世館跡。	6・32・34
91	秋山屋敷						○		近世館跡。	6・32・34
92	上之手立野遺跡					○	○		奈良・平安時代の住居、溝、中・近世の屋敷跡、土坑などを調査。	32・64
93	粉糠島遺跡			○			○		弥生土器が出土。近世の土坑、溝、井戸などを調査。	63
94	重田屋敷						○		中世館跡。	6・32・34
95	原屋敷遺跡					○	○		奈良・平安時代の土坑、中・近世の屋敷跡などを調査。	1・6・32・34・40・64・79
96	内田屋敷遺跡					○	○		奈良・平安時代の溝、中・近世の屋敷跡などを調査。	6・32・34・64
97	玉村館(御殿)						○		戦国末期の城館か。近世、伊奈半十郎陣屋。	6・32・34

番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	近代	概要	参考文献
98	福島飯玉遺跡				○	○	○		古墳時代～平安時代の水田、溝、中世の掘立柱建物、中・近世の水田、畠、近世水田などを調査。	25
99	斉田竹之内遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、平安時代の住居、水田、中世の方形館、掘立柱建物、近世の水田、畠、復旧痕などを調査。	29
100	斉田中耕地遺跡		○		○	○	○		古墳時代の水田、溝、旧河道、古代の水田、溝、中世の屋敷、掘立柱建物、竪穴、畠、中・近世の水田、溝、近世の道路、溝、畠、復旧遺構などを調査。	10・27
101	田口下屋敷遺跡					○	○		奈良・平安時代の土坑、中世土豪田口氏の屋敷に伴う堀、溝、井戸、土坑などを調査。	6・32・34・49
102	柄田添遺跡				○	○	○	○	古墳時代前期の土坑、奈良・平安時代の住居、As-B直下水田、近世のAs-A泥流下水田、畠などを調査。	32・82
103	横丹遺跡				○	○	○		古墳時代前期以前の河川跡、平安時代のAs-B直下水田、古代の大溝、中・近世の土坑、近世以降の掘立柱建物、土坑、溝などを調査。	76
104	若宮遺跡					○			平安時代のAs-B直下水田などを調査。	85
105	中樋越屋敷						○		中世城館跡。	6
106	藤川前遺跡					○			平安時代のAs-B下水田、土坑などを調査。	32・35
107	前通遺跡					○	○		平安時代のAs-B下水田、中世の小溝群などを調査。	32・52
108	藤川環濠集落						○		中世末期環濠集落。	6・34
109	飯塚環濠集落						○		中世末期環濠集落。	6・34
110	力丸城						○		中世城跡。	6・87
111	徳丸仲田遺跡		○	○	○	○	○		縄文時代草創期の石器製作址、弥生時代中期後半の御新田式土器が出土。古墳～奈良・平安時代の住居、水田、中・近世の環濠屋敷などを調査。	13・17・88・89・90
112	西善尺司遺跡		○	○	○	○	○		縄文時代の石器製作址、古墳時代の集落、方形周溝墓、Hr-FA下水田、溝、平安時代の集落、As-B下水田、畠、中・近世の館跡、掘立柱建物、土坑墓などを調査。	12・88・89
113	中内村前遺跡				○	○	○		古墳時代の住居、As-C復旧水田、Hr-FA・FP下水田、奈良・平安時代の住居、掘立柱建物、As-B下水田、中世の屋敷、掘立柱建物、水田、近世の溝などを調査。	15・20・22
114	前田遺跡				○	○	○		奈良・平安時代の住居、As-B下水田、中世の掘立柱建物、井戸、土坑、近世の溝、灌漑用井戸などを調査。	21
115	火雷神社					○			延喜式内社、上野国八の宮。	34
116	倭文神社					○			延喜式内社、上野国九の宮。	1
117	玉村町第13号古墳				○				円墳。滑石製模造品斧頭などが出土。	5・34・78
118	川井稲荷山古墳(川井松塚)(芝根村第7号古墳)				○				4世紀(1次)・6世紀後半(2次)の2時期にわたり構造。三角縁四神四獣鏡、土師器、土玉などが出土。	5・34・78
119	軍配山古墳(玉村町第1号古墳)				○				4世紀後半築造の径40m、高さ6mの円墳。	5・34・78
120	梨ノ木山古墳(皇院廻り)(芝根村第3号古墳)				○				5世紀後半築造。滑石製模造品刀子などが出土。	5・34・78
121	芝根村第16号古墳				○				6世紀後半築造。大刀、鉄鏃、馬具辻金具、碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス製小玉などが出土。	34・78

第3表参考文献(数字は文献番号と一致する)

- 1 伊勢崎市1987 『伊勢崎市史 通史編1 原始古代中世』
- 2 伊勢崎市教育委員会2012 『伊勢崎市遺跡分布図』
- 3 伊勢崎市教育委員会2003 『宮柴前遺跡I・II』
- 4 伊勢崎市教育委員会2014 『東上之宮遺跡』
- 5 群馬県1938 『上毛古墳総覧』
- 6 群馬県教育委員会1988 『群馬の中世城館』
- 7 群馬県教育委員会1999 『川井箱石遺跡』
- 8 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012 年報31
- 9 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013 年報32
- 10 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013 『斉田中耕地遺跡(2)』
- 11 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015 『東上之宮遺跡』
- 12 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001 『西善尺司遺跡』
- 13 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2001 『徳丸仲田遺跡(1)(縄文時代草創期編)』
- 14 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『上福島尾柄町遺跡』
- 15 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『中内村前遺跡(1)一1～4区一』
- 16 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2002 『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』
- 17 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003 『徳丸仲田遺跡(2)』
- 18 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003 『福島久保田遺跡・福島大光坊遺跡』
- 19 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003 『上福島中町遺跡』
- 20 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2003 『中内村前遺跡(2)一5～7区一』
- 21 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2004 『前田遺跡』
- 22 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2005 『中内村前遺跡(3)』
- 23 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2007 『福島飯塚遺跡(1)』
- 24 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008 『福島飯塚遺跡(2)』
- 25 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2008 『福島飯玉遺跡』



## 第2章 地理的及び歴史的環境

- 26 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009 『福島大島遺跡』
- 27 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010 『斉田中耕地遺跡』
- 28 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010 『箱石浅間山古墳 不動山古墳』
- 29 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011 『斉田竹之内遺跡』
- 30 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011 年報30
- 31 玉村町教育委員会1989 『金免遺跡』
- 32 玉村町教育委員会1992 『玉村町の遺跡』
- 33 玉村町教育委員会1992 『神人村Ⅱ遺跡』
- 34 玉村町1992 『玉村町誌 通史編 上巻』
- 35 玉村町教育委員会1993 『藤川前遺跡』
- 36 玉村町教育委員会1993 『小泉大塚越遺跡』
- 37 玉村町教育委員会1995 『北原遺跡』
- 38 玉村町教育委員会1996 『原浦Ⅱ遺跡』
- 39 玉村町教育委員会1997 『三境遺跡・三境Ⅱ遺跡』
- 40 玉村町教育委員会1997 『上之手八王子Ⅱ遺跡・原屋敷Ⅱ遺跡』
- 41 玉村町教育委員会1998 『五郎作巡遺跡』
- 42 玉村町教育委員会1998 『原浦遺跡』
- 43 玉村町教育委員会1998 『利根添遺跡』
- 44 玉村町教育委員会1998 『屋敷遺跡(一次・二次調査)』
- 45 玉村町教育委員会1999 『沖遺跡』
- 46 玉村町教育委員会1999 『曲田遺跡』
- 47 玉村町教育委員会1999 『曲田Ⅱ遺跡』
- 48 玉村町教育委員会1999 『滝川南遺跡』
- 49 玉村町教育委員会2000 『田口下屋敷遺跡』
- 50 玉村町教育委員会2000 『宮ノ下遺跡・若王子Ⅱ遺跡・天神巡りⅢ遺跡』
- 51 玉村町教育委員会2000 『十王堂・十王堂Ⅱ遺跡』
- 52 玉村町教育委員会2000 『前通遺跡』
- 53 玉村町教育委員会2001 『北田中遺跡』
- 54 玉村町教育委員会2001 『天神下り遺跡・天神巡り遺跡・天神巡りⅡ遺跡』
- 55 玉村町教育委員会2001 『角湖城遺跡』
- 56 玉村町教育委員会2002 『上飯島芝根遺跡・上飯島芝根Ⅱ遺跡』
- 57 玉村町教育委員会2002 『天神前遺跡・大明神遺跡・北小路遺跡』
- 58 玉村町教育委員会2002 『福島治部前遺跡』
- 59 玉村町教育委員会2003 『一万田遺跡』
- 60 玉村町教育委員会2003 『オトカ塚遺跡』
- 61 玉村町教育委員会2003 『松原Ⅲ遺跡』
- 62 玉村町教育委員会2004 『久保田遺跡』
- 63 玉村町教育委員会2004 『粉糠島遺跡』
- 64 玉村町教育委員会2004 『内田屋敷遺跡・原屋敷遺跡・上之手立野遺跡』
- 65 玉村町教育委員会2004 『横堀遺跡・街道南遺跡』
- 66 玉村町教育委員会2004 『樋越諏訪前遺跡』
- 67 玉村町教育委員会2005 『角湖八反田Ⅱ遺跡・角湖八反田Ⅲ遺跡・天神巡りⅣ遺跡』
- 68 玉村町教育委員会2005 『神人村遺跡』
- 69 玉村町教育委員会2006 『神明遺跡・行人塚遺跡・十王堂Ⅲ遺跡・中郷遺跡・松原Ⅱ遺跡・杉山遺跡』
- 70 玉村町教育委員会2006 『小泉長塚遺跡』
- 71 玉村町教育委員会2006 『天神巡りⅤ遺跡・角湖八反田Ⅳ遺跡』
- 72 玉村町教育委員会2007 『砂町遺跡(第1～3次調査)・尾柄町Ⅲ遺跡・中之坊遺跡』
- 73 玉村町教育委員会2007 『味噌袋・福島二丁町遺跡・福島・南玉遺跡』
- 74 玉村町教育委員会2008 『小泉大塚越遺跡(第2・3次調査)・往来遺跡(1・2次調査)』
- 75 玉村町教育委員会2009 『屋敷Ⅱ遺跡 屋敷Ⅱ遺跡(第2次調査)』
- 76 玉村町教育委員会2009 『横丹遺跡』
- 77 玉村町教育委員会2009 『福島稲荷木遺跡(第1～3次調査)・福島稲荷木Ⅱ遺跡・福島稲荷木Ⅲ遺跡』
- 78 玉村町教育委員会2009 『川井・茂木古墳群』
- 79 玉村町教育委員会2010 『原屋敷Ⅲ遺跡・八街北圃・八街北区遺跡』
- 80 玉村町教育委員会2010 『向田遺跡』
- 81 玉村町教育委員会2011 『角湖八反田遺跡 角湖八反田遺跡(第2次調査) 天神巡りⅢ遺跡(第2次調査)』
- 82 玉村町教育委員会2011 『柄田添遺跡(第1次～第5次調査)』
- 83 玉村町教育委員会2011 『福島稲荷木Ⅳ遺跡・福島稲荷木Ⅳ遺跡(第2次調査)』
- 84 玉村町教育委員会2013 『深沢遺跡 深沢遺跡(第2次調査)』
- 85 玉村町教育委員会2013 『深町遺跡・深町遺跡(第2次調査)・深町Ⅱ遺跡・蛭堀東遺跡・水口遺跡・若宮遺跡・玉村町No.711遺跡』
- 86 玉村町教育委員会2014 『松原遺跡・若王子遺跡・角湖丹土遺跡』
- 87 前橋市1971 『前橋市史 第一巻』
- 88 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1998 『横手湯田Ⅲ遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西善尺司Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅲ遺跡』
- 89 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1999 『徳丸高堰Ⅱ遺跡・徳丸仲田Ⅲ遺跡・西善尺司Ⅲ遺跡・下増田常木Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡』
- 90 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2001 『横手湯田Ⅴ遺跡・徳丸仲田Ⅳ遺跡』

## 第3章 近世の遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

南玉埋堀遺跡において、近世の遺構と遺物が確認できた調査区は1区から5区である。近世の遺構は、復旧溝群と復旧溝を合わせて51ヶ所、畠29ヶ所、土坑19基、溝11条、井戸2基、集石1基、道2条、旧河道1条である。1区から5区のすべての調査区において、洪水などの自然災害から畠を復旧し、復興するために掘削された復旧溝群を確認することができた。

近世では、利根川を起因とする洪水による自然災害が度々発生し、天明三年以前の洪水被害の記録が残されている。1区から3区では天明三年以前の可能性がある復旧溝群も確認されている。

1区から5区における遺構確認面は、現表土耕作土下層、As-A以降の洪水層下層、As-A直下層などにおいて遺構精査を行ったが、全体に後世の削平が著しく、復旧溝群を時期別に分けてそれぞれ調査することは困難であったため、洪水被害による復旧溝群と近世の畠などの遺構が同一調査面に混在した状況である。2区や4区では、遺構の残存状態が良好であったため、近世でも複数面の発掘調査を実施することができた。2区では第1面、4区では第1面から第3面が近世の遺構確認面である。4区第1面では、天明三年の浅間山噴出による軽石(As-A)直下の畠が確認されるなど、被災直前の状況が残っていた。以下、調査区ごとに記す。

### 第2節 1区の遺構と遺物

1区は、本遺跡における西端の調査区となる。近世の遺構と遺物は、第1面で確認した。発掘調査では、調査区を西側と東側に分けてそれぞれ実施した。遺構確認面は、西側では、As-A降下以降の洪水層の下層である基本土層第4層上面とし、東側は、洪水層の影響によって基本土層第4層上面を明瞭に確認できず、基本土層第1a層の下面とした。1区は、後世の削平などによって、特に西側の遺構の残存状況が不良であった。遺構が確認で

きた範囲は、西側中央部、東側東部、南部、西部など調査区内の一部にとどまる。第1面では、天明三(1783)年以前及び以降の時期と考えられる遺構を確認することができた。当該時期の遺構については、自然災害からの復旧や復興のために掘削された復旧溝群の他、畠、土坑、溝である。

#### 1 復旧溝群・復旧溝

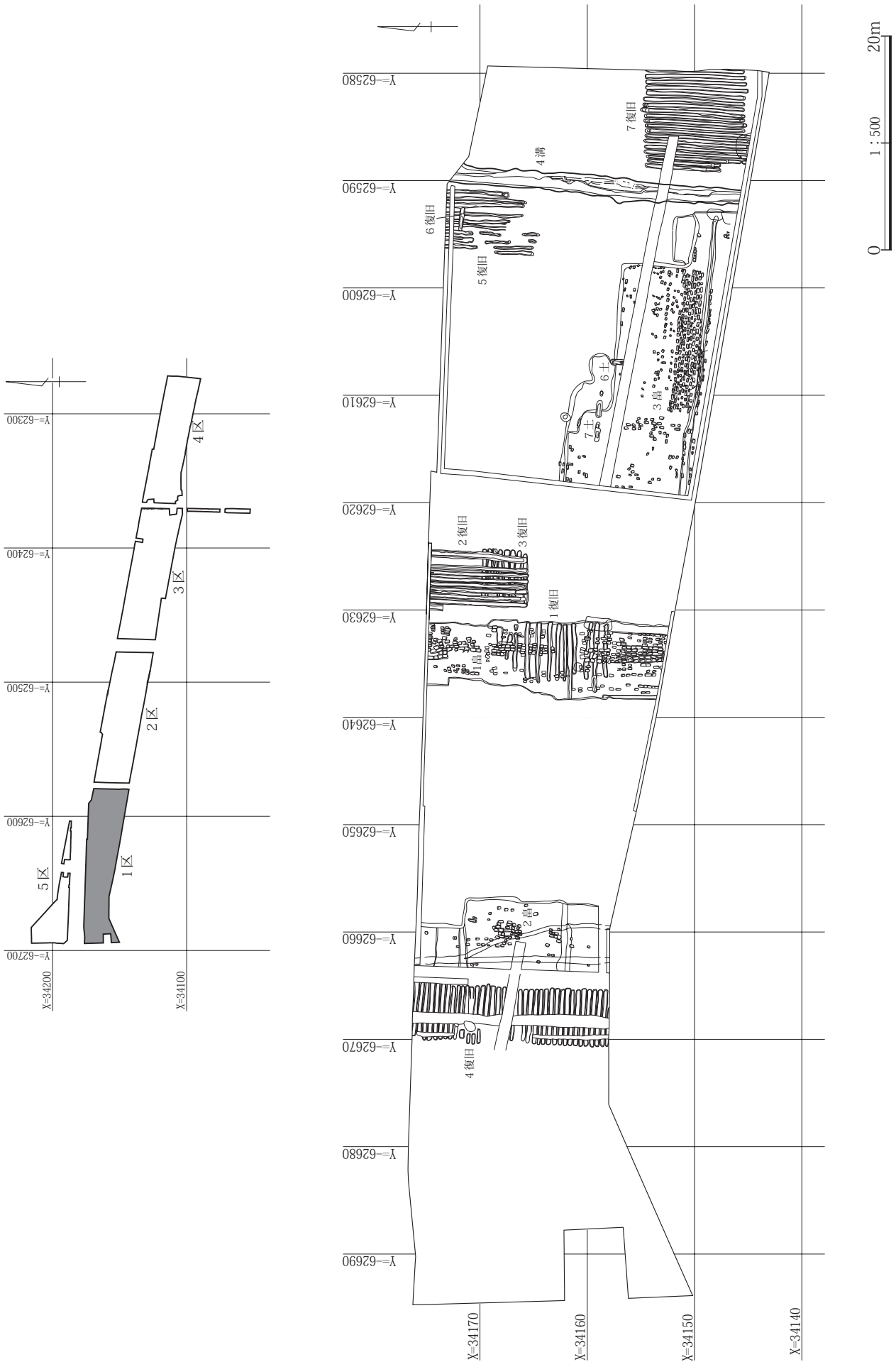
1区第1面において復旧溝群として一つの単位として捉えることができたものは6ヶ所、復旧溝1ヶ所である。溝状にほぼ等間隔に連続して掘削していることから、整理作業では複数条の掘削が認められるものについては、復旧溝群に変更した。

##### 1区1号復旧溝群(第9図 PL. 2)

**位置:** X=157 ~ 168、Y=-631 ~ 637 **形状:** 溝状  
**確認条数:** 12条 **規模:** 10.64×6.54m **残存深度:** 0.05 ~ 0.14m **条間隔:** 0.04 ~ 1.21m **条方位:** N-87°-W **重複:** 1号畠と重複し、遺構確認状況から1号復旧溝群が古いと考えられる。 **遺物:** なし。 **所見:** 第1面中央部に位置し、2・3号復旧溝群の南西側で掘削され、残存状況は良好ではない。各溝の断面形状は底面がほぼ平坦で、壁面は斜めに緩やかに立ち上がる。各溝の掘削深度はほぼ同一で、底面のレベル差は少ない。埋没土に微量であるがAs-Aが含まれ、灰黄褐色砂質土と炭化物、灰黄褐色砂質土粒を含む褐灰色粘質土によって人為的に埋戻す。約27m西側に位置する4号復旧溝群と条方位が類似することから一連の復旧作業によって掘削された可能性がある。3号復旧溝群とは条方位が類似するが、条間隔や掘削形状などが異なることから、時期差をもって掘削されたと考えられる。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

##### 1区2号復旧溝群(第10図 PL. 2・3)

**位置:** X=165 ~ 174、Y=-624 ~ 630 **形状:** 溝状  
**確認条数:** 9条 **規模:** 9.12×5.66m **残存深度:** 0.03 ~ 0.36m **条間隔:** 0.03 ~ 0.73m **条方位:** N-4°-



第8図 1区第1面(G近世)全体図



E **重複**：3号復旧溝群と重複し、遺構確認状況などから2号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物**：近世の肥前磁器染付皿(第10図2復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器4点、国産施釉陶器3点、在地系焙烙・鍋3点、近現代陶磁器1点、時期不詳の土器類5点、羽口1点が埋没土から出土した。 **所見**：1号復旧溝群の北東に位置する。東端に掘込まれた復旧溝は、他の復旧溝とやや離れた位置にあり、間隔が0.73mとやや広がる。重複する3号復旧溝群とは条方位がほぼ直角に交差する。断面形状は底面が平坦で、壁面は斜めに緩やかに立ち上がる。底面には掘削痕とみられる連続した掘込みが残存する。埋没土は、灰黄褐色砂質土と黄褐色砂質土によって人為的に埋戻す。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

1区3号復旧溝群(第11図 PL. 3・98)

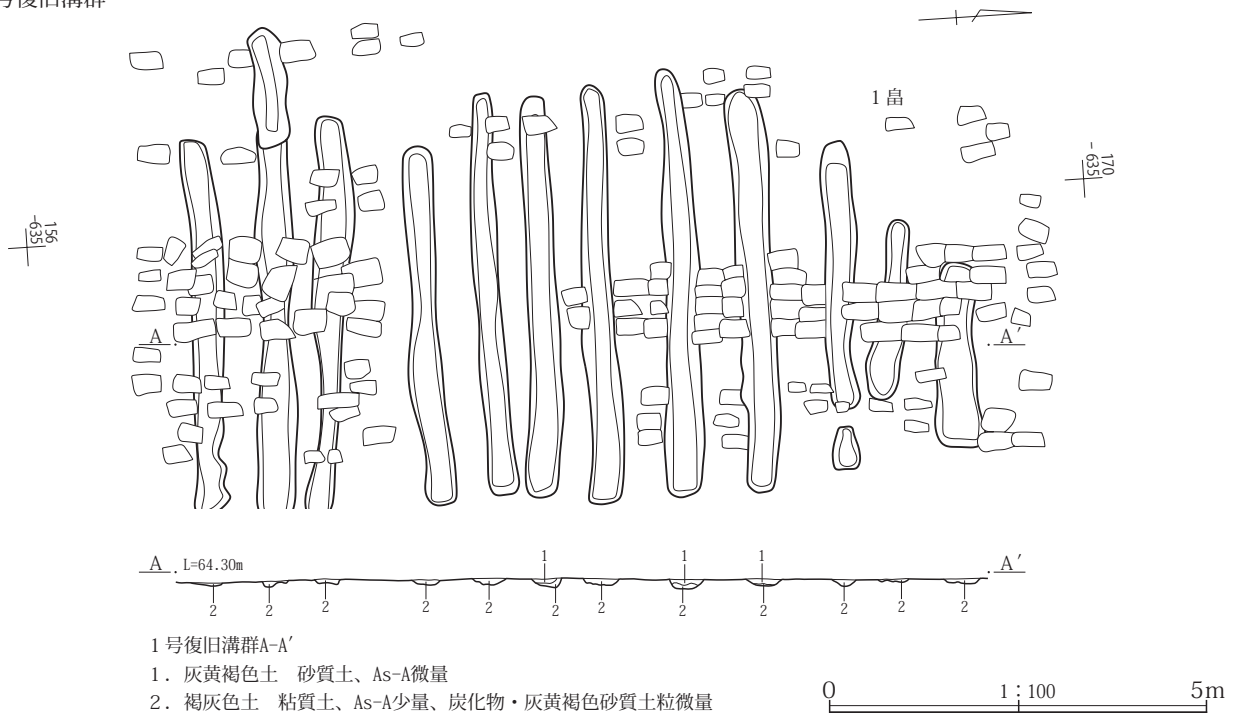
**位置**：X=165～169、Y=-624～629 **形状**：溝状 **確認条数**：8条 **規模**：5.24×4.40m **残存深度**：0.02～0.07m **条間隔**：0.06～0.22m **条方位**：N-88°-W **重複**：2号復旧溝群と重複し、遺構確認状況などから3号復旧溝群が古いと考えられる。 **遺物**：寛永通寶

(第11図3復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、近現代の陶磁器1点である。 **所見**：第1面中央部に位置し、重複する2号復旧溝群とほぼ直角に交差する。各溝の断面形状は底面が平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。埋没土は、褐灰色砂質土であり鉄分の沈着が認められる。約36m西側の位置にある4号復旧溝群と条方位が一致し、同時期に掘削された可能性がある。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

1区4号復旧溝群(第12図 PL. 3)

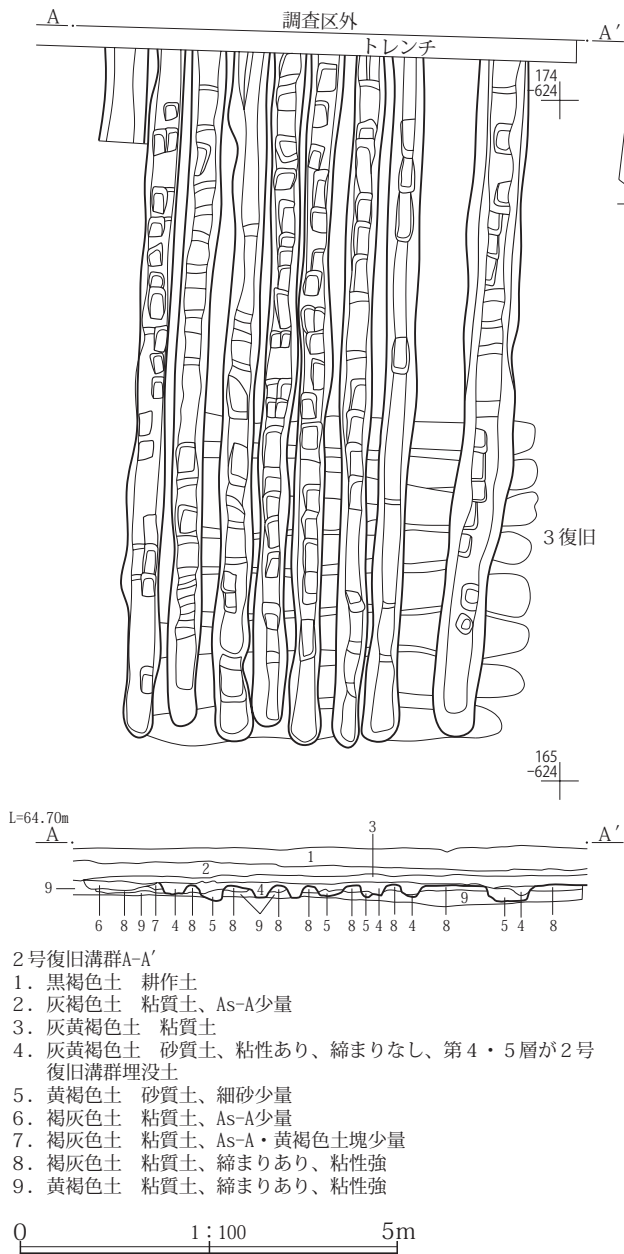
**位置**：X=157～176、Y=-665～670 **形状**：溝状 **確認条数**：37条 **規模**：18.34×5.76m **残存深度**：0.01～0.06m **条間隔**：0.04～0.34m **条方位**：N-88°-W **重複**：なし。 **遺物**：非掲載遺物は、土師器(器種不明)1点、中世の中国磁器1点、近世の国産磁器3点、国産施釉陶器5点が埋没土から出土した。 **所見**：第1面西部に位置し、本遺跡では最も西側に掘削された復旧溝群である。4号復旧溝群は、間隔を開けず連続して掘削し、底面と僅かな掘込みが残存するにすぎない。上面は後世の削平によって大半を遺失したとみられ、周辺の復旧溝群についても削平され遺失した可能性がある。断面形状

1区1号復旧溝群



第9図 1区1号復旧溝群

1区2号復旧溝群



第10図 1区2号復旧溝群と出土遺物

は底面が平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。各溝の掘削深度はほぼ同一である。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻し、鉄分の沈着も認められる。条方位は3号復旧溝群と一致し、同時期に掘削された可能性がある。埋没土から、掘削時期はAs-A降下以降と考えられる。

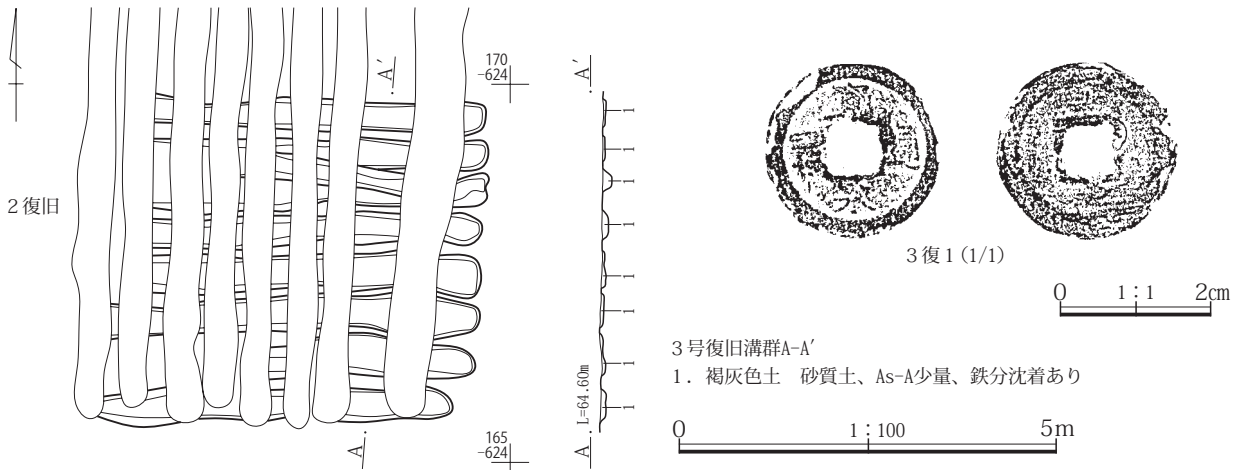
1区5号復旧溝群(第12図 PL. 3)

位置：X=164～173、Y=-590～596 形状：溝状  
 確認条数：10条 規模：8.86×6.06m 残存深度：0.02～0.23m  
 条間隔：0.02～0.71m 条方位：N-3°-E  
 重複：6号復旧溝と重複し、遺構確認状況から5号復旧溝群が新しいと考えられる。遺物：近世の製作地不詳陶器？皿(第12図5復1)、肥前陶器陶胎染付(第12図5復2)が埋没土から出土した。所見：第1面北東部に位置し、7号復旧溝群の北西側で掘削される。表土耕作土直下で確認した遺構であり、上面のほとんどを削平によって遺失し、底面の一部のみが残存する。断面形状は底面が平坦で、壁面は斜めに立ち上がる。各溝の底面にレベル差が認められ、掘削深度は不揃いである。洪水によって堆積したと考えられる灰黄色シルト質土を掘込み、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。復旧溝群は、溝状に掘削されているが、直線的な掘削をあまり意識せず、各溝の間隔が不均等で長さも不揃いである。7号復旧溝群と条方位が一致し、同時期に掘削された可能性がある。埋没土にAs-Aは確認されず、掘削時期は近世と考えられるが、時期は不明である。

1区6号復旧溝(第13図 PL. 3)

位置：X=171、Y=-592～594 形状：溝状 確認条数：1条  
 規模：2.14×0.48m 残存深度：0.02～0.23m  
 条方位：N-83°-W 重複：5号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から6号復旧溝が古いと考えられる。遺物：非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、在地系焙烙・鍋1点が埋没土から出土した。所見：溝状の掘削跡は1条のみを確認し復旧溝とした。南側では確認できなかったため、調査区外となる北側を掘削していた可能性がある。溝の断面形状は底面が平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、開口部付近は緩やかな傾斜である。溝の掘削深度は東側が高く、段差が認められる。埋没土は、褐灰色砂

1区3号復旧溝群



第11図 1区3号復旧溝群と出土遺物

質土によって人為的に埋戻す。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

1区7号復旧溝群(第13図 PL. 4・98)

位置：X=144～155、Y=-579～589 形状：溝状  
 確認条数：19条 規模：10.28×9.64m 残存深度：0.15～0.36m 条間隔：0.03～0.33m 条方位：N-3°-E 重複：なし。 遺物：砥石(第13図7復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点、在地系焙烙・鍋3点である。 所見：第1面東端部に位置し、条方位が一致する5号復旧溝群南側に掘削される。各溝の断面形状は底面が平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。褐灰色砂質土によって人為的に埋戻し、部分的に鉄分の沈着が認められる。各溝の掘削深度は、底面のレベル差が僅かに認められ、北端や南端の一部に段差を設ける。1区東側の延長線上に位置する2区において、1号復旧溝群が確認され、それぞれの位置から判断し、1区7号復旧溝群と2区1号復旧溝群は、同時期に掘削した一連の復旧溝群の可能性がある。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

2 畠

1区第1面で確認した近世の畠は、3ヶ所である。畠に関連する畝やサク、耕作痕などを基に一つの単位として捉え、それぞれの畠に付番して調査を行った。畠は1区東部、中央部、西部にそれぞれ位置する。1区の遺構

確認面が、現表土下層であることから畠の大半が後世に削平されていた。畠の残存状況は全体に良好ではなく、一部のみの調査となった。

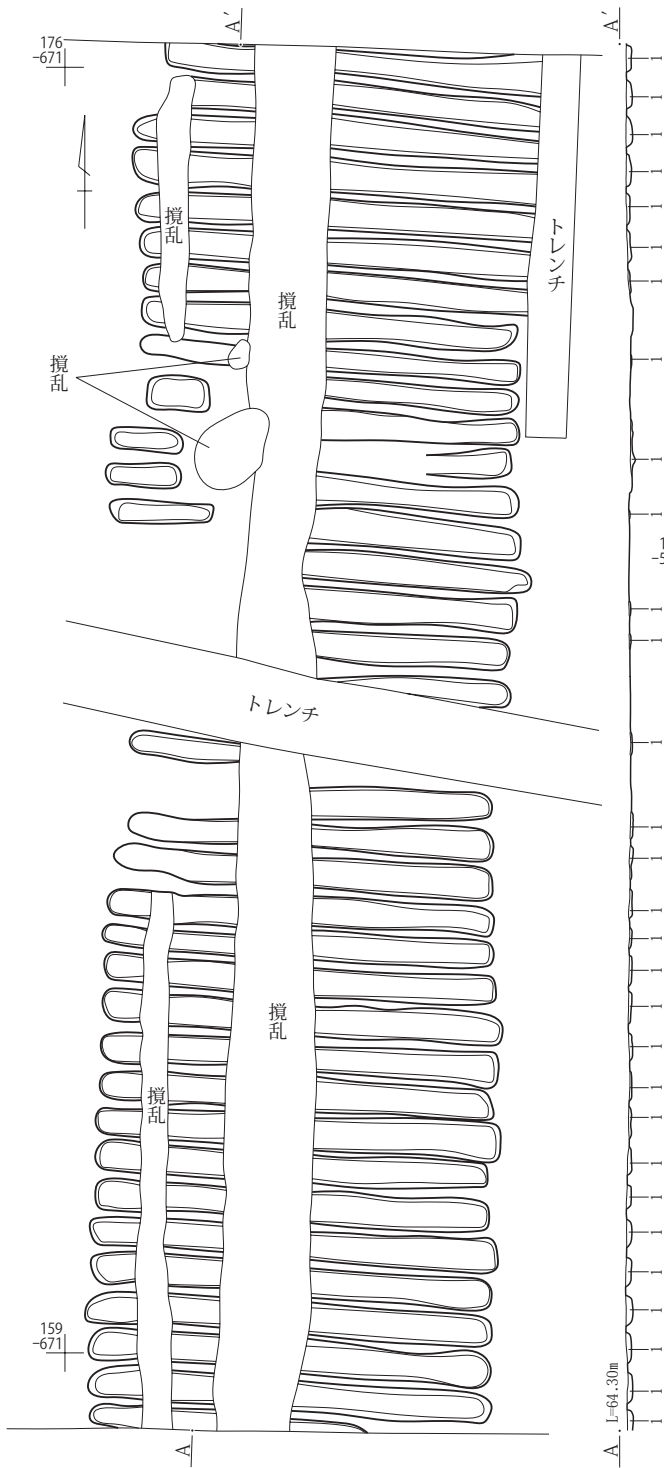
1区1号畠(第14図 PL. 4・98)

位置：X=152～154、Y=-631～637 サク数：15条  
 規模：22.0×7.10m 畝高さ：0.01～0.04m 畝幅：0.12～0.39m サク間隔：0.02～0.99m 畝方位：N-3°-W 重複：1号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から1号畠が新しいと考えられる。 遺物：瀬戸・美濃陶器皿(第14図1畠1)、銅製品キセルの雁首(第14図1畠2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器4点、国産施釉陶器19点、在地系焙烙・鍋4点、時期不詳の土器類11点である。 所見：第1面中央部に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。やや不揃いで中央部に途切れる部分も認められるが、主に北を向いて耕されている。南北方向に連続する耕作痕(鋤先痕)の規模は、幅約20～40cm、長さ約30～50cmを測る。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡については確認できなかった。埋没土は、As-Aと灰褐色土塊(As-A混土)、灰黄褐色粘質土塊によって埋没する。畠の中央部から東側のサク間隔が近接し、西半部は間隔がやや広がる。

耕作痕列の東端と西端に5cm程の段差が南北方向に認められ、1号畠が調査区西側及び東側よりも低い位置にある。これは畠の一部が低い標高であったため、周辺が削平されても残存したものであり、特に畠の区画を表す



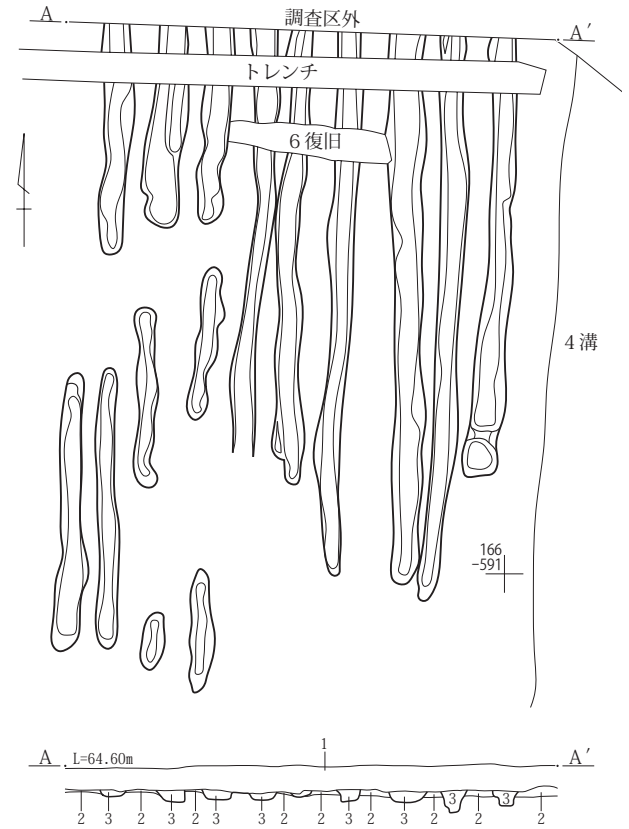
1区4号復旧溝群



4号復旧溝群A-A'

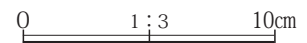
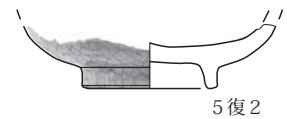
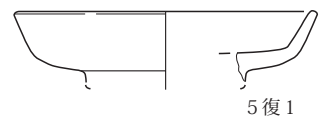
1. 褐灰色土 砂質土、灰白砂質土及びAs-A少量、所々に鉄分の沈着あり

1区5号復旧溝群



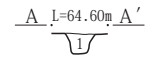
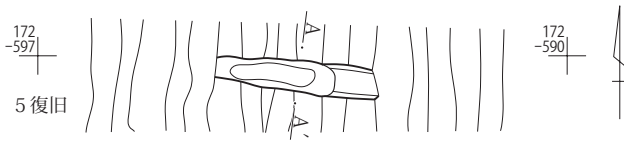
5号復旧溝群A-A'

1. 基本土層の第1 a層
2. 灰黄色土 シルト質土、洪水層、第2・3層が5号復旧溝群埋没土
3. 褐灰色土 砂質土、復旧溝群埋土



第12図 1区4号復旧溝群・5号復旧溝群と出土遺物

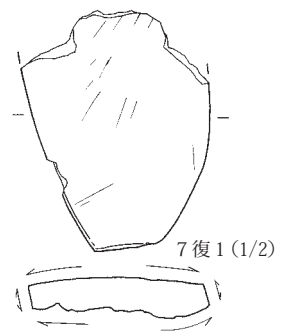
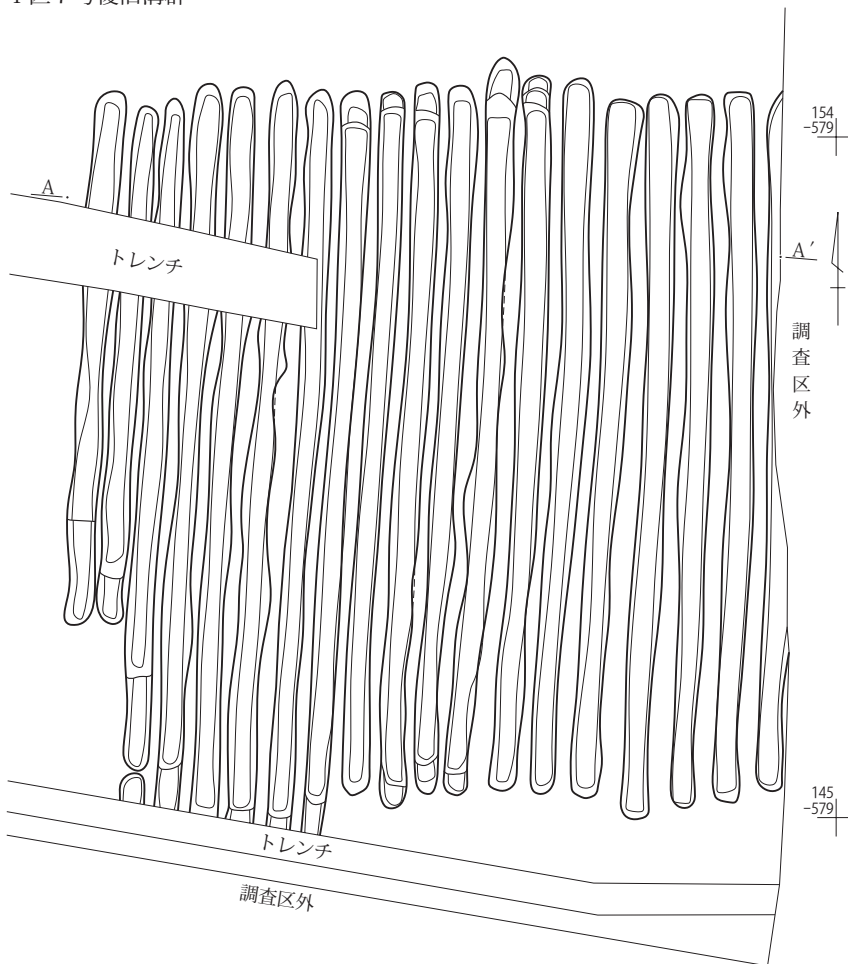
1区6号復旧溝



6号復旧溝A-A'

1. 褐灰色土 砂質土、復旧溝群埋土

1区7号復旧溝群



0 1:2 4cm



7号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 砂質土、細砂主体、部分的に鉄分の沈着あり

0 1:100 5m

第13図 1区6号復旧溝・7号復旧溝群と出土遺物

ものではない。埋没土にAs-Aが含まれるが、時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

#### 1区2号畠(第14図 PL. 4・98)

**位置:** X=159~175、Y=-656~663 **サク数:** 14条  
**規模:** 16.4×6.3m **畝高さ:** 0.01~0.04m **畝幅:** 0.14~0.38m **サク間隔:** 0.00~0.96m **畝方位:** N-5°-E **重複:** なし。 **遺物:** 銅製品キセルの雁首(第14図2畠1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器11点、国産施釉陶器30点、在地系焙烙・鍋2点、在地系皿3点、時期不詳の土器類5点である。 **所見:** 第1面西部に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。耕作痕(鋤先痕)の規模は、幅約25~30cm、長さ約30~50cmを測り、やや不揃いではあるが、連続した耕作痕が南北方向に認められ、特に中央部に集中して残存する。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡については確認できなかった。

1号畠と同様に、2号畠が周辺より低い位置にあったため、後世の削平によって南北方向や東西方向に約1~5cmの段差が認められる。特に区画を示すものではない。埋没土は、As-A、灰褐色土塊(As-A混土)、灰黄褐色粘質土塊によって埋没する。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

#### 1区3号畠(第15図 PL. 4)

**位置:** X=147~157、Y=-594~611、X=150~162、Y=-611~617 **サク数:** 東西方向18条、南北方向14条 **規模:** 東西方向17.0×9.80m、南北方向11.4×0.70m **畝高さ:** 東西方向0.02~0.44m、南北方向0.01~0.05m **畝幅:** 東西方向0.10~0.28m、南北方向0.15~0.38m **サク間隔:** 東西方向0.01~0.80m、南北方向0.03~0.28m **畝方位:** 東西方向N-3°-E、南北方向N-85°-W **重複:** 6・7号土坑と重複し、遺構確認状況から3号畠が古いと考えられる。 **遺物:** 近世の肥前磁器染付皿(第15図3畠1)、瀬戸・美濃陶器腰鍔碗(第15図3畠2)、瀬戸・美濃陶器小香炉(第15図3畠3)が埋没土から出土した。 **所見:** 第1面南東部に位置する。残存状況は良好ではなく、東西方向及び南北方向にそれぞれ耕作痕が認められる。二方向の耕作痕となり、

畠二ヶ所の可能性もあるが一つの単位の畠とした。東西方向のサク数が多く、規模も大きい。東西方向の耕作痕の規模は、幅約15~20cm、長さ約20~50cmを測り、特に南側では明瞭な列となって多数認められる。南北方向の耕作痕は、東西方向の耕作痕に比べて数が少なく、南北方向の耕作痕が途切れる西側において僅かに確認できたにすぎず閑散とする。耕作痕の規模は、幅約20~25cm、長さ25~50cmを測る。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡については確認できなかった。調査区南壁際に幅約35~80cm、深さ約1~10cmの溝状の掘り込みが認められる。3号畠の北側と南側の区画を分けるために掘られた溝の可能性もある。区画溝の可能性もある。

1・2号畠と同様に、3号畠の確認面が周辺より低い位置にあるため、周辺が削平されても3号畠の一部が残存した。東側及び北側に約5~10cmの段差が認められるが、後世の削平によるものであり、特に畠の区画を示すものではない。埋没土は、多量のAs-Aと灰黄色土塊を含む灰色砂質土によって埋没する。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

### 3 土坑

1区第1面で確認した近世の土坑は、2基のみである。1区東側で確認した。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

#### 1区6号土坑(第16図 PL. 5)

試掘トレンチによって6号土坑の南側の一部を遺失し、全体の形状や規模は不明である。平面形状は溝状と想定され、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。底面の北側は、開口部から深さ19cmに中段を設け、北側から南側にかけて緩やかに傾斜する。土坑の南端は、深さ77cmを測る。3号畠と重複し、遺構確認状況から6号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、7号土坑に類似し、As-Aを少量含むシルト質の灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻かは不明である。耕地復旧坑の可能性が考えられる。非掲載遺物は、近世の国産磁器2点、国産施釉陶器1点が埋没土から出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから近世と考えられる。

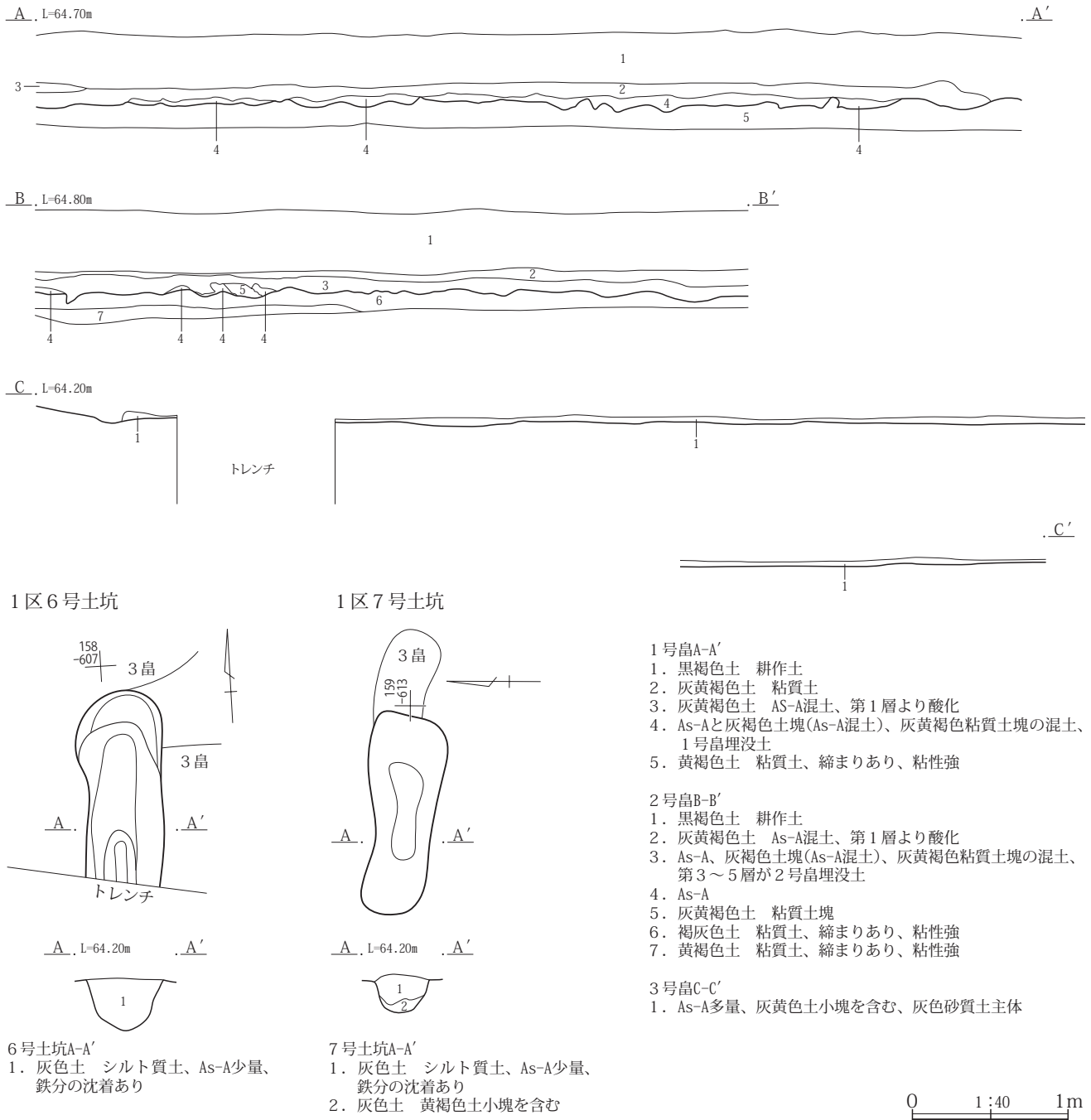




第14図 1区1・2号畠と出土遺物



第15図 1区3号墓と出土遺物



第16図 1区1～3号畠土層断面図、6・7号土坑

1区7号土坑(第16図 PL. 5)

第1面東部に位置する。3号畠と重複し、遺構確認状況から7号土坑が新しいと考えられる。平面形状は隅丸長方形である。断面形状は楕形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋没土は、6号土坑に類似し、As-Aを少量含むシルト質の灰色土と黄褐色土小塊を含む灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器2点、在地系焙

烙・鍋1点が埋没土から出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから近世と考えられる。

4 溝

1区第1面で確認できた近世の溝は、4号溝の1条のみである。調査区東部に位置する。



1区4号溝(第17～19図 PL. 5・6・98)

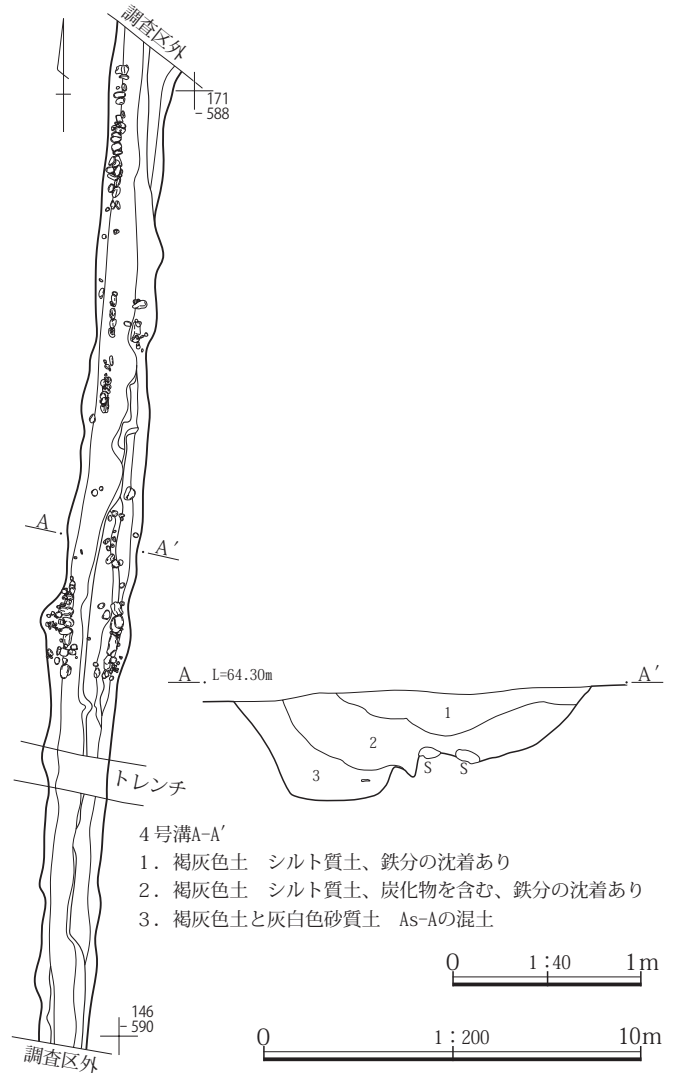
第1面東部のX=145～172、Y=-588～592に位置する。重複する遺構はない。溝の北端及び南端は調査区外となり、さらに延長すると想定される。

確認できる規模は、長さ27.16m、幅1.28～2.40m、深さ0.34～0.56mを測る。走行方向は、N-10°-Eである。北側と南側の比高0.02m、勾配0.07%であり、北側から南側に流れていたと想定される。底面は平坦であり、河床礫が北側から中央部付近に認められ、北側の礫は直線状に並ぶ。断面形状は台形を呈する。

埋没土は、灰白色砂質土とAs-Aの混土と褐灰色土、褐灰色シルト質土による自然埋没と考えられる。水成堆積など流水の痕跡は認められなかった。

遺物は、陶磁器類では肥前磁器白磁か染付小杯(第18図4溝1)、肥前磁器染付碗(第18図4溝2～4)、肥前磁器釉下彩碗(第18図4溝5)、肥前磁器染付筒形碗(第18図4溝6・7)、肥前磁器染付瓶(第18図4溝8)、肥前陶器陶胎染付碗(第18図4溝9)、瀬戸・美濃磁器か染付皿(第18図4溝10)、瀬戸・美濃磁器か染付椀(第18図4溝11)、瀬戸・美濃陶器小碗(第18図4溝12～14)、瀬戸・美濃陶器鉄絵碗(第18図4溝15)、瀬戸・美濃陶器柳茶碗(第18図4溝16)、瀬戸・美濃陶器皿(第18図4溝17・18)、瀬戸・美濃陶器灯火皿(第18図4溝19)、瀬戸・美濃陶器染付仏飯器(第18図4溝20)、瀬戸・美濃陶器仏飯器(第18図4溝21)、瀬戸・美濃陶器筒形香炉(第18図4溝22・23)、瀬戸・美濃陶器すり鉢(第19図4溝24)、在地系土器鍋(第19図4溝25)、製作地不詳磁器染付小碗(第19図4溝26)、製作地不詳陶器蓋(第19図4溝27)、在地系土器焙烙(第19図4溝28・29)、常滑陶器甕(第19図4溝30)、製作地不詳磁器白磁小杯(第19図4溝31)、製作地不詳磁器染付小碗(第19図4溝32)、寛永通寶(第19図4溝34)が埋没土、石臼(第19図4溝33)は底面上23cmから出土した。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)、砥石1点、近世の国産磁器122点、国産施釉陶器102点、国産焼締陶器4点、在地系焙烙・鍋25点、近現代陶磁器22点、時期不詳の土器類58点である。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

1区4号溝

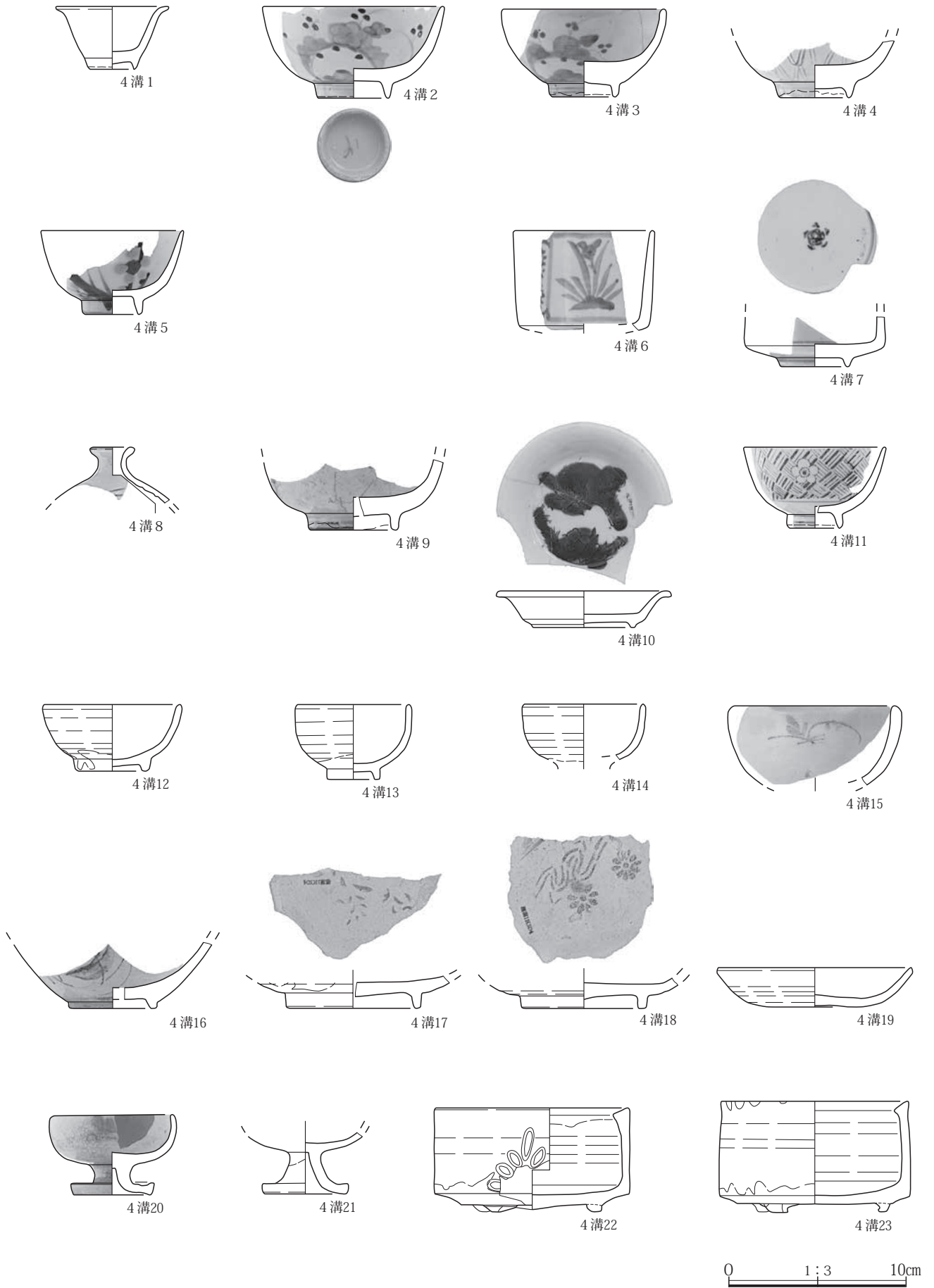


第17図 1区4号溝

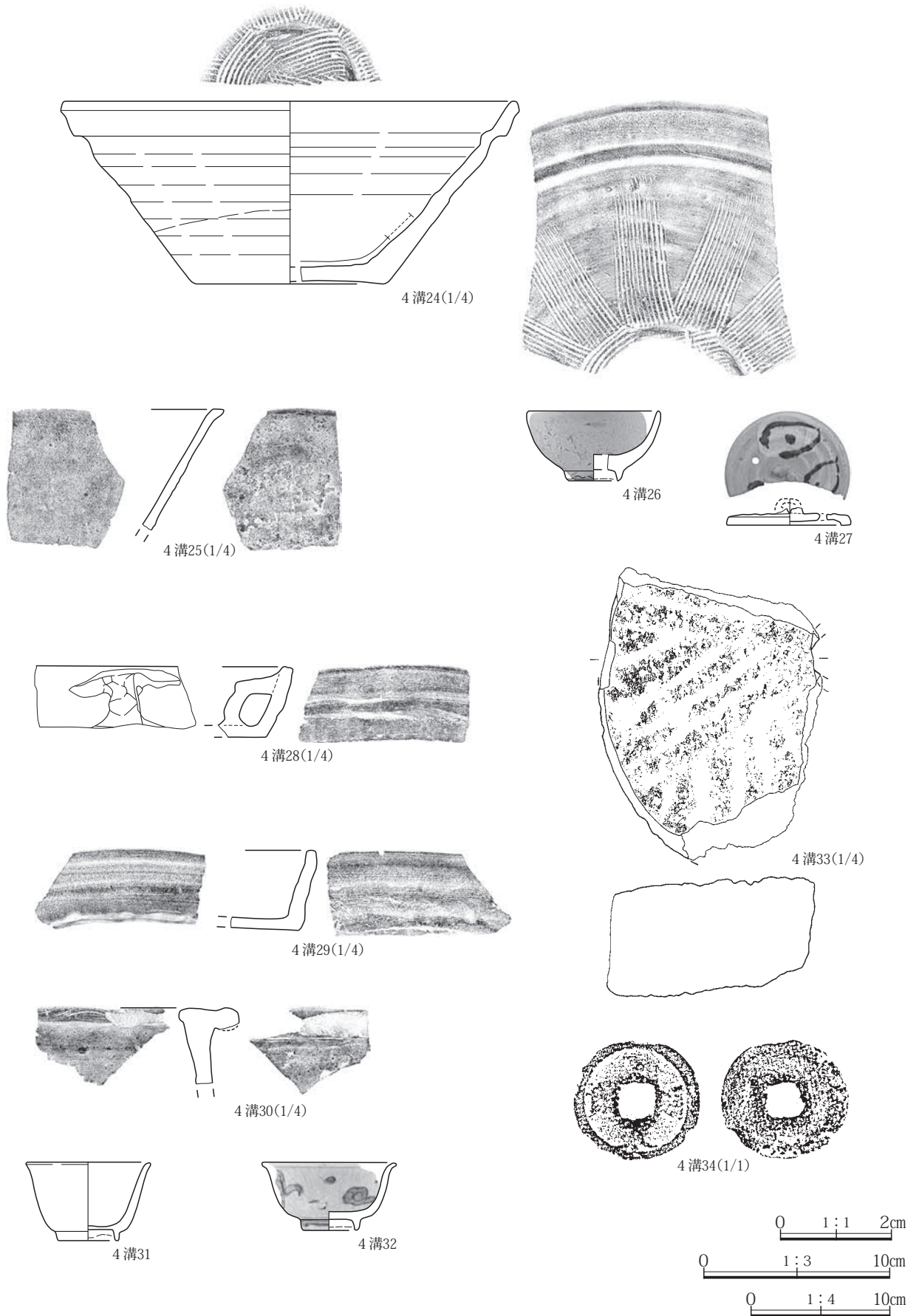
5 遺構外の出土遺物(第20図 PL.99)

1区第1面では、表土掘削や遺構確認面などにおいて、遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、遺構確認面から肥前磁器染付広東碗蓋(第20図1)、肥前磁器染付碗(第20図2・3)、肥前磁器染付筒形碗(第20図4)、在地系土器片口鉢(第20図5)、在地系土器焙烙(第20図6)、砥石(第20図7)、鉄製鑿(第20図8)、鉄製品鎌(第20図9)、鉄製品釘(第20図10～12)、銅製品銅板(第20図13)、鉄製品不詳(第20図14)、寛永通寶(第20図15)が出土した。非掲載遺物は、中世の中国磁器1点、近世の国産磁器58点、国産施釉陶器76点、国産焼締陶器16点、在地系焙烙・鍋7点、近現代陶磁器7点、時期不詳の土器類22点、石製品1点である。

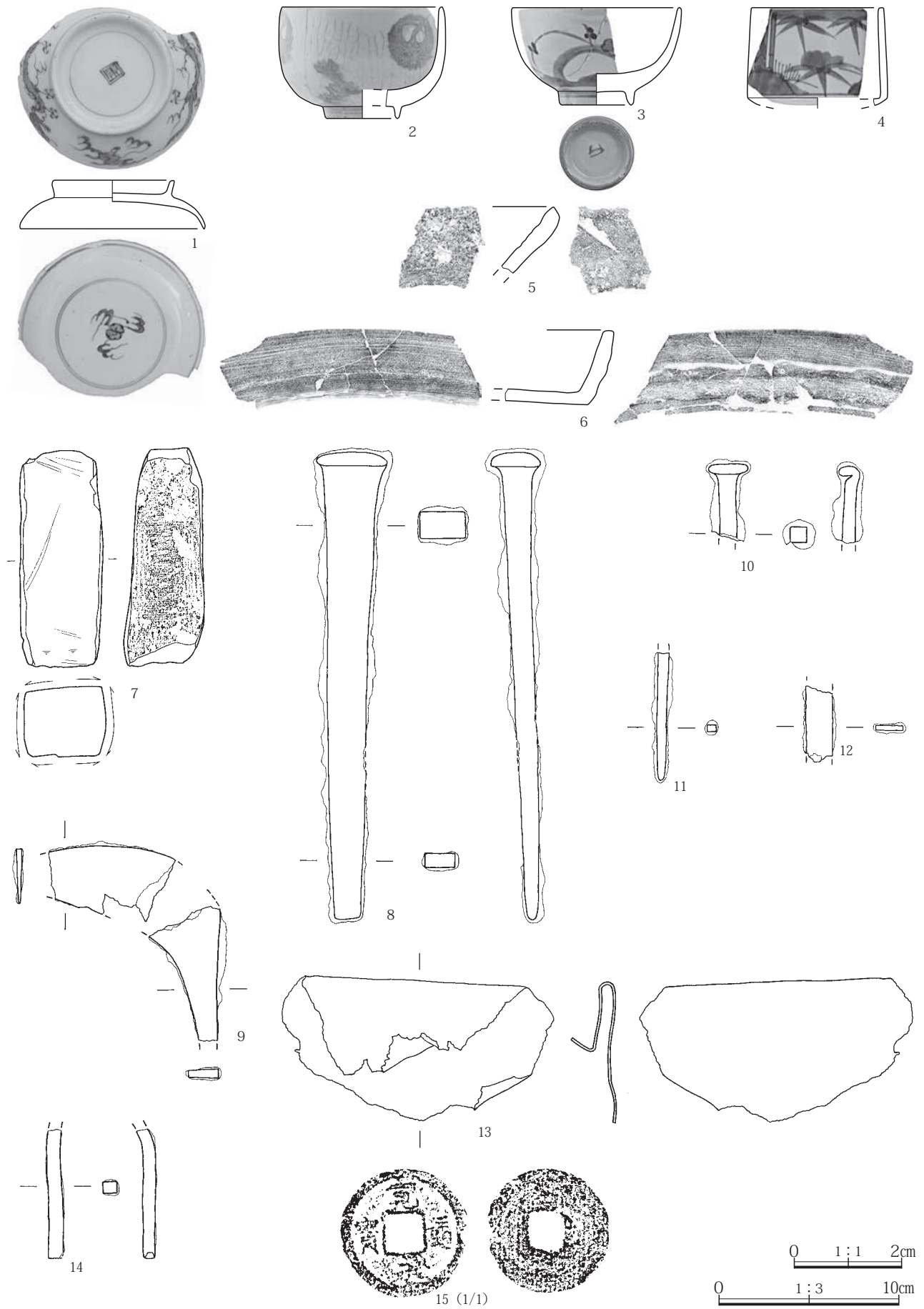


第18図 1区4号溝出土遺物(1)

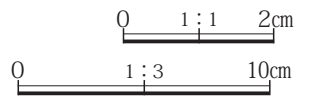


第19図 1区4号溝出土遺物(2)





第20図 1区遺構外の出土遺物



## 第3節 2区の遺構と遺物

2区は1区東側に位置する調査区である。近世の発掘調査は、第1面であり、調査区を西側と東側に分けてそれぞれ実施した。

遺構確認面は、西側ではAs-A以降の洪水層の下層である基本土層第4層上面とした。後世の削平などによって、調査区中央部については、遺構の残存状況がやや不良である。当該時期の遺構は、自然災害からの復旧や復興のために掘削された復旧溝群の他、土坑、溝、矢川の旧河道を確認した。なお、3区でも矢川の旧河道を確認していることから、2区及び3区の旧河道の遺構図や出土遺物などすべてを本節で掲載した。

### 1 復旧溝群

2区第1面で復旧溝群として一つの単位として捉えることができたものは合わせて3ヶ所である。調査区南西端での確認のみである。

#### 2区1号復旧溝群(第22図 PL. 7)

**位置：**X=144～154、Y=-570～572 **形状：**溝状  
**確認条数：**9条 **規模：**9.64m×4.06m **残存深度：**0.05～0.17m **条間隔：**0.11～0.28m **条方位：**N-2°-E **重複：**なし。 **遺物：**肥前陶器呉器手碗(第22図1復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器6点が埋没土から出土した。 **所見：**第1面南西部に位置し、西側が調査区外となるため一部のみの確認である。隣接する1区では、1区7号復旧溝群が確認され、規模や条方位が類似することなどから、一連の復旧溝群として掘削された可能性が高い。各溝の断面形状は底面が平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。東端の坑が最も短く1.54mを測り、東側から西側にかけて徐々に長くなり、西端の坑は9.54mを測る。各溝の残存深度は、やや浅い部分も一部で認められるが、床面のレベル差は少ない。埋没土は、灰白色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aが混入するか否かは不明である。約1m東側に間隔をあけて2号復旧溝群が掘削されている。条方位や断面形状、規模などが類似することから、ほぼ同時期に掘削されたと考えられる。掘削時期

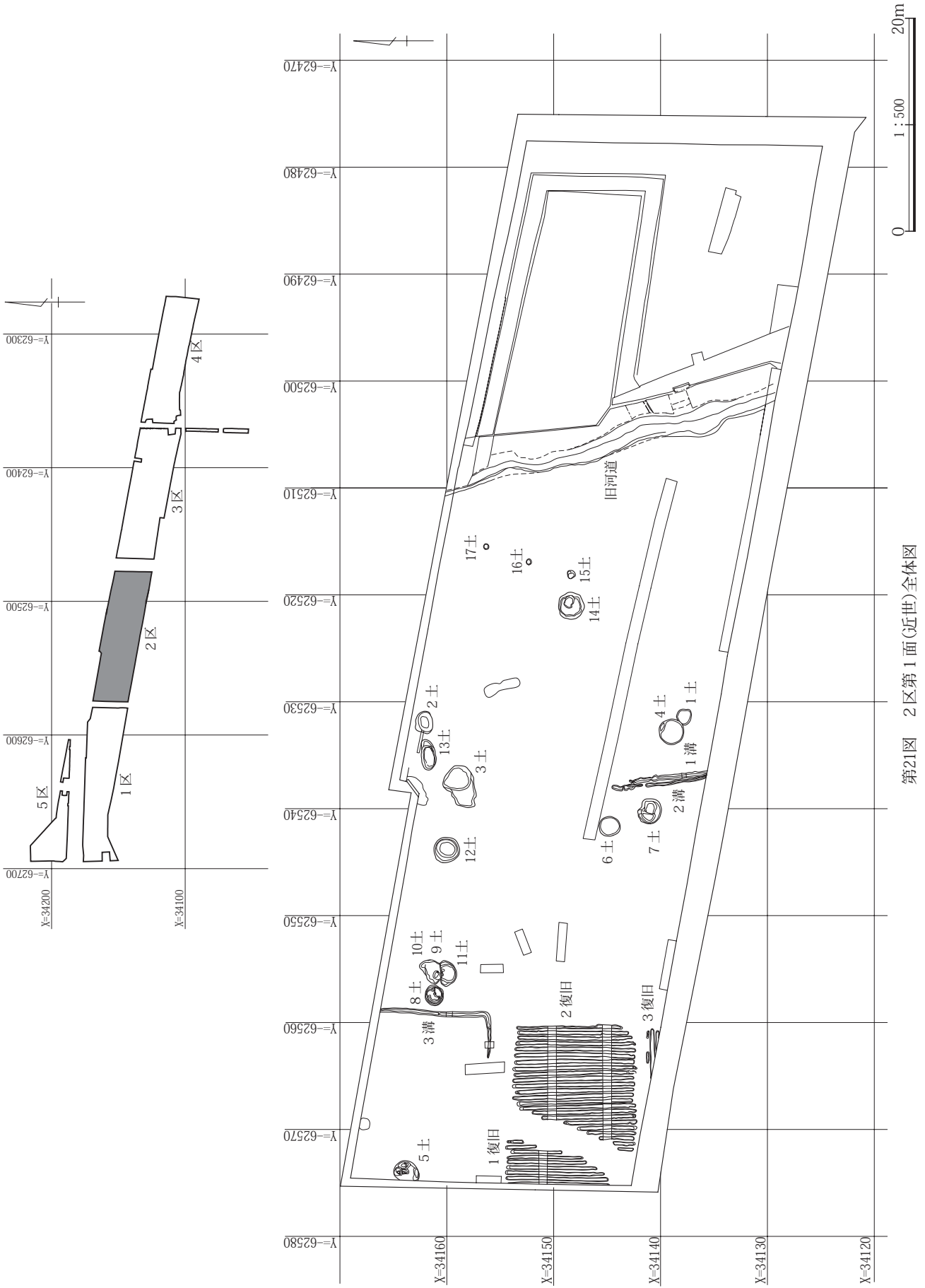
は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

#### 2区2号復旧溝群(第23図 PL. 7)

**位置：**X=142～153、Y=-560～572 **形状：**溝状  
**確認条数：**23条 **規模：**11.82×11.74m **残存深度：**0.05～0.21m **条間隔：**0.07～0.36m **条方位：**N-2°-E **重複：**なし。 **遺物：**在地系土器内耳鍋(第23図2復1・2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器8点、時期不詳の土器類7点である。 **所見：**第1面西部に位置する。各溝の断面形状は底面が平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。各溝の残存深度は、やや浅い部分も認められるが、全体に床面レベル差は少ない。埋没土は、1号復旧溝群と同一であり、灰白色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aが混入するか不明である。西側の調査区で確認した1区7号復旧溝群とは条方位や条間隔が近似するが、2号復旧溝群の規模がやや大きい。東端を1条とすると14条から西側にかけて徐々に長さが短くなり、西端は1.50mと最も短くなる。約1m西側に斜め方向の間隔をあけ、1号復旧溝群が掘削されている。規模や形状、埋没土などが類似することなどから判断し、同時期に掘削されたと考えられる。掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

#### 2区3号復旧溝群(第23図 PL. 7)

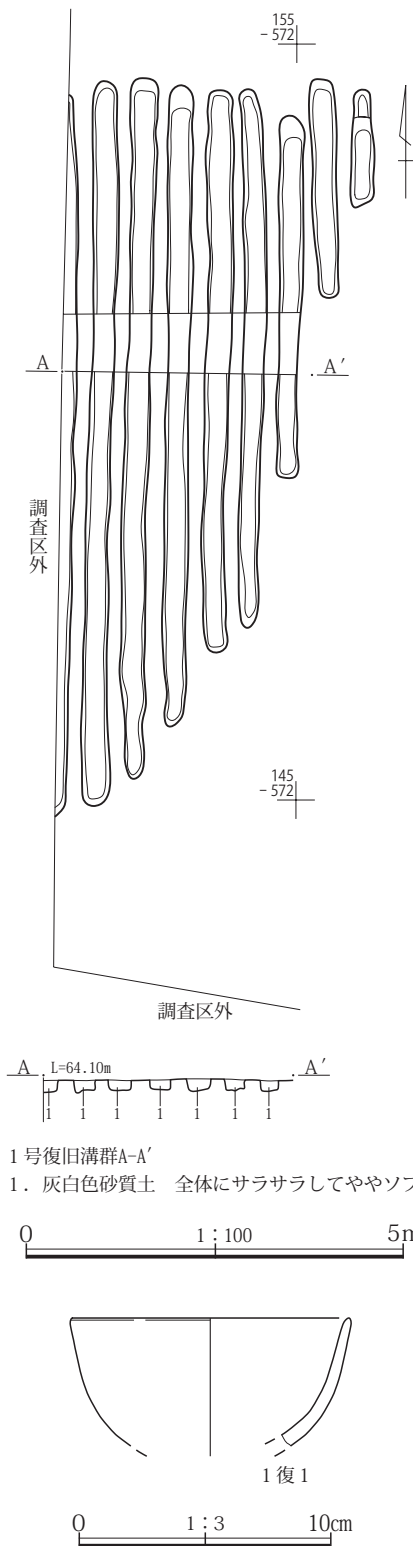
**位置：**X=140・141、Y=-560～565 **形状：**溝状  
**確認条数：**3条 **規模：**4.68×1.18m **残存深度：**0.03～0.11m **条間隔：**0.11～0.17m **条方位：**N-88°-E **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面南西部に位置する。南側が調査区外となるため一部のみの確認であり、さらに南側及び西側に掘削されていると想定されるため、全体の規模は不明である。約50cm北側の2号溝と隣接するが、条方位は、3号復旧溝群は東西方向となるため異なる。北側列の坑は、長さ0.68mと1.06mの溝状に列となり2ヶ所が掘削されている。各溝の断面形状は底面が平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。各溝の掘削深度は、底面のレベル差は少なくほぼ同一である。埋没土は、1・2号復旧溝群と同一であり、灰白色砂質土によって人為的に埋戻す。掘削時期は近世と考



第21図 2区第1面(近世)全体図



2区1号復旧溝群



第22図 2区1号復旧溝群と出土遺物

えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

2 土坑

2区第1面で確認した近世の土坑は17基である。調査区北半部及び中央部南側で確認し調査を行った。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

2区1号土坑(第24図 PL. 7)

第1面中央部南側に位置する。平面形状は隅丸台形である。断面形状は底面がほぼ平坦であり壁は斜めに立ち上がる。4号土坑と重複し、1号土坑が古い。埋没土は、浅黄橙色砂質土を含む灰白色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく、時期を特定できない。

2区2号土坑(第24図 PL. 7)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は楕円形である。断面形状は椀形を呈し、北壁側に中段を設ける。埋没土は、底面にAs-Aの堆積が認められ、黒褐色砂質土やAs-Aと天明泥流を含む褐灰色砂質土による自然埋没と考えられる。出土遺物はない。時期は、As-A降下以前に掘削されたと考えられる。

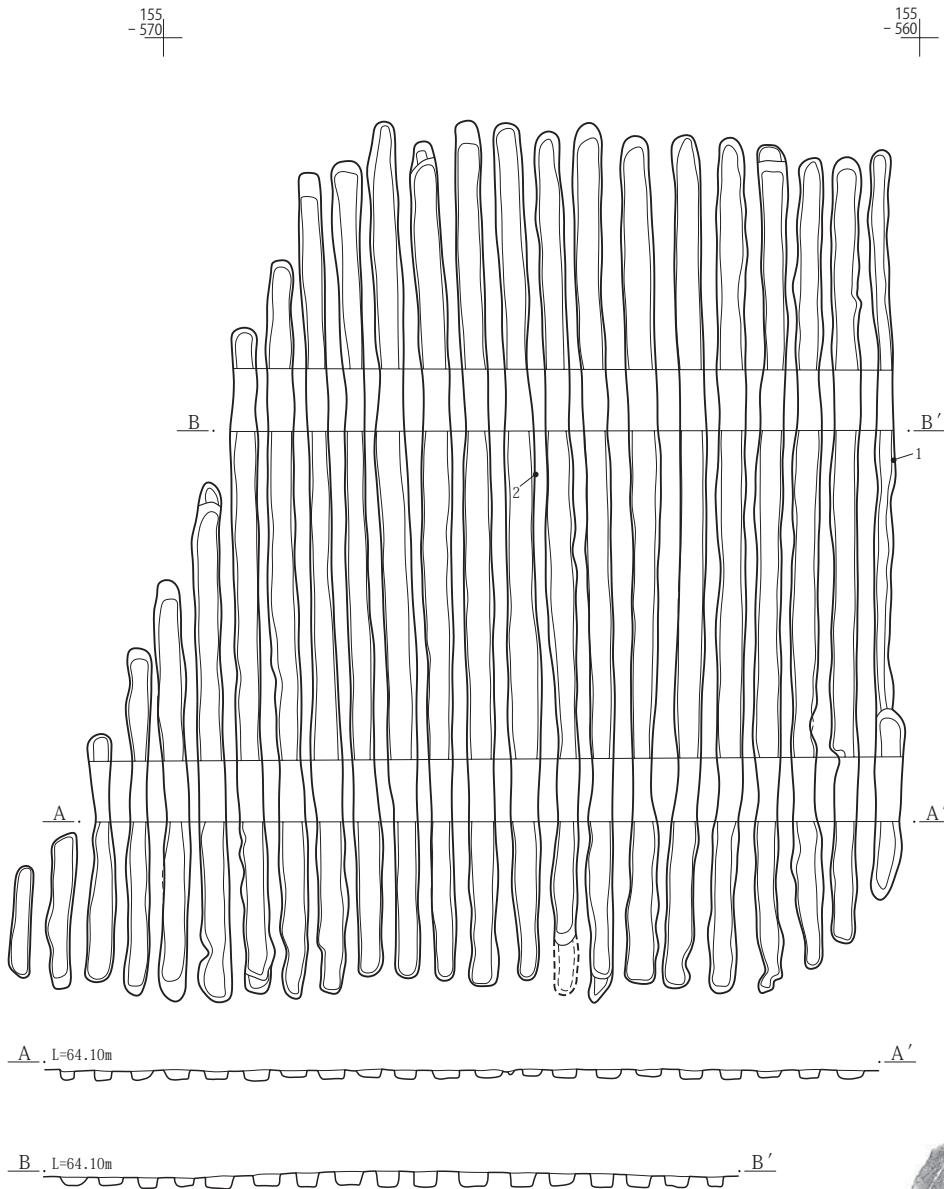
2区3号土坑(第24図 PL. 7・99)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は不定形である。断面形状は南西側が浅く底面はほぼ平坦で、北東側が22～26cm低く掘り窪められている。埋没土は、底面に浅黄橙色砂質土が堆積し、上面にかけてAs-Aや天明泥流を含む褐灰色砂質土によって埋没する。堆積状況から自然埋没と考えられる。遺物は、瀬戸・美濃陶器灯火皿(第24図1)が埋没土から出土した。時期は、As-A降下以前に掘削されたと考えられる。

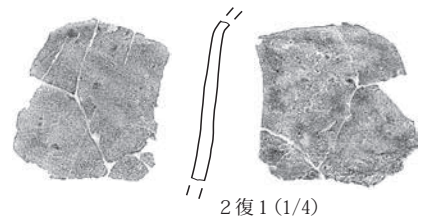
2区4号土坑(第25図 PL. 7・99)

第1面中央部南側に位置する。平面形状は円形である。断面形状は台形を呈し、底面はほぼ平坦である。1号土坑と重複し、4号土坑が新しい。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土による自然埋没と考えられる。遺物は、肥前磁

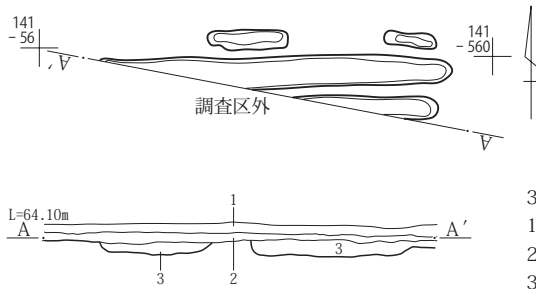
2区2号復旧溝群



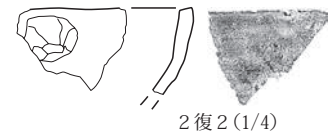
2号復旧溝群A-A'・B-B'  
埋没土はすべて灰白色砂質土 全体にサラサラしてややソフト



2区3号復旧溝群



3号復旧溝群A-A'  
1. 耕作土  
2. 褐灰色土 砂質土 下層に床土(酸化)橙色  
3. 灰白色土 砂質土 全体にサラサラしてややソフト



0 1:4 10cm

0 1:100 5m

第23図 2区2号復旧溝群と出土遺物・3号復旧溝群

器染付碗(第25図4土1)、肥前陶器陶胎染付碗(第25図4土2)、瀬戸・美濃陶器小碗(第25図4土3)、在地系土器鍋(第25図4土4)、砥石(第25図4土5)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器6点、在地系焙烙・鍋1点の他、砥石1点が埋没土から出土した。埋没土にAs-Aが含まれないことからAs-A降下以前に掘削され、埋没したと考えられる。

#### 2区5号土坑(第25図)

第1面西端部に位置する。平面形状は楕円形である。断面形状は北側壁際及び南側壁際を深く掘り窪め、底面の凹凸が著しい。出土遺物がなく時期を特定できない。

#### 2区6号土坑(第25図 PL. 7)

第1面中央部に位置する。平面形状は円形である。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物はない。埋没土にAs-Aが含まれないことからAs-A降下以前に掘削され、埋没したと考えられる。

#### 2区7号土坑(第26図 PL. 8)

第1面中央部南側に位置する。平面形状は楕円形である。断面形状は椀形を呈するが、東半部が約10cm深く掘り窪められている。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土による自然埋没と考えられる。出土遺物はない。埋没土にAs-Aが含まれないことからAs-A降下以前に掘削され、埋没したと考えられる。

#### 2区8号土坑(第26図 PL. 8)

第1面北西部に位置する。平面形状は楕円形である。断面形状は底面を大小ピット状に掘込み、凹凸が著しい。埋没土は、浅黄橙色土とにぶい黄橙色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、須恵器椀(第26図18土1)が底面上4cmから出土し、混入と考えられる。非掲載遺物は、土師器大型製品1点、近世の在地系焙烙・鍋1点、時期不詳の土器類1点である。埋没土にAs-Aが含まれないことからAs-A降下以前に掘削され、埋没したと考えられる。

#### 2区9号土坑(第26図 PL. 8)

第1面北西部に位置する。平面形状は不定形である。断面形状はほぼ平坦であるが、底面の南西側を土坑状に約10cm深く掘込む。10・11号土坑と重複し、9号土坑が10号土坑より新しく、11号土坑より古い。埋没土は、灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色砂質土による自然埋没と考えられる。出土遺物はない。埋没土にAs-Aが含まれないことからAs-A降下以前に掘削され、埋没したと考えられる。

#### 2区10号土坑(第26図 PL. 8・99)

第1面北西部に位置する。9号土坑と重複し、10号土坑が古い。重複のため全体の規模や形状は不明であるが、平面形状は不定形と想定される。底面付近にAs-B混土を含み、にぶい黄橙色砂質土によって埋没する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、鉄製品釘(第26図10土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、時期不詳の土器類1点である。出土遺物から時期は、近世と考えられる。

#### 2区11号土坑(第26図 PL. 8・99)

第1面北西部に位置する。9号土坑と重複し、11号土坑が新しい。平面形状は不定形である。断面形状は底面がほぼ平坦で、南壁は底面から開口部にかけて斜めに、北壁は垂直に立ち上がる。埋没土は、灰白色砂質土とにぶい黄橙色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、火打石(第26図11土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点、木製品漆椀1点が出土した。出土遺物から時期は、近世と考えられる。

#### 2区12号土坑(第27図 PL. 8・99)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は円形である。断面形状は底面がほぼ平坦で、東壁は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がり、西壁は垂直に約20cm立ち上がったあとにスロープ状に段差を設け、開口部にかけて斜めに立ち上がる。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土と灰白色砂質土である。出土遺物が多く、肥前磁器染付小碗(第27図12土1)、肥前磁器染付碗(第27図12土2～4)、肥前磁器染付筒形碗(第27図12土5)、瀬戸・美濃陶器灯



火皿(第27図12土6・7)、瀬戸・美濃陶器筒形小香炉(第27図12土8)、砥石(第27図12土9)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器小型製品1点、須恵器大型製品1点、中世の在在系鉢・鍋2点、近世の国産磁器10点、国産施釉陶器7点、国産焼締陶器1点、近現代の土器類1点、時期不詳の土器類3点の他、棒状礫1点である。出土遺物から時期は、近世と考えられる。

#### 2区13号土坑(第28図 PL. 8・100)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は楕円形であり、断面形状は底面がほぼ平坦で、西壁が底面から開口部にかけて斜めに立ち上がり、東壁は底面から約30cm立ち上がったあと、開口部にかけて段差を設け緩やかに立ち上がる。埋没土は、灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色砂質土による自然埋没と考えられる。遺物は、木製品漆椀(第28図13土3・4・5)は底面直上から、瀬戸・美濃陶器腰鍔碗(第28図13土1)、銅製品キセルの吸い口(第28図13土2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点、木製品椀赤漆のみ残存1点、木皮1点、種1点である。

#### 2区14号土坑(第27図 PL. 8)

第1面中央部に位置する。平面形状は円形である。断面形状は底面が平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土であり、自然埋没と考えられる。非掲載遺物は、国産施釉陶器1点の他、板碑片1点が埋没土から出土した。出土遺物から時期は、近世と考えられる。

#### 2区15号土坑(第27図 PL. 9)

第1面北西部に位置する。平面形状は隅丸台形である。断面形状は底面が小ピット状に掘り窪められ、凹凸が著しい。南西壁は開口部にかけてほぼ垂直に、北東壁は斜めに立ち上がる。埋没土は褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく、時期を特定できない。

#### 2区16号土坑(第27図 PL. 9)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は円形である。断面形状は椀形を呈する。埋没土は、灰褐色砂質土であ

り、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく、時期を特定できない。

#### 2区17号土坑(第27図 PL. 9)

第1面中央部北側に位置する。平面形状は円形である。断面形状は椀形を呈する。埋没土は、灰褐色砂質土であり16号土坑と類似する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく、時期を特定できない。

### 3 溝

2区第1面で確認できた近世の溝は3条のみである。調査区北西部及び中央部南側に位置する。

#### 2区1号溝(第29図 PL. 9)

第1面中央部南側のX=135～143、Y=-536・537に位置する。1号溝の南側は調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに南側へ延長すると想定される。1号溝は、南北方向にほぼ直線状に走行する。2号溝と近接し、走行方向はほぼ同一である。

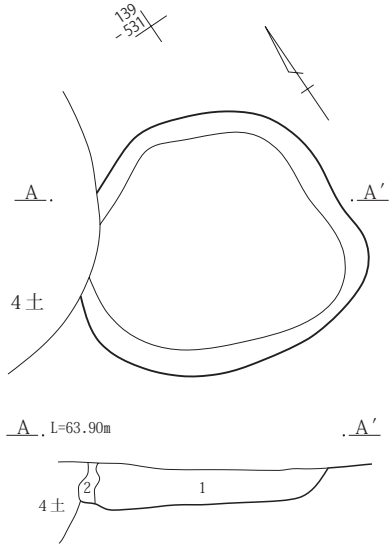
確認できる規模は、長さ7.28m、幅0.12～0.58m、深さ0.09～0.18mを測る。走行方向は、N-7°-Wである。勾配は2.06%であり、僅かな高低差は認められるが、北側から南側にかけて流れていたと想定される。上面が削平されたため、底面付近の一部のみの確認となり残存状況は不良である。底面はほぼ平坦となる。出土遺物がなく、時期を特定できない。

#### 2区2号溝(第29図 PL. 9)

第1面中央部南側のX=135～144、Y=-536～538に位置する。2号溝の南側は調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに南側へ延長すると想定される。北側と南側に分かれるが、走行方向が同一であるため一連の溝とした。1号溝とは近接した位置にある。

確認できる規模は、長さ8.88m、幅0.18～0.60m、深さ0.02～0.06mを測る。走行方向は、N-7°-Wである。勾配は1.46%であり、僅かな高低差は認められるが、北側から南側にかけて流れていたと想定される。上面が削平されたため、底面付近の確認となり残存状況は不良である。出土遺物がなく、時期を特定できない。

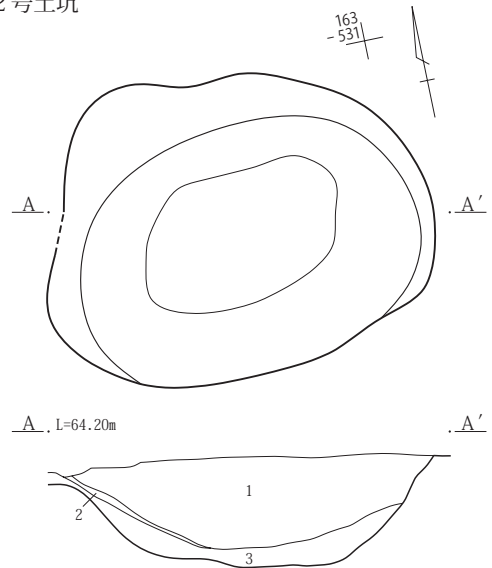
2区1号土坑



1号土坑A-A'

1. 灰白色土 砂質土、浅黄橙色砂質土を含む、締まり弱
2. 浅黄橙色土 砂質土

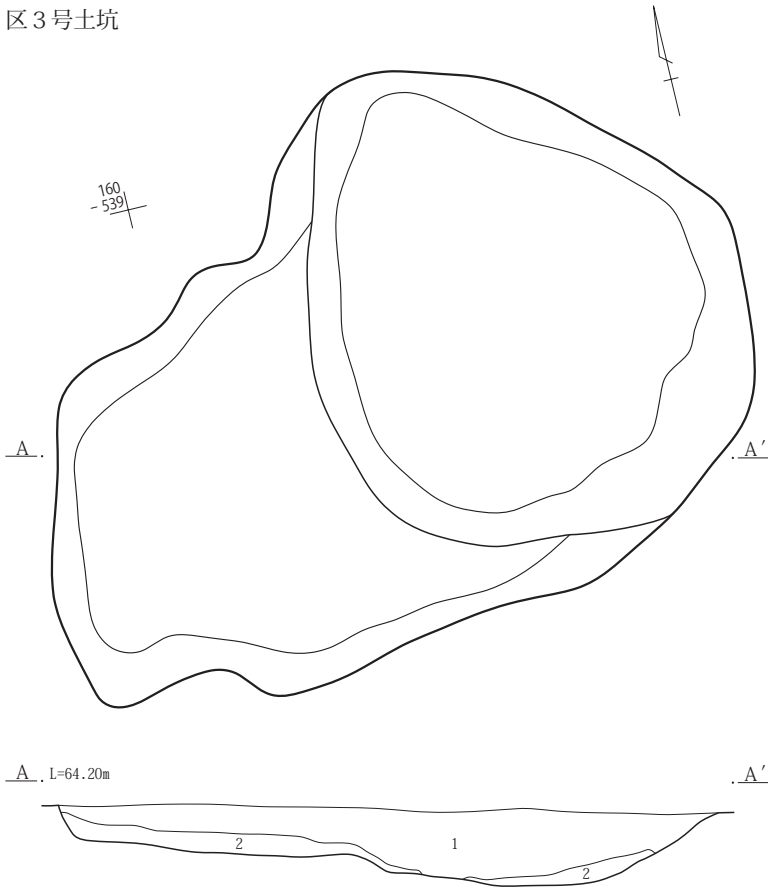
2区2号土坑



2号土坑A-A'

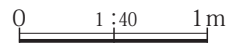
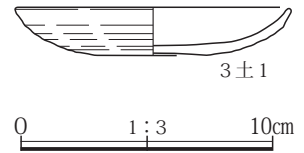
1. 褐灰色土 砂質土、As-A・Hr-FP含む、浅黄橙色砂質土を含む、下部に鉄分の沈着あり、酸化面硬い
2. 黒褐色土 砂質土
3. As-A

2区3号土坑



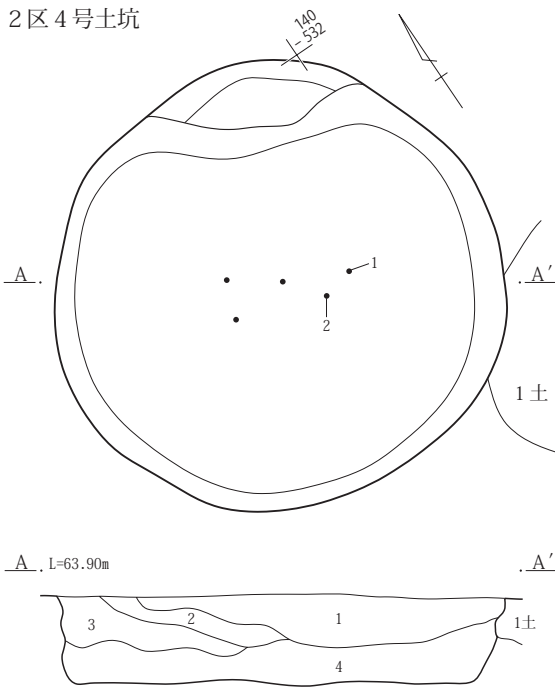
3号土坑A-A'

1. 褐灰色土 砂質土、As-A・Hr-FP含む、上層に浅黄橙色砂質土を含む
2. 浅黄橙色土 砂質土、上層にラミナ状に砂層堆積



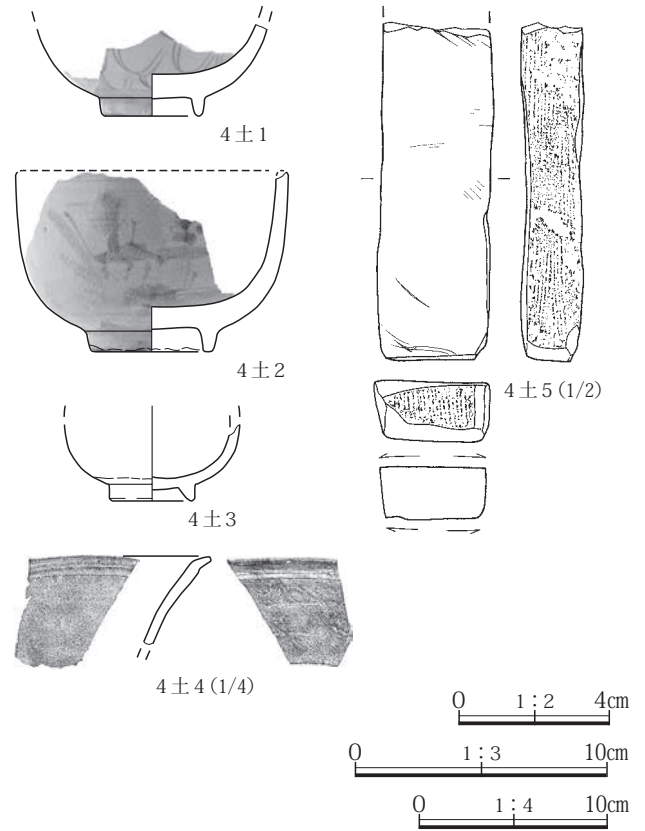
第24図 2区1・2号土坑・3号土坑と出土遺物

2区4号土坑

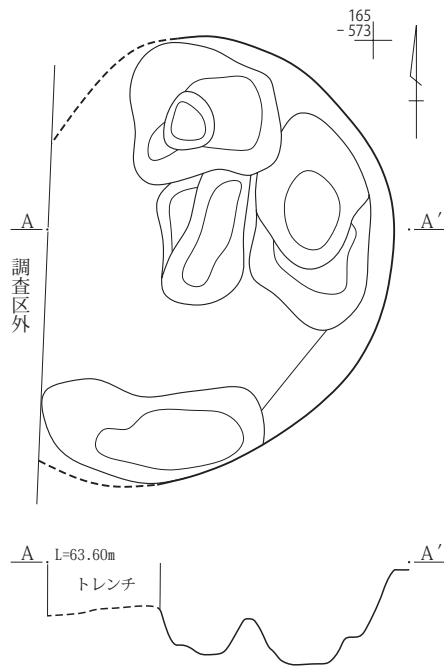


4号土坑A-A'

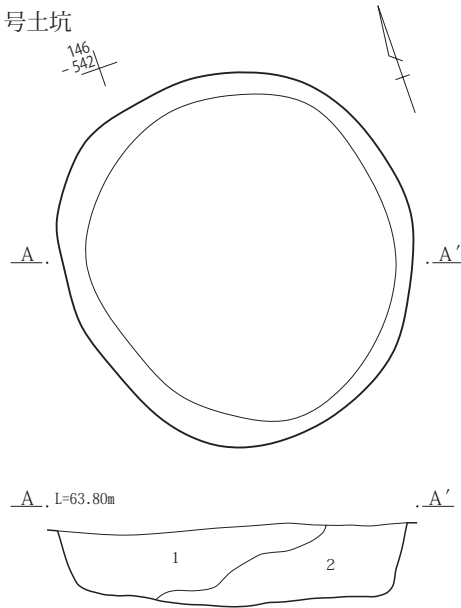
1. にぶい黄橙色土 砂質土
2. にぶい黄橙色土 砂質土、灰褐色土塊を含む
3. にぶい黄橙色土 砂質土、第2層より小さい灰褐色土塊を含む
4. にぶい黄橙色土 砂質土、全体に締めりあり



2区5号土坑

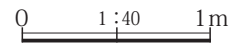


2区6号土坑



6号土坑A-A'

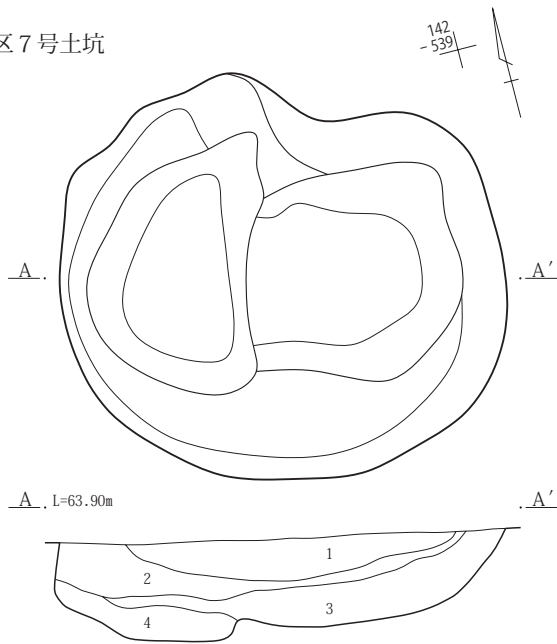
1. にぶい黄橙色土 砂質土
2. にぶい黄橙色土 砂質土、第1層より色味は暗い



第25図 2区4号土坑と出土遺物・5・6号土坑



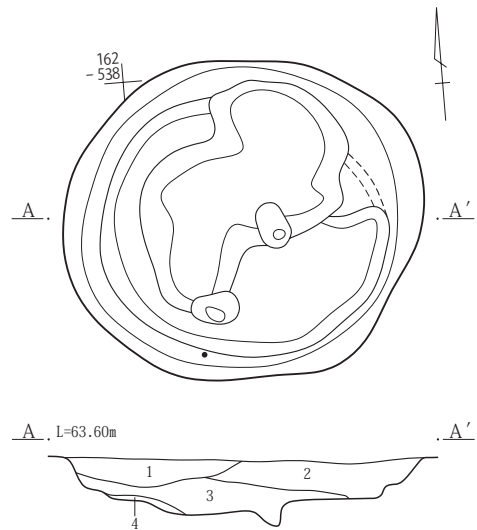
2区7号土坑



7号土坑A-A'

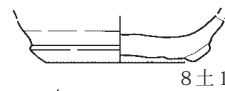
1. にぶい黄橙色土 砂質土、下部が灰白色砂質土
2. にぶい黄橙色土 砂質土
3. にぶい黄橙色土 砂質土、下部が灰白色砂質土、縮まりあり
4. にぶい黄橙色土 砂質土、縮まりあり

2区8号土坑



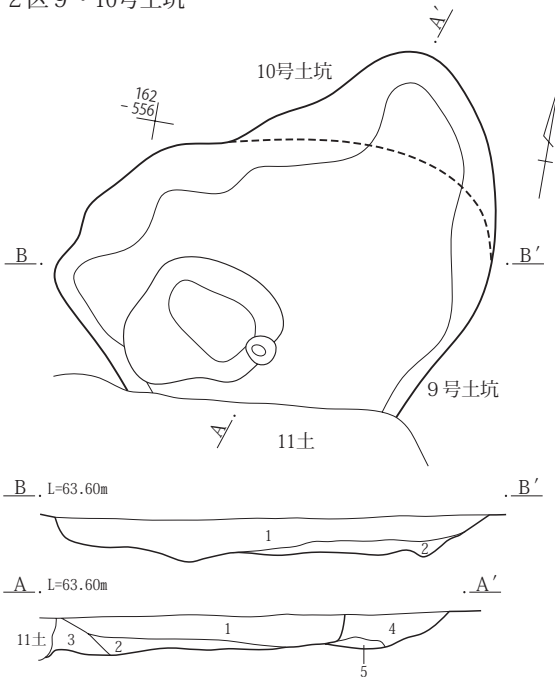
8号土坑A-A'

1. にぶい黄橙色土 砂質土
2. にぶい黄橙色土 砂質土、第1層より色味は暗い
3. にぶい黄橙色土 砂質土、灰黄褐色土を含む、粘性ややあり
4. 浅黄橙色土 粘性あり



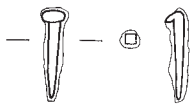
0 1:3 10cm

2区9・10号土坑



9号・10号土坑A-A'・B-B'

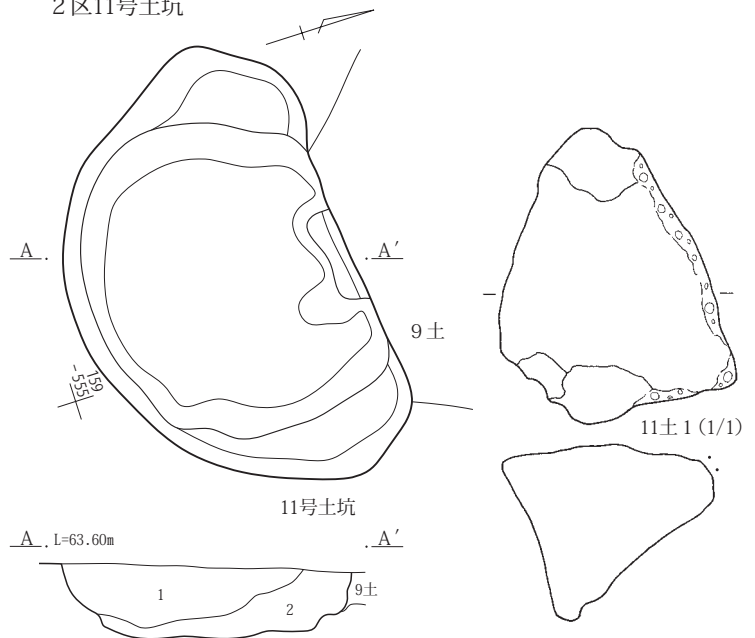
1. にぶい黄橙色土 砂質土、第1～3層が9号土坑
2. にぶい黄橙色土 砂質土、褐灰色粘質土塊を含む
3. 灰黄褐色土 砂質土
4. にぶい黄橙色土 砂質土、第1層より色味は暗い
5. にぶい黄橙色土 砂質土、As-B混土を含む



10土1 (1/2)

0 1:2 4cm

2区11号土坑



11号土坑A-A'

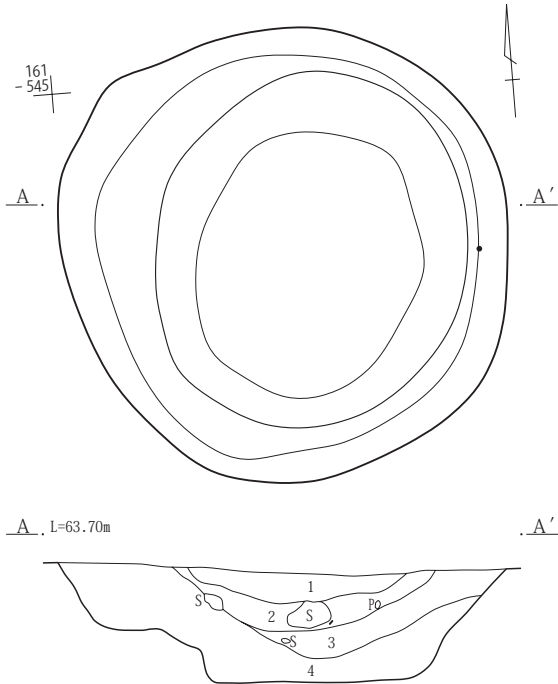
1. にぶい黄橙色土 砂質土
2. 灰白色土 砂質土

0 1:1 2cm

0 1:40 1m

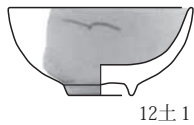
第26図 2区7・9号土坑・8・10・11号土坑と出土遺物

2区12号土坑

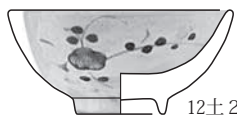


A, L=63.70m

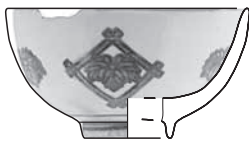
- 12号土坑A-A'
1. にぶい黄橙色土 砂質土
  2. 灰白色土 砂質土、遺物混入層、上層に木炭層
  3. 灰白色土 砂質土、全体に縮まりあり
  4. にぶい黄橙色土 砂質土、縮まりあり



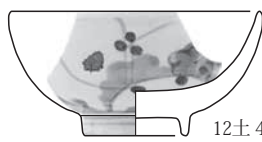
12±1



12±2



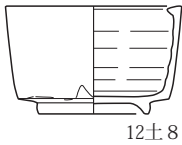
12±3



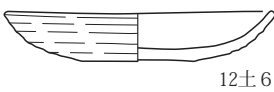
12±4



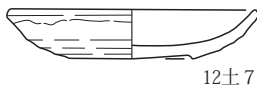
12±5



12±8



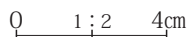
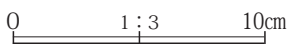
12±6



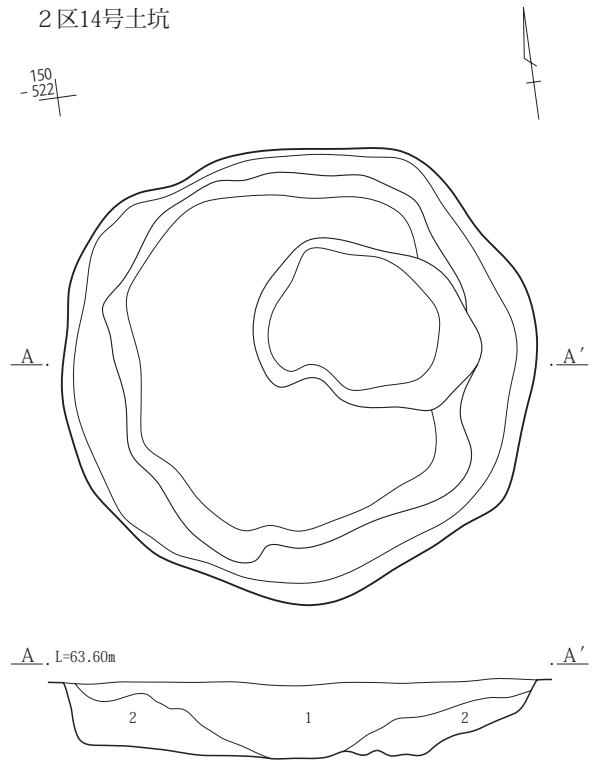
12±7



12±9 (1/2)



2区14号土坑

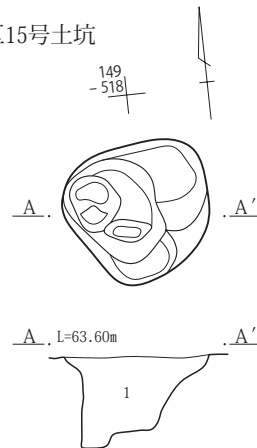


A, L=63.60m

14号土坑A-A'

1. にぶい黄橙色土 砂質土
2. にぶい黄橙色土 砂質土、シルト質

2区15号土坑

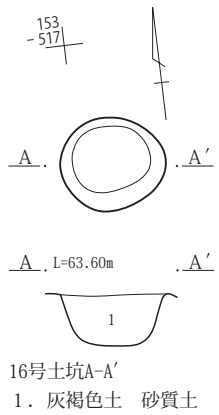


A, L=63.60m

15号土坑A-A'

1. 褐灰色土 砂質土

2区16号土坑

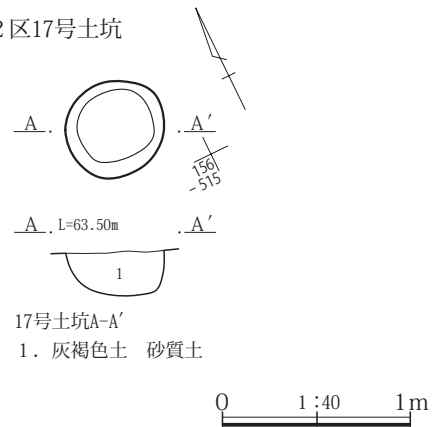


A, L=63.60m

16号土坑A-A'

1. 灰褐色土 砂質土

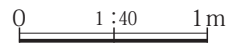
2区17号土坑



A, L=63.50m

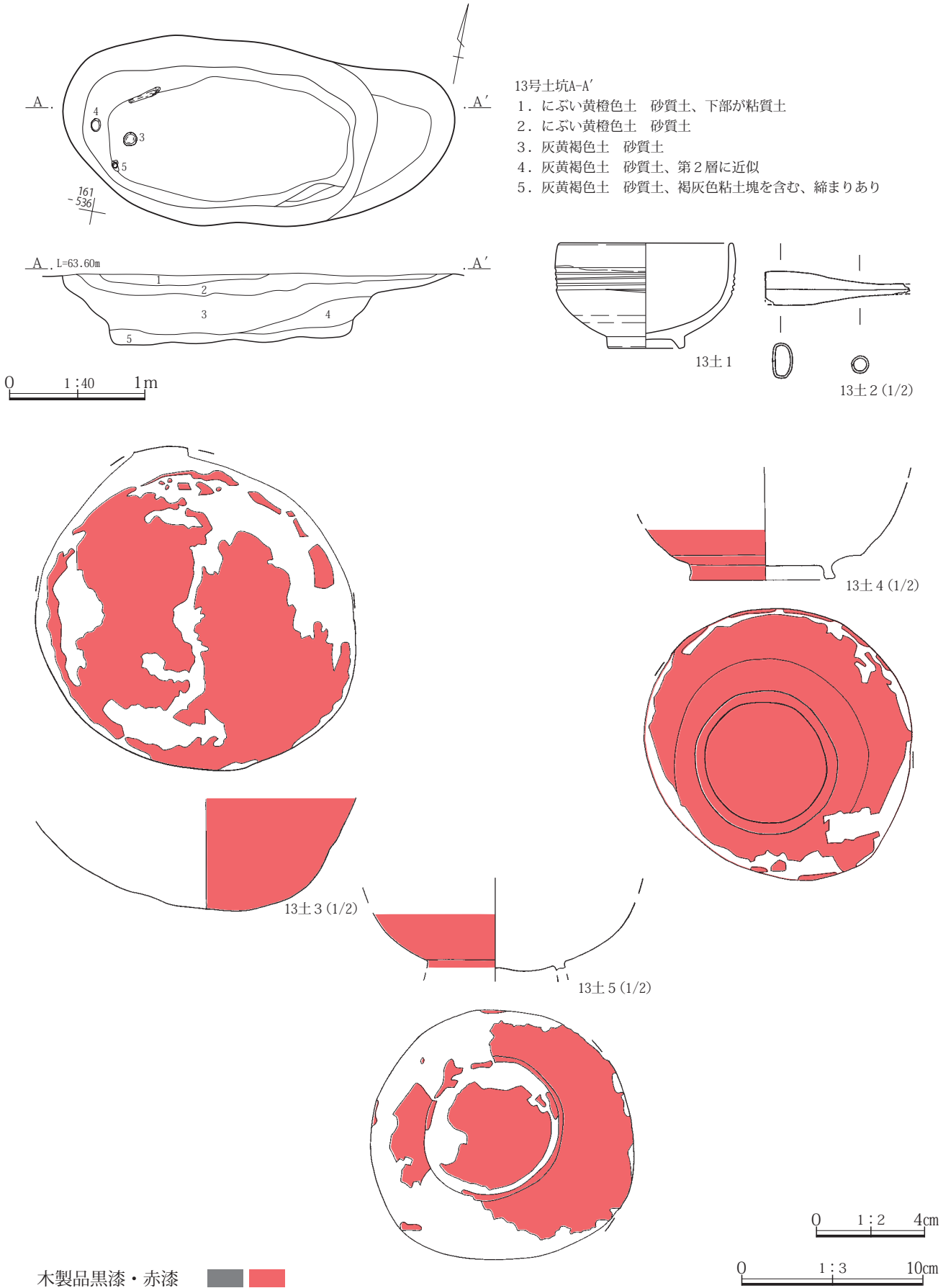
17号土坑A-A'

1. 灰褐色土 砂質土



第27図 2区12号土坑と出土遺物・14～17号土坑

2区13号土坑



第28図 2区13号土坑と出土遺物

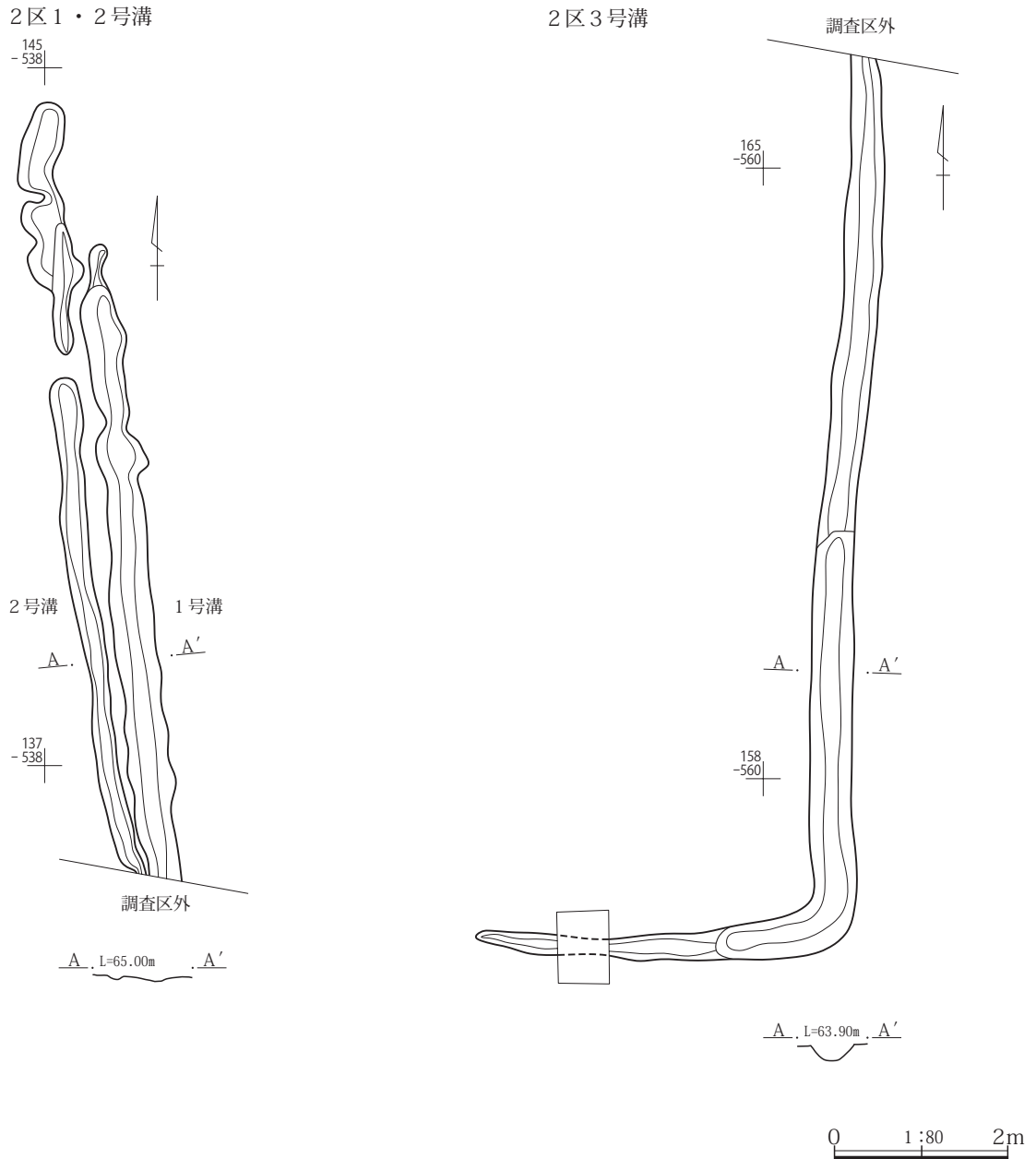


2区3号溝(第29図 PL. 9)

第1面北西部のX=155～166、Y=-558～563に位置する。3号溝の北側は、調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側へ延長すると想定される。

確認できる規模は、長さ14.08m、幅0.20～0.52m、深さ0.02～0.19mを測る。平面形状はL字状であり、走行方向は、N-0°とN-90°である。南側に掘削され

た東西方向の溝には高低差が認められずほぼ平坦であり、南北方向の溝は南端に比べ北端が僅かに深く、勾配は0.97%である。断面形状は浅い椀形を呈し、底面から上端にかけて緩やかに立ち上がる。規模や形状などから区画を分けるために掘られた溝の可能性はある。出土遺物がなく、時期を特定できない。



第29図 2区1～3号溝

#### 4 旧河道

2区第1面では、天明三(1783)年に発生した泥流や中世以降の洪水などによって埋没したと考えられる旧河道を確認した。この旧河道は、近世に残る諸記録などから天明泥流によって埋没した矢川の旧河道と考えられる。2区東側に位置する3区第1面においても矢川の旧河道の一部を確認した。調査区は異なるが、同一の旧河道と考えられるため、本節に掲載した。

#### 2・3区旧河道(第30～46図 PL. 9～12・100～113)

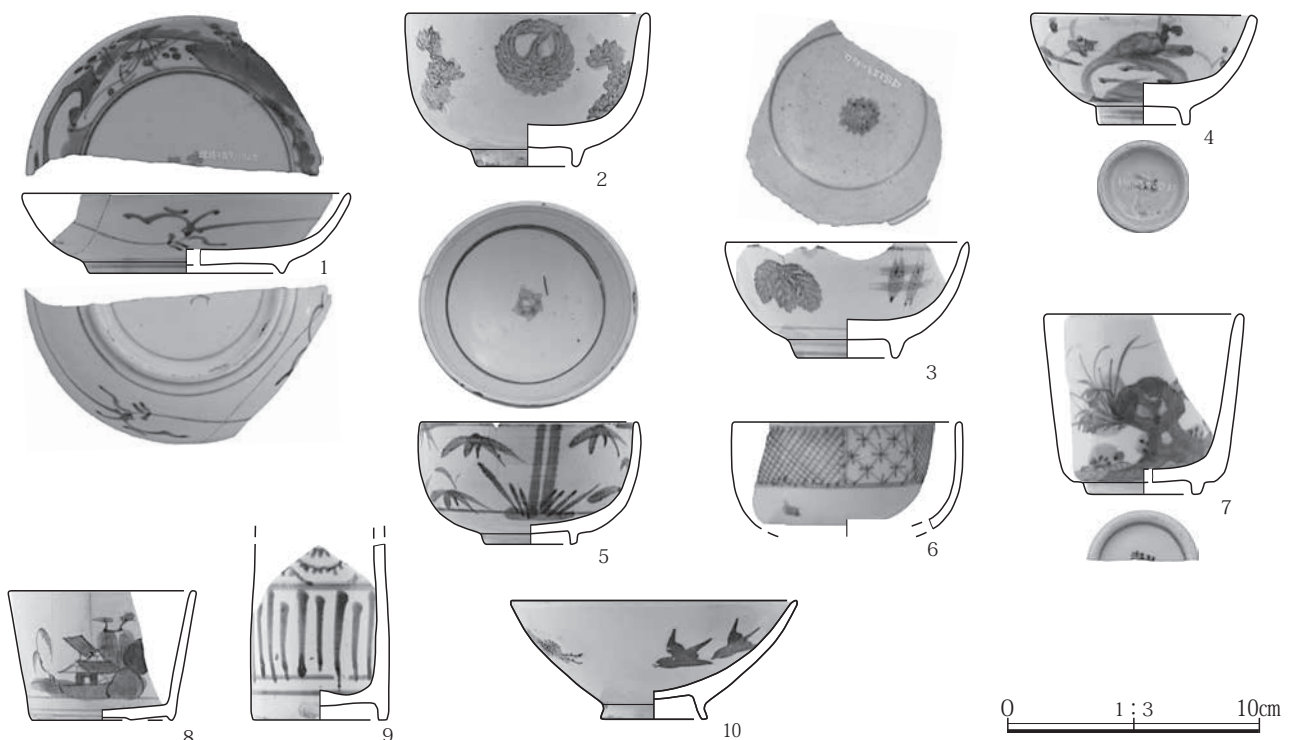
2区第1面東部、3区第1面西部のX=121～159、Y=-449～510に位置する。調査区外となる北側及び南側にさらに延長される。

天明泥流によって埋没した矢川の旧河道の規模は、長さ31.4m、幅47.3m、深さ0.32～1.91mを測る。走行方向は、N-17°-Wである。旧河道の矢川の底面までは掘削できなかったが、2区底面の比高差0.03mとなり北側から南側にかけて南流していたと想定される。

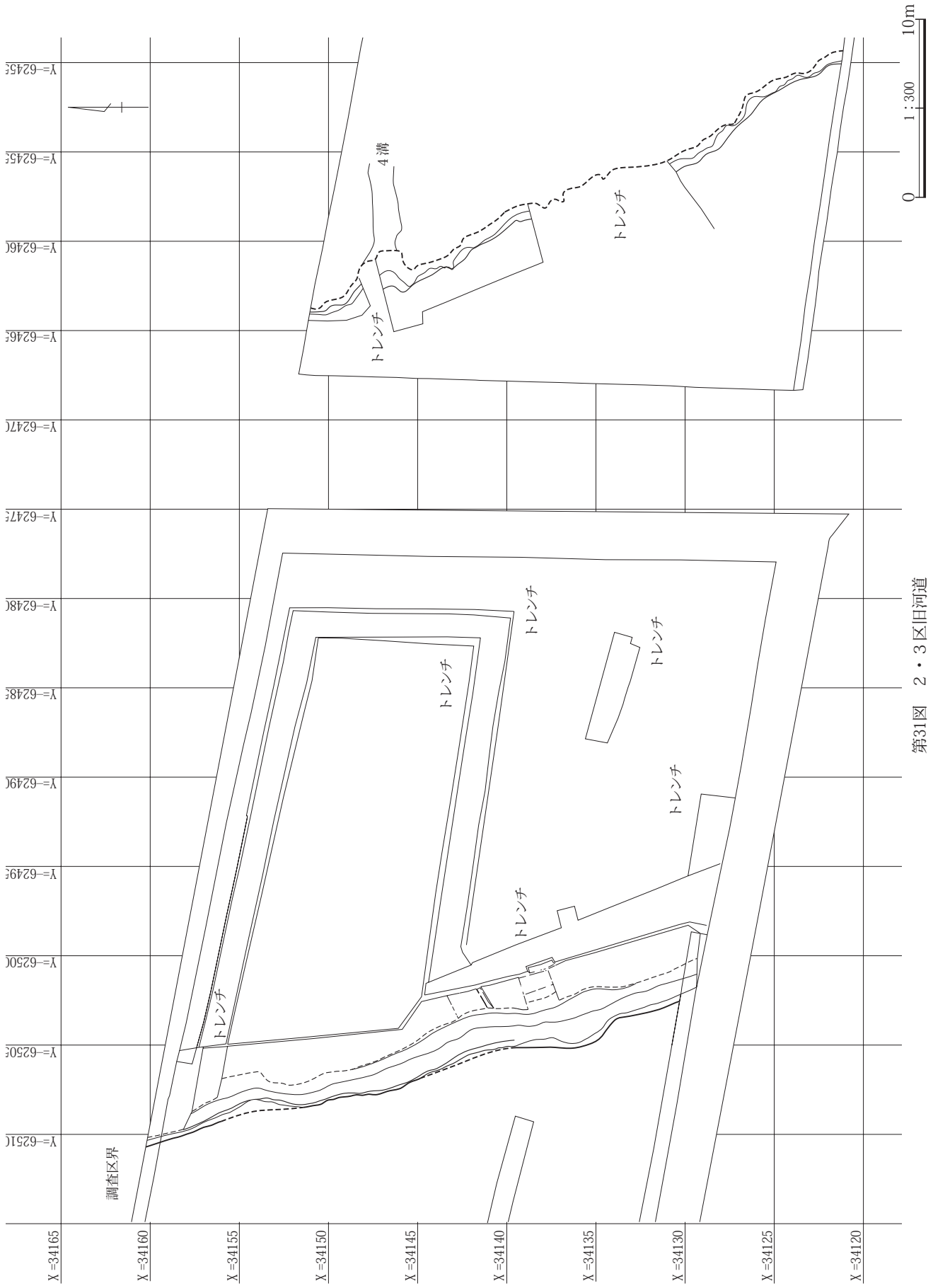
2区南壁A-A'の土層断面の観察によると、下層の第31・32層は灰黄褐色シルト質土や黒褐色シルト質土と砂層の互層、第21層は明褐灰色シルト質土と砂層が成層する。第20層は、明褐灰色シルト質土の互層が認められる

ことから、これらは天明三年に起こった泥流以前の洪水などによる堆積物と考えられる。第27層は中世の水田耕土であり、耕作土は河道を埋めた堆積物中に挟まることから水田と矢川の旧河道が接していたと考えられる。なお、第5層については、圃場整備前の水田であり、近現代の洪水などによって水田耕土、畦、水路が埋没したものである。3区B-B'・C-C'の土層断面の観察によって、上層から下層まで第2層の天明三年の泥流による堆積物が認められた。3区も湧水のため河床までは掘削できなかったが、3区と2区の堆積状況が異なることから、天明三年以前の矢川の旧河道は、泥流によって埋没した3区西端を流路としていたと考えられる。

出土遺物が多く、2区では肥前磁器染付皿(第30図1)、肥前磁器染付碗(第30図2～4)、肥前磁器染付丸碗(第30図5・6)、肥前磁器か染付湯飲み(第30図7)、肥前磁器染付猪口(第30図8)、肥前磁器染付瓶(第30図9)、瀬戸・美濃磁器か染付平碗(第30図10)、瀬戸・美濃陶器腰鏝碗(第34図11)、瀬戸・美濃陶器灯火皿(第34図12)、瀬戸・美濃陶器火入れか香炉(第34図13)、在地系土器焙烙(第34図14)、肥前陶器か瓶(第34図15)が埋没土から出土した。金属製品では、銅製品キセルの吸い口(第34図16)、銭貨(第34図17・18)が埋没土から出土した。木製品については遺存状態の良好な遺物が多く、漆椀蓋

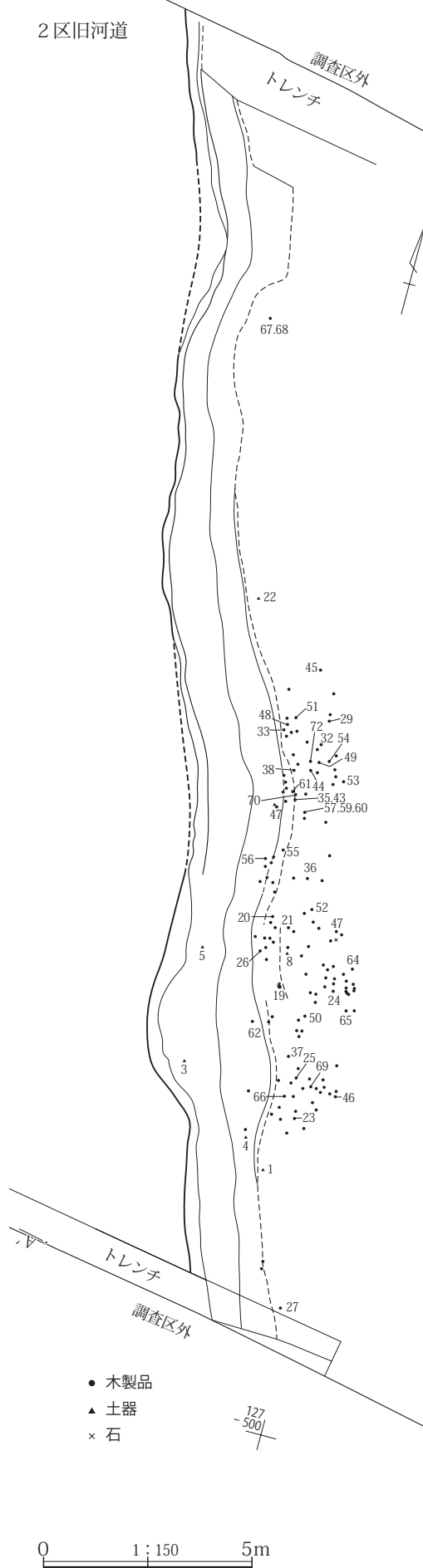


第30図 2区旧河道出土遺物(1)



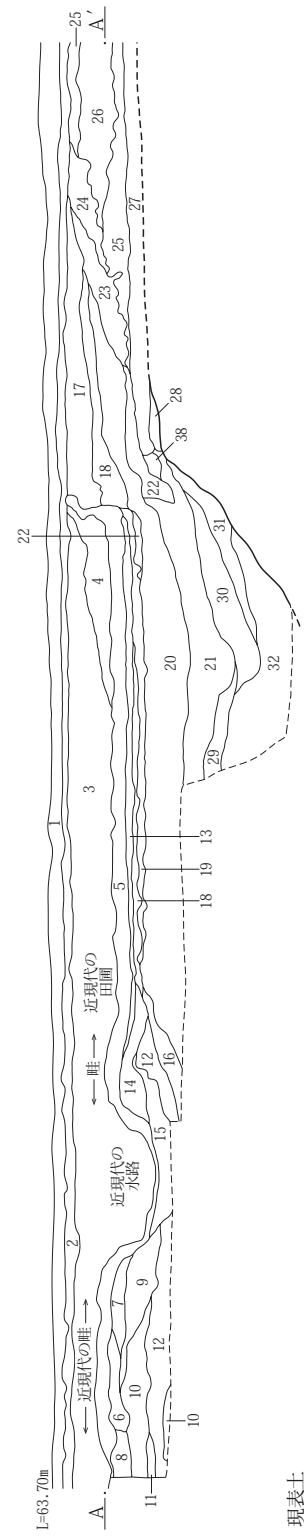
第31図 2・3区旧河道

2区旧河道



150  
-500

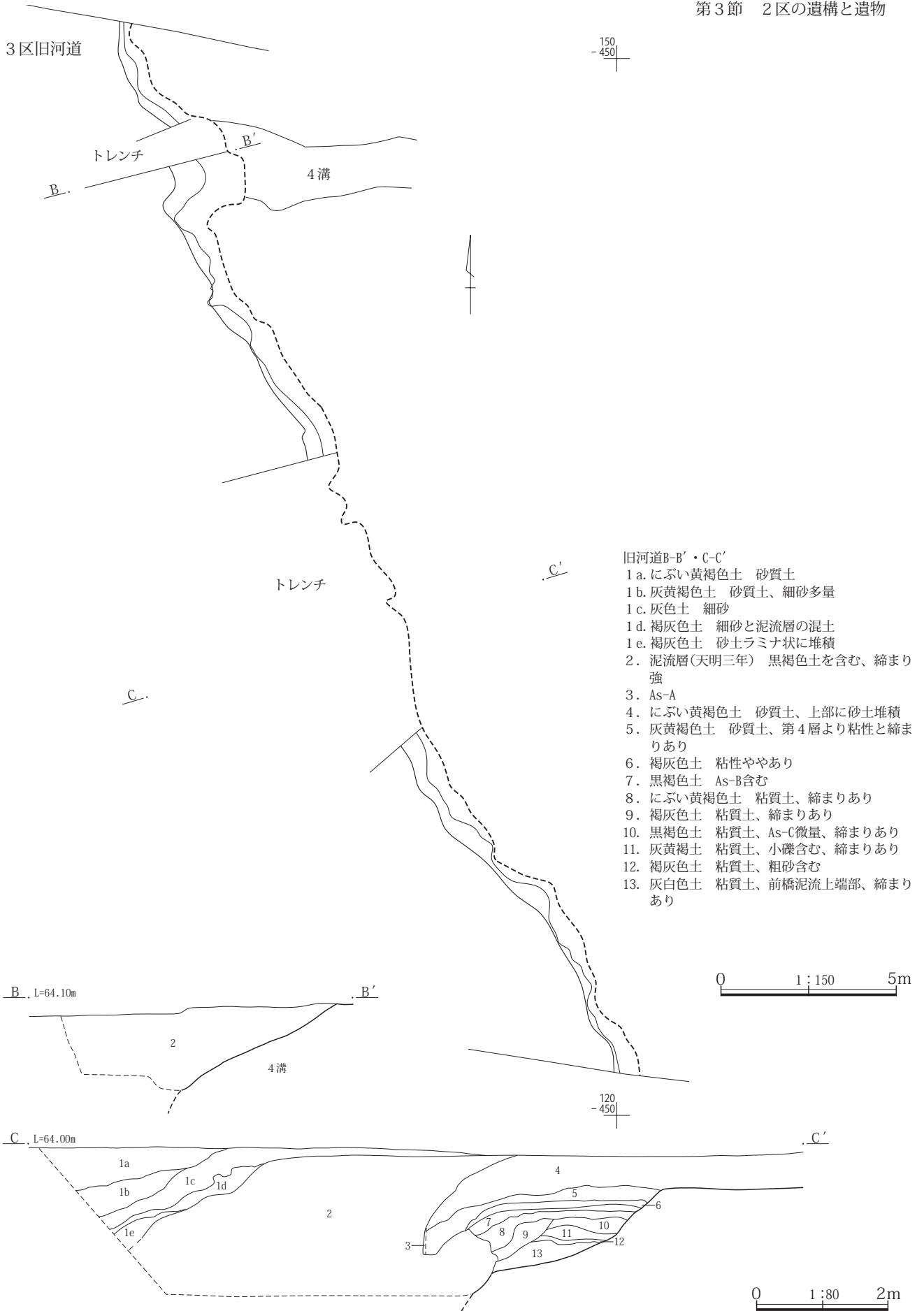
第32図 2区旧河道



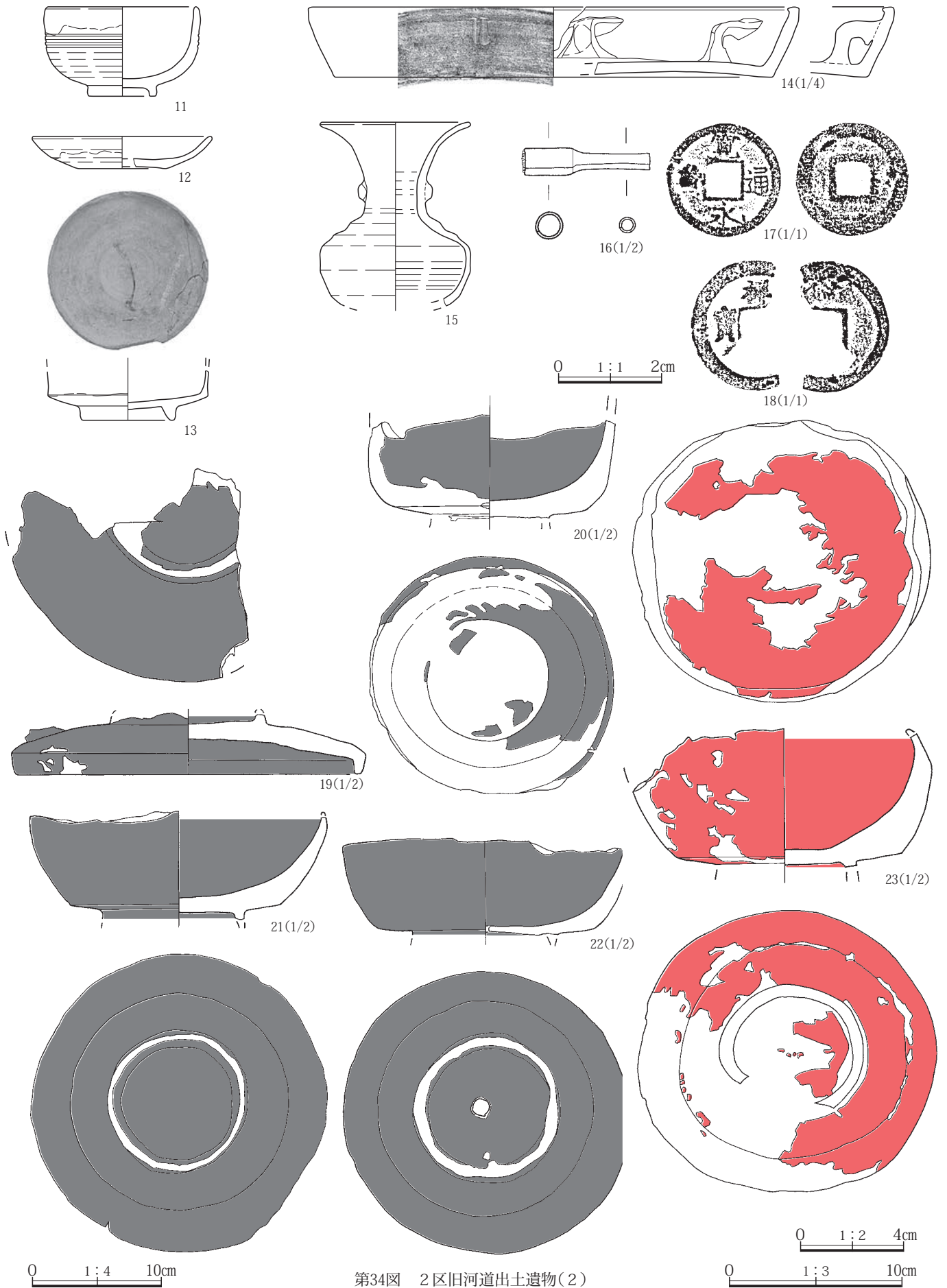
- 木製品
- ▲ 土器
- × 石

- 旧河道A-A'
1. 灰褐色土、砂質土、現表土
  2. 褐色土、砂質土、縮まり強
  3. 暗灰黄色土、天明泥流起源の30～40cm礫を含む、砂礫多量、洪水堆積物か
  4. 灰白色土、細砂
  5. 褐色土、シルト質土、近現代の水田耕土、畦、水路
  6. 明褐色土、砂質土
  7. 明褐色土、砂質土、泥流(天明三年)少量
  8. 明褐色土、砂質土、第6層より色味は明るい
  9. 明褐色土、シルト質土、中央部に泥流(天明三年)の砂層を含む
  10. 明褐色土、砂質土、第6層に近似
  11. 明褐色土、砂質土、第10層より微砂粒
  12. にぶい褐色土、シルト質土
  13. 明褐色土、シルト質土
  14. 灰褐色土、シルト質土
  15. 灰褐色土、砂質土
  16. 褐色土、シルト質土、小砂利を含む
  17. 明褐色土、砂質土、縮まり強
  18. にぶい褐色土、砂質土
  19. 明褐色土、シルト質土、砂質土を含む
  20. 明褐色土、シルト質土、褐色シルト質土、明褐色砂質土の互層
  21. 明褐色土、シルト質土と砂層の互層、炭化物を含む
  22. 灰褐色土、砂質土、縮まりあり
  23. 褐色土、砂質土
  24. 褐色土、砂質土、天明泥流を含む
  25. 明褐色土、砂質土
  26. 明褐色土、砂質土、第25層より色味は明るい
  27. にぶい褐色土、砂質土、中世の水田耕土
  28. 灰褐色土、砂質土、As-Bを含む、縮まり強
  29. 褐色土、シルト質土
  30. 褐色土、シルト質土と灰白色砂層の互層
  31. 灰褐色土、シルト質土と砂層の互層
  32. 黒褐色土、シルト質土と砂層の互層

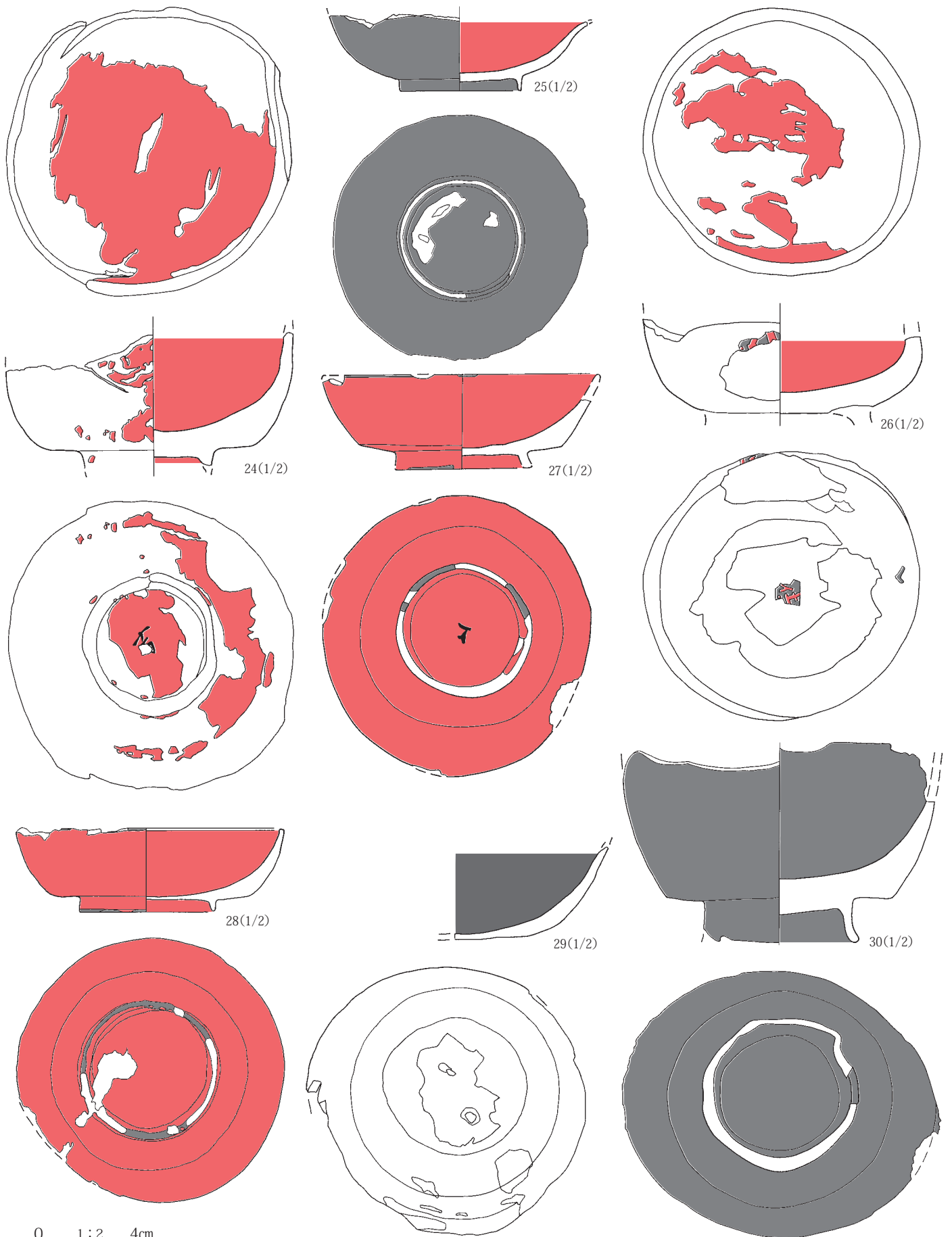




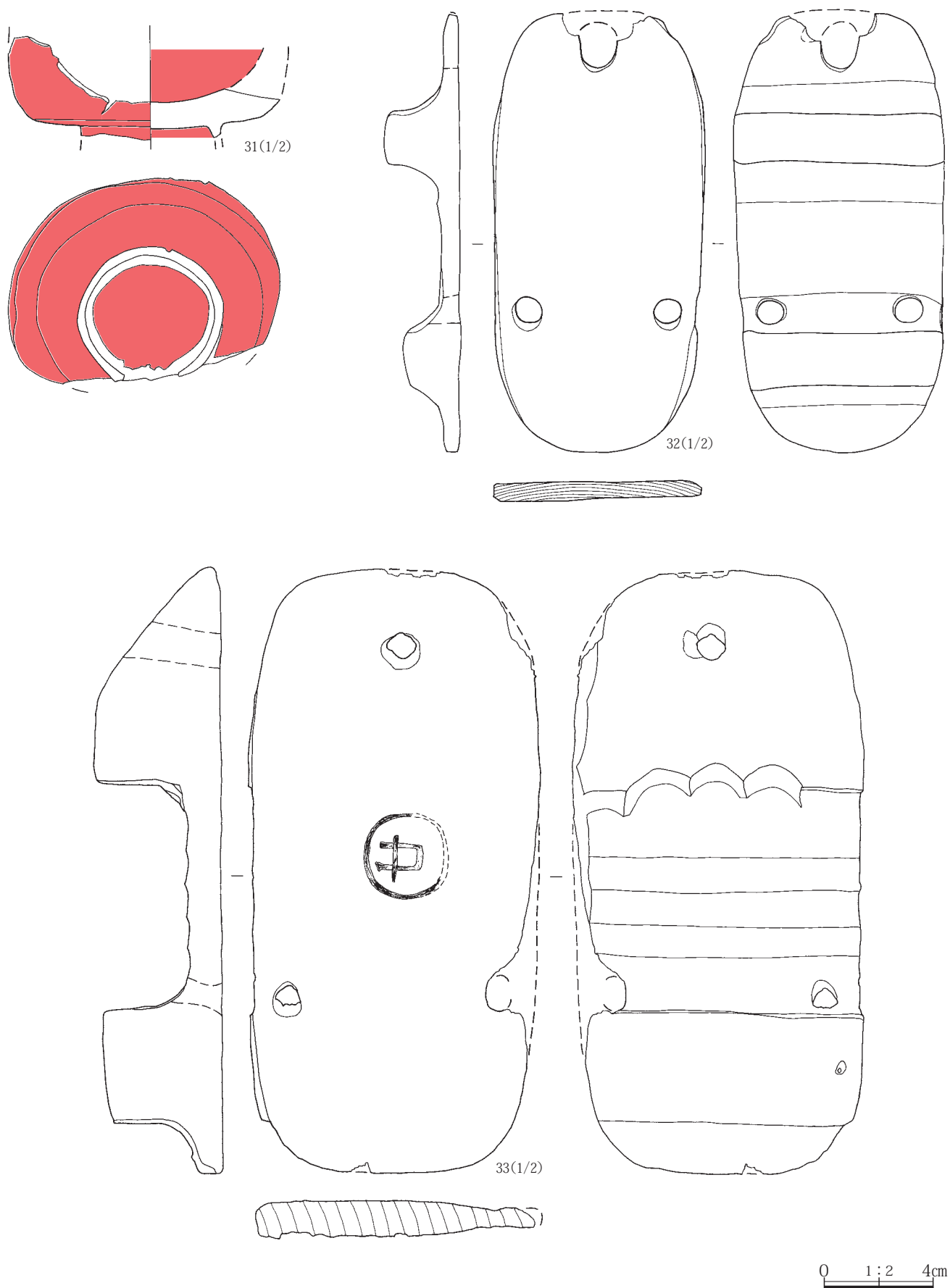
第33図 3区旧河道



第34図 2区旧河道出土遺物(2)

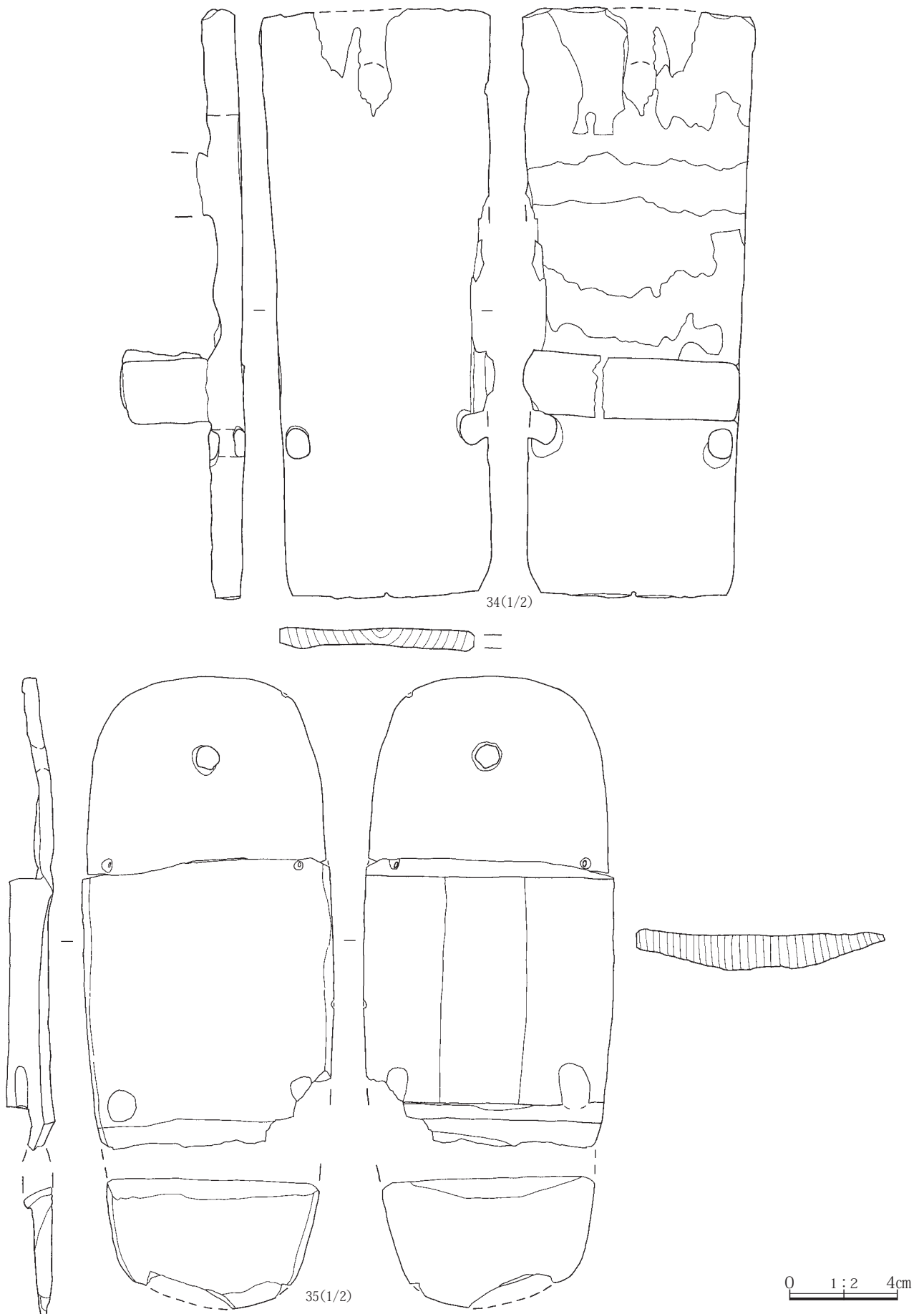


第35図 2区旧河道出土遺物(3)

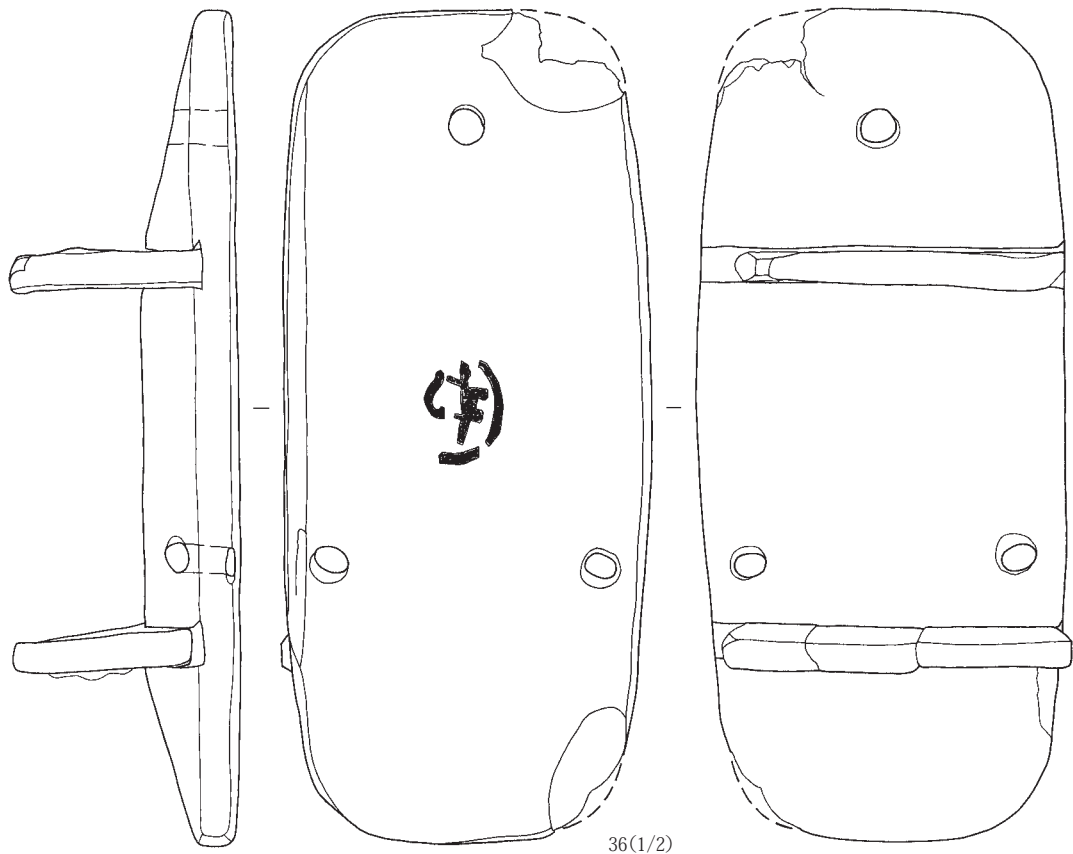


第36図 2区旧河道出土遺物(4)

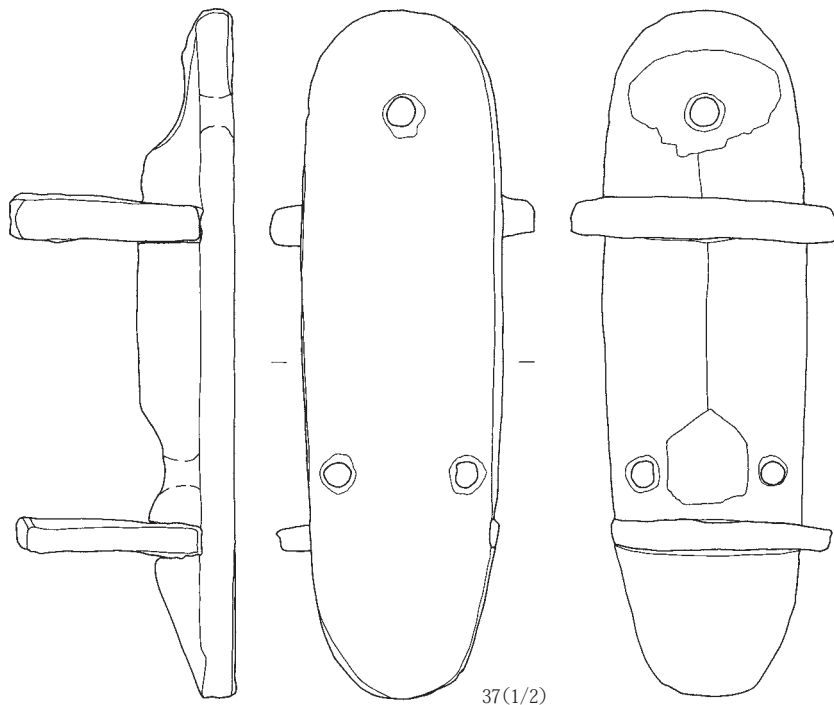
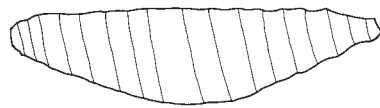




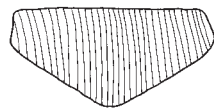
第37図 2区旧河道出土遺物(5)



36(1/2)

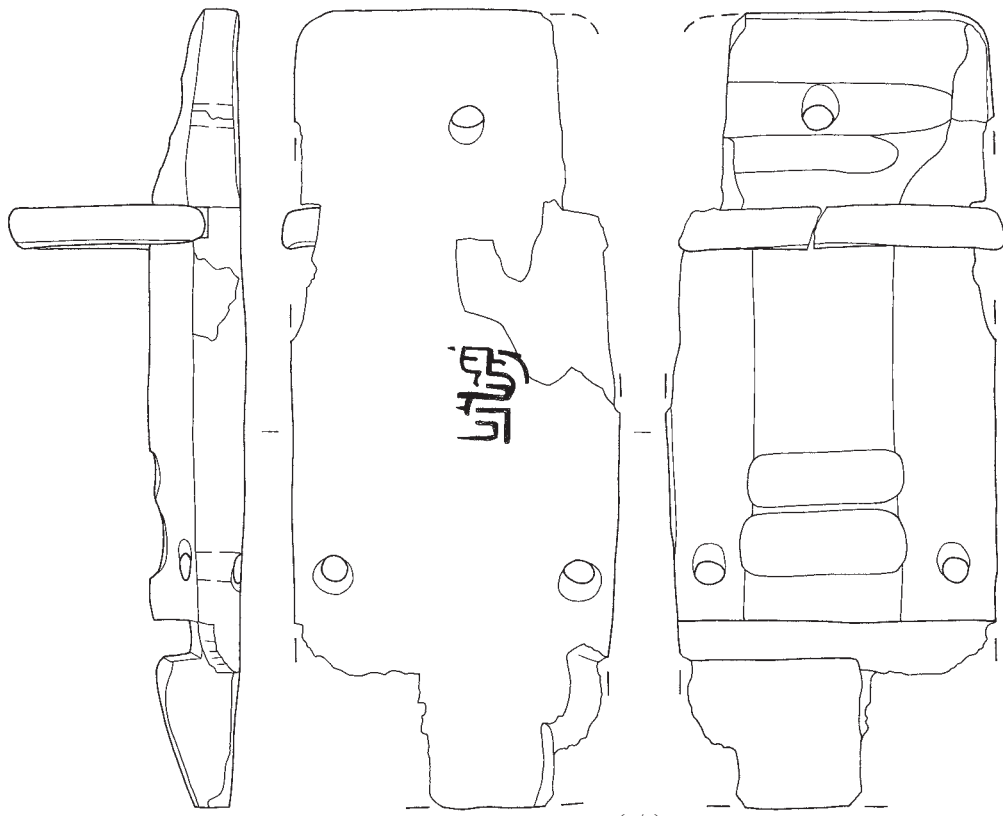


37(1/2)

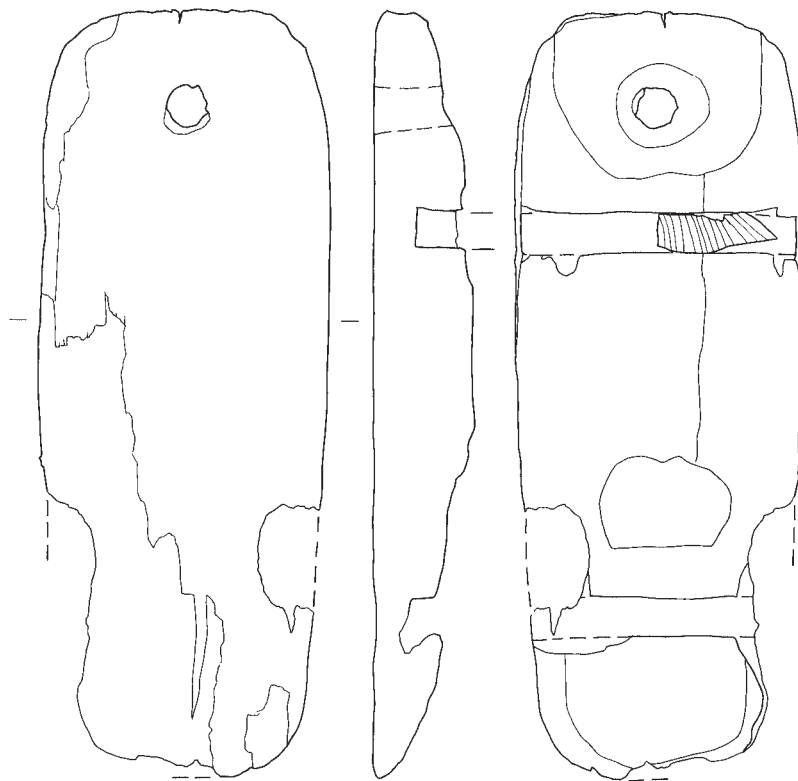
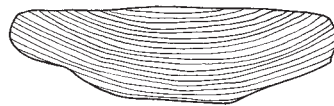


0 1 2 4cm

第38図 2区旧河道出土遺物(6)



38(1/2)

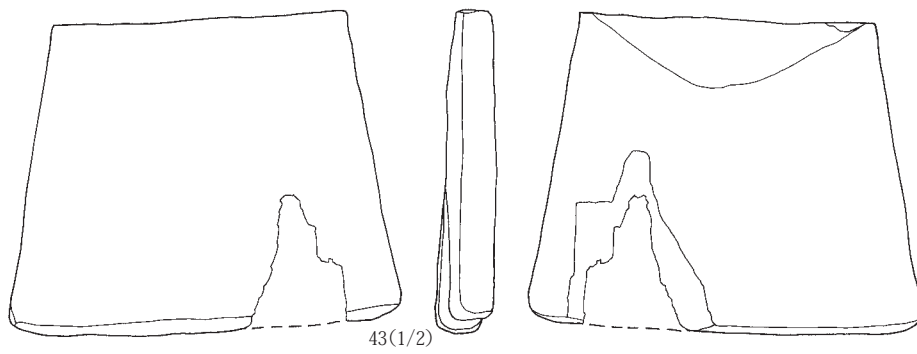
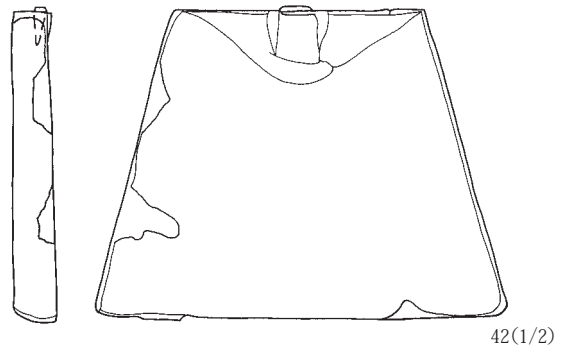
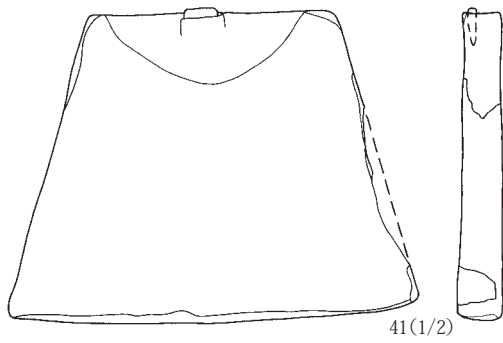
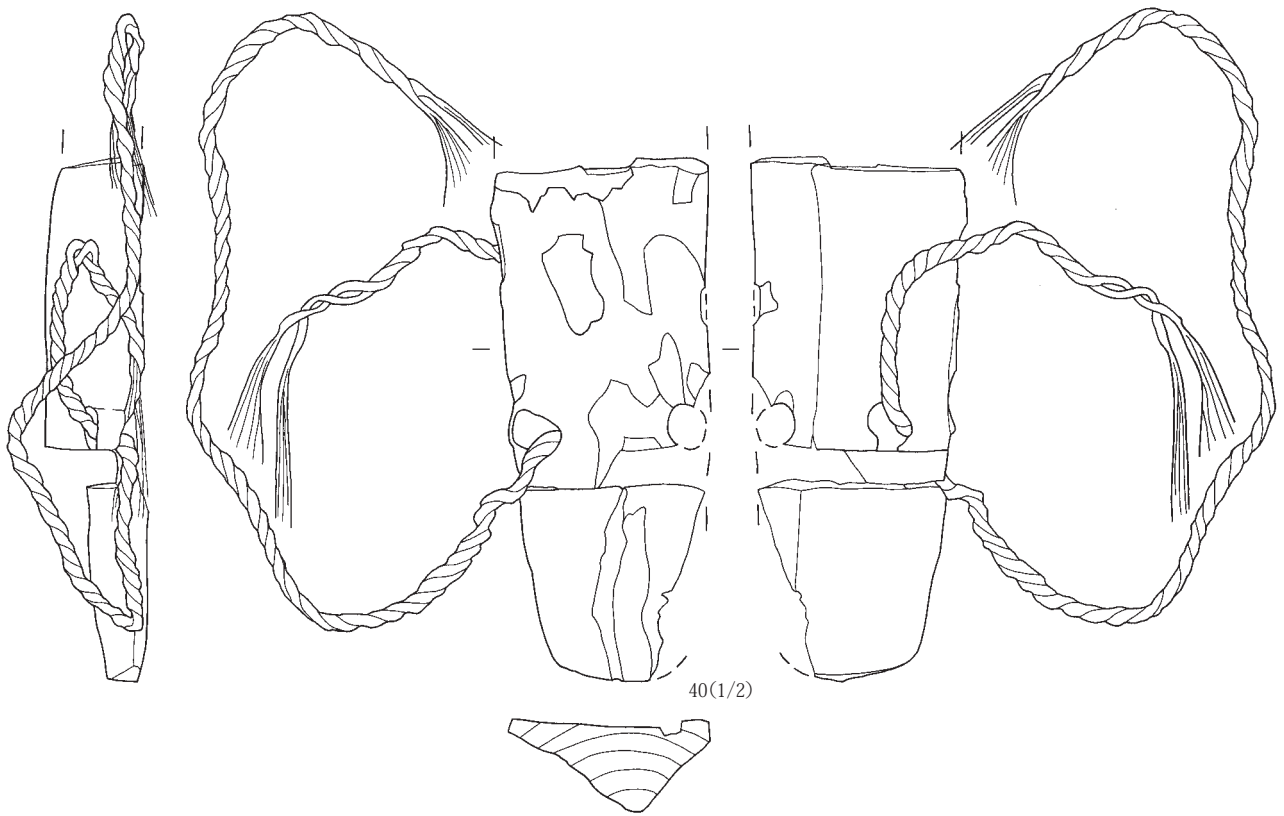


39(1/2)



0 1:2 4cm

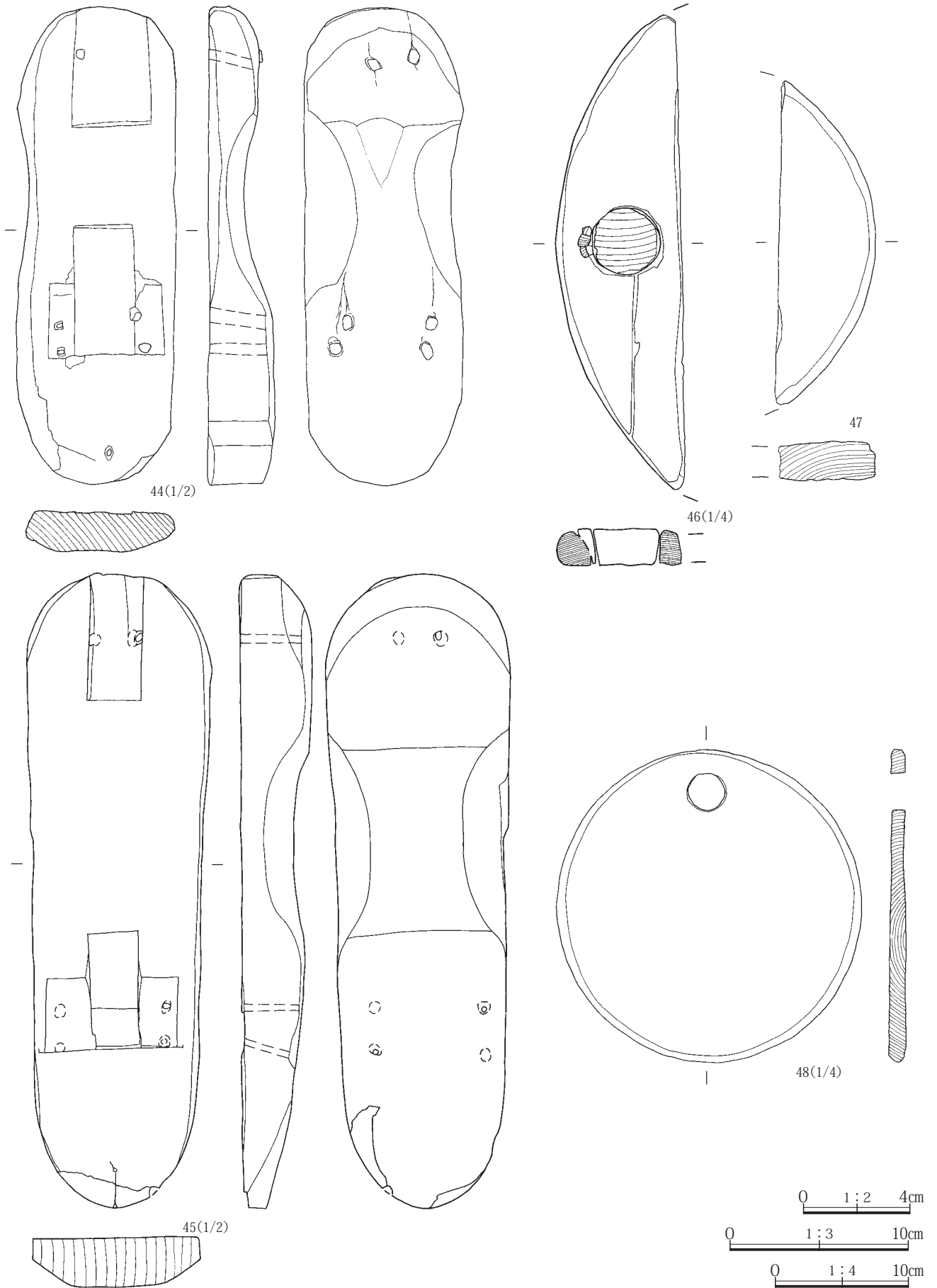
第39図 2区旧河道出土遺物(7)



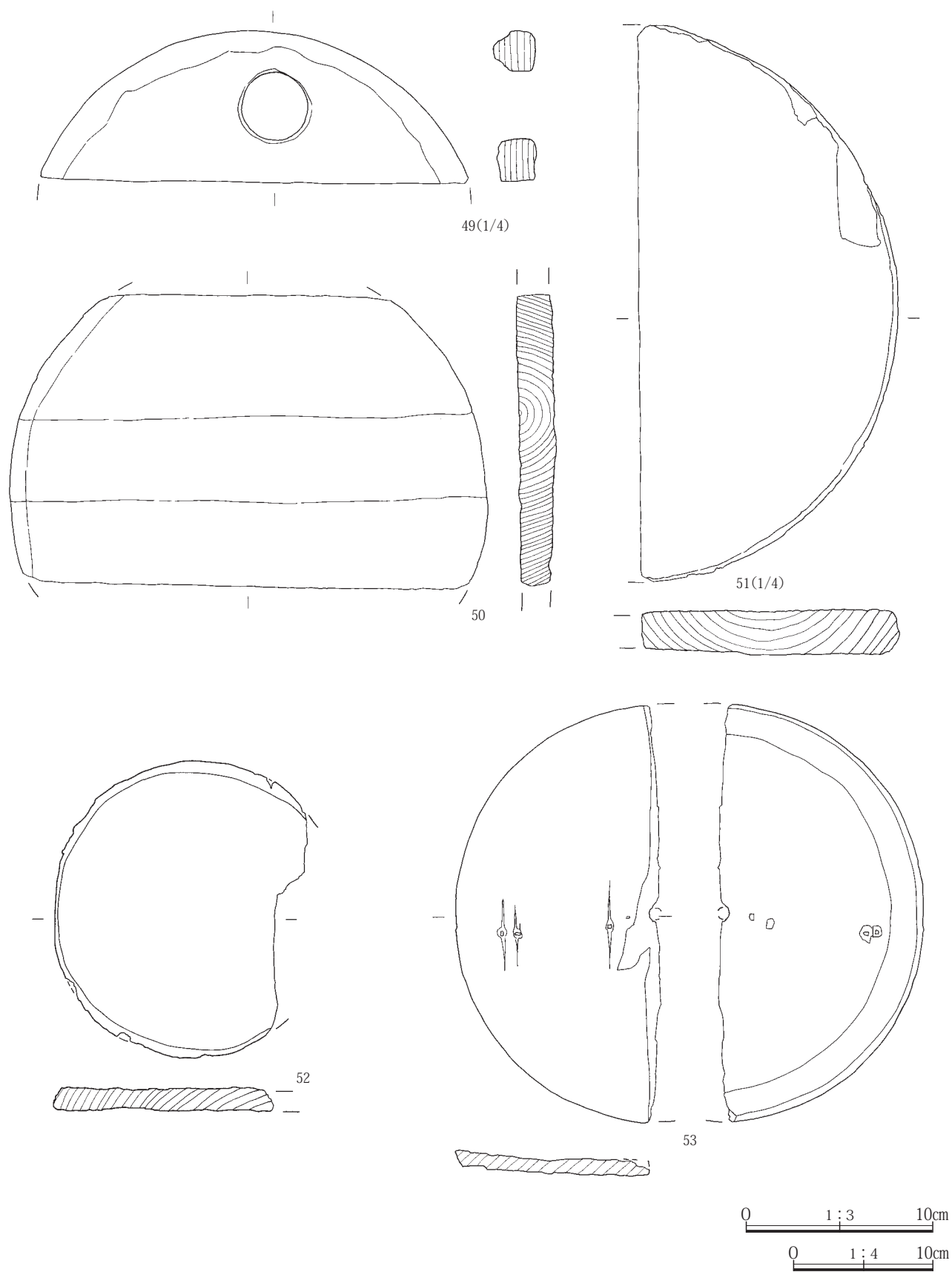
0 1:2 4cm

第40図 2区旧河道出土遺物(8)

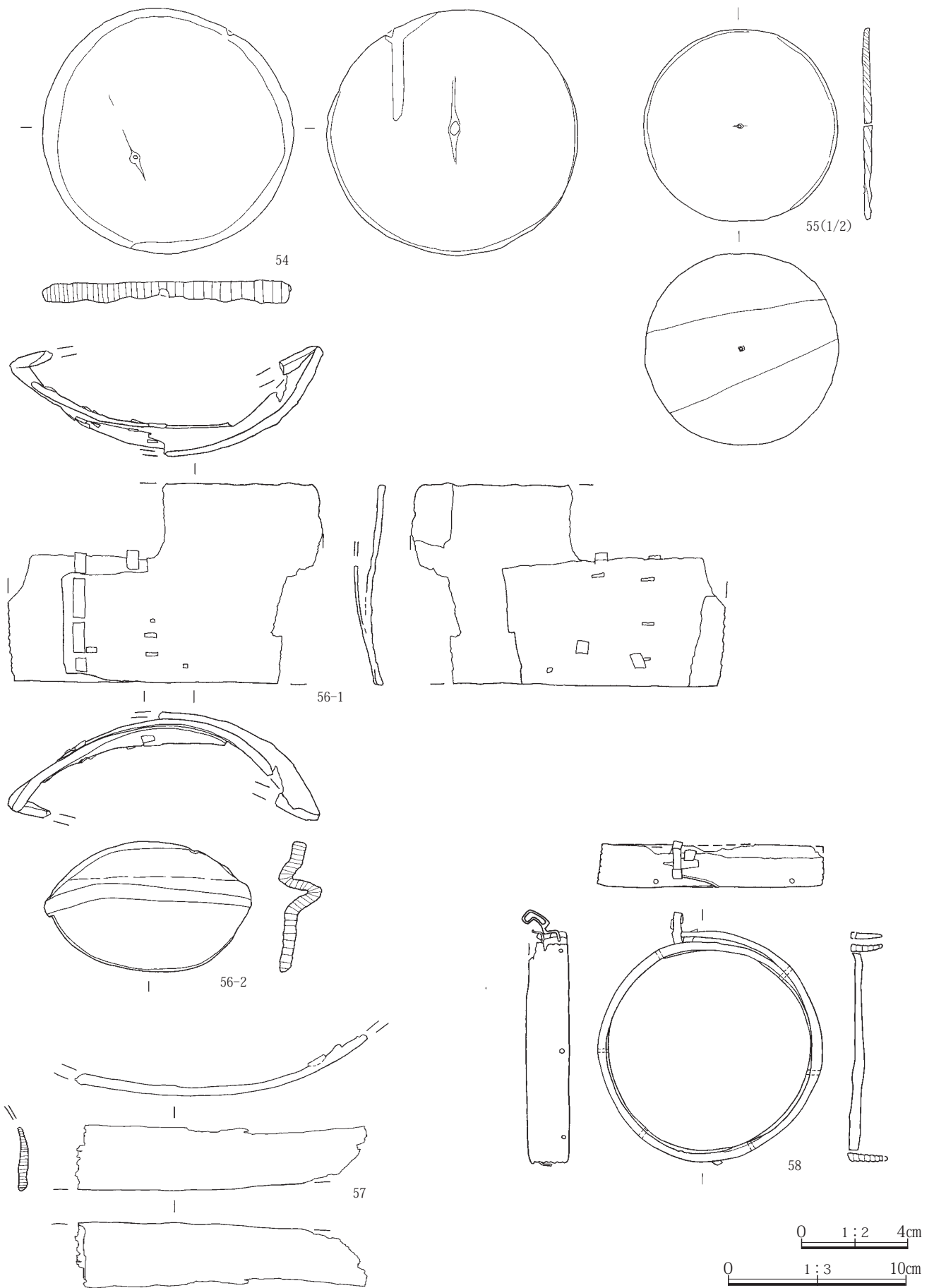




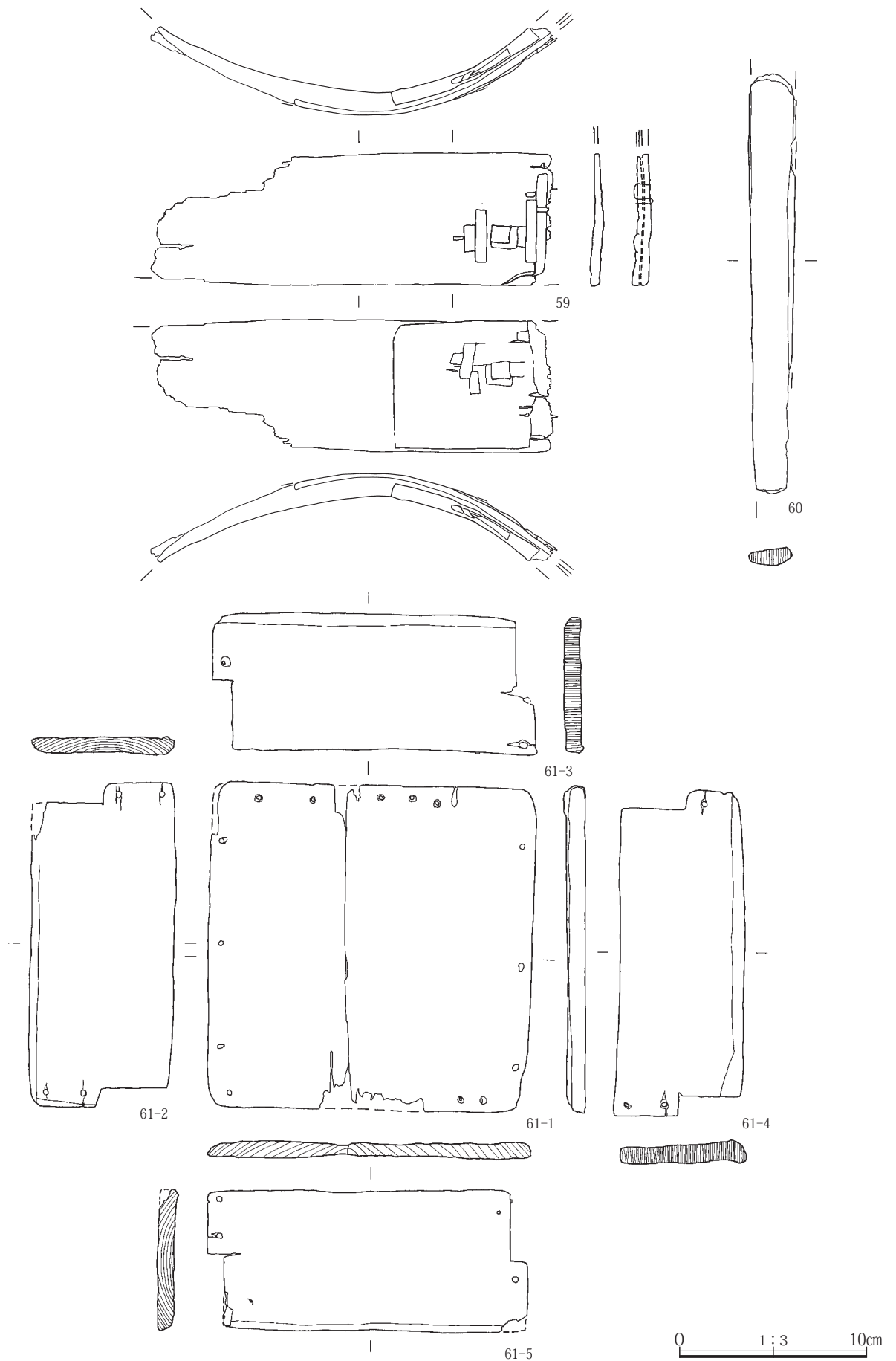
第41図 2区旧河道出土遺物(9)



第42図 2区旧河道出土遺物(10)

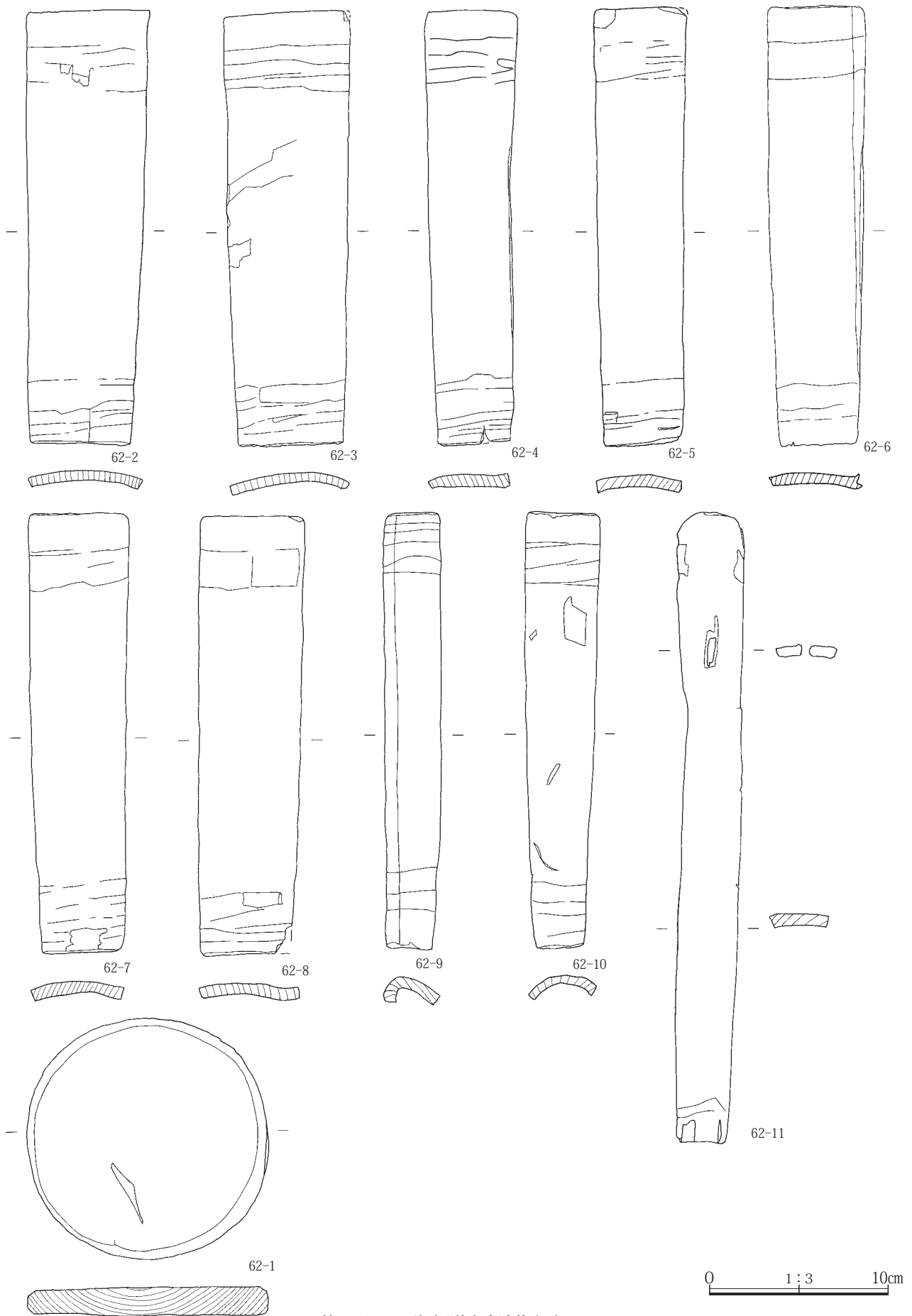


第43図 2区旧河道出土遺物(11)

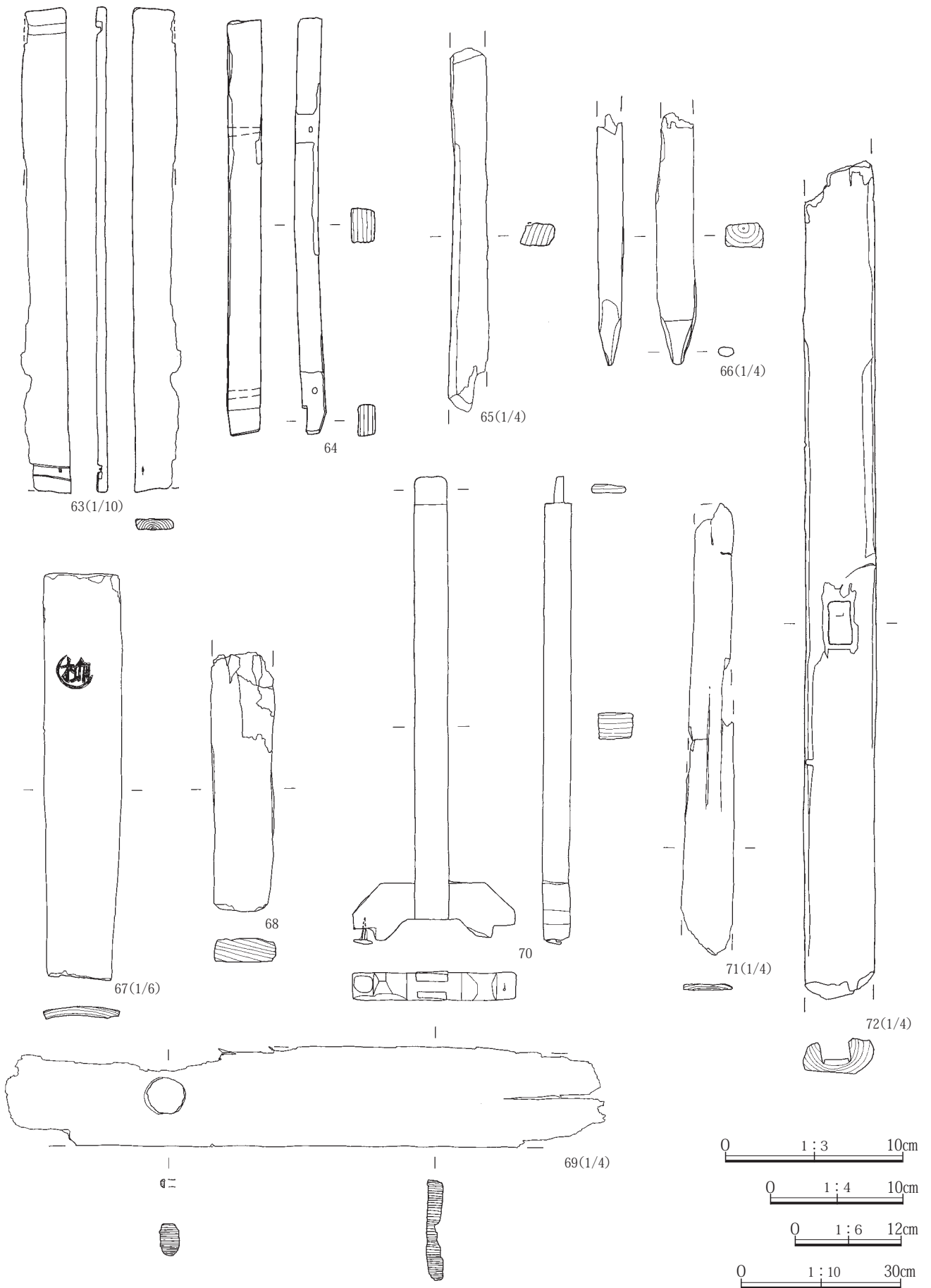


第44図 2区旧河道出土遺物(12)





第45図 2区旧河道出土遺物(13)



第46図 2区旧河道出土遺物(14)

(第34図19)、漆椀(第34図20～23、第35図24～30、第36図31)、杵(第44図61)、桶(第45図62)、桶側板(第46図67～69)、桶底(第42図51)、桶底か(第42図50)、蓋(第41図46・47)、曲物(第43図56～58、第44図59)、板(第44図60、第46図63)、蓋か底板(第42図52)、樽蓋(第41図48、第42図49)、杭(第46図66)、角材(第46図65)、加工材(第46図64)、角棒(第46図72)、下駄(第36図32・33、第37図34・35、第38図36・37、第39図38・39、第40図40～43)、不詳(第41図44・45、第42図53、第43図54・55)、不明(第46図70・71)の他、オニグルミ(PL.113-73～75)、クリ(PL.113-76・77)、モモ(PL.113-78)、マツ属(PL.113-79)の種実が埋没土から出土した。

非掲載遺物は、2区では近世の国産磁器24点、国産施釉陶器10点、近現代の陶磁器5点、土器類1点、瓦1点、ガラス1点、時期不詳の土器類7点の他、砥石2点、石盤1点、3区では天明泥流の上層の砂層から近現代の陶

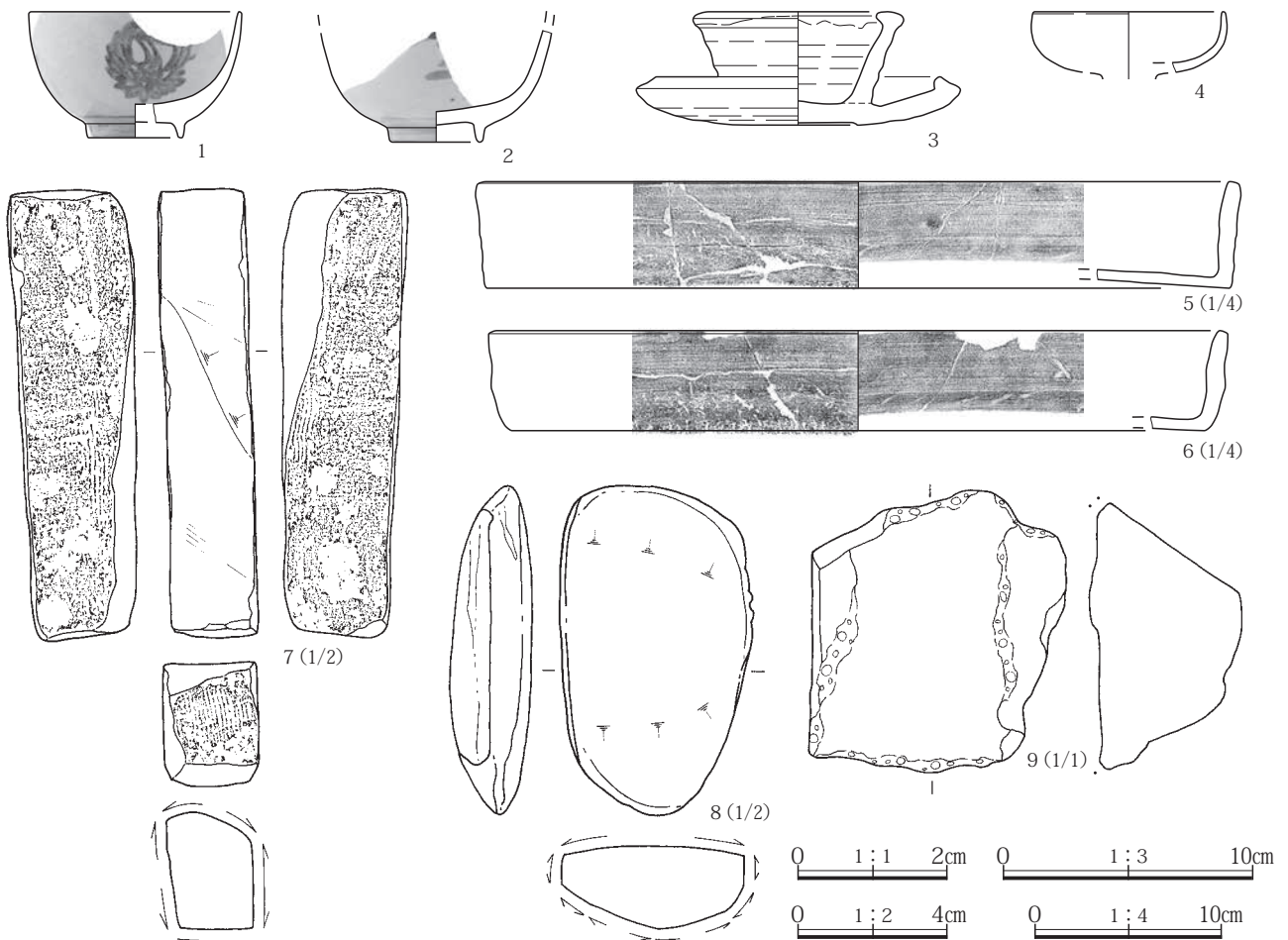
磁器1点が出土した。2区では木製品90点、種実1点が出土した。

河床まで掘削できず時期を特定できないが、中世から近世と想定される。

### 5 遺構外の出土遺物(第47図 PL.114)

2区第1面では、表土掘削や遺構確認中に、遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、肥前磁器染付椀(第47図1・2)、瀬戸・美濃陶器仏飯器(第47図4)、在地系土器焙烙(第47図5・6)、砥石(第47図8)が攪乱から出土し、瀬戸・美濃陶器灯火受台(第47図3)、砥石(第47図7)、火打石(第47図9)が遺構確認面から出土した。非掲載遺物は、中世磁器1点、近世国産磁器4点、近現代の陶磁器7点、土器類2点、ガラス1点、時期不詳の土器類3点の他、木製品椀1点、木製品棒状品1点が出土した。



第47図 2区遺構外の出土遺物

## 第4節 3区の遺構と遺物

3区は2区東側に位置する調査区であり、東西方向の調査区と南北方向の調査区に分かれる。南北方向の調査区を3区拡張部として北側と南側に分けて発掘調査を行った。近世の遺構は、現表土耕作土の下層である基本土層第8a層上面を遺構確認面として第1面での発掘調査を実施した。調査区中央部から東側にかけて遺構の残存状況が良好である。当該時期の遺構は、自然災害からの復旧のために掘削された復旧溝群の他、畠、井戸、溝、集石、道を確認するとともに、調査区西端では旧河道の矢川左岸を確認した。旧河道の矢川は、2区で右岸を確認していることから、遺構図や出土遺物などは、すべて第3節に掲載した。

### 1 復旧溝群

3区第1面で復旧溝群として一つの単位として捉えることができたものは合わせて19ヶ所である。3区中央部から東側にかけて調査を行った。

#### 3区1号復旧溝群(第50図 PL.14)

**位置：**X=129～135、Y=-406～413 **形状：**溝状  
**確認条数：**10条 **規模：**7.22×4.96m **残存深度：**0.12～0.64m **条間隔：**0.21～0.46m **条方位：**N-8°-W **重複：**2号溝と重複し、遺構確認状況から1号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**在地系土器焙烙(第50図1復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品)の他、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器7点、在地系焙烙・鍋1点、時期不詳の土器類4点である。 **所見：**第1面中央部に位置し、1号道に近接する。東側で隣接する5・6号復旧溝群とは、規模や条方位が類似することから一連の復旧溝群として災害復旧のために掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、中央の2条の坑には小ピット条の窪みが認められ、各溝の掘削深度は、北端及び南端より中央部が約10～20cm低い。各溝の条方位や幅は、ほぼ同一であるが長さにはばらつきが認められ不揃いである。東端の坑が最も短く2.64mであり、西端の坑が最も長く4.98mを測る。埋没土は、As-Aを含む

褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

#### 3区2号復旧溝群(第50図 PL.14)

**位置：**X=135～140、Y=-399～405 **形状：**溝状  
**確認条数：**8条 **規模：**5.44×5.38m **残存深度：**0.07～0.44m **条間隔：**0.02～0.25m **条方位：**N-80°-E **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面中央部北端に位置し、全体の規模は不明であるが、調査区外となる北側に復旧溝がさらに広がると想定される。各溝の断面形状は台形を呈し、底面はほぼ平坦である。各溝の幅は、0.52～0.78mを測り、南端の坑の幅が0.36～0.44mとなり他と比べてやや狭い。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。南北方向と東西方向に走行する1号道に近接し、1号道の東西方向と2号復旧溝群の条方位がほぼ同一であることから、道によって区画された場所を災害復旧のために掘削している。出土遺物がなく、埋没土から掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

#### 3区3号復旧溝群(第50図 PL.14)

**位置：**X=135～138、Y=-391～396 **形状：**溝状  
**確認条数：**5条 **規模：**5.52×2.88m **残存深度：**0.03～0.44m **条間隔：**0.14～0.40m **条方位：**N-10°-W **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面北東部に位置し、全体の規模は不明であるが、調査区外となる北側に復旧溝がさらに広がると想定される。西側2.3mに位置する2号復旧溝群と隣接し、南北方向と東西方向に走行する1号道に近接する。1号道で区画された範囲を災害復旧のために掘削している。各溝の断面形状は腕形を呈する。各溝の条方位はほぼ同一であるが、幅は0.18～0.58mを測り、ややばらつきが認められ、東側の2条の坑については、別の単位の復旧溝となる可能性がある。第3層に天明泥流が認められる。埋没土は、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

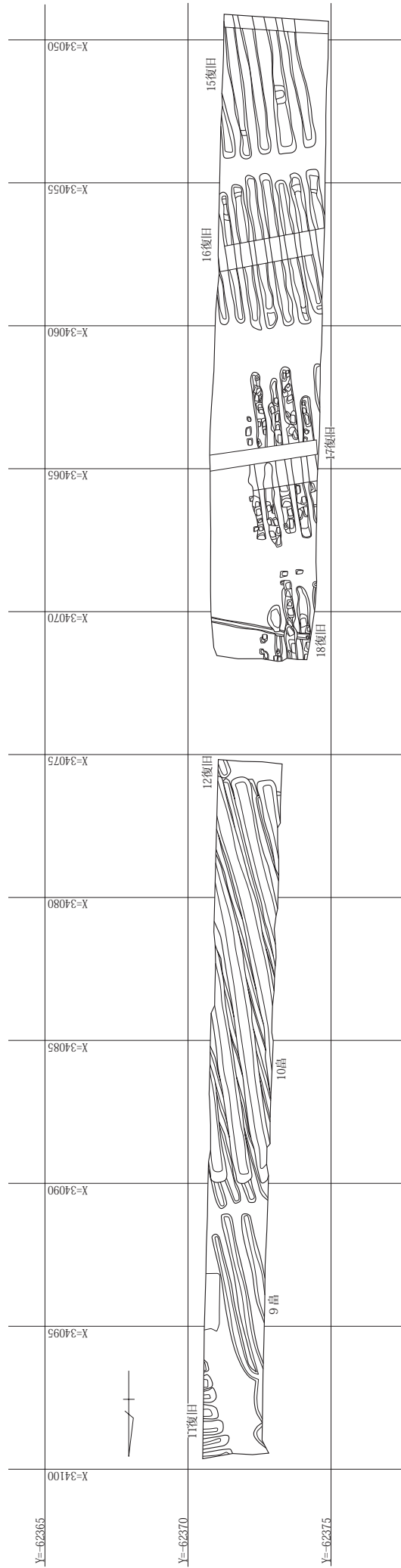
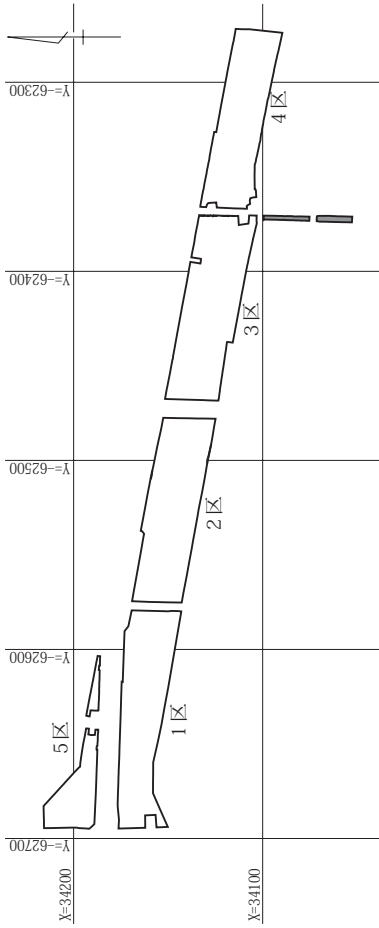
#### 3区4号復旧溝群(第50図 PL.14・15)

**位置：**X=128～133、Y=-397～402 **形状：**溝状  
**確認条数：**7条 **規模：**4.96×4.24m **残存深度：**0.16



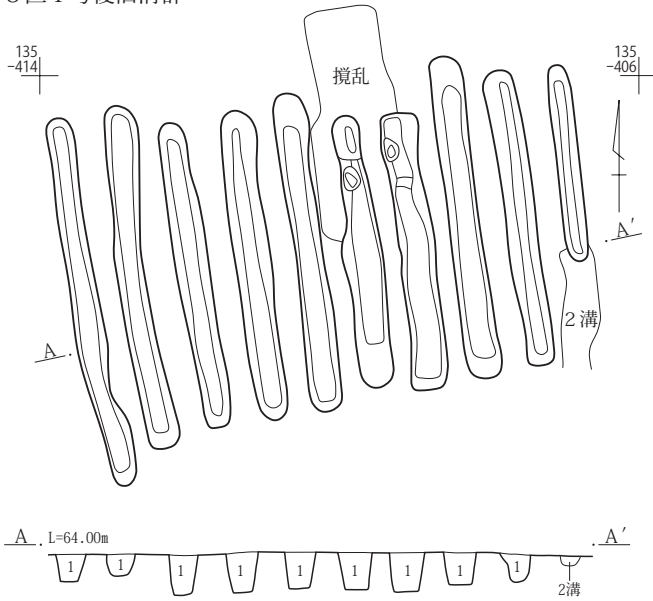


第48図 3区第1面(近世)全体図



第49図 3区第1面拵張部(近世)全体図

3区1号復旧溝群



1号復旧溝群A-A'

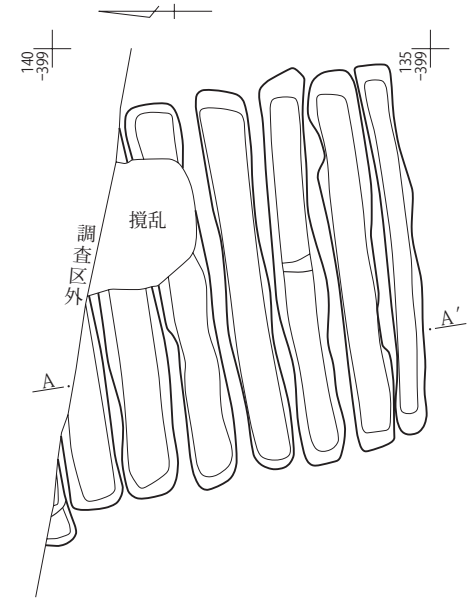
1. 褐灰色土 砂土、As-A少量



1復1 (1/4)

0 1:4 10cm

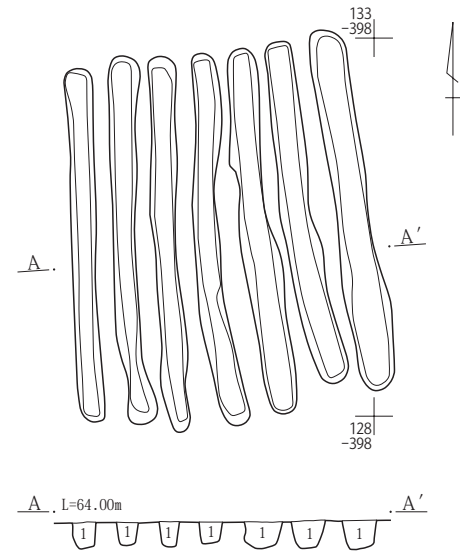
3区2号復旧溝群



2号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 砂土、As-A少量

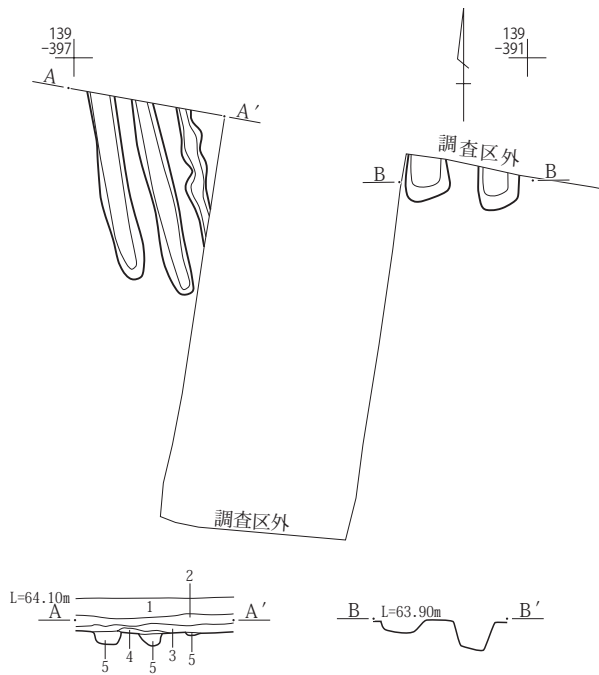
3区4号復旧溝群



4号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 砂土、As-A少量

3区3号復旧溝群



3号復旧溝群A-A'

1. 黒褐色土 表土、耕作土
2. 灰黄褐色土 砂質土、As-A少量
3. 黒褐色土 粘質土、小礫多量、天明泥流
4. にぶい黄褐色土 砂質土、復旧で天地返しした土か
5. 褐灰色土 砂土

0 1:100 5m

第50図 3区1号復旧溝群と出土遺物・2～4号復旧溝群

～0.45m 条間隔：0.10～0.40m 条方位：N-5°-W 重複：なし。遺物：非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器2点、時期不詳の土器類4点が埋没土から出土した。所見：第1面東部に位置し、1号道、5・7・19号復旧溝群と隣接する。各溝の断面形状は台形を呈し、底面はわずかな高低差であるが凹凸が認められる。各溝の幅は0.20～0.58mを測る。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。5号復旧溝群と規模、条方位、埋没土などが類似することから、一連の復旧溝群として災害復旧のために掘削された可能性が高い。出土遺物が少なく、埋没土から掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

3区5号復旧溝群(第51図 PL.15)

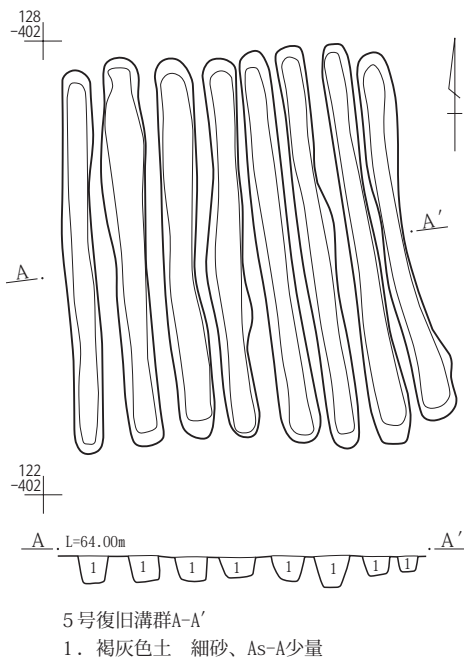
位置：X=122～127、Y=-396～401 形状：溝状 確認条数：8条 規模：5.36×5.12m 残存深度：0.12～0.50m 条間隔：0.07～0.33m 条方位：N-5°-W 重複：なし。遺物：非掲載遺物は、礫石器棒状礫1点が埋没土から出土した。所見：第1面東部に位置し、4・6・9・7・19号復旧溝群に隣接する。各溝の断面形状は台形を呈する。底面はわずかな高低差であるが凹凸が認められる。各溝の長さはほぼ等しく、直線の溝状に掘削し、幅は0.32～0.58mを測る。埋没土は、

As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。4号復旧溝群と規模、条方位、埋没土などが類似することから、一連の復旧溝群として災害復旧のために掘削された可能性が高い。出土遺物が少なく、埋没土から掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

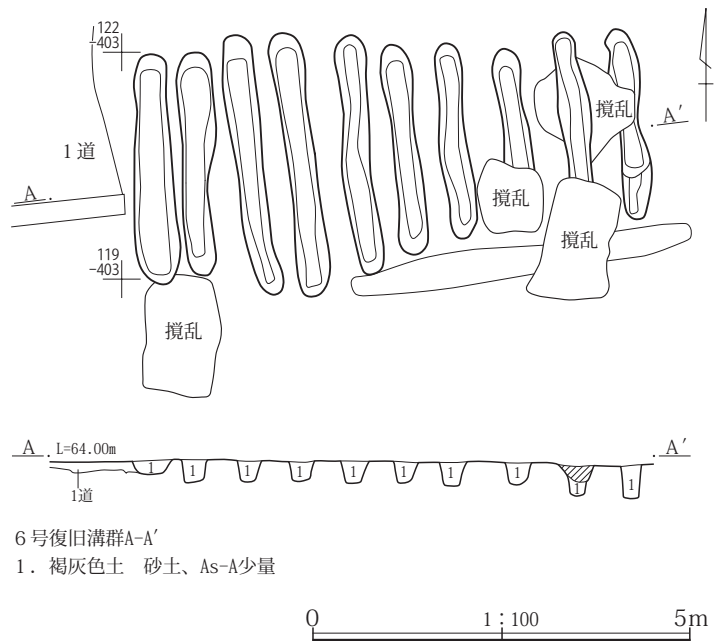
3区6号復旧溝群(第51図 PL.15)

位置：X=118～122、Y=-396～402 形状：溝状 確認条数：10条 規模：6.88×3.50m 残存深度：0.04～0.45m 条間隔：0.07～0.52m 条方位：N-8°-W 重複：なし。遺物：非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)の他、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器1点、在地系焙烙・鍋1点、時期不詳の土器類3点が埋没土から出土した。所見：1号道東側、5号復旧溝群南側に位置する。各溝の長さにはばらつきが認められ、2.52～3.50mを測る。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は中央部が平坦であり、北端や南端にわずかな高低差であるが凹凸が認められる。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。5号復旧溝群の埋没土と条方位がほぼ一致することから一連の復旧溝群とみられる。出土遺物が少なく、埋没土から掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

3区5号復旧溝群



3区6号復旧溝群



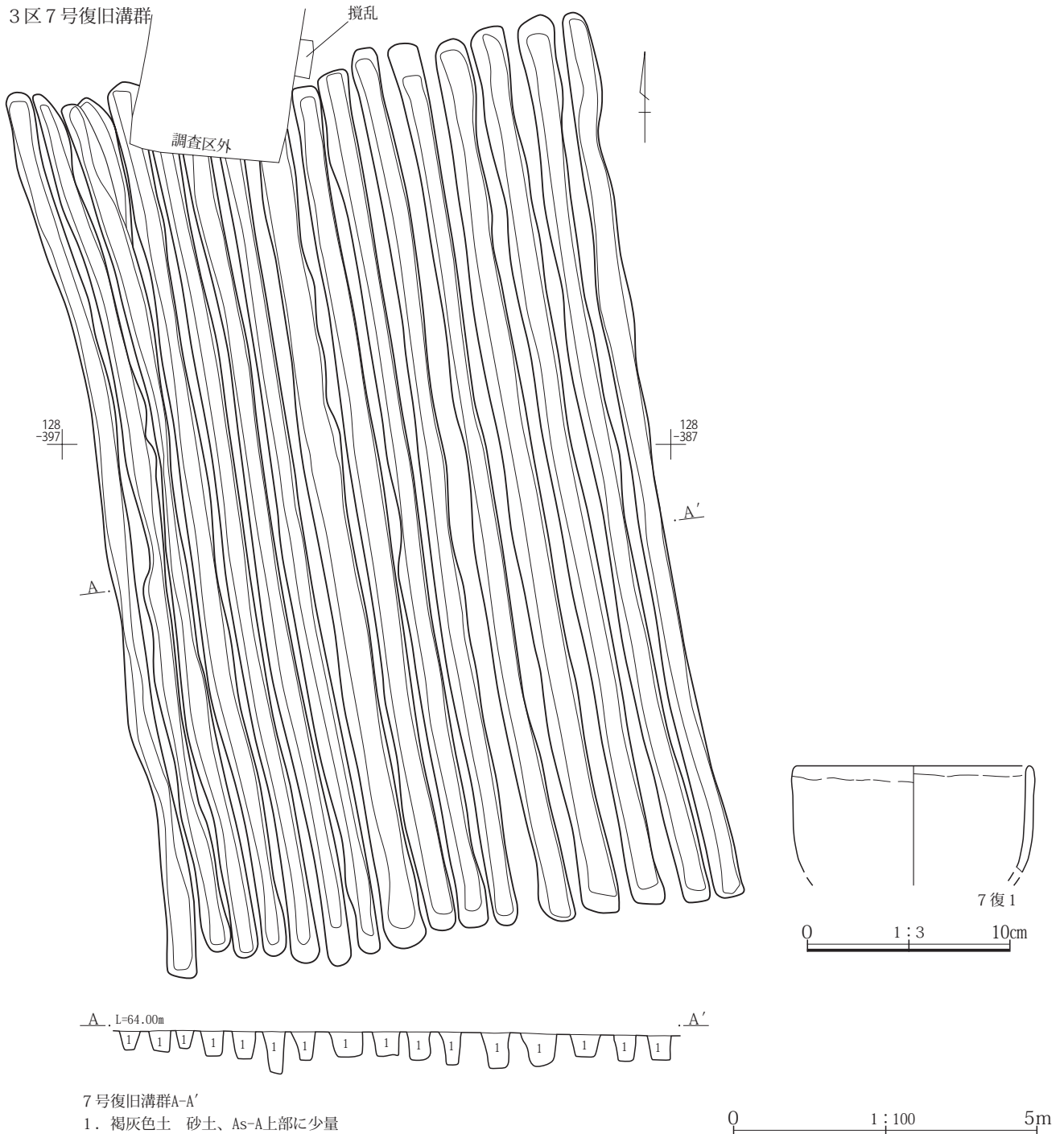
第51図 3区5・6号復旧溝群



3区7号復旧溝群(第52図 PL.15)

位置：X=119～135、Y=-385～397 形状：溝状  
 確認条数：16条 規模：14.84×9.72m 残存深度：0.12～0.59m 条間隔：0.02～0.34m 条方位：N-8°-W 重複：なし。 遺物：瀬戸・美濃陶器尾呂碗(第52図7復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器14点(大型製品13、小型製品1)の他、近世の国産施釉陶器7点である。 所見：第1面東側に位置する。西側

に4・5・6号復旧溝群、東側に8号復旧溝群、南側に10号復旧溝群が隣接する。北側では、東西方向に走行する1号道と近接し、道で区画された範囲を掘削している。南北方向に掘削された3区の復旧溝群の中では、坑の長さが最も長い。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は掘削深度にややばらつきがあり、わずかであるが凹凸が認められる。各溝の長さはほぼ等しく直線の溝状に掘削し、幅は0.24～0.66mを測る。埋没土は、As-Aを含む



第52図 3区7号復旧溝群と出土遺物

溝灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区8号復旧溝群(第53図 PL.15・114)

**位置：**X=103～135、Y=-371～388 **形状：**溝状  
**確認条数：**48条 **規模：**32.65×10.92m **残存深度：**0.01～0.84m **条間隔：**0.00～0.57m **条方位：**N-80°-E **重複：**3号畠と重複し、遺構確認状況から8号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**土師器杯(第53図8復1)、肥前陶器青緑釉皿(第53図8復2)、火打石(第53図8復3)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器107点(大型製品105、中型製品1、小型製品1)、須恵器13点(大型製品6、小型製品7)、灰釉陶器1点(小型製品)の他、灰釉陶器瓶類1点、近世の国産磁器3点、国産施釉陶器17点、国産焼締陶器1点である。 **所見：**第1面東部に位置する。西側に7・10号復旧溝群、東側に9・13号復旧溝群、南側に22号溝と11号復旧溝群が隣接する。北側では、東西方向に走行する1号道の南側に近接し、1号道で区画された範囲を掘削している。各溝の断面形状は、底面までの掘削深度にばらつきがあり、わずかであるが凹凸が認められる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。各溝の長さや幅はほぼ均等であり、3区では条数が最も多い復旧溝群である。埋没土は、As-Aを含む灰黄褐色土、As-Aと暗褐色砂質土塊を含む灰黄褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区9号復旧溝群(第54図 PL.15)

**位置：**X=122～135、Y=-370～378 **形状：**溝状  
**確認条数：**15条 **規模：**13.40×7.88 m **残存深度：**0.03～0.84m **条間隔：**0.03～0.36 m **条方位：**N-75°-E **重複：**3号畠と重複し、遺構確認状況から9号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**瀬戸・美濃陶器碗(第54図9復1)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器7点、在地系焙烙・鍋2点、在地系皿1点、時期不詳の土器類7点である。 **所見：**第1面北東部に位置し、東側及び北側の調査区外にさらに広がると想定される。西側に隣接する8号復旧溝群と規模や条方位が類似することなどから、一連の復旧溝群として掘削されたと考えられる。3区東側の調査区である4区

では、4区3号復旧溝群を確認した。調査区を便宜的に分けて発掘調査を行っているが、条方位が類似することから同一の復旧溝群の可能性はある。各溝の断面形状は浅い椀形、台形、長方形などを呈する。底面までの掘削深度にばらつきがあり、わずかであるが凹凸が認められる。各溝の幅は0.36～1.00mを測る。埋没土は、As-Aを含む灰黄褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区10号復旧溝群(第55図 PL.16・114)

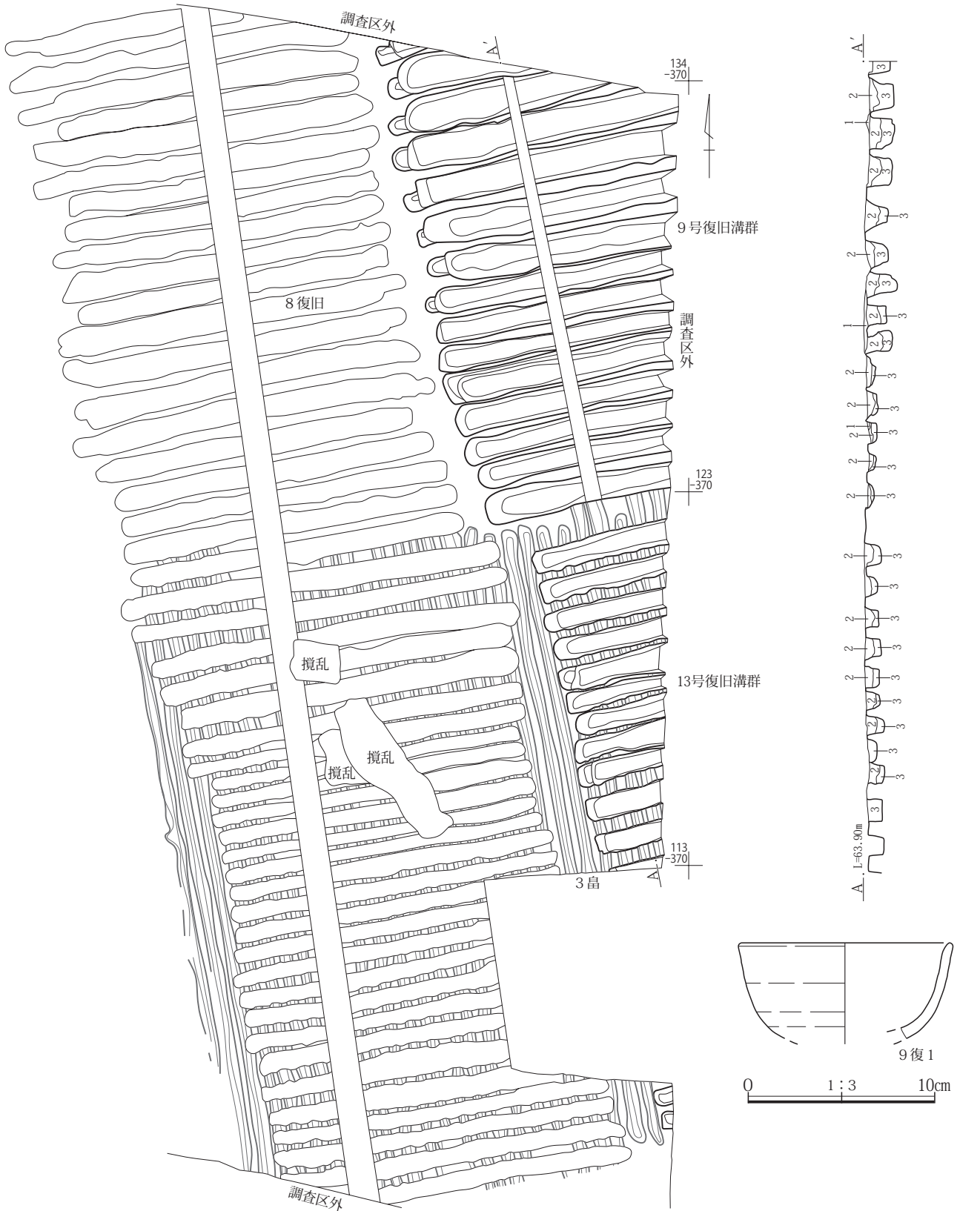
**位置：**X=104～120、Y=-382～393 **形状：**溝状  
**確認条数：**20条 **規模：**15.64×8.66m **残存深度：**0.01～0.76m **条間隔：**0.06～0.65m **条方位：**N-80°-E **重複：**3・4号畠と重複し、遺構確認状況から10号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**瀬戸・美濃陶器皿(第55図10復1)、砥石(第55図10復2)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器56点(大型製品53、小型製品3)、須恵器10点(大型製品7、小型製品3)、灰釉陶器2点(小型製品)の他、灰釉陶器碗・皿1点、近世の国産磁器4点、国産施釉陶器16点、在地系焙烙・鍋4点、時期不詳の土器類4点である。 **所見：**第1面東部に位置する。北側で7号復旧溝群、東側で8号復旧溝群、西側で14号復旧溝群が隣接する。調査区外となる南側にさらに広がると想定される。8号復旧溝群とは、規模や条方位が類似することなどから、一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。各溝の断面形状は底面がほぼ平坦で、掘削深度にややばらつきがあり、西端や東端には段差が認められる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、As-Aを含む灰黄褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区11号復旧溝群(第56図 PL.16)

**位置：**X=096～099、Y=-370・371 **形状：**溝状 **確認条数：**8条 **規模：**3.46×1.08m **残存深度：**0.08～0.45m **条間隔：**0.04～0.13m **条方位：**N-85°-E **重複：**なし。 **遺物：**非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器2点、時期不詳の土器類1点が埋没土から出土した。 **所見：**第1面南側の拡張部に位置



3区9・13号復旧溝群



9号・13号復旧溝群A-A'

1. 暗褐色土 砂質土 締まりあり
2. 灰黄褐色土 砂土、As-A少量
3. 灰黄褐色土 砂土、As-A第2層より少ない

0 1:150 5m

第54図 3区9・13号復旧溝群と出土遺物





し、北側及び東側が調査区外となるため一部のみの確認である。西側の9号畠と隣接する。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は平坦であるが、掘削深度にややばらつきが認められる。埋没土は、As-Aを含む灰黄褐色砂質土や暗褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区12号復旧溝群(第56図 PL.16)

**位置：**X=075～090、Y=-370～373 **形状：**溝状  
**確認条数：**6条 **規模：**14.36×4.14m **残存深度：**0.03～0.59m **条間隔：**0.12～0.38m **条方位：**N-8°-W **重複：**10号畠と重複し、遺構確認状況から12号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**非掲載遺物は、中世の在り系鉢・鍋1点、近世の国産施釉陶器2点が埋没土から出土した。 **所見：**1面南側の拡張部に位置する。東側及び西側が調査区外となるため一部のみの確認である。各溝の断面形状は台形を呈する。底面には僅かな高低差が認められるが、ほぼ平坦である。埋没土は、As-Aの混入が認められず、暗褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

### 3区13号復旧溝群(第54図 PL.16)

**位置：**X=106～122、Y=-370～374 **形状：**溝状  
**確認条数：**14条 **規模：**9.14×4.18m **残存深度：**0.07～0.53m **条間隔：**0.02～0.43m **条方位：**N-80°-E **重複：**3号畠と重複し、遺構確認状況から13号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面東端部に位置する。東側が調査区外となるため一部のみの確認である。北側に隣接する9号復旧溝群とは西端が揃わないため、別の単位の復旧溝群とした。西側に隣接する8号復旧溝群と規模や条方位が類似することなどから、一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。断面形状は台形や長方形を呈する。各溝の掘削深度にばらつきが認められる。埋没土は、As-Aを含む灰黄褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく埋没土から掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区14号復旧溝群(第57図 PL.16)

**位置：**X=108～117、Y=-392～401 **形状：**溝状  
**確認条数：**13条 **規模：**9.96×8.46m **残存深度：**0.07～0.68m **条間隔：**0.00～0.29m **条方位：**N-80°-E **重複：**4号畠と重複し、遺構確認状況から14号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**須恵器杯(第57図14復1)、瀬戸・美濃陶器尾呂碗か(第57図14復2)、瀬戸・美濃陶器碗(第57図14復3)が埋没土から出土した。須恵器杯は流れ込みによる混入と考えられる。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器12点、国産焼締陶器2点、在り系焙烙・鍋5点、時期不詳の土器類5点である。 **所見：**第1面東部に位置する。東側で10号復旧溝群と隣接する。北側に掘削された3条の坑が、他の10条と比べて短く、北端が最も短く6.06mである。各溝の断面形状は台形を呈する。底面に僅かであるが凹凸が認められ、南側に掘削された4条の坑が他と比べてやや浅い。埋没土は、As-Aを含む褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 3区15号復旧溝群(第58図 PL.16・17)

**位置：**X=049～054、Y=-371～374 **形状：**溝状  
**確認条数：**5条 **規模：**5.24×3.32m **残存深度：**0.10～0.74m **条間隔：**0.18～0.47m **条方位：**N-8°-W **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面南側の拡張部最南端に位置する。東側及び南側が調査区外となるため一部のみの確認であり、全体の規模は不明である。北側の16号復旧溝群と隣接し、条方位が類似することから一連の復旧溝群として同時期に掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形を呈する。底面に僅かな高低差が認められるが、ほぼ平坦である。埋没土は人為的な埋戻しと考えられるが、As-Aの混入は不明である。出土遺物がなく、掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

### 3区16号復旧溝群(第58図 PL.16・17)

**位置：**X=054～060、Y=-371～374 **形状：**溝状  
**確認条数：**8条 **規模：**5.38×4.06m **残存深度：**0.10～0.36m **条間隔：**0.06～0.28m **条方位：**N-10°-W **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面南側の

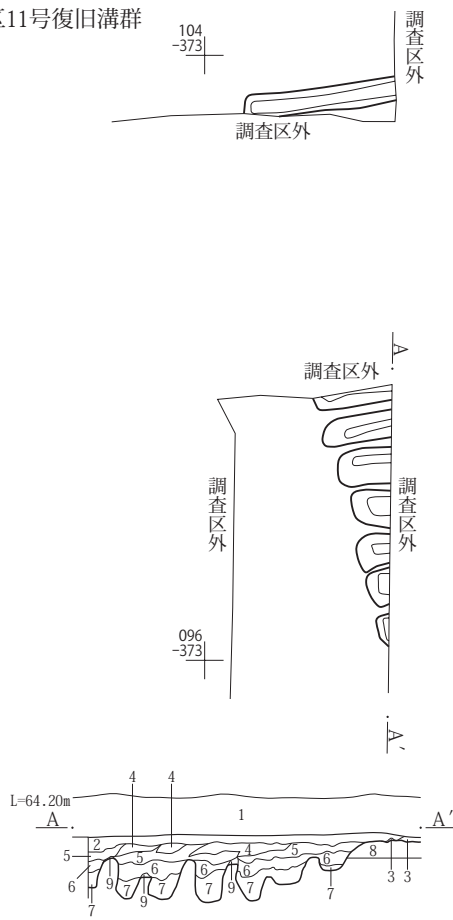
拡張部に位置する。東側及び西側が調査区外となるため一部のみの確認であり、全体の規模は不明である。北側の17号復旧溝群や南側の15号復旧溝群と隣接し、条方位が類似することから一連の復旧溝群として同時期に掘削された可能性がある。断面形状は台形を呈する。底面に僅かであるが凹凸が認められるが、ほぼ平坦である。埋没土は、灰褐色粘質土塊を含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aが混入するかは不明である。出土遺物がなく、掘削時期は近世と考えられるが、As-A

降下以前か以降かは特定できず不明である。

3区17号復旧溝群(第59図 PL.16・17)

位置：X=061～067、Y=-372～374 形状：溝状  
 確認条数：6条 規模：6.16×2.46m 残存深度：0.01～0.17m 条間隔：0.12～0.38m 条方位：N-8°-W 重複：なし。 遺物：なし。 所見：第1面南側の拡張部に位置する。調査区外となる西側にさらに広がると想定される。北側の18号復旧溝群や南側の16号復旧溝

3区11号復旧溝群



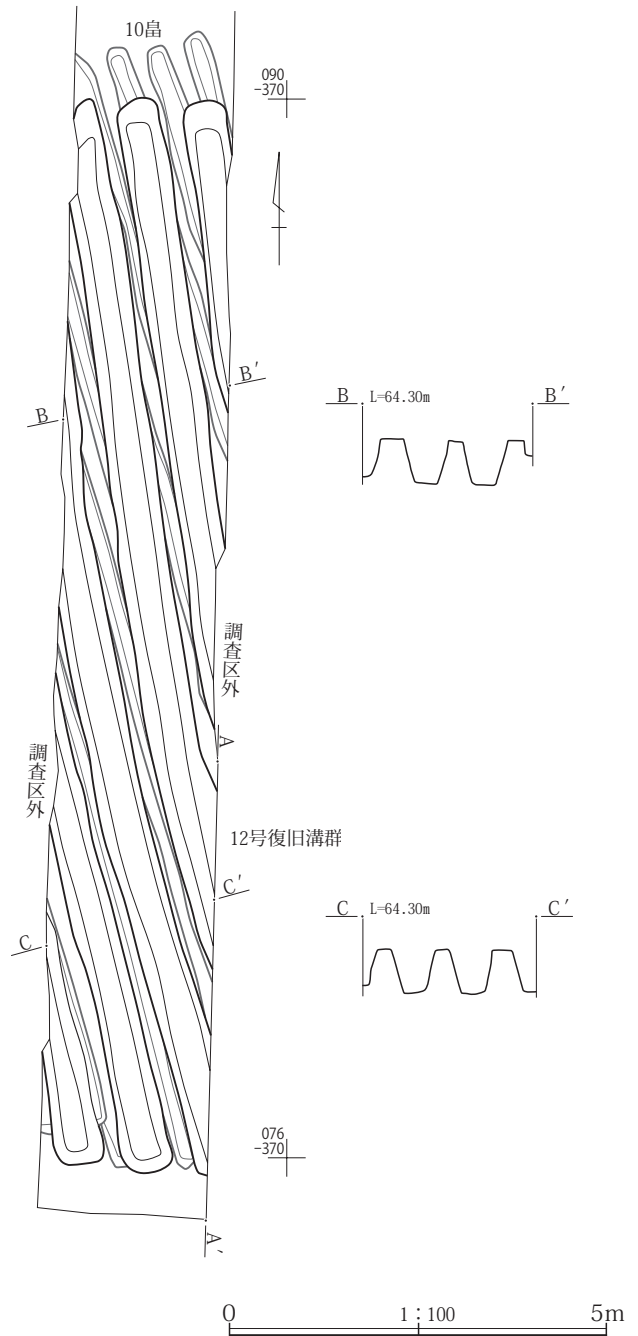
11号復旧溝群A-A'

1. 暗褐色土 表土、耕作土
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-Aを含む
3. As-A 2次堆積
4. 暗褐色土 砂質土、第9層に近似
5. 灰黄褐色土 砂土、灰黄褐色土塊、As-A少量
6. 灰黄褐色土 砂土、As-A多量
7. 灰黄褐色土 砂土、As-A少量
8. 灰黄褐色土 砂質土
9. 灰黄褐色土 砂土、細砂粒
10. 灰黄褐色土 やや粘質

12号復旧溝群A-A'

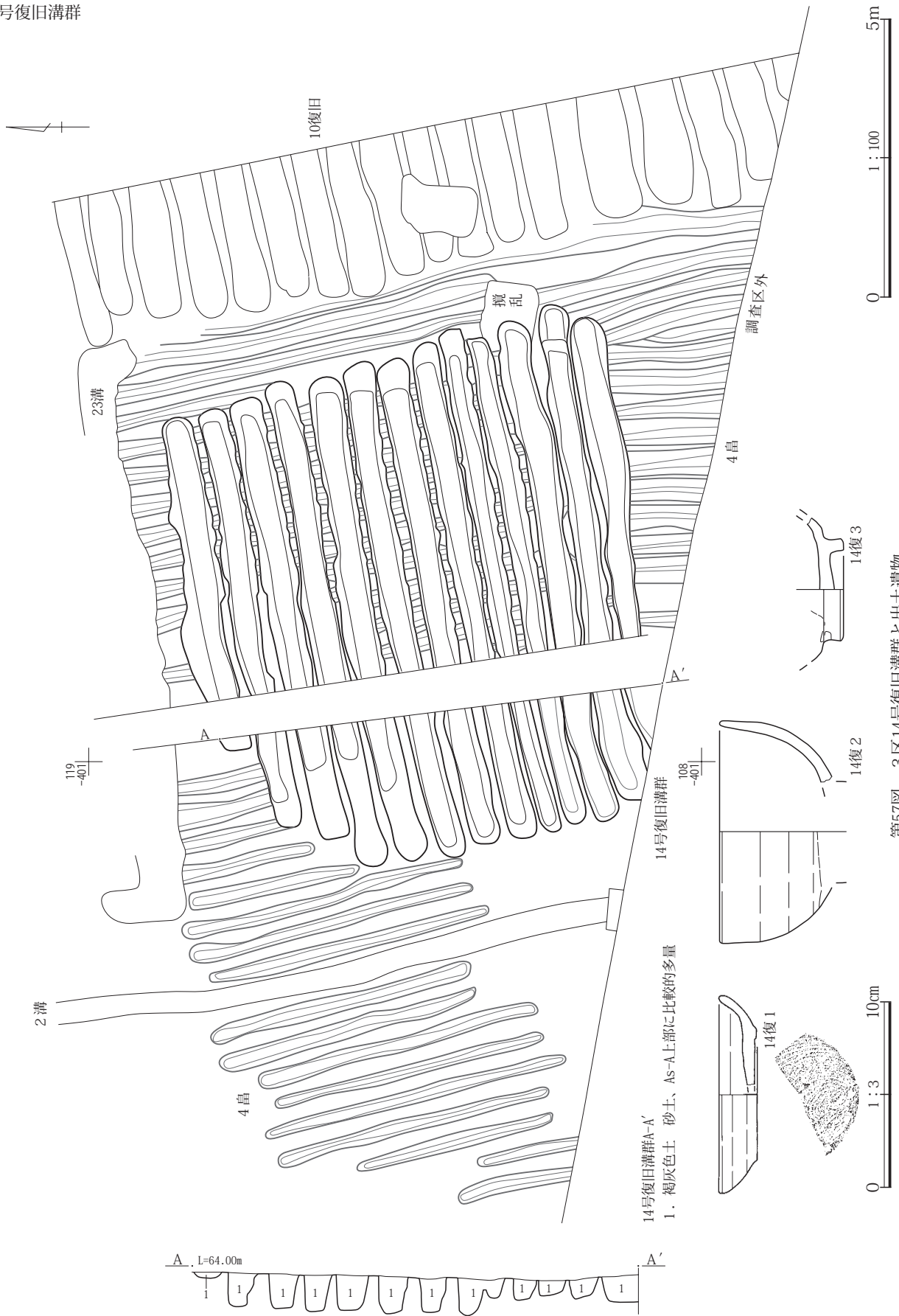
1. 暗褐色土 表土、耕作土
2. にぶい黄褐色土 砂質土、酸化鉄分あり
3. 暗褐色土 砂質土
4. 暗褐色土 細砂、色味は第3層より暗い

3区12号復旧溝群



第56図 3区11・12号復旧溝群

3区14号復旧溝群



第57図 3区14号復旧溝群と出土遺物



群と隣接し、条方位が類似することから一連の復旧溝群として同時期に掘削された可能性がある。上面は削平され底面付近の一部が残存する。各溝の長さは不揃いで、断面形状は浅い台形を呈する。底面に掘削痕が認められるため掘削深度も不揃いである。埋没土は、にぶい黄橙色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aが混入するかは不明である。出土遺物がなく、掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

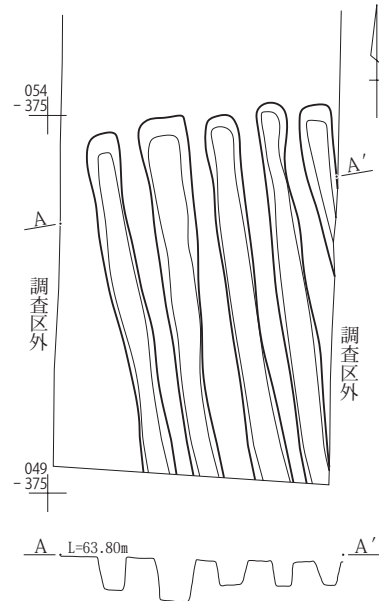
**3区18号復旧溝群**(第59図 PL.16)

**位置:** X=068 ~ 071、Y=-372 ~ 374 **形状:** 溝状  
**確認条数:** 5条 **規模:** 3.14×2.36m **残存深度:** 0.02 ~ 0.12m **条間隔:** 0.07 ~ 0.27m **条方位:** N-3°-W **重複:** なし。 **遺物:** なし。 **所見:** 第1面南側の拡張部に位置する。北側及び西側にさらに広がると想定される。南側の17号復旧溝群と隣接し、条方位が類似することから一連の復旧溝群として同時期に掘削された可能性がある。上面は削平され底面付近の一部が残存する。各溝の長さは不揃いで残存状況は良好ではない。底面に掘削痕が認められる。出土遺物はなく、掘削時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

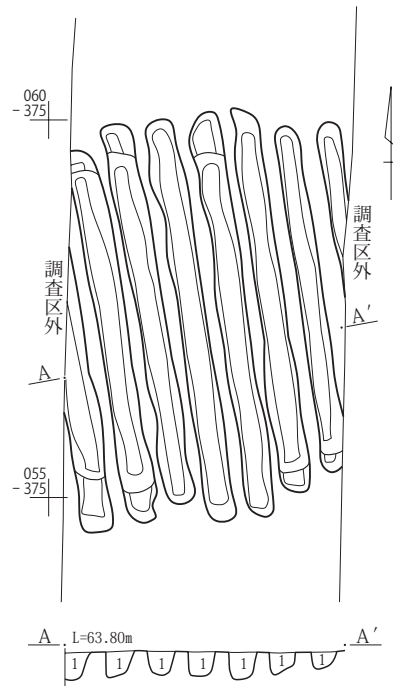
**3区19号復旧溝群**(第59図 PL.15)

**位置:** X=122 ~ 132、Y=-401 ~ 404 **形状:** 溝状  
**確認条数:** 3条 **規模:** 9.92×1.54m **残存深度:** 0.10 ~ 0.44m **条間隔:** 0.08 ~ 0.33m **条方位:** N-5°-W **重複:** 1号道と重複し、遺構確認状況から19号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物:** なし。 **所見:** 第1面東部に位置する。東側で4・5号復旧溝群と隣接する。19号復旧溝群の長さは、4号復旧溝群と5号復旧溝群の坑の長さを合わせるとほぼ同一となる。東側から西側にかけて坑が長くなり、隣接することから一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形を呈し、底面はほぼ平坦であるが、掘削深度は中央の坑がやや浅い。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物はなく、埋没土から掘削時期はAs-A降下以降と考えられる。

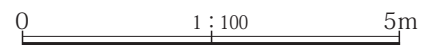
3区15号復旧溝群



3区16号復旧溝群

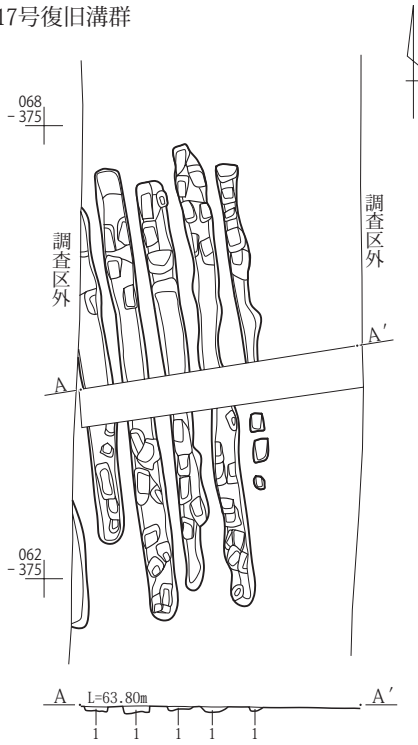


16号復旧溝群A-A'  
 1. 褐灰色土 細砂、灰褐色粘質土を含む



第58図 3区15・16号復旧溝群

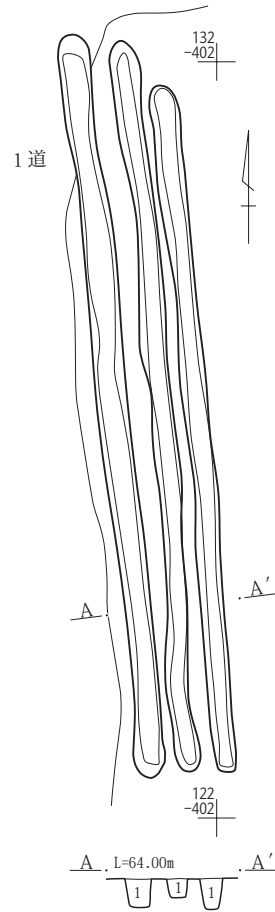
3区17号復旧溝群



17号復旧溝群A-A'

1. にぶい黄橙色土 砂質土

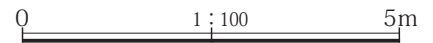
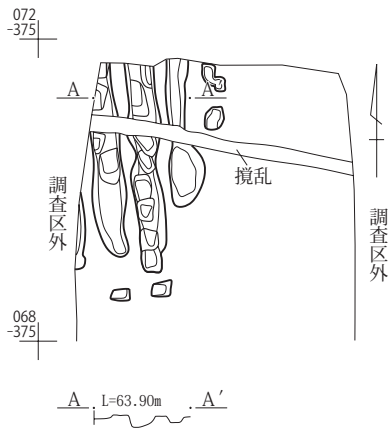
3区19号復旧溝群



19号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 As-A少量

3区18号復旧溝群



第59図 3区17～19号復旧溝群

## 2 畠

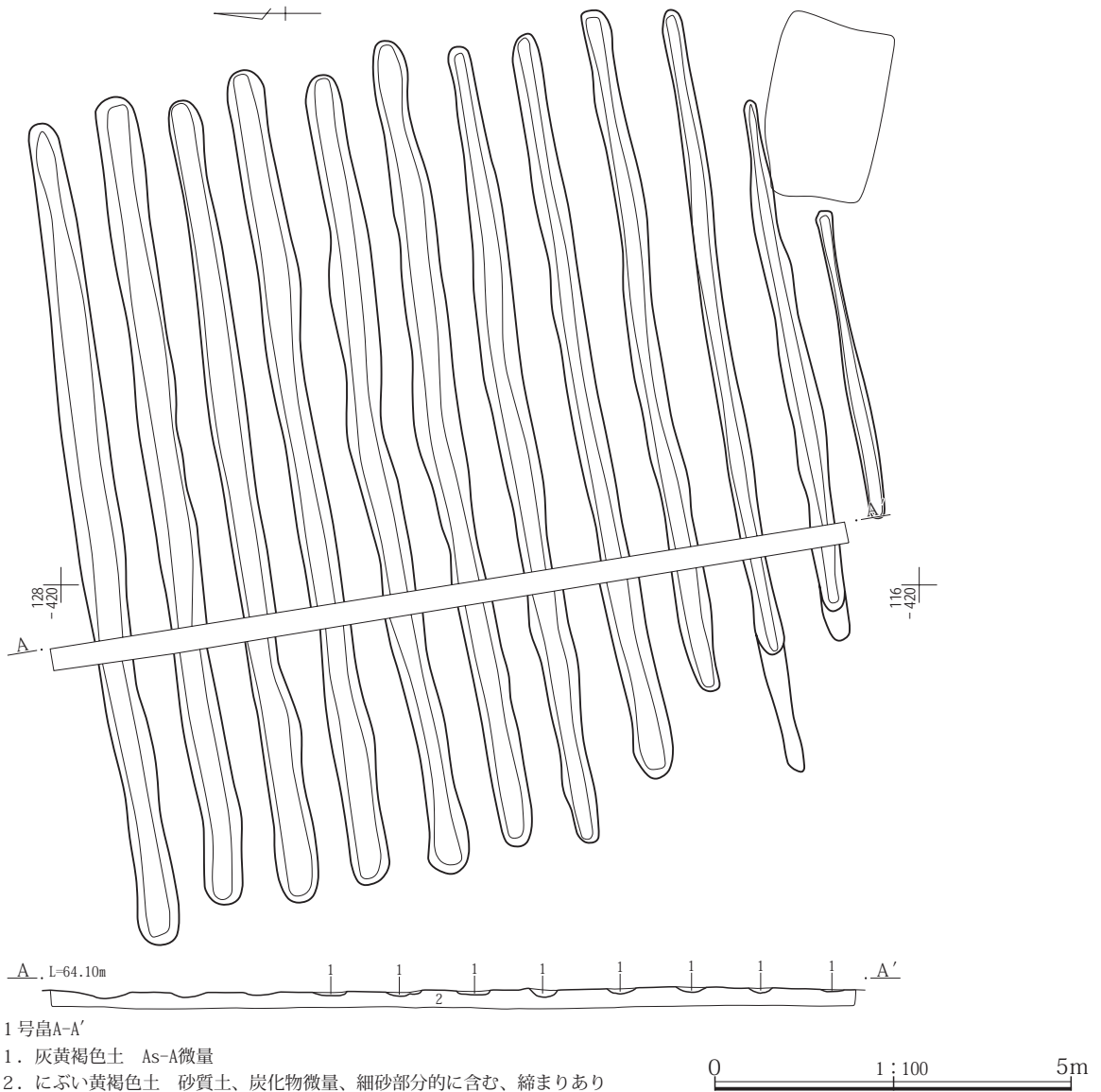
3区第1面で確認することができた近世の畠は、10ヶ所である。畠に関連する畝やサク、耕作痕などを基に一つの単位として捉え、それぞれの畠に付番して調査を行った。畠は3区中央部から東部に位置し、自然災害から復旧するために掘削された復旧溝群と重複する畠もある。遺構確認面が表土耕作土の直下であるため、畠上面の大半を後世の削平によって遺失し、一部のみの確認となった。

### 3区1号畠(第60図 PL.17)

位置：X=116～128、Y=-412～425 サク数：12条

規模：12.31×11.28m 畝高さ：0.01～0.13m 畝幅：0.14～0.64m サク間隔：0.37～0.77m 畝方位：N-80°-E 重複：なし。遺物：非掲載遺物は、近世の国産磁器2点、国産施釉陶器2点、在地系焙烙・鍋2点、時期不詳の土器類3点が埋没土から出土した。所見：第1面中央部に位置する。後世の削平によって畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではないが、東西方向に連続するサクが残存する。北端から南側の7条のサクは約11mとなり、ほぼ同じ長さを測るが、南側にかけて徐々に短くなり南端のサクが最も短く4.36mである。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、As-Aを僅かに含む灰黄褐色砂質土によって埋没する。埋没土から時期は、As-A降下以前と考えられる。

3区1号畠



第60図 3区1号畠

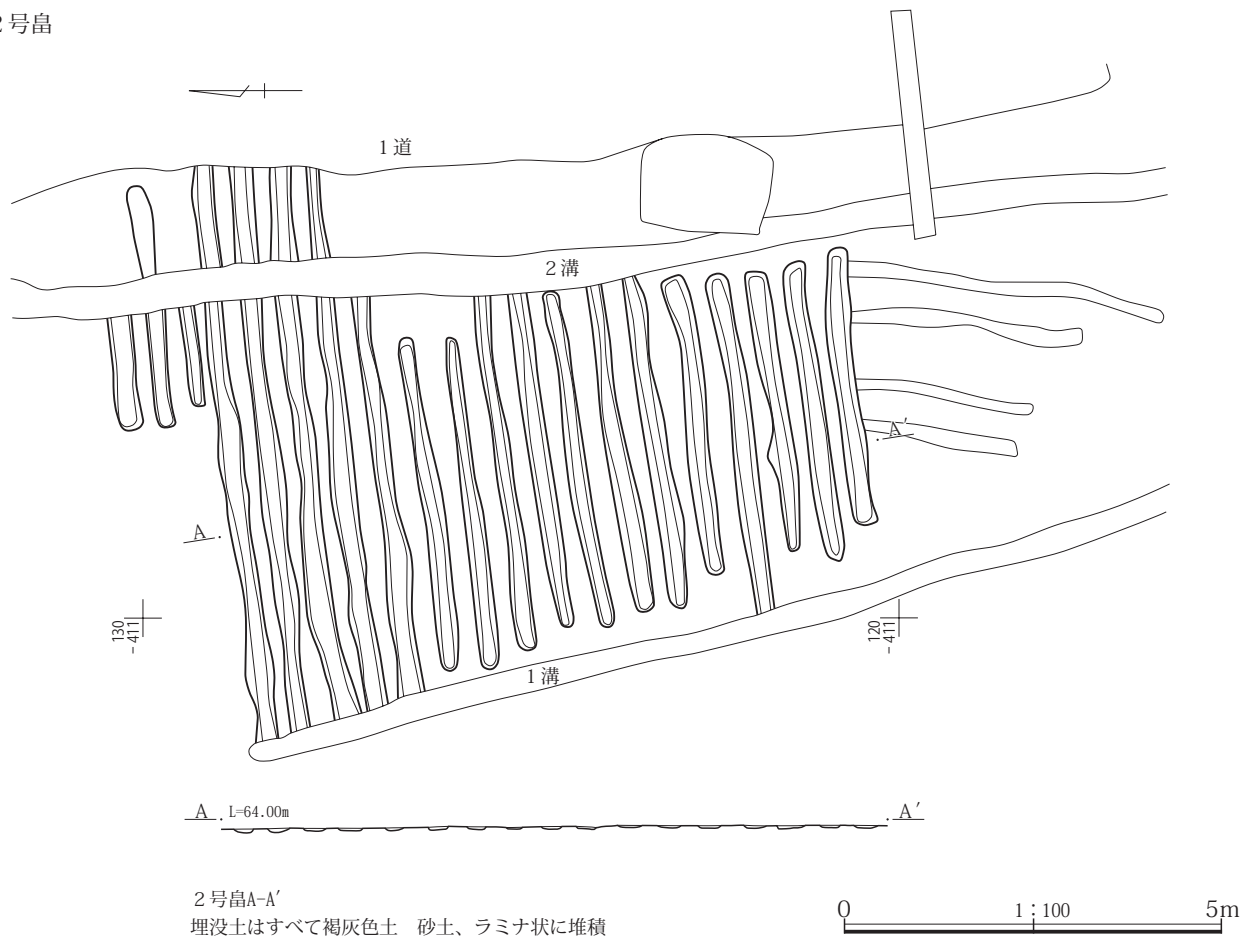
3区2号畠(第61図 PL.17)

位置：X=120～130、Y=-405～412 サク数：20条  
 規模：9.83×(7.62)m 畝高さ：0.01～0.07m 畝幅：  
 0.17～0.37m サク間隔：0.08～0.43m 畝方位：  
 N-81°-E 重複：1・2号溝、1号道と重複し、遺構  
 確認状況から2号畠が古いと考えられる。遺物：非掲  
 載遺物は、近世の国産施釉陶器3点、時期不詳の土器類  
 3点が埋没土から出土した。所見：第1面中央部に位  
 置する。南北に走行する1号溝によって西側の1号畠と  
 分かれ、畝方位が類似することから同時期に耕作された  
 可能性がある。後世の削平などによって畝の高さが全体  
 に低く、残存状況は良好ではないが、東西方向に連続す  
 るサクが残存する。1号畠に比べ畝幅やサク間隔が狭い。  
 畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できな  
 かった。埋没土は、褐灰色砂質土によって埋没し、As-A  
 の混入は確認できなかった。時期は近世と考えられるが、  
 As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

3区3号畠(第62図 PL.17)

位置：X=104～123、Y=-370～384 サク数：29条  
 規模：18.02×14.78m 畝高さ：0.01～0.15m 畝幅：  
 0.22～0.56m サク間隔：0.09～0.24m 畝方位：  
 N-12°-W 重複：8～10・13号復旧溝群、24号溝と重  
 複し、遺構確認状況から1号畠が古いと考えられる。  
 遺物：非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。  
 所見：第1面東端部に位置する。東側が調査区外となる  
 ため、全体の規模は不明であるが、さらに東側に広がる  
 と想定され、4区西端で確認できた4区5号畠と一致す  
 る可能性が高い。後世の削平や復旧溝群との重複などによ  
 って残存状況は良好ではないが、東西方向に連続する  
 サク数は4号畠に次いで多い。畝方位については、5号  
 畠に類似する。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕  
 跡は確認できなかった。出土遺物はなく、8～10号復  
 旧溝群との重複関係から時期は、As-A降下以前と考えら  
 れる。

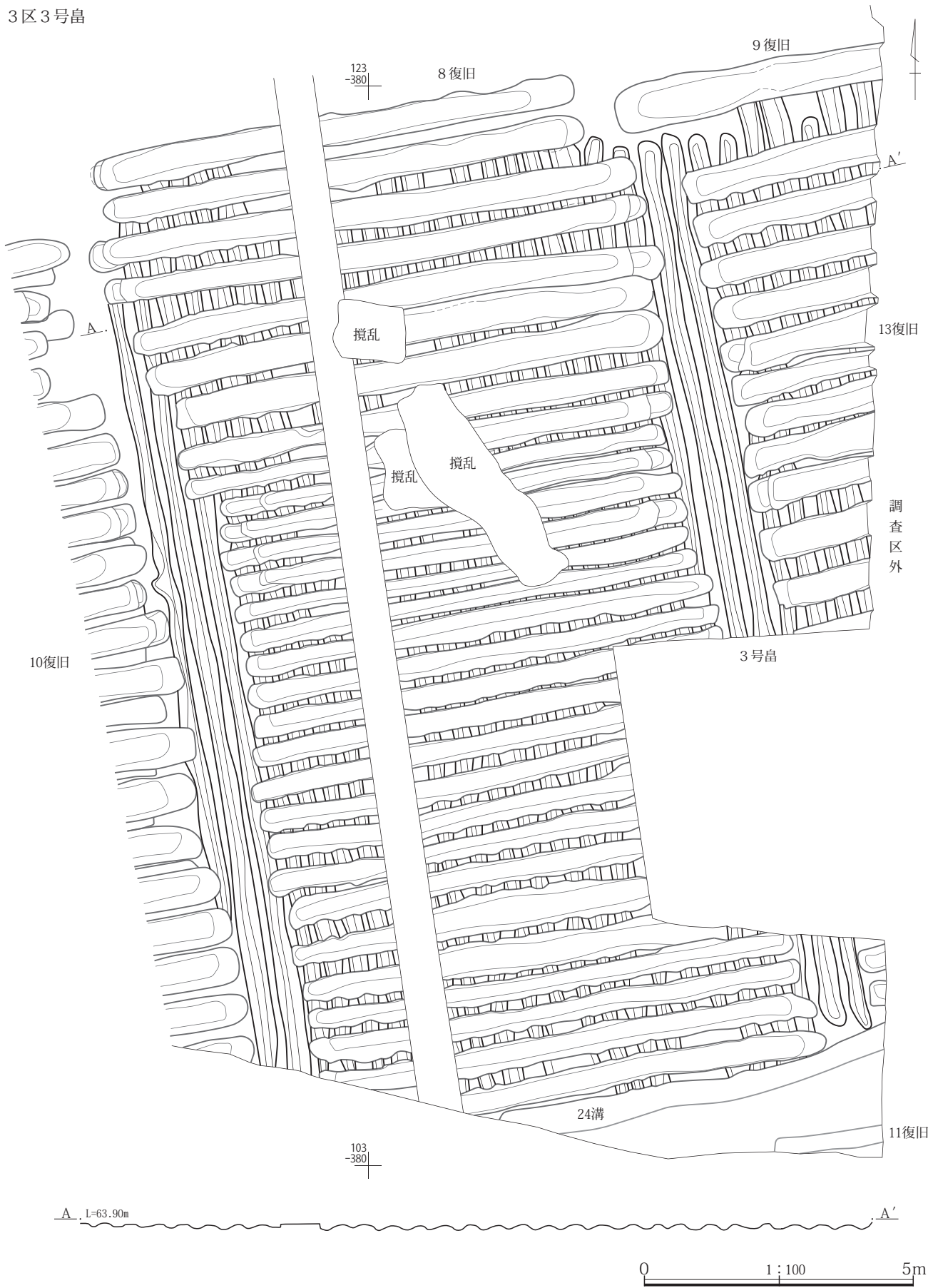
3区2号畠



第61図 3区2号畠



3区3号畠



第62図 3区3号畠

**3区4号畠**(第63図 PL.17・18・114)

**位置:** X=106 ~ 118、Y=-391 ~ 408 **サク数:** 32条  
**規模:** 17.13×12.01m **畝高さ:** 0.01 ~ 0.10m **畝幅:** 0.17 ~ 0.64m **サク間隔:** 0.05 ~ 0.73m **畝方位:** N-20°-W **重複:** 2・21号溝、10・14号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から4号畠が古いと考えられる。  
**遺物:** 在地系土器鍋(第63図4畠1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器7点(大型製品)の他、近世の国産磁器3点、国産施釉陶器12点、在地系焙烙・鍋7点、時期不詳の土器類10点である。**所見:** 第1面東部に位置する。調査区南側にさらに広がると想定される。2号溝によって区画されると考えられる。後世の削平や復旧溝群との重複などによって残存状況は良好ではないが、南北方向に連続するサク数は3区の中で最も多い。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、褐灰色砂質土によって埋没し、As-Aの混入は確認できなかった。10・14号復旧溝群との重複関係から時期は、As-A降下以前と考えられる。

**3区5号畠**(第64図 PL.18)

**位置:** X=134 ~ 142、Y=-406 ~ 418 **サク数:** 24条  
**規模:** 11.13×8.45m **畝高さ:** 0.01 ~ 0.17m **畝幅:** 0.15 ~ 0.55m **サク間隔:** 0.00 ~ 0.45m **畝方位:** N-13°-W **重複:** なし。**遺物:** 堺陶器すり鉢(第64図5畠1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器18点、在地系焙烙・鍋3点、在地系皿1点、時期不詳の土器類8点である。**所見:** 第1面中央部北側に位置する。調査区北側にさらに広がると想定される。東端に1号道が近接することから、1号道を隔て耕作が行われたと考えられる。南側に1号復旧溝群が隣接する。後世の削平などによって残存状況は良好ではなく、サクの長さは全体にやや不揃いである。畝方位については、3号畠に類似する。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、灰黄褐色砂質土と褐灰色粘質土によって埋没し、As-Aの混入は確認できなかった。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

**3区6号畠**(第65図 PL.18)

**位置:** X=128 ~ 135、Y=-424 ~ 432 **サク数:** 14条

**規模:** 8.78×6.62m **畝高さ:** 0.01 ~ 0.08m **畝幅:** 0.14 ~ 0.52m **サク間隔:** 0.04 ~ 0.37m **畝方位:** N-84°-E **重複:** なし。**遺物:** 瀬戸・美濃陶器すり鉢(第65図6畠1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器1点である。**所見:** 第1面中央部に位置する。後世の削平などによって残存状況は良好ではなく、サクの長さは全体に不揃いである。畝方位については、7・8号畠とほぼ同一であり、同時期に耕作されていた可能性がある。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、粘質の褐灰色土によって埋没し、As-Aの混入については確認できなかった。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

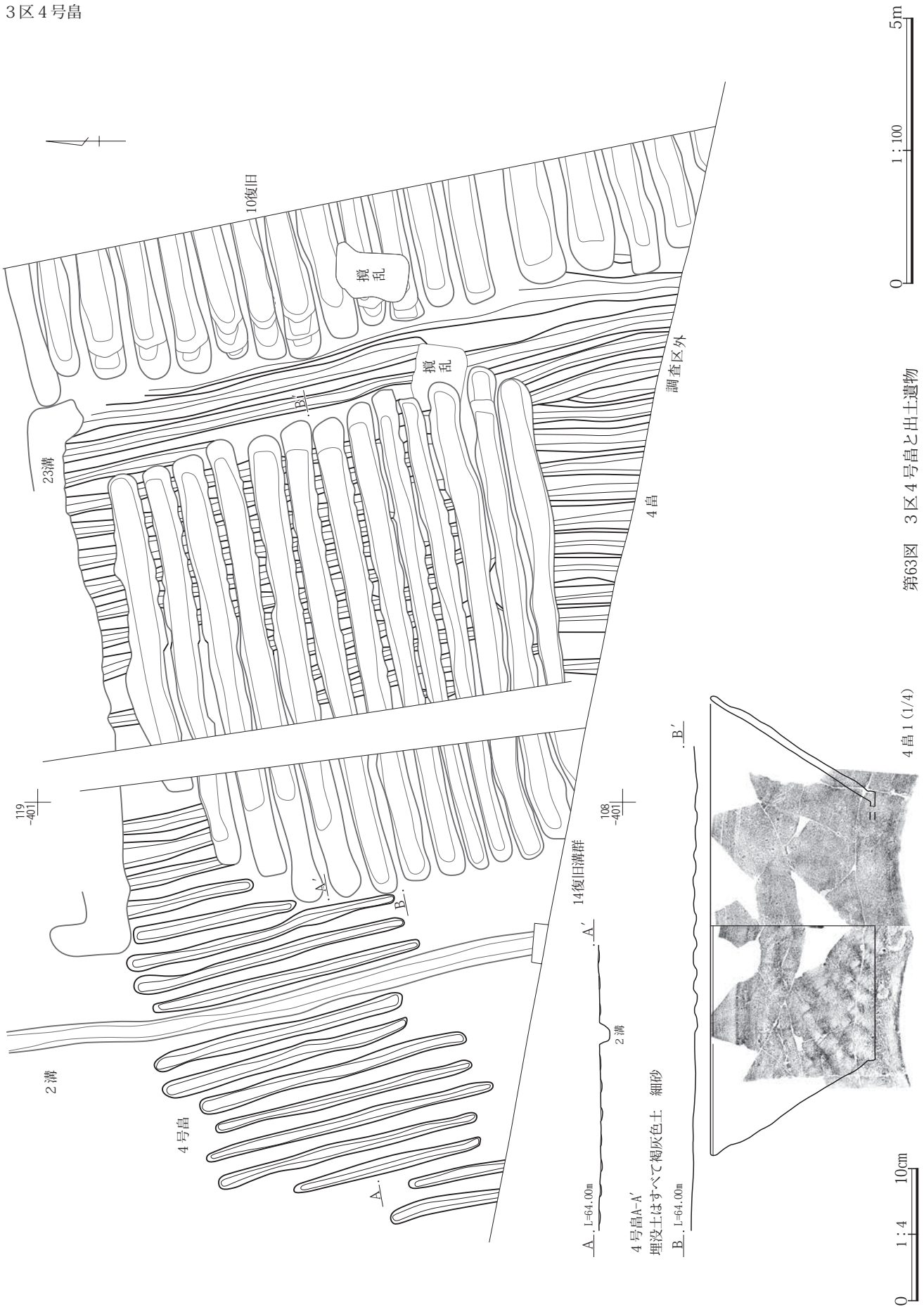
**3区7号畠**(第65図 PL.18・114)

**位置:** X=115 ~ 125、Y=-423 ~ 434 **サク数:** 13条  
**規模:** 10.22×9.85m **畝高さ:** 0.01 ~ 0.05m **畝幅:** 0.14 ~ 0.44m **サク間隔:** 0.01 ~ 0.82m **畝方位:** N-83°-E **重複:** なし。**遺物:** 肥前陶器陶胎染付碗(第65図7畠1)、瀬戸・美濃陶器碗(第65図7畠2)、銅製銅板(第65図7畠3)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器3点である。**所見:** 第1面中央部南側に位置する。後世の削平などによって残存状況は良好ではなく、他の畠に比べてサク間隔が広く、長さが不揃いである。畝方位については、6・8号畠とほぼ同一であり、隣接することから同時期に耕作されていた可能性がある。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、灰黄褐色砂質土塊を含む褐灰色砂質土によって埋没し、As-Aの混入は確認できなかった。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

**3区8号畠**(第66図 PL.19)

**位置:** X=135 ~ 141、Y=-424 ~ 430 **サク数:** 14条  
**規模:** 6.43m×(5.38)m **畝高さ:** 0.01 ~ 0.06m **畝幅:** 0.10 ~ 0.31m **サク間隔:** 0.17 ~ 0.43m **畝方位:** N-84°-E **重複:** なし。**遺物:** 非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)の他、近世の国産磁器2点、国産施釉陶器4点、国産焼締陶器1点、時期不詳の土器類2点が埋没土から出土した。**所見:** 第1面中央部北側に位置

3区4号島



第63図 3区4号島と出土遺物

第3章 近世の遺構と遺物

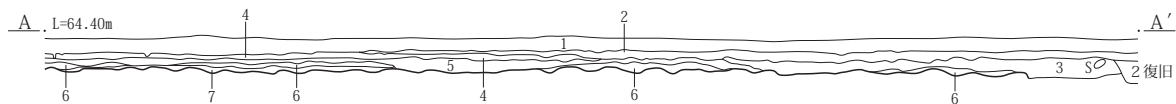
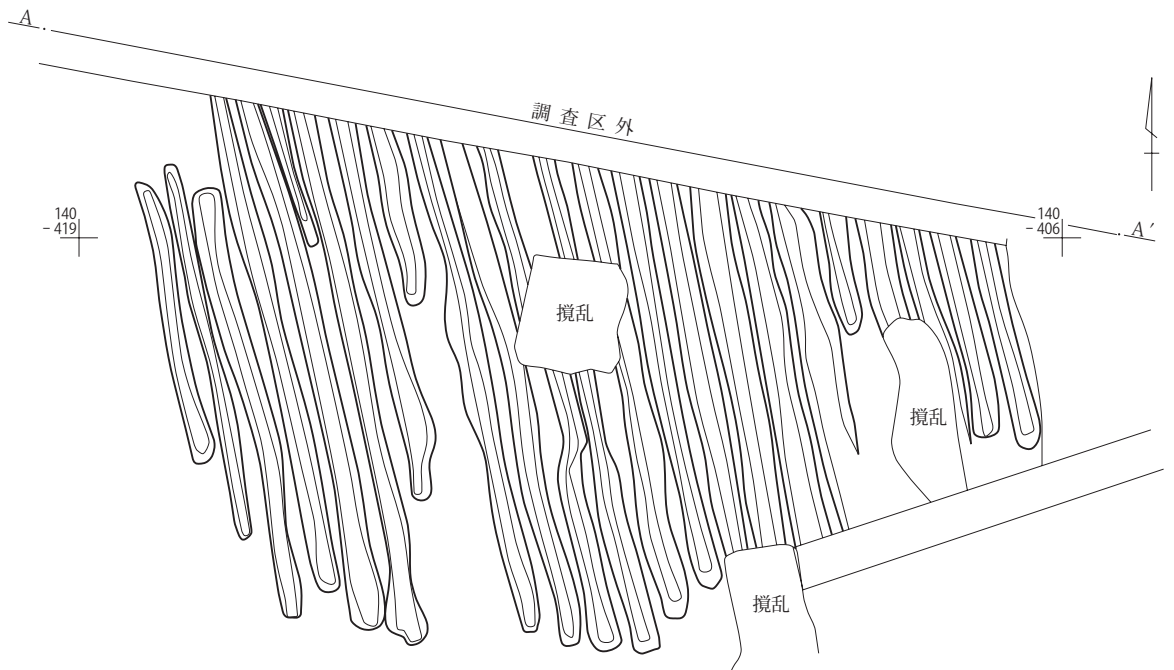
する。後世の削平などによって残存状況は良好ではない。サク間隔がやや広く、長さが不揃いである。畝方位については、6・7号畝とほぼ同一であり、隣接する6号畝とは形状が類似することから同時期に耕作されていた可能性がある。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、7号畝と同一であり、灰黄褐色砂質土塊を含む褐灰色砂質土によって埋没し、As-Aの混入は確認できなかった。時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

規模：8.32×1.65m 畝高さ：0.01～0.08m 畝幅：0.26～0.42m サク間隔：0.11～0.41m 畝方位：N-14°-W 重複：なし。遺物：非掲載遺物は、須恵器1点(小型製品)が出土した。所見：第1面南側の拡張部に位置する。調査区西側に広がると想定され、全体の規模は不明である。畝方向は南側に隣接する10号畝と同一である。後世の削平などによって残存状況は良好ではない。サク間隔がやや広く、サクの長さは不揃いである。畝方位については、6・7号畝とほぼ同一であり、同時期に耕作されていた可能性がある。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、As-Aを含む灰褐色砂質土によって埋没する。埋没土から時期は、As-A降下以前と考えられる。

3区9号畝(第66図 PL.19)

位置：X=091～099、Y=-370～372 サク数：3条

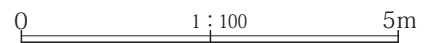
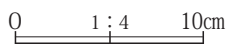
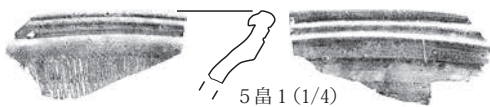
3区5号畝



5号畝A-A'

- 1. 黒褐色土 表土、現代耕作土
- 2. 灰黄褐色土 表土、As-A少量、部分的に酸化
- 3. 褐灰色土 砂土、ラミナ状に堆積、As-A多量、1号道覆土か

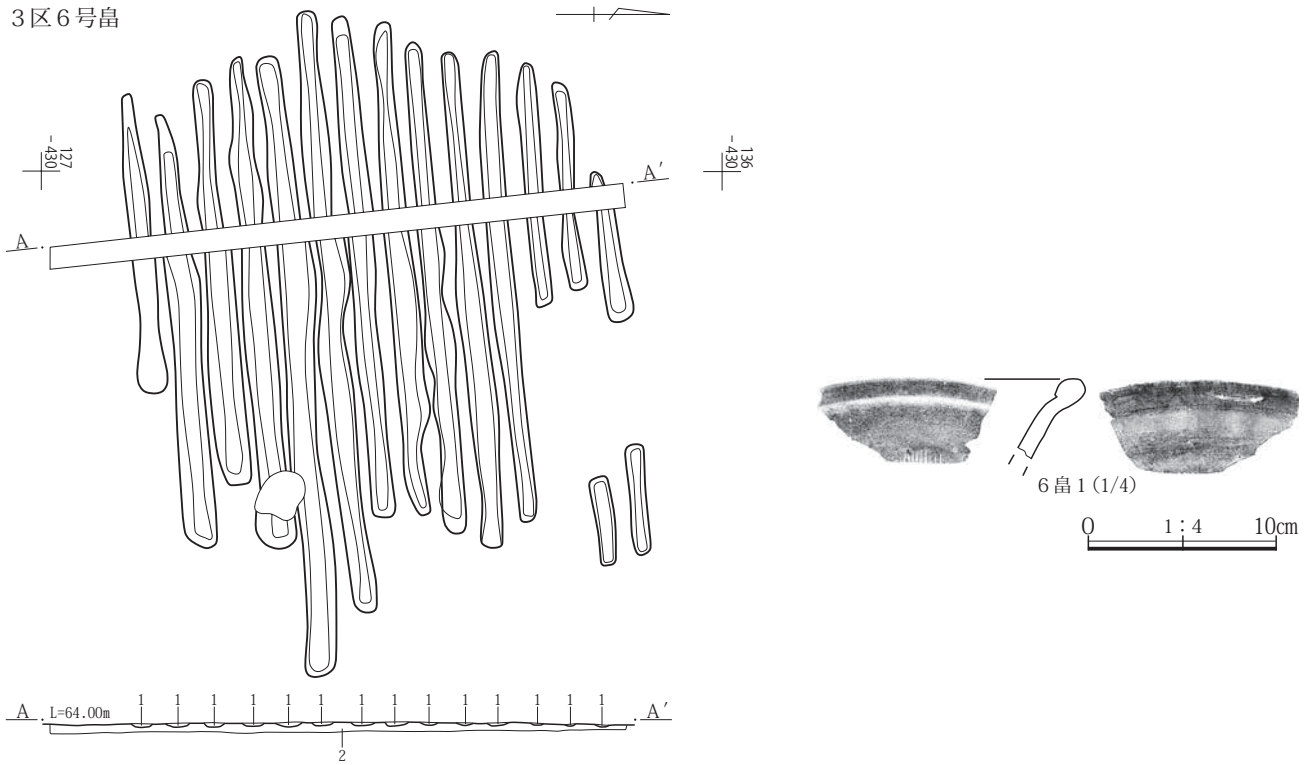
- 4. 褐色土 細砂、酸化、As-A少量
- 5. 灰黄褐色土 細砂、As-A少量、ラミナ状に堆積
- 6. 灰黄褐色土 砂質土、炭化物微量、締まりあり
- 7. 褐灰色土 粘質土、底面酸化、締まりあり



第64図 3区5号畝と出土遺物



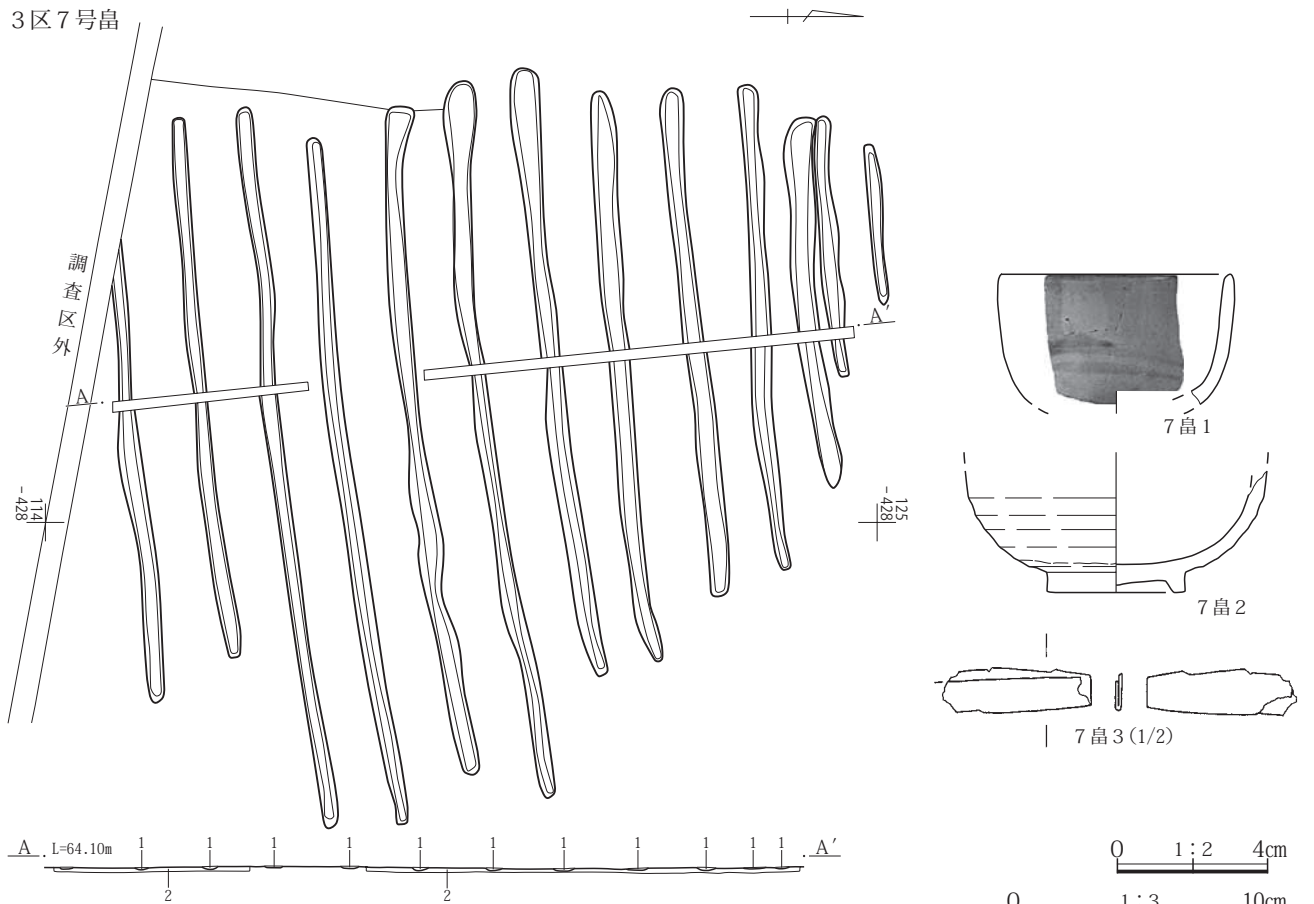
3区6号畠



6号畠A-A'

1. 褐灰色土 粘質土、底面が酸化、縮まりあり
2. にぶい黄褐色土 砂質土、炭化物少量、細砂部分的に含む、縮まりあり

3区7号畠



7号畠A-A'

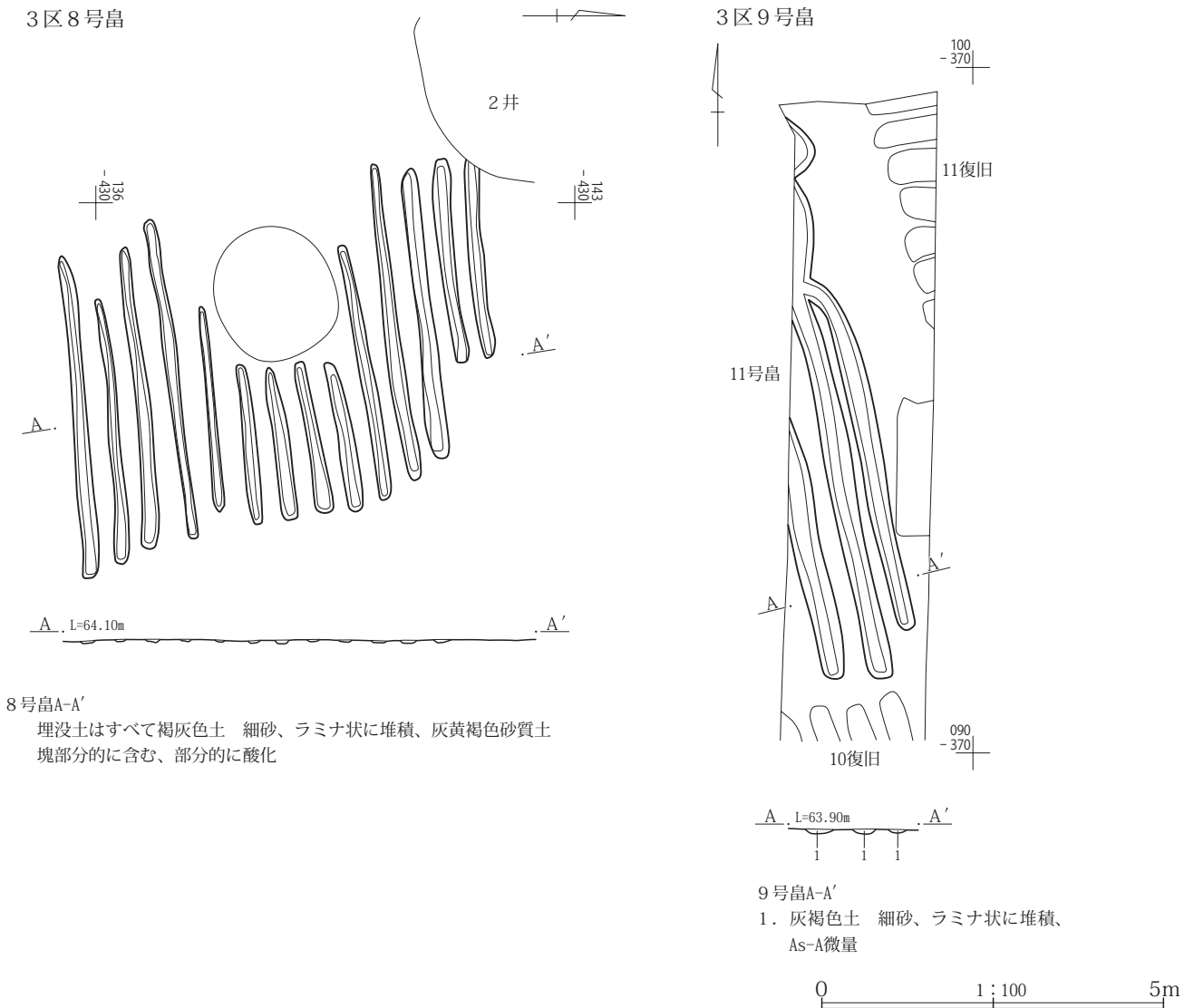
1. 褐灰色土 細砂、ラミナ状に堆積、灰黄褐色砂質土塊部分的に含む、部分的に酸化
2. にぶい黄褐色土 砂質土、炭化物少量、細砂部分的に含む、縮まりあり

第65図 3区6・7号畠と出土遺物

3区10号畠(第67図 PL.19)

位置：X=075～090、Y=-370～373 サク数：10条  
 規模：14.89×4.82m 畝高さ：0.01～0.07m 畝幅：  
 0.27～0.35m サク間隔：0.13～0.23m 畝方位：  
 N-14°-W 重複：12号復旧溝群と重複し、遺構確認状  
 況から10号畠が古いと考えられる。遺物：非掲載遺物  
 は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器1点が埋没土か  
 ら出土した。所見：第1面南側の拡張部に位置し、調査

区東側及び西側にさらに広がると想定され、全体の規模  
 は不明である。畝方向は南側に隣接する9号畠と同一で  
 ある。後世の削平や12号復旧溝群との重複などによって  
 残存状況は良好ではない。畠の耕作面を精査したが、植  
 物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、9号畠と  
 同一であり、As-Aを含む灰褐色砂質土によって埋没する。  
 埋没土から時期は、As-A降下以前と考えられる。



第66図 3区8・9号畠

3区10号畠



10号畠A-A'

1. 灰褐色土 細砂、ラミナ状に堆積、As-A微量

第67図 3区10号畠

3 井戸

3区第1面で確認することができた近世の井戸は2基である。3区中央部から西部北端に位置し、周辺では畠や溝などが確認されている。

3区1号井戸(第68図 PL.19)

第1面北西部のX=143～145、Y=-444～447に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-90°である。平面形状は楕円形、掘削状況は円筒形と想定される。

規模は、長径2.83m、短径2.62mを測る。底面に湧水が認められ、確認できた深さは2.66mである。石積みの井戸であり、遺存状況は良好で崩落などは認められない。円筒形に掘削したのち、壁面から約0.05～0.10m内側に石を積み上げ、上段に比べ下段に小礫を用いている。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土や灰黄褐色砂質土によって埋没し、天明泥流などによる自然埋没と考えられる。

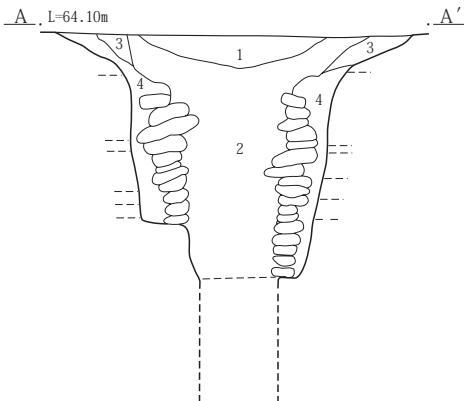
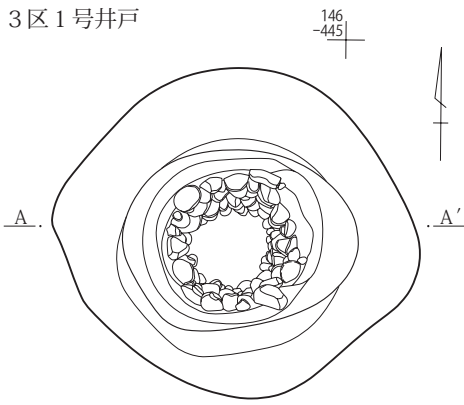
遺物は、常滑陶器甕か(第68図1井1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点である。出土遺物は少ないが埋没土などから時期は、天明泥流以前の近世と考えられる。

3区2号井戸(第68図 PL.19・20)

第1面中央部北側のX=140～144、Y=-430～434に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-79°-Wである。平面形状は円形、掘削状況は円筒形と想定される。

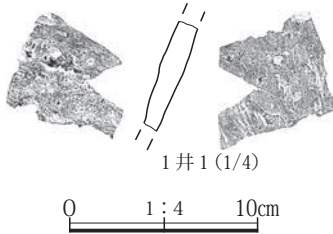
規模は、長径3.65m、短径3.25mを測る。底面に湧水が認められ、確認できた深さは1.45mである。石積みの井戸であり、遺存状況は良好で崩落などは少ない。埋没土は、As-Aや礫を多量に含む黒褐色土であり、天明泥流による自然埋没と考えられる。円筒形に地山を掘り抜き、壁面から約0.60～0.80m内側に石を積み上げている。掘り方は礫を多量に含むにぶい黄褐色土や灰黄褐色土である。尚、地山層の記録を残せなかったため、湧水層は確認できなかった。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、在地系その他1点が掘り方から出土した。埋没土などから時期は、天明泥流以前の近世と考えられる。

3区1号井戸

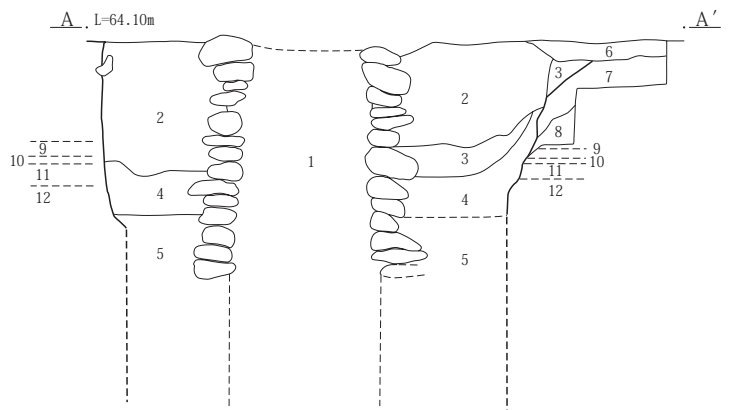
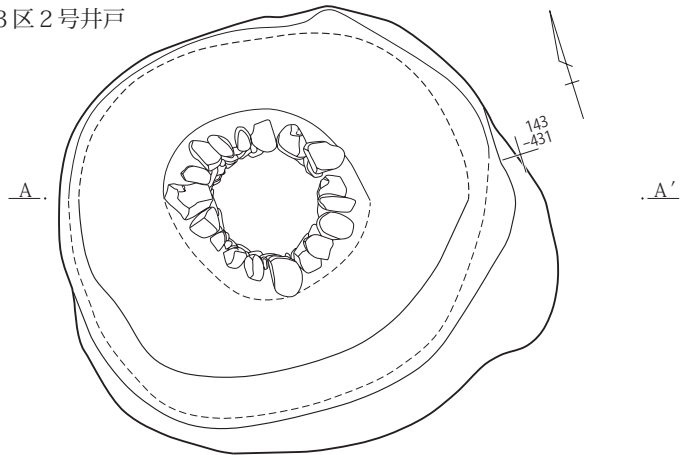


1号井戸A-A'

1. 灰黄褐色土 砂質土、粗粒砂多量、As-A微量、縮まりあり
2. 褐灰色土 粗粒砂、As-A微量
3. 黒褐色土 天明泥流に近似、礫多量
4. 黒褐色土 粘質土、上部はにぶい黄褐色土粒、下部は灰白色粘質土粒多量、石積み間に5~10cmの小礫が含まれる、縮まりなし

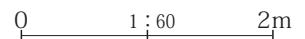


3区2号井戸



2号井戸A-A'

1. 黒褐色土 礫多量、天明泥流に近似、縮まり強
2. にぶい黄褐色土 礫多量、砂質土と粘質土の混土、縮まり強
3. にぶい黄褐色土 第2層より礫少量
4. 灰黄褐色土 砂質土、縮まりなし
5. 灰黄褐色土 砂質土、礫少量
6. 暗褐色土 砂質土
7. にぶい黄褐色土 砂質土、小礫少量
8. 灰黄褐色土 砂質土
9. 褐色土 炭化物粒を含む
10. 褐灰色土 As-B混土
11. 暗褐色土 As-Bを含む
12. 灰白色土 砂質土 細粒



第68図 3区1号井戸と出土遺物・2号井戸

## 4 溝

3区第1面では、近世の溝6条を調査した。溝は、調査区東側及び北西部に位置する。

### 3区1号溝(第69図 PL.20)

第1面中央部南側のX=110~128、Y=-408~412に位置する。溝の南側が調査区外となるため、全体の規模などは不明であるが、さらに南側に延長すると想定される。

確認できる規模は、長さ18.56m、幅0.26~0.44m、深さ0.06~0.29mを測る。走行方向は、N-14°-Wと

N-13°-Eであり、南側で「く」の字状に屈曲する。勾配は0.91%であり、僅かな高低差は認められるが、北側から南側にかけて流れていたと想定される。断面形状は椀形を呈する。埋没土は、As-Aを含むにぶい黄褐色砂質土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から流水の痕跡は認められなかった。1号溝に沿って東側と西側に隣接して1・2・4号畠が確認された。1号溝を意識した耕作が行われたと考えられることから、区画を分けるために掘られた溝の可能性がある。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などからAs-A降下以前と考えられる。



**3区2号溝**(第69図 PL.20)

第1面中央部のX=109～135、Y=-403～407に位置する。溝の南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに南側に延長すると想定される。1号復旧溝群、2・4号畠と重複し、遺構確認状況から2号溝が新しいと考えられる。1号溝の西側に位置し、走行方向が類似する。

確認できる規模は、長さ23.28m、幅0.30～0.56m、深さ0.07～0.28mを測る。走行方向は、N-7°-Wである。勾配は0.08%であり、高低差は、北側より南側が僅かに高い。断面形状は台形を呈する。埋没土は、1号溝と同一であり、As-Aを含むにぶい黄褐色砂質土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などからAs-A降下以前と考えられる。

**3区3号溝**(第70図 PL.20・114)

第1面中央部南側のX=113～116、Y=-416～426に位置する。溝の南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに南西側に延長すると想定される。重複する遺構はない。溝の北側で確認された1・7号畠のサクの走行方向と類似する。

確認できる規模は、長さ10.02m、幅0.76～1.22m、深さ0.02～0.24mを測る。走行方向は、N-80°-Eである。僅かな高低差は認められるが、南西から北東にかけてほぼ直線状に流れていたと想定され、勾配は1.00%である。断面形状は椀形を呈する。埋没土は、As-Aと炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。堆積状況から自然埋没と考えられる。土層断面の観察から、底面付近に流水の痕跡などは認められなかった。

出土遺物が多く、近世の肥前陶器陶胎染付碗(第70図3溝1)が底面下から、志戸呂陶器灯火受皿(第70図3溝2)が底面上5cmから、在地系土器鍋(第70図3溝3)が底面直上から出土した。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)、近世の国産磁器3点、国産施釉陶器2点、在地系焙烙・鍋2点、時期不詳の土器類2点である。出土遺物や埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

**3区4号溝**(第70図 PL.20)

第1面北西部のX=145～148、Y=-444～461に位置する。溝の北側が調査区外となり、全体の規模は不明であるが、さらに東側に延長すると想定される。西側に位置する矢川の旧河道と重複し、新旧関係は不明である。

確認できる規模は、長さ14.68m、幅1.02～2.14m、深さ0.62～0.87mを測る。走行方向は、N-90°である。勾配は2.45%であり、僅かな高低差は認められるが、東から西へほぼ直線状に走行し、矢川の旧河道の方向に流れていたと想定される。断面形状は底面から中段にかけて緩やかに立ち上がり、中段から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、As-Aを含むにぶい黄褐色砂質土、褐灰色砂質土、灰黄褐色砂質土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から第3層の砂質土は、流水の痕跡の可能性はある。

遺物は、在地系土器焙烙(第70図4溝1)が埋没土から出土した。出土遺物や時期を特定できないが、埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

**3区23号溝**(第71図)

第1面東部のX=117～119、Y=-393～403に位置する。23号溝の周辺は復旧溝群や畠となり、10号復旧溝群、4号畠と重複し、遺構確認状況から23号溝が新しいと考えられる。

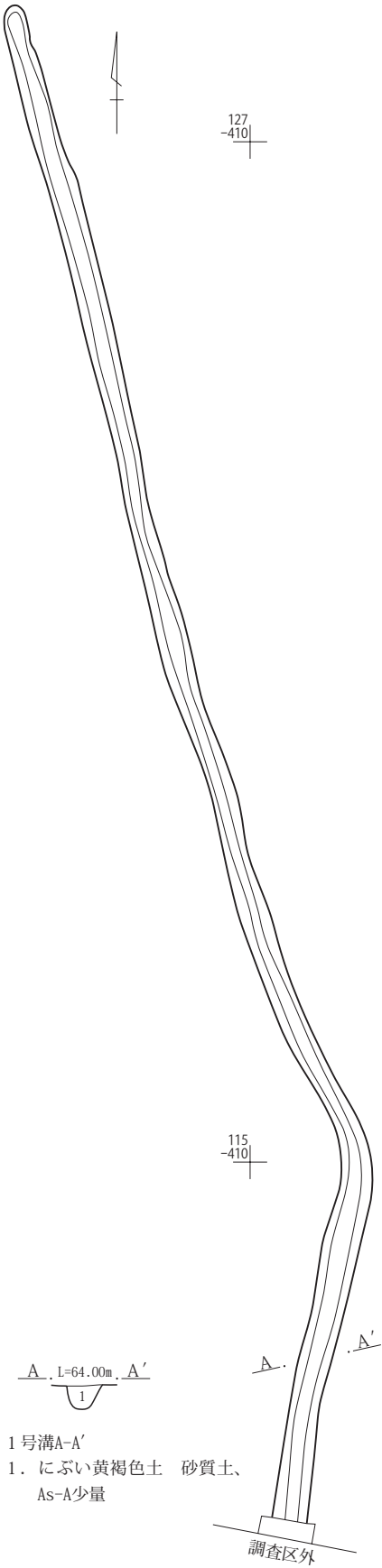
確認できる規模は、長さ10.47m、幅0.55～0.90m、深さ0.03～0.26mを測る。走行方向は、N-84°-Eである。西端が北側へ、東端が南側へそれぞれほぼ直角に屈曲し僅かに延びる。勾配は0.76%であり、僅かな高低差は認められるが、西側から東側へ流れていたと想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり、溝上面の大半が削平されたため、残存状況は良好ではない。南側で近接する位置にある14号復旧溝群とは走行方向が類似する。

出土遺物はなく、時期はAs-A降下以前か以降かは特定できず不明である。

**3区24号溝**(第71図)

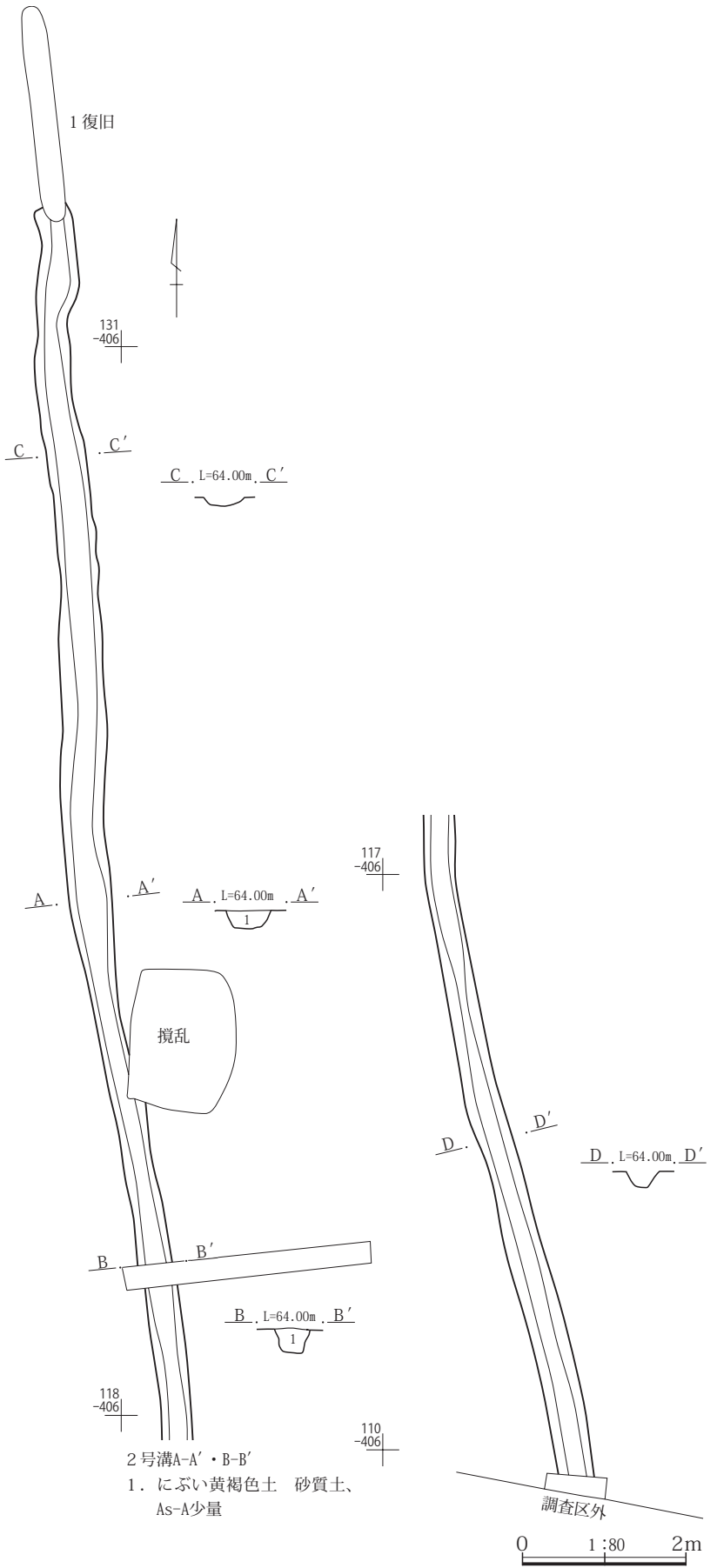
第1面南東部隅のX=103～105、Y=-370～377に位置する。溝の東側及び南側が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。東側に位置する4区では、24号溝の東側の延長部分を確認

3区1号溝



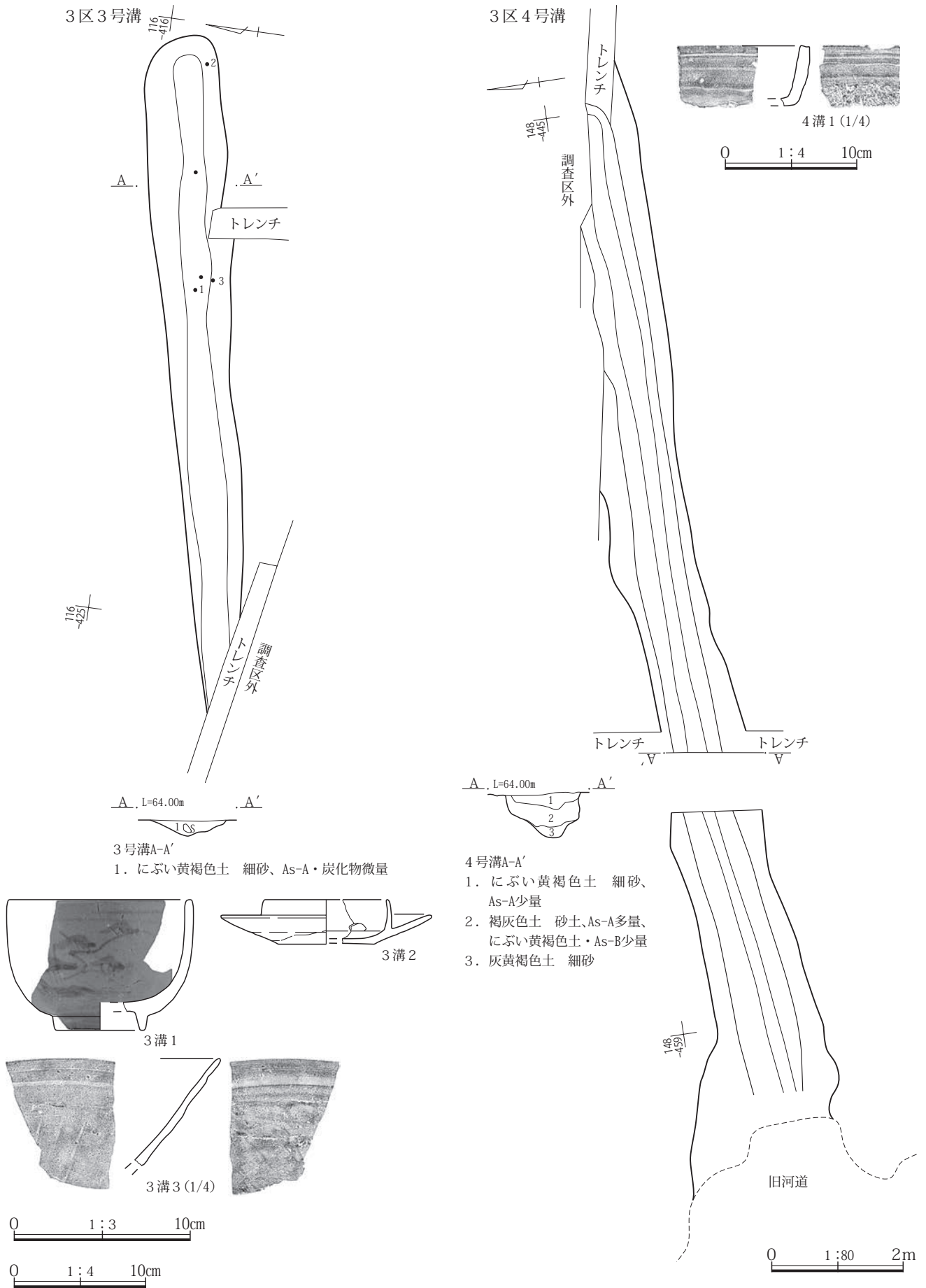
1号溝A-A'  
 1. にぶい黄褐色土 砂質土、  
 As-A少量

3区2号溝

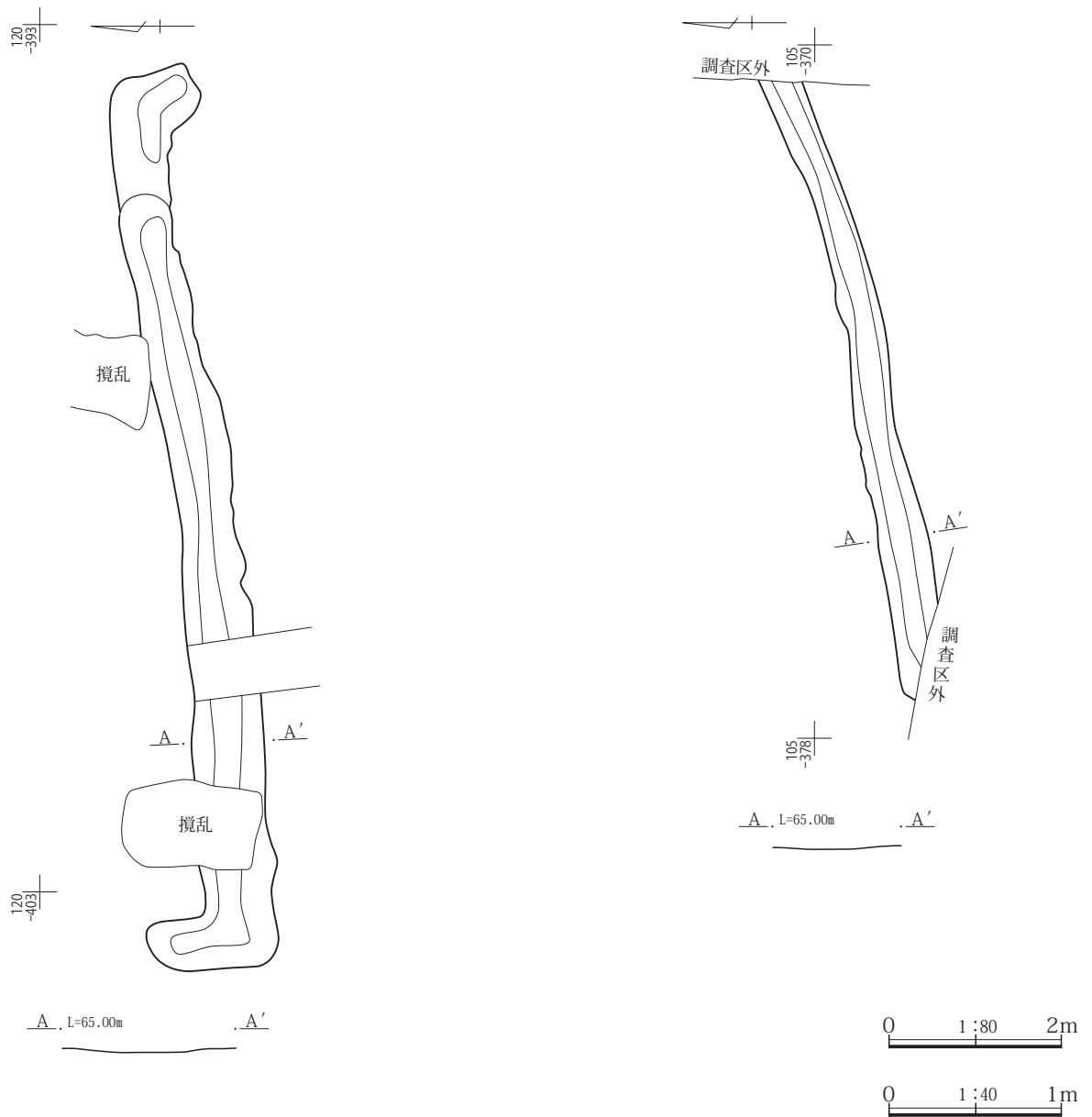


2号溝A-A'・B-B'  
 1. にぶい黄褐色土 砂質土、  
 As-A少量

第69図 3区1・2号溝



第70図 3区3・4号溝と出土遺物



第71図 3区23・24号溝

することができなかった。8・11号復旧溝群、3号畠と重複し、遺構確認状況から24号溝が新しいと考えられる。

確認できる規模は、長さ7.28m、幅0.36～0.58m、深さ0.03～0.14mを測る。走行方向は、N-75°-Eである。勾配は0.96%であり、僅かな高低差は認められるが、北東から南西へほぼ直線状に流れていたと想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり、溝上面の大半が削平されたため、残存状況は良好ではない。復旧溝群や畠と隣接することから、区画を分けるために掘られた溝の可能性はある。

出土遺物はなく時期は、As-AI降下以前か以降かは特定できず不明である。

## 5 集石

3区第1面では1基の集石を調査した。調査区中央部北側に位置し、周辺では畠や井戸が隣接する。本遺跡で確認できた集石は1基のみである。

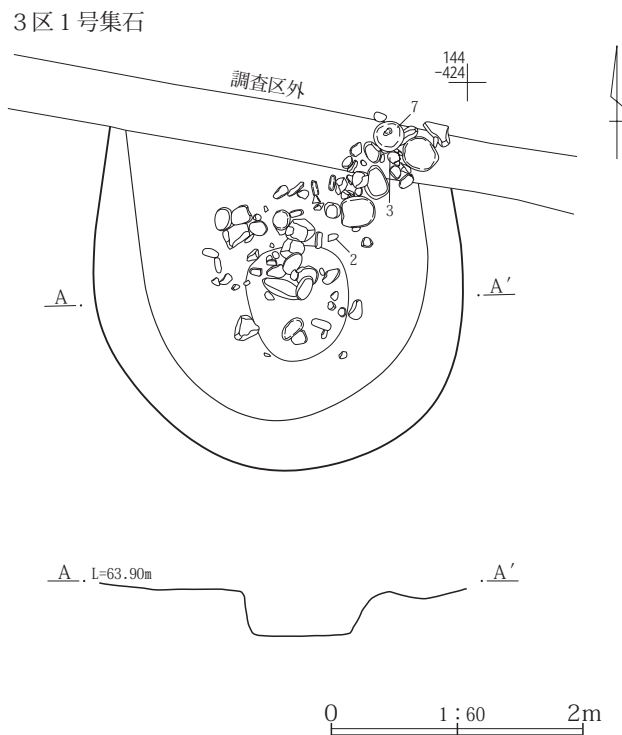


3区1号集石(第72・73図 PL.20・114)

第1面中央部北側のX=140～143、Y=-424～426に位置する。集石の北側が調査区外となるため、全体の形状や規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。8号畠に近接するが、重複する遺構はない。

確認できた集石は、北東から南西方向にかけて帯状に配置され、集石下面は土坑状に掘込まれていた。確認できる土坑状の規模は、長さ2.94m、幅2.47m、深さ0.44mを測り、底面の中央部は、ピット状に長径0.92m、短径0.80m、深さ0.39m掘り窪めている。長軸方向は、N-86°-Wである。西側に2基の井戸が確認されていることから、埋没した井戸の可能性もある。

遺物は、在地系土器皿(第73図1集3)が底面上6cmから、志戸呂陶器灯火受皿(第73図1集2)が底面上12cmから、肥前磁器青磁皿(第73図1集1)、在地系土器火鉢か(第73図1集4)、在地系土器焙烙(第73図1集5)が埋没土から、石製品(第73図1集7)が底面上3cmから出土し、砥石(第73図1集6)、石製品(第73図1集8)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器6点、在地系焙烙・鍋4点、時期不詳の土器類4点の他、石製品1点である。出土遺物などから時期は、近世と考えられる。



第72図 3区1号集石

6 道

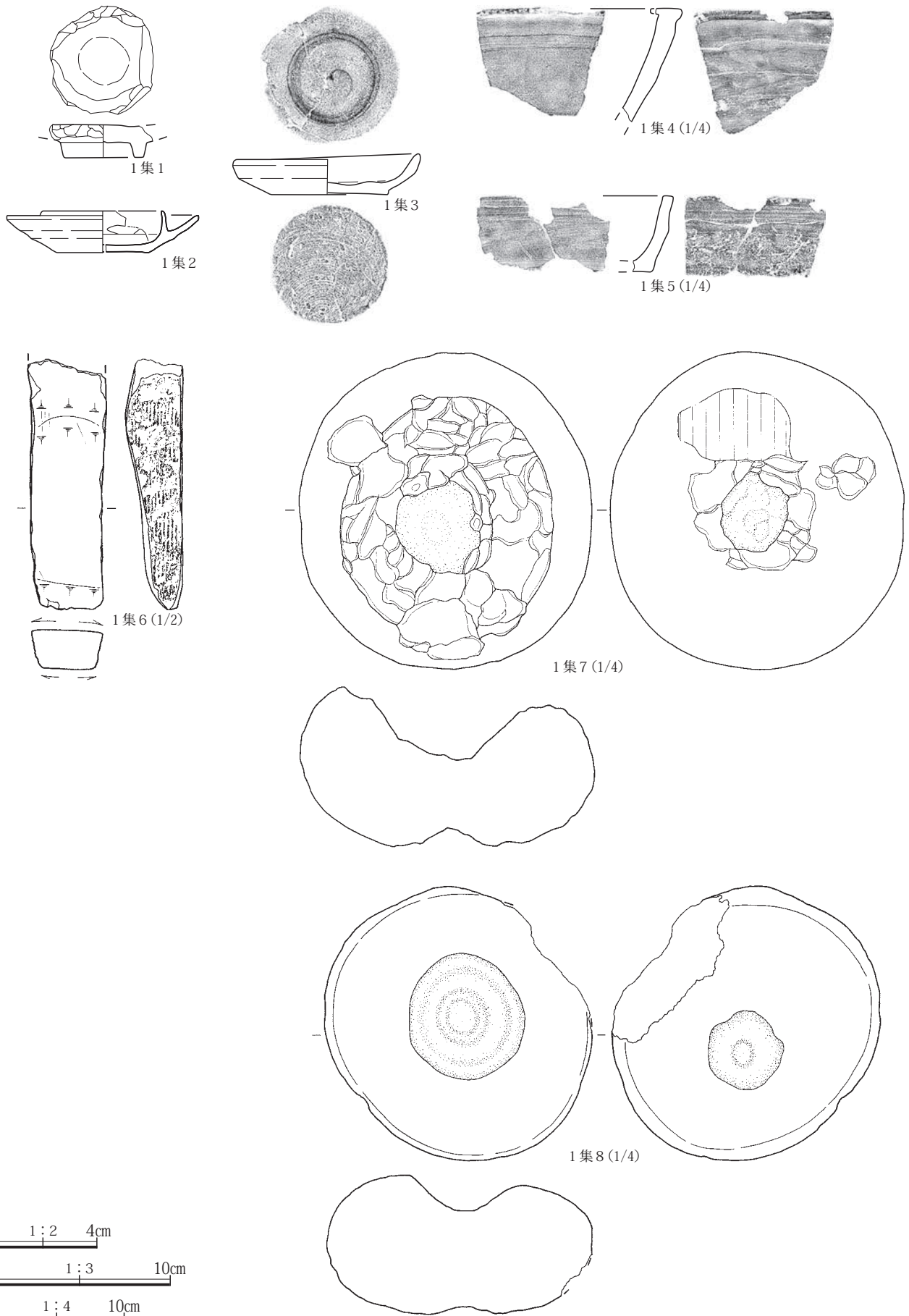
3区第1面で確認できた道は1条のみである。道の周辺では、復旧溝群や畠が近接し、道によって復旧溝群や畠が区画されている状況である。

3区1号道(第74図 PL.20・115)

第1面中央部やや東寄りのX=119～140、Y=-383～406に位置する。7・19号復旧溝群、2号畠と重複し、遺構確認状況から1号道が新しい。第1面東半部は、復旧溝群、畠、溝によって構成され、1号道は、1・2・4～6号復旧溝群、5号畠と近接することから、1号道を意識しながら復旧溝群が掘削されたと考えられる。1号道の北側や東側が調査区外となるため、全体の形状や規模は不明であるが、南北方向と東西方向の丁字路が認められ、北側及び東側にさらに延長すると想定される。道の南側については、4号畠北端付近で道が途絶え、明瞭な延長部分を確認することができなかった。

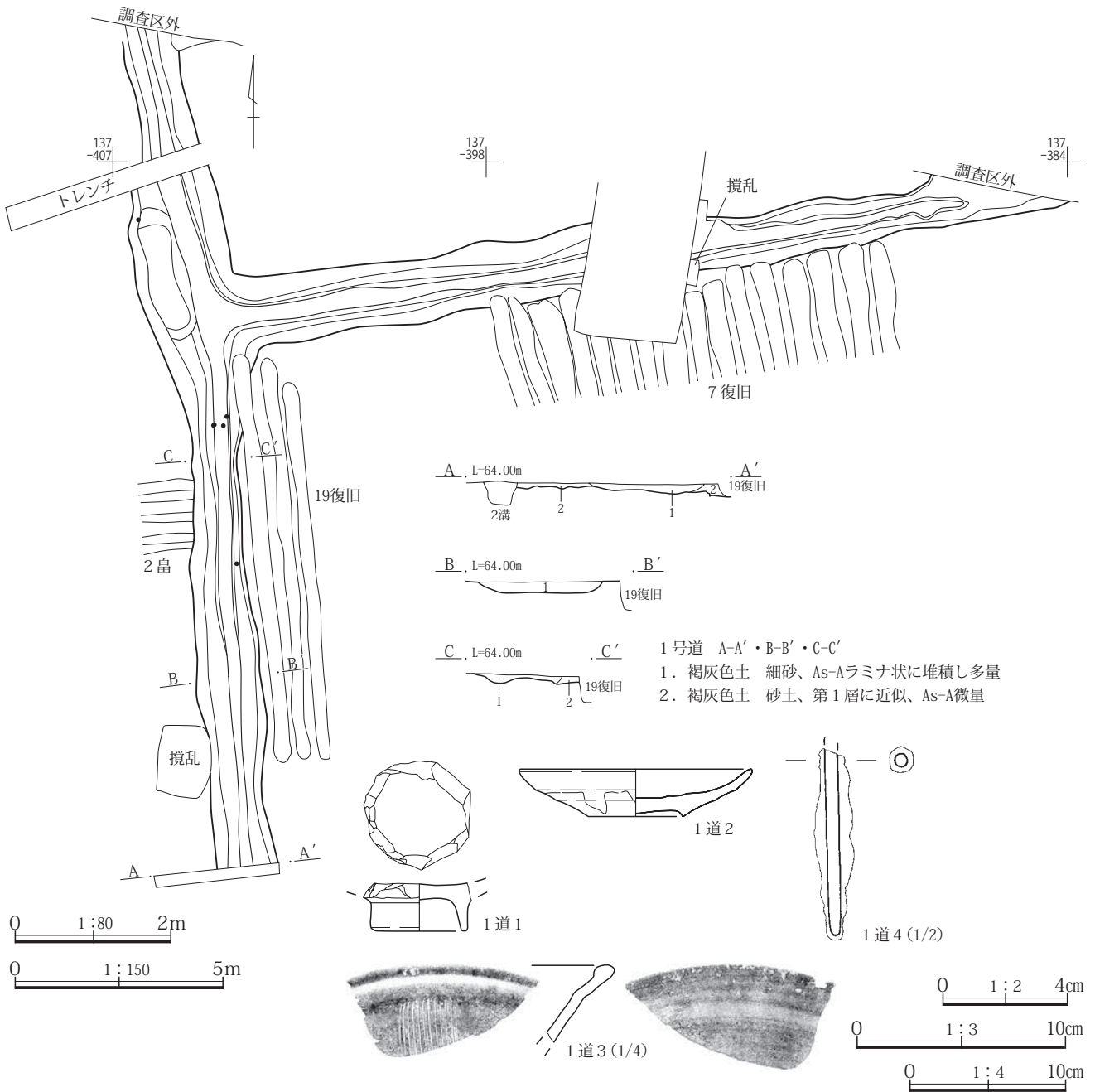
確認できる規模は、南北方向の長さ10.18m、幅0.54～1.17m、深さ0.07～0.22mを測り、走行方向は、N-7°-Wである。東西方向の長さ11.16m、幅0.42～0.83m、深さ0.02～0.20mを測り、走行方向は、N-81°-Eである。東西方向に比べ南北方向の道の幅や深さなど規模がやや大きい。南側の隣接する位置にある21号溝は、走行方向が東西方向に伸びる道と近似することから、1号道の延長部分の可能性もあるが、道に比べ溝の幅がやや狭い。南北方向の道は、比高0.09mで南側が低く、勾配0.88%である。東西方向の道は、比高0.09mで東側が低く、勾配0.80%である。断面形状は、底面がほぼ平坦面であり、道の両側に僅かな溝の窪みが認められる。

遺物は、近世の瀬戸・美濃陶器灯火皿(第74図1道2)が底面下から出土し、肥前陶器呉器手碗(第74図1道1)、瀬戸・美濃陶器すり鉢(第74図1道3)、鉄製品不詳(第74図1道4)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器4点、在地系皿2点、時期不詳の土器類4点である。出土遺物や埋没土などから時期は近世と考えられるが、As-A降下以前か以降かは特定できず不明である。



第73図 3区1号集石出土遺物

3区1号道



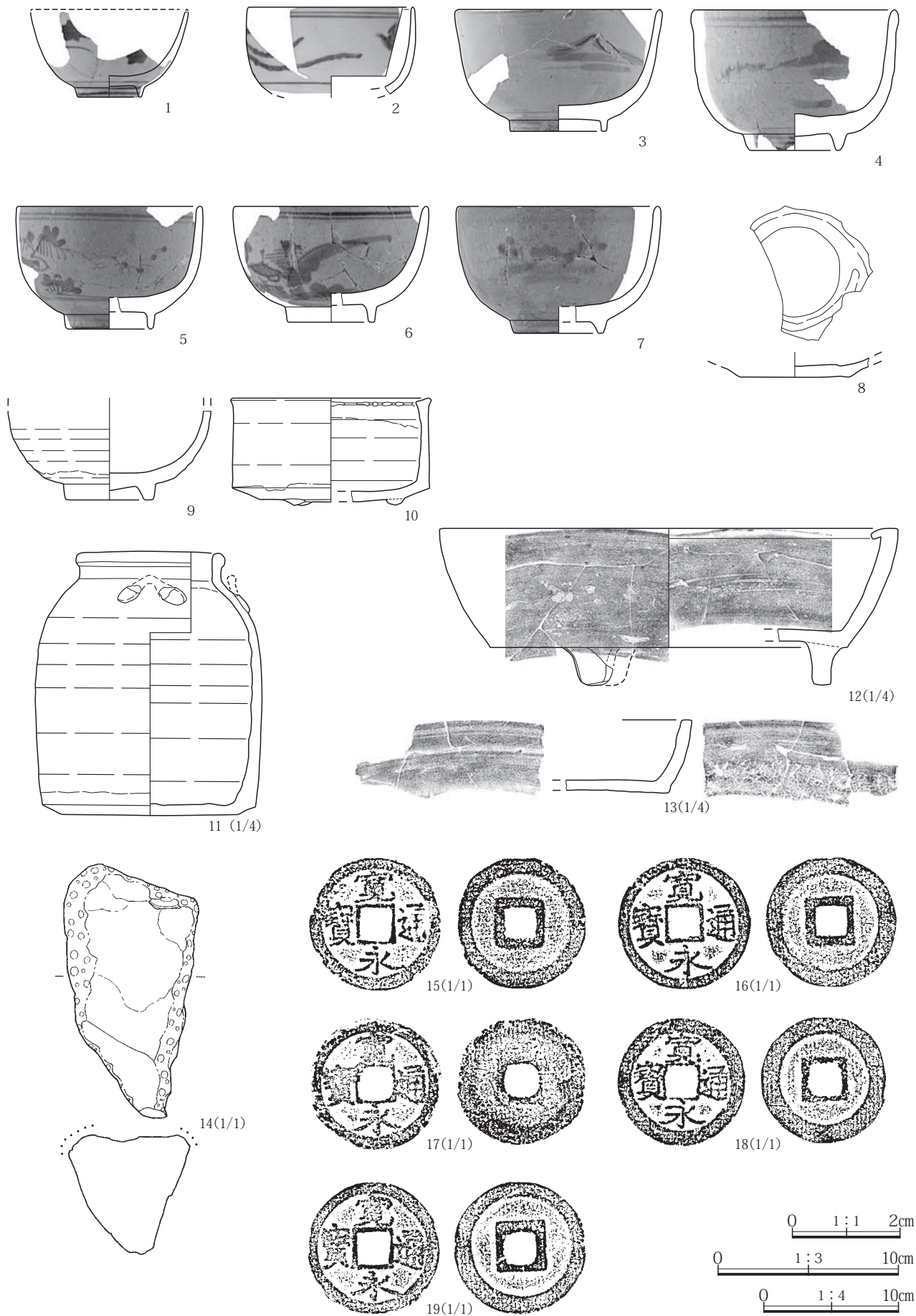
第74図 3区1号道と出土遺物

7 遺構外の出土遺物(第74図 PL.115)

3区第1面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、肥前磁器染付碗(第75図1)、肥前磁器染付鉢(第75図2)、肥前陶器陶胎染付碗(第75図3～7)、瀬戸・美濃陶器皿(第75図8)、瀬戸・美濃陶器碗(第75図9)、瀬戸・美濃陶器筒形香炉(第75図10)、瀬戸・美濃陶器三耳壺(第75図11)、在地系土器鉢か火鉢(第75図12)、在地

系土器焙烙(第75図13)、火打石(第75図14)、寛永通寶(第75図15～19)が出土した。非掲載遺物は、土師器15点(大型製品14、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)、灰釉陶器9点(小型製品)、砥石1点、近世の国産磁器5点、国産施釉陶器37点、在地系焙烙・鍋8点、在地系焙烙・鍋1点、在地系皿5点、在地系その他1点、時期不詳の土器類6点である。



第75図 3区遺構外の出土遺物



## 第5節 4区の遺構と遺物

4区は3区東側に位置する調査区であり、南玉埋堀遺跡の東端の調査区となる。遺構の残存状況は他の調査区に比べ比較的良好であり、表土耕作土の下層である第1面から第3面まで近世の遺構をそれぞれ確認し、調査を実施することができた。4区ではAs-Aの堆積が明瞭に認められ、近世の遺構確認面は、基本土層第4層であるAs-A直下面が第1面、第6層及び8a層上面が第2面、第12層上面が第3面となった。当該時期の遺構については、第1面では、As-Aで埋没した畝、第2面では、自然災害からの復旧や復興のために掘削された復旧溝群の他、畝、道、第3面では、復旧溝群と畝を確認した。

### 1 畝

4区で確認することができた近世の畝は15ヶ所である。畝に関連する畝やサク、耕作痕などを基に一つの単位として捉え、それぞれの畝に付番した。4区では近世の遺構の遺存状況が比較的良好であり、遺構確認面が3面となった。第1面では、As-A直下層から4ヶ所、第2面では8ヶ所、第3面では3ヶ所の畝を確認した。後世の削平や復旧溝群との重複によって一部のみの確認となった畝もある。整理作業によって、9畝Aを8号畝、9畝Bを9号畝、9畝Cを10号畝に変更した。

#### 4区1号畝(第78・79図 PL.21)

**位置：**X=088～119、Y=-270～296 **サク数：**47条  
**規模：**27.80×25.30m **畝高さ：**0.02～0.12m **畝幅：**0.08～0.96m **サク間隔：**0.10～0.67m **畝方位：**N-2°-W **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面東部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、北側、東側、南側に広がると想定される。調査区東端は、畝の残存状況が良好であるが、中央部周辺は後世の削平のため畝の高さが全体に低く、残存状況はあまり良好ではない。畝には、南北方向に連続するサクが残存し、確認できたサクのまとまりを1つの単位とすると5ヶ所から構成されていると考えられる。サクの断面形状は浅い椀形を呈し、底面はほぼ平坦である。サクの幅は0.20～0.40mを測る。南西隅の範囲で確認で

きた8条のサクは、他と比べて幅がやや広く約0.70～0.90mを測り、底面には連続する耕作痕とみられる窪みが残存していた。耕作物の種類によって場所の使い分けが行われていたと考えられる。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認することができなかった。埋没土は、As-A及び褐色砂質土による自然埋没である。遺構確認状況などから時期は、As-A直下と考えられる。

#### 4区2号畝(第80図 PL.21)

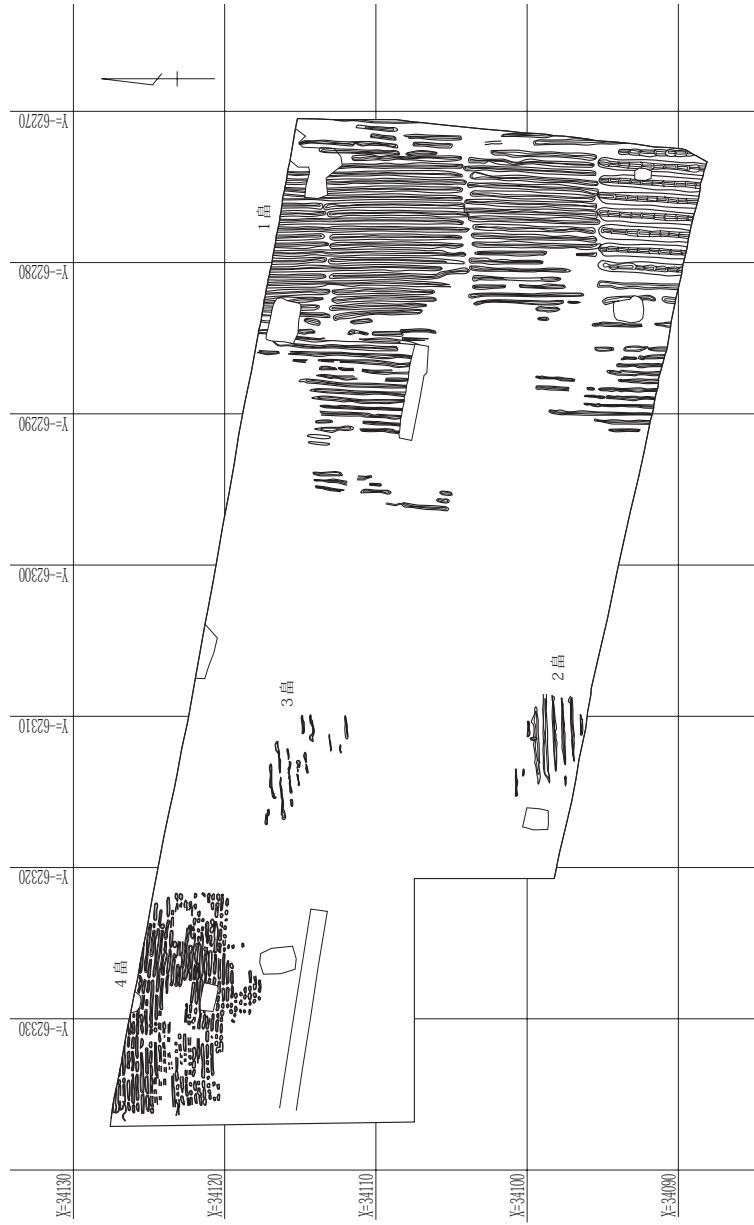
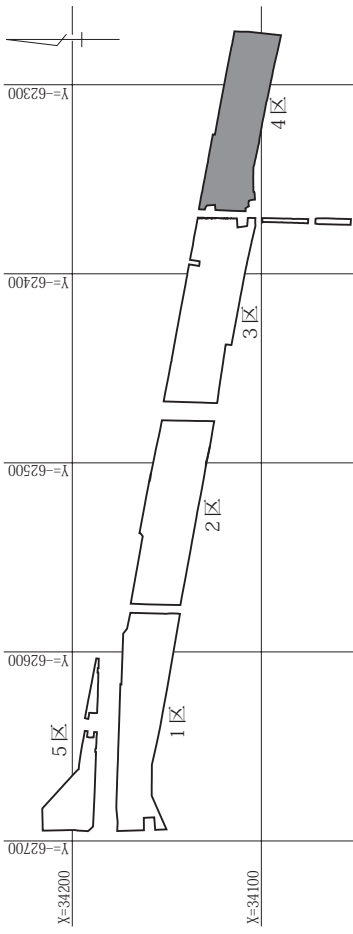
**位置：**X=096～100、Y=-308～315 **サク数：**9条  
**規模：**7.00×4.20m **畝高さ：**0.01～0.05m **畝幅：**0.03～0.46m **サク間隔：**0.15～0.50m **畝方位：**N-89°-E **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面中央部南側に位置する。後世の削平によって畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが僅かに残存するが、長さや幅などの規模はそれぞれ不揃いである。畝方位は、3・4号畝と類似する。断面形状は浅い椀形を呈し、底面はほぼ平坦である。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認することができなかった。埋没土は、As-Aによる自然埋没である。遺構確認状況などから時期は、As-A直下と考えられる。

#### 4区3号畝(第80図 PL.21)

**位置：**X=111～117、Y=-310～316 **サク数：**10条  
**規模：**7.20×5.30m **畝高さ：**0.02～0.05m **畝幅：**0.03～0.24m **サク間隔：**0.34～1.06m **畝方位：**N-84°-E **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面中央部北側に位置する。後世の削平によって畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクの一部が僅かに残存する。畝方位は、2・4号畝と類似する。断面形状は浅い椀形を呈し、底面はほぼ平坦であり、耕作痕は認められない。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認することができなかった。埋没土は、As-Aによる自然埋没である。遺構確認状況などから時期は、As-A直下と考えられる。

#### 4区4号畝(第81図 PL.21)

**位置：**X=117～127、Y=-321～336 **サク数：**34条  
**規模：**15.10×10.00m **畝高さ：**0.02～0.08m **畝幅：**0.08～0.26m **サク間隔：**0.04～0.21m **畝方位：**



第76図 4区第1面(近世)全体図



第77図 4区第2・3面(近世)全体図

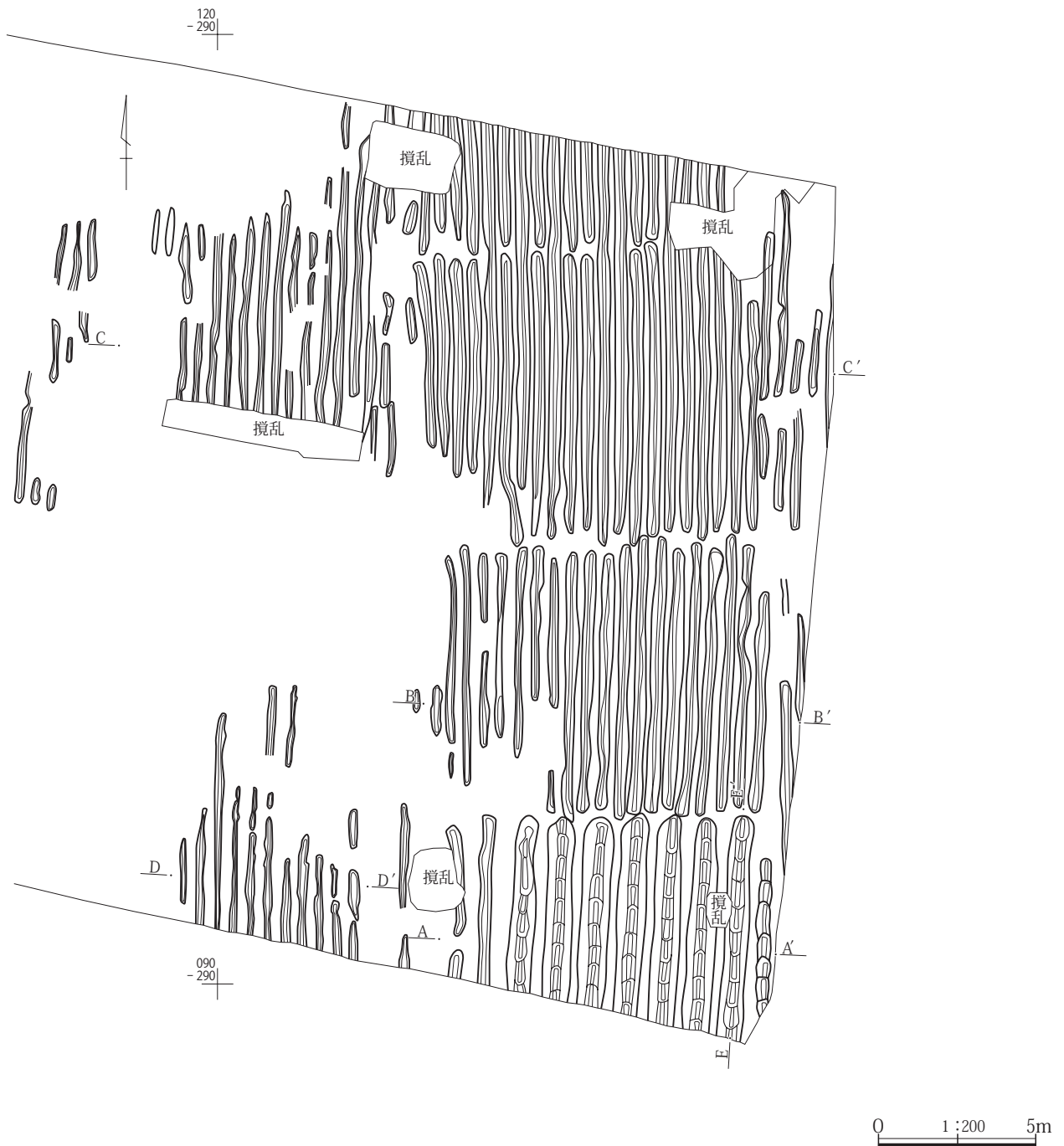
N-87°-E 重複：なし。 遺物：なし。 所見：第1面中央部北側端に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではないが、東西方向に連続する耕作痕とみられる窪みが認められる。畝の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、褐灰色砂質土による自然埋没と考えられる。約0.10～0.15m下層の第2面調査によって、畝方向が同一となる7号畝を確認した。洪水などの自然災害によって周辺が埋没し

た後も、ほぼ同じ場所を畝として耕作していたと考えられる。遺構確認状況などから時期は、As-A直下と考えられる。

4区5号畝(第82図 PL.23)

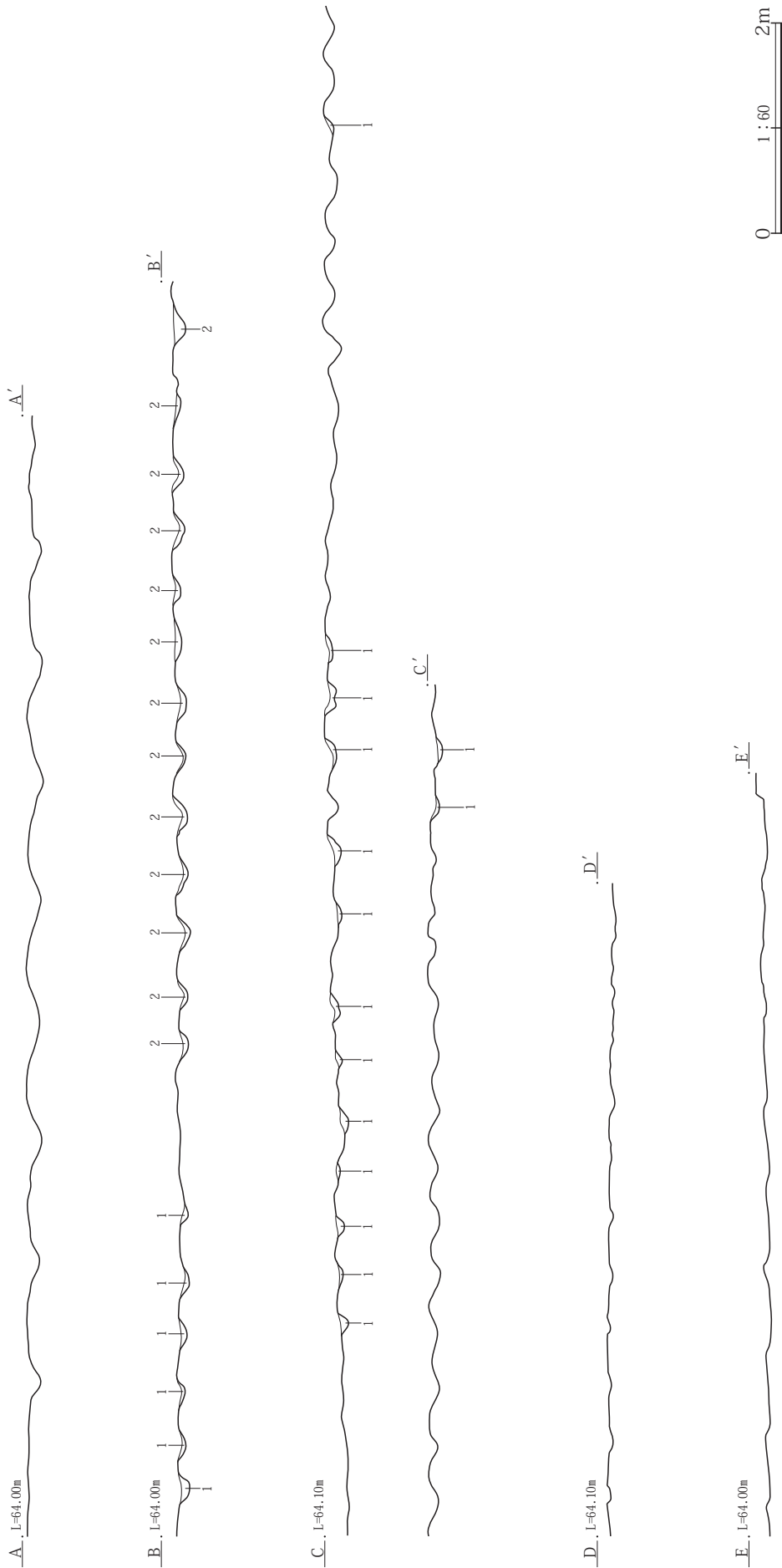
位置：X=107～122、Y=-360～366 サク数：11条 規模：15.22×5.92m 畝高さ：— 畝幅：0.15～0.39m サク間隔：0.11～0.43m 畝方位：N-13°-

4区1号畝



第78図 4区1号畝





第79図 4区1号畠土層断面図

W 重複：3号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から5号畠が古いと考えられる。遺物：なし。所見：第2面西部で確認した。西側が調査区外となりさらに西側に広がると想定される。4区西側に位置する3区では、調査区東端において3区3号畠を確認した。調査区ごとに遺構を分けたが、4区5号畠と3区3号畠の畝方向や規模などが類似し、両畠が近接することなどから判断し、同一の畠の可能性が高いとみられる。3区3号畠と同様に埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区6号畠(第82図 PL.23・26)

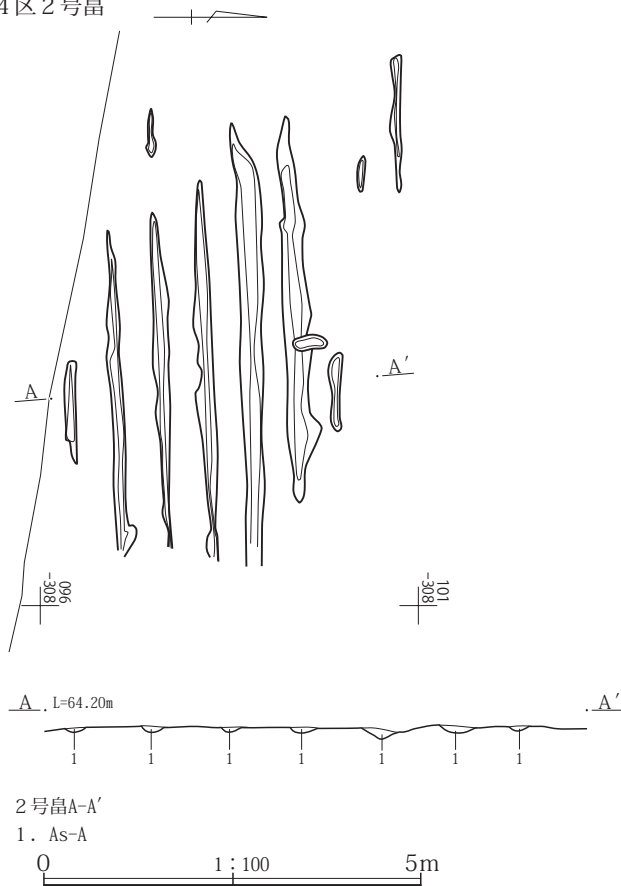
位置：X=098～109、Y=-317～326 サク数：28条  
 規模：10.48m×8.45m 畝高さ：0.02～0.18m 畝幅：0.09～0.35m サク間隔：0.01～0.22m 畝方位：N-8°-W 重複：なし。遺物：なし。所見：第2面中央部南側に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに南側に広がると想定される。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。南北方向に連続するサクが残存し、畝間が全体に狭い。鋏状

工具痕とみられる掘込みが底面の一部に残存する。埋没土は、褐灰色砂質土による自然埋没と考えられる。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

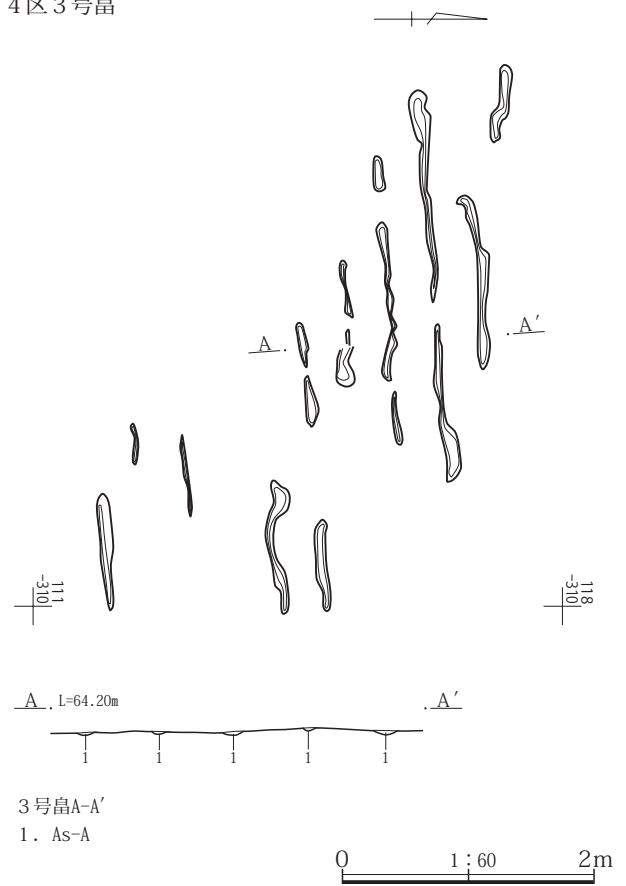
4区7号畠(第83図 PL.23)

位置：X=109～126、Y=-321～333 サク数：33条  
 規模：16.98×11.77m 畝高さ：— 畝幅：0.07～0.50m サク間隔：0.01～0.44m 畝方位：N-87°-E 重複：なし。遺物：なし。所見：第2面中央部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。7号畠の南側で6号畠、東側で4号復旧溝群と隣接する。東西方向に連続するサクの方位は、4号復旧溝群の条方位と近似する。7号畠の約0.10～0.15m上層である第1面からは、畝方向が同一となる4号畠を確認した。埋没土は、灰黄褐色砂質土による自然埋没と考えられる。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区2号畠



4区3号畠



第80図 4区2・3号畠

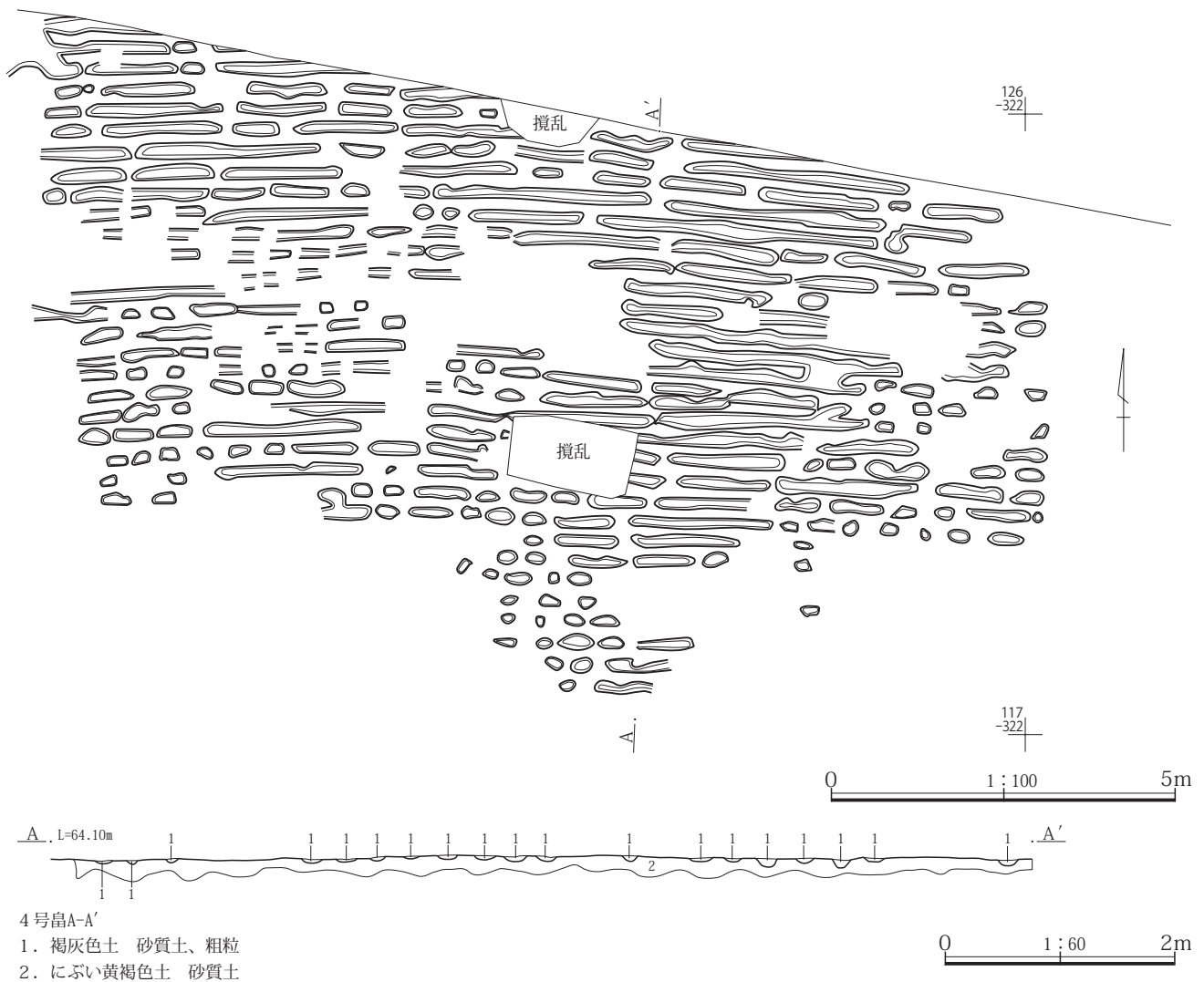
4区8号畠(第84図 PL.23)

位置：X=108～117、Y=-284～294 サク数：20条  
 規模：9.77×9.36m 畝高さ：0.01～0.17m 畝幅：  
 0.12～0.51m サク間隔：0.05～0.34m 畝方位：  
 N-4°-E 重複：なし。遺物：なし。所見：第2  
 面北東部に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況  
 は良好ではない。南北方向に連続する耕作痕が認められ  
 る。サクの長さが不揃いであり、西側は一部のみが残存  
 していた。埋没土は、灰黄褐色砂質土と褐灰色砂質土に  
 による自然埋没である。畠の耕作面を精査したが、植物な  
 どの痕跡は確認できなかった。サクの断面形状は、浅い  
 碗形や台形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面の一部  
 に鋤状工具痕とみられる掘込みが残存する。埋没土など  
 から時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区9号畠(第84図 PL.23)

位置：X=110～113、Y=-278～283 サク数：10条  
 規模：5.54×2.96m 畝高さ：0.01～0.08m 畝幅：  
 0.28～0.46m サク間隔：0.12～0.34m 畝方位：  
 N-2°-W 重複：8号復旧溝群と重複し、遺構確認状  
 況から9号畠が新しいと考えられる。遺物：なし。  
 所見：第2面北東部に位置する。畝の高さが全体に低く、  
 残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが残  
 存する。9号畠の西側で8号畠、北側で10号畠が隣接す  
 る。畝方位が類似することから、ほぼ同時期に耕作され  
 たと考えられる。埋没土は、灰黄褐色砂質土と褐灰色砂  
 質土による自然埋没である。畠の耕作面を精査したが、  
 植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土などから時  
 期は、As-A降下以前と考えられる。

4区4号畠



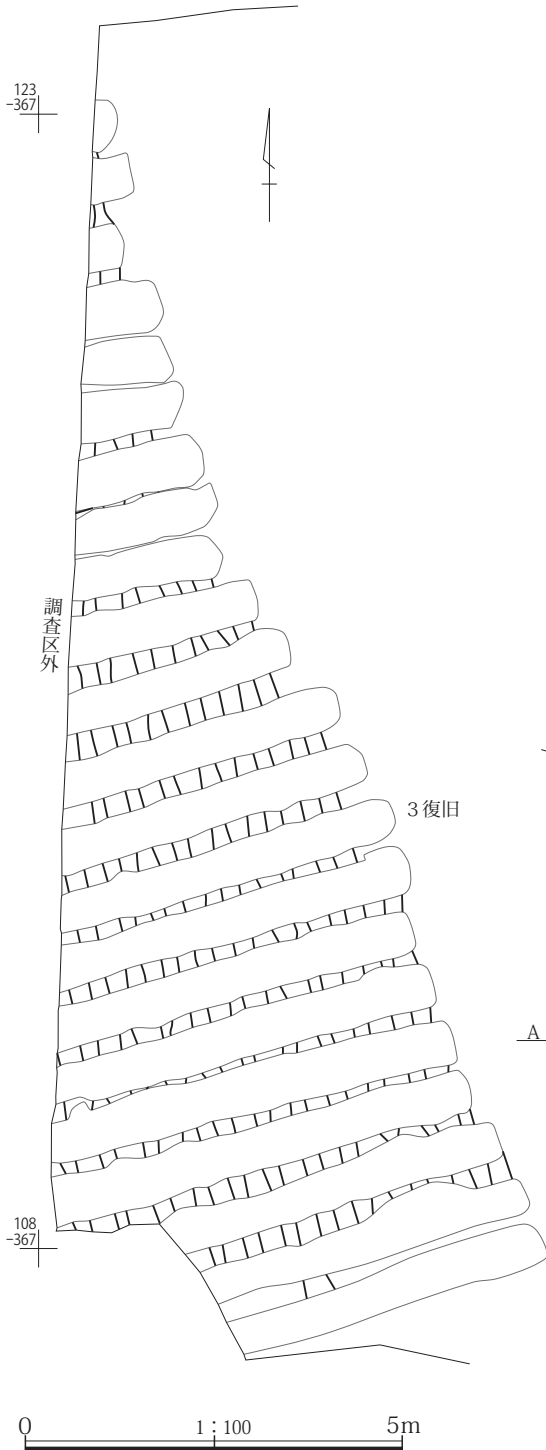
第81図 4区4号畠

4区10号畠(第84図 PL.23)

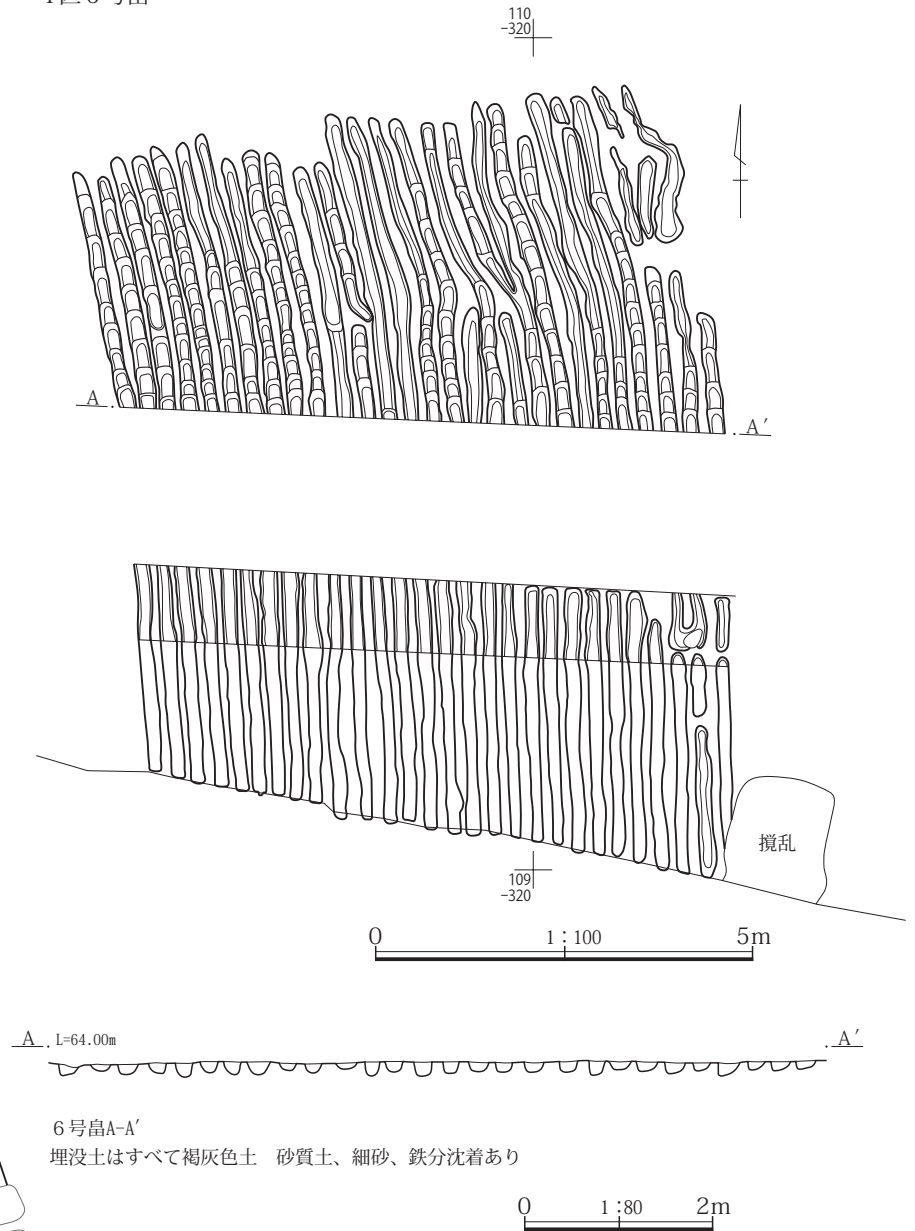
位置：X=113～116、Y=-278～283 サク数：10条  
 規模：4.29×2.53m 畝高さ：0.01～0.10m 畝幅：  
 0.15～0.33m サク間隔：0.06～0.36m 畝方位：  
 N-3°-W 重複：8号復旧溝群と重複し、遺構確認状  
 況から10号畠が新しいと考えられる。 遺物：なし。  
 所見：第2面北東部に位置する。畠の北側が調査区外と

なるため一部のみの確認である。畝の高さが全体に低く、  
 残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが残  
 存する。埋没土は、灰黄褐色砂質土と褐灰色砂質土によ  
 る自然埋没である。畠の耕作面を精査したが、植物など  
 の痕跡は確認できなかった。8・9号畠と隣接し、ほぼ  
 同時期に耕作されたと考えられる。埋没土などから時期  
 は、As-A降下以前と考えられる。

4区5号畠



4区6号畠



第82図 4区5・6号畠



4区7号島



A, L=63.90m

7号島A-A'  
埋没土はすべて灰黄褐色土 砂質土、鉄分沈着多い

第88図 4区7号島

4区11号畠(第84図 PL.23・27)

位置：X=284～287、Y=-091～095 サク数：10条  
規模：4.10×3.40m 畝高さ：0.02～0.19m 畝幅：0.13～0.28m サク間隔：0.04～0.26m 畝方位：N-12°-W 重複：5号復旧溝群と重複し、11号畠が古いと考えられる。遺物：なし。所見：第2面南東部に位置する。畠の南側が調査区外となるため一部のみの確認であり、さらに南側に広がると想定される。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。南北方向に連続するサクが残存する。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。遺構確認状況などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区12号畠(第85図 PL.24・27)

位置：X=108～115、Y=-296～306 サク数：20条  
規模：9.50×7.90m 畝高さ：— 畝幅：0.17～0.35m サク間隔：0.15～0.28m 畝方位：N-2°-W 重複：なし。遺物：なし。所見：第2面東部に位置する。8号畠が東側に隣接し畝方位が近似する。畠の残存状況は良好ではない。南北方向に連続するサクが確認できたにすぎず、サクの長さも全体に不揃いであり、畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡については確認できなかった。時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区13号畠(第85図 PL.24・27)

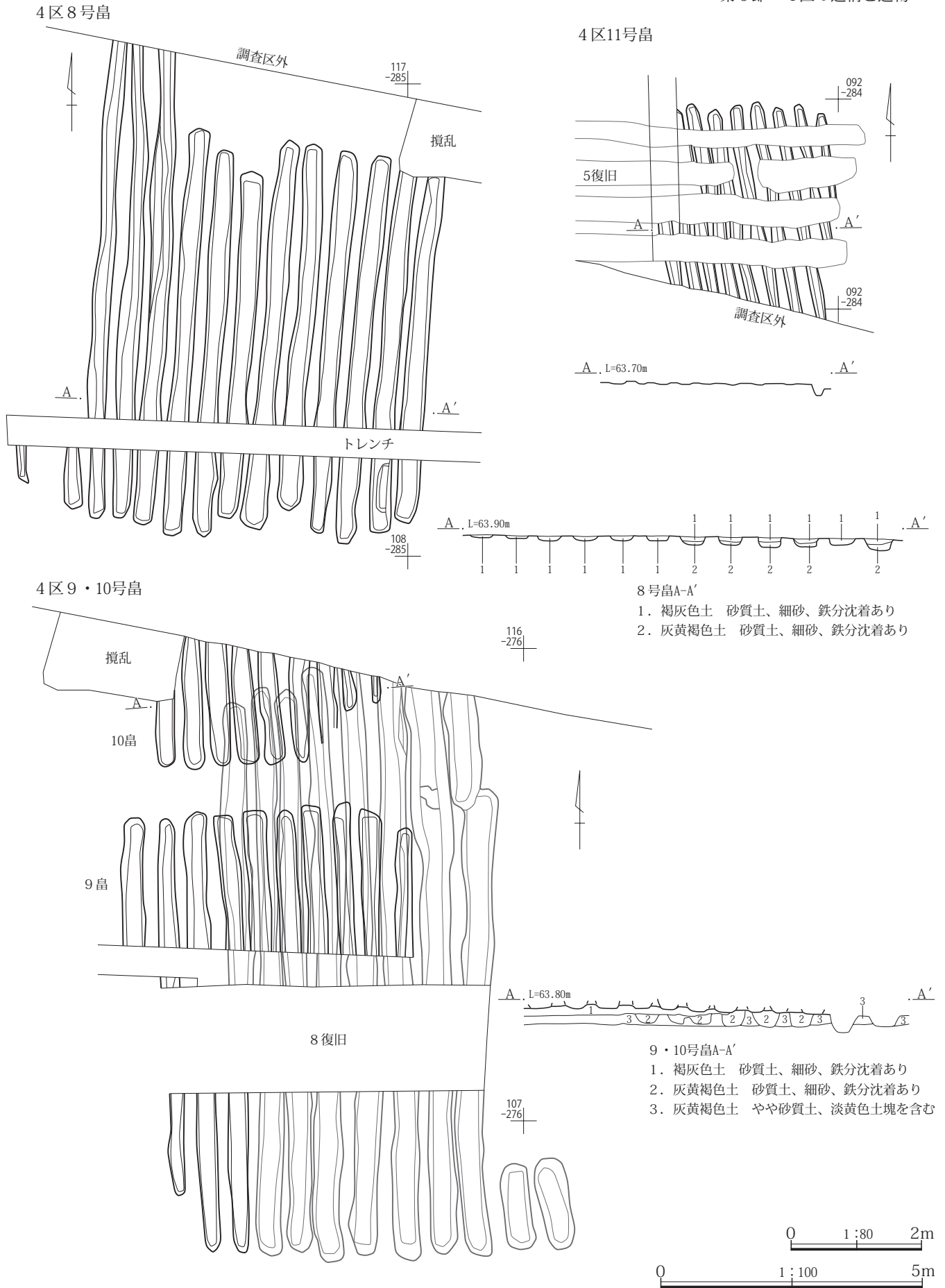
位置：X=104～108、Y=-306～316 サク数：6条  
規模：10.02×3.60m 畝高さ：0.08～0.22m 畝幅：0.13～0.25m サク間隔：0.18～0.68m 畝方位：N-89°-E 重複：なし。遺物：なし。所見：第3面中央部に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが残存する。14号畠が西側に隣接し、畝方位が近似することから、ほぼ同時期に耕作されたと考えられる。断面形状は台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、鍬状工具痕とみられる掘込みが一部に残存する。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土は、褐灰色砂質土による自然埋没と考えられる。時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区14号畠(第85図 PL.24・27)

位置：X=099～108、Y=-316～326 サク数：11条  
規模：9.35×6.50m 畝高さ：0.07～0.19m 畝幅：0.14～0.40m サク間隔：0.11～0.49m 畝方位：N-84°-E 重複：なし。遺物：なし。所見：第3面中央部南側に位置する。畠の南側が調査区外となるため一部のみの確認であるが、さらに南側に広がると想定される。後世の削平によって畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが残存する。断面形状は台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、鍬状工具痕とみられる掘込みが一部に残存する。埋没土は13号畠と同一であり、褐灰色砂質土による自然埋没と考えられる。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。埋没土などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

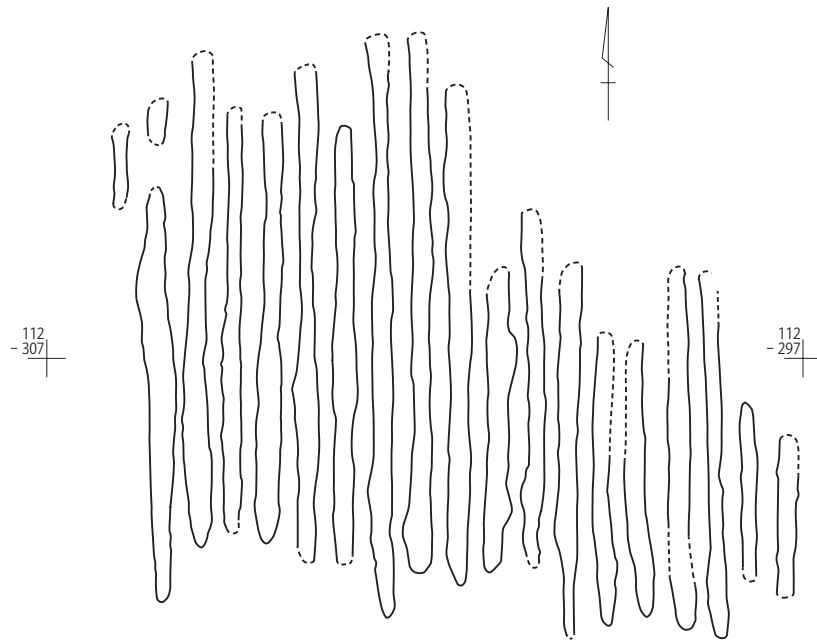
4区15号畠(第86図 PL.24・27)

位置：X=098～109、Y=-273～282 サク数：26条  
規模：10.51×8.25m 畝高さ：— 畝幅：0.08～0.23m サク間隔：0.17～0.68m 畝方位：N-88°-E 重複：9・11・12号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から15号畠が古いと考えられる。遺物：なし。所見：第3面東端部に位置する。畝の高さが全体に低く、残存状況は良好ではない。東西方向に連続するサクが残存するが、長さはそれぞれ不揃いである。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確認できなかった。復旧溝群との重複などから時期は、As-A降下以前と考えられる。

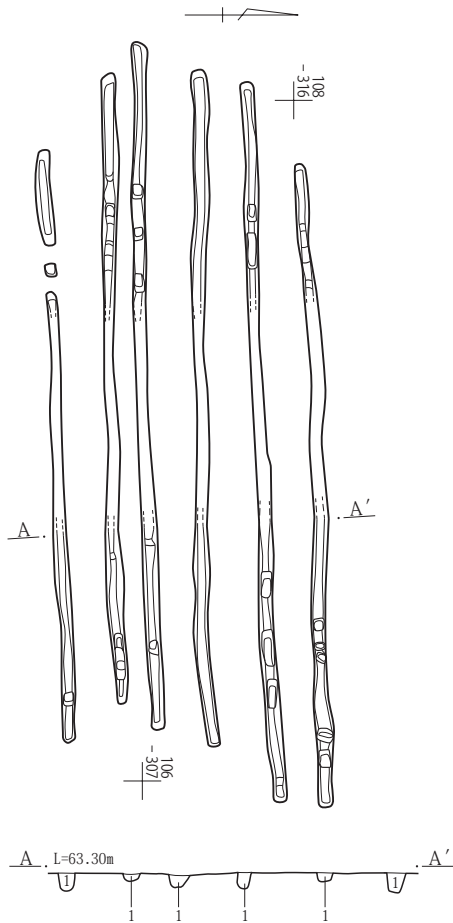


第84図 4区8～11号島

4区12号畠

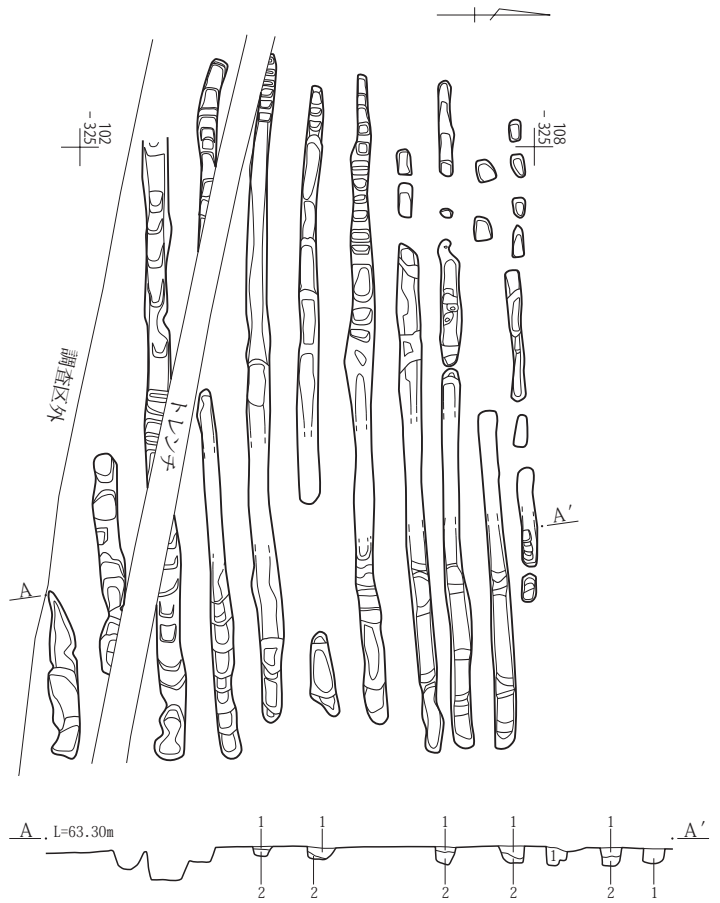


4区13号畠



13号畠A-A'  
1. 褐灰色土 砂質土

4区14号畠



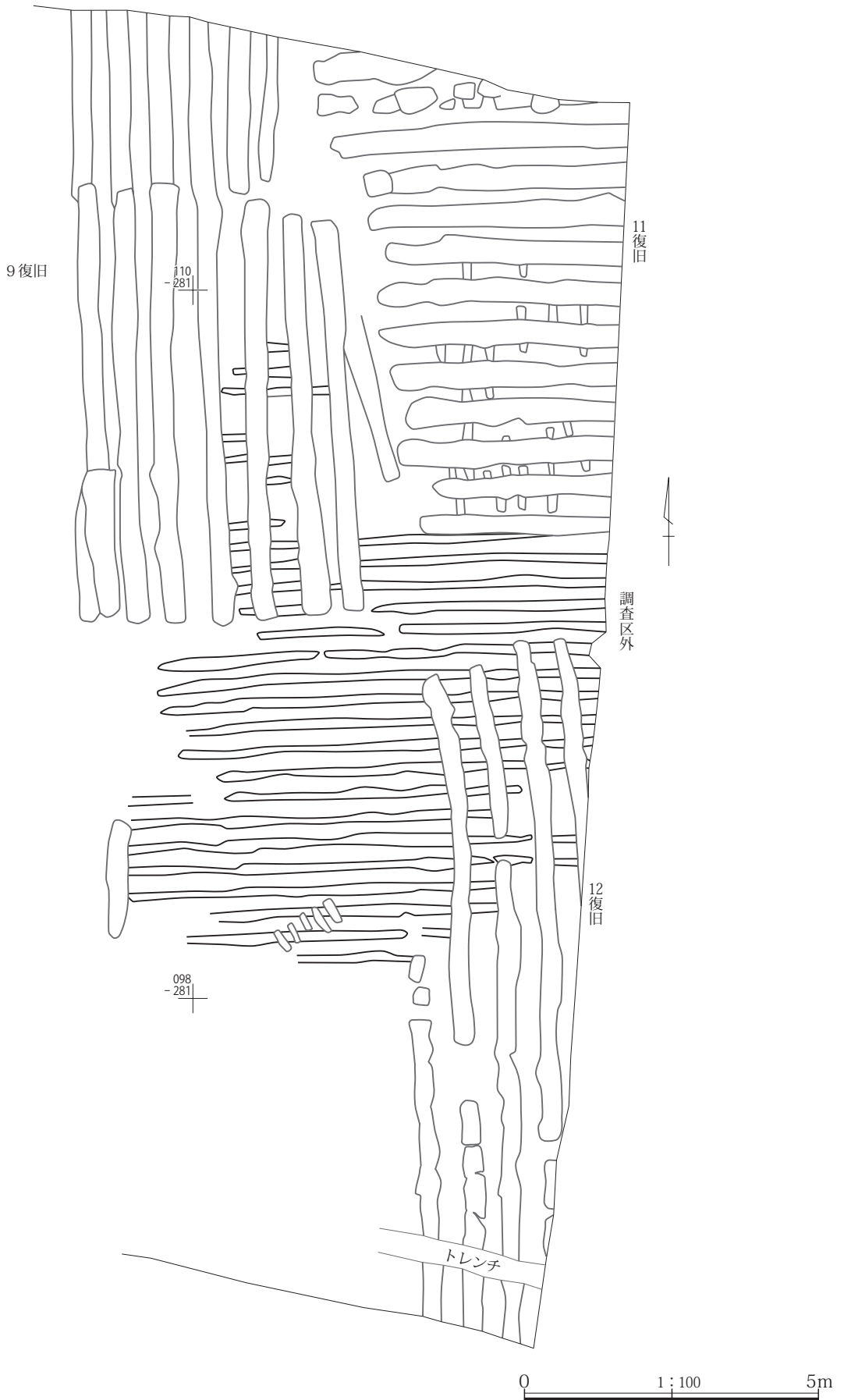
14号畠A-A'  
1. 褐灰色土 砂質土  
2. 褐灰色土と褐色土の混土でおよそ 1 : 1



第85図 4区12～14号畠



4区15号畠



第86図 4区15号畠

## 2 復旧溝群

4区で復旧溝群として一つの単位として捉えることができたものは合わせて17ヶ所である。4区では近世の遺構確認面が3面となるが、復旧溝群が確認できたのは第2面で10ヶ所、第3面で7ヶ所である。4区10号復旧溝群は欠番である。

### 4区1号復旧溝群(第87図 PL.24・25)

**位置：**X=107～132、Y=-335～365 **形状：**溝状  
**確認条数：**29条 **規模：**24.06×13.78m **残存深度：**0.08～0.52m **条間隔：**0.00～0.97m **条方位：**N-5°-W **重複：**なし。 **遺物：**肥前陶器青緑釉皿(第87図1復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器5点、在地系皿2点である。 **所見：**第2面東部に位置し、北側で2・17・18号復旧溝群、南側で6号復旧溝群、東側で7号畠、西側で1号道と隣接する。各溝の断面形状は台形を呈する。底面に僅かな凹凸が認められるがほぼ平坦である。各溝の条方位や幅は、ほぼ同一であるが、1号復旧溝群の南西部で1号道が斜めに走行するため、西側に位置する4条の坑が他より短い。東端の坑が最も短く3.78mを測る。東端3条の坑間隔がやや広く、幅も広いが、他はほぼ均等に掘削している。埋没土は、褐灰色粘質土塊を含む褐灰色砂粒によって人為的に埋戻す。復旧溝群の埋没土や周辺におけるAs-Aの混入の有無を確認するため試料を採取しテフラ分析を実施した。テフラ分析の結果、埋没土中にAs-Aが認められ、周辺でもAs-A混入の可能性が指摘された。詳細については第8章第2節(338頁)を参照されたい。

出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

### 4区2号復旧溝群(第88図 PL.25)

**位置：**X=121～129、Y=-343～353 **形状：**溝状  
**確認条数：**11条 **規模：**26.92×11.78m **残存深度：**0.10～0.21m **条間隔：**0.15～0.55m **条方位：**N-26°-E **重複：**17・18号復旧溝群と重複し、遺構断面観察から2号復旧溝群が最も新しい。 **遺物：**非掲載遺物は、近世の国産焼締磁器1点、在地系皿1点、時期不詳の土器類3点が埋没土から出土した。 **所見：**第2面西部北

側に位置し、調査区外となる北側にさらに広がると想定される。南側では1号復旧溝群と隣接する。4区では、2号復旧溝群と条方位が類似する復旧溝群を確認することができなかった。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は、僅かな凹凸が認められるがほぼ平坦である。各溝の幅は0.26～0.64mを測り、条方位や長さにはばらつきが認められる。復旧溝群の北側は、直線状ではなくやや湾曲する部分も認められる。埋没土は、褐灰色粘質土塊を含む褐灰色砂粒によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

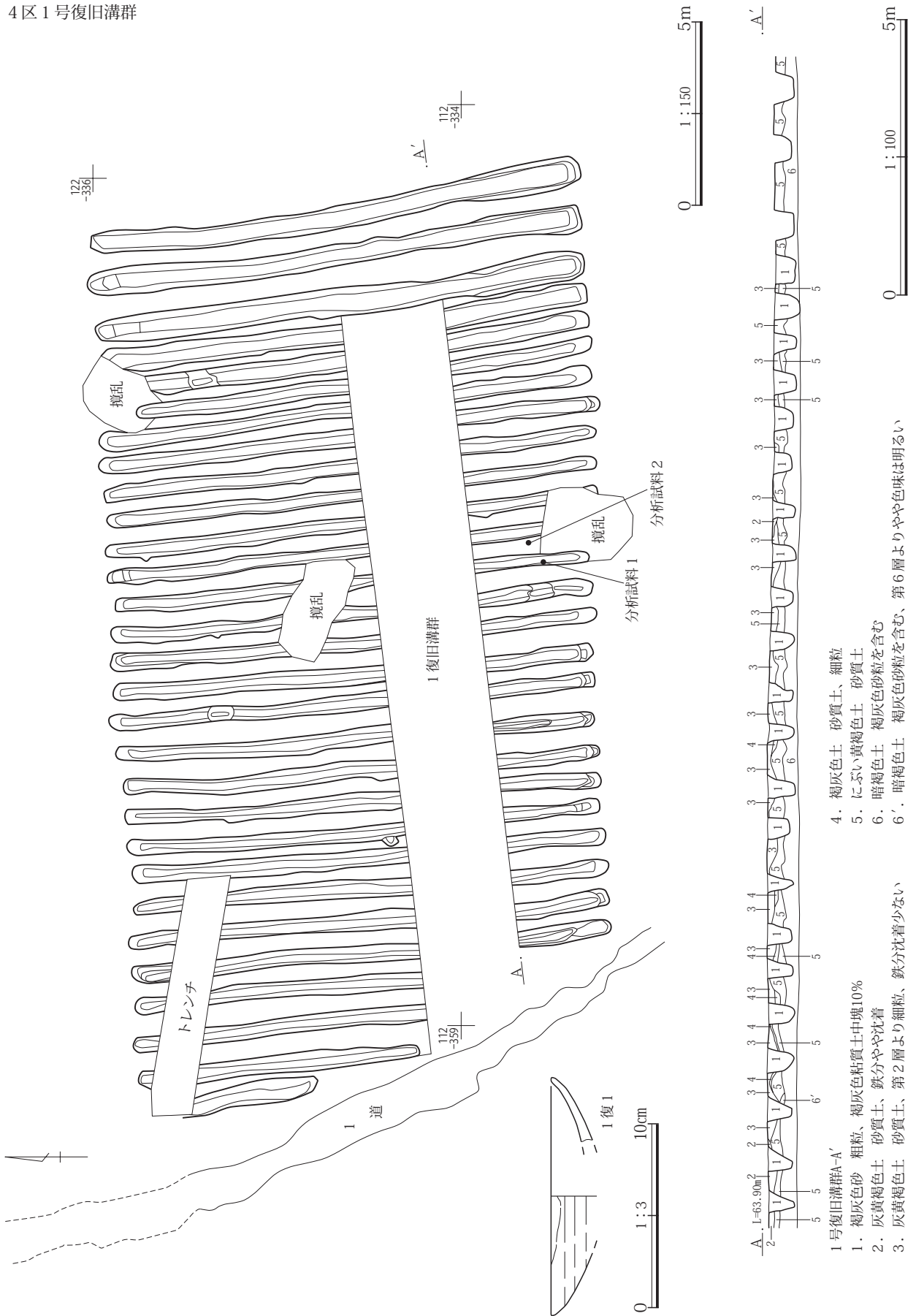
### 4区3号復旧溝群(第89図 PL.23)

**位置：**X=106～123、Y=-360～366 **形状：**溝状  
**確認条数：**22条 **規模：**16.36×6.08m **残存深度：**0.09～0.19m **条間隔：**0.01～0.38m **条方位：**N-73°-E **重複：**5号畠と重複し、遺構確認状況から3号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**第2面西端部に位置する。東側で隣接する1号道に沿って掘削されたと考えられる。西側の調査区である3区では、調査区東端で3区13号復旧溝群を確認した。4区3号復旧溝群は、3区13号復旧溝群と条方位などが類似し、近接することなどから同一の復旧溝群の可能性はある。各溝の断面形状は台形を呈する。底面のレベル差が僅かに認められるが、全体にほぼ平坦となる。各溝の幅は、0.30～0.53mを測る。3区13号復旧溝群は、埋没土からAs-A降下以降に掘削されたと考えられるが、4区3号復旧溝群の掘削時期は、埋没土が不明で特定できない。

### 4区4号復旧溝群(第90図 PL.25)

**位置：**X=110～123、Y=-307～321 **形状：**溝状  
**確認条数：**17条 **規模：**13.58×12.90m **残存深度：**0.17～0.59m **条間隔：**0.04～1.31m **条方位：**N-85°-E **重複：**なし。 **遺物：**志戸呂陶器灯火受皿(第90図4復1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点、時期不詳の土器類4点である。 **所見：**第2面中央部北側に位置する。調査区外の北側にさらに広がると想定され、全体の規模は不明である。北端の2条目の坑と、南側に続く3条及び4条の坑との条間隔が他と比べてやや広いことから、北端の2条の坑は北側にさらに広がる別の復旧溝群となる可能性がある。東

4区1号復旧溝群



- 1号復旧溝群A-A'
1. 褐灰色 粗粒、褐灰色粘質土中塊10%
  2. 灰黄褐色土 砂質土、鉄分やや沈着
  3. 灰黄褐色土 砂質土、第2層より細粒、鉄分沈着少ない
  4. 褐灰色土 砂質土、細粒
  5. にぶい黄褐色土 砂質土
  6. 暗褐色土 褐灰色砂粒を含む
  - 6'. 暗褐色土 褐灰色砂粒を含む、第6層よりやや色味は明るい

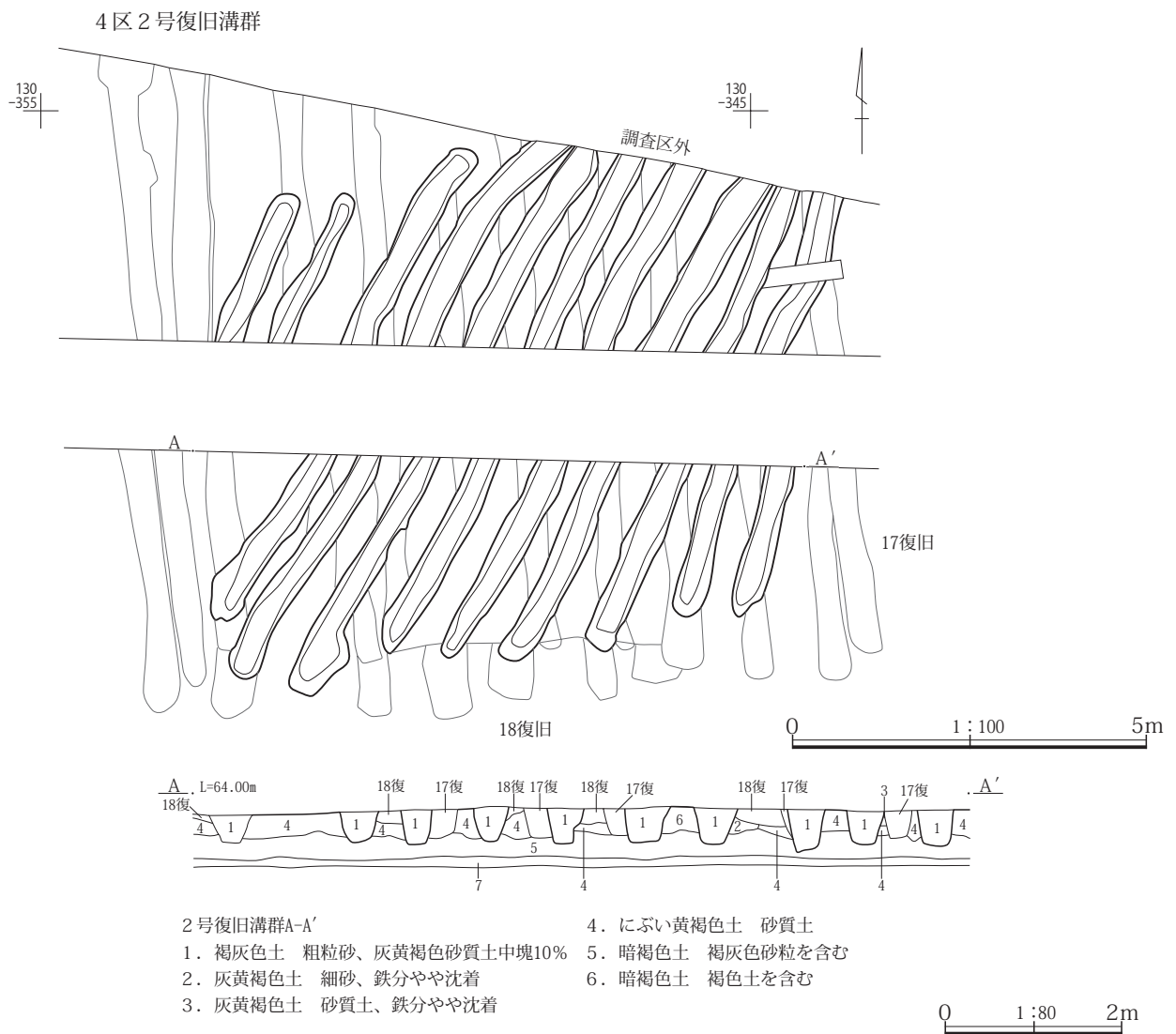
第87図 4区1号復旧溝群と出土遺物

側で12号畠と隣接し、西側で隣接する7号畠とは条方位が近似する。各溝の断面形状は台形や椀形を呈する。底面は南側がほぼ平坦であるが、北側にかけて底面のレベル差が僅かに認められる。各溝の条方位や長さはほぼ同一である。埋没土は、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区5号復旧溝群(第91図 PL.23・25・116)

位置：X=092～107、Y=-283～293 形状：溝状  
 確認条数：19条 規模：14.88×10.46m 残存深度：0.10～0.57m 条間隔：0.08～1.10m 条方位：N-90°  
 重複：11号畠と重複し、遺構確認状況から5号復旧溝群が新しいと考えられる。遺物：丹波・信楽陶器すり鉢(第91図5復1)、銅製品キセルの雁首(第91図5復3)、砥

石(第91図5復2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器3点、国産施釉陶器5点、時期不詳の土器類1点である。 所見：第2面東部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに南側に広がると想定される。東側で8号復旧溝群、北側で8・9号畠と隣接する。各溝の長さはほぼ同一であるが、南端から4条目と5条目の坑の間隔が他と比べてやや広いことから別の単位の復旧溝群となる可能性もある。各溝の断面形状は台形及び椀形を呈する。底面は西端や東端がやや高く、段差が認められる坑もある。中央部は高低差が僅かに認められるがほぼ平坦である。底面の一部で工具痕とみられる掘込みが認められる。埋没土は、褐灰色土粒を多量に含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。



第88図 4区2号復旧溝群



4区6号復旧溝群(第92図 PL.25・26・116)

位置：X=100～108、Y=-326～355 形状：溝状  
 確認条数：47条 規模：26.48×8.06m 残存深度：0.19～0.44m 条間隔：0.00～0.38m 条方位：N-5°-W 重複：なし。  
 遺物：肥前陶器器手碗(第92図6復1)、鉄製品釘(第92図6復2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器3点、時期不詳の土器類3点である。  
 所見：第2面南西部に位置する。調査区外となる南側にさらに広がると想定され、全体の規模は不明である。北側で1号復旧溝群、東側で6号畠と隣接する。西側の4条は近接する1号道とほぼ並行するよう掘削されていることから、1号道を意識して掘削していることが判る。北側の1号復旧溝群とは条方位が同一であり、条間隔や残存深度が類似することなどから一連の復旧溝群として同時期に掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形その他、底面が狭く壁が斜めに立ち上がる。底面は北端に段差が認められる坑が多く、中央部はレベル差が少なくほぼ平坦である。埋没土は、褐灰色粘土中塊を含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

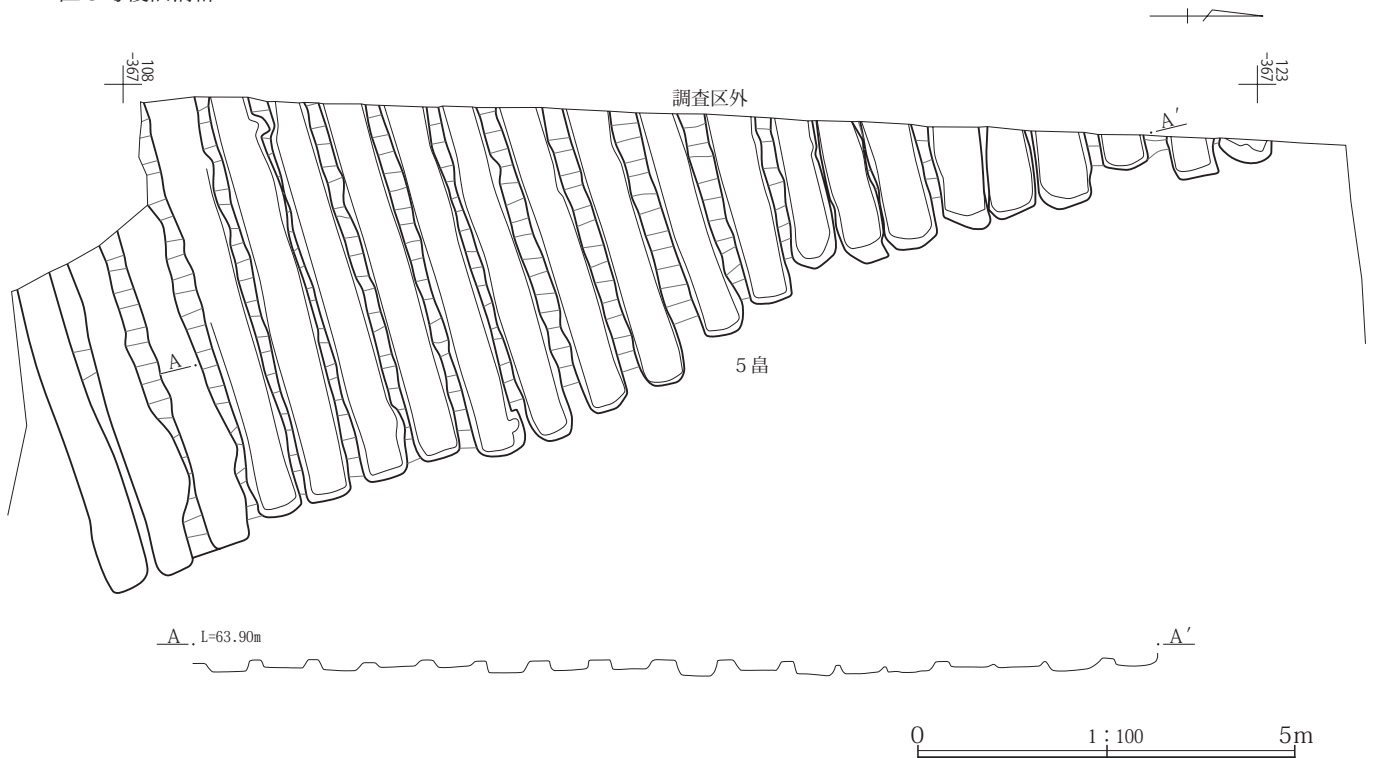
4区7号復旧溝群(第92図 PL.23・26)

位置：X=109～113、Y=-273～275 形状：溝状  
 確認条数：1条 規模：5.50×1.28m 残存深度：0.19～0.25m 条間隔：— 条方位：N-5°-W 重複：なし。  
 遺物：なし。 所見：第2面北東部に位置する。東側が調査区外となるため、全体の規模は不明である。復旧溝は1条のみを確認したが、調査区境となる東壁に復旧溝の一部が認められることから復旧溝群になると判断した。断面形状は浅い台形を呈する。底面は北端に比べ南端が約10cm低く、緩やかに傾斜するがほぼ平坦である。埋没土は、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区8号復旧溝群(第92図 PL.23)

位置：X=104～115、Y=-275～281 形状：溝状  
 確認条数：10条 規模：11.72×6.98m 残存深度：0.13～0.39m 条間隔：0.05～0.30m 条方位：N-0° 重複：9・10号畠と重複し、遺構確認状況から8号復旧溝群が古い。 遺物：非掲載遺物は、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器2点、時期不詳の土器類1点が埋没土から

4区3号復旧溝群



第89図 4区3号復旧溝群

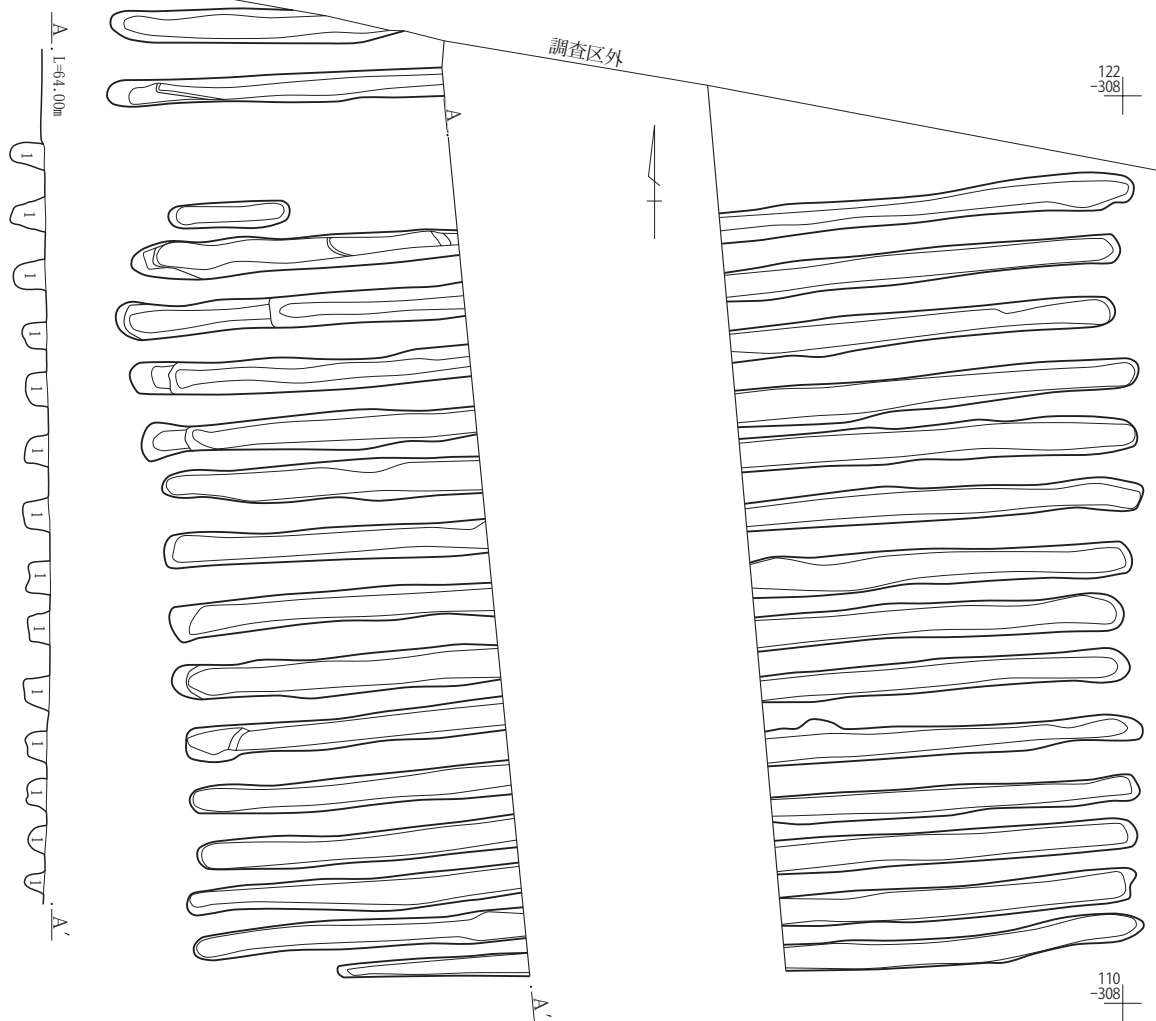
出土した。 **所見**：第2面北東部に位置し北側が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。下層となる3面では、ほぼ同位置から条方位が同一となる9号復旧溝群を確認した。東側で7号復旧溝群、西側で8号畠と隣接する。各溝の断面形状は台形及び椀形を呈する。底面は高低差が少なくほぼ平坦である。各溝の長さは、ほぼ同一であるが、東端の2条の坑が短く1.74mを測る。埋没土は、褐灰色粘質土塊を含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考え

られる。

4区9号復旧溝群(第93図 PL.27)

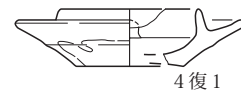
**位置**：X=104～114、Y=-278～283 **形状**：溝状  
**確認条数**：7条 **規模**：10.42×4.72m **残存深度**：0.02～0.22m **条間隔**：0.09～0.54m **条方位**：N-0°  
**重複**：15号畠と重複し、遺構確認状況から9号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物**：なし。 **所見**：第3面北東部に位置し北側が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。上層

4区4号復旧溝群

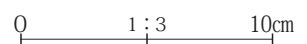
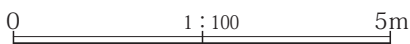


4号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 砂質土、細粒、炭化物を含む

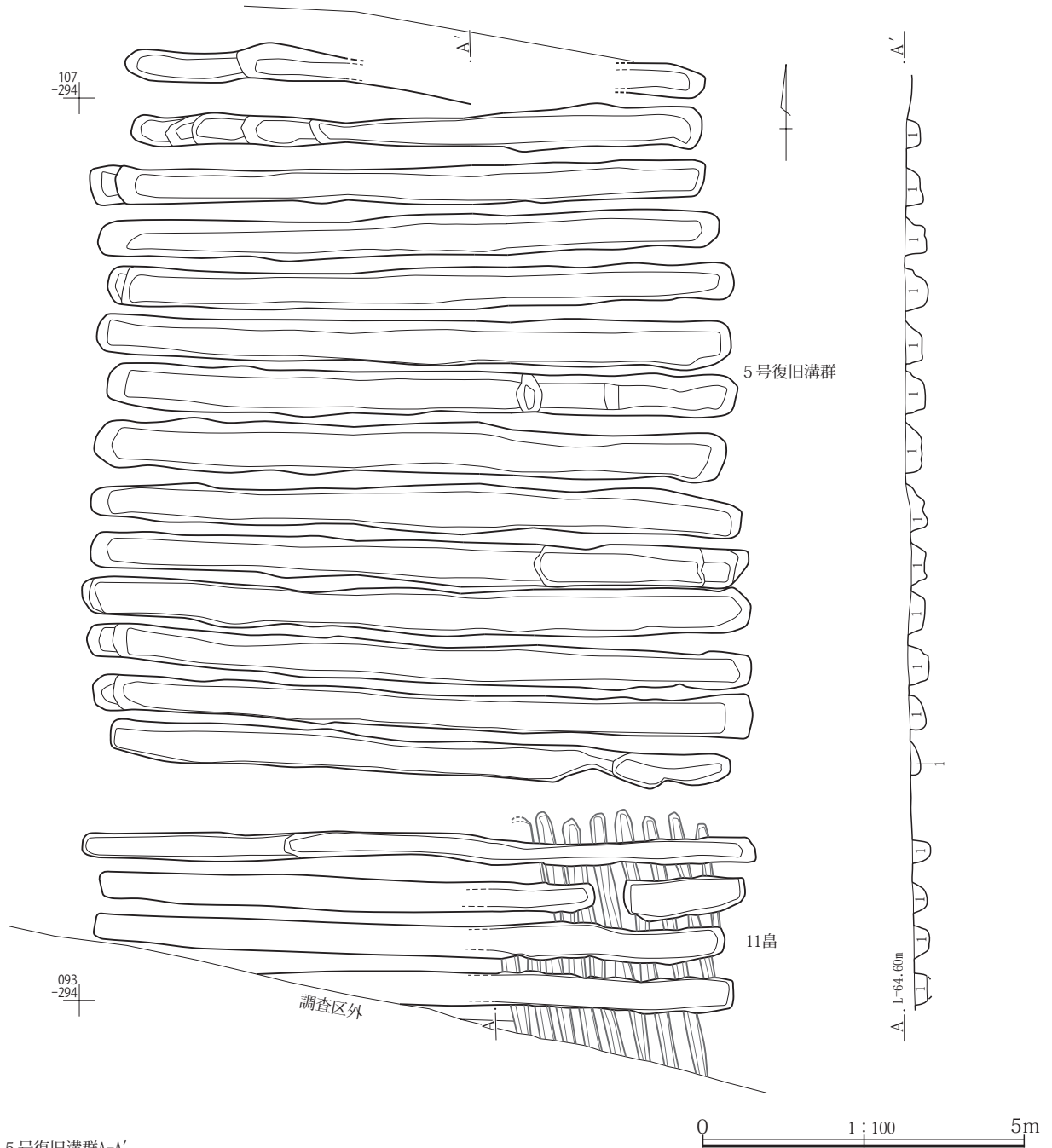


4復1



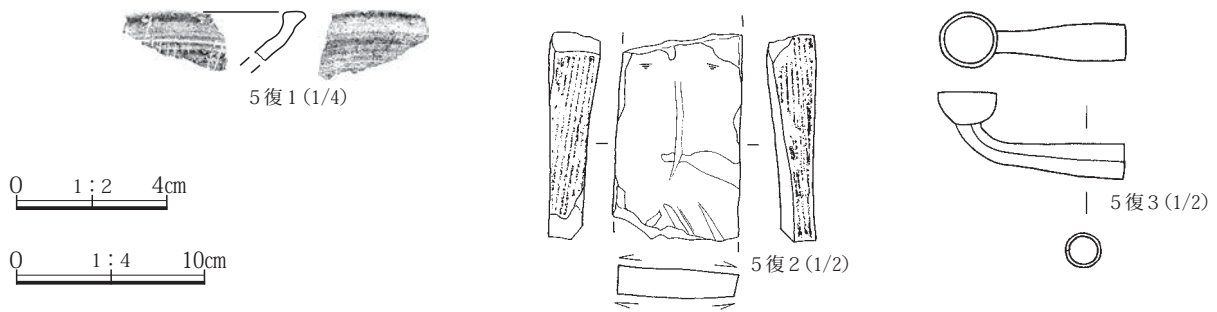
第90図 4区4号復旧溝群と出土遺物

4区5号復旧溝群



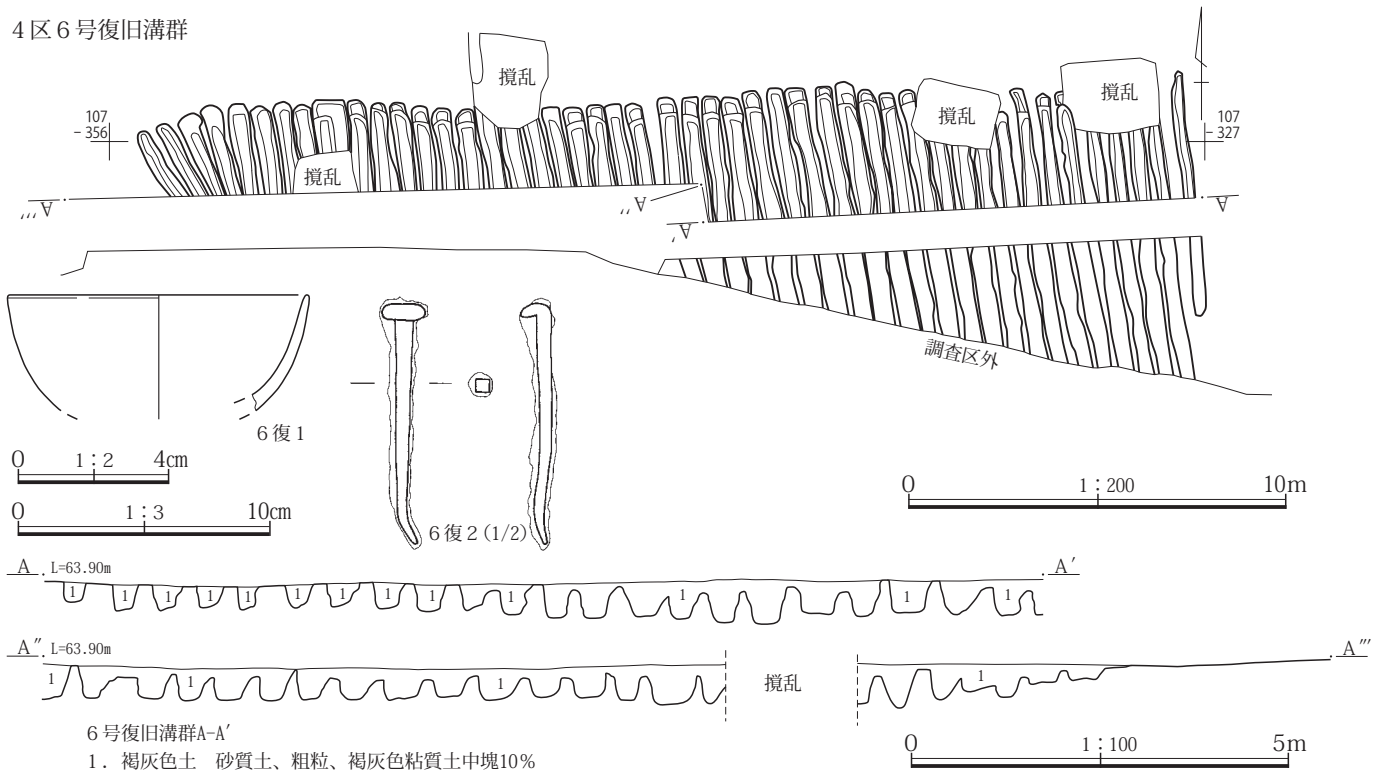
5号復旧溝群A-A'

1. 褐灰色土 砂質土、灰褐色土粒多量

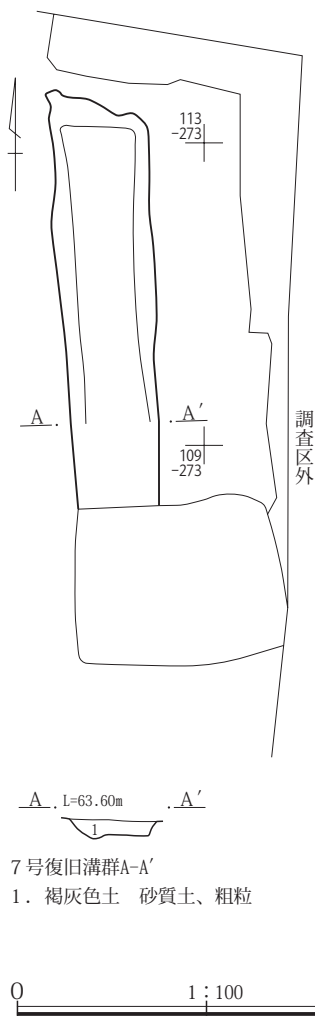


第91図 4区5号復旧溝群と出土遺物

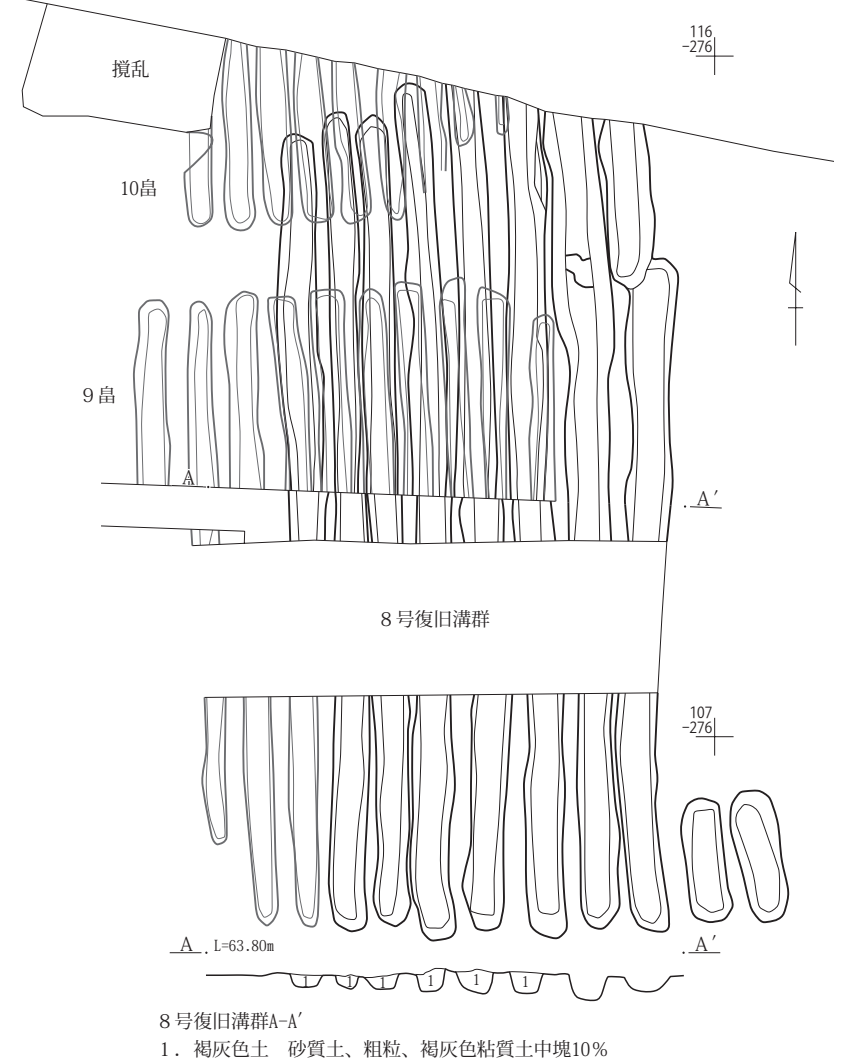
4区6号復旧溝群



4区7号復旧溝群



4区8号復旧溝群



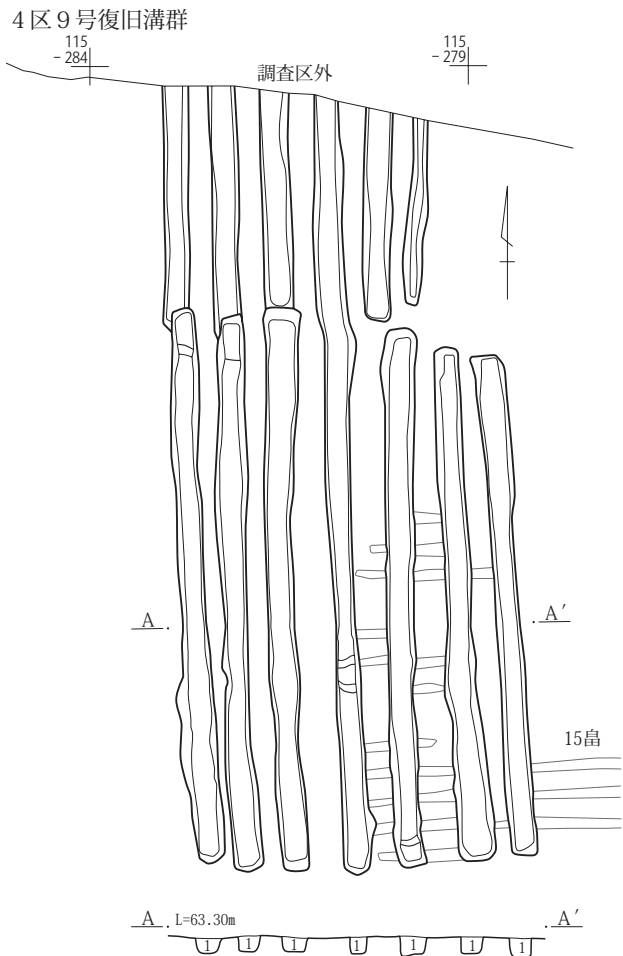
第92図 4区6号復旧溝群と出土遺物・7・8号復旧溝群



の第2面では、ほぼ同位置から条方位が同一となる8号復旧溝群を確認している。東側で条方位が異なる11号復旧溝群と隣接する。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は北端と南端の比高約10cmであり、緩やかに南側に傾斜するがほぼ平坦である。各溝の長さはほぼ同一と考えられるが、東側の2条の坑は6.78mを測り、他の坑と比べて短い。隣接する11号復旧溝群との重複を避けるため短く掘削したと考えられる。埋没土は、灰褐色砂質土塊を含む褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区11号復旧溝群(第93図 PL.27)

位置：X=105～114、Y=-273～278 形状：溝状  
 確認条数：13条 規模：8.24×5.28m 残存深度：0.08～0.24m 条間隔：0.08～0.37m 条方位：N-90°

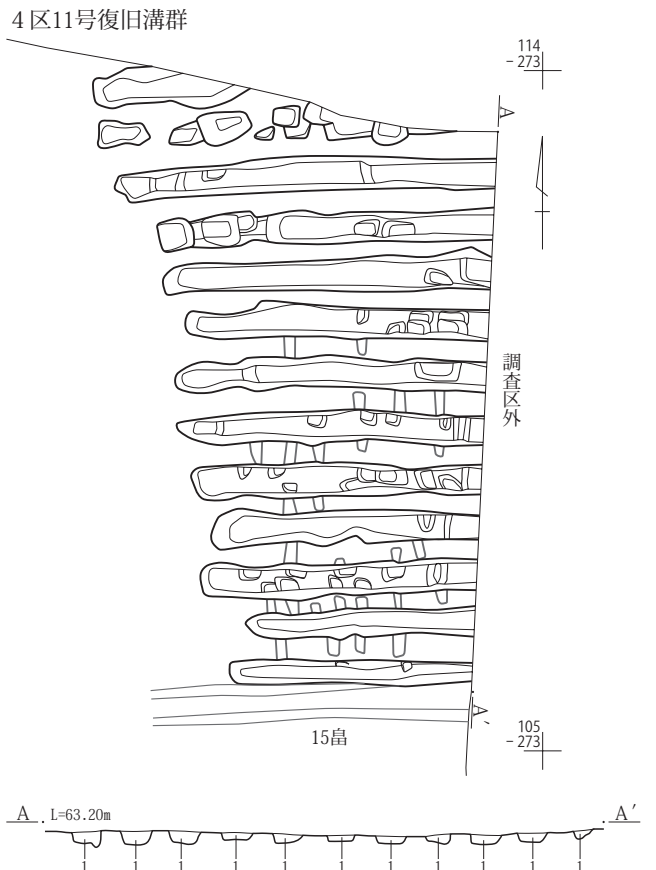


9号復旧溝群A-A'  
 1. 褐色土 砂質土、灰褐色砂質土塊を含む

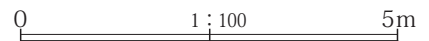
**重複**：15号畠と重複し、遺構確認状況から11号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物**：なし。 **所見**：第3面北東部に位置する。全体の規模は不明であるが、調査区外となる北側及び東側にさらに広がると想定され、西側で条方位が異なる9号復旧溝群、南側でも条方位が異なる12号復旧溝群と隣接する。各溝の断面形状は浅い台形を呈する。底面の高低差は僅かでありほぼ平坦であるが、一部に掘削痕とみられる掘込みが認められる。各溝の西端が揃わず、長さにはばらつきが認められる。埋没土は、にぶい褐色土を含む灰褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区12号復旧溝群(第94図 PL.24・27)

位置：X=092～104、Y=-274～277 形状：溝状



11号復旧溝群A-A'  
 1. 灰褐色土 砂質土、にぶい褐色土を含む



第93図 4区9・11号復旧溝群

**確認条数：**5条 **規模：**1.74×3.34m **残存深度：**0.04～0.19m **条間隔：**0.20～0.52m **条方位：**N-3°-W **重複：**15号畠と重複し、遺構確認状況から12号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**第3面南東部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに東側及び南側に広がると想定される。西側の13号復旧溝群と隣接し、長さが異なるが条方位が類似することから一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。各溝の断面形状は浅い台形を呈する。底面は北端と南端との比高約10cmであり、南側が低い。底面に掘削痕とみられる小ピット条の掘込みが認められる。埋没土は、にぶい褐色土を含む灰褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

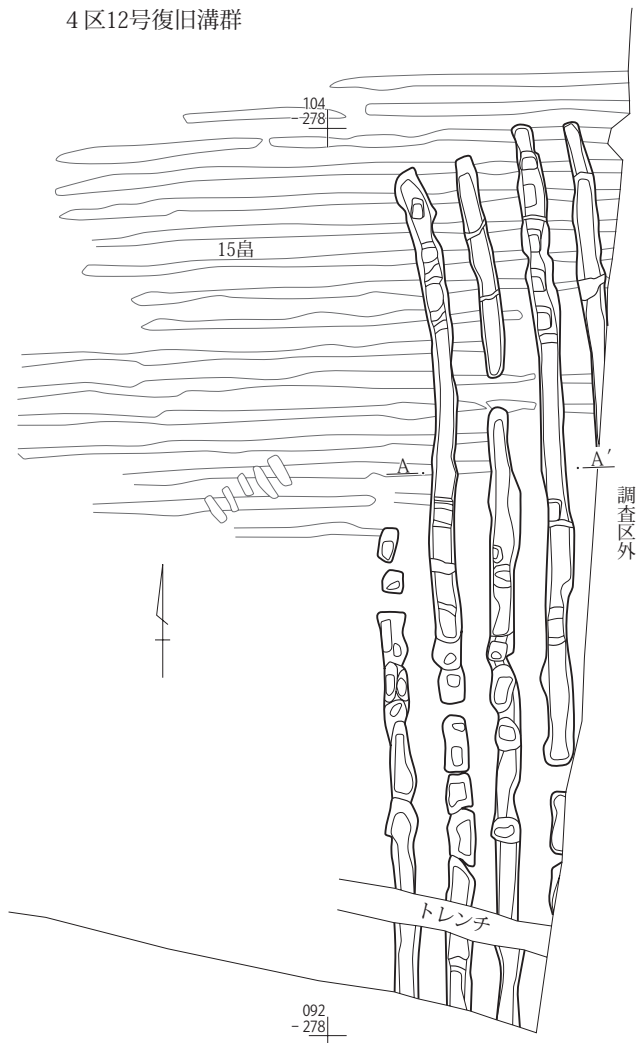
**4区13号復旧溝群**(第94図 PL.27)

**位置：**X=093～098、Y=-278～283 **形状：**溝状 **確認条数：**7条 **規模：**5.24×4.52m **残存深度：**0.04～0.20m **条間隔：**0.23～0.61m **条方位：**N-0° **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第3面南東部に位置する。12号復旧溝群と隣接し、長さが異なるが条方位が類似することから一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。残存状況はやや不良であるが、各溝の断面形状は浅い台形を呈する。底面には掘削痕とみられる小ピット条の掘込みが認められる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

**4区14号復旧溝群**(第95図 PL.27)

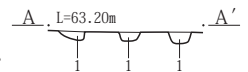
**位置：**X=096～108、Y=-284～293 **形状：**溝状 **確認条数：**15条 **規模：**11.88×8.62m **残存深度：**0.10～0.34m **条間隔：**0.09～0.46m **条方位：**N-0° **重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第3面東部に位置する。西側で15号復旧溝群と隣接するし、規模は異なるが条方位が同一であることから一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形を呈する。底面の高低差は少なくほぼ平坦である。各溝の条方位や幅は、ほぼ同一であるが長さにややばらつきが認められる。埋没土は、にぶい褐色土を含む灰褐色砂質土によ

4区12号復旧溝群

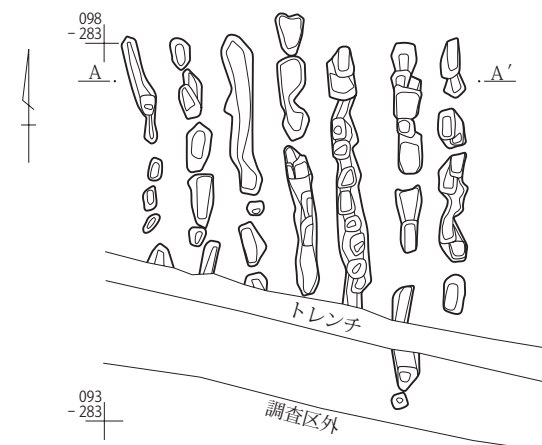


12号復旧溝群A-A'

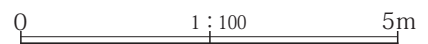
1. 灰褐色土 砂質土、にぶい褐色土を含む



4区13号復旧溝群

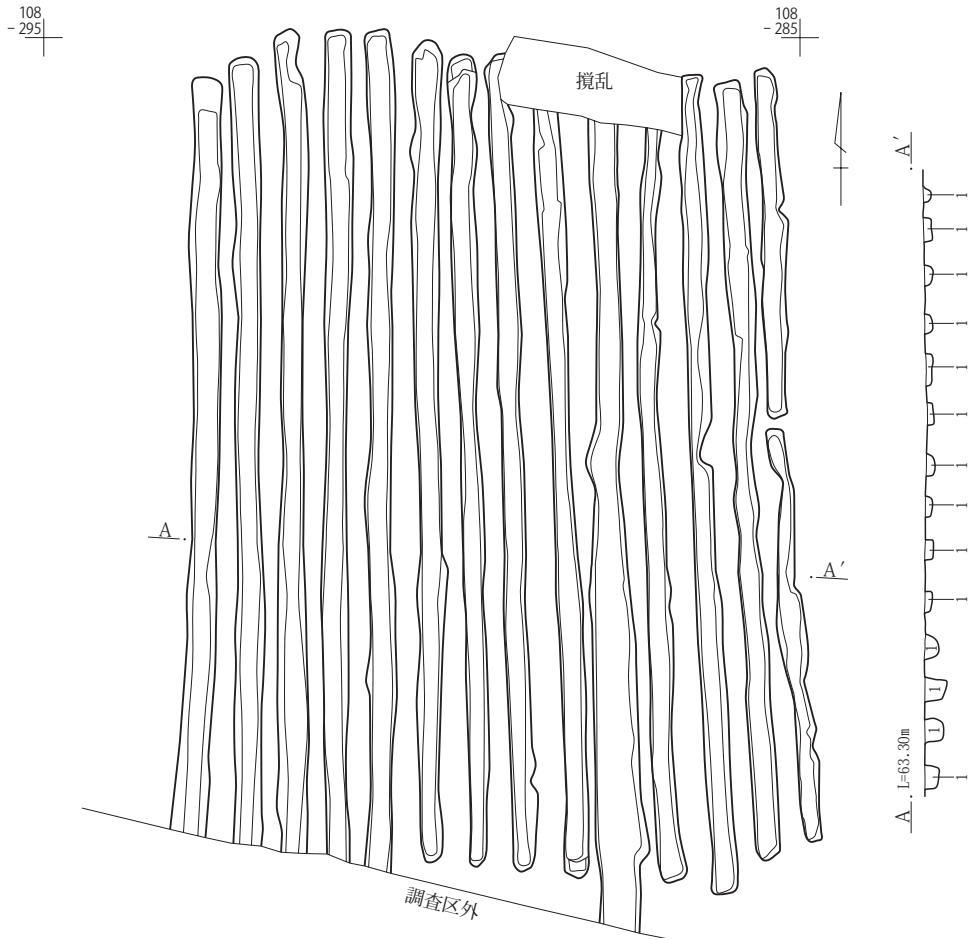


A-A', L=63.20m

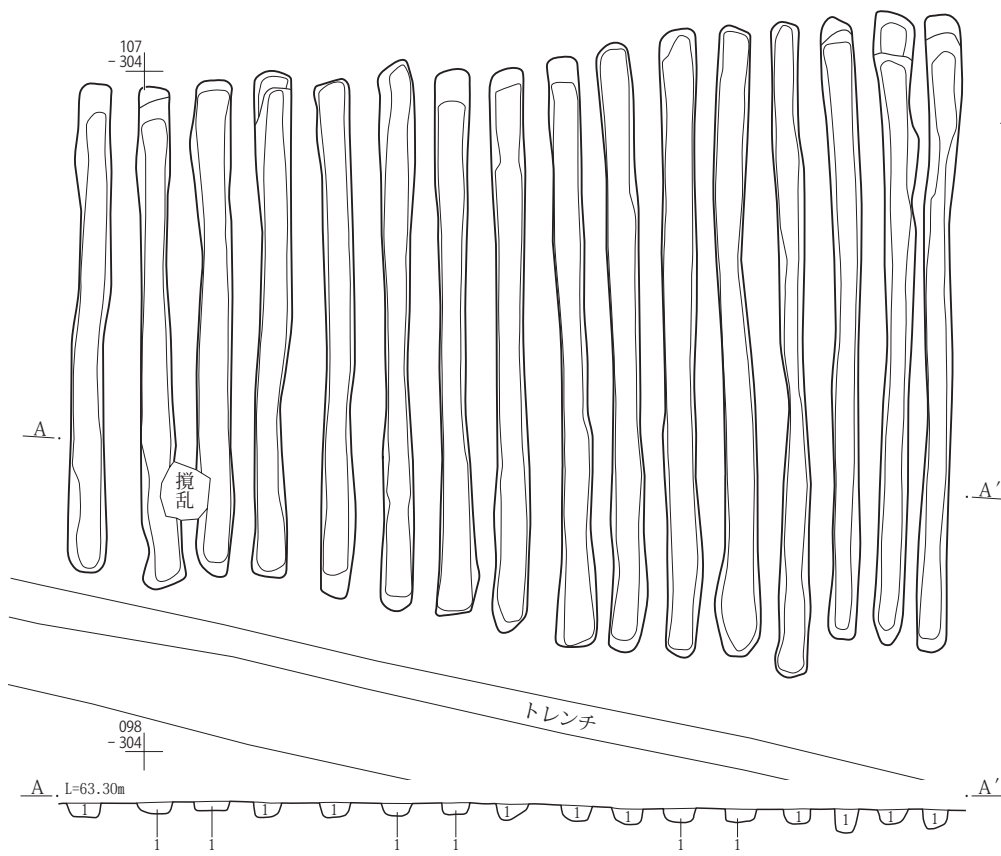


第94図 4区12・13号復旧溝群

4区14号復旧溝群



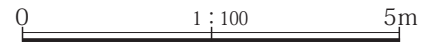
4区15号復旧溝群



14・15号復旧溝群A-A'

1. 灰褐色土 砂質土、にぶい褐色土を含む

第95図 4区14・15号復旧溝群



て人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区15号復旧溝群(第95図 PL.27)

**位置：**X=099～107、Y=-293～304 **形状：**溝状  
**確認条数：**16条 **規模：**11.74×8.86m **残存深度：**0.14～0.40m **条間隔：**0.11～0.59m **条方位：**N-0°  
**重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第3面中央部に位置する。東側で14号復旧溝群と、西側で16号復旧溝群と隣接する。14号復旧溝群とは、規模は異なるが条方位が同一であることから一連の復旧溝群として掘削された可能性がある。各溝の断面形状は台形を呈する。底面の高低差によって僅かな凹凸が認められるがほぼ平坦である。東側に比べて西側の坑の長さが徐々に短くなり、全体的に不揃いである。埋没土は、にぶい褐色土を含む灰褐色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

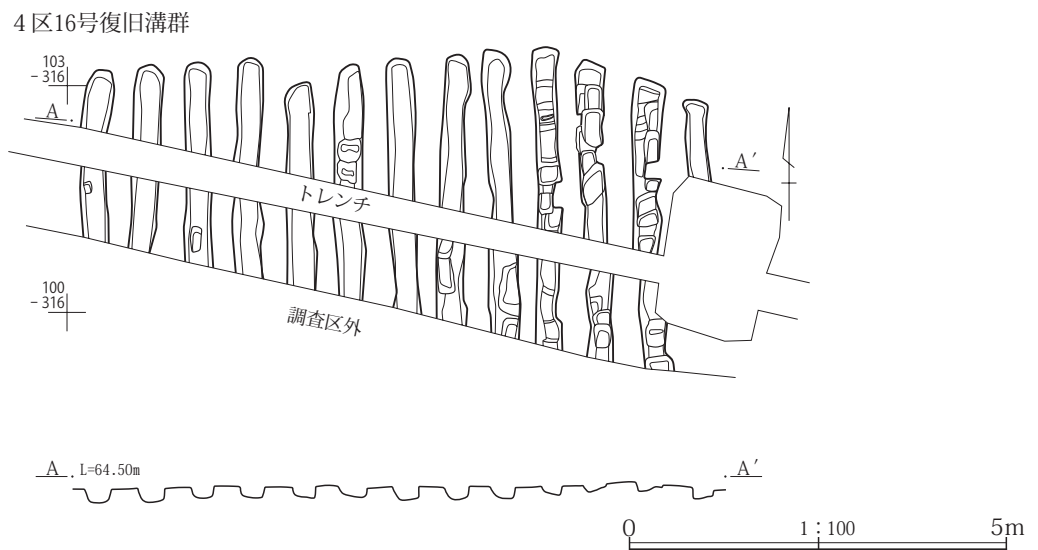
4区16号復旧溝群(第96図 PL.24)

**位置：**X=099～103、Y=-307～315 **形状：**溝状  
**確認条数：**13条 **規模：**8.34×4.36m **残存深度：**0.11～0.21m **条間隔：**0.21～0.44m **条方位：**N-0°  
**重複：**なし。 **遺物：**なし。 **所見：**第3面中央部南側

に位置する。調査区外となるため、さらに南側に広がると想定され、全体の規模は不明である。東側で15号畠、北側で13号畠と隣接する。15号復旧溝群とは条方位が同一である。各溝の断面形状は台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、東側の一部で掘削痕とみられる掘込みが認められる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

4区17号復旧溝群(第97図 PL.25)

**位置：**X=121～132、Y=-336～365 **形状：**溝状  
**確認条数：**32条 **規模：**26.66×11.49m **残存深度：**0.05～0.49m **条間隔：**0.00～1.50m **条方位：**N-10°-W  
**重複：**2・18号復旧溝群と重複し、2号復旧溝群より古く、18号復旧溝群より新しい。 **遺物：**なし。 **所見：**第2面西部北側に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。西側で1号道、南側で1号復旧溝群に隣接する。各溝の断面形状は台形を呈する。底面は高低差によって僅かな凹凸が認められるがほぼ平坦である。各溝の条方位や長さは、ほぼ同一であると考えられるが、条間隔が東側に従って狭くなる。埋没土は、褐灰色粘質土塊を含む褐灰色砂粒によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以前と考えられる。

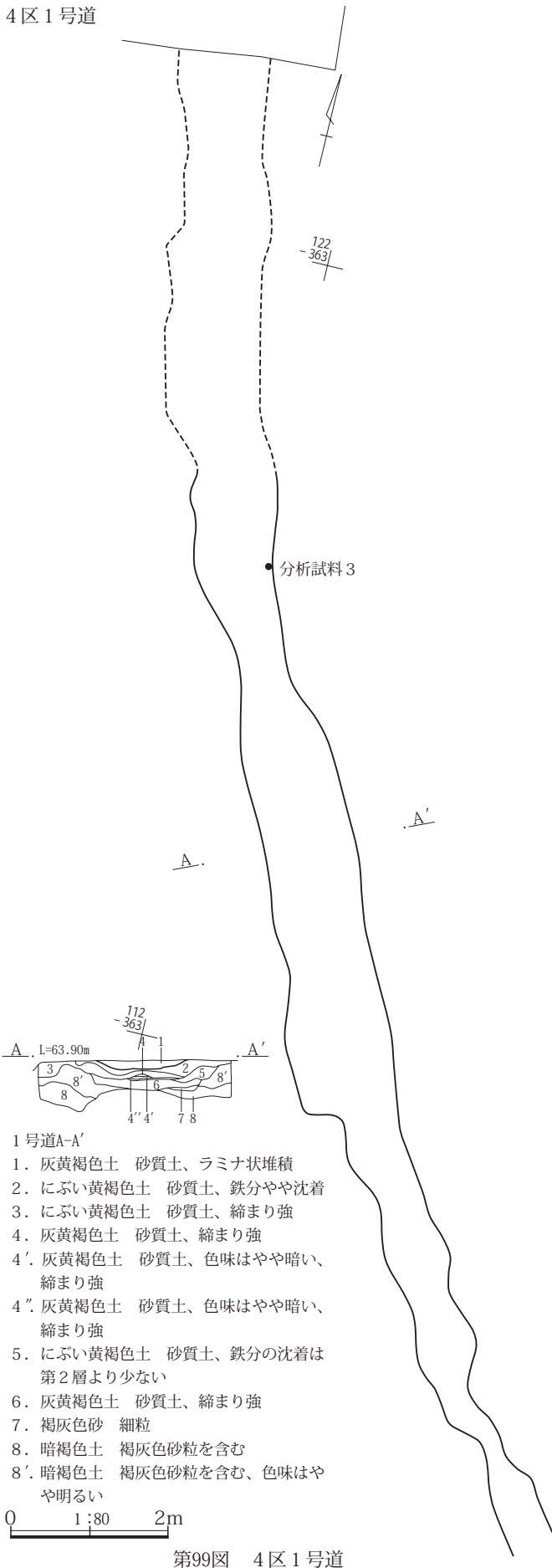


第96図 4区16号復旧溝群









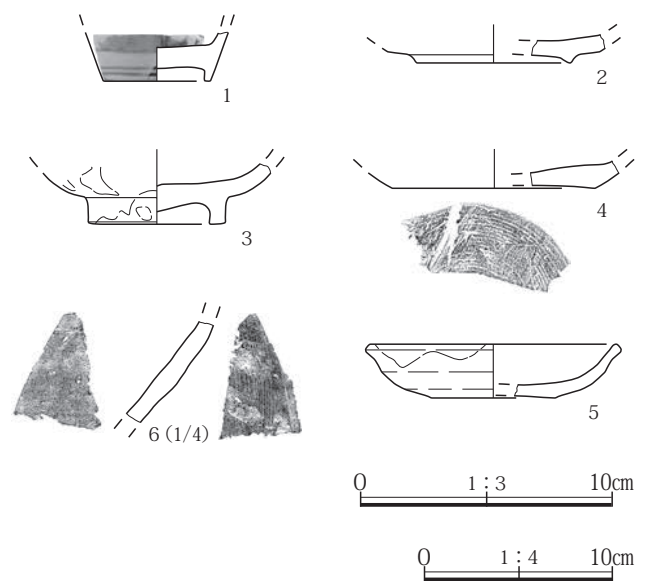
1号道の表面におけるAs-Aの混入の有無を確認するため試料を採取しテフラ分析を実施した。テフラ分析の結果、テフラ粒子が認められ、As-Aの混入の可能性が指摘された。詳細については第8章第2節(338頁)を参照されたい。

1号道の表面に認められたAs-Aは上層からの混入の可能性もあるが、As-A降下以前から継続して使用していたと考えられる。

#### 4 遺構外の出土遺物(第100図)

4区において近世の遺構を確認した第1面～第3面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、第1・2面の遺構確認面から、肥前磁器猪口(第100図1)、瀬戸・美濃陶器碗(第100図3)、志戸呂陶器灯火皿(第100図5)、第3面の遺構確認面から、瀬戸・美濃陶器志野皿(第100図2)、在地系土器皿(第100図4)、常滑陶器甕か(第100図6)が出土した。非掲載遺物は、1面から近世の国産磁器1点、国産施釉陶器2点、在地系焙烙・鍋4点、在地系皿2点、時期不詳土器1点、2面から土師器4点(大型製品2、小型製品2)、須恵器2点(大型製品1、小型製品1)、国産施釉陶器1点、3面から中世の在地系皿1点、近世の国産施釉陶器1点が出土した。



第100図 4区遺構外の出土遺物

## 第6節 5区の遺構と遺物

5区は、東西に走行する道路を隔て、1区北側に位置する調査区であり、本遺跡の西端の調査区となる。調査区は略三角形を呈する。調査区中央部で南北方向に走行する用水路によって西側と東側の調査区に分ける。遺構確認面は、As-A以降の洪水層の下層である基本土層第4層上面として第1面の調査を行った。西側では、後世の削平のため遺構の残存状況は良好ではなく、溝を確認できなかった。東側では、自然災害からの復旧のために掘削された復旧溝群の他、畠、溝を確認した。

### 1 復旧溝群

5区第1面において、復旧溝群として一つの単位として捉えることができたものは、合わせて5ヶ所である。西側の調査区東端部と東側の調査区においてそれぞれ調査を行った。

#### 5区1号復旧溝群(第102図 PL.30・116)

**位置：**X=185～189、Y=-603～615 **形状：**溝状  
**確認条数：**21条 **規模：**11.82×3.28m **残存深度：**0.04～0.29m **条間隔：**0.02～0.24m **条方位：**N-0°  
**重複：**2号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から1号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**志戸呂陶器灯火受皿(第102図1復1)、鉄製品不詳(第102図1復2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、近世の国産磁器2点、在地系焙烙・鍋1点である。 **所見：**第1面東側調査区の東端部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側、東側、南側に広がると想定される。東西方向に走行する道路を挟み、調査区南側に位置する1区では、5区1号復旧溝群の延長部分の溝群を確認できなかった。各溝の断面形状は椀形を呈する。底面は高低差が少なくほぼ平坦である。各溝の条方位は、ほぼ均等であるが、各溝の幅は0.27～0.95mを測り、条間隔とともにややばらつきが認められる。埋没土は、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aを確認することができなかった。出土遺物や遺構確認状況などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

#### 5区2号復旧溝群(第102図 PL.30)

**位置：**X=186～189、Y=-603～615 **形状：**溝状  
**確認条数：**5条 **規模：**12.08×3.28m **残存深度：**0.02～0.24m **条間隔：**0.09～0.37m **条方位：**N-90°  
**重複：**1号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から2号復旧溝群が古いと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面東側調査区の東端部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側、東側、南側に広がると想定される。1号復旧溝群との重複のため、2号復旧溝群は僅かに残存するにすぎない。各溝の断面形状は台形を呈する。底面に僅かな高低差が認められるが、ほぼ平坦である。埋没土は、As-Aを僅かに含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく、時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

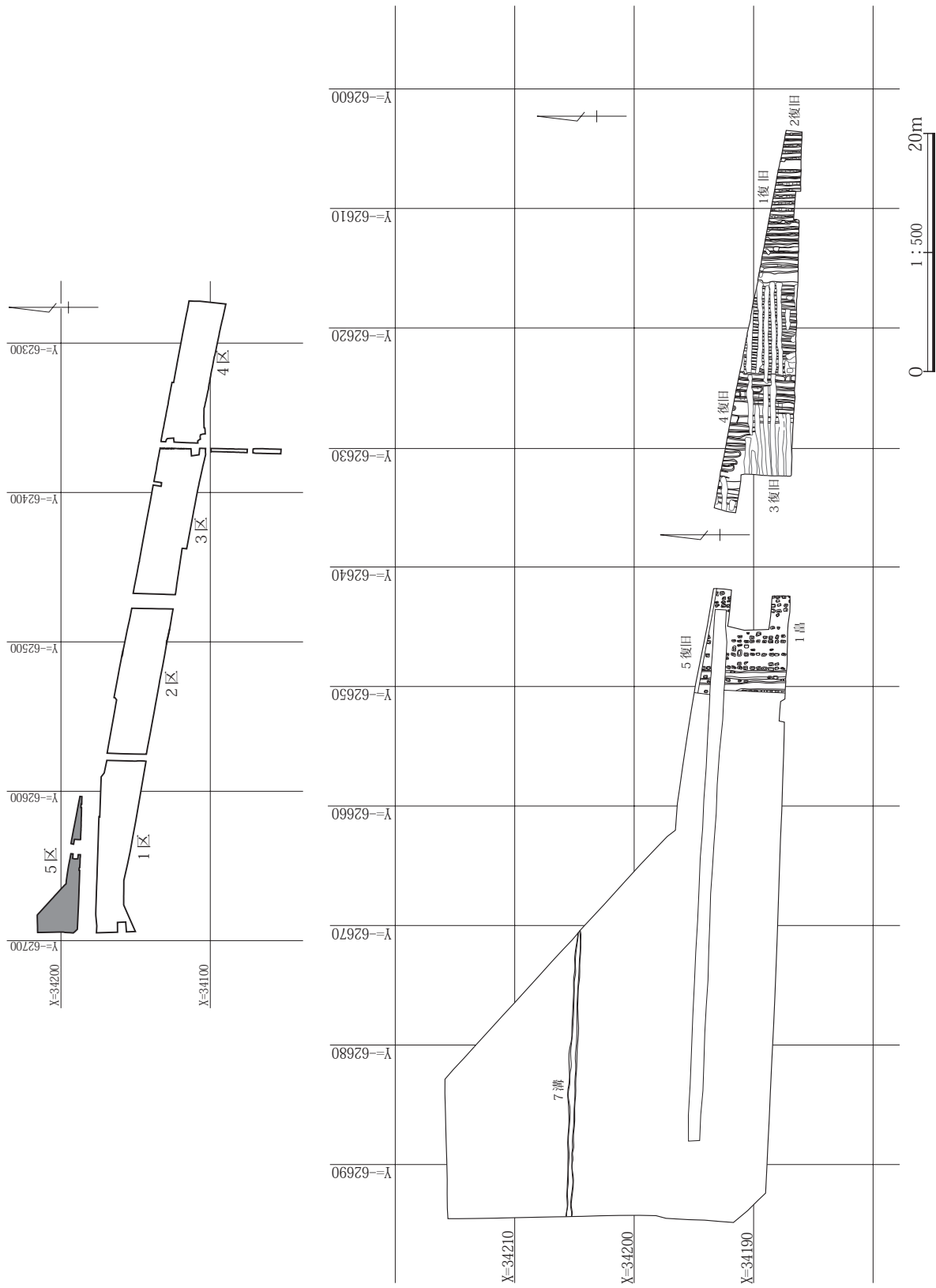
#### 5区3号復旧溝群(第103図 PL.30)

**位置：**X=186～193、Y=-616～635 **形状：**溝状  
**確認条数：**9条 **規模：**19.22×6.94m **残存深度：**0.01～0.17m **条間隔：**0.01～0.52m **条方位：**N-90°  
**重複：**4号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から3号復旧溝群が新しいと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**第1面東側調査区に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側及び南側に広がると想定される。各溝の条方位はほぼ同一であるが、中央部分の3条の坑は東西方向に直線状に長く掘削され、北側及び南側の坑は短く途切れている。各溝の断面形状は台形や椀形を呈する。底面の高低差は僅かでありほぼ平坦であるが、底面の一部に掘削痕が認められる。埋没土は、褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。埋没土にAs-Aを確認することができなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

#### 5区4号復旧溝群(第103図 PL.30)

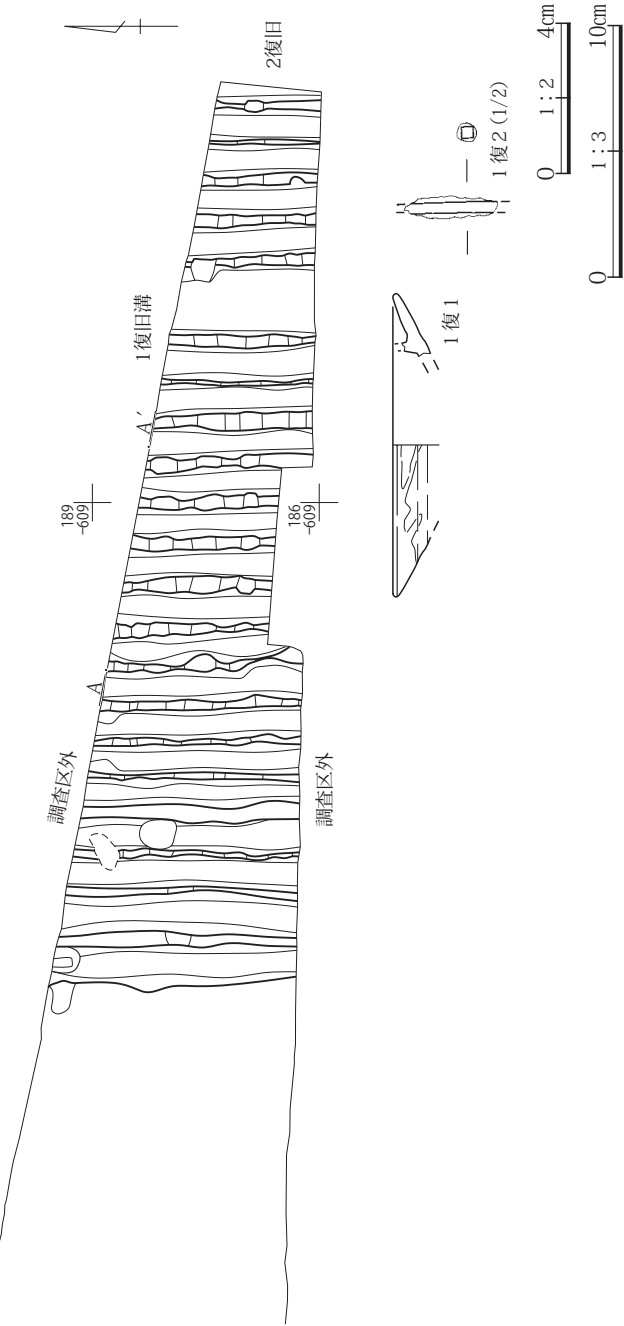
**位置：**X=186～193、Y=-616～634 **形状：**溝状  
**確認条数：**32条 **規模：**18.30×6.50m **残存深度：**0.01～0.15m **条間隔：**0.02～0.54m **条方位：**N-5°-E  
**重複：**3号復旧溝群と重複し、遺構確認状況から4号復旧溝群が古いと考えられる。 **遺物：**なし。 **所見：**





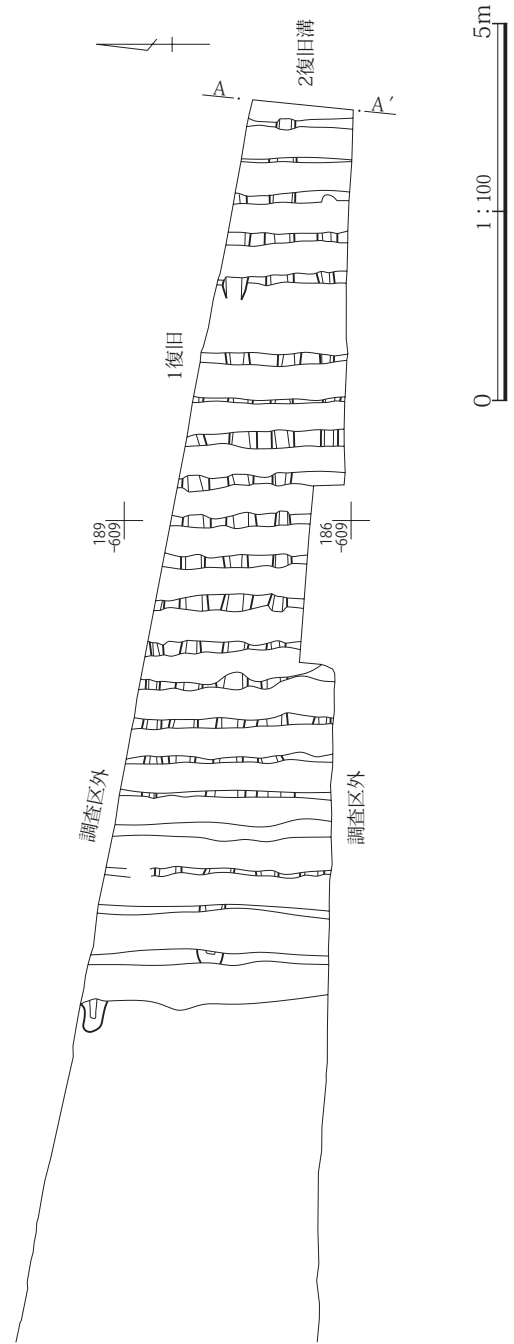
第101図 5区第1面(近世)全体図

5区1号復旧溝群



- 1号復旧溝群A-A'
1. 褐灰色土 表土、現代の耕作土
  2. 灰黄褐色砂質土 天明以降の洪水層か、鉄分の沈着あり
  3. 褐灰色砂質土 1号復旧溝群埋没土

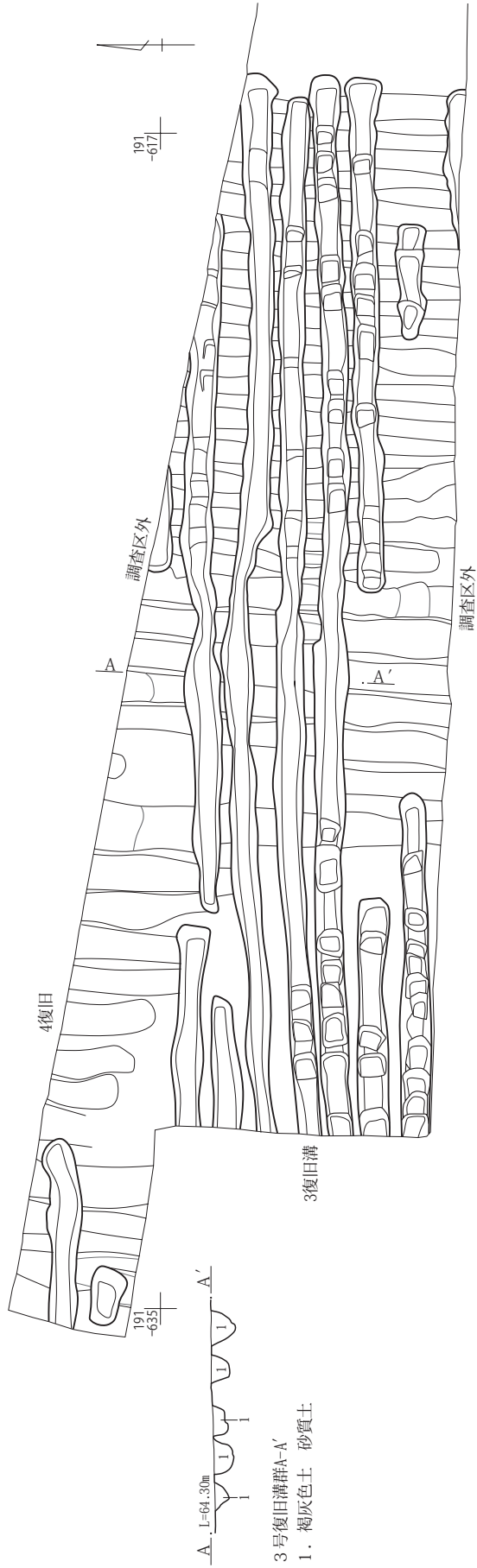
5区2号復旧溝群



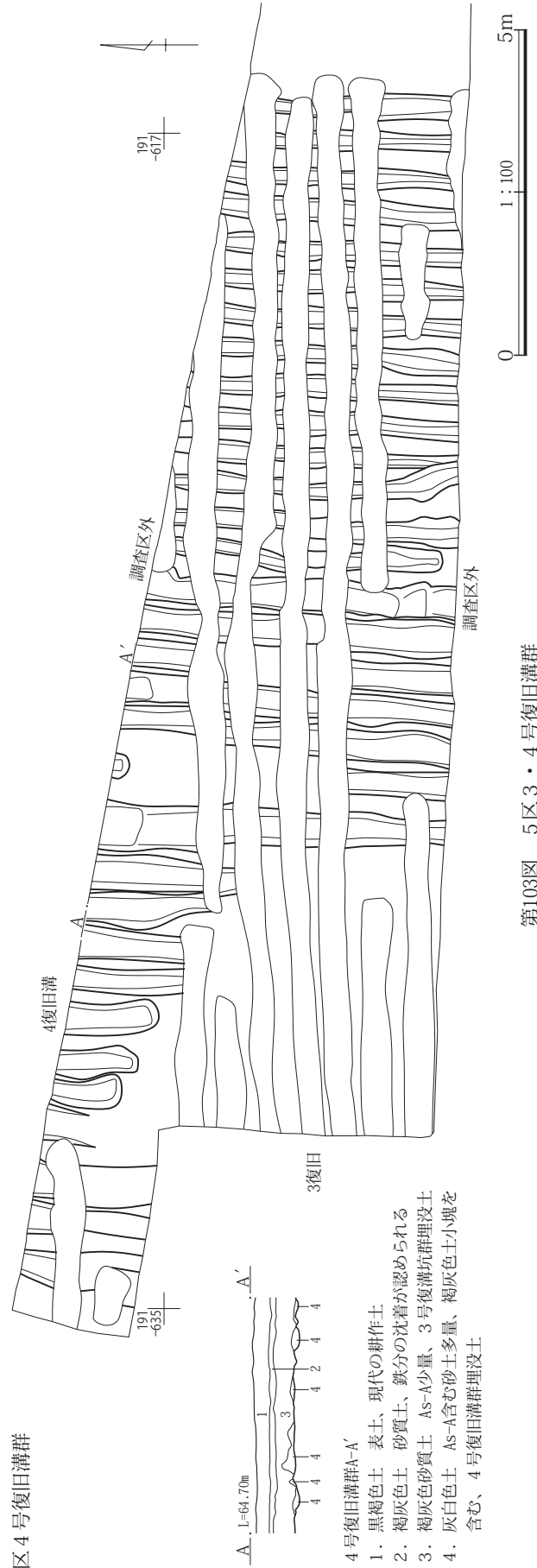
- 2号復旧溝群A-A'
1. 黒褐色土 表土、現代の耕作土
  2. 褐灰色砂質土 にぶい黄橙色部 分が多い、鉄分の沈着か、天明以降の洪水層
  3. 褐灰色砂質土 As-A少量、2号復旧溝群埋没土

第102図 5区1号復旧溝群と出土遺物・2号復旧溝群

5区3号復旧溝群



5区4号復旧溝群



第103図 5区3・4号復旧溝群

第1面東側調査区に位置する。3号復旧溝群との重複のため残存状況はやや良好ではない。各溝の断面形状は浅い椀形を呈する。底面の高低差は僅かであり、ほぼ平坦である。各溝の条方位はほぼ同一であるが、各溝の幅は0.22～0.70mを測り、中央部から西側の幅が広い。各溝の長さにもばらつきが認められ、西側の6条が東側と比べて短く、南壁まで達していない。埋没土は、褐灰色土塊と多量のAs-Aを含む灰白色土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

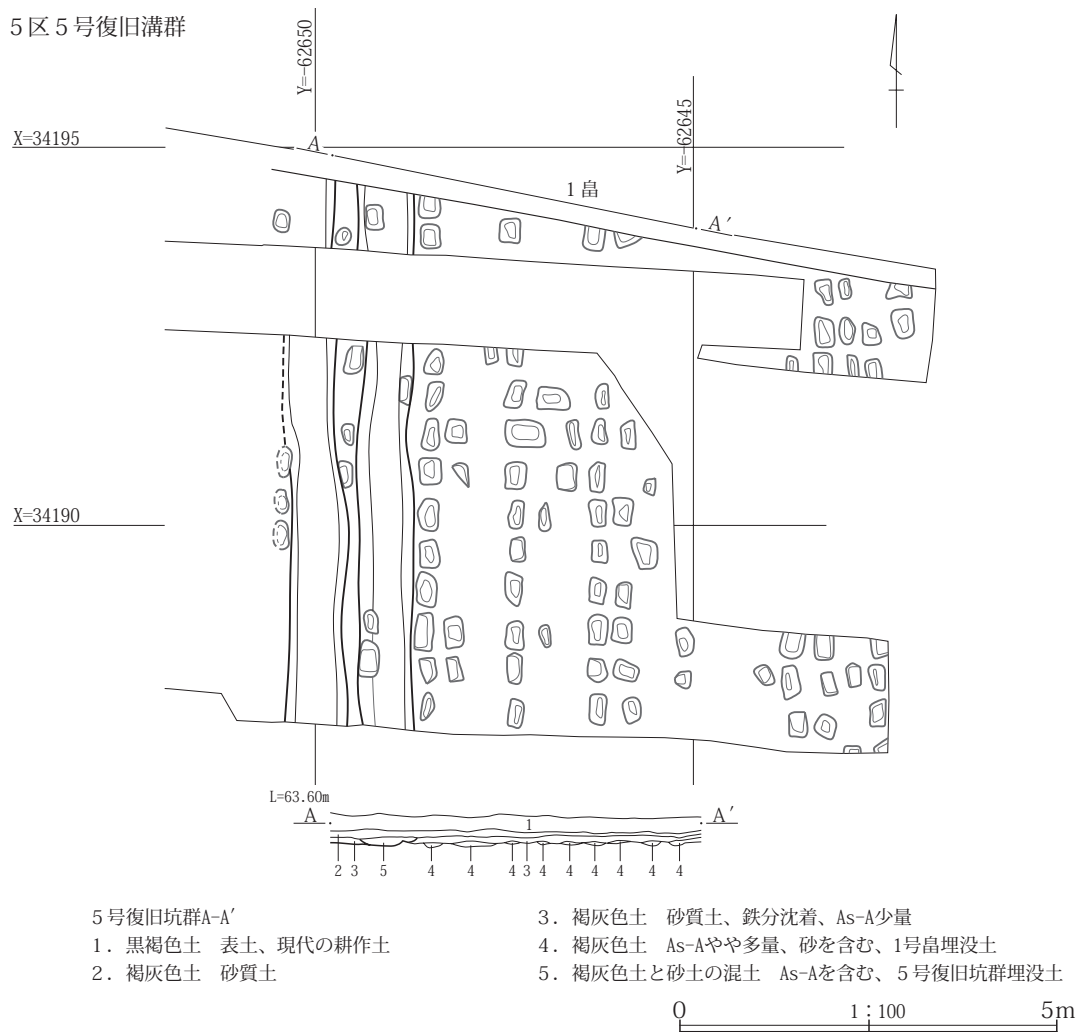
5区5号復旧溝群(第104図 PL.30)

位置：X=187～194、Y=-648～650 形状：溝状  
 確認条数：2条 規模：7.32×1.88m 残存深度：0.01～0.08m  
 条間隔：0.14～0.41m 条方位：N-0°  
 重複：1号畠と重複し、遺構確認状況から5号復旧溝群

が新しいと考えられる。遺物：なし。所見：第1面西側調査区の東端部に位置する。調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側及び南側に広がると想定される。調査区西側については、現表土の堆積が僅かであり、後世の削平や攪乱などによって慎重に掘り下げたが復旧溝群を確認することができなかった。各溝の断面形状は浅い椀形を呈する。底面は、高低差が認められずほぼ平坦である。埋没土は、As-Aを含む褐灰色砂質土によって人為的に埋戻す。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。

2 畠

5区第1面で確認することができた近世の畠は1ヶ所のみである。耕作痕などを基に一つの単位として捉え畠とした。5区第1面西側の調査区は、後世の削平や攪乱などが認められ、近世の遺構の遺存状況が良好ではない。



第104図 5区5号復旧溝群



畠は復旧溝群との重複などによって一部のみの確認である。

5区1号畠(第105図 PL.30)

位置：X=088～119、Y=-270～296 サク数：15条  
 規模：27.80×25.30m 畝高さ：0.02～0.12m 畝幅：0.08～0.96m  
 サク間隔：0.10～0.67m 畝方位：N-2°-W 重複：5号復旧溝群と重複し、遺構断面の観察から1号畠が古いと考えられる。遺物：なし。

所見：第1面西側調査区の東端部に位置する。北側及び南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに北側、東側、南側、西側に広がると想定される。調査区西側は後世の削平によって遺構の残存状況が良好ではなく、畠を確認できなかった。1号畠は、南北方向に連続するサクとみられる掘削痕が残存する。サクの断面形状は浅い椀形を呈する。サクの幅は0.14～0.52mを測る。畠の耕作面を精査したが、植物などの痕跡は確

認することができなかった。埋没土は、As-Aを含む褐色砂質土による自然埋没と考えられる。遺構確認状況や埋没土などから、As-A降下以前に耕作されたと考えられる。

3 溝

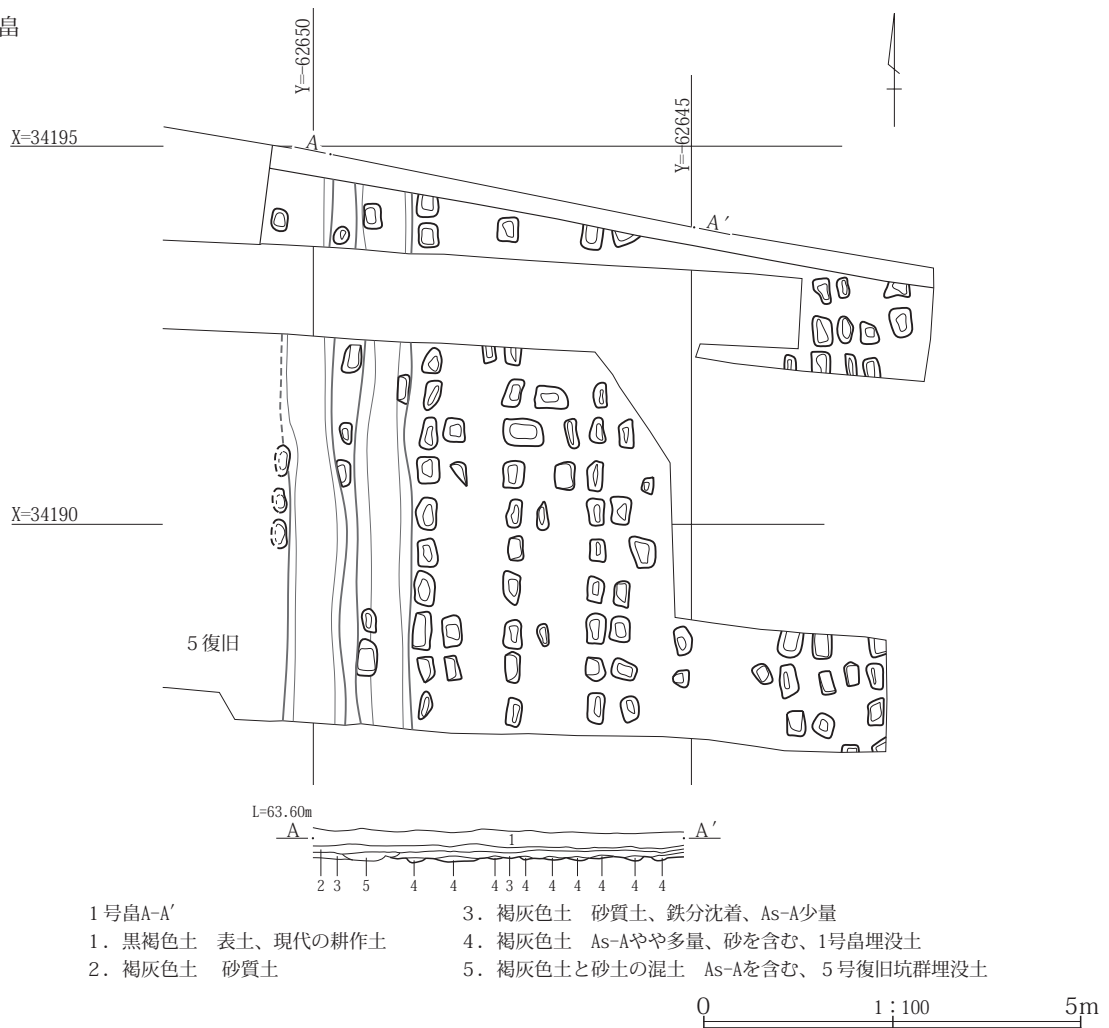
5区第1面で確認できた近世の溝は1条のみである。西側の調査区に位置する。東側の調査を先行したため、1～6号溝は2面で確認している。

5区7号溝(第106図 PL.30)

第1面西側調査区のX=204・205、Y=-670～694に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。

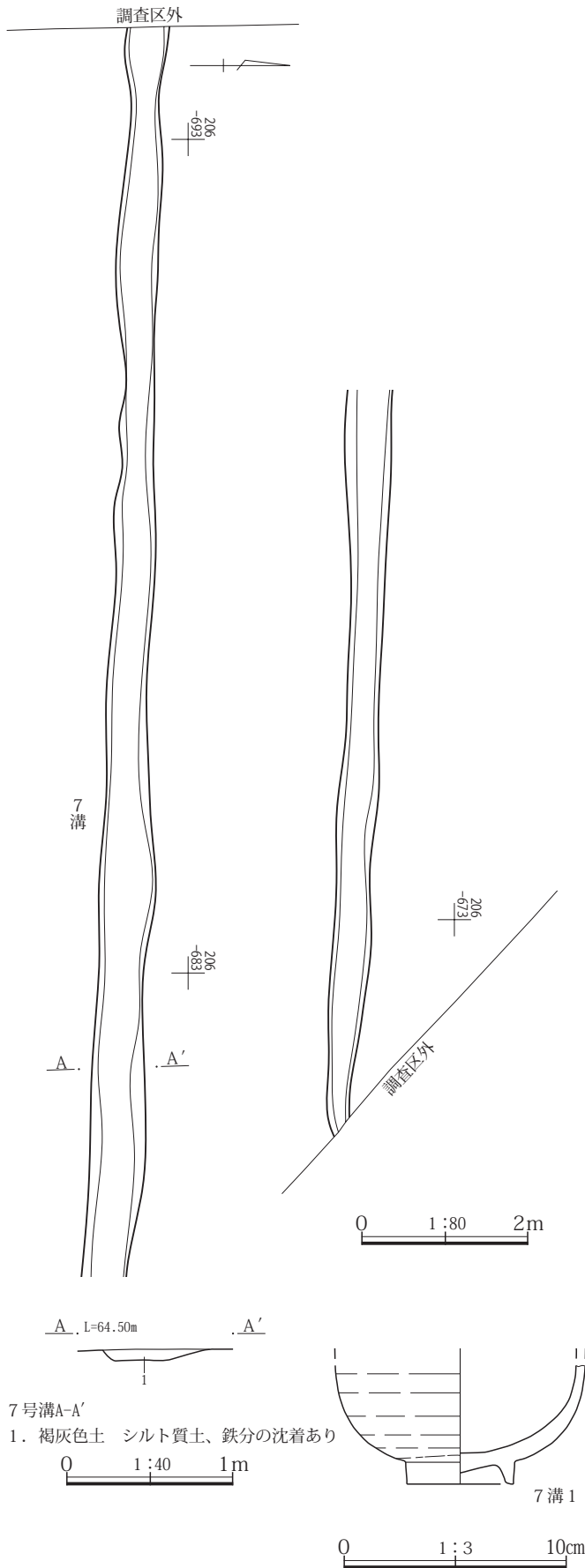
確認できる規模は、長さ23.81m、幅0.28～0.70m、深さ0.01～0.06mを測る。東西方向にほぼ一直線に走行し、走行方向は、N-3°-Wである。勾配は0.16%であり、底面の高低差はほとんど認められないが、東側か

5区1号畠



第105図 5区1号畠

5区7号溝

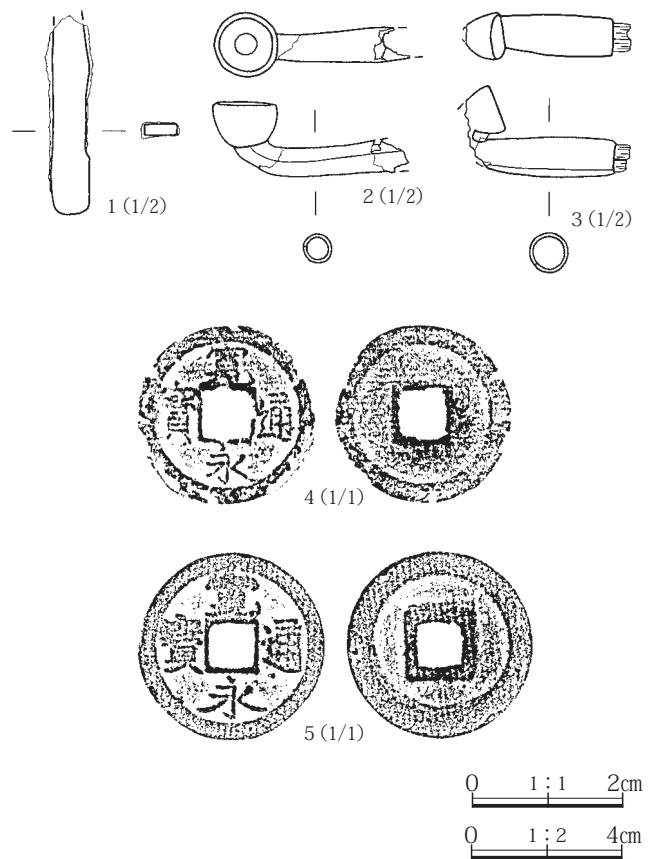


第106図 5区7号溝と出土遺物

ら西側にかけて流れていたと想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり壁が斜めに立ち上がる。埋没土は、褐灰色シルト質土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察によって流水の痕跡は認められず、水田や畠などを区画するために掘られた可能性もある。遺物は、瀬戸・美濃陶器碗(第106図7溝1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、時期不詳の土器類である。出土遺物が少なく、遺構確認状況などから時期は、As-AI降下以前か以降かは特定できず不明である。

4 遺構外の出土遺物(第107図 PL.116)

5区において近世の遺構を確認した第1面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。遺物は、鉄製品不詳(第107図1)、銅製品キセルの雁首(第107図2・3)、寛永通寶(第107図4・5)が出土した。非掲載遺物は、中世の在地系鉢・鍋1点、近世の国産磁器18点、国産施釉陶器40点、国産焼締陶器2点、在地系焙烙・鍋5点、在地系皿1点、時期不詳の土器類26点である。



第107図 5区遺構外の出土遺物

## 第4章 中世以降の遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

本遺跡において中世以降とみられる遺構と遺物が確認できた調査区は、1区から5区である。

遺構確認面は、基本土層第15層及び第16層下面として、各調査区で精査を行った。調査区は地形などによって遺構の遺存状態が異なる。中世から近世とみられる遺構確認面は、1区第2面、3区第2面、4区第4面、5区第2面である。2区については、遺構確認面が複数面であり、水田などの遺構が確認された。2区の中世から近世の遺構確認面は、第2～4面である。発掘調査では、中世以降と古墳時代から平安時代の遺構が同一面で確認できたが、時代ごとに分けた。出土遺物がなく明確な時期判定ができず、中世以外にも近世とみられる遺構も混在していることから、本章では中世以降の遺構と遺物として掲載した。後世の削平などによって遺構の残存状況は全体的に良好ではなく、近世や古墳時代から平安時代の遺構に比べ確認できた遺構数が全体的に少ない。確認できた中世から近世に至る遺構は、掘立柱建物1棟、土坑43基、ピット6基、井戸7基、溝24条、水田3である。以下、調査区ごとに記す。

### 第2節 1区の遺構と遺物

1区における中世以降となる遺構確認面は、第2面である。1区では、第1面で行った調査のように、発掘調査の工程の関係から調査区を西側と東側に分けてそれぞれ実施した。遺構確認面は、基本土層第16層のAs-B下面であるが、前述のとおり、古墳時代から平安時代遺構が混在していたため中世以降と分けて掲載した。中世以降の遺構については、後世の削平などによって残存状況は良好ではなく、調査区西端では、As-B混土層などが認められず、土坑が1基確認されたにすぎない。調査区東側では、中世以降の遺構は確認できなかった。1区第2面では、掘立柱建物、土坑、井戸、溝の調査を行った。

#### 1 掘立柱建物

1区第2面において、6本のピットを柱穴として1棟の掘立柱建物を調査した。掘立柱建物の周辺からは、土坑や井戸が数基確認され、掘立柱建物以外のピットはなかった。掘立柱建物の柱穴から出土した遺物はなく、明確な時期を特定できなかったが、埋没土などから中世以降に帰属させた。

##### 1区1号掘立柱建物(第109図 PL.31・32)

位置：X=166～172、Y=-657～661

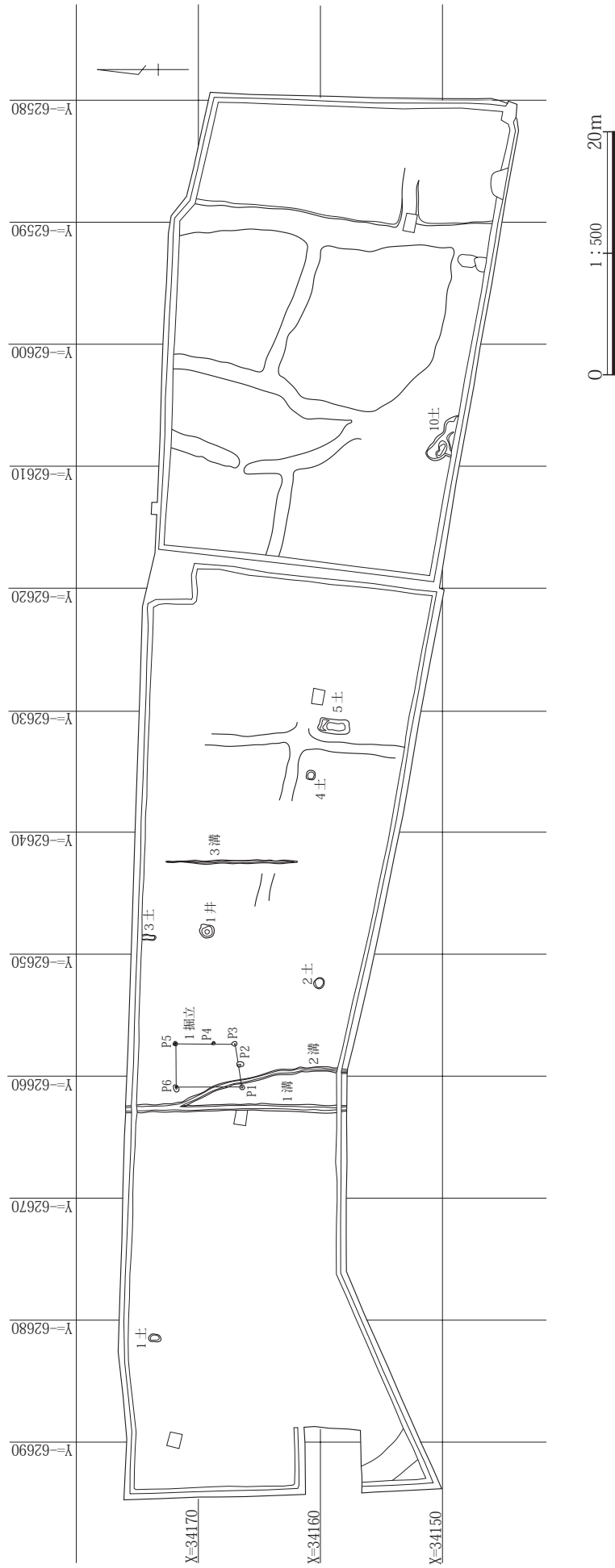
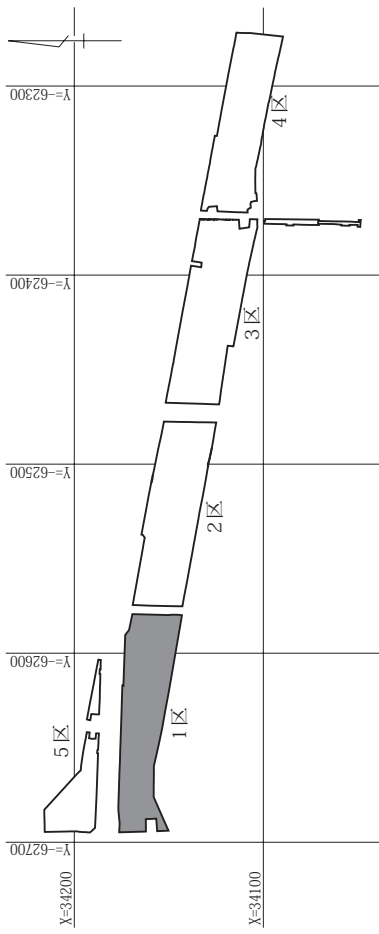
重複：なし。

主軸方向：N-1°-E

規模・形態：第2面西側中央部において、6本の柱穴を確認した。南北2間、東西2間以上の南北棟であり、側柱建物と想定される。北辺と西辺中央部の柱穴は、遺構確認面を精査したが確認できなかった。柱穴及び柱穴間の寸法などの計測表は、第4表のとおりである。東辺のP3からP4間に比べP4からP5間が長い。西辺で柱穴を確認できなかったが、南北3間となる可能性もある。確認できる規模は、北辺及び南辺3.54m、東辺4.90m、西辺5.42mである。東辺が西辺に比べ短くなるため、北辺と南辺の軸線が揃わず歪みが生じ、外形は台形に近い。柱穴の深さは、0.12～0.64mを測り、やや不揃いである。土層断面は、明瞭ではないがP1からP3、P5、P6の第3層が柱痕とみられ、各柱の直径は、約0.14～0.18mと考えられる。掘り方は、灰黄褐色土塊を含む暗褐色土やAs-Bを含む暗褐色砂質土などによって人為的に埋戻す。

遺物：なし。

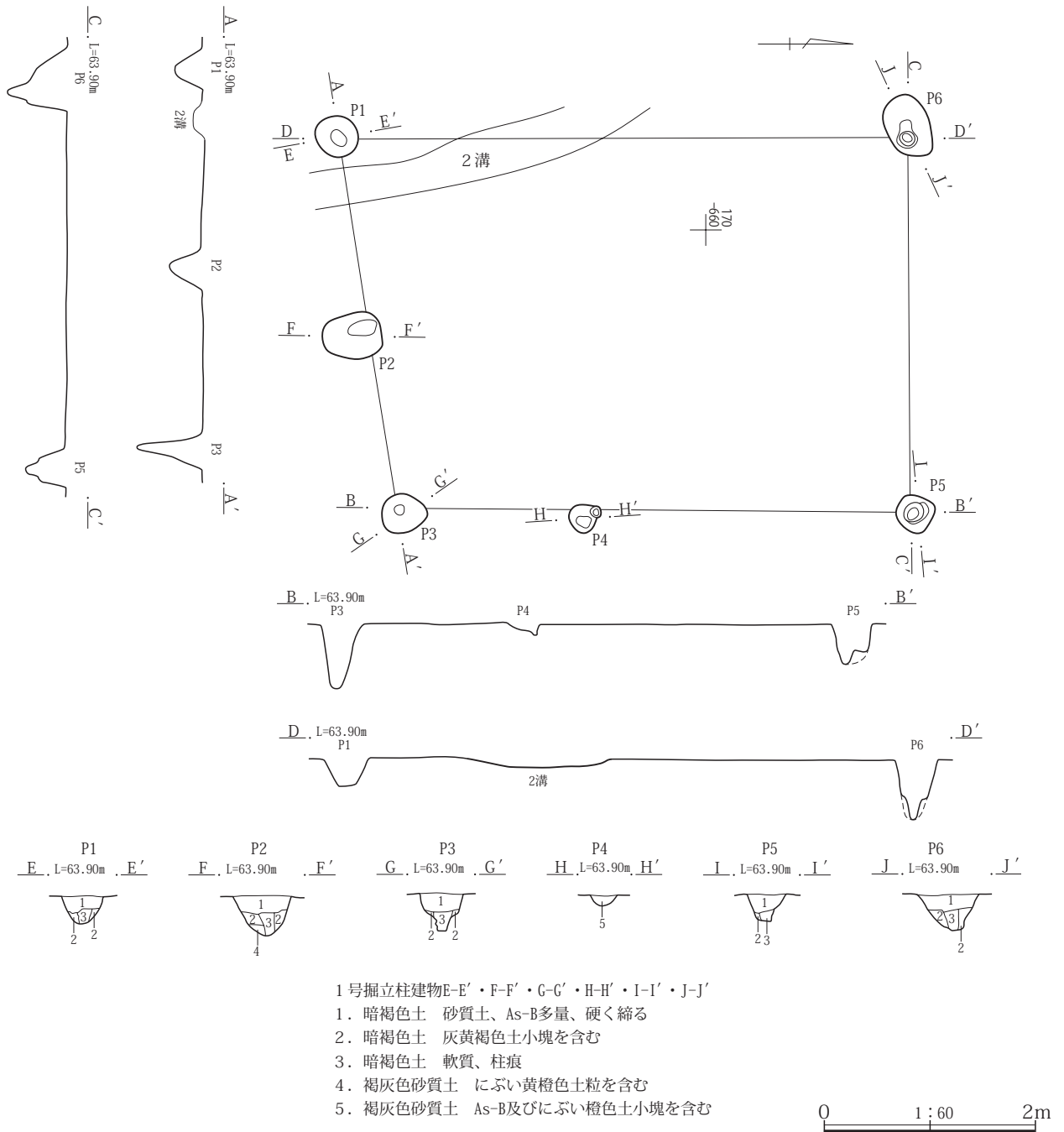
所見：周辺では1号掘立柱建物以外に建物などを確認することができなかった。柱穴の埋没土や建物周辺などから出土遺物がなく、明確に時期を特定することができないが、柱穴の埋没土などから時期は、中世から近世と考えられる。



第108図 1区第2面(中世以降)全体図



1区1号掘立柱建物



第109図 1区1号掘立柱建物

第4表 1区1号掘立柱建物計測表

柱穴No.	規模(m)			形状	面積16.93㎡ 柱間の寸法(m)
	長軸	短軸	深さ		
P 1	0.41	0.39	0.25	円形	P1-P2 1.80, P1-P6 5.42
P 2	0.56	0.43	0.32	楕円形	P2-P3 1.74
P 3	0.43	0.37	0.64	楕円形	P3-P4 1.78
P 4	0.30	0.26	0.12	楕円形	P4-P5 3.14
P 5	0.37	0.35	0.40	楕円形	P5-P6 3.52
P 6	0.62	0.41	0.57	楕円形	

## 2 土坑

1区第2面では中世以降とみられる6基の土坑を第2面西側北東部及び中央部で確認し、調査を行った。なお、6・7号土坑は第3章に、9・11号土坑は第5章に、8号土坑は第6章において掲載している。第1面で確認できなかった近世の土坑が含まれている可能性もある。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

### 1区1号土坑(第110図 PL.32)

第2面西側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦で、壁は斜めに立ち上がる。第2面水田と重複し、1号土坑が新しい。埋没土は、多量のAs-Bと少量のにぶい褐色土を含む暗褐色砂質土であり、人為的な埋戻しか否かは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 1区2号土坑(第110図 PL.32)

第2面西側中央部に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦で、壁は斜めに立ち上がるが、西側の傾斜が東側に比べ緩やかである。埋没土は、多量のAs-Bと少量の褐色土小塊を含む暗褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 1区3号土坑(第110図 PL.32)

第2面西側中央部に位置する。調査区外となる北側にさらに広がるため全体の規模や形状は不明である。平面形状は不定形と想定され、断面形状は底面が平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、As-Bと少量の褐色土塊を含む黒褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、須恵器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく、時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 1区4号土坑(第110図 PL.33)

第2面西側中央部に位置する。平面形状は隅丸方形で、断面形状は浅い椀形を呈する。埋没土は、多量のAs-Bと褐色土塊を含む暗褐色砂質土による人為的な埋戻しと考

えられる。非掲載遺物は、土師器47点(大型製品35、中型製品1、小型製品11)、須恵器4点(大型製品2、小型製品2)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 1区5号土坑(第110図 PL.33)

第2面西側中央部に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は台形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北側に中段を設ける。埋没土は、暗褐色土塊を含む明褐灰色土の他、明褐灰色土塊やAs-Bと暗褐灰色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器2点が出土する。出土遺物が少なく時期を特定できないが、出土遺物や埋没土などから時期は、近世と考えられる。

### 1区10号土坑(第110図 PL.33)

第2面東側南端に位置する。調査区外となる南側にさらに広がるため全体の規模や形状は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面はほぼ平坦であり壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、上層にAs-Aとみられる軽石、底面付近には焼土層が認められ、黒褐色土と暗褐色土などによる人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物の土師器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、近世と考えられる。

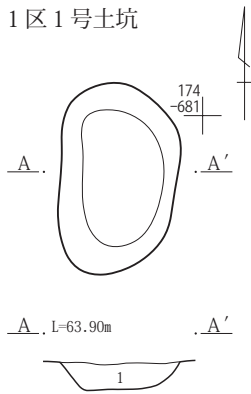
## 3 井戸

1区第2面で確認した中世以降と考えられる井戸は、1基のみである。調査区西側中央部で確認した。周辺においては、土坑やピットなど確認できた遺構の数が少なく、1号井戸の約9m西側で掘立柱建物を1棟確認できたにすぎない。井戸が同時期に使用されていた可能性があり、関連が想定される。

### 1区1号井戸(第110図 PL.33)

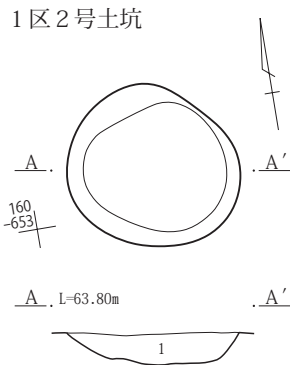
第2面西側中央部のX=168、Y=-647に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-7°-Eである。平面形状は、開口部の南側が円形を呈するが、北側が不定形となる。長径1.21m、短径1.07m、深さ0.81mを測る。断面形状は底面から0.55mまでほぼ垂直に立ち上がり、開口部にかけて斜めに立ち上がる。井筒朝顔

1区1号土坑



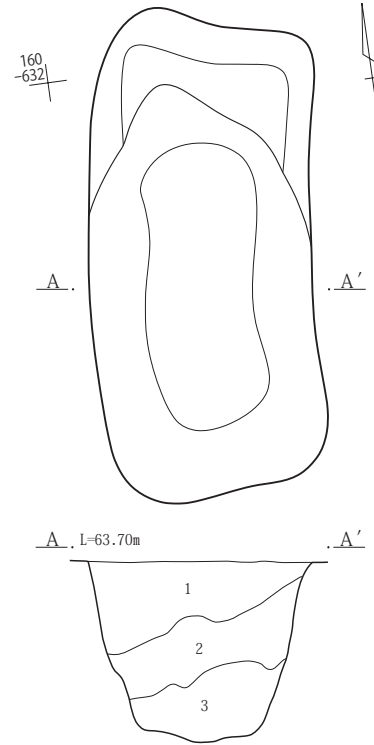
1号土坑A-A'  
1. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、  
にぶい褐色土少量

1区2号土坑



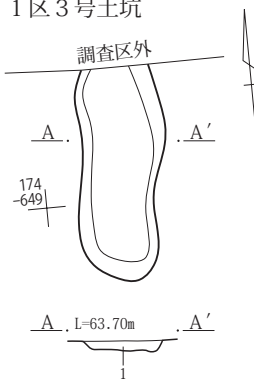
2号土坑A-A'  
1. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、  
褐色土小塊少量

1区5号土坑



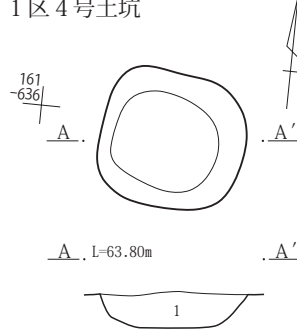
5号土坑A-A'  
1. 暗褐色土 やや砂質、As-B、明褐色土  
土塊少量  
2. 暗褐色土 明褐色土塊多量  
3. 明褐色土 暗褐色土塊を含む

1区3号土坑



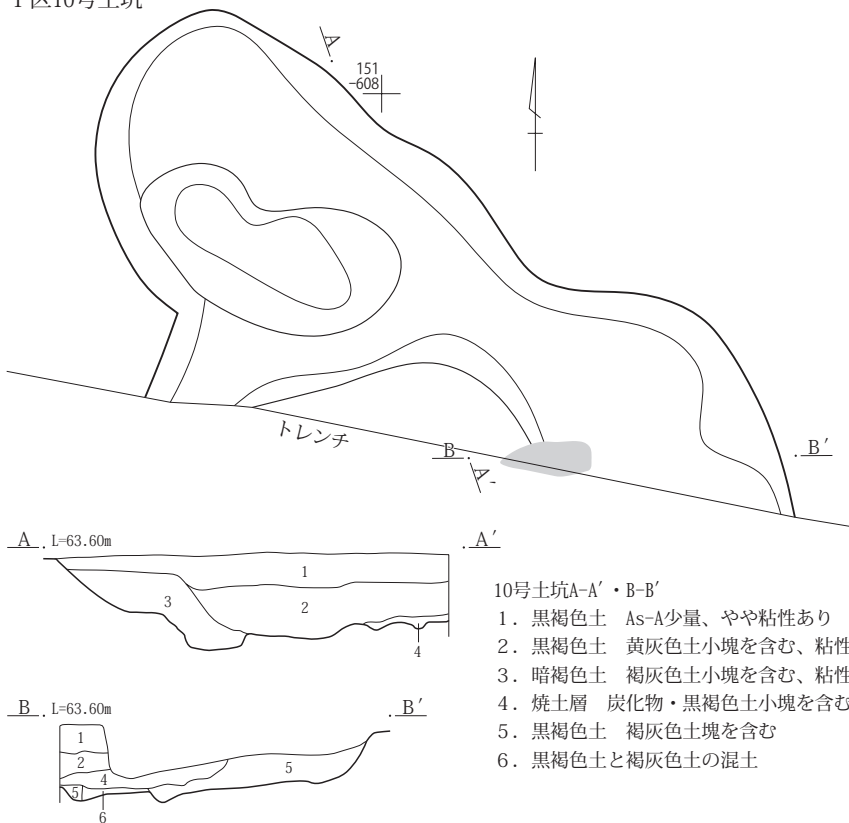
3号土坑A-A'  
1. 黒褐色土 やや砂質、As-B、褐色土塊少量

1区4号土坑



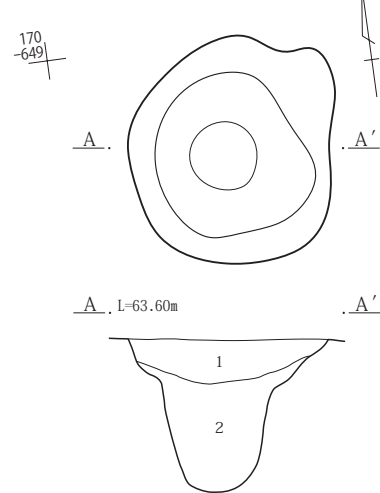
4号土坑A-A'  
1. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、  
褐色土塊を含む

1区10号土坑

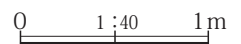


10号土坑A-A'・B-B'  
1. 黒褐色土 As-A少量、やや粘性あり  
2. 黒褐色土 黄灰色土小塊を含む、粘性あり  
3. 暗褐色土 褐色土小塊を含む、粘性やや強  
4. 焼土層 炭化物・黒褐色土小塊を含む  
5. 黒褐色土 褐色土塊を含む  
6. 黒褐色土と褐色土の混土

1区1号井戸



1号井戸A-A'  
1. 黒褐色土塊・にぶい橙色土塊・灰白  
色土塊の混土  
2. 褐色土 砂質土、明黄褐色土小塊  
を含む



第110図 1区1～5・10号土坑、1号井戸

型の井戸である。底面付近からは湧水が認められた。埋没土は、明黄褐色土小塊を含む褐灰色土とにぶい橙色土塊及び、灰白色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できない。

#### 4 溝

1区第2面で確認した中世以降とみられる溝は、3条である。調査区西側中央部で確認し調査を行った。周辺では、掘立柱建物が近接し、数は少ないが土坑や井戸などが確認されている。1区の北側に位置する5区は、東西方向に走行する道路によって調査区が分断されているが、遺構確認状況などから1区第2面の1・2号溝が北側にさらに延長され、5区第2面の3・4号溝と同一の溝となる可能性がある。

##### 1区1号溝(第111図 PL.34)

第2面西側中央部のX=157～171、Y=-659～662に位置する。1号溝北端から4.60mの位置で分岐する2号溝と重複するが、埋没土が同一であることから同時期と考えられる。調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。前述のとおり、1区北側の延長線上に位置する5区第2面において5区3・4号溝を確認した。1区1号溝は、5区3・4号溝と走行方向、幅、埋没土がほぼ同一であることから、1区1号溝と5区3・4号溝が繋がる可能性が高い。

確認できる規模は、長さ18.08m、幅0.45～0.71m、深さ0.08～0.15mを測る。主軸方向はN-0°である。標高は、北端63.66m、南端63.57m、比高0.09mである。勾配は0.49%であり、高低差は僅かであるが、北側から南側にかけて一直線に流れていたと想定される。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、多量のAs-Bを含む暗褐色砂質土によって埋没し、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面には水流の痕跡は認められず境界溝として掘削された可能性がある。東側約20mに位置する3号溝とは、規模が異なるが走行方向が南北方向で同一となり、埋没土も類似することから同時期に掘削されるなど、関連が想定される。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

##### 1区2号溝(第111図 PL.34)

第2面西側中央部のX=157～171、Y=-659～662に位置する。2号溝は1号溝と重複し、1号溝北端から4.60mの位置で分岐し、南東方向に流れている。1号溝と埋没土が同一であることから、ほぼ同時期に掘削されたと考えられる。調査区外となる南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。

確認できる規模は、長さ14.06m、幅0.31～0.46m、深さ0.05～0.11mを測る。主軸方向は、N-15°-Wである。重複する1号溝と比較し、幅及び深さなど規模が小さい。標高は、北端63.63m、南端63.64m、比高0.01mである。勾配は0.07%であり、2号溝南側の標高が僅かに高いが、高低差はほとんど認められない。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、1号溝と同一であり、多量のAs-Bを含む暗褐色砂質土によって埋没し、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面には水流の痕跡は認められなかった。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

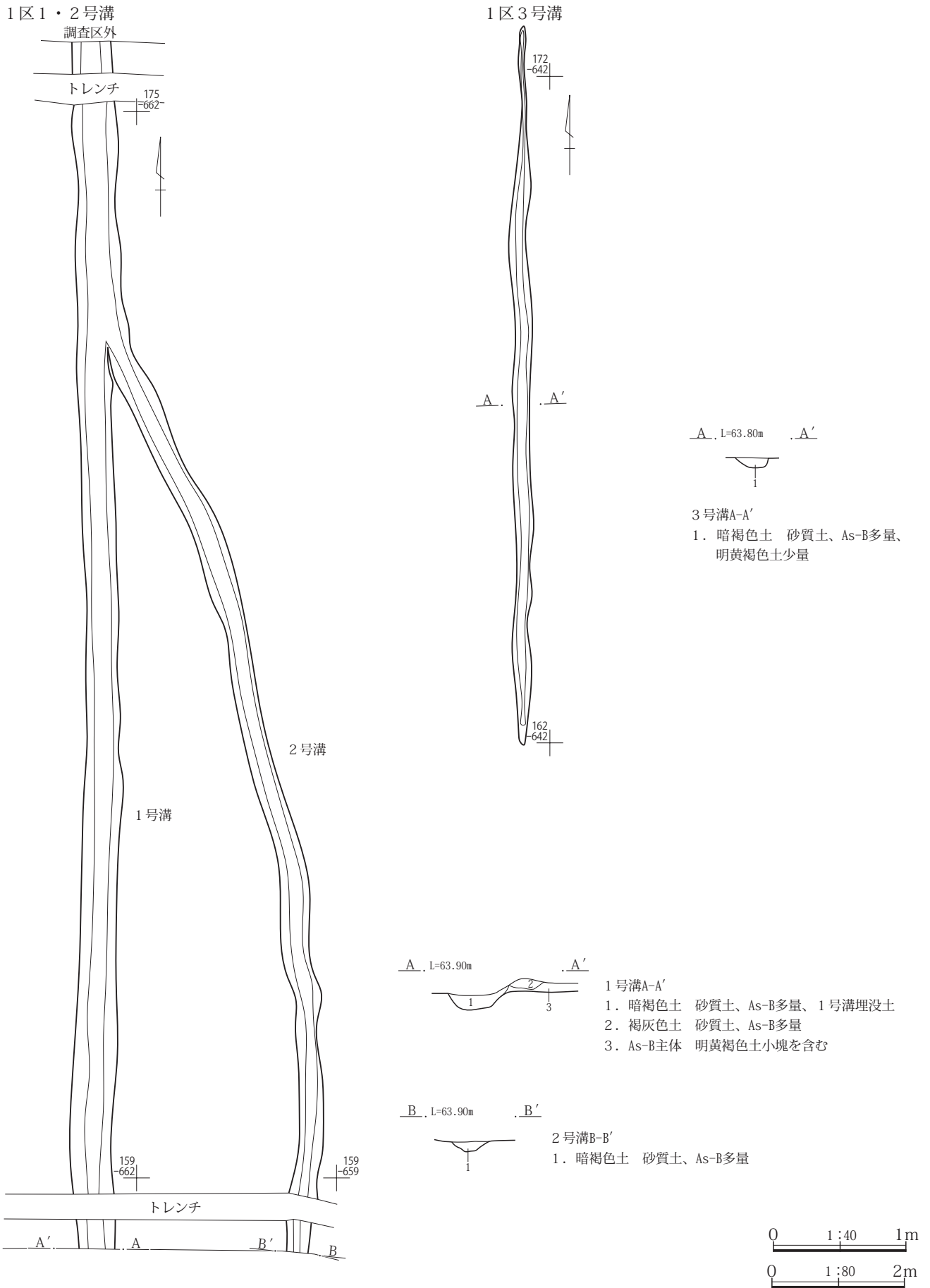
##### 1区3号溝(第111図 PL.34)

第2面西側中央部のX=161～172、Y=-642に位置する。重複する遺構はない。

確認できる規模は、長さ10.82m、幅0.04～0.28m、深さ0.01～0.07mを測る。主軸方向は、N-0°である。標高は、北端63.64m、南端63.63m、比高0.01mである。3号溝北側の標高が僅かに高いが、高低差はほとんど認められず、北側から南側にかけてほぼ一直線に走行する。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、多量のAs-Bと少量の明黄褐色土を含む暗褐色砂質土によって埋没し、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面には水流の痕跡は認められなかった。西側約20mに位置する1号溝とは、規模が異なるが走行方向が南北方向で同一となり、埋没土も類似することから同時期に掘削されるなど、関連が想定される。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。



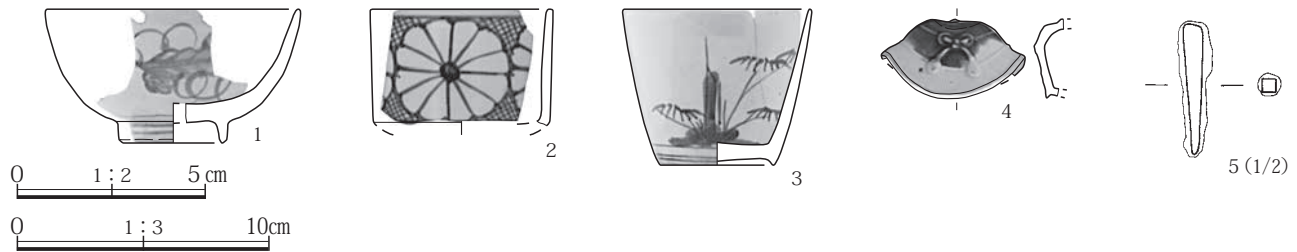


第111図 1区1～3号溝

### 5 遺構外の出土遺物(第112図 PL.116)

1区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、遺構確認面から肥前磁器染付猪口(第112図



第112図 1区遺構外の出土遺物

3)、肥前磁器染付筒形碗(第112図2)、肥前磁器染付碗(第112図1)、肥前磁器染付人形か(第112図4)、鉄製品釘(第112図5)が出土した。非掲載遺物は、国産施釉陶器1点、時期不詳の土器類1点である。

## 第3節 2区の遺構と遺物

2区における中世以降とみられる遺構確認面は、第2～第4面である。発掘調査の工程から調査区を西側と東側に分けてそれぞれ実施した。遺構確認面は、基本土層第6層及び第6層下面である。中世から近世の遺構は、水田が確認され、第2面西側で水田8区画、第3面東側で水田5区画、第4面では水田3区画の他、溝である。

### 1 水田

2区のはほぼ全域で、中世以降とみられる水田を確認した。調査区西半部は第2面水田、東半部で第3面水田、さらに下層の第4面水田となる。中世以降の水田が確認された調査区は2区のみである。

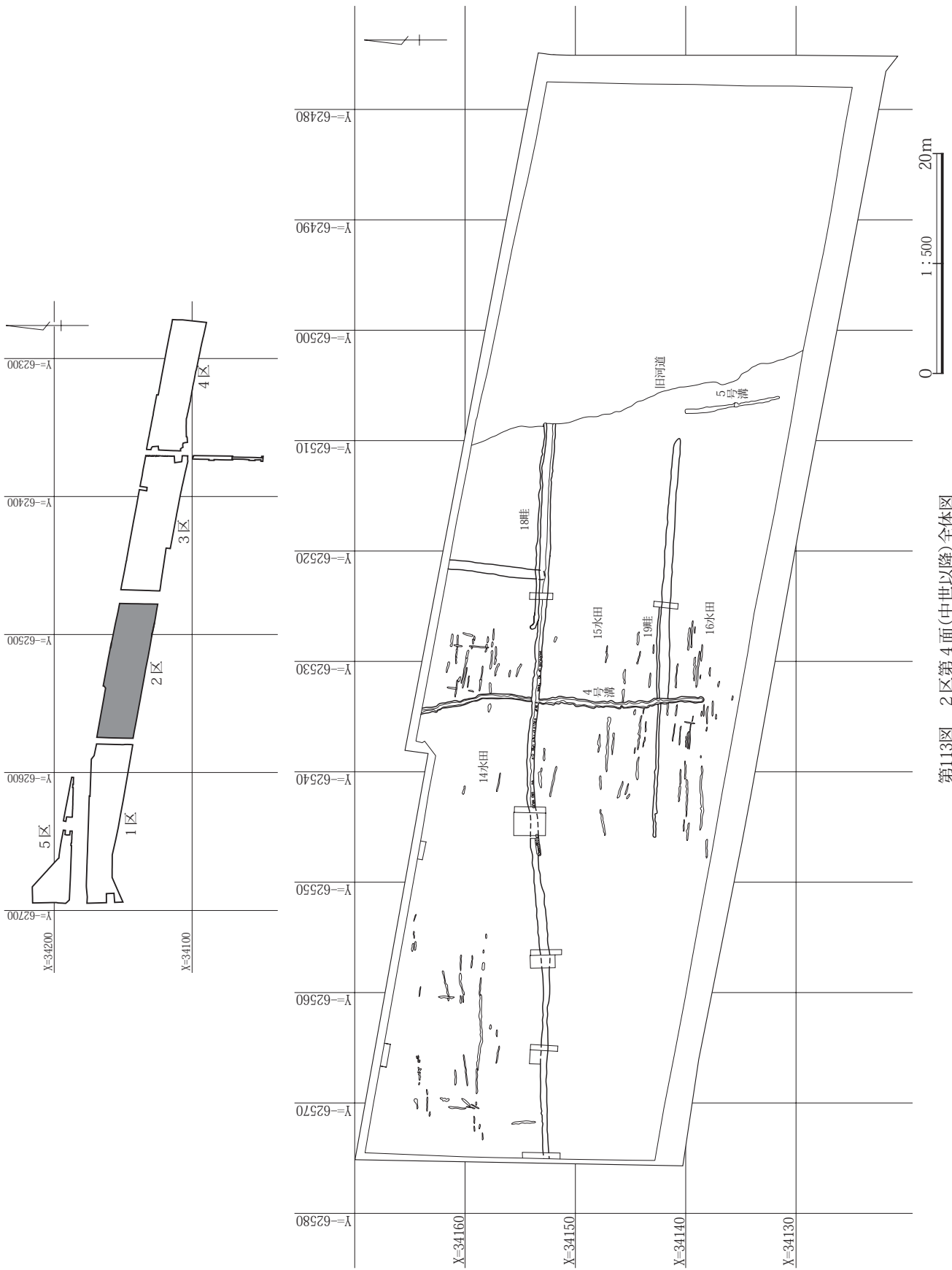
#### 第2面水田(第114～116図 PL.35～37・116)

第2面西側において、中世から近世の水田を調査した。第2面東側は旧河道である矢川右岸となり、遺構の遺存状況は良好ではなく、第2面西側の畦の延長部分については不明瞭で確認することができなかった。調査区西側で基本土層第6層下面の水田を調査した。調査によって畦、水口、溝といった水田に関連する施設を確認した。水田は区画によって分かれていることから、便宜的に名称を付けた。調査区北半部の西側から東側、南半部の西側から東側にかけて順に付番した。第2面西側の水田の区画は、合わせて8ヶ所となり、それぞれ1～8号水田

とした。第114図を参照されたい。

調査区北半部で確認できた1～4号水田は、東西方向の4～7号畦、南北方向の1～3号畦によって区画された水田である。南半部の水田は、南北方向の1～3号畦と南西方向の9・10号畦、南北方向の11号畦によって区分けされている。北半部の1～4号水田は、北側及び西側が調査区外となり、5号水田は西側が調査区外に広がる。8号畦によって区分けされる6号水田は東側に、7・8号水田についても調査区外の南側にさらに広がると想定されるため、それぞれ全体の規模は不明である。北半部に位置する2号水田の東西方向の長さ約18.5m、3号水田の東西方向の長さ17.5mを測る。南半部に位置する8号水田の東西の長さは34.5mを測り、第2面西側で最も長い。南北方向の長さについては、5号水田が10.5m、6号水田が11.5mであった。4・5・8号水田の区画は南北方向である。

確認できる畦の規模及び主軸方向は、以下のとおりである。1号畦の幅0.36～0.57m、高さ0.10～0.16m、主軸方向N-2°-E、2号畦の幅0.80～1.12m、高さ0.03m、主軸方向N-0°、3号畦の幅0.75～0.84m、高さ0.02～0.05m、主軸方向N-5°-E、4号畦の幅0.44～0.82m、高さ0.09～0.15m、主軸方向N-90°、5号畦の幅0.61～0.69m、高さ0.09～0.14m、主軸方向N-90°、6号畦の幅0.62～0.81m、高さ0.11～0.14m、主軸方向N-90°、7号畦の幅0.56m、高さ0.11～0.14m、主軸方向N-3°-E、8号畦の幅0.57～0.80m、高さ0.10m、主軸方向N-2°-E、9号畦の幅0.50～0.81m、高さ



第113図 2区第4面(中世以降)全体図

0.08～0.11m、主軸方向N-90°、10号畦の幅0.64～0.96m、高さ0.10～0.13m、主軸方向N-90°、11号畦の幅0.65～0.97m、高さ0.05m、主軸方向N-5°-Wを測る。各畦の幅については、2号畦の幅が最も長く、1号畦の幅が最も短い。東西方向の主軸方向はほぼ同一であり、南北方向の主軸方向については、11号畦以外は近似する。第4面水田土層断面図(第115図)から第17層のにぶい褐色シルト質土が畦と第2面の畦と考えられる。

水田の標高は、北半部に位置する1号水田が63.57mと最も高く、4号水田がこれに次ぎ63.54mである。2・3号水田はそれぞれ63.51mであった。1～4号水田の南側で確認された5号水田の標高は63.48m、6号水田の標高は63.49mであり、1～4号水田に比べ5・6号水田が僅かに低く、比高0.02～0.09mであった。調査区南境に位置する7・8号水田は、標高がさらに低くなり、7号水田の標高63.47m、8号水田の標高63.41mであり、5・6号水田との比高0.02～0.08mであった。南側に位置する8号水田の標高が最も低くなっている。1～4号水田の給水源については、調査区外となる北側にあると想定される。給水の経路については、2号水田南側の5号畦に水口が3ヶ所設置され、4・5号水口から5号水田へ、さらに6号水口から6号水田へ送水されたと考えられる。水口の規模は、4号水口が幅0.39m、深さ0.05m、5号水口が幅0.38m、深さ0.10m、6号水口が幅0.42m、深さ0.10mを測る。5・6号水口には給水の調節などに使用されたと考えられる小礫が認められる。5号水田からは、水田南側となる9号畦に水口を3ヶ所設置し、3号水口から7号水田へ、1・2号水口から8号水田に送水していたと考えられ、北側の水田から南側の水田にそれぞれ送水していたとみられる。水口の規模は、1号水口が幅1.20m、深さ0.12mであり、水流によって約70cm削られていた。2号水口が幅0.25m、深さ0.07m、3号水口が幅0.43m、深さ0.13mを測る。10号畦に沿って南側に掘込まれた溝の規模は、幅0.22～0.52m、深さ0.01～0.05mを測る。溝底面の標高は、西端63.41m、東端63.37mであり、僅かな高低差であるが西側から東側に流れていたと想定され、給排水のために使用されたと考えられる。農作業に伴う耕作痕については、3・4・6・8号水田で確認できた。長い筋状の耕作痕は、畜耕によるものと想定され、点状に連続する耕作痕

は人力による鋤先や鍬先の痕が想定される。3号水田の耕作痕は、3号畦西側で畦に沿うように南北方向に長い筋状で、5条確認できた。長さはそれぞれ不揃いである。耕作痕の規模は、長さ1.66～3.55m、幅0.11～0.30m、深さ0.02～0.03mである。4号水田の耕作痕は、3号畦にやや近く南北方向の筋状で2条である。規模は長さ2.27mと3.80m、幅0.14～0.28m、深さ0.01～0.05mであり、底面に小ピット状の窪みが認められる。6号水田の耕作痕は、南北方向3条、東西方向1条を確認した。耕作痕の規模は、長さ0.78～2.77m、幅0.17～0.39m、深さ0.02～0.05mである。8号水田では、長い筋状と連続した点状の耕作痕列の2種類を確認した。筋状は10条、点状は4条であり、すべて南北方向である。確認できた筋状の耕作痕の規模は、長さ1.82～5.60m、幅0.20～0.40m、深さ0.01～0.06mである。点状の耕作痕の規模は、長さ0.14～0.62m、幅0.10～0.27m、深さ0.01～0.05mである。調査区外となる南側にさらに耕作痕列が延長されたと考えられる。

遺物は、銭貨(第116図4～7)が水田確認面から出土した。非掲載遺物は、土師器大型製品1点、不明1点、須恵器大型製品2点、灰釉陶器瓶類1点である。

水田の時期を特定できないが、時期は、中世以降と考えられる。

### 第3面水田(第114～116図 PL.37・38・116)

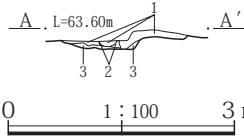
調査区東側で基本土層第6b層下面の水田を調査した。調査区東側の水田は、2区第3面とした。

西側調査区第2面の水田と比べ東側で確認できた第3面の水田は、標高が0.20m低い。西側の第2面の水田と同時期ではなく、遺構確認状況から東側の第3面の水田の時期が古い。東西方向の畦の位置についても、東側で確認した第3面の水田が僅かに南側にずれる。東側で確認した第3面の水田が埋没した後も東西方向の畦を意識しながら継続的に水田耕作が行われたと考えられる。調査によって畦、水口、溝といった水田施設を確認した。水田は区画によって分かれていることから、便宜的に名称を付け、調査区北側から南側にかけて順に付番した。2区第3面東側の水田の区画は、合わせて5ヶ所となり、それぞれ9～13号水田とした。第114図を参照されたい。

9号水田は、東西方向の12・13畦、10・11号水田は、

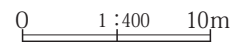


第2面水田



- 1号水口A-A'
1. 浅黄橙色砂質土と橙色砂質土の混土、細粒砂を含む
  2. 褐灰色土 砂質土、にぶい黄橙色砂質土を含む
  3. 褐灰色土 砂質土、第2層に近似、砂粒多量、部分的に鉄分の沈着あり

第3面水田



第114図 2区第2・3面水田(1)

12～16号畦、12・13号水田は、15～17号畦によって区画された水田である。9・11・13号水田は、東側に位置する旧河道である矢川と重複し、北側、南側は調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに水田が広範囲に広がると想定される。南北方向の水田の長さを計測できる水田は10・11号水田であり、それぞれ11.2mを測る。

確認できる畦の規模及び主軸方向は、以下のとおりである。12号畦の幅0.70m、高さ0.15m、主軸方向N-85°-W°、13号畦の幅0.48～0.68m、高さ0.18m、主軸方向N-85°-W、14号畦の幅0.52～0.63m、高さ0.04～0.10m、主軸方向N-6°-E、15号畦の幅0.55m、高さ0.08m、主軸方向N-90°、16号畦の幅0.47～0.72m、高さ0.11～0.18m、主軸方向N-86°-W、17号畦の幅0.32～0.38m、高さ0.10～0.12m、主軸方向N-3°-Wである。各畦の幅については、16号畦の幅が最も長く、17号畦の幅が最も短い。畦の高さは、13・16号畦が最も高く、残存状況は良好であった。東西方向の主軸方向は同一あるいは近似する。

水田の標高は、北部に位置する9号水田の北西部が63.38mと最も高く、13号水田が63.26mと最も低い。9号水田と10・11号水田の比高は0.05mである。10号水田と12号水田との比高0.08m、11号水田と13号水田との比高0.02mである。給水源は調査区外の北側にあると想定される。給水の経路については、確認できた水田が少なく全体の経路は不明であるが、水口が16号畦に設置され、11号水田から13号水田に給水していたと考えられる。7号水口の規模は、幅0.24m、深さ0.08mである。北側の水田から南側にかけて給水していたと想定される。13号畦から水口は確認できなかったが、畦に沿った南側に幅0.40～0.55m、深さ0.02～0.05mの溝が掘られていた。溝底面の標高は西端63.23m、東端63.26mであり、僅かな高低差であるが東側から西側に流れていたと想定され、給排水のために使用されたと考えられる。水田面を精査したが、農作業に伴う耕作痕などは確認できなかった。遺物は、在地系土器内耳鍋(第116図2)、龍泉窯系青磁盤(第116図3)が水田確認面から出土した。非掲載遺物は、中世の在地系鉢・鍋1点、近世国産施釉陶器1点、在地系焙烙・鍋1点、時期不詳時期1点であり、耕作土から出土した。

水田の時期を特定できないが、時期は、中世以降と考えられる。

#### 第4面水田(第115・116図 PL.38・39)

第2・3面をさらに掘り下げ、下面から中世から近世の水田を調査した。遺構は、第2・3面下層にあることから中世以降の水田では最も古い時期であり、遺構確認面を2区第4面とした。遺構確認面は第6c層下面である。

第4面の水田は4号溝と重複し、遺構確認状況から4号溝が古いと考えられるが、同時期に使用された水田の給排水に伴う溝の可能性も考えられる。

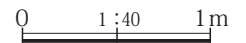
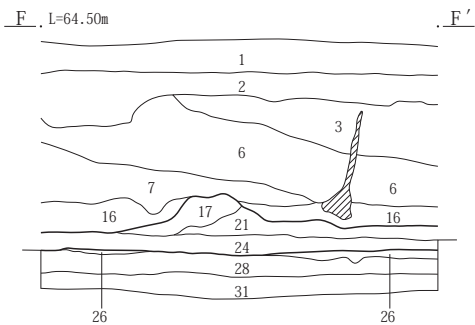
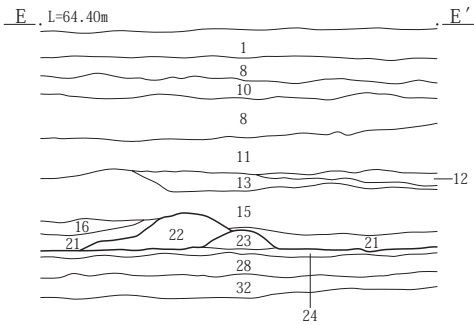
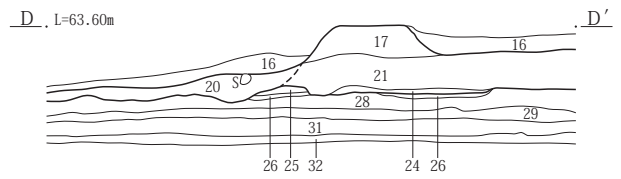
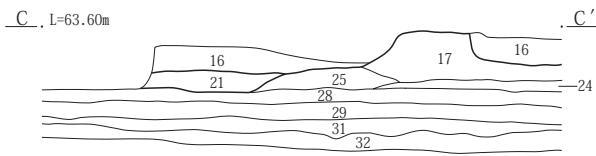
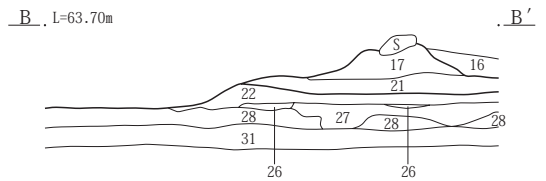
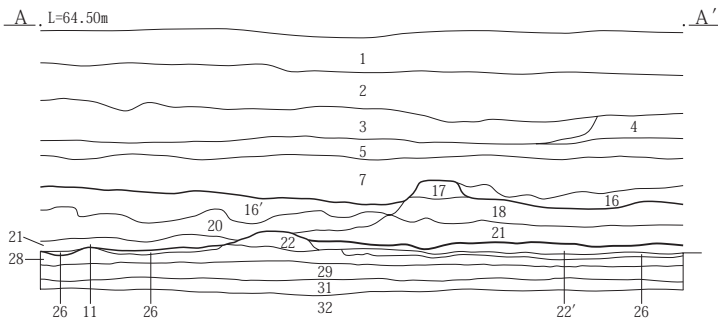
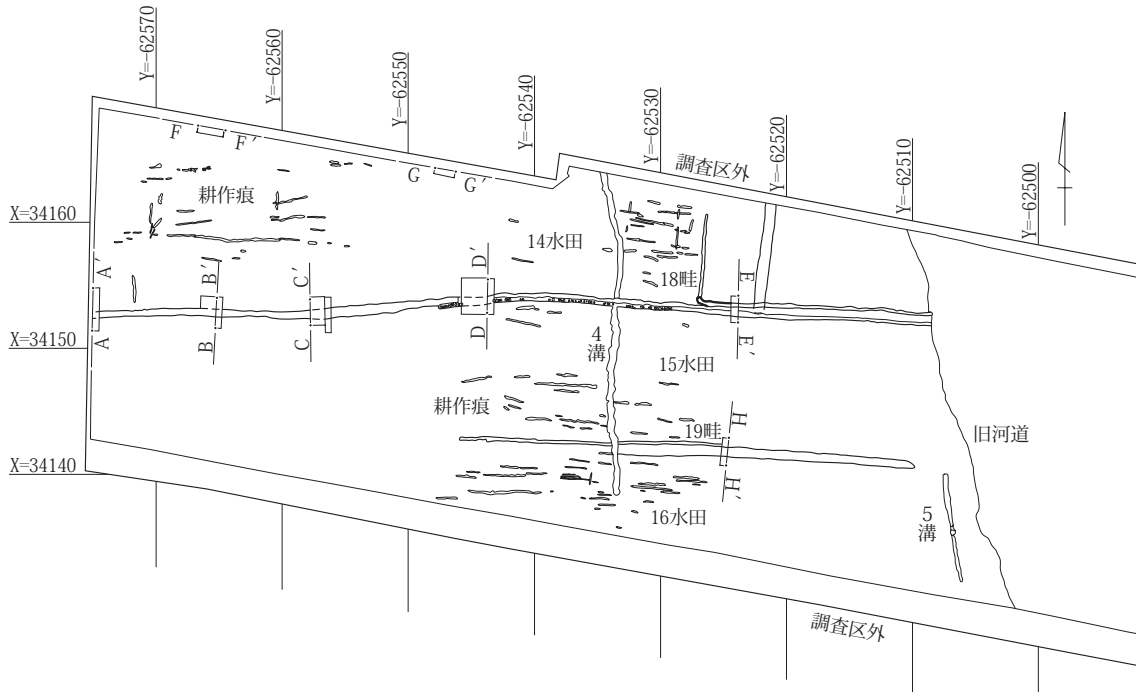
調査によって、畦、溝といった水田施設を確認した。第4面の水田は遺存状況が良好ではなく、東西方向の畦が2条確認されたにすぎず、第2・3面で確認した水田のように、南北方向の畦については確認できなかった。便宜的に北側から南側にかけて順に付番した。第4面の水田の区画は3ヶ所となり、それぞれ14～16号水田とした。第115図を参照されたい。

14号水田は18号畦の北側に位置する。北側が調査区外となるため全体の規模は不明であるが、さらに北側に広がると想定される。15号水田は、18号畦と19号畦の間に位置し、南北の長さ11.0mである。16号水田は、19号畦の南側に位置し、調査区外となる南側にさらに広がると想定される。

確認できる畦の規模及び主軸方向は、18号畦の幅0.38～0.97m、高さ0.02～0.12m、主軸方向N-86°-W→N-88°-E、19号畦の幅0.59～0.94m、高さ0.02～0.06m、主軸方向N-86°-Wである。As-Bを含む灰褐色砂質土である第22層と褐灰色砂質土の第25層が第4面水田畦と考えられる。

水田の標高は、北部に位置する14号水田の北西部が63.33mと最も高く、東側へ行くにしたがって標高が低くなり、14号水田東端は63.18mであった。14号水田と15号水田の比高は僅かであり0.01～0.03mとなる。15号水田も西側に比べ東側の標高が低い。南部に位置する16号水田東端が最も標高が低く、63.02mである。15号水田と16号水田との比高は0.01～0.03mを測る。標高から判断し、給水源は調査区外の北側にあると想定される。18・19号畦は、水口などの施設を確認できず、給水の経路については不明である。標高などから判断し、北

第4面水田

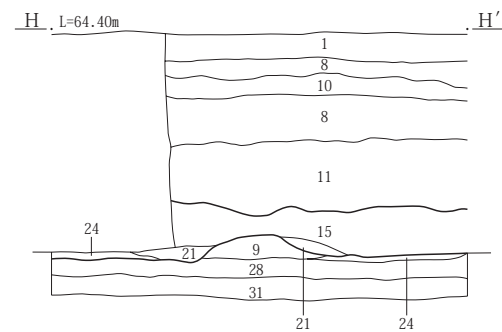
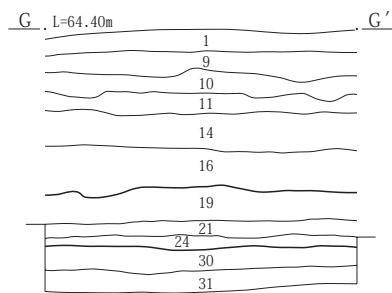


第115図 2区第4面水田(2)

側の水田から南側の水田に流していたと想定される。18号畦には、畦の北側に沿うように東西方向の溝が掘られ、西端で北方向に折れている。この溝の規模は、東西方向の長さ18.50m、幅0.13～0.45m、深さ0.01～0.05m、主軸方向N-86°-W、南北方向の長さ6.60m、幅0.20～0.28、深さ0.02～0.03m、主軸方向N-5°-Eである。給排水や畦を形成する際に掘られた溝の可能性もあり、確認できなかったが南北方向の溝に沿った畦によって水田を区画していた可能性もある。19号畦でも畦の北側に

沿って溝が掘られていた。この溝の規模は、長さ26.0m、幅0.17～0.40m、深さ0.02mを測る。18号畦に伴う溝と同じく、給排水に使用された可能性がある。

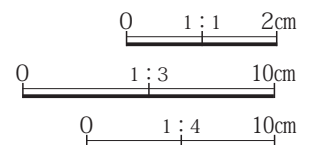
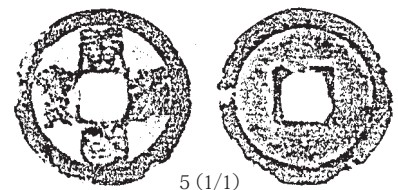
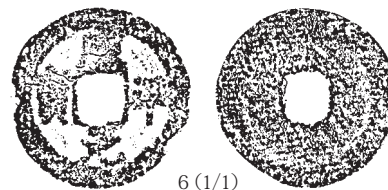
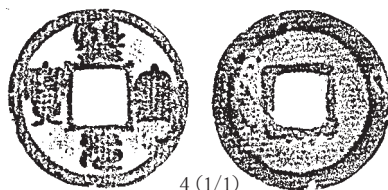
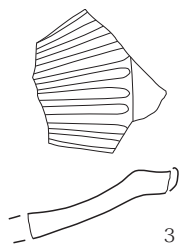
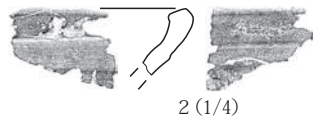
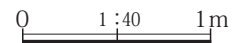
14～16号水田では、農作業に伴うと考えられる長い筋状の耕作痕や点状の耕作痕を確認した。南北方向の耕作痕は確認数が少なく、大半が18・19号畦と同方向となる東西方向である。複数の種類からなる耕作痕が認められ、畜耕や人力など作業の種類や時期差などによって耕作痕が異なると考えられる。



第4面水田A-A'

1. 現表土
2. にぶい褐色土 砂質土、上部が酸化した床土
3. 明褐色土 砂質土、均一
4. 明褐色土 シルト質土、均一に締まりあり
5. 灰褐色土 砂質土、上部が橙色に酸化
6. 明褐色土 砂質土、黒斑状の錆多量
7. にぶい橙色土 シルト質土
8. 明褐色土 砂質土
9. 灰白色土 砂質土、上部が酸化土
10. 灰白色土 砂質土
11. にぶい橙色土 砂質土
12. にぶい橙色土 砂質土、第11層より色味は明るい
13. にぶい橙色土 砂質土、細砂
14. にぶい橙色土 砂質土、黒斑状の錆を含む
15. にぶい橙色土 砂質土、やや締まりあり
16. にぶい橙色土 シルト質土、第2面耕土、砂質土を含む
- 16'. にぶい橙色土 シルト質土、第16層と近似、下部ににぶい橙色シルト質を含む

17. にぶい褐色土 シルト質土、第2面水田畦
18. にぶい褐色土 シルト質土
19. 暗褐色土 シルト質土、黒褐色土を含む
20. 明褐色土 シルト質土
21. 灰褐色土 砂質土、硬く締まりあり
22. 灰褐色土 砂質土、As-Bを含む、締まり強、第4面水田畦
- 22'. 灰褐色土 砂質土、As-Bを含む、締まりあり
23. 褐色土 砂質土、As-Bを含む、締まり強
24. 灰褐色土 砂質土、As-Bを含む、締まり強
25. 褐色土 砂質土、締まり強、第4面水田畦
26. As-B
27. 褐色土 シルト質土、As-Bを含む
28. 褐色土 シルト質土、色味は明るい
29. 褐色土 シルト質土
30. 褐色シルト質土と褐色シルト質土の混土
31. 黒褐色土 シルト質土
32. 黄灰色土 シルト質土



第116図 2区第4面水田土層断面図と出土遺物

遺物は、渥美陶器甕か壺(第116図1)が水田埋没土から出土した。非掲載遺物は、須恵器大型製品1点、灰釉陶器椀・皿1点、中世の在地系鉢・鍋1点、時期不詳の土器類1点である。

水田の時期を特定できないが、時期は、中世以降と考えられる。

## 2 溝

2区第4面で確認した中世から近世の溝は、2条である。調査区中央部および東部に位置し、ほぼ南北方向に走行する溝である。第4面では水田を確認し、遺構確認状況から水田の給排水のために掘られた溝の可能性もある。

### 2区4号溝(第117図 PL.38)

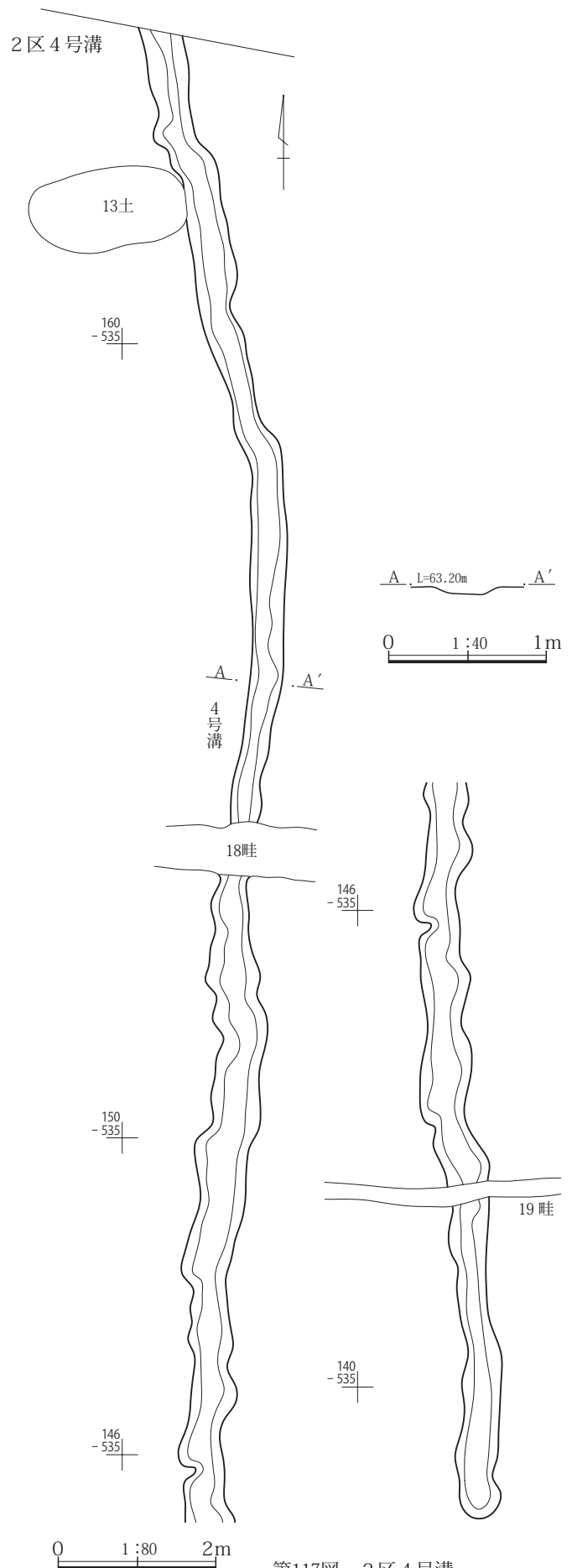
第4面中央部のX=138～163、Y=-532～534に位置する。第4面で確認した水田の18・19号畦と重複し、遺構確認状況から4号溝が古いと考えられる。走行は南北方向であるが、南側に比べ北側がやや屈曲し、全体に僅かであるが蛇行する。走行方向が近似する5号溝は、東側25.6mに位置する。調査区外となる北側にさらに延長すると想定されるため、全体の規模は不明である。

確認できる規模は、長さ25.78m、幅0.29～0.69m、深さ0.01～0.09mを測る。走行方向はN-5°-Wである。標高は、北端63.19m、南端63.13mであり、勾配は0.23%であり、高低差は僅かであるが北側から南側にかけて流れていたと想定される。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁が斜めに立ち上がる。水田の18・19号畦と直交することから、水田の給排水などに関連する溝として使用されていた可能性もある。

非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器1点である。出土遺物が少なく時期を特定できないが、水田と同時期の中世から近世と考えられる。

### 2区5号溝(第118図 PL.39)

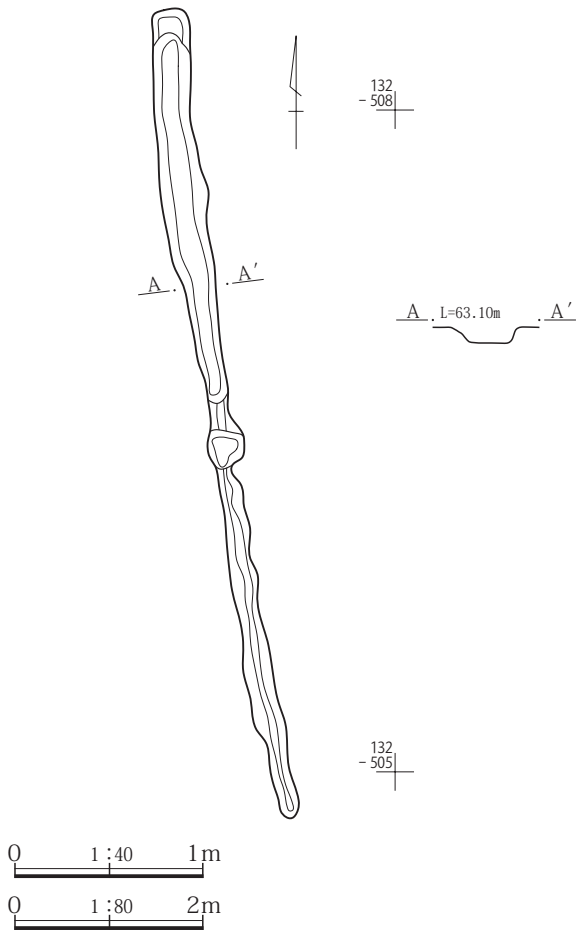
第4面東部のX=131～140、Y=-505～507に位置する。重複する遺構はない。走行は南北方向にほぼ直線状に走行する。水田面で確認された他の耕作痕と比べ、規模が大きくなることから溝と判断した。5号溝は、4号溝から東側へ25.6m、19号畦東端から2.30mに位置する。



第117図 2区4号溝



2区5号溝



第118図 2区5号溝

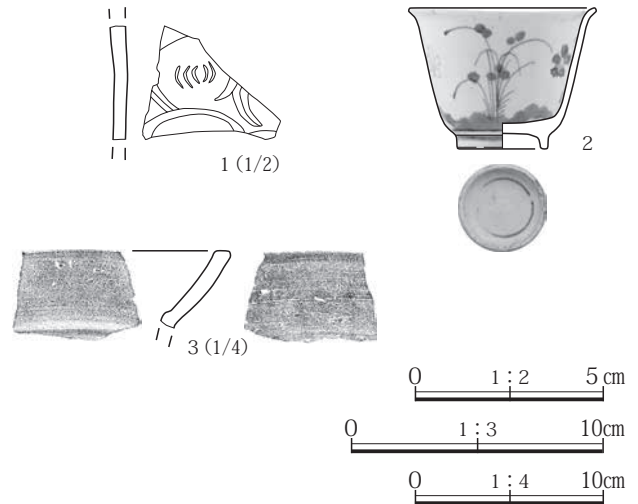
規模は、長さ8.65m、幅0.15～0.51m、深さ0.01～0.09mを測る。走行方向はN-9°-Wであり、4号溝の走行方向に近似する。標高は、北端63.06m、南端62.97mであり、勾配は1.04%であり、高低差は僅かであるが北側から南側にかけて流れていたと想定される。断面形状は底面が平坦で、壁が斜めに立ち上がる。中央部分や北端に僅かな段差が認められるがほぼ平坦である。19号畦とは直交していないが、水田の給排水に関連した溝として使用されていた可能性もある。

出土遺物がなく時期を特定できないが、時期は、水田と同時期中世から近世と考えられる。

3 遺構外の出土遺物(第119図 PL.116)

中世以降の遺構確認面である第2～4面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。

遺物は、第2面から肥前磁器染付猪口(第119図2)、



第119図 2区遺構外の出土遺物

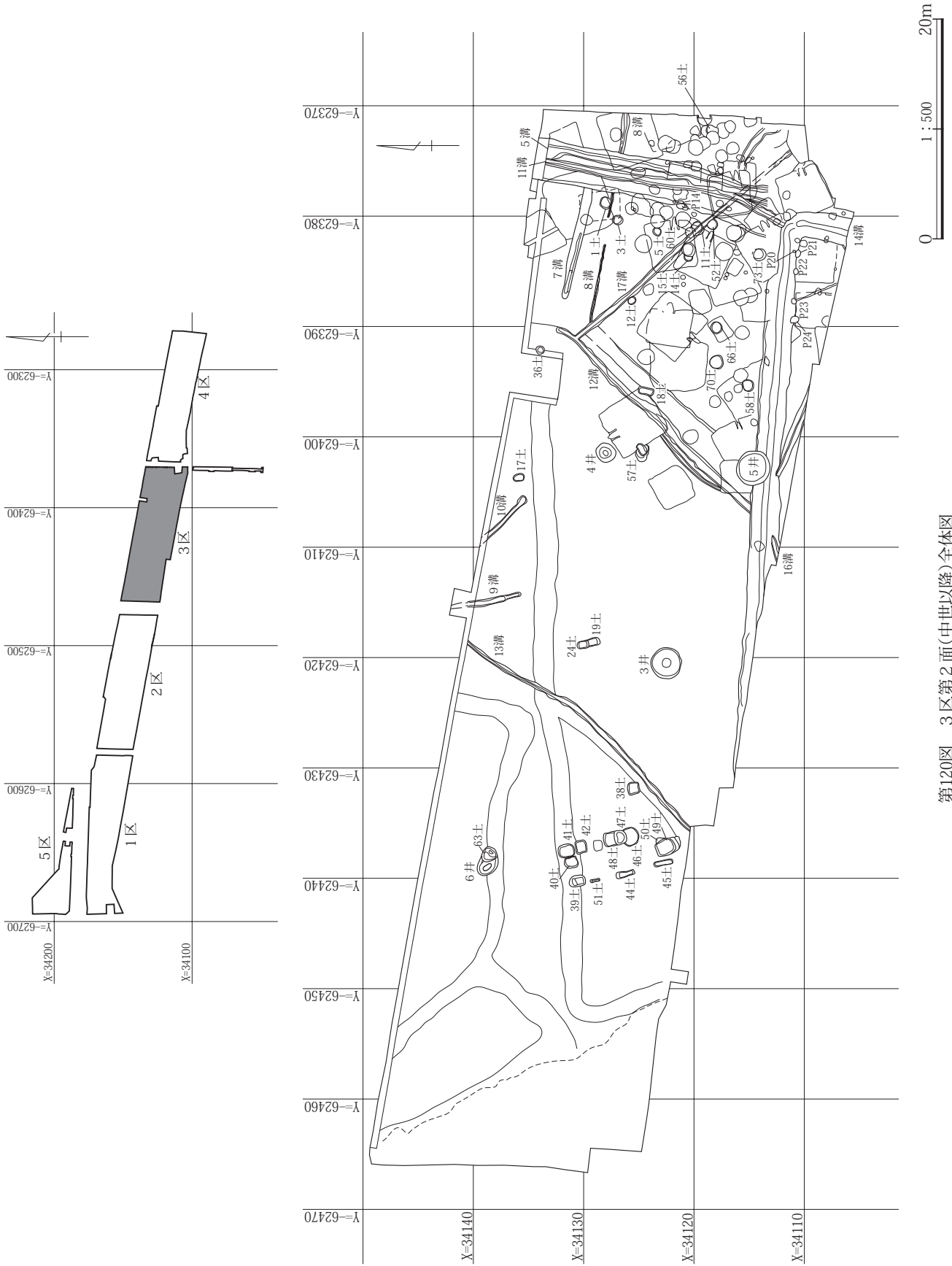
在地系土器内耳鍋(第119図3)、中国磁器青白磁瓶か(第119図1)が出土した。非掲載遺物は、土師器26点(大型製品25、小型製品1)、須恵器11点(大型製品6、小型製品5)、灰釉陶器1点(椀・皿)、中世中国陶器3点、国産施釉陶器1点、国産焼締陶器1点、在地系鉢・鍋8点、近世の国産施釉陶器4点、時期不詳の土器類13点である。

第4節 3区の遺構と遺物

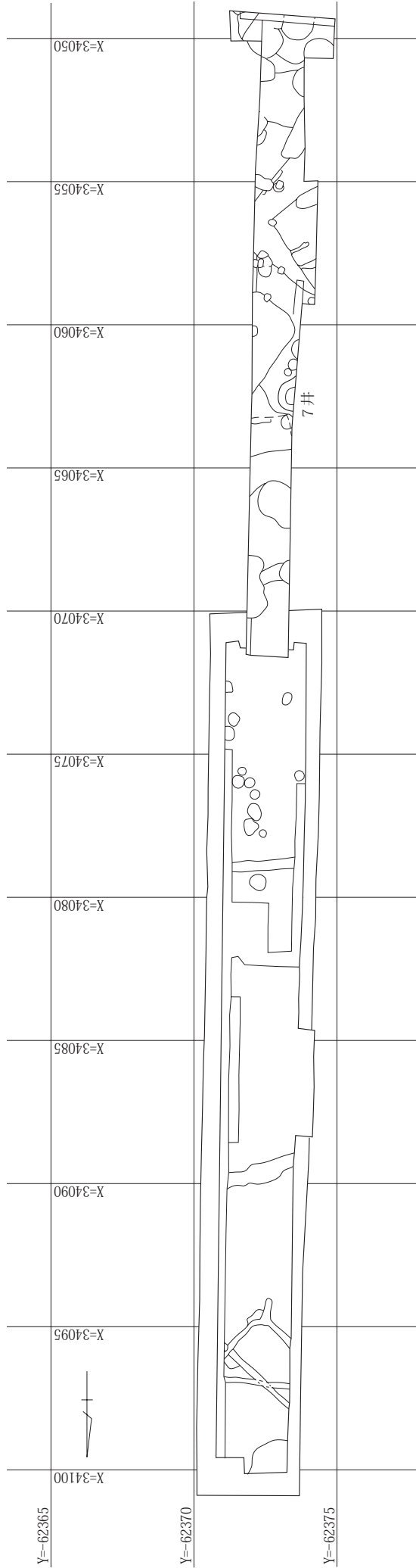
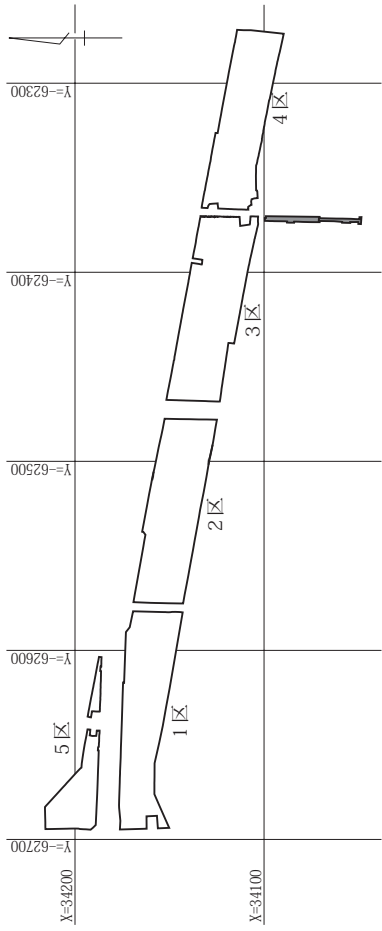
3区における中世から近世に至る遺構は、第2面で確認した。遺構確認面は、基本土層第15層下面である。発掘調査では、第2面において古墳時代から近世に至る遺構の調査を行っている。古墳時代から近世の遺構が混在していることから、中世から近世の遺構と古墳時代から平安時代の遺構に分けて掲載した。確認できた遺構は、土坑、ピット、井戸、溝である。

1 土坑・ピット

3区第2面で確認した中世から近世と考えられる土坑は34基、ピットは6基である。調査区東部や南側に位置する3区拡張部に集中する。出土遺物がなく時期を特定できない土坑とピットについては埋没土などから判断し中世から近世としたが、古墳時代から平安時代の土坑やピットが含まれている可能性もある。53号土坑と12号ピットは欠番である。それぞれの土坑とピットは、第15表土坑計測表(378・379頁)及び第16表ピット計測表(380頁)において概略を記す。



第120図 3区第2面(中世以降)全体図



第121図 3区第2面拡張部(中世以降)全体図

**3区1号土坑(第122図 PL.40)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦であり壁は斜めに立ち上がる。5号竪穴住居、8号溝と重複し、1号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、黄褐色土や黄灰砂を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できない。

**3区3号土坑(第122図 PL.40)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦であり、北壁に比べ南壁がやや緩やかに立ち上がる。5号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から3号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、少量のAs-Aと黄褐色土を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから時期は、近世と考えられる。

**3区5号土坑(第122図 PL.40・57)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面から開口部にかけて緩やかに立ち上がる。8号竪穴住居P1、6号土坑と重複し、5号土坑が新しい。埋没土は、As-Bや暗褐色土を多量に含む黒褐色土によって埋没する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**3区11号土坑(第123図 PL.40・117)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり壁は斜めに立ち上がる。8・15号竪穴住居、16・60号土坑、17号溝と重複する。11号土坑は、60号土坑より古く、8・15号竪穴住居、16号土坑、17号溝より新しい。埋没土は、黄褐色土塊、炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器甕(第123図11土1)、土製品土錘(第123図11土2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器29点(大型製品22、小型製品7)が出土し、遺物は混入と考えられる。17号溝との重複などから時期は、中世以降と考えられる。

**3区12号土坑(第123図)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。17号溝と重複し、12号土坑が新しい。埋没土は、As-Bを含む黒褐色土で埋没する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、須恵器杯(第123図12土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器64点(大型製品50、中型製品1、小型製品13)、須恵器8点(大型製品1、小型製品7)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**3区14号土坑(第123図 PL.41)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形と想定される。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。8号竪穴住居P3、15号竪穴住居P1、15号土坑と重複する。14号土坑は、8号竪穴住居P3、15号竪穴住居P1より新しく、15号土坑より古い。埋没土は、軽石(As-B?)を少量含む黒褐色土で埋没する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**3区15号土坑(第123図 PL.41・57)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面にやや凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。8号竪穴住居P3、15号竪穴住居、14号土坑、17号溝と重複し、15号土坑が最も新しい。埋没土は、黄褐色土塊や炭化物を含む暗褐色土や黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器22点(大型製品12、小型製品10)、須恵器4点(大型製品2、小型製品2)が出土し、遺物は混入と考えられる。14号土坑との重複などから時期は、中世以降と考えられる。

**3区17号土坑(第123図 PL.41)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が小ピット状に掘り窪められ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。黒褐色土塊や炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土と、As-Bを含む黒褐色土によって埋没する。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区18号土坑(第123図 PL.41)

第2面東側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は椀形を呈する。12号竪穴住居貯蔵穴と重複し、18号土坑が新しい。埋没土は、黒褐色土塊や黄褐色土塊を多量に含む灰黄褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できない。

### 3区19号土坑(第123図 PL.41)

第2面西側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は底面が平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。24号土坑と重複し、遺構確認状況から19号土坑が新しい。埋没土は、黒褐色土塊や炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器5点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、24号土坑との重複などから時期は、近世と考えられる。

### 3区24号土坑(第123図 PL.41)

第2面西側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は底面が平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。19号土坑と重複し、遺構確認状況から24号土坑が古い。埋没土は、黄灰色砂質土やAs-Aを含む褐灰色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、近世と考えられる。

### 3区36号土坑(第123図 PL.41)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土塊やAs-Bを含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第123図36土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器16点(大型製品15、小型製品1)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区38号土坑(第124図 PL.41)

第2面西側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は底面が平坦であり壁は斜めに立ち上がる。第2面

で確認した水田畦と重複し、38号土坑が新しい。埋没土は、As-B混土を含むにぶい黄褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区39号土坑(第124図 PL.41)

第2面東側に位置する。40～42号土坑が隣接する。平面形状は楕円形で、断面形状は椀形を呈する。水田畦と重複し、39号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、38号土坑と類似し、にぶい黄褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区40号土坑(第124図 PL.42)

第2面東側に位置する。39・41・42号土坑が隣接する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は東側より西側がやや緩やかに立ち上がる。水田畦と重複し、40号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、As-B混土を含むにぶい黄褐色砂質土であり、人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、須恵器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区41号土坑(第124図 PL.42)

第2面東側に位置する。39・40・42号土坑が隣接する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり壁は斜めに立ち上がる。水田畦と重複し、41号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、As-B混土を含むにぶい黄褐色砂質土や褐灰色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区42号土坑(第124図 PL.42)

第2面東側に位置する。39～41号土坑が隣接する。平面形状は長方形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。水田畦と重複し、42号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、As-B混土や黒褐色土塊を



含むにぶい黄褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区44号土坑(第124図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、As-B混土を含むにぶい黄褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区45号土坑(第124図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、44号土坑に類似し、にぶい黄褐色砂質土である。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器2点(小型製品)、須恵器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区46号土坑(第124図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。47号土坑と重複し、46号土坑が新しい。埋没土は、As-B混土とにぶい黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土と黒褐色土塊を含むにぶい黄褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区47号土坑(第124図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。46・48号土坑と重複し、46号土坑より古く、48号土坑より新しい。埋没土は、As-B混土塊を含むにぶい黄褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区48号土坑(第124図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。47号土坑と重複し、48号土坑が古い。埋没土は、As-B混土やにぶい黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区49号土坑(第125図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。50号土坑と重複し、49号土坑が古い。埋没土は、にぶい黄褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区50号土坑(第125図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面北側が斜めに立ち上がり、南側には中段を設ける。49号土坑と重複し、50号土坑が新しい。埋没土は、As-B混土を含む暗褐色土とにぶい黄褐色砂質土による自然埋没と考えられる。非掲載遺物は、土師器5点(大型製品)の他、近世の国産磁器1点、国産施釉陶器3点が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、近世と考えられる。

### 3区51号土坑(第125図 PL.42)

第2面西側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は椀形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、にぶい黄褐色砂質土により、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器11点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区52号土坑(第125図 PL.42)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。17号溝と重複し、52号土坑が新しい。埋没土は、砂質土を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)、須恵器4点(大型製品)

が出土し、遺物は混入と考えられる。中世以降の17号溝との重複から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区56号土坑(第125図 PL.42)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。21・54号土坑と重複し、56号土坑が最も新しい。埋没土は、焼土粒、炭化物、黄褐色土塊を含む黒褐色土と黄褐色土塊、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物が多く、非掲載遺物は、土師器57点(大型製品50、小型製品7)、須恵器3点(大型製品2、小型製品1)の他、近世の国産施釉陶器2点、在地系焙烙・鍋1点が出土した。出土遺物から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区57号土坑(第125図 PL.43)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。12号竪穴住居と重複し、57号土坑が新しい。埋没土は、As-B混土、黄褐色土塊、黒褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器甕(第125図57土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器39点(大型製品30、小型製品9)、須恵器3点(大型製品2、小型製品1)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区58号土坑(第125図 PL.43)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。74号土坑と重複し、遺構確認状況から58号土坑が最も新しい。埋没土は、褐灰色砂質土や黄褐色土塊、焼土粒を含む暗褐色土やにぶい黄橙色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器10点(大型製品9、小型製品1)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区60号土坑(第125図 PL.43)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形を呈する。断面形状は底面がほぼ平坦である。8・15号竪穴住居、11・16号土坑、17号溝と重複し、60号土坑が最も新しい。

埋没土は、黄褐色土塊、焼土粒、炭化物を含む黒褐色土、黄褐色土粒、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土、黒褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しは不明である。非掲載遺物は、土師器9点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、中世以降と考えられる。

### 3区63号土坑(第126図 PL.43・45・117)

第2面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は東側が小ピット状に掘込まれている。水田、6号井戸と重複し、63号土坑が新しい。埋没土は、As-Bや黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、棒状礫(第126図63土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品)、須恵器3点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区66号土坑(第126図 PL.43)

第2面東側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。76号土坑と重複し、66号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土塊を含む暗褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器4点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区70号土坑(第126図 PL.43・117)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦であり、南半部の壁は斜めに、北半部の壁はほぼ垂直に立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、As-Bを含む黒色土と黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土製品土錘(第126図70土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器52点(大型製品47、小型製品5)、須恵器11点(大型製品2、小型製品9)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

### 3区73号土坑(第126図)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦であり、壁面が袋状に掘込まれている。

10号竪穴住居と重複し、73号土坑が新しい。埋没土は、As-B混土や黄褐色土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**3区14号ピット(第126図 PL.43)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。11号溝と重複し、遺構確認状況から14号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、灰黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器5点(小型製品)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できない。

**3区20号ピット(第126図 PL.44)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は台形を呈する。14号溝と重複し、遺構確認状況から20号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、焼土粒や灰黄褐色土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。明瞭な柱痕は確認できなかった。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品1、小型製品1)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できない。

**3区21号ピット(第126図 PL.44)**

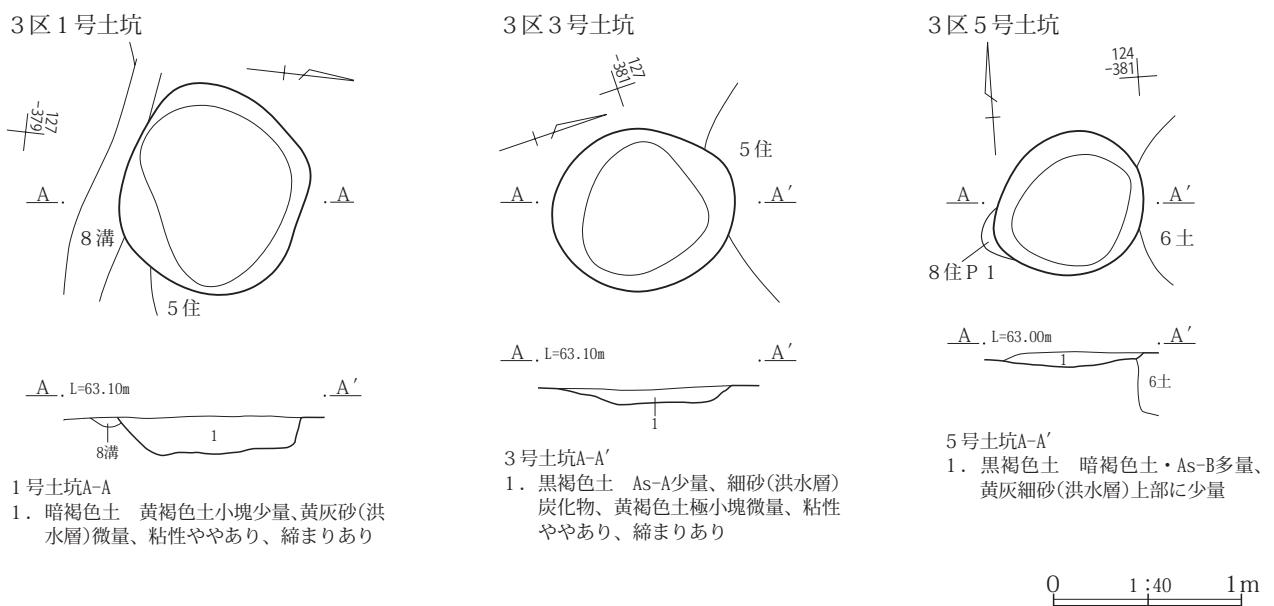
第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。25号竪穴住居、14号溝と重複し、遺構確認状況から21号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、焼土粒やローム大粒を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できない。

**3区22号ピット(第126図 PL.44)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。25号竪穴住居、14号溝と重複し、遺構確認状況から22号ピットが最も新しいと考えられる。埋没土は、ローム中粒を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できない。

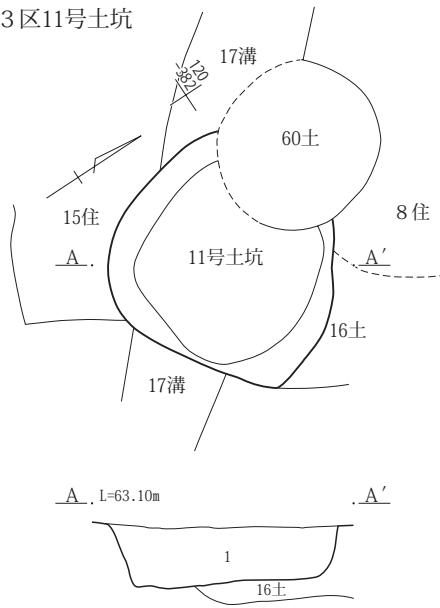
**3区23号ピット(第126図 PL.44)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。27・28号竪穴住居、14号溝と重複し、遺構確認状況から23号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、ローム中塊を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できない。



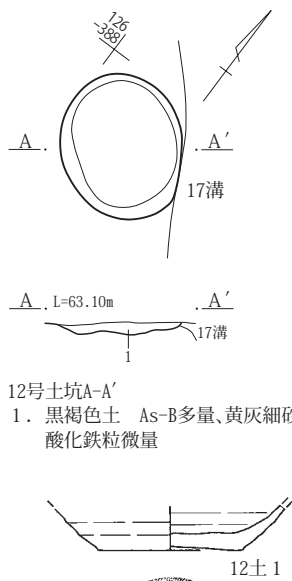
第122図 3区1・3・5号土坑

3区11号土坑



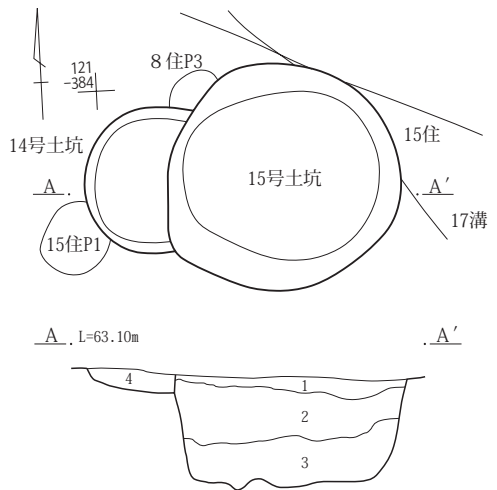
11号土坑A-A'  
1. 暗褐色土 黄褐色土小塊を含む、焼土粒・炭化物微量

3区12号土坑



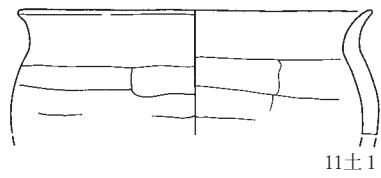
12号土坑A-A'  
1. 黒褐色土 As-B多量、黄灰細砂・酸化鉄粒微量

3区14・15号土坑

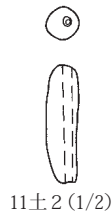


14号・15号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊を含む、炭化物微量  
2. 黒褐色土 炭化物微量、粘性ややあり  
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊・炭化物粒微量  
4. 黒褐色土 軽石(As-B?)少量、粘性ややあり

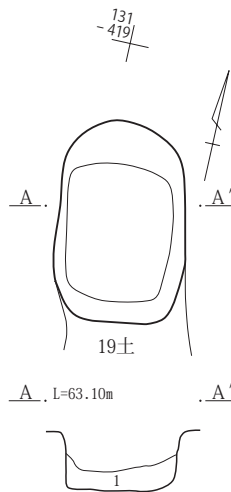


11土 1



11土 2 (1/2)

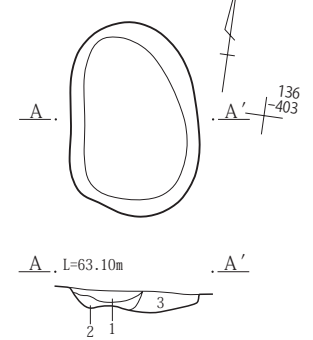
3区24号土坑



24号土坑A-A'

1. 褐灰色土 As-A多量、黄灰色砂質土小塊微量、縮まりなし

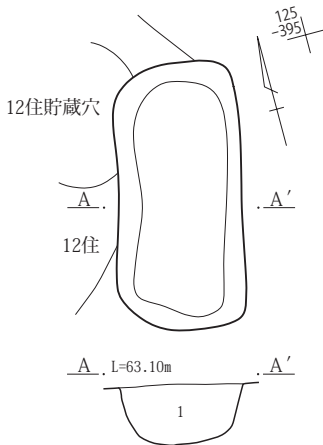
3区17号土坑



17号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色砂質土 黒褐色土小塊、炭化物微量、縮まり弱  
2. 黒褐色土 As-Bを含む  
3. にぶい黄褐色 砂質土

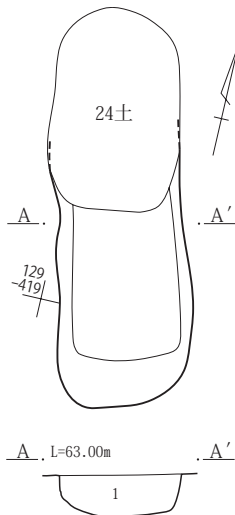
3区18号土坑



18号土坑A-A'

1. 灰黄褐色土 砂質土、黒褐色土大塊・黄褐色土小塊多量、17・19号土坑より粘性あり、縮まりあり

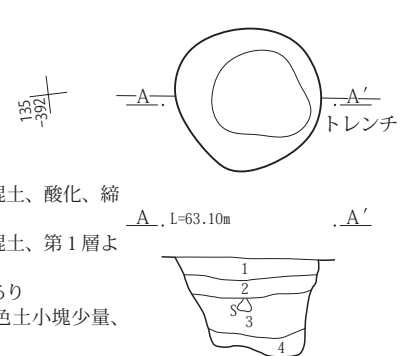
3区19号土坑



19号土坑A-A'

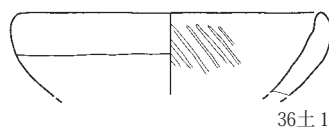
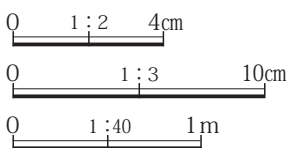
1. にぶい黄褐色土 砂質土、黒褐色土小塊、炭化物微量

3区36号土坑



36号土坑A-A'

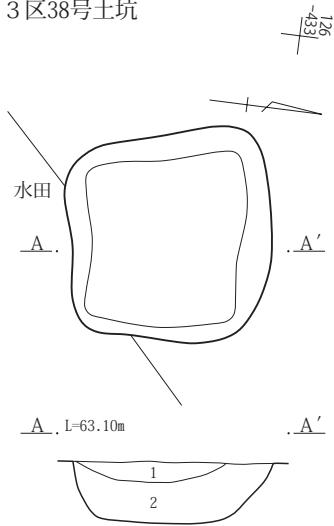
1. 暗褐色土 As-B混土、酸化、縮まり強  
2. 暗褐色土 As-B混土、第1層よりAs-B少量  
3. 暗褐色土 粘性あり  
4. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、粘性あり



36土 1

第123図 3区11・12号土坑と出土遺物、14・15・17・18・19号土坑・24号土坑と出土遺物・36号土坑

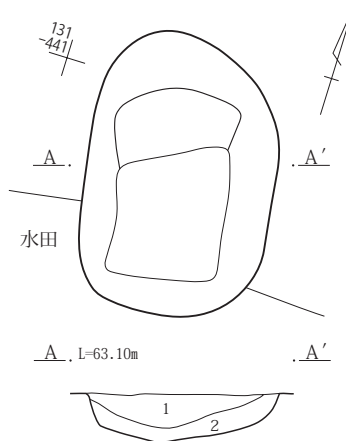
3区38号土坑



38号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土を斑に含む
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土微量

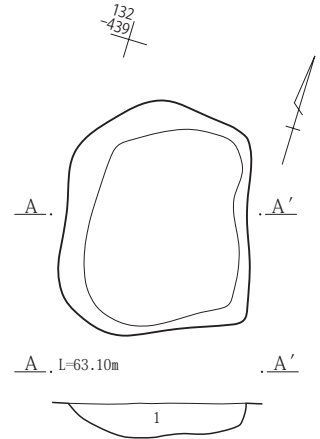
3区39号土坑



39号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土
2. にぶい黄褐色土 砂質土、黒褐色粘質土極小塊少量

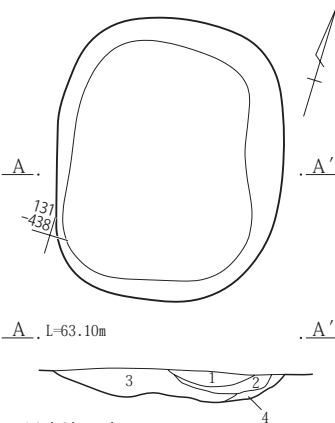
3区40号土坑



40号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土少塊少量

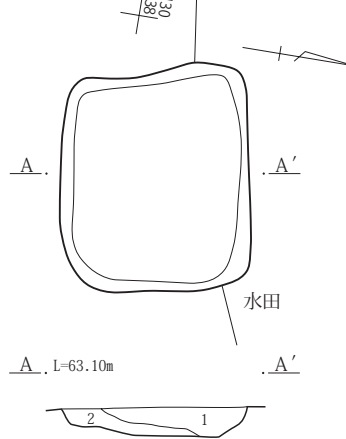
3区41号土坑



41号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色砂質土大塊主体
2. にぶい黄褐色土 砂質土 As-B混土中塊多量
3. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色砂質土小塊少量
4. 褐灰色土 粘質土、にぶい黄褐色土少量

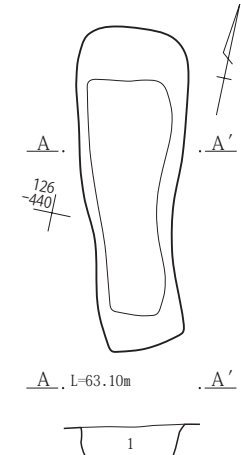
3区42号土坑



42号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、黒褐色粘質土中塊少量
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土小塊多量

3区44号土坑

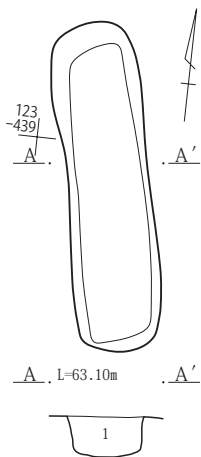


44号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土極小塊少量

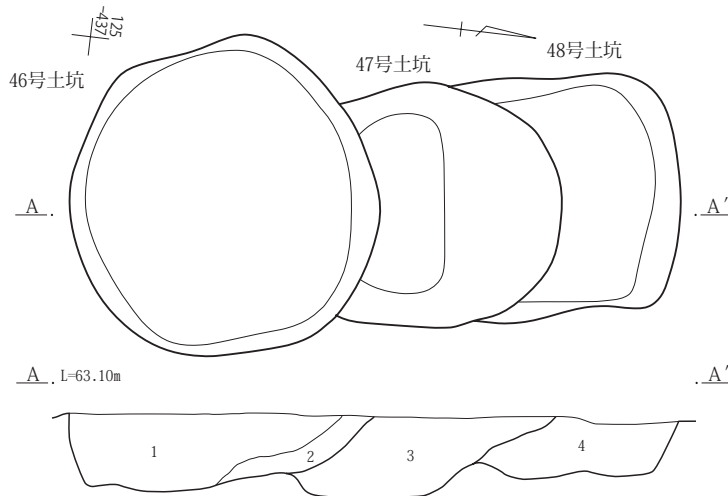
3区46・47・48号土坑

3区45号土坑



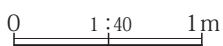
45号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土



46・47・48号土坑A-A'

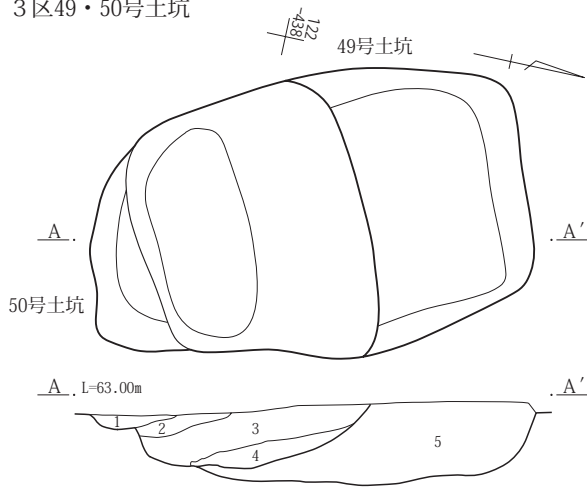
1. にぶい黄褐色土 砂質土、黒褐色粘質土中塊少量
2. 暗褐色土 As-B混土、にぶい黄褐色土小塊多量
3. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土中塊少量
4. 暗褐色土 As-B混土主体、にぶい黄褐色土小塊少量



第124図 3区38～42・44～48号土坑



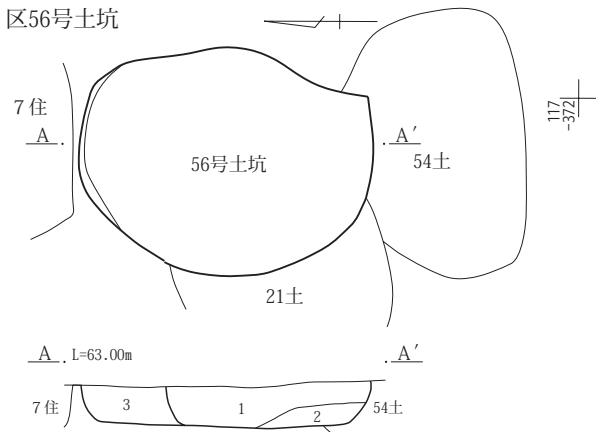
3区49・50号土坑



49・50号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、As-B混土少量
2. 暗褐色土 As-B混土、にぶい黄褐色土中塊少量
3. にぶい黄褐色土 砂質土
4. 暗褐色土 As-B混土、にぶい黄褐色土中塊多量
5. にぶい黄褐色土 砂質土

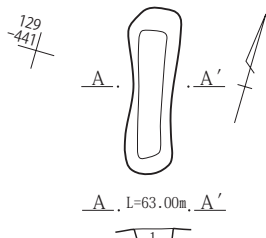
3区56号土坑



56号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土極小塊少量、炭化物・焼土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土中塊少量、第1層より色味は暗い
3. 黒褐色土 黄褐色土小塊少量、炭化物・焼土粒微量

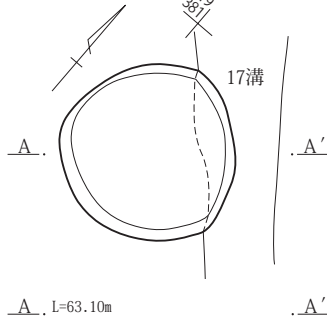
3区51号土坑



51号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土

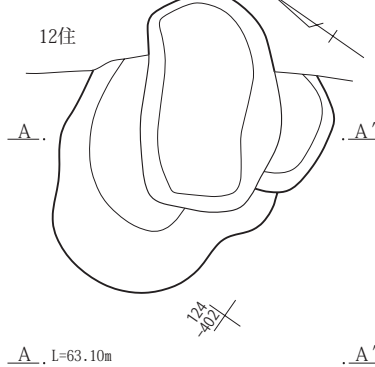
3区52号土坑



52号土坑A-A'

1. 暗褐色土 砂質土少量

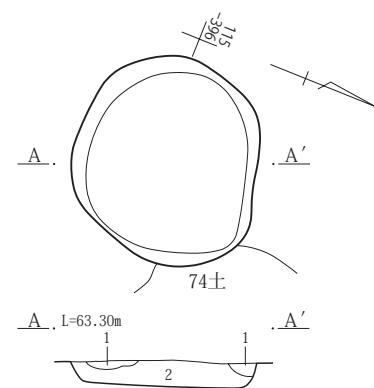
3区57号土坑



57号土坑A-A'

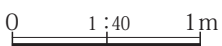
1. 暗褐色土 As-B混土、酸化、黄褐色土大塊多量
2. 暗褐色土 As-B混土、黄褐色土極小塊微量
3. 暗褐色土 As-B混土、黄褐色土大塊やや多量
4. 暗褐色土 As-B混土、黒褐色土小塊多量、黄褐色土極小塊微量

3区58号土坑

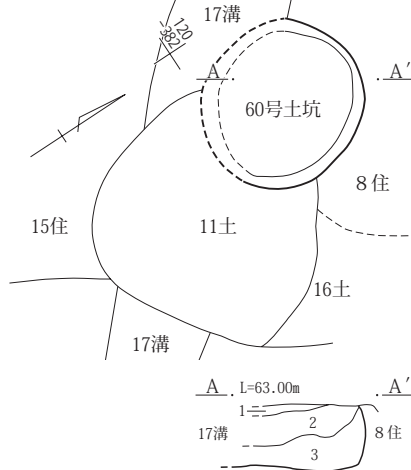


58号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土
2. 暗褐色土 褐灰色砂質土小塊やや多量、黄褐色土極小塊少量、焼土粒微量、やや粘性あり

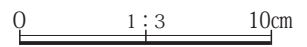


3区60号土坑

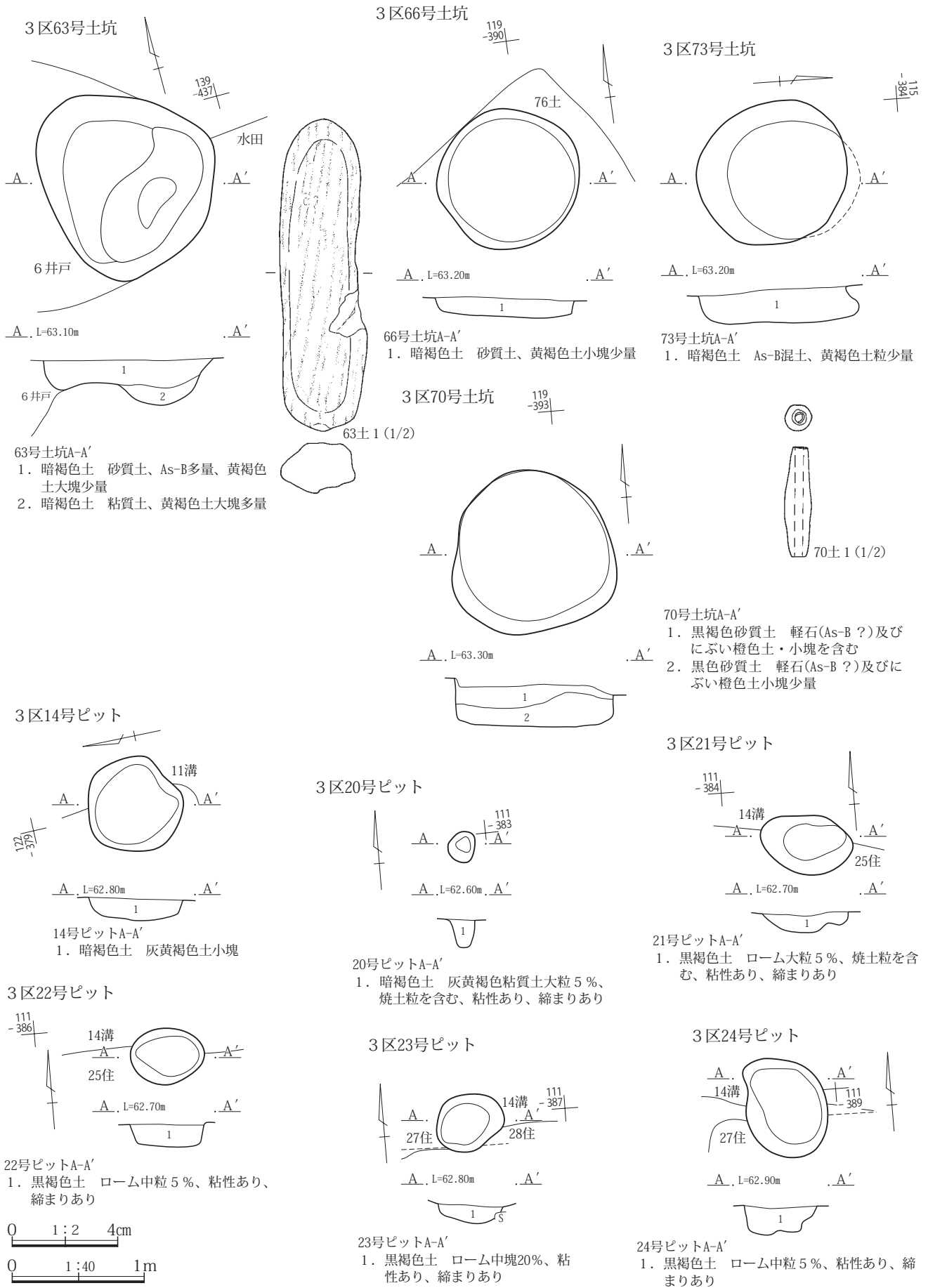


60号土坑A-A'

1. 黒褐色土 砂質土
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物微量、締まりややあり
3. 黒褐色土 黄褐色土中塊多量、焼土粒・炭化物微量、やや砂質



第125図 3区49～52・56～58・60号土坑



第126図 3区63号土坑と出土遺物・66号土坑・70号土坑と出土遺物・73号土坑、14・20～24号ピット

### 3区24号ピット(第126図 PL.44)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。27号竪穴住居、14号溝と重複し、遺構確認状況から24号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、22号ピットと同一であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できない。

## 2 井戸

3区第2面では、5基の井戸を調査した。第1面では、近世の井戸2基を調査し、形状や規模などが類似する井戸が第2面でも確認されている。遺構確認面は中世以降であるが、中世から近世に帰属する井戸の可能性はある。

### 3区3号井戸(第127図 PL.44)

第2面中央部のX=121～123、Y=-419～422に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-0°である。平面形状は整った円形を呈し、掘削状況は円筒形と想定される。

規模は、直径2.80mを測る。底面に湧水が認められたため、確認できた深さは0.59mである。石積みの井戸であり、崩落は少ない。円筒形に掘削したのち、壁面から約0.45～0.50m内側に礫を円筒形に積み上げている。埋没土は、粗粒砂を含む灰黄褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。掘り方は、褐灰色粘質土や黄褐色土塊などを含むにぶい黄褐色土や褐灰色土で充填し非常に締まる。遺構確認面下0.50～0.70mまでは石積みが認められたが、底面付近まで石を積み上げていたかは確認できなかった。

非掲載遺物は、土師器3点(大型製品2、不明1)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土などから時期は、中世から近世と考えられる。

### 3区4号井戸(第127図 PL.44・45)

第2面東側のX=127・128、Y=-400～402に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-44°-Eである。平面形状は円形を呈する。断面形状は、井戸の下層が円筒形となり、遺構確認面下約0.90mから開口部にかけて斜めに立ち上がるように掘削されている。

規模は、長径1.76m、短径1.62mを測る。底面に湧水が認められたため、確認できた深さは1.29mである。埋没土は、As-Bや黄褐色土塊を含む褐灰色土や暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。第4層の壁際に礫が認められ、円筒形に地山を掘り、石を筒形に積み上げたと考えられる。第3層中の礫は上層の石積みが崩落したとみられる。

非掲載遺物は、須恵器4点(大型製品2、小型製品2)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土などから時期は、中世から近世と考えられる。

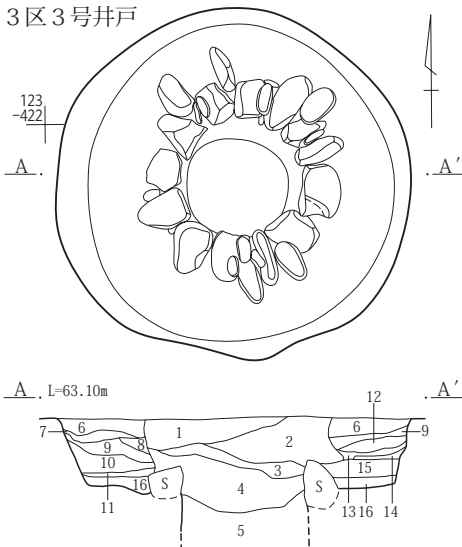
### 3区5号井戸(第127・128図 PL.45・78・117)

第2面東側のX=113～116、Y=-401～404に位置する。14・31号竪穴住居、14号溝と重複し、遺構確認状況から5号井戸が新しいと考えられる。開口部の主軸方向は、N-76°-Wである。平面形状は整った円形を呈する。掘削状況は円筒形と想定される。

規模は、長径3.13m、短径3.00mを測る。底面に湧水が認められたため、確認できた深さは1.46mである。石積みの井戸で、遺存状況は良好である。地山を円筒形に掘削したのち、壁面から約0.70m内側に石を積み上げている。埋没土は、灰黄褐色土による自然埋没と考えられ、第1層中に認められる多量の礫は、上層に積み上げた石積み礫の崩落と考えられる。掘り方は、褐灰色粘質土や黄褐色土塊などを含むにぶい黄褐色土や褐灰色土で充填し非常に締まる。底面付近まで石を積んでいたか調査では確認できなかったが、井戸の開口部下1.30mの東側壁に礫が認められることからさらに下層まで礫を積んでいた可能性もある。

遺物は、肥前磁器染付碗(第128図5井1)、肥前陶器陶胎染付碗(第128図5井2)、瀬戸・美濃陶器尾呂碗(第128図5井3～5)、在地系土器鍋か(第128図5井6)、石皿(第128図5井7)、石臼(第128図5井8)、石製品(第128図5井9)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器31(大型製品)、須恵器2点(大型製品)、灰釉陶器1点(大型製品)、石臼1点、近世の国産施釉陶器4点、在地系焙烙・鍋4点である。埋没土などから時期は、近世と考えられる。

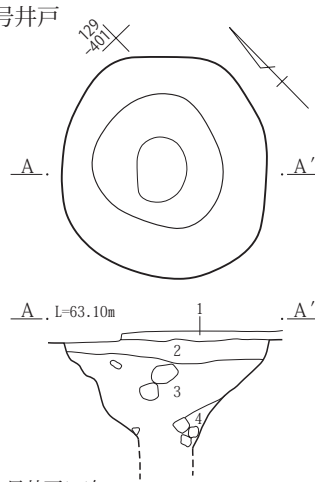
3区3号井戸



3号井戸A-A'

1. 灰黄褐色土 粗粒砂少量、黒褐色土小塊を含む
2. 灰黄褐色土 粗粒砂少量、第1層より色味はやや暗い
3. 灰黄褐色土 粗粒砂少量、第2層より色味はやや明るい
4. 灰黄褐色土 粗粒砂多量、第3層より色味はやや暗い
5. 灰黄褐色土 第4層に近似、色味は暗い
6. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土中塊少量
7. 灰白色土 粘質土、小礫含む、前橋泥流軽石
8. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土塊・灰白色土・粘質土塊多量
9. 褐灰色土 粘質土、にぶい黄褐色土大塊多量
10. 第6層と同質 下層に褐灰色粘質土が層厚1cm堆積、縮まり強
11. 第10層と同質、縮まりあり
12. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土塊・灰白色土・粘質土塊少量
13. にぶい黄褐色土 砂質土、褐灰色粘質土中塊微量
14. にぶい黄褐色土 第13層に近似 縮まり強
15. にぶい黄褐色土 第12層に近似、灰白色土・粘質土塊少量、縮まり強
16. 褐灰色土 砂質土、にぶい黄褐色土大塊多量、縮まり強

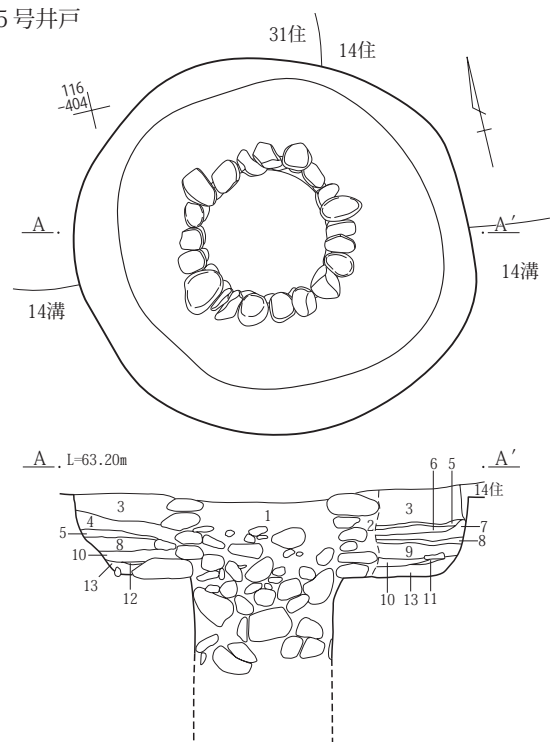
3区4号井戸



4号井戸A-A'

1. 褐灰色土 As-B混土、縮まりあり
2. 暗褐色土 As-Bを含む、黄褐色土大塊多量、酸化鉄分あり、縮まりあり
3. 褐灰色土 As-Bを含む、黄褐色土中塊少量、礫多量、粘性あり
4. 褐灰色土 黄褐色土中塊多量、礫多量

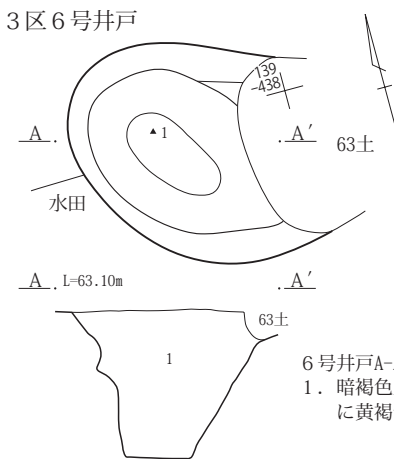
3区5号井戸



5号井戸A-A'

1. 灰黄褐色土 拳大~人頭大の礫多量
2. 灰黄褐色土 小礫やや多量、縮まり弱
3. 黄褐色土 砂土、小礫多量、縮まりあり
4. 褐灰色土 黒褐色土中塊・黄褐色土小塊少量
5. 褐灰色土 砂質土
6. 黒褐色土 褐灰色砂質土多量、黄褐色土塊・黄褐色土塊やや多量
7. 褐灰色土 砂質土
8. 褐灰色土 黒褐色土中塊・黄褐色土小塊少量
9. 黄褐色土 砂土、小礫多量、縮まりあり
10. 明黄褐色土 粘質土、小礫少量
11. 褐灰色土 砂質土
12. 黒褐色土 粘質土
13. 明黄褐色土 粘質土、小礫少量

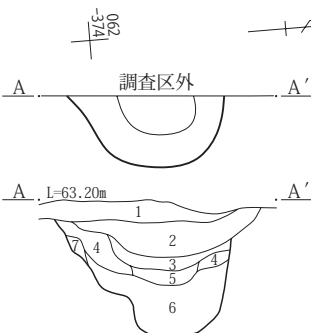
3区6号井戸



6号井戸A-A'

1. 暗褐色土 上層にAs-B多量、下層に黄褐色土大塊少量

3区7号井戸

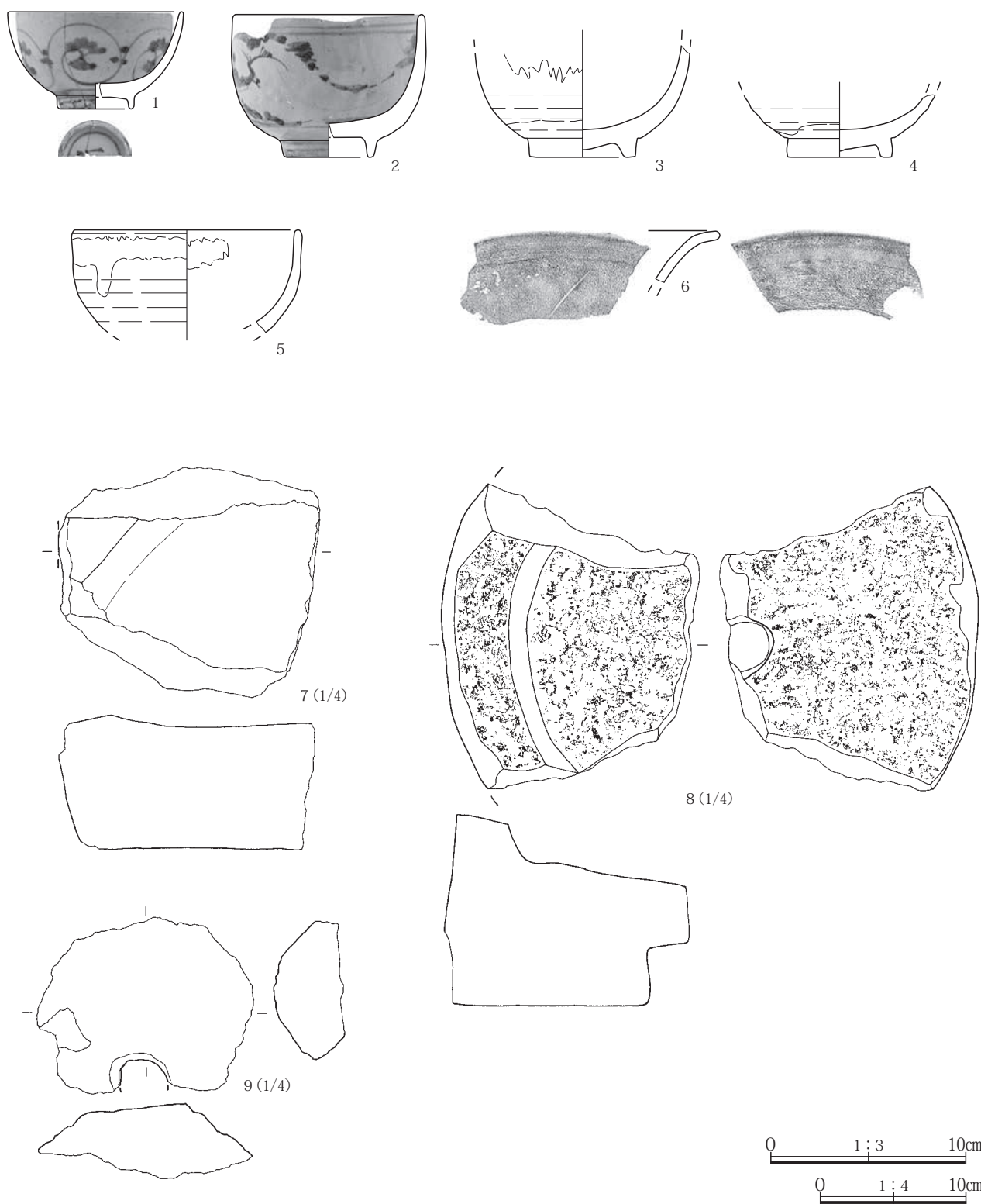


7号井戸A-A'

1. 灰褐色土 浅黄橙色土塊少量
2. 灰褐色土 浅黄橙色土塊・明褐色粘土塊少量、粘土粒微量
3. 褐灰色土 砂質
4. 褐灰色土 第2層に近似、浅黄橙色土小塊・明褐色粘土小塊を含む、縮まりあり
5. 褐灰色土 第4層に近似
6. 褐灰色土 浅黄橙色土小塊・明褐色粘土小塊は第4層より少量
7. にぶい黄橙色土 粘質土

第127図 3区3~7号井戸





第128図 3区5号井戸出土遺物



3区6号井戸(第127図 PL.45・117)

第2面西側のX=137～139、Y=-438・439に位置する。水田、63号土坑と重複する。6号井戸は、水田より新しく、63号土坑より古い。開口部の主軸方向は、N-75°-Wである。平面形状は不定形を呈し、断面形状は台形と想定される。

確認できる規模は、長径1.98m、短径1.69m、深さ1.17mを測る。底面に湧水が認められる。底面に礫が認められるが、側壁などに礫は認められない。埋没土は、上層には多量のAs-B、下層には少量の黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられ、掘り方は確認できなかった。

遺物は、石製品(6井戸1、PL.117)が底面直上から出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土などから時期は、中世から近世と考えられる。

3区7号井戸(第127図 PL.45)

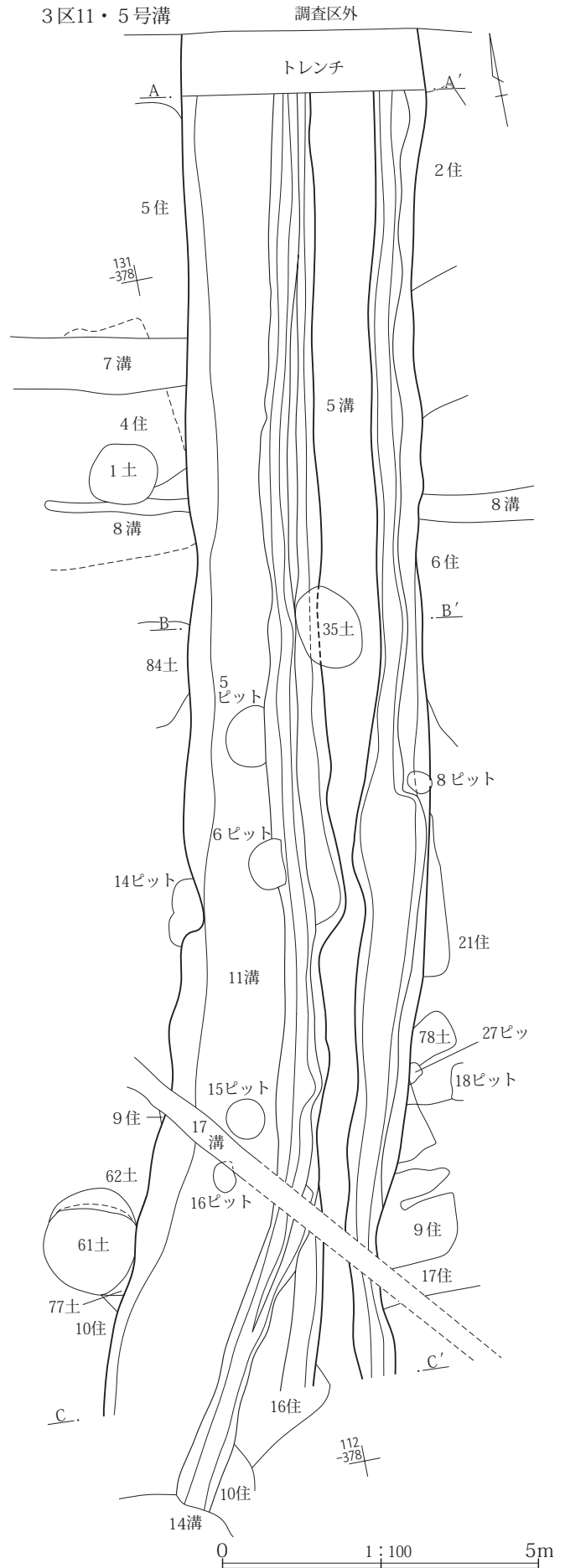
第2面拡張部のX=061～063、Y=-372・373に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-0°である。井戸の西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、北壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁は垂直に約0.25m立ち上がったのち段差を設け開口部にかけて斜めに立ち上がる。

規模は、長径1.26m、短径0.56mを測る。底面に湧水が認められたため、確認できた深さは0.90mである。埋没土は、浅黄橙色土塊や明褐色粘土塊を含む灰褐色土による自然埋没と考えられる。石積みの礫などは認められず掘り方も確認できなかった。

出土遺物がなく時期を特定できないが、中世から近世と考えられる。

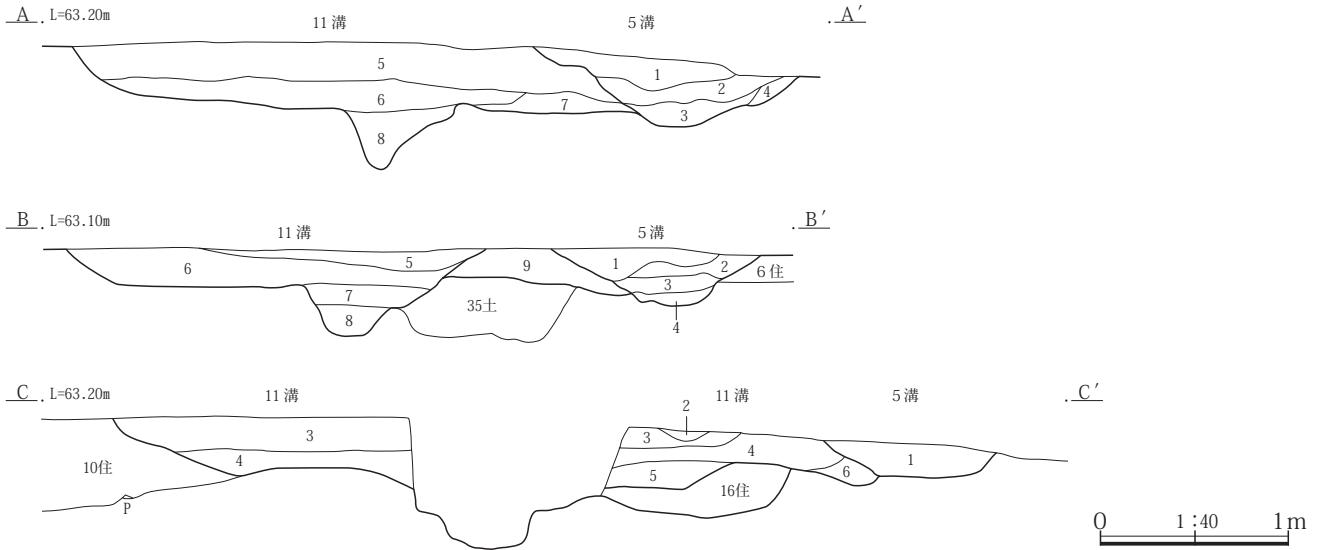
3 溝

3区第2面では、中世から近世とみられる溝11条を調査した。溝は、おもに調査区東側から確認された。第2面では古墳時代から平安時代の遺構も確認され、各時期の遺構が混在する状況である。溝からの出土遺物がなく、明確な時期を特定できず中世から近世としたが、古い時期の溝が含まれている可能性もある。6号溝は、欠番である。



第129図 3区5・11号溝

第4章 中世以降の遺構と遺物



5・11号溝A-A'

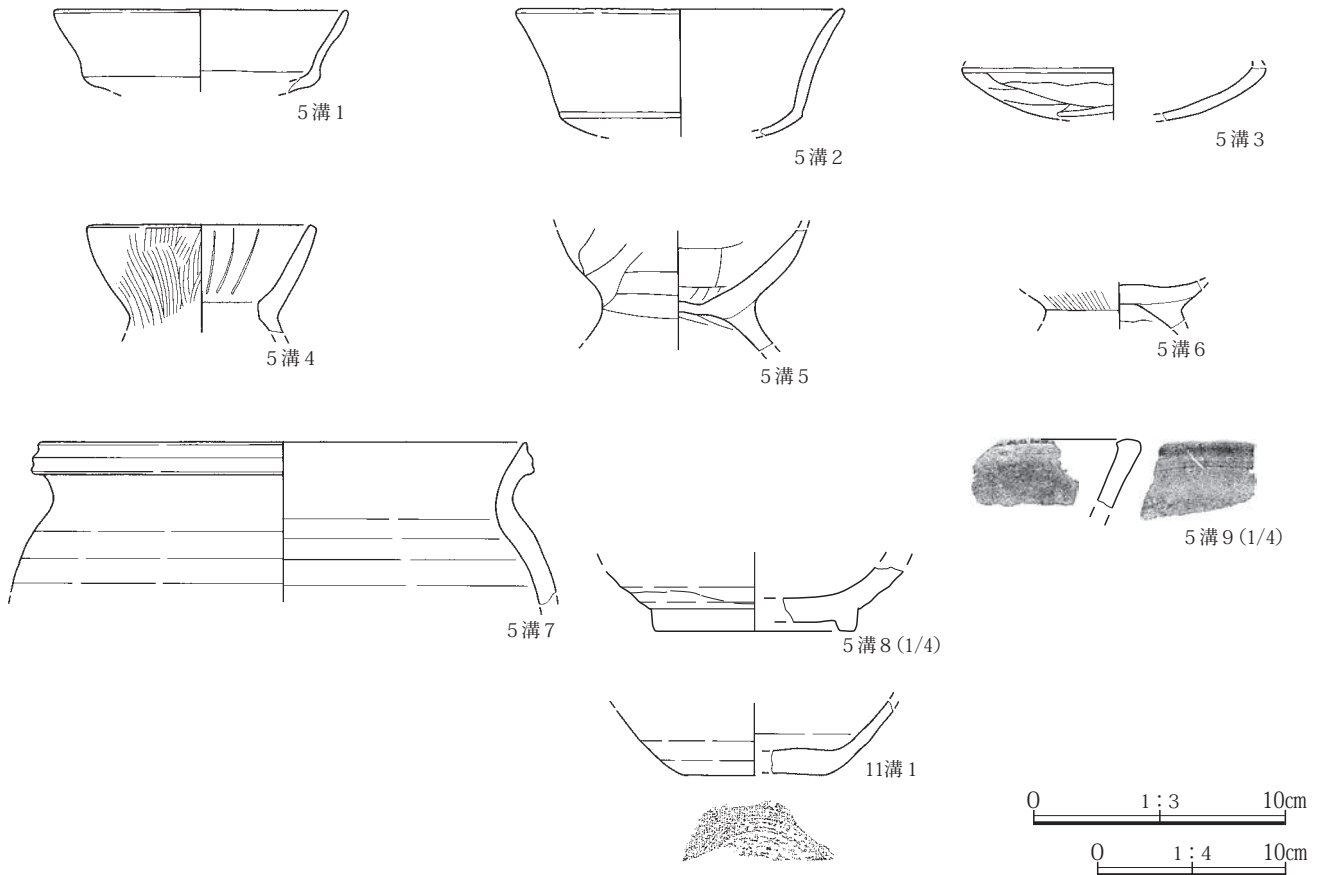
1. 明褐色土 砂質土、暗褐色土を含む
2. 褐色土 黄褐色土・暗褐色土少量、第5層より色味は暗い
3. 褐色土 粘質土、灰褐色シルトを挟む、締まり強
4. 褐色土 黄褐色大塊を含む
5. 褐色土 粘質土、締まりあり
6. 褐色土 第5層より色味は明るい
7. 褐色土 粘質土
8. 褐色土 黄褐色土塊・黒褐色土塊を含む

5・11号溝B-B'

1. にぶい黄褐色土 砂質土
2. 褐色土 砂質土、締まり強
3. 褐色土 粘質土、第1層土ラミナ状に含む、締まりあり
4. 褐色土 焼土粒・砂質土少量、締まり強
5. 褐色土 やや粘性あり
6. 褐色土 As-B混土、黄褐色土粒多量
7. 暗褐色土 As-B混土、焼土粒少量、黄褐色土粒微量
8. 暗褐色土 粘質土、黄褐色土中塊多量
9. 暗褐色土 第6層より締まり弱

5・11号溝C-C'

1. 灰黄褐色土 粘質土
2. にぶい黄褐色土 砂質土
3. 褐色土 粘性ややあり
4. 褐色土 As-B混土、黄褐色土粒多量
5. 暗褐色土 As-B混土、焼土粒少量、黄褐色土粒微量
6. 黒褐色土 砂質土、As-B混土



第130図 3区5・11号溝土層断面図と出土遺物

**3区5号溝**(第129・130図 PL.45・58・117)

第2面東側のX=113・134、Y=-372～377に位置する。北側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。2・6・9・17・21号竪穴住居、78号土坑、8号ピット、8・11・17号溝と重複する。5号溝は、2・6・9・17・21号竪穴住居、78号土坑、8号ピット、8・11号溝より新しく、17号溝より古いと考えられる。重複する11号溝とほぼ並走する。

確認できる規模は、長さ21.30m、幅0.45～1.20m、深さ0.16～0.43mを測る。走行方向は、N-10°-Eであり、北側から南側にほぼ直線状に走行する。底面の標高は、北端62.68m、南端62.69m、比高0.01mである。勾配は0.04%であり、高低差はほとんど認められない。

断面形状は台形を呈し、底面はほぼ平坦である。埋没土は、褐灰色土、明褐灰色土、灰黄褐色土であり、堆積状況から自然埋没と考えられる。下層に認められた砂質土は流水の痕跡の可能性はある。

遺物は、土師器杯(第130図5溝1、第130図5溝2・3)、土師器台付甕(第130図5溝4～6)、須恵器甕(第130図5溝7)、瀬戸・美濃陶器鉢か(第130図5溝8)、在地系土器片口鉢(第130図5溝9)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器1,142点(大型製品1,047、小型製品95)、須恵器109点(大型製品31、小型製品78)、灰釉陶器14点(大型製品1、小型製品13)が出土し、遺物は混入と考えられる。11号溝との重複や埋没土などから時期は、中世以降と考えられる。

**3区7号溝**(第131図 PL.46・117)

第2面東側のX=129～131、Y=-377～387に位置する。4・5号竪穴住居、29号土坑・11号溝と重複する。7号溝は、4・5号竪穴住居、29号土坑より新しく、11号溝より古いと考えられる。11号溝の東側に7号溝の延長部分を確認できなかったことから、7号溝から11号溝に流れていた可能性もある。

確認できる規模は、長さ10.25m、幅0.50～0.85m、深さ0.01～0.05mを測る。走行方向は、N-75°-Wである。後世の削平のため残存状態は良好ではないが、底面には掘削痕が列状に残存する。底面の標高は西端63.00m、東端62.95m、比高0.05mである。勾配は0.48%であり、西側から東側にかけて直線状に流れていたと想

定される。

遺物は、土師器杯(第131図7溝1)、土師器高坏(第131図7溝2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器70点(大型製品65、小型製品5)、須恵器9点(大型製品2、小型製品7)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。遺構確認状況から時期は、中世以降と考えられる。

**3区8号溝**(第131図 PL.46)

第2面東側のX=125～129、Y=-370～389に位置する。東側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。4～6号竪穴住居、5・11・17号溝、1・37号土坑と重複する。8号溝は、4～6号竪穴住居、37号土坑より新しく、1号土坑、5・11・17号溝より古い。

確認できる規模は、長さ19.22m、幅0.12～0.72m、深さ0.02～0.08mを測る。走行方向は、N-80°-Wである。底面の標高は、西端63.01m、東端62.88m、比高0.13mである。勾配は0.67%であり、西側から東側にかけて流れていたと想定される。断面形状は、浅い椀形を呈する。埋没土は、炭化物、黄灰細砂などを含む灰黄褐色土であり、自然埋没と考えられる。土層断面の観察から流水の痕跡は認められなかった。

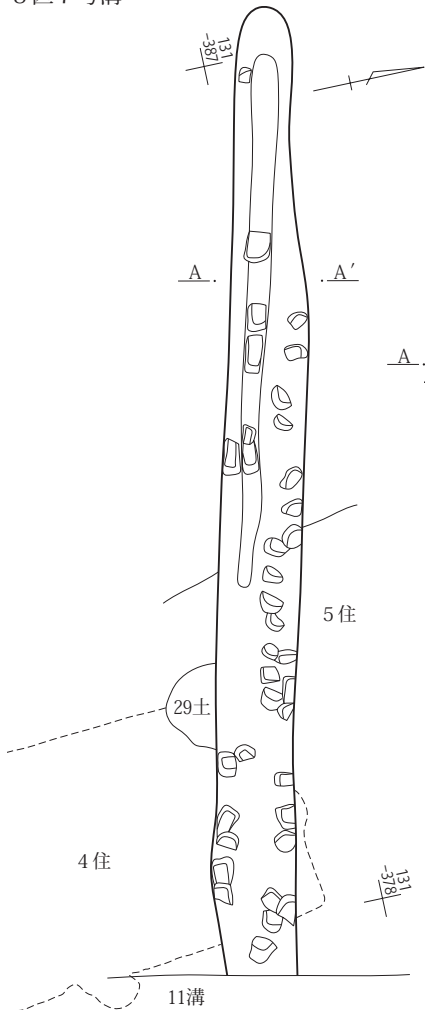
出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**3区9号溝**(第132図 PL.46・117)

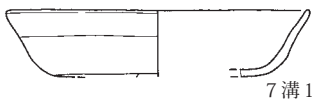
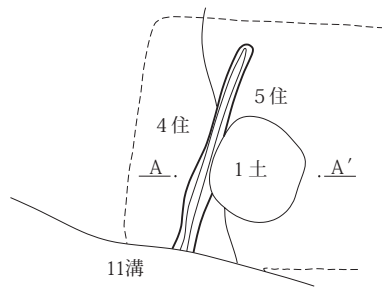
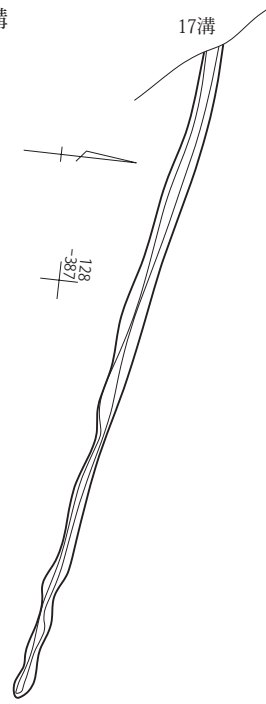
3区第2面中央部のX=135～142、Y=-414・415に位置する。北側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。重複する遺構はない。

確認できる規模は、長さ6.44m、幅0.35～0.62m、深さ0.04～0.42mを測る。走行方向は、N-10°-Wである。底面の標高は、北端62.66m、南端62.69m、比高0.03mである。勾配は0.91%であり、僅かな高低差であるが、北側から南側にかけて直線状に流れていたと想定される。断面形状は、底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。埋没土は、にぶい黄橙色土小塊などを含む灰黄褐色土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から、流水の痕跡は認められなかった。

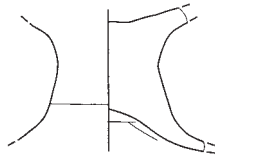
3区7号溝



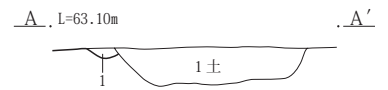
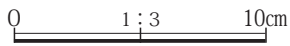
3区8号溝



7溝1

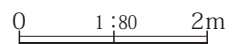
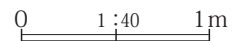
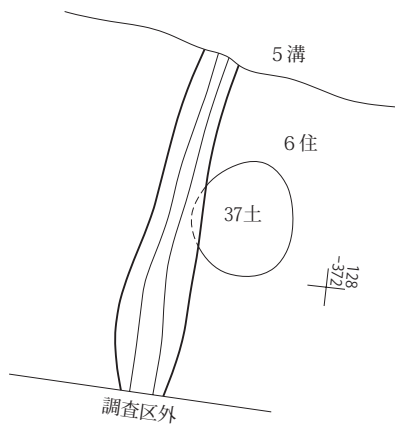


7溝2



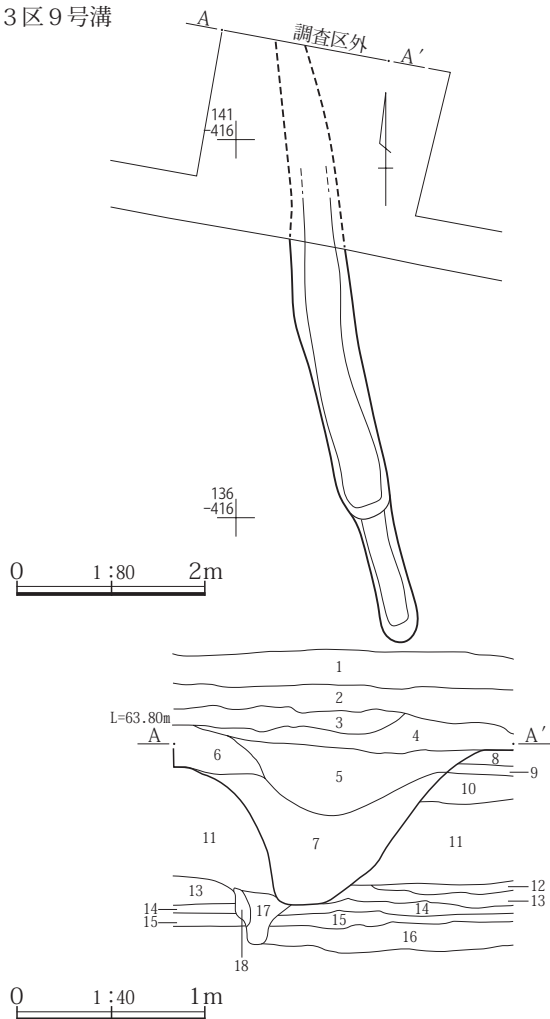
8号溝A-A'

1. 灰黄褐色土 炭化物・黄灰細砂(洪水層)  
少量、粘性ややあり、締めりあり



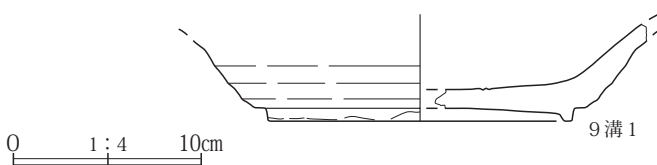
第131図 3区7号溝と出土遺物・8号溝

3区9号溝



9号溝A-A'

1. 灰褐色土 水田耕土
2. 黄褐色土 砂質土、やや灰色気味、上面水田による酸化(床土)
3. 灰黄褐色土 砂質土、灰白色砂少量、酸化鉄分微量
4. 灰黄褐色土 砂質土、炭化物を含む、酸化鉄分少量
5. 灰黄褐色土 砂質土、にぶい黄褐色土小塊・炭化物少量、
6. 灰黄褐色土 砂質土、第5層より色味は明るい
7. 灰黄褐色土 砂質土、炭化物・小礫を含む
8. にぶい黄褐色土 砂質土、灰黄褐色土を含む、縮まりあり
9. 灰白色土 砂質土、水平堆積、灰白色粘質土を含む
10. 灰黄褐色土 砂質土、灰黄褐色土を含む
11. 灰黄褐色土 砂質土、炭化物微量、第7層より色味は明るい、下層縮まりあり
12. 褐灰色土 粘質土、灰黄褐色土を含む
13. 暗褐色土 砂質土、As-B含む
14. 黄褐色土 砂質土、褐灰色土を含む
15. 灰褐色土 砂質土、黄褐色土を含む
16. 灰褐色土 粘質土
17. 灰褐色土 砂質土、縮まり弱
18. 灰褐色土 砂質土、暗褐色砂質土塊を含む



第132図 3区9号溝と出土遺物

遺物は、瀬戸・美濃陶器鉢(第132図9溝1)が出土した。非掲載遺物は、灰釉陶器1点(大型製品)である。出土遺物などから時期は、中世から近世と考えられる。

3区10号溝(第133図 PL.46)

第2面中央部のX=135～139、Y=-405～409に位置する。北側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。重複する遺構はない。

確認できる規模は、長さ5.86m、幅0.40～0.65m、深さ0.04～0.10mを測る。走行方向は、N-45°-Wである。底面の標高は、北端及び南端ともに62.83mであり、高低差はなくほぼ平坦である。断面形状は、浅い椀形を呈する。埋没土は、As-Bを含む暗褐色砂質土による自然埋没と考えらる。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

3区11号溝(第129・130図 PL.45・58)

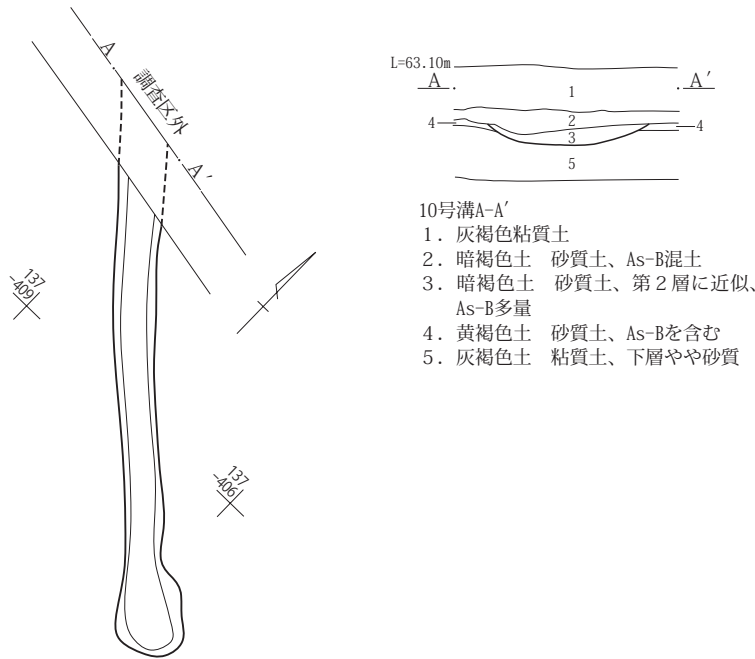
第2面東側のX=111～134、Y=-374～381に位置する。北側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。4・6・9・10・16・17・21号竪穴住居、5・7・8・14・17号溝、35・61・62・77・84号土坑、5・6・14～16号ピットと重複する。11号溝は、4・6・9・10・16・17・21号竪穴住居、7・8号溝、35・61・62・77・84号土坑、5・6・15・16号ピットより新しく、5・14・17号溝、14号ピットより古い。

確認できる規模は、長さ23.32m、幅1.92～3.24m、深さ0.16～0.36mを測る。走行方向は、N-10°-Eであり、南側が僅かに「く」の字に屈曲する。底面の標高は、北端62.75m、南端62.69m、比高0.06mである。勾配は0.28%であり、僅かな高低差であるが、北側から南側にかけて流れていたと想定される。

断面形状は、底面がほぼ平坦であり、東壁は開口部にかけて斜めに立ち上がるが、西壁は底面から斜めに立ち上がったあと0.50～0.80mの平坦面となり開口部にかけて緩やかに立ち上がる。埋没土は、As-B混土や黄褐色土粒などを含む暗褐色土や褐灰色土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から流水の痕跡は認められな



3区10号溝



第133図 3区10号溝

かった。

遺物は、須恵器椀(第130図11溝1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器31点(大型製品27、小型製品4)、須恵器2点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土などから時期は、中世以降と考えられる。

3区12号溝(第134図 PL.46・117)

第2面東側のX=114～132、Y=-390～406に位置する。12・31号竪穴住居、14・17号溝と重複する。12号溝は、12・31号竪穴住居、14号溝より新しく、17号溝とは同時期と考えられる。

確認できる規模は、長さ24.00m、幅0.41～1.18m、深さ0.01～0.14mを測る。走行方向は、N-40°-Eである。底面の標高は、北端62.83m、南端62.91m、比高0.08mである。勾配は0.33%であり、北東から南西にほぼ一直線に走行する。断面形状は底面が平坦で、西壁より東壁が緩やかに傾斜する。埋没土は、As-B混土や黄褐色土粒を含む灰褐色土や暗褐色土による自然埋没と考えられ、土層断面の観察から流水の痕跡は認められなかった。周辺で畝や水田を確認できなかったが、給排水や区画を分ける溝として使われていた可能性もある。

遺物は、土師器甕(第134図12溝4・5)、須恵器杯(第134図12溝2)、須恵器椀(第134図12溝3)、灰釉陶器皿

(第134図12溝1)、石製模造品(勾玉)(第134図12溝6)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器388点(大型製品380、小型製品8)、須恵器46点(大型製品14、小型製品32)、灰釉陶器2点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

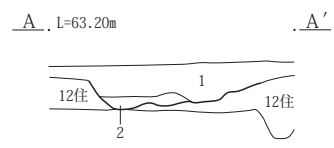
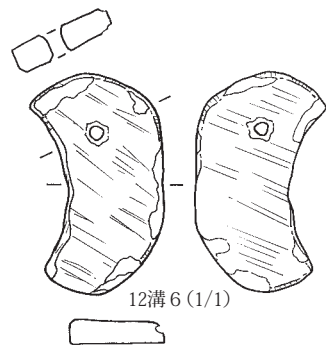
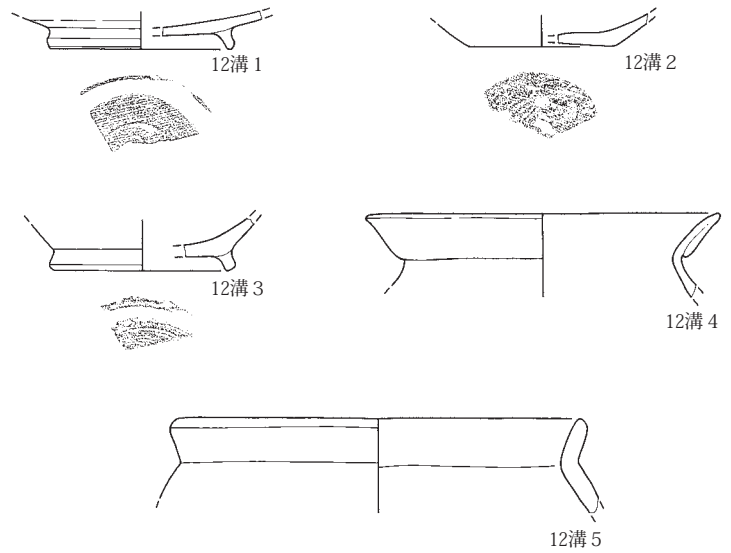
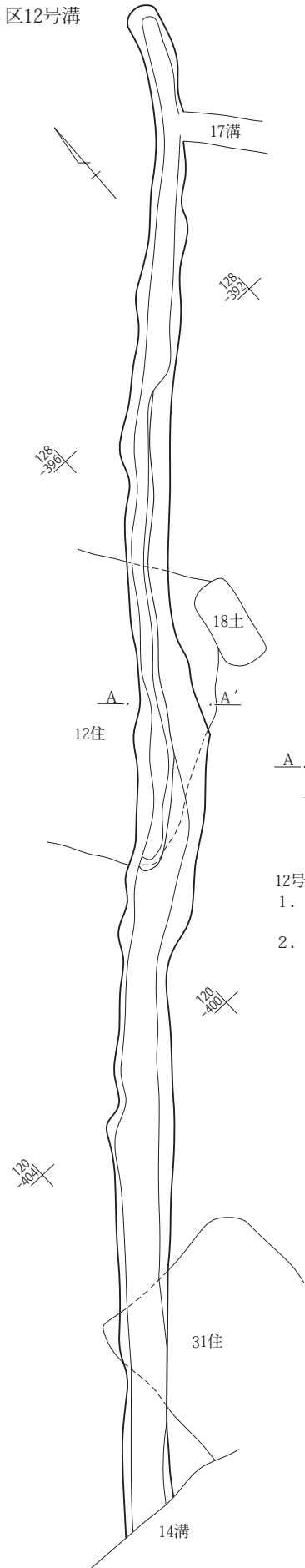
3区13号溝(第135図 PL.46)

第2面西側のX=120～140、Y=-418～435に位置する。北側及び南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。重複する遺構はない。

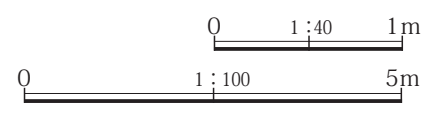
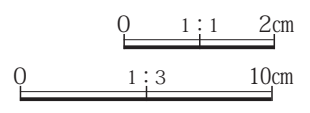
確認できる規模は、長さ26.65m、幅0.29～0.71m、深さ0.02～0.07mを測る。走行方向は、N-45°-Eである。底面の標高は、北端62.88m、南端62.90m、比高0.02mである。勾配は0.07%であり、北東から南西にほぼ直線状に走行し、走行方向は東側約25mに位置する12号溝に類似する。後世の削平のため残存状況は良好ではない。断面形状は、底面が平坦であり壁は斜めに立ち上がる。走行方向が類似する12号溝のように、周辺で畝や水田を確認できなかったが、給排水または区画を分ける溝として使われていた可能性もある。

出土遺物がなく時期を特定できないが、時期は、中世以降と考えられる。

3区12号溝

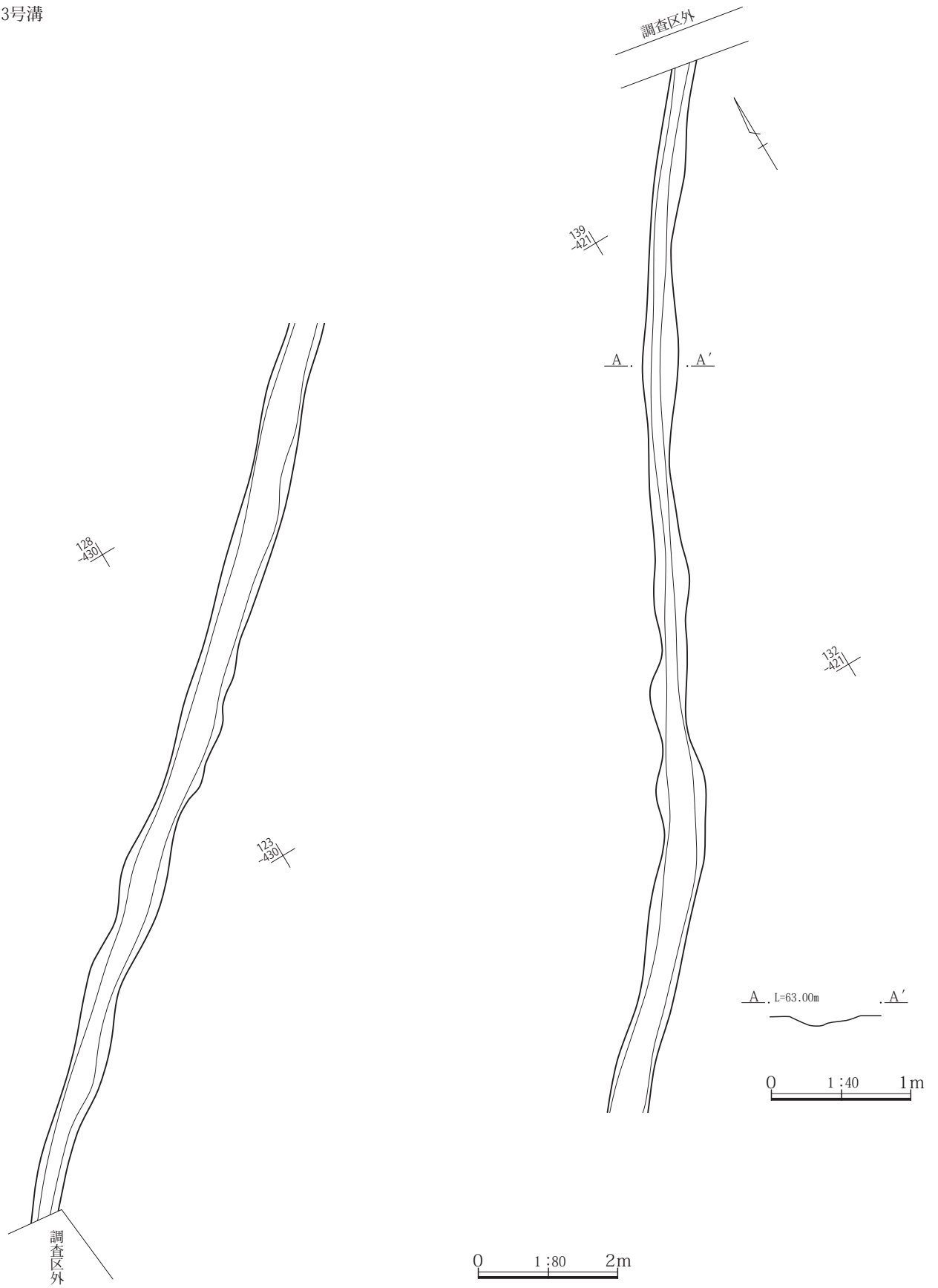


- 12号溝A-A'
1. 暗褐色土 As-B混土、黄褐色土粒微量、締まりあり
  2. 灰褐色土 As-B混土、酸化鉄分の沈着あり、黄褐色土粒少量



第134図 3区12号溝と出土遺物

3区13号溝



第135図 3区13号溝

3区14号溝(第136・137図 PL.46・118)

第2面東側のX=105~116、Y=-380~430に位置する。南側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。10・14・18・23~25・27・28・31・32号竪穴住居、80・83・85号土坑、19~24・26号ピット、5号井戸、12・15・16号溝と重複する。14号溝は、10・14・18・23~25・27・28・31・32号竪穴住居、83号土坑、20~24号ピット、5号井戸、12・16号溝より古く、80・85号土坑、19・26号ピット、15号溝より新しい。

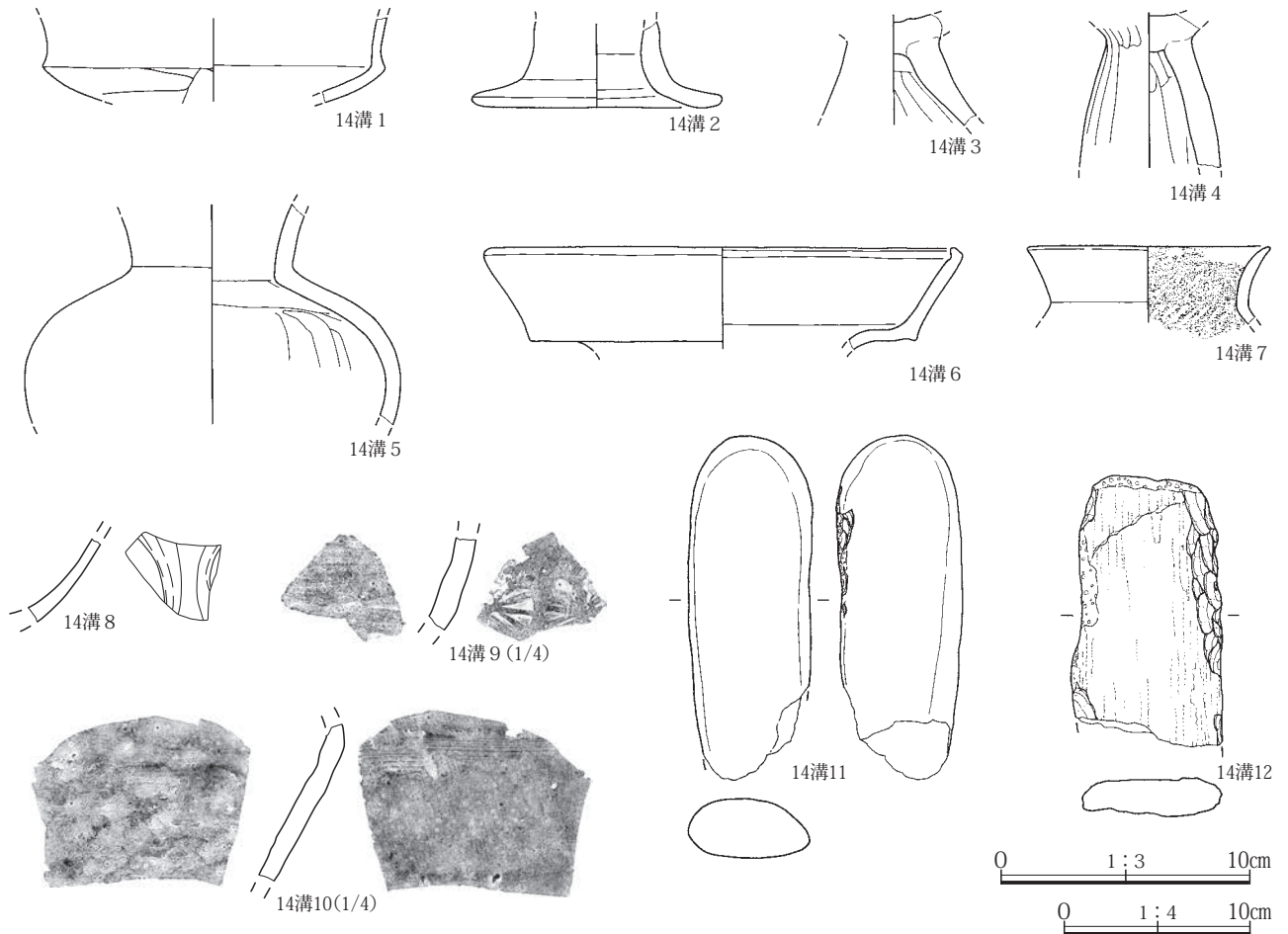
確認できる規模は、東西方向の長さ50.5m、南北方向の長さ5.90m、幅1.56~2.76m、深さ0.27~0.91mを測る。走行方向は、N-15°-EとN-85°-Wであり、東端がほぼ直角に南方向に折れ曲がる。底面の標高は、西端62.64m、東端62.20m、南端61.91mである。東西の比高0.44m、勾配0.87%であり、南北の比高0.29m、勾配4.91%である。断面形状は、台形を呈する。埋没土は、褐灰色土、灰黄褐色土、にぶい黄褐色土による自然埋没

と考えられ、第2層にはAs-B・Hr-FPが認められる。下層は水成堆積層であり、流水の痕跡と考えられる。

遺物は、土師器杯(第137図14溝1)、土師器甕(第137図14溝7)、土師器壺(第137図14溝6)、土師器高坏(第137図14溝2~4)、土師器埴(第137図14溝5)、龍泉窯系青磁碗(第137図14溝8)、常滑陶器甕(第137図14溝9・10)、棒状礫(第137図14溝11・12)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器933点(大型製品759、中型製品5、小型製品169)、須恵器144点(大型製品64、小型製品80)、灰釉陶器19点(小型製品)、礫製品棒状礫1点、板碑片1点が出土し、中世以前の遺物は混入と考えられる。出土遺物や埋没土などから時期は、中世以降と考えられる。

3区16号溝(第138図 PL.47)

第2面東側のX=112、Y=-408~411に位置する。南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。14号溝と重複し、16号溝が新しい。



第136図 3区14号溝出土遺物

3区14号溝



第137図 3区14号溝



確認できる規模は、長さ1.85m、幅0.55～0.70m、深さ0.06～0.26mを測る。走行方向は、N-70°-Eである。底面の標高は、北東端62.58m、南西端62.61m、比高0.03mである。勾配は1.62%である。断面形状は、椀形を呈し、西壁に比べ東壁が緩やかに傾斜する。埋没土は、黄褐色土粒を含む暗褐色砂質土による自然埋没と考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

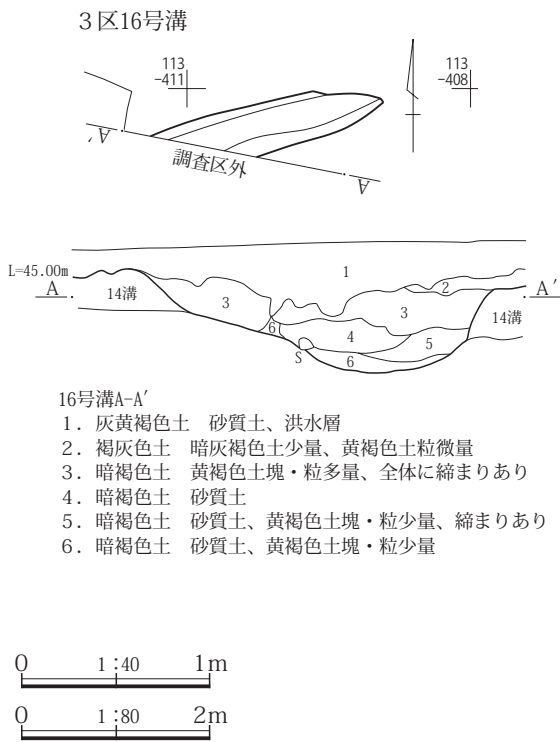
3区17号溝(第140図 PL.47)

第2面東側のX=111～130、Y=-374～391に位置する。8・9・15・17号竪穴住居、11・12・15・52・60号土坑、16号ピット、5・8・11・12号溝と重複する。17号溝は、8・9・15・17号竪穴住居、16号ピット、5・8・11号溝より新しく、11・12・15・52・60号土坑より古い。12号溝とは同時期と考えられる。

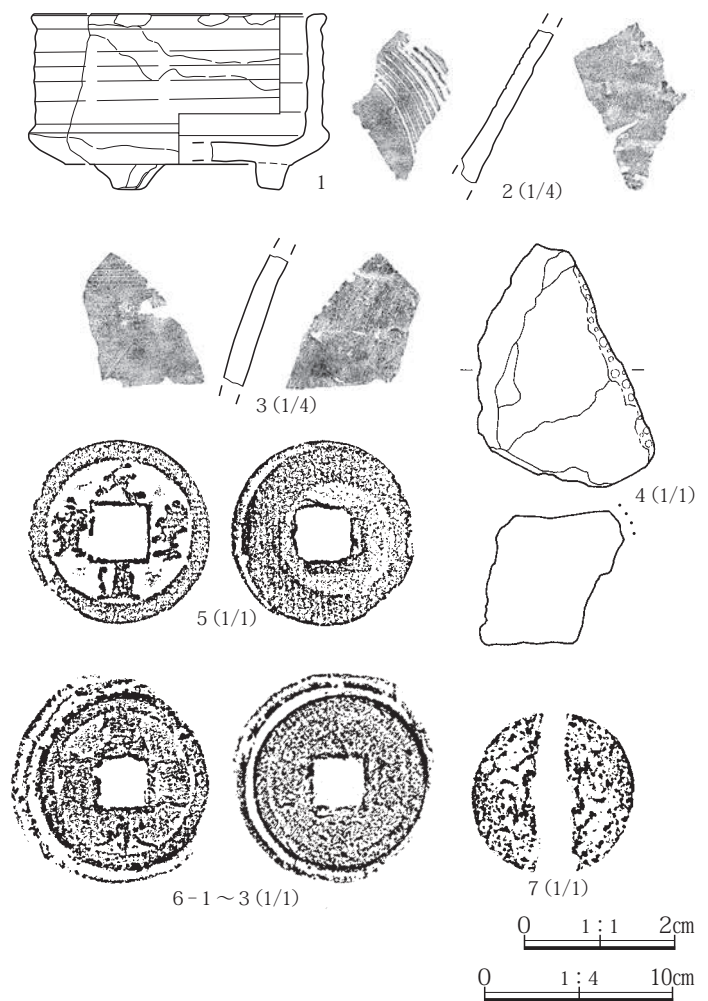
確認できる規模は、長さ25.65m、幅0.26～0.62m、深さ0.05～0.41mを測る。走行方向は、N-43°-Wである。底面の標高は、北西端62.81m、南東端62.68m、比高0.13mである。勾配は0.50%であり、北西側から南東側にかけて流れていたと想定される。断面形状は、台形を呈する。埋没土は、As-Bとみられる軽石やにぶい黄褐色土粒を含む黒褐色土による自然埋没と考えられる。底面に掘削痕が認められる。土層断面の観察から流水の痕跡は認められなかった。12号溝とはほぼ直角に交わり、底面の高低差も認められないことから同時期に使用された可能性もある。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

4 遺構外の出土遺物(第139図 PL.118)

3区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。発掘調査では、第2面で古墳時代から近世に



第138図 3区16号溝



第139図 3区遺構外の出土遺物

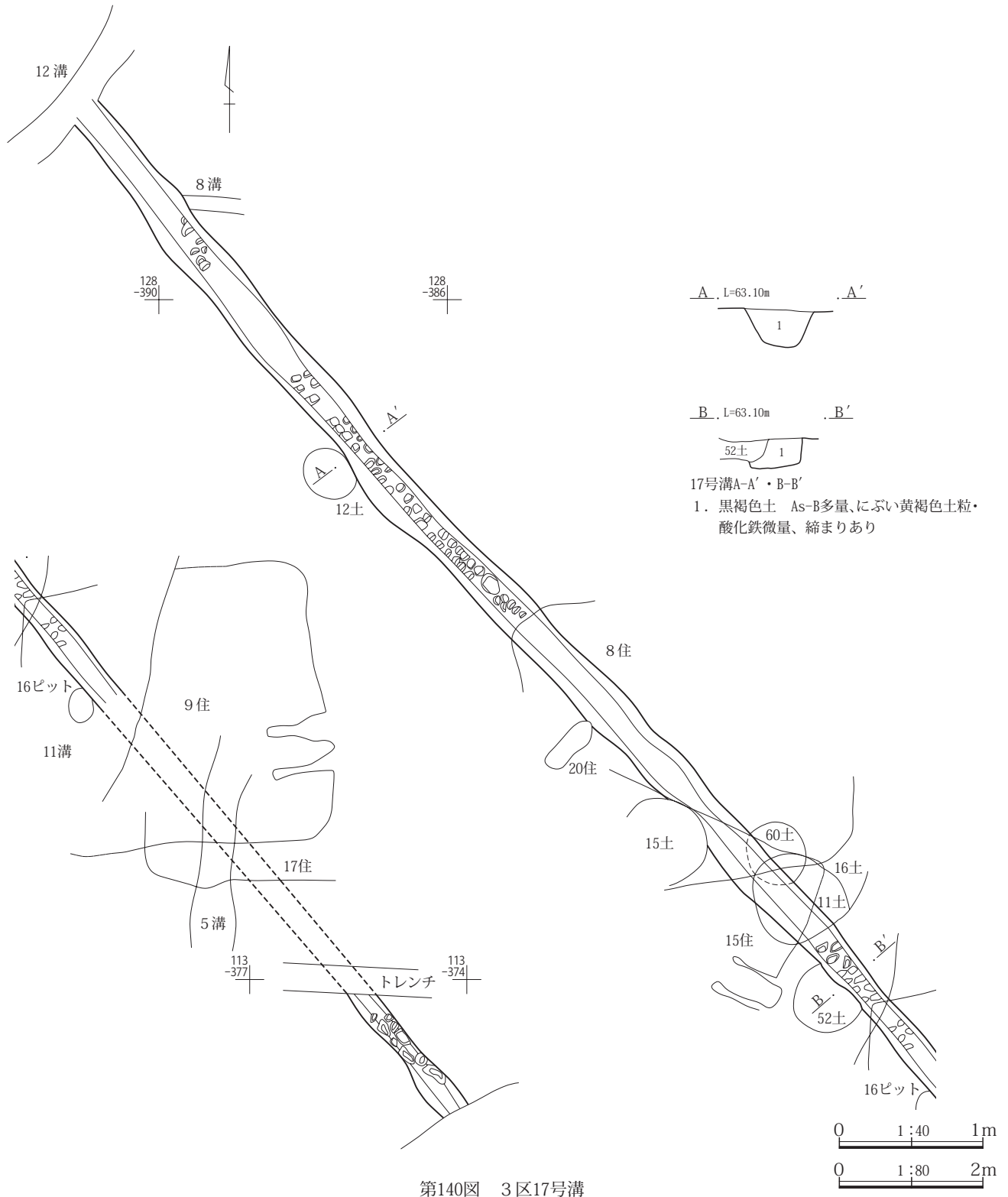
第4章 中世以降の遺構と遺物

至る遺構の調査を行っている。本項では、第2面から出土した遺構外の遺物のうち、中世以降の遺物を掲載した。

遺物は、常滑陶器甕(第139図3)、瀬戸・美濃陶器香炉(第139図1)、在地系土器片口鉢(第139図2)、銭貨(第139図5~7)、火打石(第139図4)が出土した。非掲載

遺物は、火打石1点、中世の国産焼締陶器1点、在地系鉢・鍋2点、近世の国産磁器2点、国産施釉陶器10点、在地系焙烙・鍋1点、時期不詳の土器類1点である。

3区17号溝



第140図 3区17号溝

4区4号土坑

第5節 4区の遺構と遺物

4区における中世から近世に至る遺構は、第4面で確認した。遺構確認面は、基本土層第15層及び第16層下面である。発掘調査では、第4面において古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。古墳時代から近世の遺構が混在しているため、古墳時代から平安時代の遺構と中世から近世の遺構とに分けて掲載した。確認できた遺構は土坑、溝である。

1 土坑

4区第4面では中世から近世とみられる1基の土坑を調査した。土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

4区4号土坑(第141図 PL.47)

第4面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は、底面から開口部にかけて、東壁より西壁がやや緩やかに立ち上がる。1号溝と重複し、遺構確認状況から4号土坑が新しい。埋没土は、褐灰色土粒やローム粒を含む黒褐色土による自然埋没と考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況などから時期は、中世以降と考えられる。

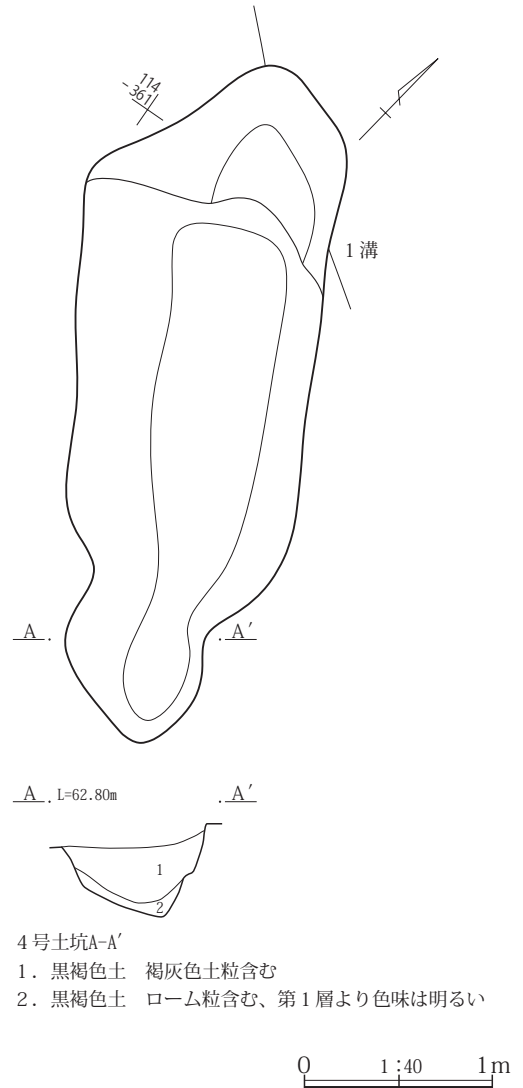
2 溝

4区第4面では、中世から近世に帰属するとみられる2条の溝を調査した。2条の溝は、調査区西端と東側において確認された。

4区1号溝(第143図 PL.47・118)

4区第4面西端のX=106～122、Y=-353～364に位置する。溝の北側及び南側が調査区外となるため、全体の形状や規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。4区西端の微高地に位置し、土坑、溝、粘土採掘坑の遺構が密集する箇所である。2～5号溝、4号土坑、1号粘土採掘坑と重複する。遺構確認状況などから1号溝は、4号土坑より古く、2～5号溝、1号粘土採掘坑より新しいと考えられる。

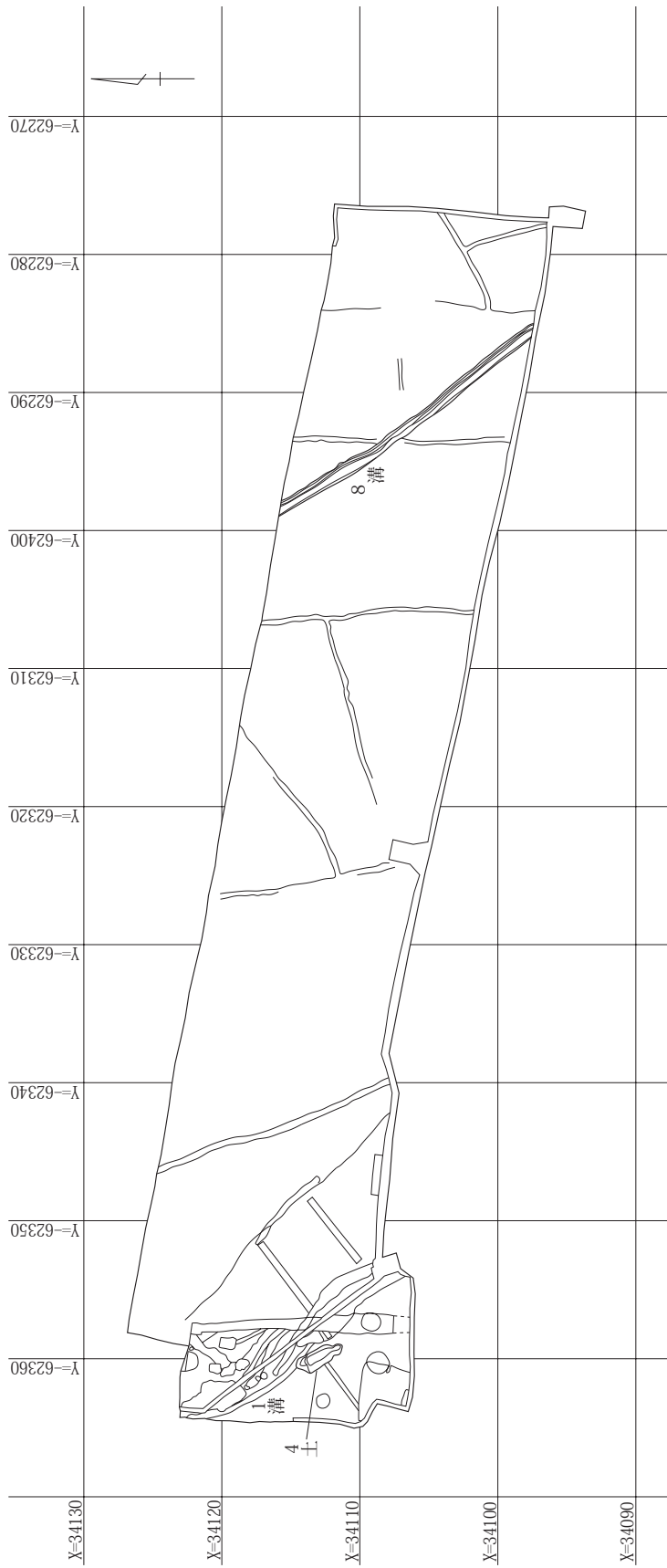
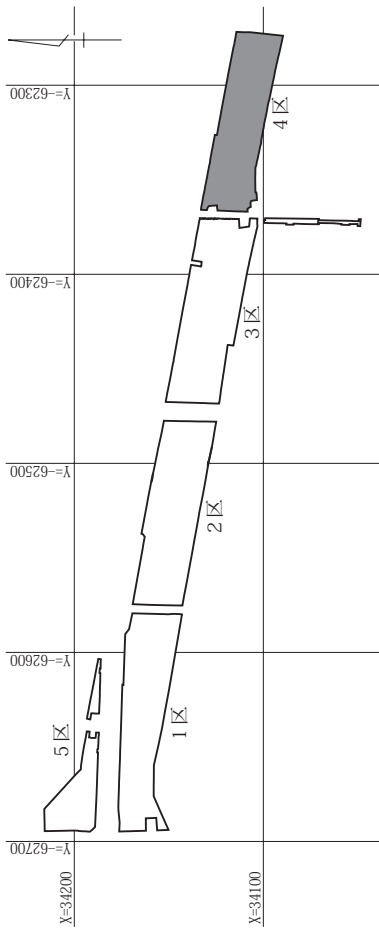
確認できる規模は、長さ17.65m、幅0.83～1.63m、



4号土坑A-A'  
1. 黒褐色土 褐灰色土粒含む  
2. 黒褐色土 ローム粒含む、第1層より色味は明るい

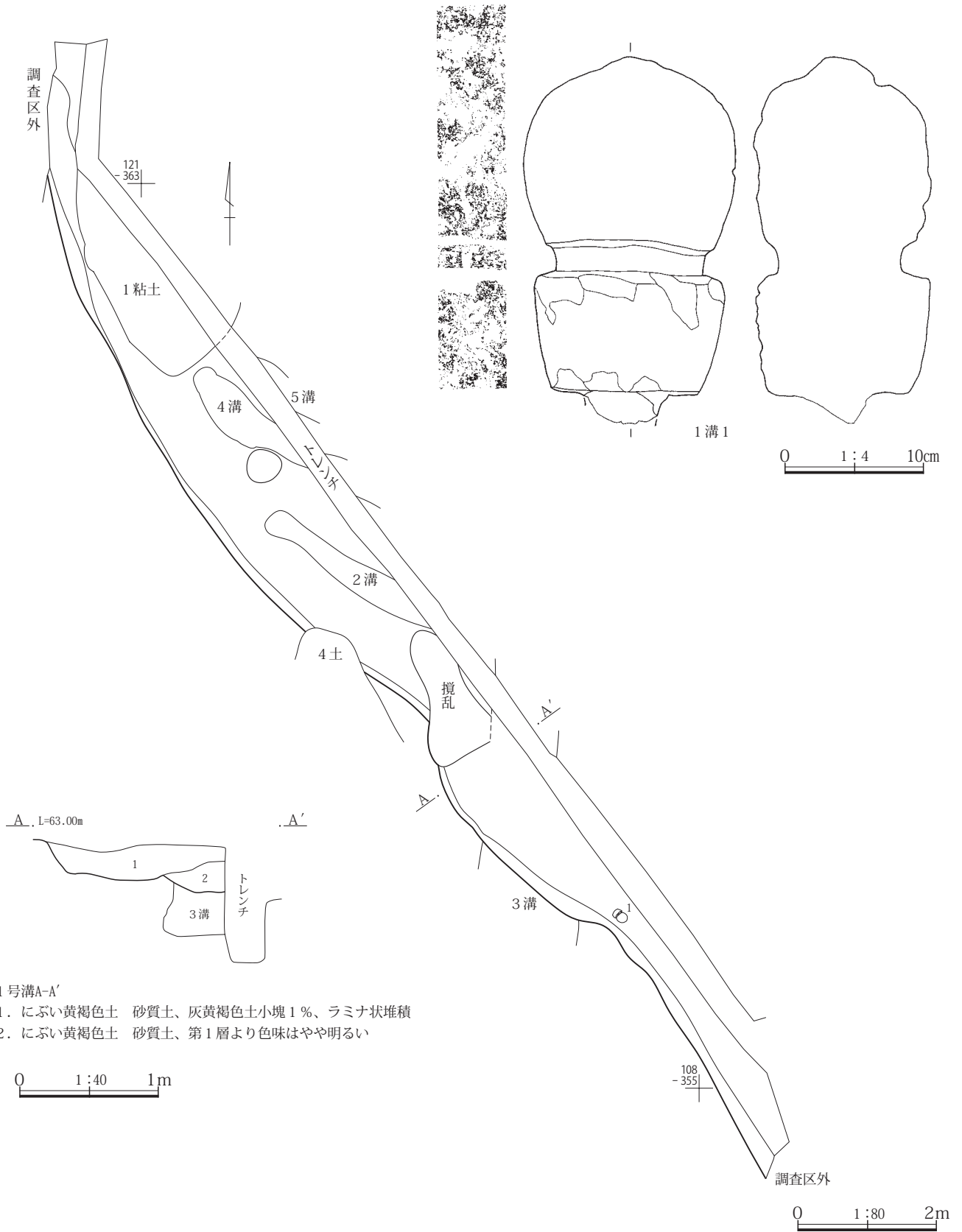
第141図 4区4号土坑

深さ0.04～0.27mを測る。走行方向は、N-40°-Wである。底面の標高は、北端62.51m、南端62.47m、比高0.04mであり、高低差は少なく、勾配は0.22%である。北西から南東にかけて僅かではあるが屈曲しながら流れていたと想定される。断面形状の西半部については、底面から緩やかに立ち上がり平坦面の段差を設け、西壁にかけて斜めに立ち上がる。断面形状の東半部については、東壁の立ち上がりは、南北方向のトレンチ東側を想定するが、遺構確認面における溝の残存状態が不良であり、精査したが確認することができなかった。埋没土は、灰黄褐色土小塊を含むにぶい黄褐色砂質土による自然埋没と考えられ、第1層にラミナ状の堆積が認められる。土層断面の観察によって、水成堆積など明瞭な流水の痕跡は認められなかった。



第142図 4区第4面(中世以降)全体図

4区1号溝



1号溝A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土、灰黄褐色土小塊1%、ラミナ状堆積
2. にぶい黄褐色土 砂質土、第1層より色味はやや明るい

第143図 4区1号溝と出土遺物



遺物は、五輪塔(第143図1溝1)が底面上6cmから出土した。出土遺物が1点と少なく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから時期は、中世以降と考えられる。

#### 4区8号溝(第144図)

第4面東側のX=097~115、Y=-284~298に位置する。溝の北側及び南側が調査区外となるため、全体の形状や規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。4区東側の低地に位置し、第4面水田の8・9号畦と重複し、遺構確認状況から8号溝が新しいと考えられる。4面水田で確認された畦の走行方向と8号溝の走行方向を比べると1号畦とはやや類似するが、他の畦とは揃わない。4面水田との関連も想定されるが、水田には伴わない溝と判断し、別遺構とした。

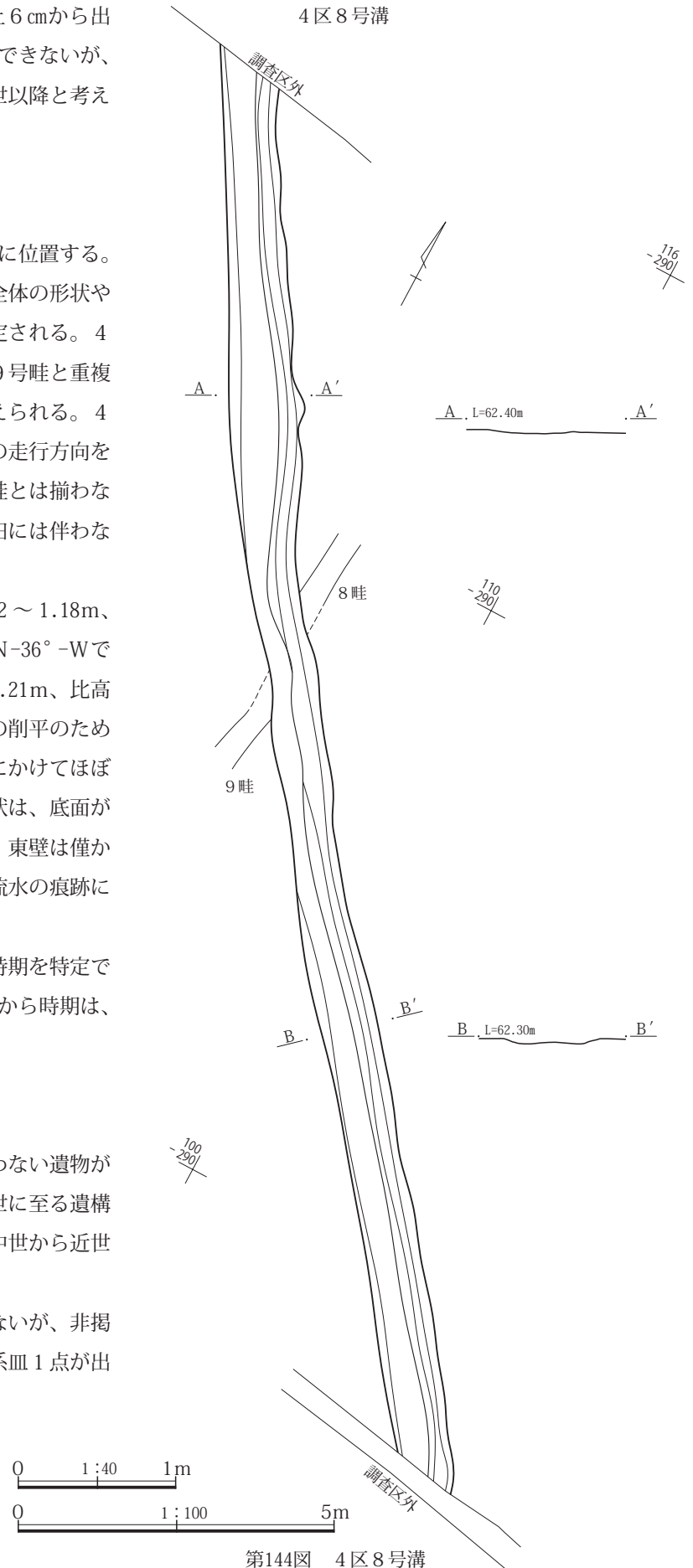
確認できる規模は、長さ22.5m、幅0.72~1.18m、深さ0.01~0.04mを測る。走行方向は、N-36°-Wである。底面の標高は、北端62.27m、南端62.21m、比高0.06mを測る。勾配は0.26%である。後世の削平のため残存状況は良好ではないが、北西から南東にかけてほぼ直線状に流れていたと想定される。断面形状は、底面がほぼ平坦で、西壁は緩やかな傾斜となるが、東壁は僅かな段差を設けながら緩やかに立ち上がる。流水の痕跡については確認できなかった。

出土遺物がなく埋没土も不明であるため時期を特定できないが、4面水田との重複や遺構確認状況から時期は、中世以降と考えられる。

#### 3 遺構外の出土遺物

4区第4面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。第4面では、古墳時代から中近世に至る遺構が混在する状況であり、遺構には伴わない中世から近世の遺物も僅かではあるが出土している。

本項において図示した中世以降の遺物はないが、非掲載遺物は、近世の国産施釉陶器4点、在地系皿1点が出土した。



第144図 4区8号溝

5区1号土坑

第6節 5区の遺構と遺物

5区における中世から近世に至る遺構は、第2面で確認した。遺構確認面は、基本土層第14層の下面である。発掘調査では、第2面において古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。遺構確認面を分けることができなかつたため、古墳時代から近世の遺構が混在した状況であるため、他の調査区のように古墳時代、平安時代、中世以降の遺構にそれぞれ分けて掲載した。確認できた中世以降となる遺構は、土坑、井戸、溝である。

1 土坑

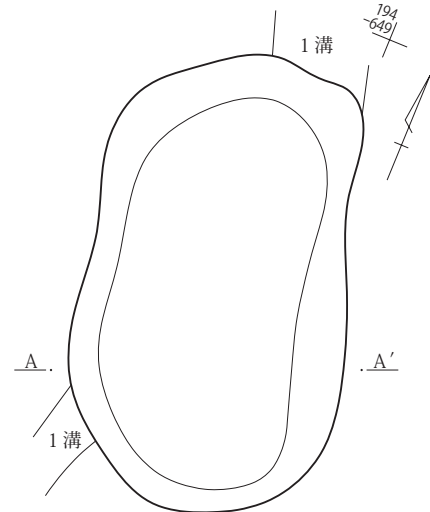
5区第2面では中世以降とみられる2基の土坑を調査した。2基の土坑は、隣接した位置で確認された。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

5区1号土坑(第145図 PL.49)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。1号溝と重複し、遺構確認状況から1号土坑が新しいと考えられる。1号土坑は、2号土坑の北側に位置する。埋没土の下層は、灰黄褐色土塊を含む暗褐色土と褐色土の混土であり、上層の暗褐色土にAs-Bが多量と褐色土塊が少量含まれている。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、須恵器1点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

5区2号土坑(第145図 PL.49)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は円形で、断面形状は浅い碗形を呈する。重複する遺構はない。2号土坑は、1号土坑の南側に位置する。埋没土は、As-Bを多量に含む黒褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。



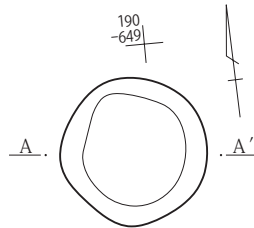
A-A', L=63.90m



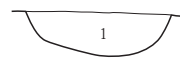
1号土坑A-A'

- 1. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、1号溝埋没土
- 2. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、褐色土塊少量
- 3. 暗褐色土と褐色土の混土、灰黄褐色土塊を含む

5区2号土坑

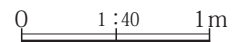


A-A', L=63.90m

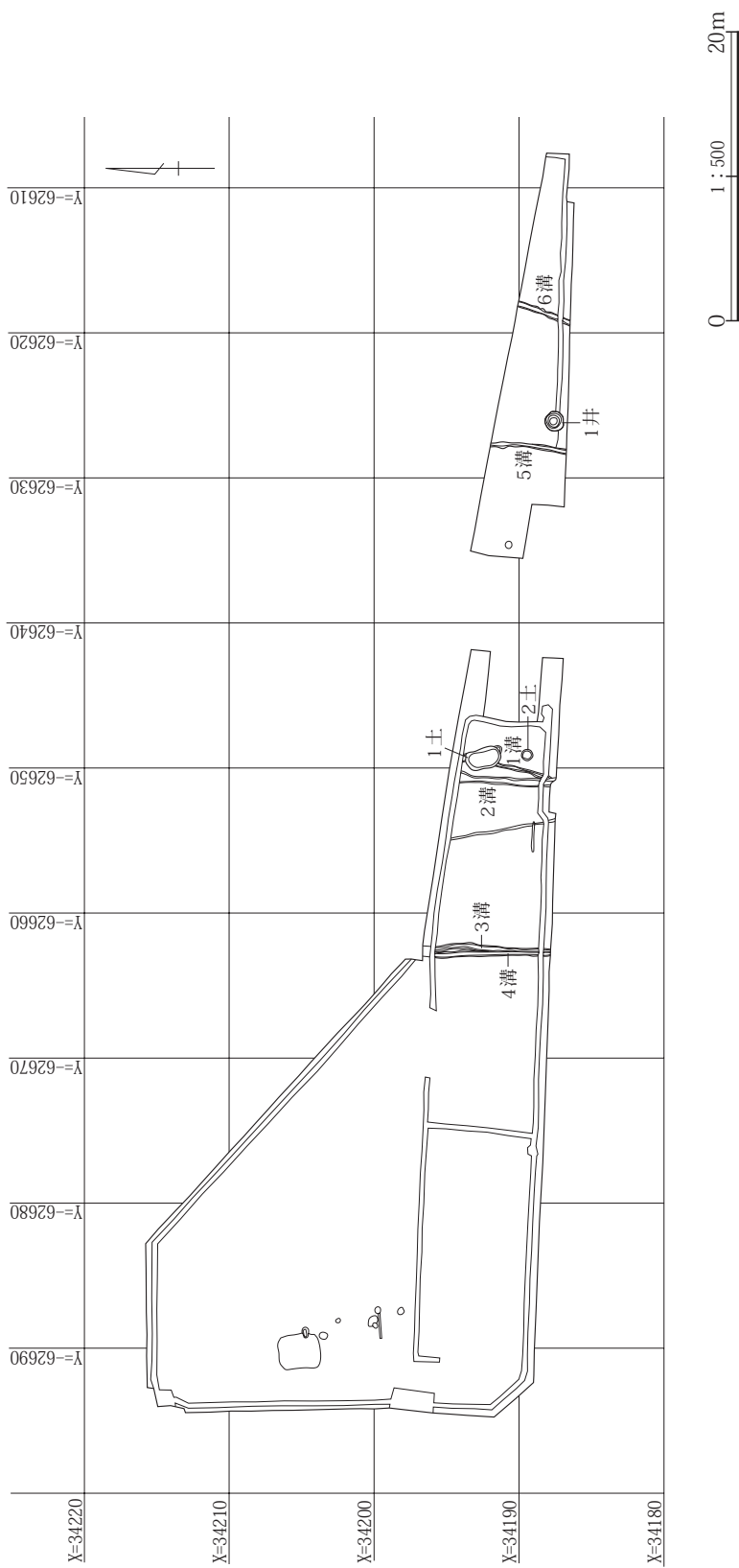
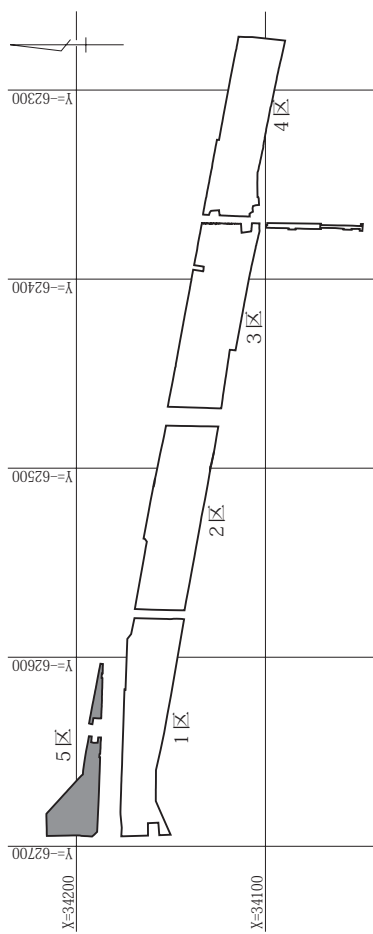


2号土坑A-A'

- 1. 黒褐色土 砂質土、As-B多量



第145図 5区1・2号土坑



第146図 5区第2面(中世以降)全体図

## 2 井戸

5区第2面では、1基の井戸を調査した。第1面で近世の遺構の調査を行ったが、井戸は確認されず、5区で確認できた井戸は1基のみである。5区の南側に位置する1区でも中世以降とみられる同規模の井戸1基が確認されている。

### 5区1号井戸(第147図 PL.49)

第2面東側調査区のX=186・187、Y=-625・626に位置する。重複する遺構はない。開口部の主軸方向は、N-90°である。平面形状は円形を呈し、掘削状況は円筒形と想定される。

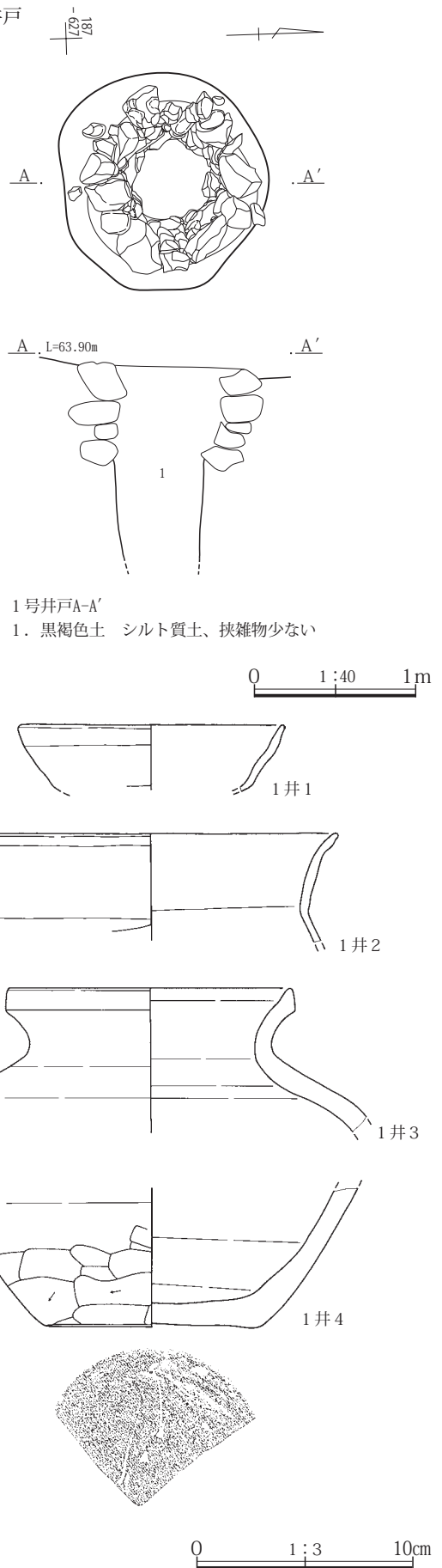
規模は、長径1.33m、短径1.27mを測る。底面付近に湧水が認められたため、確認できた深さは1.24mである。井戸の側壁に4から5段の石積みが見られ、崩落が少なく遺存状況は比較的良好である。埋没土は、黒褐色シルト質土で夾雑物が少ない。石積み崩落していない状況から、洪水などによる自然埋没の可能性もある。遺構確認面下0.50～0.60mまでは石積みが見られたが、湧水によって底面付近まで石を積み上げていたかは確認できなかった。

遺物は、土師器杯(第147図1井1)、土師器甕(第147図1井2)、須恵器壺(第147図1井3)、須恵器甕(第147図1井4)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器6点(大型製品4、小型製品2)、須恵器2点(小型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

## 3 溝

5区第2面で確認した中世以降とみられる溝は6条である。調査区西側及び東側で確認し調査を行った。5区南側に位置する1区とは、東西方向に走行する道路によって調査区が分断されているが、5区3・4号溝は南側にさらに延長され、1区第2面の1号溝と同一の溝になると想定される。5区第2面では、畦などの水田施設を確認することができなかったが、確認できた6条の溝は、ほぼ南北方向に走行することから水田の給排水などに使用された溝の可能性も考えられる。

5区1号井戸



第147図 5区1号井戸と出土遺物

5区1号溝(第148図 PL.49)

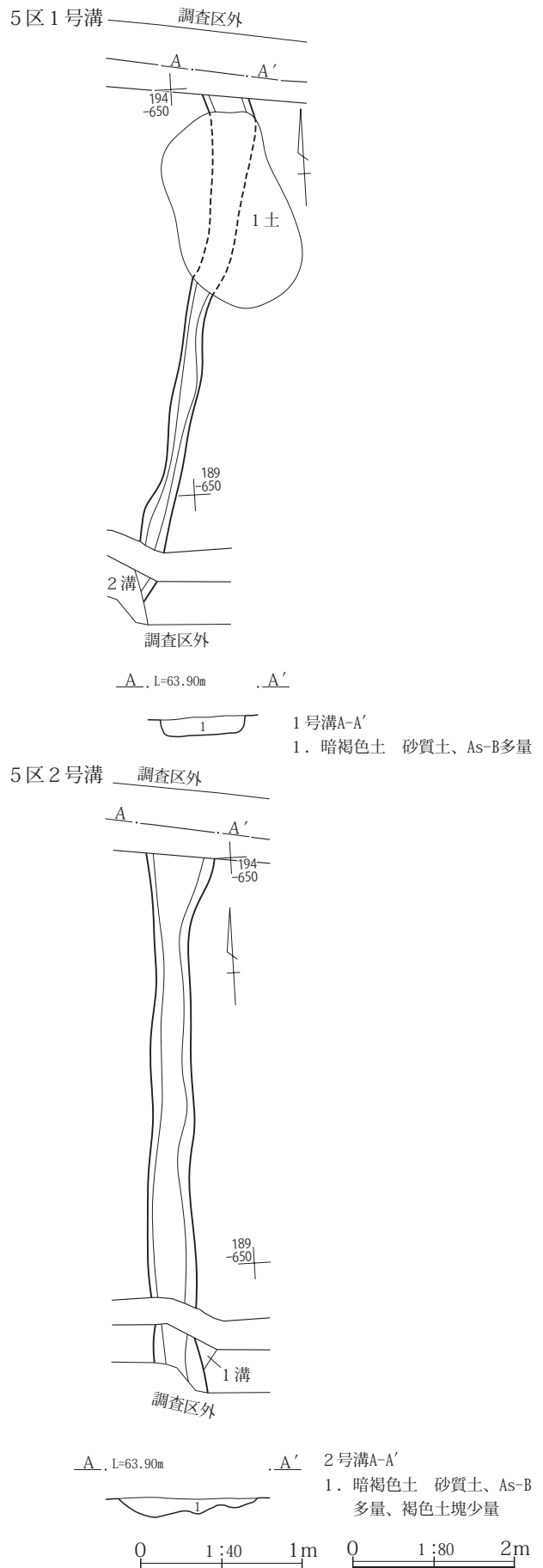
第2面西側調査区のX=187～194、Y=-648～650に位置する。溝は調査区外となる北側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。1号土坑、2号溝と重複し、遺構確認状況から1号土坑より新しく、2号溝より古いと考えられる。

確認できる規模は、長さ6.40m、幅0.21～0.54m、深さ0.01～0.13mを測る。主軸方向はN-15°-Eである。底面の標高は、北端63.61m、中央部63.70m、南端63.65mであり、北端と南端の比高0.04mを測る。勾配は0.62%である。断面形状は底面が平坦で、壁は垂直に立ち上がる。埋没土は、As-Bを多量に含む暗褐色砂質土によって埋没し、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面には水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用されたと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

5区2号溝(第148図 PL.49)

第2面西側調査区のX=187～194、Y=-650・651に位置する。溝は調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。1号溝と重複し、遺構確認状況から2号溝が新しいと考えられる。南側に位置する1区2面では、5区2号溝の延長部分は確認できなかった。西側約11mに位置する3・4号溝とは規模、埋没土、走行方向がほぼ同一であり、区画を分ける溝として同時期に掘られるなど関連が想定される。

確認できる規模は、長さ6.63m、幅0.40～0.81m、深さ0.07～0.13mを測る。主軸方向はN-5°-Eである。底面の標高は、北端63.68m、南端63.60m、比高0.08mである。勾配は1.20%であり、北側から南側にほぼ一直線状に流れていたと想定される。断面形状は底面に大小の窪みが僅かに認められるがほぼ平坦であり、壁は緩やかに傾斜する。埋没土は、多量のAs-Bと少量の褐色土塊を含む暗褐色砂質土により、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面付近に水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用されたと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から時期は、中世以降と考えられる。



第148図 5区1・2号溝



**5区3号溝**(第149図 PL.50)

第2面西側調査区のX=187～195、Y=-662に位置する。溝は調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。4号溝と南半部で重複し、3号溝が4号溝より新しい。東側約11mに位置する2号溝とは規模、埋没土、走行方向がほぼ同一であることから、同時期に掘られるなど関連が想定される。

確認できる規模は、長さ8.00m、幅0.21～0.48m、深さ0.09～0.11mを測る。主軸方向はN-5°-Eである。底面の標高は、北端63.65m、南端63.66m、比高0.01mを測る。勾配は0.12%である。北側で僅かな屈曲が認められ、北側から南側にほぼ直線状に走行する。4号溝と重複する部分の幅が狭くなる。断面形状は底面が浅い椀形を呈する。埋没土は、多量のAs-Bと少量の褐色土塊を含む暗褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面に水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用されたと考えられる。

5区南側の延長線上に位置する1区第2面において1区1号溝を確認した。5区3号溝は、1区1号溝と走行方向、規模、埋没土が類似することから、同一の溝となる可能性がある。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**5区4号溝**(第149図 PL.50)

第2面西側調査区のX=187～195、Y=-662・663に位置する。溝は、調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。3号溝と南半部で重複し、4号溝は3号溝より古い。3号溝で述べたように東側約11mに位置する2号溝とは規模や走行方向が類似し、関連が想定される。

確認できる規模は、長さ9.99m、幅0.37～0.44m、深さ0.08～0.14mを測る。主軸方向はN-0°である。底面の標高は、北端及び南端63.6mであり高低差はない。北側から南側にかけてほぼ一直線に走行する。断面形状は底面がほぼ平坦であるが、東側より西側が僅かに低く、壁は緩やかに立ち上がる。埋没土は、多量のAs-Bを含む暗褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面に水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用された

と考えられる。

5区南側に位置する1区第2面では、5区4号溝の南側の延長線上で1区1号溝を確認している。1区1号溝と走行方向、規模、埋没土が類似することから、1区1号溝と5区4号溝あるいは5区3号溝が同一の溝になる可能性がある。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から時期は、中世以降と考えられる。

**5区5号溝**(第149図 PL.50)

第2面東側調査区のX=186～191、Y=-627・628に位置する。溝は、調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の形状や規模は不明である。重複する遺構はない。東側8～9mの位置で6号溝を確認し、1号井戸が近接している。

確認できる規模は、長さ5.32m、幅0.21～0.45m、深さ0.09～0.17mを測る。主軸方向はN-10°-Eである。底面の標高は、北端63.63m、南端63.60m、比高0.03mを測る。勾配は0.56%であり、北側から南側にほぼ直線状に流れていたと想定される。断面形状は浅い椀形を呈し、西壁に比べ東壁がやや緩やかに立ち上がり、北側の東壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋没土は、にぶい黄橙色シルト質土であり、近世の洪水などによる自然埋没と考えられる。土層断面の観察から、底面には水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用されたと考えられる。

南側に位置する1区第2面では、5区5号溝の延長部分を確認することができなかった。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土し、遺物は混入と考えられる。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土などから時期は、中世以降と考えられる。

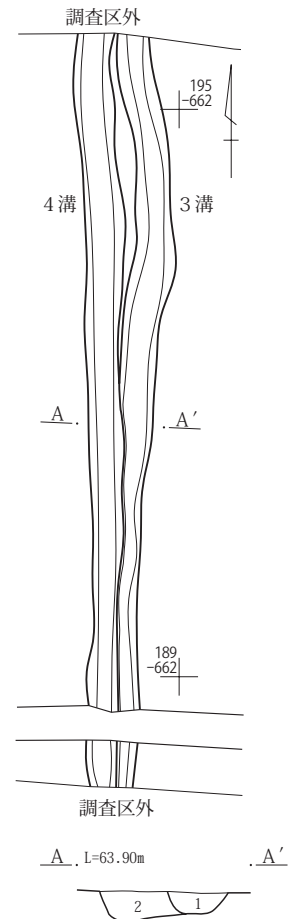
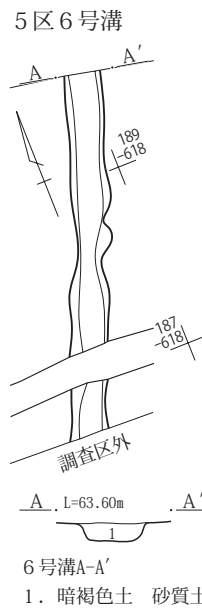
**5区6号溝**(第149図 PL.50)

第2面東側調査区のX=186～190、Y=-617～619に位置する。溝は、調査区外となる北側及び南側へさらに延長すると想定され、全体の規模は不明である。重複する遺構はない。西側8～9mの位置で、5号溝を確認している。

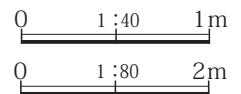
確認できる規模は、長さ3.85m、幅0.25～0.42m、深さ0.08～0.13mを測る。主軸方向はN-20°-Eである。底面の標高は、北端63.50m、南端63.47m、比高0.03m

を測る。勾配は0.77%であり、北東側から南西側にほぼ一直線に走行する。断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、As-Bを多量に含む暗褐色砂質土により、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面の観察から、底面に水成堆積など水流の痕跡は認められなかった。区画溝として使用されたと考えられる。

南側に位置する1区2面では、5区6号溝の延長部分を確認することができなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から時期は、中世以降と考えられる。



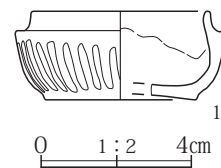
- 3号・4号溝A-A'
1. 暗褐色土 砂質土、As-B多量、褐色土小塊少量、3号溝
  2. 暗褐色土 砂質土、As-B多量 4号溝



第149図 5区3～6号溝

#### 4 遺構外の出土遺物(第150図 PL.118)

5区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。第2面では、他の調査区に比べ遺構数は少ないが古墳時代から中近世の遺構が混在する状況であり、中世から近世の遺物も僅かではあるが出土している。遺物は、中国磁器青白磁合子(第150図1)が出土した。



第150図 5区遺構外の出土遺物

## 第5章 奈良・平安時代の遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

本遺跡において奈良・平安時代の遺構と遺物が確認できた調査区は、1・3～5区である。遺構確認面は、基本土層第15層及び16層であるAs-B下面として調査を行い、古墳時代から平安時代、中世以降の遺構や遺物が確認された。各時代の遺構や遺物が混在することから、時代ごとに分けて掲載した。

奈良・平安時代の遺構が確認できた調査区及び遺構確認面は、1区第2面、3区第2面、4区第4面、5区第2面である。発掘調査によって確認できた奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居13軒、土坑36基、ピット17基、溝1条、水田4である。以下、調査区ごとに記す。

### 第2節 1区の遺構と遺物

1区第2面で確認できた奈良・平安時代と考えられる遺構は、土坑と水田である。調査区中央部から東側で確認した。

#### 1 土坑

1区第2面では、土坑2基を調査した。1区第2面東側調査区で確認した。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

#### 1区9号土坑(第152図 PL.50)

第2面東側調査区南端に位置する。重複する遺構はない。調査区外の南側にさらに広がると想定され、全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦で、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、灰黄褐色土、黒褐色土、黒色土がほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しと考えられる。土師器杯(第152図9土1)、須恵器椀(第152図9土2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品1、小型製品1)が出土した。出土遺物から時期は、8～9世紀と考えられる。

#### 1区11号土坑(第152図 PL.50)

第2面東側調査区南端に位置する。8号土坑と重複し、11号土坑が新しい。調査区外の南側にさらに広がると想定され、全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面に大小の窪みが認められ、壁は斜めに立ち上がる。埋没土は、灰黄褐色土や黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられ、上層に焼土層が認められる。非掲載遺物は、須恵器1点(器種不明)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、9世紀代と考えられる。

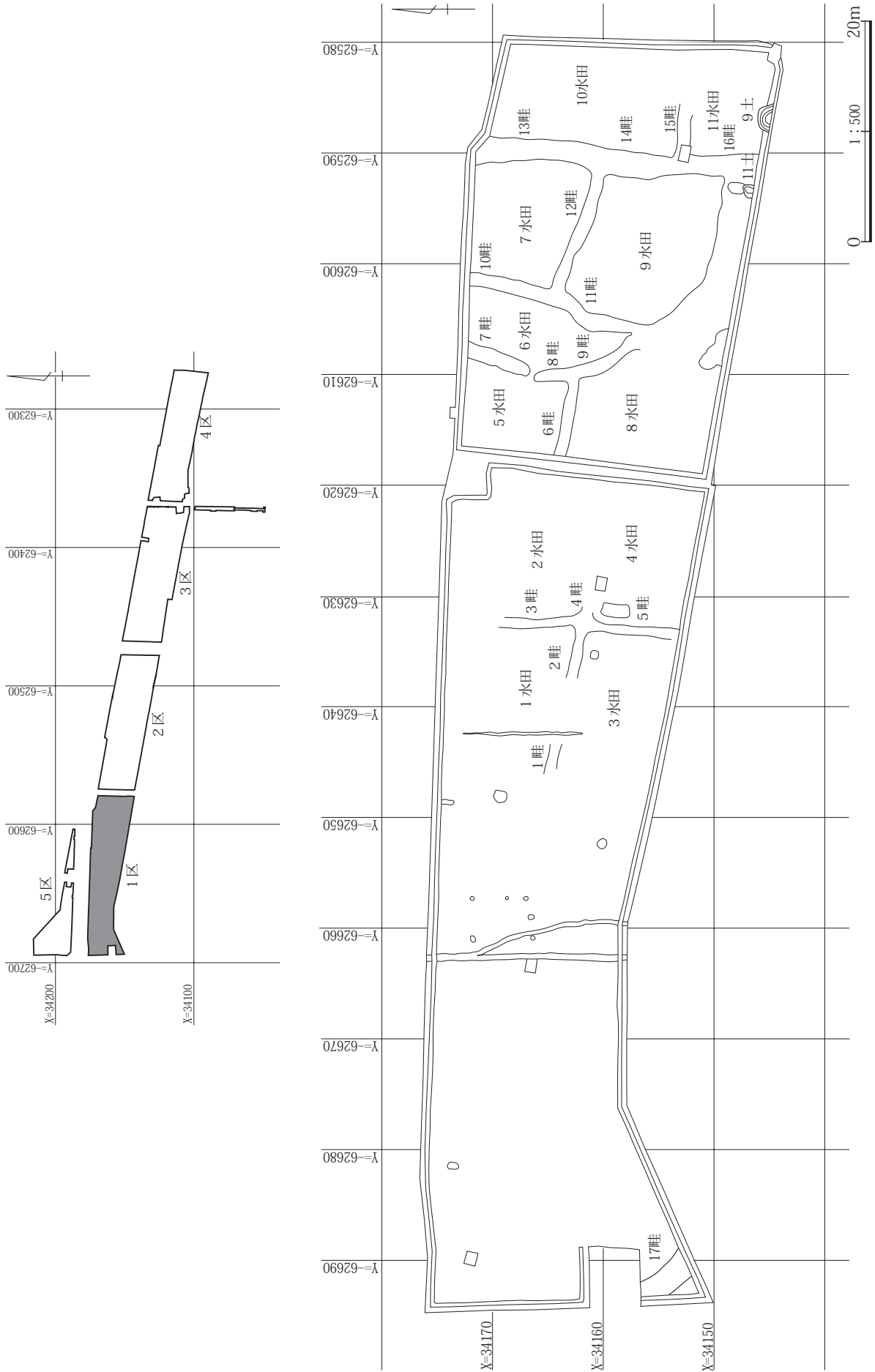
#### 2 水田

1区第2面では、平安時代の水田を調査した。1区第2面中央及び東側調査区の低地に位置する。1区では確認できなかったが、北西側の5区の微高地で竪穴住居を確認し、1区水田を含めた範囲が生産域と想定される。

#### 第2面水田(第153図 PL.51・52)

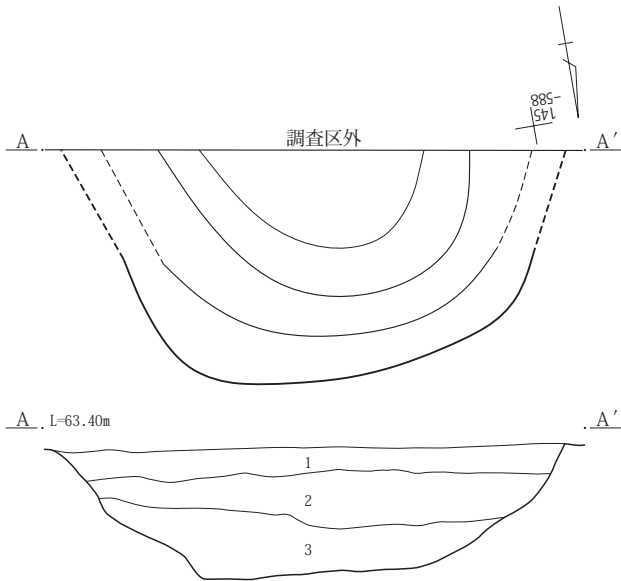
第2面水田の調査によって、南北方向や東西方向などの畦とみられる水田施設を確認した。確認できた水田の区画は11ヶ所であり、便宜的に1～11号水田と名称を付けた。水田を区画した畦は17条である。

調査区外に水田が広がるため、全体の規模は不明である。確認できた畦の規模及び主軸方位は以下のとおりである。1号畦の幅0.88～1.03m、高さ0.01m、主軸方位N-77°-W、2号畦の幅0.78～0.99m、高さ0.01m、主軸方位N-77°-W、3号畦の幅0.72～0.98m、高さ0.01m、主軸方位N-0°、4号畦の幅1.04m、高さ0.01m、主軸方位N-77°-W、5号畦の幅0.68～1.02m、高さ0.01m、主軸方位N-6°-E、6号畦の幅0.89～1.11m、高さ0.02m、主軸方位N-79°-W、7号畦の幅1.26～1.48m、高さ0.01m、主軸方位N-20°-E、8号畦の幅1.09m、高さ0.01m、主軸方位N-0°、9号畦の幅0.88～1.30m、高さ0.03m、主軸方位N-30°-W、10号畦の幅1.12～1.36m、高さ0.01～0.04m、主軸方位N-14°-E、11号畦の幅0.94～1.61m、高さ0.01m、



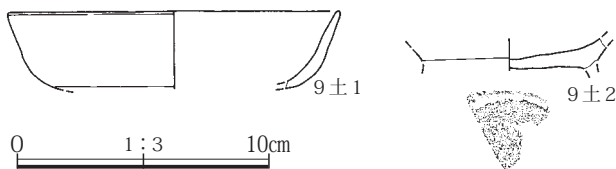
第151図 1区第2面(奈良・平安時代)全体図

1区9号土坑

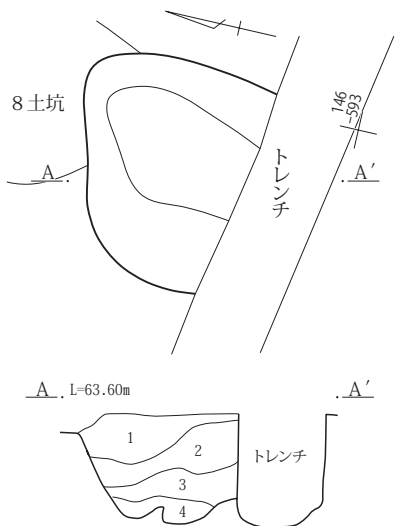


9号土坑A-A'

1. 黒色土 As-Aを含む、粘性あり
2. 黒褐色土 灰黄褐色土を含む、粘性あり
3. 灰黄褐色土 黒褐色土塊・灰白色土塊を含む、粘性あり

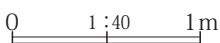


1区11号土坑



11号土坑A-A'

1. 焼土層 人為的に投げ込まれた焼土か
2. 黒褐色土 焼土塊を含む、やや粘性あり
3. 黒褐色土 灰黄褐色土塊を含む
4. 灰黄褐色土 黒褐色土塊を含む



主軸方位N-11° -EとN-50° -E、12号畦の幅0.85～1.28m、高さ0.01～0.02m、主軸方位N-67° -W、13号畦の幅1.76～2.22m、高さ0.04～0.07m、主軸方位N-5° -E、14号畦の幅1.56～2.34m、高さ0.05～0.11m、主軸方位N-5° -E、15号畦の幅1.19m、高さ0.04m、主軸方位N-82° -W、16号畦の幅1.62～1.84m、高さ0.09m、主軸方位N-0°、17号畦の幅2.24～2.48m、高さ0.02～0.08m、主軸方位N-40° -Wを測る。

1～4号水田は、調査区中央部に位置し、東西方向の1・2・4号畦と南北方向の3・5号畦によって十字に区分けされた水田である。1号水田は、1～3号畦によって区画された水田であり、標高は、西側63.67m、東側63.61～63.63mとなり、南北間のレベル差は少なく、西側から東側へ傾斜する。2号水田は、3・4号畦によって区画された水田であり、標高は、西側63.60～63.61m、東側63.55～63.56mとなり、南北間のレベル差は僅かであり、1号水田と同様に西側から東側へ傾斜する。1号水田との比高0.02～0.03mで2号水田が僅かに低い。3号水田は、1・2・5号畦によって区画された水田である。5号畦と17号畦は約55m離れていることから、3号水田の西側には別の区画があったと想定される。3号水田の標高は、西側63.65～63.75m、東側63.61～63.63mとなり、南北間のレベル差はほとんどなく、西側と東側の比高0.14mで東側が低い。1号水田との比高0.01mで、3号水田が僅かであるが低い。4号水田は、4・5号畦によって区画された水田であり、4号畦の東側延長部分は確認できなかった。標高は、西側63.59～63.63m、東側63.55～63.58mとなり、南北間のレベル差は少なく、西側から東側へ緩やかに傾斜する。3号水田との比高0.01～0.03mで4号水田が低い。

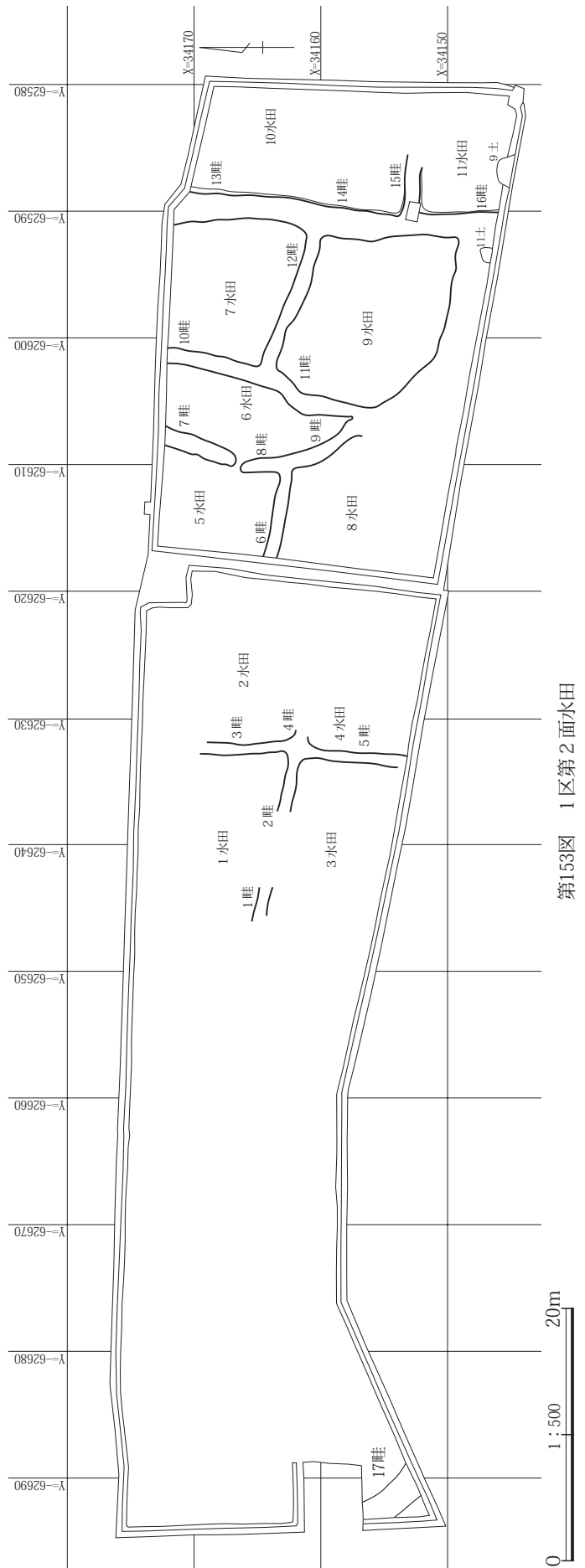
5～11号水田は東側調査区に位置し、6～16号畦で区画された水田である。南北や東西方向の他に、北西から南東に走行する畦も認められ、水田規模が不揃いである。5号水田は、6～8号畦で区画された水田である。標高は、北側63.54～63.57m、南側63.56mとなり、レベル差は少なく平坦であるが、西側と比較し東側が0.01～0.03m低い。北西の標高が63.57最も高く、7・8号畦の間が63.51mと最も低い。2号水田東端と3号水田西端とのレベル差もほとんどなく一連の水田の可能性はあるが、4号畦と6号畦の走行方向が一致せず判然とし

第152図 1区9号土坑と出土遺物・11号土坑



ない。6号水田は、7～11号畦で区画された水田である。8・9号畦が北西から南東に走行するため南側は三角形となる。標高は、西側63.51～63.55m、東側63.49～63.51m、南端は63.53mであり、西側から東側へ僅かに傾斜する。7・8号畦が繋がらないことから水口となる可能性もあり、5号水田との比高0.01mであり高低差はわずかであるが5号水田から6号水田への給水が想定される。7号水田は、10・12・13号畦で区画された水田である。標高は、西側63.47～63.50m、東側63.45～63.47mで北西が最も高く、南東が最も低い。南北間の高低差はほとんどなく、西側から東側へ緩やかに傾斜する。6号水田との比高0.01～0.04mであり7号水田が低い。8号水田は、6・9号畦で区画された水田である。9号畦と11号畦が合流し南東側かあるいは南側に延長すると考えられるが畦の高まりは不明瞭で確認できなかった。標高は、西側63.57～63.52m、南東側63.50mであり北側から南側及び南東にかけて緩やかに傾斜する。5号水田との比高0.01m、8号水田との比高0.03mで5号水田とはほぼ同レベルであり、6号水田が僅かに低い。9号水田は、11・12・14・16号畦で区画された水田であり、南北11.20m、東西14.20mの規模となる。標高は、63.45～63.50で高低差は少なくほぼ平坦面であり、西側と東側の比高0.01～0.02mで東側が低い。7～9号水田とほぼ同レベルか僅かに低い水田である。10号水田は、13～15号畦で区画された水田である。標高は、西側63.42m、東側63.32～63.35mであり、西側から東側にかけて緩やかに傾斜する。7号水田との比高0.04～0.06m、9号水田との比高0.04～0.06mで10号水田が低い。11号水田は、15・16号畦で区画された水田である。標高は、西側63.37～63.39m、東側63.32mで西側から東側にかけて緩やかに傾斜する。10号水田との比高0.01m、9号水田との比高0.08mであり、1区第2面で確認された水田のうち標高は、1号水田が最も高く、11号水田が最も低い。給水源は、調査区外の北側に想定され、高低差から北西から南東側にかけて給排水を行っていたと考えられる。農作業に伴う耕作痕は、大小の窪みが全体的に認められ、人力による鋤先痕が想定される。

出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況からAs-B下の水田と考えられる。



第153図 1区第2面水田

### 3 遺構外の出土遺物

1区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。本項で図示した遺物はなく、1区から出土した奈良・平安時代の非掲載遺物については、第6章において古墳時代と奈良・平安時代の遺構外の出土遺物総数を記した。

## 第3節 3区の遺構と遺物

3区における奈良・平安時代の遺構は、第2面で確認できた。遺構確認面は、基本土層第15層下面である。発掘調査では、第2面において中世から近世に至る遺構の調査も行っている。古墳時代から近世の遺構が混在していることから、各時代にそれぞれ分けて掲載した。確認できた奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居、土坑・ピット、溝、水田である。

### 1 竪穴住居

3区第2面において、確認できた竪穴住居は、10軒である。次章で述べる古墳時代の住居群と同様に、調査区東側及び拡張区南端の微高地に集中し、住居群の様相を呈する。3区の東側に位置する4区西端でも竪穴住居が2軒確認された。古墳時代の竪穴住居に比べ、確認できた数は少なくなるが、3区東端から拡張部南端、4区西端の範囲に住居群を形成していたと考えられる。住居群はさらに北側及び南側にかけて広がると想定されるが、調査区西側は東側に比べわずかに標高が低く、竪穴住居は確認されなかった。他の遺構との重複のためカマドのみの確認や調査区外に住居が広がるため部分的な調査となった竪穴住居もある。特に3区南側の拡張部については調査区の幅が狭く竪穴住居の一部分のみの調査となった。29号竪穴住居は、整理作業によって28号竪穴住居と同一住居と判断し欠番となった。

#### 3区4号竪穴住居(第156・157図 PL.52・118)

**位置：**X=126～130、Y=-377～380

**形状・規模：**形状は長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長3.67m、短軸長2.56m、壁高東壁11cm、北壁12cmを測る。

**主軸方位：**N-80°-E

**重複：**5号竪穴住居、1・3・29号土坑、7・8・11号溝と重複する。4号竪穴住居は、5号竪穴住居より新しく、1・3・29号土坑、7・8・11号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、炭化物や黄褐色土極小塊を含む暗褐色土であり堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は僅かであり、ほぼ平坦である。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁中央やや北寄りに燃焼面の灰が広範囲に残存し、焼土の一部を確認しカマドとした。燃焼部側壁、天井部、煙道などのほとんどが削平されたため残存状況は不良である。須恵器椀(第157図1)、土師器甕(第157図8)が燃焼面直上から、須恵器椀(第157図3)が燃焼面上2cmから出土した。主軸方位はN-63°-Eである。須恵器椀(第157図2・4)は燃焼面上7～14cmからの出土である。

**貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**灰釉陶器椀(第157図5・6)が北壁際の床面上11～16cmから、土師器甕(第157図7)が東壁際の床面下から、須恵器甕(第157図9)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器101点(大型製品95、小型製品6)、須恵器3点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、10世紀第1四半期と考えられる。

#### 3区11号竪穴住居(第158～161図 PL.53・54・119)

**位置：**X=120～124、Y=-387～391

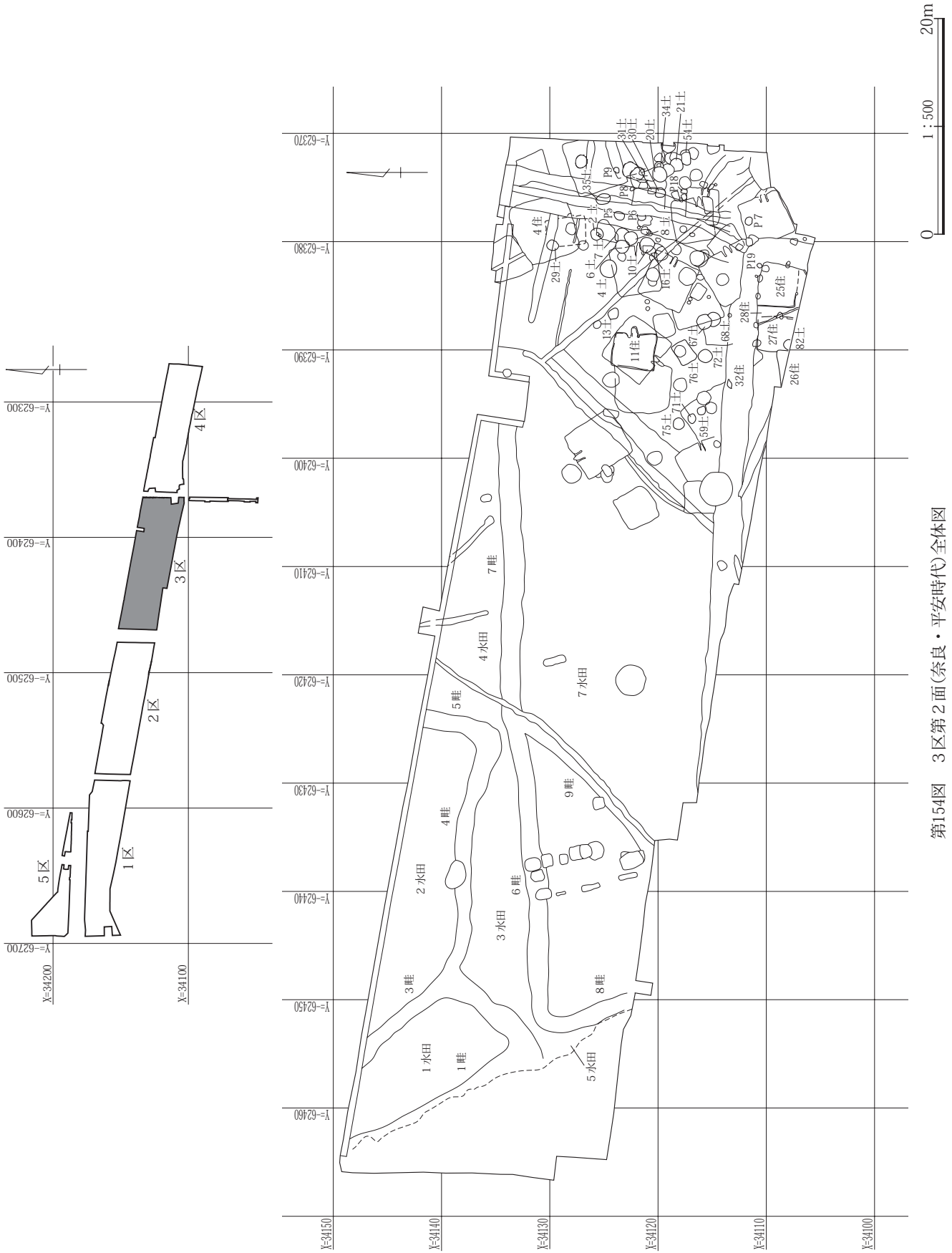
**形状・規模：**形状は長方形を呈する。規模は、長軸長3.99m、短軸長3.36m、壁高北壁22cm、東壁17cm、南壁及び西壁14cmを測る。面積は14.39㎡である。

**主軸方位：**N-95°-E

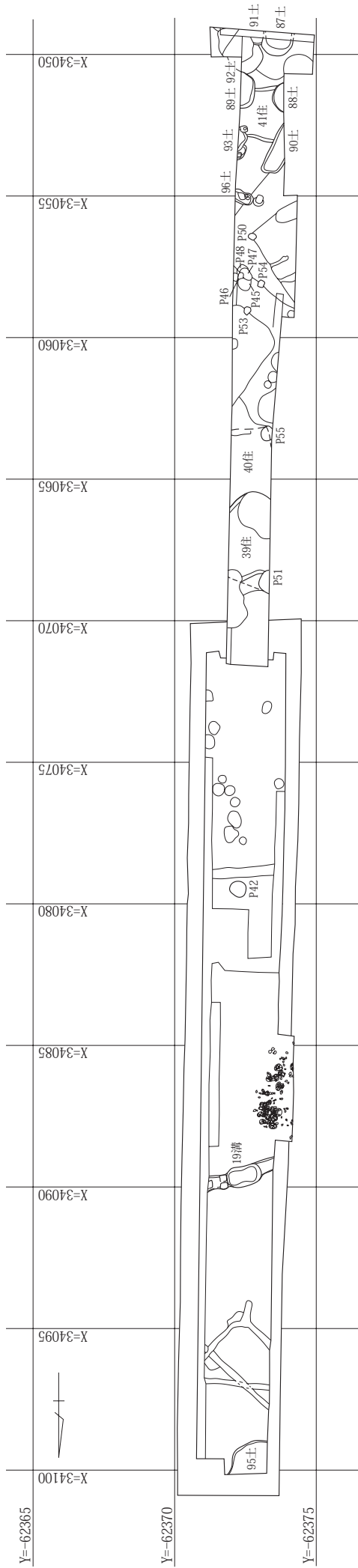
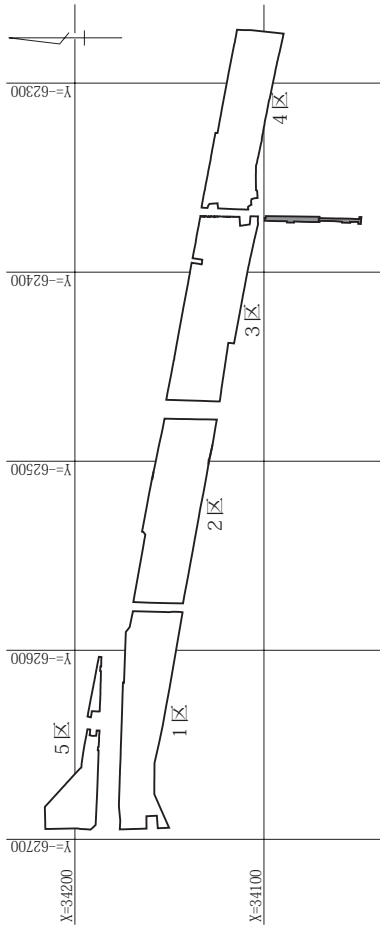
**重複：**13・19号竪穴住居と重複し、11号竪穴住居が新しい。

**埋没土：**埋没土は、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土や灰黄褐色土でほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**北壁際と南壁際のレベル差はほとんどなく、東壁際に比べ西壁際が約10cm低く緩やかに傾斜する。カマド焚口外側から住居中央部にかけて、使用による硬化面が残存し、住居の北東及び南東隅では焼土が認められる。

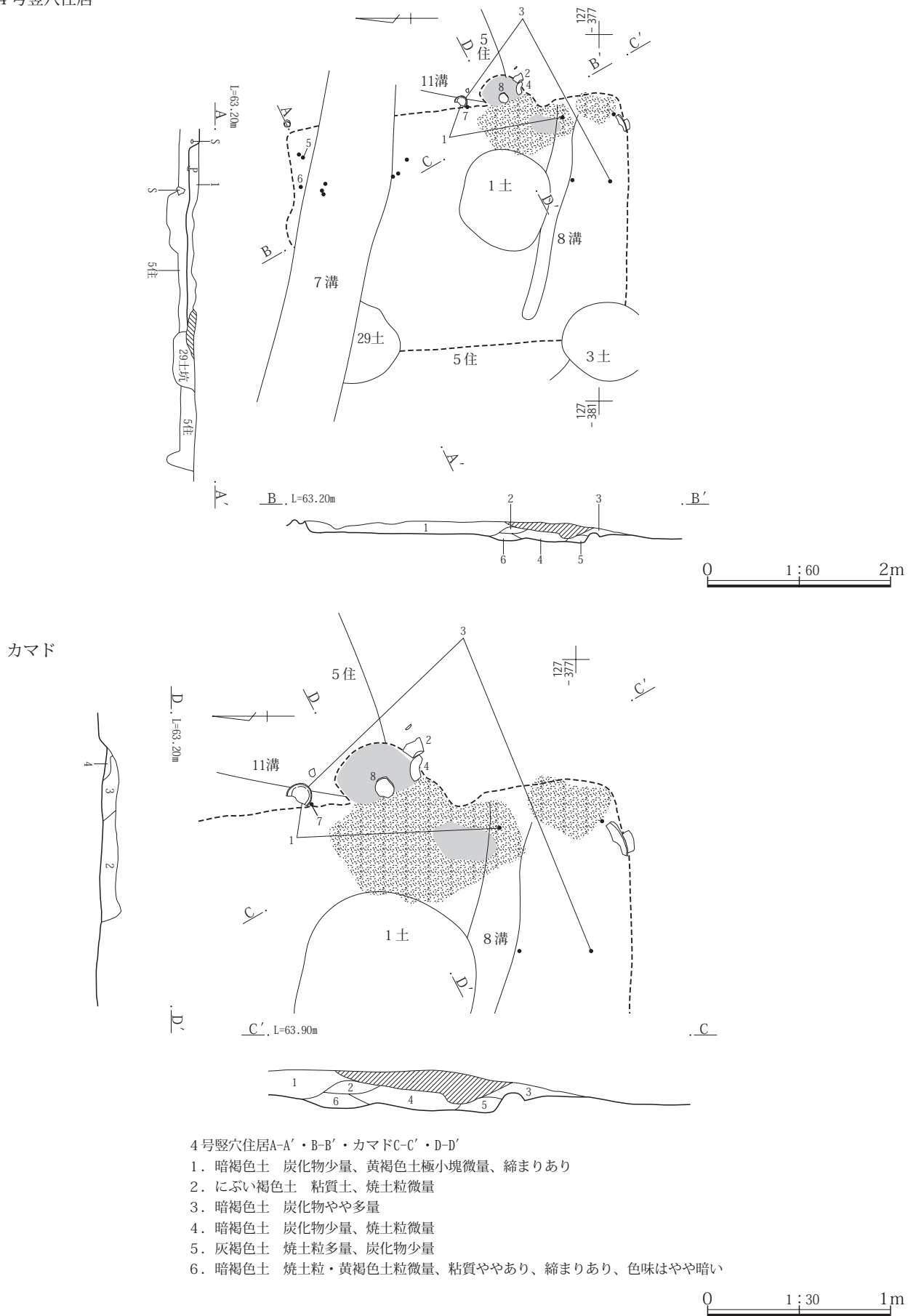


第154図 3区第2面(奈良・平安時代)全体図



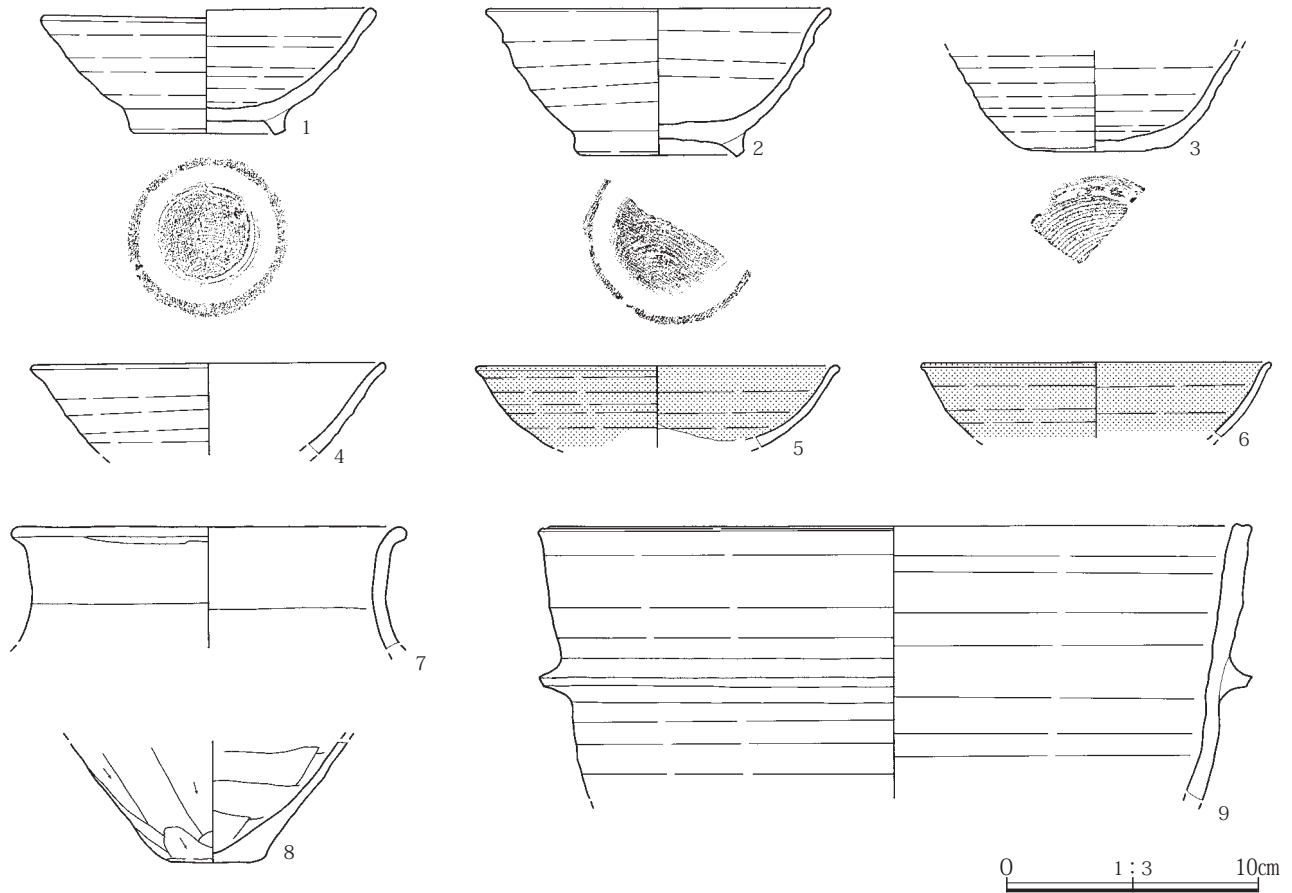
第155図 3区第2面拡張部(奈良・平安時代)全体図

3区4号竪穴住居



第156図 3区4号竪穴住居





第157図 3区4号竪穴住居出土遺物

**カマド**：東壁中央部に付設する。カマド燃烧部奥壁や煙道部が壁外に延びる構造である。確認できる規模は、全長1.00m、燃烧部幅0.50m、燃烧部奥行き0.90m、焚口幅0.43m、右袖状残存部長さ0.23mを測る。主軸方位は、N-87°-Eである。焚口外側から床面にかけて灰が広範囲に残存する。燃烧部や燃烧部側壁左側周辺からの遺物の出土が多く、土師器杯(第159図7)は燃烧部側壁内側の燃烧面上8cmから、須恵器椀(第160図11)は燃烧面下と東壁際の床面上1cmから、須恵器長頸壺(第160図17)は燃烧面下から、須恵器甕(第161図22)は燃烧面下からと燃烧面上9cmから出土し、燃烧面直上～15cmから出土した須恵器甕(第161図23・24・25)は同一個体の可能性がある。須恵器椀(第160図12)、土師器甕(第160図19)は埋没土から出土した。

**貯蔵穴**：カマド右側で確認した。平面形状は楕円形を呈し、規模は、長径0.69m、短径0.54m、深さ0.26mを測る。埋没土は暗褐色土と褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物が多量に混入し上層に焼土粒が認められる。土師器杯(第159図6)は底面上28cmから、須恵器椀(第

160図13)は底面上15cmから出土した。

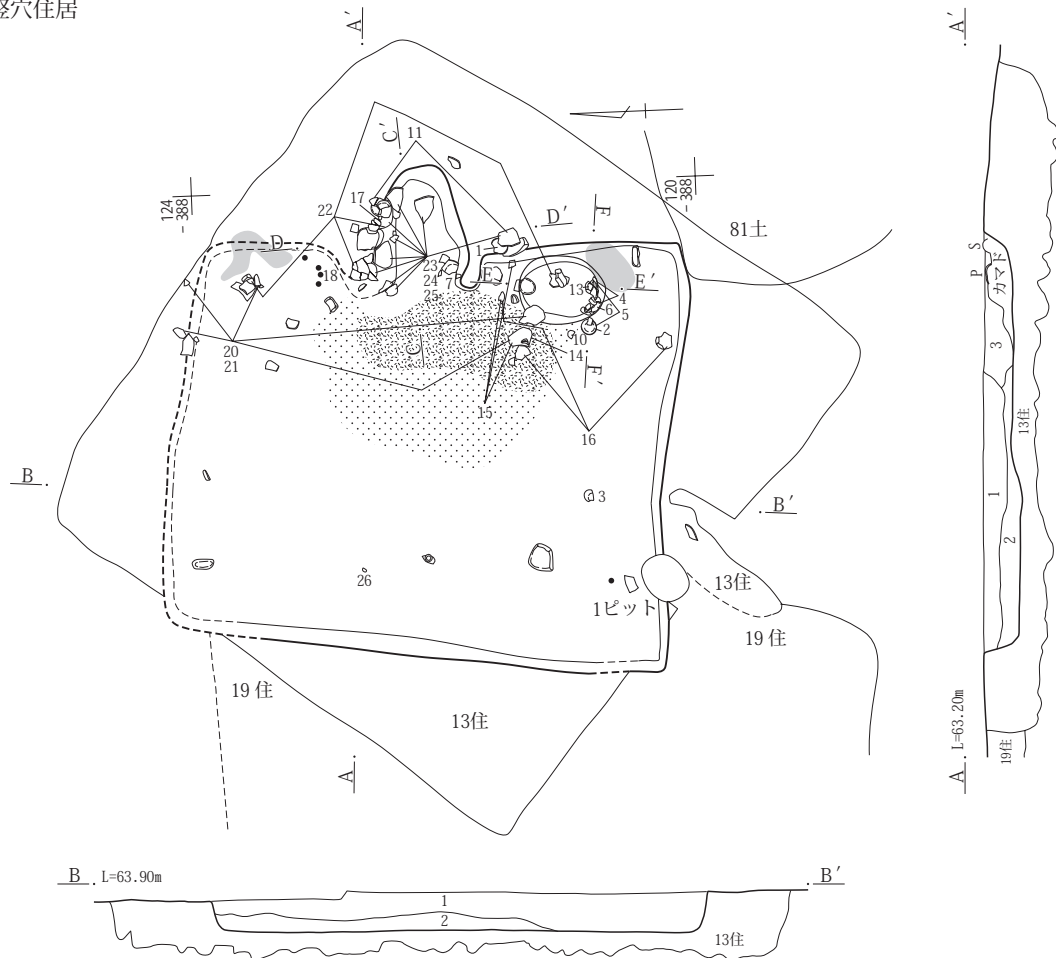
**柱穴・周溝**：床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方**：住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態**：土師器杯(第159図1～5)は貯蔵穴周辺や壁際の床面直上～床面上15cmから、須恵器杯(第159図10)は貯蔵穴周辺の床面直上から、須恵器椀(第160図14)、土師器甕(第160図18・20・21)は住居壁際や貯蔵穴周辺の床面直上～床面上43cmから、灰釉陶器椀(第160図15)はカマド周辺の床面上2～13cmから、灰釉陶器皿(第160図16)は南壁際の床面下からと床面上13cmから、土師器椀(第159図8)、須恵器杯(第159図9)は埋没土から出土した。石製品丸軋(第161図26)は西壁際の床面上9cmから出土した。鉄製品紡輪(第161図27)、鉄製品不詳(第161図28・30)、鉄製品釘(第161図29)、鉄製品鏃(第161図31)は埋没土から、非掲載遺物は、土師器1,805点(大型製品894、中型製品15、小型製品874、不明22)、須恵器190点(大型製品40、小型製品150)、灰釉陶器5点(小型製品)が出土した。

**所見**：出土遺物から時期は、9世紀後半と考えられる。

3区11号竪穴住居

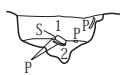


11号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 焼土粒少量、炭化物・As-Cを含む
2. 暗褐色土 第1層に近似、焼土粒・炭化物多量、色味は暗い
3. 灰黄褐色土 焼土粒多量、炭化物・褐灰色土塊を含む

貯蔵穴

E, L=63.10m



F, L=63.20m



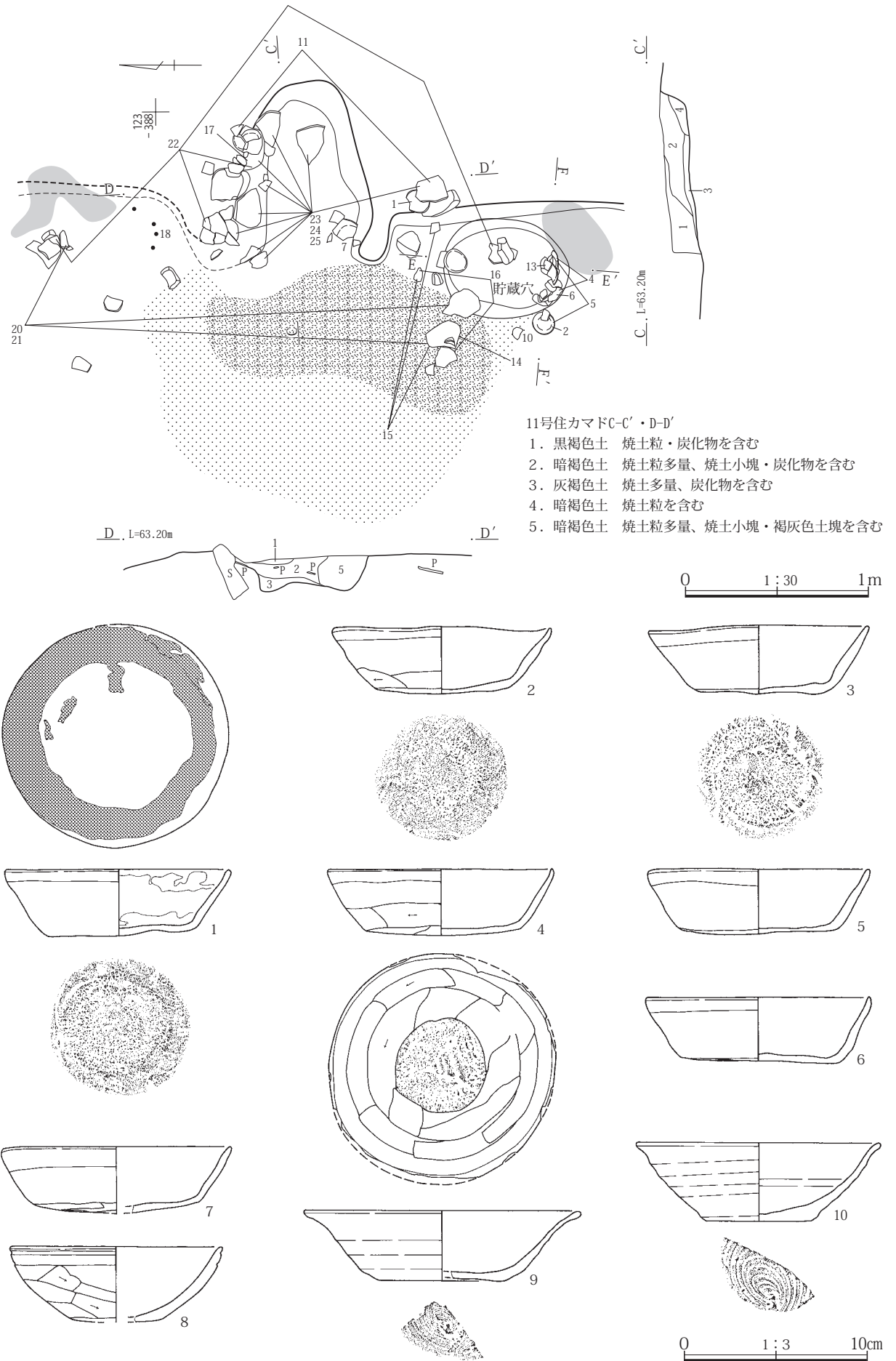
11号住貯蔵穴E-E'

1. 褐灰色土 明褐灰色土塊・焼土粒を含む
2. 暗褐色土 灰白色土塊を含む

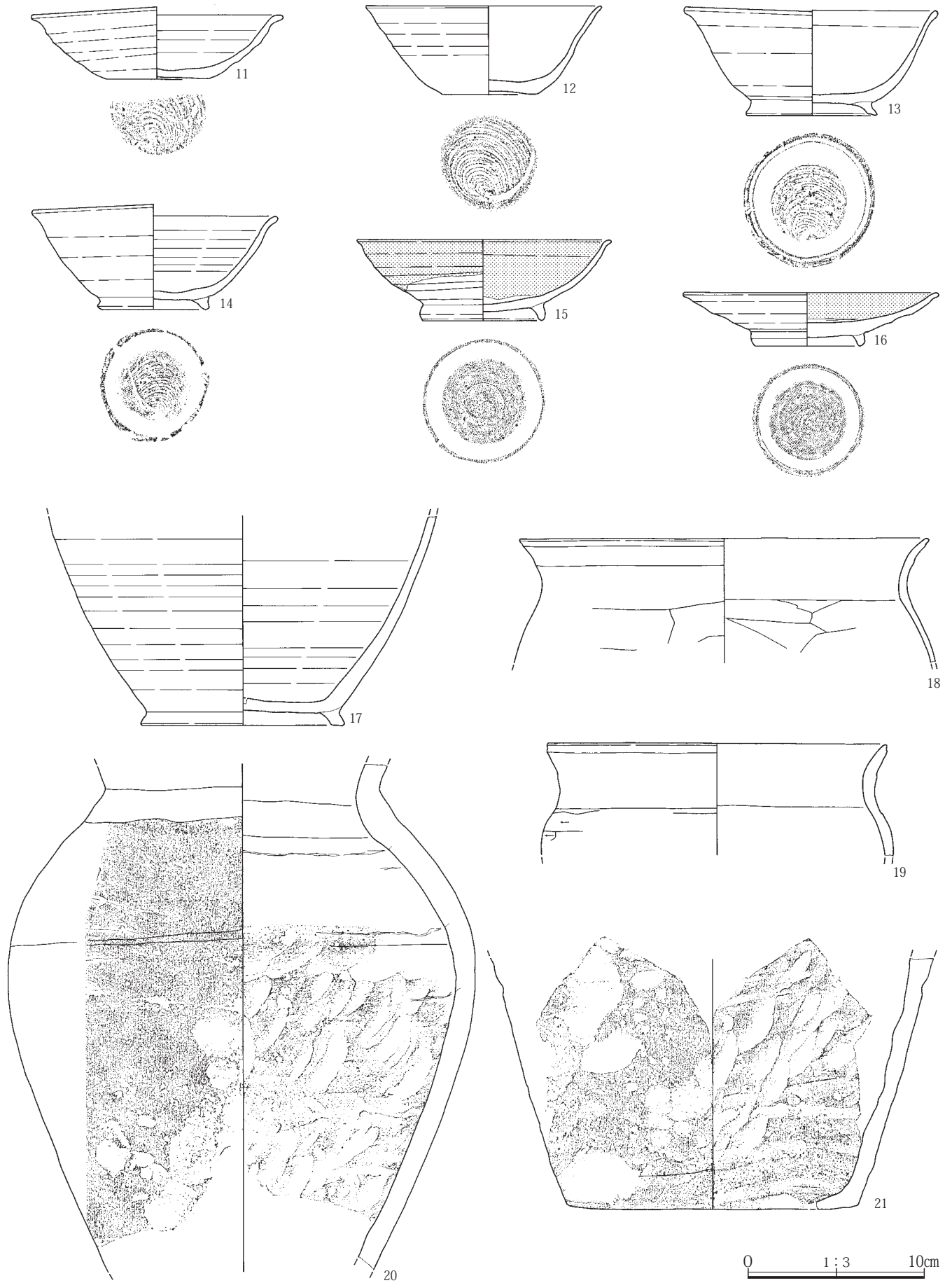


第158図 3区11号竪穴住居

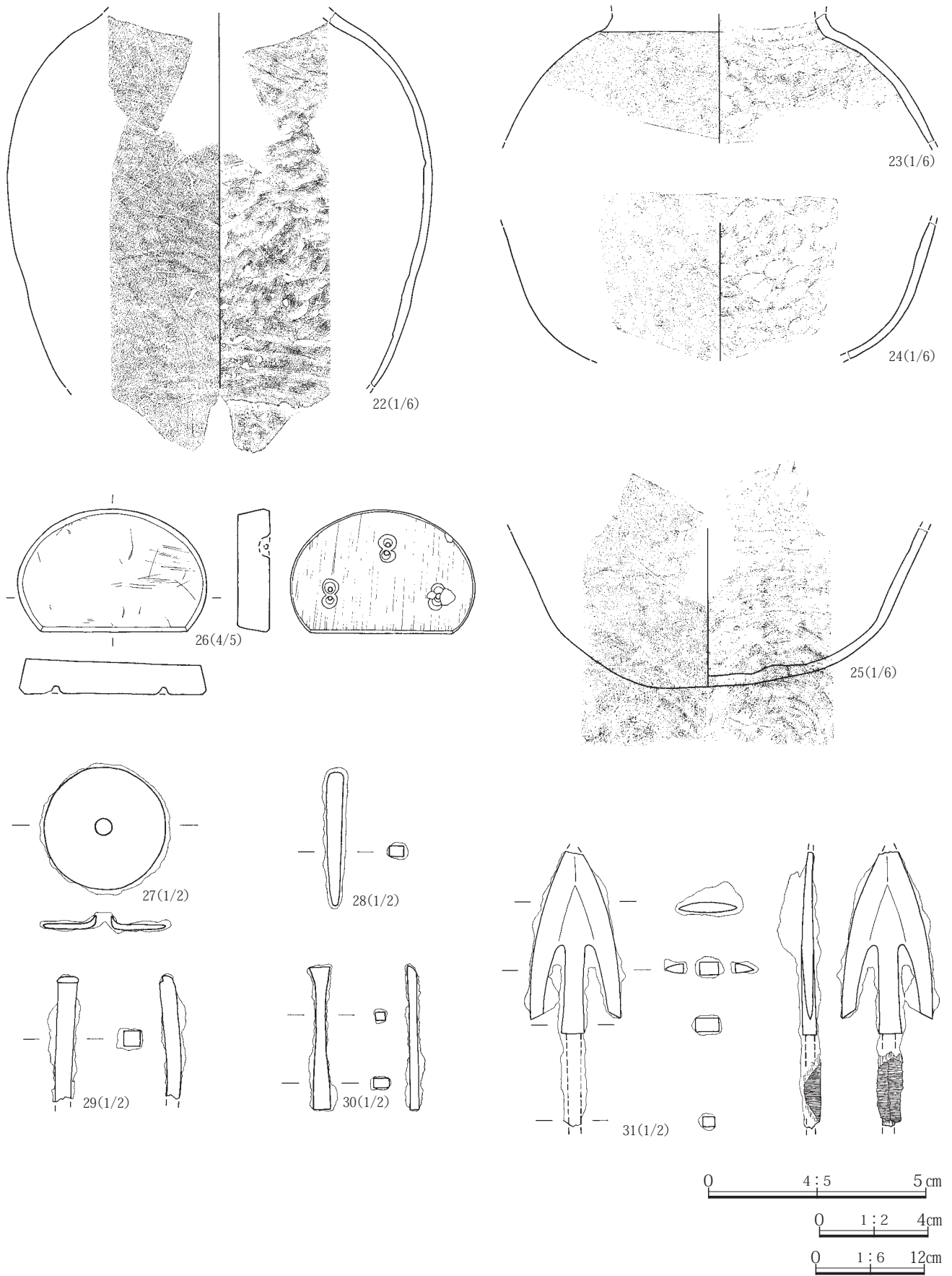
カマド



第159図 3区11号竪穴住居カマドと出土遺物(1)



第160図 3区11号竪穴住居出土遺物(2)



第161図 3区11号竪穴住居出土遺物(3)



**3区25号竪穴住居**(第162・163図 PL.54・55・120)

**位置：**X=107～111、Y=-381～386

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形または長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長4.06m、短軸長3.48m、壁高南壁13cm、西壁15cmを測る。

**主軸方位：**N-81°-W

**重複：**28号竪穴住居、21・22号ピット、14号溝と重複する。25号竪穴住居は、28号竪穴住居より新しく、21・22号ピット、14号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、灰黄褐色土粒・塊、焼土粒、炭化物などを含む暗褐色土や黒褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、北側と南側との比高3cmで南側が僅かに低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**床面精査では、焼土や灰などは確認できなかったが、土層断面の観察から東側の床面直上の埋没土に粘土塊や焼土が認められることから、カマド構築材の崩落土の可能性はある。

**貯蔵穴：**南東隅寄りで確認した。平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は、長径1.52m、短径1.23m、深さ0.28mで、底面を小ピット状に掘り窪めている。埋没土は、ローム粒・塊を含む黒色土及び黒褐色土と灰黄褐色粘土との混土であり、灰層が認められる。人為的な埋戻しと考えられる。須恵器椀(第163図8)、土師器台付甕(第163図9)は埋没土から出土し、混入と考えられる。

**柱穴：**床面精査によってピット6基を確認した。形状及び規模は、P1(不定形、長径50cm、短径45cm、深さ16cm)、P2(楕円形、長径42cm、短径37cm、深さ11cm)、P3(不定形、長径54cm、短径46cm、深さ11cm)、P4(不定形、長径58cm、短径41cm、深さ25cm)、P5(隅丸長方形、長径68cm、短径63cm、深さ7cm)、P6(不定形、長径66cm、短径59cm、深さ27cm)である。P1～P4は、壁際に付設した出入口の梯子や根太関連など何らかの施設の下部構造と考えられる。P6は、底面中央部を小ピット状に掘り窪めている。周辺から遺物の出土が多く認められ、須恵器椀(第163図2)は底面上4cmから出土し、貯蔵穴の可能性はある。

**周溝：**西壁が掘込まれている。規模は、幅13～19cm、

深さ5～9cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**須恵器椀(第163図4)は床面直上から出土した。土師器杯(第163図1)は床面上6～8cm、須恵器椀(第163図3)は床面上18cm、灰釉陶器皿(第163図5)は床面上12cm、土師器甕(第163図6)は床面上13cm、土製品土錘(第163図10)は床面上4cm、土師器甕(第163図7)は床面上12cmから出土した。磨石(第163図11)は床面上17cm、鉄製品不詳(第163図12)、鉄製品釘(第163図13)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器836点(大型製品616、中型製品3、小型製品209、不明8)、須恵器129点(大型製品37、小型製品92)、灰釉陶器16点(大型製品)、棒状礫1点、磨石2点が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、9世紀第4四半期と考えられる。

**3区26号竪穴住居**(第164図 PL.55)

**位置：**X=107～109、Y=-389～393

**形状・規模：**調査区外の南側に住居が広がるため、全体の形状及び規模は不明である。確認できる規模は、東西長2.56m、南北長1.07m、壁高北壁4cm、東壁5cmを測る。

**主軸方位：**北壁を主軸方位とするとN-85°-E

**重複：**27号竪穴住居、82号土坑と重複し、26号竪穴住居が、27号竪穴住居より新しく、82号土坑より古い。

**埋没土：**埋没土は、ローム粒、焼土粒、炭化物などを含む黒褐色土や暗褐色土であり、下層にローム塊が多量に含まれることから人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少ないが、東壁際に比べ西側が1cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

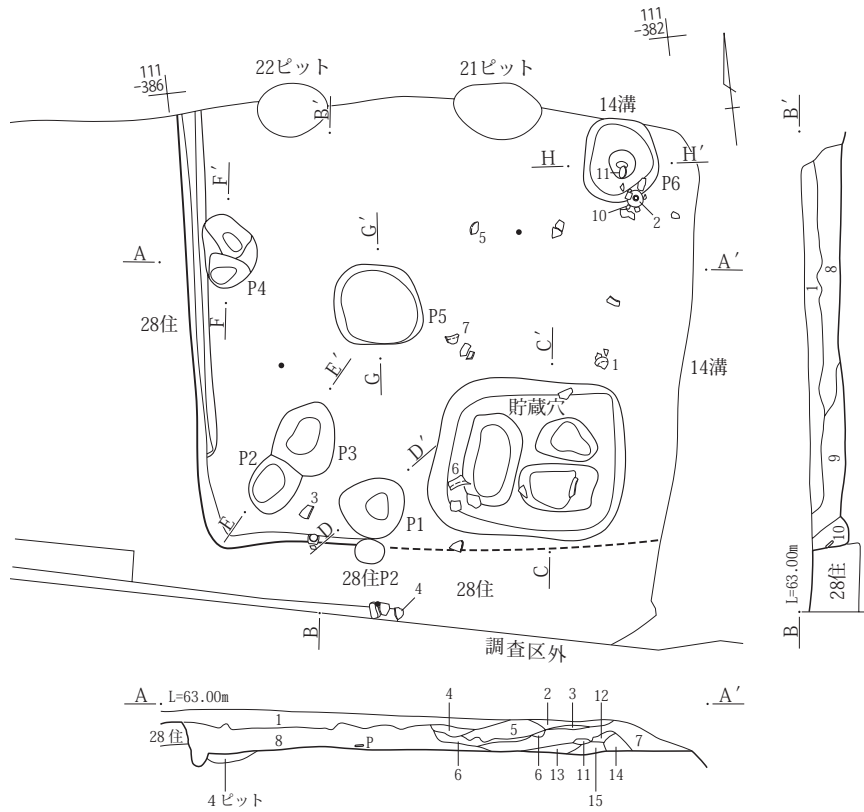
**カマド・貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**非掲載遺物は、土師器29点(大型製品19、小型製品10)、須恵器1点(小型製品)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。

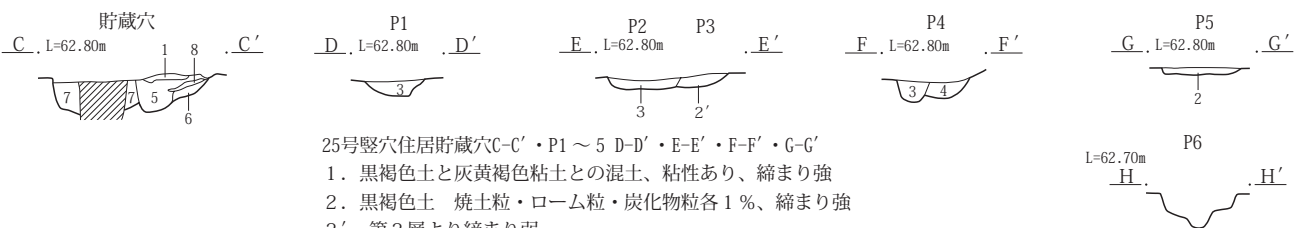
**所見：**出土遺物は9世紀代を主体とするが27号竪穴住居からの混入の可能性があり、重複関係から時期は10世紀代とするのが妥当であろう。

3区25号竪穴住居



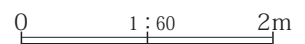
25号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む、やや砂質、鉄分沈着、粘性ややあり、縮まりあり
2. 暗褐色土 灰黄褐色土中粒5%、焼土中粒3%、粘性あり、縮まりあり
3. 暗褐色土 暗灰色灰層を含む
4. 暗褐色土 灰黄褐色粘土大粒10%、粘性あり、縮まりあり
5. 暗褐色土 灰黄褐色土中粒5%、焼土粒・炭化物粒・ローム粒含む、やや砂質、粘性あり、縮まりあり
6. 暗褐色土 灰黄褐色粘土中塊30%、粘性あり、縮まりあり
7. 黒褐色土 灰黄褐色土中粒3%、焼土粒・炭化物粒・ローム粒各1%、粘性あり、縮まりあり
8. 暗褐色土 焼土中粒・炭化物粒・ローム粒1%、粘性あり、縮まりあり
9. 暗褐色土 第8層よりややローム粒大きい
10. 黒褐色土 炭化物を含む、粘性あり、縮まりあり
11. 黒褐色土 焼土中粒50%、粘性なし、縮まり弱くボンボン
12. 黄褐色土 砂質土、黒褐色土小粒1%、粘性なし、縮まりやや弱
13. 暗褐色土 灰黄褐色粘土塊10%、黒色灰10%、粘性あり、縮まりあり
14. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む、粘性あり、縮まり弱
15. にぶい黄橙色土 粘質土、黒褐色土を含む

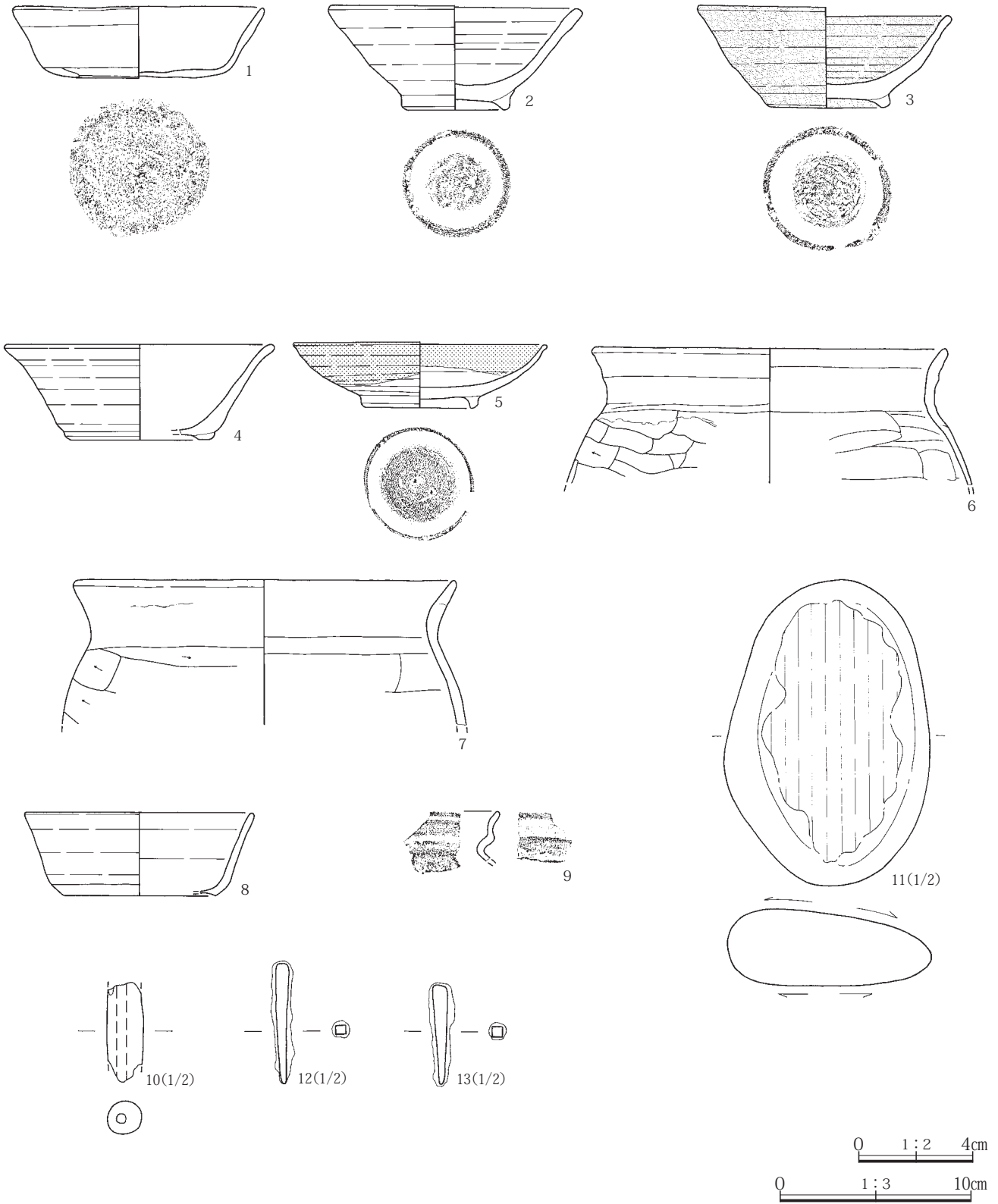


25号竪穴住居貯蔵穴C-C'・P1～5 D-D'・E-E'・F-F'・G-G'

1. 黒褐色土と灰黄褐色粘土との混土、粘性あり、縮まり強
2. 黒褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物粒各1%、縮まり強  
2'. 第2層より縮まり弱
3. 黒色土 ローム粒・炭化物粒を含む、粘性あり、縮まりあり
4. 黒色土 ローム中塊30%、ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり
5. 黒色土 ローム極小粒3%、粘性あり、縮まりあり
6. 黒色土 ローム大塊2%、粘性あり、縮まりあり
7. 黒色土 ローム極小粒10%、炭化物粒を含む、粘性あり、縮まりあり
8. 灰層

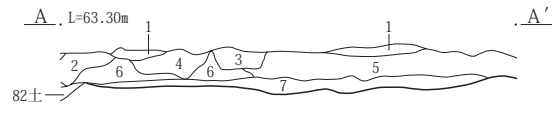
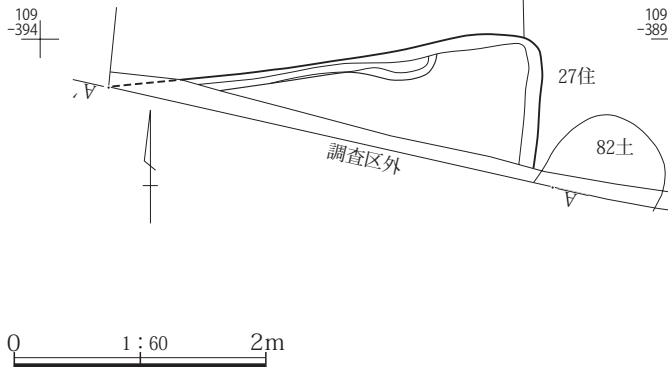


第162図 3区25号竪穴住居



第163図 3区25号竪穴住居出土遺物

3区26号竪穴住居



26号竪穴住居A-A'

1. 黒褐色土 砂質土、暗褐色土を含む、焼土粒・炭化物を含む、締まりあり、粘性あり
2. 黒褐色土 第1層より色味は暗い
3. 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒を含む、やや砂質、粘性ややあり、締まりあり
4. 黒褐色土 ローム粒1%、焼土粒・炭化物粒を含む、やや砂質、粘性ややあり、締まりあり
5. 暗褐色土 ローム粒・炭化物を含む、粘性あり、締まりあり
6. 暗褐色土 灰黄褐色土大粒10%、ローム粒・炭化物粒を含む、粘性あり、締まりあり
7. 黒褐色土 ローム中塊10%、粘性あり、締まり強

第164図 3区26号竪穴住居

3区27号竪穴住居(第165・166図 PL.54・55・120)

位置：X=107～110、Y=-386～390

形状・規模：形状は方形と想定される。規模は、長軸長3.30m、短軸長3.27m、壁高北壁2cm、東壁29cm、西壁8cmを測る。確認できる面積は16.64㎡である。

主軸方位：N-87°-E

重複：26・28号竪穴住居、82号土坑、23・24号ピット、14号溝と重複する。27号竪穴住居は、28号竪穴住居より新しく、26号竪穴住居、82号土坑、23・24号ピット、14号溝より古い。

埋没土：埋没土は、ローム粒・焼土粒・炭化物を含む黒褐色土であり、人為的な埋戻しと考えられる。

床面：床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、カマド焚口外側から床面中央部にかけて2～3cm低い。カマド焚口外側に焼土が認められる。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

カマド：東壁中央部に付設したと想定される。カマド燃烧部側壁を遺失し残存状況は良好ではない。確認できる規模は、全長0.49m、幅0.68m、燃烧部幅0.41m、焚口幅0.49cm、右袖状残存部幅0.17mを測り、床面からカマド燃烧面のレベル差はない。主軸方位は、N-89°-Eである。焚口外側の焼土内で、土師器杯(第166図1・2)が床面上13cmから、須恵器椀(第166図3)が埋没土から出土した。

貯蔵穴：カマド右側で確認した。南側の調査区外に広がるため全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、長径0.84m、短径0.80m、深さ0.14mを測る。埋没土は、ローム粒・塊、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土で

人為的に埋戻す。須恵器椀(第166図4)は貯蔵穴開口部際の底面下から、土師器甕(第166図5)は底面直上から出土した。内部に有機物が残存する銅製品巡方(第166図6)は底面直上から出土した。

柱穴：床面精査を行ったが確認できなかった。

周溝：カマド右側の東壁の一部が掘込まれる。規模は、幅15～17cm、深さ2～9cmを測る。

掘り方：住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

遺物出土状態：非掲載遺物は、土師器226点(大型製品152、小型製品74)、須恵器33点(大型製品3、小型製品30)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。

所見：出土遺物から時期は、9世紀第4四半期～10世紀第1四半期と考えられる。

3区28号竪穴住居(第167図 PL.54～56・120)

位置：X=106～110、Y=-382～387

形状・規模：他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形または長方形と想定される。確認できる規模は、南側で周溝の一部が認められ南北長6.08m以上、東西長5.10m以上、壁高西壁22cm、西壁5cmを測る。

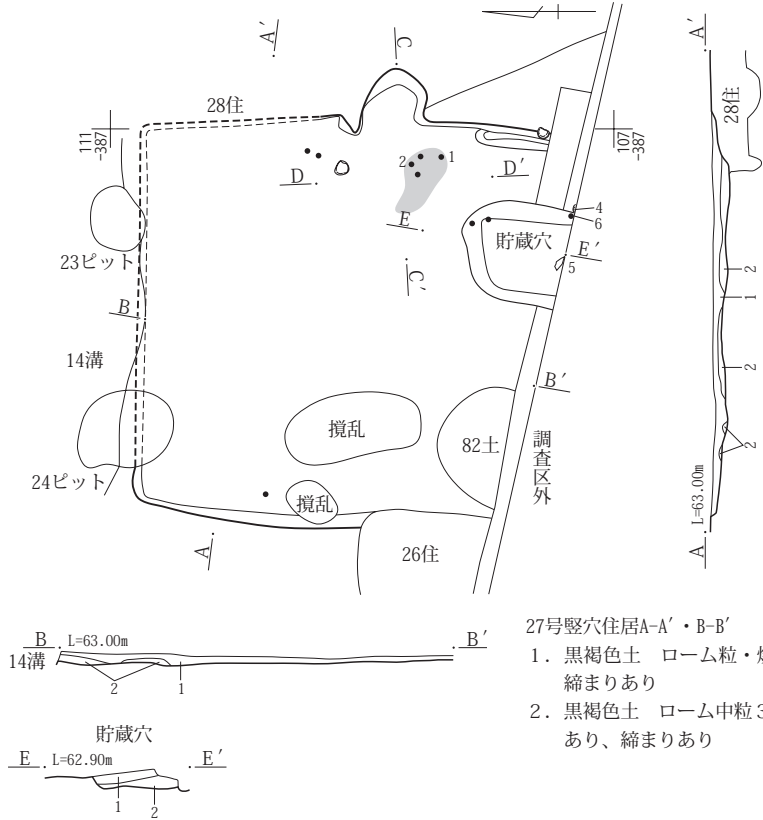
主軸方位：西壁を主軸方位とすると、N-3°-E

重複：25・27号竪穴住居、14号溝と重複する。28号竪穴住居は、25・27号竪穴住居、14号溝より古い。

埋没土：埋没土は、ローム粒・塊を含む黒褐色土や暗褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

床面：25号竪穴住居との重複のため確認できる床面は一部であるが、床面のレベル差は、北側に比べ南側が3～

3区27号竪穴住居

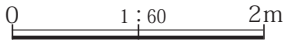


27号竪穴住居A-A'・B-B'

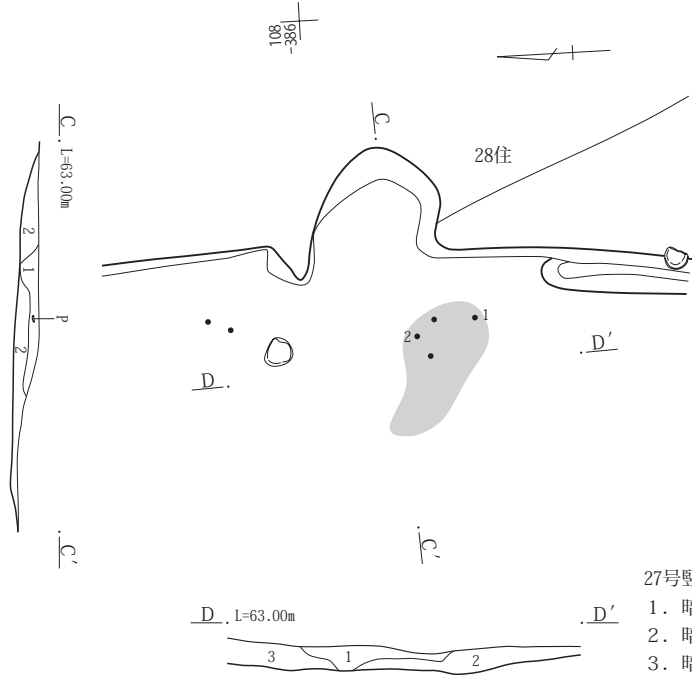
- 1. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物を含む、粘性あり、縮まりあり
- 2. 黒褐色土 ローム中粒3%、焼土粒・炭化物を含む、粘性あり、縮まりあり

27号竪穴住居貯蔵穴E-E'

- 1. 暗褐色土 焼土大粒・灰黄褐色土中粒・炭化物中粒各3%、ローム粒を含む、粘性あり、縮まり弱
- 2. 暗褐色土 ローム中塊5%、炭化物粒を含む、粘性あり、縮まりあり

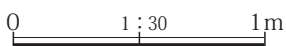


カマド



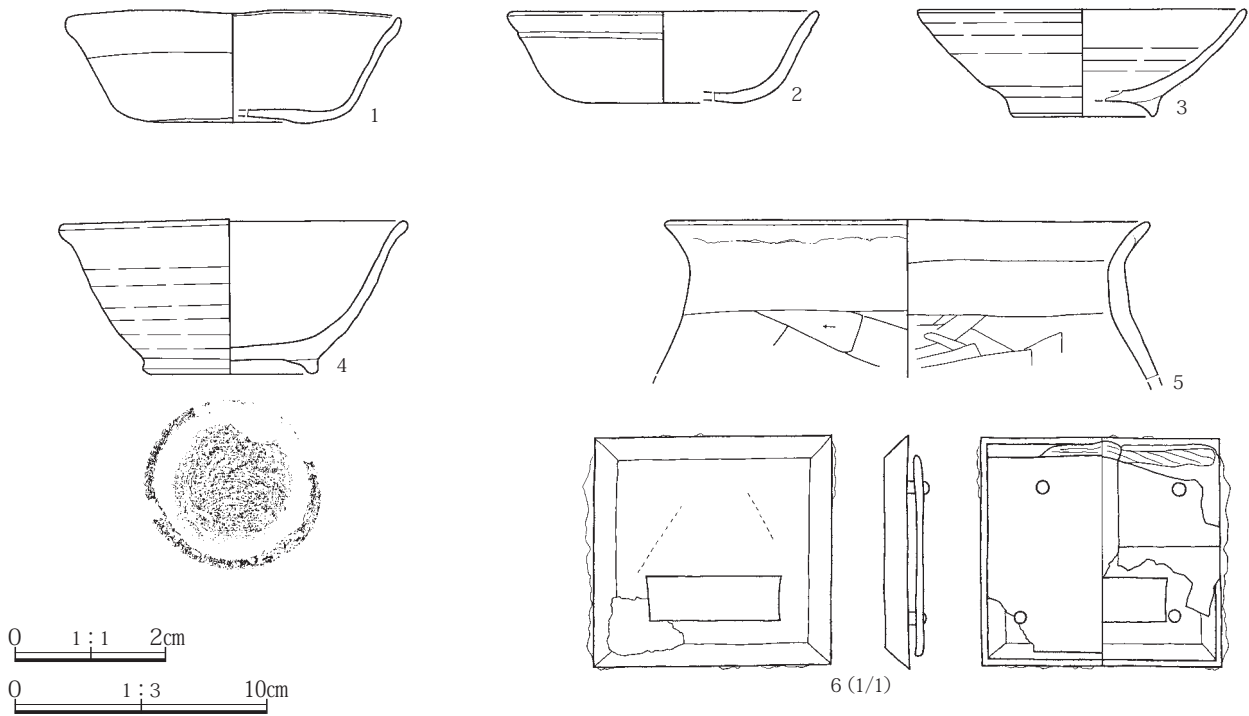
27号竪穴住居カマドC-C'・D-D'

- 1. 暗褐色土 焼土中粒3%
- 2. 暗褐色土 灰黄褐色土を含む、粘性あり、縮まりあり
- 3. 暗褐色土 焼土粒・ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり



第165図 3区27号竪穴住居





第166図 3区27号竪穴住居出土遺物

5 cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**床面精査によってピット2基を確認した。形状及び規模は、P 1 (不定形、長径43cm、短径36cm、深さ16 cm)、P 2 (楕円形、長径24cm、短径20cm、深さ18cm)である。P 1 はローム粒・塊、焼土粒、炭化物を含む黒褐色土で、P 2 は炭化物粒を含む黒色土で埋没し、土層断面の観察から柱痕は確認できなかった。

**周溝：**西壁と南壁の一部で確認した。規模は、幅8～22cm、深さ5～14cmを測る。

**掘り方：**南側の一部で掘り方が認められ、3～12cm掘り窪め、ローム粒や黒色土塊を含む黒褐色土によって床面を整えている。

**遺物出土状態：**石製模造品(第167図1)はP 1 開口部付近の床面直上から出土した。非掲載遺物は、土師器77点(大型製品60、小型製品17)、須恵器11点(大型製品4、小型製品7)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

**3区32号竪穴住居(第168図 PL.56)**

**位置：**X=113、Y=-392～393

**形状・規模：**カマドに残存する焼土や燃烧部の浅い掘込

みが確認できたにすぎず、全体の形状及び規模は不明である。

**主軸方位：**カマド以外は確認できなかった。

**重複：**14溝と重複し、32号竪穴住居が古い。

**埋没土・床面：**住居上面の大部分が14号溝によって掘込まれているため、確認できなかった。

**カマド：**焼土が不定形に残存し、規模は、長径0.43m、短径0.25mである。燃烧部とみられる溝状の掘込みが認められ、長径0.90m、短径0.41m、深さ0.01～0.13mを測る。主軸方位は、N-73°-Eである。燃烧部側壁などは遺失する。埋没土は焼土粒や黄褐色土塊を含む暗褐色土と褐色土である。掘り方は確認できなかった。

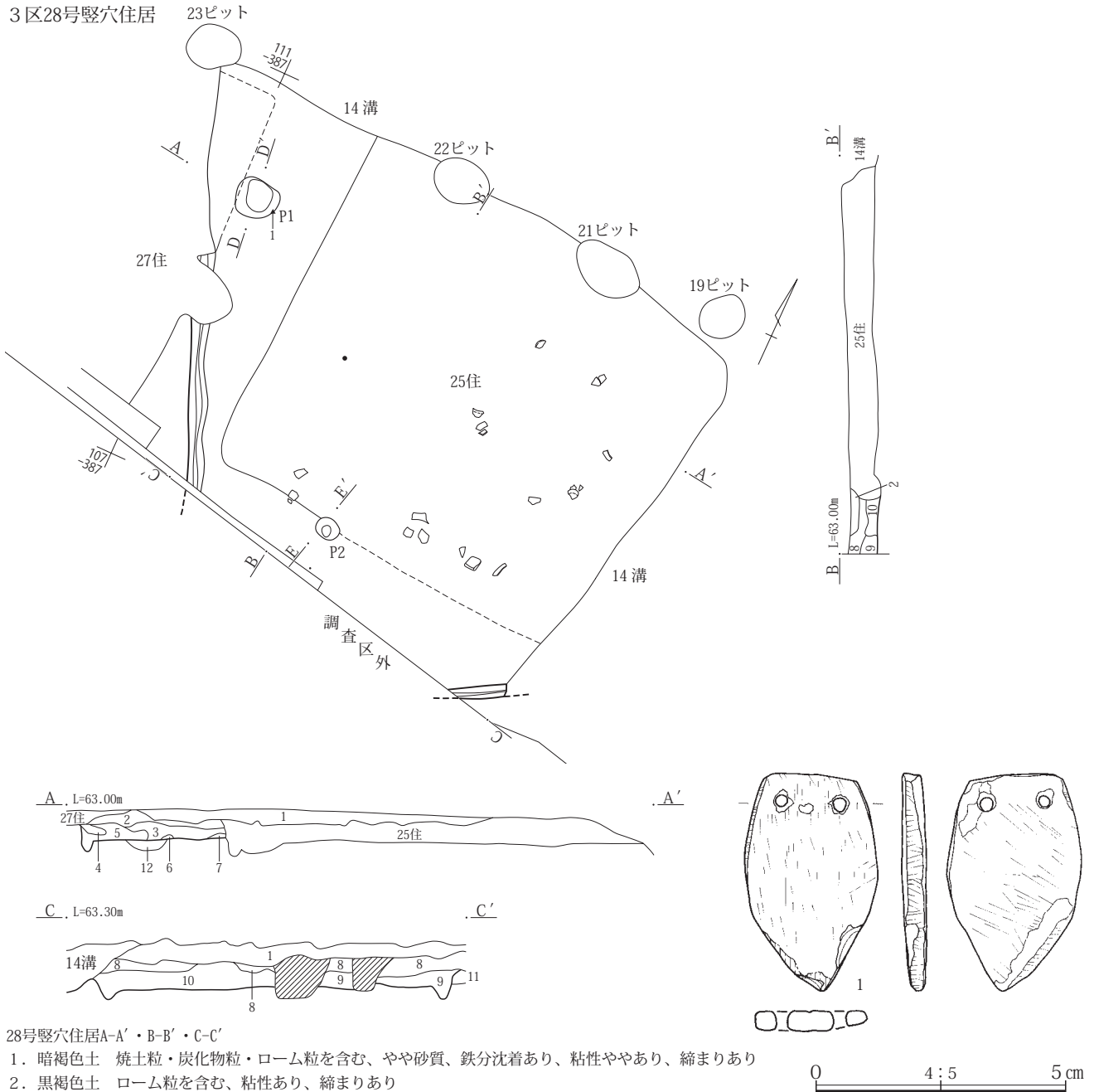
**貯蔵穴・柱穴・周溝：**カマド周辺で床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第168図1～3)は埋没土から出土した。土師器杯(第168図4)は混入と考えられる。非掲載遺物は、土師器73点(大型製品62、小型製品9、不明2)が出土した。

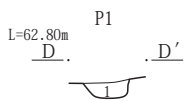
**所見：**出土遺物から時期は、8世紀後半と考えられる。

3区28号竪穴住居



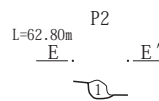
28号竪穴住居A-A'・B-B'・C-C'

1. 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・ローム粒を含む、やや砂質、鉄分沈着あり、粘性ややあり、縮まりあり
2. 黒褐色土 ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり
3. 黒褐色土 黒色大塊10%、ローム粒を含む、やや砂質、粘性ややあり、縮まりあり
4. 黒褐色土 ローム粒10%、ローム粒As-YPに由来か、粘性あり、縮まりあり
5. 黒褐色土 ローム大粒5%、ローム粒As-YPに由来か、粘性あり、縮まりあり
6. 黒褐色土 ローム小粒50%、粘性あり、縮まりあり
7. 黒色土 ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり
8. 黒褐色土 ローム小粒微量
9. 黒褐色土 ローム小塊・粒3%、第2層に近似、粘性あり、縮まりあり
10. 黒褐色土 ローム中塊10%、粘性あり、縮まり強
11. 黒褐色土 ローム中粒3%、粘性あり、縮まりあり
12. 黒褐色土 ローム中塊、黒色土塊各5%、ローム粒・焼土粒・炭化物粒含む、粘性あり、縮まりあり



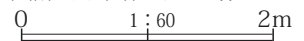
28号竪穴住居P1 D-D'

1. 黒褐色土 ローム塊・黒色土塊5%、ローム粒・焼土粒・炭化物を含む、粘性あり、縮まりあり

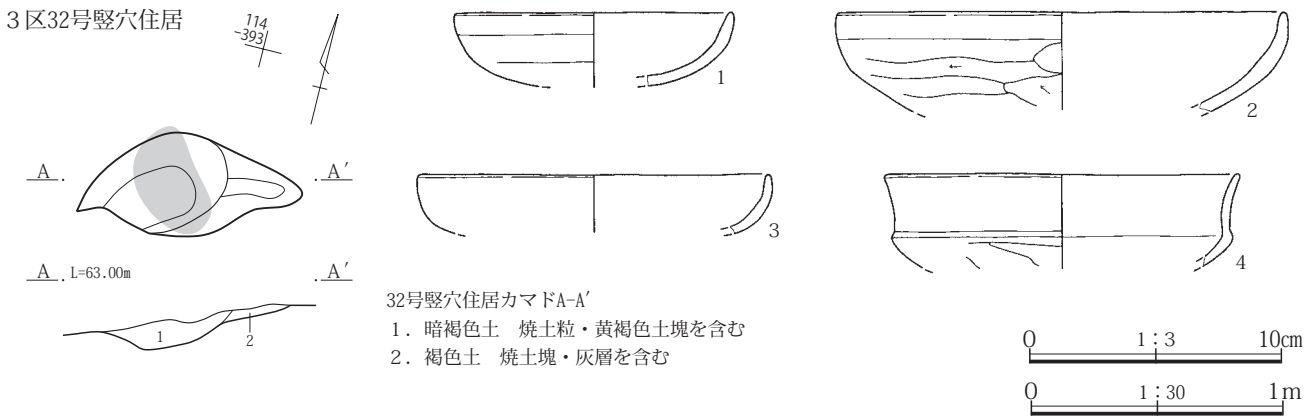


28号竪穴住居P2 E-E'

1. 黒色土 炭化物粒を含む、粘性あり、縮まりやや弱



第167図 3区28号竪穴住居と出土遺物



第168図 3区32号竪穴住居と出土遺物

**3区39号竪穴住居**(第169図 PL.56)

**位置：**X=065～069、Y=-371～373

**形状・規模：**他の遺構との重複や調査区外の東側及び西側に広がるため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長2.43m、東西長1.46m、壁高南壁7cmを測る。

**主軸方位：**南壁を主軸方位とするとN-58°-W

**重複：**38・40号竪穴住居、94号土坑、51号ピットと重複する。39号竪穴住居は、38・40号竪穴住居と94号土坑より新しく、51号ピットより古い。

**埋没土：**埋没土は、浅黄橙色土塊、焼土粒・塊、炭化物を含む褐灰色土であり、下層から上層にかけてほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**周辺地域の水田耕作による出水によって遺構確認面の状態が悪化し、住居の床面については明瞭に確認することができず、掘り方まで掘り下げて調査を行った。土層断面の観察から第7層上面が床面と考えられる。

**カマド・貯蔵穴・柱穴：**床面精査及び掘り方調査を行ったが確認できなかった。

**周溝：**東壁の土層断面の観察及び掘り方調査によって、東壁の一部で周溝を確認した。規模は、幅22cm、深さ11cmを測る。

**掘り方：**大小ピット状及び土坑状に掘込み、凹凸が著しい。全体的に3～22cm掘り窪めて床面を整えている。特に床下施設は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第169図2)は掘り方底面上23cm、土師器鉢(第169図3)、土師器甕(第169図5)は掘り方底面上43cmから、土師器杯(第169図1)、須恵器杯(第

169図4)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器243点(大型製品203、中型製品1、小型製品39)、須恵器13点(大型製品2、小型製品11)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、8世紀第4四半期と考えられる。

**3区40号竪穴住居**(第170図 PL.56・121)

**位置：**X=063～066、Y=-371～373

**形状・規模：**調査区外の東側及び西側に広がり、確認できた範囲が狭いため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長2.80m、東西長1.43m、壁高南壁9～11cmを測る。

**主軸方位：**南壁を主軸方位とするとN-86°-E

**重複：**39号竪穴住居、55号ピットと重複する。40号竪穴住居は、39号竪穴住居、55号ピットより古いと考えられる。

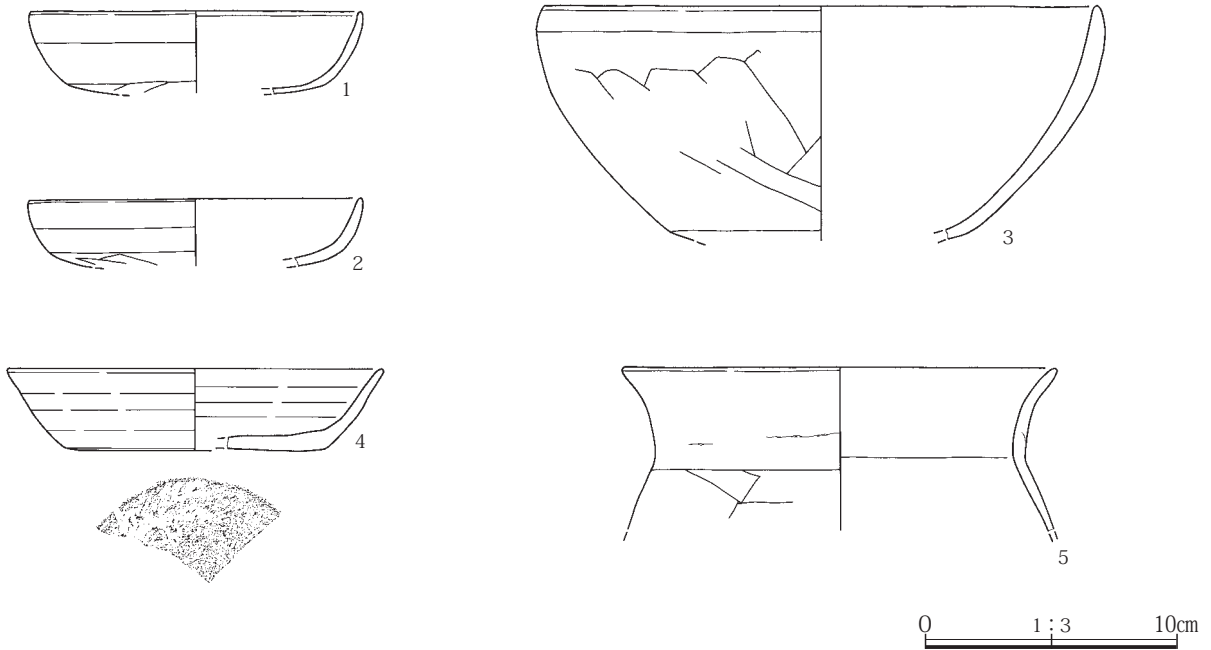
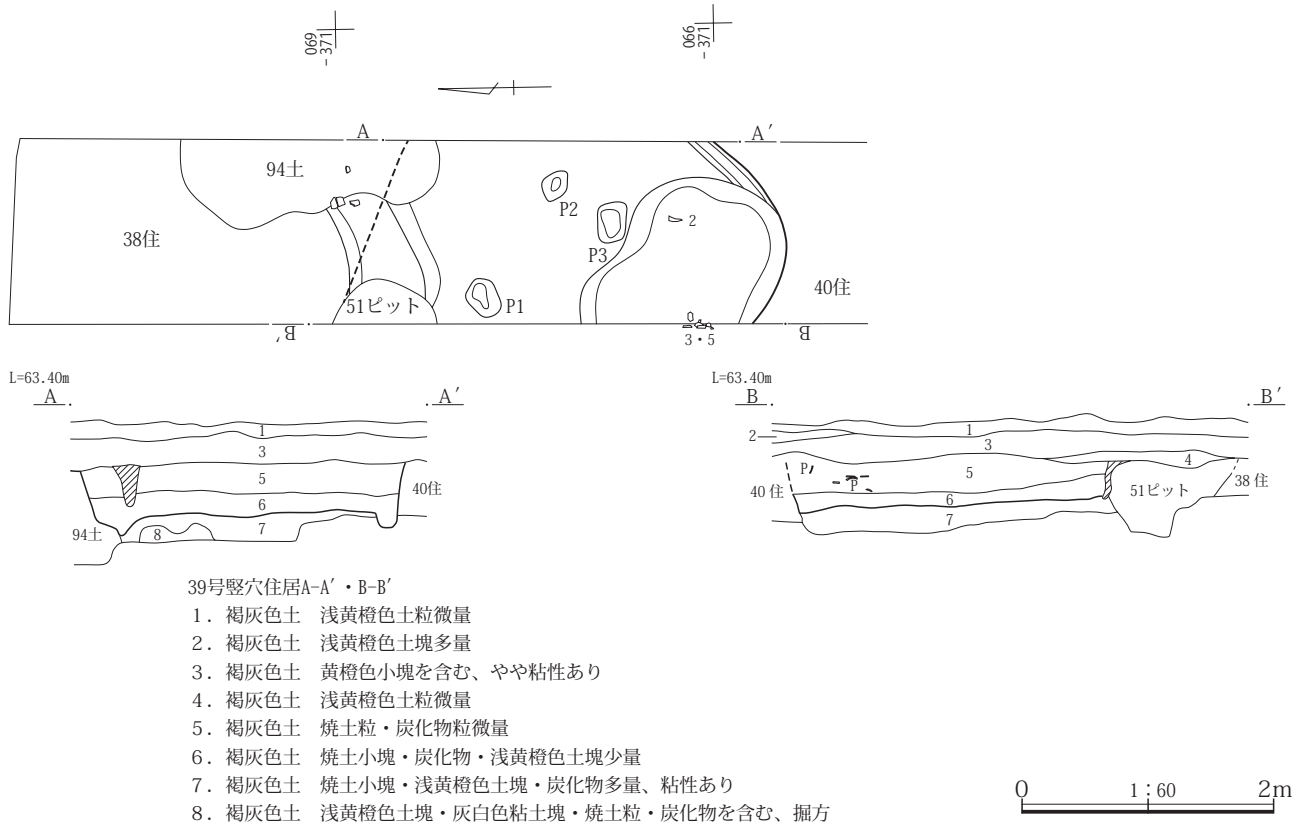
**埋没土：**埋没土は、焼土や浅黄橙色土粒を含む灰褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**周辺地域の水田耕作による出水によって遺構確認面の状態が悪化し、住居の床面については明瞭に確認することができず、掘り方まで掘り下げて調査を行った。土層断面を観察し、第4層の灰褐色土が、他の埋没土と比べ締まりが強いことから貼床の可能性はある。

**カマド・貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査及び掘り方調査を行ったが確認できなかった。

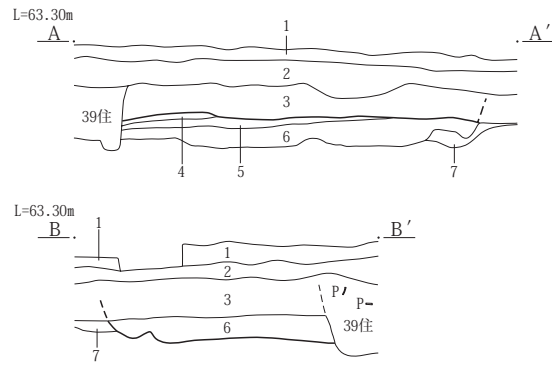
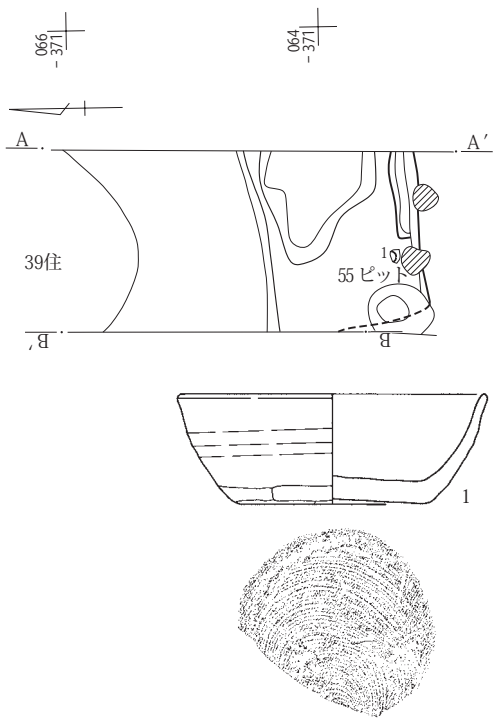
**掘り方：**壁際に比べ中央部分が1～2cm低く、大小土坑状に掘込む。全体的に10～25cm掘り窪め、床面を整えている。

3区39号竪穴住居



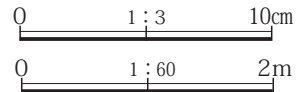
第169図 3区39号竪穴住居と出土遺物

3区40号竪穴住居



40号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 褐灰色土 浅黄橙色土粒・焼土粒微量
2. 褐灰色土 第1層より色味は暗い、粘性ややあり
3. 灰褐色土 焼土・浅黄橙色土粒を含む、粘性あり
4. 灰褐色土 焼土・浅黄橙色土粒少量、締まりあり
5. 灰褐色土 第4層に近似
6. 黒褐色土 焼土・浅黄橙色土粒・炭化物粒を含む
7. 明黄褐色土 浅黄橙色土塊・粒多量、黒褐色土を含む



第170図 3区40号竪穴住居と出土遺物

**遺物出土状態：**須恵器杯(第170図1)は床面直上から出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、8世紀第4四半期と考えられる。

3区41号竪穴住居(第171図 PL.56・121)

**位置：**X=051～053、Y=-372～373

**形状・規模：**他の遺構との重複や、調査区外の東側及び西側に広がるため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長1.88m、東西長1.55m、壁高北壁及び南壁7cmを測る。

**主軸方位：**南壁を主軸方位とするとN-82°-E

**重複：**88・89・90・93号土坑と重複する。41号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、黄橙色土粒、焼土粒、炭化物などを含む褐灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面を確認したが明瞭な硬化面は確認できなかった。

**床面：**北壁際に比べ南壁際に10cm低く、全体に大小ピット状の掘込みが認められる。住居の床面としたが、掘り方の可能性がある。

**カマド・貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが、確認できなかった。

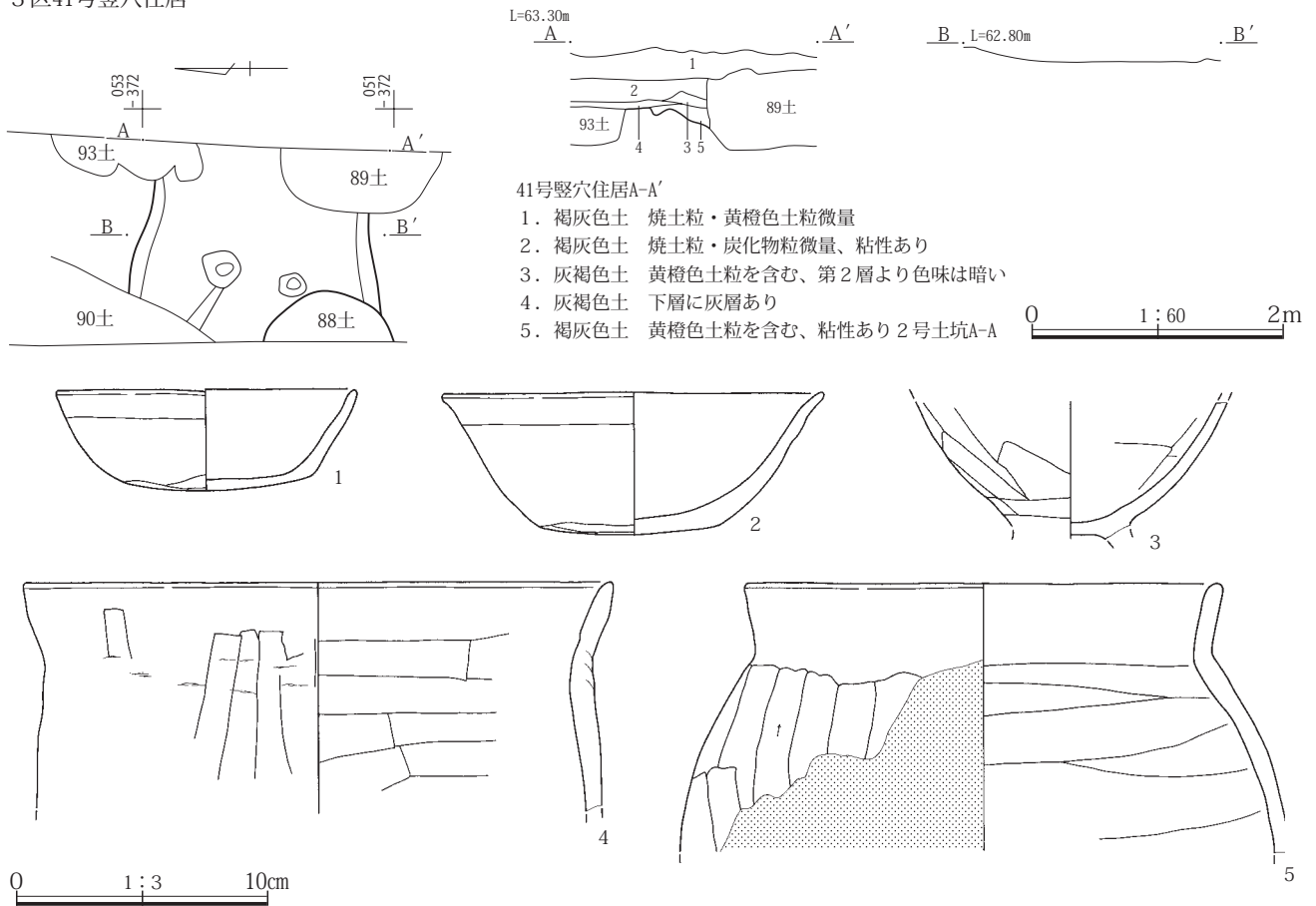
**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第171図1)、土師器椀(第171図2)、土師器台付甕(第171図3)、土師器甌か(第171図4)、土師器甕(第171図5)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器125点(大型製品95、小型製品30)、須恵器17点(大型製品6、小型製品11)、棒状礫1点が出土した。

**所見：**住居の内部施設は認められず、北壁と南壁で僅かな掘込みが認められたにすぎない。他の竪穴住居と比べ小規模であることなどから、竪穴状遺構の可能性もある。出土遺物から時期は、10世紀代と考えられる。



3区41号竪穴住居



第171図 3区41号竪穴住居と出土遺物

2 土坑・ピット

3区第2面では、土坑33基、ピット17基を調査した。調査区東部や南側に位置する3区拡張部に集中する。出土遺物がなく時期を特定できない土坑とピットについては埋没土などから判断し奈良・平安時代としたため、古墳時代や中世以降の土坑やピットが含まれている可能性もある。それぞれの土坑とピットは、第15表土坑計測表(378・379頁)及び第16表ピット計測表(380頁)において概略を記す。

3区2号土坑(第172図 PL.56・57)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり壁は斜めに立ち上がる。84号土坑、28・29号ピットと重複し、遺構確認状況から2号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土や黄褐色砂を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器4点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

3区4号土坑(第172図 PL.57・121)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦であり、壁は底部から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。8号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から4号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、黒褐色土と暗褐色土の混土であり、暗褐色土には炭化物や焼土粒が微量に含まれ、人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器高杯(第172図4土1)、土師器甕(第172図4土2)が埋没土から出土した。出土遺物から時期は、9世紀第4四半期と考えられる。

3区6号土坑(第172図 PL.40・57)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は底部から開口部にかけて垂直に立ち上がる。8号竪穴住居、5・7・8号土坑と重複する。6号土坑は、8号竪穴住居、7・8号土坑より新しく、5号土坑より古い。埋没土は、炭化物を含む黒褐色土と焼土粒や炭化物を含む暗褐色土による人為的

な埋戻しと考えられる。遺物は、須恵器杯(第172図6土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器27点(大型製品15、小型製品12)、須恵器4点(大型製品2、小型製品2)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀前半以降と考えられる。

### 3区7号土坑(第172図 PL.40・57)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁はやや袋状に掘込まれている。6・8・84号土坑と重複し、84号土坑より新しく、6・8号土坑より古い。埋没土は、暗褐色土と黒褐色土の混土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第172図7土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器5点(大型製品3、小型製品2)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀第4四半期から9世紀前半と考えられる。

### 3区8号土坑(第172図 PL.40・57)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁面はやや袋状に掘込まれている。6・7号土坑と重複し、7号土坑より新しく、6号土坑より古い。埋没土は、暗褐色土と褐灰色土の混土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器82点(大型製品71、小型製品11)、須恵器10点(大型製品3、小型製品7)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀第4四半期から9世紀前半と考えられる。

### 3区10号土坑(第173図 PL.40・57)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であるが、北側に比べ0.07m低い。壁はやや袋状に掘込まれている。8号竪穴住居、16号土坑と重複し、10号土坑が最も新しい。埋没土は、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土と黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第173図10土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器80点(大型製品53、中型製品2、小型製品25)、須恵器5点(大型製品2、小型製品3)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

### 3区13号土坑(第172図 PL.57)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は椀形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土粒、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器甕(第172図13土1・2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器16点(大型製品12、小型製品4)、須恵器6点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀後半と考えられる。

### 3区16号土坑(第173図 PL.40・57)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦である。8・15号竪穴住居、10・11・60号土坑と重複する。16号土坑は8・15号竪穴住居より新しく、10・11・60号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土塊、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品1、小型製品2)、須恵器4点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、9世紀代と考えられる。

### 3区20号土坑(第173図 PL.57)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が小ピット状に掘り窪められ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。33・34号土坑と重複し、20号土坑が最も新しい。埋没土は、暗褐色土、褐灰色土、黒褐色土、黄褐色土の互層となり、人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器不明(第173図20土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器7点(大型製品)、須恵器2点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀前半以降と考えられる。

### 3区21号土坑(第173図 PL.42・57)

第2面東側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面が平坦であり壁は垂直に立ち上がる。33・54・56号土坑と重複する。21号土坑は33・54号土坑より新しく、56号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器45点(大型製品26、小型製品19)、須恵器2点(小型製品)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。出土遺物や重複関係から時期は、9世紀後半以降と考えられる。

### 3区29号土坑(第174図 PL.58)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は、底面に凹凸が認められ壁は斜めに立ち上がる。4・5号竪穴住居、7号溝と重複する。29号土坑は、7号溝より古く、4・5号竪穴住居より新しい。埋没土は、黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器9点(大型製品6、小型製品3)が出土した。4・5号竪穴住居との重複から時期は、10世紀第1四半期以降と考えられる。

### 3区30号土坑(第173図 PL.58)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形で、底面の北側が南側に比べ約0.15m低い。21号竪穴住居、31号土坑と重複し、30号土坑が最も新しい。埋没土は、黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土や黒褐色土、明黄褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器19点、(大型製品18、小型製品1)、須恵器2点(大型製品)が出土した。出土遺物や他の遺構との重複から時期は、8世紀から9世紀と考えられる。

### 3区31号土坑(第173図 PL.58)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は、底面中央部が小ピット状に0.38m掘込まれ、壁は斜めに立ち上がる。21号竪穴住居、30号土坑と重複する。31号土坑は、21号竪穴住居より新しく、30号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土塊を含む暗褐色土や灰褐色土、褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器12点(大型製品)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀代と考えられる。

### 3区34号土坑(第173図 PL.58)

第2面中央部東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈する。7号竪穴住居、20・33号土坑と重複する。34号土坑は、7号竪穴住居と33号土坑より新しく、20号土坑より古い。埋没土は、褐灰色土と黒褐色土の混土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第173図34土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器15点(大型製品8、小型製品7)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀前半と考えられる。

### 3区35号土坑(第174図 PL.58)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形と想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。5・11号溝と重複し、35号土坑が最も古い。埋没土は、暗褐色土と黒褐色土の混土で黄褐色土塊を多量に含むことから人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品)、須恵器3点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

### 3区54号土坑(第174図 PL.42)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり壁は袋状に掘込まれている。21・55・56号土坑と重複する。54号土坑は、55号土坑より新しく、21・56号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土塊、焼土粒、炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第174図54土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器9点(大型製品7、小型製品2)、須恵器1点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

### 3区59号土坑(第174図 PL.43)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。24号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から59号土坑が新しいと考えられる。褐灰色砂質土塊や黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土とにぶい黄褐色砂質土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器7点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

### 3区67号土坑(第174図 PL.58)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁が袋状に掘込まれている。22・23号竪穴住居、68号土坑と重複し、67号土坑が最も新しい。埋没土は、焼土粒、炭化物、黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器68点(大型製品56、小型製品12)、須恵器10点(大型製品2、小型製品8)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀後半と考えられる。

**3区68号土坑(第174図 PL.58)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形と想定され、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。22・23号竪穴住居、67号土坑と重複し、22・23号竪穴住居より新しく67号土坑より古い。埋没土は、暗褐色土塊や黄褐色土塊、炭化物を含む黒褐色土や暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器45点(大型製品39、中型製品2、小型製品4)、須恵器11点(大型製品2、小型製品9)、灰釉陶器2点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀後半と考えられる。

**3区71号土坑(第174図 PL.58)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦で、壁が斜めに立ち上がる。24号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から71号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土塊や暗褐色土粒を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器10点(大型製品9、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、10世紀代と考えられる。

**3区72号土坑(第174図 PL.58)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦で、壁が垂直に立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土粒や褐灰色土粒、黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器41点(大型製品32、小型製品9)、須恵器4点(大型製品1、小型製品3)、灰釉陶器2点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

**3区75号土坑(第175図)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は腕形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土塊などを含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器15点(大型製品10、小型製品5)、須恵器3点(大型製品2、小型製品1)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀代と考えられる。

**3区76号土坑(第175図 PL.58・121)**

第2面東側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は底面が平坦で、壁が斜めや垂直に立ち上がる。66号土坑と重複し、遺構確認状況から76号土坑が古い。埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土塊、炭化物を含む暗褐色土であり、底面全体に炭化物や焼土が認められ人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第175図76土1)、土師器小型壺(第175図76土2)、土師器台付甕(第175図76土3)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器79点(大型製品59、小型製品20)、須恵器13(大型製品3、小型製品10)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、平安時代と考えられる。

**3区82号土坑(第175図 PL.59)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、北壁はほぼ垂直に立ち上がる。26・27号竪穴住居と重複し、82号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、上層に焼土が認められ、ローム粒や灰などを含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、26・27号竪穴住居との重複から10世紀以降と考えられる。

**3区87号土坑(第175図 PL.59)**

第2面南側に位置する。土坑の南側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は楕円形と想定され、断面形状は底面が平坦で、壁が斜めに立ち上がる。91号土坑と重複し、87号土坑が新しい。埋没土は、浅黄橙色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

**3区88号土坑(第175図 PL.59)**

第2面拡張部に位置する。土坑の西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は楕円形と想定され、断面形状は底面が平坦で、壁がほぼ垂直に立ち上がる。41号竪穴住居と重複し、88号土坑が新しい。埋没土は、底面が黄橙色土塊を含む黒褐色土であり、上層にかけて黄橙色土塊を含む灰褐色土や浅黄褐色土粒を含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、41号竪穴住居との



重複から10世紀以降と考えられる。

### 3区89号土坑(第175図 PL.56・121)

第2面拡張部に位置する。調査区外の東側に広がるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は隅丸長方形と想定され、断面形状は底面がほぼ平坦であり、北壁は斜めに立ち上がり、南壁は袋状に掘込まれる。41号竪穴住居、92号土坑と重複し、89号土坑が新しい。埋没土は第1層に黄褐色土塊が多量に認められ、人為的な埋戻しと考えられる。第2～4層は黄橙色土粒や炭化物粒を含む灰褐色土や黒褐色土によって人為的に充填し、やや浅いが堆積状況などから井戸の様相を呈する。遺物は、砥石(第175図89土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、10世紀代と考えられる。

### 3区90号土坑(第175図 PL.59)

第2面拡張部に位置する。土坑の南西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は長方形と想定され、断面形状は台形を呈する。36・41号竪穴住居と重複し、90号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、黄橙色土塊を含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器10点(大型製品9、小型製品1)、須恵器1点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、41号竪穴住居との重複から10世紀以降と考えられる。

### 3区91号土坑(第175図 PL.59)

第2面拡張部に位置する。土坑の南側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は楕円形と想定され、断面形状は底面が平坦で、壁が斜めに立ち上がる。87・92号土坑と重複し、91号土坑が古い。埋没土は、浅黄橙色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区92号土坑(第175図 PL.59)

第2面拡張部に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形と想定され、断面形状は底面にやや凹凸が認められ、

89・91号土坑との重複のため壁面の立ち上がりは不明である。92号土坑は、89・91号土坑より古い。埋没土は、黄橙色土塊を少量に含む褐灰色土と灰褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区93号土坑(第176図 PL.59)

第2面拡張部に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は楕円形と想定され、平面形状は不定形で、断面形状は底面を小ピット状に掘り窪め、壁は斜めに立ち上がる。41号竪穴住居と重複し、93号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、焼土粒や炭化物、黄橙色土粒を含む褐灰色による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、41号竪穴住居との重複から10世紀以降と考えられる。

### 3区95号土坑(第176図 PL.59)

第2面拡張部に位置する。土坑の北側及び西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、焼土粒や炭化物粒などを含む褐灰色土や黒褐色土の混土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区96号土坑(第176図)

第2面拡張部に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形と想定され、断面形状は底面が平坦で、壁が斜めに立ち上がる。底面を小ピット状に掘り窪める。36号竪穴住居と重複し、96号土坑が新しい。埋没土は、自然埋没か人為的な埋め戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。



**3区5号ピット(第176図 PL.59)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は台形を呈する。11号溝と重複し、遺構確認状況から5号ピットが古いと考えられる。埋没土は、灰黄褐色土小塊や焼土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。第1層が柱痕の可能性ある。遺物は、土師器杯(第176図5ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀後半と考えられる。

**3区6号ピット(第176図 PL.60)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であるが、壁面に中段を設けている。11号溝と重複し、遺構確認状況から6号ピットが古いと考えられる。埋没土は、暗褐色土や灰黄褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

**3区7号ピット(第176図 PL.60)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は腕形を呈する。18号竪穴住居と重複し、7号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、灰黄褐色土塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。柱痕は確認できなかった。非掲載遺物は、土師器1点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、8世紀代と考えられる。

**3区8号ピット(第176図 PL.60)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁に中段を設け開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。5号溝と重複し、遺構確認状況から8号ピットが古いと考えられる。埋没土は、灰黄褐色土粒や小塊を含む暗褐色土や黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。柱痕は確認できなかった。遺物は、須恵器碗(第176図8ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、灰釉陶器1点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀前半と考えられる。

**3区9号ピット(第176図 PL.60)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈する。6・7号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から9号ピットが新しいと考えられる。埋没土は、焼土粒や灰黄褐色土小塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。遺物は、土師器甕(第176図9ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器11点(大型製品5、小型製品6)が出土した。出土遺物から時期は、9世紀後半と考えられる。

**3区18号ピット(第176図 PL.60・121)**

第2面東側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は台形を呈する。17号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から18号ピットが新しい。埋没土は、焼土粒や灰白色土塊を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。遺物は、鉄製品不詳(第176図18ピット1・2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器7点(大型製品6、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、平安時代と考えられる。

**3区19号ピット(第177図 PL.60)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は腕形を呈する。14号溝と重複し、19号ピットが古いと考えられる。埋没土は、焼土粒や灰黄褐色土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。遺物は、須恵器碗(第177図19ピット1)が埋没土から出土した。出土遺物から時期は、9世紀後半と考えられる。

**3区42号ピット(第177図)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、にぶい橙色土粒を含む黒褐色土であり自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、8世紀代と考えられる。

### 3区45号ピット(第177図 PL.60)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦で、壁は斜めに立ち上がる。46・47号ピットと重複し、45号ピットが新しい。埋没土は、浅黄橙色土塊を含む黒褐色土であり底面に礫が認められる。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、土師器杯(第177図45ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器2点(小型製品)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、8世紀前半と考えられる。

### 3区46号ピット(第177図 PL.60)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。45・47・49号ピットと重複する。46号ピットは45号ピットより古く、47・49号ピットより新しい。埋没土は、浅黄橙色土小塊を含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区47号ピット(第177図)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦で、壁は斜めに立ち上がる。36号竪穴住居、45・46・48号ピットと重複する。47号ピットは45・46号ピットより古く、36号竪穴住居と48号ピットより新しい。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区48号ピット(第177図)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。36号竪穴住居、47号ピットと重複する。48号ピットは36号竪穴住居より新しく、47号ピットより古い。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区50号ピット(第177図)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は中央部が深く掘込まれ、壁に中段を設けほぼ垂直に立ち上がる。35・36号竪穴住居と重複し、遺構確

認状況から50号ピットが新しいと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区51号ピット(第177図)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は南壁より北壁が緩やかに立ち上がる。38・39号竪穴住居と重複し、51号ピットが新しい。埋没土は、浅黄橙色土粒・塊、焼土粒、炭化物を含む黒褐色土や褐灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器11点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、39号竪穴住居との重複から時期は、8世紀第4四半期以降と考えられる。

### 3区53号ピット(第177図)

第2面拡張部に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。37号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から53号ピットが新しい。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

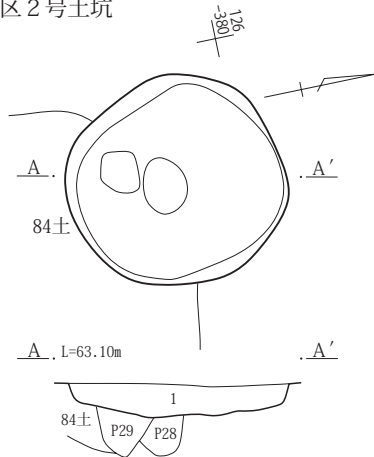
### 3区54号ピット(第177図)

3区第2面拡張部に位置する。平面形状は方形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。36号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から54号ピットが新しい。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から平安時代と考えられる。

### 3区55号ピット(第177図)

3区第2面拡張部に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面が平坦で、開口部にかけて斜めに立ち上がる。40号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から55号ピットが新しい。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、40号竪穴住居との重複から8世紀第4四半期以降と考えられる。

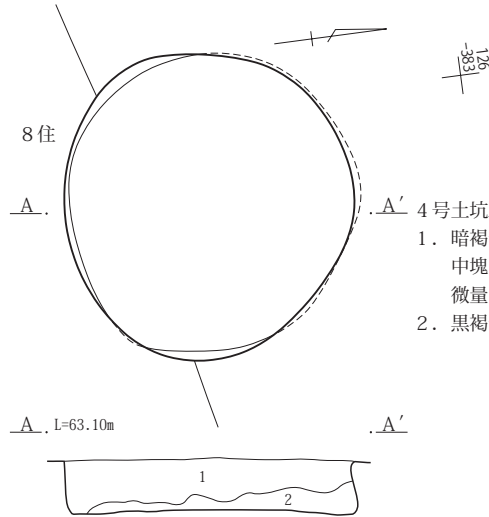
3区2号土坑



2号土坑A-A'

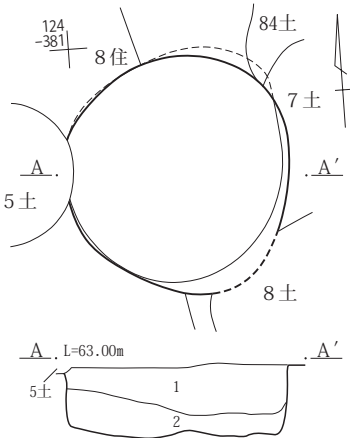
1. 暗褐色土 炭化物・黄褐色土小塊少量、黄褐砂(洪水層)微量、粘性ややあり、締まりあり

3区4号土坑



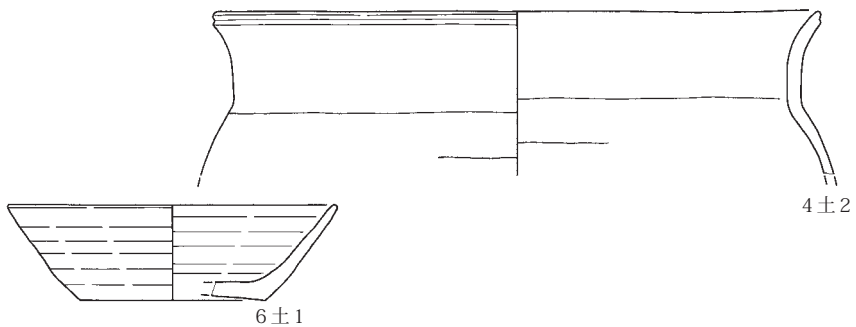
- 4号土坑A-A'
1. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土中塊を斑に含む、焼土粒・炭化物微量、粘性ややあり、締まりあり
  2. 黒褐色土 粘性ややあり

3区6号土坑

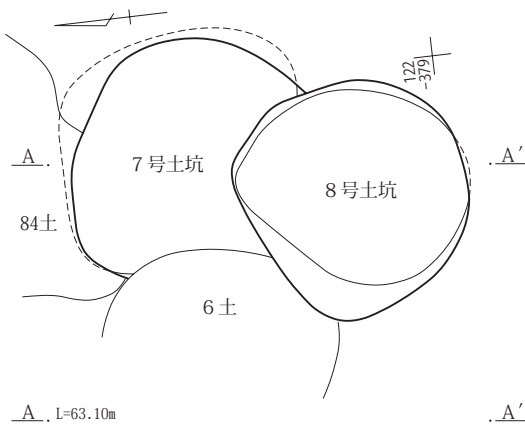


6号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊を含む、焼土粒・炭化物微量、粘性ややあり、締まりあり
2. 黒褐色土 黄褐色小塊、炭化物微量、第1層より締まり弱



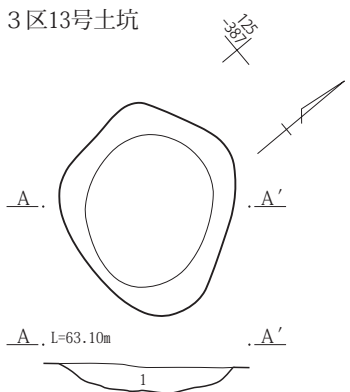
3区7・8号土坑



7号・8号土坑A-A'

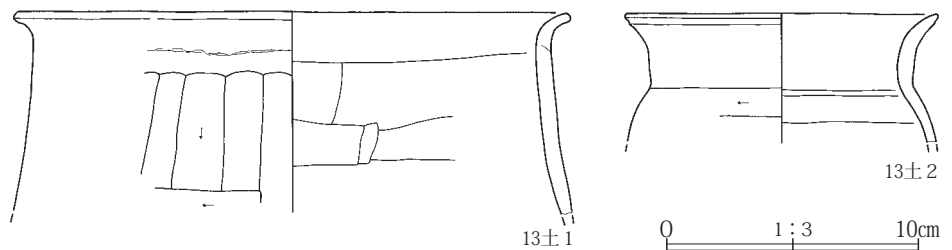
1. 暗褐色土 黄褐色土中塊少量、締まりあり
2. 褐灰色土 砂質土、色味は暗い、焼土粒微量、締まりなし
3. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、締まりあり
4. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量
5. 褐灰色土 締まり非常にあり
6. 暗褐色土 黄褐色土中塊多量、褐灰色土小塊少量
7. 黒褐色土 黄褐色土中塊少量
8. 暗褐色土 黄褐色土中塊・黒褐色土粒少量
9. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量
10. 黒褐色土 黄褐色土小塊微量
11. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量

3区13号土坑



13号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物微量、粘性ややあり、締まりやや弱

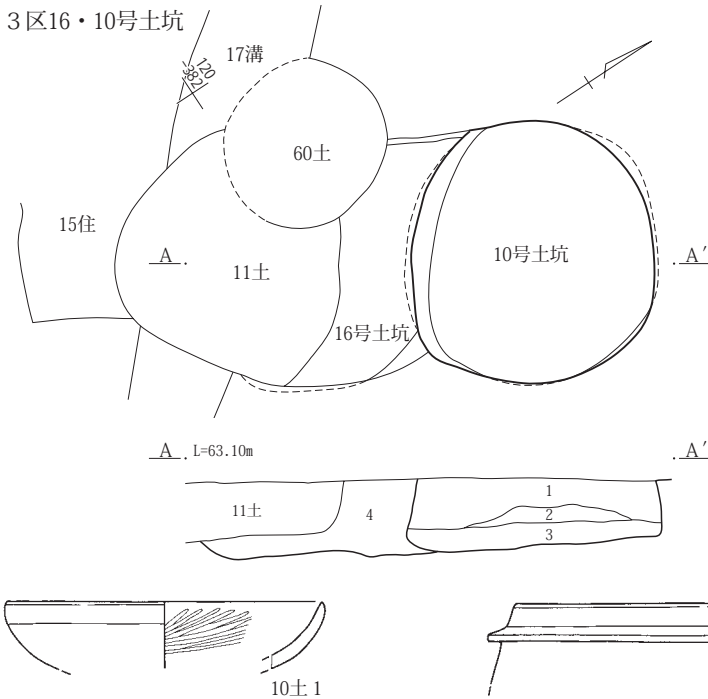


0 1:40 1m

0 1:3 10cm

第172図 3区2号土坑・4・6・7号土坑と出土遺物・8号土坑・13号土坑と出土遺物

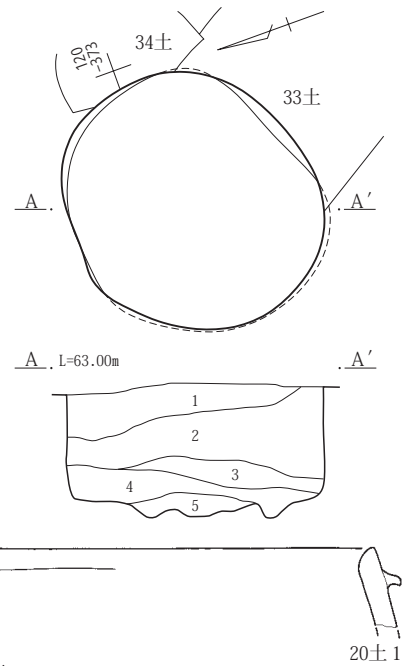
3区16・10号土坑



10号・16号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、焼土粒・炭化物・灰白色粘質土塊微量、縮まりあり
2. 黒褐色土 やや砂質
3. 暗褐色土 黄褐色土極小塊少量、炭化物微量
4. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、黒褐色土小塊・炭化物微量

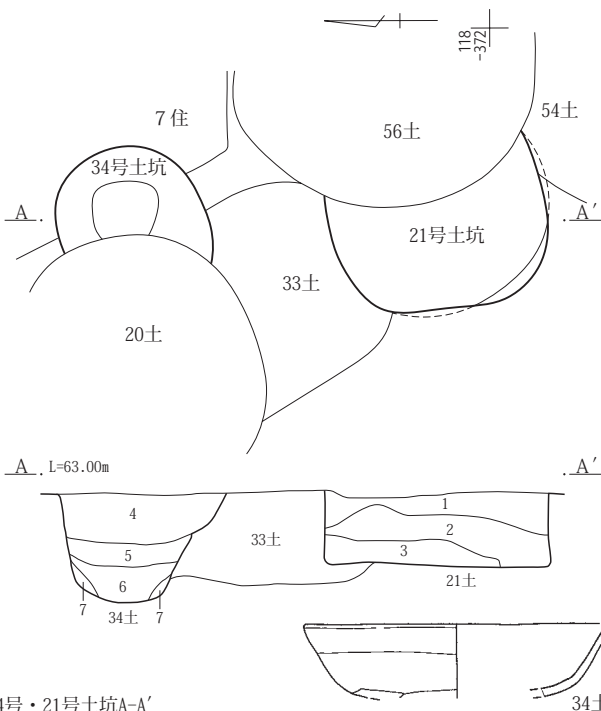
3区20号土坑



20号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊多量、炭化物微量、縮まり強
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、第1層より塊少ない、縮まりあり
3. 褐灰色土 やや砂質、黄褐色土小塊・灰白色砂質土小塊微量、縮まりあり
4. 黒褐色土 粘質土、黄褐色土小塊少量、縮まりなし
5. 黄褐色土大塊と黒褐色土の混土、縮まりあり

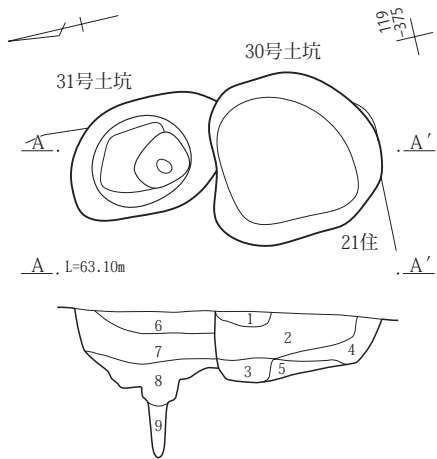
3区34・21号土坑



34号・21号土坑A-A'

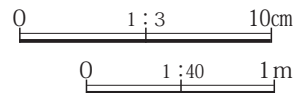
1. 暗褐色土 黄褐色土中塊多量、炭化物微量
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、やや砂質
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、炭化物微量
4. 黒褐色土 黄褐色土小塊少量、焼土粒・炭化物微量、粘性あり
5. 黒褐色土 第1層より黄褐色土中塊多量
6. 黒褐色土 黄褐色土小塊、黄褐色土中塊微量、粘性あり、縮まりあり
7. 褐灰色土 黄褐色土粒少量、縮まりなし

3区31・30号土坑



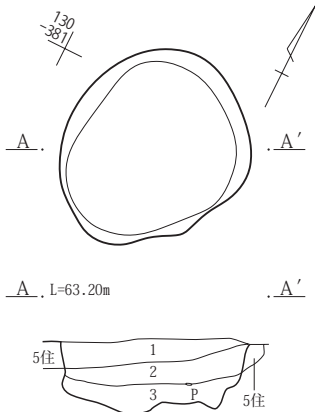
30号・31号土坑A-A'

1. 暗褐色土 灰白色砂質土少量、縮まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、黒褐色土小塊少量
3. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、黒褐色土大塊を含む
4. 黒褐色土 黄褐色土中塊少量、焼土粒微量
5. 明黄褐色土 黒褐色土小塊少量
6. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、黒褐色土極小塊少量、炭化物微量
7. 灰褐色土 色味は暗い、黄褐色土中塊多量、黒褐色土小塊少量
8. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、炭化物微量
9. 褐灰色土 黒褐色土大塊少量、粘性強



第173図 3区10号土坑と出土遺物・16号土坑・20号土坑と出土遺物・21・30・31号土坑・34号土坑と出土遺物

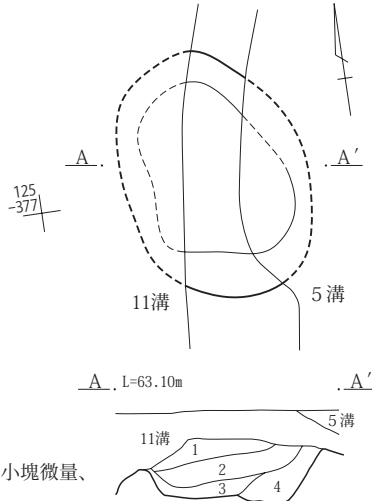
3区29号土坑



29号土坑A-A'

1. 暗褐色土 砂質土多量、黄褐色土極小塊微量、As-Aを含む、縮まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土極小塊多量、焼土粒・炭化物微量
3. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒色土小塊多量

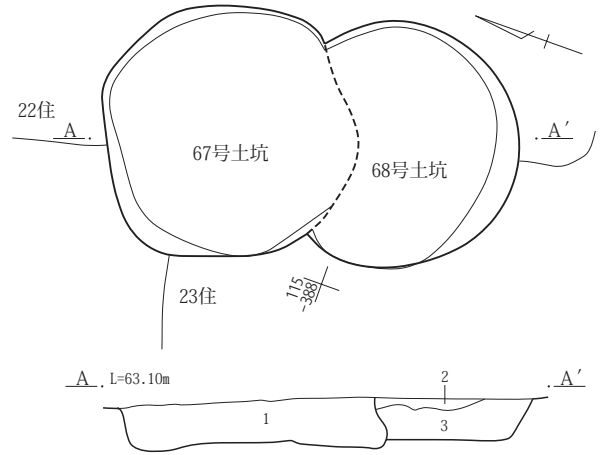
3区35号土坑



35号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊・黒褐色土小塊少量、縮まり強
2. 黒褐色土 黄褐色土小塊・黒褐色土小塊多量
3. 暗褐色土 粘質土、黄褐色土小塊少量
4. 黒褐色土 黄褐色土中塊多量

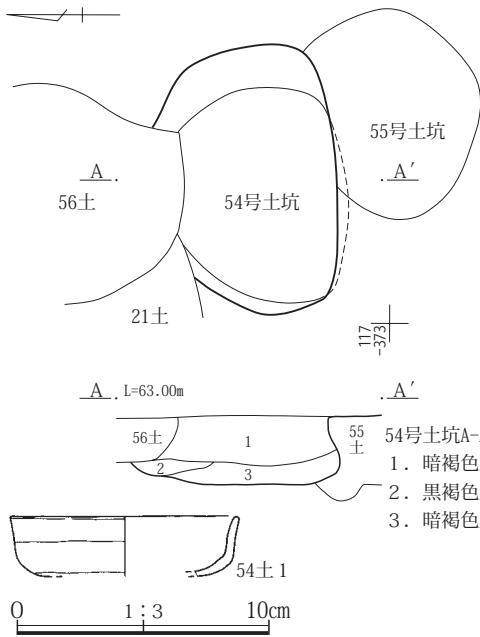
3区67・68号土坑



67・68号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土大塊少量、焼土粒・炭化物微量
2. 暗褐色土 砂質土、黄褐色土粒少量
3. 黒褐色土 暗褐色土小塊少量、黄褐色土小塊・炭化物微量、縮まり強

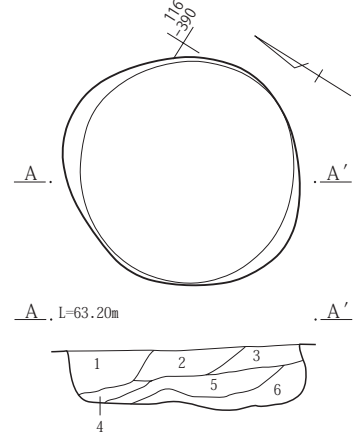
3区54号土坑



54号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、縮まり強
2. 黒褐色土 黄褐色土極小塊微量、縮まり強
3. 暗褐色土 黄褐色土中塊多量、縮まり強

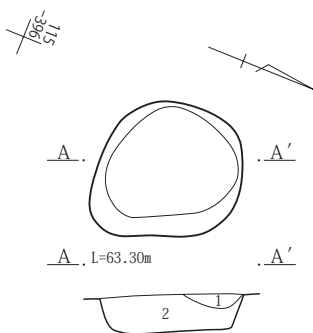
3区72号土坑



72号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒褐色土小塊やや多量
2. 暗褐色土 砂質土、褐灰色土粒多量、黄褐色土粒少量
3. 暗褐色土 砂質土、黄褐色土粒、褐灰色土粒やや多量
4. 暗褐色土 砂質土、縮まりあり
5. 暗褐色土 黄褐色土中塊・黄褐色土粒多量、やや砂質
6. 暗褐色土 砂質土、黄褐色土極小塊多量

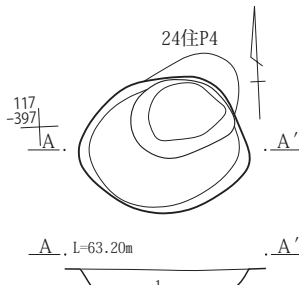
3区59号土坑



69号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 砂質土
2. 暗褐色土 灰褐色砂質土小塊、黄褐色土中塊やや多量、やや粘性あり

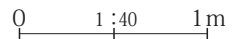
3区71号土坑



71号土坑A-A'

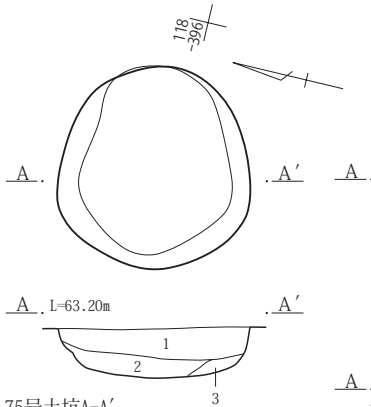
1. 黒褐色土 砂質土、暗褐色土粒多量、黄褐色土小塊微量

第174図 3区29・35・54号土坑と出土遺物・59・67・68・71・72号土坑





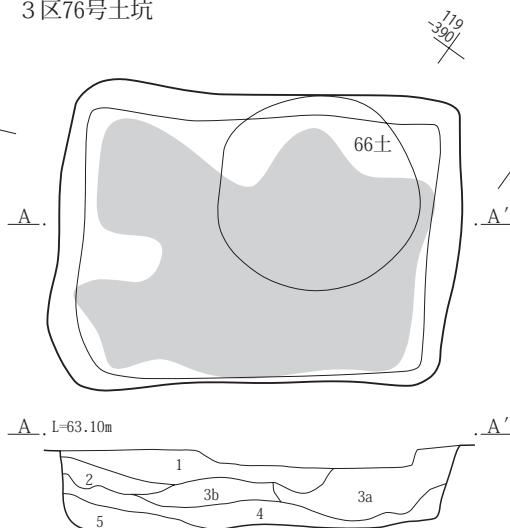
3区75号土坑



75号土坑A-A'

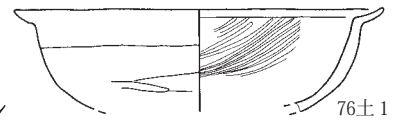
1. 暗褐色土 黄褐色土極小塊、黄褐色土粒少量、粘性あり
2. 暗褐色土 黒褐色土小塊、黄褐色土粒少量、第1層より色味は暗い
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊、黄褐色土粒多量

3区76号土坑

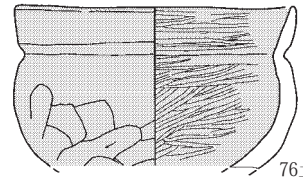


76号土坑A-A'

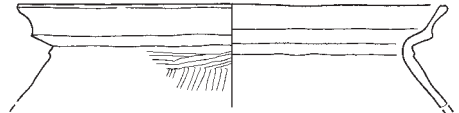
1. 暗褐色土 黄褐色土粒、黄褐色土塊少量、炭化物微量、縮まり弱
2. 暗褐色土 炭化物多量



76土1



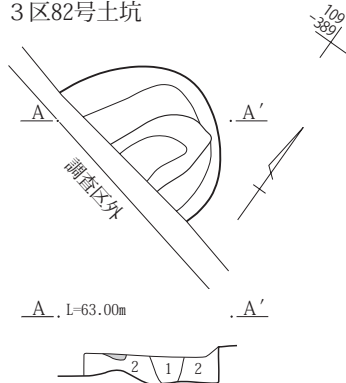
76土2



76土3

- 3 a. 暗褐色土 黄褐色土塊・黒褐色土塊多量
- 3 b. 3 a層に近似 暗褐色土塊と黒色土塊の混土
4. 暗褐色土 黒褐色土塊多量、黄褐色土極小塊少量、縮まりあり
5. 暗褐色土 焼土粒多量、黄褐色土粒・黄褐色土極小塊少量、上層より色味は明るい、縮まりあり

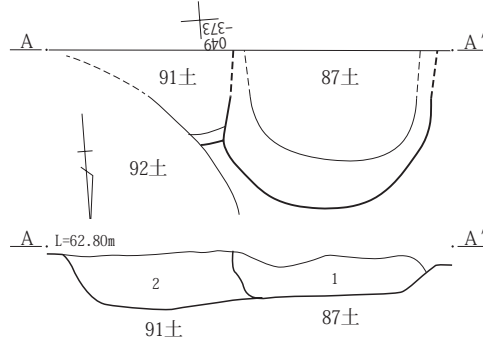
3区82号土坑



82号土坑A-A'

1. 暗褐色土 灰極小塊5%、ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり
2. 暗褐色土 ローム中粒5%、粘性あり、縮まりあり

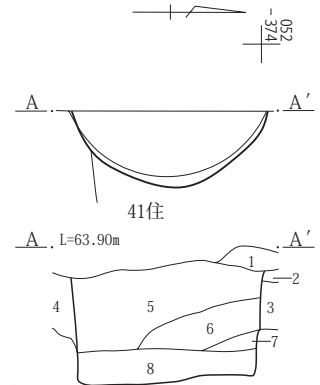
3区91・87号土坑



91・87号土坑A-A'

1. 黒褐色土 浅黄橙色土塊を均一に含む
2. 黒褐色土 浅黄橙色土塊を含む

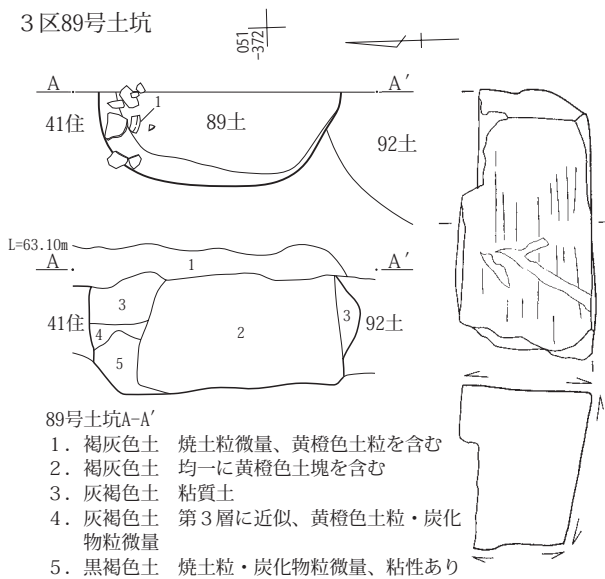
3区88号土坑



88号土坑A-A'

1. 褐灰色土 やや砂質
2. 褐灰色土 浅黄橙色土粒を含む
3. 灰褐色土 粘質土、焼土粒微量
4. 灰褐色土 黄橙色土塊は第5~8層より大きい
5. 灰褐色土 黄橙色土塊を斑に含む
6. 灰褐色土 均一に黄橙色土塊を含む
7. 灰褐色土 均一に黄橙色土塊を含む、縮まりあり
8. 黒褐色土 均一に黄橙色土塊を含む

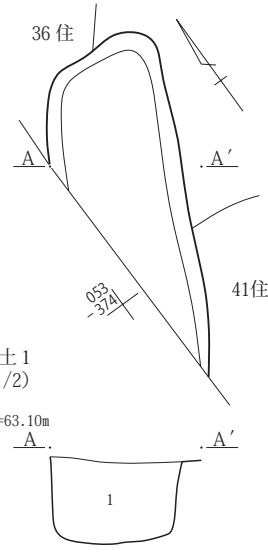
3区89号土坑



89号土坑A-A'

1. 褐灰色土 焼土粒微量、黄橙色土粒を含む
2. 褐灰色土 均一に黄橙色土塊を含む
3. 灰褐色土 粘質土
4. 灰褐色土 第3層に近似、黄橙色土粒・炭化物粒微量
5. 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒微量、粘性あり

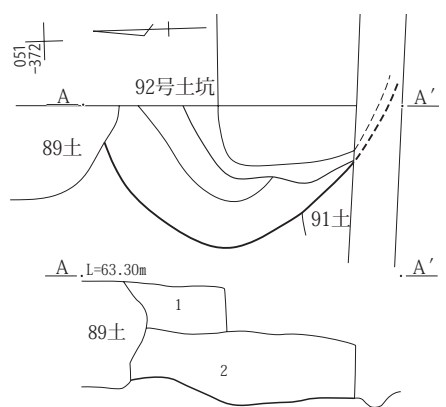
3区90号土坑



90号土坑A-A'

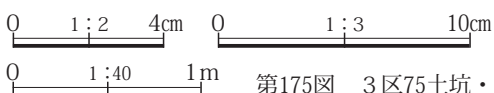
1. 褐灰色土 黄橙色土塊多量

3区92号土坑



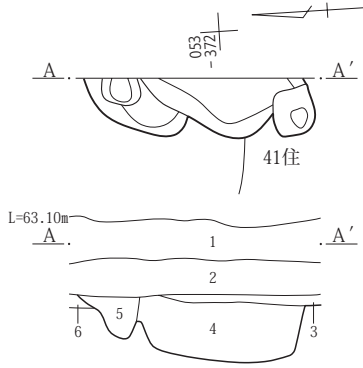
92号土坑A-A'

1. 褐灰色土 均一に黄橙色土塊を含む
2. 褐灰色土 第1層より黄橙色土塊少量



第175図 3区75号土坑・76号土坑と出土遺物・82・87・88号土坑・89号土坑と出土遺物・90～92号土坑

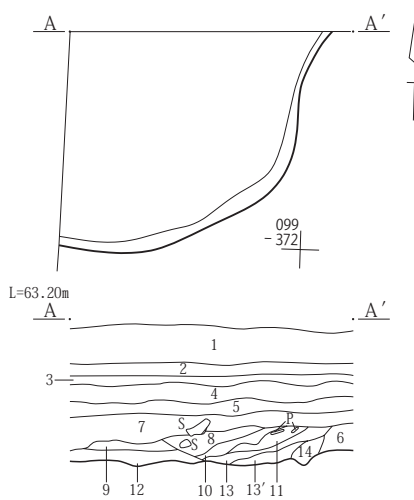
3区93号土坑



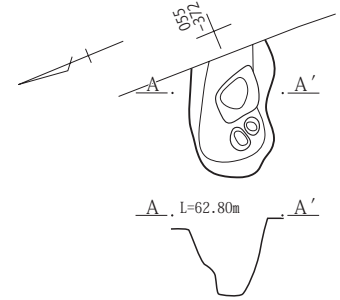
93号土坑A-A'

1. 褐灰色土 焼土粒微量、黄橙色土粒を含む
2. 褐灰色土 焼土粒・炭化物粒少量、粘性あり
3. 褐灰色土 下部に灰層を含む
4. 褐灰色土 黄橙色小塊多量、黒褐色土塊少量
5. 褐灰色土 黄橙色土粒を含む、粘性あり
6. 黒褐色土 焼土粒・灰白色粘土塊を含む

3区95号土坑



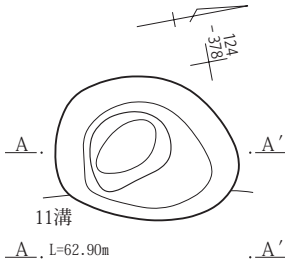
3区96号土坑



95号土坑A-A'

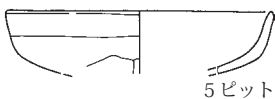
1. にぶい橙色土 やや砂質気味だが締まる
2. 明褐灰色土 やや粘質で締まる
3. にぶい橙色土と褐灰色土の混土
4. 褐灰色土 粘質を帯びる
5. 灰褐色土 As-B混土層
6. 黒褐色土 粘質あり、にぶい橙色塊少量
7. 褐灰色土 にぶい橙色粒少量、小塊を含む
8. 黒褐色土 礫を含む
9. 褐灰色土 明褐灰色粘質土塊少量
10. 黒色土 第8層に近似、色味はやや暗い
11. 褐灰色土 粘質土、土器片と焼土粒を含む
12. 黒褐色土 全体に締まる、白色粒を含む、床面か
13. 褐灰色土 焼土塊・炭化物粒を含む
- 13'. 褐灰色土 黒褐色土・粘質土を含む
14. 黒褐色土 全体に締まる、白色粒を含む

3区5号ピット



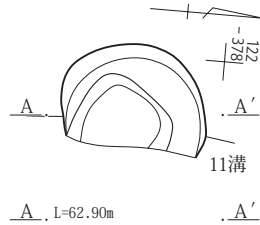
5号ピットA-A'

1. 暗褐色土 灰黄褐色土小塊・焼土粒少量
2. 暗褐色土 灰黄褐色土塊を含む



5ピット1

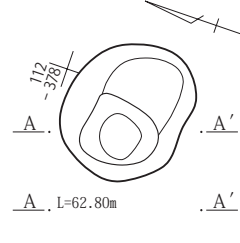
3区6号ピット



6号ピットA-A'

1. 暗褐色土 焼土粒少量
2. 暗褐色土と灰黄褐色土の混土

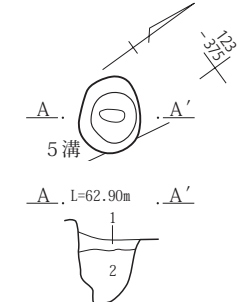
3区7号ピット



7号ピットA-A'

1. 暗褐色土 灰黄褐色土小塊少量
2. 暗褐色土 灰黄褐色土小塊多量

3区8号ピット

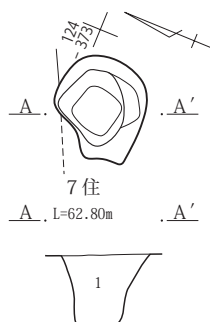


8号ピットA-A'

1. 暗褐色土 灰黄褐色土小塊少量
2. 黒褐色土 灰黄褐色土・粒少量

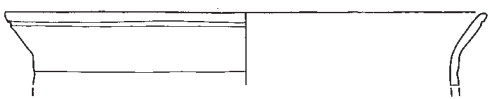
3区18号ピット

3区9号ピット



9号ピットA-A'

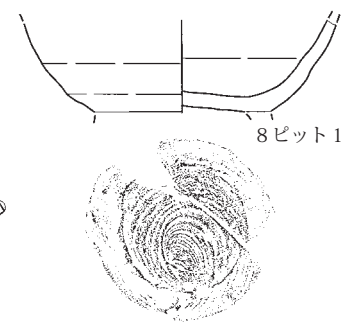
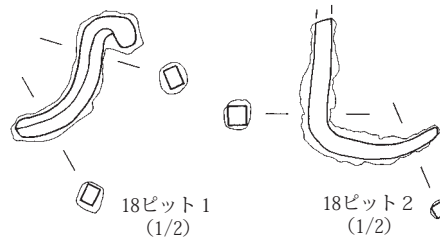
1. 暗褐色土 焼土粒少量、灰黄褐色土小塊を含む



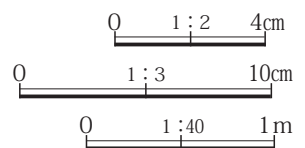
9ピット1

18号ピットA-A'

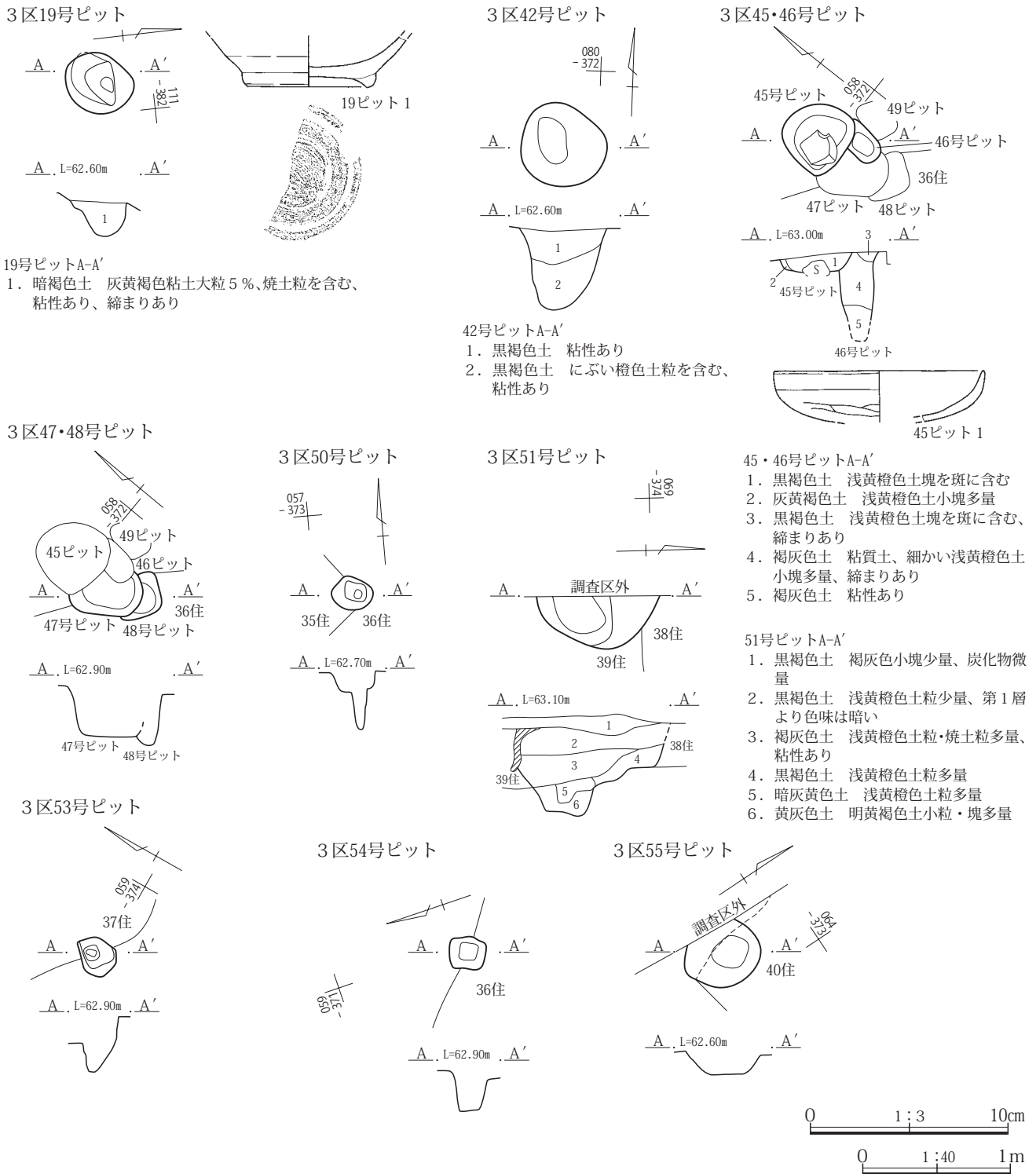
1. 黒褐色土 焼土粒少量、灰白色土小塊を含む
2. 黒褐色土 焼土粒少量、締まりなし



8ピット1



第176図 3区93・95・96号土坑、5号ピットと出土遺物・6・7号ピット・8・9・18号ピットと出土遺物



第177図 3区19号ピットと出土遺物・42号ピット・45号ピットと出土遺物・46～48・50・51・53～55号ピット

### 3 溝

3区第2面では、溝1条を調査した。溝は、調査区東側から確認された。第2面では古墳時代から平安時代の遺構も確認され、各時期の遺構が混在する状況である。溝からの出土遺物が少なく、明確な時期を特定できない。

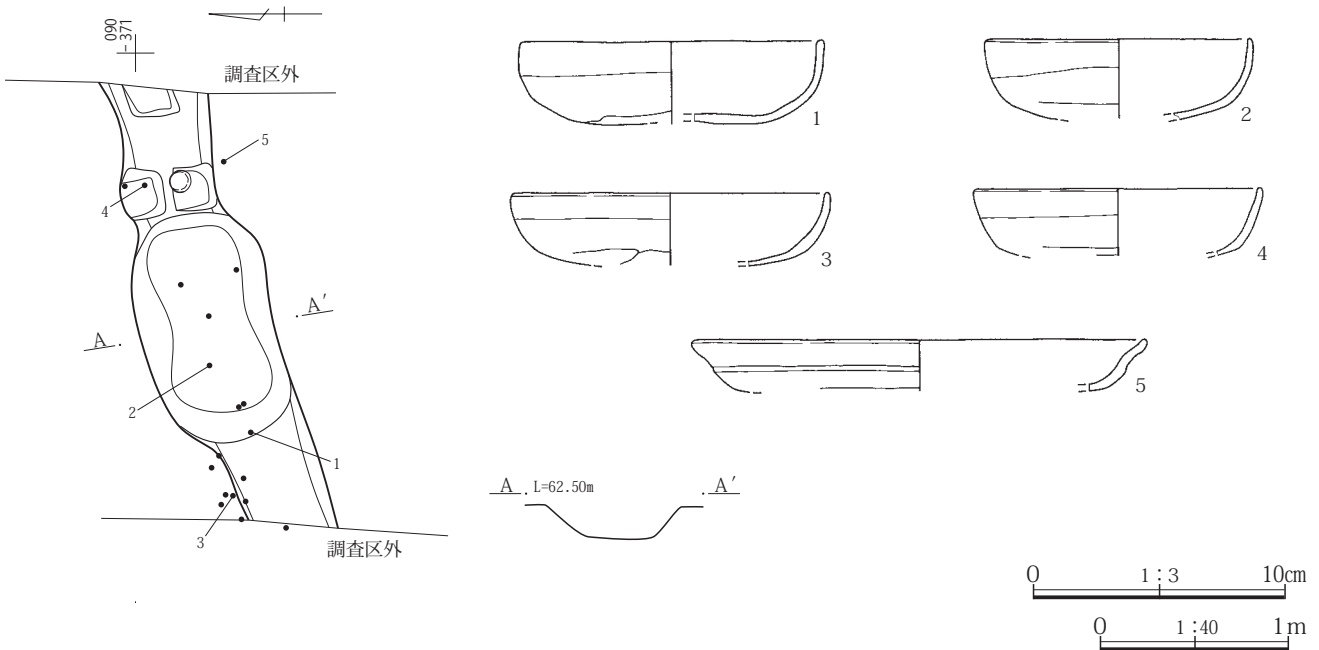
### 3区19号溝(第178図 PL.60・121)

第2面拡張部のX=088～090、Y=-371～373に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。重複する遺構はない。確認できる規模は、長さ2.42m、幅0.47～0.72m、深さ0.05～0.25mを測る。走行方向

は、N-70° -Eである。東端と西端の比高0.07mであり、僅かな高低差は認められるが、西側から東側にかけて流れていたと想定され、勾配は2.89%である。断面形状は台形を呈する。底面には大小ピット状の掘込みが認められる。遺物は、土師器杯(第178図1～4)が底面上2～

32cmから、土師器皿(第178図5)が底面上6cmから出土した。非掲載遺物は、土師器30点(大型製品18、小型製品12)、須恵器1点(小型製品)である。出土遺物から時期は、9世紀前半と考えられる。

3区19号溝



第178図 3区19号溝と出土遺物

#### 4 水田

3区第2面では、平安時代の水田を調査した。3区第2面中央及び西側調査区の低地に位置する。3区東側の微高地では平安時代の竪穴住居群を確認していることから、3区水田がこの住居群の生産域と考えられる。

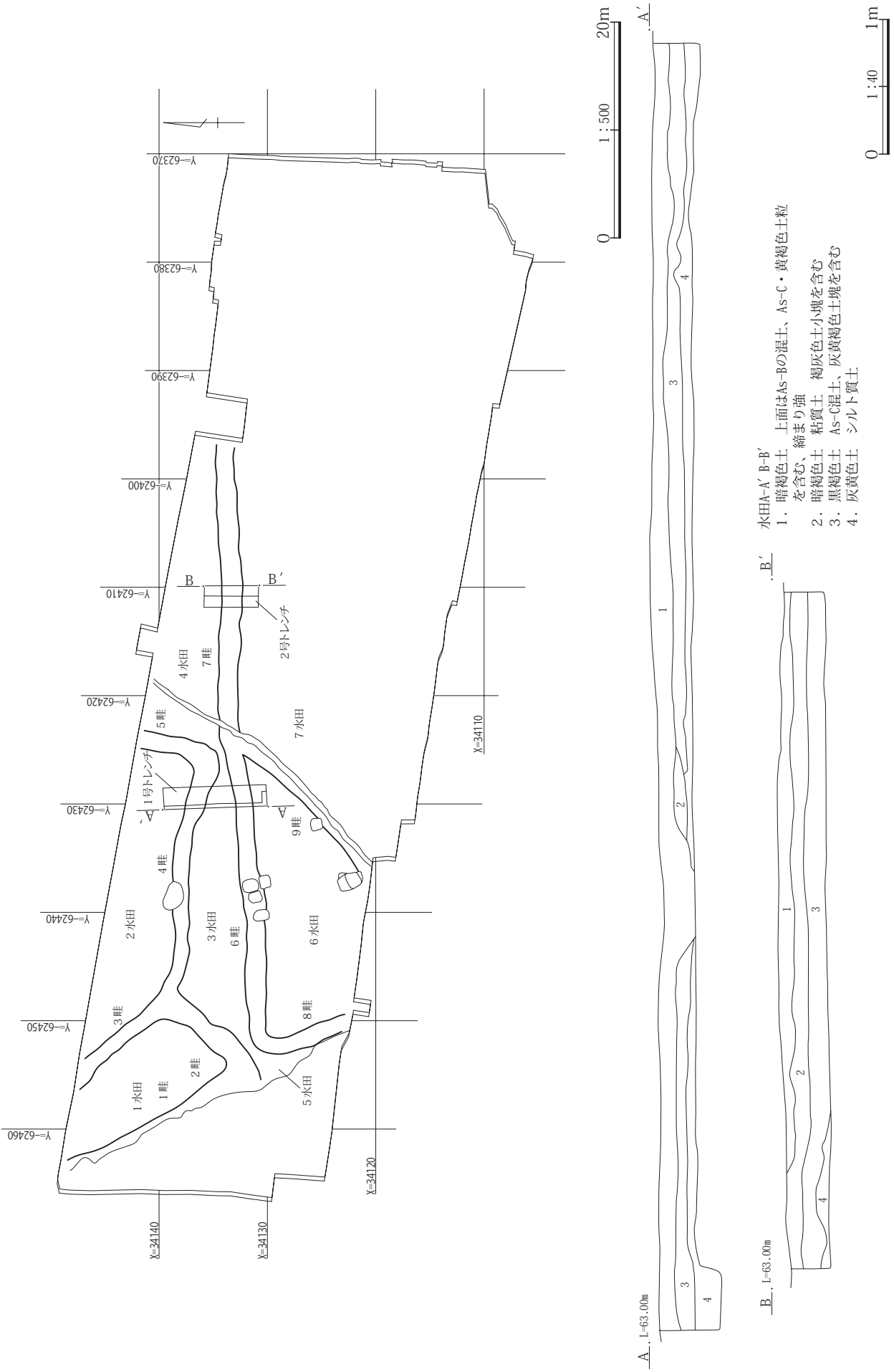
##### 第2面水田(第179図 PL.61)

第2面で水田を調査した。3区で確認した水田は、第3章で述べた旧河道の矢川左岸となる調査区西側に位置する。遺構確認面では、南北方向や東西方向の他、北西から南東、北東から南西に走行する幅約1～2mの帯状の僅かな高まりが認められた。遺存状況はあまり良好ではなく、遺構確認状況から水田施設の畦と考えられるが、確認できた各畦の方向を比べると規則性があまりなく判然としない。東西及び南北方向などの畦によって区画さ

れた水田は7ヶ所となり、西側から東側、北側から南側にかけて便宜的に1～7号水田と名称を付けた。それぞれの水田を区画する畦はあわせて9条であった。水田及び畦の位置については、第179図を参照されたい。

第2面の水田は、旧河道38～42・49・50号土坑、6号井戸と重複し、水田が古いと考えられる。矢川との重複や調査区の北側や南側に水田がさらに広がるため、全体の規模は不明である。確認できた1～9号畦の規模及び主軸方位は、以下のとおりである。

1号畦の幅0.37～1.95m、高さ0.01m、主軸方位N-29° -E、2号畦の幅1.58～2.40m、高さ0.03～0.05m、主軸方位N-47° -W、3号畦の幅1.28～1.52m、高さ0.01～0.02m、主軸方位N-39° -W、4号畦の幅1.09～1.82m、高さ0.01～0.02m、主軸方位N-83° -W、5号畦の幅1.50～1.64m、高さ0.02～0.03m、主軸方位N-12° -E、6号畦の幅1.49～1.99m、高さ0.01～0.02m、主軸方位



第179図 3区第2面水田



N-94° -W、7号畦の幅1.73～2.08m、高さ0.01～0.02m、主軸方位N-90°、8号畦の幅1.42～1.55m、高さ0.01～0.02m、主軸方位N-21° -Wである。9号畦は、13号溝との重複のため全体の規模は不明であり、確認できる幅0.54～1.15m、高さ0.01～0.06m、主軸方位N-46° -Eである。旧河道との重複のため1号畦の幅はやや狭く、概ね1.0～2.0mの規模となる。高さは0.01～0.05mであり、残存状況から休耕田の可能性もある。6・7号畦は、ほぼ東西方向に走行している。

1～7号水田の形状や規模、各水田との標高差などを比較すると、以下のとおりである。

1号水田は、1～3号畦で区画された水田である。北東から南西の幅は5.70～7.60mであり、平面形状は長方形か。標高は、北側62.96m、南側62.93mであり、南側が僅かに低い。2号水田は、3～5号畦で区画された水田である。標高は、西側62.95～92.97m、東側62.94mであり、西側にかけて緩やかに傾斜する。1号水田との比高0.01mである。3号水田は、2・4・6号畦で区画された水田で、平面形状は台形を呈する。標高は、北側62.89～62.93m、南側62.88～62.92mであり、南側が僅かに低い。1号水田との比高0.01m、2号水田との比高0.01～0.05mで、3号水田が僅かであるが低い。2号畦と6号畦、4号畦と6号畦が繋がらず、間隔を持つことから水口として4号水田から3号水田、5号水田へと給排水を行っていた可能性も考えられる。4号水田は、5・7号畦で区画された水田である。標高は、東側62.92m、西側62.86～62.92mとなり、僅かであるが東側が低く、南北間のレベル差も少なくほぼ平坦である。2号水田との比高0.01～0.05mで4号水田が僅かに低い。5号水田は、8号畦の西側に位置し、旧河道との重複のため確認できた範囲が一部のみである。標高は、62.89mである。1号水田との比高0.04mで、5号水田が低い。6号水田は、6・8・9号畦で区画された水田である。平面形状は台形或いは三角形を呈すると想定される。標高は、北側62.86～62.91m、南側62.87～62.94mとなり、北側から南側にかけて緩やかに傾斜する。3号水田との比高0.01mで6号水田が僅かに低い。7号水田は、7・9号畦で区画された水田である。標高は、北側62.93～62.96m、南側62.86～62.91mとなり、7号水田の南西部が確認できた水田の中で最も低い。4号水田との比高0.02～0.04m、6号水

田との比高0.05mであり7号水田が低い。調査区東側の水田の範囲については、遺構確認面を精査したが畦の高まりは不明瞭であり確認できなかった。4・6号畦と7号畦にトレンチを設定し土層断面を確認した。水田耕土である上層はAs-B混土であり、As-Cや黄褐色土粒を含む。畦の僅かな高まりは認められるが、畦と下層との区別は困難であった。

3区の水田の給水源については、調査区外となる北側にあると想定される。畦に付設した水口や溝などの施設を特に確認できなかったが、水田の標高などから判断し、北側から南側及び南西側にかけて給排水を行っていたと考えられる。

農作業に伴う耕作痕については、水田の確認面で大小の窪みが全体的に認められた。連続する窪みとならないことから、人力による鋤先や鍬先の痕などが想定される。

3区の水田東側から4区にかけて微高地となり、平安時代の住居が複数軒確認された。この微高地に住居群を形成し、3区で確認した水田が生産域となると考えられる。

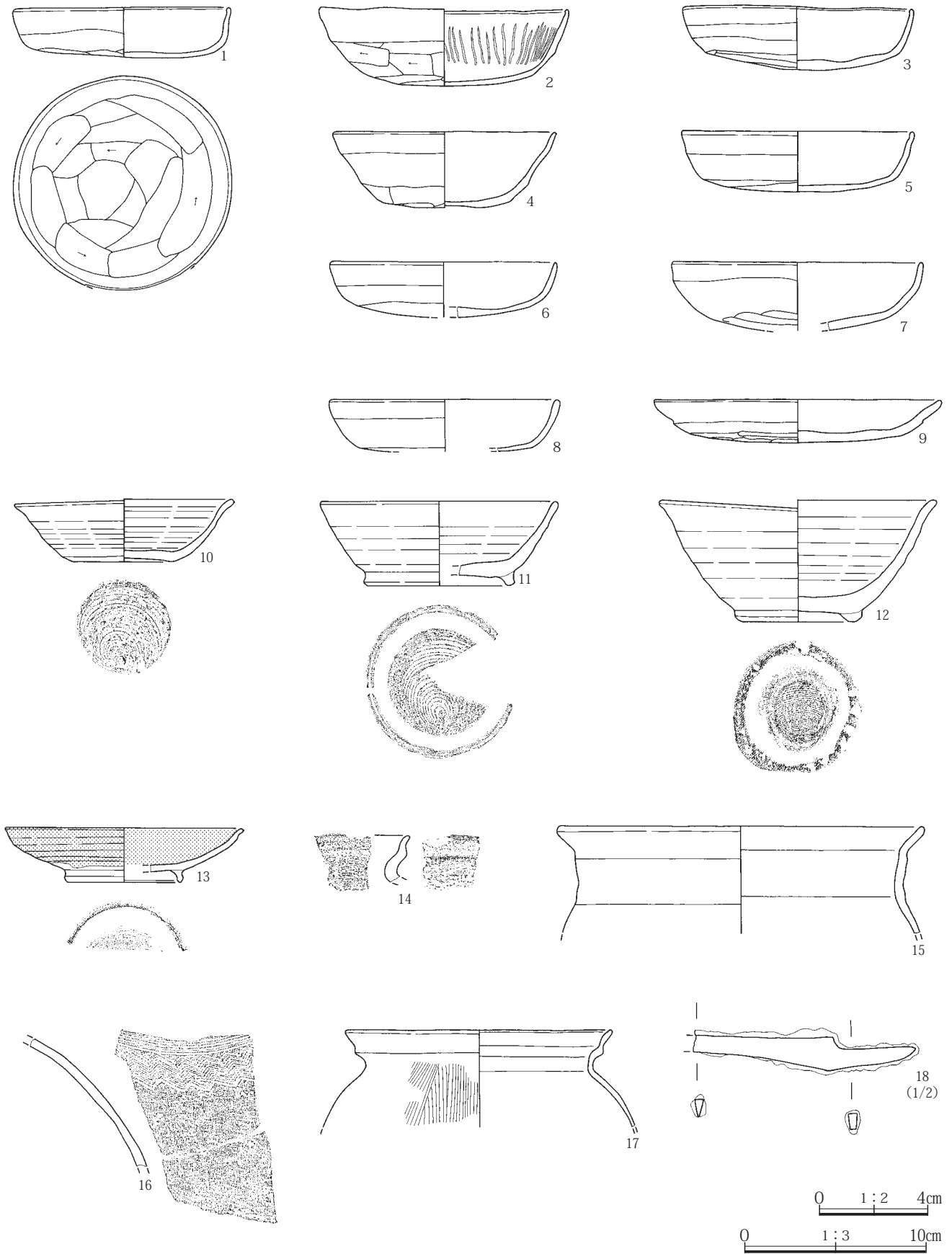
非掲載遺物は、確認面から土師器6点(大型製品5、小型製品1)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、遺構確認状況などからAs-B下の水田と考えられる。

### 5 遺構外の出土遺物(第180図 PL.121)

3区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が多数出土した。発掘調査では、第2面で古墳時代から近世に至る遺構の調査を行った。本項では、第2面から出土した遺構外の遺物のうち、奈良・平安時代の遺物を掲載した。

遺物は、遺構確認面の他、竪穴住居、溝、井戸の周辺や遺物包含層であるAs-B混土層や確認面から土師器杯(第180図1～9)、須恵器杯(第180図10・11)、14号溝周辺の確認面から須恵器椀(第180図12)、灰釉陶器皿(第180図13)、土師器台付甕(第180図14)、第2面拡張部北側の2号土器集積周辺の確認面から土師器甕(第180図15)、土師器壺(第180図16)が出土した。鉄製品刀子(第180図18)は確認面から出土した。土師器台付甕(第180図17)は混入と考えられる。

3区から出土した奈良・平安時代の非掲載遺物については、第6章において古墳時代と奈良・平安時代の遺物総数を記した。



第180図 3区遺構外の出土遺物

## 第4節 4区の遺構と遺物

4区における奈良・平安時代の遺構確認面は、第4・5面である。遺構確認面は、As-Bを含む暗褐色土である第15層下面及びAs-Bの堆積層である第16層の下面を遺構確認面とした。当該時代の遺構は、おもに調査区西端に集中する。4区西側に位置する3区では、奈良・平安時代の竪穴住居が10軒確認されるなど、古墳時代から平安時代まで集落が継続的に営まれている。3区で確認できた奈良・平安時代の竪穴住居は、調査区東端に集中しており、4区の発掘調査によって竪穴住居群の範囲が4区西端までとなった。4区第4面では、竪穴住居、土坑、水田の調査を行った。

### 1 竪穴住居

4区第4面では奈良・平安時代の竪穴住居2軒を調査した。調査区南西隅で確認し、時期は8世紀と考えられる。調査区域外に広がる竪穴住居や他の遺構との重複などによって部分的な調査となったものもある。

#### 4区1号竪穴住居(第182・183図 PL.62・122)

**位置：**X=106～110、Y=-360～364

**形状・規模：**調査区外となる南側及び西側に竪穴住居が広がるため、全体の形状と規模は不明である。形状は長方形または正方形と想定され、確認できる規模は、東西長4.29m、南北長3.51m、壁高北壁及び東壁16cm、西壁5cmを測る。

**主軸方位：**N-82°-W

**重複：**2号竪穴住居、2号土坑と重複する。1号竪穴住居の南側埋没土を2号竪穴住居が掘込んでいることから、1号竪穴住居が古い。遺構確認状況から、2号土坑が新しい。

**埋没土：**ローム粒を含む黒色土によってほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しが行われた可能性がある。埋没土に僅かであるが炭化物や焼土粒が含まれる。

**床面：**カマド周辺が床面の中央部より4～5cm低く、床面の中央部から西側は高低差がなくほぼ平坦である。床面に明瞭な硬化面が認められず、土層断面の観察から、床面中央部南側で貼床の一部が残存し、黄褐色土大塊を

含む黒色土によって床面を構築する。

**カマド：**竪穴住居の南壁が不明であるため、正確な位置は不明であるが、東壁中央部やや北寄りに付設したと想定される。2号土坑との重複のため燃焼部左側壁や燃焼部から煙道などを遺失し、残存状況は全体的に不良である。確認できる規模は、右袖状残存部長さ76cm、幅36cmを測る。主軸方位は、N-111°-Eである。燃焼部右側壁周辺にカマド構築材とみられる粘土の他、焚口から床面にかけて焼土が飛散する。燃焼部から遺物の出土はないが、カマド焚口の周辺部から土師器甕(第182図6)は床面上16cmから、土師器杯(第182図1)が床面上5～13cmから、土師器鉢(第182図4)はカマド埋没土から出土した。

**貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**カマド周辺や床面中央部、東壁際から遺物の出土が認められる。土師器甕(第182図5)は床面直上から、土師器甕(第183図9)は床面上6cmから出土した。土師器杯(第182図2)は床面上11cmから、土師器甕(第183図7・10)は床面上12と15cmから、土師器杯(第182図3)、土師器甕(第183図8・11)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器129点(大型製品120、小型製品9)である。

**所見：**出土遺物から時期は、8世紀と考えられる。

#### 4区2号竪穴住居(第183図 PL.62・122)

**位置：**X=106、Y=-362～363

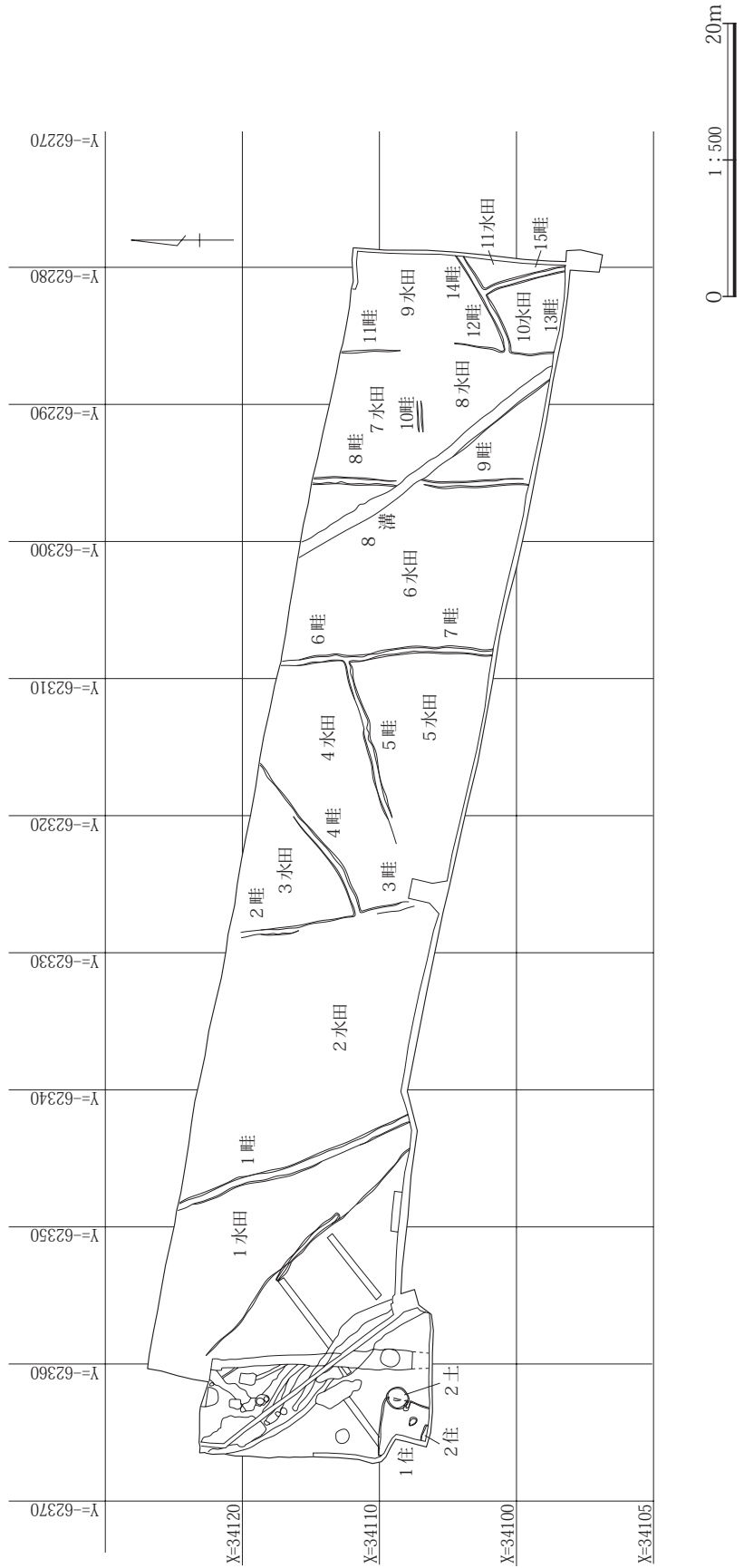
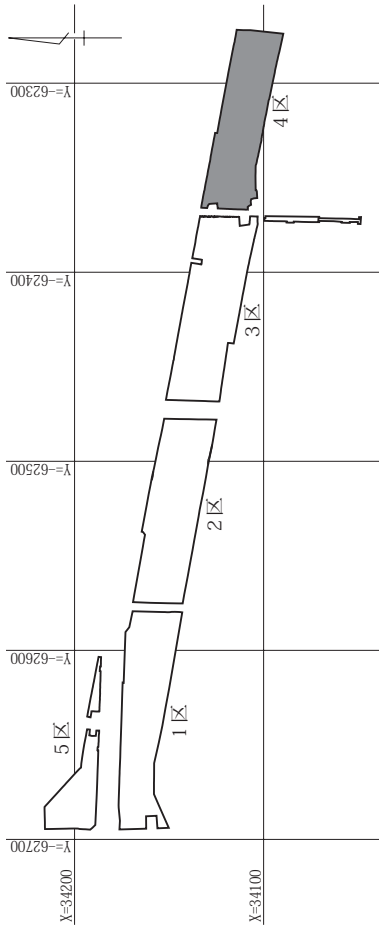
**形態・規模：**調査区外となる南側及び西側に竪穴住居が広がるため全体の形状と規模は不明である。確認できる規模は、東西長1.20m、南北長0.37m、壁高北壁9cm、東壁1cmを測る。

**主軸方位：**南北方向を主軸方位とすると、N-73°-W

**重複：**1号住居と重複する。1号竪穴住居の南側埋没土を2号竪穴住居が掘込んでいることから、2号竪穴住居が新しい。

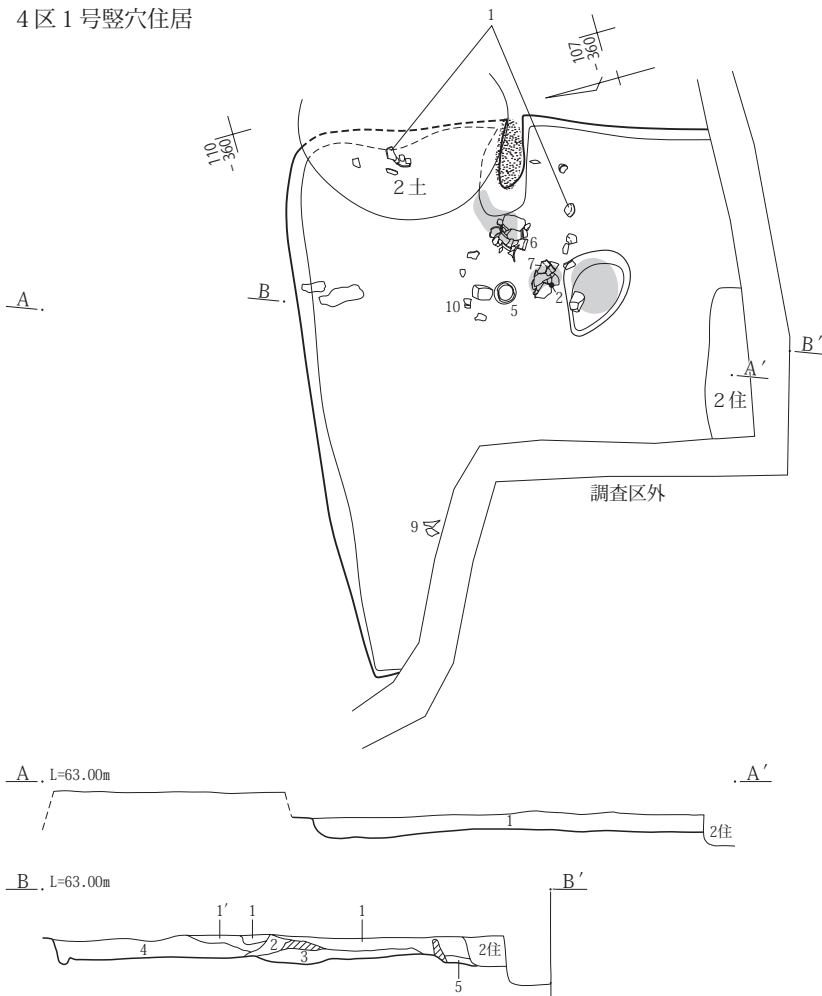
**埋没土：**白色粒や黄褐色ローム小塊を多量に含む黒色土によって埋没する。一部のみの確認のため、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。

**床面：**確認できた床面の範囲が狭いため、明瞭な硬化面



第181図 4区第4面(奈良・平安時代)全体図

4区1号竪穴住居



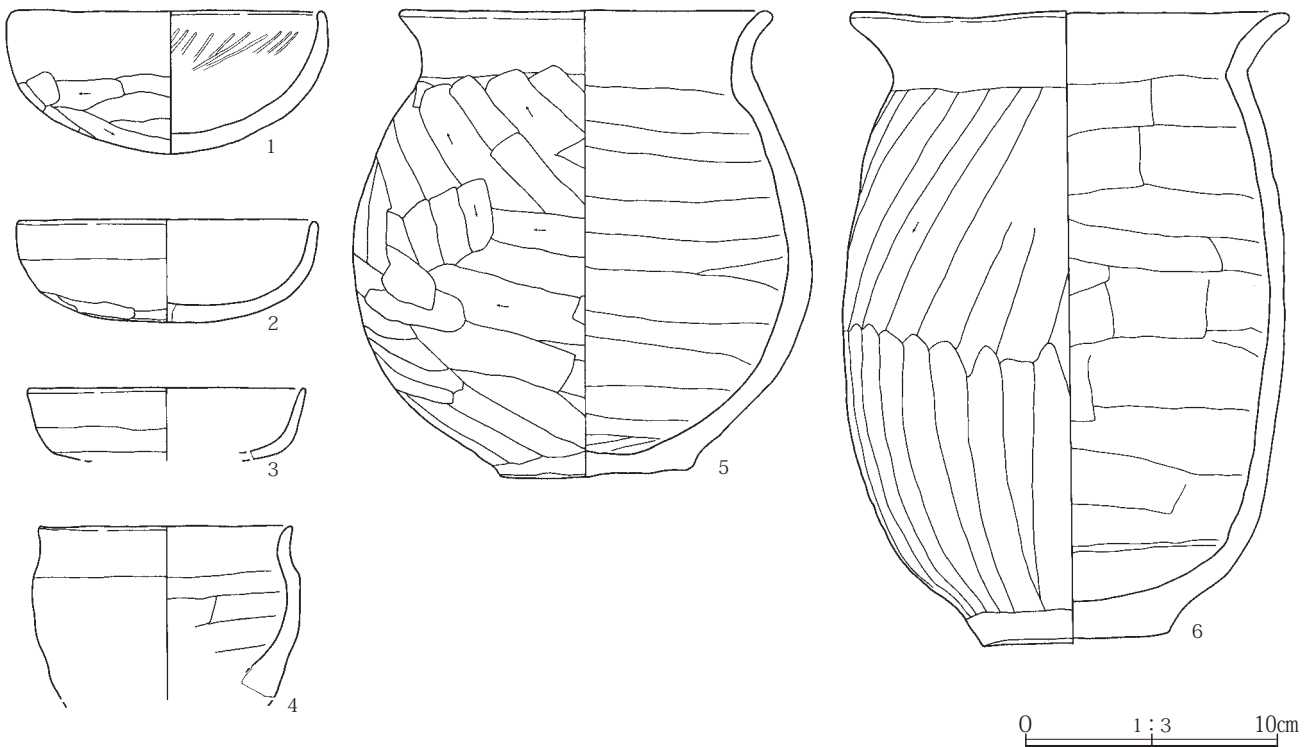
1号竪穴住居A-A'

- 1. 黒色土 極小の焼土粒・炭化物粒各1%

1号竪穴住居B-B'

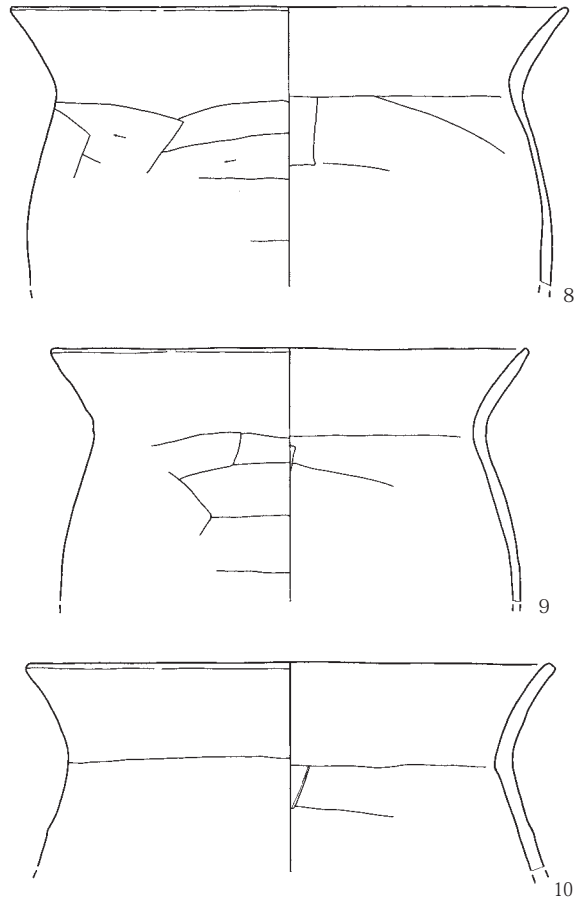
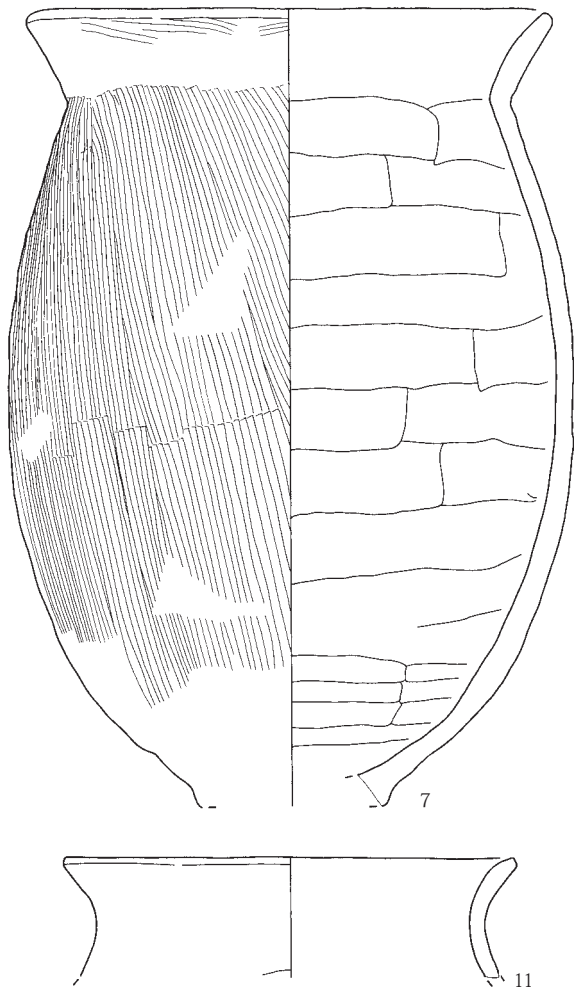
- 1. 黒色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を含む
- 1'. 黒色土 第1層より色味は明るい
- 2. 黒色土 砂質土、ローム粒含む
- 3. 黒色土 極小ローム粒・炭化物・焼土粒各3%
- 4. 黒色土 極小ローム粒・炭化物・焼土粒各1%
- 5. 黒色土 黄褐色ローム中塊5%、締まり強、貼床

0 1:60 2m

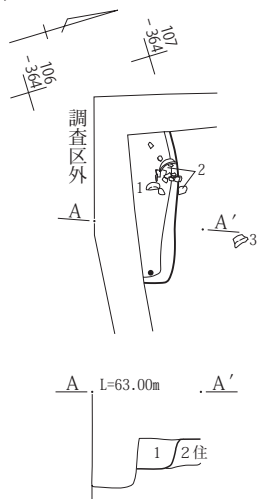


第182図 4区1号竪穴住居と出土遺物(1)

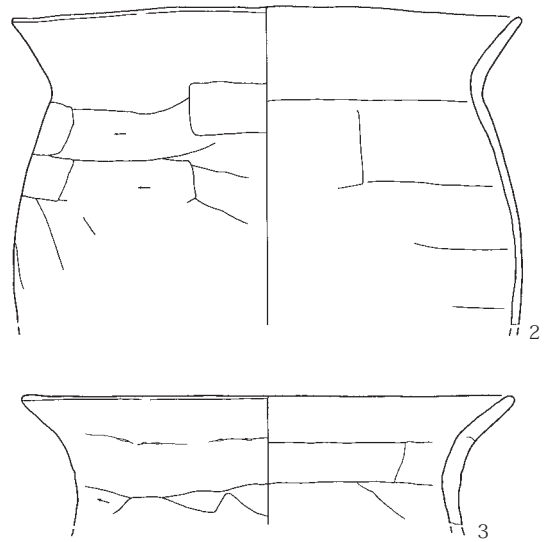
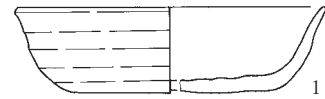




4区2号竪穴住居



2号住居A-A'  
1. 黒色土 黄褐色ローム小塊10%、白色粒を含む



0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第183図 4区1号竪穴住居出土遺物(2)、2号竪穴状住居と出土遺物

などは確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・柱穴・周溝**：床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方**：住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態**：北壁際から遺物が出土した。須恵器杯(第183図1)、土師器甕(第183図2・3)は床面上13～17cmから出土した。非掲載遺物は、土師器15点(大型製品)が出土した。

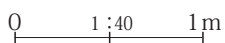
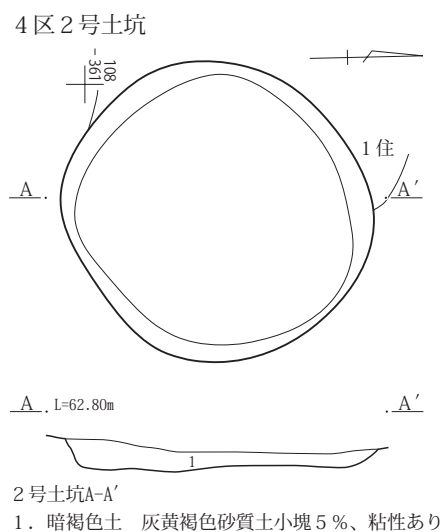
**所見**：出土遺物から時期は、8世紀と考えられる。

## 2 土坑

4区第4面では、土坑1基を調査した。土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

### 4区2号土坑(第184図 PL.62)

第4面西側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。1号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から2号土坑が新しい。埋没土は、灰黄褐色砂質土小塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器11点(大型製品)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、1号竪穴住居との重複から8世紀以降と考えられる。



第184図 4区2号土坑

## 3 水田

4区第4面では、平安時代の水田を調査した。第4面中央やや西側寄りから東側に至る調査区ほぼ全域の低地に位置する。4区第4面西側調査区から西側の3区第2面へと続く微高地においては、平安時代の竪穴住居を複数確認していることから、4区で確認できた第4面の水田は、この住居群に隣接する生産域になると想定される。

### 第4面水田(第185～187図 PL.62・63)

4区第4面において、水田を調査した。調査区西端では、第4面で古墳時代から平安時代の竪穴住居の他、土坑、溝、粘土採掘坑などを調査し、中世以降の土坑や溝も第4面で確認されている。調査区東側において、As-Bを含む暗褐色土である第14層下面及びAs-Bの堆積層である第15層の下面の遺構確認面から水田が確認されたが、遺存状況は全体に良好ではなく、僅かな畦の高まりや溝を確認できたにすぎない。

調査によって畦は残存していたが、畦に付設した水口や給排水のために利用した溝などの水田施設については確認できなかった。水田は区画によって分かれていることから、便宜的に名称を付けるため調査区西側から東側へ順に付番した。水田の区画は11ヶ所となり、それぞれ1～11号水田とした。水田を区画する畦についても15ヶ所を確認した。水田及び畦の位置については第185図を参照されたい。

1号水田は、1号畦の西側に位置し、2号水田は1・2号畦によって区画されている。3～5号水田は、南北方向の2・3・6・7号畦、東西方向の4・5号畦によってそれぞれ区画されている。6号水田は、南北方向の6・7・8・9号畦によって区画されている。7・8号水田は、南北方向の8・9・11・12・13号畦、東西方向の10号畦によって区画されている。9号水田は、11・12・13号畦と14号畦、10号水田は、12・13・15号畦、11号水田は14・15号畦によって区画されている。確認できる東西方向の長さは、2号水田16.30m、4号水田18.30m、6号水田11.80m、7号水田9.20m、8号水田9.60m、10号水田5.40mをそれぞれ測る。調査区外となる北側、南側、東側に水田がさらに広がると想定され、全体の規模について不明である。

確認できる畦の規模及び主軸方向は、以下のとおりである。1号畦の幅0.53～0.70m、高さ0.01～0.03m、主軸方向N-20°-W、2号畦の幅0.29～0.52m、高さ0.02m、主軸方向N-10°-W、3号畦の幅0.48～0.55m、高さ0.03m、主軸方向N-12°-W、4号畦の幅0.37～0.60m、高さ0.01～0.03m、主軸方向N-58°-E、5号畦の幅0.39～0.57m、高さ0.02～0.03m、主軸方向N-74°-E、6号畦の幅0.40～0.51m、高さ0.03m、主軸方向N-5°-W、7号畦の幅0.41～0.58m、高さ0.01～0.04m、主軸方向N-2°-E、8号畦の幅0.38～0.52m、高さ0.02～0.03m、主軸方向N-0°、9号畦の幅0.36～0.53m、高さ0.01～0.03m、主軸方向N-0°、10号畦の幅0.27～0.39m、高さ0.01m、主軸方向N-87°-E、11号畦の幅0.11～0.17m、高さ0.03m、主軸方向N-2°-W、12号畦の幅0.06～0.12m、高さ0.03m、主軸方向N-8°-W、13号畦の幅0.10m、高さ0.04m、主軸方向N-0°、14号畦の幅0.49～0.53m、高さ0.01m、主軸方向N-63°-E、15号畦の幅0.43～0.50m、高さ0.02～0.05m、主軸方向N-15°-Wを測る。南北方向の畦の主軸方向については、1号畦と15号畦が近似し、2・3・6～9・11～13号畦が近似するなど規格性をもつが、東西方向の畦の主軸方向についてみると、全体的に不揃いである。畦の高さなど残存状況から、休耕田の可能性もある。

1号水田の標高は、北側62.44m、南側62.36mであり、北から南にかけて傾斜する。2号水田の標高は、北西隅62.41m、南東隅62.31mを測る。1号水田と東側の2号水田との比高0.01～0.03mであり、2号水田が低い。3号水田の標高は北側62.35m、南側62.33m、西側の2号水田との比高0.01mであり、3号水田が僅かに低い。4号水田の標高は北側62.33m、南側62.31mであり、東側に比べ西側の標高が0.02m低い。西側の2号水田との比高0.01～0.04m、3号水田との比高0.01～0.04mである。5号水田の標高は、高低差がほとんど認められず、北側及び南側ともに62.29～62.30mであり、北側の4号水田との比高0.03～0.06mである。6号水田の高低差も僅かであり、北側及び南側ともに標高62.26mであり、西側の4号水田との比高0.03～0.05m、西側の5号水田との比高0.02～0.03mであり、4・5号水田に比べ6号水田が低い。7号水田は、北側62.30m、南側

62.27mであり、僅かに残存する10号畦によって区画された水田であり、西側の6号水田との比高0.03mである。8号水田の標高は、北側62.26m、南側62.25m、北側の7号水田との比高0.03m、西側の6号水田との比高0.02mである。9号水田の標高は、北側62.23m、南側62.20m、西側の7号水田との比高0.03～0.05mである。10号水田の標高は、北側62.17m、南側62.16m、北側の9号水田との比高0.01～0.03mである。11号水田の標高は、北側62.19m、南側62.15m、北側の9号水田との比高0.02m、西側の10号水田との比高0.01mである。

確認できた各水田の高低差などから判断すると、給水源については、調査区外となる北側にあると想定される。1～15号畦には、残存状況が良好ではなく、水口その他、畦に沿った溝などが確認できず、全体の給水経路についても不明である。標高が最も高くなった水田は、1号水田であり、調査区南東に位置する11号水田の標高が最も低くなることから、北側から南側の水田に給水していたと想定される。

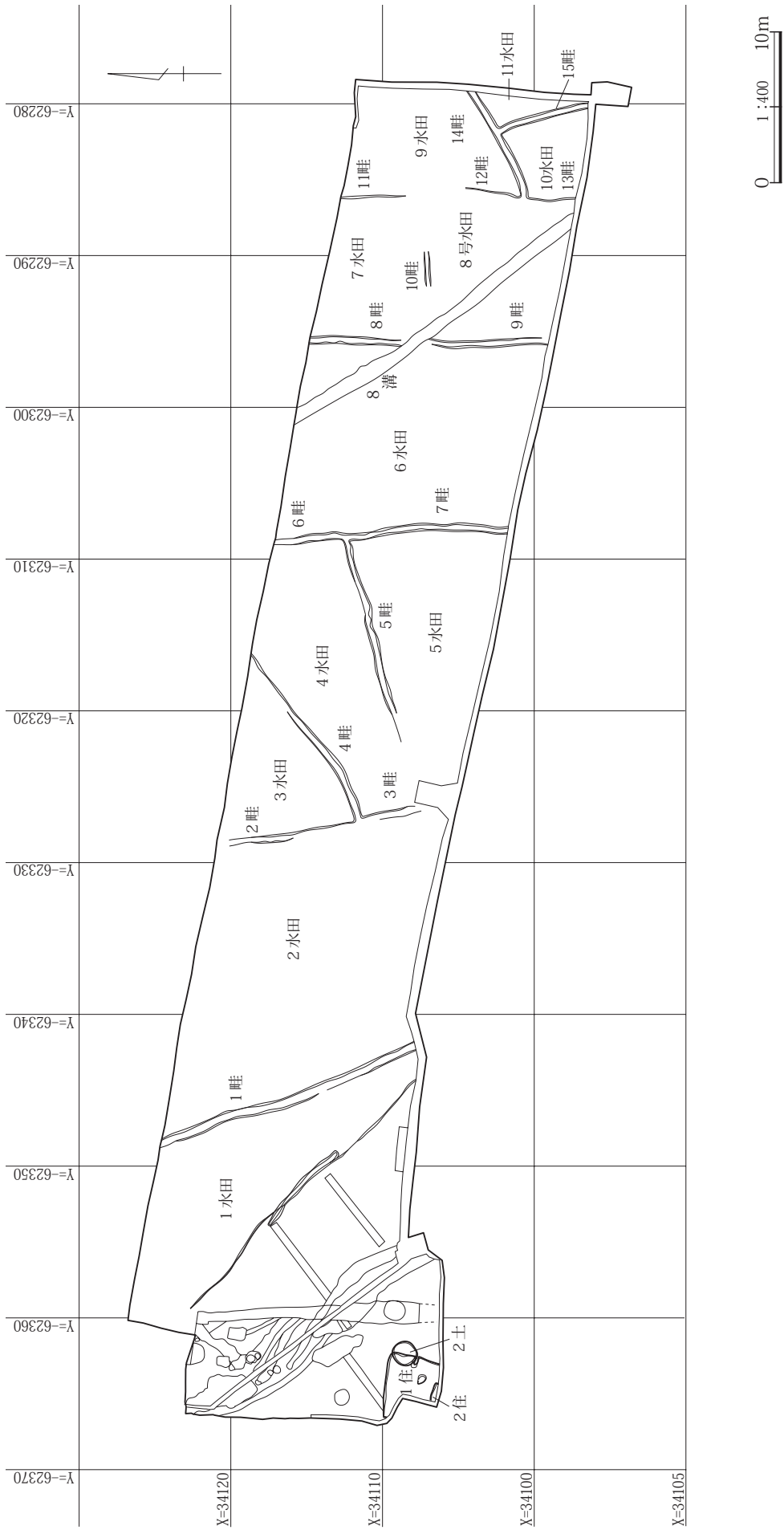
農作業に伴う水田の耕作痕については、1号水田において深さはやや浅いが、長い筋状の耕作痕1ヶ所が確認された。この痕跡は、形状などから、畜耕によるものと想定される。1号畦と軸方向は揃わないが、耕作痕の規模は、長さ6.61m、幅0.30～0.50m、深さ0.03m、主軸方向N-48°-Wである。

4区第4面水田の西側から3区第2面調査区東側まで微高地となる。4区の微高地では、平安時代の竪穴住居が2軒確認された。3区から4区にかけて住居群の様相を呈し、4区第4面の水田が、この住居群の生産域であったと考えられる。

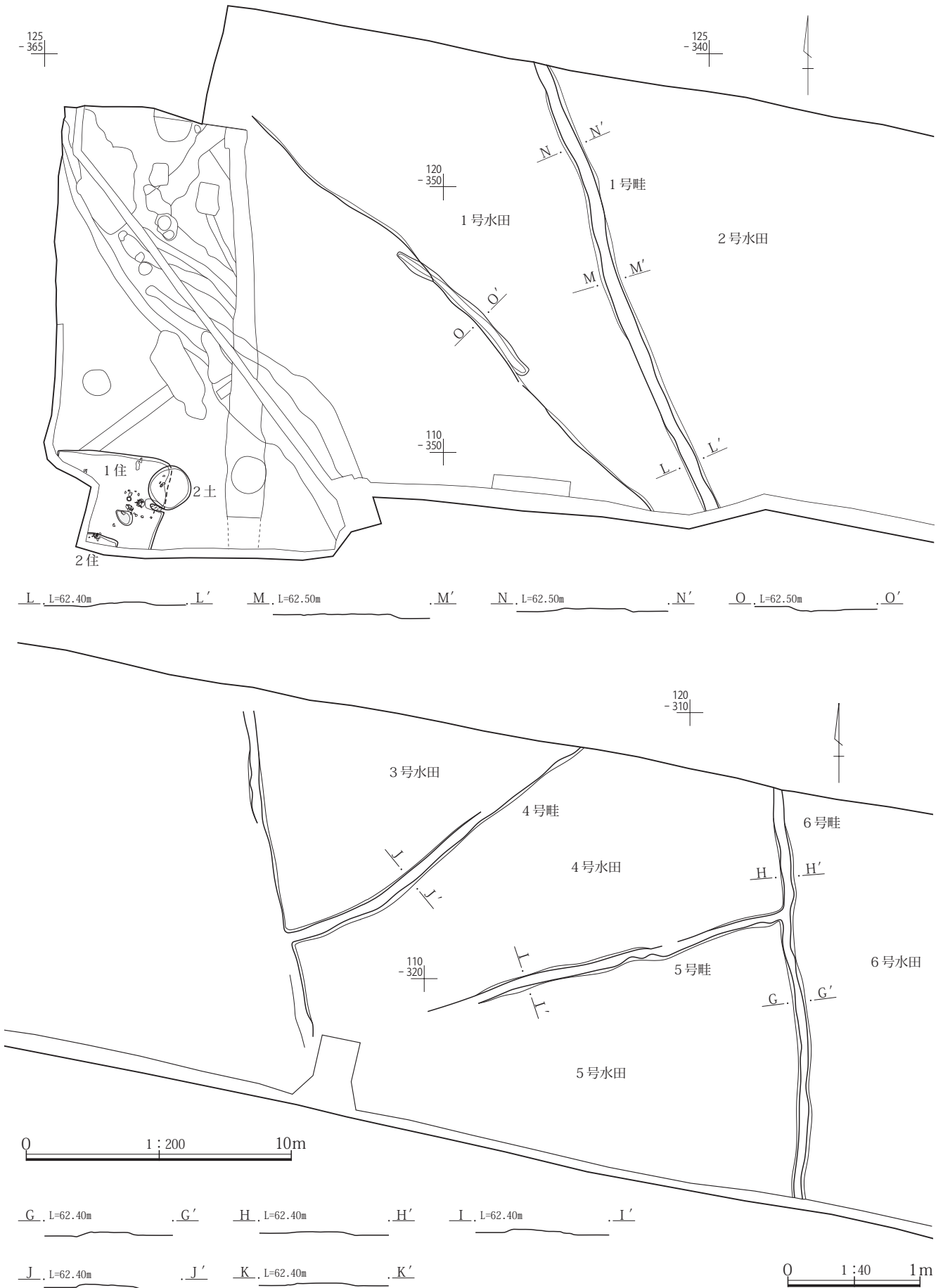
出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から時期は、As-B下の水田と考えられる。

#### 4 遺構外の出土遺物

4区第4面では、古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行い、各時代の遺構が混在した状況である。遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土しているが、本項において図示した奈良・平安時代の遺物はない。4区第4面の非掲載遺物については、第6章において古墳時代と奈良・平安時代の遺構外の出土遺物総数を記した。



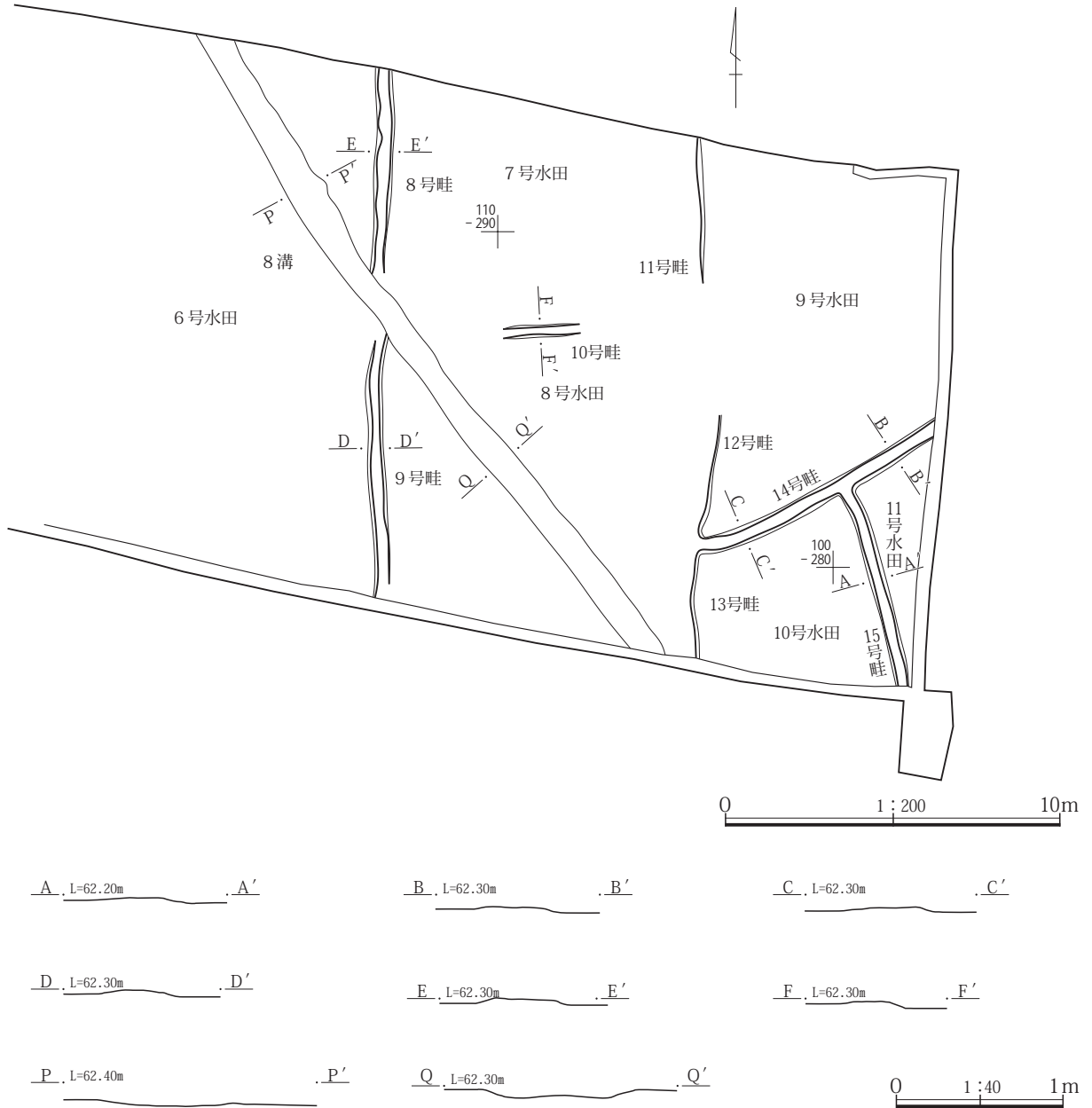
第185図 4区第4面水田全体図



第186図 4区第4面水田(1)



4区4面6～8号水田・8～10号畦



第187図 4区第4面水田(2)

## 第5節 5区の遺構と遺物

5区における平安時代の遺構は、第2面で確認した。遺構確認面は、基本土層第14層下面である。発掘調査では、第2面において古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。古墳時代から近世の遺構が混在しているため、各時代にそれぞれ分けて掲載した。確認できた平安時代の遺構は、竪穴住居と水田である。

### 1 竪穴住居

5区第2面において、確認できた平安時代の竪穴住居は1軒のみであり、調査区北西隅で確認した。調査区南側や東側では竪穴住居が確認されなかった。調査区外となる5区の北側や西側において当該時期の竪穴住居が確認される可能性がある。

#### 5区1号竪穴住居(第188・190図 PL.63)

位置：X=203～206、Y=-688～691

形状・規模：形状は長方形であり、規模は、長軸長2.88m、短軸長2.33m、壁高北壁3cm、東壁及び南壁2cm、西壁1cmを測る。

主軸方位：N-7°-W

重複：なし。

**埋没土：**焼土粒や炭化物を含む黒褐色土によってほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しが行われた可能性がある。

**床面：**床面レベル差はなくほぼ平坦である。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁やや南寄りに付設する。規模は、全長74cm、燃烧部幅46cm、焚口幅26cm、焚口から燃烧部奥行き58cmである。主軸方位は、N-111°-Eである。燃烧部両側壁や天井部などの大半を失い、燃烧面に焼土や炭化物が僅かに残存するにすぎず、遺存状況は全体的に良好ではない。

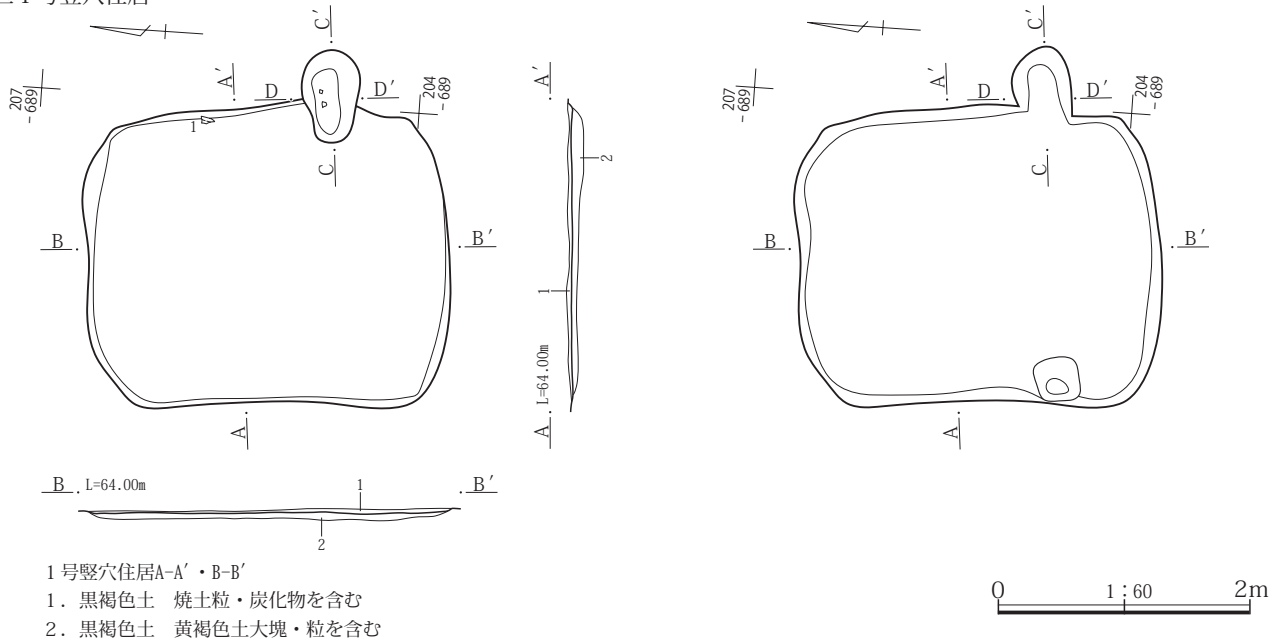
**貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**全体的に5～9cm掘り窪め、床面を整えている。ピット状の窪みが認められたが、特に床下施設などは確認できなかった。

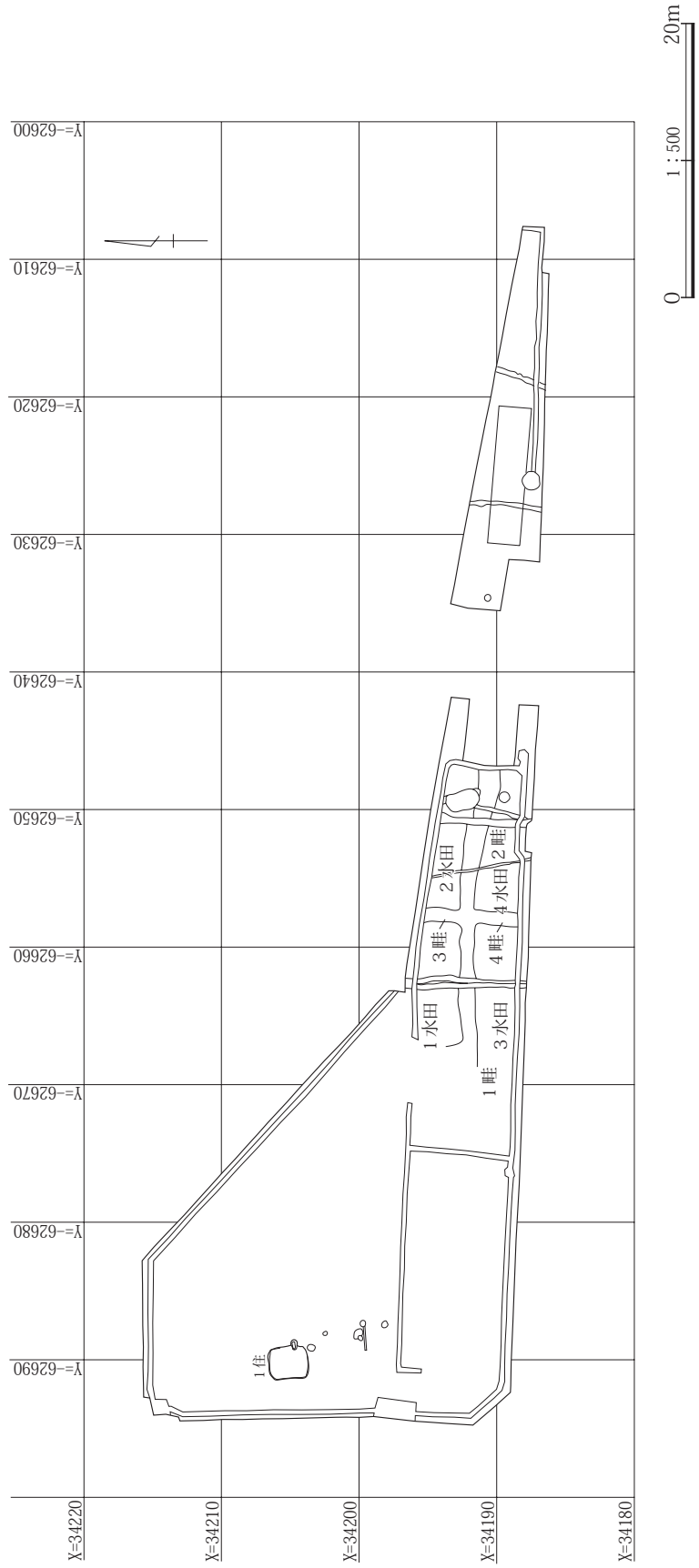
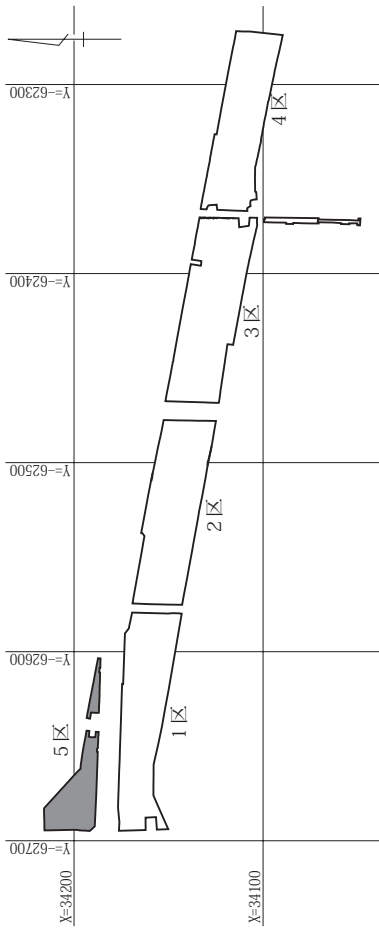
**遺物出土状態：**東壁際から土師器甕(第190図1)が床面上1cmから出土した。非掲載遺物は、土師器40点(大型製品35、小型製品5)、須恵器7点(大型製品1、小型製品6)が出土した。

**所見：**竪穴住居は微高地に位置し、隣接する東側の低地では水田を確認した。竪穴住居との関連が想定される。出土遺物から時期は、9世紀第3四半期と考えられる。

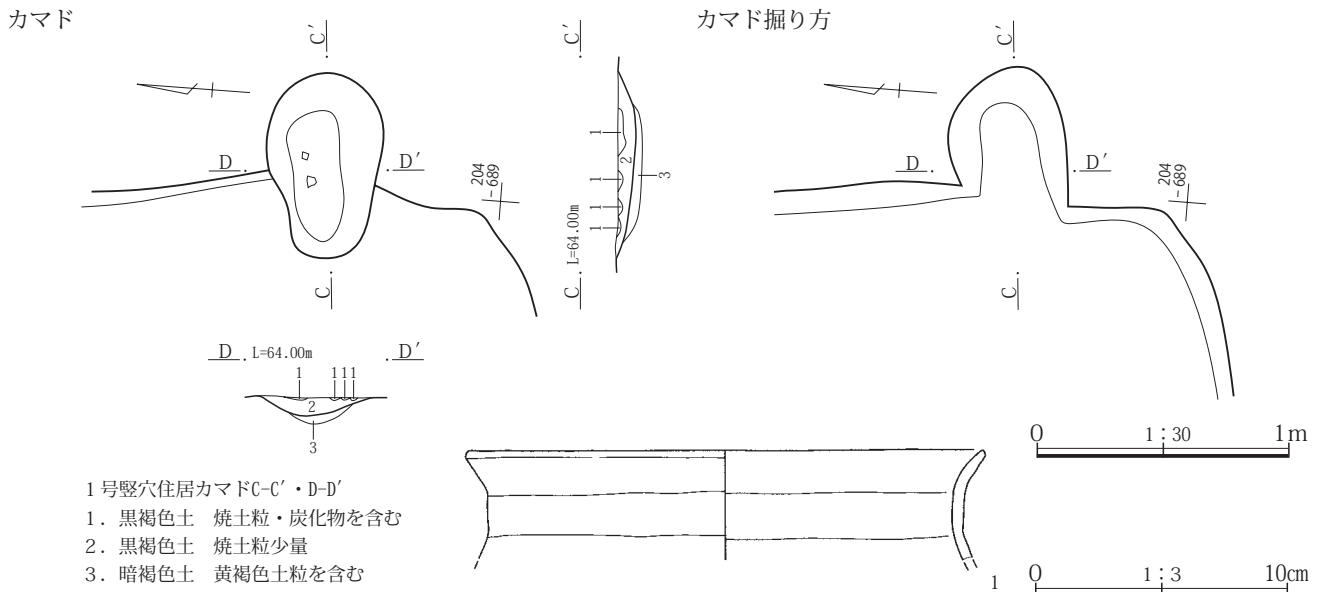
5区1号竪穴住居



第188図 5区1号竪穴住居



第189図 5区第2面(奈良・平安時代)全体図



第190図 5区1号竪穴住居カマドと出土遺物

## 2 水田

5区第2面では、平安時代の水田を調査した。5区第2面西側調査区の低地に位置する。5区西側の微高地で平安時代の竪穴住居を確認した。5区第2面水田や南側に位置する1区第2面水田の範囲が生産域と考えられる。

### 第2面水田(第191図 PL.63)

第2面西側調査区で水田を調査した。南北と東西の方向に直交する畦と考えられる水田施設を確認したが僅かな畦の高まりと溝を確認できたにすぎない。

確認できた水田の区画は4ヶ所であり、便宜的に調査区西側から東側へ順に付番し1～4号水田と名称を付けた。5区西端部や東端部では、水田を確認できなかった。

1号土坑と重複し、第2面水田が古い。調査区北側や南側に水田がさらに広がるため規模は不明である。確認できた畦の規模及び主軸方位は、以下のとおりである。

1号畦の幅0.93～1.26m、高さ0.01m、主軸方位N-90°、2号畦の幅0.99～1.60m、高さ0.01m、主軸方位N-80°-W、3号畦の幅0.87～1.02m、高さ0.01m、主軸方位N-5°-E、4号畦の幅0.92～1.05m、高さ0.01～0.03m、主軸方位N-5°-Eである。概ね1.0～1.6mの規模となる。高さは0.01～0.03cmであり、残存状況は良好ではなく休耕田の可能性もある。1・2

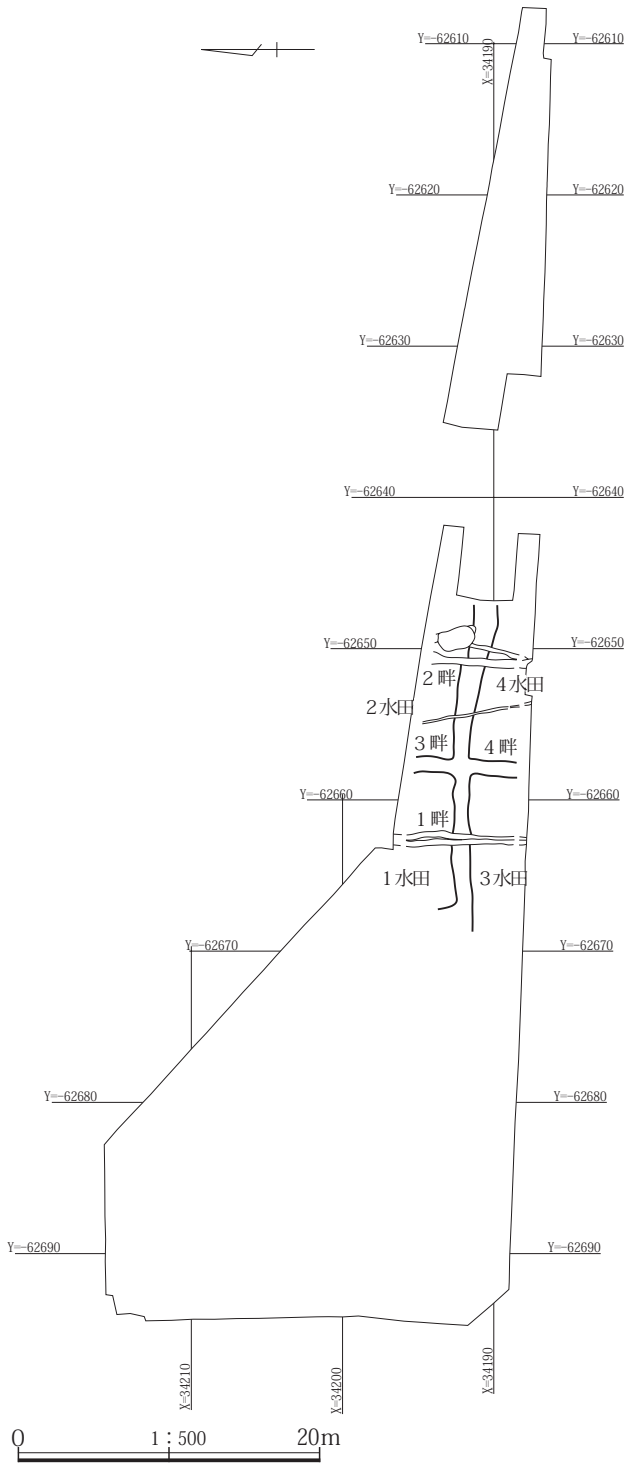
号畦は、東西方向、3・4号畦は南北方向に走行する。

1号水田は1・3号畦によって区画された水田である。標高は、北西が63.79m、北東が63.71mであり、西側から東側へ緩やかに傾斜する。南北方向のレベルについても南東隅の標高が63.74mで、北側より南側が低い。2号水田は2・3号畦に区画された水田である。標高は、北西が63.72m、北東が63.70mであり、レベル差は少なくほぼ平坦である。南東隅の標高が63.65mで、北西から南東にかけて傾斜する。3号水田は1・4号畦で区画された水田である。標高は、北東が63.77m、南西が63.73mであり、西側から東側に傾斜する。4号水田は2・4号畦で区画された水田である。標高は、北西が63.75mと高く、北東が63.65mと低くなり、西側から東側にかけて緩やかに傾斜する。1号水田と2号水田の比高は0.01mで2号水田が僅かに低い。1号水田と3号水田はほぼ同レベルである。4号水田は、3号水田より0.02m低く、2号水田とはほぼ同レベルである。

第2面水田の給水源については、標高などから判断し調査区外となる北側にあると想定される。給水の経路については、不明であるが、北側から南側の水田に、西側から東側の水田にそれぞれ給水していたと想定される。

農作業に伴う耕作痕については、遺構確認面を精査し水田の確認面で大小の窪みが認められ、連続する窪みとならないが、人力による鋤先や鍬先の痕が想定される。

水田西側は微高地となり、平安時代の竪穴住居が確認



第191図 5区第2面水田

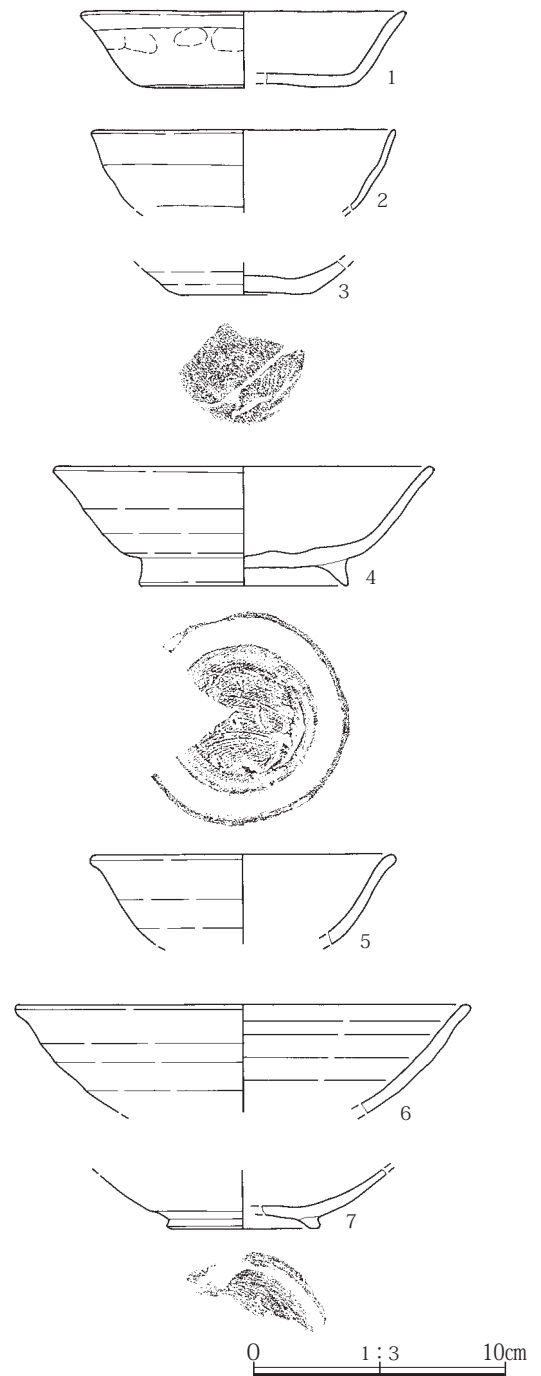
された。5区で確認した竪穴住居は1軒であるが、西側や北側でも確認できる可能性もあり、5区の水田が生産域になると想定される。出土遺物はなく時期を特定できないが、遺構確認状況からAs-B下の水田と考えられる。

### 3 遺構外の出土遺物(第192図 PL.123)

5区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が

出土した。発掘調査では、第2面で古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。本項では、第4・5面から出土した遺構外の遺物のうち、奈良・平安時代の遺物を掲載した。

遺物は、土師器杯(第192図1・2)、須恵器杯(第192図3)、須恵器椀(第192図4～7)が出土した。5区から出土した奈良・平安時代の非掲載遺物については、第6章において古墳時代と奈良・平安時代の遺構外の出土遺物総数を記した。



第192図 5区遺構外の出土遺物



## 第6章 古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 調査の概要

本遺跡において古墳時代の遺構と遺物が確認できた調査区は、1・3～5区である。遺構確認面は、基本土層第15層及び16層下面として調査を行ったが、古墳時代から平安時代、中近世の遺構や遺物が確認された。1・3～5区の遺構確認面では、各時代の遺構や遺物が混在することから、時代ごとに分けて掲載した。

古墳時代の遺構や遺物が確認できた調査区及び遺構確認面については、1区第2面、3区第2面、4区第4・5面、5区第2面である。4区では近世の遺構確認面が複数面となったため、第4・5面が他の調査区の第2面に相当する。

発掘調査によって確認できた古墳時代の遺構は、竪穴住居28軒、土坑35基、ピット36基、溝11条、粘土採掘坑1基、土器集積2ヶ所である。以下、調査区ごとに記す。

### 第2節 1区の遺構と遺物

1区第2面で確認できた古墳時代と考えられる遺構は、土坑のみである。調査区東側の南壁際で確認した。1区第2面では、他の時代の土坑も数が少ないが、1区東側の南壁際に集中することから調査区外となる南側に土坑などの遺構が想定される。

遺構確認面にトレンチを6ヶ所設定し(PL.64)、下層の遺構確認を行ったが、古墳時代以前の遺構については確認できなかった。

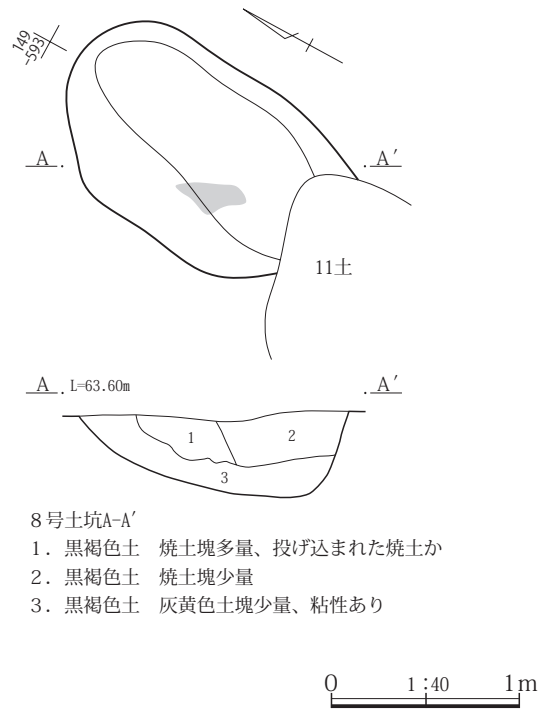
#### 1 土坑

1区第2面では、土坑1基を調査した。1区第2面東側で確認した。土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

#### 1区8号土坑(第193図 PL.50)

第2面東側の南壁際に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は、東壁に比べ西壁がやや緩やかに開口部にか

1区8号土坑



8号土坑A-A'

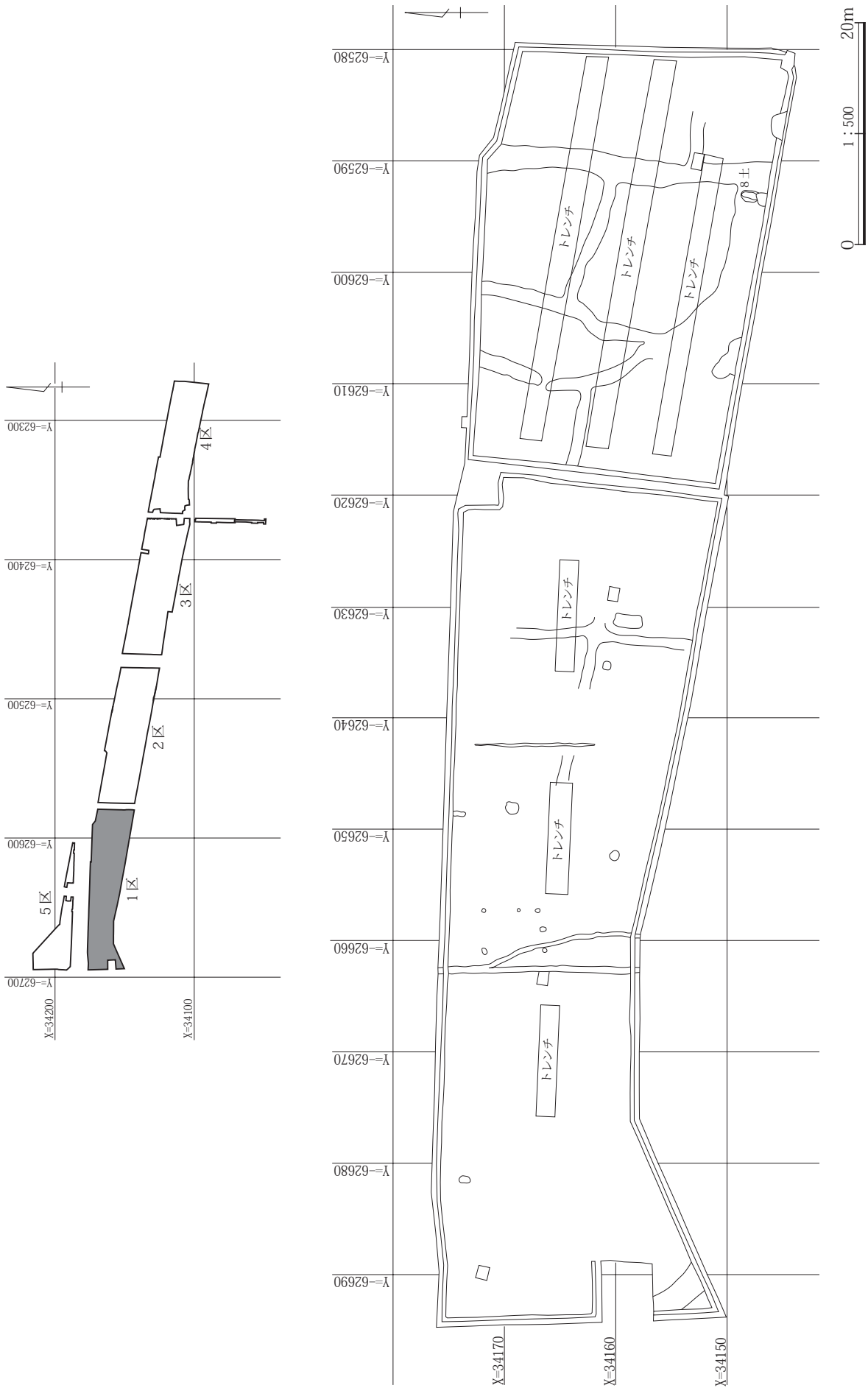
1. 黒褐色土 焼土塊多量、投げ込まれた焼土か
2. 黒褐色土 焼土塊少量
3. 黒褐色土 灰黄色土塊少量、粘性あり

第193図 1区8号土坑

けて立ち上がる。11号土坑と重複し、遺構確認状況から8号土坑が古いと考えられる。埋没土は、灰黄色土塊を含む黒褐色土であり、第1層には多量の焼土塊が含まれていた。焼土の確認や堆積状況などから人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

#### 2 遺構外の出土遺物

1区第2面では、古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行った。遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土しているが、本項において図示した古墳時代の遺物はない。非掲載遺物は、古墳時代から奈良・平安時代を合わせて、土師器24点(大型製品17、小型製品7)、須恵器6点(大型製品2、小型製品4)が出土した。



第194図 1区第2面(古墳時代)全体図

### 第3節 3区の遺構と遺物

3区における古墳時代の遺構は、第2面で確認した。遺構確認面は、基本土層第15層下面である。発掘調査では、第2面において中世から近世に至る遺構の調査を行っている。古墳時代から近世の遺構が混在していることから、各時代に分けて掲載した。確認できた古墳時代の遺構は、竪穴住居、土坑・ピット、溝、土器集積である。

#### 1 竪穴住居

3区第2面において、確認できた古墳時代の竪穴住居は、28軒である。前章で述べたとおり、奈良・平安時代の竪穴住居も10軒確認されるなど、調査区東側及び拡張部南端の微高地に竪穴住居が集中し、住居群の様相を呈する。3区の東側に位置する4区西端では、平安時代の竪穴住居が2軒確認されたが、古墳時代の竪穴住居については確認できなかった。3区の住居群はさらに北側及び南側にかけて広がると想定されるが、調査区西側は東側に比べわずかに標高が低く、竪穴住居は確認されなかった。他の遺構との重複や調査区外に広がるため部分的な調査となった竪穴住居もある。特に3区拡張部については調査区の幅が狭く竪穴住居の一部分のみの調査となった。

#### 3区1号竪穴住居(第197・198図 PL.66・67・123)

**位置：**X=131～135、Y=-379～383

**形状・規模：**形状は長方形または方形と想定される。確認できる規模は、長軸長3.83m、短軸長3.56m、壁高東壁40cm、南壁34cm、西壁56cmを測る。

**主軸方位：**N-27°-W

**重複：**5号竪穴住居と重複し、1号竪穴住居が5号竪穴住居の埋没土を掘込むことから、1号竪穴住居が新しい。

**埋没土：**埋没土は、焼土粒や炭化物、黄褐色土塊を含む暗褐色土や黒褐色土などにより、壁際に三角堆積が認められ、下層から上層にかけてレンズ状の堆積となることから自然埋没と考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。東側に比べ西側が低く比高3cmである。黄褐色土塊を含む暗褐色土や黒褐色土などによって床面を整える。明瞭な硬化

面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・柱穴：**床面精査や掘り方調査を行ったが確認できなかった。

**周溝：**西壁と南壁西半部で確認する。規模は、幅16～28cm、深さ26～44cmを測る。

**他の施設：**床面中央部やや東寄りでP1を確認した。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長径83cm、短径39cm、深さ21cmを測る。埋没土からの出土遺物が多く、土師器甕(第198図6)は底面上8cmから、土師器甕(第198図8)は底面上12cmから出土した。床面下からは1号床下土坑を確認した。床面のほぼ中央部に位置する。形状は不整形円形で、断面形状は中心部をほぼ垂直に深く掘込み、壁際は浅く溝状に掘り窪めている。規模は、長径1.88、短径1.81m、中心部の深さ1.07mであり、壁際の周溝状の幅0.35～0.57m、深さ0.11～0.22mを測る。主軸方位は、N-22°-Wである。土坑の下層から湧水が認められ、用途などは不明である。

**掘り方：**大小ピット状の窪みが認められ、全体的に5～34cm掘り窪め床面を整える。南壁際は、溝状に幅0.50m～0.89m、深さ0.11～0.18m掘込まれている。

**遺物出土状態：**土師器甕(第198図7)が床面上14cmから、土師器杯(第198図1)、土師器甑(第198図5)は床面上10cm以上から、土師器杯(第198図2)、土師器高杯(第198図3)は埋没土から、土師器鉢(第198図4)は掘り方から出土した。非掲載遺物は、土師器99点(大型製品84、中型製品2、小型製品13)、須恵器4点(大型製品2、小型製品2)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

#### 3区2号竪穴住居(第199図 PL.67・123)

**位置：**X=130～133、Y=-371～373

**形状・規模：**5号溝との重複のため、形状は長方形または方形と想定される。確認できる規模は、長軸長2.70m、短軸長2.43m、壁高北壁7cm、東壁13cm、南壁8cmを測る。

**主軸方位：**N-73°-E

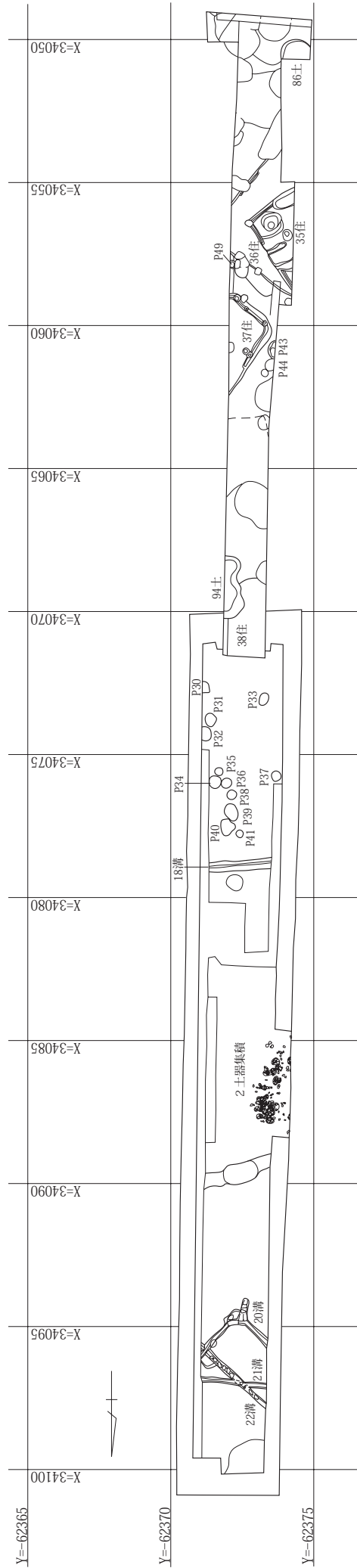
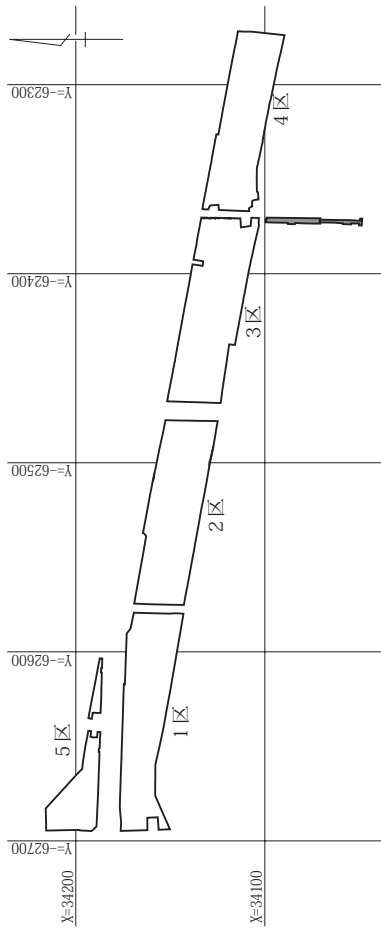
**重複：**5号溝と重複し、遺構確認状況から2号竪穴住居が古い。

**埋没土：**遺構確認面がほぼ床面となるため埋没土は確認できず、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。北壁際



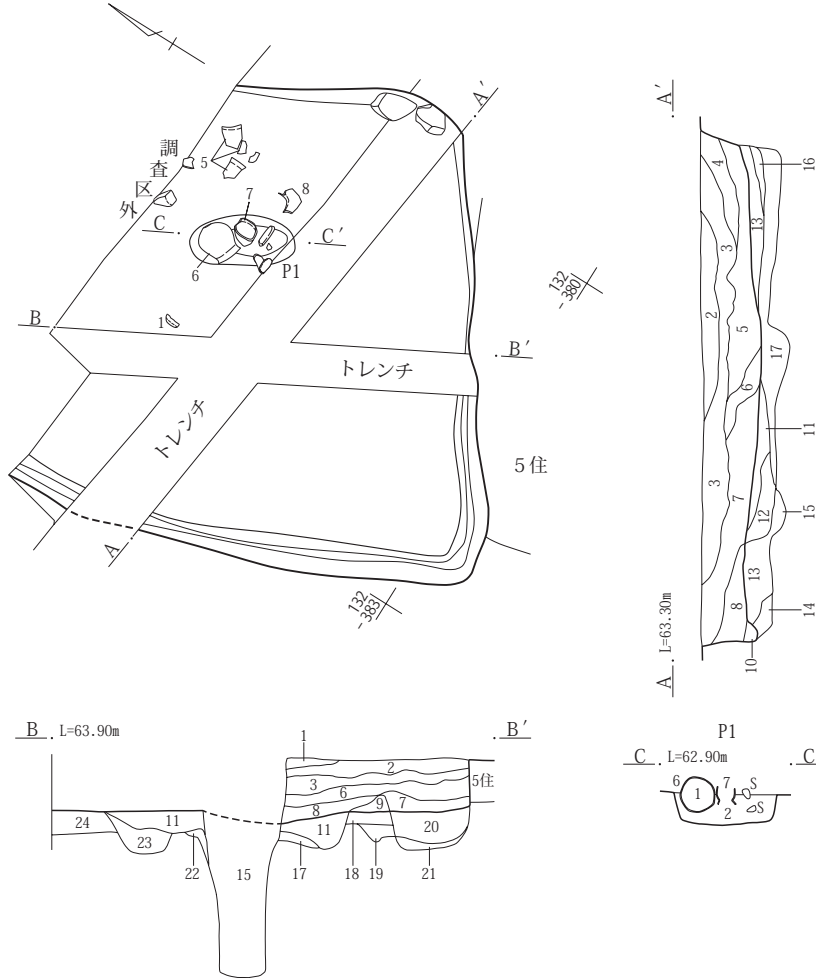
第195図 3区第2面(古墳時代)全体図



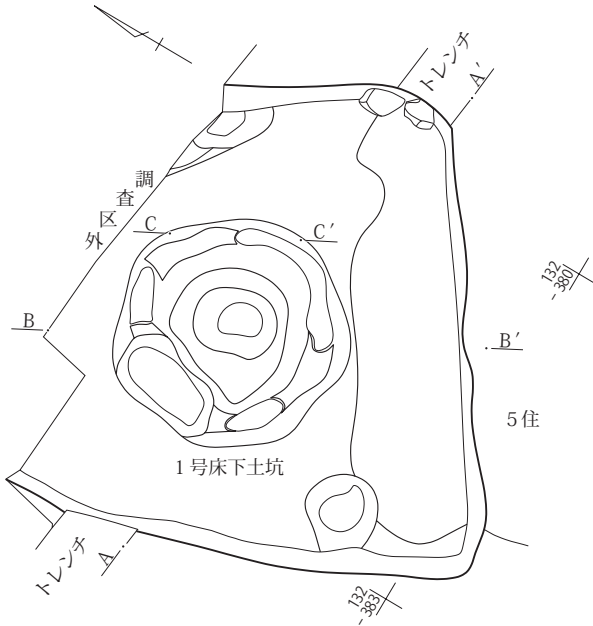
第196図 3区第2面拡張部(古墳時代)全体図



3区1号竪穴住居

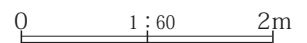


掘り方



1号竪穴住居A-A'・B-B'・C-C'

1. 褐色土 黄褐色土小塊少量、Hr-FA微量
2. 褐色土 炭化物・焼土粒・Hr-FA微量
3. 褐色土 Hr-FA、にぶい黄橙色土多量
4. 暗褐色土 黄褐色土極小塊・炭化物・焼土粒微量
5. 黒褐色土 炭化物・焼土粒・黄褐色土中塊少量
6. 暗褐色土と黄褐色土の混土
7. 暗褐色土 黄褐色土極小塊微量
8. 黒褐色土 炭化物・焼土粒・黄褐色土中塊少量
9. 明黄褐色土 粘性あり、締まりあり
10. 明黄褐色土 黄褐色土塊少量、粘性あり、締まりあり
11. 暗褐色土 黄褐色土塊・粒多量
12. 黒褐色土 黄褐色土小塊多量
13. 明黄褐色土 粘性あり、締まりあり
14. 明黄褐色土 黄褐色土塊少量、粘性あり、締まりあり
15. 黒褐色土 黄褐色土極小塊少量、粘性あり
16. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、粘性あり
17. 暗褐色土 粘質土、黄褐色土塊少量
18. 黄褐色土 炭化物・焼土粒・黄褐色土多量
19. 暗褐色土 黄褐色土塊少量、やや色味は暗い
20. 暗褐色土と黄褐色土の混土
21. 黒褐色土 第20層より色味は暗い
22. 暗褐色土 第11層より色味は暗い
23. 黒褐色土 黄褐色土塊・粒多量
24. にぶい黄褐色土 黄褐色土大塊・粒多量



第197図 3区1号竪穴住居



第198図 3区1号竪穴住居出土遺物

と南壁際の比高2cmであり南側にかけて低くなるが、中央部やや南寄り周辺が南壁際に比べ2～3cm低い。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド**:東壁中央部に付設する。カマド構築材とみられる粘土が広範囲に認められ、焼土も僅かに飛散する。燃焼部側壁や煙道などを遺失しているため残存状況は不良である。確認できる規模は、幅1.15m、焚口幅0.60mである。遺物は、土師器鉢(第199図1・2)が燃焼面上5

～8cmから出土した。

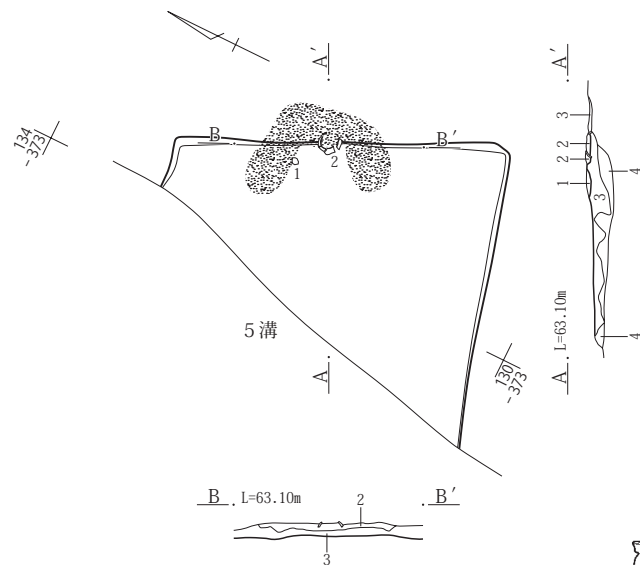
**貯蔵穴・柱穴・周溝**:床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方**:床面下を全体的に8～20cm掘り窪める。特に床下施設などは確認できなかった。

**遺物出土状態**:カマド以外から出土した遺物はなかった。

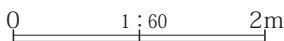
**所見**:出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

3区2号竪穴住居

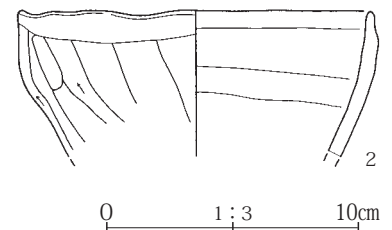
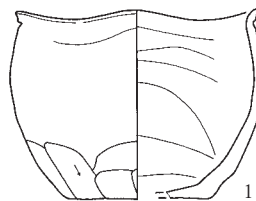
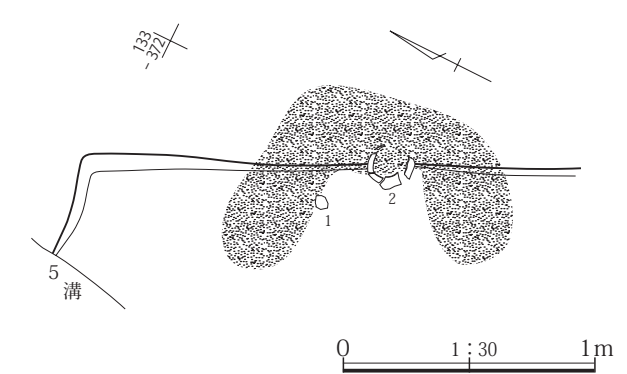


2号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 黒褐色土 焼土粒30%、粘性あり、縮まりあり
2. 黒褐色土 黒色土中塊30%、焼土粒を含む、粘性あり、縮まり強
3. 黒褐色土 黒色土中塊30%、粘性あり、縮まりあり
4. 暗褐色土 白色粒を含む、やや砂質、粘性ややあり、縮まりあり



カマド



第199図 3区2号竪穴住居と出土遺物

### 3区3号竪穴住居(第200・201図 PL.67・124)

**位置**: X=128～129, Y=-371～373

**形状・規模**:カマドから出土した遺物や焼土などを確認できたにすぎず、全体の形状及び規模は不明である。

**重複**:6号竪穴住居と重複し、出土遺物から3号竪穴住居が古いと考えられる。

**埋没土・床面**:住居の上面が削平されているため、確認できなかった。

**カマド**:残存状態から東壁に付設したと想定され、燃焼部側壁の芯材として右壁に土師器甕(第201図5・6)、左壁に土師器甕(第200図4・第201図7)土師器甕(第201図8)をそれぞれ逆向きに並べている。燃焼面から約

10cm上に甕を付設しているが、ピット状に掘込んだ痕跡は認められない。焚口幅50cmを測り、燃焼面には焼土や炭化物が残存する。主軸方位は、N-73°-Eである。土師器杯(第200図1)、土師器高杯(第200図2)土師器甕(第200図3)は燃焼面直上から出土した。

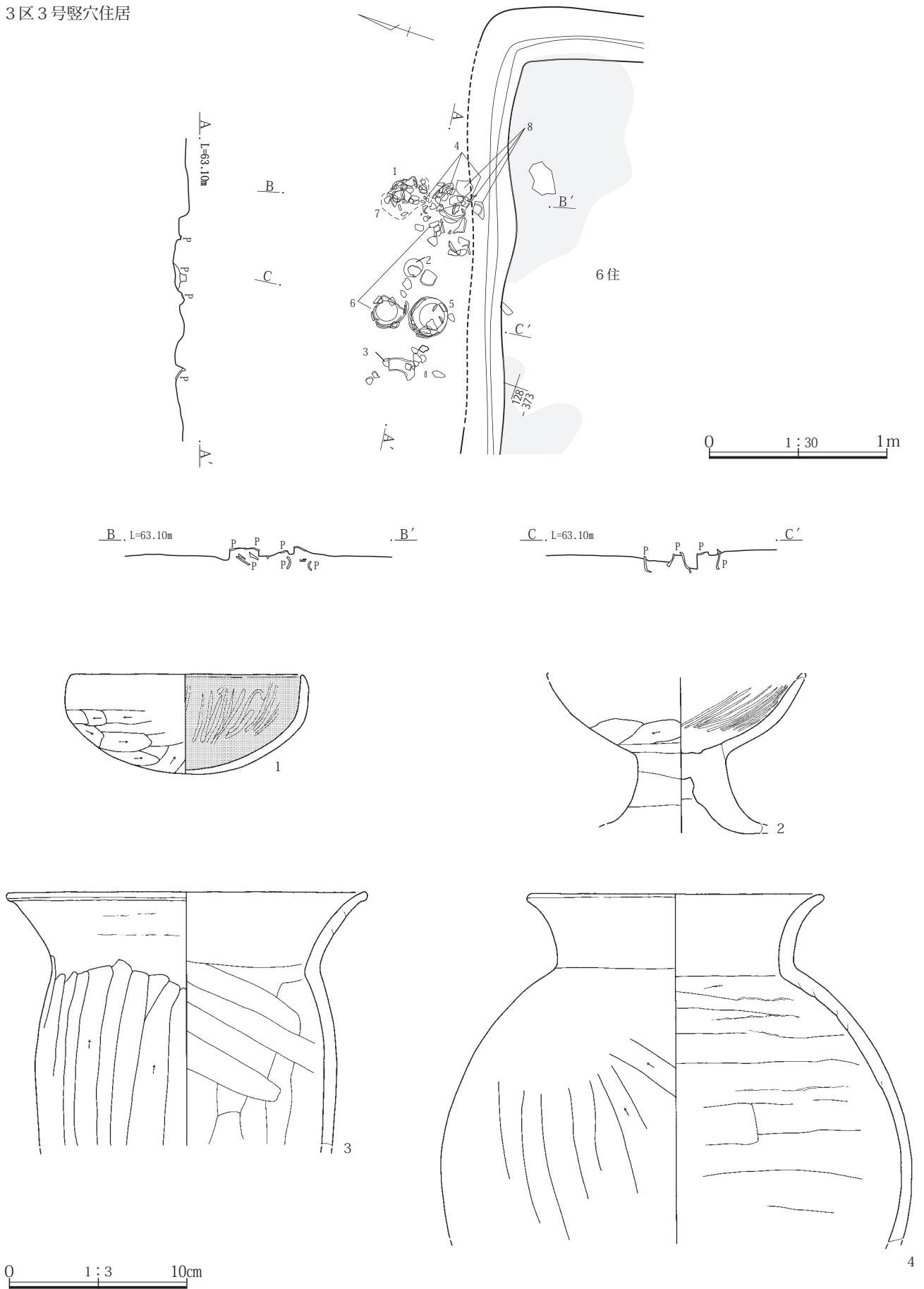
**貯蔵穴・柱穴・周溝**:カマド周辺を精査したが確認できなかった。

**掘り方**:住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

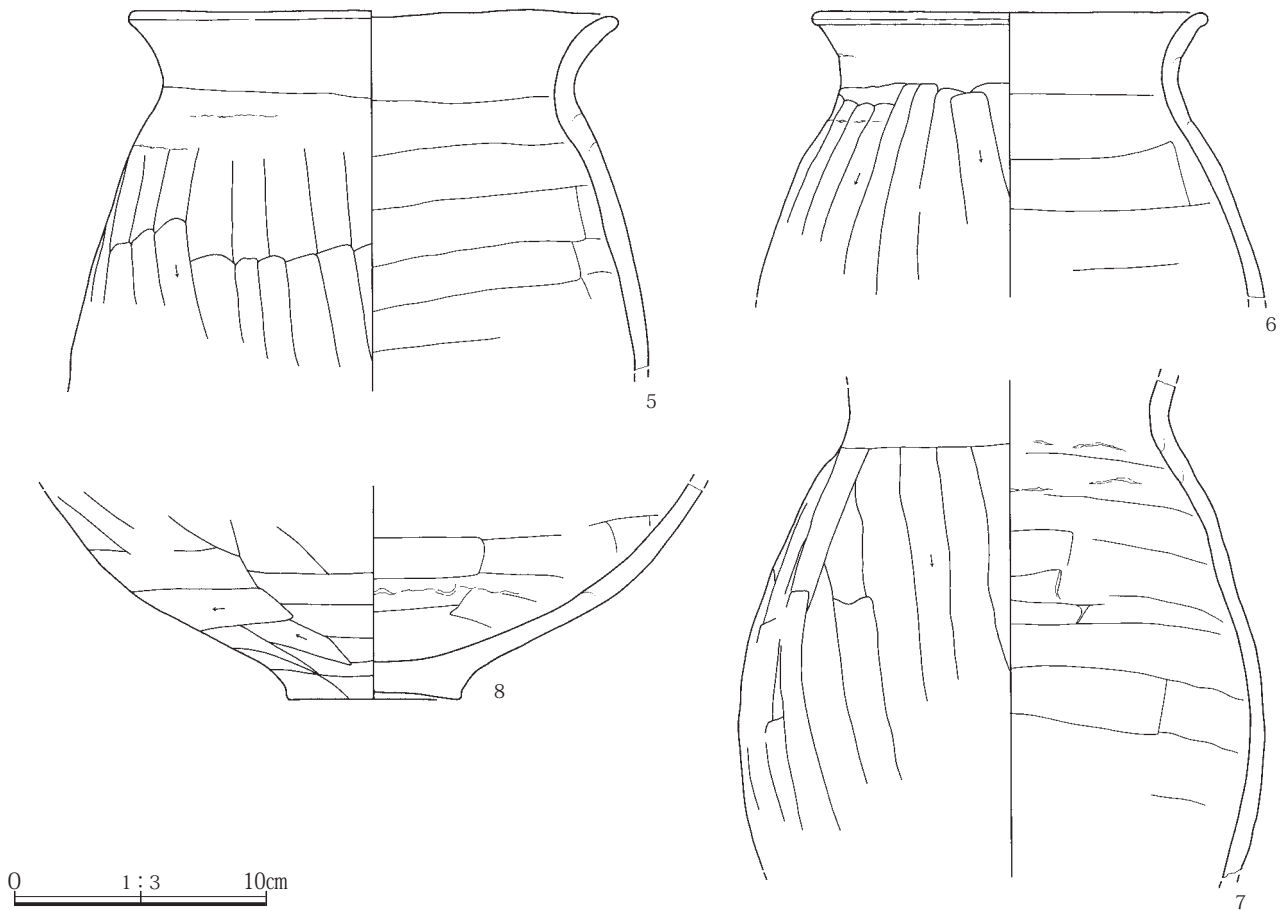
**遺物出土状態**:非掲載遺物は、土師器163点(大型製品)、須恵器2点(大型製品1、小型製品1)、棒状礫1点が出土した。

**所見**:出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

3区3号竪穴住居



第200図 3区3号竪穴住居と出土遺物(1)



第201図 3区3号竪穴住居出土遺物(2)

**3区5号竪穴住居(第202・203図 PL.68～70・124)**

**位置：**X=127～133、Y=-375～382

**形状・規模：**形状は方形を呈する。確認できる規模は、長軸長5.70m、短軸長5.69m、壁高北壁15cm、東壁及び南壁8cm、西壁21cmを測る。確認できる床面積は22.20㎡である。

**主軸方位：**N-71°-E

**重複：**1・4号竪穴住居、1・3・29号土坑、7・8・11号溝と重複する。5号竪穴住居は、1号竪穴住居、4号竪穴住居、1・3・29号土坑、7・8・11号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土や黒褐色土などであり、壁際の一部以外は下層から上層にかけてほぼ平坦に堆積することから人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、北壁際や西壁際に比べ東壁際や南壁際が約1～5cm低い。中央部もやや低いが、明瞭な硬化面は確認できなかった。西壁やや南寄り、北壁やや西寄りで焼土を確認した。

**炉：**床面中央部やや東寄りで確認した。平面形状は楕円形を呈する。規模は、長径0.80m、短径0.36m、深さ0.06mを測る。主軸方位は、N-71°-Eである。埋没土は、第2層が焼土層であり、上層の黒色土に多量の焼土が含まれる。埋没土に多量の焼土が認められたため5号ピットを炉に変更した。

**貯蔵穴：**床面南東隅付近で貯蔵穴を確認した。平面形状は隅丸方形を呈する。規模は、長径0.76m、短径0.74m、深さ0.28mを測る。主軸方位は、N-69°-Wである。埋没土は、明黄褐色土塊を含む黒色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物はなかった。

**柱穴：**床面精査によって7基のピットを確認した。P1～P4の4本は、床面の対角線上に位置することから主柱穴と考えられる。P6とP7は、床面やや西寄りに位置するがP1とP4の軸線上に乗らない。P8は、ほぼ中央部に位置することから支柱穴の可能性はある。平面形状及び規模は、以下のとおりである。P1(不定形、長径48cm、短径30cm、深さ36cm)、P2(不定形、長径61cm、



短径37cm、深さ35cm)、P 3(不定形、長径42cm、短径36cm、深さ34cm)、P 4(円形、長径34cm、短径31cm、深さ37cm)、P 6(円形、長径48cm、短径43cm、深さ5cm)、P 7(不整形、長径52cm、短径46cm、深さ11cm)、P 8(不定形、長径89cm、短径52cm、深さ29cm)である。柱間は、P 1～P 2間2.77m、P 2～P 3間2.73m、P 3～P 4間2.51m、P 1～P 4間2.72mを測り、P 3～P 4間が他の柱穴間と比べやや短い。埋没土は、にぶい黄橙色土塊や明黄褐色土塊を含む黒色土、黒褐色土、暗褐色土であり、支柱穴や他のピットに明瞭な柱痕は認められなかった。P 8の底面直上から、土師器高杯(第203図1)が出土した。

**周溝:** ほぼ全周すると想定される。規模は、幅13～33cm、深さ8～26cmを測る。底面に大小の窪みが認められるが、小ピット状の掘込みは確認できなかった

**掘り方:** 住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態:** 北壁際で土師器台付甕(第203図2)が床面下から、床面中央部で手捏ね鉢形(第203図5)が床面上14cmから出土した。土師器小型甕(第203図3)、土師器甕(第203図4)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器233点(大型製品207、中型製品7、小型製品19)、須恵器3点(小型製品)が出土した。

**所見:** 出土遺物から時期は、6世紀前半以降と考えられる。

### 3区6号竪穴住居(第204～206図 PL.70・71・125)

**位置:** X=122～128、Y=-370～375

**形状・規模:** 形状は方形と想定される。規模は、長軸長5.15m、短軸長4.89m、壁高北壁24cm、東壁45cm、南壁7cm、西壁15cmを測る。確認できる面積は22.29㎡である。

**主軸方位:** N-70°-E

**重複:** 3・7号竪穴住居、23・37号土坑、9号ピット、5・8号溝と重複する。6号竪穴住居は、3・7号竪穴住居より新しく、23・37号土坑、9号ピット、5・8号溝より古い。

**埋没土:** 埋没土は、黄褐色土粒・塊、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土であり、下層に焼土や炭化物が混入し、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面:** 床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。黄褐色土小塊・粒を多量に含む褐灰色土によって床面を構築する。北壁際、南壁際、東壁際の広範囲に焼土が認められ

ることから焼失住居の可能性はある。

**カマド:** 東壁中央部やや南寄りに付設する。カマド燃焼部奥壁や煙道部は調査区外となるため、全体の規模は不明である。確認できる規模は、焚口幅0.53m、右袖状残存部幅0.31m、左袖状残存部幅0.32mを測り、床面からカマド燃焼面は3～5cm低い。主軸方位は、住居の主軸方位と近似しN-72°-Eである。土師器高杯(第206図5)、土師器甕(第206図8)が燃焼面上3cmから、土師器甕(第206図6)は埋没土から出土した。

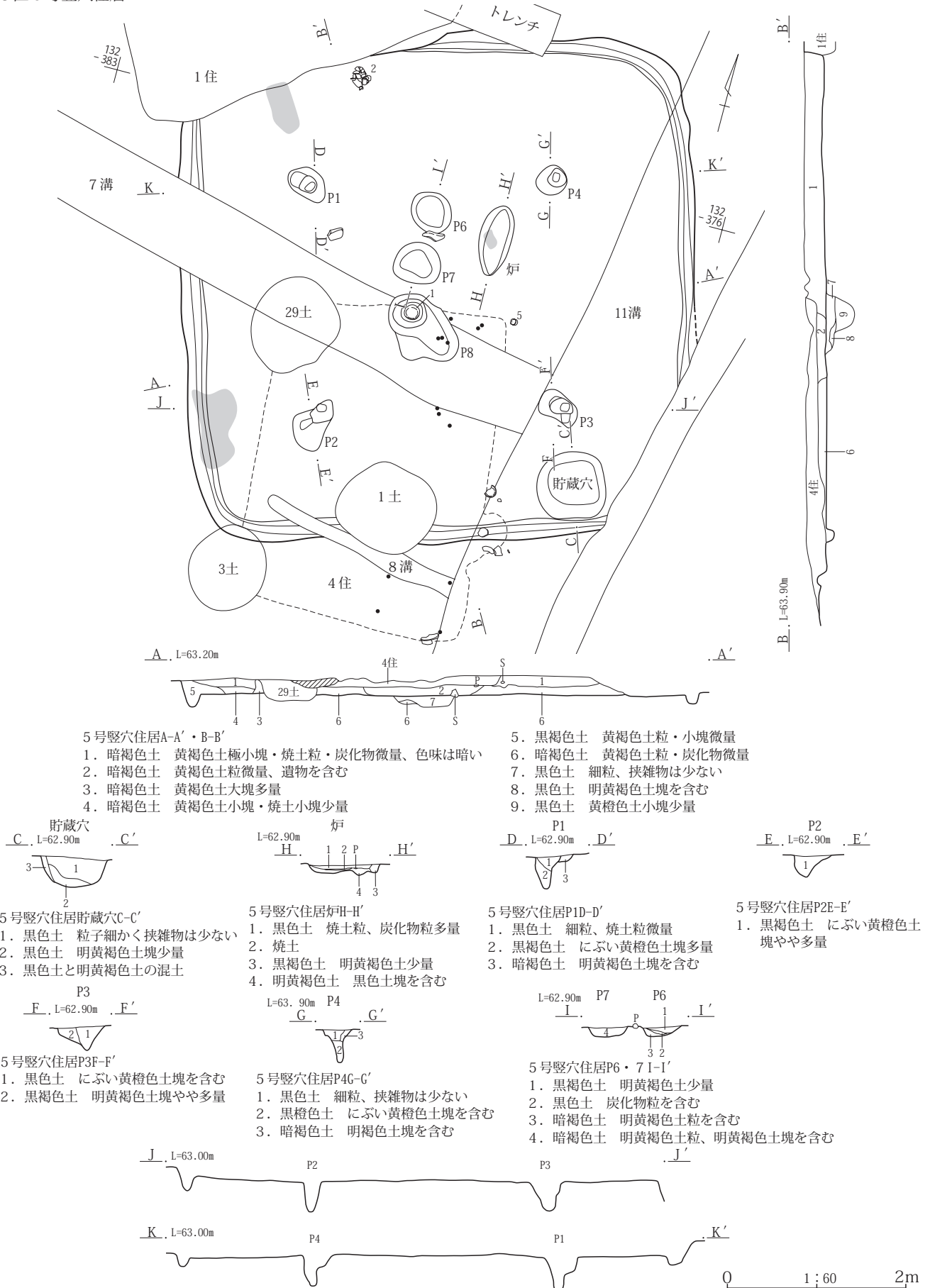
**貯蔵穴:** 床面精査では確認できなかったが、掘り方調査によって住居の南東隅に土坑状の掘込みが認められる。東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明であるが、南北長0.82m、深さ0.09mを測る。カマド南側で隣接する位置にあることから貯蔵穴の可能性はある。

**柱穴:** 床面精査と掘り方調査によって支柱穴4本と支柱穴以外の何らかの施設となるピット3基を確認した。床面精査によって確認したP 1とP 2は、西壁からそれぞれ1.60m、P 1は北壁から1.45m、P 2は南壁から1.40mの位置で確認し、支柱穴と考えられる。形状及び規模は、P 1(不整形、長径32cm、短径26cm、深さ33cm)、P 2(楕円形、長径31cm、短径27cm、深さ43cm)である。柱間は、P 1～P 2間1.90mである。埋没土は、灰黄褐色土や黒褐色土によって人為的に埋戻し、第2層が柱痕と考えられる。

P 3～P 7は、掘り方調査によって確認した。形状及び規模は、P 3(円形、長径36cm、短径32cm、深さ12cm)、P 4(不定形、長径41cm、短径35cm、深さ16cm)、P 5(円形、長径28cm、短径26cm、深さ33cm)、P 6(不定形、長径29cm、短径23cm、深さ25cm)、P 7(不定形、長径37cm、短径29cm、深さ14cm)である。確認した位置から、P 3とP 4は支柱穴とみられる。柱間は、P 1～P 3間2.40m、P 2～P 4間2.40m、P 3～P 4間2.35mを測る。P 4は、他の支柱穴に比べ南壁面から85cmに位置しやや壁に寄る。P 1～P 2間よりP 3～P 4間が長いことから、P 3～P 4間で確認できなかった別の柱穴があった可能性がある。P 5～P 7は、壁際に付設した何らかの施設の下部構造の一部の可能性はある。

**周溝:** 東壁の一部は調査区外となるため不明であるが、カマド付設部分以外は全周すると考えられる。規模は、幅15～31cm、深さ5～38cmを測る。埋没土は、黄褐色

3区5号竪穴住居

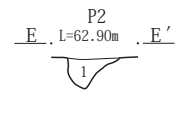
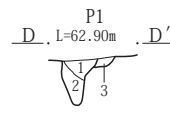
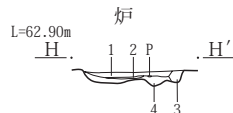
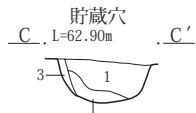


5号竪穴住居A-A'・B-B'

- 1. 暗褐色土 黄褐色土極小塊・焼土粒・炭化物微量、色味は暗い
- 2. 暗褐色土 黄褐色土粒微量、遺物を含む
- 3. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量
- 4. 暗褐色土 黄褐色土小塊・焼土小塊少量

5. 黒褐色土 黄褐色土粒・小塊微量

- 6. 暗褐色土 黄褐色土粒・炭化物微量
- 7. 黒色土 細粒、挟雑物は少ない
- 8. 黒色土 明黄褐色土塊を含む
- 9. 黒色土 黄橙色土小塊少量



5号竪穴住居貯蔵穴C-C'

- 1. 黒色土 粒子細かく挟雑物は少ない
- 2. 黒色土 明黄褐色土塊少量
- 3. 黒色土と明黄褐色土の混土

5号竪穴住居炉H-H'

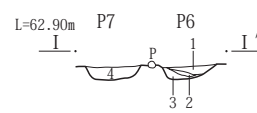
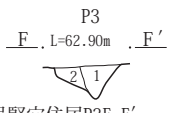
- 1. 黒色土 焼土粒、炭化物粒多量
- 2. 焼土
- 3. 黒褐色土 明黄褐色土少量
- 4. 明黄褐色土 黒色土塊を含む

5号竪穴住居P1D-D'

- 1. 黒色土 細粒、焼土粒微量
- 2. 黒褐色土 にぶい黄橙色土塊多量
- 3. 暗褐色土 明黄褐色土塊を含む

5号竪穴住居P2E-E'

- 1. 黒褐色土 にぶい黄橙色土塊やや多量



5号竪穴住居P3F-F'

- 1. 黒色土 にぶい黄橙色土塊を含む
- 2. 黒褐色土 明黄褐色土塊やや多量

5号竪穴住居P4G-G'

- 1. 黒色土 細粒、挟雑物は少ない
- 2. 黒褐色土 にぶい黄橙色土塊を含む
- 3. 暗褐色土 明褐色土塊を含む

5号竪穴住居P6・7I-I'

- 1. 黒褐色土 明黄褐色土少量
- 2. 黒色土 炭化物粒を含む
- 3. 暗褐色土 明黄褐色土粒を含む
- 4. 暗褐色土 明黄褐色土粒、明黄褐色土塊を含む

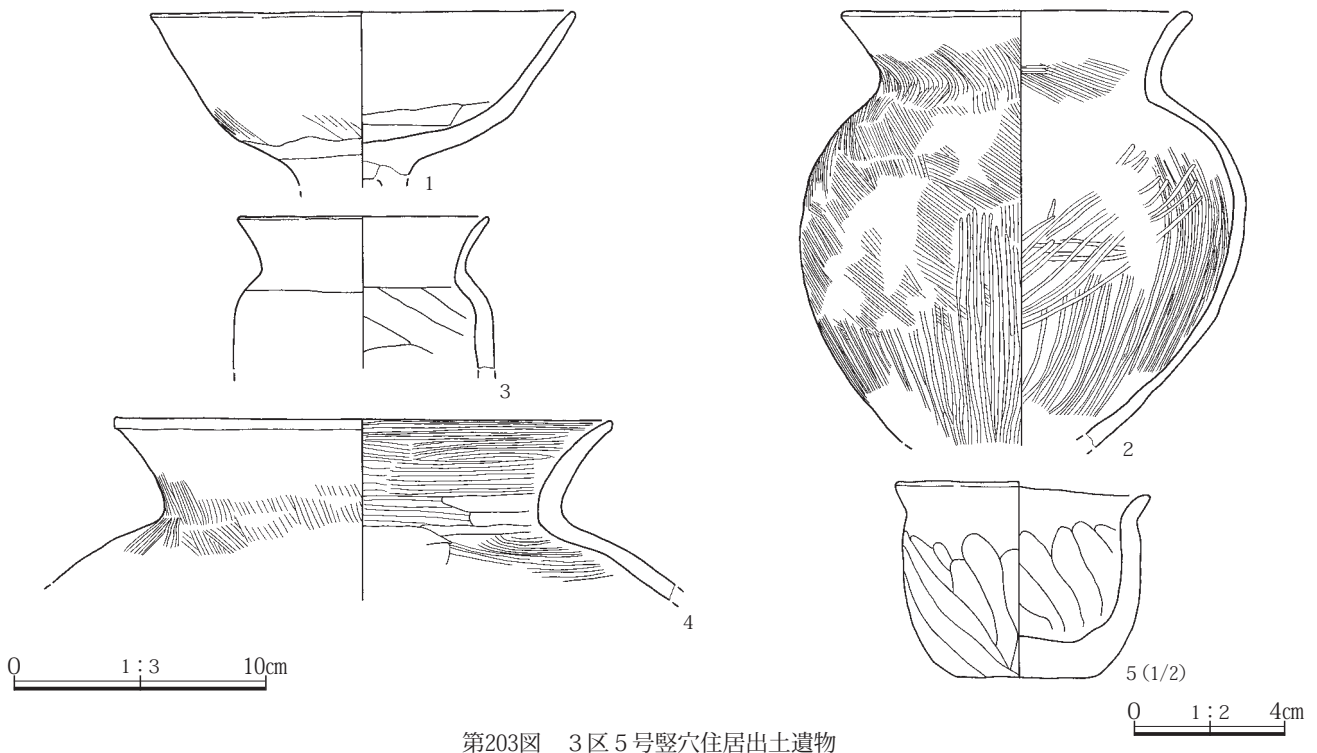
J, L=63.00m



K, L=63.00m



第202図 3区5号竪穴住居



第203図 3区5号竪穴住居出土遺物

土粒を少量含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。

**他の施設：**掘り方調査によって、床面下から1・2号床下土坑を確認した。1号床下土坑は住居のほぼ中央部、2号床下土坑は南壁際中央部に位置する。形状及び規模は、1号床下土坑(不整円形、長径1.12m、短径1.09m、深さ0.22m)、2号床下土坑(不整円形、長径1.02m、短径0.89m、深さ0.26m)である。

**掘り方：**大小ピット状及び土坑状の窪みが認められる。全体的に10～20cm掘り窪め、床面を整えている。

**遺物出土状態：**各時代の遺物が混在し、第206図の1・2は4世紀、3～8は6世紀、9・10は8世紀、11～15は9世紀と考えられる。土師器甕(第206図10)は床面上7cmから、土師器甕(第206図7)は床面上14cmから、土師器杯(第206図4・9)、須恵器椀(第206図11・12)、土師器台付甕(第206図1・2)、土師器甕(第206図15)、須恵器長頸壺(第206図13)、須恵器広口壺(第206図14)は埋没土から、土師器杯(第206図3)は掘り方から出土した。土製品土錘(第206図16)は床面下から出土した。非掲載遺物は、土師器211点(大型製品166、小型製品45)、須恵器6点(大型製品1、小型製品5)が出土した。

**所見：**出土遺物や竪穴住居の形状などから時期は、6世紀後半と考えられる。

### 3区7号竪穴住居(第207図 PL.71・125)

**位置：**X=119～124、Y=-370～374

**形状・規模：**東側が調査区外となるため、形状は長方形または方形と想定される。規模は、長軸長4.93m、短軸長3.57m、壁高北壁20cm、南壁14cm、西壁7cmを測る。確認できる面積は、14.14㎡である。

**主軸方位：**N-17°-W

**重複：**6号竪穴住居、22・23・25・34・69号土坑、9号ピットと重複する。7号竪穴住居は、6号竪穴住居、22・23・25・34・69号土坑、9号ピットより古い。

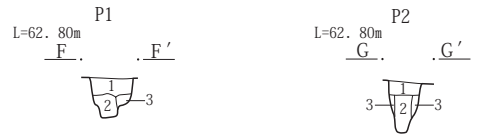
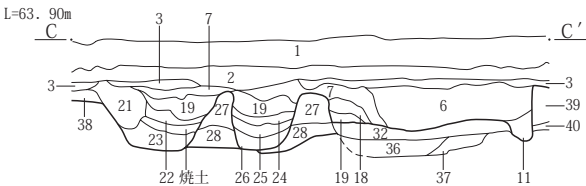
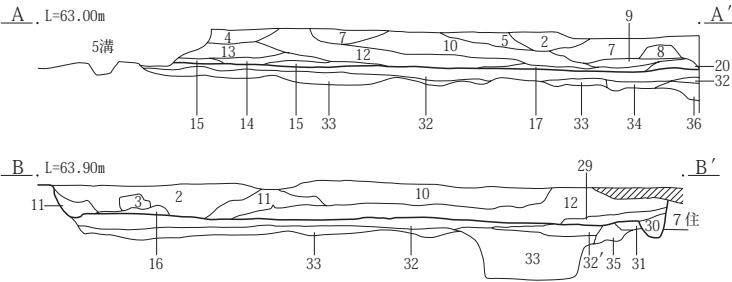
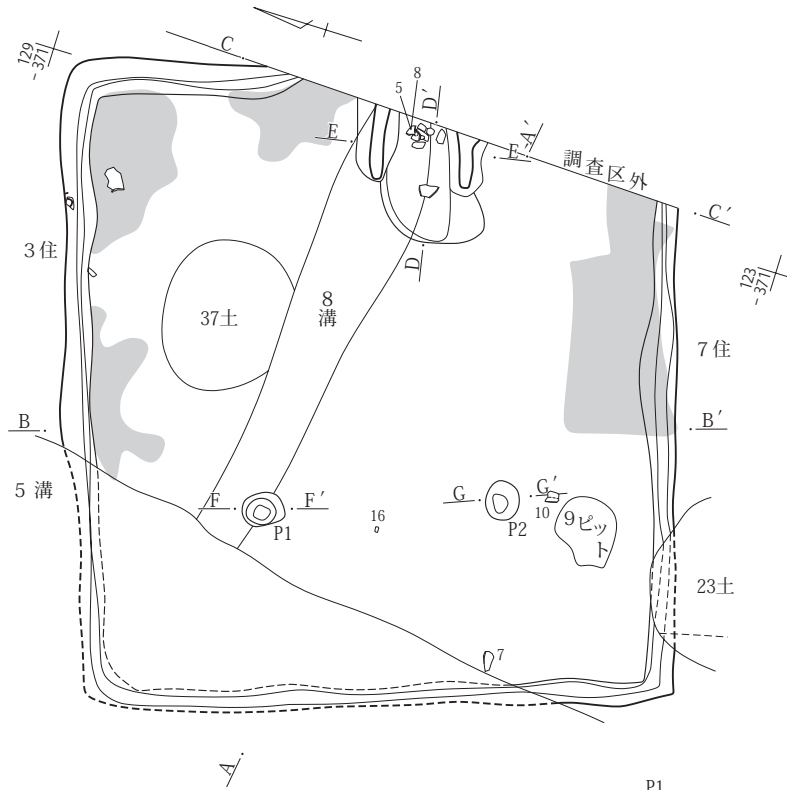
**埋没土：**黄褐色土粒・塊、焼土粒や炭化物を含む黒褐色土や暗褐色土の混土によって埋没し、埋没土下層の底面付近には焼土層や炭化物層が認められる。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、西壁際に比べ床面中央部が2～3cm低い。北壁際に長さ2.00m、幅0.40～0.89cmの範囲に焼土が認められることから、焼失住居の可能性はある。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**確認できなかったが、調査区外となる東壁に付設したと想定される。

**柱穴：**床面精査によって主柱穴2本の他に、ピット1基を確認した。P1は西壁面から1.70m、南壁面から1.10m、

3区6号竪穴住居

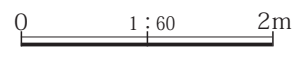


- 6号竪穴住居P1・2 F-F'・G-G'
1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊を含む、硬く締まりあり
  2. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊少量、柱痕か
  3. 灰黄褐色土 黒褐色土を含む

6号竪穴住居A-A'・B-B'・C-C'

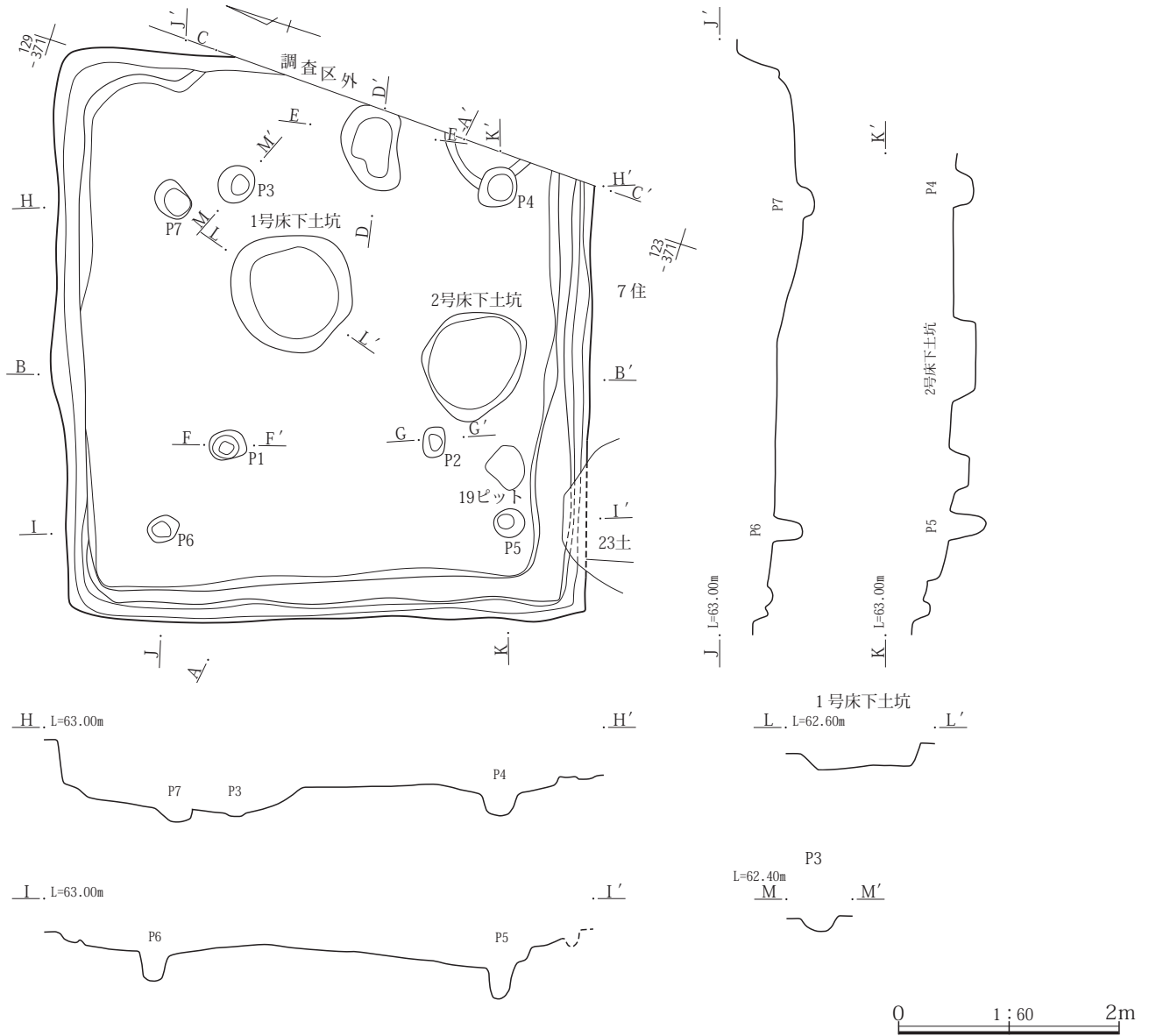
1. 灰黄褐色土 砂質土
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・Hr-FA極小塊少量、焼土粒・炭化物微量
3. 灰黄褐色土 Hr-FA大塊多量
4. 暗褐色土 やや砂質、黄褐色土粒・焼土粒・炭化物微量
5. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量、第1層より色味はやや暗い
6. 暗褐色土 黄褐色土塊を斑に含む、下層に焼土層あり
7. 暗褐色土 焼土大塊多量、褐色土大塊・炭化物少量
8. 灰黄褐色土 粘質土、カマド構築材の崩落
9. 暗褐色土 粘質土、黒褐色土小塊やや多量
10. 暗褐色土 黄褐色土小塊・黄褐色土粒少量、Hr-FA・焼土粒微量
11. 黒褐色土 黄褐色土大塊少量、焼土極小塊微量
12. 黒褐色土 黄褐色土中塊多量、焼土粒微量、第8層より色味は暗い
13. 黒褐色土 黄褐色土小塊少量、第10層より色味は明るい、締まりあり
14. 黒褐色土 黄褐色土極小塊少量、焼土粒微量、粘性ややあり
15. 焼土層 下層に炭化層あり
16. 黒褐色土 黄褐色土極小塊少量
17. 黒褐色土 灰層及び焼土層あり、黄褐色土小塊を含む
18. 褐色土 焼土塊多量
19. 灰黄褐色土 暗褐色土少量、色味はやや明るい
20. 暗褐色土 粘質土、黄褐色土粒少量、焼土粒微量、締まりあり

21. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量・黄褐色土粒多量
22. 暗褐色土 黒褐色土を含む
23. 暗褐色土 黒褐色土小塊やや多量
24. 灰褐色土 灰層主体
25. 褐灰色土 焼土塊・炭化物多量、灰を含む
26. 褐色土 灰黄褐色土塊、暗褐色土を含む
27. にぶい黄橙色土 明黄褐色土大塊を含む、カマド内部壁面が焼土化
28. 褐色土 灰黄褐色土塊、暗褐色土を含む
29. 黒褐色土 焼土層を含む、下層に炭化層あり
30. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、周溝埋没土
31. 黒褐色土 黄褐色土粒少量
32. 褐灰色土 黄褐色土小塊・粒多量、締まり強、貼床
- 32' 褐灰色土 黄褐色土大塊多量
33. 黒褐色土 黄褐色土大塊多量
34. 黒褐色土 やや砂質
35. 黒褐色土 灰黄褐色土中塊多量
36. 暗褐色土 粘質土、黄褐色土塊少量
37. 黒褐色土 粘質土、黄褐色土少量
38. 暗褐色土 黄褐色土粒少量
39. 暗褐色土 黄褐色土小塊・焼土塊を含む
40. 暗褐色土 焼土塊・粒多量

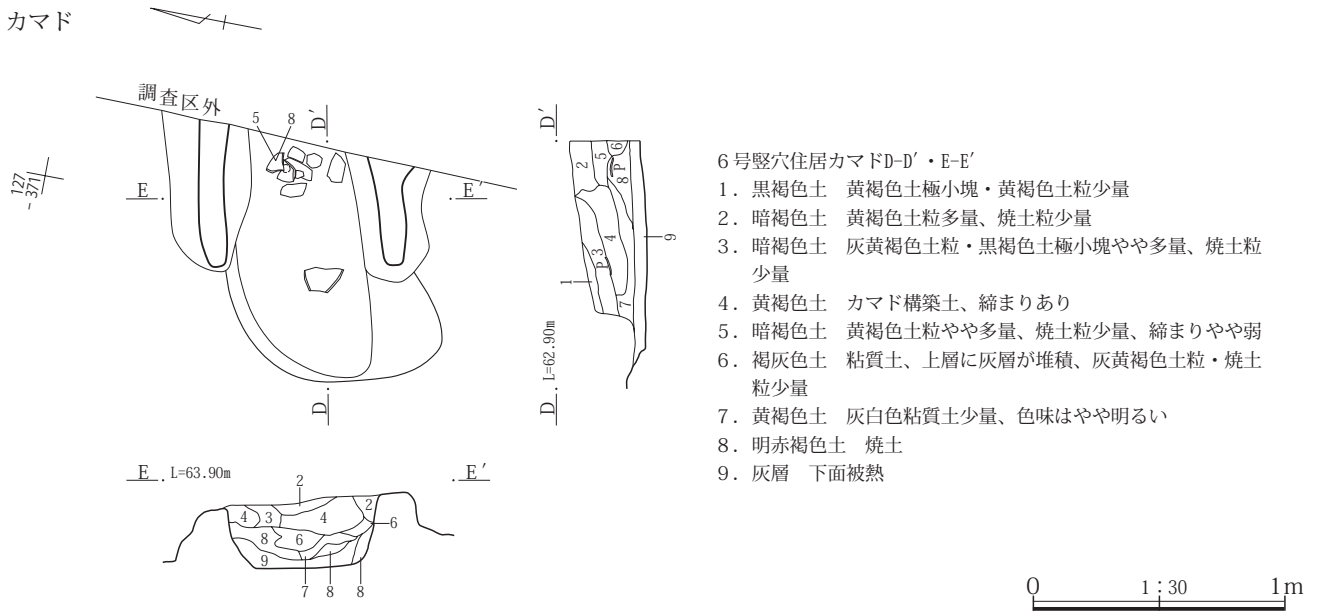


第204図 3区6号竪穴住居

3区6号竪穴住居掘方



カマド

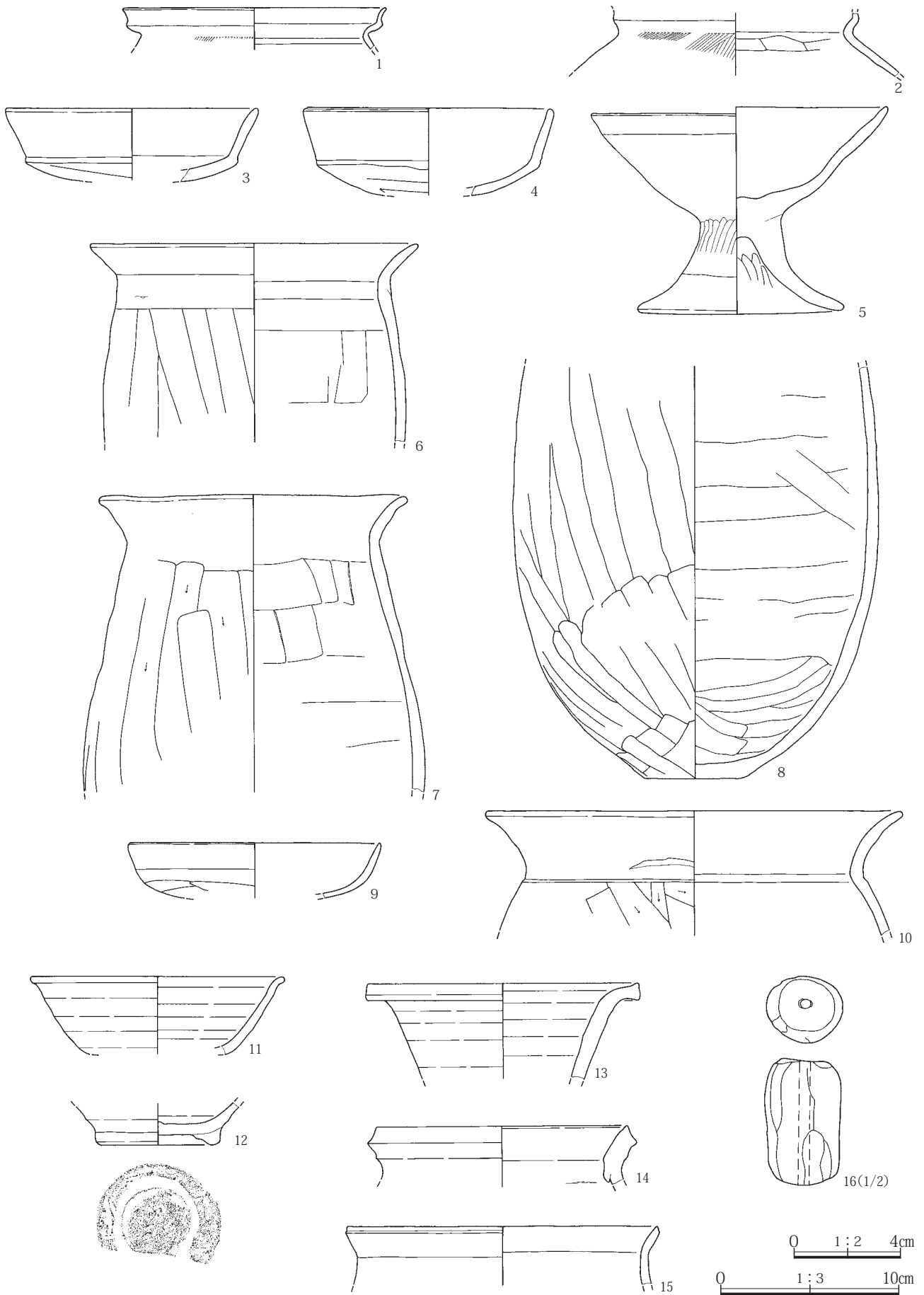


6号竪穴住居カマドD-D'・E-E'

1. 黒褐色土 黄褐色土極小塊・黄褐色土粒少量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒多量、焼土粒少量
3. 暗褐色土 灰黄褐色土粒・黒褐色土極小塊やや多量、焼土粒少量
4. 黄褐色土 カマド構築土、締まりあり
5. 暗褐色土 黄褐色土粒やや多量、焼土粒少量、締まりやや弱
6. 褐灰色土 粘質土、上層に灰層が堆積、灰黄褐色土粒・焼土粒少量
7. 黄褐色土 灰白色粘質土少量、色味はやや明るい
8. 明赤褐色土 焼土
9. 灰層 下面被熱

第205図 3区6号竪穴住居掘方・カマド





第206図 3区6号竪穴住居出土遺物

P 2は西壁面から1.75mの位置で確認し、2基のピットが主柱穴と考えられる。形状及び規模は、P 1(楕円形、長径28cm、短径20cm、深さ43cm)、P 2(楕円形、長径28cm、短径20cm、深さ33cm)、P 3(不定形、長径26cm、短径17cm、深さ12cm)である。P 1～P 2の柱間は、2.05mである。P 3は、P 1～P 2の軸線に乗らず、ややP 2寄りに位置するが、支柱穴の可能性はある。

**貯蔵穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**調査区境となるが床面中央部に集中する。土師器杯(第207図1～4)は床面直上～2cm、土師器杯(第207図5～8)、土師器甕(第207図9)は床面上4～5cmから出土した。非掲載遺物は、土師器238点(大型製品86、小型製品152)、須恵器2点(小型製品1、不明1)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

### 3区8号竪穴住居(第208～210図 PL.72・73・125・126)

**位置：**X=119～124、Y=-380～385

**形状・規模：**形状は方形である。規模は、長軸長4.48m、短軸長4.14m、壁高北壁31cm、東壁27cm、南壁6cm、西壁38cmを測る。面積は16.85㎡である。

**主軸方位：**N-81°-E

**重複：**15・20号竪穴住居、4～6・10・11・14～16号土坑、17号溝と重複し、8号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊、焼土粒を含む暗褐色土や褐色土である。壁際に三角堆積が認められ、下層から上層にかけてレンズ状に堆積することから自然埋没と考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、カマド焚口外側の床面周辺が2～3cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁中央部やや南寄りに付設する。燃烧面は床面より2～4cm低く、燃烧部側壁から燃烧部奥壁、煙道にかけて残存状況は良好である。煙道が東壁から外側にあまり伸びない構造である。規模は、全長1.27m、燃烧部幅0.45m、燃烧部奥行き0.99m、焚口幅0.54m、左袖状残存部長さ1.00m、右袖状残存部長さ0.91mを測る。煙道は、東壁から外へ0.30m延びる。主軸方位は、N-86°-Eである。掘り方は、燃烧面から外側にかけて8

～12cm、燃烧面から奥壁にかけて約0.20～0.22m掘込み、黄褐色土粒や灰褐色土を含む黒褐色土により整えている。出土遺物が多く、土師器杯(第209図1)は焚口周辺の燃烧面上5cm、土師器杯(第209図3)が燃烧部側壁左側の床面上4cm、土師器甕(第209図8)が焚口外側の床面直上から出土した。土師器杯(第209図4)、土師器高杯(第209図6)は燃烧面下から出土した。土師器甕(第209図9)は燃烧面上16cm、土師器甕(第210図10・11)は燃烧面上9～10cm、土師器甕(第209図16)は埋没土から出土した。

**貯蔵穴：**床面南東隅に位置し、カマド右側に構築する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は台形を呈し、開口部に段差を設ける。規模は長径1.09m、短径0.88m、深さ0.34mを測る。下層は暗褐色土と黄褐色土塊の混土であり、上層は焼土粒や炭化物、黄褐色土塊や黒褐色土塊を多量に含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。土師器杯(第209図2)は底面上30cmから、土師器甕(第210図14)は底面直上から、土師器甕(第210図12)は床面直上から出土した。

**柱穴：**床面の対角線上に位置する4本のピットは主柱穴と考えられる。形状及び規模は、P 1(円形、長径31cm、短径30cm、深さ25cm)、P 2(楕円形、長径34cm、短径29cm、深さ35cm)、P 3(不定形、長径35cm、短径31cm、深さ31cm)、P 4(楕円形、長径19cm、短径16cm、深さ33cm)である。柱間は、P 1～P 2間2.00m、P 2～P 3間1.67m、P 3～P 4間1.98m、P 1～P 4間2.08mである。P 2～P 3間が他の柱間に比べやや短い。

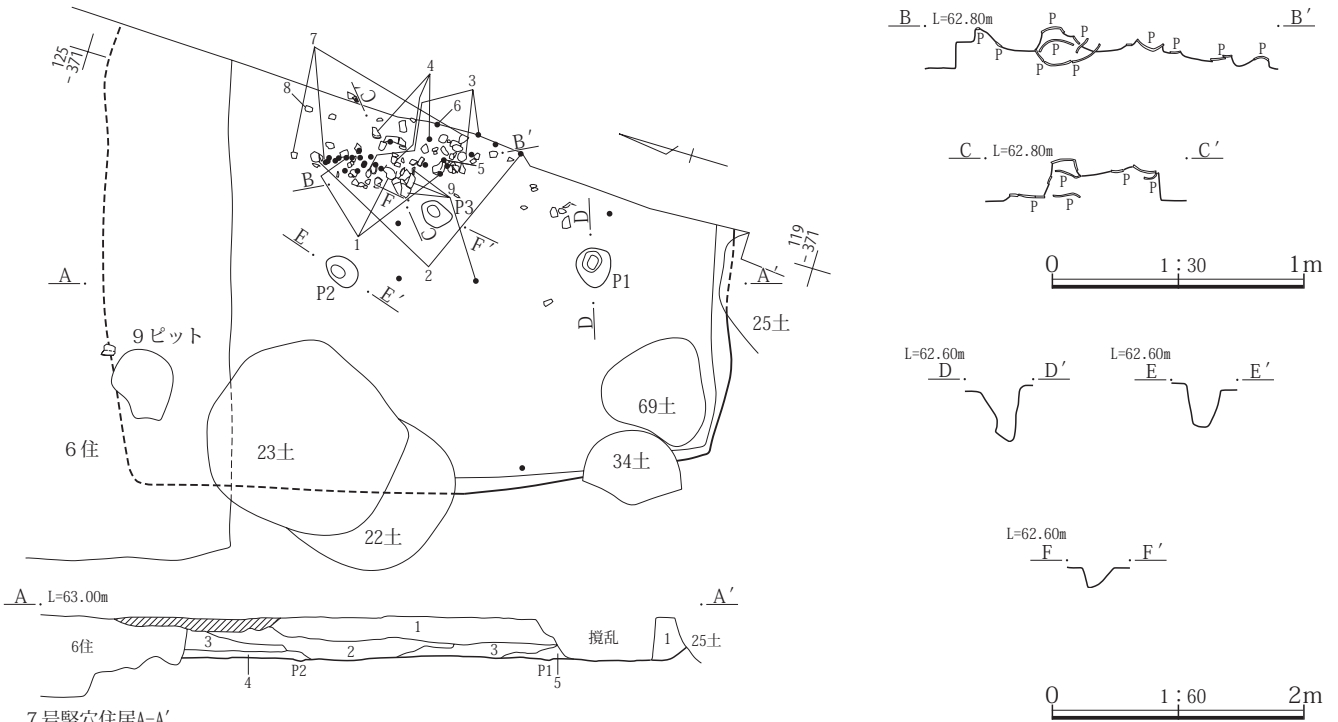
**周溝：**北東隅からカマド燃烧部側壁右側まで掘込まれている。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第209図5)、土師器鉢(第209図7)、土師器甕(第209図13)が中央部床面上4～7cmから、土師器甕(第209図15)が北壁際の床面直上から、土製品土玉(第210図17)が南西隅の床面直上から出土した。棒状礫(第210図18)がカマド左側の床面直上から出土した。非掲載遺物は、土師器378点(大型製品310、小型製品68)、須恵器7点(小型製品)、灰釉陶器1点(大型製品)が出土した。

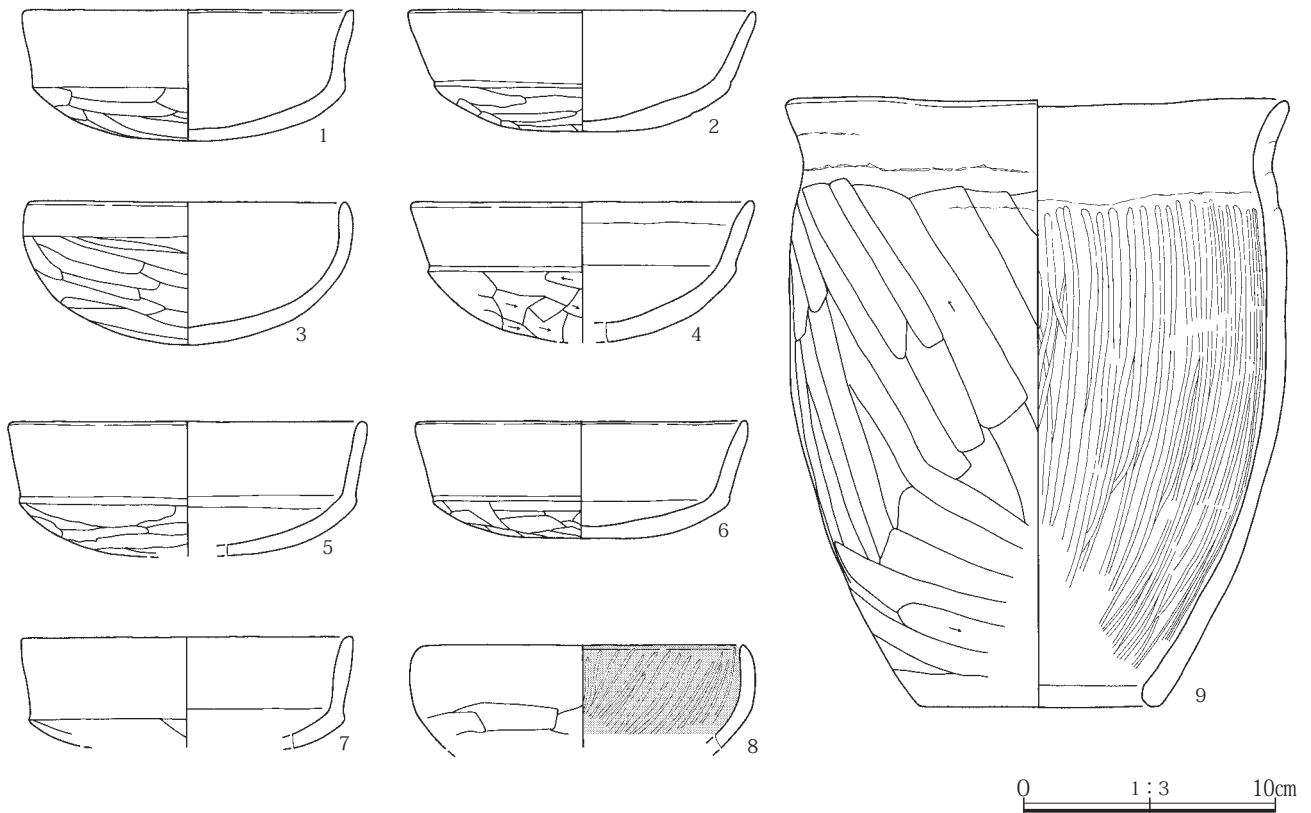
**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

3区7号竪穴住居



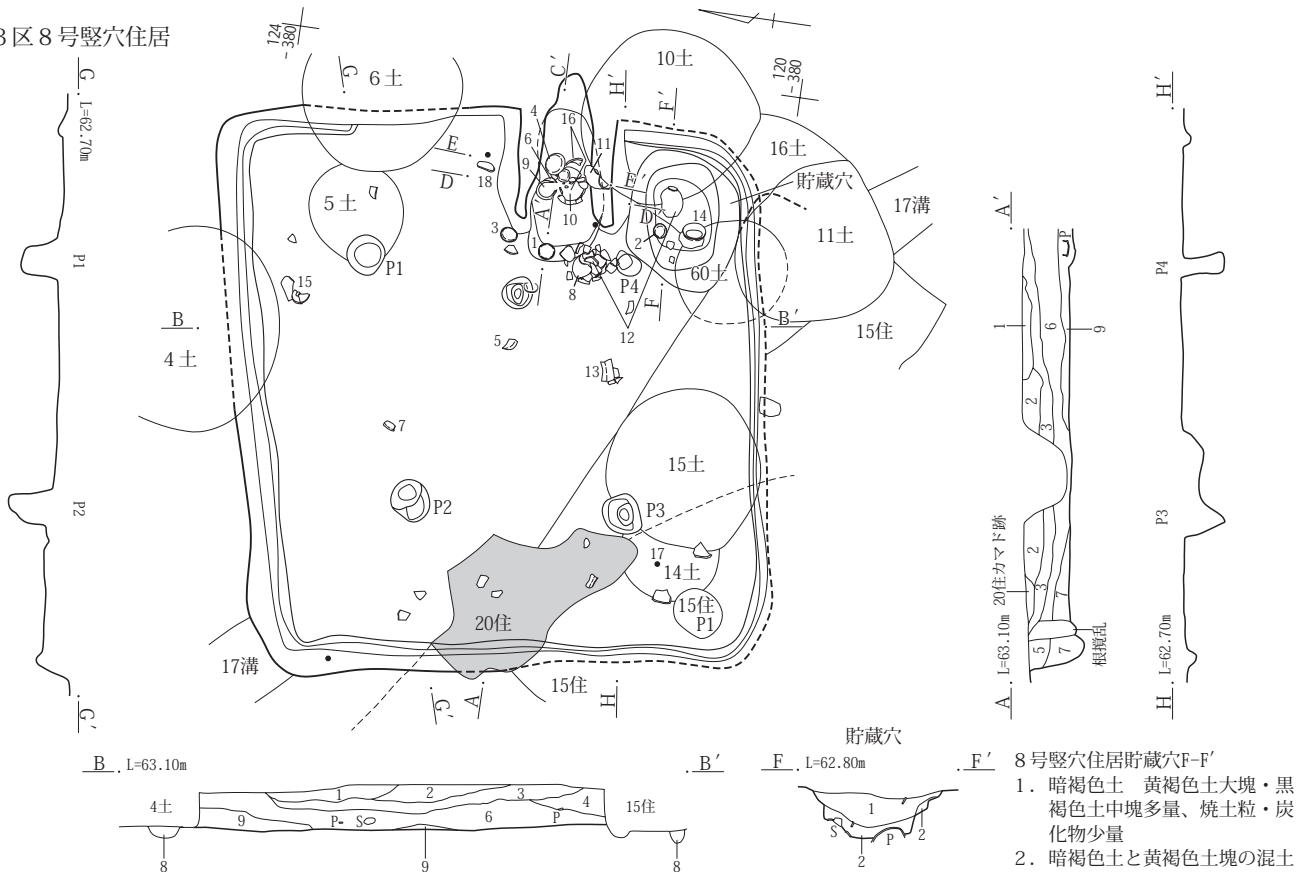
7号竪穴住居A-A'

1. 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒は第1層より多量、焼土粒・炭化物微量
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊やや多量、第2層より色味は暗い、下部に焼土層・炭化層が堆積
4. 黒褐色土 黄褐色土粒微量
5. 黒褐色土 黄褐色土大塊少量



第207図 3区7号竪穴住居と出土遺物

3区8号竪穴住居



8号竪穴住居A-A'・B-B'

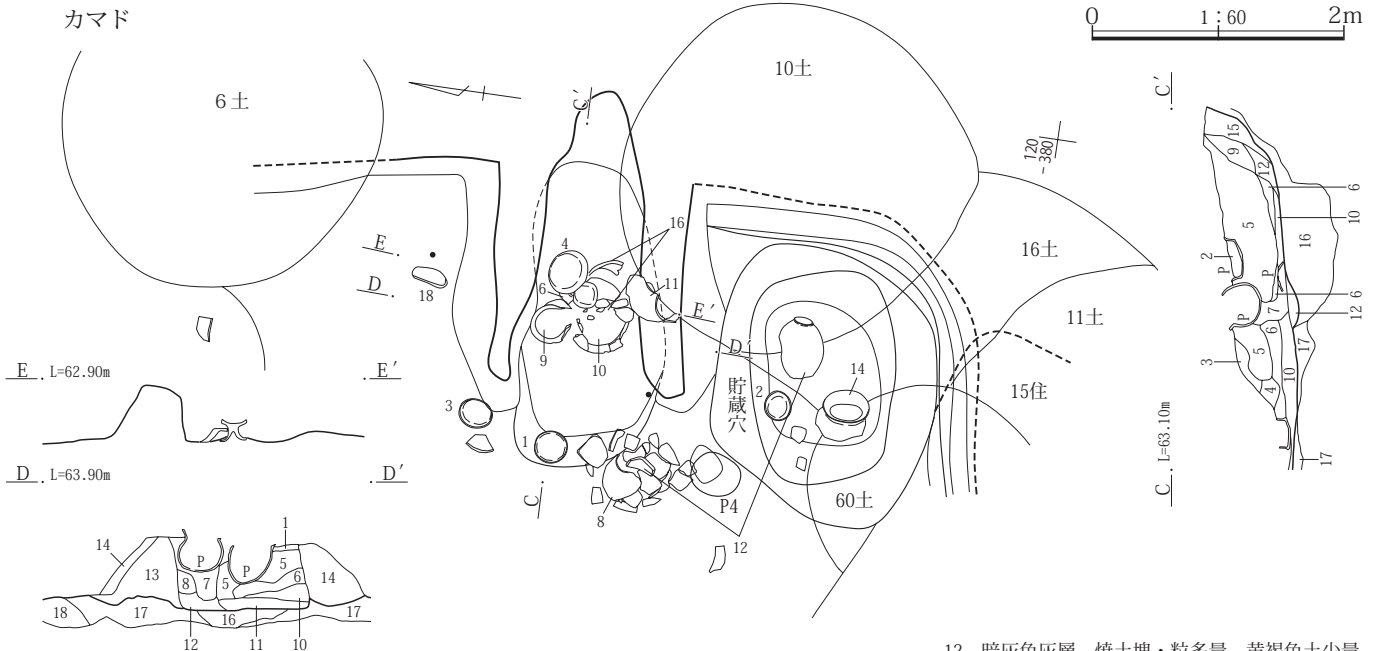
1. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土極小塊少量、焼土粒・炭化物微量、第1層より締まり弱
3. 暗褐色土 Hr-FA多量
4. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量、第1層より色味は暗い、

5. 褐色土 暗褐色土塊、焼土粒多量

6. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒褐色土小塊多量、焼土粒微量
7. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土中塊多量
8. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒褐色土小塊多量、焼土粒微量、第6層より色味は暗い、粘性あり
9. 灰褐色土 粘質土、黄褐色土小塊・粒多量

- 貯藏穴 F-F'
1. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒褐色土中塊多量、焼土粒・炭化物少量
  2. 暗褐色土と黄褐色土塊の混土

カマド



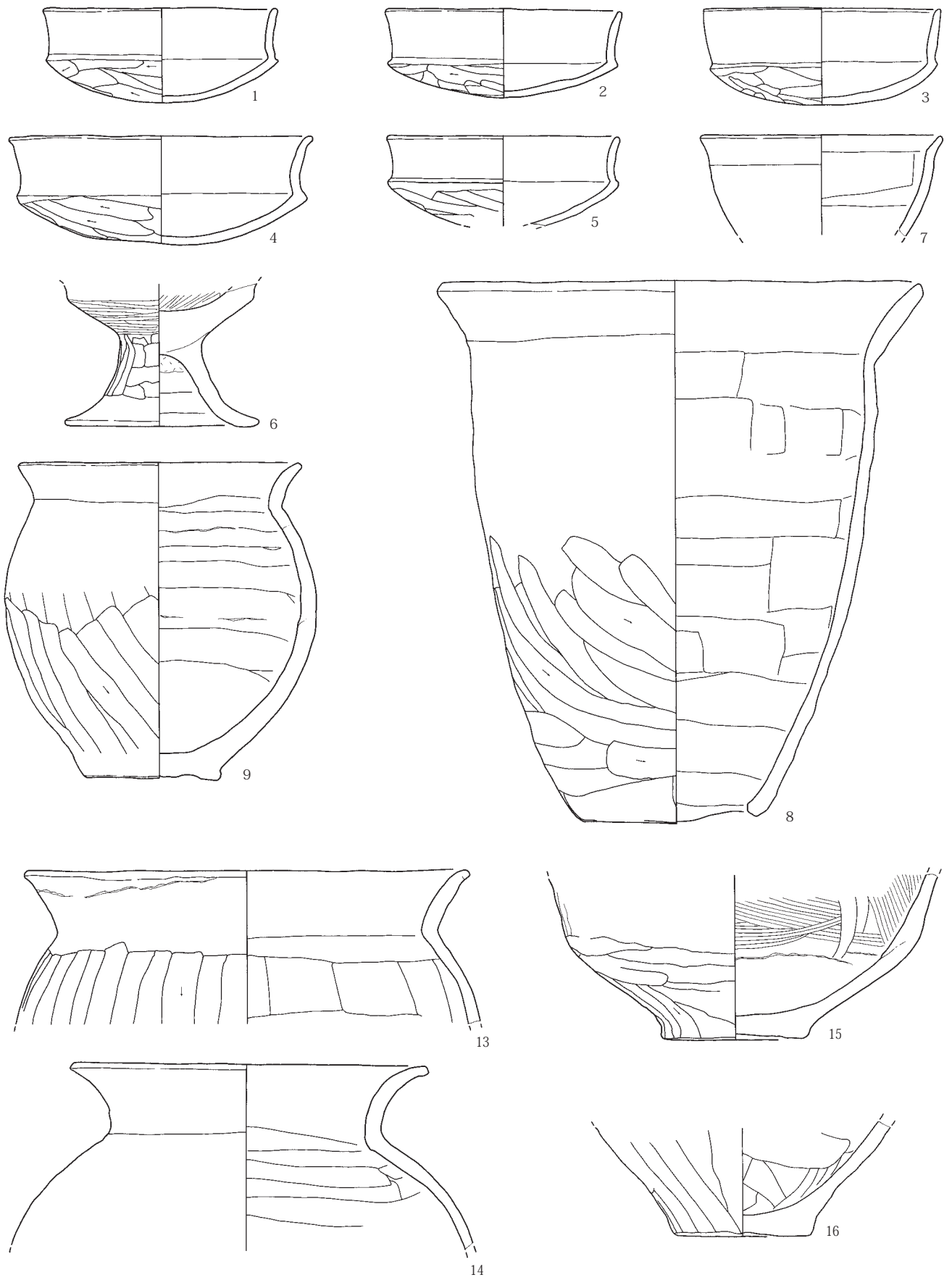
8号竪穴住居カマドC-C'・D-D'

1. 褐灰色土 砂質土
2. 灰褐色土 粘質土
3. 暗褐色土 黄褐色土粒少量
4. 灰褐色土 粘質土、暗褐色土、焼土粒少量
5. 灰褐色土 粘質土、焼土塊少量

6. 橙色土 焼土塊
7. 暗褐色土 灰褐色土粒を含む、締まり弱
8. 灰褐色土 粘質土、下層焼土塊、上層に灰多量
9. 明黄褐色土 被熱による焼土化が顕著
10. 暗灰色灰層 焼土小塊・粒多量
11. 暗灰色灰層 第10層に近似、白黄褐色土塊多量

12. 暗灰色灰層 焼土塊・粒多量、黄褐色土少量
13. 黄褐色土 粘質土、燃焼部側壁左側の構築土
14. 灰褐色土 粘質土 燃焼部側壁右側の構築土
15. 黄褐色土 ローム粒微量
16. 黒褐色土 焼土粒を斑に含む
17. 黒褐色土 焼土粒・灰褐色粘質土を含む
18. 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量

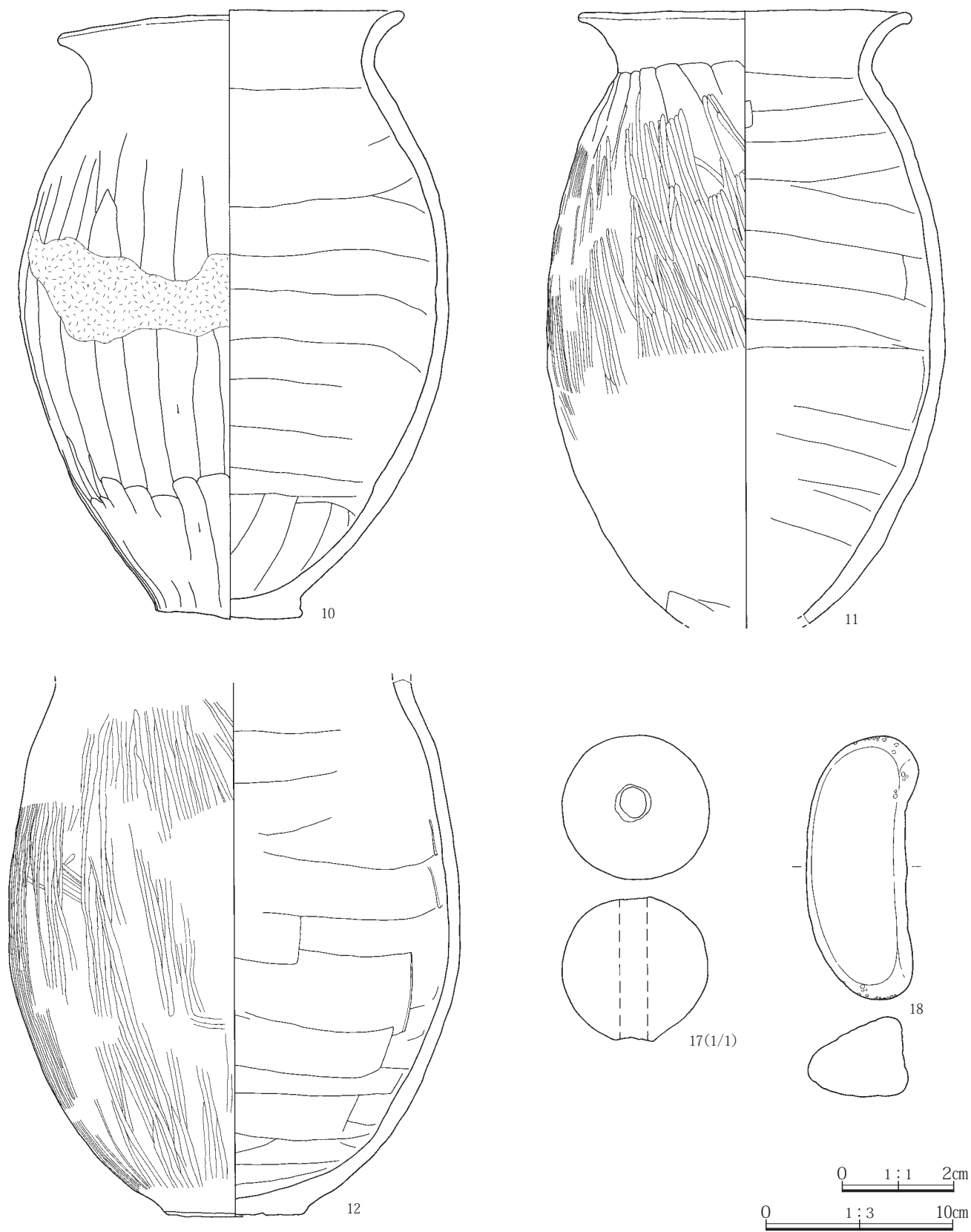
第208図 3区8号竪穴住居



0 1:3 10cm

第209図 3区8号竪穴住居出土遺物(1)





第210図 3区8号竪穴住居出土遺物(2)

**3区9号竪穴住居**(第211・212図 PL.73・127)

**位置**：X=114～118、Y=-375～380

**形状・規模**：形状は方形である。規模は、長軸長3.97m、短軸長3.83m、壁高北壁13cm、東壁38cm、南壁5cm、西壁62cmを測る。面積は14.58㎡である。

**主軸方位**：N-81°-E

**重複**：17号竪穴住居、78号土坑、15・16・17・27号ピット、5・11・17号溝と重複する。9号竪穴住居は、17号竪穴住居と78号土坑より新しく、15・16・17・27号ピット、5・11・17号溝より古い。

**埋没土**：黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土であり、下層に焼土粒や炭化物が認められる。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。

**床面**：床面のレベル差は、東壁際に比べ西壁際が4～5cm高く、北壁際より南壁際が1～3cm低い。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド**：東壁中央部やや南寄りに付設する。燃烧面は床面より2cm低く、燃烧部側壁から燃烧部奥壁にかけて残存状況は良好である。規模は、全長0.97m、燃烧部幅0.34m、燃烧部奥行き0.84m、焚口幅0.32m、左袖状残存部長さ0.89m、右袖状残存部長さ0.91mを測る。煙道は東壁から外側へあまり出ない構造である。主軸方位は、N-83°-Eである。焚口から外側の床面には焼土が残存する。遺物は燃烧面や焚口外側の床面から出土した。土師器高杯(第212図6)は燃烧面上8cmの他、燃烧部側壁右側や貯蔵穴周辺から出土した。

**貯蔵穴**：床面南東隅に位置し、カマド右側に構築する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は台形を呈し、西側にピット状の掘込みが認められる。規模は、長径0.77m、短径0.66m、深さ0.51mを測る。土師器甕(第212図8)は底面上2cm、土師器甕(第212図9)は底面上4cmの他、カマド燃烧部側壁外側の床面下から出土した。

**柱穴**：床面精査を行ったが確認できなかった。

**周溝**：西壁からカマド左側の東壁まで確認し、南壁では確認できなかった。規模は、幅15～20cm、深さ7～21cmを測る。

**他の施設**：床面下から1号床下土坑を確認した。1号床下土坑は北壁際のやや東寄りに位置する。形状は隅丸長方形を呈し、規模は、長径1.04m、短径0.93m、深さ0.38mである。埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土塊を含

む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。

**掘り方**：住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態**：カマド焚口周辺から貯蔵穴にかけて遺物が多数出土した。土師器杯(第212図1)は貯蔵穴開口部付近の床面上4cmから、土師器杯(第212図2)は住居南東隅の床面上3cmから、土師器杯(第212図4・5)は床面下から、土師器鉢(第212図7)は住居南東隅の床面直上から、土師器杯(第212図3)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器380点(大型製品291、中型製品2、小型製品87)、須恵器5点(小型製品)、灰釉陶器2点(小型製品)が出土した。

**所見**：出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

**3区10号竪穴住居**(第213・214図 PL.74・75・127)

**位置**：X=111～116、Y=-379～385

**形状・規模**：14号溝との重複のため全体の形状や規模は不明である。平面形状は長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長5.10m、短軸長4.59m、壁高北壁8cm、東壁29cm、西壁41cmを測る。

**主軸方位**：N-54°-E

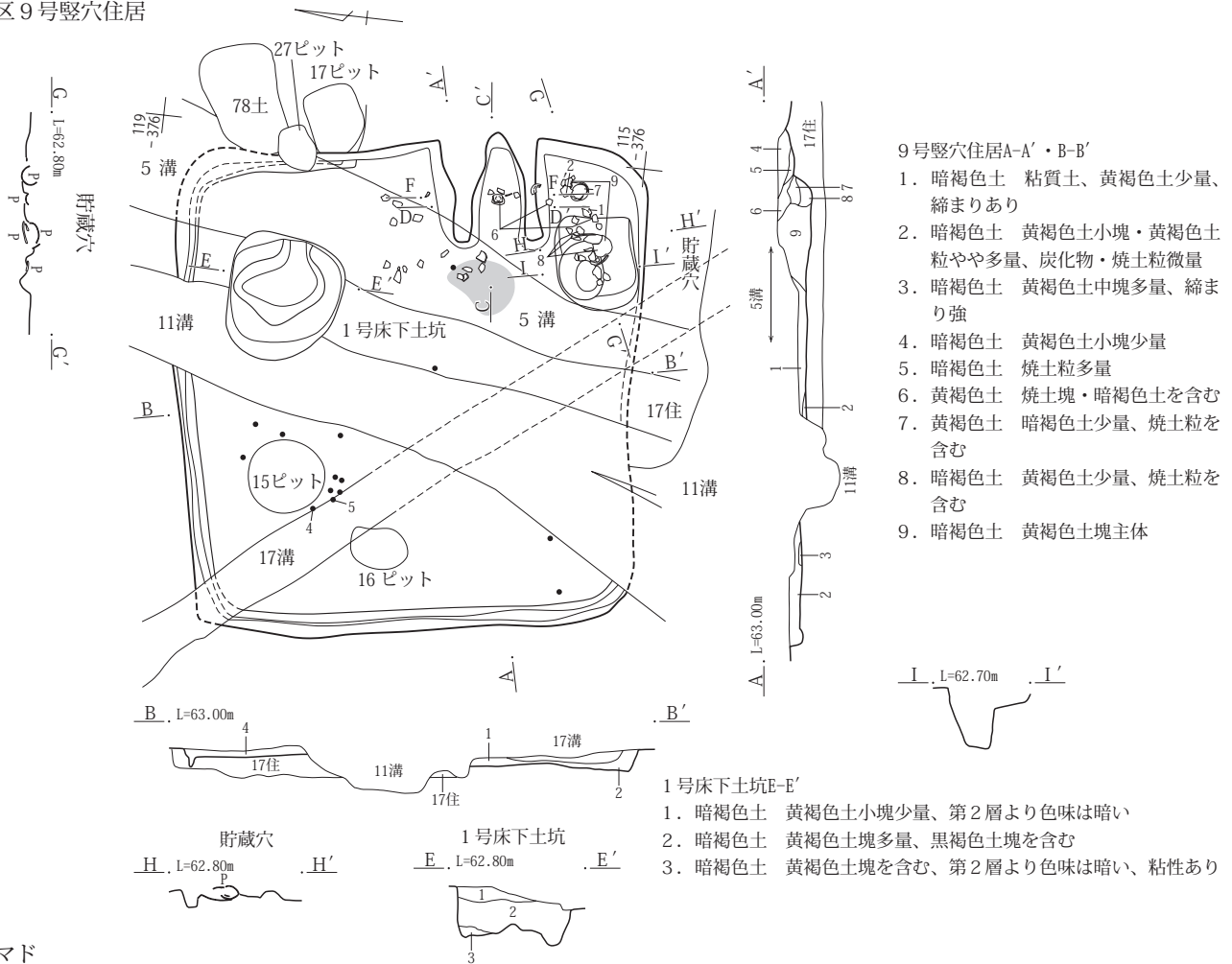
**重複**：16・22・23号竪穴住居、61・62・73・83号土坑、52号ピット、5・11・14号溝と重複する。10号竪穴住居は、16・22・23号竪穴住居、52号ピットより新しく、61・62・73・83号土坑、5・11・14号溝より古い。

**埋没土**：埋没土は、黄褐色土粒・塊、焼土粒、炭化物などを含む暗褐色土、暗褐色土塊や黄褐色土粒を含む黒褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

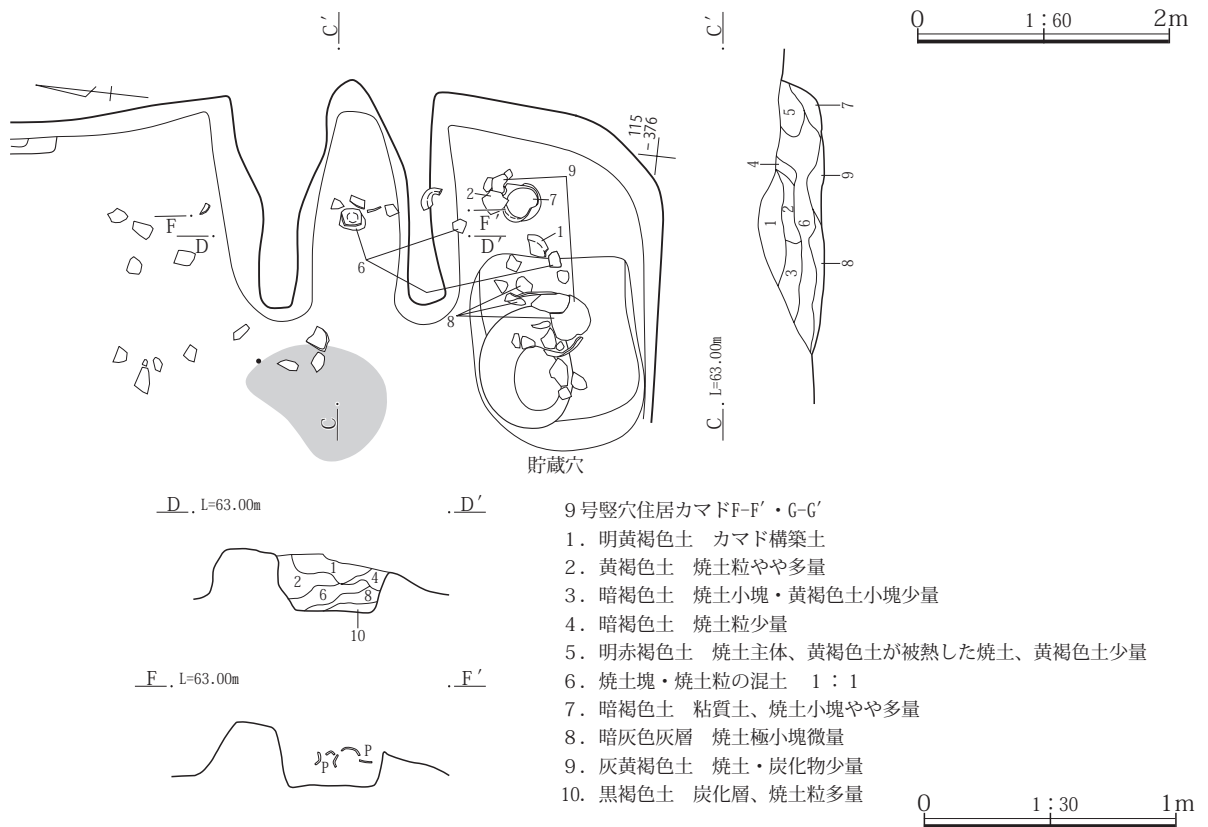
**床面**：床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、西壁際に比べ東壁際が2cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド**：東壁に付設する。カマド燃烧部側壁や燃烧部奥壁にかけて残存状況は良好である。規模は、全長1.00m、幅1.05m、燃烧部幅0.41m、焚口幅0.46cm、右袖状残存部長さ0.85m、左袖状残存部長さ0.75mを測り、床面とカマド燃烧面のレベル差はない。主軸方位は、N-57°-Eである。カマドの掘り方は、燃烧面下を15～70cm掘込み、浅黄橙色粘土塊、焼土粒・塊を含む黒褐色土と褐灰色粘土塊と黒褐色土の混土によって整える。土師器甕(第214図8)は燃烧面や焚口外側の床面上2～12cmから、土師器杯(第214図1)は掘り方から出土した。

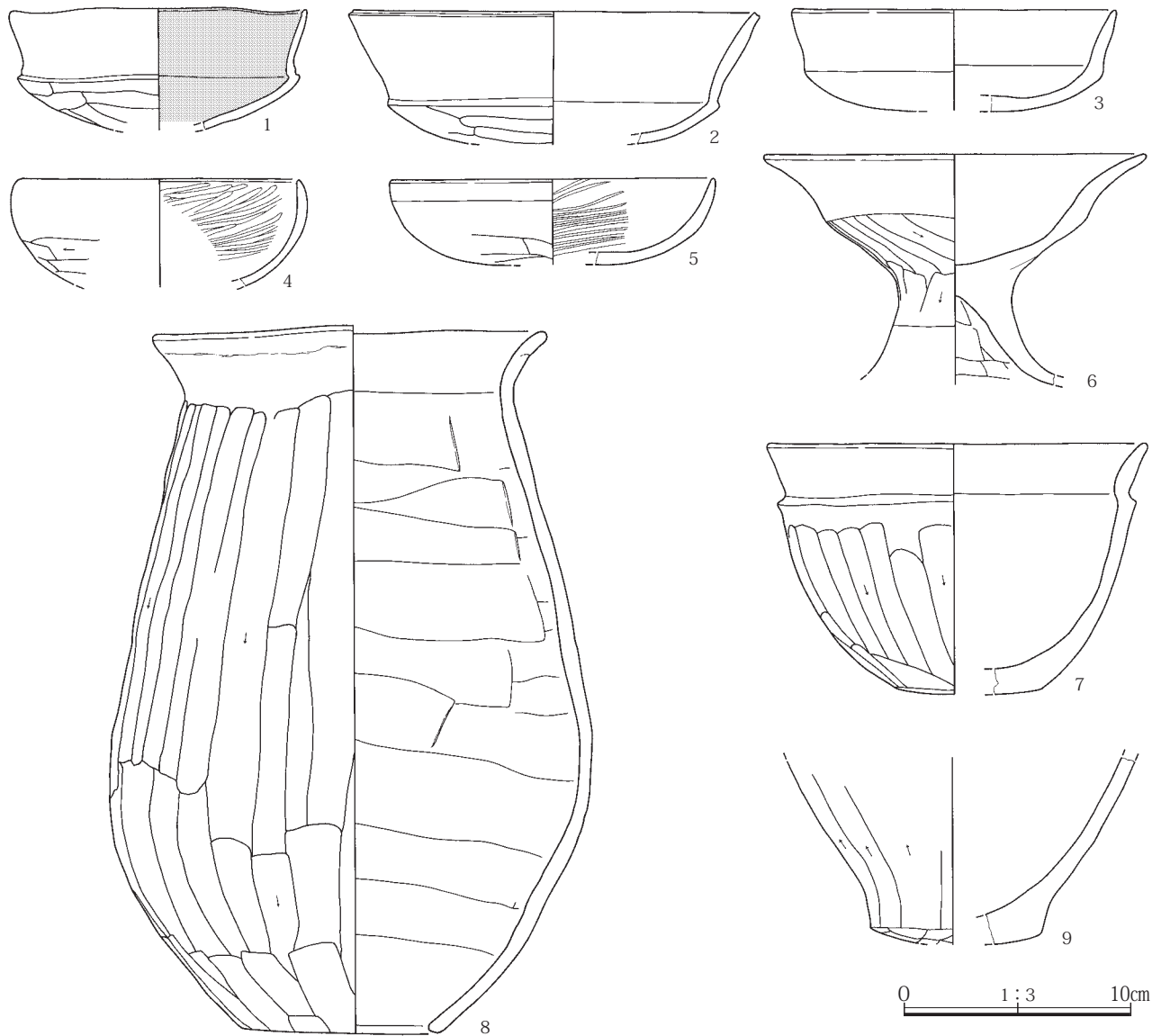
3区9号竪穴住居



カマド



第211図 3区9号竪穴住居



第212図 3区9号竪穴住居出土遺物

**貯蔵穴：**床面精査を行い、カマド右側で貯蔵穴を確認した。平面形状は不定形で、規模は、長径0.62m、短径0.56m、深さ0.51mを測る。出土遺物はなかった。

**柱穴：**床面精査を行い、主柱穴3本を確認した。形状及び規模は、P 1 (不定形、長径35cm、短径27cm、深さ33cm)、P 2 (不定形、長径23cm、短径20cm、深さ27cm)、P 3 (円形、長径42cm、短径38cm、深さ26cm)である。柱間は、P 1～P 2間2.15m、P 1～P 3間2.12mである。P 2の第1層が柱痕と考えられ、黄褐色土粒・塊を多量に含む暗褐色で充填する。P 1に明瞭な柱痕は確認できなかった。

**周溝：**カマド左側の東壁、北壁、西壁が掘込まれる。カマド右側の壁際では確認できなかった。規模は、幅9～32cm、深さ3～12cmを測る。埋没土は、黄褐色土粒を

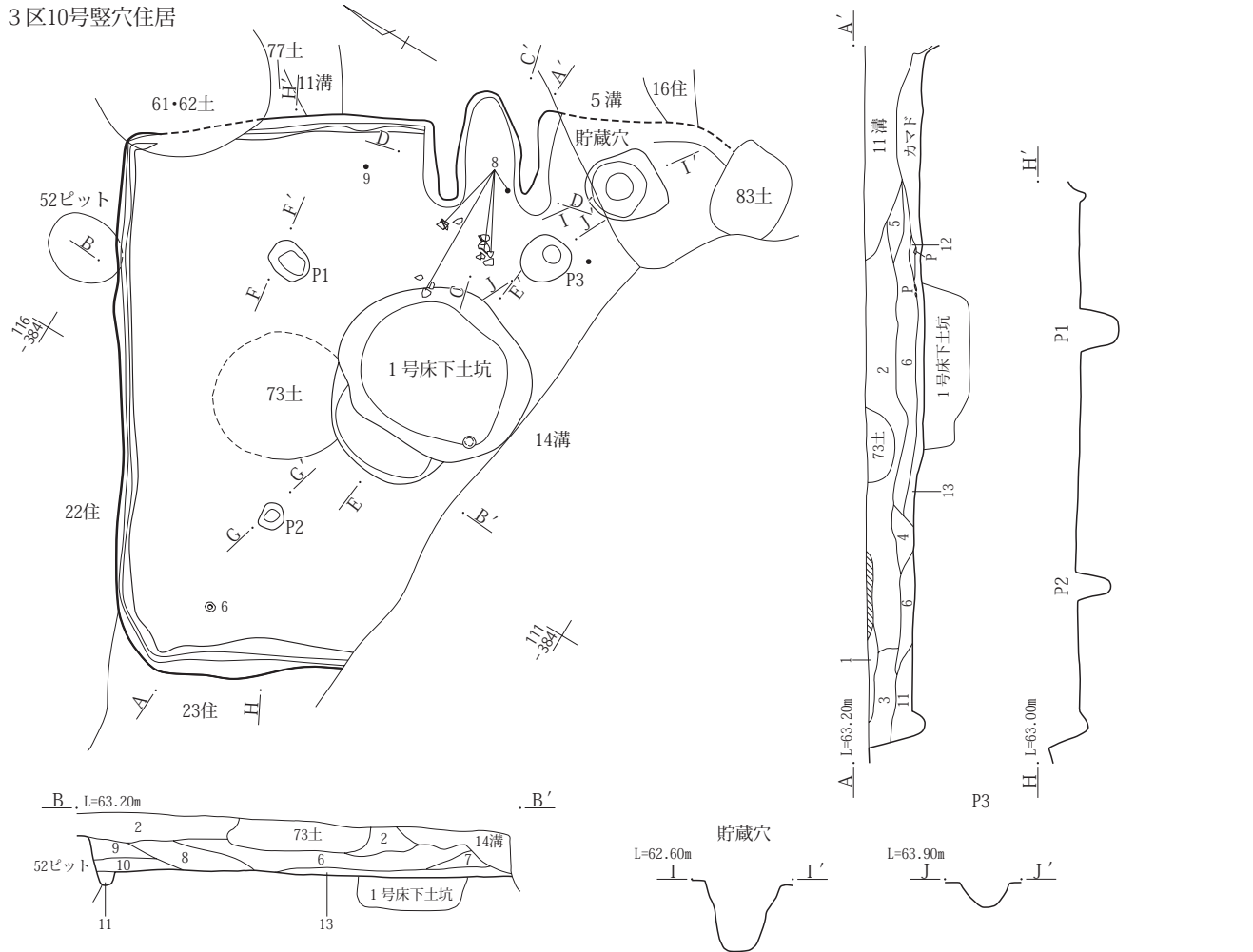
少量含む黒褐色土で人為的に埋戻す。

**他の施設：**床面下から1号床下土坑を確認した。カマド焚口外側から床面のほぼ中央部に位置する。形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦で、開口部にかけて壁は斜めに立ち上がり、西側にスロープ状の中段を設ける。規模は、長径1.72m、短径1.64m、深さ0.39mである。埋没土は、明黄褐色土塊を多量に含むにぶい黄褐色土と黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。

**掘り方：**カマドに掘り方は認められたが、住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器高杯(第214図6)は北西隅の床面上3cmから、土師器甕(第214図9)は東壁際の床面直上から、土師器杯(第214図2・3)、土師器器台(第214図4)

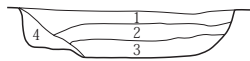
3区10号竪穴住居



10号竪穴住居A-A'・B-B'

- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土粒微量、粘性ややあり</li> <li>2. 黒褐色土 暗褐色土小塊・黄褐色土粒微量</li> <li>3. 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土粒微量、粘性ややあり、第1層より縮まり弱</li> <li>4. 暗褐色土 焼土粒微量、粘性ややあり</li> <li>5. 暗褐色土 焼土粒微量、縮まりあり</li> <li>6. 暗褐色土 黄褐色土極小塊少量</li> </ol> | <ol style="list-style-type: none"> <li>7. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒・炭化物少量、やや粘質</li> <li>8. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黄褐色土塊・粒多量、焼土粒・炭化物微量</li> <li>9. 暗褐色土 黄褐色土粒多量、焼土粒・炭化物微量</li> <li>10. 暗褐色土 第9層より各含有物が多く含まれる</li> <li>11. 黒褐色土 黄褐色土中粒少量</li> <li>12. 黒褐色土と黄褐色土の混土</li> <li>13. 暗褐色土 灰・炭化物・焼土粒少量</li> </ol> |
|--|---|

E. L=62.80m 1号床下土坑 E'



1号床下土坑E-E'

1. 床面 黒褐色土・黄褐色土塊・灰黄褐色土塊・暗褐色土の混合土、黒褐色土主体
2. 黒褐色土・黄褐色土塊・灰黄褐色土塊・暗褐色土の混合土、暗褐色土主体
3. 暗褐色土 第2層に近似、灰黄褐色土塊・黄褐色土粒多量
4. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量

L=63.80m P1 F. F'



10号竪穴住居P1F-F'

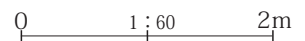
1. 暗褐色土 黄褐色土塊・黒褐色土極小塊やや多量、焼土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土塊多量

L=63.80m P2 G. G'



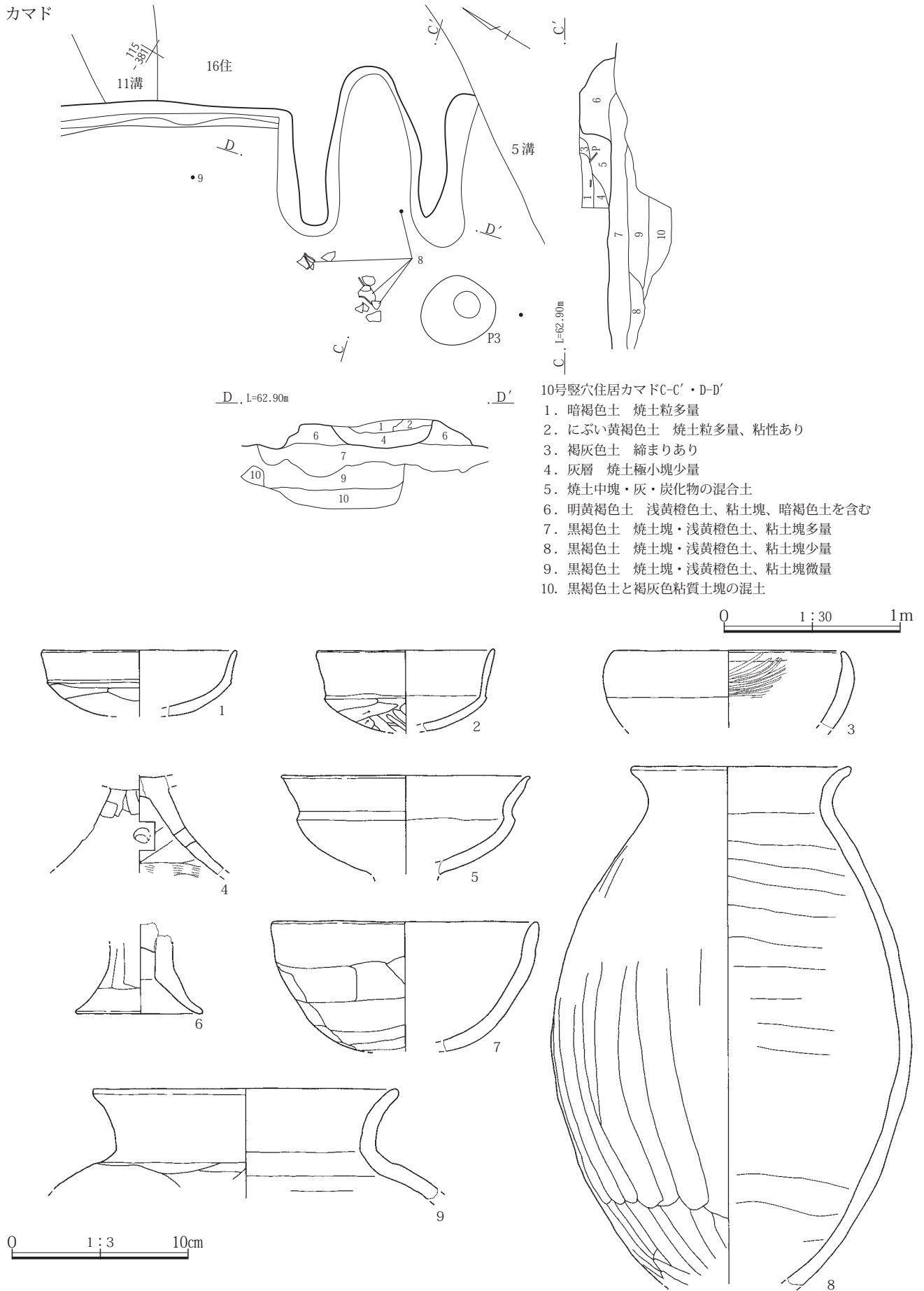
10号竪穴住居P2G-G'

1. 暗褐色土 柱痕、黄褐色土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土極小塊多量



第213図 3区10号竪穴住居





第214図 3区10号竪穴住居カマドと出土遺物

土師器高杯(第214図5)、土師器鉢(第214図7)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器962点(大型製品948、中型製品5、不明9)、須恵器104点(大型製品25、小型製品79)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

### 3区12号竪穴住居(第215～217図 PL.75～77・128)

**位置：**X=122～128、Y=-395～401

**形状・規模：**形状は長方形を呈する。規模は、長軸長5.10m、短軸長4.64m、壁高北壁24cm、東壁30cm、南壁23cm、西壁19cmを測る。面積は22.57㎡である。

**主軸方位：**N-33°-W

**重複：**18・57号土坑、12号溝と重複し、12号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土塊、黒褐色土塊、暗褐色土粒などを含む黒褐色土、暗褐色土、にぶい黄橙色土であり、堆積状況から自然埋没と考えられる。上層の暗褐色土にはAs-B混土が含まれ、第2層の褐色土に含まれる黄灰色砂質土は洪水層の可能性がある。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、北壁際と南壁際との比高4cmで南側が低い。カマドが付設された北壁際から中央部にかけて焼土が広範囲に認められる。使用による硬化面は確認できなかった。

**カマド：**北壁中央部に付設する。燃烧面と床面とのレベル差はなく、燃烧部側壁から燃烧部奥壁、煙道にかけて残存状況は良好である。規模は、全長1.13m、燃烧部幅0.45m、燃烧部奥行き1.00m、焚口幅0.62m、左袖状残存部長さ0.94m、右袖状残存部長さ0.86mを測る。煙道は北壁から外へ0.15m延びる。主軸方位は、N-28°-Wである。掘り方は、焚口から燃烧面を0.33m、燃烧部奥壁から煙道を0.05～0.20m掘込み、ローム粒を含む黒褐色土により整えている。土師器杯(第217図4)は燃烧面上2cmから、土師器有孔鉢(第217図9)、土師器甕(第217図12)は燃烧部側壁右側際の床面直上から、石製模造品(第217図15)は燃烧部側壁左側際の床面上8cmから出土した。

**貯蔵穴：**床面南東隅で確認した。平面形状は不整円形で、規模は、長径0.78m、短径0.58m、深さ0.33mを測る。断面形状は台形を呈する。埋没土は、灰白色土塊を含む黒褐色土と黒色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しか

は不明である。土師器鉢(第217図7)は底面上38cmの開口部外側からの出土である。

**柱穴：**床面の対角線上に位置する4本のピットは主柱穴と考えられる。形状及び規模は、P1(円形、長径48cm、短径46cm、深さ61cm)、P2(円形、長径49cm、短径44cm、深さ40cm)、P3(円形、長径55cm、短径54cm、深さ60cm)、P4(不定形、長径58cm、短径46cm、深さ70cm)である。柱間は、P1～P2間2.62m、P2～P3間2.32m、P3～P4間2.68m、P1～P4間2.31mである。柱間は、東西間に比べ南北間が長い。土層断面の観察からP1とP2に明瞭な柱痕は認められない。P3の第3層とP4の第4層は柱痕であり、黒褐色土によって充填する。土師器杯(第217図2)はP1の埋没土から出土した。

**周溝：**カマド付設部分以外はほぼ全周する。規模は、幅18～35cm、深さ11～35cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第217図1・3)はカマド右側の床面上7～8cmから、土師器杯(第217図5)はP2左側床面上3cmから出土した。土師器高杯(第217図6)はP1南側の床面上4cmから、土師器鉢(第217図8)はカマド右側の床面直上～5cmから、土師器甕(第217図14)は北東隅壁際の床面上21cmから、土師器甕(第217図13)はカマド右側の床面直上～3cmから出土した。土師器台付甕(第217図10・11)は埋没土からの出土である。非掲載遺物は、土師器350点(大型製品318、小型製品27、不明5)、須恵器7点(大型製品3、小型製品4)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

### 3区13号竪穴住居(第218・219図 PL.78・128)

**位置：**X=118～125、Y=-386～393

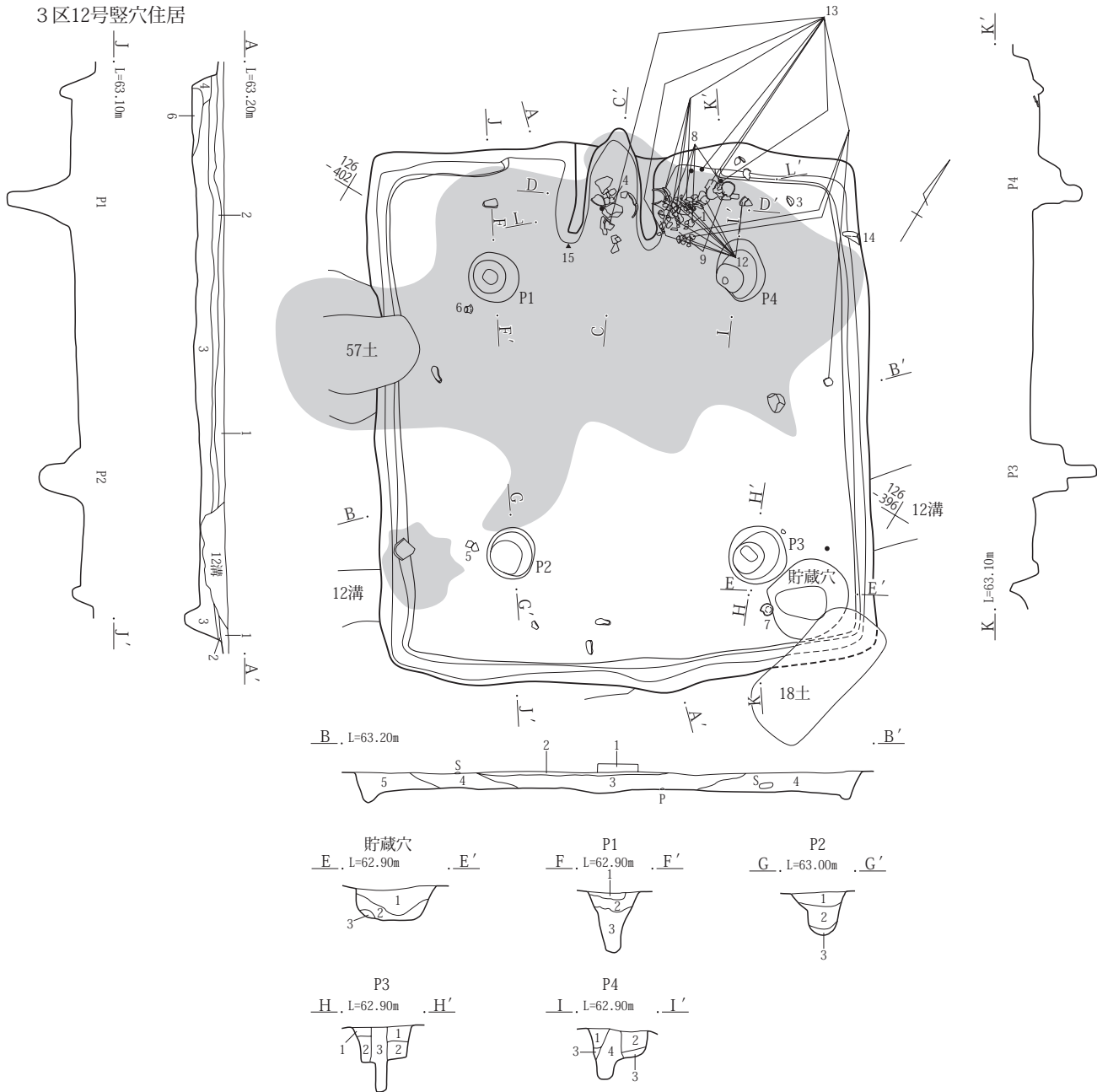
**形状・規模：**形状は方形である。規模は、長軸長4.87m、短軸長4.71m、壁高北壁及び東壁17cm、南壁36cm、西壁5cmを測る。面積は18.32㎡である。

**主軸方位：**N-142°-W

**重複：**11・19号竪穴住居、81号土坑、1号ピットと重複する。13号竪穴住居は、11号竪穴住居より古く、19号竪穴住居、81号土坑、1号ピットより新しい。

**埋没土：**にぶい橙色土小塊や褐灰色土小塊、焼土粒を含む黒褐色土や暗褐色土である。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

3区12号竪穴住居



12号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 As-B混土、黄褐色土粒微量、締まりあり
2. 褐色土 黄灰色砂質土多量、締まりあり
3. 暗褐色土 黒褐色土小塊やや多量、黄褐色土小塊少量、締まりやや弱
4. 暗褐色土 黄褐色土極小塊やや多量
5. 黒褐色土 暗褐色土粒少量、粘性ややあり
6. にぶい黄橙色土 黒色土粒多量、焼土粒少量

12号竪穴住居貯蔵穴E-E'

1. 黒色土 灰白色土小塊少量
2. 黒褐色土 灰白色土塊を含む
3. 褐灰色土 明黄褐色大塊主体

12号竪穴住居P1F-F'

1. 黒褐色土 黄褐色土小塊少量、As-Cを含む
2. 黒褐色土 黄褐色土小塊・灰白色土小塊を含む
3. 黒褐色土と灰白色土の混土

12号竪穴住居P2G-G'

1. 黒褐色土 黄褐色土小塊・灰白色土小塊少量
2. 灰白色土 黒色土小塊を含む
3. 黒色土 灰白色土小塊少量

12号竪穴住居P3H-H'

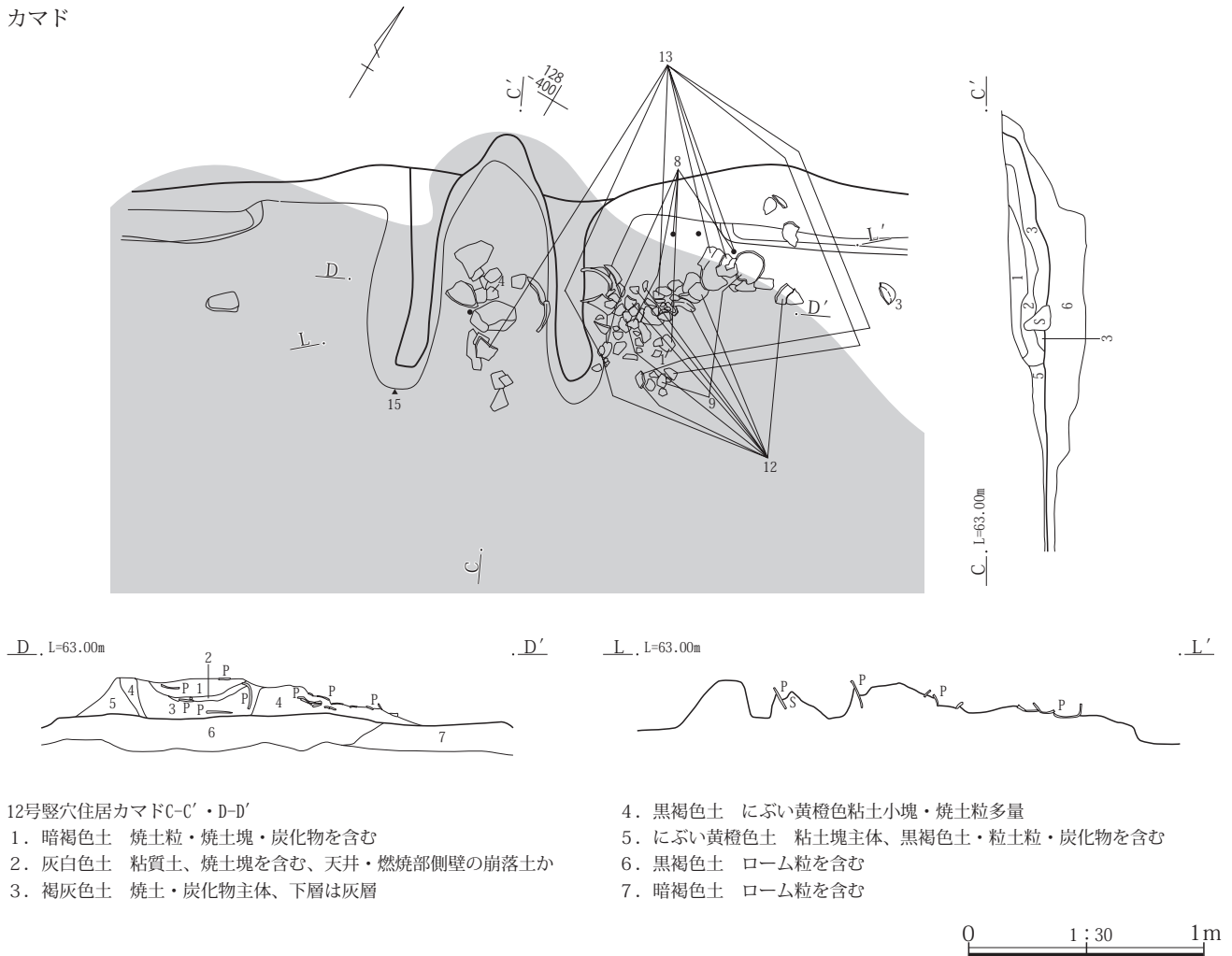
1. 黒褐色土 灰白色土塊を含む、締まり強
2. 黒褐色土 灰色土塊少量、締まり弱
3. 黒褐色土 柱痕

12号竪穴住居P4I-I'

1. 灰白色土 黒褐色土塊を含む
2. 黒褐色土 炭化粒、灰白色土小塊少量
3. 灰白色土 黒褐色土小塊少量
4. 黒褐色土 柱痕

第215図 3区12号竪穴住居

カマド



12号竪穴住居カマドC-C'・D-D'

- 1. 暗褐色土 焼土粒・焼土塊・炭化物を含む
- 2. 灰白色土 粘質土、焼土塊を含む、天井・燃烧部側壁の崩落土か
- 3. 褐灰色土 焼土・炭化物主体、下層は灰層

- 4. 黒褐色土 にぶい黄橙色粘土小塊・焼土粒多量
- 5. にぶい黄橙色土 粘土塊主体、黒褐色土・粒土粒・炭化物を含む
- 6. 黒褐色土 ローム粒を含む
- 7. 暗褐色土 ローム粒を含む

第216図 3区12号竪穴住居カマド

**床面：**北壁際と南壁際との比高2～6cmで南側から北側にかけて高くなる。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**南壁中央部やや東寄りに付設する。カマド煙道が南壁面から外側に長く延びる構造である。11号竪穴住居との重複のため、燃烧部側壁右側を遺失するなど残存状況は良好ではない。確認できる規模は、全長1.30m、燃烧部幅0.35m、燃烧部奥行き0.53m、焚口幅0.56m、煙道の長さ0.61m、左袖状残存部長さ0.63m、を測る。床面とのレベル差は、カマド燃烧面が3cm低い。主軸方位は、N-141°-Wであり、住居の主軸方位とほぼ同一である。

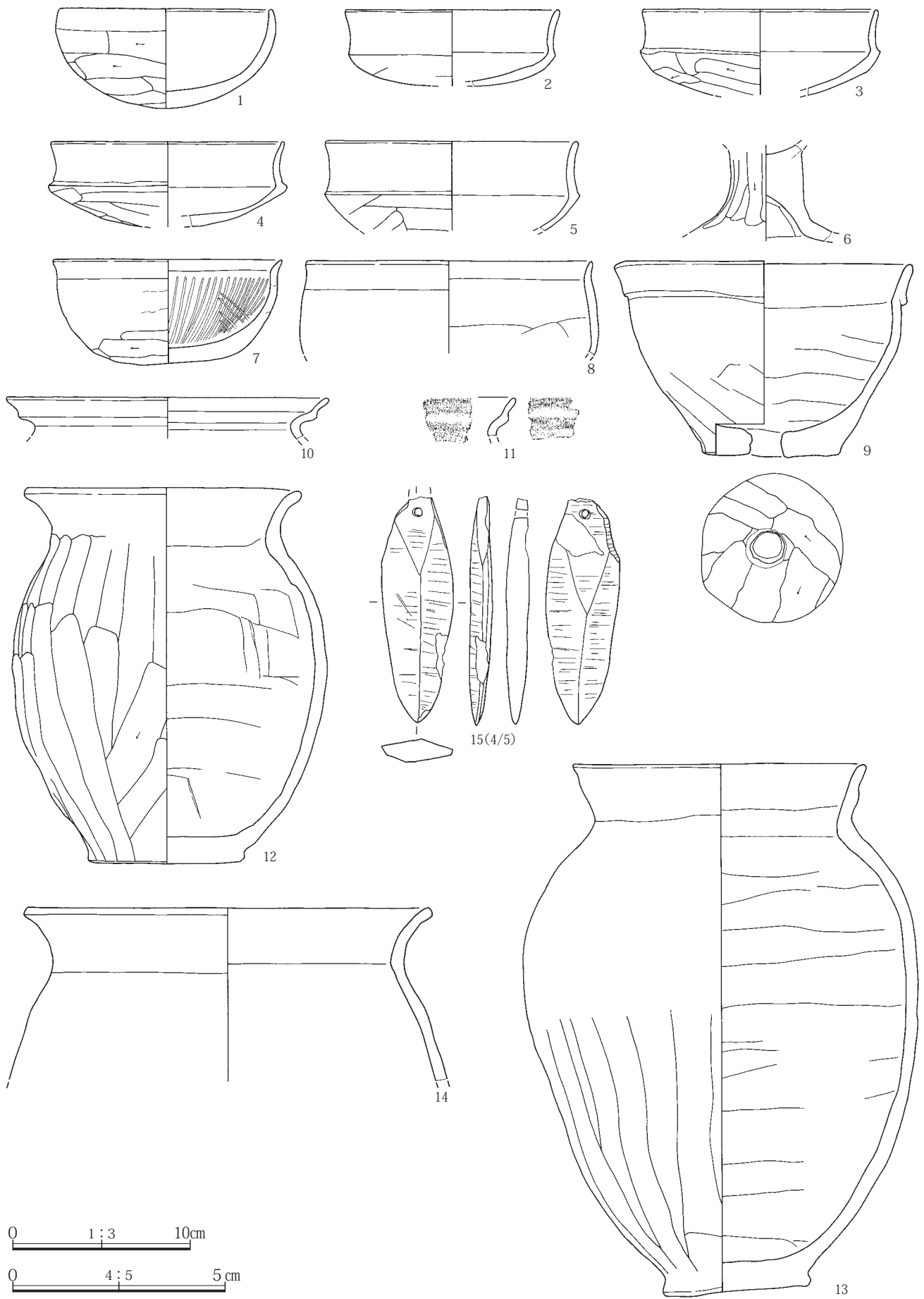
**貯蔵穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**掘り方調査によって主柱穴4本と主柱穴以外の何らかの施設となるピット3基を確認した。P1～4は主柱穴であり、形状及び規模は、P1(楕円形、長径60cm、短径46cm、深さ34cm)、P2(楕円形、長径56cm、短径51cm、

深さ39cm)、P3(不定形、長径37cm、短径35cm、深さ22cm)、P4(不定形、長径44cm、短径39cm、深さ35cm)である。柱間は、P1～P2間2.50m、P2～P3間3.00m、P3～P4間2.70m、P1～P4間3.00mである。柱間の長さは、南北間より東西間が長い。P5の形状は不整円形で、長径39cm、短径33cm、深さ32cmを測る。東壁際のほぼ中央部に位置し、梯子など出入口施設の下部構造の可能性はある。P6とP7はP1に隣接し、形状及び規模は、P6(楕円形、長径32cm、短径25cm、深さ19cm)、P7(不定形、長径42cm、短径45cm、深さ36cm)である。

**周溝：**カマド付設部分以外はほぼ全周する。規模は、幅12～24cm、深さ1～43cmを測る。埋没土は、にぶい橙色土小塊を多量に含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。

**掘り方：**大小ピット状及び土坑状の窪みが認められ、凹凸が著しい。全体的に5～28cm掘り窪め、灰黄褐色土



第217図 3区12号竪穴住居出土遺物



塊や明黄褐色土塊などを多量に含む黒褐色土、暗褐色土、褐灰色土の混土によって床面を整えている。特に床下の施設は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第219図1)、土師器甕(第219図4)、土師器輪羽口か(第219図5)は北東壁際の床面下から、灰釉陶器長頸壺(第219図2・3)は北壁際の床面下から出土した。北東壁際に棒状礫が集中し、棒状礫(第219図6～8)は床面下から出土した。非掲載遺物は、土師器286点(大型製品130、中型製品4、小型製品152)、須恵器47点(大型製品10、小型製品37)、礫石器棒状礫2点出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

### 3区14号竪穴住居(第220図 PL.78・129)

**位置：**X=114～118、Y=-398～402

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形または長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長4.25m、短軸長3.28m、壁高北壁9cm、東壁20cmを測る。

**主軸方位：**N-62°-E

**重複：**24・31号竪穴住居、79号土坑、5号井戸、14号溝と重複する。14号竪穴住居は、24号竪穴住居より新しく、31号竪穴住居、79号土坑、5号井戸、14号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、東壁際に比べ中央部が約2cm低い。床面に明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁中央部に付設する。燃焼面は床面より1cm低く、燃焼部側壁から燃焼部奥壁、煙道にかけて残存する。規模は、全長1.02m、幅0.54、燃焼部幅0.15m、燃焼部奥行き0.65m、焚口幅0.37m、左袖状残存部長さ0.80m、右袖状残存部長さ1.05mを測る。煙道が東壁面より内側に入る構造である。主軸方位は、N-70°-Eである。カマド燃焼面は、住居床面より2～3cm低い。焼土粒・塊、黄褐色土粒・灰を含む暗褐色土で埋没する。土師器甕(第220図4)は燃焼面上3cmから、土師器手捏ね椀形(第220図5)は掘り方から出土した。

**貯蔵穴・柱穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**周溝：**東壁中央部と北壁に掘込まれている。規模は、幅

14～19cm、深さ9～20cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器器台または高杯(第220図1)は床面直上から出土した。土師器器台付甕(第220図2・3)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器134点(大型製品132、小型製品2)、須恵器1点(大型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

### 3区15号竪穴住居(第221・222図 PL.79・80・129)

**位置：**X=116～121、Y=-380～386

**形状・規模：**形状は方形である。規模は、長軸長4.47m、短軸長4.40m、壁高北壁2cm、東壁22cm、南壁5cm、西壁25cmを測る。面積は14.38㎡である。

**主軸方位：**N-115°-E

**重複：**8・20・22号竪穴住居、11・14～16・60・64号土坑、17号溝、52号ピットと重複する。15号竪穴住居は、8・22号竪穴住居、52号ピットより新しく、20号竪穴住居、11・14～16・60・64号土坑、17号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、壁際に三角堆積が認められ、下層から上層にかけてレンズ状に堆積することから自然埋没と考えられる。上層に比べ底面付近に焼土粒や炭化物が多く、上層の暗褐色土にはAs-Bが含まれる。

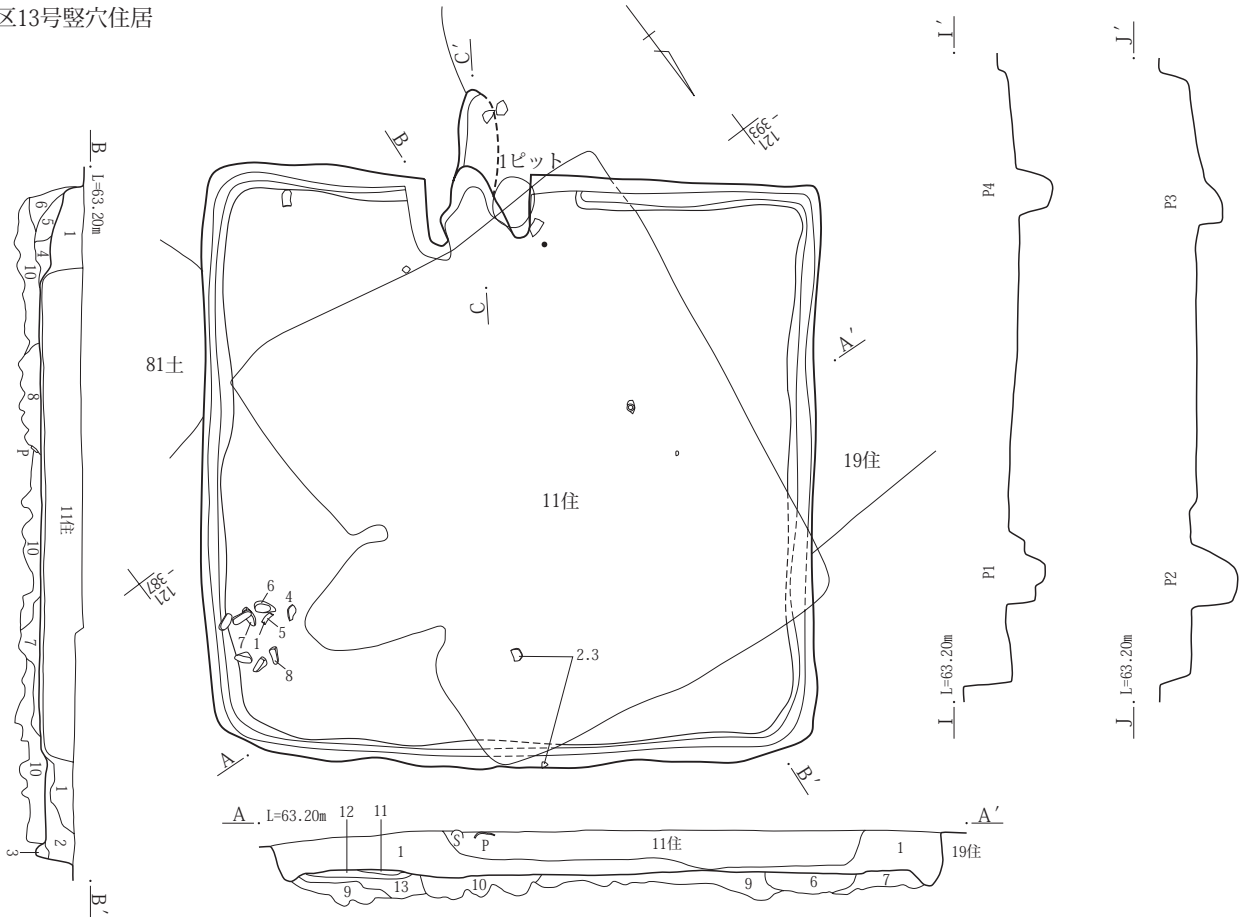
**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。床面に明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁中央部やや北寄りに付設する。燃焼面は床面より1～2cm低く、燃焼部側壁から燃焼部奥壁、煙道にかけて残存する。規模は、全長0.92m、幅0.57m、燃焼部幅0.30m、燃焼部奥行き0.68m、焚口幅0.28m、左袖状残存部長さ0.72m、右袖状残存部長さ0.75mを測る。主軸方位は、N-116°-Eであり、住居の主軸方位とほぼ同一である。カマドの掘り方は、燃焼面から奥壁にかけて約1～6cm掘込み、黄褐色土塊を含む暗褐色土により整えている。

**貯蔵穴：**カマド右側で確認した。64号土坑との重複によって南半部を遺失し、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、長径0.62m、短径0.52m、深さ0.36mを測る。埋没土は、灰黄褐色土と暗褐色土による自然埋没と考えられる。出土遺物はなかった。

**柱穴：**床面精査によって3基のピットを確認した。床面

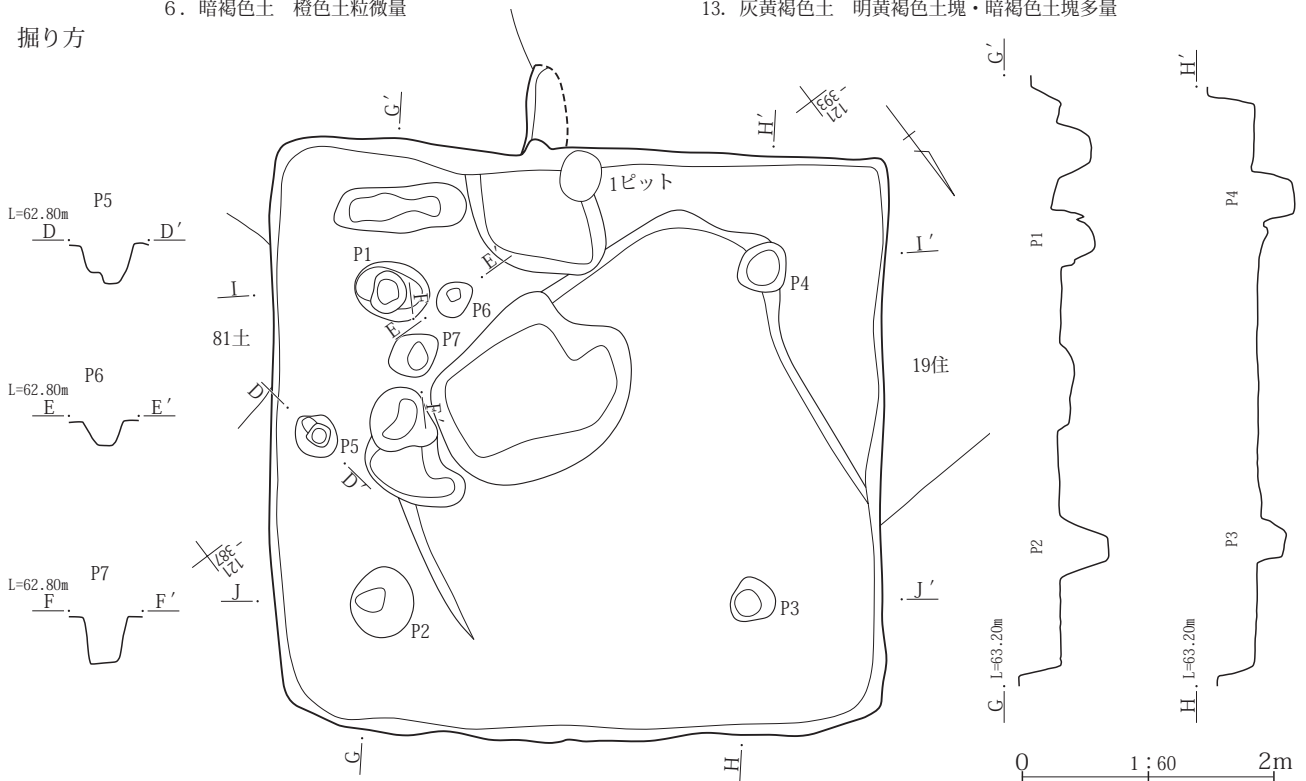
3区13号竪穴住居



13号竪穴住居A-A'・B-B'

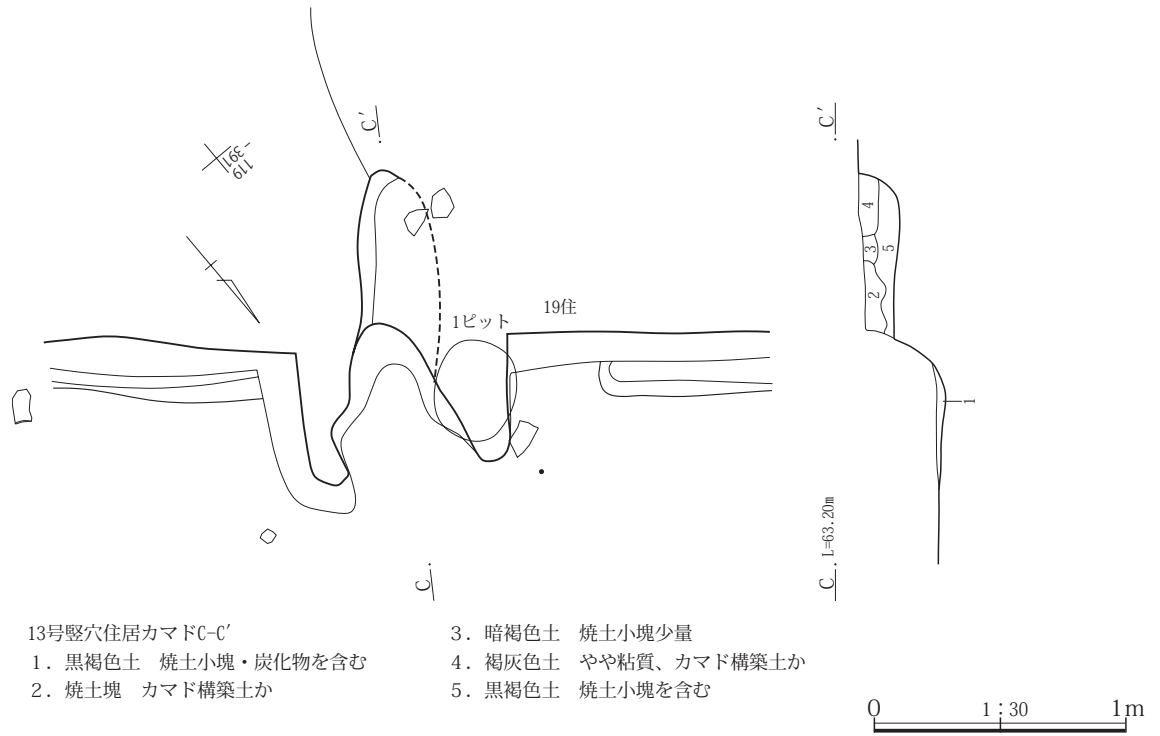
- |                           |                              |
|---------------------------|------------------------------|
| 1. 黒褐色土 焼土粒少量             | 7. 黒褐色土 橙色土粒微量、第6層よりやや多い     |
| 2. 黒褐色土 焼土粒少量、にぶい橙色土小塊を含む | 8. 黒褐色土 粘質土、焼土粒・炭化物粒微量       |
| 3. 暗褐色土 にぶい橙色土小塊やや多量      | 9. 黒褐色土 灰黄褐色土塊多量             |
| 4. 暗褐色土 焼土小塊・褐灰色土小塊を含む    | 10. 暗褐色土 焼土小塊・炭化物・灰黄褐色土小塊を含む |
| 5. 褐灰色土 粘土塊               | 11. 褐灰色土 暗褐色土少量              |
| 6. 暗褐色土 橙色土粒微量            | 12. 暗褐色土 灰黄褐色土小塊少量           |
|                           | 13. 灰黄褐色土 明黄褐色土塊・暗褐色土塊多量     |

掘り方



第218図 3区13号竪穴住居

カマド



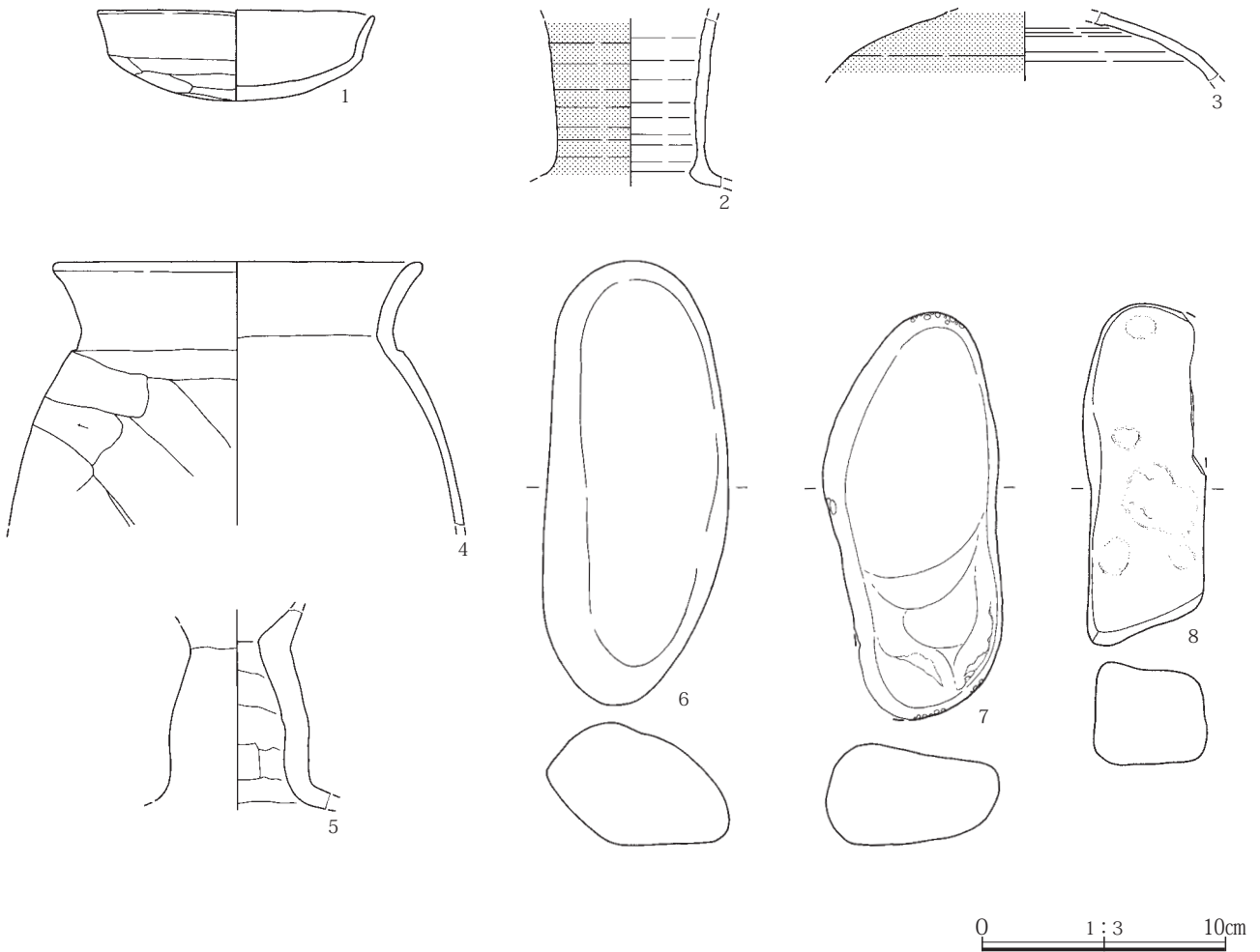
13号竪穴住居カマドC-C'

- 1. 黒褐色土 焼土小塊・炭化物を含む
- 2. 焼土塊 カマド構築土か

- 3. 暗褐色土 焼土小塊少量

- 4. 褐灰色土 やや粘質、カマド構築土か
- 5. 黒褐色土 焼土小塊を含む

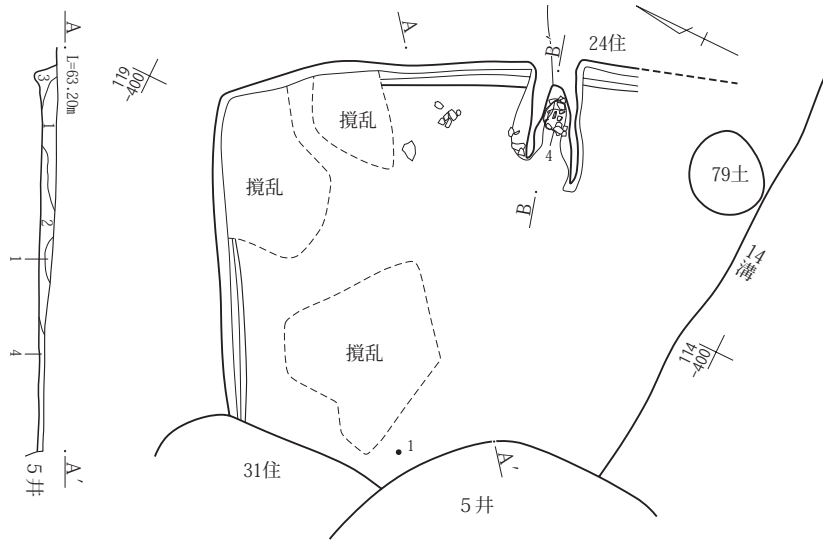
0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第219図 3区13号竪穴住居カマドと出土遺物

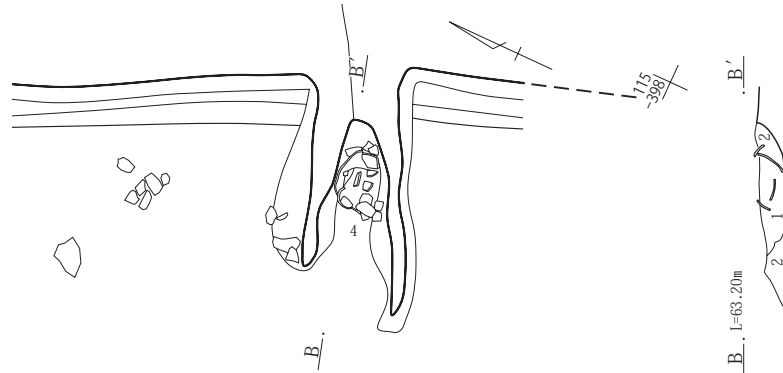
3区14号竪穴住居



14号竪穴住居A-A'

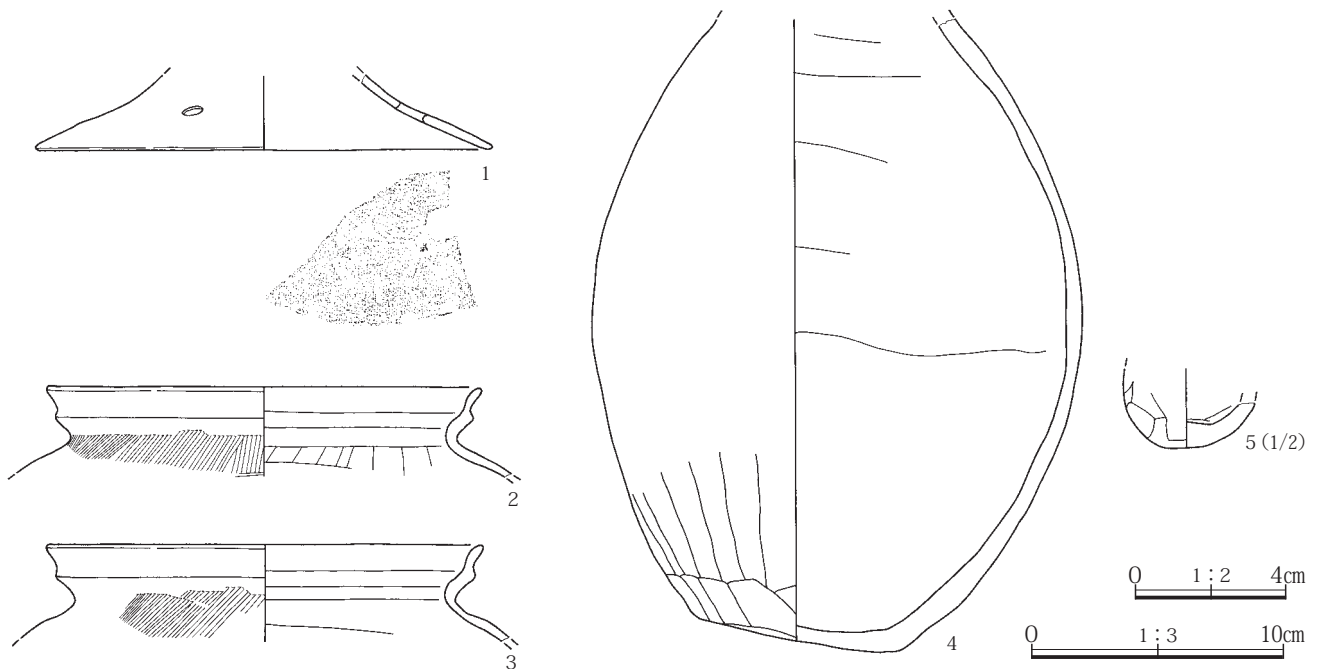
1. 暗褐色土 黄褐色土粒微量、粘性あり
2. 暗褐色土 第1層より色味は明るい、黄褐色土塊・粒多量
3. 暗褐色土 第4層に近似、黄褐色土小塊微量
4. 暗褐色土 第2層より色味は明るい、黄褐色土粒多量

カマド



14号竪穴住居カマドB-B'

1. 暗褐色土 焼土粒・焼土塊多量、黄褐色土粒少量、灰微量
2. 暗褐色土 焼土粒・灰・黄褐色土粒微量



第220図 3区14号竪穴住居と出土遺物

の対角線上に位置することから3基のピットは主柱穴と考えられる。形状及び規模は、P1(楕円形、長径41cm、短径34cm、深さ29cm)、P2(不定形、長径46cm、短径37cm、深さ29cm)、P3(楕円形、長径28cm、短径19cm、深さ36cm)である。柱間は、P1～P2間1.70m、P1～P3間2.20mである。P1の第1層に柱痕が認められ、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。

**周溝：**カマド付設部分と南東隅を除き、ほぼ全周すると考えられる。規模は、幅9～26cm、深さ6～33cmを測る。埋没土は、黄褐色土粒を少量含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。

**掘り方：**カマドに掘り方は認められたが、住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第222図は2)、土師器甕(第222図8)、土師器甕または甑(第222図7)は床面直上から、土師器甑(第222図6)はカマド焚口外側の床面上7cmから、土製品土玉(第222図13)は南西隅の床面上9cmから出土した。土師器杯(第222図1・3～5)、土師器甕(第222図9)は埋没土から出土した。土師器台付甕(第222図10～12)は混入と考えられる。南西隅の壁際に沿って棒状礫が「コ」の字状にまとまって出土した。棒状礫(第222図14・16～19)は床面直上から、棒状礫(第222図15)は床面上18cmから出土した。非掲載遺物は、土師器848点(大型製品707、中型製品3、小型製品138)、須恵器56点(大型製品14、小型製品42)、棒状礫5点が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

### 3区16号竪穴住居(第223図 PL.80)

**位置：**X=112～115、Y=-378～381

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形あるいは長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長2.42m、短軸長1.29m、壁高北壁5cm、東壁4cm、南壁8cmを測る。

**主軸方位：**N-62°-E

**重複：**10号竪穴住居、11号溝と重複し、16号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、暗褐色土と黒褐色土であり、焼土や炭化物が微量に含まれる。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。

**床面：**床面のレベル差が僅かに認められ、北壁際に比べ南側が約5cm高い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**非掲載遺物は、土師器36点(大型製品35、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)、灰釉陶器3点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物が少なく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代後期と考えられる。

### 3区17号竪穴住居(第224・225図 PL.80・81・129)

**位置：**X=114～117、Y=-374～378

**形状・規模：**形状は長方形である。規模は、長軸長3.30m、短軸長3.03m、壁高北壁43cm、東壁34cm、南壁18cm、西壁10cmを測る。確認できる面積は9.12㎡である。

**主軸方位：**N-87°-W

**重複：**9号竪穴住居、28号土坑、18号ピット、5・11・17号溝と重複し、17号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土塊、黒褐色土塊を含む暗褐色土であり、第3層に焼土塊と灰層の互層となる第5層を含む。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。使用による硬化面は確認できなかった。

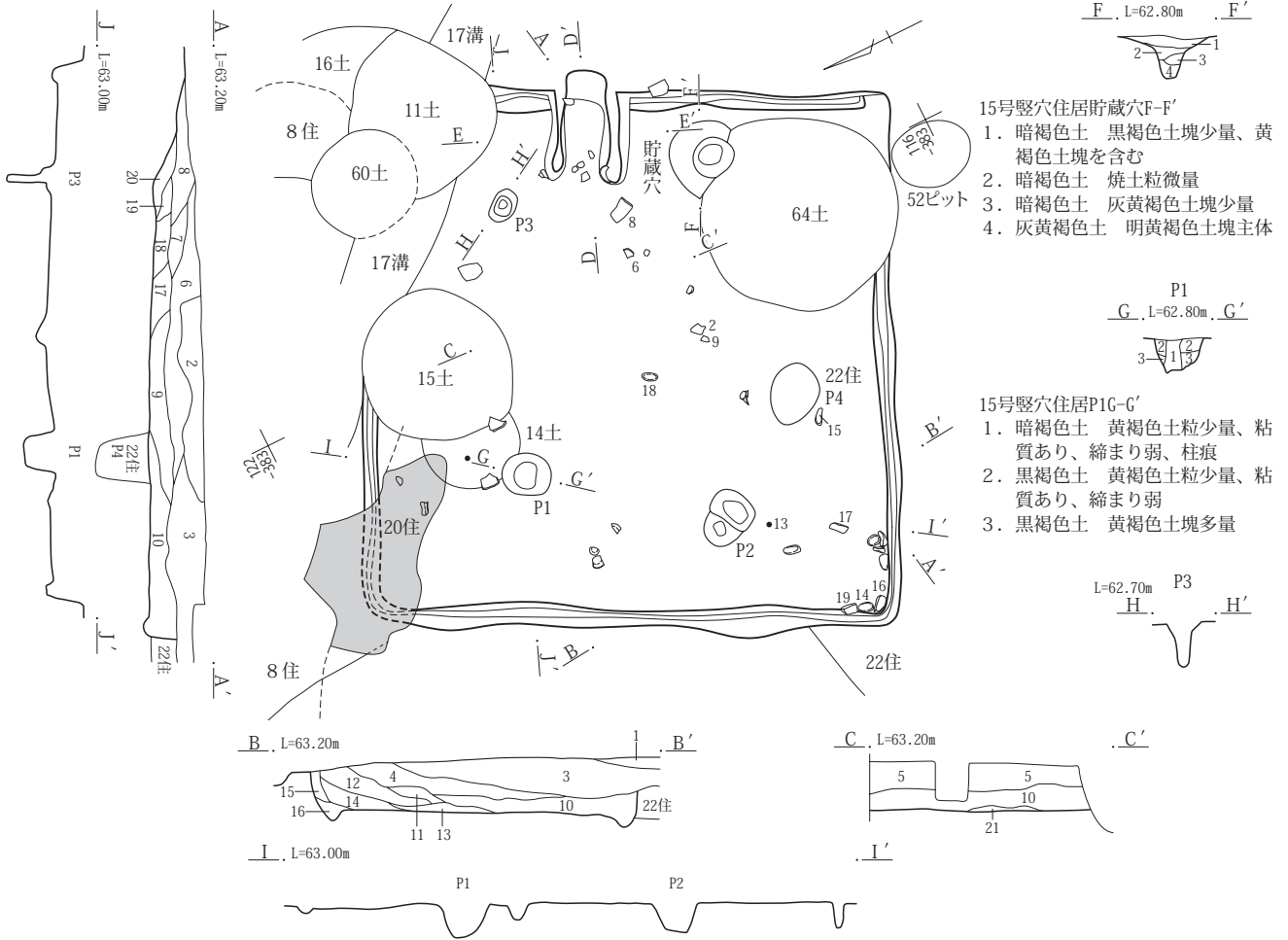
**カマド：**東壁中央部に付設する。燃烧面は床面より1～3cm低く、燃烧部側壁から燃烧部奥壁、煙道にかけ僅かに残存する。規模は、全長0.96m、幅0.82m、燃烧部幅0.34m、燃烧部奥行き0.83m、焚口幅0.36m、左袖状残存部長さ0.89m、右袖状残存部長さ0.91mを測る。主軸方位は、N-100°-Eである。掘り方は、燃烧面から奥壁にかけて30～42cm掘込み、黄灰色土塊や明黄褐色土塊を含む黒色土や暗褐色土の混土により整えている。土師器高杯(第225図3)はカマド焚口とカマド左側の床面上5～8cmから出土した。

**貯蔵穴：**カマド右側で確認した。平面形状は隅丸方形で、断面形状は台形を呈する。規模は、長径0.83m、短径0.78m、深さ0.54mを測る。

**柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。



3区15号竪穴住居

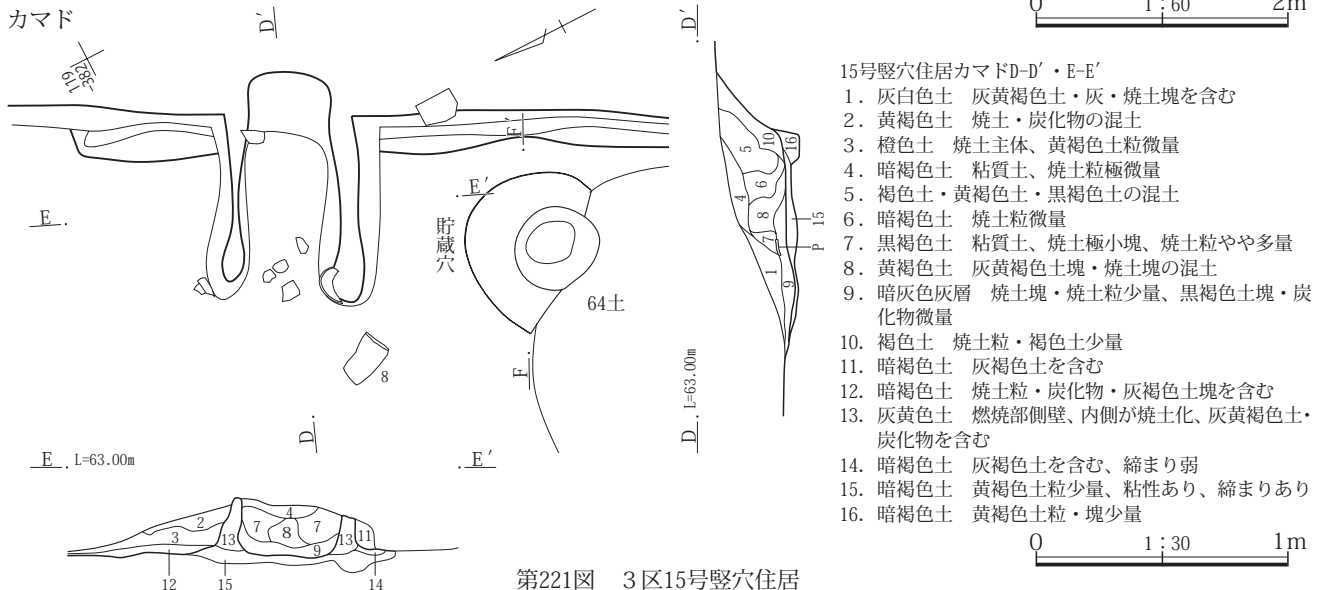


15号竪穴住居A-A'・B-B'・C-C'

1. 暗褐色土 As-B多量
2. 暗褐色土 As-B少量、焼土粒微量
3. 暗褐色土 As-B微量
4. 暗褐色土 黄褐色土塊・黄褐色土粒・炭化物少量
5. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・黄褐色土粒少量、粘性あり
6. 暗褐色土 黄褐色土塊少量、炭化物微量、粘性あり
7. 暗褐色土 黄褐色土塊少量、焼土粒微量
8. 暗褐色土 第6層に近似、黄褐色土粒少量
9. 暗褐色土 黒褐色土塊・黄褐色土塊多量、焼土粒・黄褐色土粒少量
10. 暗褐色土 黒色土塊多量、焼土粒少量、第4層より色味はやや暗い

11. 暗褐色土 黒褐色土塊・黄褐色土塊少量、粘性ややあり、縮まりあり
12. 暗褐色土 第11層に近似、黒褐色土塊少量
13. 暗褐色土 焼土・炭化物が床面直上に堆積
14. 暗褐色土 粘質土、黒褐色土塊・黄褐色土塊少量、縮まりあり
15. 暗褐色土 黄褐色土粒微量、縮まりなし
16. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、第15層より縮まりあり
17. 暗褐色土 黄褐色土粒多量、焼土塊多量
18. 暗褐色土 灰黄褐色土多量
19. 暗褐色土 黄褐色土塊多量
20. 黒褐色土 焼土粒・炭化物少量
21. 灰白色土 カマド構築材か

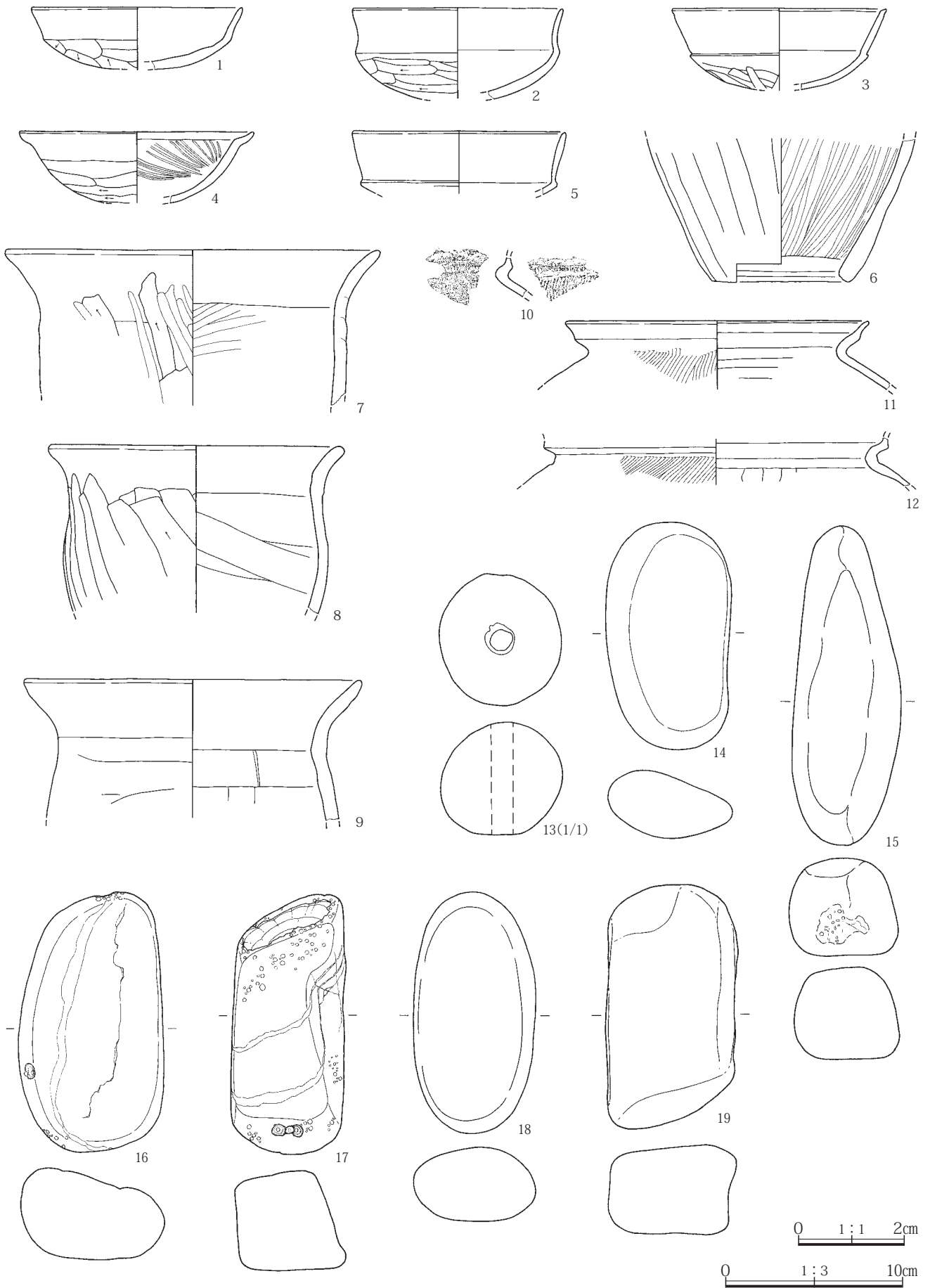
カマド



15号竪穴住居カマドD-D'・E-E'

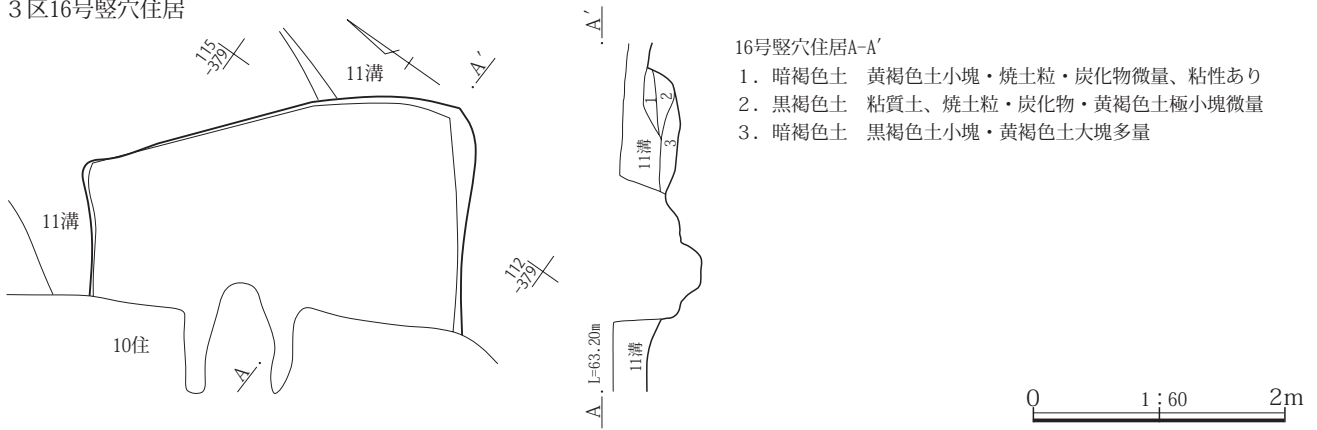
1. 灰白色土 灰黄褐色土・灰・焼土塊を含む
2. 黄褐色土 焼土・炭化物の混土
3. 橙色土 焼土主体、黄褐色土粒微量
4. 暗褐色土 粘質土、焼土粒極微量
5. 褐色土・黄褐色土・黒褐色土の混土
6. 暗褐色土 焼土粒微量
7. 黒褐色土 粘質土、焼土極小塊、焼土粒やや多量
8. 黄褐色土 灰黄褐色土塊・焼土塊の混土
9. 暗灰色灰層 焼土塊・焼土粒少量、黒褐色土塊・炭化物微量
10. 褐色土 焼土粒・褐色土少量
11. 暗褐色土 灰褐色土を含む
12. 暗褐色土 焼土粒・炭化物・灰褐色土塊を含む
13. 灰黄色土 燃焼部側壁、内側が焼土化、灰黄褐色土・炭化物を含む
14. 暗褐色土 灰褐色土を含む、縮まり弱
15. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、粘性あり、縮まりあり
16. 暗褐色土 黄褐色土粒・塊少量

第221図 3区15号竪穴住居



第222図 3区15号竪穴住居出土遺物

3区16号竪穴住居



第223図 3区16号竪穴住居

**他の施設：**床面下から1号床下土坑を確認した。1号床下土坑は南西隅に位置する。形状は不定形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。規模は、長径1.18m、短径1.15m、深さ0.51mである。埋没土は、黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。

**掘り方：**カマド焚口から中央部、南西隅にかけて大小ピット状及び土坑状の窪みが認められる。全体的に10～20cm掘り窪め、床面を整えている。

**遺物出土状態：**土師器杯(第225図1)は床面上8cmから、土師器杯(第225図2)は床面下から、土師器高杯(第225図4)は床面直上から出土し、土師器甕(第225図5)は埋没土から出土した。土師器台付甕(第225図6)は混入と考えられる。磨石(第225図7)はカマド左側の床面直上から出土した。非掲載遺物は、土師器93点(大型製品86、小型製品7)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

3区18号竪穴住居(第226・227図 PL.81～83・130)

**位置：**X=107～112、Y=-375～379

**形状・規模：**形状は方形である。規模は、長軸長4.33m、短軸長4.26m、壁高北壁15cm、東壁17cm、南壁16cm、西壁18cmを測る。確認できる面積は16.55㎡である。

**主軸方位：**N-66°-E

**重複：**83号土坑、7号ピット、14号溝と重複し、18号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊や黒褐色土塊などを含む暗褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考

えられる。

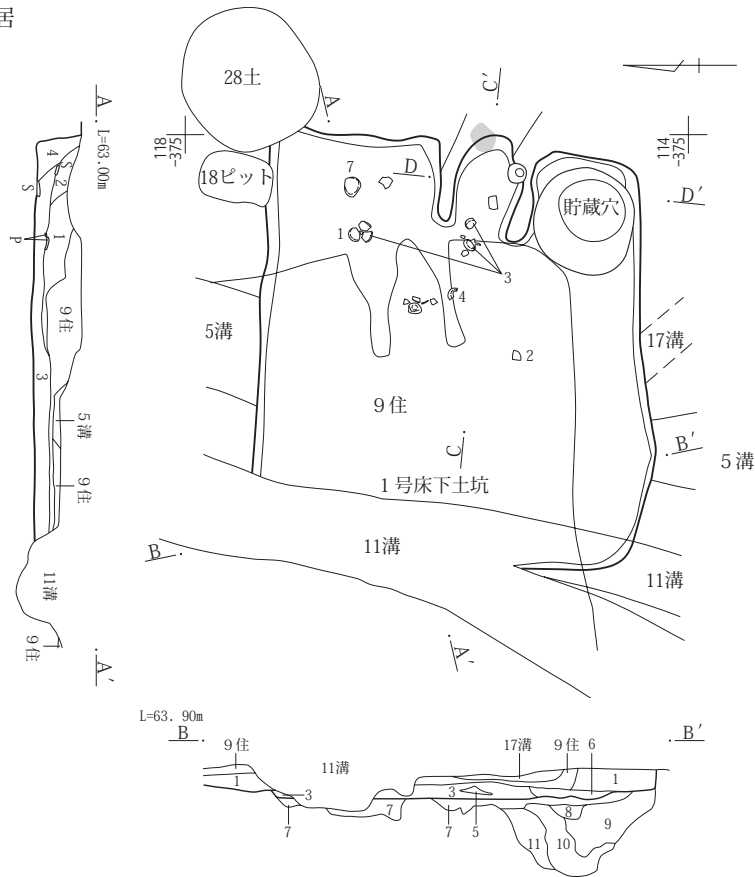
**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、東側と西側の比高1cmで、西側が僅かであるが低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**東壁中央部やや南寄りに付設する。カマド燃焼部や燃焼部側壁が僅かに残存する。確認できる規模は、全長0.73m、幅0.89m、燃焼部幅0.40m、焚口幅0.43m、左袖状残存部幅0.72m、右袖状残存部幅0.57mを測り、床面とカマド燃焼面のレベル差はない。掘り方は、燃焼面を6～23cm掘込み整える。主軸方位は、N-78°-Eである。土師器杯(第227図1)は埋没土から出土した。

**貯蔵穴：**カマド右側で確認した。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈する。規模は、長径1.12m、短径0.86m、深さ0.54mを測る。埋没土は、灰黄褐色土小塊を多量に含む黒褐色土によって人為的に埋戻す。出土遺物はなかった。

**柱穴：**床面精査によって支柱穴4本とピット1基を確認した。支柱穴4本の形状及び規模は、P1(円形、長径33cm、短径29cm、深さ33cm)、P2(楕円形、長径40cm、短径29cm、深さ48cm)、P3(円形、長径40cm、短径36cm、深さ38cm)、P4(楕円形、長径38cm、短径32cm、深さ35cm)、である。柱間は、P1～P2間2.39m、P2～P3間2.13m、P3～P4間2.44、P1～P4間2.00mである。柱間は、南北間より東西間が長い。埋没土は、灰黄褐色土塊を含む黒褐色土であり、P3の第1層は柱痕の可能性はある。P5の形状は円形で、規模は、長径32cm、短径28cm、深さ15cmである。P3～P4のほぼ中間に位置し、軸線上に乗らずやや内側に入るが、支柱穴の可能性があ

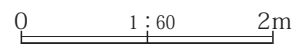
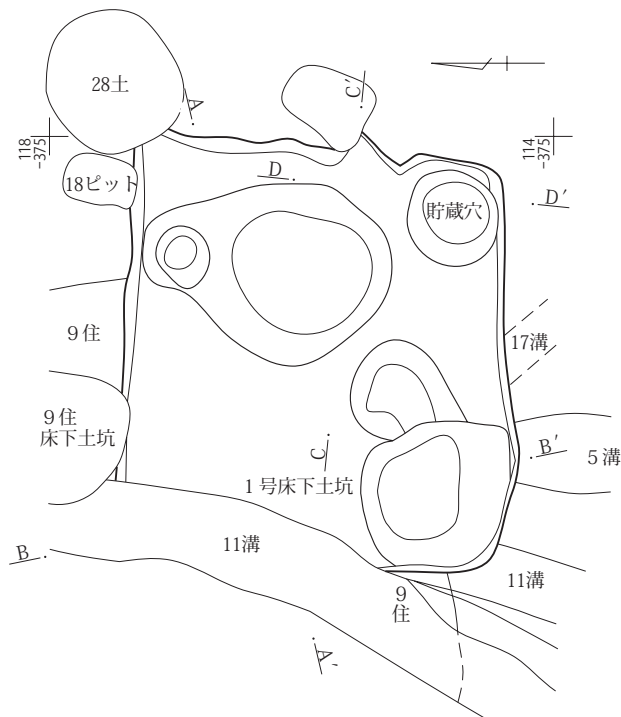
3区17号竪穴住居



17号竪穴住居A-A'・B-B'

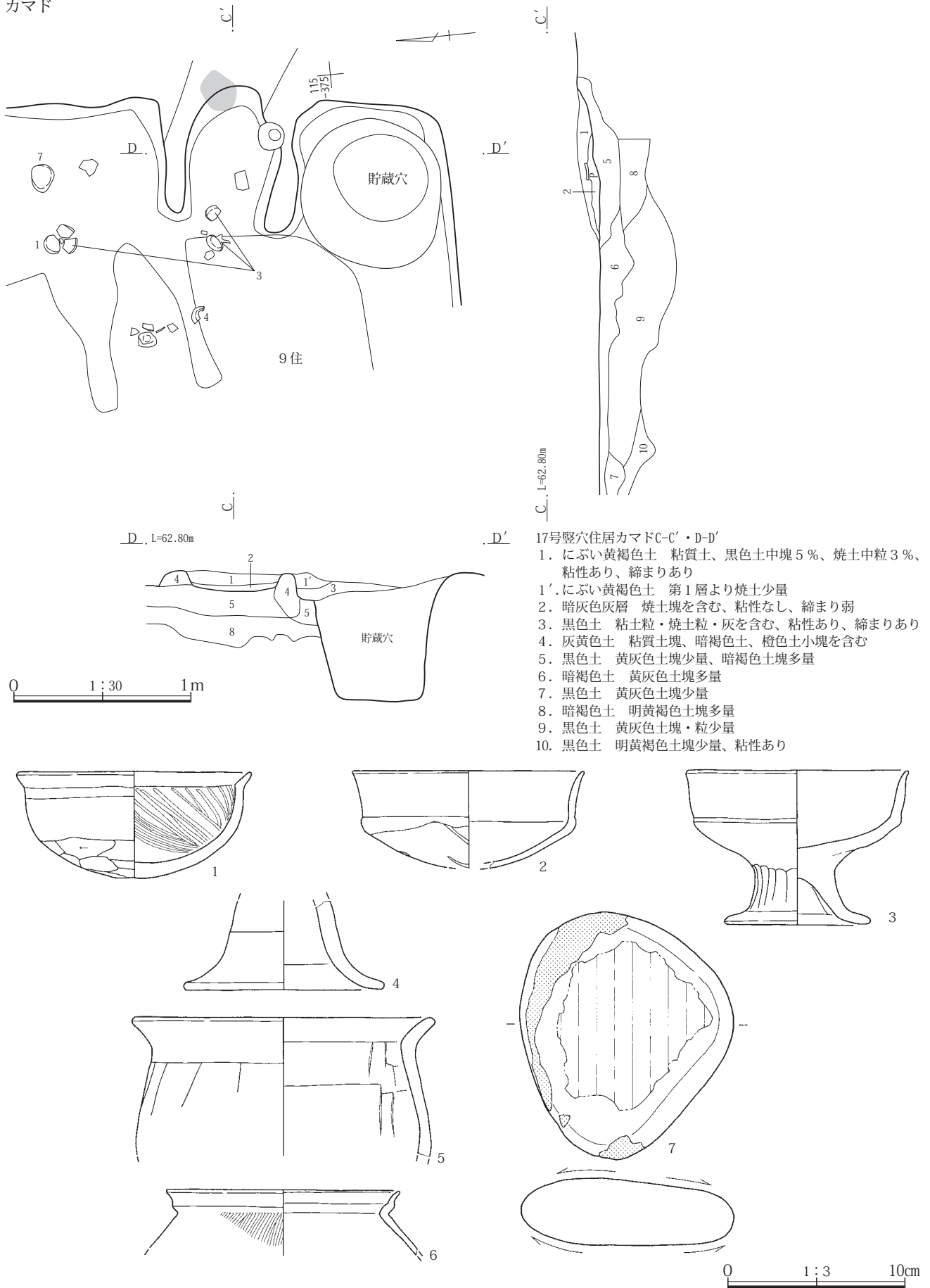
- |                                |                                     |
|--------------------------------|-------------------------------------|
| 1. 暗褐色土 黄褐色土塊多量                | 6. 暗褐色土 黒褐色土と焼土塊・粒多量                |
| 2. 暗褐色土 黄褐色土塊・黒褐色土塊少量          | 7. 暗褐色土 17号竪穴住居の床面を構成、黄褐色土・暗褐色土が版築状 |
| 3. 暗褐色土 黄褐色土塊・焼土塊・灰褐色土塊・炭化物を含む | 8. 黒褐色土 黄褐色土塊少量                     |
| 4. 暗褐色土 第2層より色味は明るい、黄褐色土塊・粒多量  | 9. 黒褐色土 粘質土                         |
| 5. 焼土と灰層の互層                    | 10. 暗褐色土 粘質土                        |
| 6. 暗褐色土 黒褐色土と焼土塊・粒多量           | 11. 黄褐色土 粘質土                        |

掘り方



第224図 3区17号竪穴住居

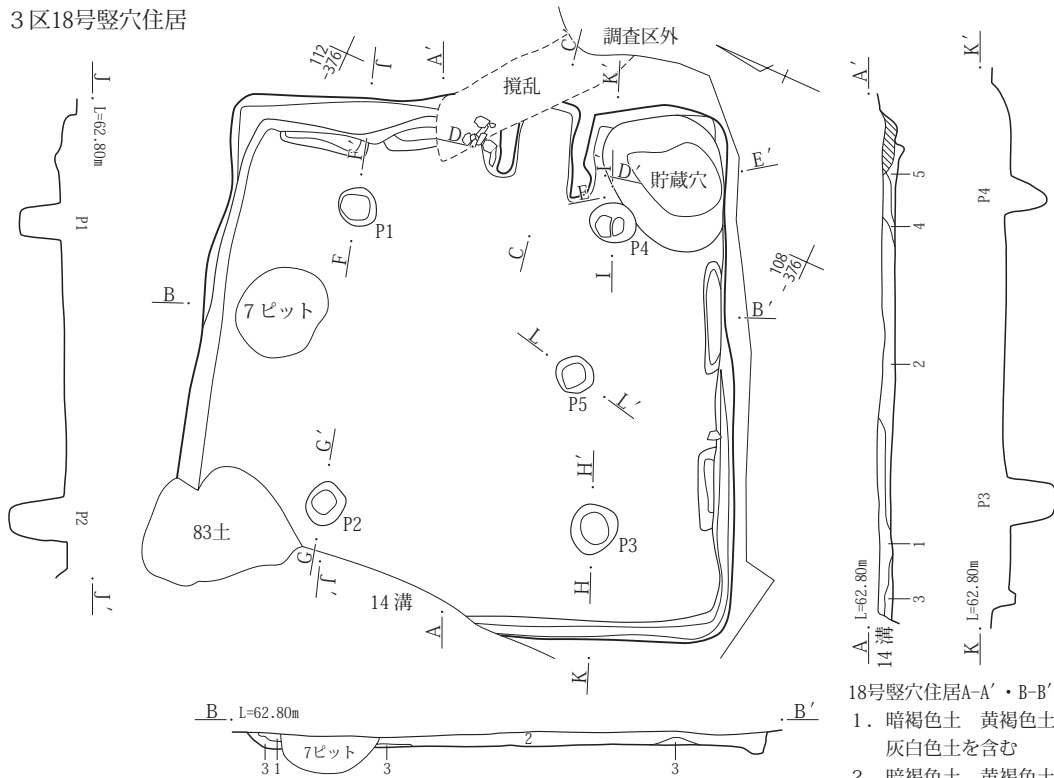
カマド



第225図 3区17号竪穴住居カマドと出土遺物

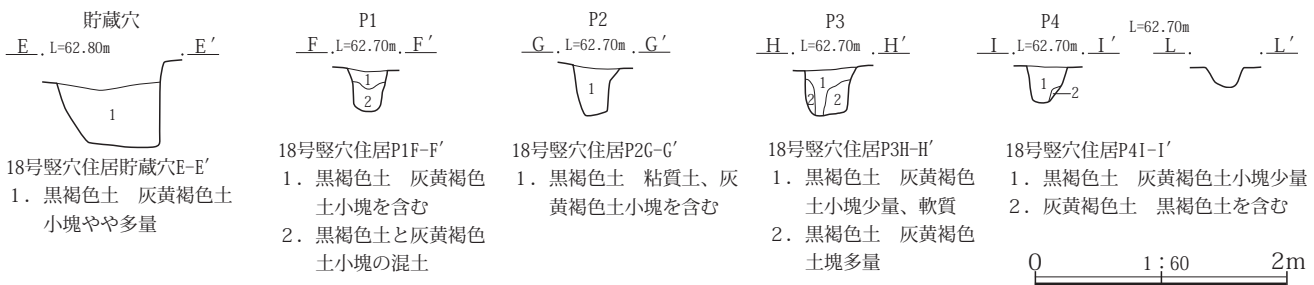


3区18号竪穴住居



18号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊・暗褐色土中塊・粒多量、灰白色土を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊・黒褐色土小塊・黄褐色土粒少量
3. 黒褐色土 暗褐色土粒・黄褐色土粒少量、灰白色土を含む
4. 暗褐色土 黄褐色土小塊・粒少量
5. 暗褐色土 黄褐色土小塊・焼土粒少量、粘性あり



18号竪穴住居貯蔵穴E-E'  
1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊やや多量

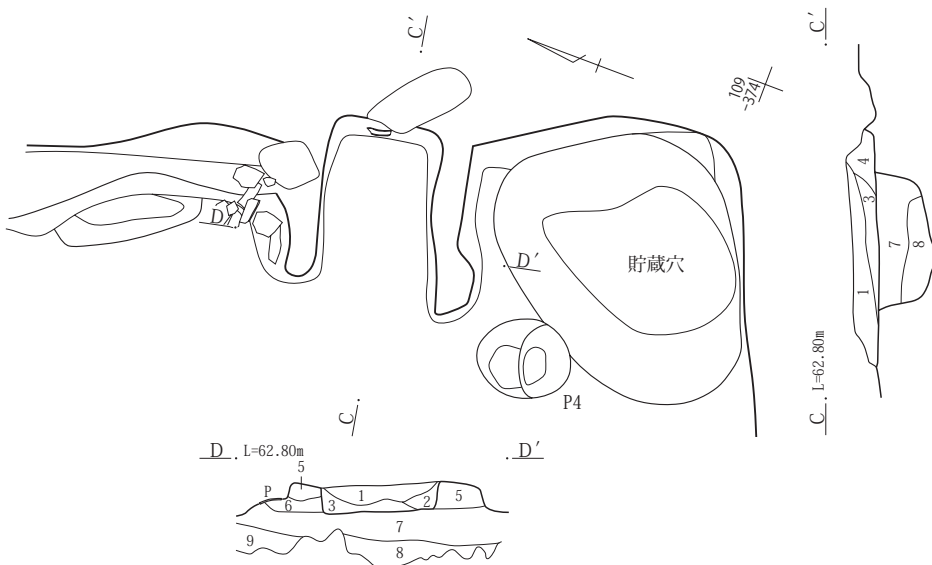
18号竪穴住居P1F-F'  
1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊を含む  
2. 黒褐色土と灰黄褐色土小塊の混土

18号竪穴住居P2G-G'  
1. 黒褐色土 粘質土、灰黄褐色土小塊を含む

18号竪穴住居P3H-H'  
1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊少量、軟質  
2. 黒褐色土 灰黄褐色土塊多量

18号竪穴住居P4I-I'  
1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊少量  
2. 灰黄褐色土 黒褐色土を含む

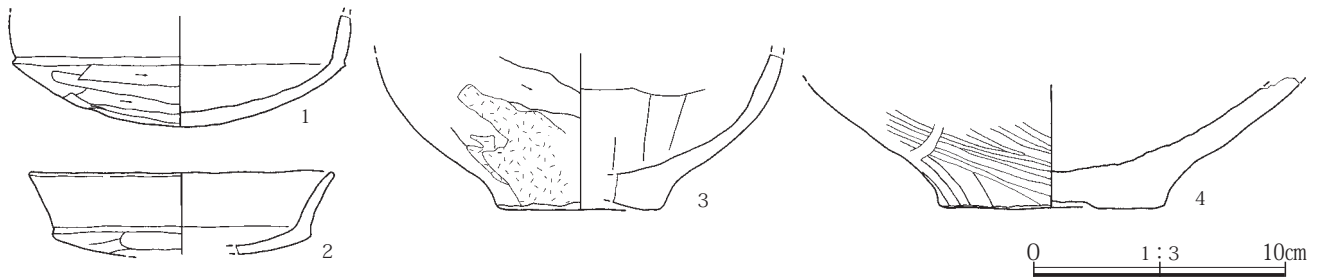
カマド



18号竪穴住居カマドC-C'・D-D'

1. 暗褐色土 焼土塊多量、黄褐色土塊少量
2. 暗褐色土 焼土極小塊・黄褐色土極小塊・炭化物少量、締まりあり
3. 暗褐色土 灰・炭化物・焼土粒多量
4. 暗褐色土 第1層に比べて含有物少ない、灰多量、焼土極小塊・炭化物少量
5. 黄灰色土 浅黄色粘土塊主体
6. 黒褐色土 黄褐色土粒微量
7. 黒褐色土 黄褐色土粒少量、焼土を含む
8. 褐灰色土 にぶい黄褐色粘質土小塊少量、粘性あり
9. 黒褐色土 にぶい黄褐色土粒微量、第6層に近似、やや色味は暗い

第226図 3区18号竪穴住居



第227図 3区18号竪穴住居出土遺物

る。

**周溝：**南壁から西壁、北東隅を掘込む。規模は、幅9～36cm、深さ9～10cmを測る。

**掘り方：**カマドに掘り方は認められたが、住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第227図2)、土師器甕(第227図3・4)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器257点(大型製品223、小型製品34)、須恵器20点(大型製品7、小型製品13)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

### 3区19号竪穴住居(第228・229図 PL.83・84・130)

**位置：**X=118～124、Y=-391～395

**形状・規模：**形状は長方形と想定される。規模は、長軸長5.06m、短軸長3.27m、壁高北壁27cm、東壁19cm、南壁25cm、西壁21cmを測る。確認できる面積は17.06㎡である。

**主軸方位：**N-3°-E

**重複：**11・13号竪穴住居、27号土坑、1・2号ピットと重複する。19号竪穴住居は、11・13号竪穴住居、27号土坑より古く、1・2号ピットより新しい。

**埋没土：**壁際に暗褐色土が認められるが、下層から上層にかけて黒褐色土で平坦に埋没する。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**炉：**床面精査によって確認できなかったが、底面中央部に焼土が認められる。平面形状は不定形で、規模は長径95cm、短径35cmを測り、炉の可能性がある。

**貯蔵穴：**南東隅で確認した。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。規模は、長径0.59m、短径0.57m、深さ0.39mを測る。埋没土は、にぶい橙色土塊を含む黒

褐色土によって人為的に埋戻す。土師器台付甕(第224図5)は埋没土から出土した。

**柱穴：**床面精査によって支柱穴4本を確認した。形状及び規模は、P1(円形、長径52cm、短径48cm、深さ65cm)、P2(楕円形、長径62cm、短径48cm、深さ65cm)、P3(不定形、長径63cm、短径52cm、深さ55cm)、P4(円形、長径36cm、短径32cm、深さ43cm)である。柱間は、P1～P2間2.12m、P2～P3間2.54m、P3～P4間2.28m、P1～P4間2.62mである。柱間は南北間より東西間が長い。P2とP3の第3層が柱痕とみられ、灰黄褐色土塊とにぶい橙色土を含む黒褐色土によって充填する。

**周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**大小ピット状及び土坑状の窪みが認められ、全体的に5～23cm掘り窪め、床面を整えている。特に床下の施設は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器器台(第229図1)北壁中央部床面直上から、土師器小型壺(第229図2)は西壁際中央部床面直上から、土師器台付甕(第229図4)は中央部床面下から、土師器小型甕(第229図3)は、北西隅の床面直上で潰れた状態で出土した。吉ヶ谷式土器甕(第229図8)は、北壁際の床面上5cmから、土師器台付甕(第229図6・7)、土製品土錘(第229図9)、石製品(第229図10)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器344点(大型製品290、小型製品39、不明15)、須恵器14点(大型製品3、小型製品11)、灰釉陶器1点(大型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、古墳時代初頭と考えられる。

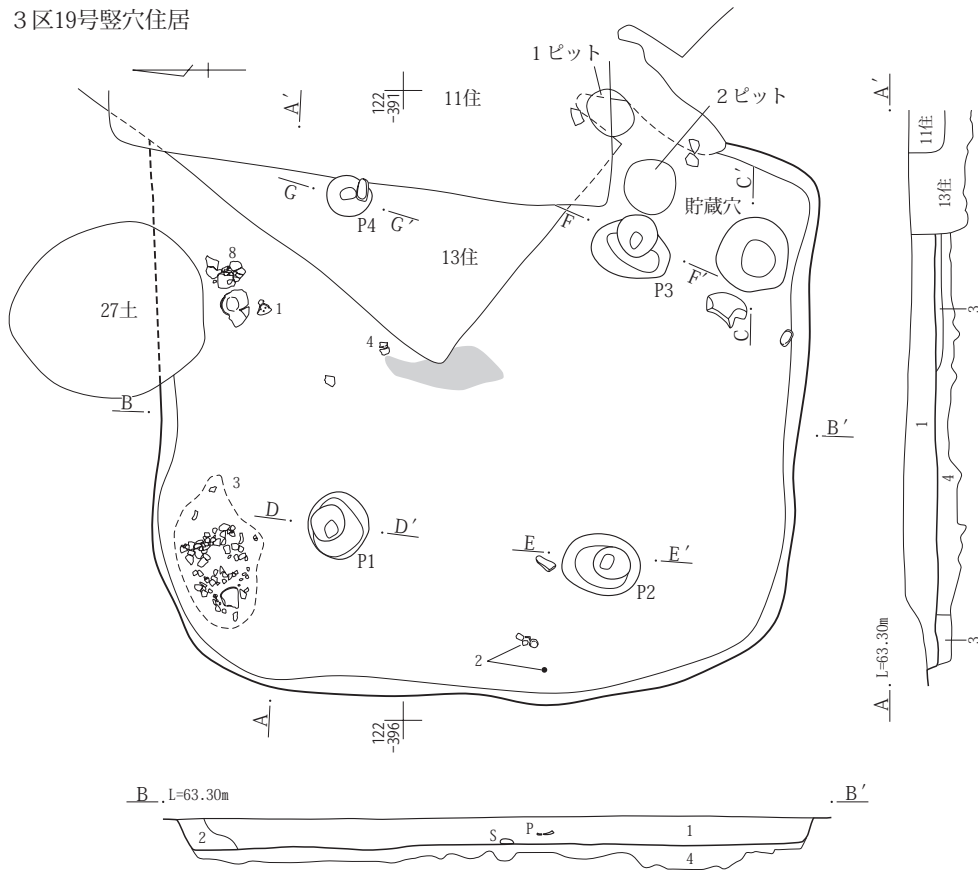
### 3区20号竪穴住居(第230図 PL.84・85・130)

**位置：**X=120～122、Y=-383～384

**形状・規模：**カマドに残存する焼土や燃焼部の浅い掘込みが確認できたにすぎず、全体の形状及び規模は不明である。

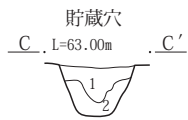
**主軸方位：**カマド以外は確認できなかった。

3区19号竪穴住居



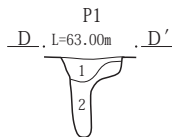
19号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 黒褐色土 白色軽石及び焼土粒少量、粘性ややあり
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊及び白色軽石・焼土粒少量
3. 暗褐色土 黄褐色土塊・焼土塊を含む
4. 黒褐色土 黄褐色土塊少量



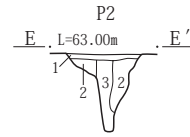
19号竪穴住居貯蔵穴C-C'

1. 黒褐色土 にぶい橙色土小塊少量
2. 黒褐色土 にぶい橙色土塊多量



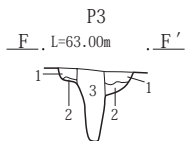
19号竪穴住居P1D-D'

1. 黒褐色土 白色軽石少量
2. にぶい橙色土 黒褐色土少量



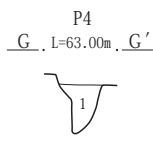
19号竪穴住居P2E-E'

1. 黒褐色土 縮まり強
2. 黒色褐色土とにぶい橙色土の混土
3. 黒色褐色土とにぶい橙色土の混土、第2層より黒褐色土が多い



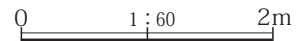
19号竪穴住居P3F-F'

1. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊少量、縮まり強
2. 黒褐色土 灰黄褐色土小塊主体
3. 黒褐色土 縮まり弱、柱痕か

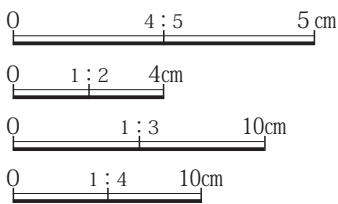
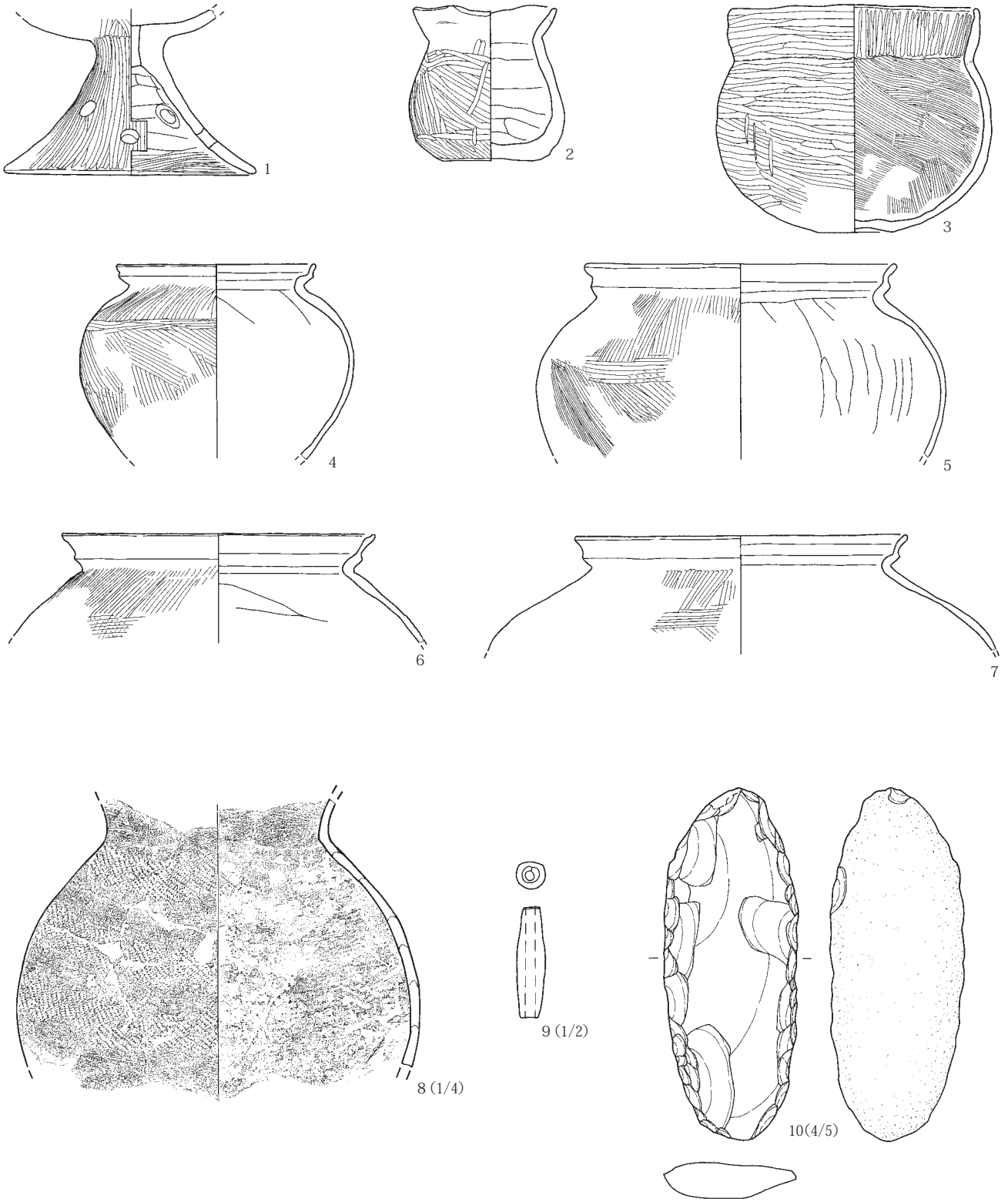


19号竪穴住居P4G-G'

1. 黒褐色土 縮まり弱



第228図 3区19号竪穴住居



第229図 3区19号竪穴住居出土遺物

**重複：**8・15号竪穴住居、14・15号土坑、17号溝と重複する。20号竪穴住居は、8・15号竪穴住居より新しく、14・15号土坑、17号溝より古い。

**埋没土・床面：**住居の上面が削平されているため、確認できなかった。

**カマド：**残存状態から東壁に付設したと想定される。焼土範囲は、南北1.52m、東西1.14mである。燃焼部とみられる溝状の掘込みが認められ、長径0.84m、短径0.26m、深さ0.01～0.08mを測る。主軸方位は、N-42°-Eである。埋没土は暗褐色土であり、下層に灰や焼土粒が多く含まれる。掘り方は確認できなかった。

**貯蔵穴・柱穴・周溝：**カマド周辺で床面精査を行ったが確認できなかった。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第230図1)、須恵器椀(第230図2)は床面上30cmと25cmから、土師器甕(第230図4～6)は床面上7～24cmから出土した。土師器台付甕(第230図3)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器18点(大型製品17、小型製品1)、須恵器2点(大型製品1、小型製品1)、棒状礫1点が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

### 3区21号竪穴住居(第231図)

**位置：**X=119～122、Y=-375～377

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形あるいは長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長2.97m、短軸長2.04m、壁高北壁13cm、東壁20cm、南壁4cmを測る。

**主軸方位：**N-4°-E

**重複：**30・31号土坑、5・11号溝と重複し、21号竪穴住居が古い。

**埋没土：**住居の大部分が5・11号溝と重複し、下層から上層まで削平されているため確認できなかった。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**床面中央部でピット1基を確認した。形状は円形で、規模は長径41cm、短径39cm、深さ26cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**非掲載遺物は、土師器30点(大型製品29、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区22号竪穴住居(第232図 PL.85・130)

**位置：**X=113～118、Y=-382～388

**形状・規模：**形状は方形と想定される。規模は、長軸長4.74m、短軸長4.45m、壁高北壁33cm、西壁31cmを測る。

**主軸方位：**N-72°-E

**重複：**10・15・23号竪穴住居、64・65・67・68号土坑、10・11・13・52号ピットと重複する。22号竪穴住居は、23号竪穴住居、10・11・13号ピットより新しく、10・15号竪穴住居、64・65・67・68号土坑、52号ピットより古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊や黒褐色土塊を含む暗褐色土であり、上層にAs-Bが含まれる。堆積状況から自然埋没と考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦である。床面に明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**10・15号竪穴住居との重複のため確認できなかったが、東壁に付設したと想定される。

**柱穴：**床面精査によって4基のピットを確認した。P1は、西壁から1.10m、北壁から1.30m、P2は西壁から1.20m、南壁から1.05mの位置で確認し主柱穴と考えられる。P3とP4は、東壁からの位置は不明であるが、出土位置から主柱穴と考えられる。形状及び規模は、P1(円形、長径41cm、短径38cm、深さ35cm)、P2(円形、長径46cm、短径44cm、深さ30cm)、P3(円形か、径48cm、深さ34cm)、P4(楕円形、長径51cm、短径38cm、深さ32cm)である。柱間は、P1～P2間2.11m、P2～P3間2.40m、P3～P4間2.15m、P1～P4間2.40mである。柱間は、南北間に比べ東西間が長い。埋没土は、灰黄褐色土、黒褐色土、暗褐色土によって人為的に埋戻し、土層断面で柱痕を確認できなかった。

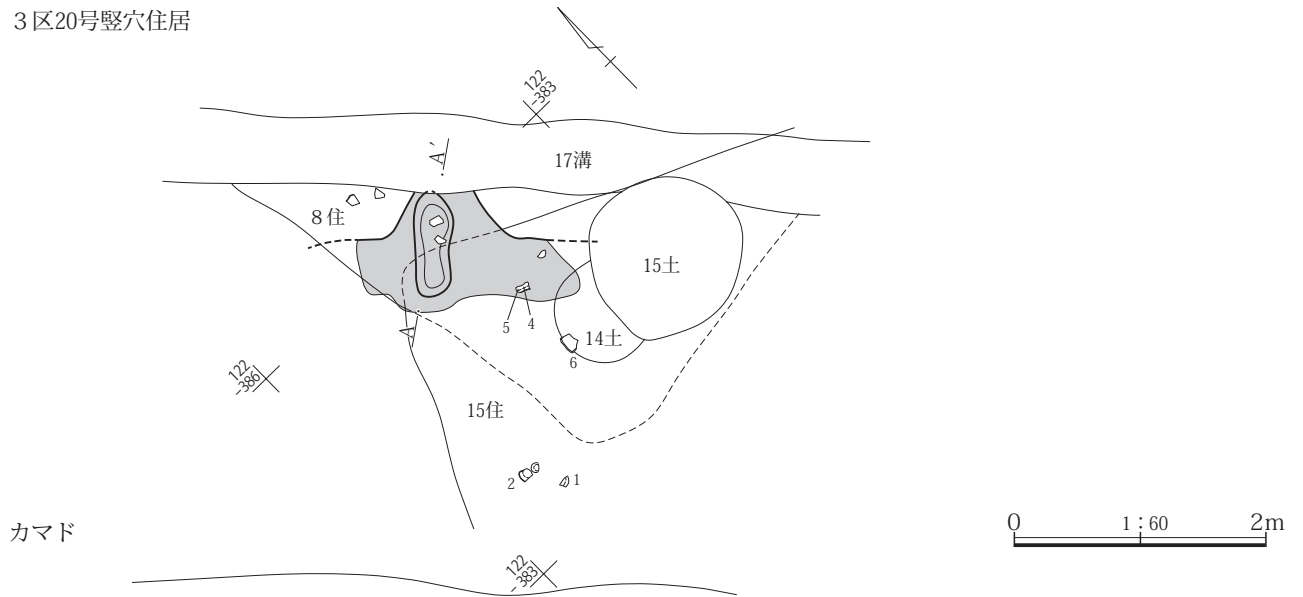
**周溝：**西壁から北西隅で確認した。規模は、幅1～22cm、深さ5～32cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

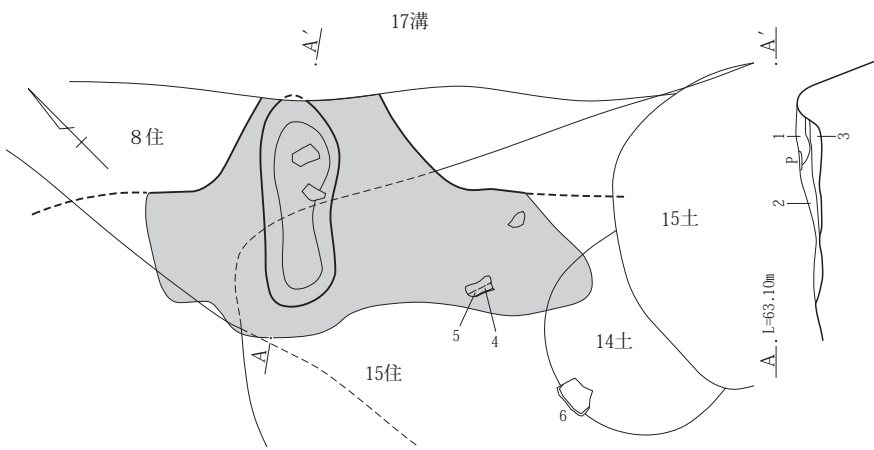
**遺物出土状態：**土師器杯(第232図1・2)は南壁際の床面直上と床面上3cmから、土師器甕(第232図3)、手捏ね椀形?(第232図4)は埋没土から出土した。土師器高杯(第232図5)は西壁際の床面上27cmから、非掲載遺物



3区20号竪穴住居

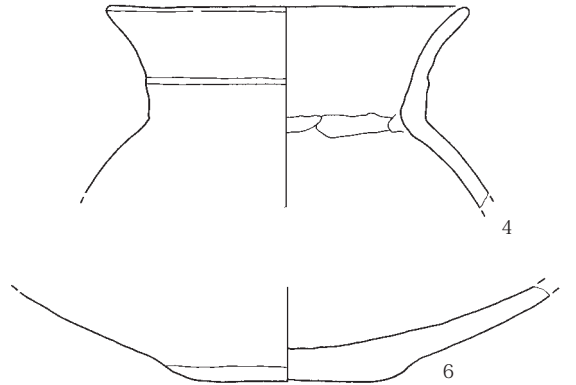
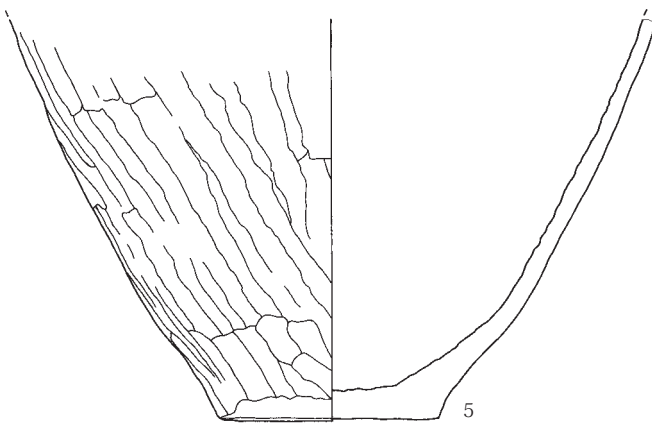
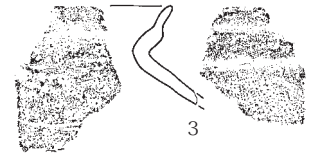
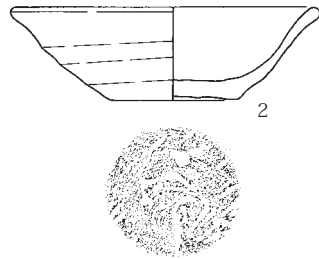
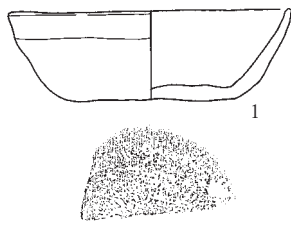


カマド



20号竪穴住居カマドA-A'

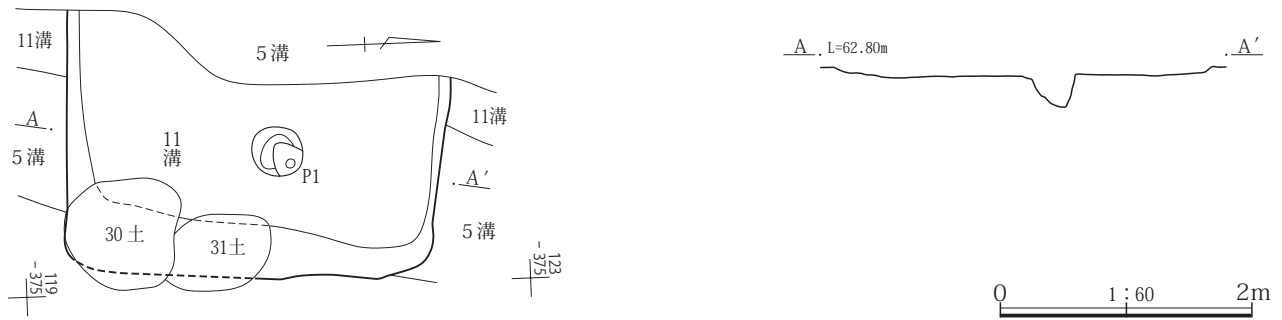
- 1. 暗褐色土 焼土粒・焼土極小塊多量
- 2. 暗褐色土 粘性あり
- 3. 暗褐色土 灰多量、焼土粒少量



0 1:3 10cm

第230図 3区20号竪穴住居と出土遺物

3区21号竪穴住居



第231図 3区21号竪穴住居

は、土師器245点(大型製品149、小型製品96)、須恵器24点(大型製品5、小型製品19)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀中頃と考えられる。

**3区23号竪穴住居**(第233図 PL.85・130)

**位置：**X=113～115、Y=-385～389

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形または長方形と想定される。確認できる規模は、長軸長3.85m、短軸長2.31m、壁高北壁22cm、西壁24cmを測る。

**主軸方位：**N-89°-W

**重複：**10・22号竪穴住居、67・68号土坑、14号溝と重複する。23号竪穴住居は、10・22号竪穴住居、67・68号土坑、14号溝より古い。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土塊を含む暗褐色土と褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。

上層から下層にかけて焼土粒や炭化物が認められる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、西壁際に比べ東側が4cm低い。床面に明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**床面精査によってピット1基を確認した。P1の形状は円形を呈し、規模は径37cm、深さ18cmを測る。

**周溝：**西壁に掘込まれている。規模は、幅14～19cm、深さ9～20cmを測る。埋没土は、黄褐色土粒を多量に含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**須恵器椀(第233図2)は床面直上から、

土師器甕(第233図3・4)は床面上13cmと床面直上から、土師器鉢(第233図1)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器265点(大型製品216、小型製品49)、須恵器40点(大型製品11、小型製品29)が出土した。

**所見：**14号溝との重複のため9世紀第4四半期の遺物が混入しているが、10・22号竪穴住居との重複から判断し、時期は6世紀前半と考えられる。

**3区24号竪穴住居**(第234図 PL.85・86・131)

**位置：**X=113～117、Y=-392～398

**形状・規模：**他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は方形または長方形と想定される。規模は、長軸長4.84m、短軸長3.78m、壁高北壁22cm、東壁24cmを測る。

**主軸方位：**N-34°-W

**重複：**14号竪穴住居、58・59・71・74・79号土坑、14号溝と重複し、24号竪穴住居が古い。

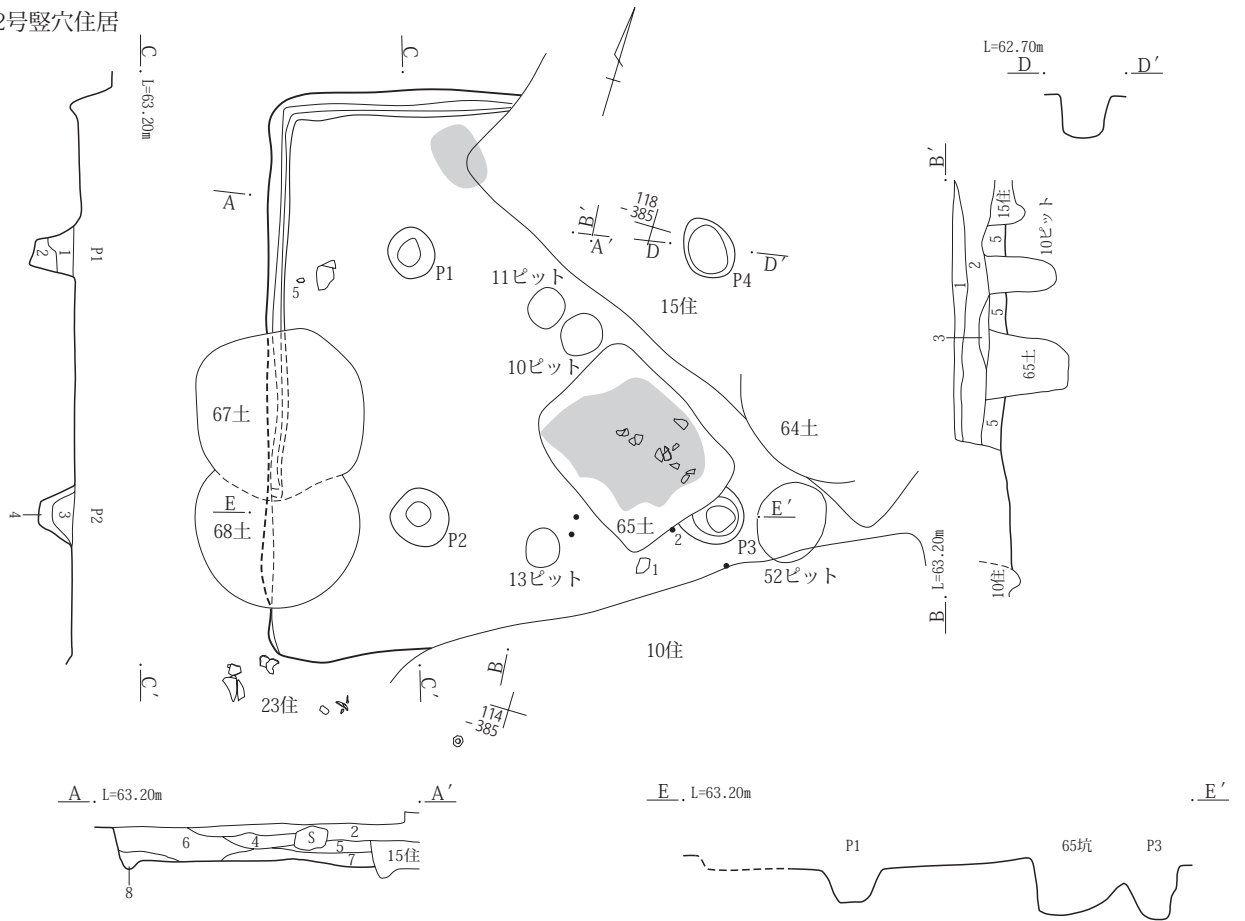
**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土と褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少ないが、西側と東壁際との比高3cmで、東側が低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**床面精査によって4基のピットを確認した。形状及び規模は、P1(不定形、長径44cm、短径39cm、深さ36cm)、P2(楕円形、長径35cm、短径28cm、深さ35cm)、P3(不定形、長径36cm、短径30cm、深さ40cm)、P4(楕円形、長径62cm、短径50cm、深さ23cm)である。東壁からP1は1.65m、P3は2.00mに位置し、主柱穴の可能

3区22号竪穴住居



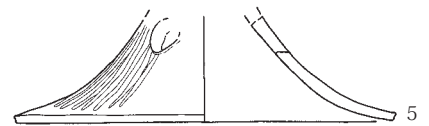
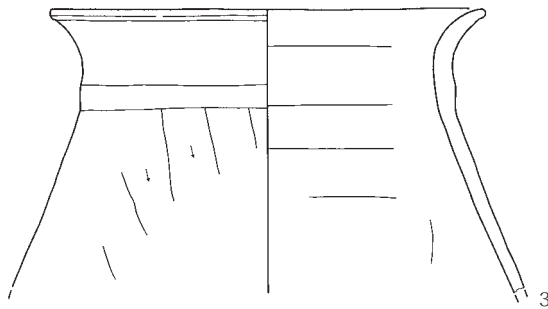
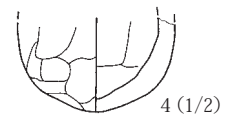
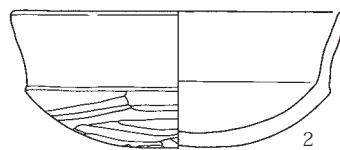
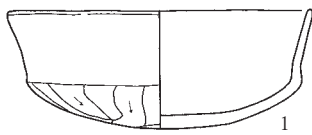
22号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 As-B多量
2. 暗褐色土 As-B微量
3. 暗褐色土 As-B・焼土粒微量
4. 暗褐色土 黒褐色土極小塊多量、黄褐色土塊少量、第6層より色味は暗い
5. 暗褐色土 黄褐色土極小塊・黄褐色土粒多量、締まりややあり
6. 暗褐色土 黒褐色土塊多量、黄褐色土塊・黄褐色土粒少量、締まりあり
7. 暗褐色土 黒褐色土塊・黄褐色土粒少量、第6層より色味は明るい
8. 暗褐色土 黄褐色土塊・黄褐色土粒・黒褐色土塊多量、締まりややあり

22号竪穴住居P1・P2 C-C'

1. 暗褐色土 灰黄褐色土塊・黒褐色土塊を含む
2. 灰黄褐色土 黒褐色土塊を含む
3. 黒褐色土 灰黄褐色土塊を含む
4. 灰黄褐色土塊と黒褐色土塊の混土

0 1:60 2m

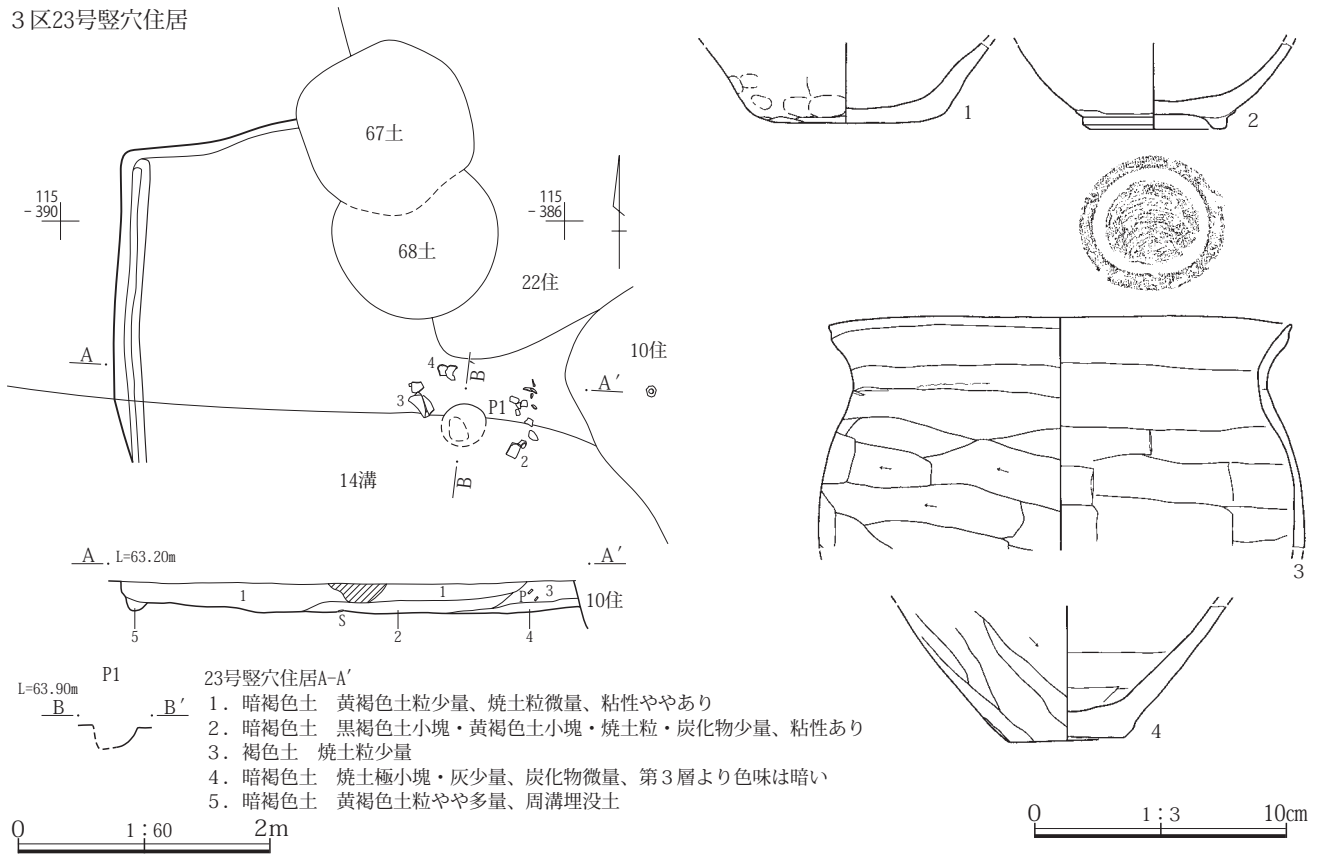


0 1:2 4cm

0 1:3 10cm

第232図 3区22号竪穴住居と出土遺物

3区23号竪穴住居



第233図 3区23号竪穴住居と出土遺物

性がある。P 1 と P 3 の柱間は2.20mである。P 4 は北隅に位置することから貯蔵穴の可能性が有る。埋没土は、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などを含む暗褐色土によって人為的に埋戻す。土層断面の観察によって、柱痕などは確認できなかった。

**周溝：**北壁と東壁が掘込まれる。規模は、幅11～29cm、深さ19～22cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第234図1)は床面上3cmから、土師器杯(第234図2)は埋没土から出土した。土師器甕(第234図3・4)は床面上3cmと10cmから出土した。非掲載遺物は、土師器267点(大型製品242、小型製品25)、須恵器6点(大型製品2、小型製品4)、灰釉陶器6点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

**3区30号竪穴住居**(第235～237図 PL.86・87・131・132)

**位置：**X=119～124、Y=-402～406

**形状・規模：**形状は方形である。規模は、長軸長3.43m、短軸長3.38m、壁高北壁6cm、東壁10cm、南壁11cm、西

壁9cmを測る。面積は10.74㎡である。

**主軸方位：**N-28°-W

**重複：**なし。

**埋没土：**埋没土は、黄褐色土粒を含む暗褐色土であり、上層に焼土粒や炭化物を含む。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

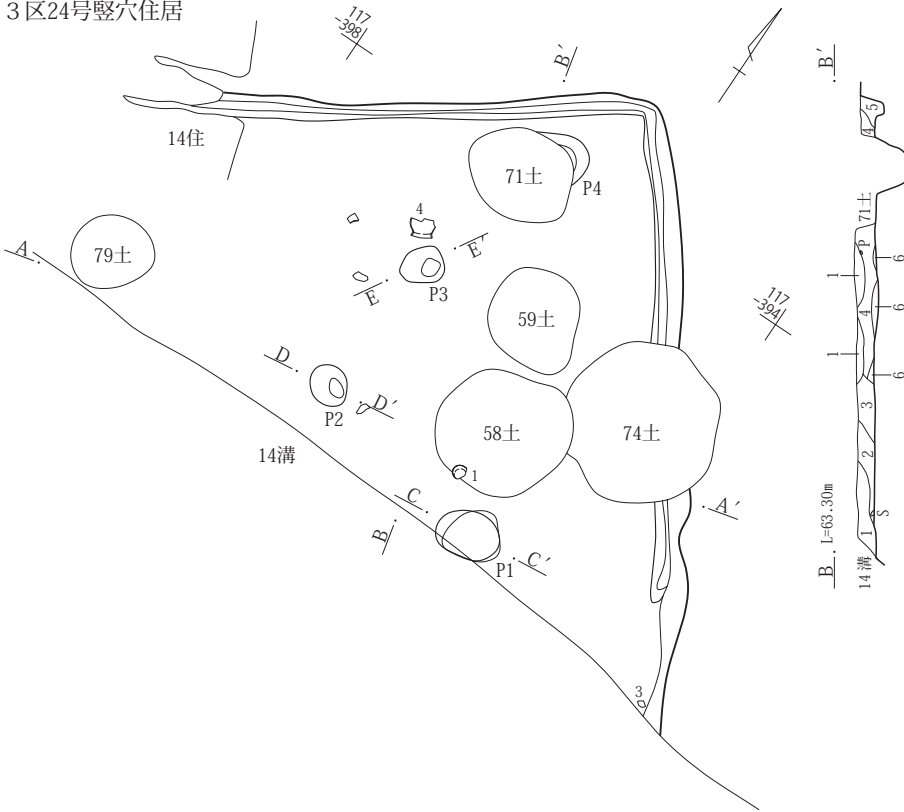
**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、中央部が2～3cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド：**北壁北東隅に付設する。燃烧部側壁右側や燃烧面の一部が残存する。確認できる規模は、全長0.69m、幅0.50m、燃烧部幅0.16m、燃烧部奥行き42cm、焚口幅0.11m、左袖状残存部幅0.53m、右袖状残存部幅0.38mを測り、床面と燃烧面とのレベル差はほとんど認められない。主軸方位は、N-12°-Eである。カマドの掘り方は確認できなかった。

**貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認できなかった。

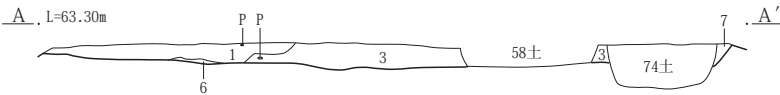
**他の施設：**床面精査を行い、何らか施設のピット2基を確認した。形状及び規模は、P 1(楕円形、長径52cm、

3区24号竪穴住居

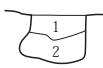


24号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、やや粘質、第3層より縮まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・黄褐色土塊少量、第3層より色味は明るい
3. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、炭化物微量
4. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、粘性あり、縮まりあり
5. 暗褐色土 黄褐色土粒やや多量、黒褐色土塊少量、縮まり弱
6. 暗褐色土 黄褐色土粒やや多量、黒褐色土塊微量
7. 褐色土 上層に黄褐色土粒・下層に暗褐色土粒多量、焼土粒やや多量



P1  
C, L=63.10m, C'



24号竪穴住居P1C-C'

1. 暗褐色土 黒褐色土塊・黄褐色土を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量

P2  
D, L=63.10m, D'



24号竪穴住居P2D-D'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量

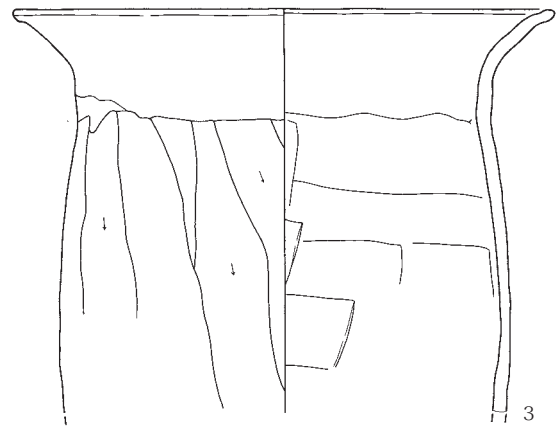
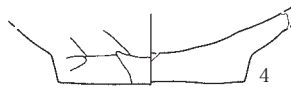
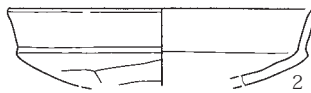
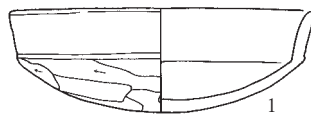
P3  
E, L=63.10m, E'



24号住居ピット3E-E'

1. 暗褐色土 明黄褐色土粒微量
2. 暗褐色土 第1層より色味は暗い、明黄褐色土粒少量
3. 暗褐色土 明黄褐色土粒・小塊を含む

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

第234図 3区24号竪穴住居と出土遺物



短径41cm、深さ31cm)、P2(不定形、長径91cm、短径35cm、深さ28cm)である。P2の埋没土は、黄褐色土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。P1から出土した土師器甕(第237図10)は床面直上と底面上4cmから、P2から出土した土師器甕(第236図7)は底面上4cmから出土した。

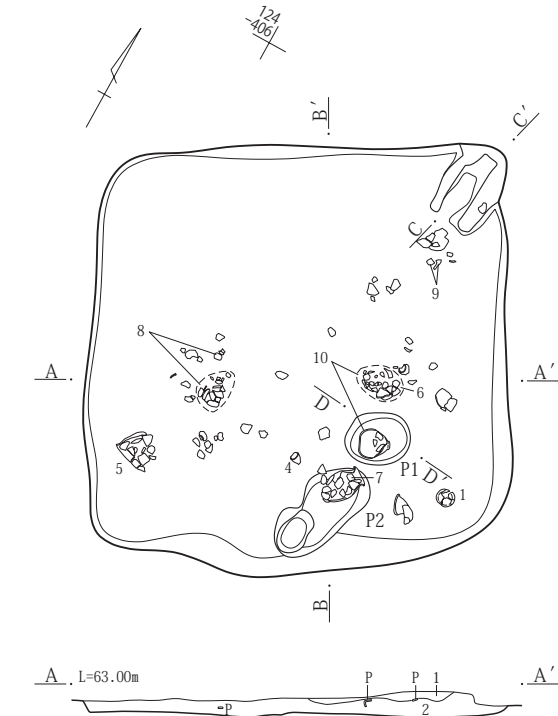
**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第236図1)は南東隅の床面上8cmから、土師器高杯(第236図4)は中央部南寄りの床面上6cmから、土師器甕(第236図5)は西壁際の床面直上から、土師器甕(第236図6)は中央部東寄りの床面直

上から、土師器甕(第236図8・9)は中央部西寄りとカマド焚口外側の床面直上から、土師器杯(第236図2・3)、土師器台付甕(第237図11・12)、鉄製品刀子(第237図13)は埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器636点(大型製品567、中型製品3、小型製品35、不明31)、須恵器35点(大型製品11、小型製品24)、灰釉陶器1点(大型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

3区30号竪穴住居

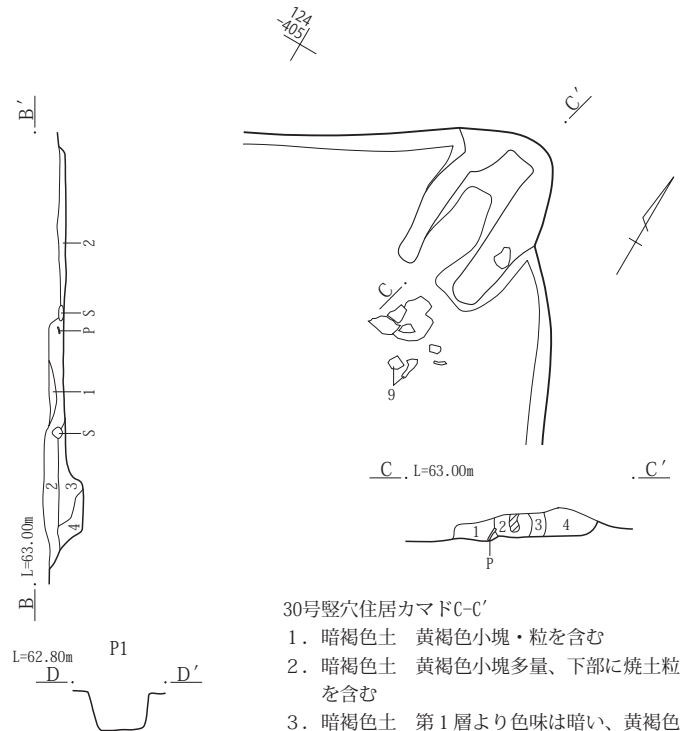


30号竪穴住居A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 焼土粒・塊多量、炭化物を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、粘性あり
3. 暗褐色土 第2層より締め強
4. 暗褐色土 黄褐色土粒を斑に含む

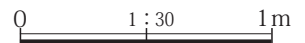


カマド

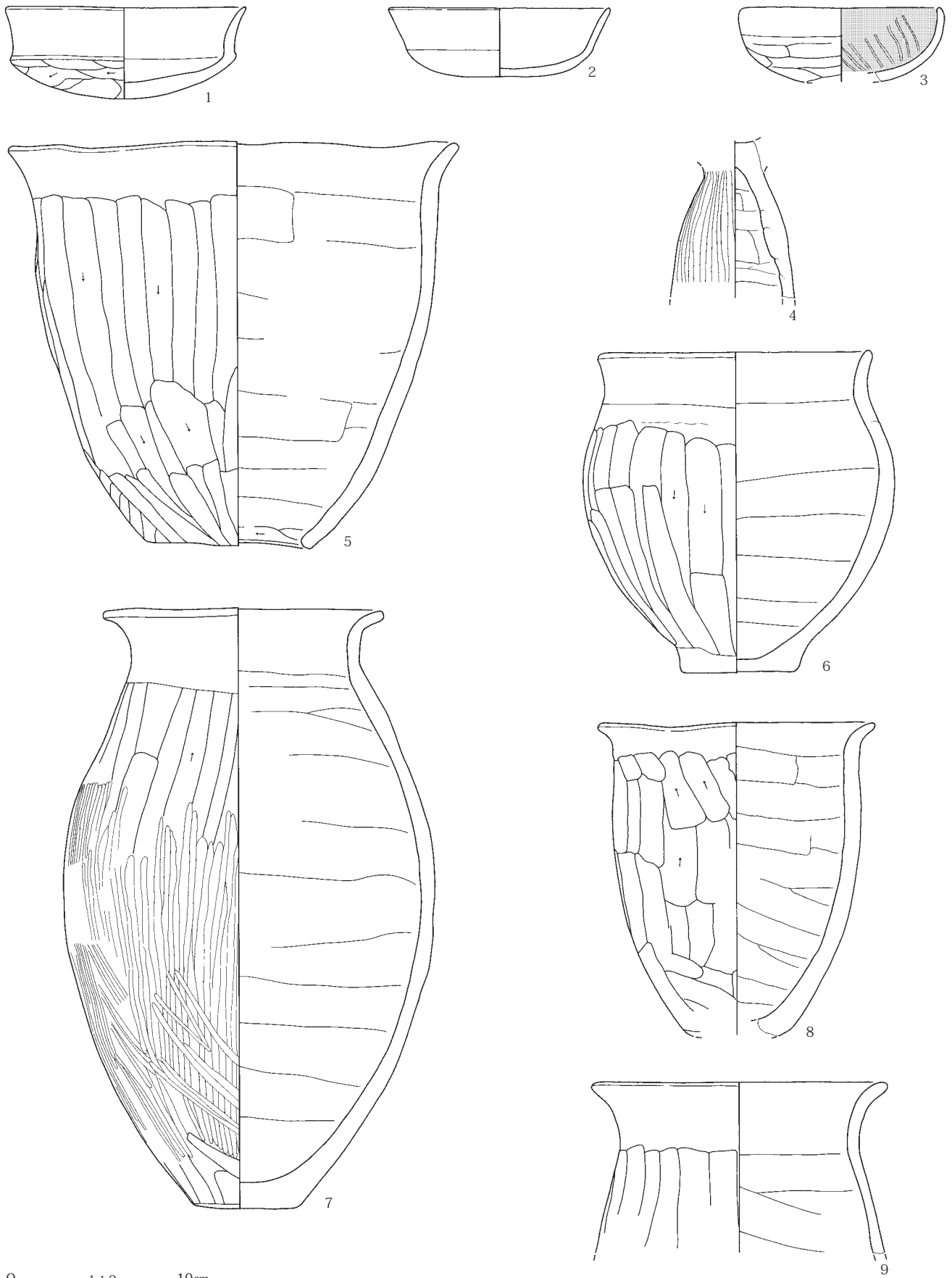


30号竪穴住居カマドC-C'

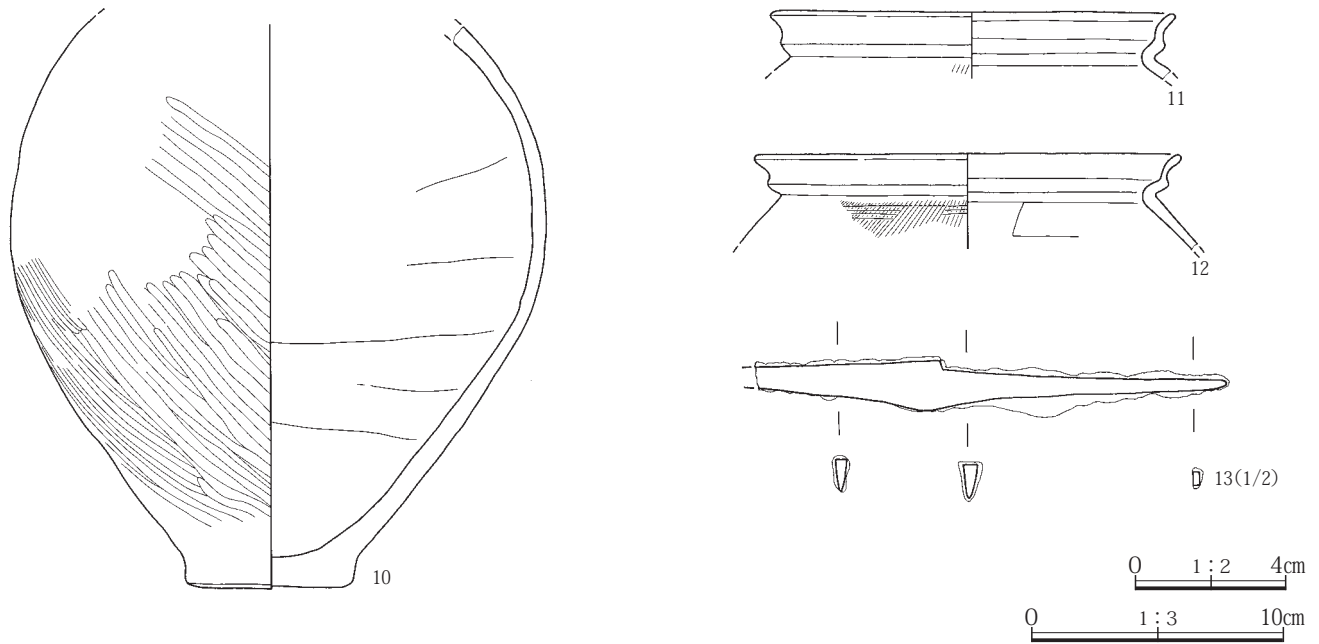
1. 暗褐色土 黄褐色小塊・粒を含む
2. 暗褐色土 黄褐色小塊多量、下部に焼土粒を含む
3. 暗褐色土 第1層より色味は暗い、黄褐色土小塊・粒を含む
4. 暗褐色土 第2層に近似、黄褐色土小塊少量



第235図 3区30号竪穴住居



第236図 3区30号竪穴住居出土遺物(1)



第237図 3区30号竪穴住居出土遺物(2)

**3区31号竪穴住居**(第238図 PL.87・132)

**位置:** X=114 ~ 117、Y=-402 ~ 405

**形状・規模:** 他の遺構との重複のため、全体の形状や規模は不明である。形状は長方形と想定される。規模は、長軸長2.98m、短軸長2.87m、壁高北壁13cm、東壁5cm、西壁4cmを測る。

**主軸方位:** N-4°-E

**重複:** 14号竪穴住居、5号井戸、12・14号溝と重複する。31号竪穴住居は、14号竪穴住居より新しく、5号井戸、12・14号溝より古い。

**埋没土:** 上層が削平されているため確認できなかった。

**床面:** 床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、北壁際に比べ南側が2cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・柱穴:** 床面精査を行ったが確認できなかった。

**周溝:** 北壁の中央部が掘込まれている。規模は、幅15~26cm、深さ10~15cmを測る。

**掘り方:** 住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態:** 鉄製品鏃(第238図1)は床面上9cmから出土した。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品1、小型製品1)が出土した。

**所見:** 出土遺物が少なく時期を特定できないが、古墳時代後半と考えられる。

**3区35号竪穴住居**(第238図 PL.87・88・132)

**位置:** X=055 ~ 058、Y=-372 ~ 374

**形状・規模:** 東壁と南壁の一部を確認し、調査区外の西側に住居が広がるため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長1.71m、東西長2.87m、壁高東壁15cm、南壁4cmを測る。

**主軸方位:** N-55°-E

**重複:** 36号竪穴住居、50号ピットと重複する。35号竪穴住居は、36号竪穴住居より新しく、50号ピットより古い。

**埋没土:** 埋没土は、焼土粒や炭化物、浅黄橙色土を含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。

**床面:** 確認できた床面が僅かであるが、レベル差は少なくほぼ平坦である。

**カマド:** 東壁に付設する。カマド燃烧部側壁や燃烧部が残存する。確認できる規模は、全長0.79m、幅1.07m、燃烧部幅0.48m、右袖状残存部長さ0.73mを測る。床面よりカマド燃烧面は1cm高い。主軸方位は、N-63°-Eである。掘り方は確認できなかった。土師器杯(第238図1)は、燃烧部側壁右側の床面直上から出土した。

**貯蔵穴:** カマド右側で確認した。形状は不定形で、長径1.04m、短径0.96、深さ0.63mを測る。底面を小ピット状に掘込み、底面から斜めに立ち上がり、開口部付近は緩やかに傾斜する。出土遺物はなかった。

**柱穴:** 床面精査によってピット1基を確認した。P1の

形状は楕円形で、規模は、長径0.40m、短径0.32m、深さ0.30mを測る。

**周溝：**東壁と南壁が掘込まれる。規模は、幅13～19cm、深さ1～21cmを測る。埋没土は、浅黄橙色土塊を多量に含む褐灰色土によって人為的に埋戻す。

**他の施設：**南壁際で土坑を1基確認した。西側が調査区外となるため全体の形状及び規模は不明であるが、形状は溝状で、確認できる規模は、長径0.73m、短径0.54m、深さ0.18mである。埋没土は、黒色土塊と浅黄橙色土塊を多量に含む黒褐色土によって人為的に埋戻す。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器杯(第238図2・3)は埋没土から出土し、土師器杯(第238図4)は混入と考えられる。非掲載遺物は、土師器158点(大型製品140、中型製品1、小型製品17)、須恵器5点(大型製品2、小型製品3)、灰釉陶器2点(大型製品1、小型製品1)が出土した。

**所見：**出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

### 3区36号竪穴住居(第239図 PL.87)

**位置：**X=054～058、Y=-372～374

**形状・規模：**東壁と南壁の一部を確認し、調査区外の西側及び東側に住居が広がるため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長3.91m、東西長2.88、壁高東壁14cm、南壁8cmを測る。

**主軸方位：**南壁を主軸方位とすると、N-44°-E

**重複：**35号竪穴住居、90・96号土坑、47・48・50・54号ピットと重複し、36号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、浅黄橙色土塊を含む灰褐色土、にぶい黄褐色土、褐灰色土であり、上層に焼土粒・塊や炭化物を含む。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**確認できた床面が僅かであるが、レベル差は、北側に比べ南側が4cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**炉・カマド・貯蔵穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**柱穴：**床面精査によってピット1基を確認した。形状は不定形で、規模は長径40cm、短径23cm、深さ43cmである。壁際に付設した梯子など、何らかの施設の下部構造と考えられる。

**周溝：**南壁の一部が掘込まれる。規模は、幅11～15cm、

深さ7～9cmを測る。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態：**土師器高杯(第239図1)は東壁際の床面直上から出土した。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品)が出土した。

**所見：**35号竪穴住居との重複から時期は、6世紀前半以前と考えられる。

### 3区37号竪穴住居(第234図 PL.88)

**位置：**X=058～062、Y=-372～373

**形状・規模：**西壁と南壁の一部を確認し、調査区外の東側に住居が広がるため、全体の形状や規模は不明である。確認できる規模は、南北長2.73m、東西長1.80、壁高西壁19cm、南壁27cmを測る。

**主軸方位：**西壁を主軸方位とするとN-32°-E

**重複：**53号ピットと重複し、遺構確認状況から37号竪穴住居が古い。

**埋没土：**埋没土は、浅黄橙色土粒・塊や灰白色粘土塊を含む灰褐色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**床面のレベル差は少なくほぼ平坦であるが、西壁際は、南側より北側が3cm低い。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**カマド・貯蔵穴・柱穴：**床面精査を行ったが確認できなかった。

**周溝：**西壁と南壁が掘込まれる。規模は、幅18～32cm、深さ11～33cmを測る。周溝の底面に小ピット状で深さ4～8cmの窪みが4ヶ所認められる。

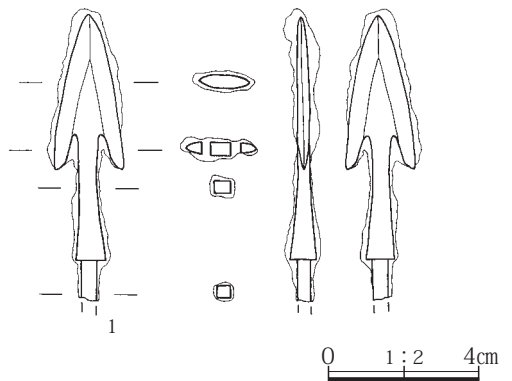
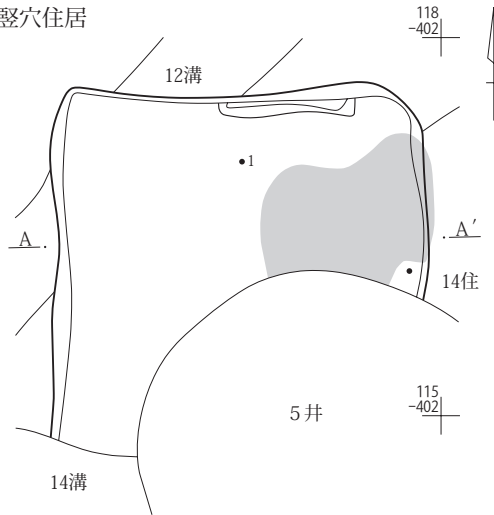
**他の施設：**床面精査を行い、東壁際でピット1基を確認した。形状は不定形で、長径0.24m、短径0.23m、深さ0.06mである。壁際に付設した何らかの施設の下部構造と考えられる。

**掘り方：**住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

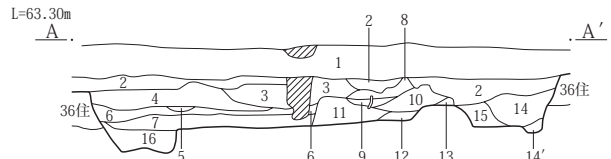
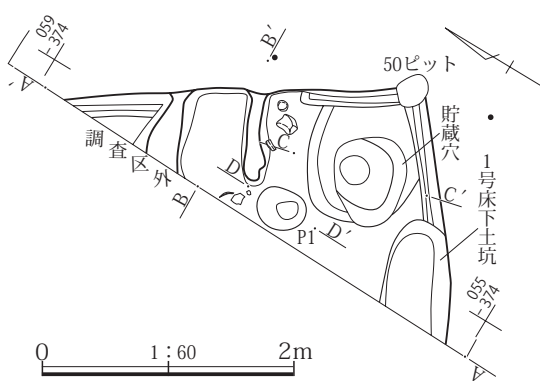
**遺物出土状態：**非掲載遺物は、土師器21点(大型製品18、小型製品3)、須恵器1点(小型製品)が出土した。

**所見：**出土遺物が少なく時期を特定できないが、古墳時代後期と考えられる。

3区31号竪穴住居



3区35号竪穴住居

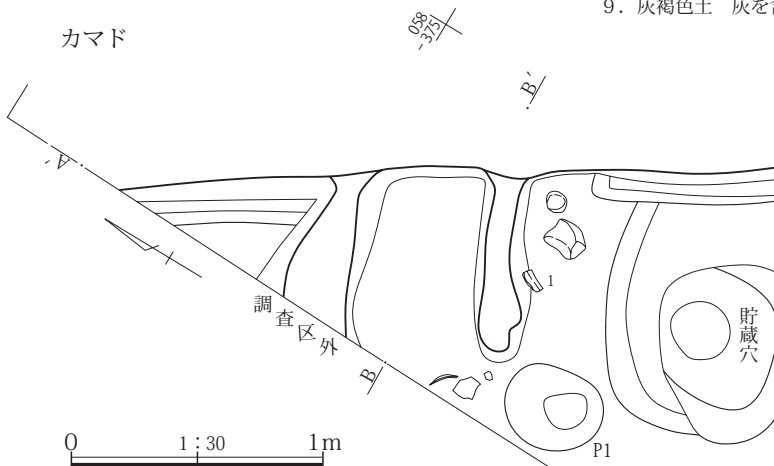


35号竪穴住居A-A'

1. 褐灰色土 焼土粒・黄橙色粒微量
2. 褐灰色土 焼土粒少量、第2層より色味は明るい、締まりあり
3. 灰褐色土 焼土小塊を含む、粘性あり
4. 褐灰色土 焼土粒を含む、粘性あり
5. 褐灰色土 炭化物を含む
6. 褐灰色土 焼土粒・炭化物を含む、締まりあり
7. 褐灰色土 黄橙色粒を含む、粘性あり
8. 灰褐色粘質土 焼土粒小塊多量
9. 灰褐色土 灰を含む

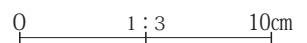
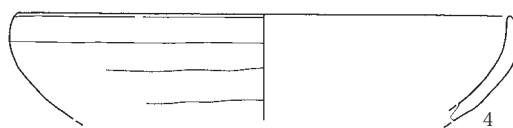
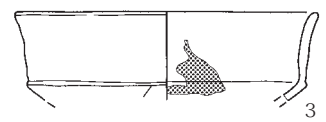
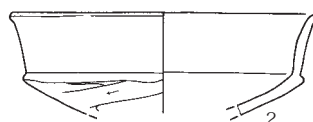
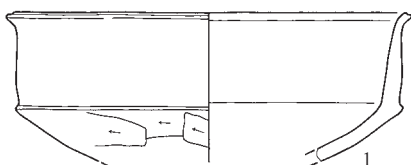
10. 灰褐色土 焼土粒・黄橙色粒少量、粘性あり
11. 灰褐色土 第5層より色味は暗い、褐灰色粘質土を含む
12. 明褐色土 炭化物を含む、粘性あり
13. 浅黄褐色土 焼土粒を含む、粘性あり
14. 褐灰色土 浅黄褐色土塊微量、粘性あり
- 14'. 褐灰色土 浅黄褐色土塊多量
15. 褐灰色土 第14'層より色味は明るい、浅黄褐色土塊を含む、粘性あり
16. 黒褐色土 黒色土塊・浅黄褐色土塊多量

カマド



35号竪穴住居カマドB-B'

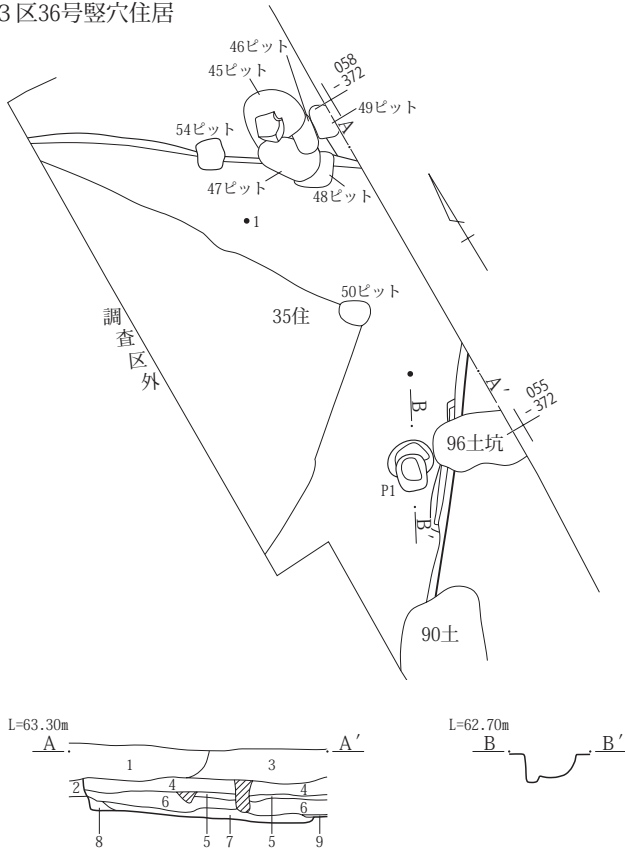
1. 灰褐色土 焼土塊を斑に含む
2. 灰褐色土 灰褐色粘土塊・焼土塊少量
3. 灰褐色土 浅黄褐色土微量
4. 浅黄褐色土 焼土塊・褐色土少量、粘性あり
5. 黒褐色土 焼土粒微量
6. 灰褐色土 焼土粒・黄橙色粒少量、粘性あり
7. 明褐色土 炭化物を含む、粘性あり
8. 灰褐色土 粘土層、浅黄褐色土を含む
9. 灰黄褐色土 焼土層塊主体
10. 黒褐色土 炭化物多量、焼土粒微量
11. にぶい褐色土 焼土粒を含む、粘性あり
12. 浅黄褐色土 焼土塊・褐色土少量、粘性あり
13. 浅黄褐色土 第12層に近似、焼土粒微量
14. にぶい褐色土 焼土粒微量



第238図 3区31・35号竪穴住居と出土遺物

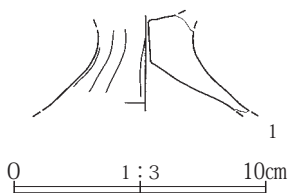


3区36号竪穴住居

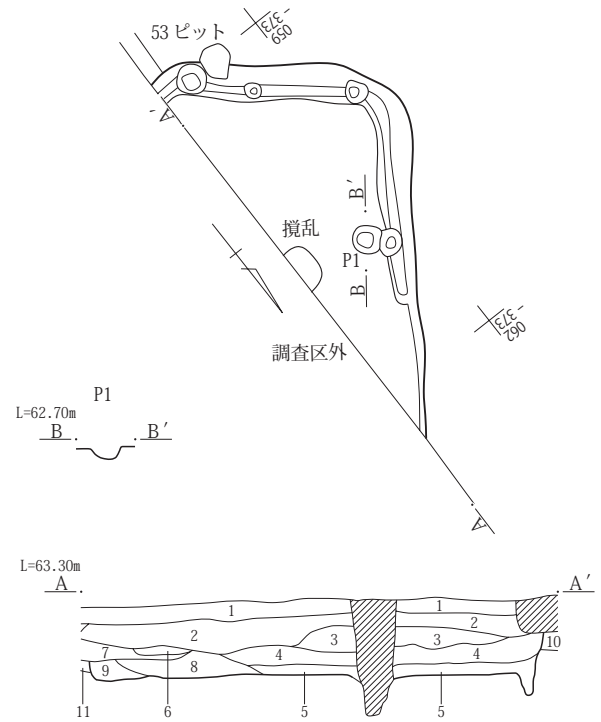


36号竪穴住居A-A'

1. 灰褐色土 浅黄橙色土塊・灰白色粘土塊を含む
2. にぶい黄褐色土 浅黄橙色土粒多量、締まり弱
3. 灰褐色土 浅黄橙色土粒少量
4. 灰褐色土 焼土粒・浅黄橙色土塊微量、粘性ややあり、締まりあり
5. 褐灰色土 浅黄橙色土塊少量
6. 灰褐色土 浅黄橙色土塊含む、粘性あり
7. 灰褐色土 浅黄橙色土塊・焼土塊・炭化物を含む
8. 灰褐色土 浅黄橙色土塊・粒多量
9. 褐灰色土 粘質土、灰白色粘土塊・焼土塊・浅黄橙色土塊を含む



3区37号竪穴住居



37号竪穴住居A-A'

1. 褐灰色土 浅黄橙色土粒・焼土粒微量
2. 灰褐色土 焼土・浅黄橙色土粒微量
3. 灰褐色土 焼土粒微量、粘性あり
4. 灰褐色土 浅黄橙色土粒少量、第3層に近似、粘性強
5. 灰褐色土 浅黄橙色土粒多量
6. 灰褐色土 浅黄橙色土小塊・焼土粒多量、締まりあり
7. 灰褐色土 浅黄橙色土粒多量、焼土粒微量
8. 灰褐色土 灰白色粘土塊・焼土小塊多量
9. 灰褐色土 灰白色粘土塊・浅黄橙色土塊多量
10. にぶい黄褐色土 浅黄橙色土粒多量、締まり弱
11. にぶい黄褐色土 灰黄橙色土粒を含む



第239図 3区36号竪穴住居と出土遺物・37号竪穴住居

3区38号竪穴住居(第240・241図 PL.88・132)

位置：X=068～071、Y=-371～373

形状・規模：他の遺構との重複や調査区外の東側及び西側に広がるため、全体の形状や規模は不明である。

主軸方位：不明。

重複：39号竪穴住居、94号土坑、51号ピットと重複する。

38号竪穴住居は、39号竪穴住居、94号土坑、51号ピットより古い。

**埋没土：**埋没土は、浅黄橙色土粒・塊や焼土粒を含む褐灰色土であり、堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。

**床面：**北側に比べ南側との比高2cmであり、南側が僅かに低い。南側は39号竪穴住居によって掘込まれているため床面は確認できなかった。使用による明瞭な硬化面は確認できなかった。

**炉・貯蔵穴・柱穴・周溝：**床面精査を行ったが確認でき

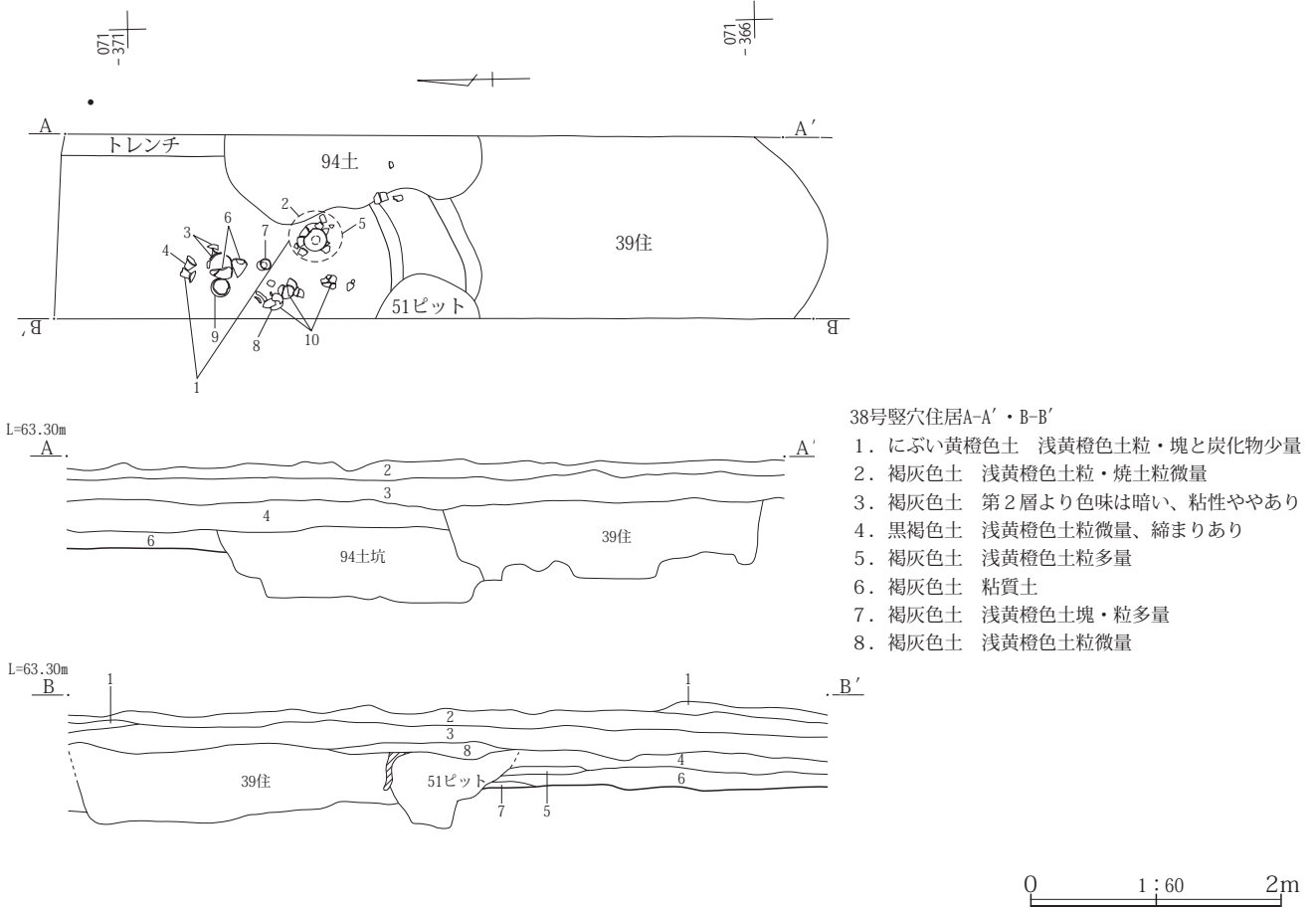
なかった。

**掘り方**：住居の床面下で掘り方は確認できなかった。

**遺物出土状態**：土師器高杯(第241図2・4・5)は床面直上～4cmから、土師器高杯(第241図1・3)は床面下から、土師器有孔鉢(第241図6)、土師器小型壺(第241図7・8)は床面上4～8cmから、土師器壺(第241図9)

は床面下から、土師器甕(第241図10)は床面直上～7cmから出土した。棒状礫(第241図11)は、埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器150点(大型製品141、中型製品2、小型製品7)、須恵器5点(小型製品)が出土した。  
**所見**：出土遺物から時期は、5世紀前半と考えられる。

3区38号竪穴住居



第240図 3区38号竪穴住居

2 土坑・ピット

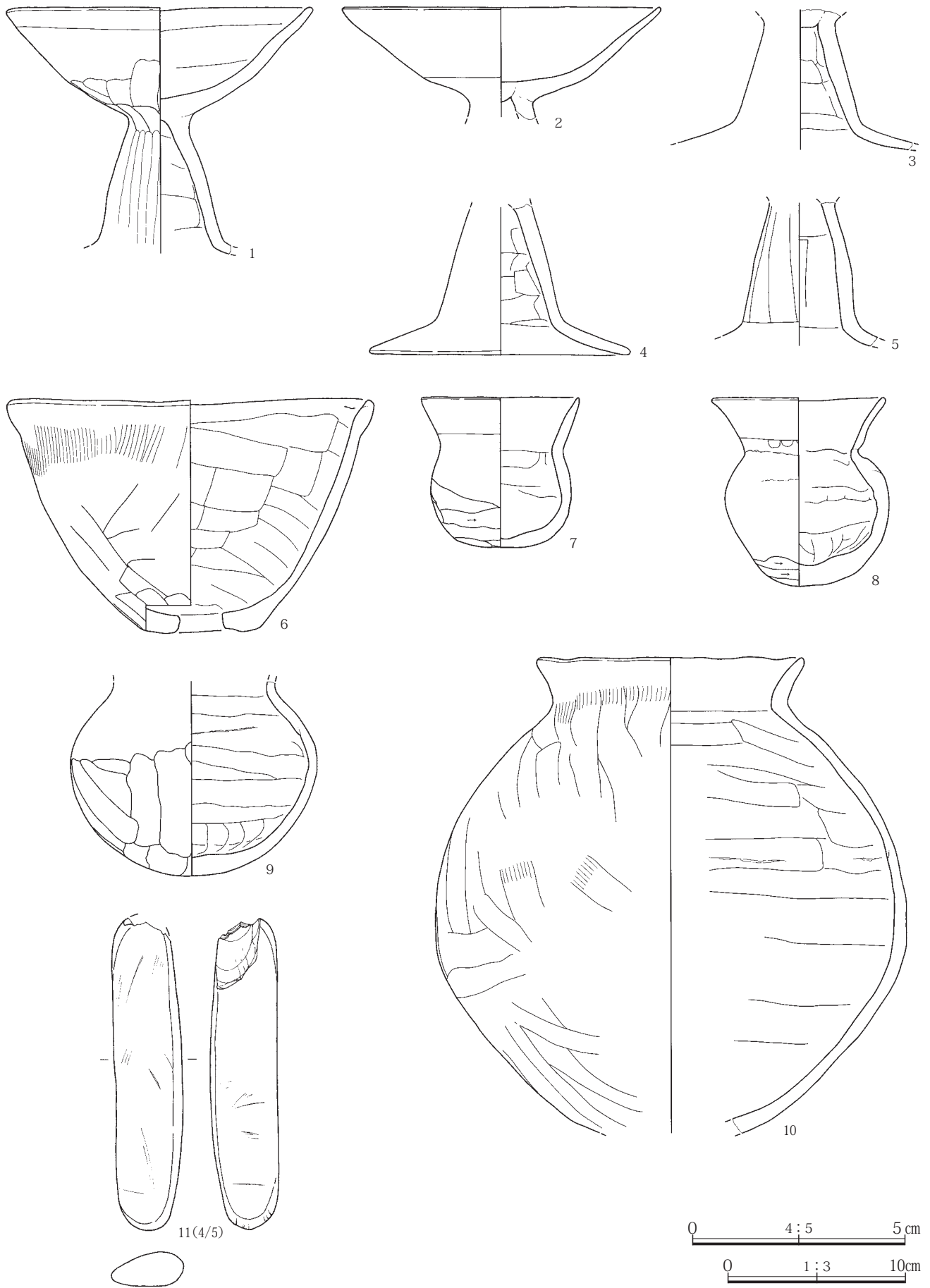
3区第2面では、土坑28基、ピット31基を調査した。土坑とピットは、調査区東部の微高地や南側の3区拡張部に集中する。出土遺物などがなく時期を特定できない土坑とピットについては、埋没土などから判断し古墳時代に帰属させたが、奈良・平安時代以降の新しい土坑やピットが含まれている可能性もある。それぞれの土坑とピットは、第15表土坑計測表(378・379頁)及び第16表ピット計測表(380頁)において概略を記す。

3区9号土坑(第242図 PL.42・88)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面に僅かな凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、下層の暗褐色土に多量の黄褐色土大塊が含まれることから人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器65点(大型製品46、小型製品19)、須恵器7点(大型製品1、小型製品6)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

3区22号土坑(第242図 PL.88)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形



第241図 3区38号竪穴住居出土遺物

状は底面がほぼ平坦であり、壁は開口部がやや狭く袋状に掘込まれている。7号竪穴住居、23号土坑と重複し、22号土坑が最も新しい。埋没土は、黄褐色土塊や黒褐色土を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器9点(大型製品)が出土した。出土遺物などから時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区23号土坑(第242図 PL.88)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は開口部がやや狭く袋状に掘込まれている。6・7号竪穴住居、22号土坑と重複し、6・7号竪穴住居より新しく、22号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土大塊を多量に含む黒褐色土や暗褐色土、黄褐色土小塊を含む灰黄褐色土などによる人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器12点(大型製品11、小型製品1)、須恵器3点(小型製品)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区25号土坑(第242図 PL.42・88)

第2面東側に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明であるが、平面形状は楕円形と想定される。断面形状は浅い椀形を呈する。7号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から25号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土塊や焼土粒を含む暗褐色土や褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器18点(大型製品17、小型製品1)、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区26号土坑(第242図 PL.88)

第2面東側に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明であるが、平面形状は楕円形と想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。南側に比べ北側がやや深く掘込まれている。重複する遺構はない。埋没土は25号土坑に類似し、黄褐色土塊を含む暗褐色土や褐灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

### 3区27号土坑(第242図 PL.88)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。19号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から27号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土塊を含む暗褐色土や黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、19号竪穴住居との重複から古墳時代初頭以降と考えられる。

### 3区28号土坑(第242図 PL.89・133)

第2面東側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面がほぼ平坦である。壁は開口部にかけて垂直に立ち上がる。17号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から28号土坑が新しい。埋没土は、炭化物を微量に含む暗褐色土であり、黄褐色土塊を多量に含むことから人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第242図28土1)、土師器器台(第242図28土2)、土師器甕(第242図28土3)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器133点(大型製品98、小型製品35)、須恵器10点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区32号土坑(第242図 PL.89)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面中央部に小ピット状の窪みが認められ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しは不明である。非掲載遺物は、土師器4点(大型製品3、小型製品1)である。出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

### 3区33号土坑(第243図 PL.42・89)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦である。20・21・34・56号土坑と重複する。33号土坑は、20・21・34・56号土坑より古い。埋没土は、黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器10点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀代と考えられる。

**3区37号土坑(第243図 PL.89)**

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は東側の底面が西側に比べ約0.10m低く、壁は開口部がやや狭く特に東側が袋状に掘込まれている。8号溝、6号竪穴住居と重複し、37号土坑は8号溝より古く、6号竪穴住居より新しい。埋没土は、少量の黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器12点(大型製品8、小型製品4)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀後半以降と考えられる。

**3区43号土坑(第243図 PL.89)**

第2面西側に位置する。平面形状は隅丸長方形で、断面形状は底面がほぼ平坦であるが、北側がやや深く掘込まれている。壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黒褐色土小塊を含むにぶい黄褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代以降と考えられる。

**3区55号土坑(第243図 PL.42)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形と想定される。断面形状は底面が平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。54号土坑と重複し、55号土坑が古い。埋没土は、黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土と黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器10点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

**3区61号土坑(第243図 PL.89)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁の北側が袋状に掘込まれる。10号竪穴住居、62・77号土坑、11号溝と重複する。61号土坑は、10号竪穴住居・62・77号土坑より新しく、11号溝より古い。埋没土は、黄褐色土中塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物が多く、土師器杯(第243図61土1)、土師器甕(第243図61土2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器83点(大型製品72、小型製品11)、須恵器8点(大型製品2、小型製品6)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

**3区62号土坑(第243図 PL.89)**

第2面東側に位置する。61号土坑との重複から全体の規模や形状は不明であるが、平面形状は円形と想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は北側が袋状に掘込まれる。10号竪穴住居、61・77号土坑、11号溝と重複する。62号土坑は、10号竪穴住居・77号土坑より新しく、61号土坑、11号溝より古い。埋没土は、黄褐色土中塊や黒褐色土中塊を多量に含む褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複から6世紀後半以降と考えられる。

**3区64号土坑(第243図 PL.89)**

第2面東側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁が垂直に立ち上がる。22号竪穴住居と重複し、64号土坑が新しい。埋没土は、焼土粒や炭化物を含む暗褐色土であり、黄褐色土塊を多量に含むことから人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器皿(第243図64土1)、土師器甕(第243図64土2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器34点(大型製品26、小型製品8)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀後半と考えられる。

**3区65号土坑(第244図 PL.89)**

第2面東側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は底面が平坦であり、壁がほぼ垂直に立ち上がる。22号竪穴住居と重複し、65号土坑が新しい。埋没土は、焼土粒や炭化物、黄褐色土塊を多量に含む暗褐色土であり、底面には焼土と炭化層が認められる。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物が多く、土師器皿(第244図65土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器115点(大型製品108、小型製品7)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀中頃以降と考えられる。

**3区69号土坑(第243図 PL.90)**

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁は開口部にかけて斜めに立ち上がる。7号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から69号土坑が新しい。埋没土は、黄褐色土小塊を多量に含む褐色土と黒褐色土により、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器8点(大型製品)、



須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物や7号竪穴住居との重複などから時期は、6世紀前半以降と考えられる。

### 3区74号土坑(第244図)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦で、壁がほぼ垂直に立ち上がる。24号竪穴住居、58号土坑と重複し、74号土坑が24号竪穴住居より新しく、58号土坑より古い。埋没土は、焼土粒を含む暗褐色土であり、黒褐色土塊や黄褐色土塊を含むことから人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

### 3区77号土坑(第244図 PL.90)

第2面東側に位置する。他の遺構との重複によって遺存状態は良好ではなく全体の規模や形状は不明であるが、平面形状は不定形と想定される。断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。61号土坑、11号溝と重複し、77号土坑が古い。埋没土は、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土により、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。遺物は、土師器甕(第244図77土1)が底面上5cmから、土師器甕(第244図77土2)が底面上18cmから出土した。非掲載遺物は、土師器3点(大型製品)が出土した。出土遺物などから時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区78号土坑(第244図 PL.90・133)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈するが東壁が西壁に比べ緩やかに斜めに立ち上がる。9号竪穴住居、5号溝、27号ピットと重複し、78号土坑が古い。埋没土は、褐灰色土粒や炭化物を含む黒色土、ローム粒を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器高杯(第244図78土1)が底面上29cmから、土師器甕(第244図78土2・3)が底面上28～30cmから出土した。非掲載遺物は、土師器26点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、5世紀代と考えられる。

### 3区79号土坑(第244図 PL.90)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。14・24号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から79号土坑が新しいと考えられる。埋没土は、明黄褐色土粒・塊などを含む褐色土、黄褐色土、暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、14・24号竪穴住居との重複や埋没土などから、6世紀後半以降と考えられる。

### 3区80号土坑(第245図 PL.90)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。14号溝と重複し、80号土坑が古い。埋没土は、灰黄褐色土塊を含む黒褐色土や暗褐色土などであり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器5点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区81号土坑(第245図 PL.90・133)

第2面東側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は底面が平坦であり、壁がほぼ垂直に立ち上がる。13号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から81号土坑が古いと考えられる。埋没土は、黄褐色土小塊や黒褐色土塊を含む暗褐色土であり、第7層に灰層や焼土層が認められる。堆積状況から人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物が多く、土師器杯(第245図81土1)が底面上4cmから、土師器甕(第245図81土3)が底面上31cmから、土師器甕(第245図81土2)、土製品土錘(第245図81土4)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器35点(大型製品32、中型製品3)、須恵器1点(大型製品)、灰釉陶器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、5世紀末から6世紀初頭と考えられる。

### 3区83号土坑(第245図 PL.90)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は南側に比べ北側がやや深く掘込まれ、底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。10・18号竪穴住居、14号溝と重複する。遺構確認状況から83号土坑は、10・18号竪穴住居より新しく、14号溝より古いと考えられる。自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がな

く時期を特定できないが、他の遺構との重複から6世紀後半以降と考えられる。

### 3区84号土坑(第245図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面の南側はほぼ平坦であるが、底面の北側が約0.30m高い。2・7号土坑、28・29号ピット、11号溝と重複し、84号土坑が最も古い。埋没土は、ローム粒を含む黒褐色土や黒色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

### 3区85号土坑(第245図 PL.133)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は椀形を呈する。14号溝と重複し、遺構確認状況から85号土坑が古い。遺物は、土師器台付甕(第245図85土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区86号土坑(第246図 PL.59・91)

第2面拡張部に位置する。土坑の北側及び西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明であるが、平面形状は円形と想定される。断面形状は底面がほぼ平坦であるが、北側がやや深く、南壁が斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色土塊を多量に含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器杯(第246図86土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器4点(大型製品3、小型製品1)、須恵器4点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、6世紀前半と考えられる。

### 3区94号土坑(第246図)

第2面拡張部に位置する。土坑の東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁が斜めに立ち上がる。38・39号竪穴住居と重複し、38号竪穴住居より新しく、39号竪穴住居より古い。埋没土は、浅黄橙色土塊や黒色土塊などを含む黒褐色土や褐灰色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく

時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

### 3区1号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。11・13・19号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から1号ピットが最も古いと考えられる。埋没土は、黒褐色土と暗褐色土の混土による人為的な埋戻しと考えられ、第2層は柱痕の可能性はある。周辺で1号ピットに対応する柱穴については確認できなかった。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、11・13・19号竪穴住居との重複から古墳時代初頭と考えられる。

### 3区2号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は椀形を呈する。19号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から2号ピットが古いと考えられる。埋没土は、少量の炭化物を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。遺物は、土師器鉢(第246図2ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、4世紀代と考えられる。

### 3区3号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、焼土粒を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代と考えられる。

### 3区4号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、第2層の締まりが弱く柱痕の可能性があり、にぶい橙色土を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。周辺で4号ピットに対応する柱穴を確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定でき

ないが、埋没土から古墳時代と考えられる。

### 3区10号ピット(第246図)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が平坦であり、開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。22号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から10号ピットが古いと考えられるが、周辺に対応する柱穴がないことから、22号竪穴住居に伴う柱穴の可能性もある。埋没土は、第1層が柱痕とみられ、黄褐色土粒・塊を含む暗褐色土によって埋戻す。非掲載遺物は、須恵器1点(小型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、22号竪穴住居との重複から、6世紀中頃以前と考えられる。

### 3区11号ピット(第246図)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。22号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から11号ピットが古いと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、22号竪穴住居との重複から、6世紀中頃以前と考えられる。

### 3区13号ピット(第246図)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。22号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から13号ピットが古いと考えられる。形状及び規模は11号ピットに類似する。出土遺物がなく時期を特定できが、22号竪穴住居との重複から、6世紀中頃以前と考えられる。

### 3区15号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は整った円形で、断面形状は底面の中央部がやや深く、底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。9号竪穴住居と重複し、15号ピットが古いと考えられる。埋没土は、第3層が柱痕とみられ、灰黄褐色土塊や焼土粒を含む黒褐色土によって充填する。16号ピットが隣接するが、周辺で15号ピットに対応する柱穴については確認できなかった。非掲載遺物は、土師器8点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、9号竪穴住居との重複から、6世紀前半以前と考えられる。

### 3区16号ピット(第246図 PL.91)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面北側が小ピット状に深く掘込まれる。北壁は開口部にかけてほぼ垂直に、南壁はやや緩やかに立ち上がる。9号竪穴住居、17号溝と重複し、遺構確認状況から16号ピットが古いと考えられる。埋没土は、第2層が柱痕とみられ、黒褐色土によって充填する。15号ピットが隣接するが、周辺で16号ピットに対応する柱穴については確認できなかった。非掲載遺物は、土師器4点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、9号竪穴住居との重複から、6世紀前半以前と考えられる。

### 3区17号ピット(第247図 PL.92・133)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈する。9号竪穴住居と重複し、17号ピットが新しい。埋没土は、灰黄褐色土塊を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。遺物は、土師器甕(第247図17ピット1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器1点(小型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。

### 3区25号ピット(第247図 PL.92)

第2面東側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は碗形を呈する。27・28号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から25号ピットが古いと考えられる。埋没土は、黒色土と灰の混土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

### 3区26号ピット(第247図 PL.92)

第2面東側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦で、開口部にかけて東壁はほぼ垂直に、西壁は斜めに立ち上がる。14号溝と重複し、遺構確認状況から26号ピットが古いと考えられる。埋没土は、黄灰色土塊と焼土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

**3区27号ピット(第247図)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面に小ピット状の凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。9号竪穴住居、78号土坑、5号溝と重複し、遺構確認状況から9号竪穴住居、78号土坑より新しく、5号溝より古いと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代と考えられる。

**3区28号ピット(第247図 PL.92)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は碗形を呈する。2・84号土坑、29号ピットと重複し、遺構確認状況から28号ピットが最も古いと考えられる。埋没土は、ローム粒を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

**3区29号ピット(第247図 PL.92)**

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は碗形を呈する。2・84号土坑、28号ピットと重複し、遺構確認状況から2・84号土坑より古く、28号ピットより新しい。埋没土は、黒色土塊を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複や埋没土などから古墳時代と考えられる。

**3区30号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。ピットの東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形と想定され、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代と考えられる。

**3区31号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代と考えられる。

**3区32号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。ピットの東側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は円形と想定され、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代と考えられる。

**3区33号ピット(第247図 PL.92)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は楕円形と想定され、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、灰白色土と黒褐色土の混土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土などから古墳時代と考えられる。

**3区34号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、灰白色土と橙色土粒を含む黒褐色土などによる人為的な埋戻しと考えられる。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物が少なく時期を特定できないが、古墳時代前期と考えられる。

**3区35号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面に凹凸が認められ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、36号ピットと同一の黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる。

**3区36号ピット(第247図)**

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、35号ピットと同一の黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器5点(大型製品)が出土した。出土遺物から時期は、古墳時代後期と考えられる。



### 3区37号ピット(第247図 PL.92)

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、にぶい黄橙色土粒を含む黒褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる

### 3区38号ピット(第247図)

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、にぶい黄橙色土と黒褐色土による自然埋没と考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる

### 3区39号ピット(第248図)

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は台形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、橙色土粒を多量に含む黒褐色土と黒色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる。

### 3区40号ピット(第248図)

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、橙色土粒を含む黒褐色土と黒色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる

### 3区41号ピット(第248図)

第2面拡張部北側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面の東側がやや深く掘込まれ、壁は斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黒褐色土であり自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる

### 3区43号ピット(第248図 PL.45)

第2面拡張部南側に位置する。ピット西側が調査区外となるため全体の形状や規模は不明である。平面形状は不定形で、断面形状は底面北側が小ピット状に掘込まれ、北壁は斜めに、南壁は中段を設けて開口部にかけて緩やかに立ち上がる。44号ピットと重複し、43号ピットが古い。埋没土は、にぶい黄橙色土粒や焼土粒、炭化物を含む褐灰色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、44ピットとの重複から古墳時代と考えられる

### 3区44号ピット(第248図 PL.45)

第2面拡張部南側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面から開口部にかけてほぼ垂直に立ち上がる。43号ピットと重複し、44号ピットが新しい。埋没土は、第1層が柱痕とみられ、浅黄橙色土塊を含むにぶい黄橙色土で充填する。周辺で44号ピットに対応する柱穴を確認できなかった。非掲載遺物は、土師器1点(大型製品)が出土した。出土遺物や遺構確認状況から古墳時代後期と考えられる。

### 3区49号ピット(第248図)

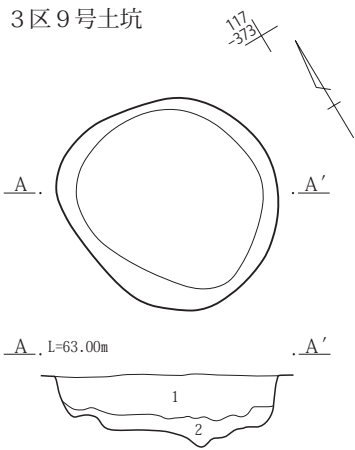
第2面拡張部南側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は中央部が小ピット状に深く掘込まれ、壁に中段を設けほぼ垂直に立ち上がる。46号ピットと重複し、遺構確認状況から49号ピットが古いと考えられる。埋没土は、浅黄橙色土塊を多量に含む灰褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況や埋没土から古墳時代と考えられる。

### 3区52号ピット(第248図)

第2面東側に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は台形を呈する。10・15・22号竪穴住居と重複し、遺構確認状況から22号竪穴住居より新しく、10・15号竪穴住居より古い。埋没土は、黄褐色土粒・塊や焼土粒などを含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。出土遺物がなく時期を特定できないが、10・15・22号竪穴住居との重複から時期は、6世紀後半以前と考えられる。



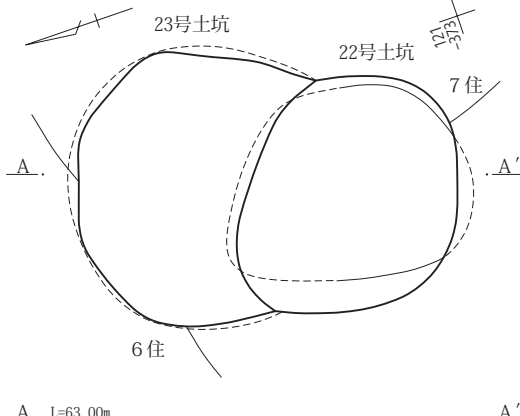
3区9号土坑



9号土坑A-A'

1. 暗褐色土 やや砂質、黄褐色土極小塊少量、炭化物微量、縮まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量

3区23・22号土坑

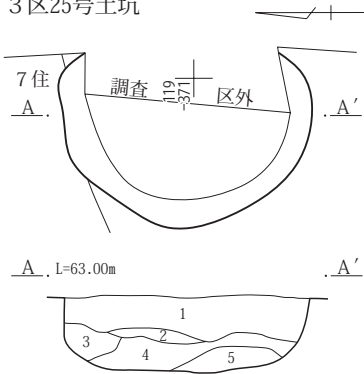


22号・23号土坑A-A'

22号・23号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土大塊・黒褐色粒多量、炭化物微量、縮まりあり
2. 暗褐色土と黄褐色土小塊の混土、縮まりなし
3. 灰黄褐色土 黄褐色土小塊多量
4. 暗褐色土 第1層より黄褐色土大塊多量
5. 灰黄褐色土 黄褐色土小塊少量、縮まりなし
6. 黒褐色土 黄褐色土大塊多量、暗褐色土粒少量
7. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、黒褐色粘質土小塊微量、縮まりあり

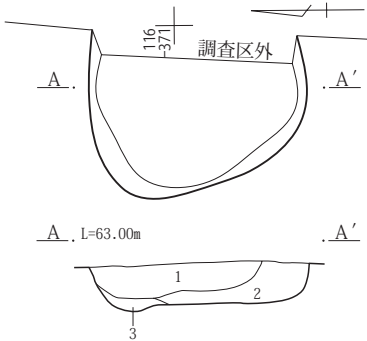
3区25号土坑



25号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊多量、焼土粒微量
2. 褐灰色土 黄褐色土小塊少量、焼土粒微量、色味は暗い、やや砂質
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量
4. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量
5. 褐灰色土 黄褐色土小塊少量、焼土粒微量、色味は暗い、やや砂質

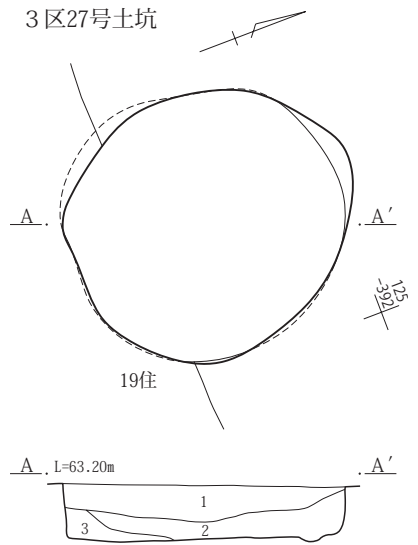
3区26号土坑



26号土坑

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊少量
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、縮まりややあり
3. 褐灰色土 やや砂質、黄褐色土小塊微量

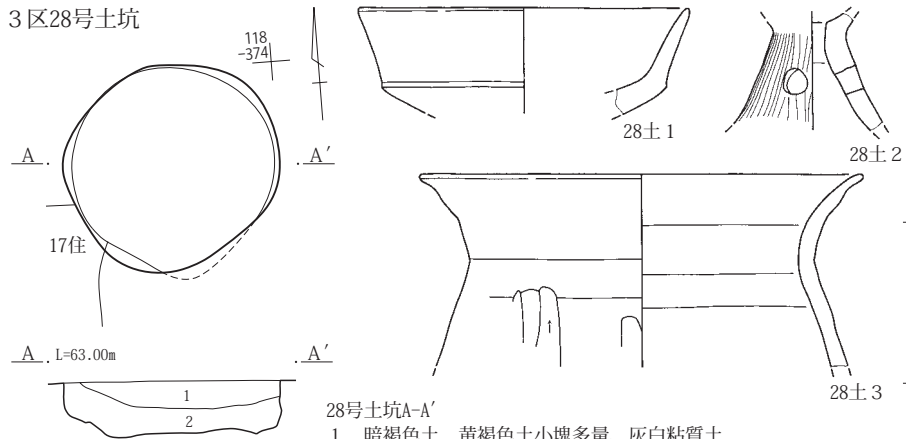
3区27号土坑



27号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、小礫微量、縮まりあり
2. 黒褐色土 黄褐色土小塊・黒色粘質土小塊微量
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、第1層より色味は暗い

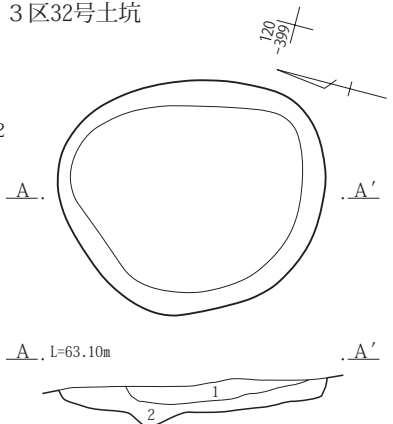
3区28号土坑



28号土坑A-A'

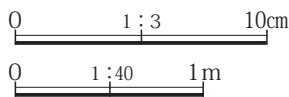
1. 暗褐色土 黄褐色土小塊多量、灰白粘質土大塊少量、炭化物微量
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、炭化物微量

3区32号土坑



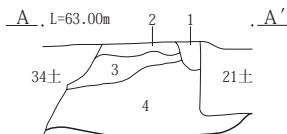
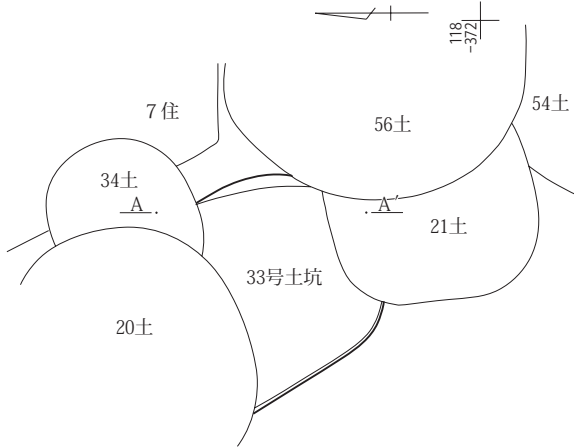
32号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊少量、縮まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊微量、縮まりなし、第1層より色味は暗い



第242図 3区9・22・23・25～27号土坑・28号土坑と出土遺物・32号土坑

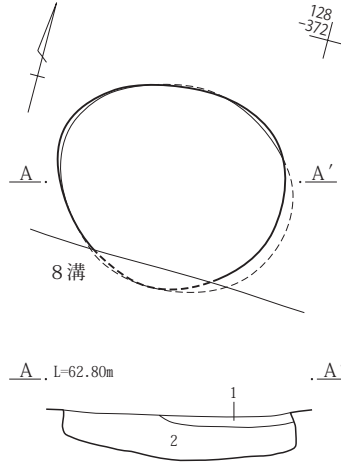
3区33号土坑



33号土坑A-A'

1. 暗褐色土 砂粒少量、締まりあり
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊・粒多量、締まり強
3. 暗褐色土 黄褐色土小塊、焼土粒・炭化物微量、締まりあり
4. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、炭化物微量

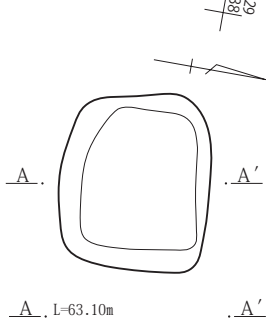
3区37号土坑



37号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土極小塊多量、締まりあり
2. 暗褐色土 砂質土、黄褐色土小塊少量、締まりあり

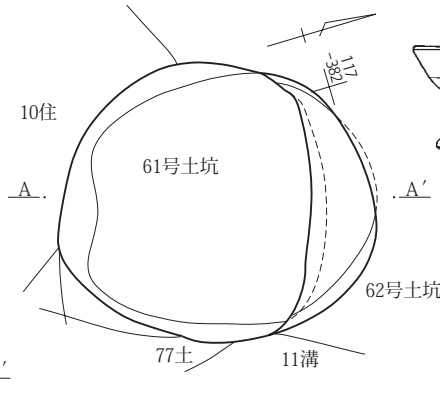
3区43号土坑



43号土坑A-A'

1. にぶい黄褐色土 黒褐色粘質土小塊微量

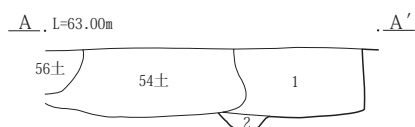
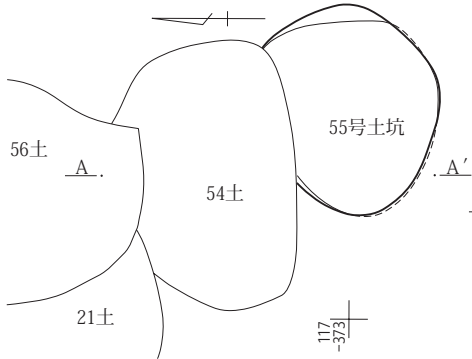
3区61・62号土坑



61・62号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊少量
2. 褐色土 黄褐色土中塊・黒褐色土中塊多量

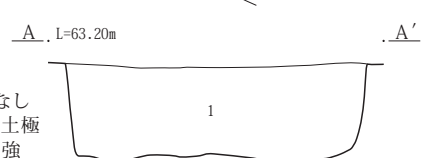
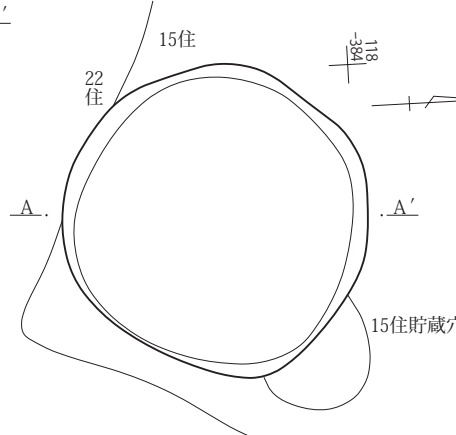
3区55号土坑



55号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土塊多量
2. 黒褐色土 黄褐色土塊多量、締まり強

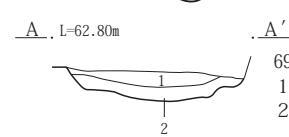
3区64号土坑



64号土坑A-A'

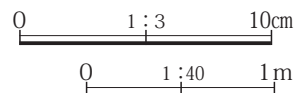
1. 暗褐色土 黄褐色土大塊多量、焼土粒・炭化物微量

3区69号土坑



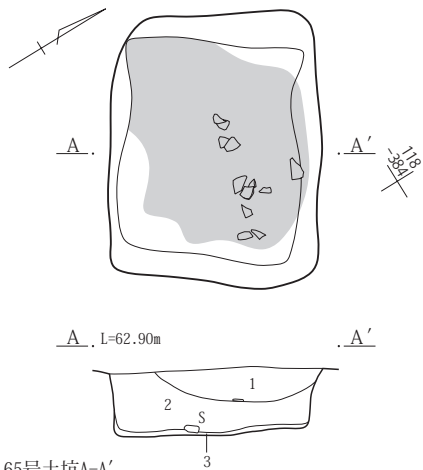
69号土坑A-A'

1. 黒褐色土 締まりなし
2. 褐灰色土 黄褐色土極小塊多量、締まり強



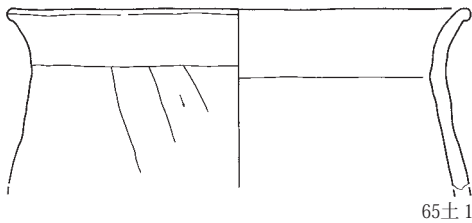
第243図 3区33・37・43・55号土坑・61・62・64号土坑と出土遺物・69号土坑

3区65号土坑



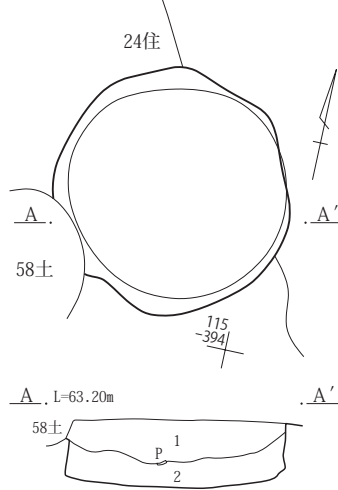
65号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土中塊、黒褐色土小塊多量、焼土粒・炭化物少量、第2層より色味は暗い
2. 暗褐色土 黄褐色土大塊やや多量、焼土粒・炭化物少量、第1層より粘性強
3. 焼土と炭化物層



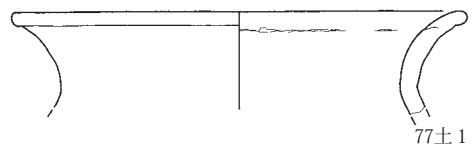
65土1

3区74号土坑



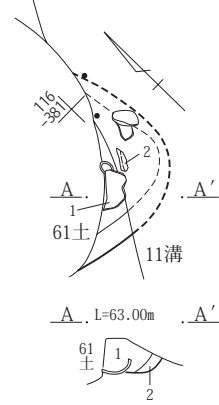
74号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土極小塊、黄褐色土粒やや多量、黒褐色土極小塊少量、焼土粒微量
2. 暗褐色土 黒褐色土大塊多量、焼土粒微量



77土1

3区77号土坑

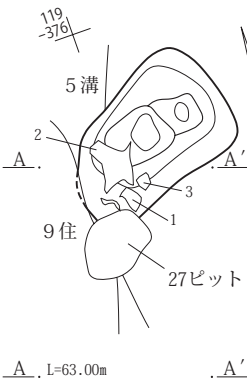


77号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量、Hr-FA?・As-C?を含む
2. 暗褐色土 黄褐色土塊多量、第1層より色味は明るい

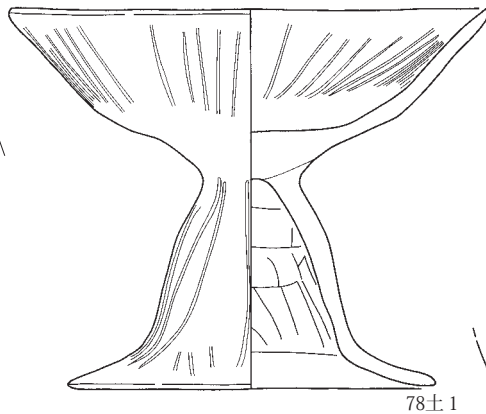


3区78号土坑

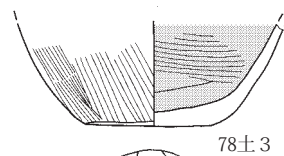


78号土坑A-A'

1. 黒褐色土 ローム中粒3%、粘性あり、縮まりあり
2. 黒色土 炭化物粒を含む、粘性あり、縮まりあり
3. 黒色土 褐灰色粘土粒1%、粘性あり、縮まりあり
4. 黒色土 褐灰色粘土中粒1%、粘性あり、縮まりあり

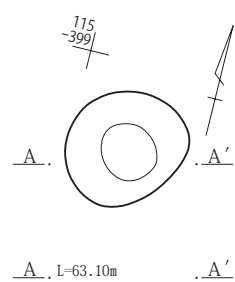


78土1



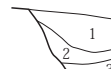
78土3

3区79号土坑



79号土坑A-A'

1. 暗褐色土 明黄褐色土小塊微量、やや粘質
2. 黄褐色土 明黄褐色土塊主体
3. 褐色土 明黄褐色土少量



0 1:4 10cm

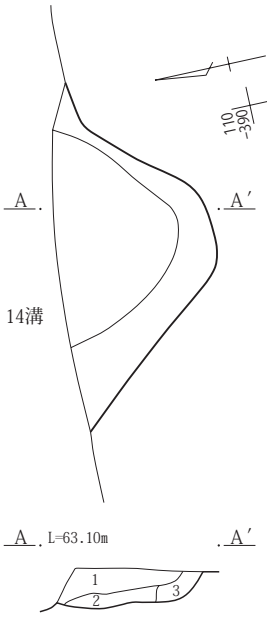
0 1:3 10cm

0 1:40 1m

78土2 (1/4)

第244図 3区65号土坑と出土遺物・74号土坑・77・78号土坑と出土遺物・79号土坑

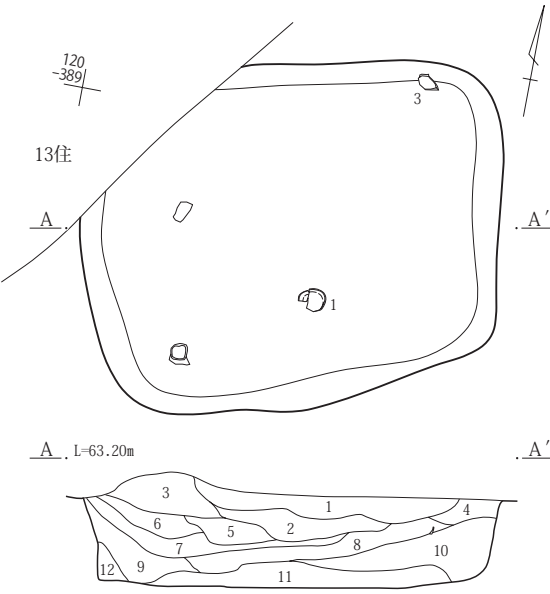
3区80号土坑



80号土坑A-A'

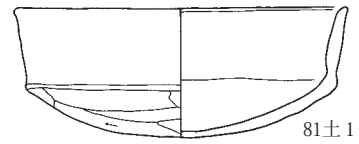
1. 暗褐色土 灰黄褐色土塊少量
2. 黒褐色土 灰黄褐色土塊やや多量
3. 灰黄褐色土 黒褐色土を含む

3区81号土坑

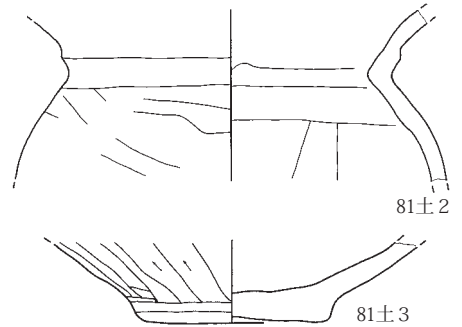
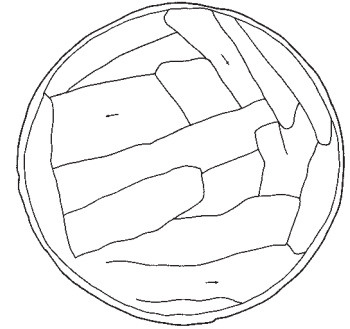


81号土坑A-A'

1. 暗褐色土 黄褐色土小塊・粒少量
2. 暗褐色土 黄褐色土小塊・粒多量
3. 暗褐色土 第1層に近似、色味は明るい
4. 暗褐色土 粘性あり
5. 暗褐色土 灰黄褐色土塊と焼土粒を含む
6. 暗褐色土 黒褐色土塊少量と焼土粒を含む
7. 暗褐色土 灰層や焼土層を含む
8. 暗褐色土 黄褐色小塊少量、粘性あり
9. 暗褐色土 第2層に近似、黄褐色土塊・粒少量
10. 暗褐色土 黒褐色土塊少量、粘性あり
11. 暗褐色土 炭化材と黄褐色土塊を含む
12. 暗褐色土 黄褐色土粒少量

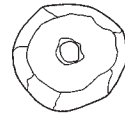


81土1



81土2

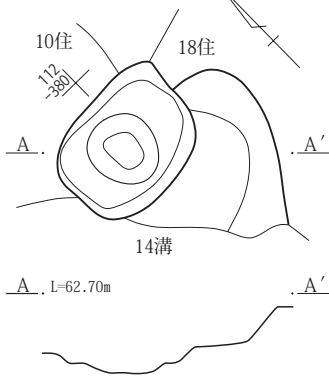
81土3



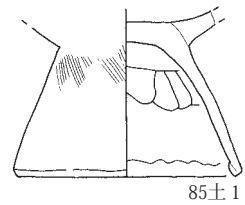
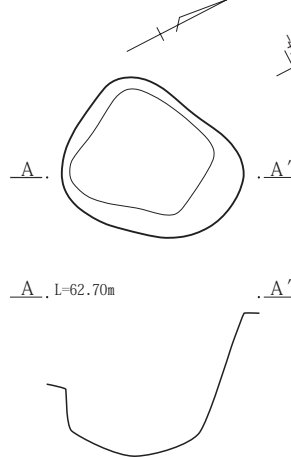
81土4 (1/2)



3区83号土坑

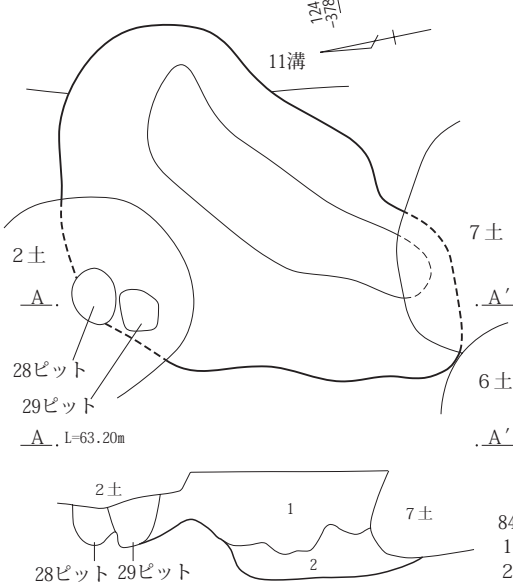


3区85号土坑



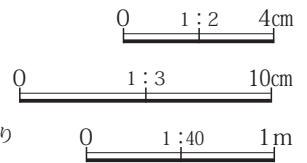
85土1

3区84号土坑

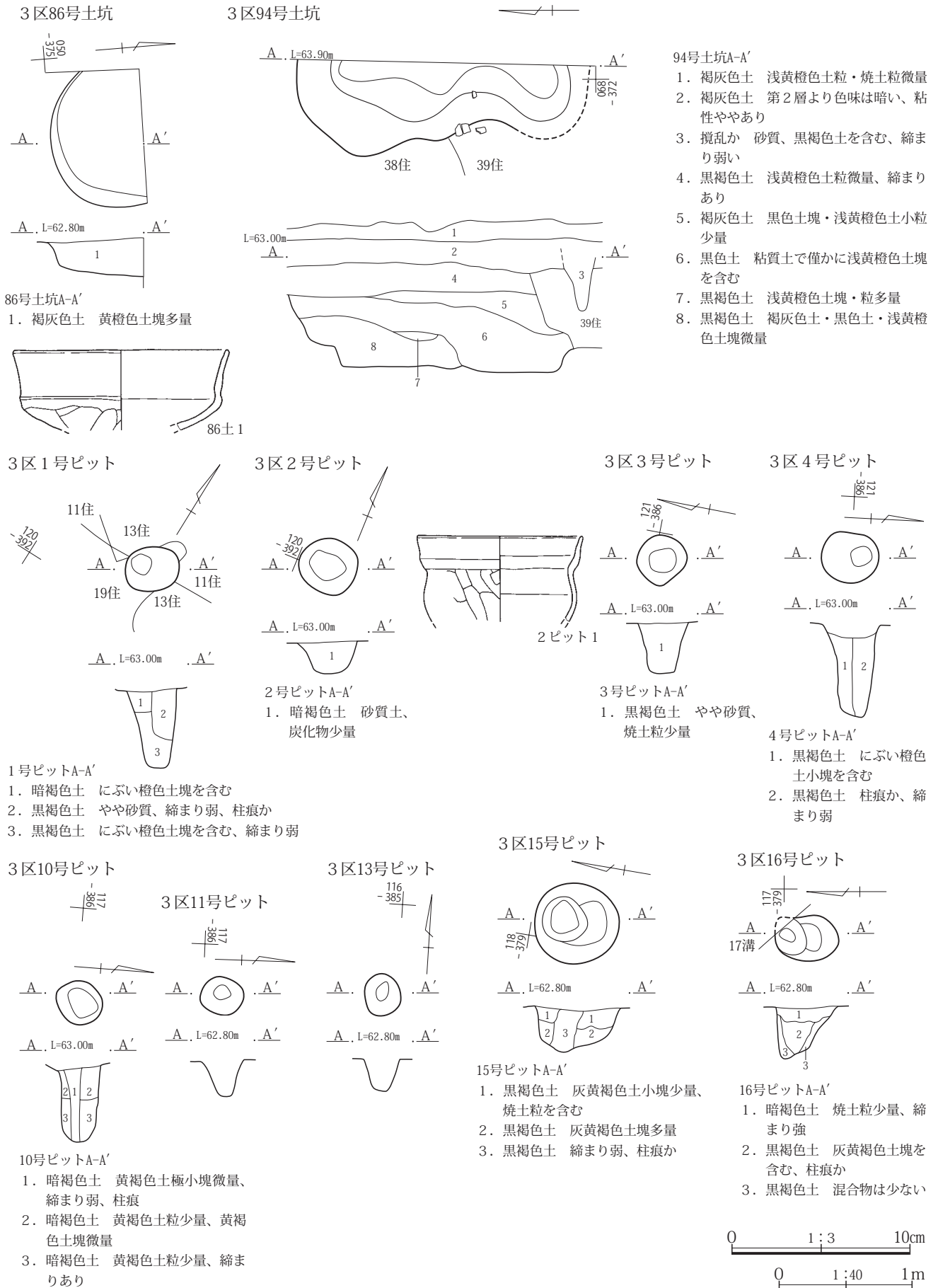


84号土坑A-A'

1. 黒色土 焼土粒・ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり
2. 黒褐色土 ローム粒を含む、粘性あり、縮まりあり

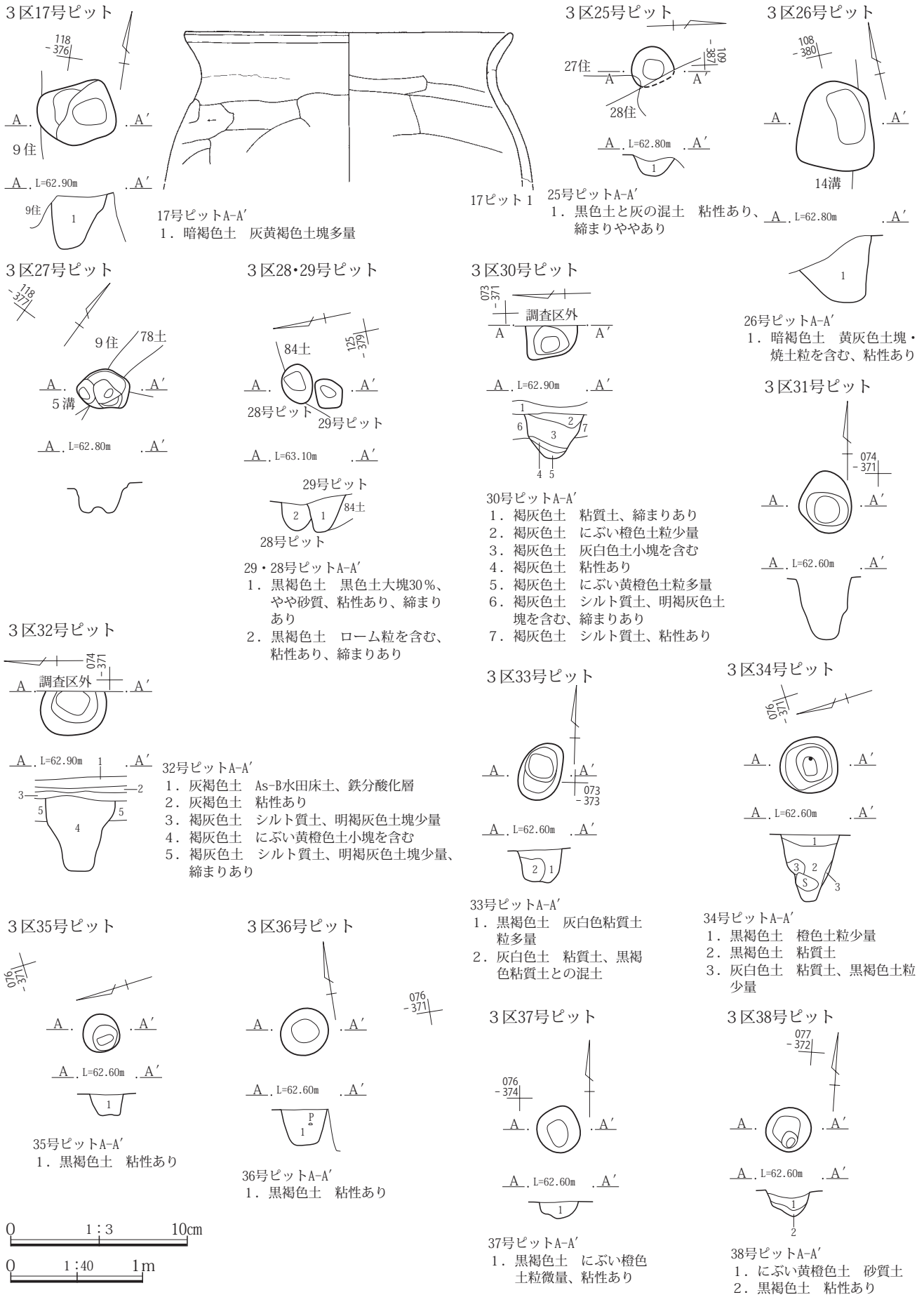


第245図 3区80号土坑・81号土坑と出土遺物・83・84号土坑・85号土坑と出土遺物



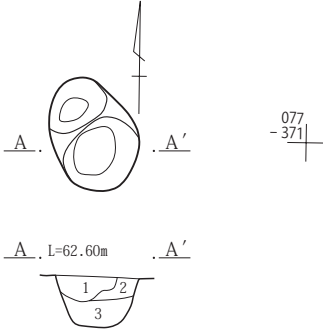
第246図 3区86号土坑と出土遺物・94号土坑、1号ピット・2号ピットと出土遺物・3・4・10・11・13・15・16号ピット





第247図 3区17号ピットと出土遺物・25～38号ピット

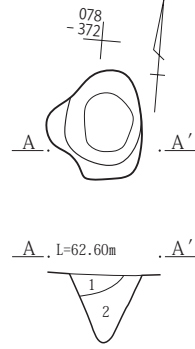
3区39号ピット



39号ピットA-A'

1. 黒色土 粘性あり
2. 黒褐色土 橙色土粒多量
3. 黒褐色土 粘性あり

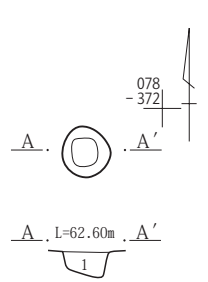
3区40号ピット



40号ピットA-A'

1. 黒色土 粘質土
2. 黒褐色土 粘質土、橙色土粒少量

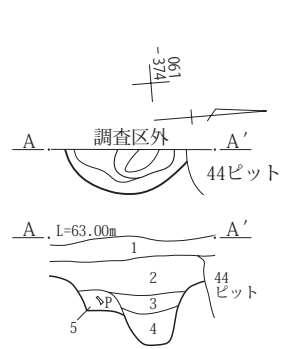
3区41号ピット



41号ピットA-A'

1. 黒褐色土 粘性あり

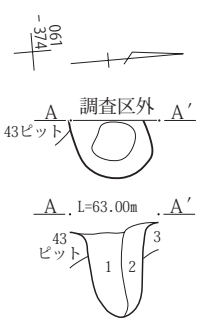
3区43号ピット



43号ピットA-A'

1. 灰褐色土 焼土粒微量・浅黄橙色土粒を含む
2. 灰褐色土 第1層より色味は暗い粘質土
3. 炭化物と焼土塊の混土
4. 灰褐色土 炭化物多量
5. 灰褐色土 粘質土、にぶい黄橙色土塊を含む

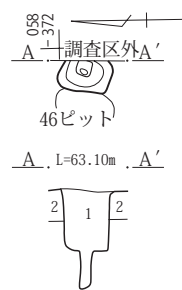
3区44号ピット



44号ピットA-A'

1. 黒褐色土 浅黄橙色土粒・小塊少量、柱痕か
2. にぶい黄橙色土 浅黄橙色土塊多量
3. にぶい黄橙色土 浅黄橙色土粒を含む

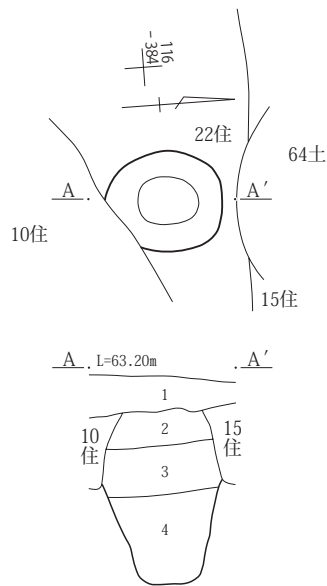
3区49号ピット



49号ピットA-A'

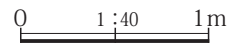
1. 灰褐色土 浅黄橙色土塊多量
2. にぶい黄褐色土 浅黄橙色土大塊多量

3区52号ピット



52号ピットA-A'

1. 黒褐色土 暗褐色土小塊・黄橙色土粒微量
2. 暗褐色土 黄褐色土粒多量、焼土粒・炭化物微量
3. 暗褐色土 黄褐色土塊・粒主体、暗褐色土塊・黒褐色土塊少量、灰褐色土・焼土・炭化物を含む
4. 暗褐色土 黄褐色土粒少量、焼土粒を含む、第3層より砂質



第248図 3区39～41・43・44・49・52号ピット

### 3 溝

3区第2面では、溝5条を調査した。溝は、おもに調査区東側から確認された。第2面では古墳時代から平安時代の遺構も確認され、各時期の遺構が混在する状況である。溝からの出土遺物が少なく、明確な時期を特定できない。

#### 3区15号溝(第249図 PL.93・133)

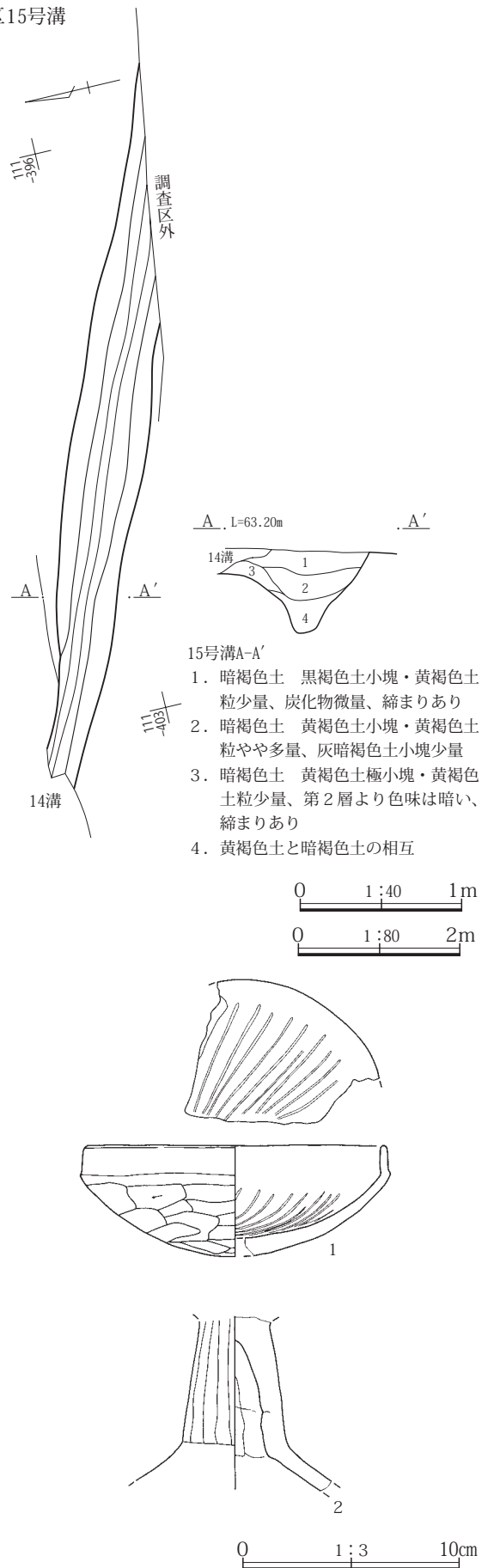
第2面東側のX=109～112、Y=-395～403に位置する。南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに南側に延長すると想定される。14号溝と重複し、14号溝より古い。

確認できる規模は、長さ7.25m、幅0.55～0.94m、深さ0.22～0.44mを測る。走行方向は、N-65°-Wである。底面の標高は、北西端62.61m、南東端62.57m、比高0.04mである。僅かな高低差は認められるが、北西から南東に直線状に流れていたと想定され、勾配は0.55%である。断面形状はV字状である。埋没土は、黒褐色土塊や黄褐色土粒などを含む暗褐色土や黄褐色土の混土による自然埋没と考えられる。土層断面の観察から流水の痕跡は確認できなかった。遺物は、土師器杯(第249図1)、土師器高杯(第249図2)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器84点(大型製品78、中型製品1、小型製品5)、須恵器9点(大型製品4、小型製品5)、灰釉陶器1点(小型製品)である。出土遺物から時期は、古墳時代以降と考えられる。

#### 3区18号溝(第250図)

第2面拡張部のX=078～079、Y=-371・372に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。重複する遺構はない。確認できる規模は、長さ2.18m、幅0.32～0.40m、深さ0.05～0.09mを測る。走行方向は、N-85°-Eである。東端と西端の比高0.05mであり、僅かな高低差は認められるが、東側から西側にかけて流れていたと想定される。勾配は2.29%である。断面形状は、中央部に高まりが認められ、両壁際が掘り窪められている。非掲載遺物は、土師器30点(大型製品15、小型製品15)が出土した。出土遺物や遺構確認状況から時期

3区15号溝



第249図 3区15号溝と出土遺物

は、古墳時代以降と考えられる。

**3区20号溝**(第250図 PL.93)

第2面拡張部北側のX=371～373、Y=-094～096に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。22号溝と重複し、20号溝が新しい。確認できる規模は、北東から南西方向の長さ2.60m、幅0.14～0.45m、深さ0.02～0.08mであり、走行方向は、N-42° -Eである。北東端と南西端との比高0.06mで北東端が低い。勾配は、2.30%である。北西から南東方向の長さ1.65m、幅0.19～0.24m、深さ0.03～0.06mであり、走行方向は、N-46° -Wであり、北西端と南東端との比高0.03mで南西端が低い。勾配は1.81%である。断面形状は、台形を呈する。二方向の溝が交わる地点の高さが最も低く、調査区内でほぼ直角に屈曲するが、南西方向にやや延長される。底面には、掘削痕とみられる小ピット状の掘込みが認められる。出土遺物がなく、時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代以降と考えられる。

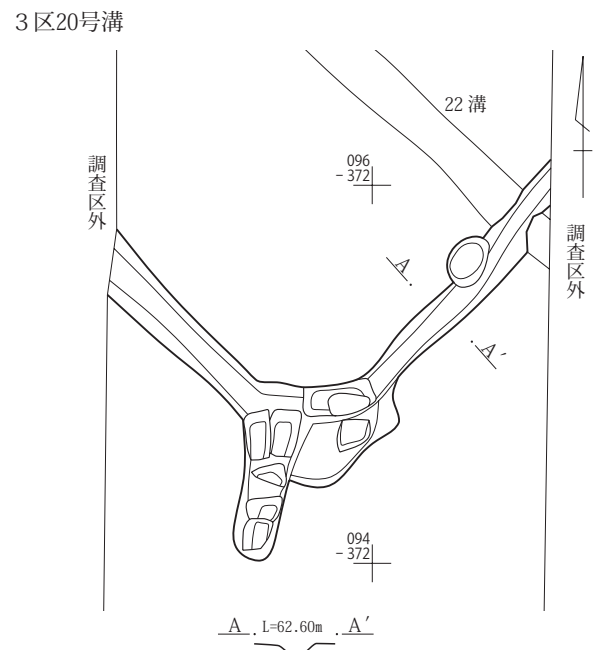
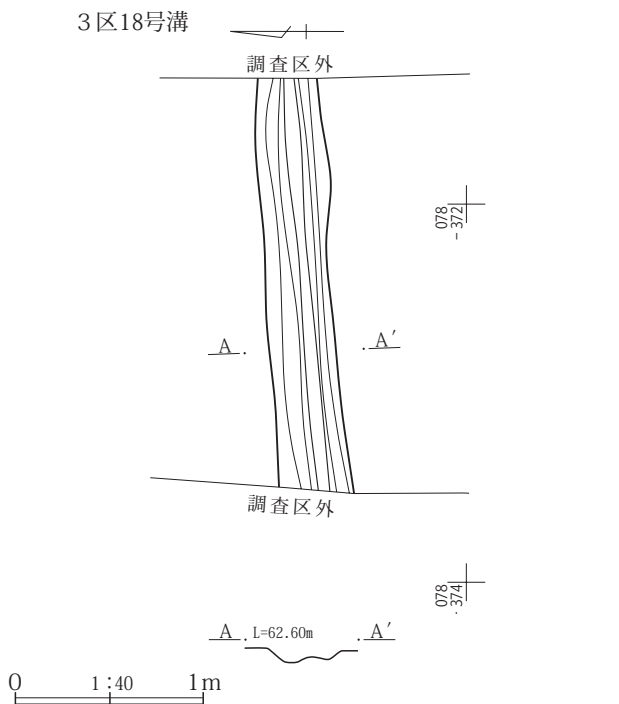
**3区21号溝**(第251図 PL.93)

第2面拡張部北側のX=096～097、Y=-371～373に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の

規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。22号溝と重複し、ほぼ同時期に掘削されたと考えられる。確認できる規模は、長さ2.30m、幅0.16～0.20m、深さ0.04～0.09mを測る。走行方向は、N-85° -Wである。東端と西端との比高0.01mで東端が低い。高低差は僅かであるが、西側から東側にかけて流れていたと想定される。勾配は0.43%である。断面形状は、台形を呈する。出土遺物がなく、時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代以降と考えられる。

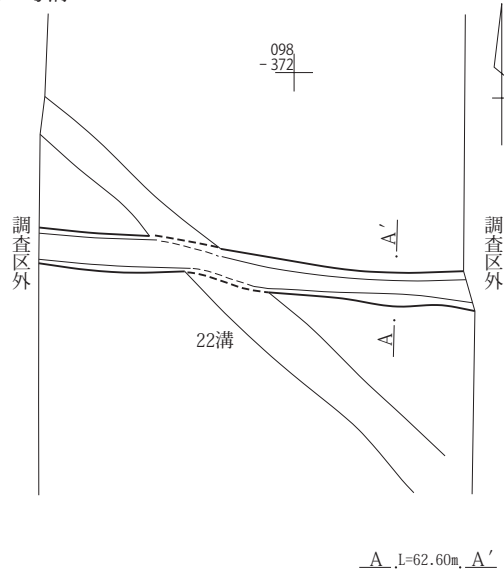
**3区22号溝**(第251図 PL.93)

第2面拡張部北側のX=095～097、Y=-371～373に位置する。東側及び西側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。20・21号溝と重複し、20号溝より古く、21号溝とはほぼ同時期と考えられる。確認できる規模は、長さ3.10m、幅0.15～0.25m、深さ0.05～0.06mを測る。走行方向は、N-46° -Wである。北西端と南東端との比高0.02mで南東端が低い。高低差は僅かであるが、北西から南東にかけて流れていたと想定される。勾配は0.64%である。断面形状は、台形を呈するが、底面に掘削痕とみられる小ピット状の掘込みが認められる。出土遺物がなく、時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代以降と考えられる。

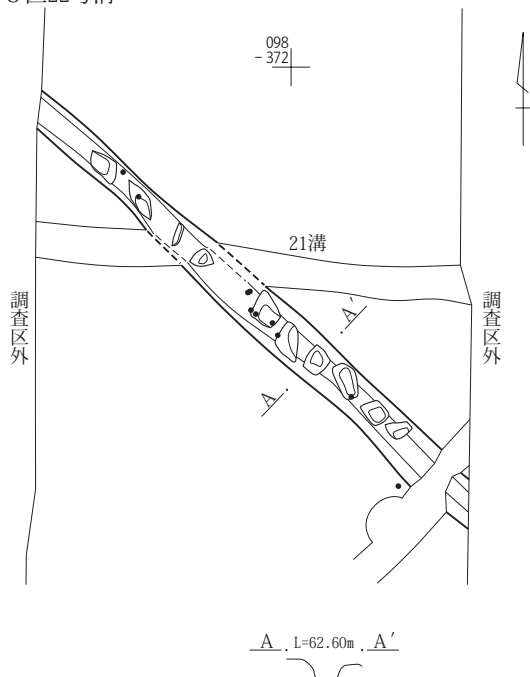


第250図 3区18・20号溝

3区21号溝



3区22号溝



0 1:40 1m

第251図 3区21・22号溝

#### 4 土器集積

3区第2面では、2ヶ所の土器集積を調査した。第2面中央部及び拡張部で、遺構確認面から土器が集中して出土し、土坑などの掘込みが認められず土器集積とした。第2面では古墳時代の竪穴住居が複数軒調査され、周辺は集落の様相を呈するなど、関連が想定される。

##### 3区1号土器集積(第252図 PL.93・134)

第2面中央部南側のX=117・118、Y=-415～417に位置する。遺構確認面で潰れた状態の土器片が集中して出土したことから土器集積とした。1号土器集積には、土坑状の掘込みが認められなかった。1号土器集積の東側は古墳時代から平安時代の竪穴住居が確認されているが、隣接する場所に竪穴住居などは確認されなかった。

遺物は、土師器高杯(第252図1)、土師器台付甕(第252図2・3)が遺構確認面から、土師器台付甕(第252図4～7)は埋没土から出土した。出土遺物は、4世紀と6世紀のものがあり、時期の確定には至らなかった。

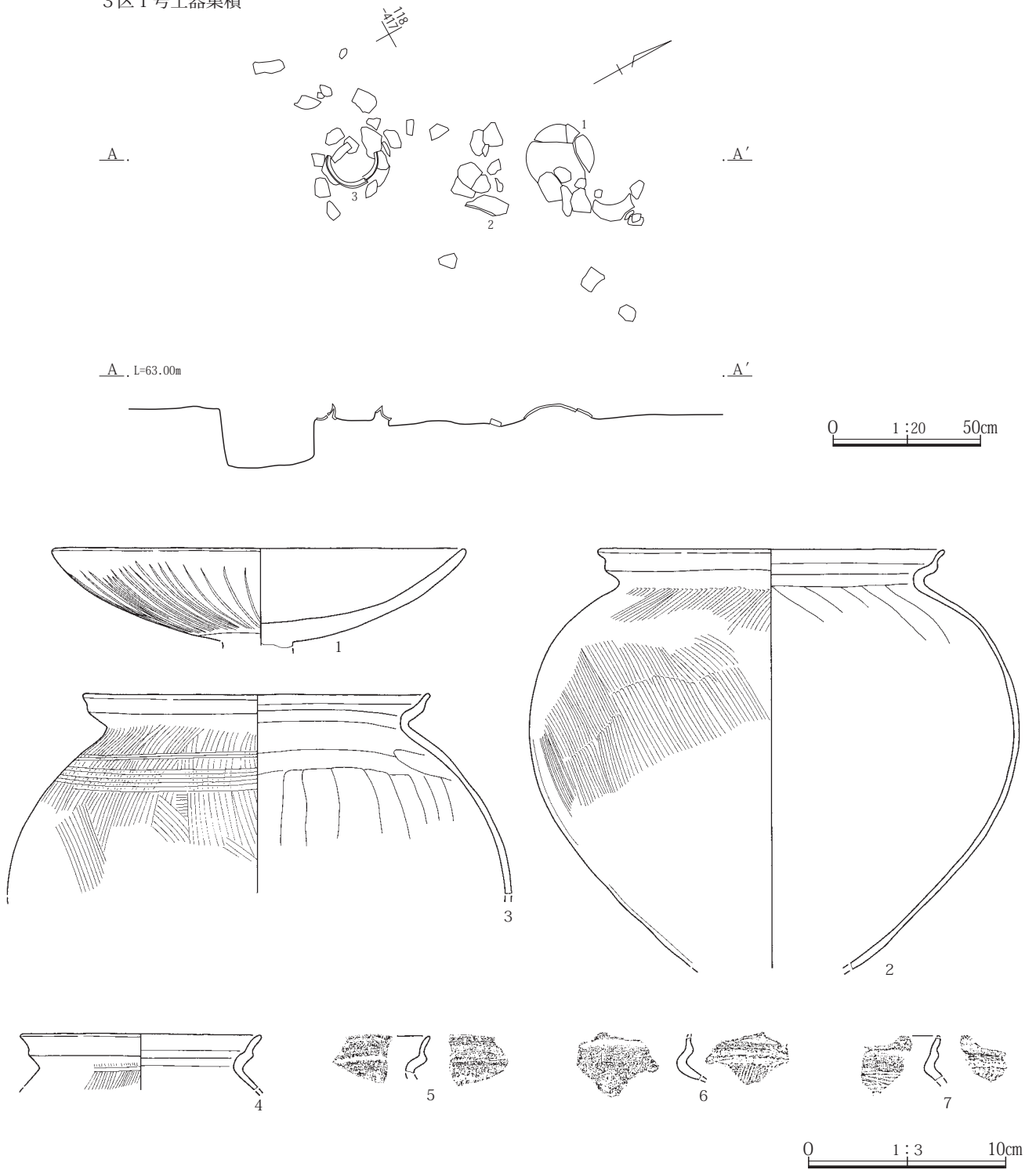
##### 3区2号土器集積(第253～255図 PL.93・94・134～136)

第2面拡張部のX=084～088、Y=-372～374に位置する。遺構確認面で遺物が集中して出土したことから土器集積とした。遺物の出土状況から竪穴住居などを想定して調査を行ったが、周辺で明瞭な硬化面は認められず、調査区境の壁面を観察したが竪穴住居や土坑などの掘込みは確認できなかった。調査区北側や南側では竪穴住居が複数軒確認された。遺物が集中する場所で溝を確認したが、竪穴住居などはなかった。発掘調査では拡張部を1～6グリッドと呼称し調査を行い、特に5グリッド(第253図)と称した地点からの遺物の出土が多いことから2号土器集積とし、他は遺物包含層から出土した遺構外の遺物として次項に掲載した。

遺物は、土師器杯(第253図3)、土師器高杯(第253図4・5、第254図6～16)、土師器脚付鉢(第254図17)、土師器脚付甕(第255図18)、土師器台付甕(第255図19)、土師器壺(第255図20)、土師器甕(第255図21～26)が遺構確認面から出土し、土師器杯(第253図1・2)は混入と考えられる。非掲載遺物は、土師器125点(大型製品106、小型製品17、不明2)、須恵器5点(小型製品)であ



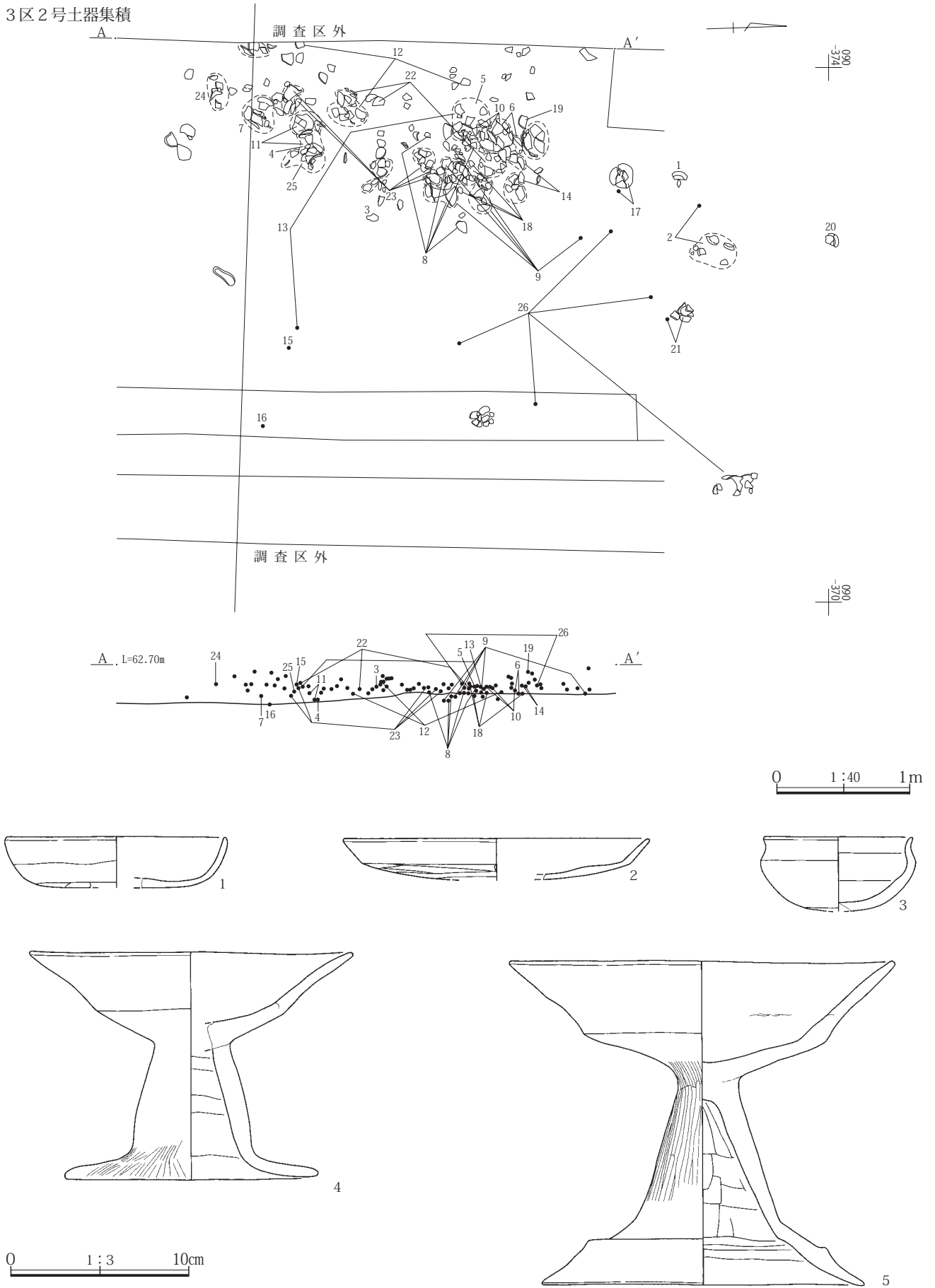
3区1号土器集積



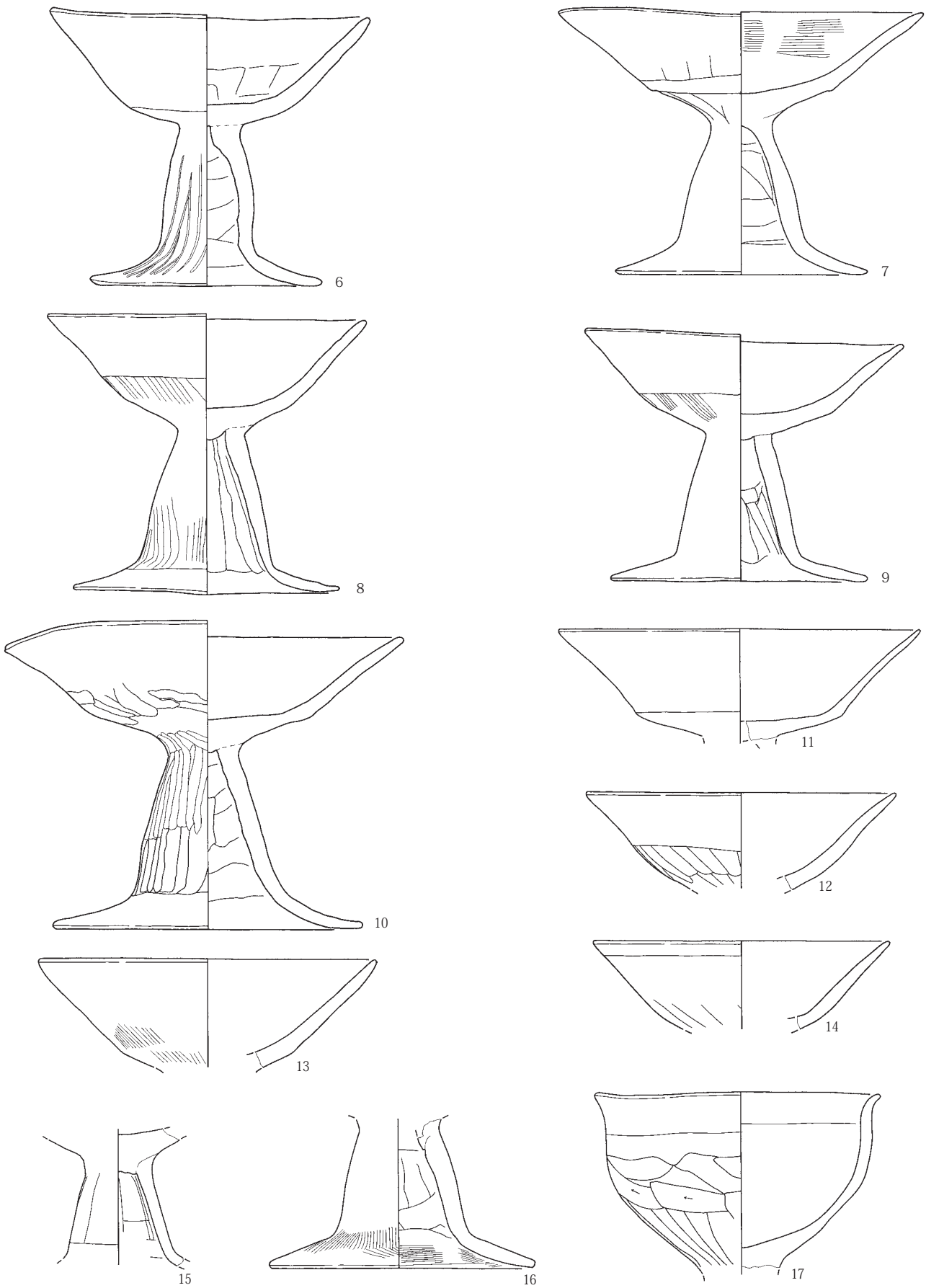
第252図 3区1号土器集積と出土遺物

る。土師器高杯の出土が多く認められることから祭祀跡  
や土器投棄の可能性もある。出土遺物から時期は、5世  
紀前半と考えられる。

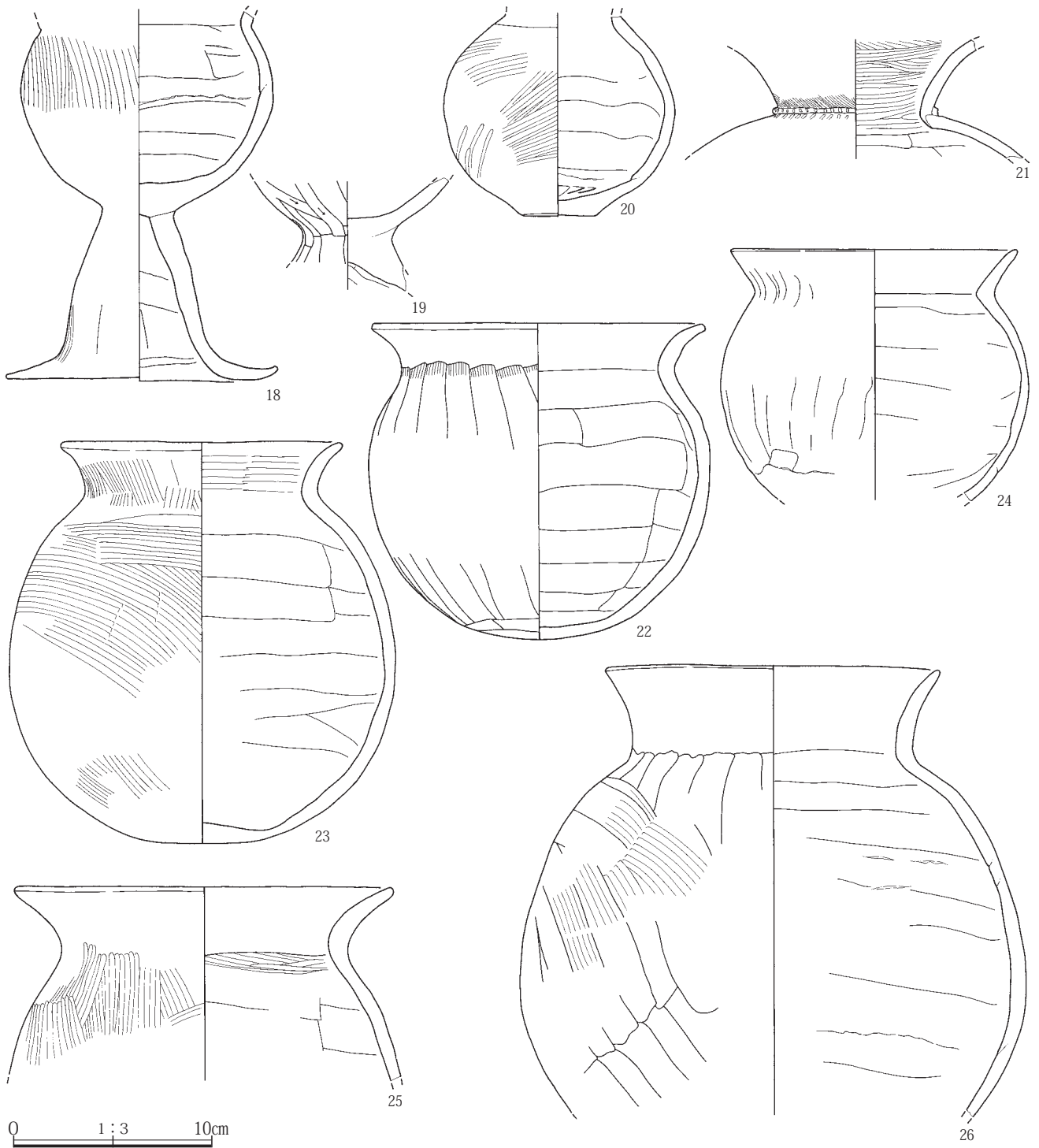
3区2号土器集積



第253図 3区2号土器集積と出土遺物(1)



第254図 3区2号土器集積出土遺物(2)



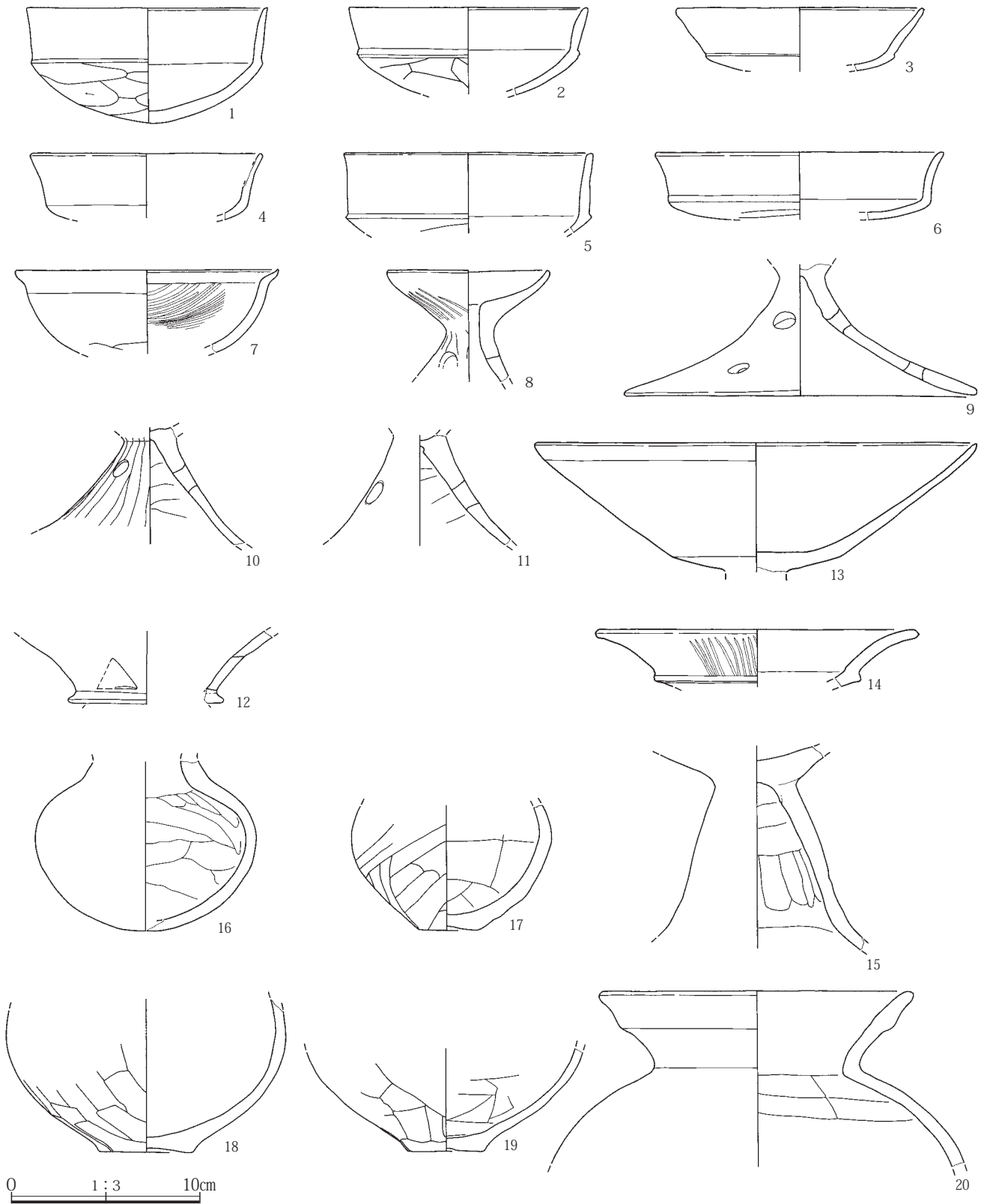
第255図 3区2号土器集積出土遺物(3)

5 遺構外の出土遺物(第256・257図 PL.136)

3区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。本項では、第2面から出土した遺構外の遺物のうち、古墳時代の遺物を掲載した。

遺物は、遺構確認面の他、竪穴住居、溝、井戸の周辺や遺物包含層であるAs-B混土層から出土した。第2面

確認面や拡張部北側の2号土器集積周辺から土師器杯(第256図1～7)、土師器器台(第256図8～12)、土師器高杯(第256図13～15)、土師器埴(第256図16)、土師器小型壺(第256図17～19)、土師器壺(第256図20)、土師器台付甕(第257図21～30)、土師器小型甕(第257図31)、土師器甕(第257図32・33)、土製品土錘(第257図34～37)が出土した。土錘については、古墳時代の竪穴住

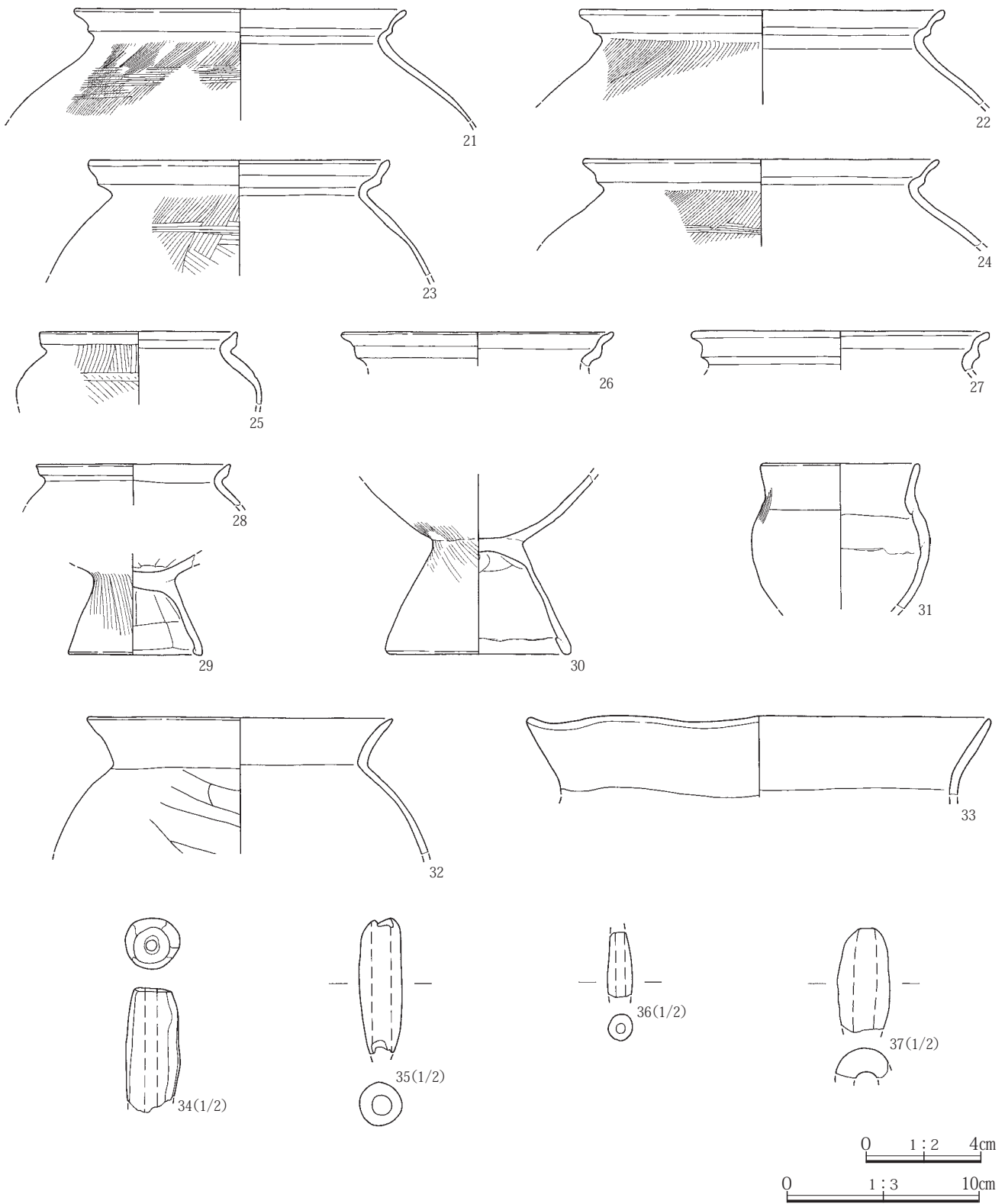


第256図 3区遺構外の出土遺物(1)

居から出土していることから、遺構外から出土した土錘は本項において掲載した。非掲載遺物は、古墳時代から奈良・平安時代を合わせて、土師器10,296点(大型製品8,102、中型製品187、小型製品1,974、不明33)、須恵

器863点(大型製品322、小型製品541)、灰釉陶器102点(大型製品31、小型製品71)、棒状礫7点が出土した。





第257図 3区遺構外の出土遺物(2)

## 第4節 4区の遺構と遺物

4区における古墳時代の遺構確認面は、第4・5面である。遺構確認面は、As-Bを含む暗褐色土である第15層下面及びAs-Bの堆積層である第16層の下面が第4面、第26層下面が第5面である。当該時期の遺構は、おもに調査区西端に集中する。4区第4面では土坑、溝、粘土採掘坑の調査を行った。第4面調査終了後にトレンチを4ヶ所設定し遺構確認を行い(PL.96)、第5面では溝の調査を行った。

### 1 土坑

4区第4面では、土坑4基を調査した。すべて4面西端で確認した。出土遺物が少なく時期を特定できない土坑については埋没土などから判断し古墳時代としたため、奈良・平安時代以降の土坑が含まれている可能性もある。それぞれの土坑は、第15表土坑計測表(378・379頁)において概略を記す。

#### 4区1号土坑(第258図 PL.94)

第4面西側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であるが、北側に比べ南側がやや深く掘込まれている。壁は斜めに立ち上がる。3号溝と重複し、遺構確認状況から1号土坑が新しい。埋没土は、灰黄褐色砂質土小塊を含む暗褐色砂質土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器4点(大

型製品)が出土した。出土遺物や遺構確認状況から時期は、古墳時代後期と考えられる。

#### 4区3号土坑(第258図 PL.94)

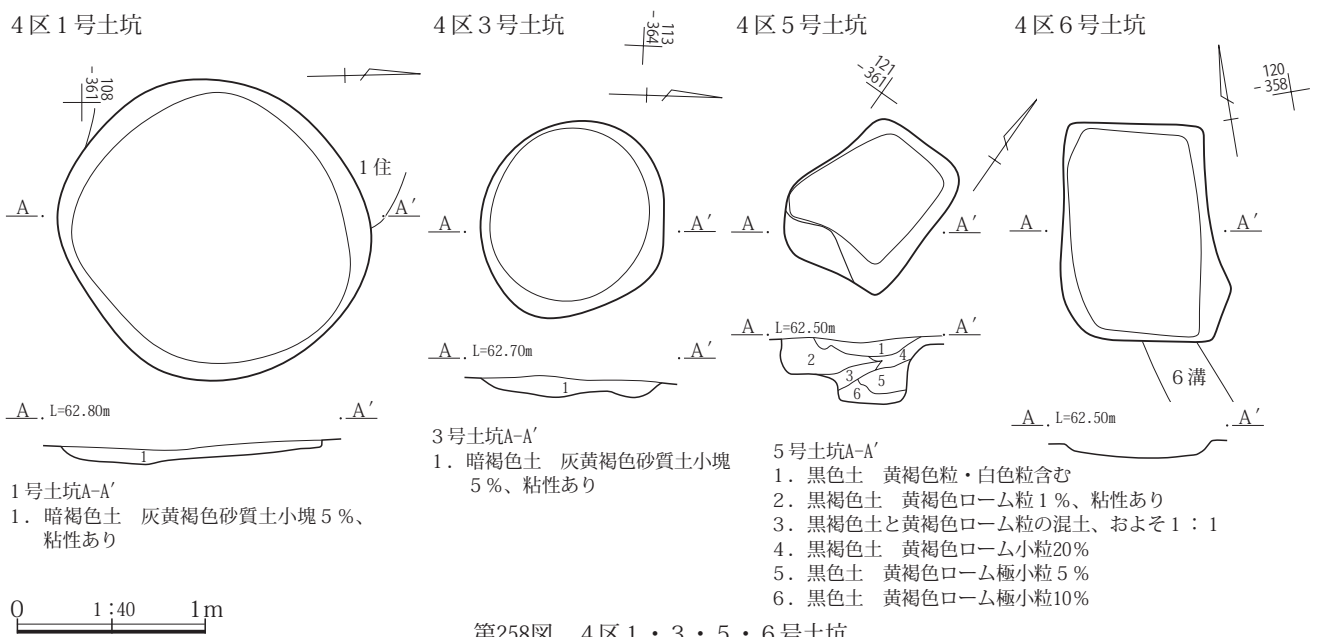
第4面西側に位置する。平面形状は円形で、断面形状は底面が僅かな窪みが認められるがほぼ平坦であり、壁は開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、灰黄褐色砂質土小塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。非掲載遺物は、土師器2点(大型製品)が出土した。出土遺物や遺構確認状況から時期は、古墳時代前期と考えられる。

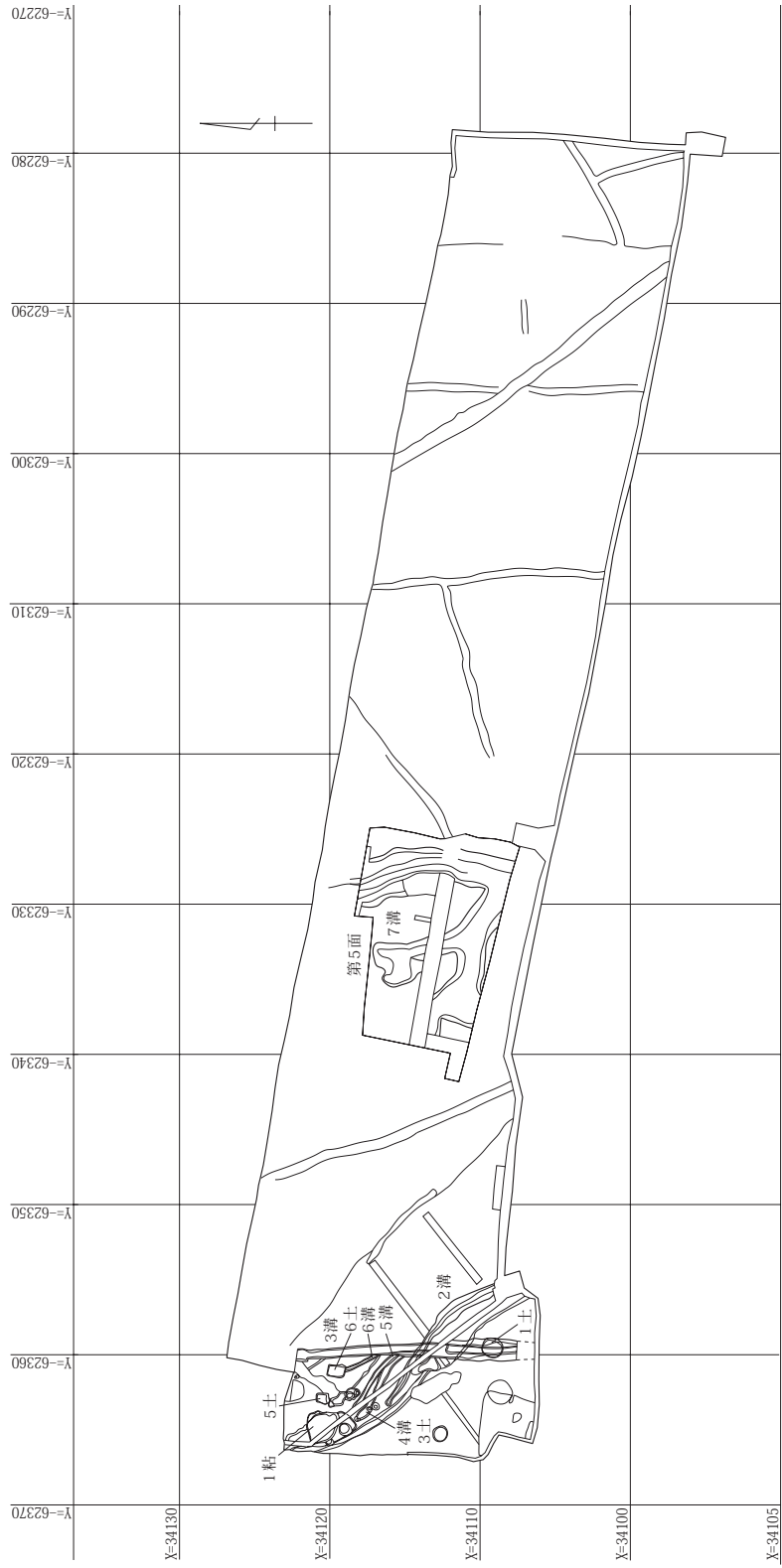
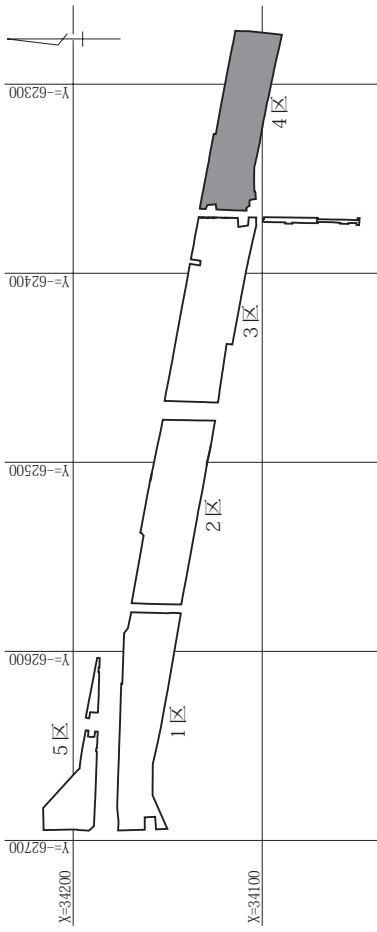
#### 4区5号土坑(第258図 PL.95)

第4面西側に位置する。平面形状は不定形で、断面形状は底面が平坦であり、開口部にかけて東壁がほぼ垂直に、西壁が中段を設けて立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、黄褐色ローム粒を多量に含む黒色土や黒褐色土の混土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土から古墳時代以降と考えられる。

#### 4区6号土坑(第258図)

第4面西側に位置する。平面形状は長方形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は斜めに立ち上がる。6号溝と重複し、遺構確認状況から6号土坑が新しい。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代と考えられる。





第259図 4区第4・5面(古墳時代)全体図

## 2 溝

4区第4面では、溝5条を調査した。溝は、おもに調査区西側から確認された。調査区東側では、第5面で1条の溝が確認された。溝からの出土遺物が少なく、明確な時期を特定できず古墳時代としたが、奈良・平安時代以降の新しい時期の溝が含まれている可能性もある。

### 4区2号溝(第261図 PL.47・95)

第4面西側のX=109～116、Y=-353～361に位置する。南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。1・3号溝と重複し、2号溝が最も古いと考えられる。

確認できる規模は、長さ10.65m、幅0.26～1.03m、深さ0.05～0.15mを測る。走行方向は、N-50°-Wである。底面の標高は、北端62.41m、南端62.39m、比高0.02mである。高低差は僅かであるが、北西から南東にかけて屈曲するように流れていたと想定され、勾配は0.18%である。断面形状は、浅い椀形を呈する。埋没土は、ローム小塊を多量に含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面を観察したが、明瞭な流水の痕跡は認められなかった。

出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複などから古墳時代以降と考えられる。

### 4区3号溝(第260・261図 PL.47・95・137)

第4面西側のX=107～122、Y=-356～358に位置する。北側及び南側が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、さらに延長すると想定される。1・2・4～6号溝、1号土坑と重複する。1号溝、1号土坑より古く、2・4～6号溝より新しいと考えられる。

確認できる規模は、長さ15.91m、幅0.56～1.48m、深さ0.34～0.62mを測る。走行方向は、N-0°であり、北側から南側にほぼ直線状に走行する。底面の標高は、北端62.10m、南端62.19m、比高0.09mである。底面はほぼ平坦であるが、南北方向の中間付近が僅かに高く、部分的に高低差が認められる。勾配は0.56%である。

断面形状は台形を呈するが、南側は底面上約20cmに中段を設け、開口部にかけて斜めに立ち上がる。埋没土は、ローム粒を含む黒褐色土、黒色土、灰黄褐色土などであ

り、堆積状況から自然埋没と考えられる。

遺物は、土師器杯(第260図1・2)土師器高杯(第260図3・4)、土師器甕(第260図5～8)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器155点(大型製品145、小型製品9、不明1点)、須恵器1点(大型製品)が出土した。出土遺物などから時期は、古墳時代後期以前と考えられる。

### 4区4号溝(第261図 PL.95)

第4面西側のX=115～118、Y=-357～362に位置する。南端が3号溝と重複するため、全体の規模は不明である。1・3・5号溝と重複する。4号溝は、1・3・5号溝より古いと考えられる。

確認できる規模は、長さ5.37m、幅0.38～0.60m、深さ0.08～0.23mを測る。走行方向は、N-60°-Wであり、底面の標高は、北端62.17m、南端62.35m、比高0.18mである。溝の北端が小ピット状に掘り窪められているが、高低差はほとんど認められず、勾配は3.35%である。北西から南東にかけて蛇行する。断面形状は底面から開口部にかけて、西壁より東壁がやや緩やかに斜めに立ち上がる。埋没土は、ローム極小塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面から流水の痕跡は認められない。

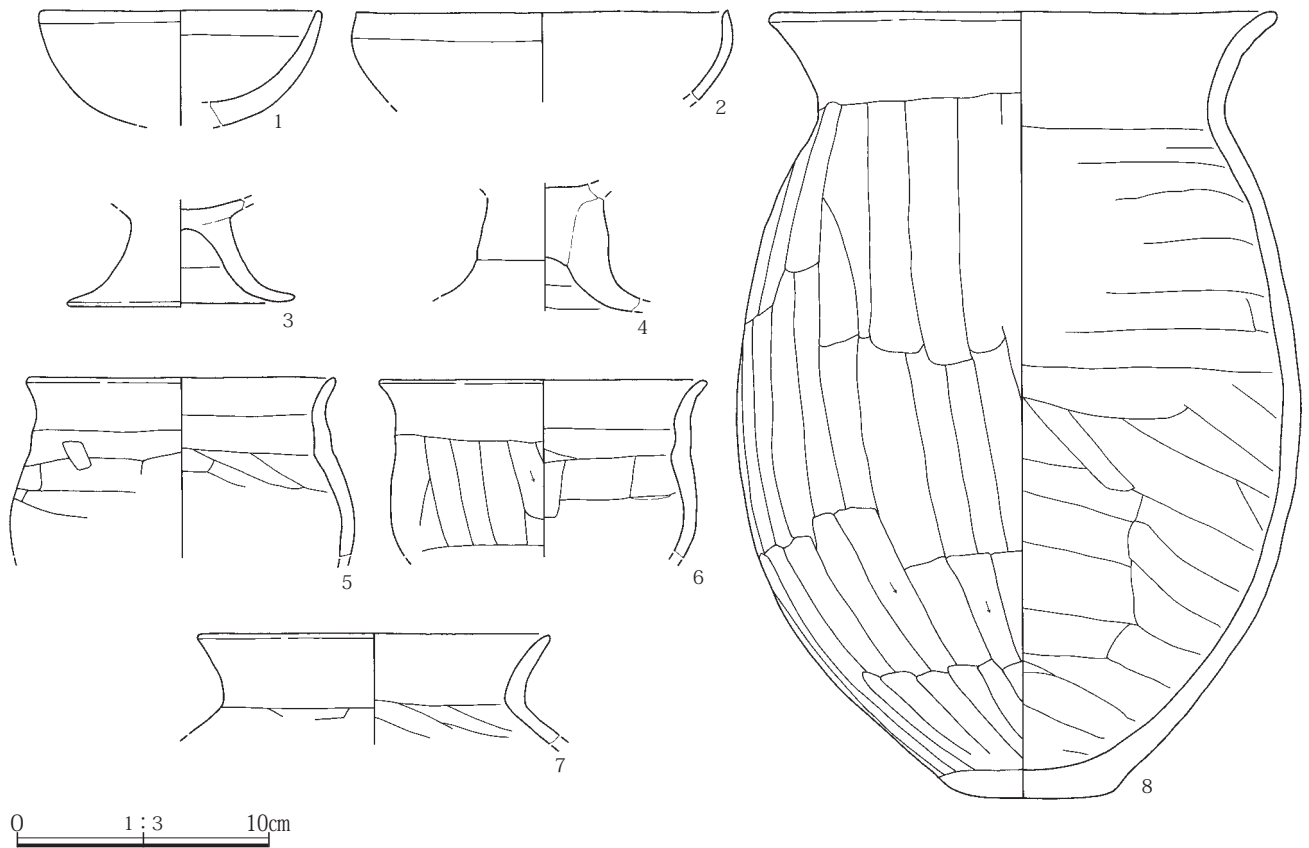
出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複などから古墳時代以降と考えられる。

### 4区5号溝(第261図 PL.95)

第4面西側のX=115～118、Y=-357～361に位置する。南端が3号溝と重複するため、全体の規模は不明である。1・3・4号溝と重複する。5号溝は、1・3号溝より古く、4号溝より新しいと考えられる。

確認できる規模は、長さ5.37m、幅0.38～0.60m、深さ0.08～0.23mを測る。走行方向は、N-60°-Wであり、底面の標高は、北端62.17m、南端62.35m、比高0.18mである。高低差はほとんど認められず、勾配は3.35%である。北西から南東にかけてわずかに屈曲する。断面形状は椀形を呈する。埋没土は、ローム極小塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。土層断面から流水の痕跡は認められない。

出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複などから古墳時代以降と考えられる。



第260図 4区3号溝出土遺物

**4区6号溝**(第261図 PL.95)

第4面西側のX=116～118、Y=-357・358に位置する。南端が3号溝、北側が6号土坑と重複するため全体の規模は不明である。6号溝は、遺構確認状況から3号溝、6号土坑より古いと考えられる。

確認できる規模は、長さ2.42m、幅0.21～0.29m、深さ0.05～0.14mを測る。走行方向は、N-25°-Wである。底面の標高は、北端62.42m、南端62.35m、比高0.07mである。北西から南東にかけて直線状に流れていたと想定され、勾配は2.894%である。断面形状は台形を呈する。

出土遺物がなく時期を特定できないが、他の遺構との重複などから古墳時代以降と考えられる。

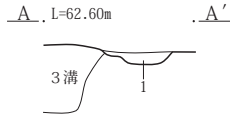
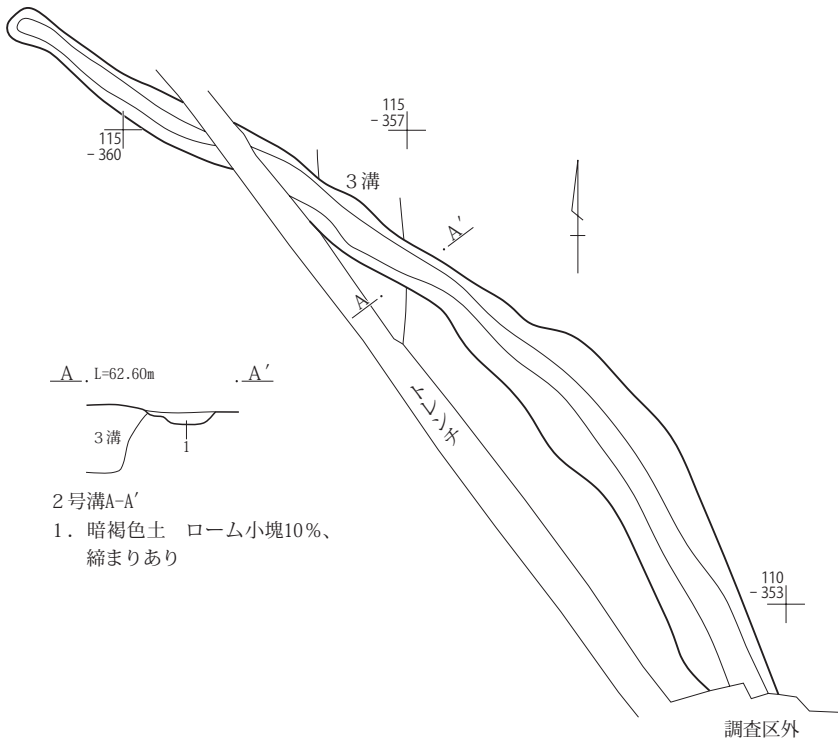
**4区7号溝**(第262図 PL.95・96)

第5面西側のX=107～118、Y=-324～336に位置する。第4面調査後にトレンチを設定し下層の調査を行い調査区西寄り確認した溝である。重複する遺構はない。湧水などによって部分的な調査となり、北側及び南側にさらに広がると想定される。

確認できる規模は、長さ20.22m、幅1.32～3.30m、深さ0.15～0.62mを測る。走行方向は、南北方向がN-10°-W、東西方向がN-70°-Wである。底面の標高は、東側南北方向の溝の北端61.49m、南端61.48m、比高0.01m、勾配0.11%である。中央部の南北方向の溝の北端61.72m、南端61.56m、比高0.16m、勾配2.90%である。東西方向の溝の西端61.69m、東端61.48m、比高0.21m、勾配1.67%である。北側から南側へ、西側から東側へ流れていたと想定される。断面形状は底面から開口部にかけて斜めに立ち上がる。埋没土は、褐灰色粘質土及び黒褐色粘質土による自然埋没と考えられ、底面付近から礫が多量に含まれている。形状から自然流路の可能性はある。出土遺物がなく時期を特定できないが、遺構確認状況から古墳時代以降と考えられる。

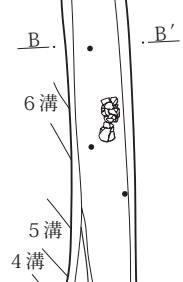
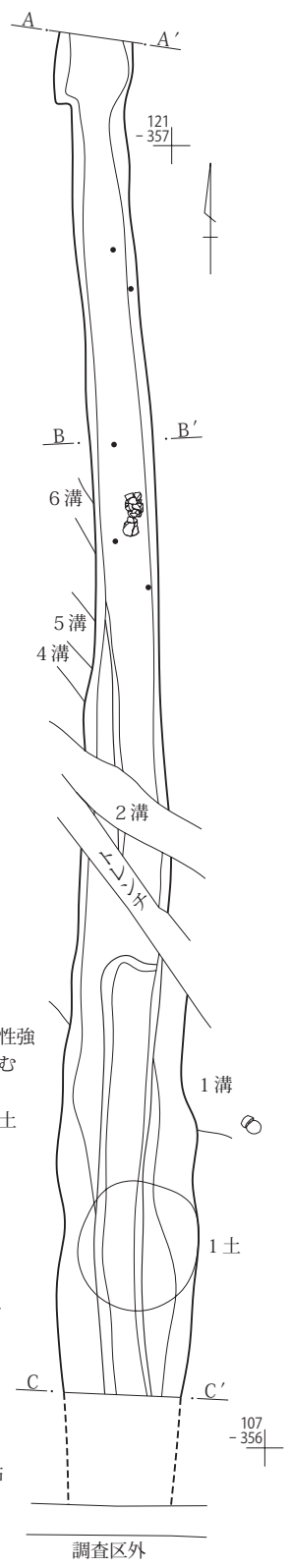


4区2号溝



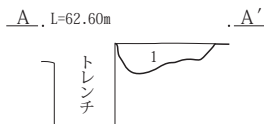
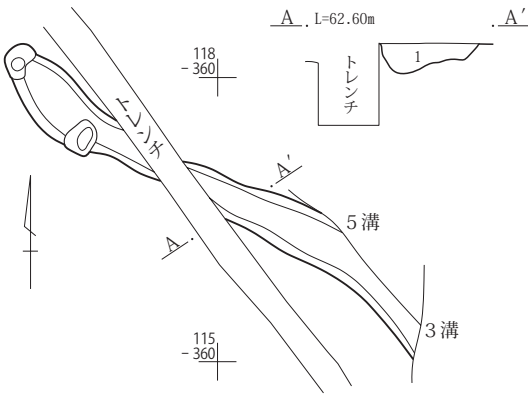
2号溝A-A'  
1. 暗褐色土 ローム小塊10%、縮まりあり

4区3号溝



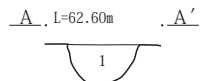
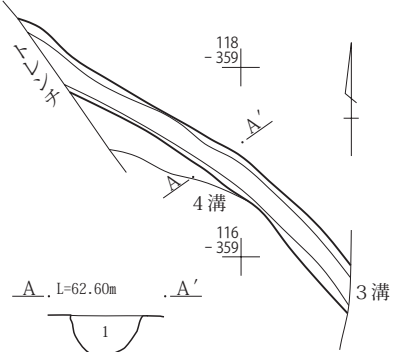
3号溝A-A'  
1. As-B  
2. 黒色土 粘性強 As-Bを含む  
3. 褐灰色土 Hr-FP混入、粘性強  
4. 灰黄褐色土 黄褐色土粒を含む、粘性強  
5. 灰黄褐色土 上層にふい黄橙色粘質土を含む、粘性強  
6. 黒褐色土 砂質土、上層にふい黄橙色粘質土を含む  
7. 灰黄褐色土 粘性強 第6層に近似、3号溝埋没土  
8. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色土粒多量、3号溝埋没土

4区4号溝



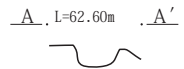
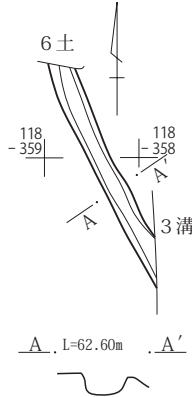
4号溝A-A'  
1. 暗褐色土 ローム極小塊10%、縮まりあり

4区5号溝

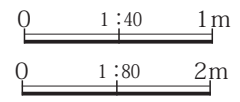


5号溝A-A'  
1. 暗褐色土 ローム極小塊10%、縮まりあり

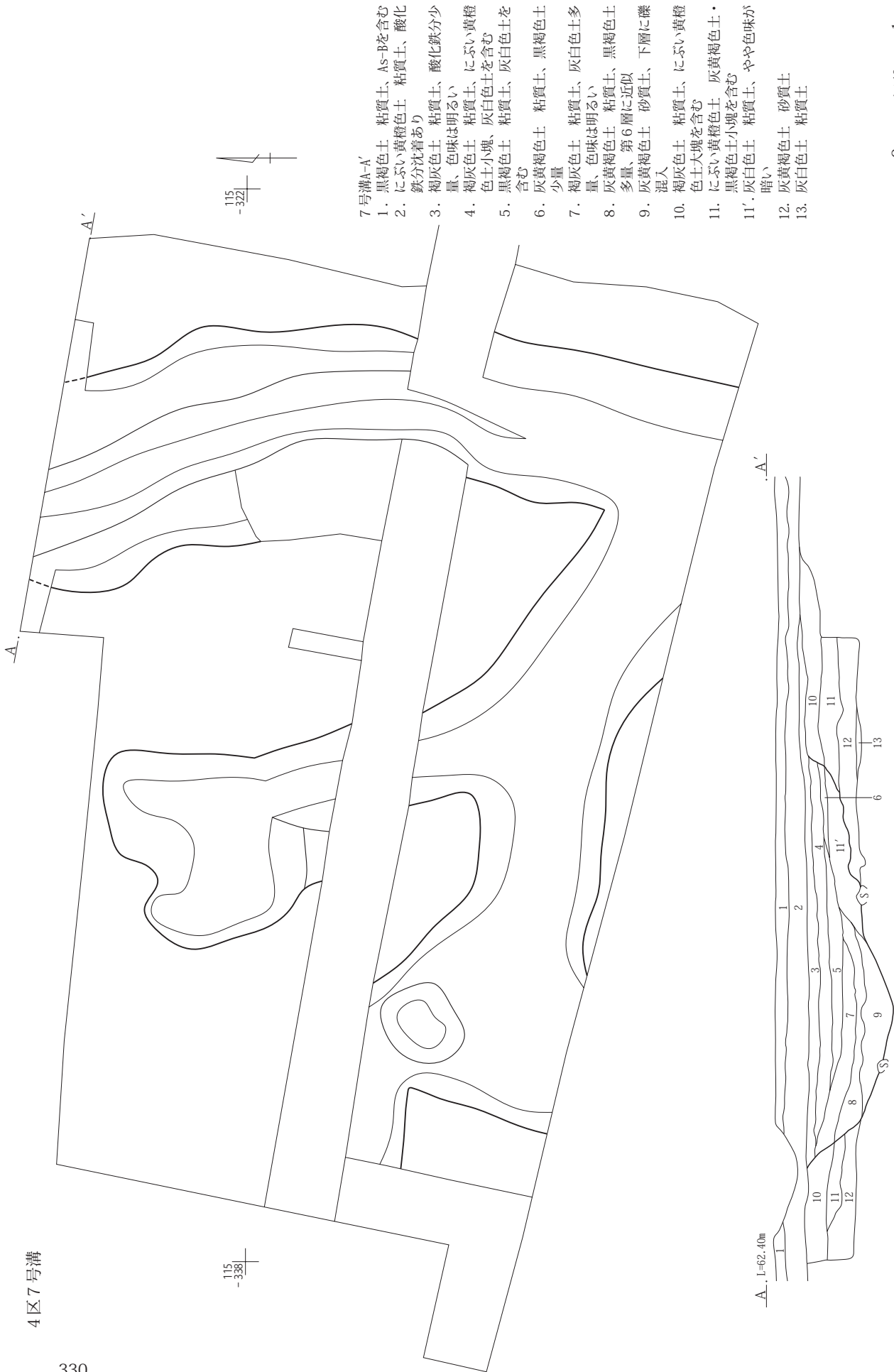
4区6号溝



3号溝B-B'・C-C'  
1. 黒色土 明黄褐色ローム中塊40%、粘性あり  
2. 黒色土 白色粒含む  
2'. 第2層にローム粒極微量  
3. 黒褐色土 黄褐色ローム粒極小1%、焼土粒含む  
3'. 黒褐色土 第3層に近似、黄褐色ローム粒極小1%  
4. 黒褐色土 ローム粒を含む  
5. 黒褐色土 灰黄褐色土中塊15%、粘性あり



第261図 4区2～6号溝



第262図 4区7号溝

### 3 粘土採掘坑

4区第4面で粘土採掘坑1基を調査した。調査区北西部隅の微高地に位置する。粘土採掘坑の周辺では、土坑や溝などの遺構が確認されている。4区では古墳時代の竪穴住居は1軒も確認できなかったが、西側に隣接する3区では、古墳時代の竪穴住居などを複数軒確認し、住居群の様相を呈することから、粘土採掘坑との関連が想定される。

#### 4区1号粘土採掘坑(第263図 PL.96)

第4面北西部隅のX=118～122、Y=-361～364に位置する。1号溝と重複し、遺構確認状況から1号粘土採掘坑が古いと考えられる。

溝など他の遺構との重複や、粘土採掘坑が調査区外の北側にさらに広がるため、全体の規模や形状は不明である。底面の中央部分に深さ26cmの不定円形や、南側に深さ33cmの小ピット状の掘込みなどが認められる。底面全体を大小ピット状及び土坑状に掘り窪めており、規模や形状などから粘土採掘坑とした。

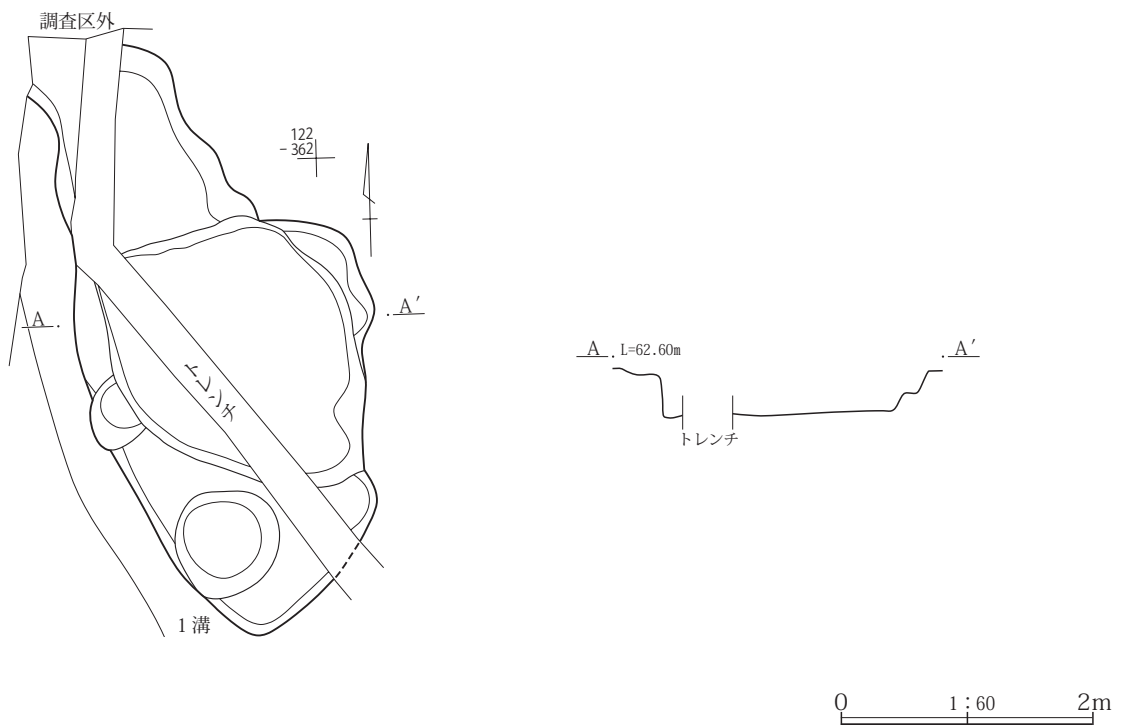
上面形状は不定形であるが、南側は隅丸長方形と不定円形など複数の形状が結合したものと考えられる。

確認できる規模は、長軸長4.76m、短軸長2.51m、深さ0.36mを測る。走行方向は、N-14°-Wである。断面形状は東壁の中央部については、一段の段差を設けながら開口部にかけて立ち上がり、西壁についてはほぼ垂直に立ち上がる。4区で確認できた粘土採掘坑は1基のみであり、他の調査区では規模や形状など類似する土坑などについても確認できなかった。

1号粘土採掘坑は微高地に位置し、周辺で古墳時代の土坑や溝を複数確認したが、竪穴住居は確認できなかった。隣接する西側の3区東端では、古墳時代前期から後期の竪穴住居が複数確認されるなど住居群となり、この住居群などで使用するために粘土を採掘した可能性も考えられる。調査区東側や南側では確認できなかったことから、調査区外となる北側や西側の3区と4区の調査区境においてさらに粘土採掘坑が確認できる可能性もある。

出土遺物がなく時期を特定できないが、古墳時代以降と考えられる。

4区粘土採掘坑



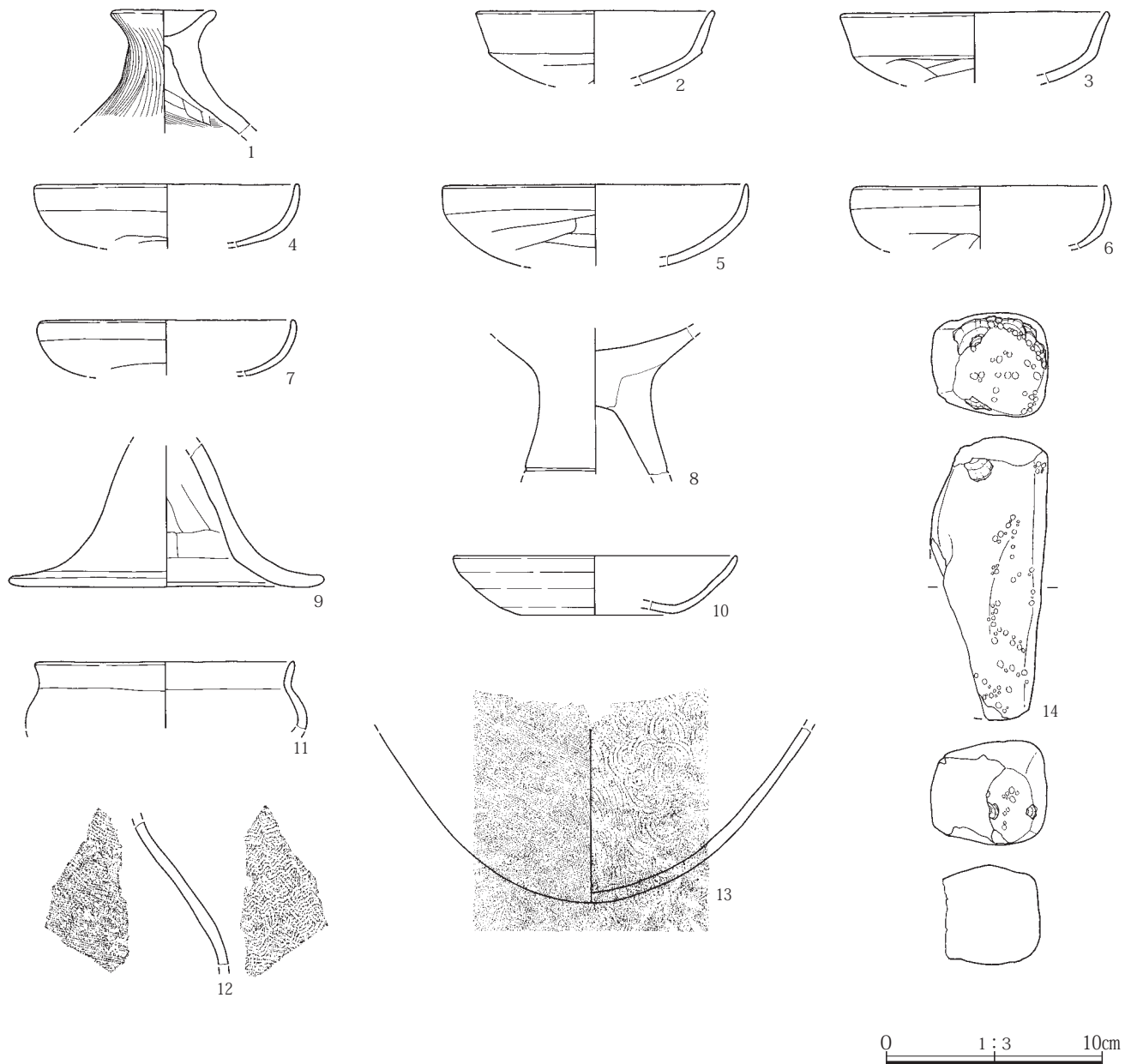
第263図 4区1号粘土採掘坑

4 遺構外の出土遺物(第264図 PL.137)

4区第4・5面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。発掘調査では、第4面で古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。本項では、第4・5面から出土した遺構外の遺物のうち、古墳時代の遺物を掲載した。

遺物は、遺構確認面などから土師器蓋(第264図1)、土師器杯(第264図2～7)、土師器高杯(第264図8・9)、土師器高杯(第264図8・9)、

須恵器杯(第264図10)、土師器短頸壺(第264図11)、土師器甕(第264図12)、須恵器甕(第264図13)が出土した。石器は、敲石(第264図14)が出土した。非掲載遺物は、古墳時代から奈良・平安時代を合わせて、土師器1,198点(大型製品865、中型製品11、小型製品322)、須恵器83点(大型製品37、小型製品46)の他、礫石器棒状礫1点が出土した。



第264図 4区遺構外の出土遺物

## 第5節 5区の遺構と遺物

5区における古墳時代の遺構は、第2面で確認した。遺構確認面は、基本土層第14層下面である。発掘調査では、第2面において古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。古墳時代から近世の遺構が混在しているため、各時代にそれぞれ分けて掲載した。当該時期の遺構は、数は少ないが調査区西側に集中する。確認できた古墳時代の遺構は、土坑・ピットのみである。調査終了後、遺構確認面にトレンチを8ヶ所設定し(PL.97)、下層の遺構確認を行ったが、古墳時代以前の遺構については確認できなかった。

### 1 土坑・ピット

5区第2面では土坑2基、ピット5基を調査した。調査区西側の微高地に位置するが、確認できた遺構は少ない。出土遺物がなく時期を特定できない土坑とピットについては埋没土などから判断し古墳時代としたため、奈良・平安時代以降の土坑やピットが含まれている可能性もある。それぞれの土坑とピットは、第15表土坑計測表(378・379頁)及び第16表ピット計測表(380頁)において概略を記す。

#### 5区3号土坑(第266図 PL.96)

5区第2面西側調査区に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は底面がほぼ平坦であり、壁は開口部にかけて斜めに立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、ロームを主体に黒褐色土を含むにぶい橙色土と焼土粒を含む黒褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。遺物は、土師器台付甕(第266図3土1)が埋没土から出土した。非掲載遺物は、土師器17点(大型製品)が出土した。出土遺物や遺構確認状況から古墳時代と考えられる。

#### 5区4号土坑(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は不定形で、断面形状はほぼ平坦であり、東壁は開口部にかけてほぼ垂直に、西壁は斜めに立ち上がる。4号ピットと重複し、土層断面の観察から4号土坑が古い。埋没土は、褐色土粒やローム塊を多量に含む暗褐色土による人為的な埋戻

しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが埋没土などから古墳時代と考えられる。

#### 5区1号ピット(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は円形で、断面形状は椀形を呈する。重複する遺構はない。埋没土は、暗褐色土塊を含む灰黄褐色土と焼土塊を含む暗褐色土であり、自然埋没か人為的な埋戻しかは不明である。柱痕などは確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できない。

#### 5区2号ピット(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は不定形で、断面形状はV字状に立ち上がる。底面は小ピット状に掘り窪められている。重複する遺構はない。埋没土は、橙色土粒を含む黒色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

#### 5区3号ピット(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状はV字状に立ち上がる。重複する遺構はない。埋没土は、焼土粒を含む暗褐色土による人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

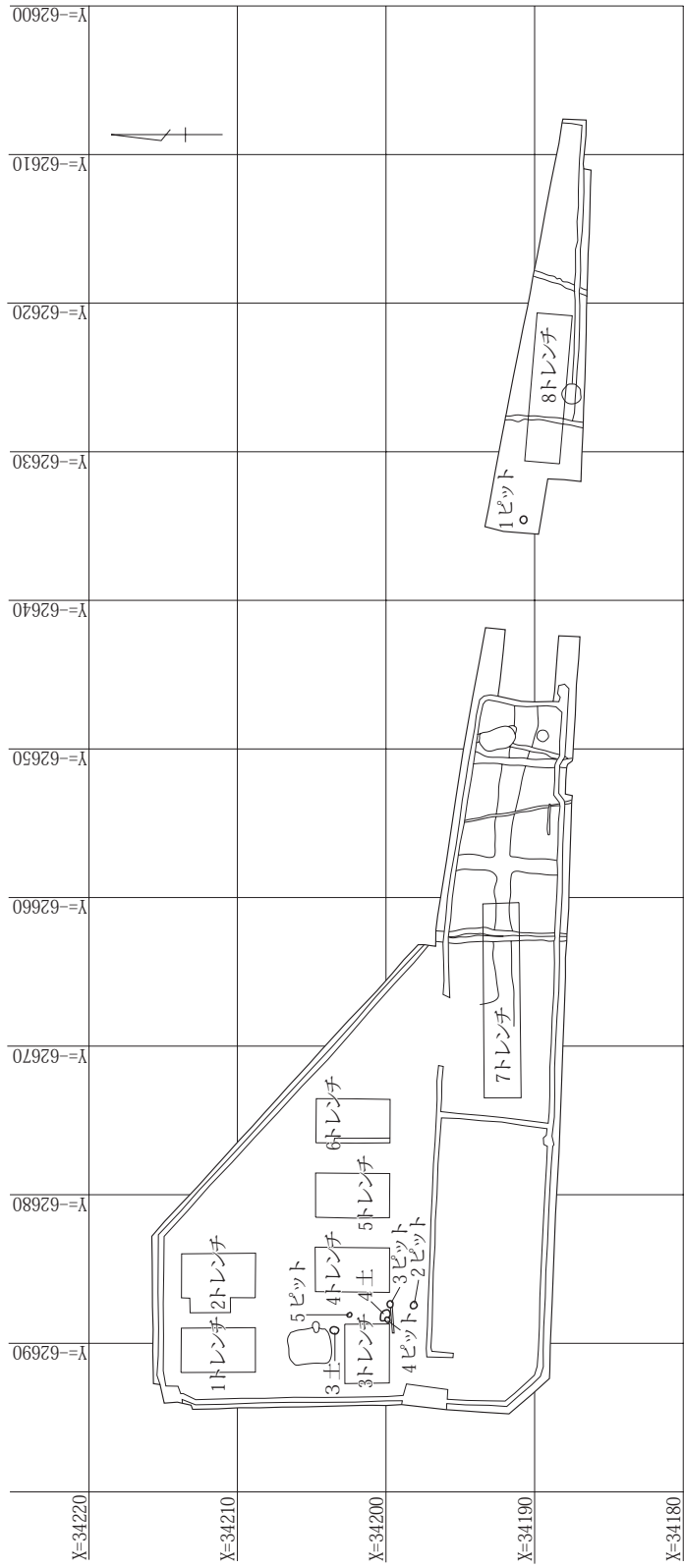
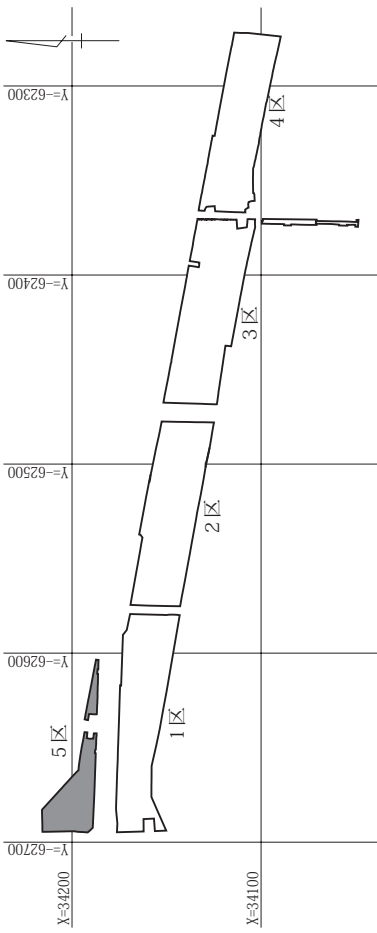
#### 5区4号ピット(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は、底面の東側は開口部にかけて段差を設け、やや緩やかに傾斜するが、西側は小ピット状に約10cm深く掘り窪められ、西壁はほぼ垂直に立ち上がる。柱痕は確認できなかった。4号土坑と重複し、4号ピットが新しい。埋没土は、黒色土による人為的な埋戻しと考えられる。出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

#### 5区5号ピット(第266図 PL.97)

第2面西側調査区に位置する。平面形状は楕円形で、断面形状は椀形を呈する。埋没土は、焼土粒を含む暗褐



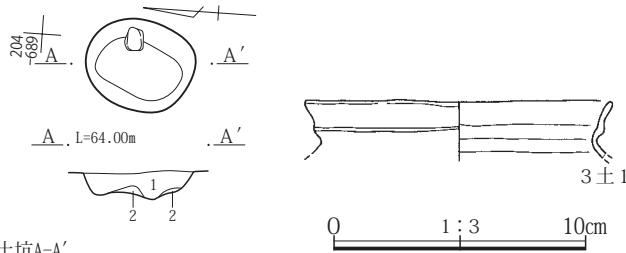


第265図 5区第2面(古墳時代)全体図

色土であり、底面上5cmに焼土塊が認められることから人為的な埋戻しと考えられる。柱痕は確認できなかった。

出土遺物がなく時期を特定できないが、埋没土などから古墳時代と考えられる。

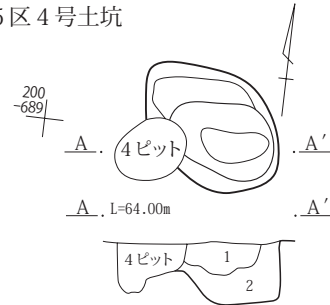
5区3号土坑



3号土坑A-A'

1. 黒褐色土 焼土粒少量、やや粘性あり
2. にぶい橙色土 ローム主体、黒褐色土を含む

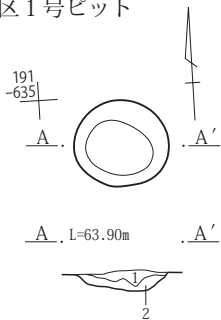
5区4号土坑



4号土坑A-A'

1. 暗褐色土 褐色土粒を含む、粘性あり
2. 暗褐色土 ローム中塊15%、粘性あり

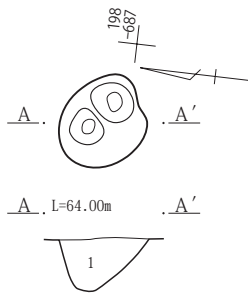
5区1号ピット



1号ピットA-A'

1. 暗褐色土 焼土小塊含む
2. 灰黄褐色土 暗褐色土塊を含む

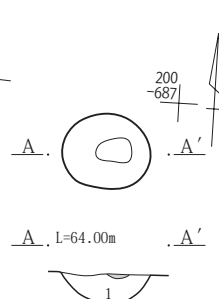
5区2号ピット



2号ピットA-A'

1. 黒色土 橙色土粒極小 1%、粘性あり

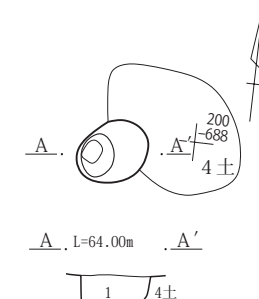
5区3号ピット



3号ピットA-A'

1. 暗褐色土 焼土粒を含む、粘性あり

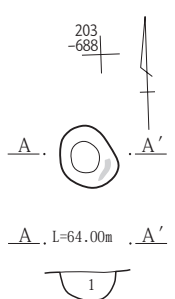
5区4号ピット



4号ピットA-A'

1. 黒色土 粘性あり

5区5号ピット



5号ピットA-A'

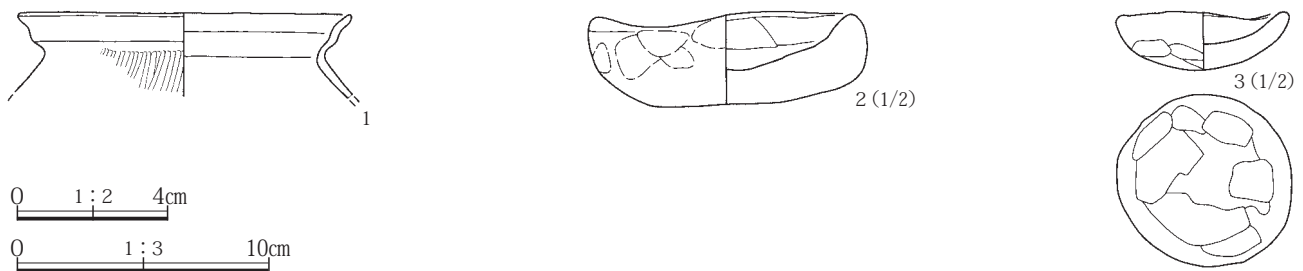
1. 暗褐色土 焼土粒を含む、粘性あり

第266図 5区3号土坑と出土遺物・4号土坑、1～5号ピット

2 遺構外の出土遺物(第267図 PL.137)

5区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない遺物が出土した。発掘調査では、第2面で古墳時代から中近世に至る遺構の調査を行っている。本項では、第4・5面から出土した遺構外の出土遺物のうち、古墳時代の遺物を掲載した。

遺物は、遺構確認面やトレンチなどから土師器台付甕(第267図1)、手捏ね皿形(第267図2・3)が出土した。非掲載遺物は、古墳時代から奈良・平安時代を合わせて、土師器293点(大型製品260、小型製品33)、須恵器59点(大型製品27、小型製品32)が出土した。



第267図 5区遺構外の出土遺物

## 第7章 縄文時代・弥生時代の遺物

### 第1節 調査の概要

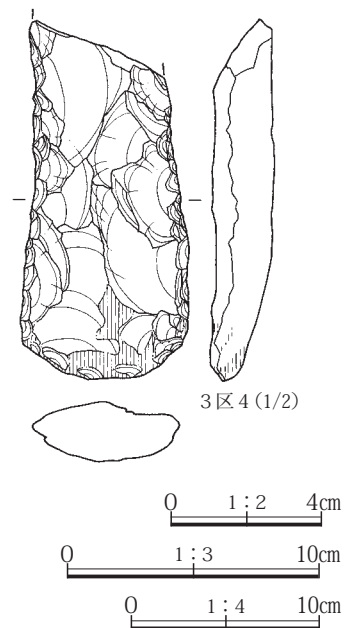
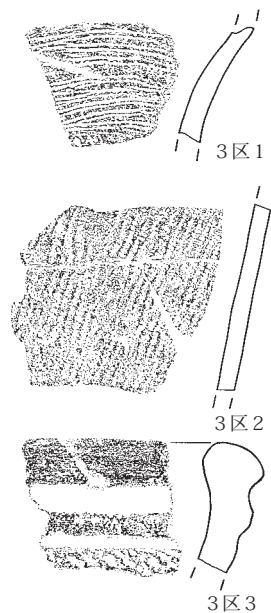
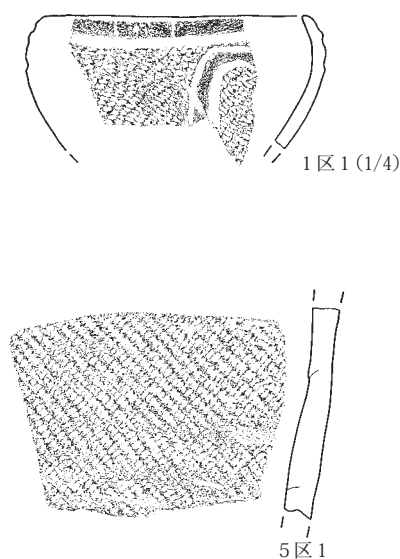
本遺跡において縄文時代と弥生時代の遺物が確認できた調査区は、1・3・5区である。基本土層第15層及び第16層下面を第2面として古墳時代以降の遺構と遺物について発掘調査を行った後、トレンチを設定し掘り下げた遺構確認を行ったが、縄文時代の遺構と遺物は確認することができなかった。第2面である遺構確認面及び竪穴住居などの遺構の埋没土から、混入とみられる縄文時代の遺物が僅かであるが出土した。本章では、縄文時代の遺物を遺構外の出土遺物として掲載した。

### 第2節 1区遺構外の出土遺物

(第268図 PL.137)

1区第2面において、遺構確認中や遺構埋没土などから遺構に伴わない縄文時代の遺物が5点出土した。1区では、縄文時代の遺構は確認できなかった。

遺物は、加曽利E3式土器(第268図1区1)が10号土坑の埋没土から出土し混入と考えられる。非掲載遺物は、加曽利E3式土器1点、時期不明土器2点、打製石斧1点のみである。



第268図 1・3・5区縄文時代・弥生時代の遺構外の出土遺物

### 第3節 3区遺構外の出土遺物

(第268図 PL.137)

3区第2面では、遺構確認中や埋没土などから遺構に伴わない縄文時代の遺物が21点、弥生時代の遺物が6点出土した。3区では、縄文時代及び弥生時代の遺構は確認できなかった。

遺物は、諸磯b式土器(第268図3区1・2)、加曽利E3式土器(第268図3区3)、打製石斧(第268図3区4)が出土した。非掲載遺物のうち縄文土器は諸磯b式土器2点、諸磯c式土器2点、加曽利E3式土器3点、時期不明土器1点である。弥生土器は吉ヶ谷式土器6点であり、19号竪穴住居からも出土している。石器は、打製石斧4点、剥片石器二次加工ある剥片5点である。

### 第4節 5区遺構外の出土遺物

(第268図 PL.137)

5区第2面では、遺構確認中に遺構に伴わない縄文時代の遺物が1点出土した。5区では、縄文時代の遺構は確認できなかった。

遺物は、遺構確認面から出土した加曽利E3式土器(第268図5区1)1点のみである。

## 第8章 自然科学分析

### 第1節 概要

平成24年度に発掘調査を行った南玉埋堀遺跡では、テフラ分析、プラント・オパール分析、銅製巡方の自然科学分析をそれぞれ実施した。自然科学分析の目的と結果は、以下のとおりである。

テフラ分析については、4区1号復旧溝群から試料1・2、4区1号道から試料3、4区南東隅の壁面から試料4を採取した(第269図)。試料4では、同時にプラント・オパール分析も実施した。

4区では、第1面において天明三(1783)年浅間山の噴火による浅間Aテフラ(As-A)によって埋没した畠を確認した。As-Aが確認できた調査区は4区のみであり、第2面では1号復旧溝群をはじめとする復旧溝群の他、畠や道を調査している。4区1号復旧溝群の埋没土は褐灰色粘質土塊を含む褐灰色砂粒、1号道の埋没土は灰黄褐色砂質土であり、遺構確認状況からそれぞれ近世に帰属すると考えられるが、正確な時期の判断ができなかった。このため、埋没土におけるAs-Aの混入の有無を確認することによって、4区1号復旧溝群と4区1号道の年代を特定したいと考えた。さらに、本遺跡におけるテフラの堆積状況をもとに土層の層位や時期を明確にすることを目的にテフラ分析を実施した。

プラント・オパール分析については、4区第2面において天仁元(1108)年の浅間山の噴火に伴う浅間Bテフラ(As-B)降下以前と考えられる水田の痕跡を確認した。畦などの痕跡は残存状況が良好ではなく、耕作痕も確認できるが、水田耕作との確証がなかった。4区で確認した水田の正確な理解に資すること、As-BからAs-A堆積までの期間における水田耕作の状況を確認することを目的として、火山灰考古学研究所にテフラ分析とプラント・オパール分析を委託した。

まず、テフラ分析によって第2面で確認した4区1号復旧溝群の埋没土中にAs-Aの混入が認められ、周辺でもAs-Aの混入の可能性が指摘された。4区1号道の表面か

らも僅かながらAs-Aの混入の可能性が指摘された。以上の分析結果から、1号復旧溝群の掘削時期は、As-A降下以降と考えられる。1号道の埋没土中には確認できなかったAs-Aが、道の表面で僅かに含まれていた。As-Aは、上層からの混入の可能性もあるが、As-A降下以前から道が使われていたと推量される。

4区南東隅で確認した基本土層断面の分析結果から、本遺跡では、4種類のテフラ粒子が検出された。As-AやAs-Bの他、As-Bの下層である試料3付近では、As-CやHr-FAと推定されるテフラが検出されている。なお、As-Aの直上層には、約20cmの天明泥流による堆積物が確認されている。

プラント・オパール分析については、4区第2面で確認したAs-B直下の水田跡からはイネが多量に検出され、ムギ類、ヒエなどは検出されなかった。As-B上位層及び直上層、As-B直下層及びAs-C・Hr-FA混土層において、高密度でイネが検出され、特にAs-B直上層の検出数が最も多かった。この結果から4区第2面では、稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。さらに、As-C・Hr-FA混土層が水田耕作の開始時期となり、As-B直下層及び下層では水田耕作が行われ、As-B上位層でも水田耕作が継続して行われていたと考えられる。

本遺跡におけるAs-B直下の水田については、畦など遺存状況が全体に良好ではないことから判断し、イネの検出数が多いものの一時的に休耕していた可能性がある。As-B降下直前における水田耕作の状況について周辺遺跡と比較しながら、今後も検討が必要であると考えられる。

銅製巡方は本遺跡の3区27号竪穴住居から出土した。3区27号竪穴住居は、出土した土器などの遺物から判断し、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に帰属すると考えられる。出土した巡方は、表金具と裏金具が残存しており、裏金具の一部を外すと内部に紐状物が確認された。内部の残存物には、毛穴のような痕跡も認められ、動物の皮革で製作された可能性がある革帯の一部が残存していることが判明した。巡方内部に革帯の一部が残存する例は全国的にも稀有である。正倉院には革帯が依存

し、紺玉帯の革帯は薄皮を袋状に2枚合わせている。大阪府藤井寺市の道明寺天満宮には、銀装革帯が残存している。南玉埋掘遺跡から出土した巡方に残存する革帯とみられる残存物の分析を行うことによって帯の材質の他、内部構造の一端が明らかとなる可能性がある。

発掘調査の段階では、銅製巡方の記録・観察を行い、整理作業において詳細な観察、クリーニング、遺物写真撮影作業を行った。巡方内部に残存する革帯の一部については、遺存状態が不良のため、整理担当者の顕微鏡観察だけでは正確な判定が難しく、分析によって成果が期待できる有機物分析、蛍光X線分析、電子顕微鏡写真撮影を外部委託した。有機物分析(赤外分光分析)では、帯の一部が有機物であるか否かの判定を行い、電子顕微鏡で観察することによって革の種類を同定できる可能性があり、巡方の表金具及び裏金具には緑青の錆が観察されることから銅製品と想定されるが、蛍光X線分析によって巡方に含まれる金属の種類を特定することができると考えられる。これらの解明に資することを目的として株式会社パレオ・ラボに分析を委託した。

上記の分析の結果、巡方内部の残存物については、断面観察から3層に分かれていることが明らかとなった。断面模式図(第273図- 2)をみると、最下層(c層)については、巡方が埋没する過程で混入した砂層であった。b層の表面には規則性のある縞状の筋が認められ、有機物が残存したものと考えられるが、電子顕微鏡観察では、現状で有機物の種類を特定するに至らなかった。また、b層の表面の赤外分光分析では、C-H基の吸収による段差(第274図- 3の1・2)が僅かに認められ、有機物の劣化に伴うゴム質(第274- 3の6)も確認されることから、有機物が劣化したものである可能性が高い。b層の断面観察を電子顕微鏡で行うと、長柱状の結晶が認められた。これは革の繊維の絡まりに錆が生成されて形成したものである可能性があるが、内部残存物が銅成分の浸透を受けたため、革帯の組織などについては確認できなかった(第274図- 2a・2b)。b層の表面の一部には、50 $\mu$ m程の窪み(第274図- 1b)が認められることから、この窪みが動物の毛穴の可能性もあり、断面観察などによる検討がさらに必要であると考えられる。

蛍光X線分析によって、銅、鉛、ヒ素が検出されたことから、表金具と裏金具及び鉾は銅合金と考えられる。

水銀及び金は検出されず、銀については微量な検出にとどまることから、表面は金銀装ではないと考えられ、黒漆についても確認できなかった。第273図- 3b表面の一部に認められる黒色部分については、革帯に塗られた黒漆の可能性がある。c層(第273図- 3b)については電子顕微鏡観察でも有機物と特定できる組織について確認できなかったが、b層及びc層については、分析の結果から判断し革帯の可能性が高い。巡方内部の残存物のうち、片側の端部には縫いをかけた紐状物(第273図- 1b・3a)が認められた。錆によって紐状物の種類を特定できなかったが、正倉院や道明寺天満宮に伝存する革帯の類例から、紐状物は革縁に縫い込まれた縫い紐に相当すると考えられる。

巡方内部の残存物は分析の結果から有機物と考えられるが、劣化によって特定できる組織が確認できず革帯の種類までは明らかとならなかった。今後も他の遺跡などで出土した巡方の分析結果と比較検討を行い、本遺跡から出土した巡方内部に残存する有機物について解明したいと考える。

## 第2節 南玉埋掘遺跡の土層とテフラ

### 1. はじめに

関東地方北西部に位置する群馬県玉村町とその周辺には、榛名火山や浅間火山をはじめとする北関東地方とその周辺に分布する火山のほか、中部地方や中国地方さらには九州地方など遠方に位置する火山から噴出したテフラ(火山砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く降灰している。とくに後期更新世以降に降灰したそれらの多くについては、層相や年代さらに岩石記載的な特徴がテフラ・カタログなどに収録されており、遺跡などで調査分析を行いテフラを検出することで、地形や地層の形成年代さらには遺物や遺構の年代などに関する研究を実施できるようになっている。

玉村町南玉二丁町遺跡他の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層や遺構が認められたことから、地質調査を実施して土層やテフラの記載を行うとともに、採取した試料および発掘調査担当者により採取された試料を対象にテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、すでに噴出年代が明らかにされている指標テフラの検出



同定を実施し、それとの層位関係から土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象は、南玉埋堀遺跡4区中央部および4区(基本土層断面)の2地点である。

## 2. 土層の層序

4区(標準土層断面)では、下位より灰白色泥流堆積物(層厚25cm以上、礫の最大径51mm)、灰色砂質泥層(層厚16cm)、黄灰色泥層(層厚18cm)、色調がやや暗い灰色泥層(層厚7cm)、暗灰色泥層(層厚7cm)、鉄分を多く含む褐色泥層(層厚1cm)、褐灰色粗粒火山灰層(層厚6cm)、暗灰色砂質土(層厚8cm)、砂混じりでやや色調が暗い灰色土(層厚11cm)、砂混じりでやや色調が暗い灰色シルト層(層厚7cm)、灰色シルト層(層厚11cm)、暗褐灰色砂質シルト層(層厚13cm)、砂混じり褐灰色シルト層(層厚13cm)、灰色シルト層(層厚17cm)、シルト混じり褐灰色シルト層(層厚19cm)が認められる(第270図)。最上位の土層の上面では溝や畝遺構が検出されている(3面)。

その上位には灰色砂層(層厚23cm)が堆積しており、その上面は遺構検出面(2面)となっている。さらに、その上位には、黄灰色砂層があって、上面からは畝遺構(1面)が検出されている。この1面は成層したテフラ層で覆われており、その直上には暗灰褐色泥流堆積物(層厚13～22cm、礫の最大径33mm)が認められる。泥流堆積物の上位には、垂円礫混じり灰色砂層(層厚5cm、礫の最大径17mm)、灰色土(層厚9cm)、若干色調が暗い灰色表土(層厚12cm)が認められる。

成層したテフラ層は、畝遺構のサクのように厚く保存されているところでは、下位より灰白色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)、若干黄色がかかった灰白色細粒軽石層(層厚2cm、軽石の最大径2mm)、灰白色粗粒火山灰層(層厚3cm)、白色粗粒火山灰層(層厚0.4cm)、桃灰色粗粒火山灰層(層厚2cm)、逆級化構造をもつ白色軽石層(層厚3cm、軽石の最大径3mm)からなる。このテフラ層は、層相から1783(天明3)年に浅間火山から噴出した浅間A軽石(As-A, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。したがって、その直上の暗灰褐色泥流堆積物は、層位や層相からいわゆる天明泥流堆積物と考えられる。なお、より下位にある褐灰色粗粒火山灰層は、層位や層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間Bテフ

ラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。

## 3. テフラ検出分析

### (1)分析試料と分析方法

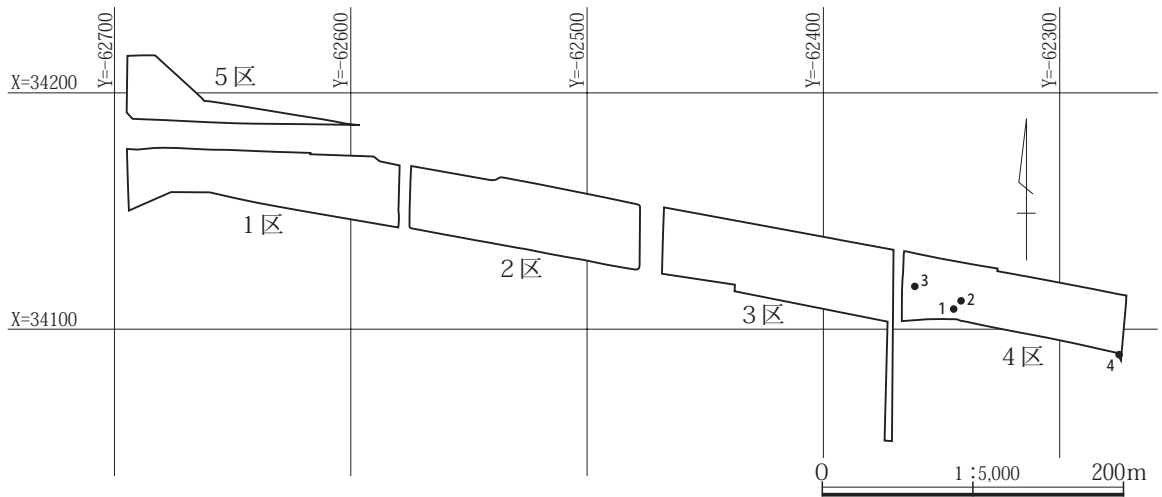
4区中央部において発掘調査担当者により採取された3試料(4区試料1～3)、ならびに4区(基本土層断面)において採取された試料のうちの4試料の合計7試料を対象に、含まれるテフラ粒子の量や特徴を定性的に明らかにするテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料7gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながらていねいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

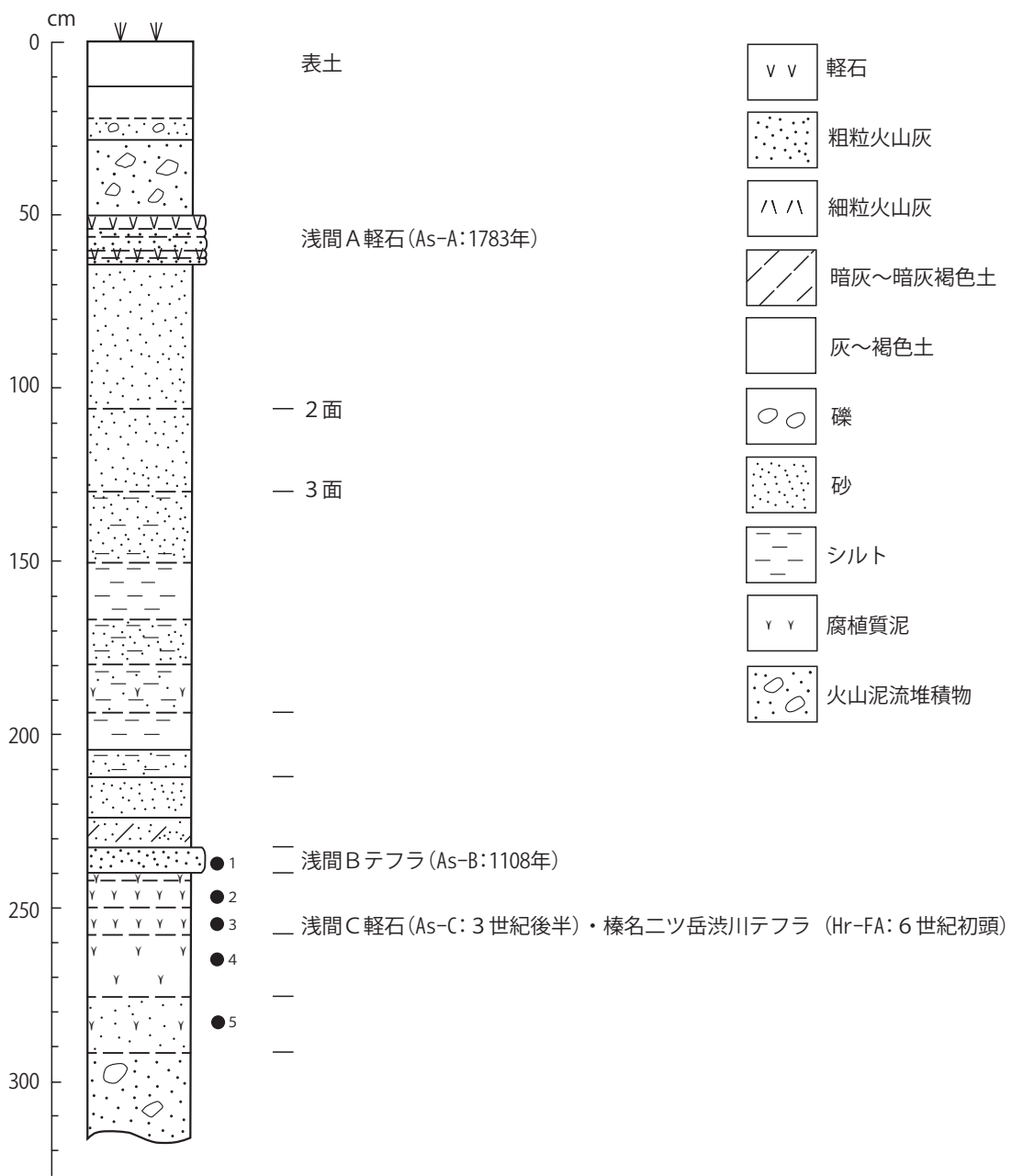
### (2)分析結果

テフラ検出分析の結果を第5表に示す。分析では、おもに4種類の軽石や火山ガラスが検出された。それらは、1) スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径6.3mm)や、その細粒物である灰白色の軽石型ガラスで、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められるもの、2) さほど発泡の良くない白色軽石や、その細粒物である白色の軽石型ガラスで、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められるもの、3) 比較的良く発泡した淡褐色や淡灰色の軽石や、その細粒物である淡褐色や淡灰色の軽石型ガラスで、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められるもの、4) 繊維束状に比較的良く発泡した白色の軽石や軽石型ガラスで、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められる。中には光沢をもつものも認められる。

4区(基本土層断面)では、試料3や試料2に1)や2)の火山ガラスが少量ずつ含まれている。このことから、4区(基本土層断面)では、試料3付近に1)や2)で特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が指摘できる。一方、発掘調査担当者により採取された4区中央部の3試料では、1)～4)のテフラ粒子を認めることができた。



第269図 南玉埋堀遺跡テフラ分析、プラント・オパール分析試料採取地点



第270図 南玉埋堀遺跡4区基本土層断面の土層柱状図(●：テフラ分析試料、数字：試料番号)

第5表 南玉埋堀遺跡におけるテフラ検出分析結果

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
4区中央部	1	**	白, 淡灰	2.7, 2.0	**	pm	白, 淡灰, 淡褐, 灰白, 白(光沢)
	2	**	淡灰, 白, 灰白	2.1, 2.2, 6.3	**	pm	淡灰, 淡褐, 白, 白(光沢), 灰白
	3	***	白, 淡灰	3.3, 2.1	**	pm	白, 淡灰, 淡褐, 白(光沢), 灰白
4区	2				*	pm	灰白, 白
	3				*	pm	白, 灰白
	4						
	5				*	pm	透明

\*\*\*\*: とくに多い, \*\*\*: 多い, \*\*: 中程度, \*: 少ない. 最大径の単位は, mm. bw: バブル型, pm: 軽石型.

第6表 屈折率測定結果

試料・テフラ(噴出年代)・試料	火山ガラス		文献
	屈折率(n)	測定点数	
南玉埋堀遺跡・4区中央部・試料1	1.501-1.504, 1.506-1.511, 1.528-1.532	22, 15, 4	本報告
南玉埋堀遺跡・4区中央部・試料2	1.500-1.501, 1.503-1.507, 1.521-1.522	9, 24, 3	
南玉埋堀遺跡・4区中央部・試料3	1.501-1.505, 1.523-1.527	30, 11	本報告
<長野・群馬西部のおもな指標テフラ-AT以降>			
浅間A (As-A, 1783年)	1.507-1.512		1)
浅間A' (As-A')	1.515-1.521		2)
浅間船川(As-Kk, 1128年)	未報告		2)
浅間B (As-B, 1108年)	1.524-1.532		1)
榛名二ツ岳伊香保(Hr-FP, 6世紀中葉)	1.501-1.504		1)
榛名二ツ岳渋川(Hr-FA, 6世紀初頭)	1.500-1.502		1)
	1.499-1.504		4)
浅間C (As-C, 3世紀後半)	1.514-1.520		2)
浅間D (As-D)	1.513-1.516		2)
妙高大田切川(My-0t, 約4,500年前)	1.497-1.499		1)
草津白根熊倉(KS-Ku)	未報告		2)
沼沢湖(Nm-N)	1.500-1.505		1)
浅間六合(As-Kn)	未報告		2)
妙高赤倉(My-A, 約7,000~7,200年前)	1.496-1.498		1)
	1.497-1.501		3)
鬼界アカホヤ(K-Ah, 約7,300年前)	1.506-1.513		1)
浅間藤岡(As-Fo)	未報告		2)
浅間総社(As-Sj)	1.501-1.518		2)
浅間草津(As-K)	1.501-1.503		1)
浅間板鼻黄色(As-YP, 約1.5~1.65万年前)	1.501-1.505		1)
浅間大窪沢2(As-0k2)	1.502-1.504		1)
浅間大窪沢1(As-0k1)	1.500-1.502		1)
浅間白糸(As-Sr)	1.506-1.510		1)
浅間秋生(As-Hg)	1.500-1.502		2)
浅間板鼻褐色(群)(As-BP Group)上部	1.515-1.520		1)
中部	1.508-1.511		1)
下部	1.505-1.515		1)
始良Tn (AT, 約2.8~3万年前)	1.499-1.500		1)

1): 町田・新井(1992, 2003), 2): 早田(1996), 3)竹本・奥村(2012), 4)早田(未公表).  
 本報告および3)~4): 温度変化型屈折率測定装置(RIMS2000).  
 1)~2): 故新井房夫群馬大学名誉教授の温度一定型屈折率測定法.

4. 屈折率測定

(1)測定試料と測定方法

日本列島とその周辺でとくに盛んに利用されている火山灰編年学では、火山ガラスや鉱物の屈折率特性を明らかにしてテフラの同定精度の向上が図られている(町田・新井, 1992, 2003など)。そこで、4区中央部の3試料に含まれる軽石を軽く粉砕した後に、火山ガラスの屈折率測定を行ってその起源を明らかにすることになった。屈折率測定には、温度変化型屈折率測定装置(京都フィッシャントラック社製RIMS2000)を使用した。

(2)測定結果

屈折率測定の結果を第6表に示す。テフラ検出分析の結果のように、bimodalあるいはtrimodalな屈折率特性のあることが明らかになった。4区中央部の試料1に含まれる火山ガラスの屈折率(n)は、1.501-1.504(22粒子)、1.506-1.511(15粒子)、1.528-1.532(4粒子)である。試料2に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.500-1.501(9粒子)、1.503-1.507(24粒子)、1.521-1.522(3粒子)である。そして、試料3に含まれる火山ガラスの屈折率は、1.501-1.505(30粒子)、1.523-1.527(11粒子)である。

5. 考察—指標テフラとの同定とその層位について

テフラ検出分析により認められた4種類のテフラ粒子については、岩相などから、1)は3世紀後半に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 坂口, 2010)、2)は6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井, 1962, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992, 2003)、3)はAs-B、4)はAs-Aにそれぞれ由来すると推定される。なお、2)の榛名系テフラについては、実際には本遺跡近辺にも堆積したHr-FAやHr-FPの噴火に関係した火山泥流(早田, 1989)に由来する可能性がより高い。したがって、4区(基本土層断面)の試料3付近に降灰層準があるテフラは、As-Cと、本遺跡付近でHr-FPより厚くまた粗粒のテフラが降灰したHr-FAと推定される。

屈折率測定により得られた火山ガラスの屈折率の値を検討すると、試料1のn:1.501-1.504(22粒子)はHr-FAおよびHr-FP、n:1.506-1.511(15粒子)はAs-A、n:1.528-1.532(4粒子)はAs-Bのそれぞれの屈折率特性を示すと考えられる。また、試料2のn:1.500-1.501(9粒子)はHr-FA、1.503-1.507(24粒子)はHr-FP、1.521-1.522(3粒子)はAs-Cのそれぞれの屈折率特性を示している可能性が高い。なお、1.503-1.507(24粒子)の中にはAs-A起源の火山ガラスが含まれている可能性も否定できない。試料3の1.501-1.505(30粒子)はHr-FAまたはHr-FP、1.523-1.527(11粒子)はAs-Bのそれぞれの屈折率特性を示していると考えられる。

4区中央部における今回の分析のおもな目的はAs-Aの混入の有無であるが、試料1には少なくとも火山ガラスの屈折率測定結果から、As-A起源の軽石の混入が認められる。また、わずかながら光沢のある白色の繊維束状軽石型ガラスが検出されたこともこれと矛盾しない。同じように、テフラ検出分析で光沢をもつ繊維束状軽石型ガラスが少量検出されたことから、試料2や試料3にもわずかながらAs-Aの混入している可能性が考えられる。

6. まとめ

玉村町南玉埋堀遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)と、浅間A軽石(As-A, 1783年)のテフラ層を認めることができた。また、それらのほか、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)などに由来するテフラ粒子も検出できた。さらに、発掘調査担当者により採取された試料からもAs-AやAs-AIに由来する可能性があるテフラ粒子が検出された。

文献

- 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, pp.41-52.  
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質。地団研専報, no.14, pp.1-45.  
 町田洋・新井房夫(1992)「火山灰アトラス—日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 276p.  
 町田洋・新井房夫(2003)「新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺」, 東京大学出版会, 336p.  
 坂口一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, pp.103-119.  
 坂口一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落との関係—。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, pp.17-22.  
 早田勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, pp.297-312.  
 早田勉(1990)群馬県の自然と風土。群馬県史編さん委員会編「群馬県史通史編1 原始古代1」, pp.37-129.  
 早田勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, pp.256-267.  
 竹本仁美・奥村晃史(2011)長野県神城盆地の局所的な地形変化に対する完新世の花粉化石群集の応答。第四紀研究, 51, pp.21-33.

### 第3節 南玉埋堀遺跡における プラント・オパール分析

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO<sub>2</sub>)が蓄積したもので、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法で、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山, 1984, 杉山, 2000)。

#### 2. 試料

分析試料は、南玉埋堀遺跡4区(第269図4の地点)から採取された計6点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

#### 3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。

#### 第3節 南玉埋堀遺跡におけるプラント・オパール分析

- 4) 超音波水中照射(300W・42kHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

#### 4. 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を第7表および第271図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真図版(第272図)に示す。

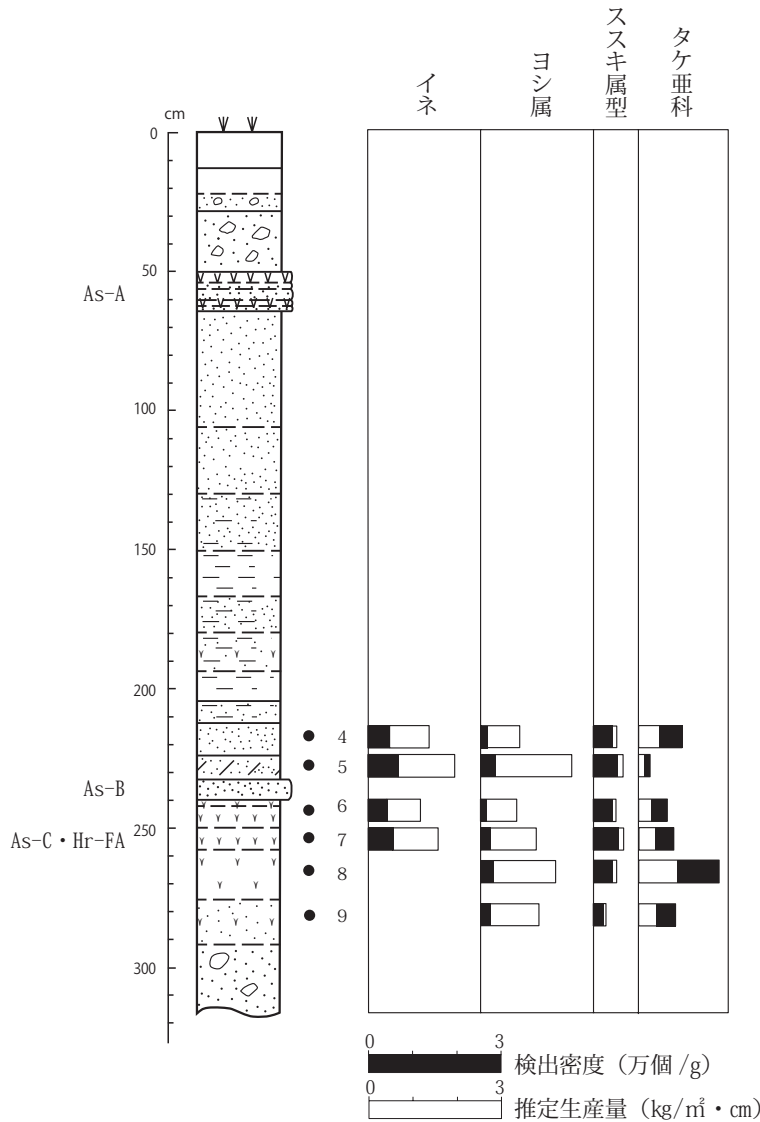
第7表 南玉埋堀遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度(単位: ×100個/g)		4区					
分類群	地点・試料 学名	4	5	6	7	8	9
イネ	<i>Oryza sativa</i>	47	67	40	54		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	33	13	20	27	21
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	41	53	40	54	41	21
タケ亜科	Bambusoideae	101	27	66	82	185	85

推定生産量(単位: kg / m <sup>2</sup> ・cm) : 試料の仮比重を1.0と仮定して算出							
分類群	学名	4	5	6	7	8	9
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.39	1.96	1.17	1.60		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.85	2.11	0.83	1.29	1.72	1.33
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.50	0.66	0.49	0.67	0.51	0.26
タケ亜科	Bambusoideae	0.49	0.13	0.32	0.39	0.89	0.41





第271図 南玉埋堀遺跡4区における植物珪酸体(プラント・オパール)分析結果

5. 考察

(1) 水田跡(稲作跡)の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。なお、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

南玉埋堀遺跡4区では、As-Bの上位層からAs-C・Hr-FA混層の下層までの層準について分析を行った。その結果、As-Bの上位層(試料4、5)、As-B直下層(試料6)、As-C・Hr-FA混層(試料7)からイネが検出された。このうち、As-B直上層(試料5)とAs-C・Hr-FA混層(試料7)では密度

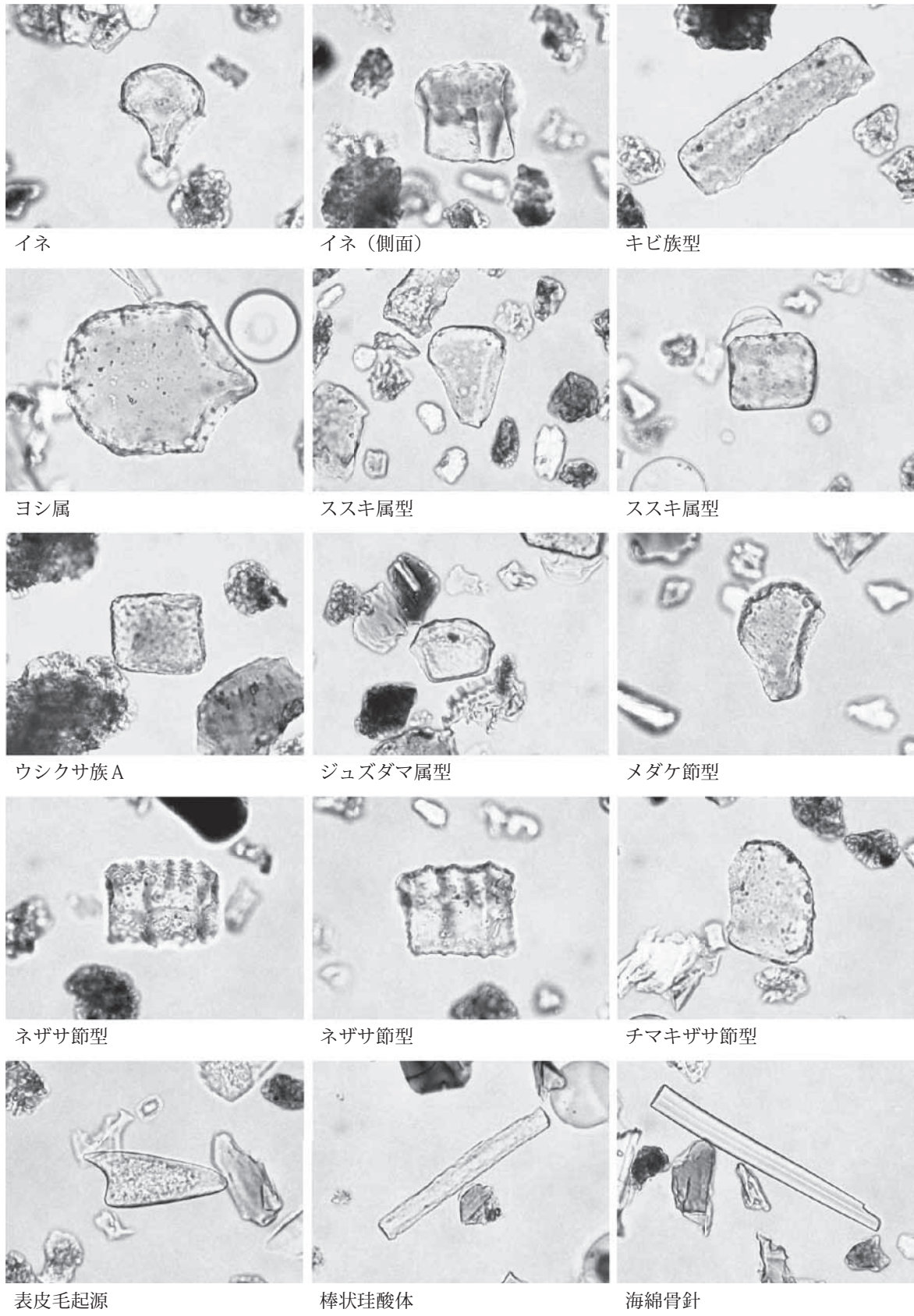
が6,700個/gおよび5,400個/gと高い値で、As-Bの上位層(試料4)とAs-B直下層(試料6)でも密度が4,700個/gおよび4,000個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

(3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜



第272図 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。イネ以外の分類群では、下位層準を中心にタケ亜科が比較的多く検出され、各層準でヨシ属やススキ属型も認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねヨシ属が優勢となっている。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、As-C・Hr-FA混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところには竹笹類やススキ属などが分布していたと考えられる。

## 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、As-Bの上位層、As-B直下層、As-C・Hr-FA混層ではイネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、As-C・Hr-FA混層の時期にそこを利用して水田稲作が開始されたと推定される。

### 文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール). 辻誠一郎編「考古学と植物学」. 同成社, pp.189-213.  
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, pp.15-29.  
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-. 考古学と自然科学, 17, pp.73-85.

## 第4節 銅製巡方の材質分析

### 1. はじめに

南玉埋堀遺跡の調査では、平安時代前期末～中期初頭(9世紀第4四半期～10世紀第1四半期)の銅製巡方が出土した。ここでは、この巡方の構造や材料の特徴について検討した。

### 2. 試料と方法

分析試料は、3区の27号住居から出土した巡方である(第8表)。時期は、9世紀第4四半期～10世紀第1四

半期とみられている。巡方は、表金具と裏金具からなり、いわゆる緑青錆が観察されるため、銅ないし銅合金製品と推定された。表金具の裏面には4本の鉚がついており、鉚で裏金具が固定されている。裏金具は半分に分かれており、内部に有機質とみられる物質が観察される。

分析は、内部破片試料について電子顕微鏡観察と付着物のX線分析および赤外分光分析、金属部分について蛍光X線分析を実施した。

### [内部破片試料の分析]

電子顕微鏡観察およびX線分析は、破片付着物について行った。電子顕微鏡観察およびX線分析は、エネルギー分散型X線分析装置が付属した走査型電子顕微鏡を用いて、二次電子像で観察した。使用した装置は、走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV)と付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200)を用いた。なお、点分析は、PRZ法で行った。

赤外分光分析は、破片試料の白色付着物から手術用メスを用いて試料を薄く削り取った後、押しつぶして、厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム(KBr)結晶板に挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計(日本分光(株)製FT/IR-410、IRT-30-16)を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

### [金属の分析]

蛍光X線分析は、表金具表面と鉚(付け根破断面)、裏金具内面の3ヶ所について行った。この蛍光X線分析は、表面分析であり、均一とは限らない金属製品の正確な組成比を必ずしも示しているとはいえないが、概略組成、微量元素を知る上では有効な分析手法である。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウムターゲット、X線照射径が8mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。また、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム～ウランである。

測定条件は、管電圧50kV、一次フィルタ・測定時間(sec)



第8表 分析試料とその詳細

分析No.	遺物名	遺物番号	調査区	遺構	時期	分析項目
1	巡方	9	3区	27号住居	平安時代前期末～中期中頭	金属：蛍光X線分析、付着物：電子顕微鏡観察等

の組み合わせがPb測定用1000s・Cd測定用1700sの2条件、管電流自動設定、照射径8mm（表金具鉸の付け根は1mm）、試料室内雰囲気真空中に設定した。定量分析は、MBH Analytical社の32X LB14(batch A)を用いて補正したファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による半定量分析を行った。

### 3. 結果

以下では、巡方の構造、内部破片の分析、金属部分の分析に分けて述べる。

#### [巡方の構造]

この遺物は、表金具と裏金具からなる。表金具の裏面には4本の鉸がついており、鉸で裏金具が固定されている。裏金具は半分に割れている(第273図-1a・1b)。

内部には、金属以外の残存物が見られた。分析に供した破片はその一部である(第273図-4a・4b)。内部にみられる残存物は、ほぼ全面にわたって見られる層構造部と片側端部に見られる黄白色の束状物(第273図-2:d)からなる。ほぼ全面にわたって見られる層構造部は、大きく次の3層からなる。最下位の現生植物遺体を含む砂質層(a層：第273図-4b)、表面に黄白色縞状付着物を伴う黒色層(b層：第273図-4a)、オリーブ黒色層(c層：第273図-3b)である。a層は、現生植物遺体を伴うことから埋積後に入ったと考えられる。なお、b層の表面の黄白色縞状付着物と黄白色の束状物(第273図-2:d)の色感が似ている。

#### [内部破片の分析]

b層の表面に見られる黄白色縞状付着物の電子顕微鏡観察では、肉眼観察で見られた縞状構造が見られるものの、物質を特徴づけるような組織は見られなかった(第274図-1a・1b)。表面のX線分析(第274図-1aのNo.1とNo.2)では、炭素(C)が35.78%および36.35%、酸化銅(CuO)が32.47%および32.50%と多く検出され、酸化ケイ素(SiO<sub>2</sub>)が18.91%および18.78%、酸化アルミニウ

ム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が6.95%および6.57%、それぞれ含まれていた(第9表)。また、この黄白色縞状付着物の赤外分光分析では、C-H基(炭化水素)に由来する2925 (cm<sup>-1</sup>)、2854 (cm<sup>-1</sup>)の吸収は僅かであった。なお、1026 (cm<sup>-1</sup>)付近の大きな吸収は有機物の劣化に伴うゴム質と考えられる(第274図-3)。

b層の断面観察では、幅数μm、長さ20μmの長柱状結晶が集合して見られ、表面の黄白色縞状付着物は膨張して膨れ上がったような構造が見られた(第274図-2a)。長柱状結晶(第274図-2bのNo.4とNo.5)のX線分析では、炭素(C)が29.31%および43.41%、酸化銅(CuO)が47.74%および55.01%と多く検出され、酸化ケイ素(SiO<sub>2</sub>)が4.36%および12.15%、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)が3.17%および1.14%、それぞれ含まれていた(第8表)。なお、この黒色部の表面(第274図-1bのNo.3)のX線分析では、酸化アルミニウム(Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)がやや低い結果であった(第8表)。

#### [金属部分の分析]

表金具表面と鉸、裏金具内面の3ヶ所の蛍光X線分析を行った。

ケイ素や鉄など、土砂に多く含まれる元素を除くと、銅(Cu)が60.72～78.60%、鉛(Pb)が11.59～22.95%、ヒ素(As)が8.02～13.66%と多く検出され、他に銀(Ag)が0.84～0.93%、スズ(Sn)が0.15～0.47%、アンチモン(Sb)が0.32～0.64%、ビスマス(Bi)が0.47～0.63%と微量検出された(第10表)。

### 4. 考察

巡方は、腰帯の飾り金具であり、腰帯の縦幅は帯幅よりわずかに小さい。正倉院に伝存する銚帯の革帯は、牛皮などの革で作られ、細長い革を袋状に仕立て、上下の縁に麻縫り紐を縫い込んで芯とし、裏面にて縫い合わせている(松村, 2002)。

巡方の内部には、b層とc層の2層の薄層部分が認められたが、b層やその表面の黄白色縞状付着物は、銅成分

第9表 破片のX線分析結果(単位：%)

点No.	試料	C	Na <sub>2</sub> O	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	S <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Cl	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CuO	ZnO	SnO <sub>2</sub>	total
1	白色部(b層表面)	35.78	0.53	-	6.95	18.91	0.06	0.11	0.22	0.34	0.26	0.06	0.33	3.51	32.47	0.48	-	100.01
2		36.35	0.13	0.57	6.57	18.78	-	0.06	-	0.35	0.23	0.08	0.12	4.26	32.50	-	-	100.00
3	黒色部(b層、表面)	34.50	0.14	0.12	0.99	12.84	-	0.00	-	0.21	0.05	-	0.08	1.09	49.22	0.38	0.37	99.99
4	断面(b層、結晶)	43.41	-	-	3.17	4.36	-	0.11	-	0.87	-	-	0.18	0.16	47.74	-	-	100.00
5		29.31	-	-	1.14	12.15	0.26	0.13	-	0.11	0.10	0.16	-	0.80	55.01	0.84	-	100.01
最小値		29.31	0.13	0.12	0.99	4.36	0.06	0.00	0.22	0.11	0.05	0.06	0.08	0.16	32.47	0.38	0.37	99.99
最大値		43.41	0.53	0.57	6.95	18.91	0.26	0.13	0.22	0.87	0.26	0.16	0.33	4.26	55.01	0.84	0.37	100.01

第10表 金属部の蛍光X線分析結果(単位：%)

測定位置	Cu	As	Pb	Ag	Sn	Sb	Bi	total
表金具表面	78.60	8.02	11.59	0.84	0.15	0.32	0.47	99.99
表金具鋳付け根	77.80	8.06	11.88	0.84	0.27	0.51	0.63	99.99
裏金具	60.72	13.66	22.95	0.93	0.47	0.64	0.63	100.00
最小値	60.72	8.02	11.59	0.84	0.15	0.32	0.47	
最大値	78.60	13.66	22.95	0.93	0.47	0.64	0.63	

が浸透していたため、本来の材質については不明であった。なお、c層は蛍光X線分析を行っていないが、顕微鏡観察では材料を特徴づける組織等は確認されなかった。これらb層やc層の薄層部分は、革帯の一部である可能性が高い。なお、片側端部に見られる黄白色の束状物(第273図- 2 : d)は、上述の正倉院伝存の革帯の縁に縫い込まれた麻縫り紐に相当すると考えられる。

金属部の分析では、表金具、裏金具ともに銅とヒ素と鉛が主に検出され、Cu-As-Pbの銅合金と考えられる。その他には、銀、スズ、アンチモン、ビスマスは微量であり、金属中に含まれる不純物と考えられる。鋳については、表金具に鑲接されている可能性も検討したが、表金具裏面に痕跡は確認できなかった。化学組成も表金具とよく似ており、表金具とともに鑄出された一体品と考えられる。

ヒ素を多く含む銅合金は、奈良・平安時代の銅製品において多数報告されている(例えば長谷川ほか, 2002、齋藤ほか, 2002など)。中には、今回のようなスズをほとんど含まないCu-As-Pbの組成からなる製品も多く存在しており、銀やアンチモン等を微量に含有する特徴も含め、当時、比較的良好に使用されていた組成の素材と考えられる。

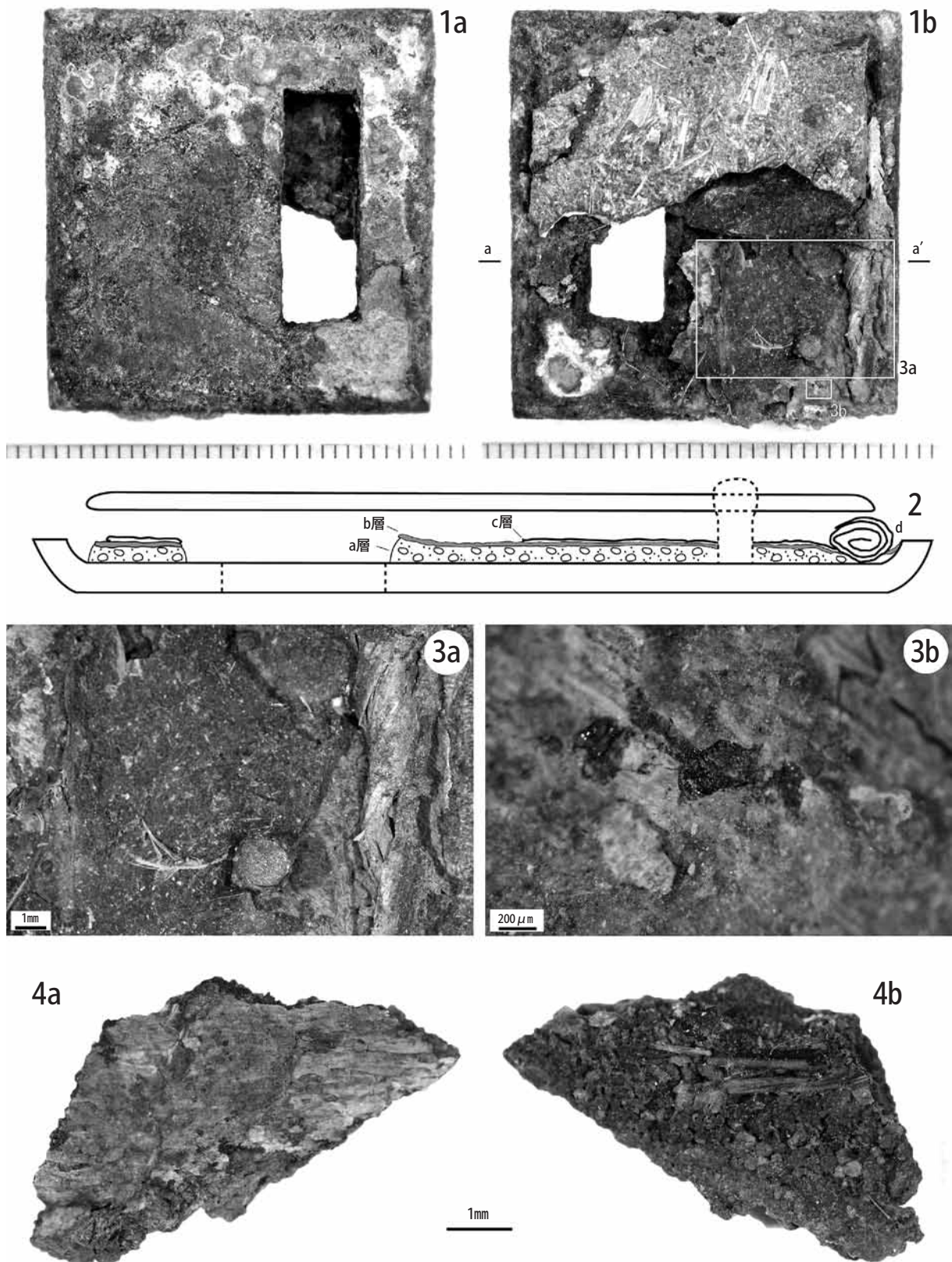
巡方は、養老衣服令の朝服条では五位以上は金銀装腰帯、六位以下は烏油(くろつくり)腰帯の使用が規定されている(高島, 2002)。金銀装は銅地の金具にアマルガムのためっき、あるいは銀製の金具、烏油は銅製の金具に黒漆が塗られていたとみられている(田中, 2006、木村, 2002など)。今回分析した巡方からは、水銀(Hg)や金(Au)

は検出されておらず、また、銀も微量であるため、少なくとも金銀装ではないといえる。

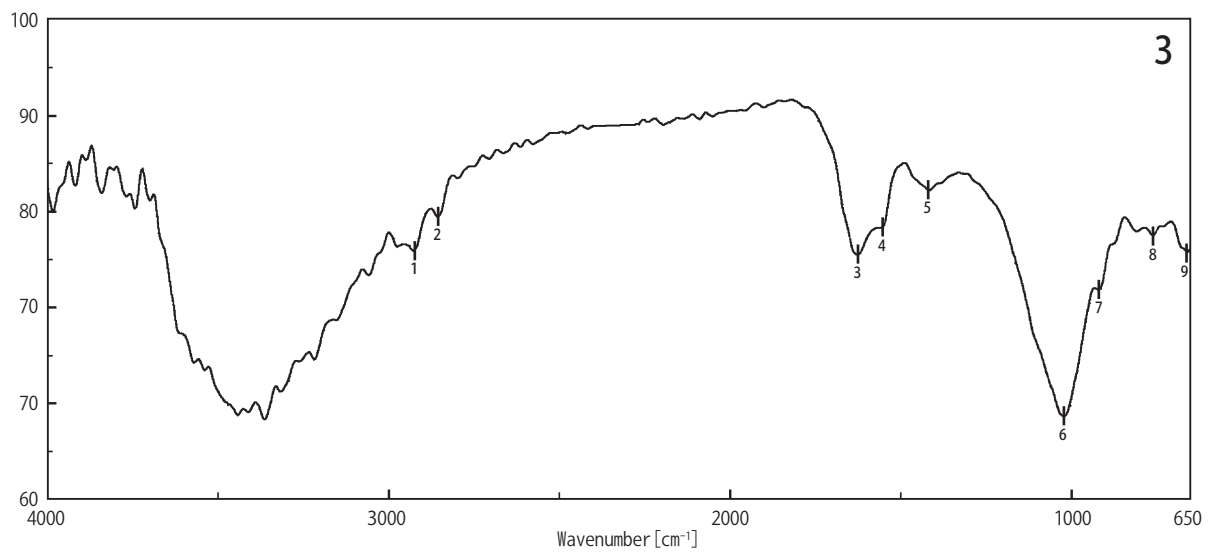
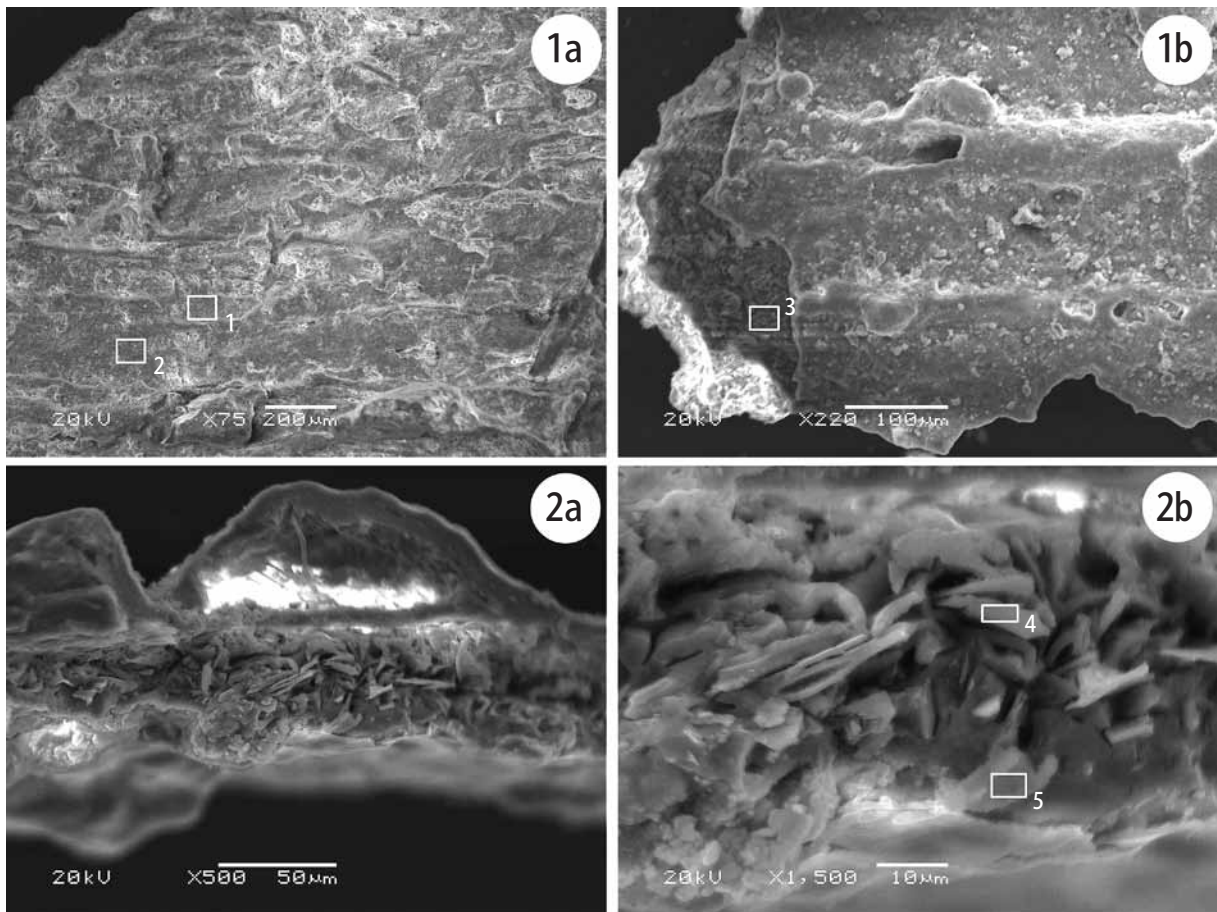
引用・参考文献

長谷川雅啓・河野益近・西山文隆・内田俊秀(2002)9世紀前半の平安京で使用されたヒ素を含む銅材料について—淳和院跡出土遺物を中心として—。日本文化財科学会第19回大会研究発表要旨集, 244-245。  
 木村泰彦(2002)銅鈿から石鈿へ。奈良文化財研究所編「鈿帯をめぐる諸問題」: 129-140, 奈良文化財研究所。  
 中井泉編(2005)蛍光X線分析の実際。242p, 朝倉書店。  
 松村恵司(2002)鈿帯金具の位階表示機能。奈良文化財研究所編「鈿帯をめぐる諸問題」: pp.37-54, 奈良文化財研究所。  
 奈良文化財研究所編(2002)鈿帯をめぐる諸問題。394p, 奈良文化財研究所。  
 齋藤努・高橋照彦・西川裕一(2002)古代銭貨に関する理化学的研究—「皇朝十二銭」の鉛同位体比分析および金属組成分析—。IMES Discussion Paper J-Series2002-J-30, 日本銀行金融研究所。  
 高島英之(2002)文献史料からみた日本古代の鈿帯。奈良文化財研究所編「鈿帯をめぐる諸問題」: pp.27-36, 奈良文化財研究所。  
 田中広明(2006)国司の館—古代の地方官人たち—。209p, 学生社。





第273図 巡方とその内部および分析試料(3a～4b：実体顕微鏡写真)  
 1a. 巡方の表面 1b. 巡方の裏面 2. 断面模式図(a-a'断面)  
 3a. 内部拡大 3b. b層の表面 4a・4b. 分析試料の表面と裏面(a層とb層)

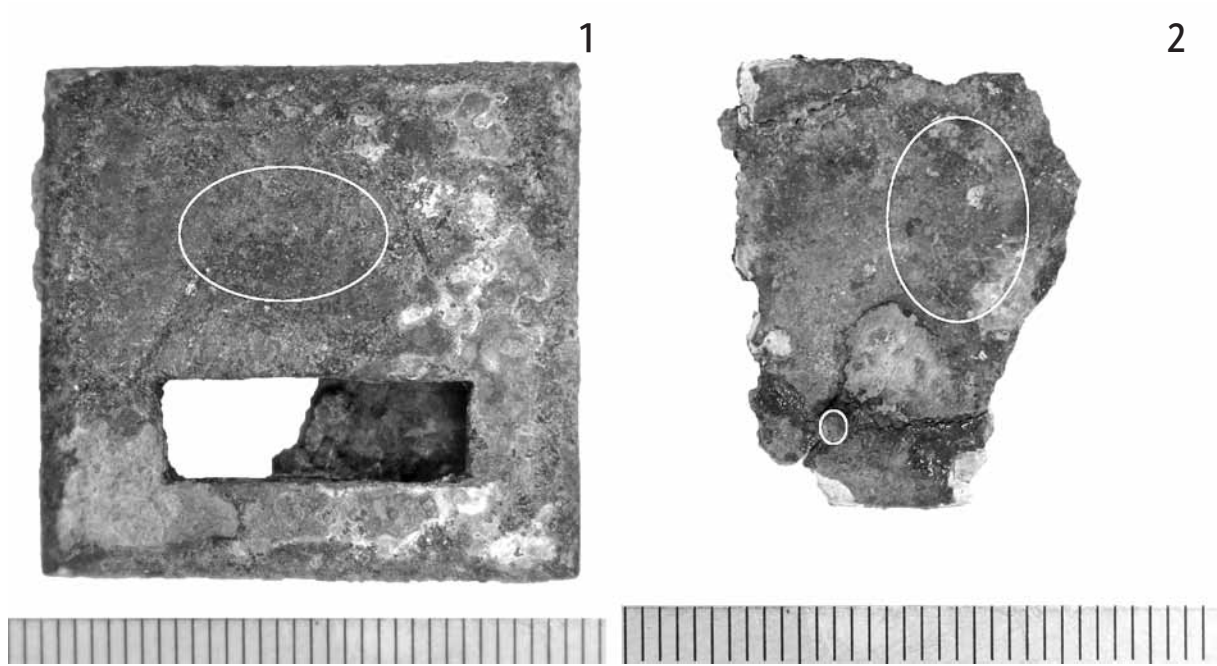


第274図 b層の電子顕微鏡写真(X線分析位置)と黄白色付着物の赤外線分光スペクトル図

1a. b層表面(黄白色付着物) 1b. b層(黒色部) 2a. b層断面 2b. b層断面の拡大

3. b層表面の黄白色付着物の赤外線分光分析

(数字は主な吸収、縦軸が透過率(%R)、横軸が波数(Wavenumber (cm<sup>-1</sup>); カイザー)



第275図 金属部の蛍光X線分析位置

1. 表金具表面 2. 鋌付け根破断面(小楕円)と裏金具内面



## 第9章 総括

### 第1節 調査の成果

本報告書で報告する南玉埋掘遺跡において調査した遺構は、以下のとおりである。

近世の遺構は、復旧溝群50ヶ所、復旧溝1ヶ所、畠29ヶ所、土坑19基、溝11条、井戸2基、集石1基、道2条、旧河道1条である。中世以降の遺構は、掘立柱建物1棟、土坑43基、ピット6基、井戸7基、溝24条、水田3を確認した。平安時代の遺構は、竪穴住居13軒、土坑36基、ピット17基、溝1条、水田4、古墳時代の遺構は、竪穴住居28軒、土坑35基、ピット36基、溝11条、粘土採掘坑1基、土器集積2ヶ所である。遺構確認面は調査区によって2～5面と異なることから遺構確認面一覧表を作成した。第1章第5節(6頁)を参照されたい。

本遺跡は、国道354号玉村伊勢崎バイパス建設事業に関連して発掘調査が実施され、他の遺跡と隣接した位置にある。本遺跡の東側に下之宮高俣遺跡、下之宮中沖遺跡、本遺跡から西側に南玉二丁町遺跡、福島味噌袋遺跡がそれぞれ所在する。南玉二丁町遺跡では古墳周溝の他、古墳時代から平安時代の竪穴住居、平安時代や中世の掘立柱建物、下之宮高俣遺跡では中世館などが調査された。下之宮高俣遺跡、下之宮中沖遺跡、南玉二丁町遺跡、福島味噌袋遺跡でも近世の復旧溝が調査されている。

平成24年度に実施された本遺跡の発掘調査によって、古墳時代から平安時代にかけて集落が継続的に営まれるとともに、水田などによる生産域について確認することができた。調査区内で確認した微高地に竪穴住居が密集した状況であり、3区東端と南側の拡張部、4区西端の範囲までが集落の形成範囲であったと考えられる。3区及び4区で確認した竪穴住居群から約300m北西に位置する5区西端も微高地となり、平安時代の竪穴住居を1軒確認した。5区南側に位置する1区は、5区に比べ標高が低くなる。この低地部において水田が確認されたことから、5区で確認した竪穴住居の生産域であった可能性があり、5区北西隅の微高地からさらに北西方向にか

けて竪穴住居が展開されると想定される。

3・4区及び5区で確認された竪穴住居群の周辺では、残存状況は良好ではないものの、As-B下層から水田跡とみられる畦などの水田施設の痕跡が広範囲に認められた。この水田跡は、平安時代の竪穴住居群に隣接することから関連が想定される。2区では中世以降の水田が確認され、本遺跡の周辺地域では、平安時代から中世以降まで継続的に水田が営まれていたようである。中世以降の遺構では、1区で掘立柱建物1棟を確認したが、中世の水田が2区で確認されたことから、掘立柱建物を含め周辺に中世の生活域が存在すると考えられる。近世の遺構は、本遺跡から北側を流れる利根川を起因とする度重なる洪水など自然災害に屈することなく、農地を復旧し復興するため人々によって整然と掘られた復旧溝群を1区から5区の調査区で確認した。また、天明三(1783)年の浅間山噴火によって降下した軽石に覆われた畠の他、天明三(1783)年前後とみられる畠を確認した。さらに、天明三(1783)年に発生した泥流によって埋没した矢川の旧河道を2区と3区で確認することができた。

出土した遺物のうち、縄文土器5点、弥生土器1点、縄文時代から中近世の礫石器及び石製品45点、土師器・須恵器など468点(弥生土器を含む)、中近世から近現代の陶磁器類160点、金属類など46点、木製品63点、種実7点を本報告書で掲載した。遺物の出土位置や特徴など詳細な記録については、出土遺物観察表(第17表381～410頁)を参照されたい。

本報告書で非掲載となった遺物は、縄文土器11点、弥生土器6点、土師器11,851点(大型製品9,283、中型製品198、小型製品2,337、不明33)、須恵器1,023点(大型製品394、小型製品629)、灰釉陶器112点(大型製品31、小型製品81)である。土師器と須恵器については、土師器86%、須恵器84%が3区からの出土であり、竪穴住居など確認できた遺構数と同じく、圧倒的に3区からの出土が多い。石器については、打製石斧5点、二次加工ある剥片5点、棒状礫20点、磨石2点、砥石5点、石製品3点、板碑2点、石盤1点、石臼1点、火打石1点であ

る。剥片については包含層からの出土であるが、2区では玉髓1点、3区では黒色頁岩20点、硬質泥岩1点、黒曜石1点、玉髓1点、細粒輝石安山岩8点、粗粒輝石安山岩2点、変質安山岩1点、輝緑凝灰岩1点、変質玄武岩1点、4区では黒色頁岩1点であった。木製品は加工された板材を中心に2区旧河道から90点、種実1点、金属製品3点が出土した。

本遺跡では、縄文時代と弥生時代の遺物は出土したが、当該時期の遺構については確認することができず、出土遺物は、数量が僅かであることから他地域からの流入と考えられる。本遺跡の周辺地域には、縄文時代から弥生時代の遺構が存在する可能性があり、今後の調査が期待される。

本章では以下のとおり、矢川の旧河道、旧河道から出土した下駄、古墳時代から平安時代の竪穴住居の時期別変遷と分布状況、本遺跡から出土した銅製巡方について考察を行い、まとめたい。

## 第2節 南玉埋堀遺跡で確認した矢川の旧河道について

### 1. 矢川の旧河道について

南玉埋堀遺跡の2区と3区で近世の遺構確認面である第1面から、矢川の旧河道を発見した。旧河道は天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う天明泥流により埋没しており、2区では右岸、3区では左岸の調査を実施した。

現在の矢川は、佐波郡玉村町飯倉の県道142号付近から流路が明らかとなり、新玉村ゴルフ場付近へ向かう農業用水路である。矢川の流域は住宅が建ち並び、流路は護岸などの整備が進み、自然河川としての面影は少ない。

近世の古記録は、天明泥流が利根川から矢川に流れ込み、周辺地域に甚大な被害を及ぼしたことを伝えている。この地域の天明泥流による被害は、萩原進氏によって資料の集成が行われている<sup>註1)</sup>。

矢川の旧河道は、これまでに本遺跡の南東に位置する沖遺跡(第7図45・第3表45)の発掘調査で確認されている。また、利根添遺跡(第7図4・第3表4)、(第276図・第11表1)では、矢川左岸に築かれた土手が確認されて

いる。

矢川周辺の旧地形は、昭和22(1947)年9月にキャサリン台風の被害状況を撮影した米軍の航空写真により判読することができる。これをもとに、矢川の旧河道周辺の等高線図を作成した(第277図)。

過去に利根川から矢川が分岐したと推定した利根川左岸は、標高66～67m、幅約300～400mの範囲で等高線が密になり、急斜面を形成している。この斜面は、利根川の攻撃斜面と考えられる。本遺跡の周辺には、標高65～67mに半円形に広がる洪水堆積物の地形が認められる。

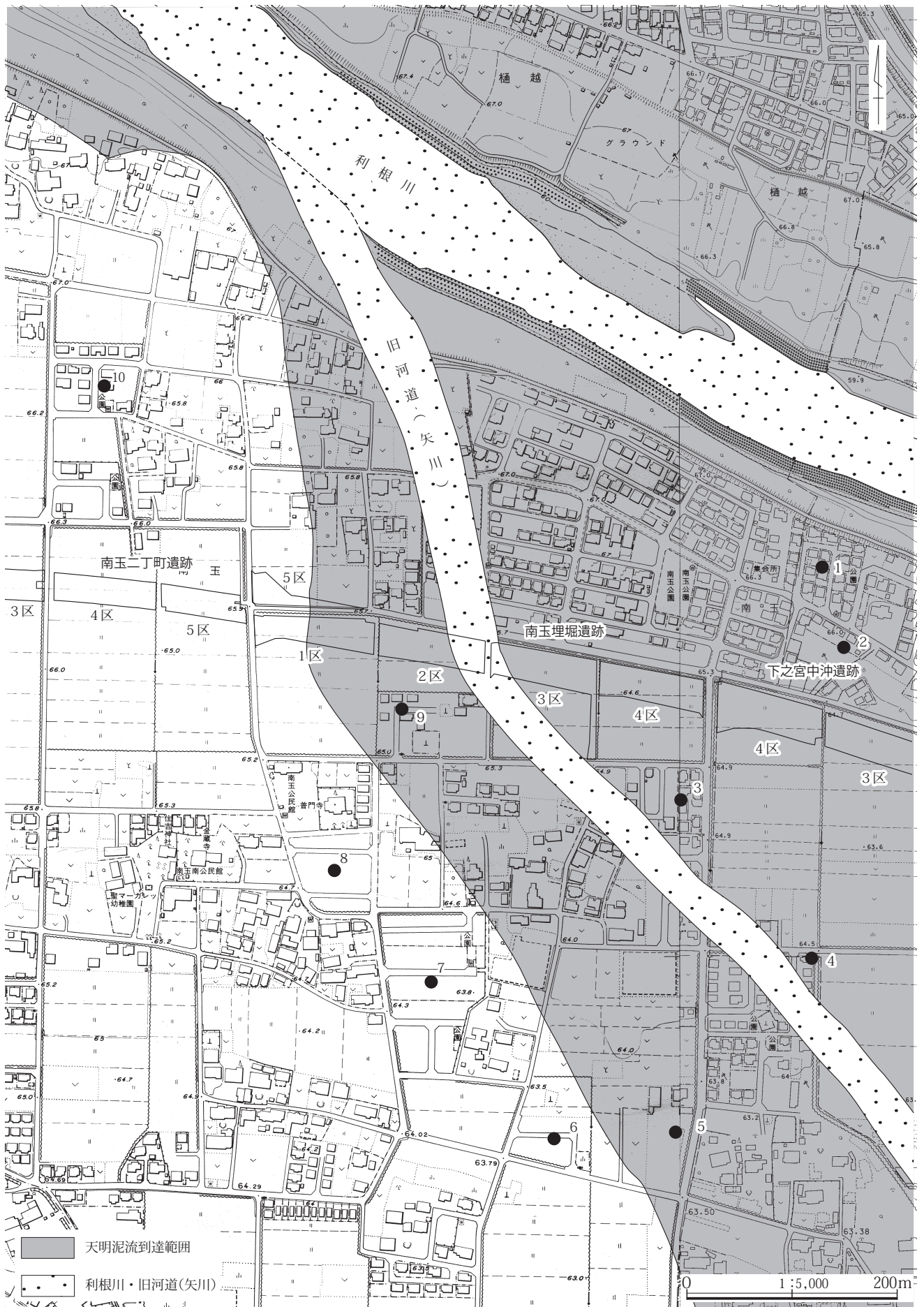
このことから過去に矢川が分岐した付近で、再び利根川が決壊し、キャサリン台風によって発生した洪水堆積物が矢川の旧河道を覆った。

原・中島(2001)は、玉村町の地形図や土地の利用、近世の諸記録、発掘調査の成果などをもとに埋没以前の矢川の景観復元を行い、当時の様相が明らかとなりつつある。さらに、天明泥流の到達範囲図の研究(関・中島2005)で、利根川右岸の矢川の旧流路が想定されている。これらの研究は、矢川の旧河道が本遺跡を通過することを示唆し、今回の発掘調査によって、2区から3区の範囲から矢川の旧河道が確認された。

本遺跡で確認した矢川の旧河道は、利根川の推定分岐点から約380m南東に位置する。調査によって確認できた矢川の旧河道の規模は、幅45.3m、深さ0.32～1.91mを測り、走行方向は、N-17°-Wである。利根川から分岐した矢川の旧河道は、これまでの周辺遺跡の発掘調査の結果と合わせると、2区と3区付近で南東方向に「く」の字形に屈曲していたと想定される(第276・278図)。また、3区南端付近を掠めながら、南東方向に向きを変えていたものと考えられる。

矢川の旧河道の屈曲については、旧河道の遺物出土状況からも窺える。2区の旧河道からは、木製品をはじめとする大量の遺物がまとまって出土した。遺物の出土層準は、天明泥流直下もしくは泥流以前であることが確実である。この地点には、大量の遺物を堰き止められるような遺構の他、堆積物を堰き止める可能性がある礫や流木などは認められない。このことから、出土した木製品などは、天明泥流に伴う水流によって集積した可能性がある。





第276図 旧河道と天明泥流到達範囲と周辺遺跡図(関・中島2005より作成。この地図の作成にあたっては玉村町長の下承を得て、同町発行の2,500分の1の地形図を使用して複製したものである。)

第11表 南玉埋堀遺跡で確認した旧河道の周辺に所在する遺跡(番号は第276図と一致する)

番号	遺跡名	概要	参考文献等
1	利根添遺跡	近世のAs-A下畠、土手などを調査。	玉村町教育委員会1998『利根添遺跡』
2	玉村町NO.204遺跡	畑跡(江戸)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.29
3	玉村町NO.205遺跡	畑跡・旧河川(江戸)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.29
4	玉村町NO.206遺跡	旧河川・畑(江戸)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.29
5	玉村町NO.174遺跡	畑跡(江戸)、平成元年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.28
6	玉村町NO.173遺跡	集落跡(奈良・平安)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.28
7	玉村町NO.172遺跡	集落跡・水田跡(平安)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.28
8	玉村町NO.171遺跡	集落跡・水田跡(平安)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.28
9	玉村町NO.41遺跡	集落跡(奈良・平安)、平成2年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.23
10	玉村町NO.166遺跡	集落跡(奈良・平安)、平成3年試掘調査	玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』,p.28

また、出土した木材や下駄の長軸方向は南北方向が卓越する。出土遺物の長軸方向と旧河道の走行方向は平行で、流れに直交する水流の影響を受けて集積したものと考えられる。また、出土遺物の集積は、旧河道が屈曲する手前の河道内の斜面際にあることから、河道内の水位と水流が急速に低下・減衰することによって一ヶ所に集積された可能性がある。

矢川の左岸にある3区の旧河道の埋没状況を示す土層断面図を示す(第33図)。旧河道は、天明三(1783)年の泥流堆積物でほぼ充填されている。3区の旧河道の壁面にはAs-Aが残存し、天明泥流はAs-Aが堆積した河道の斜面を大きく抉り取りながら堆積したものと考えられる(第33図C-C'第3層)。この様な河道の埋没状況から天明泥流の堆積時における浸食力の大きさが窺える。また、3区で確認した泥流堆積物の上位には、砂層が認められる。天明泥流以降、天明六(1786)年に発生した利根川の大洪水に伴い、矢川も氾濫を起こしていたことが古記録に残る(玉村町誌)。この古記録や堆積状況から判断すると、確認した砂層は、この洪水を起因とする堆積物の可能性が高い。

2区で確認した旧河道の埋没状況は、3区とは異なり、シルトや砂の互層が顕著である。2区では埋没土中に泥流堆積物が含まれないことから、天明泥流の堆積前にすでに埋没しており、当時の流路は2区の東端から3区西端を流れたと考えられる。

本遺跡の基本土層(第5図)は、第16層のAs-B及び第14・15層であるAs-B混土層の上層に砂層が認められ、これは中世から近世の洪水堆積物とみられる。

寛保二(1742)年八月一日(旧暦)に利根川で発生した洪水は、近世の記録に残された大洪水であり、南玉地

域の1帯も洪水によって埋め尽くされたとされる(萩原1949)。

中世以降の洪水堆積物は、矢川左岸の4区では約60～98cm、3区拡張部では110cm、3区94cmに達する堆積が認められる。さらに、矢川右岸の2区では76cm、1区では34cm、5区では約20cmの洪水堆積物が確認された。矢川を挟んだ両岸で洪水堆積物の厚さは非対称であり、これは左岸の標高が右岸に比べて低いため、より左岸側が洪水の影響を受けやすいためと考えられる。

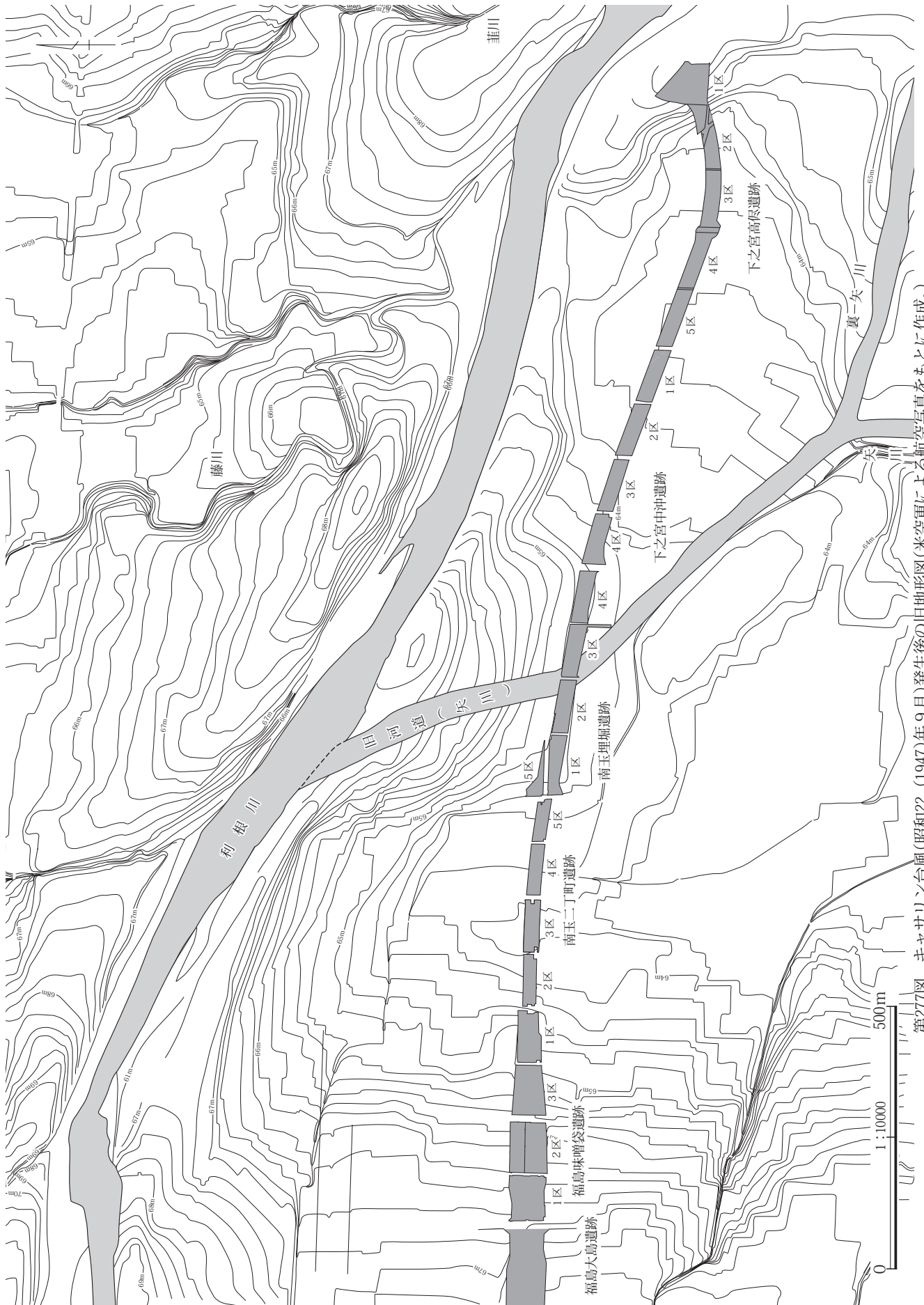
矢川の旧河道の記録は、『上野国郡村誌』の「上野國那波郡飯倉村」や「上野國那波郡川井村」にも流路の規模に関する記載が残されている。

川井村では「深処二尺、廣処6間」、飯倉村では「深処三尺或ハ壱尺巾8間」の記録が残る。烏川の合流付近の矢川の規模は、川井村で深さが約60cm、幅約10.9mである。飯倉村では深さが約30～90cm、幅約14.5mである。これらの地域は遺跡から南方に位置し、発掘調査で確認した矢川の旧河道と比べ規模がやや小さい。矢川は天明泥流による埋没後も明治時代初頭まで小河川として流れていたようである。

## 2. 遺跡周辺の天明泥流について

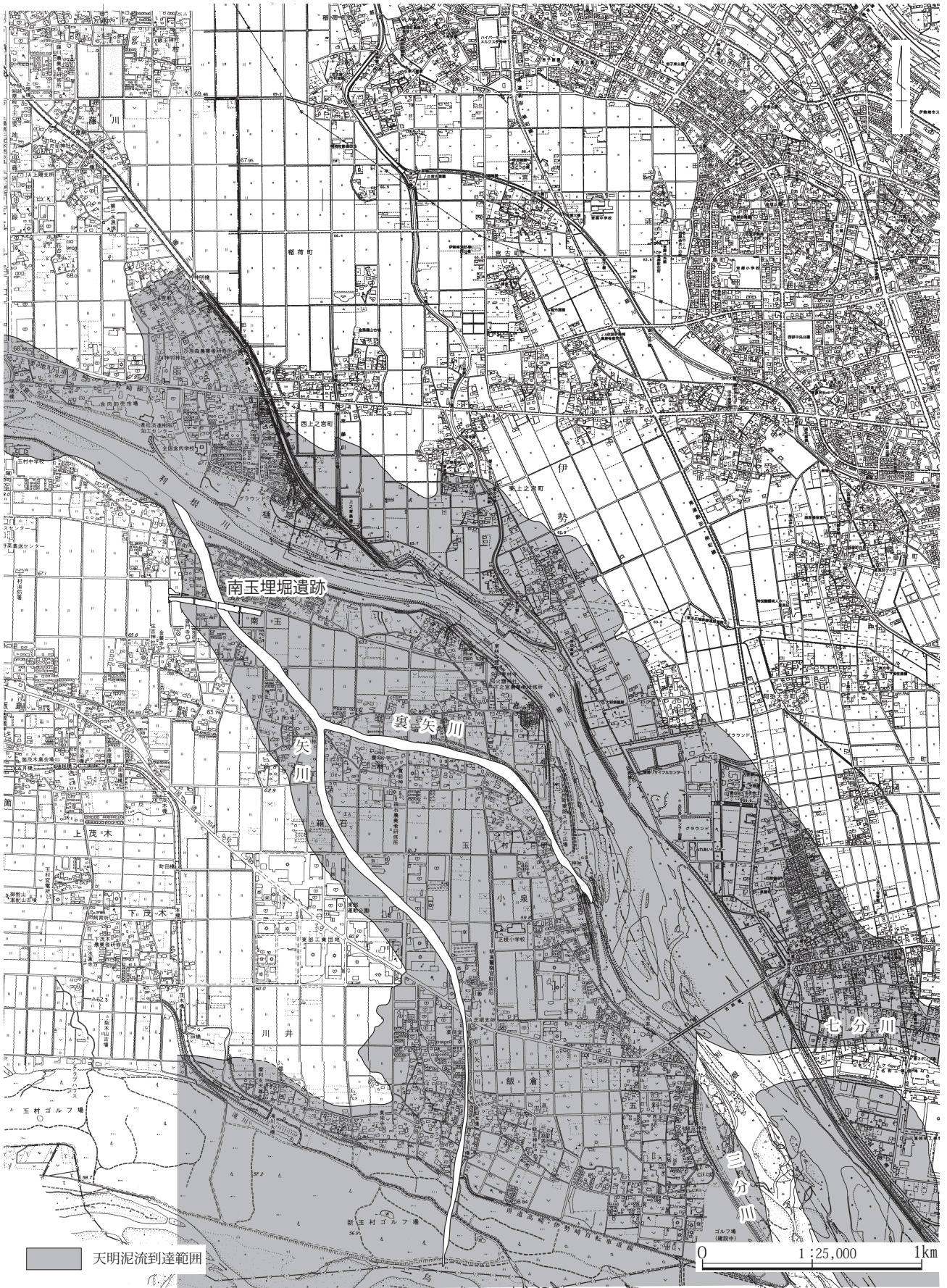
本遺跡の1～4区における近世の遺構確認面の断面図を示す(第279図)。1区西端と4区東端を比べると、標高差はほとんど認められない。近世の遺構確認面は、西側の1区より東側の4区が約40cmも低い。

遺跡の東側に位置する下之宮中沖遺跡4区(第276図)では、As-Aによって埋没した畠が確認され、遺構の標高は、約63.40mである。本遺跡4区東端の遺構確認面との比高差は、東側の下之宮中沖遺跡4区が約50cm低い。



第277図 キャサリン台風(昭和22(1947)年9月)発生後の旧地形図(米空軍による航空写真をもとに作成。)





第278図 天明泥流到達範囲図(関・中島2005より作成。この地図の作成にあたっては伊勢崎市長・玉村町長の下承を得て、同市・同町発行の10,000分の1の地形図を使用して複製したものである。)



さらに、下之宮中沖遺跡の東に位置する下之宮高俣遺跡は利根川に隣接し(第276図)、近世の遺構確認面は、標高約61.40～62.10mであった。下之宮高俣遺跡1区東部と本遺跡4区東端の標高差は、東の下之宮高俣遺跡側が約1mも低い。

本遺跡1区西側には、南玉二丁町遺跡が所在する(第276図)。本遺跡1区と隣接する南玉二丁町遺跡5区の近世の遺構確認面の標高は、約64.40～64.50mであり、本遺跡1区より約10～20cm高い。さらに西側の南玉二丁町遺跡1区の標高は、65.40～65.60mであった。南玉二丁町遺跡は、所々に微高地が認められ、緩やかに傾斜しながら西側にかけて標高が高い。

こうした遺跡周辺の「西高東低」の地形は、中世の洪水堆積物の層厚の変化にも共通し、天明泥流の堆積に影響を与えた環境の要素の一つである

関・中島(2005)は、本遺跡周辺の天明泥流の到達範囲を示した(第276・278図)。本遺跡の発掘調査は、天明泥流が4区東端から確認され、As-Aの直上に約20cmの層厚を確認した。また、3区北壁東寄りの3号復旧溝群でも天明泥流を確認した。3区西端の矢川の旧河道を埋没させた泥流堆積物は、3区及び東側の4区に達していたことは確実であり、西側の1区にも堆積した可能性がある。

本遺跡の東に位置する下之宮中沖遺跡や下之宮高俣遺跡の発掘調査では、天明泥流を埋め込んだ復旧溝を確認した。このことから、本遺跡の東側の周辺地域に天明泥流が到達していたことは明らかである。また、南玉二丁町遺跡では、天明泥流は確認できず、本遺跡の西側には天明泥流は到達していなかった。

下之宮高俣遺跡と南玉二丁町遺跡の標高を比べると、東西で約1.2mの標高差が認められる。このことから遺跡周辺の東西方向における天明泥流の堆積高度は、おおむねこの付近と考えることができる。

しかし、本遺跡の1区や4区では、その後の圃場整備によって表土下が削平されたため、As-Aや天明泥流を確認することはできなかった。また、下之宮中沖遺跡や下之宮高俣遺跡でも、同様の理由で標高が低い場所でも天明泥流が確認できなかった。

### 3 . 矢川の起源について

今回発見された旧河道を形成した矢川は、何時から当

地を流れていたのか、天明泥流以前のいつ頃まで遡るか、明らかではない。本遺跡の2区では中世の水田を確認し、矢川は水田に隣接して流れていたと考えられる。また、3区では、As-B混土層の下層から平安時代の水田を確認した。水田の西部は矢川によって浸食されているので、平安時代の12世紀以降には矢川が存在していたと考えられる。

これまで矢川は、現在の利根川流路から一時的に利根川が分岐して形成されたと考えられてきた。しかし、前橋台地を刻む藤川や端気川の流路は、利根川が現在の流路に移る以前に形成された榛名山南東山麓を起源とする河川系が起源と考えられている。矢川の流路はこれに調和的であるため、過去に前橋台地を刻んだ水系の地形が矢川の流路に影響を与えていた可能性がある。

中世に流路を変更した利根川によってこれらの河川が分断され、再度矢川の流路が形成された可能性については、第2章で指摘した。

等高線図(第277図)をみると、利根川と矢川に分岐点付近の利根川左岸には、南北方向の直線状に等高線が密になる地形が認められる。これは、前橋台地上の微高地の西縁に相当する斜面で、矢川の旧河道の走行方向の延長線上に位置している。

このような等高線図の判読による矢川流路の解析は、現時点で現地調査や試掘などによる堆積物の存在が未発見のため仮説の域に留まる。明確な証拠は、今後の発掘調査などでの検証を待たねばならない。この旧地形に現れた場所が、矢川の旧河道の痕跡の可能性について、また矢川の古流路や形成過程について、今後も検討し、矢川の全体像をさらに解明していきたいと考えている。

#### 参考・引用文献

- 萩原進1949『寛保洪水記録』, p.43
- 群馬県1990『群馬県史』通史編1 原始古代, pp.110-129
- 玉村町1992『玉村町誌』通史編上巻, pp.681-703
- 玉村町教育委員会1992『玉村町の遺跡』—町内遺跡詳細分布調査報告書—, p.54
- 中島直樹1999「確認された旧河川について」玉村町教育委員会『沖遺跡』, pp.14-17
- 関俊明・中島直樹2005「玉村町における天明泥流到達範囲」—天明三年浅間災害に関する地域史的研究—(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要23』, pp.85-98
- 原真・中島直樹2001「埋没河川の景観復元」—群馬県佐波郡玉村町所在旧矢川を中心にして—(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要19』, pp.45-66
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『年報31』, pp.25-28
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『年報32』, pp.41-42





第279図 南玉埋堀遺跡1～5区全体図(近世)と遺構確認面の断面図

### 第3節 矢川の旧河道から出土した 下駄について

南玉埋堀遺跡では、2区と3区で矢川の旧河道を確認した。矢川の旧河道は、天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う利根川からの泥流堆積物によって埋没した。この旧河道で2区の旧河道からは、木製品をはじめとする大量の遺物がまとまって出土した。第9章第2節で述べたが、木製品などの遺物は、天明泥流に伴う水流によって集積したと考えられる。出土遺物については、近世の陶磁器、煙管、銭貨、木製品、種実を図示した(第34～46図・PL. 100～113)。発掘調査では、湧水によって旧河道の川床まで掘削することはできなかったが、この湧水によって木製品の数々は遺存状況が良好に保たれていた。

出土した木製品は、非掲載遺物を含め129点にのぼる(第280図)。出土遺物の大半は加工された板材であるが、下駄の他に赤漆や黒漆が塗られた椀、桶、枡、曲物、樽や桶の蓋、杭が出土している。本節では、出土した木製品のうち下駄について考察を行う。

群馬県内において、近世の下駄の出土が顕著に認められる遺跡は、長野原町川原畑に所在する東宮遺跡が挙げられよう。東宮遺跡は、本遺跡と同じく天明三(1783)年に発生した吾妻川からの泥流によって甚大な被害を受けたが、泥流堆積物の下から近世の遺構や遺物などが良好な状態で発見された遺跡である。この泥流堆積物によって埋没した屋敷跡から多数の木製品が出土し、下駄についても破片を含め82点が出土している。東宮遺跡出土の下駄については、飯島義雄氏によって下駄の歯の形成のあり方、台の平面形状、歯と鼻緒を通し固定する孔の位置関係などから形態分類が行われている。本遺跡では、東宮遺跡と比較し出土点数が少ないものの、残存状況が良好な下駄が出土している。東宮遺跡の整理作業で行われた分類方法をもとに、本遺跡出土の下駄について分類した。

本遺跡から出土した下駄は、台や歯など破片を含めて14点を数える。整理作業によって、左右対の組み合わせの検討を試みたが、確認することができなかった。

本遺跡出土の下駄は、一木下駄と差歯下駄の2種類に

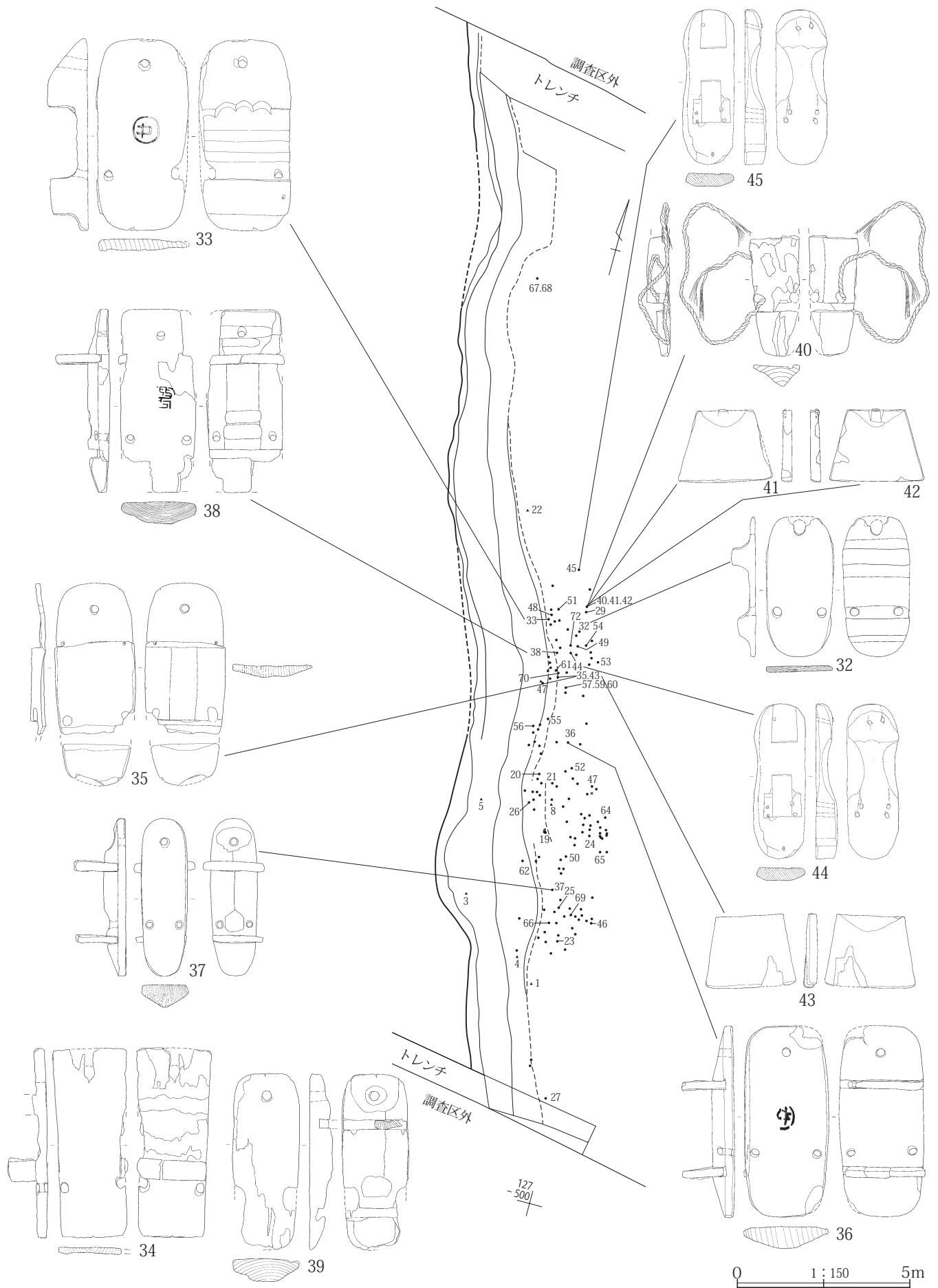
大別することができる。それぞれの特徴についてまとめたものが第12表である。一木下駄とは、「連歯下駄」とも呼ばれ、一つの木から下駄の歯と台をつくり出すものである。本遺跡からは、5点の一木下駄が出土している。下駄の台の平面形状については、隅丸長方形が2点、長方形1点、後部が窄まる紡錘形が2点である。下駄には、足をかけるための紐である緒を通すために前部1ヶ所と後部2ヶ所の孔をそれぞれ穿つ。前部1ヶ所の孔の穿つ方向は、ほぼ垂直方向と内側に傾斜する2種類に分かれる。後部2ヶ所にある孔の穿つ方向については、垂直方向または後部端となる外側に傾斜している。後部2ヶ所の孔を穿つ位置については、隅丸長方形は後歯の前、長方形については後歯の後ろであった。後部が窄まる紡錘形については、後歯の中に位置していた。

一木下駄の前後の歯間の特徴については、短軸方向の横断面の形状をみると中央部が厚く、両端部にかけて薄くなる三角形や台形を呈する下駄が2点であり、ほぼ平坦が3点である。長軸方向の縦断面をみると平坦が2点、曲線状となる五連の弧状と一連の弧状が3点であった。

下駄の歯と台をそれぞれ別の素材で組み合わせてつくる「差歯下駄」は6点であり、歯のみ3点が出土した。本遺跡では、一木下駄に比べ差歯下駄の出土点数がわずかに多い。台と前後の歯が残存する下駄は2点、台と前部の歯が残存する下駄は1点、台のみの下駄が3点であった。

差歯下駄の台の平面形状については、後部が窄まる紡錘形4点、隅丸長方形1点、長方形1点である。前部1ヶ所の孔の穿つ方向については、垂直4点、内側に傾斜1点、台前部を遺失したため不明1点である。後部2ヶ所の孔を穿つ方向については、垂直またはやや内側に傾斜する。後部2ヶ所の孔を穿つ位置については、すべて後歯の前であった。

差歯下駄の前後の歯間の特徴については、短軸方向の横断面の形状をみると中央部が厚く、両端部にかけて薄くなる三角形が2点、三角形の頂部が欠損した可能性もあるが台形が3点である。長軸方向の縦断面をみると一部欠損が認められるが平坦状が6点である。平坦状の6点のうち1点については、後歯付近に二連弧状が認められる。後部が窄まる紡錘形の差歯下駄1点については、後部2ヶ所の孔のうち1ヶ所に鼻緒紐が通された状態で出土した。また、後部が窄まる紡錘形の連歯下駄2点に



第280図 旧河道の下駄出土状況(番号は第36～41図と一致する。)

第9章 総括

第12表 旧河道から出土した下駄一覧表

挿図番号	台と歯の形成	台の平面形状	台の最大幅の位置	後部2ヶ所の孔の位置	前と後の歯間の特徴	前部1ヶ所の孔と後部2ヶ所の孔を穿つ方向	備考
第36図32	一木造り	隅丸長方形	中央部	後ろ歯の前	横断面はほぼ平坦状	前部の孔はほぼ垂直、後部の孔はやや後方に傾斜	
第36図33	一木造り	隅丸長方形	ほぼ中央部	後ろ歯の前	縦断面は五連弧状、横断面はほぼ平坦状	前部の孔はやや前方、後部の孔はやや後方に傾斜	前歯の内側が三連弧状、台表面に焼き印「中」
第37図34	一木造り	長方形	台前面端部	後ろ歯の後	縦断面は一連弧状か、横断面はほぼ平坦状	前部と後部の孔はほぼ垂直	
第37図35	差歯	後部が窄まる紡錘形	中央部	後ろ歯の前	縦断面はほぼ平坦、横断面は中央部が厚く、左右端部が薄い台形状	前部の孔はほぼ垂直、後部の孔はやや前方に傾斜	
第38図36	差歯	隅丸長方形	中央部	後ろ歯の前	縦断面はほぼ平坦状、横断面は中央部が厚く、左右端部が薄い三角形状	前部の孔はほぼ垂直、後部の孔はやや前方に傾斜	台表面に焼き印「中」第281図下駄のX線写真
第38図37	差歯	後部が窄まる紡錘形	前端部	後ろ歯の前	縦断面はほぼ平坦状、横断面は中央部が厚く、左右端部にかけて薄い三角形状	前部と後部の孔はほぼ垂直	
第39図38	差歯	長方形	中央部	後ろ歯の前	縦断面はほぼ平坦だが後歯側に2連弧状、横断面は中央部が厚く、左右端部が薄い三角形状	前部と後部の孔はほぼ垂直	台表面に焼き印「壽」、鼻緒の紐残存
第39図39	差歯のみ	後部が窄まる紡錘形	中央部	後ろ歯の前	縦断面はほぼ平坦状、横断面は中央部が厚く、左右端部が薄い台形状	前部の孔はやや内側に傾斜	
第40図40	差歯	後部が窄まる紡錘形	中央部か	後ろ歯の前	断面は中央部が厚く、左右端部にかけて薄い三角形状	後部の孔はやや前方に傾斜	
第40図41	差歯のみ	—	—	—	—	—	台との接地面に楔残存
第40図42	差歯のみ	—	—	—	—	—	台との接地面に楔残存
第40図43	差歯のみ	—	—	—	—	—	楔の痕跡なし
第41図44	一木造り	後部が窄まる紡錘形	台前面端部	後ろ歯	縦断面は弧状、横断面は中央部が厚く、左右端部にかけて薄い三角形状	前部の孔はやや内側、後部の孔は垂直とやや後ろ側に傾斜	台上面の板が外れたか、下駄に類似する履物か
第41図45	一木造り	後部が窄まる紡錘形	台前面端部	後ろ歯	縦断面は弧状、横断面は中央部が厚く、左右端部にかけて薄い三角形状	前部の孔はやや内側、後部の孔は垂直とやや後ろ側に傾斜	台上面の板が外れたか、下駄に類似する履物か

については、足を乗せるための台部を別の板木と組み合わせた痕跡が認められる。この下駄の足裏との接触面の板については遺失しており、泥流によって外れたか、以前から外れていたかは不明である。

差歯下駄の台と歯を組み合わせる方法について、南玉埋堀遺跡から出土した下駄については二つの方法が認められる。まず、台の裏面に刻まれた2条の溝に歯をそのまま差し込み装着させる継ぎ手の技法となる「大入」である。釘などを用いる場合もあるが、東宮遺跡で出土した下駄の平板状の歯の装着方法については、溝と接着する歯の部分の木槌でたたいて圧縮した後に、歯を溝にはめ合わせ、装着した後に下駄に水分を含ませることによって木を膨張させて密着させる方法が推測されている(飯

島2012)。本遺跡から出土した差歯下駄の台と歯を観察すると、釘などを打ち込んだ痕跡は認められず、台から外れた歯について観察すると、台と歯が接着する側面には、台に刻んだ溝によって圧縮された痕が明瞭に残されていることから、東宮遺跡で出土した下駄と同じ装着方法が採用されたと考えられる。

差歯下駄の歯のみは、3点出土しているが、このうち2点については、上記の組み方ではない方法によって台と歯を装着した痕跡が認められた。本遺跡から出土した差歯下駄の歯(第40図41・42)を観察すると、下駄の台の裏面に刻んだ溝と接着する歯の中央部分の一カ所に長軸方向と同方向となる幅1.0～1.2cm、厚さ0.2cm程の小さな楔が確認できる。これは木材の柄と柄穴の組み方の一



つであり、下駄の歯である柄を溝の柄穴に打ち込むと、あらかじめ先端部分を残して打ち込んでおいた楔が台の溝に接することによって歯に楔が徐々に食い込み、歯の先端部が楔によって徐々に広がり、一度打ち込むと接着後には柄と柄穴が密着して抜けなくなる仕掛けである。これらの木材の組み方は、「地獄柄」などと呼ばれるものであり、東宮遺跡でも同じ装着方法による組み方でつくられた下駄が出土している。

歯と台が装着された状態で出土した差歯下駄については、歯と台を分解することができないものも含まれていた。歯の装着方法を確認することができないため、X線写真撮影によって差歯と台の接合方法や内部構造の観察を行った。X線写真撮影の結果、1点の差歯下駄(第38図36)は、台の溝中央部端に楔を置き、差歯を台に打ち込む構造であった(第281図)。差歯先端の切れ込みに楔を入れて台の溝に打ち込むのではなく、楔を溝の中に置く方法を用いることによって差歯と台を接合させていることが明らかとなった。

前述のとおり、天明三(1783)年の浅間山噴火によって近隣の村々は壊滅し、同時に吾妻川で発生した泥流は、現在の長野原町、東吾妻町、渋川市など川沿いの村々の家屋や田畑、人や馬などを呑み込み、未曾有の被害や犠牲をもたらした。吾妻川の泥流は東流したのち渋川市で利根川と合流し、さらに前橋市田口町や本遺跡が所在する玉村町一帯でも泥流による被害を拡大させていた。

下駄をはじめとする木製品の数々は、旧河道からまわって出土した遺物である。これまでのところ、吾妻川や利根川沿いの村々から流失したものか、あるいは本遺

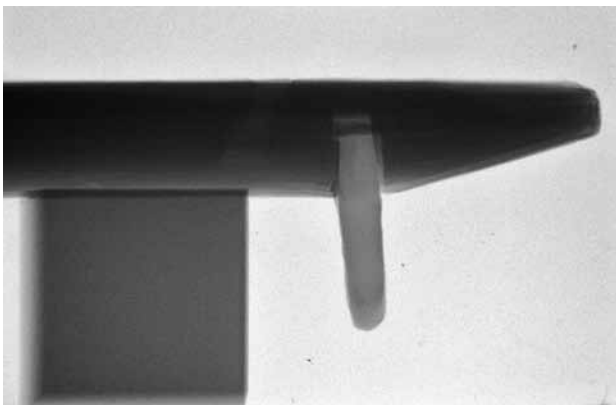
跡周辺で使われていたものかなどは不明である。2区及び3区で確認した矢川の調査では、礫や流木などによって泥流が堰き止められた痕跡はなく、矢川の流路が僅かに屈曲したため、泥流とともに水流によってこの地点に集積されたと考えられる。出土した木製品のうち、下駄や桶を観察すると、木の表面に焼印が施されたものが認められた。第282図1・2(第36図33・第38図36)の二点は、一木下駄と差歯下駄の違いがあるが、下駄の台の表面中央部には、○の中に「中」を記す㊦が記されていた。さらに、第282図3(第39図38)の台表面中央部の「壽」が記されていた。それぞれの下駄の焼印は、高島英之氏によって判読された。また、第282図4(第46図67)の桶側板には、○の中に「柳」が認められた。木製品に残るこれらの焼印は、所有者あるいは製作者の屋号などを示すと考えられる。出土遺物が、遺跡周辺地域の家屋などから流失したものであるとすると、焼印された文字を手掛かりに、玉村町域において流失した場所や所有者が判明する可能性もある。

屋号とは、近世において各家を識別するために用いられていたものである。群馬県内の屋号に関する資料は少ない。このうち玉村町大字板井では、㊦「マルナカ」を屋号とする家があることが調査されている(星野1992)。玉村町大字板井は、本遺跡から約3.5km北西の利根川沿いに位置する。板井村(玉村町大字板井)は、一部地域を天明泥流によって覆われ、未曾有の大災害の体験記が残されている(萩原1989)。2点の下駄に印された㊦の焼印だけでは、流失先や所有者を特定できない。しかしながら、天明泥流によって被害を受けた玉村町板井地域の家屋から本遺跡まで流された可能性がある。

天明三(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流による被害を受けた村々の屋号をもとに、遺跡から出土する遺物などの資料と比較し、出土遺物が流失した場所などについて明らかにしたいと考える。

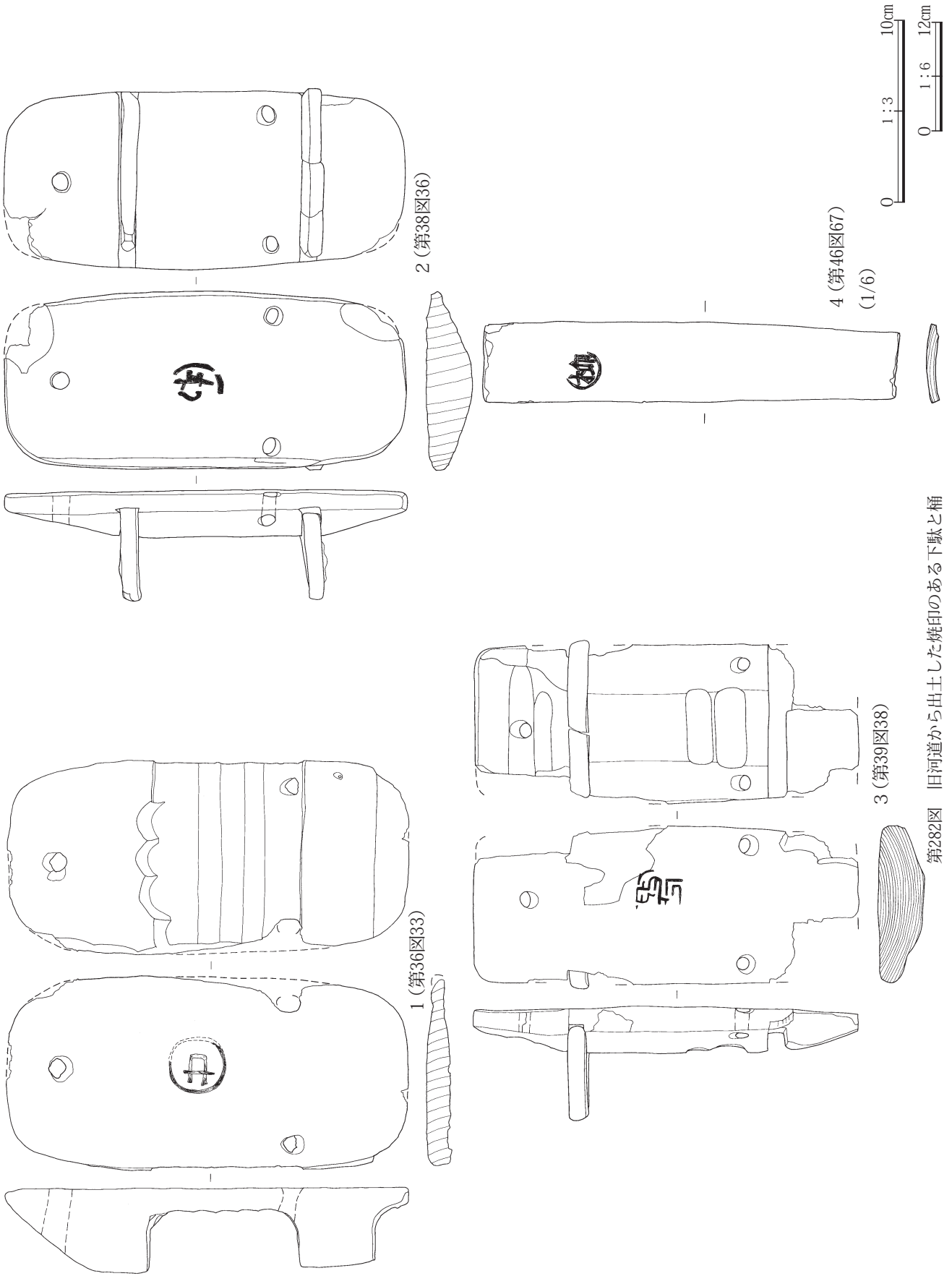
参考・引用文献

滝川村誌編纂委員会1984『滝川村誌』, pp.427-435  
 (財)文化財建造物保存技術協会1986『文化財建造物伝統技法集成—継手及び仕口』上, pp.17-27  
 萩原進1989『浅間山天明噴火資料集成Ⅲ記録編(二)』, 157 p  
 玉村町1992『玉村町誌』通史編上巻, pp.681-703  
 星野正幸1992『群馬県の屋号』, pp.26- (8)  
 飯島義雄2012「東宮遺跡出土の下駄」(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『東宮遺跡(2)』—遺物編一, pp.393-406  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『自然災害と考古学』, pp.147-184



第281図 下駄のX線写真(第38図36)





第282図 旧河道から出土した焼印のある下駄と桶

## 第4節 竪穴住居の時代別変遷と分布状況について

南玉埋堀遺跡では、3～5区において41軒の竪穴住居を調査した。竪穴住居の時期別の推移を表したものが第13表である。竪穴住居の時期判定については、床面直上やカマド焼面などから出土し、竪穴住居に帰属すると考えられる遺物の他、重複する遺構との関係などを考慮した。

出土遺物がなく、時期を特定できない竪穴住居もあるが、本遺跡で確認した古墳時代の竪穴住居は前期から後期まで28軒、平安時代13軒によって構成される。竪穴住居の時期別構成比率は以下のとおりである。6世紀に比定される竪穴住居が22軒であり、古墳時代後期や後半とした4軒の竪穴住居を含めると26軒と最も多く、次いで8世紀及び9世紀に比定される竪穴住居がそれぞれ5軒であった。さらに、10世紀が3軒、古墳時代初頭1軒、5世紀前半1軒と続き、古墳時代後期の竪穴住居軒数が全体の63%を占め、8世紀と9世紀がそれぞれ12%、10世紀が7%となった。7世紀代の竪穴住居については本遺跡の調査区内では1軒も確認されなかった。本遺跡の竪穴住居の確認件数は41軒であり、6世紀前半が12軒と最も多く、6世紀中頃や後半から減少に転じ、7世紀代の竪穴住居はなく、8世紀から10世紀まで増減が少なく8世紀第4四半期や9世紀第4四半期に微増するがほぼ同軒数で推移する傾向が認められた。

以下、各時期別の特徴を記す。

### 1. 古墳時代前期から中期の竪穴住居について

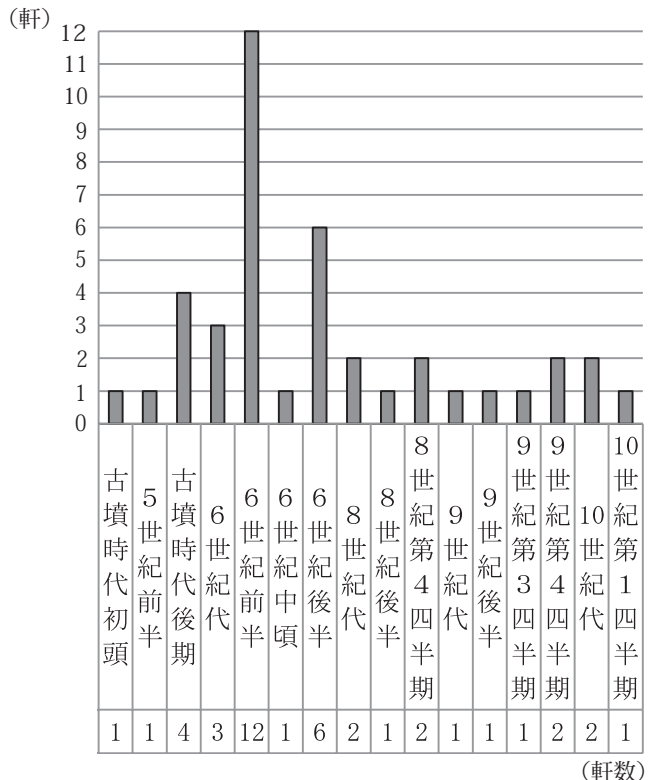
本遺跡で確認された古墳時代前期から中期の竪穴住居は2軒であり、すべて3区で確認した(第283図)。古墳時代初頭は3区19号竪穴住居、中期は3区38号竪穴住居である。古墳時代初頭から竪穴住居が出現し、6世紀を中心として集落が形成されていたと考えられる。なお、3区38号竪穴住居については、3区南側の拡張部のほぼ中央部に位置し、調査区が狭いため一部のみの調査となった。

当該時期の竪穴住居の軒数は、6世紀代に比べ2軒と少ないが、確認状況から判断し3区東側の微高地や南側の周辺地域において古墳時代初頭から竪穴住居が点在していたと考えられる。3区東端の微高地に比べ、3区拡張部北半部の標高は約50cm、南半部は約10～30cm低い。3区拡張部北半部の低地部には、5世紀前半に比定される2号土器集積が確認され、土師器高杯が多量に出土していることから、祭祀跡の可能性もある。3区で確認した5世紀前半の竪穴住居は1軒のみであったが、周辺の発掘調査によって5世紀代の竪穴住居がさらに確認される可能性が高いと考えられる。

### 2. 6世紀代の竪穴住居について

6世紀代の竪穴住居の分布状況は、古墳時代初頭や古墳時代中期、古墳時代後期となる6世紀前半から後半まで、すべて3区東端の微高地を中心として、南側の拡張部南端に至る広範囲に分布し、安定した集落が微高地に形成されたと考えられる(第284図)。時代別にみると6世紀前半が12軒と全ての時期と比べても突出した軒数である。6世紀前半以降の3区5号竪穴住居と6世紀前半以前の3区36号竪穴住居については、時期を特定できなかったため、6世紀前半に含めた。また、古墳時代後半の3区31号竪穴住居についても古墳時代後期に含めた。

第13表 竪穴住居の時期別軒数



他遺構との重複や調査区域外に広がるため全体の規模が不明な竪穴住居もあるが、床面積が確認できた6世紀前半の竪穴住居は6軒である。床面積は9.12～22.57㎡を測り、平均値は16.57㎡であった。他の時期と比べても3区17号竪穴住居が最も小規模であり、3区12号竪穴住居の規模が最も大きい。6世紀後半の竪穴住居で床面積が確認できたのは4軒であり、10.74～22.29㎡を測り、平均値は16.43㎡である。古墳時代初頭の3区19号竪穴住居は17.06㎡、6世紀代の3区18号竪穴住居は16.55㎡であることから、前期や後期の竪穴住居と比較し、大小の差は認められるものの、約16㎡前後の小～中規模で概ね推移していたと想定される。竪穴住居の分布状況から集落の様相を呈するが、床面積が30～40㎡程の大規模となるような竪穴住居については、今回の発掘調査では確認することができなかった。

竪穴住居の内部施設のうち、カマドの設置場所については、6世紀前半の3軒が不明であったが、東壁に付設と東壁に想定される竪穴住居をあわせると7軒であり、過半数以上が東壁となった。3区12号竪穴住居では、カマドを北壁に付設し、3区5号竪穴住居では炉が確認された。6世紀後半では、1軒のカマドの位置が不明であり、東壁3軒、南壁1軒、北壁北東隅1軒であった。古墳時代後期の4軒については不明であるが、6世紀代の3軒と6世紀中頃の1軒は、それぞれ東壁に付設していた。6世紀代で確認できたカマドの付設位置については、北壁や南壁も認められるが、大半となる14軒が東壁であり、不明を除き82%が東壁であった。貯蔵穴が確認できた6世紀前半の竪穴住居は6軒である。4軒は、住居床面の南東隅に構築し、2軒はカマド右側で確認した。6世紀後半については、1軒が床面の南東隅、2軒がカマド右側に構築していた。3区24号竪穴住居の北隅では、貯蔵穴の可能性のあるピットが確認された。6世紀代の3区18号竪穴住居では、カマド右側で確認した。貯蔵穴が認められた竪穴住居は少ないが、6世紀代についてはカマド付近に限らず南東隅に構築する傾向が窺える。支柱穴が確認できた竪穴住居は、6世紀前半4軒、6世紀後半4軒であり、支柱穴の可能性のあるピットを持つ竪穴住居は1軒であった。6世紀中頃1軒、6世紀代1軒にもそれぞれ支柱穴が認められ、3区18号竪穴住居には支柱穴となるピット1基を確認した。また、3区6・

13・36号竪穴住居では、出入口に付設した梯子や壁際の何らかの構造部に関連すると考えられるピットを確認している。

### 3. 8世紀代の竪穴住居について

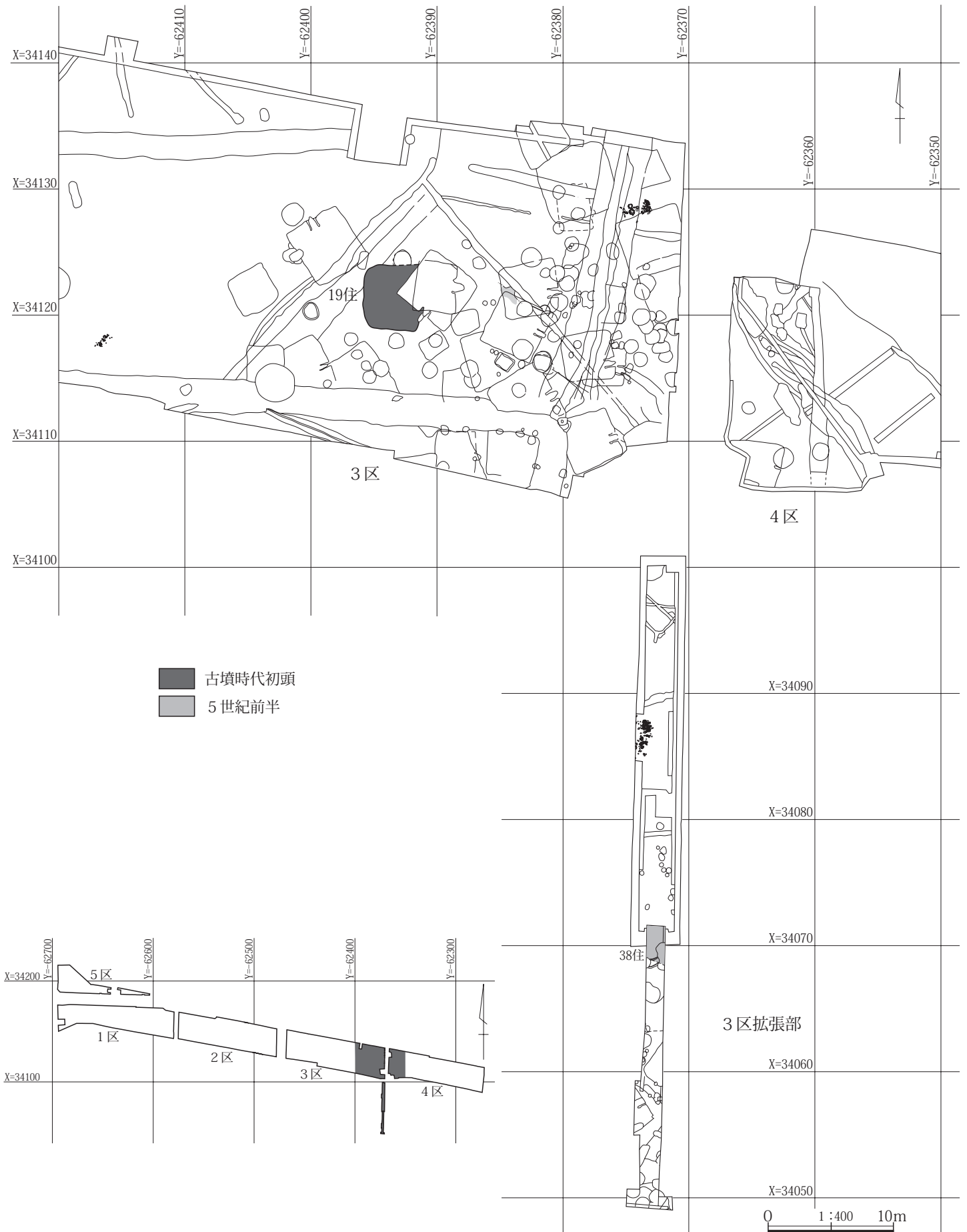
7世紀代の竪穴住居は1軒も確認することができなかったが、8世紀代の竪穴住居は、6世紀代に比べ急激に減少する。時期が特定できず8世紀代とした2軒の他、8世紀第4四半期2軒を含めて8世紀後半は3軒のみである。8世紀代の竪穴住居の分布状況については、確認できた竪穴住居の軒数は少ないが、3区東端の南寄りから拡張部南側、4区西端において確認し、3区32号竪穴住居や4区1・2号竪穴住居より北側では確認できなかった(第285図)。4区でも竪穴住居が僅かであるが確認されたことから、8世紀に入り竪穴住居は散在しながら、西側から南東側にかけて居住域が拡大するか、或いは人々の移動が想定される。

確認できた8世紀代の竪穴住居については、他の遺構との重複や調査区域外に広がるため床面積など全体の規模はすべて不明であった。内部施設のうちカマドについては、3区32号竪穴住居ではカマドのみの確認であり、4区1号竪穴住居については、東壁に付設したと考えられる。また、貯蔵穴や柱穴についても8世紀代の竪穴住居では確認することができなかった。

### 4. 9世紀代の竪穴住居について

9世紀代の竪穴住居については、8世紀代の竪穴住居と同数の5軒であった。時期が特定できず9世紀代とした1軒の他、9世紀第3四半期1軒と9世紀第4四半期2軒を含め9世紀後半が4軒であった。9世紀代の竪穴住居の分布状況については、3区東端の調査区内で3軒が重複し、9世紀第3四半期の竪穴住居が本遺跡西端の調査区である5区でも1軒確認された(第286図)。3区27号竪穴住居については、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期と考えられるが、本節では9世紀代に含めた。

他遺構との重複や調査区域外に広がるため全体の規模が不明なものが3軒であり、床面積が確認できた2軒は、3区11号竪穴住居14.39㎡、3区27号竪穴住居16.64㎡を測り、前述した古墳時代の竪穴住居と比較してもほぼ同規模である。

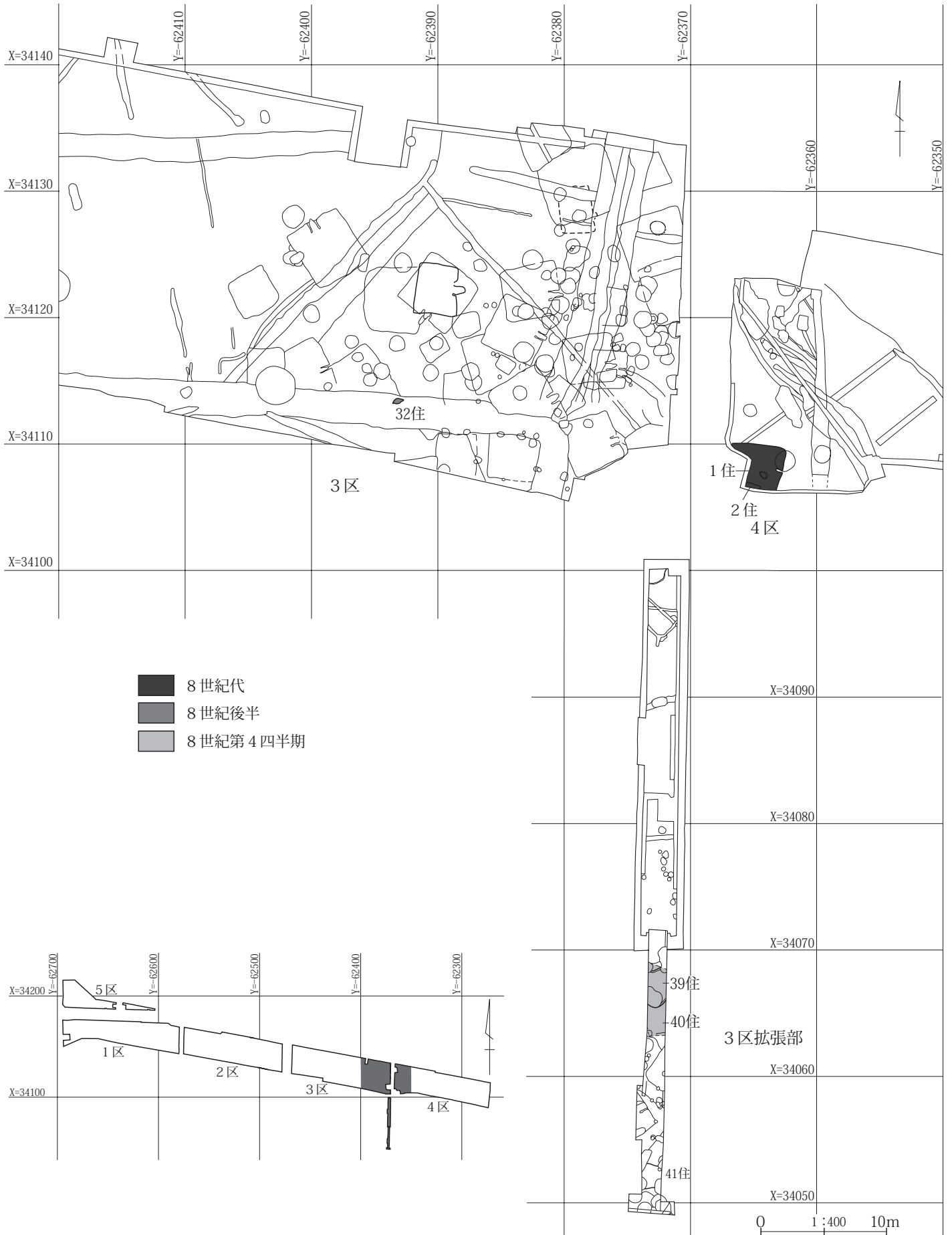


第283図 古墳時代初頭と5世紀前半の竪穴住居分布図



第284図 6世紀代の竪穴住居分布図





第285図 8世紀代の竪穴住居分布図

竪穴住居の内部施設のうちカマドの設置場所については、1軒が不明であるが、3軒が東壁に付設し、3区25号竪穴住居は東壁に付設したと想定される。貯蔵穴が確認できた竪穴住居は3軒であり、2軒がカマド右側に、1軒が住居床面の南東隅に構築していた。支柱穴については、明瞭な柱穴を確認することができなかった。3区25号竪穴住居で確認されたピットについては、出入口に付設した梯子など何らかの構造部の下部構造の可能性があると考えられる。

## 5. 10世紀代の竪穴住居について

10世紀代の竪穴住居については、他の時期と比べても僅か3軒と少ない。時期が特定できず10世紀代とした2軒の他、10世紀第1四半期1軒である。9世紀代の竪穴住居の分布状況については、3区東端の調査区内で2軒、3区拡張部南端で1軒確認された。8世紀代の竪穴住居と同じく、広範囲に散在する状況である(第287図)。

他遺構との重複や調査区域外に広がるため床面積など全体の規模はすべてが不明であった。

竪穴住居の内部施設のうちカマドの設置場所が確認できたのは、3区4号竪穴住居であり、東壁に付設していた。貯蔵穴や支柱穴についても確認することができず不明である。

## 6. まとめ

本遺跡で確認した古墳時代初頭から10世紀までの竪穴住居のおもな特徴は以下のとおりである。

竪穴住居の時期別構成について、古墳時代初頭から竪穴住居が出現し、古墳時代後期の6世紀前半が一時期としては最も多い。竪穴住居のほとんどが3区東端の微高地に密集し、住居群の様相を呈する。3区拡張部北側に位置する低地部で土器集積を確認したが、竪穴住居は1軒も確認できず、3区東端から約30m南に位置する拡張部南端から竪穴住居が現れはじめることから、調査区南側の周辺地域において、別の住居群が確認できる可能性がある。

竪穴住居数については、6世紀前半をピークとして6世紀後半から約半数に減少する。本遺跡では、7世紀になると竪穴住居は確認できず、8世紀代から竪穴住居が急激に減少していた。他の調査区を含め7世紀の竪穴住

居は1軒も確認できず、8世紀から9世紀代にかけて竪穴住居が減少した要因は明らかではない。調査区外など周辺に居住域を拡大させていたか、何らかの原因で南玉埋堀から他地域への流出した可能性もある。しかし、9世紀第4四半期から10世紀代に入ると微増ではあるが竪穴住居の軒数が増加に転じていたようである。

竪穴住居の規模については、重複などによって床面積を正確に把握できない竪穴住居が多く、10㎡以下の小規模も1軒認められたが、全体に16㎡前後の規模であった。

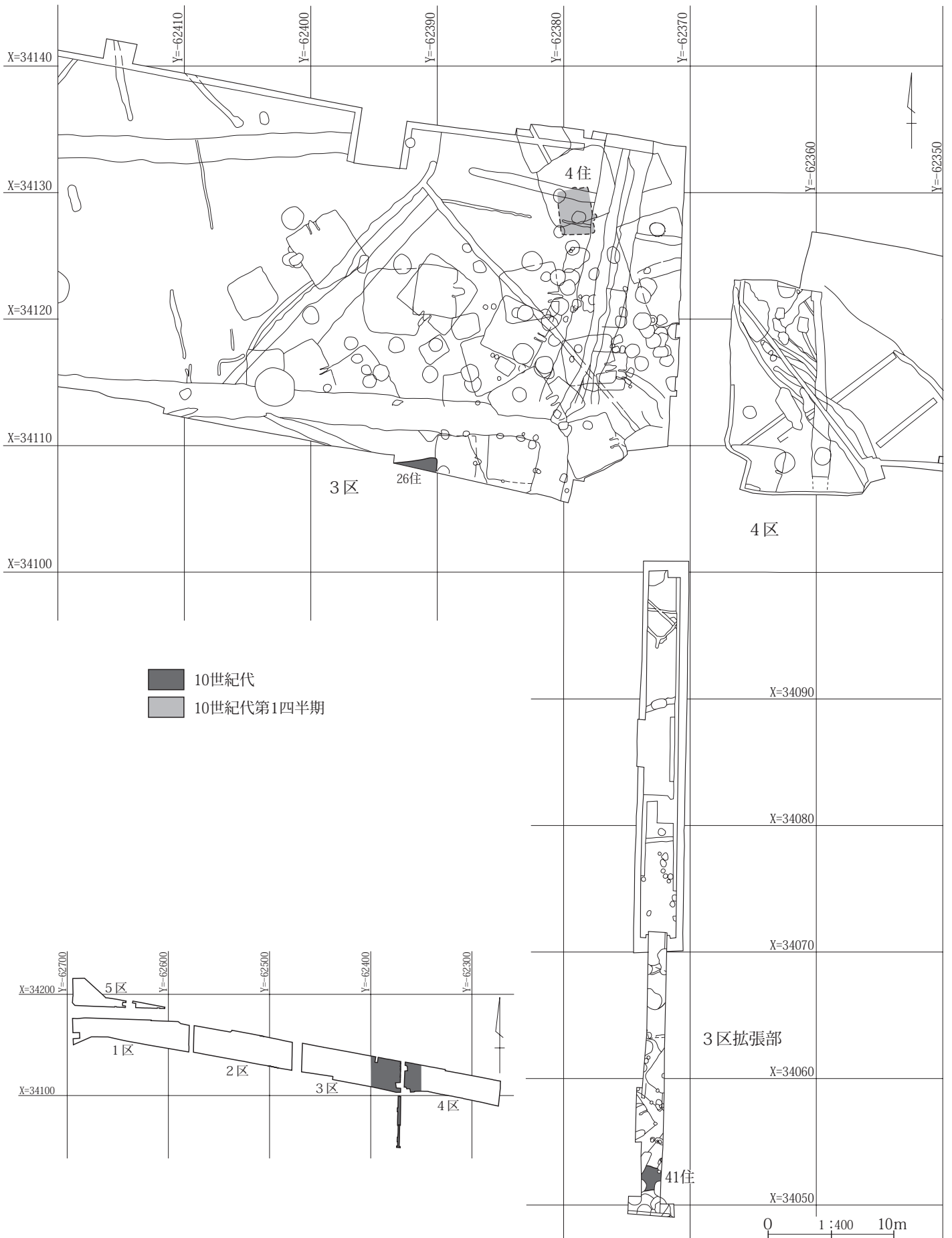
竪穴住居の内部施設では、カマド付設方向については、カマドが確認できた軒数が全体に少ないが、ほとんどが東壁面に付設されるなど規則性をもつことが分かる。西壁に付設した竪穴住居については1軒も認められず、南壁や北壁はわずか1軒ずつにすぎず、カマドの付設位置の多様性は認められない。6世紀後半では、カマドのほとんどが西壁や北壁など住居北半部に付設されていた。貯蔵穴については、6世紀や9世紀の竪穴住居の床面南東隅が7軒と多く、次いでカマド右側が5軒となった。支柱穴については8～10世紀の竪穴住居では確認できなかったが、出入口に梯子など付設するためのピットを確認することができた竪穴住居もあった。

3区拡張部北半部で確認された土器集積については祭祀跡の可能性もあり竪穴住居群との関連が想定される。さらに、3区や5区ではAs-B下層から水田が確認され、11世紀以降の竪穴住居などは確認されなかったが、3区では10世紀代の竪穴住居が3軒確認されていることから、この竪穴住居に関連する生産域と考えられる。

本遺跡の周辺では、国道354号玉村伊勢崎バイパス建設に伴う発掘調査によって、各遺跡で古墳時代から平安時代の竪穴住居、畠、水田などが調査されている。これらの遺構の分布状況をみると、東側に位置する下之宮中沖遺跡ではAs-Bで覆われた水田、下之宮高俣遺跡ではAs-Bで覆われた畠がそれぞれ確認されている。これらの生産域をもつ集落が遺跡周辺にあると考えられるが、下之宮高俣遺跡では古墳時代前期の竪穴住居は調査されたものの、平安時代の竪穴住居については下之宮高俣遺跡と下之宮中沖遺跡では確認できなかった。さらに東方の利根川左岸に所在する東上之宮遺跡では、古墳時代前期から平安時代(9世紀後半)の竪穴住居235軒、古墳時代後期以降の畠が調査されている。東上之宮遺跡では6世



第286図 9世紀代の竪穴住居分布図



第287図 10世紀代の竪穴住居分布図

紀代を中心として微高地上に集落が継続的に営まれ、周辺の低地部に生産域が想定されている。10世紀に入ると灰釉陶器が僅かに出土するものの竪穴住居は確認できず、本遺跡と同様に11世紀以降の竪穴住居もみられなくなっていた。

下之宮高俣遺跡1区の利根川沿い微高地上には古墳時代前期の竪穴住居が認められたが、本遺跡から東側の下之宮高俣遺跡までは高低差は認められるものの概ね低地部となり、河川による洪水など自然災害の影響も受けやすいことから、集落の中心部については本遺跡4区から西側の微高地上に展開し、低地部に生産域を持つと考えるのが妥当である。南玉二丁遺跡でも微高地に古墳時代から平安時代の竪穴住居が確認されるなど集落が微高地に点在する状況となる。生産域である水田がどの範囲まで広がるか、さらに竪穴住居は7世紀以降から減少し、11世紀以降は消失する要因についても本遺跡周辺地域の発掘調査の成果や今後の発掘調査の結果を基に、さらに検討したいと考える。

#### 参考・引用文献

- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『年報31』, pp.25-28  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『年報32』, pp.41-42  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『東上之宮遺跡』, 1070 p  
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『下之宮中沖遺跡』, 172 p

## 第5節 南玉埋堀遺跡から出土した

### 銅製巡方について

南玉埋堀遺跡3区27号竪穴住居の床面直上から、銅製巡方が出土した。3区27号竪穴住居は、調査区南端に位置し全体の形状や規模は不明ながら、他の出土遺物から判断し、9世紀第4四半期から10世紀第1四半期に帰属すると考えられる。3区27号竪穴住居の周辺では、古墳時代初頭から10世紀に至る竪穴住居が複数軒確認され、微高地に集落を形成していた。このうちの1軒から、銚帯に装飾されていた銅製巡方が出土したのである。

銚帯とは、金属や玉石の銚によって表面及び裏面を装飾した腰帯具である。方形の銚が巡方であり、表金具と裏金具によって革帯を挟み、鉾で固定する。巡方の下方には、長方形の孔をもつ。身分表象としての銚帯につい

ては、『養老衣服令制』から始まるとされ、五位以上は金銀装腰帯、六位以下は烏油腰帯を用いることが規定されていた(高島2002)。本遺跡では、9世紀後半に比定される3区11号竪穴住居の埋没土から、石製品ではあるが丸軛1点が出土している。

群馬県から出土した腰帯については、これまでに小林敏夫氏(小林1988)や飯田陽一氏(飯田2002)などによって集成が行われている。近年の集成では、135遺跡256点の腰帯が石田典子氏によって確認されている(石田2013)。現在も発掘調査及び整理作業が継続的に行われ、本遺跡を含め銅製巡方がさらに確認されていることから、石田氏の集成をもとに銅製の巡方のみ一覧表を作成した。銅製巡方については、馬具の可能性や詳細不明なものもあるが、本報告書において確認できた銅製の巡方は、本遺跡出土遺物を含め県内では、63点が出土している(第14表)。銅製巡方が出土した遺構については、古墳からの出土が30点と最も多く、次いで竪穴住居から26点、その他の遺構や遺構外が7点であった。このうち表金具と裏金具が結合して残存するものは20点、鍍金されたものが2点、黒漆が残存するものが2点であった。

本遺跡出土の銅製巡方には、内部に革帯とみられる有機物が残存していた。巡方内部に有機物が残存する事例は少なく、県内では本遺跡以外の銅製巡方の内部に有機物などが残存するものは確認できなかった。

有機物などが残存する他の金属製遺物の事例としては、県内では沼田市の奈良古墳群13号墳から出土した金銅製飾金具がある。出土した金銅製飾金具は、馬具の繫を飾るものとされ、飾金具の一部内部に皮革が多く残存しているが、この飾金具の内部に認められる皮革の種類については不明である。銅製巡方ではないものの、太田市(旧新田町)の境ヶ谷戸遺跡の2号掘立柱建物5ピットから出土した石製巡方には、裏面に金銅製の金具が付き、間に内容物が確認されている。しかしながら、この内容物の種類についても不明である。

本遺跡から出土した銅製巡方については、第8章第4節(346～351頁)のとおり、金属及び有機物の特定などを目的に、蛍光X線分析、有機物分析(赤外分光分析)、電子顕微鏡写真撮影を実施した。表金具及び裏金具、鉾については、蛍光X線分析を行った結果、銅、ヒ素、鉛などが検出されたことから銅合金であることが判明し



た。水銀や金は検出されず、銀は微量の検出であることから、本遺跡の銅製巡方は金銀装ではなく、黒漆も塗られていなかったと考えられる。銚帯については、金銀装腰帯や烏油腰帯以外の出土例も多いことなどから、本遺跡出土の銅製巡方もこの一つではないかと考えられる。

正倉院伝存の銚帯の構造分析によると、細長い革を袋状に仕立て、上下の縁に麻縫り紐を縫い込んで芯とし、裏面で縫い合わせている。革帯2条を後部の巡方部で継ぎ足した例が多い(松村2002)。この革帯については、馬革の可能性が高いと指摘され、他にモグラの皮とされるが判定不能な革帯や、紺玉帯は牛革や馬革ではなく小動物革ではないかとされる(出口他2006)。大阪府藤井寺市に所在する道明寺天満宮には、菅原道真の遺品である銀装革帯(国宝)が伝存する。この銀装革帯には、銅製鍍銀の巡方15個、鉸具、蛇尾が装着される。革帯の種類については不明とされるが、上下端部に縫りをかけた麻紐を芯にして皮革を包み、芯の部分と中央部分に糸で縫い合わせた痕跡が認められる。

本遺跡出土の銅製巡方を観察すると、内部の上側端部には縫りをかけた紐状物が確認でき、下側の縫り紐については欠損していたため確認できなかった。本遺跡出土の紐状物については、錆によって麻などの種類について特定することができなかったが、正倉院伝存の銚帯や道明寺天満宮に残る革帯などの類例から、上側端部の紐状物は、革帯の強度を保つために縫い込まれた縫り紐による芯であると考えられる(第289図1・2)。

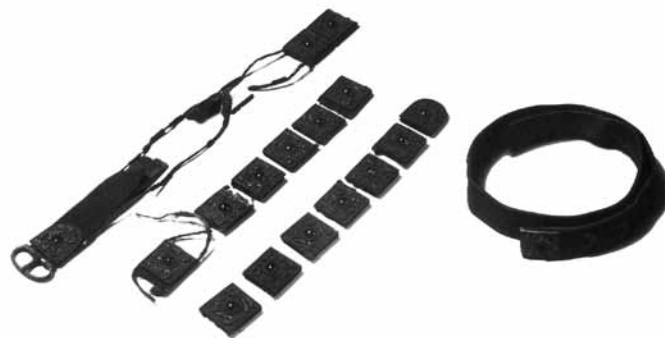
自然科学分析による銅製巡方の断面観察から、内部が3層に分かれていたことが判明しているが、a層は埋没過程の砂層であり、b・c層が革帯の本体と考えられる(第273図2)。上下の紐の芯を巻き込むように革帯が折

り曲げられ巡方内部の中央部分で繋がれていた。紐の芯を巻き込む箇所については欠損した状態であるが、折りたたまれたことによってb層外側がc層外側となっている(第273図2)。銅製巡方の裏側の中央部分で袋状となった革帯には、継ぎ目の痕が認められ、この皮革の端部に螺旋状に通された糸の一部が残存することから、纏り縫いのような方法で革帯を接合したとみられる(第289図2)。また、巡方を装着した皮革中央部分には、縦方向に革帯が分断したような状況も認められることから、長い革帯を繋ぎ合わせる箇所に銅製巡方を配置して挟み込み、鉸で留め革帯の継ぎ足していたようである。銅製巡方内部のb層内側を電子顕微鏡で観察すると、小さな窪みが複数箇所で見られ、毛穴の痕跡と考えられる。銅製巡方内部のc層外側の一部に認められる黒色部分については、革帯に塗られていた黒漆の可能性があり、全面に黒漆が塗られていた革帯であったと推量される。

本遺跡から出土した銅製巡方内部の残存物を分析し観察することによって、革帯の構造の一端について解明することができた。革帯の種類については、類例から牛革の他、馬革や鹿革などの皮革が想定されるが、今回の分析では有機物の残存状態が不良であったため、種類の特定には至らなかった。

銅製巡方が、竪穴住居内から単体で出土することはある。銅製巡方は表金具と裏金具の内部に革帯が残ったまま何らかの要因で切り離された可能性が高い。この状態の銅製巡方が竪穴住居に持ち込まれたと考えられる。

本遺跡から出土した銅製巡方の分析結果をもとに他の遺跡から出土している巡方などに残存する有機物との比較・検討を行うことによって、銅製巡方を装飾した革帯の種類について今後解明したいと考える。



第288図 道明寺天満宮所蔵の銀装革帯(この図は、道明寺天満宮の許可を得て「道明寺天満宮宝物選」9頁図版4から転載したものである。)

第5節 南玉埋堀遺跡から出土した銅製巡方について

第14表 群馬県内出土金属製巡方一覧表(石田2013より作成。)

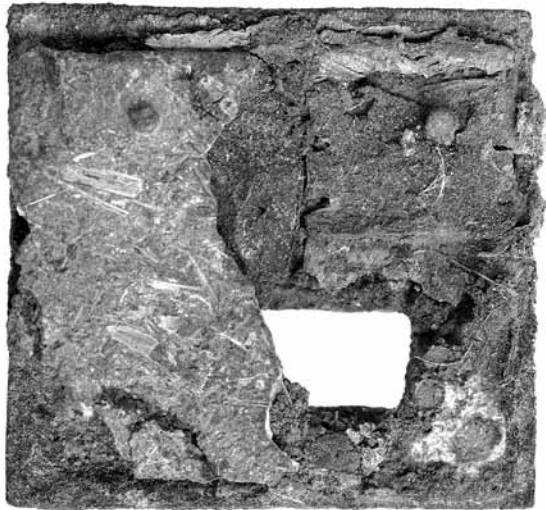
番号	遺跡名	所在地	遺構名など	縦全体 (cm)	横全体 (cm)	厚全体 (cm)	縦透孔 (cm)	横透孔 (cm)	重量 (g)	備考(報告書記載事項等)	引用文献
1	南玉埋堀遺跡	佐波郡玉村町大字南玉	3区27号竪穴住居							銅製巡方、表金具と裏金具の間に黒漆が付着した革帯とみられる有機物残存	本報告書
2	植松・地尻遺跡	安中市安中二丁目字植松2484-1	遺構外	2.1	3.2	0.2	0.4	3	4.8	巡方は2枚を銀で合わせたうちの片方のみ	安中市埋蔵文化財発掘調査団2005『植松・地尻遺跡』, p43, p53, p65, 図版12
3	愛宕山遺跡	安中市松井町松井田字愛宕山1060他	4号住居	3.3	3.6	0.7	0.3	2.6	18	腰帯具巡方、床面に表面を密着し、裏面に石製の腰帯具丸轆が付着	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2000『愛宕山遺跡』, pp21-35, p116, PL.22
4	上原古墳	伊勢崎市三和町上原1263-4		2	2.4	0.55					
5	上原古墳	伊勢崎市三和町上原1263-4		2	2.3	0.45					
6	上原古墳	伊勢崎市三和町上原1263-4		2	2.2	0.4					群馬県1981『群馬県史資料編3』, pp581-588
7	三ツ木遺跡	佐波郡三ツ木字光坊・堂前	185号住居跡	3.35	3.67	0.81	0.37	2.64		青銅製の巡方	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1984『三ツ木遺跡』, pp155-159, PL.39
8	上淵名遺跡	伊勢崎市上淵名	第2次調査X1区竪穴住居							金属製巡方	境町教育委員会1981『上淵名遺跡第2次発掘調査概要』, p11, 境町教育委員会1982『上淵名遺跡第3次発掘調査概要』, p2, 東日本埋蔵文化財研究会1997『遺物からみ律令国家と蝦夷-資料集第I分冊-』, p471
9	中屋敷・中村田遺跡	太田市新田村田町・市野井町	1-14号住居貯蔵穴内覆土	3.2	3.6	0.2			17.3	青銅鈎帯具、表金具、裏面に6ヶ所釘状の突起あり	新田町教育委員会1997『中屋敷・中村田遺跡』, p26, p746, PL.22
10	中西田遺跡	太田市内ヶ島字川向・中西田	22号住居	3	3.2	0.5	0.7	2.2		銅製鈎帯、表金具、住居址の南東壁中、床面からわずかに浮いて出土	太田市教育委員会1988『市内遺跡IV』間之原遺跡(Ⅶ次)中西田遺跡(Ⅱ次), p69, 太田市教育委員会1991『市内遺跡Ⅶ』, p26
11	大久保A遺跡	北群馬郡吉岡町大字大久保	121号住居	3.7	3.9	0.1				銅製品、裏金具、帯金具の一部か	吉岡村教育委員会1986『大久保A遺跡』, pp256-261, 図版87
12	大久保A遺跡	北群馬郡吉岡町大字大久保	124号住居	3.35	3.55	0.15			7.9	銅製、裏金具、平面の四隅は4個の孔	吉岡村教育委員会1986『大久保A遺跡』, pp268-269
13	見柳東遺跡	北群馬郡吉岡町大字大久保字見柳東891-1	S124A	(3.1)	3.1	0.3	0.5	1.5		銅製鈎帯、表金具、内面に鉾が残る	吉岡村教育委員会2001『見柳東遺跡』, pp24-26, 図版17
14	本郷所在古墳	高崎市本郷町		2.3	1.9		0.7	1.7		銅製、表金具	東京国立博物館1983『東京国立博物館目録 古墳遺物篇(関東Ⅱ)』, p217,
15	本郷所在古墳	高崎市本郷町		2.3	1.9		0.7	1.7		銅製、表金具	奈良文化財研究所2002『鈎帯をめぐる諸問題』, p208
16	本郷所在古墳	高崎市本郷町		2.3	1.8~1.9		0.7	1.7		銅製、表金具	
17	本郷的場D古墳	高崎市本郷町的場		1.85	2.25	0.56	0.75	1.9		銅製帯金具、表金具と裏金具の結合	
18	本郷的場D古墳	高崎市本郷町的場		1.7	2.3	0.5	0.7	1.8		銅製帯金具、表金具と裏金具の結合	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『本郷的場古墳群』, pp31-42, p68, 写真図版7
19	本郷的場D古墳	高崎市本郷町的場		1.75	2.2	0.4	0.7	1.9		銅製帯金具、表金具と裏金具の結合	
20	本郷的場D古墳	高崎市本郷町的場		1.75	2.4	0.5	0.65	1.9		銅製帯金具、表金具と裏金具の結合	
21	川内遺跡	高崎市吉井町吉井	44号住居	3.7	4.1	0.2				巡方、裏金具	吉井町教育委員会1982『川内遺跡発掘調査報告書-図版編-』, 遺物図版27, 写真図版43, 小林敏夫1988『群馬県出土の腰帯具について』群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬の考古学』, pp427-438
22	御部入8号古墳	高崎市乗附町	玄門部榎石付近	1.9	2.2	0.55				銅製巡方、表金具と裏金具が結合	群馬県1981『群馬県史資料編3』, pp186-190
23	御部入8号古墳	高崎市乗附町	玄門部榎石付近	1.9	2.2	0.6				銅製巡方、表金具と裏金具が結合	
24	引間遺跡	高崎市上豊岡町字引間	B-75号住居北部床面上	3.35	3.65	0.7	0.35	2.6		9c~10c前半、銅製、表金具	高崎市教育委員会1979『引間遺跡』, pp123-125
25	日高遺跡	高崎市日高町・新保田町中町	10号溝底	1.9	2.2		0.6	1.5		銅製巡方、表金具	高崎市教育委員会1982『日高遺跡(Ⅳ)』, pp71-73
26	八幡遺跡	高崎市八幡町字四之市他	4号墳北側周溝中	1.5	3.2	0.2				銅製品、表金具	高崎市教育委員会1989『八幡遺跡』, P112, pp187-188
27	八幡遺跡	高崎市八幡町字四之市他	1号墳玄室のほぼ全面	1.9	2.2	0.6				銅製品、表金具と裏金具が結合	
28	八幡遺跡	高崎市八幡町字四之市他	1号墳玄室のほぼ全面	1.9	2.3	0.6				銅製品、表金具と裏金具が結合	高崎市教育委員会1989『八幡遺跡』, P110, pp178-182, P110
29	八幡遺跡	高崎市八幡町字四之市他	1号墳玄室のほぼ全面	1.9	2.2	0.6				銅製品、表金具と裏金具が結合	
30	八幡遺跡	高崎市八幡町字四之市他	1号墳玄室のほぼ全面	2.0	2.3	0.6				銅製品、表金具と裏金具が結合	
31	北原遺跡	高崎市北原町	42号住居P1内	3.1	3.2	0.15	0.6	1.7		白銅製か、表金具、黒漆一部残存	群馬県教育委員会1986『北原遺跡』, pp209-213, 図版87
32	下東西遺跡	高崎市北原町	59号住居	2.3	3	0.2	0.8	2.6		銅製巡方、表金具	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1987『下東西遺跡』, pp164-166, PL.83
33	鳥羽遺跡C・H・I区	高崎市塚田町	G区	3.2	3.5	0.7	0.4	5.5		銅製品帯金具、巡方、表金具	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『鳥羽遺跡L・M・N・O区』, p435, PL.182
34	鳥羽遺跡C・H・I区	高崎市塚田町	G区7号住居	1.7	1.9	0.5	0.5	1.5		銅製品帯金具、表金具と裏金具が結合	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1986『鳥羽遺跡G・H・I区』, pp31-33, PL.11

第9章 総括

番号	遺跡名	所在地	遺構名など	縦全体 (cm)	横全体 (cm)	厚全体 (cm)	縦透孔 (cm)	横透孔 (cm)	重量 (g)	備考(報告書記載事項等)	引用文献
35	鳥羽遺跡G・H・I区	高崎市塚田町	H区	1.7	1.9	0.2	0.3	0.9		銅地鍍金、表金具	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1990『鳥羽遺跡L・M・N・O区』, p460, PL.184
36	五代木福Ⅱ遺跡	前橋市五代町	H-104号住居跡	2.4	2.6	0.5	0.4	1.7	17.7	銅製帯金具、表金具	前橋市教育委員会2000『五代木福Ⅱ遺跡・五代深堀Ⅰ遺跡』, p16, p59, p117, 図版55
37	二之宮宮下東遺跡	前橋市二之宮町宮下他	3区15層	3.2	3.5	0.2				銅製、巡方裏金具か	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『二之宮宮下東遺跡』, pp189-191, p222, PL.71
38	上庄司原古墳群	前橋市富士見町	4号古墳玄室床面下攪乱中	1.7	2.2	0.6	0.7(表) 0.7(裏)	1.9(表) 1.7(裏)		銅製巡方、表金具と裏金具の結合	富士見村教育委員会1991『富士見地区遺跡群 陣場・庄司原古墳群』, pp67-75, p85, PL.31
39	新山1号古墳	前橋市馬場町	玄室							銅製	群馬県1981『群馬県史資料編3』, pp129-132
40	新山1号古墳	前橋市馬場町	玄室							銅製	
41	新山1号古墳	前橋市馬場町	玄室	2	2	0.5	0.5	1.6		銅製	
42	清里南部遺跡群(松ノ木)	前橋市青梨子町字松ノ木他	住居跡	3.35	3.35		0.5			青銅製帯金具(巡方)	前橋市教育委員会1980『富田遺跡群・西大宮遺跡群・清里南部遺跡群』, pp84-85, p91
43	鳥取福蔵寺遺跡	前橋市鳥取町	H-1号住居	3.5	3.6	0.2				真鍮の鈎帯、裏金具	前橋市教育委員会1997『鳥取福蔵寺遺跡』, p8, p34, p70, PL.17
44	芳賀東部団地遺跡Ⅱ	前橋市鳥取町・小坂子町・五代町	H23号住居	3	3.4	0.2	0.3	2.2		銅製品巡方、表金具	前橋市教育委員会1988『芳賀東部団地遺跡Ⅱ』, pp19-20, p357, p70図版64
45	堤沼上遺跡	前橋市堤町・亀泉町	24号住居	2.5	2.8	0.5	0.25	2	5.88	横長孔、表金具、黒漆を表面全体に塗布	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『堤沼上遺跡』, pp60-65, p215, PL.44
46	下鎌田遺跡	甘楽郡下仁田町大字馬山字鎌田	5号古墳1	(1.2)	2.1	0.4		1.8		青銅製、巡方、表金具	群馬県教育委員会・下仁田町教育委員会1997『下鎌田遺跡』, pp447-459, p514, PL.370
47	下鎌田遺跡	甘楽郡下仁田町大字馬山字鎌田	5号古墳2	(1.3)	2.2	0.4		1.8		青銅製、巡方、表金具	
48	下鎌田遺跡	甘楽郡下仁田町大字馬山字鎌田	5号古墳3-1	(0.9)	(1.9)	(0.1)				青銅製、巡方、表金具、破損した破片	
49	下鎌田遺跡	甘楽郡下仁田町大字馬山字鎌田	5号古墳3-2	(1.0)	(0.6)	(0.2)				青銅製、巡方、表金具、破損した破片	
50	下鎌田遺跡	甘楽郡下仁田町大字馬山字鎌田	5号古墳3-3	(0.7)	(0.8)	(0.15)				青銅製、巡方、表金具、破損した破片	
51	花和田遺跡	邑楽郡板倉町板倉	平安時代住居址		4	1				銅鈎、種別・詳細不明	奈良文化財研究所2002『鈎帯をめぐる諸問題』, p210, ジャパン通信社1994『月刊文化財発掘出土情報1』, p26
52	福島曲戸遺跡	佐波郡玉村町字福島	12号住居	2.6	3.2	0.1			2.88	銅製品巡方、かがり穴2ヶ所	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2002『福島曲戸遺跡・上福島遺跡』, p54, p295, PL.74
53	半田中原・南原遺跡	渋川市半田445～713	32号住居	1.8	2	0.6	0.6	1.4	4	銅製帯金具(鈎帯巡方)、表金具と裏金具の結合	渋川市教育委員会1994『半田中原遺跡・南原遺跡』, pp109-111, pp695-696, 図版144
54	白井二位屋遺跡	渋川市白井	68号住居覆土	2.4	2.6	0.2	0.55	1.5		銅製巡方、表金具	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1994『白井遺跡群(白井二位屋遺跡)集落編1』, pp202-205, PL.86
55	奈良ノ号古墳	沼田市奈良町	横穴式石室							馬具か、表金具	群馬県1981『群馬県史資料編3』, pp542-545
56	秋塚11号墳	沼田市秋塚町字前原467	北側周堀中、浅間B軽石層中	1.3	3	0.7	0.26	2.38		留金周りにわずかに鍍金、表金具と裏金具の結合	沼田市教育委員会1992『秋塚古墳群Ⅱ』, pp9-15, 写真図版12
57	戸神諏訪Ⅳ遺跡	沼田市町田町字土塔原	9号住居	3.2	3.4	0.15			6.5	報告書では蛇尾、裏金具	沼田市教育委員会1994『戸神諏訪Ⅳ遺跡』, pp21-22, p42, p54
58	御廟塚古墳	富岡市黒川字三谷915	横穴式石室	1.5	2.1	0.5	0.5	1.5		富岡市史では丸靱、裏金具一部欠損	富岡市1987『富岡市史 自然編 原始・古代・中世編』, pp209-211
59	御廟塚古墳	富岡市黒川字三谷915	横穴式石室	2.1	2.5	0.6	0.6	1.9		銅製巡方、表金具と裏金具の結合	
60	生品西浦遺跡Ⅱ	利根郡川場村生品字西浦・西川原	D区1号竪穴建物	2.9	3	0.2			5.7	鈎帯巡方裏金(再利用)	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『生品西浦遺跡Ⅱ』, pp171-179, PL.152
61	生品西浦遺跡Ⅱ	利根郡川場村生品字西浦・西川原	D区2号工房	3.1	3.3	0.6	0.7	2	13.9	表金具	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『生品西浦遺跡Ⅱ』, pp303, PL.166
62	綿貫伊勢遺跡	高崎市綿貫町	1区14号住居	2.3	3.5	0.35			9.1	表金具	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫伊勢遺跡』, p42, p269, p432, PL.262
63	綿貫伊勢遺跡	高崎市綿貫町	1区95号住居	2.1	2.7	0.3			3.7	表金具	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『綿貫伊勢遺跡』, pp132-134, p303, p432, PL.276



第5節 南玉埋堀遺跡から出土した銅製巡方について



1 銅製巡方の表金具の一部が外れた状態



2 銅製巡方の内部拡大写真

第289図 銅製巡方の内部

参考・引用文献

町田章1970「古代帯金具考」日本考古学会『考古雑誌56巻第1号』, p.33-60

小林敏夫1988「群馬県出土の腰帯具について」群馬県埋蔵文化財調査事業団『群馬の考古学』, pp.427-438

新田町教育委員会1999『新田町内遺跡Ⅰ』, p.23, pp.27-28

高島英之2002「文献史料からみた日本古代の表銚帯」奈良文化財研究所『銚帯をめぐる諸問題』, pp.27-36

松村恵司2002「銚帯金具の位階表示機能」奈良文化財研究所『銚帯をめぐる諸問題』, pp.37-54

飯田陽一2002「関東1 群馬県」奈良文化財研究所『銚帯をめぐる諸問題』,

pp.205-211

沼田市教育委員会2001『奈良古墳群』, pp.11-15, pp.53-54, pp.59-60  
図版17

出口公長・竹之内一昭・奥村章・小澤正実「皮革製宝物材質調査」2006宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要第28号』, pp.1-46

出口公長「正倉院宝物に見る皮革の利用と技術」2006宮内庁正倉院事務所『正倉院紀要第28号』, pp.47-65

道明寺天満宮2007『道明寺天満宮宝物選』, p.9, p.66

石田典子2013「上西根遺跡出土の金属製品」(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団『新屋敷遺跡・上西根遺跡・関遺跡(1)』, pp.312-320

土坑計測表

第15表 土坑計測表

区	面	番号	位置	形状	長軸方位	規模(m)			挿図 番号
						長	幅	深	
1	2	1	173-681	楕円形	N-4°-E	1.01	0.62	0.16	第110図 PL.32
1	2	2	159-651	円形	N-30°-W	0.92	0.85	0.17	第110図 PL.32
1	2	3	173-648	不定形	N-0°	(1.14)	0.43	0.09	第110図 PL.32
1	2	4	160-634	隅丸方形	N-80°-W	0.76	0.72	0.16	第110図 PL.33
1	2	5	157-630	隅丸長方形	N-5°-E	2.63	1.18	0.95	第110図 PL.33
1	1	6	156-606	溝状	N-5°-E	1.23	0.48	0.49	第16図 PL.5
1	1	7	158-613	不定形	N-80°-W	1.30	0.36	0.22	第16図 PL.5
1	2	8	147-592	不定形	N-27°-E	1.56	1.02	0.47	第193図
1	2	9	144-585	不定形	N-90°	(2.66)	(1.23)	0.65	第152図
1	2	10	148-605	不定形	N-78°-W	3.45	(1.47)	0.57	第110図 PL.33
1	2	11	146-592	不定形	N-82°-E	1.22	(0.82)	0.56	第152図
2	1	1	137-530	不定形	N-90°	1.48	1.37	0.24	第24図 PL.7
2	1	2	161-530	不定形	N-90°	2.10	1.56	0.52	第24図 PL.7
2	1	3	157-535	不定形	N-76°-E	4.07	2.22	0.44	第24図 PL.7・99
2	1	4	137-531	円形	N-35°-E	2.39	2.37	0.49	第25図 PL.7・99
2	1	5	162-572	楕円形	N-40°-E	(2.45)	(2.00)	0.42	第25図
2	1	6	143-540	円形	N-21°-E	1.98	1.85	0.74	第25図 PL.7
2	1	7	139-539	不定形	N-90°	2.33	2.21	0.60	第26図 PL.8
2	1	8	160-556	円形	N-85°-W	1.90	1.67	0.38	第26図 PL.8
2	1	9	160-554	不定形	N-83°-E	2.28	(1.36)	0.34	第26図 PL.8
2	1	10	161-554	不定形	N-74°-W	(1.13)	(0.55)	0.16	第26図 PL.8・99
2	1	11	160-554	不定形	N-90°	2.45	1.47	0.38	第26図 PL.8・99
2	1	12	158-542	円形	N-6°-E	2.40	2.35	0.64	第27図 PL.8・99
2	1	13	161-533	楕円形	N-80°-E	2.38	1.33	0.53	第28図 PL.8・100
2	1	14	147-519	円形	N-82°-W	2.50	2.43	0.43	第27図 PL.8
2	1	15	148-517	不定形	N-83°-W	0.77	0.74	0.54	第27図 PL.9
2	1	16	152-516	円形	N-83°-W	0.56	0.50	0.29	第27図 PL.9
2	1	17	156-515	円形	N-0°	0.51	0.51	0.27	第27図 PL.9
3	2	1	127-378	円形	N-84°-E	1.11	0.98	0.19	第122図 PL.40
3	2	2	125-378	円形	N-12°-W	1.18	1.10	0.21	第172図 PL.56
3	2	3	126-379	円形	N-19°-E	0.96	0.86	0.11	第122図 PL.40
3	2	4	123-382	円形	N-82°-W	1.62	1.53	0.33	第172図 PL.121
3	2	5	122-381	楕円形	N-73°-E	0.83	0.73	0.28	第122図 PL.40・57
3	2	6	122-379	円形	N-0°	1.27	1.18	0.37	第172図 PL.40
3	2	7	122-378	不定形	N-43°-W	1.37	(1.23)	0.41	第172図 PL.40
3	2	8	121-379	不定形	N-75°-E	1.19	1.14	0.45	第172図 PL.40
3	2	9	115-373	楕円形	N-60°-W	1.18	1.12	0.38	第242図 PL.42・88
3	2	10	120-379	楕円形	N-57°-W	1.38	1.28	0.39	第173図 PL.40
3	2	11	119-380	不定形	N-43°-W	1.25	1.18	0.49	第123図 PL.40・117
3	2	12	125-387	楕円形	N-43°-W	0.77	0.64	0.10	第123図
3	2	13	123-386	不定形	N-55°-W	1.14	0.91	0.23	第172図 PL.57
3	2	14	120-383	円形か	N-0°	0.77	(0.44)	0.42	第123図 PL.41
3	2	15	119-382	円形	N-0°	1.23	1.22	0.59	第123図 PL.41・57
3	2	16	119-380	不定形	N-33°-E	1.45	1.25	0.41	第173図 PL.40・57
3	2	17	135-403	楕円形	N-10°-W	1.03	0.68	0.12	第123図 PL.41
3	2	18	123-395	隅丸長方形	N-11°-E	1.42	0.65	0.36	第123図 PL.41
3	2	19	128-418	隅丸長方形	N-15°-W	(1.02)	0.69	0.26	第123図 PL.41
3	2	20	119-373	円形	N-20°-E	1.37	1.34	0.61	第173図 PL.57
3	2	21	117-372	円形	N-90°	1.18	1.15	0.40	第173図 PL.42
3	2	22	121-373	不定形	N-83°-W	1.24	1.03	0.60	第242図 PL.88
3	2	23	121-372	円形	N-20°-E	1.50	1.40	0.63	第242図 PL.88
3	2	24	129-418	隅丸長方形	N-11°-W	1.06	0.68	0.33	第123図 PL.41
3	2	25	118-370	楕円形か	N-0°	1.31	(0.66)	0.36	第242図 PL.42・88
3	2	26	114-371	楕円形か	N-0°	1.16	(0.75)	0.24	第242図 PL.88
3	2	27	123-392	円形	N-0°	1.53	1.39	0.35	第242図 PL.88
3	2	28	117-374	円形	N-85°-W	1.15	1.09	0.41	第242図 PL.89・133
3	2	29	129-379	楕円形	N-0°	(1.12)	0.91	0.40	第174図 PL.58
3	2	30	119-375	不定形	N-5°-W	0.93	0.87	0.37	第173図 PL.58
3	2	31	120-374	楕円形	N-0°	(0.78)	0.61	0.80	第173図 PL.58
3	2	32	119-399	不定形	N-15°-W	1.40	1.21	0.23	第242図 PL.89
3	2	33	118-372	不定形	N-33°-W	(0.78)	1.11	0.49	第243図 PL.42・89
3	2	34	119-372	不定形	N-0°	0.83	(0.59)	0.59	第173図 PL.58
3	2	35	124-375	楕円形	N-8°-W	1.34	(0.97)	0.32	第174図 PL.58
3	2	36	133-391	円形	N-8°-E	0.76	0.75	0.52	第123図 PL.41
3	2	37	126-372	円形	N-75°-E	1.18	1.06	0.28	第243図 PL.89
3	2	38	124-431	隅丸方形	N-78°-E	1.13	1.06	0.32	第124図 PL.41
3	2	39	129-439	楕円形	N-15°-W	1.51	0.99	0.27	第124図 PL.41
3	2	40	130-437	不定形	N-18°-W	1.22	0.96	0.21	第124図 PL.42



区	面	番号	位置	形状	長軸方位	規模(m)			挿図 番号
						長	幅	深	
3	2	41	130-436	楕円形	N-9°-W	1.50	1.20	0.21	第124図 PL.42
3	2	42	129-436	長方形	N-78°-E	1.20	1.00	0.17	第124図 PL.42
3	2	43	128-436	隅丸長方形	N-80°-E	0.92	0.80	0.11	第243図 PL.89
3	2	44	125-439	長方形	N-15°-W	1.70	0.54	0.24	第124図 PL.42
3	2	45	121-438	長方形	N-11°-W	1.75	0.42	0.23	第124図 PL.42
3	2	46	125-435	凹形	N-6°-W	1.63	1.63	0.40	第124図 PL.42
3	2	47	126-435	不定形	N-6°-W	(1.46)	1.26	0.42	第124図 PL.42
3	2	48	126-435	不定形	N-6°-W	(0.63)	1.20	0.29	第124図 PL.42
3	2	49	121-436	不定形	N-12°-W	1.48	1.28	0.28	第125図 PL.42
3	2	50	121-436	不定形	N-12°-W	(0.87)	1.50	0.39	第125図 PL.42
3	2	51	128-440	長方形	N-10°-W	0.98	0.21	0.10	第125図 PL.42
3	2	52	117-380	不定形	N-44°-W	0.93	0.91	0.15	第125図 PL.42
3		欠番							
3	2	54	117-371	不定形	N-90°	1.43	(1.06)	0.40	第174図 PL.42
3	2	55	116-371	楕円形	N-64°-E	1.09	(0.94)	0.36	第243図 PL.42
3	2	56	118-371	不定形	N-90°	1.08	(0.43)	0.23	第125図 PL.42
3	2	57	124-400	不定形	N-76°-E	1.65	1.25	0.33	第125図 PL.43
3	2	58	114-394	楕円形	N-76°-E	1.10	0.99	0.19	第125図 PL.43
3	2	59	114-395	不定形	N-22°-W	0.80	0.71	0.21	第174図 PL.43
3	2	60	119-381	不定形	N-54°-W	0.89	(0.55)	0.35	第125図 PL.43
3	2	61	115-380	楕円形	N-71°-W	1.48	1.31	0.41	第243図 PL.89
3	2	62	115-380	凹形か	N-68°-W	(1.40)	(1.35)	0.39	第243図 PL.89
3	2	63	137-437	不定形	N-8°-E	1.40	1.28	0.35	第126図 PL.43・45・117
3	2	64	116-382	凹形	N-87°-W	1.66	1.61	0.51	第243図 PL.45・89
3	2	65	115-383	長方形	N-57°-W	1.46	1.13	0.35	第244図 PL.89
3	2	66	117-389	凹形	N-90°	1.08	1.05	0.14	第126図 PL.43
3	2	67	115-386	凹形	N-67°-E	1.33	(1.30)	0.24	第174図 PL.58
3	2	68	114-386	凹形か	N-70°-E	1.30	(0.84)	0.28	第174図 PL.58
3	2	69	119-371	不定形	N-0°	0.85	0.80	0.16	第243図 PL.90
3	2	70	118-392	楕円形	N-0°	1.23	1.20	0.37	第126図 PL.43・117
3	2	71	116-395	楕円形	N-90°	0.90	0.72	0.15	第175図 PL.58
3	2	72	114-389	楕円形	N-0°	1.32	1.21	0.33	第175図 PL.58
3	2	73	113-382	凹形	N-0°	1.12	1.08	0.26	第126図
3	2	74	115-393	不定形	N-20°-W	1.30	1.23	0.36	第244図
3	2	75	117-396	楕円形	N-74°-E	1.07	1.01	0.27	第175図
3	2	76	116-389	長方形	N-54°-E	2.13	1.53	0.44	第175図 PL.58・121
3	2	77	115-380	不定形	N-48°-E	(0.94)	(0.36)	0.18	第244図 PL.90
3	2	78	117-376	不定形	N-70°-E	(0.93)	0.55	0.41	第244図 PL.90・133
3	2	79	114-398	凹形	N-76°-E	0.65	0.59	0.33	第244図 PL.90
3	2	80	110-389	不定形	N-81°-W	1.78	(0.84)	0.21	第245図 PL.90
3	2	81	118-386	長方形	N-80°-E	2.21	1.84	0.53	第245図 PL.90・133
3	2	82	107-389	不定形	N-80°-W	0.95	(0.67)	0.27	第175図 PL.59
3	2	83	110-379	不定形	N-46°-W	1.17	(0.86)	0.35	第245図 PL.90
3	2	84	123-377	不定形	N-50°-E	2.51	1.50	0.58	第245図 PL.91
3	2	85	113-409	不定形	N-50°-E	0.93	0.76	0.65	第245図 PL.133
3	2	86	050-373	凹形か	N-90°	(1.03)	(0.70)	0.29	第246図 PL.59・91
3	2 拡張部	87	049-373	楕円形か	N-85°-W	(1.09)	(0.84)	0.24	第175図 PL.59
3	2 拡張部	88	051-373	楕円形か	N-0°	1.04	(0.40)	0.25	第175図 PL.59
3	2 拡張部	89	050-372	隅丸長方形	N-0°	1.28	(0.50)	0.12	第175図 PL.59・121
3	2 拡張部	90	0.52-373	長方形か	N-25°-E	(1.85)	0.69	0.42	第175図 PL.59
3	2 拡張部	91	049-372	楕円形か	N-85°-W	(0.90)	(0.50)	0.29	第175図 PL.59
3	2 拡張部	92	049-371	不定形	N-49°-W	1.86	1.17	0.32	第175図 PL.59
3	2 拡張部	93	052-372	楕円形か	N-3°-E	1.15	(0.32)	0.31	第176図 PL.59
3	2 拡張部	94	068-371	不定形	N-0°	(2.18)	(0.72)	0.51	第246図
3	2 拡張部	95	098-371	不定形	N-88°-E	(1.38)	(1.13)	0.09	第176図 PL.59
3	2	96	054-372	不定形	N-63°-W	(0.69)	0.41	0.41	第176図
4	4	1	108-356	凹形	N-0°	1.40	0.30	0.11	第258図 PL.94
4	4	2	107-359	凹形	N-0°	1.65	1.60	0.18	第184図 PL.62
4	4	3	112-362	凹形	N-90°	1.08	0.95	0.11	第258図 PL.94
4	4	4	111-358	不定形	N-25°-W	3.66	1.28	0.57	第141図 PL.47
4	4	5	120-360	不定形	N-0°	0.85	0.72	0.33	第258図 PL.95
4	4	6	119-359	長方形	N-12°-E	1.15	0.77	0.12	第258図
5	2	1	191-648	楕円形	N-13°-W	2.45	1.33	0.35	第145図 PL.49
5	2	2	189-648	凹形	N-0°	0.79	0.78	0.24	第145図 PL.49
5	2	3	203-689	楕円形	N-0°	0.57	0.48	0.12	第266図 PL.96
5	2	4	199-687	不定形	N-50°-W	0.85	0.58	0.34	第266図 PL.97

ピット計測表

第16表 ピット計測表

区	面	番号	位置	形状	長軸方位	規模(m)			挿図 番号
						長	幅	深	
3	2	1	120-391	楕円形	N-58°-E	0.39	0.31	0.61	第246図 PL.91
3	2	2	119-391	円形	N-90°	0.44	0.40	0.24	第246図 PL.91
3	2	3	120-386	円形	N-10°-W	0.37	0.37	0.38	第246図 PL.91
3	2	4	120-385	円形	N-0°	0.44	0.37	0.73	第246図 PL.91
3	2	5	123-377	楕円形	N-10°-E	0.97	0.75	0.50	第176図 PL.59
3	2	6	121-377	不定形	N-5°-W	0.75	(0.54)	0.33	第176図 PL.60
3	2	7	111-377	楕円形	N-85°-W	0.75	0.64	0.30	第176図 PL.60
3	2	8	122-374	楕円形	N-50°-W	0.41	0.32	0.41	第176図 PL.60
3	2	9	123-373	不定形	N-65°-E	0.55	0.44	0.40	第176図 PL.60
3	2	10	116-385	円形	N-40°-E	0.35	0.31	0.32	第246図
3	2	11	117-385	円形	N-5°-W	0.31	0.28	0.29	第246図
3		欠番							
3	2	13	115-384	楕円形	N-0°	0.31	0.27	0.25	第246図
3	2	14	120-378	不定形	N-14°-E	0.72	0.71	0.21	第126図 PL.43
3	2	15	117-378	円形	N-10°-W	0.63	0.60	0.32	第246図 PL.91
3	2	16	116-379	楕円形	N-0°	0.48	0.33	0.41	第246図 PL.91
3	2	17	117-375	不定形	N-70°-E	0.58	0.44	0.49	第247図 PL.92・133
3	2	18	118-375	隅丸長方形	N-15°-E	0.58	0.38	0.54	第176図 PL.60・121
3	2	19	110-382	楕円形	N-40°-E	0.48	0.38	0.25	第177図 PL.60
3	2	20	110-383	楕円形	N-18°-E	0.23	0.20	0.23	第126図 PL.44
3	2	21	110-383	楕円形	N-75°-W	0.70	0.45	0.23	第126図 PL.44
3	2	22	110-384	楕円形	N-85°-W	0.55	0.41	0.28	第126図 PL.44
3	2	23	110-387	楕円形	N-58°-E	0.50	0.41	0.18	第126図 PL.44
3	2	24	110-389	不定形	N-25°-W	0.79	0.60	0.20	第126図 PL.44
3	2	25	108-386	円形	N-0°	0.33	0.29	0.17	第247図 PL.92
3	2	26	107-379	不定形	N-20°-E	0.65	0.54	0.50	第247図 PL.92
3	2	27	117-375	楕円形	N-65°-E	0.40	0.31	0.31	第247図
3	2	28	125-379	楕円形	N-82°-E	0.28	0.23	0.22	第247図 PL.92
3	2	29	125-379	隅丸方形	N-10°-E	0.20	0.18	0.24	第247図 PL.92
3	2 拡張部	30	072-371	不定形	N-0°	0.40	(0.23)	0.34	第247図
3	2 拡張部	31	073-371	不定形	N-0°	0.47	0.39	0.48	第247図
3	2 拡張部	32	074-371	円形か	N-0°	0.50	(0.33)	0.57	第247図
3	2 拡張部	33	072-373	楕円形	N-25°-E	0.45	0.30	0.37	第247図 PL.92
3	2 拡張部	34	075-371	円形	N-17°-E	0.44	0.42	0.53	第247図
3	2 拡張部	35	075-371	円形	N-0°	0.27	0.27	0.25	第247図
3	2 拡張部	36	075-371	円形	N-0°	0.36	0.36	0.28	第247図
3	2 拡張部	37	075-373	円形	N-0°	0.36	0.34	0.13	第247図 PL.92
3	2 拡張部	38	076-371	円形	N-0°	0.33	0.33	0.26	第247図
3	2 拡張部	39	076-371	不定形	N-30°-W	0.62	0.43	0.30	第248図
3	2 拡張部	40	077-371	不定形	N-0°	0.58	0.50	0.44	第248図
3	2 拡張部	41	077-372	円形	N-0°	0.26	0.26	0.16	第248図
3	2 拡張部	42	079-371	円形	N-90°	0.59	0.57	0.59	第177図
3	2 拡張部	43	060-373	不定形	N-5°-E	0.69	(0.23)	0.30	第248図 PL.45
3	2 拡張部	44	061-373	円形	N-0°	0.40	(0.31)	0.30	第248図 PL.45
3	2 拡張部	45	057-372	不定形	N-0°	0.50	0.45	0.11	第177図 PL.60
3	2 拡張部	46	057-372	楕円形	N-0°	0.31	0.18	0.53	第177図 PL.60
3	2 拡張部	47	057-372	楕円形	N-40°-W	0.48	0.29	0.35	第177図
3	2 拡張部	48	057-372	不定形	N-90°	0.37	0.26	0.33	第177図
3	2 拡張部	49	057-372	不定形	N-0°	0.28	(0.16)	0.51	第248図
3	2 拡張部	50	056-372	不定形	N-90°	0.29	0.23	0.41	第177図
3	2 拡張部	51	068-373	円形	N-0°	0.83	(0.36)	0.42	第177図
3	2	52	115-383	楕円形	N-3°-W	(0.61)	0.54	1.10	第248図
3	2 拡張部	53	058-374	不定形	N-8°-E	0.29	0.24	0.32	第177図
3	2 拡張部	54	057-370	方形	N-62°-E	0.25	0.21	0.28	第177図
3	2 拡張部	55	063-373	楕円形	N-10°-W	0.51	(0.49)	0.18	第177図
5	2	1	190-634	円形	N-40°-W	0.50	0.45		第267図 PL.97
5	2	2	197-687	不定形	N-75°-W	0.51	0.45	0.36	第267図 PL.97
5	2	3	199-687	楕円形	N-90°	0.46	0.40	0.21	第267図 PL.97
5	2	4	199-688	楕円形	N-40°-E	0.39	0.31	0.26	第267図 PL.97
5	2	5	202-687	楕円形	N-40°-W	0.35	0.28	0.16	第267図 PL.97

第17表 出土遺物観察表

1区2号復旧溝群

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚 重			
第10図	1	肥前磁器 染付皿	埋没土 底部1/5	口 底	- (11.2)	高 -	//白	内面と裏文様は小片のため意匠不明。高台脇と体部と高台境1重圏線。高台外面2重圏線。高台内1重圏線。ハリ支え痕1ヶ所残る。高台端部のみ無釉。	

1区3号復旧溝群

第11図 PL.98	1	銅製品 銭貨	埋没土 ほぼ完形	長 幅	2.324 2.310	厚 重	0.124 2.24	//	寛永通寶、表面は外縁・文字・郭とも明瞭だが、裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。外縁の一部は劣化により破損する。	
---------------	---	-----------	-------------	--------	----------------	--------	---------------	----	--	--

1区5号復旧溝群

第12図	1	製作地不詳 陶器?皿	埋没土 1/8	口 底	(11.8) -	高 -	-	//灰白	内外面釉白濁し、器面荒れる。焼成不良。	
第12図	2	肥前陶器 陶胎染付	埋没土 底部完	口 底	- 5.0	高 -	-	//灰白	体部外面下位染付不明瞭。高台端部のみ無釉。貫入入る。	

1区7号復旧溝群

第13図 PL.98	1	石製品 砥石	埋没土 1/2	長 幅	(6.4) (5.0)	厚 重	(1.2) 20.2	二ツ岳軽石//	正面はやや外湾し、主要な研面と考えられる。裏面は凹凸があるが部分的に平滑部分が認められ研面と判断した。この平滑部分は、加工時の痕跡である可能性もある。上部欠損。	
---------------	---	-----------	------------	--------	----------------	--------	---------------	---------	--	--

1区1号畠

第14図	1	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋没土 底部1/4	口 底	- (7.0)	高 -	-	//灰白	高台脇小さく挟り込む。体部外面から高台内回転篋削り。内面灰釉。底部内面輪状の重ね焼き痕。	
第14図 PL.98	2	銅製品 キセル・雁 首	埋没土 破片	長 幅	2.4 1.5	厚 重	2.2 3.53	//	キセル雁首破片。表面は茶褐色で錆化により荒れているオリジナル表面は消失している。	

1区2号畠

第14図 PL.98	1	銅製品 キセル・雁 首	埋没土 破片	長 幅	1.3 1.2	厚 重	1.0 0.68	//	キセル雁首の火皿部分の破片で、劣化破損により全体形状・詳細は不明。	
---------------	---	-------------------	-----------	--------	------------	--------	-------------	----	-----------------------------------	--

1区3号畠

第15図	1	肥前磁器 染付皿	埋没土 底部1/6	口 底	- 7.1	高 -	-	//灰白	体部内面染付一部残る。見込み五弁花コンニャク印判。蛇の目釉剥ぎ。釉剥ぎ部アルミナ塗布。高台端部無釉。	
第15図	2	瀬戸・美濃 陶器 腰鍔碗	埋没土 底部完	口 底	- 4.1	高 -	-	//灰白	体部外面回転篋削り。内面灰釉。外面鉛釉に近い鉄釉施釉後、高台端部を拭う。灰釉に貫入入る。	
第15図	3	瀬戸・美濃 陶器 小香炉	体部下位1/4、 底部1/2	口 底	- (2.8)	高 -	-	//灰白	体部外面灰釉。貫入入る。内面と体部外面下端以下無釉。	

1区4号溝

第18図 PL.98	1	肥前磁器 白磁か染付 小杯	埋没土 口縁部1/2、 底部3/4	口 底	(6.4) 2.6	高	3.5	//灰白	口縁部水平に近く開く。残存部無文。高台端部無釉。	
第18図 PL.98	2	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部1/3、 底部完	口 底	(10.0) (4.0)	高	5.2	//灰白	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。内面無文。高台端部無釉。	
第18図 PL.98	3	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部1/3、 底部完	口 底	(9.0) 3.6	高	5.0	//灰白	底部器壁厚い。外面雪輪梅樹。高台内不明銘。内面無文。高台端部無釉。	
第18図	4	肥前磁器 染付碗	埋没土 底部完	口 底	- 3.8	高 -	-	//灰白	外面2重網目。内面無文。高台端部無釉。	
第18図 PL.98	5	肥前磁器 釉下彩碗	埋没土 口縁部1/5、 底部完	口 底	(8.9) 2.9	高	4.7	//白	外面一方にピンク、黒、茶色、緑色で梅樹文。外面高台境コバルトによる2重圏線、内面高台境1重圏線。内面無文。高台端部無釉。	近現代
第18図	6	肥前磁器 染付筒形碗	埋没土 口縁部~体部 1/6	口 底	(7.7) -	高 -	-	//白	外面区画内に草花文。高台脇不明染付。口縁部内面四方禪文。見込み周縁2重圏線。	
第18図	7	肥前磁器 染付筒形碗	埋没土 底部完	口 底	- 3.8	高 -	-	//白	体部外面下位1重圏線。高台脇から高台境2重圏線。見込み2重圏線内に五弁花。	
第18図	8	肥前磁器 染付瓶	埋没土 口縁部~頸部	口 底	2.4 -	高 -	-	//白	肩部外面染付一部残存。頸部内面以下無釉。	
第18図	9	肥前陶器 陶胎染付碗	埋没土 体部下位以下 1/2	口 底	- (5.0)	高 -	-	//灰	外面圏線と文様の一部残る。高台端部を除き透明釉。	
第18図 PL.98	10	瀬戸・美濃 磁器か 染付皿	埋没土 口縁部1/2、 天井部完	口 底	(9.8) 5.7	高	2.1	//白	口縁部開く。見込み牡丹と獅子を型押しか押し印し、文様部分にダミを入れる。高台端部のみ無釉。呉須は酸化コバルトか。	
第18図 PL.98	11	瀬戸・美濃 磁器か 染付碗	埋没土 口縁部1/3、 底部1/2	口 底	(7.9) 2.9	高	4.6	//白	ゴム印版による外面網代状内に梅花。内面無文。高台端部無釉。	

出土遺物観察表

1区4号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第18図 PL.98	12	瀬戸・美濃 陶器 小碗	埋没土 口縁部1/2、 底部2/3	口 底	(7.7) 4.0	高 3.7	//浅黄	外面中位以下回転篋削り。内面から高台脇胎釉。	
第18図 PL.98	13	瀬戸・美濃 陶器 小碗	埋没土 口縁部1/4、 底部完	口 底	(6.4) 2.9	高 4.2	//灰白	体部外面中位以下回転篋削り。内面から高台脇胎釉。	
第18図	14	瀬戸・美濃 陶器 小碗	埋没土 口縁部～体部 1/3	口 底	(6.7) -	高 -	//灰白	外面下半回転篋削り。内面から高台脇胎釉。貫入入る。	
第18図	15	瀬戸・美濃 陶器 鉄絵碗	埋没土 口縁部～体部 1/3	口 底	(9.2) -	高 -	//灰白	口縁部外面鉄絵1ヶ所。内外面胎釉。	
第18図	16	瀬戸・美濃 陶器 柳茶碗	埋没土 体部下位以下 1/3	口 底	- (4.8)	高 -	//灰白	外面から高台内回転篋削り。外面一方鉄絵具によるしだれ柳。内面から高台脇胎釉。	
第18図 PL.98	17	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋没土 底部1/2	口 底	- (7.4)	高 -	//灰白	底部内面鉄絵具による型紙摺。内面から高台脇胎釉。一部に押さえ跡が認められ、変形皿の可能性はある。御深井製品か。	
第18図 PL.98	18	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋没土 底部2/3	口 底	- 7.0	高 -	//灰白	内面鉄絵具による型紙摺。内面から高台脇胎釉。御深井製品か。	
第18図	19	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	埋没土 口縁部1/5、 底部完	口 底	(10.7) 4.4	高 2.2	//灰	外面口縁部下から底部外面回転篋削り。錆油施釉後、体部外面下位以下を拭う。見込み重ね焼き痕。	
第18図 PL.98	20	瀬戸・美濃 陶器 染付仏飯器	埋没土 2/3	口 底	6.9 4.3	高 4.5	//灰白	口縁部外面1ヶ所に呉須絵。内面から脚柱部胎釉。貫入入る。	
第18図	21	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	埋没土 杯部下位以下完	口 底	- 4.5	高 -	//灰白	杯部内面から脚上位外面胎釉。貫入入る。脚部やや高い。	
第18図 PL.98	22	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	埋没土 口縁部1/4、 底部1/2	口 底	(10.8) (7.9)	高 5.9	//灰白	体部外面一方に鑿状工具による松文。口縁部内面から体部外面黄釉。釉斑状に白濁。底部脚貼り付け。脚2ヶ所残る。	
第18図 PL.98	23	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	埋没土 1/4	口 底	(10.4) (8.8)	高 6.2	//灰白	口縁部内面から体部外面胎釉。貼り付け脚2ヶ所残存。口縁部外面、上面からの敲打による小剥離多い。火入れとして使用か。	
第19図 PL.98	24	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋没土 口縁部1/6、 底部1/3	口 底	(32.2) (13.7)	高 13.1	//灰白	体部外面以下回転篋削り。口縁部下で外面は窪み、内面は突帯状に突き出る。内外面錆油施釉後、体部外面下位以下を拭う。体部内面下位以下使用により摩滅。	
第19図	25	在地系土器 鍋	埋没土 口縁部から底部 片	口 底	- -	高 -	//黒	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。口縁部小さく外反し、上面は平坦。外面煤付着。	
第19図	26	製作地不詳 磁器 染付小碗	埋没土 1/3	口 底	(7.0) (2.7)	高 3.8	//白	釉白濁し、染付はごく一部見えるのみ。焼成不良。高台端部無釉。	
第19図 PL.98	27	製作地不詳 陶器 蓋	埋没土 2/3	口 -	6.6 -	高 -	//灰白	天井部外面轆轤目立つ。残存部1ヶ所円孔。つまみ基部付近で欠損。天井部外面白土を3ヶ所塗り、この部分に鉄絵具で丸内に点を描く。天井部外面胎釉。下面無釉。	
第19図	28	在地系土器 焙烙	埋没土 口縁部から底部 片	口 底	- -	高 5.1	//暗灰	断面中央灰色、器表付近灰白色、器表暗灰色。内耳1ヶ所残存。外面中位接合痕残る。外面下位の型痕上部を除き回転篋削りで削り取る。底部外面型痕。体部中位器壁やや肥厚。	
第19図	29	在地系土器 焙烙	埋没土 口縁部から底部 片	口 底	- -	高 5.6	//黒・灰白	断面から底部外面器表灰白色、内面から体部外面下端の器表黒色。体部外面下位から底部外面型痕。	
第19図	30	常滑陶器 甕	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高 -	//暗褐	断面灰色、器表暗褐色。口縁部上面斑状に自然釉かかる。口縁部外方に折れ、内面は丸く小さく突き出る。口縁部上面窪む。	
第19図 PL.98	31	製作地不詳 磁器 白磁小杯	埋没土 完形	口 底	6.6 3.2	高 4.2	//白	上絵痕跡も認められず白磁。高台端部無釉。	
第19図 PL.98	32	製作地不詳 磁器 染付小碗	埋没土 口縁部1/3、 底部完	口 底	(7.2) 2.9	高 3.7	//白	外面雲状の染付。内面無文。高台端部無釉。貫入入る。	
第19図 PL.98	33	石製品 石臼(下)	床面23cm 1/4	長 幅	(21.0) (16.0)	厚 重	(8.6) 3374.1	粗粒輝石安山岩//	1/4残。上面には挽目の痕跡が明瞭に残る。側面には平ノミ状の工具痕が僅かに認められ加工時の痕跡と考えられる。中央部には径約4cmの軸受孔が見られる。軸受孔の内面には棒状の工具痕があり穿孔時の痕跡と考えられる。
第19図 PL.98	34	銅製品 銭貨	埋没土 ほぼ完形	長 幅	2.156 2.303	厚 重	0.110 1.75	//	寛永通寶、表面は外縁・文字・郭とも明瞭だが硬い錆びに覆われている。裏面は平坦で外縁・郭ともやや不明瞭。外縁の一部は劣化により破損する。

1区遺構外の出土遺物

第20図 PL.99	1	肥前磁器 染付広東碗 蓋	遺構確認面 口縁部1/2、 天井部完	口 揃	10.3 6.5	高 2.7	//白	外面雲龍。つまみ内1重圏線内に不明文字銘。口縁部内面2重圏線。天井部内面2重圏線内に雲。	
---------------	---	--------------------	--------------------------	--------	-------------	----------	-----	--	--



1区遺構外の出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第20図 PL.99	2	肥前磁器 染付碗	遺構確認面 1/2	口底 (8.8) (4.0)	高	6.2	//灰白	素地は充分磁化せず焼成不良。外面コンニャク印判による鶴と松。高台端部のみ無釉。貫入入る。	
第20図 PL.99	3	肥前磁器 染付碗	遺構確認面 口縁部1/3、 底部完	口底 9.5 4.0	高	5.4	//灰白	外面雪輪梅樹。高台内不明銘。内面無文。高台端部無釉。	
第20図	4	肥前磁器 染付筒形碗	遺構確認面 口縁部～体部 1/4	口底 (7.3) -	高	-	//灰白	外面雪持ち竹。口縁部内面幅広の1重圏線と細い1重圏線。底部周縁2重圏線。	
第20図	5	在地系土器 片口鉢	遺構確認面 口縁部片	口底 -	高	-	//にぶい橙	内面器表荒れる。口縁部薄い玉縁状。口縁端部尖る。	
第20図	6	在地系土器 焙烙	遺構確認面 口縁部～底部片	口底 -	高	5.5	//灰白～黒	断面中央黒色、器表付近灰白色。内面器表灰白色～灰色。外面器表黒色。体部中位やや肥厚。外面中位接合痕。外面下位回転撫で調整を行うが、型痕残る。外面下端回転窪削り。底部外面型痕。	
第20図 PL.99	7	石製品 砥石	遺構確認面 完形	長幅 8.0 3.1	厚重	3.0 118.9	砥沢石//	研面は4面認められる。正面は研ぎ減りにより僅かに内湾する。左右側面は平坦であり櫛歯タガネ痕が僅かに残る。下面は凹凸が著しく研面ではないが、線状痕が僅かに認められる。この線状痕は加工時の痕跡である可能性がある。	
第20図 PL.99	8	鉄製品 鏝	遺構確認面 ほぼ完形	長幅 17.5 2.9	厚重	2.2 136.25	//	断面長方形の厚板状で先端に向かいわずかに幅を減じ、端部は角形でやや丸みを持つ。頭部は傘状に広がり端部は丸みを持つ。	
第20図 PL.99	9	鉄製品 鎌	遺構確認面 破片	長幅 -	厚重	0.9 17.88	//	鎌破片2点で、2点は直接接合しないが同一個体と見られる。先端および茎端部を欠くが茎により木の柄に装着する構造と考えられる。	
第20図 PL.99	10	鉄製品 釘	遺構確認面 破片	長幅 3.0	厚重	1.2 4.91	//	断面四角形で先端は劣化破損する。頭は広げ折り曲げられる、錆に覆われ木質等の痕跡は確認できない。	
第20図 PL.99	11	鉄製品 釘	遺構確認面 破片	長幅 4.8 0.7	厚重	0.7 2.79	//	断面四角の角釘の先端部分と見られる破片。頭側は劣化破損し不明。	
第20図 PL.99	12	鉄製品 不詳	遺構確認面 破片	長幅 2.8 1.3	厚重	0.5 1.64	//	幅1cm厚さ1.5mm程の薄板状鉄製品で、ゆるく弧を描くように曲がるが両端とも劣化破損し詳細は不明。	
第20図 PL.99	13	銅製品 銅板	遺構確認面 破片	長幅 5.2 10.2	厚重	1.7 36.85	//	厚さ1mm弱の銅板が大きく二つ折りに折れ曲がった状態で出土する。銅板の輪郭は不定形でめくれや折れ曲りも見られ本来の形状は不明。表面にメッキや装飾等の加工は認められない。	
第20図 PL.99	14	鉄製品 不詳	遺構確認面 破片	長幅 4.8 0.6	厚重	0.5 4.18	//	断面四角の角棒状鉄製品で両端とも角型で終わるが破損の可能性あり。釘の破片とも考えられるが詳細は不明。	
第20図 PL.99	15	銅製品 銭貨	表土 ほぼ完形	長幅 2.331 2.318	厚重	0.154 2.23	//	寛永通寶、表面は外縁・文字・郭とも明瞭だが硬い錆びに覆われている。裏面は平坦で外縁・郭ともやや不明瞭。外縁の一部は劣化により破損する。本体は外圧により変形捻じれている。	

2区1号復旧溝群

第22図	1	肥前陶器 呉器手腕	埋没土 1/10	口底 (11.0) -	高	-	//浅黄	内外面透明釉。貫入入る。	
------	---	--------------	-------------	-------------------	---	---	------	--------------	--

2区2号復旧溝群

第23図	1	在地系土器 内耳鍋	埋没土 体部片	口底 -	高	-	//黒褐・黒	断面にぶい橙色、内面器表黒褐色、外面器表黒色。外面煤付着。	中世
第23図	2	在地系土器 内耳鍋	埋没土 口縁部片	口底 -	高	-	//黒	内耳部の破片。器壁やや薄く、内耳は細い。	

2区3号土坑

第24図 PL.99	1	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	埋没土 2/3	口底 10.9 4.4	高	1.9	//灰白	口縁端部外面以下回転窪削り。錆釉施釉後、体部外面以下を拭う。底部内外面重ね焼痕。	
---------------	---	--------------------	------------	-------------------	---	-----	------	--	--

2区4号土坑

第25図	1	肥前磁器 染付碗	埋没土 底部完	口底 -	高	-	//灰白	外面2重網目。内面無文。高台端部無釉。	
第25図 PL.99	2	肥前陶器 陶胎染付碗	埋没土 体部1/2、 底部完	口底 -	高	-	//灰	外面東屋山水。内面無文。貫入入る。高台端部無釉。	
第25図	3	瀬戸・美濃 陶器 小碗	埋没土 体部一部、 底部完	口底 -	高	-	//灰白	体部外面回転窪削り。高台貼り付け。内面から高台脇灰釉。貫入入る。	
第25図	4	在地系土器 鍋	埋没土 口縁部片	口底 -	高	-	//灰白・黒	断面中央暗灰色、器表付近から内面器表灰白色、外面器表黒色。外面煤付着。口縁部外反し、端部開く。	
第25図 PL.99	5	石製品 砥石	埋没土 2/3	長幅 (8.9) 3.0	厚重	1.6 75.7	砥沢石//	研面は2面認められる。正面は研ぎ減りにより僅かに内湾する。裏面はほぼ平坦であり、櫛歯タガネ痕が僅かに残る。左右側面及び下面には、櫛歯タガネ痕が明瞭に残る。上部欠損。	

2区8号土坑

第26図	1	須恵器 椀	底面上4cm 底部2/3	底台 7 5.8			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
------	---	----------	-----------------	----------------	--	--	-----------	----------------------------	--



出土遺物観察表

2区10号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	2.5 0.8	厚 重			
第26図 PL.99	1	鉄製品 釘	埋没土 ほぼ完形	長 幅	2.5 0.8	厚 重	0.5 1.04	//	断面はほぼ正方形の小型角釘で先端に向かい細くなり尖る。頭は短く折り曲げる。表面は錆びに覆われ木質等の痕跡は確認できない。

2区11号土坑

第26図 PL.99	1	石製品 火打石	埋没土 完形	長 幅	2.9 3.1	厚 重	2.3 26.4	石英//	稜線上に連続する潰れが認められる。左側面は全面が自然面であり、その形状から円礫を利用している。一部に結晶片岩を残すことから、結晶片岩中に認められる石英に由来する。
---------------	---	------------	-----------	--------	------------	--------	-------------	------	---

2区12号土坑

第27図 PL.99	1	肥前磁器 染付小碗	埋没土 口縁部1/3	口 底	(7.3) 2.6	高	3.5	//白	口縁部外面染付。主文様は欠損。内面無文。高台端部無釉。
第27図 PL.99	2	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部1/5欠	口 底	8.8 3.5	高	4.2	//灰白	外面梅樹。内面無文。高台端部無釉。釉白濁し、焼成不良。
第27図 PL.99	3	肥前磁器 染付碗	埋没土 1/3	口 底	(9.6) (3.5)	高	5.2	//白	外面コンニャク印判による桐文と井桁内に桐を交互に3ヶ所配置か。内面無文。高台端部無釉。
第27図 PL.99	4	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部1/8、 底部1/2	口 底	(10.0) 4.2	高	5.0	//白	底部器壁厚い。外面雪輪梅樹。高台内不明銘。内面無文。高台端部無釉。
第27図 PL.99	5	肥前磁器 染付筒形碗	埋没土 口縁部3/4、 底部完	口 底	7.9 3.9	高	6.0	//白	外面青磁釉。内面染付、透明釉。口縁部内面四方襷。見込1重圏線内に五弁花。
第27図 PL.99	6	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	埋没土 完形	口 底	10.5 4.5	高	1.9	//灰白	外面口縁部以下回転篋削り。錆釉施釉後、体部外面下位以下拭う。見込重ね焼痕。重ね焼痕と底部外面油付着。
第27図 PL.99	7	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	埋没土 口縁部1/3欠	口 底	9.8 4.8	高	2.0	//灰黄	底部基筭底状。内面から口縁部外面黄釉。貫入する。口縁部釉切れ部に油か油煙付着。
第27図 PL.99	8	瀬戸・美濃 陶器 筒形小香炉	埋没土 口縁部1/4、 底部1/3	口 底	(7.0) (4.4)	高	4.3	//灰白	体部直線的に立ち上がり、口縁部内側に折れる。口縁部から体部外面下位屈曲部灰釉。貫入する。
第27図 PL.99	9	石製品 砥石	埋没土 2/3	長 幅	(7.9) 4.0	厚 重	2.3 76.0	砥沢石//	研面は4面認められる。正面は研ぎ減りにより僅かに外湾する。左側面は僅かに内湾する。右側面は研ぎ減りにより著しく外湾する。裏面はほぼ平坦であり、僅かに櫛歯タガネ痕が残る。上部及び下部欠損。

1区13号土坑

第28図 PL.100	1	瀬戸・美濃 陶器 腰錆碗	埋没土 口縁部一部欠	口 底	9.7 4.2	高	5.8	//灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉、凹線部以下錆色の鉄釉。高台端部拭う。灰釉に貫入する。
第28図 PL.100	2	銅製品 キセル・吸 い口	埋没土 一部欠損	長 幅	5.3 0.9	厚 重	1.3 4.47	//	キセル吸い口で端部を劣化破損する。雁首側端部で潰れ扁平になっている。錆化により表面は脆弱でメッキ・装飾等は確認できない。
第28図 PL.100	3	木製品 漆椀	床直 漆膜痕跡	長 幅	11.9 11.7	厚 重	4.2 測定不 能	//	木胎が消失した漆塗椀内面の痕跡で、高台は不明、内面は赤色漆塗で口縁部を欠くため直径は不明。
第28図 PL.100	4	木製品 漆椀	床直 破片	長 幅		厚 重	測定不 能	//	木胎が消失した漆塗椀で、高台は0.5cmでやや外反、口縁部を欠くため直径は不明。
第28図 PL.100	5	木製品 漆椀	床直 破片	長 幅	9.7 9.2	厚 重	2.4 測定不 能	//	内外面とも赤色漆塗の椀で木胎は劣化消失し漆膜のみ残存する。口縁は端部を欠き器高・直径とも不詳。高台はやや外側に開き気味だがその先を欠く。

2区旧河道

第30図 PL.100	1	肥前磁器 染付皿	埋没土 口縁部1/4、 底部1/3	口 底	(12.8) (7.6)	高	3.2	//白	口縁部から体部内面山水文か。見込み2重圏線内五弁花コンニャク印判。裏文様は唐草。高台内1重圏線内に大明若しくは大明年製銘か。	漆継ぎ
第30図 PL.100	2	肥前磁器 染付碗	埋没土 1/2	口 底	(9.4) 3.8	高	6.1	//灰白	外面コンニャク印判による松と鶴を交互に配す。内面無文。高台端部無釉。	
第30図 PL.100	3	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部一部、 底部完	口 底	(9.5) 3.8	高	4.6	//白	外面手描きによる井桁とコンニャク印判による桐を交互に配す。文様は各3個。口縁部内面1重圏線。見込み1重圏線内コンニャク印判による不明文様。	
第30図 PL.100	4	肥前磁器 染付碗	埋没土 完形	口 底	9.0 3.5	高	4.4	//灰白	外面簡略化した雪輪梅樹。内面無文。高台内不明銘。	
第30図 PL.100	5	肥前磁器 染付丸碗	埋没土 完形	口 底	8.3~ 8.8 3.5	高	4.8	//白	外面竹の染付。口縁部内面2重圏線。見込み1重圏線内に簡略化した五弁花か。貫入する。高台端部無釉。	
第30図 PL.100	6	肥前磁器 染付丸碗	埋没土 口縁部~体部 1/3	口 底	(9.8) -	高	-	//白	外面上半2種の斜格子状垣文。外面体部下位井桁状文。口縁部内面幅広の1重圏線。	
第30図 PL.100	7	肥前磁器か 染付湯飲み	埋没土 口縁部1/8、 底部1/2	口 底	(7.7) (4.3)	高	7.2	//白	残存部体部外面下半に面取り1ヶ所残る。面取りは2ヶ所か。外面草花と岩。高台内1重圏線内に不明文字銘。内面無文。高台端部無釉。	

2区旧河道

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	7.2 5.5	高 5.1				
第30図 PL.100	8	肥前磁器 染付猪口	埋没土 口縁部1/2、 底部4/5	口 底	7.2 5.5	高 5.1	//白	外面楼閣山水。口縁部内面2重圈線。見込み1重圈線内昆虫状文様。蛇の目凹型高台。細かい貫入。素地充分磁化せず焼成不良。		
第30図 PL.100	9	肥前磁器 染付瓶	埋没土 体部下位以下	口 底	- 5.3	高 -	//灰白	体部中位外面蛸唐草。体部外面下位、圈線間に縦線。内面と高台端部無釉。		
第30図 PL.100	10	瀬戸・美濃 磁器か 染付平碗	埋没土 1/2	口 底	(11.3) 4.1	高 4.7	//白	外面銅板転写による鳥と樹木。内面無文。高台端部無釉。		
第34図 PL.101	11	瀬戸・美濃 陶器 腰鏝碗	埋没土 口縁部1/2、 底部完	口 底	(8.6) 3.9	高 5.2	//灰白	外面口縁部下螺旋状凹線。内面から口縁部外面灰釉。凹線部から体部器表黒色。高台端部の釉拭う。灰釉に貫入。入る。		
第34図	12	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	埋没土 口縁部1/4、 底部1/3	口 底	(10.2) (5.1)	高 1.9	//灰	外面口縁部以下回転削り。鏝釉施釉後、体部外面以下を拭う。見込み重ね焼き痕。		
第34図	13	瀬戸・美濃 陶器 火入れか香 炉	埋没土 体部下位以下	口 底	- 5.2	高 -	//灰白	体部円筒形。円筒部外面灰釉。貫入。底部内面不明墨書。底部外面回転削り後、高台貼り付け。		
第34図	14	在地系土器 焙烙	埋没土 1/6	口 底	(37.7) (33.8)	高 5.4	//灰白～黒	断面中央黒色、器表付近から底部内外面表灰白色、口縁部から体部器表黒色。残存部内耳2ヶ所。底部貫通する補修孔と内面から穿孔途中の補修孔各1ヶ所。	補修孔と穿孔途中の補修孔	
第34図 PL.101	15	肥前陶器か 瓶	埋没土 口縁部1/5、頸 部完、体部1/2	口 底	(8.5) -	高 -	//白	頸部一對の取っ手状粘土粒貼付。肩部外面明瞭な轆轤目。体部外面回転削り。内外面青緑釉。		
第34図 PL.101	16	銅製品 キセル・吸 い口	埋没土 ほぼ完形	長 幅	5.0 1.0	厚 重	1.0 5.34	//	キセル吸い口、雁首側内部に羅印の木質が残存する。表面は劣化により荒れメッキ・装飾等の痕跡は確認できない。	
第34図 PL.101	17	銅製品 銭貨	埋没土 完形	長 幅	2.219 2.209	厚 重	0.137 1.93	//	寛永通寶。表面は彫は浅めだが外縁・文字・郭は明瞭、裏面は平坦で外縁・郭不明瞭。寶の字を覆う大きな鋳溜りが見られる他裏面にも3ヶ所の鋳溜りが有る。	
第34図 PL.101	18	銅製品 銭貨	埋没土 破片	長 幅	2.598 -	厚 重	0.149 1.58	//	銭貨破片で祥〇〇寶の文字部分のみ残存する。表面は外縁・文字・郭とも明瞭、裏面も外縁・郭とも明瞭。	
第34図 PL.101	19	木製品 漆碗蓋	埋没土 破片	長 幅	8.7 8.2	厚 重	2.3 35	//	内外面とも黒色漆塗の碗蓋破片で推定直径は14cm弱。高台は基部のみで高さは不明。	
第34図 PL.101	20	木製品 漆碗	埋没土 破片	長 幅	9.4 9.1	厚 重	4.0 92	//	内外面とも黒色漆塗の碗。高台および口縁部の一部を欠く。口縁部は破損し器高は不明。高台も基部のみで高さ不明。	
第34図 PL.101	21	木製品 漆碗	埋没土 一部欠損	長 幅	11.5 11.3	厚 重	4.2 106	//	内外面とも黒色漆塗の碗。高台および口縁部の一部を欠く。	
第34図 PL.102	22	木製品 漆碗	埋没土 ほぼ完形	長 幅	11.0 10.8	厚 重	3.6 95	//	内外面とも黒色漆塗の碗。高台は基部のみで高さ不明。口縁部の一部を欠く。	
第34図 PL.101	23	木製品 漆碗	埋没土 一部欠損	長 幅	11.4 10.8	厚 重	5.3 157	//	内外面とも赤色漆塗の碗。高台は基部のみで高さ不明。口縁部は破損変形する。漆膜は劣化により剥がれて一部が残存するのみ。	
第35図 PL.102	24	木製品 漆碗	埋没土 一部欠損	長 幅	11.2 11.1	厚 重	5.1 150	//	内外面とも赤色漆塗の碗。高台端部を欠き。口縁部は破損変形する。高台内に「吉」の文字が書かれている。	
第35図 PL.102	25	木製品 漆碗	埋没土 一部欠損	長 幅	10.0 9.6	厚 重	3.0 42	//	内面は赤色・外面は黒色の漆塗の碗。口縁の一部に反が見られるが劣化変形と見られる。	
第35図 PL.102	26	木製品 漆碗	埋没土 破片	長 幅	10.8 10.5	厚 重	3.7 112	//	内面赤色・外面黒色漆塗の碗。漆膜は劣化により一部残存するのみ。外面上部に文様?の一部と高台内に「仕」の文字がともに赤色で書かれている。	
第35図	27	木製品 漆碗	埋没土 ほぼ完形	長 幅	10.9 10.5	厚 重	3.6 63	//	内外面とも赤色漆塗の碗。高台端部および口縁部端部は黒色に塗られている。高台内に「上」の文字が書かれている。	
第35図 PL.103	28	木製品 漆碗	埋没土 ほぼ完形	長 幅	10.5 10.4	厚 重	3.3 51	//	内外面とも赤色漆塗の碗。口縁および高台端部は黒色に塗られている。	
第35図 PL.103	29	木製品 碗漆	埋没土 破片	長 幅	10.9 10.4	厚 重	3.6 57	//	内外面とも黒色漆塗の碗破片。高台は基部のみで高さ不明。口縁の一部を欠き推定直径は約12cm。	
第35図 PL.103	30	木製品 漆碗	埋没土 一部欠損	長 幅	12.3 10.4	高 重	7.5 239	//	内外面とも黒色漆塗の碗。口縁部分を破損するとともに変形し楕円形をしている。高台は1.4cm程で外反するが劣化変形と見られる。	
第36図 PL.104	31	木製品 漆碗	埋没土 破片	長 幅	9.9 7.4	高 重	3.6 84	//	内外面とも赤色漆塗の碗。口縁部分を破損するとともに変形歪みを生じている。高台は0.4cm程残存し端部は破損する。	
第36図 PL.104	32	木製品 下駄	埋没土 ほぼ完形	長 幅	15.9 7.7	厚 重	2.7 137	//	一木造りの下駄で木表を上側に向けた板目材を使用し、歯は前後に離れて配する。歯は損耗し特に後ろ歯は低くなっている。	クリ
第36図 PL.104	33	木製品 下駄	埋没土 ほぼ完形	長 幅	22.0 10.4	厚 重	4.7 445	//	一木造りの下駄で上面中央に「中」の焼印が押されている。	ヒノキ
第37図 PL.105	34	木製品 下駄	埋没土 一部欠損	長 幅	21.8 8.5	厚 重	4.6 204	//	一木造りの下駄で板目材の木表を上側にして使用する。劣化が著しく前の歯はもと近くより欠損する。	クリ
第37図 PL.105	35	木製品 下駄	埋没土 破片	長 幅	22.0 9.2	厚 重	1.6 105	//	差し歯の下駄の台部分で柁目材を使用する。劣化が著しく旧状を留めないほど薄く変形する。	散孔材長さは17.3+4.7

出土遺物観察表

2区旧河道

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	重 量			
第38図 PL.106	36	木製品 下駄	埋没土 ほぼ完形	22.0 9.7	厚 重	6.0 367	//	隅丸長方形の差し歯下駄で台上面中央に「中」の焼印が押されている。差し歯と台の差し込み部分に小型の楔を埋め込み固定する。	ケヤキ
第38図 PL.106	37	木製品 下駄	埋没土 ほぼ完形	18.2 5.4	厚 重	5.9 194	//	長楕円形の差し歯下駄で、歯は台形で下端は台幅より広がっている。歯は固定されたまま出土する。	クリ
第39図 PL.106	38	木製品 下駄	埋没土 一部欠損	20.9 8.7	厚 重	6.1 281	//	長方形の差し歯下駄で、台上面中央に「壽」の焼印が押されている。前方の歯は固定されたまま出土するが後方の歯は一緒に出土していない。台の木取は板目で木裏側を上面にむけている。	ケヤキ
第39図 PL.107	39	木製品 下駄	埋没土 一部欠損	20.2 7.7	厚 重	2.6 181	//	差し歯の下駄で板目材の木表を上側にして使用する。劣化が著しく、前歯の一部が溝に残存するのみ。後ろの孔は左右とも欠損する。	クリ
第40図 PL.107	40	木製品 下駄	埋没土 破片	14.8 5.7	厚 重	2.6 68	//	差し歯の下駄の台部分で、板目材の木表を上側にして使用する。劣化が著しく変形している。左撚りの鼻緒材が残存する	キリ
第40図 PL.108	41	木製品 下駄の歯	埋没土 破片	10.8 8.3	厚 重	1.2 74	//	厚さ1.2cm程の台形板状の差し歯の下駄の歯。上部中央に幅1cm程の切れ込みを入れ楔を打ち込み台に固定する構造を持つ。	ケヤキ
第40図 PL.108	42	木製品 下駄の歯	埋没土 破片	10.8 8.3	厚 重	1.2 71	//	厚さ1.2cm程の台形板状の差し歯の下駄の歯。上部中央に幅1cm程の切れ込みを入れ楔を打ち込み台に固定する構造を持つ。	
第40図 PL.108	43	木製品 下駄の歯	埋没土 ほぼ完形	8.2 10.5	厚 重	1.0 65	//	台形の差し歯の下駄の歯、上端に逆三角形の台との接合痕跡が残る。	ケヤキ
第41図 PL.109	44	木製品 不詳	埋没土 一部残存	17.4 5.9	厚 重	2.5 162	//	履物の木芯と見られる木製品で木取は柁目に近いが斜めに傾く。上面は鑿によりすくう様に削り込み、上端に左右1.5cm間隔で2個、中央下よりの両端に前後1～1.5cm間隔で2個づつの孔を持つが全体構造は不明。	ヒノキ
第41図 PL.109	45	木製品 不詳	埋没土 一部残存	23.6 6.9	厚 重	2.7 284	//	履物の木芯と見られる柁目木取の木製品。上面は鑿によりすくう様に削り込み、上端に左右1.5cm間隔で2個、中央下よりの両端に前後1.5cm間隔で2個づつの孔を持つが全体構造は不明。	マツ属複雑 管束亜属
第41図 PL.109	46	木製品 蓋	埋没土 ほぼ完形	35.3 9.3	厚 重	2.8 530	//	幅の狭い半月形の厚板で木目の細かい板目材。中央に5cm程の丸い穴があり年輪幅の広い木製の栓がはめられる。複数枚の板をあわせて蓋として使用していたものと考えられる。	スギ
第41図 PL.109	47	木製品 蓋	埋没土 ほぼ完形	18.1 5.4	厚 重	2.2 132	//	幅の狭い半月形の厚板で木目の細かい板目材。複数枚の板をあわせて蓋として使用していたものと考えられる。	スギ?
第41図 PL.109	48	木製品 樽蓋	埋没土 完形	23.3 22.6	厚 重	1.2 528	//	樽の蓋と見られる円形板で外縁よりに3cm程の孔を持つが栓は一緒に出土していない。板目材の一本で作られている。	スギ
第42図 PL.110	49	木製品 樽蓋	埋没土 ほぼ完形	30.5 10.7	厚 重	3.0 537	//	幅の狭い半月形の厚板で粗い木目の柁目材。中央に5cm程の丸い穴があるが栓は付いていない。複数枚の板をあわせて蓋として使用していたものと考えられる。	スギ
第42図 PL.110	50	木製品 桶底か	埋没土 ほぼ完形	25.4 15.4	厚 重	2.0 627	//	芯をかすめた木取の板目材で、端部は劣化し破損かは不明瞭だが数枚を組み合わせて使用した桶底の一部と見られる。	スギ
第42図 PL.110	51	木製品 桶底	埋没土 ほぼ完形	39.4 18.4	厚 重	3.25 1530	//	半円形の厚い板材で、芯僅かに外した板目材。2枚以上の板をあわせて桶底として使用したのものと考えられる。	スギ
第42図 PL.110	52	木製品 蓋か底板	埋没土 一部欠損	15.8 13.2	厚 重	1.25 148	//	ほぼ円形の板目材で一部は劣化破損する。	スギ?
第42図 PL.110	53	木製品 不詳	埋没土 破片	22.15 10.7	厚 重	0.9 149	//	半円形の薄い板材で、芯から遠い部位の板目材。外周を廻るように幅1.5cm高さ0.2cm程の段を持つ。中央を横断する形で3ヶ所のやや角張った穴が開くが詳細は不明。	スギ
第43図 PL.110	54	木製品 不詳	埋没土 口縁部片	長 幅	厚 重		//	半円形の薄い板材で、芯から遠い部位の板目材。外周を廻るように幅1.5cm高さ0.2cm程の段を持つ。中央を横断する形で3ヶ所のやや角張った穴が開くが詳細は不明。	
第43図 PL.110	55	木製品 不詳	埋没土 ほぼ完形	7.2 7.2	厚 重	0.3 13	//	ほぼ円形の板目材の板で表面は平滑。中央には1mm程の丸い穴があり貫通している。	ヒノキ
第43図 PL.111	56-1	木製品 曲物	埋没土 一部破損	11.0 17.6	厚 重	0.2～ 0.35 59	//	曲物側板破片で変形破損し、底板とは分離し製品としての直径は不明。側板の端部から1cmおよび5cm付近で0.7cm程の樹皮で綴じられている。	マツ属複雑 管束亜属
第43図 PL.111	56-2	木製品 曲物	埋没土 一部破損	長 幅	厚 重		//	56-1に対応すると見られる曲物底板で柁目木取。本来丸い板が外力によって変形したものと見られる。推定径は約12cm。	マツ属複雑 管束亜属
第43図 PL.111	57	木製品 曲物	埋没土 破片	16.3 3.6	厚 重	0.55 16	//	曲げ物側板破片で、No59と一緒に出土するが直接接合はできない。	
第43図 PL.111	58	木製品 曲物	埋没土 破片	12.3 12.5	高 重	2.4 92	//	曲げ物側板下部と底板。底は側板より6ヶ所の孔に木釘により固定している。側板端部は幅0.5cmの樹皮により縫い合わせられている。	針葉樹
第44図 PL.111	59	木製品 曲物	埋没土 破片	21.5 7.0	厚 重	1.25 63	//	曲げ物側板破片で二重に回した側板を2ヶ所で幅0.6cmの樹皮により綴じあわせて固定している。綴じあわせ部には1cm程の正方形の孔があけられ柄を取り付けて使用した可能性がある。直径は破損により広がっているため不明。	ヒノキ
第44図 PL.111	60	木製品 板	埋没土 破片	22.3 2.5	厚 重	0.95 36	//	断面蒲鋒型の細長い板で両端とも破損する。柁目木取で表面に特別な構造は持たない。No57およびNo59と一緒に出土し曲げ物の柄になる可能性がある。	



2区旧河道

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	容 積			
第44図 PL.111	61 -1	木製品 枅底板	埋没土 一部欠損	17.3 17.4	0.9 194		//	ほぼ正方形の底板で、板目材二枚をあわせて構成されている。左右には5～6cm間隔で3個ずつ、上下(木口側)端には1.5～3cmと細かく不揃いな間隔で多数の孔が開けられている。	スギ
第44図 PL.111	61 -2		埋没土 ほぼ完形	17.2 7.6	1.0 92		//	長方形の板目材の左下半および右上半を切欠き、左上および右下半に穴をあけ釘でとめ組み上げる構造の側板で木表を内側に向ける。孔周囲に鉄錆びは見られず木釘を使用したと見られるが見つからない。	スギ
第44図 PL.111	61 -3		埋没土 ほぼ完形	17.2 7.2	1.0 99		//	長方形の枅目材の左下半および右上半を切欠き、左上に一ヶ所および右下半に二か所の穴をあけ釘でとめ組み上げる構造の側板。孔周囲に鉄錆びは見られず木釘を使用したと見られるが見つからない。	
第44図 PL.111	61 -4		埋没土 ほぼ完形	17.2 6.6	1.1 101		//	長方形の枅目材の左下半および右上半を切欠き、左上に一ヶ所および右下半に二か所の穴をあけ釘でとめ組み上げる構造の側板。孔周囲に鉄錆びは見られず木釘を使用したと見られるが見つからない。上端部はつぶれ変形する。	
第44図 PL.111	61 -5		埋没土 ほぼ完形	17.0 7.4	0.9 0		//	長方形の板目材の左下半および右上半を切欠き、左上および右下半に穴をあけ釘でとめ組み上げる構造の側板で木表を外側に向ける。孔周囲に鉄錆びは見られず木釘を使用したと見られるが見つからない。	
第45図 PL.112	62 -1	木製品 桶底	埋没土 ほぼ完形	13.7 13.5	1.6 202		//	芯を外した木取の板目材でほぼ円形の桶底板。	ヒノキ
第45図 PL.112	62 -2		埋没土 ほぼ完形	24.1 6.7	0.7 92		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。	
第45図 PL.112	62 -3		埋没土 ほぼ完形	24.1 7.0	0.6 99		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。	
第45図 PL.112	62 -4		埋没土 ほぼ完形	24.2 5.1	0.7 73		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面の歪みは土圧による変形と見られる	
第45図 PL.112	62 -5		埋没土 ほぼ完形	24.3 5.1	0.7 82		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。	
第45図 PL.112	62 -6		埋没土 ほぼ完形	24.3 5.4	0.7 80		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面の歪みは土圧による変形と見られる	
第45図 PL.112	62 -7		埋没土 ほぼ完形	24.4 5.4	0.7 90		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面は土圧により僅かに変形する。	
第45図 PL.112	62 -8		埋没土 ほぼ完形	24.3 5.8	0.7 90		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面は土圧により僅かに変形する。	
第45図 PL.112	62 -9		埋没土 ほぼ完形	24.2 3.2	0.7 60		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面は土圧によりし字に変形する。	
第45図 PL.112	62 -10		埋没土 ほぼ完形	24.2 4.1	0.6 54		//	桶側板で枅目木取。上部と下部にタガの圧痕が残る。断面は土圧により大きく湾曲する。	
第45図 PL.112	62 -11		埋没土 ほぼ完形	35.0 3.6	0.7 84		//	桶側板でやや板目に近い木取。上部に長方形の孔が開けられている。	
第46図 PL.113	63	木製品 板	埋没土 ほぼ完形	94.0 9.0	2.0 599		//	僅かに芯を外した板目の細長い板。両端部の片面にやや斜めに幅2cm・深さ0.7・1cm程の角張った溝を持つ。	スギ
第46図 PL.113	64	木製品 加工材	埋没土 ほぼ完形	23.3 1.9	1.4 58		//	枅目の角材一端を切欠き端部から2.5cmと27cmの2ヶ所に穴を穿つ、他の部材と組み合わせたものと考えられるが遺存せず全体形状は不明。	ヒノキ
第46図 PL.113	65	木製品 角材	埋没土 一部破損	27.2 2.85	1.7 87		//	角棒状の木材で年輪は枅目に近い。表面は劣化目やせし、両端とも破損、全体形状は不明。	針葉樹
第46図 PL.113	66	木製品 杭	埋没土 一部破損	18.8 2.95	1.9 82		//	芯持ちの丸木の長方形に整形した、先端部分を削り尖らせた杭。	カラマツ
第46図 PL.113	67	木製品 桶側板	埋没土 ほぼ完形	35.7 8.8	1.1 374		//	桶側板と見られる板目木取の板材で、木表を外側に向ける。上端から9cm程の位置に丸に柳の字の焼印が押されている。	スギ
第46図 PL.113	68	木製品 桶側板	埋没土 破片	14.5 4.5	1.3 53		//	細長い板目木取の板材で、No67と一緒に出土し桶側板の破片と見られる。	スギ
第46図 PL.113	69	木製品 桶側板	埋没土 一部欠損	44.8 7.5	1.35 245		//	上端から10cm程に直径3cm程の丸い穴を持つ板材で、比較的目の細かい枅目材。両端・側面とも劣化破損が多く全体形状は不明瞭。	スギ
第46図 PL.113	70	不明	埋没土 ほぼ完形	26.1 9.0	1.6 90		//	2×1.5cmの角材の一端を脛上に加工、他端部には別の加工材をTの字形に組む。この加工材の端部近くには長さ1.2cmで直径1.5cmの傘型の頭を持つ鉄釘が打ちつけられている。	スギ
第46図 PL.113	71	不明	埋没土 破片	33.8 3.9	0.4 34		//	板目の薄く長い板材で両端とも破損する。	スギ
第46図 PL.113	72	木製品 角棒	埋没土 一部破損	62.6 5.3	2.7 659		//	芯を僅かに外した板目で、中央付近に2×3cm深さ1.5cmのぼぞ穴状の凹みを持つが両端とも破損し全体形状は不明。	スギ
PL.113	73	種実 オニグルミ	埋没土	長 幅	厚 重		//	オニグルミ核	
PL.113	74	種実 オニグルミ	埋没土	長 幅	厚 重		//	オニグルミ核	
PL.113	75	種実 クリ	埋没土	長 幅	厚 重		//	オニグルミ核	

出土遺物観察表

2区旧河道

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
PL.113	76	種実 クリ	埋没土	長 幅	厚 重		//	渋皮付の堅果破片、22×22mm。	
PL.113	77	種実 クリ	埋没土	長 幅	厚 重		//	渋皮付の堅果破片、25×34mmの大型。	
PL.113	78	種実 モモ	埋没土	長 幅	厚 重		//	モモ核1点、29.8×19.8×13.8mm。	
PL.113	79	種実 マツ属	埋没土	長 幅	厚 重		//	マツ属球果(松ぼっくり)の頂部破片で10枚ほどの鱗片が残存、中～下部の鱗片は残存しない。	

2区遺構外の出土遺物

第47図	1	肥前磁器 染付碗	攪乱 口縁部1/4、 底部1/3	口 底	(8.4) (3.9)	高	5.1	//灰白	外面コンニャク印判による鶴。内面無文。高台端部無釉。	
第47図	2	肥前磁器 染付碗	攪乱 体部一部、 底部1/2	口 底	- 3.6	高	-	//灰白	外面染付一部残る。内面無文。高台端部無釉。	
第47図 PL.114	3	瀬戸・美濃 陶器 灯火受台	攪乱 受け部1/4、 皿部1/4	口 底	(8.0) (5.2)	高	4.6	//灰白	受け部と皿部は貼り付け。底部基筈底状。灰釉施釉後、皿部外面と受け部上面拭う。	
第47図	4	瀬戸・美濃 陶器 仏飯器	攪乱 口縁部1/3	口 底	(7.7) -	高	-	//灰白	杯部浅い。内外面灰釉。貫入入る。	
第47図 PL.114	5	在地系土器 焙烙	攪乱 1/6	口 底	(40.5) (38.0)	高	5.7	//灰白～黒	断面灰白色、内面器表灰白色から黒色、体部外面器表黒色、底部外面器表黒褐色。外面中央接合痕残る。外面下位の型痕、回転横撫でによりほとんど撫で消す。底部外面型痕。	
第47図	6	在地系土器 焙烙	攪乱 1/8	口 底	(39.0) (37.0)	高	5.3	//黒・黒褐	断面灰白色、内面から体部外面黒色、底部外面黒褐色。外面中位接合痕。外面下位の型痕、回転横撫でによりほとんど撫で消す。底部外面型痕。	
第47図 PL.114	7	石製品 砥石	遺構確認面 完形	長 幅	12.0 2.6	厚 重	3.3 160.3	砥沢石//	研面は4面認められる。正面は研ぎ減りにより中央部で上下に作出面が二分される。裏面と左右側面は平坦である。左右側面と上面には、僅かに櫛歯タガネ痕が残る。下面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。	
第47図 PL.114	8	石製品 砥石	攪乱 完形	長 幅	8.7 5.1	厚 重	2.2 54.7	粗粒輝石安山岩//	正面は外湾する形態である。裏面には作出面が4つ認められいずれも滑らかである。	
第47図 PL.114	9	石製品 火打石	遺構確認面 完形	長 幅	3.8 3.4	厚 重	2.0 32.0	石英//	稜線上に連続する潰れが認められる。一部に結晶片岩を残すことから、結晶片岩中に認められる石英に由来する。	

3区1号復旧溝群

第50図	1	在地系土器 焙烙	埋没土 口縁部～ 底部片	口 底	- -	高	4.8	//灰白・黒褐	断面から内面器表灰白色、外面器表黒褐色。内耳貼り付け痕残る。口縁部から体部回転横撫で。底部外面型痕。	
------	---	-------------	--------------------	--------	--------	---	-----	---------	--	--

3区7号復旧溝群

第52図	1	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗	埋没土 口縁部～体部 1/4	口 底	(11.4) -	高	-	//灰白	外面口縁部以下回転篋削り。内外面釉、口縁部以下薬灰釉が斑状にかかる。	
------	---	--------------------	----------------------	--------	-------------	---	---	------	------------------------------------	--

3区8号復旧溝群

第53図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 稜	10.8 10.3			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第53図	2	肥前陶器 青緑釉皿	埋没土 底部1/2	口 底	- 4.9	高	-	//灰白	内面青緑釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。体部外面から高台脇透明釉。透明釉貫入入る。	内野山
第53図 PL.114	3	石製品 火打石	完形?	長 幅	2.2 2.0	厚 重	2.1 11.8	石英//	稜線上に連続する潰れが認められる。一部に結晶片岩を残すことから、結晶片岩中に認められる石英に由来する。	

3区9号復旧溝群

第54図	1	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋没土 口縁部～体部 1/6	口 底	(11.2) -	高	-	//灰白	口縁端部わずかに外反。内外面濃い錆色の鉄釉。	
------	---	------------------	----------------------	--------	-------------	---	---	------	------------------------	--

3区10号復旧溝群

第55図	1	瀬戸・美濃 陶器 皿	埋没土 1/5	口 底	(12.6) 5.9	高	2.8	//灰黄	口縁部外反。体部外面中位以下回転篋削り。高台脇削り込む。内面から体部外面下位灰釉。見込み重ね焼き痕。	
第55図 PL.114	2	石製品 砥石	埋没土 不明	長 幅	(11.5) 1.3	厚 重	4.0 81.0	珪質粘板岩//	研面は2面認められる。左右両側面は大きく剥落しており全体の形状は不明である。表面は平滑であり、裏面は横方向と斜め方向の線状痕が顕著である。	

3区14号復旧溝群

第57図	1	須恵器 杯	埋没土 1/2	口 底	10.4 7	高	2	細砂粒/酸化焰/暗 灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第57図	2	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗か	埋没土 口縁部～体部 1/4	口 底	(11.8) -	高	-	//灰白	外面口縁部以下回転篋削り。内面から体部外面下位釉。体部外面下位以下鉄化粧。外面口縁部下わずかに白い部分が認められる。	
第57図	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋没土 底部完	口 底	- 5.4	高	-	//灰白	内面から高台内釉施釉後、高台端部を拭う。	



3区4号畠

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第63図 PL.114	1	在地系土器 鍋	埋没土 1/2	口 底	(34.3) (20.0)	高	12.3	//暗灰・黒	断面中央灰色、器表付近灰白色、内面器表暗灰色、外面器表黒色。口縁部から体部外面煤付着。口縁部強い回転横撫で。体部外面紐作り痕残る。体部外面下位以下型痕。

3区5号畠

第64図	1	堺陶器 すり鉢	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高	-	//にぶい赤褐	断面明赤褐色、器表にぶい赤褐色。口縁部内面内側に折り曲げ、端部は尖る。無釉。
------	---	------------	-------------	--------	--------	---	---	---------	--

3区6号畠

第65図	1	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高	-	//灰黄	口縁部外反し、端部内面に折り返す。内外面錆釉。
------	---	--------------------	-------------	--------	--------	---	---	------	-------------------------

3区7号畠

第65図	1	肥前陶器 陶胎染付碗	埋没土 口縁部～体部 1/5	口 底	(9.0) -	高	-	//灰	外面山水文の一部。貫入入る。
第65図	2	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋没土 体部一部、 底部完	口 底	- 5.5	高	-	//淡黄	外面回転斲削り、高台貼り付け。内面から高台脇鉛釉。
第65図 PL.114	3	銅製品 銅板	埋没土 破片	長 幅	5.0 1.2	厚 重	0.3 2.49	//	厚さ0.5mm程の銅板が折り曲げられた状態で出土。一辺は直線的な輪郭を持つが。他の端部は劣化破損し全体形状は不明。

3区1号井戸

第68図	1	常滑陶器 甕か	埋没土 体部下位片	口 底	- -	高	-	//灰赤	断面にぶい橙色、器表灰赤色。内面自然釉が斑状にかかる。内面指押さえによる凹凸残る。外面撫で。
------	---	------------	--------------	--------	--------	---	---	------	--

3区3号溝

第70図	1	肥前陶器 陶胎染付碗	床面下 1/4	口 底	(10.3) 5.0	高	7.4	//灰	外面東屋山水。内面無文。高台端部無釉。貫入入る。
第70図 PL.114	2	志戸呂陶器 灯火受皿	床面上5cm 1/3	口 底	(7.0) (5.5)	高	2.5	//にぶい橙	皿部径12.0cm。受け部の挟り、1ヶ所わずかに残る。挟りは2ヶ所か。外面口縁部下回転斲削り。内面から口縁部外面錆釉。
第70図	3	在地系土器 鍋	埋没土 口縁部～ 体部片	口 底	- -	高	-	//黒	断面中央暗灰色、器表付近灰白色、器表黒色。口縁部強い回転横撫でにより、下部内外面凹線状に窪む。体部内外面撫で。体部外面成形時の凹み残る。外面接合痕残る。

3区4号溝

第70図	1	在地系土器 焙烙	埋没土 口縁部～ 体部片	口 底	- -	高	4.6	//灰白・黒	断面中央暗灰色、器表付近から内面器表灰白色、外面器表黒色。外面中位と内面下位接合痕。外面下位から底部外面型痕。
------	---	-------------	--------------------	--------	--------	---	-----	--------	---

3区1号集石

第73図 PL.114	1	肥前磁器 青磁皿	埋没土 底部	口 底	- 4.3	高	-	//灰白	内面から高台脇青磁釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。高台脇付近で打ち欠いて円盤状に整形。	二次加工品
第73図	2	志戸呂陶器 灯火受皿	埋没土 口縁部1/4、 底部1/3	口 底	(6.5) 5.1	高	2.3	//にぶい赤褐	皿部径10.3cm。外面口縁部以下回転斲削り。内面から体部付近外面錆釉。受け部アーチ状挟り1ヶ所残る。	
第73図 PL.114	3	在地系土器 皿	床面上6cm 口縁部1/2、 底部完	口 底	10.1 6.5	高	2.1	//灰白・黒	内面は内湾するが、外面は口縁部下で屈曲して立ち上がる。底部左回転糸切無調整。内面左回転螺旋状轆轤目。	
第73図	4	在地系土器 火鉢か	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高	-	//黒	断面中央黒色、器表付近灰白色、器表黒色。内面回転横撫で。外面粗い磨きで、型痕の窪みや紐作り痕残る。	
第73図	5	在地系土器 焙烙	埋没土 口縁部～底部片	口 底	- -	高	5.6	//灰・灰白	断面から底部外面器表灰白色。口縁部から体部器表灰色。体部ゆるく内湾。体部内面撫で。口縁部回転横撫で。外面口縁部下位接合痕。体部外面中位以下型痕。	
第73図 PL.114	6	石製品 砥石	埋没土 2/3	長 幅	(9.1) (2.8)	厚 重	2.1 71.9	砥沢石//	研面は2面認められる。正面は下方に向かい研ぎ減りする裏面はほぼ平坦である。左右側面には櫛歯タガネ痕が明瞭に認められる。上部欠損。	
第73図 PL.114	7	石製品 石製品	床面上3cm 完形	長 幅	23.0 21.6	厚 重	11.6 4526.6	粗粒輝石安山岩//	孔が表裏に認められる。表面の孔は漏斗状で底部には細かな凹凸がある。孔の側面部には多くの加工単位が認められ、主に棒状工具によるものと考えられる。裏面の孔は浅く、表面の孔同様に多くの加工単位が認められる。また、孔の外側部分に非常に滑らかな箇所があり磨面と想定される。表裏の孔以外の場所は、比較的滑らかである。	
第73図 PL.114	8	石製品 石製品	埋没土 4/5	長 幅	19.9 19.5	厚 重	10.2 4355.6	粗粒輝石安山岩//	孔が表裏に認められる。表面の孔は漏斗状で底部は特に滑らかである。孔の側面部も比較的滑らかである。裏面の孔は浅く、細かな凹凸が認められる。表裏の孔以外の場所は、比較的滑らかである。	

3区1号道

第74図 PL.115	1	肥前陶器 呉器手碗	底部	口 底	- 4.5	高	-	//淡黄	高台端部を除き透明釉。細かい貫入入る。高台境周縁を敲打により円形に整形。	二次加工品
第74図 PL.115	2	瀬戸・美濃 陶器 灯火皿	床面上12cm 口縁部1/8、底 部完	口 底	(11.0) 4.5	高	2.2	//灰白	底部回転糸切後、碁碁底状に削る。内面から口縁部外面鉛釉。見込み目跡3ヶ所。	
第74図	3	瀬戸・美濃 陶器 すり鉢	埋没土 口縁部	口 底	- -	高	-	//淡黄	口縁部外反し、端部は内面に肥厚。錆釉。	

出土遺物観察表

3区1号道

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第74図 PL.115	4	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長 幅	6.1 1.2	厚 重	1.2 9.66	//	断面円形の棒状鉄製品破片で端部は丸みを持つ、もう一方の端部は劣化破損し全体形状は不明。

3区遺構外の出土遺物

第75図 PL.115	1	肥前磁器 染付碗	遺構確認面 体部一部、 底部完	口 底	- 3.5	高	-	//白	外面植物状の文様。高台内1重圏線。内面無文。高台端部釉。	
第75図	2	肥前磁器 染付鉢	遺構確認面 口縁部~体部 1/3	口 底	(9.1) -	高	-	//白	外面鳳凰か。内面無文。口縁端部上面から端部内面釉削り取る。	
第75図 PL.115	3	肥前陶器 陶胎染付碗	遺構確認面 1/2	口 底	(11.2) 5.3	高	6.8	//灰白	外面山水文の一部。内面無文。高台端部無釉。底部外面焼成時の貫通しない亀裂。貫入なく、高台径も大きい。	
第75図 PL.115	4	肥前陶器 陶胎染付碗	遺構確認面 口縁部1/4、 底部1/2	口 底	(11.0) 5.0	高	7.8	//灰	口縁部やや外反。外面山水文か。高台端部無釉。貫入入る。口縁部から底部内面、部分的に焼き膨れあり。	
第75図 PL.115	5	肥前陶器 陶胎染付碗	遺構確認面 1/3	口 底	(10.1) (4.5)	高	6.8	//灰白	外面東屋山水か。内面無文。貫入入る。高台端部無釉。	
第75図 PL.115	6	肥前陶器 陶胎染付碗	遺構確認面 口縁部1/4、 底部1/2	口 底	(10.5) (4.8)	高	6.4	//灰白	外面東屋山水。内面無文。貫入入る。高台端部無釉。	
第75図	7	肥前陶器 陶胎染付碗	遺構確認面 1/3	口 底	(11.0) (5.0)	高	7.0	//灰白	外面染付不明瞭。内面無文。高台端部無釉。貫入入る。	
第75図 PL.115	8	瀬戸・美濃 陶器 皿	遺構確認面 底部2/3	口 底	- 6.5	高	-	//灰黄	見込み周縁に段差、見込みが高くなる。内外面灰釉施釉後、見込みの釉掻き取る。高台内輪状の目跡。	大窯
第75図 PL.115	9	瀬戸・美濃 陶器 碗	遺構確認面 体部一部、 底部完	口 底	- 5.0	高	-	//淡黄	外面回転篋削り。高台貼り付け。内面から高台脇胎釉。	
第75図	10	瀬戸・美濃 陶器 筒形香炉	遺構確認面 1/3	口 底	(11.0) (7.9)	高	5.9	//淡黄	外面口縁部以下回転篋削り後、脚貼り付け。口縁部内面から体部外面下位胎釉。口縁端部内面敲打による小剥離多い。端部外面敲打による剥離1ヶ所。	
第75図 PL.115	11	瀬戸・美濃 陶器 三耳壺	遺構確認面 口縁部1/2、 底部1/4	口 底	(10.0) (13.0)	高	19.5	//灰白	口縁部肥厚。なで肩で体部は円筒状。肩部の取っ手2ヶ所残存し、配置から3ヶ所貼り付けと推定される。底部右回転糸切後、体部外面中位から底部周縁回転篋削り。頸部内面から体部外面下位錆色の鉄釉。	
第75図	12	在地系土器 鉢か火鉢	遺構確認面 1/6	口 底	(34.0) (26.4)	高	11.6	//黒	断面黒色、器表付近灰白色、器表黒色。内面口縁部以下撫で。口縁部回転横撫で。外面口縁部以下篋撫でか軽い篋削り。残存部脚1ヶ所貼り付け。	
第75図	13	在地系土器 焙烙	遺構確認面 口縁部~底部片	口 底	- -	高	5.4	//灰	断面から底部外面器表灰白色、内面から体部外面器表灰色。体部外面中位以下型痕。	
第75図 PL.115	14	石製品 火打石	遺構確認面 完形	長 幅	4.7 2.5	厚 重	2.3 25.9	石英//	稜線上に連続する潰れが認められる。左側面は全面が自然面であり、その形状から円礫を利用している。	
第75図 PL.115	15	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長 幅	2.418 2.418	厚 重	0.128 2.20	//	寛永通寶。表面は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面も外縁・郭とも明瞭。全体に劣化により表面は荒れている。通の右に鑄欠けが見られる。	
第75図 PL.115	16	銅製品 銭貨	遺構確認面 完形	長 幅	2.424 2.452	厚 重	0.124 2.71	//	寛永通寶。表面は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面も外縁・郭とも明瞭。	
第75図 PL.115	17	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長 幅	2.412 2.378	厚 重	0.147 2.93	//	寛永通寶。表面は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面は平坦で外縁・郭ともやや不明瞭。寶の字の裏面に鑄溜りが見られる。	
第75図 PL.115	18	銅製品 銭貨	遺構確認面 完形	長 幅	2.386 2.392	厚 重	0.118 2.34	//	寛永通寶、表面の外縁・文字・郭とも彫深く明瞭。裏面も外縁・郭とも明瞭。	
第75図 PL.115	19	銅製品 銭貨	遺構確認面 完形	長 幅	2.464 2.459	厚 重	0.137 3.17	//	寛永通寶、表面の外縁・文字・郭とも彫深く明瞭。裏面も外縁・郭とも明瞭。わずかにねじれる様に変形する。	

4区1号復旧溝群

第87図	1	肥前陶器 青緑釉皿	埋没土 口縁部1/10	口 底	(12.7) -	高	-	//灰黄	内面から口縁端部外面青緑釉、外面口縁端部以下透明釉。	内野山
------	---	--------------	----------------	--------	-------------	---	---	------	----------------------------	-----

4区4号復旧溝群

第90図	1	志戸呂陶器 灯火受皿	埋没土 1/3	口 底	(5.5) (4.4)	高	2.3	//灰	受け部アーチ状折り1ヶ所残存。体部外面中位以下回転篋削り。内面から口縁部外面錆釉。	
------	---	---------------	------------	--------	----------------	---	-----	-----	---	--

4区5号復旧溝群

第91図	1	丹波・信楽 陶器 すり鉢	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高	-	//灰黄	口縁部内湾。端部は外方に広がる。無釉。	
第91図 PL.116	2	石製品 砥石	埋没土 1/3	長 幅	(5.5) 3.4	厚 重	(1.3) 32.4	砥沢石//	研面は2面認められる。正面は下方に向かい研ぎ減りし、刃慣らし傷が認められる。裏面はほぼ平坦である。左右両側面には櫛歯タガネ痕が明瞭に残る。上部及び下部欠損。	
第91図 PL.116	3	銅製品 キセル・雁 首	埋没土 ほぼ完形	長 幅	5.0 1.5	厚 重	1.0 6.39	//	キセル雁首で、表面は黒~青色で平滑でメッキ等の痕跡は確認できない。	

4区6号復旧溝群

第92図	1	肥前陶器 呉器手碗	埋没土 口縁部~体部 1/7	口 底	(11.8) -	高	-	//灰黄	内外面透明釉。貫入入る。	
------	---	--------------	----------------------	--------	-------------	---	---	------	--------------	--

4区6号復旧溝群

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	高			
第92図 PL.116	2	鉄製品 釘	埋没土 完形	6.6 1.4	1.0 5.86	-	//	断面ほぼ正方形の角釘で先端に向かい徐々に細くなり、先端から1cm程でくの字に曲がる。頭部は折り曲げられている。表面は錆びに覆われ木質等の痕跡は確認できない。	

4区遺構外の出土遺物

第100図	1	肥前磁器 猪口	遺構確認面 底部1/2	口 底	- 4.0	高	-	//白	底部器壁厚。外面染付。高台端部無釉。	
第100図	2	瀬戸・美濃 陶器 志野皿	遺構確認面 底部1/6	口 底	- (6.0)	高	-	//淡黄	内外面長石釉。底部外面目跡1ヶ所。	
第100図	3	瀬戸・美濃 陶器 碗	遺構確認面 底部	口 底	- 5.5	高	-	//淡黄	腰部張り、高台径大きい。内面から高台内胎釉。高台端部の釉拭う。	
第100図	4	在地系土器 皿	遺構確認面 底部1/4	口 底	- (8.0)	高	-	//にぶい赤褐	底部回転糸切無調整。見込み指撫で。	中世
第100図	5	志戸呂陶器 灯火皿	遺構確認面 口縁部1/8、 底部1/3	口 底	(9.8) (5.0)	高	2.1	//にぶい橙	口縁部小さく外反。外面口縁部以下回転篋削り。内面から口縁部外面錆釉。	
第100図	6	常滑陶器 甕か	遺構確認面 体部片	口 底	- -	高	-	//灰白	断面灰白色、器表にぶい赤褐色。内面横位撫で。外面木口状工具による縦位撫で。	中世

5区1号復旧溝群

第102図	1	志戸呂陶器 灯火受皿	埋没土 皿部1/6	口 底	- -	高	-	//にぶい赤褐	受け部と体部以下欠損。内面から口縁部外面錆釉。	
第102図 PL.116	2	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長 幅	2.5 0.6	厚 重	0.5 1.05	//	断面ほぼ正方形の角棒状鉄製品で両端は劣化破損し詳細は不明。	

5区7号溝

第106図	1	瀬戸・美濃 陶器 碗	埋没土 体部1/4、 底部1/2	口 底	- (4.8)	高	-	//灰白	体部下位丸く、高台高い。内面から高台脇灰釉。	
-------	---	------------------	------------------------	--------	------------	---	---	------	------------------------	--

5区遺構外の出土遺物

第107図 PL.116	1	鉄製品 不詳	遺構確認面 破片	長 幅	5.3 1.2	厚 重	0.5 5.85	//	細い板状の鉄製品で、端部はやや丸みを持ち終わる。他の端部は劣化破損し全体形状は不明だが、茎破片とも考えられるが確定はできない。	
第107図 PL.116	2	銅製品 キセル・雁 首	遺構確認面 一部欠損	長 幅	5.2 1.7	厚 重	0.8 5.40	//	キセルの雁首で吸い口側端部は劣化破損する。火皿つけ根部分に破損しひび割れる。表面は黒～青色でメッキ等の痕跡は確認できない。	
第107図 PL.116	3	銅製品 キセル・雁 首	遺構確認面 一部欠損	長 幅	4.3 1.2	厚 重	1.2 5.20	//	キセルの雁首で吸い口側端部には羅印の木質が残存する。火皿つけ根部分が大きく破損し折れ曲がる。表面は劣化が著しく荒れている。	
第107図 PL.116	4	銅製品 銭貨	遺構確認面 一部欠損	長 幅	2.372 2.369	厚 重	0.126 1.87	//	寛永通寶。表面は外縁・文字・郭とも明瞭、裏面はやや彫は浅いが外縁・郭とも明瞭。外縁の一部は劣化により破損する。	
第107図 PL.116	5	銅製品 銭貨	遺構確認面 完形	長 幅	2.492 2.482	厚 重	0.120 2.70	//	寛永通寶。表面は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面も外縁・郭とも明瞭だが郭上端が二段にずれている。	

1区遺構外の出土遺物

第112図	1	肥前磁器 染付碗	遺構確認面 口縁部一部、 底部1/3	口 底	(10.0) (4.0)	高	5.3	//白	外面宝文(蕉葉)。内面無文。高台端部のみ無釉。	
第112図	2	肥前磁器 染付筒形碗	遺構確認面 口縁部～体部 1/4	口 底	(7.2) -	高	-	//白	外面斜格子内に菊花。口縁部内面四方襷。	
第112図 PL.116	3	肥前磁器 染付猪口	遺構確認面 口縁部1/2、 天井部完	口 底	(7.4) 4.5	高	6.2	//白	外面竹か笹。欠損部異なる文様であるが、欠損部のみ不明。高台端部のみ無釉。内面と高台内無文。	
第112図 PL.116	4	肥前磁器 染付人形か	遺構確認面 笠部1/2	長 幅	- -	高	-	//白	型押し成形。内面指押さえ痕。上半具須。外面から端部内面施釉。反対側が欠損し、全体形状は不明であるが、内面指押さえと、下部中央のみ幅2cmの割れ口があることから、反対は表側と同じ形状ではない可能性が高い。	
第112図 PL.116	5	鉄製品 釘	遺構確認面 破片	長 幅	6.8 1.0	厚 重	0.8 5.73	//	断面四角の角釘と見られる鉄製品で先端は細くとなり、頭側は斜めに破損する。木質等の痕跡は確認できない。	

2区第2～4面水田

第116図	1	渥美陶器 甕か壺	水田埋没土 体部片か	口 底	- -	高	-	//灰	器壁は8mmと薄い。内面紐作り痕明瞭。	古代末～中 世前期
第116図	2	在地系土器 内耳鍋か	水田確認面 口縁部片	口 底	- -	高	-	//灰白	器壁厚。口縁部短く、内湾。内面口縁部下段差。口縁部回転横撫で。外面口縁部下撫で。	中世
第116図 PL.116	3	龍泉窯系青 磁盤	水田確認面 体部片	口 底	- -	高	-	//灰白	体部内面型か鑿状工具による縦位凹線。内外面青磁釉。貫入入る。	中世
第116図 PL.116	4	銅製品 銭貨	水田確認面 完形	長 幅	2.395 2.398	厚 重	0.138 3.15	//	○寧元寶、表面の外縁・文字・郭とも彫深く明瞭だが文字の輪郭の一部がつぶれる。裏面も外縁・郭とも明瞭。	
第116図 PL.116	5	銅製品 銭貨	水田確認面 ほぼ完形	長 幅	2.367 2.346	厚 重	0.156 2.84	//	唐国通寶(篆書体)、表面は外縁・文字・郭とも彫深いが劣化のため文字不明瞭な部分がある。裏面は外縁・郭とも明瞭。	

出土遺物観察表

2区第2～4面水田

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第116図 PL.116	6	銅製品 銭貨	水田確認面 ほぼ完形	長 幅	2.430 2.372	厚 重	0.146 2.51	//	咸平元寶、表面の外縁・文字・郭とも彫深く明瞭、裏面は平坦だが外縁は明瞭、郭は不明瞭。外縁の一部は劣化破損する。
第116図 PL.116	7	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長 幅	2.460 2.483	厚 重	0.206 2.74	//	元豊通寶。表面は外縁・文字・郭とも彫深く明瞭。裏面は平坦で外縁・郭とも不明瞭。寶の字右上方郭付近に表面より強く外力を受け裏側に凹みヒビが入る。

2区遺構外の出土遺物

第119図 PL.116	1	中国磁器 青白磁瓶か	遺構確認面 体部片	口 底	- -	高	-	//白	外面篋などによる施文後、施釉。内面の釉は薄い。	古代末～中 世前期
第119図 PL.116	2	肥前磁器 染付猪口	遺構確認面 口縁部1/2、 底部完	口 底	7.4 3.3	高	5.6	//白	外面草文と花か葉を各3ヶ所配す。高台内1重圏線。内面無文。高台端部無釉。	
第117図	3	在地系土器 内耳鍋	遺構確認面 口縁部片	口 底	- -	高	-	//灰	器壁やや厚い。口縁部やや内湾。口縁端部上面平坦。口縁部下外反部の内面、明瞭な段差。段差の稜は丸い。	中世

3区11号土坑

第123図 PL.117	1	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	13.8			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第123図 PL.117	2	土製品 土錘	埋没土 完形	長 径	3.1 1.9	孔 重	0.2 2.2	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。	

3区12号土坑

第123図	1	須恵器 杯	埋没土 底部片	底	5.8			細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
-------	---	----------	------------	---	-----	--	--	----------------	--------------------------	--

3区36号土坑

第123図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部片	口	11.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部横ナデ、体部はヘラ削り。内面に斜放射状ヘラ磨き。	
-------	---	----------	-------------	---	------	--	--	--------------------	-----------------------------	--

3区57号土坑

第125図	1	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	18.8			細砂粒/良好/灰褐	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
-------	---	----------	----------------	---	------	--	--	-----------	---	--

3区63号土坑

第126図 PL.117	1	礫石器 棒状礫	埋没土 ほぼ完形	長 幅	11.7 3.2	厚 重	1.9 108.5	黒色片岩//	黒色片岩(結晶片岩)の棒状の円礫を利用している。	
-----------------	---	------------	-------------	--------	-------------	--------	--------------	--------	--------------------------	--

3区70号土坑

第126図 PL.117	1	土製品 土錘	埋没土 完形	長 径	4.1 1	孔 重	0.3 3.5	微砂粒/良好/にぶ い橙	外面はナデ。	
-----------------	---	-----------	-----------	--------	----------	--------	------------	-----------------	--------	--

3区5号井戸

第128図	1	肥前磁器 染付碗	埋没土 1/3	口 底	(9.0) (3.8)	高	5.0	//白	外面唐草。高台内1重圏線内に不明銘。内面無文。高台端部無釉。	
第128図 PL.117	2	肥前陶器 陶胎染付碗	埋没土 1/2	口 底	(9.7) 4.5	高	7.3	//灰	外面東屋山水。内面無文。貫入する。高台端部無釉。	
第128図	3	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗	埋没土 体部下位以下	口 底	- 5.3	高	-	//灰黄	体部外面以下回転削り。高台貼り付け。内面から高台脇胎釉。体部中位内外面薬灰釉わずかに流れる。高台脇以下鉄化粧。	
第128図	4	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗	埋没土 体部下位以下	口 底	- 5.4	高	-	//灰白	体部外面以下回転削り。内面から高台脇胎釉。底部内面薬灰釉斑状にかかる。	
第128図	5	瀬戸・美濃 陶器 尾呂碗	埋没土 口縁部～体部 1/4	口 底	(11.4) -	高	-	//灰白	外面口縁部以下回転削り。内外面胎釉。口縁部内外面薬灰釉。	
第128図	6	在地系土器 鍋か	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高	-	//黒	断面灰白色、器表黒色。口縁部外反。外面煤付着。外面口縁部下紐作り痕残る。	
第128図 PL.117	7	石製品 石皿	埋没土 不明	長 幅	(15.6) (17.8)	厚 重	(9.2) 4189.5	粗粒輝石安山岩//	正面は浅い皿状を呈し極めて滑らかである。裏面及び側面も滑らかに仕上げられている。	
第128図 PL.117	8	石製品 石臼(上)	埋没土 1/4	長 幅	(20.8) (17.6)	厚 重	13.0 4875.1	粗粒輝石安山岩//	1/4残。側面には棒状の工具による痕跡が認められ、加工時のものと考えられる。底面には挽目の痕跡は認められず、中央部に直径4cmの軸受孔が見られる。	
第128図 PL.117	9	石製品 石製品	埋没土 不明	長 幅	(12.1) (14.9)	厚 重	5.0 827.1	粗粒輝石安山岩//	裏面は大きく剥落しており、何らかの石製品の部分と考えられる。正面は曲面を呈しており、全体的には凹凸であるが比較的滑らかな部分もある。下端部に直径約3cmの孔がある。	

3区6号井戸

PL.117	1	石製品 石製品	床直 完形	長 幅	33.4 29.8	厚 重	18.7 19500	二ツ岳石//	全体的に平ノミ状の工具による加工痕が認められる。	
--------	---	------------	----------	--------	--------------	--------	---------------	--------	--------------------------	--

3区5号溝

第130図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 稜	11.4 9.3			細砂粒/軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第130図	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口 稜	12.8 9.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第130図	3	土師器 杯	埋没土 体部片	口 稜	12			細砂粒/良好/褐	体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第130図	4	土師器 台付甕	埋没土 口縁部片	口	8.6			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部はハケ目(1cmあたり6本)、内面は放射状ヘラ磨き。	



3区5号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第130図	5	土師器 台付甕	埋没土 底部	底	6		細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部は貼付。胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第130図	6	土師器 台付甕	埋没土 底部				細砂粒/良好/暗灰 黄	脚部は貼付。胴部はハケ目。	
第130図	7	須恵器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片	口	19		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転方向不明。	外面胴部の 一部にスス が附着
第130図	8	瀬戸・美濃 陶器 鉢か	埋没土 底部1/4	口 底	- (10.5)	高 -	//淡黄	外面回転篋削り後、高台貼り付け。内面から高台脇鉄釉。	
第130図	9	在地系土器 片口鉢	埋没土 口縁部片	口 底	- -	高 -	//にぶい褐・黒	断面橙色、内面器表黒色、外面器表褐色。口縁部小さく外反し、端部は内側に突き出る。	中世

3区11号溝

第130図	1	須恵器 椀	埋没土 底部片	底	5.6		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
-------	---	----------	------------	---	-----	--	----------------	--------------------------	--

3区7号溝

第131図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 底	11.8 8		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第131図 PL.117	2	土師器 高杯	埋没土 脚部				細砂粒/良好/明赤 褐	外面は横ナデ、内面はヘラナデ。	

3区9号溝

第132図 PL.117	1	瀬戸・美濃 陶器 鉢	埋没土 底部1/4	口 底	- (16.0)	高 -	//灰白	見込み2条の凹線。体部内面下位銅緑釉で線を描く。内面から高台端部、高台内中央灰釉。	
-----------------	---	------------------	--------------	--------	-------------	--------	------	---	--

3区12号溝

第134図	1	灰釉陶器 皿	埋没土 底部片	底 台	7.2 7		微砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ後高台を貼付。施釉方法は不明。	光ヶ丘1号窯 式期～大原2 号窯式期
第134図	2	須恵器 杯	埋没土 底部片	底	6		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。底部はヘラ削りか。	
第134図	3	須恵器 椀	埋没土 底部片	底 台	7 6.6		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転糸切り無調整。	
第134図	4	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	13.8		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部折り返し、横ナデ。	
第134図	5	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	15.8		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。	
第134図 PL.117	6	石製品 石製模造品 (勾玉)	埋没土 完形	長 幅	2.9 1.8	厚 重 0.4 3.4	蛇紋岩//	孔の直径2mm。表面と裏面ともに斜め方向の擦痕が著しい。	

3区14号溝

第136図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	稜	13.5		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第136図	2	土師器 高杯	埋没土 脚部1/3	脚	9.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	内外面とも中位はヘラナデ、端部は横ナデ。	
第136図	3	土師器 高杯	埋没土 脚部1/2				細砂粒/良好/橙	杯身底部のホヅ状突起を脚部に差し込み接合。内面はナデ。	
第136図	4	土師器 高杯	埋没土 脚部1/3				細砂粒/良好/浅黄 橙	杯身底部のホヅ状突起を脚部に差し込み接合。内外面ともヘラナデ。	
第136図	5	土師器 罎	埋没土 口縁部～胴部片	胴	15		細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横ナデ、胴部は器面磨滅のため不明。内面胴部はヘラナデ。	
第136図	6	土師器 壺	埋没土 口縁部片	口	18.6		細砂粒/良好/浅黄	口縁部は横ナデ。	
第136図 PL.118	7	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	9.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、内面口唇部に刺突文が2段巡る。	
第136図	8	龍泉窯系青 磁 碗	埋没土 体部片	口 底	- -	高 -	//灰	外面片彫りによる鑄蓮弁文。内外面青磁釉。	中世
第136図	9	常滑陶器 甕	埋没土 体部片	口 底	- -	高 -	//灰白	器表暗赤色。外面スタンプ文。内面横位撫で。	中世
第136図	10	常滑陶器 甕	埋没土 体部片	口 底	- -	高 -	//暗赤・黒褐	断面褐灰色からにぶい橙色、内面器表黒褐色、外面器表黒褐色。内面紐作り痕と指押さえ痕。外面木口状工具による撫で。肩部自然釉斑状にかかる。	中世
第136図 PL.118	11	礫石器 棒状礫	埋没土 4/5	長 幅	(13.6) 5.0	厚 重 2.5 305.7	変玄武岩//	円礫を利用している。右側面のやや上部に敲打痕が集中する。下端部に下方向からの剝離痕が認められ、敲打による剝落である可能性がある。	
第136図 PL.118	12	礫石器 棒状礫	埋没土 1/2	長 幅	(10.8) (6.0)	厚 重 (1.7) 179.1	雲母石英片岩//	雲母石英片岩(結晶片岩)の扁平な円礫を利用している。右側面のやや上部に剝離痕が集中し、敲打による可能性が指摘される。	

3区遺構外の出土遺物

第139図 PL.118	1	瀬戸・美濃 陶器 香炉	遺構確認面 1/4	口 底	(11.5) (9.0)	高 7.0	//淡黄	貼り付け脚1ヶ所残存。内面から腰部外面黄瀬戸釉。外面、口縁部から体部斜めに銅緑釉。口縁端部外面敲打による小剝離3ヶ所。	火入れとして 使用か
-----------------	---	-------------------	--------------	--------	-----------------	----------	------	---	---------------



出土遺物観察表

3区遺構外の出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第139図	2	在地系土器 片口鉢	遺構確認面 体部片	口底	-	高	-	//黒	断面にぶい黄橙色、器表黒色。内面9本以上一単位のすり目。	中世か
第139図	3	常滑陶器 甕	遺構確認面 体部片	口底	-	高	-	//赤灰・暗赤	断面灰白色、内面器表赤灰色、外面器表暗赤色。内面横位撫で。外面木口状工具による縦位撫で。	
第139図 PL.118	4	石製品 火打石	遺構確認面 完形	長幅	3.3 2.4	厚重	2.0 15.1	チャート//	稜線上に連続する潰れが認められる。全面が風化面で覆われており、この形態の小形角礫を採取利用している。その形態から、チャート露頭付近で採取したものと考えられる。	
第139図 PL.118	5	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長幅	2.451 2.421	厚重	0.137 2.60	//	元豊通寶。表面の外縁・文字・郭とも彫深く明瞭。裏面は平坦で幅広い外縁が孔に接するまでにずれ、郭も孔から大きく横にずれている。	
第139図 PL.118	6-1	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長幅	2.328 2.358	厚重	0.123	//	寛永通寶。3枚癒着した銭貨の外側の1枚。外縁・文字・郭とも彫は浅めだが明瞭、裏面は癒着し不明。	3枚の総重量 7.27g
第139図 PL.118	6-2	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長幅	2.427 2.450	厚重	0.132	//	3枚癒着した内側の1枚で、未分離のため詳細不明。	
第139図 PL.118	6-3	銅製品 銭貨	遺構確認面 ほぼ完形	長幅	2.295 2.291	厚重	0.114	//	寛永通寶。3枚癒着した銭貨の外側の1枚。外縁・文字・郭とも彫は浅めだが明瞭、裏面は癒着し不明。	
第139図 PL.118	7	銅製品 銭貨	遺構確認面 破片	長幅	2.119 -	厚重	0.159 0.75	//	小破片で劣化著しく文字判読不明。	

4区1号溝

第143図 PL.118	1	石造物 五輪塔	床面6cm ほぼ完形	長幅	(26.3) 15.3	厚重	12.9 3639.4	二ツ岳石//	空風輪。略完形。成形は均質、表面は丁寧な研磨整形を施す。底面は突起を有せず平坦に成整形。	
-----------------	---	------------	---------------	----	----------------	----	----------------	--------	--	--

5区1号井戸

第147図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口底	12			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第147図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口底	17			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第147図	3	須恵器 壺	埋没土 口縁部～胴部 1/4	口底	12.9			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第147図	4	須恵器 甕	埋没土 胴部～底部片	底	9.5			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部と胴部下位に手持ちヘラ削り。	

5区遺構外の出土遺物

第150図 PL.118	1	中国磁器 青白磁合子	遺構確認面 1/2	口底	(4.6) (4.0)	高	2.3	//白	体部外面型か鑿状工具による縦位凹線。内面口縁部以下と体部外面施釉。口縁部と底部外面無釉。貫入入る。	古代末～中 世前期
-----------------	---	---------------	--------------	----	----------------	---	-----	-----	---	--------------

1区9号土坑

第152図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口底	13 10			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第152図	2	須恵器 椀	埋没土 底部片	底	6.8			細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。底部は回転糸切り。	

3区4号竪穴住居

第157図 PL.118	1	須恵器 椀	カマド燃焼面直 上 ほぼ完形	口底	12.9 6.4	台高	5.5 4.9	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付、底部は高台貼付時のナデで整形不鮮明。	
第157図 PL.118	2	須恵器 椀	カマド燃焼面上 7cm 1/4	口底	13.9 6.6	台高	6.1 5.8	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第157図	3	須恵器 椀	カマド燃焼面上 2cm 底部片	底	6			細砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第157図	4	須恵器 椀	カマド燃焼面上 14cm 底部欠	口底	13.7			細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回りか。	
第157図 PL.118	5	灰釉陶器 椀	床面上11cm 口縁部片	口底	14			微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第157図 PL.118	6	灰釉陶器 椀	床面上16cm 口縁部片	口底	13.4			微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第157図	7	土師器 甕	床面下 口縁部片	口底	15.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外面とも横ナデ。	混入
第157図	8	土師器 甕	カマド燃焼面直 上胴部下～底部	底	3.8			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第157図	9	須恵器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口底	28 27.6			細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転方向不明。鑿は貼付。	

3区11号竪穴住居

第159図 PL.119	1	土師器 杯	床直 完形	口底	11.9 7.8	高	3.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部整形は不明。	内面体部に ススが付着
第159図 PL.119	2	土師器 杯	床直 完形	口底	11.7 7.4	高	3.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
第159図 PL.119	3	土師器 杯	床面上15cm ほぼ完形	口底	11.7 7	高	3.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部整形は不明。	
第159図 PL.119	4	土師器 杯	床面上2cm ほぼ完形	口底	12 8.2	高	3.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は周縁が手持ちヘラ削り、中央は無調整。	
第159図 PL.119	5	土師器 杯	床面上2cm 3/4	口底	11.9 8.8	高	3.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は周縁が手持ちヘラ削り、中央は無調整。	

3区11号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第159図 PL.119	6	土師器 杯	貯蔵穴底面上 28cm 3/4	口 底	12 8.5	高 3.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は周縁が手持ちヘラ削り、中央は無調整。	
第159図	7	土師器 杯	カマド焼面上 8cm 1/2	口 底	12.3 9	高 3.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第159図	8	土師器 椀	埋没土1/4	口 底	11.4 5.6	高 4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	
第159図 PL.119	9	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 底	14.7 6.9	高 3.7	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第159図 PL.119	10	須恵器 杯	床直 1/3	口 底	12.4 5.4	高 4.2	細砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第160図	11	須恵器 椀	カマド焼面下 と床面上1cm1/3	口 底	13.7 5.8	高 4	細砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第160図 PL.119	12	須恵器 椀	カマド埋没土 1/2	口 底	13.1 5.4	高 5	細砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第160図 PL.119	13	須恵器 椀	貯蔵穴底面上 15cm 3/4	口 底	13.9 6.6	台 高 7.1 6.1	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第160図 PL.119	14	須恵器 椀	床面上11cm 2/3	口 底	13.5 6.1	台 高 5.8 5.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第160図 PL.119	15	灰釉陶器 椀	床面上2～13cm 3/4	口 底	14 6.3	台 高 6.7 4.6	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第160図 PL.119	16	灰釉陶器 皿	床面下と床面上 13cm 3/4	口 底	14 6.3	台 高 5.9 3	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。内面底部に重ね焼き痕が残る。	大原2号窯 式期
第160図	17	須恵器 長頸壺	カマド焼面下 胴部下位～底部	底 台	10.8 11.2		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ナデ、高台は貼付。胴部最下部に1段の回転ヘラ削り。	
第160図	18	土師器 甕	床面上18cm 口縁部～胴部上 位	口	23		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第160図	19	土師器 甕	カマド埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	18.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第160図 PL.119	20	須恵器 甕	床面上6～43cm 1/4				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。内面に輪積痕が残る。胴部はヘラナデ、内面はナデ。	
第160図 PL.119	21	須恵器 甕	床面上6～43cm 底部～胴部下位	底	17		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	胴部最下部にヘラ削り、その上部はヘラナデ。内面は底部がヘラナデ、胴部にアテ具痕が残る。	
第161図	22	須恵器 甕	カマド焼面 下・上9cm 胴部				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	内面に輪積痕が残る。外面はヘラナデ、内面もヘラナデあるが、かすかにアテ具痕が残る。	
第161図	23	須恵器 甕	カマド焼面直 上～15cm 頸部				細砂粒/還元焰/灰	頸部は横ナデ、胴部は外面は叩き痕がナデ消されている。内面はアテ具痕が残る。	同一個体か
第161図	24	須恵器 甕	カマド焼面直 上～15cm 胴部				細砂粒/還元焰/灰	外面はナデ。叩き痕がナデ消されている。内面はアテ具痕が残る。	
第161図	25	須恵器 甕	カマド焼面直 上～15cm 底部				細砂粒/還元焰/灰	底部はヘラナデ、胴部は叩き痕がナデ消されている。内面は底部がヘラナデ、胴部はアテ具痕が残る。	
第161図 PL.119	26	石製品 丸轆	床面上9cm 完形	長 幅	2.8 4.4	厚 重 0.8 16.9	無斑晶安山岩? //	正面と側面は研磨され光沢が著しい。裏面には縦方向の擦痕が集中し、加工時の研磨痕と考えられる。裏面に潜り穴が3ヶ所認められる。	
第161図 PL.119	27	鉄製品 紡錘車・紡 輪	埋没土 完形	長 幅	4.8 4.7	厚 重 0.6 14.25	//	紡錘車の紡輪で、中央の孔は錆び・泥により閉塞され紡軸は残存していない。糸等の痕跡は確認できない。	
第161図 PL.119	28	鉄製品 不詳	埋没土 ほぼ完形	長 幅	5.2 0.9	厚 重 0.6 4.84	//	断面四角形の棒状鉄製品で、一端は細くなるが鋭利には尖らない。他の端部は丸みを持つ角型で終わる。	
第161図 PL.119	29	鉄製品 釘	埋没土 破片	長 幅	4.7 0.8	厚 重 1.1 8.97	//	断面ほぼ正方形の角釘破片。先端側は劣化破損する、頭は僅かに広がるが折り返しは残っていない木質等の痕跡は見られない。	
第161図 PL.119	30	鉄製品 不詳	埋没土 一部欠損	長 幅	5.4 1.0	厚 重 0.6 3.61	//	断面四角の鉄製品で一端は撥状に広がる、他の端部は僅かに広がり角形で終わるが破損の可能性もある。	
第161図 PL.119	31	鉄製品 鎌	埋没土 一部欠損	長 幅	10.0 3.6	厚 重 1.3 26.85	//	大型の鉄鎌で大きく深い腸削りを持つが、片方の先は劣化破損する。茎部には柄の痕跡が残り表面には細い糸で密に巻かれた痕跡が残る。	

3区25号竪穴住居

第163図 PL.120	1	土師器 杯	底面上6-8cm ほぼ完形	口 底	12.9 9.5	高 3.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第163図 PL.120	2	須恵器 椀	P6底面上4cm 完形	口 底	12.7 5.6	台 高 5	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台貼付時にナデ。	
第163図 PL.120	3	須恵器 椀	床面上18cm 3/4	口 底	12.8 6.6	台 高 6	細砂粒/還元焰・ 燻/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台貼付時にナデ。	
第163図	4	須恵器 椀	床直 口縁部-底部1/4	口 底	13.8 7.7	台 高 6	細砂粒/酸化焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部切り離し技法不明、高台は貼付。	
第163図 PL.120	5	灰釉陶器 皿	床面上12cm 2/3	口 底	12.8 6.2	台 高 5.4 3.4	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転ナデ、高台は貼付。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯 式期
第163図 PL.120	6	土師器 甕	床面上13cm 口縁部1/4、 胴部片	口	18.2		細砂粒/良好/明赤 褐	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

出土遺物観察表

3区25号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第163図	7	土師器 甕	床面上12cm 口縁部1/4、胴部片	口	19.6			細砂粒/良好/明赤 褐	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第163図	8	須恵器 椀	貯蔵穴埋没土 口縁部～底部片	口 底	11.6 8	高	4.3	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。
第163図	9	土師器 台付甕	貯蔵穴埋没土 口縁部～胴部上位片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。
第163図 PL.120	10	土製品 土錘	床面上4cm 1/2	長 径	(3.4) 1.2	孔 重	0.3 (5.3)	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。
第163図 PL.120	11	礫石器 磨石	床面上17cm 完形	長 幅	10.6 7.1	厚 重	2.8 311.9	粗粒輝石安山岩//	扁平な円礫を利用している。表面及び裏面の中央部に磨面が認められる。
第163図 PL.120	12	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長 幅	4.2 0.8	厚 重	0.7 3.18	//	断面四角で、先端は細くなりやや尖る、他の端部はやや丸みを持った角形で終わる。
第163図 PL.120	13	鉄製品 釘	埋没土 破片	長 幅	3.6 0.9	厚 重	0.7 3.14	//	断面四角の角釘と見られる鉄製品で先端は細く尖り、頭側は角形で終わるが破損の可能性がある。

3区27号竪穴住居

第166図 PL.120	1	土師器 杯	カマド床面上13cm 1/4	口 底	13 8	高	4.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第166図	2	土師器 杯	カマド床面上13cm 1/5	口 底	12 6.2	高	3.6	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第166図	3	須恵器 椀	埋没土 1/4	口 底	12.8 6	台 高	5.4 4.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第166図 PL.120	4	須恵器 椀	貯蔵穴底面下 3/4	口 底	13.5 6.8	台 高	6.4 6.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。
第165図 PL.120	5	土師器 甕	貯蔵穴底直 口縁部1/4	口	18.8			細砂粒/良好/明赤 褐	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第166図 PL.120	6	銅製品 巡方	貯蔵穴底直 ほぼ完形	長 幅	3.0 3.2	厚 重	0.7	//	裏金が装着された状態で出土したほぼ完形の順方。銅製で表面にめっき・漆膜等は確認できない。裏金と本体との隙間に黒色被膜に覆われた皮状物質および紐・繊維が残存する。

3区28号竪穴住居

第167図 PL.120	1	石製品 石製模造品 (剣形)	床直 完形	長 幅	4.3 2.7	厚 重	0.5 9.0	滑石//	孔径はともに2.5mm。表面、裏面とも一つの平滑面で構成されている。表面は縦方向の擦痕が、裏面は斜め方向の擦痕が顕著である。
-----------------	---	----------------------	----------	--------	------------	--------	------------	------	--

3区32号竪穴住居

第168図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部片	口	10.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。
第168図	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～ 体部上半片	口	17.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。
第168図	3	土師器 杯	埋没土 口縁部1/4	口	13.7			細砂粒/良好/橙	器面磨滅のため整形不明。
第168図	4	土師器 杯	埋没土 口縁部片	口 稜	13.8 13.4			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。

3区39号竪穴住居

第169図	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	13 10			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第169図	2	土師器 杯	掘り方底面上23cm 口縁部～底部片	口	13			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。
第169図	3	土師器 鉢	掘り方底面上43cm 杯身部1/4	口 底	21.8 12			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り、一部器面剥離のため不明。
第169図	4	須恵器 杯	埋没土 1/4	口 底	14.6 10.2	高	3.2	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ削り。
第169図	5	土師器 甕	掘り方底面上 43cm 口縁部～ 胴部上位	口	17			細砂粒/良好/明赤 褐	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。

3区40号竪穴住居

第170図 PL.121	1	須恵器 杯	床直 1/2	口 底	11.4 7	高	4.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整、体部下位に1段の回転ヘラ削り。
-----------------	---	----------	-----------	--------	-----------	---	-----	-----------	---

3区41号竪穴住居

第171図 PL.121	1	土師器 杯	埋没土 3/4	口 底	11.6 7.5	高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第171図 PL.121	2	土師器 椀	埋没土 3/4	口 底	14.9 7	高	5.5	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第171図	3	土師器 台付甕	埋没土 胴部下位	底	4.7			細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部は貼付。胴部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面胴部はヘラナデ。
第171図 PL.121	4	土師器 甕か	埋没土 口縁部～胴部	口	23			細砂粒/良好/橙	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第171図	5	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部	口	18.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。

3区4号土坑

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第172図 PL.121	1	土師器 高杯	埋没土 脚部1/2	脚	8.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面赤色塗彩。脚部に透孔が3ヶ所。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第172図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	23.7		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

3区6号土坑

第172図	1	須恵器 杯	埋没土 1/6	口 底	12.8 7.2	高 3.7	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
-------	---	----------	------------	--------	-------------	----------	----------------	--------------------------	--

3区7号土坑

第172図	1	土師器 杯	埋没土 小片	口 底	11.8 9		細砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
-------	---	----------	-----------	--------	-----------	--	-----------	---------------------------	--

3区13号土坑

第172図	1	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	21.6		細砂粒/良好/にぶ い橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第172図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	12.2		細砂粒/良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

3区10号土坑

第173図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部片	口	12.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部横ナデ、体部は器面磨滅のため不明。内面にヘラ磨き。	
-------	---	----------	-------------	---	------	--	-----------------	------------------------------	--

3区20号土坑

第173図	1	土師器 不明	埋没土 口縁部片	口	29.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部に凸帯が巡る。口唇部は横ナデ、内面はヘラナデ。	
-------	---	-----------	-------------	---	------	--	------------------	----------------------------	--

3区34号土坑

第173図	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口	11.9		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
-------	---	----------	------------	---	------	--	-----------------	---------------------------	--

3区54号土坑

第174図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 底	8.7 6.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
-------	---	----------	----------------	--------	------------	--	----------	---------------------------	--

3区76号土坑

第175図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口	14.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面は体部がヘラナデ。内面体部に斜放射状ヘラ磨き。	
第175図 PL.121	2	土師器 小型壺	埋没土 1/3	口	10.8		細砂粒/良好/褐灰	口縁部は横ナデ、胴部上半はナデ、下半はヘラ削り。内面は前面にヘラ磨き。	
第175図	3	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部上位	口	16.7		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり5本)。	

3区89号土坑

第175図 PL.121	1	石製品 砥石	埋没土 不明	長 幅	(7.1) 3.7	厚 重	4.3 172.3	粗粒輝石安山岩//	表面と右側面に研面が認められれば平坦である。裏面はやや凹凸があるが、部分的に平滑部があることから研面と解釈した。左側面及び下部欠損。
-----------------	---	-----------	-----------	--------	--------------	--------	--------------	-----------	--

3区5号ピット

第176図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口	10.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
-------	---	----------	----------------	---	------	--	----------	--------------------------------------	--

3区8号ピット

第176図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁部欠2/3	底	7		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付、高台は剥落。	
-------	---	----------	----------------	---	---	--	--------------------	----------------------------------	--

3区9号ピット

第176図	1	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	18.8	0	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ。	
-------	---	----------	-------------	---	------	---	----------------	--------------	--

3区18号ピット

第176図 PL.121	1	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長 幅	4.6 1.1	厚 重	1.3 6.27	//	断面四角の角棒状鉄製品で、ねじれる様に折れ曲がるが、劣化が進み全体に錆びに覆われ脆弱なため詳細は不明。
第176図 PL.121	2	鉄製品 不詳	埋没土 破片	長 幅	3.9 0.9	厚 重	1.0 5.93	//	断面四角の角棒状鉄製品で、ねじれる様にくの字型に折れ曲がり先端は細くなりやや尖る。釘の破片と見られるが劣化が進み空洞化脆弱なため詳細は不明。

3区19号ピット

第177図	1	須恵器 椀	埋没土 口縁部欠1/2	底 台	6.6 6		細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
-------	---	----------	----------------	--------	----------	--	----------------	----------------------------	--

3区45号ピット

第177図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口	10.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
-------	---	----------	----------------	---	------	--	------------------	--------------------------------------	--

3区19号溝

第178図 PL.121	1	土師器 杯	底面上10cm 1/4	口 底	11.6 7	高 3.1	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第178図	2	土師器 杯	底面上32cm 口縁部～底部片	口	10.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第178図	3	土師器 杯	底面上5cm 口縁部片	口	12.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第178図	4	土師器 杯	底面上2cm 口縁部～底部片	口	11.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	



出土遺物観察表

3区19号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第178図	5	土師器 皿	底面上6cm 小片	口 底	17.8 14.4			細砂粒/良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、底部はヘラ削り。

3区遺構外の出土遺物

第180図 PL.121	1	土師器 杯	遺構確認面 ほぼ完形	口 底	11.7 9.7	高	2.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図 PL.121	2	土師器 杯	遺構確認面 3/4	口 底	13.5 8	高	4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面体部に斜放射状暗文。	
第180図 PL.121	3	土師器 杯	遺構確認面 2/3	口 底	12.4 10.8	高	3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図 PL.121	4	土師器 杯	遺構確認面 2/3	口 底	12 7.2	高	4.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図	5	土師器 杯	遺構確認面 1/3	口 底	12.56 10.6	高	3.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図	6	土師器 杯	遺構確認面 1/3	口 底	12.2 9.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図	7	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口	13.6			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図	8	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口 底	12.2 8.5			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図 PL.121	9	土師器 杯	遺構確認面 1/3	口 底	15.5 11.8	高	2.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第180図	10	須恵器 杯	遺構確認面 3/4	口 底	11.8 5	高	3.4	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第180図	11	須恵器 杯	遺構確認面 1/3	口 底	12.8 8	台 高	7.7 4.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第180図 PL.121	12	須恵器 椀	遺構確認面 1/2	口 底	14.8 7	台 高	5.7 6.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。高台は雑な整形。	
第180図 PL.121	13	灰釉陶器 皿	遺構確認面 2/3	口 底	12.7 6.4	台 高	6 3	微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラナデ、高台は貼付。施釉方法は刷毛塗りか。	光ヶ丘1号 窯時期
第180図	14	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～胴部上 位					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第180図	15	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～胴部	口	19.8			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第180図 PL.121	16	土師器 壺	遺構確認面 胴部片					細砂粒/良好/にぶ い橙	胴部はヘラ磨き後、簾状文と波状文。	
第180図	17	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～胴部上 位	口	14.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり5本)。	
第180図 PL.121	18	鉄製品 刀子	遺構確認面 一部欠損	長 幅	8.3 1.7	厚 重	1.0 10.95	//	劣化が著しく本体は空洞化した刀子。棟側には関を持つが刃側はなだらかに茎に移行する。全体に厚く錆び付着し柄の痕跡等は確認ができない。	

4区1号竪穴住居

第182図 PL.122	1	土師器 杯	カマド床面上5 ～13cm ほぼ完形	口 最	12.1 12.8	高	5.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は体部から口縁部に斜放射状ヘラ磨き、体部下半は器面剥離のため不明。
第182図 PL.122	2	土師器 杯	床面上11cm 1/4	口 高	11.7 4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第182図	3	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口	12.7			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。
第182図 PL.122	4	土師器 鉢	カマド埋没土 口縁部～胴部 1/4	口	7.8			細砂粒/良好/黄灰	口縁部は横ナデ、胴部はナデ。内面胴部はヘラナデ。
第182図 PL.122	5	土師器 甕	床直 口縁部一部欠	口 底	14.1 7.4	高 胴	18.3 18	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第182図 PL.122	6	土師器 甕	カマド床面上 16cm 口縁部・胴 部一部欠	口 底	16.9 7.2	高 胴	24.9 17	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第183図 PL.122	7	土師器 甕	床面上12cm 2/3	口 底	20 7	高 胴	31.5 22.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から胴部はハケ目(1cmあたり4本)後、口縁部に横ナデ、胴部下位は器面磨滅、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第183図	8	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位1/3	口	21.7			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第183図	9	土師器 甕	床面上6cm 口縁部～胴部上 位1/4	口	18.6			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。
第183図	10	土師器 甕	床面上15cm 口縁部～胴部上 位	口	20.5			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がヘラナデ。
第183図	11	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	17.6			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。



4区2号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第183図 PL.122	1	須恵器 杯	床面上15cm 1/2	口 底	12 8.2	高 3.3	細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部はヘラ起し後、回転ヘラ削り。	
第183図 PL.122	2	土師器 甕	床面上13～15cm 口縁部～胴部片	口 底	19.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第183図	3	土師器 甕	床面上17cm 口縁部～胴部上 位1/4	口 底	19		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

5区1号竪穴住居

第190図	1	土師器 甕	床面上1cm 口縁部片	口 底	20.4		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ。	
-------	---	----------	----------------	--------	------	--	-----------------	--------------	--

5区遺構外の出土遺物

第192図 PL.123	1	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口 底	12.6 8	高 2.9	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り、体部に指頭痕が残る。	外面にススが 付着
第192図	2	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～胴部片	口 底	11.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第192図	3	須恵器 杯	遺構確認面 底部片	底	5		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第192図 PL.123	4	須恵器 椀	遺構確認面 口縁部～底部 1/3	口 底	14.6 8	台 高 8 4.7	細砂粒・黒粒/還 元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第192図	5	須恵器 椀	遺構確認面 口縁部片	口 底	11.6		細砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形、回転右回りか。	
第192図	6	須恵器 椀	遺構確認面 口縁部～胴部 1/4	口 底	17.7		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第192図 PL.123	7	須恵器 椀	遺構確認面 胴部～底部1/3	底 台	6 5.4		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。高台は貼付、底部切り離し技法不明。	

3区1号竪穴住居

第198図 PL.123	1	土師器 杯	床面上10cm以上 完形	口 底	13.1 12.2	高 5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。	
第198図	2	土師器 杯	埋没土 1/4	口 底	12.9 12.2	高 3.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第198図	3	土師器 高杯	埋没土 脚部上半				細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部は脚部に接合か。脚部はヘラ削り、内面はヘラナデ。	
第198図	4	土師器 鉢	掘り方 口縁部～体部	口 底	13.7		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第198図 PL.123	5	土師器 甕	床面上10cm以上 口縁部～胴部	口 底	22.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目、器面磨滅のため詳細不明。内面胴部はヘラナデ。	
第198図 PL.123	6	土師器 甕	P1底面上8cm 完形	口 底	20 8	高 胴 28.6 29.1	細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上半が縦位、下半が横位のヘラ削り、底部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	焼成後胴部 中位に一對 の穿孔
第198図 PL.123	7	土師器 甕	床面上14cm 口縁部～胴部	口 底	15.4 19.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第198図	8	土師器 甕	P1底面上12cm 口縁部～胴部	口 底	15.2		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラナデ。内面は胴部ヘラナデ。	

3区2号竪穴住居

第199図 PL.123	1	土師器 鉢	カマド燃焼面上 8cm 1/3	口 底	9.4 5.6	高 7.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り後上位・中位にヘラナデ、底部はヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第199図	2	土師器 鉢	カマド燃焼面上 5cm 口縁部～体部	口 底	15.5× 13.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄	口縁部は上下に波打つような整形。口縁部横ナデ、体部はヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	

3区3号竪穴住居

第200図 PL.124	1	土師器 杯	カマド燃焼面直上 1/2	口 最	12.9 13.4	高 5.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は体部から口縁部に斜放射状ヘラ磨き。	
第200図 PL.124	2	土師器 高杯	カマド燃焼面直上 脚部一部欠				細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	杯身部は脚部に接合。杯身部は口縁部が横ナデ、底部はヘラ削り、脚部は横ナデ。内面は杯身部口縁部に斜放射状ヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第200図	3	土師器 甕	カマド燃焼面直上 口縁部～胴部中 位	口 底	19.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第200図 PL.124	4	土師器 甕	カマド燃焼面直上 ～10cm 口縁部～胴部中 位	口 底	16.2 26.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、上位は器面磨滅のため単位不鮮明。内面は胴部がヘラナデ。	
第201図 PL.124	5	土師器 甕	カマド燃焼面直上 口縁部～ 胴部中位	口 底	18.6		細砂粒/良好/浅黄 橙	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、頸部下は器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がヘラナデ。	
第201図 PL.124	6	土師器 甕	カマド燃焼面直上 口縁部～胴部中 位	口 底	15.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第201図	7	土師器 甕	カマド燃焼面直上 頸部～胴部中 位	頸 胴	12.6 20.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄灰	内面胴部に輪積痕が残る。頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	

出土遺物観察表

3区3号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第201図	8	土師器 甕	カマド燃焼面直上 胴部下位～底部	底	6.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

3区5号竪穴住居

第203図 PL.124	1	土師器 高杯	P8底面直上 杯身部	口	16.5		細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部は横ナデ、底部上半は木口に残るヘラナデ、下半はナデ。内面は杯身部底部がヘラナデ。	
第203図 PL.124	2	土師器 台付甕	床面下 口縁部～胴部下位	口 胴	13.3 17.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部上半はハケ目(1cmあたり9～10本)、下半はヘラ磨き。内面は頸部にハケ目、胴部はヘラ磨き。	
第203図 PL.124	3	土師器 小型甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口 胴	9.8 10.3		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデか。内面胴部はヘラナデ。	
第203図 PL.124	4	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片	口	19.5		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部から胴部はハケ目(1cmあたり5～7本)後、口縁部は横ナデ。内面は口縁部から胴部上位上半にハケ目、胴部上位下半はヘラナデ。	
第203図 PL.124	5	手捏ね 鉢形	床面上14cm 口縁部一部欠損	口 底	6.5 3.7	高 5.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラナデ。内面は底部から体部にナデ。	

3区6号竪穴住居

第206図	1	土師器 台付甕	埋没土 口縁部片	口	14.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第206図	2	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片				細砂粒/良好/灰黄	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6本)、内面胴部はナデ。	
第206図	3	土師器 杯	掘り方 1/4	口 稜	13.8 11.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第206図 PL.125	4	土師器 杯	埋没土 1/5	口 稜	13.3 12.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第206図 PL.125	5	土師器 高杯	カマド燃焼面直上 3cm 脚部一部欠	口 脚	16.3 11.2	高 11.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口唇部は横ナデ、口縁部から底部ヘラ削り後ヘラ磨き、器面磨滅で不鮮明。脚部は上半がヘラ磨き、下半は横ナデ。内面は杯身部がヘラ磨きか。脚部は上半がナデ。	
第206図	6	土師器 甕	カマド埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	18		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第206図 PL.125	7	土師器 甕	床面上14cm 口縁部～胴部	口 胴	16.2 19		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第206図	8	土師器 甕	カマド燃焼面直上 3cm 胴部下半～ 底部	底 胴	5.6 20.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第206図	9	土師器 杯	埋没土 1/5	口	13.8		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。	
第206図	10	土師器 甕	床面上7cm 口縁部～ 胴部上位	口	23		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第206図	11	須恵器 椀	埋没土 口縁部片	口	14		細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。	
第206図	12	須恵器 椀	埋没土 底部	底 台	7 6		細砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。底部は器面磨滅のためやや不鮮明。	
第206図	13	須恵器 長頸壺	埋没土 口縁部片	口	15		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。外面に降灰が付着。	
第206図	14	須恵器 広口壺	埋没土 口縁部片	口	13.9		細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	
第206図	15	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	17.2		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は内外とも横ナデ。	
第206図 PL.125	16	土製品 土錘	底面下 完形	長 厚	4.7 2.8× 2.5	孔 重	0.3 32.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。

3区7号竪穴住居

第207図 PL.125	1	土師器 杯	床面上2cm 2/3	口 稜	12.9 12.3	高 5.1	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/やや軟質/橙	口唇端部に平坦面、口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第207図 PL.125	2	土師器 杯	床面上2cm 1/2	口 稜	13.4 11.6	高 4.7	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第207図 PL.125	3	土師器 杯	床面上2cm 1/2	口 最	12.2 13	高 5.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	
第207図	4	土師器 杯	床面上2cm 1/3	口 稜	13.2 12		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第207図 PL.125	5	土師器 杯	床面上4～5cm 1/3	口 稜	13.8 13.3		細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/やや軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第207図	6	土師器 杯	床面上4～5cm 1/4	口 稜	13 11.6		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	
第207図	7	土師器 杯	床面上4～5cm 1/4	口 稜	13 12.4		細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/橙	口唇端部に平坦面、口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

3区7号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第207図	8	土師器 杯	床面上4~5cm 口縁部片	口 最	12.6 13.6			細砂粒/良好/橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部はへら削り。内面に斜放射状へら磨き。
第207図 PL.125	9	土師器 甗	床面上2cm 2/3	口 底	19.4 9.6	高	2.38	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへら磨き。

3区8号竪穴住居

第209図 PL.125	1	土師器 杯	カマド燃焼面上5cm 完形	口 縁	12.4 12.5	高	5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第209図 PL.125	2	土師器 杯	貯蔵穴底面上30cm 完形	口 縁	12.5 12.5	高	4.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第209図 PL.125	3	土師器 杯	カマド燃焼面上4cm 完形	口 縁	12.6 12.4	高	5.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第209図 PL.125	4	土師器 杯	カマド燃焼面下 完形	口 縁	16.3 15.8	高	5.8	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第209図	5	土師器 杯	床面上6cm 1/4	口 縁	12.4 12.5			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第209図 PL.125	6	土師器 高杯	カマド燃焼面下 杯身部上半欠	脚	9.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部は横ナデ、底部はへら磨き。脚部は上半がへら削り、下半は横ナデ。内面は杯身部がへら磨き、脚部はへらナデ。
第209図	7	土師器 鉢	床面上4cm 1/4	口	12.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部はへら削り、器面磨滅のため単位不明。
第209図 PL.126	8	土師器 甗	カマド床面直上 ほぼ完形	口 底	25.7 9.4	高	29.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り後上半をナデ。内面胴部はへらナデ。
第209図 PL.126	9	土師器 甗	カマド燃焼面上16cm 3/4	口 底	15 7.2	高	7.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り後上半にナデ、底部はへら削り。内面は底部から胴部がへらナデ。
第210図 PL.126	10	土師器 甗	カマド燃焼面上10cm 3/4	口 底	17.8 7.6	高 胴	32.3 22.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面は胴部から胴部がへらナデ。
第210図 PL.126	11	土師器 甗	カマド燃焼面上9cm 1/3	口	17.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り後上半にへら磨き、下半は器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がへらナデ。
第210図	12	土師器 甗	貯蔵穴底面直上 頸部~底部	底 胴	7.6 23.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部はへら削り、胴部はへら削り後へら磨き、一部器面磨滅のため単位不明。内面はへらナデ。
第209図	13	土師器 甗	床面上7cm 口縁部~胴部上 位	口	23.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第209図 PL.126	14	土師器 甗	貯蔵穴底面直上 口縁部~ 胴部上位	口	19.1			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り後、へら磨き、器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がへらナデ。
第209図	15	土師器 甗	床直 胴部下位~底部	底	7.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積痕が残る。底部はへら削り、胴部はへら削り後中位はへら磨きか。内面は木口によるへらナデ。
第209図	16	土師器 甗	カマド埋没土 胴部下位~底部	底	7.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。
第210図 PL.125	17	土製品 土玉	床直 完形	長 径	2.5 2.5	孔 重	0.5 15.7	微砂粒/良好/灰黄	外面はナデ。
第210図 PL.125	18	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	13.9 6.0	厚 重	4.8 543.6	粗粒輝石安山岩//	円礫を利用している。上下端部に僅かに敲打の痕跡が認められる。

3区9号竪穴住居

第212図 PL.127	1	土師器 杯	床面上4cm 1/3	口 縁	12.8 12.4			細砂粒/良好/橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第212図 PL.127	2	土師器 杯	床面上3cm 1/3	口 縁	17.5 14.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。高杯か
第212図	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 縁	14 13			細砂粒・褐粒/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第212図	4	土師器 杯	床面下 1/4	口 最	12.1 13			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はへら削り。内面はへら磨き。
第212図	5	土師器 杯	床面下 口縁部~底部片	口	14			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部と底部はへら削り。内面はへら磨き。
第212図 PL.127	6	土師器 高杯	カマド燃焼面上 8cm杯身部1/2・ 脚一部	口	16.5			細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部は横ナデ、底部から脚部上半はへら削り、下半は横ナデ。内面は脚部がへらナデ。
第212図 PL.127	7	土師器 鉢	床直 3/4	口 底	16.4 6.5	高	10.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はへら削り。内面は底部から体部にへらナデ。
第212図 PL.127	8	土師器 甗	貯蔵穴底面上2cm 3/4	口 底	16.9 8.6	高 胴	31 21	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面口縁部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面は胴部がへらナデ。
第212図	9	土師器 甗	貯蔵穴底面上4cm 床面下胴部 ~底部	底	7.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。

3区10号竪穴住居

第214図 PL.127	1	土師器 杯	カマド掘り方 1/3	口 縁	10.9 10.3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。
第214図 PL.127	2	土師器 杯	埋没土 1/4	口 縁	9.9 9.1			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。



出土遺物観察表

3区10号竪穴住居

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第214図	3	土師器 杯	カマド掘り方 口縁部片	口 最	12.9 14.1			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は斜放射状 上ヘラ磨き。
第214図	4	土師器 器台	埋没土 脚部片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に透孔が4ヶ所。外面はヘラ削り、大半は器面磨滅の ため単位不明。内面は上半がヘラナデ、下半はハケ目後 ナデ。
第214図	5	土師器 高杯	埋没土 杯身部1/4	口	13.8			細砂粒/良好/明赤 褐	杯身部口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り後ナデ。
第214図	6	土師器 高杯	床面上3cm 脚部片	脚	7.1			細砂粒/良好/橙	杯身部は底部にホゾ状突起を有し、脚部に差し込み接合。 脚部は上半がヘラナデ、下半は横ナデ、内面はヘラナデ。
第214図 PL.127	7	土師器 鉢	埋没土 1/4	口	14.8 0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/暗灰黄	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ か、器面磨滅のため単位不明。
第214図 PL.127	8	土師器 甗	カマド燃焼面上 2～12cm 2/3	口 胴	12 20.3			細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。
第214図	9	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上 位	口	17			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。

3区12号竪穴住居

第217図 PL.128	1	土師器 杯	床面上7cm 3/4	口 最	11.8 12.3	高 5.5		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。内面は器面剥離 のため不明。	
第217図	2	土師器 杯	P1埋没土 口縁部一部～ 底部1/2	口 稜	11.8 11.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第217図 PL.128	3	土師器 杯	床面上8cm 1/4	口 稜	13 13.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第217図 PL.128	4	土師器 杯	カマド燃焼面上 2cm 1/4	口 稜	12.9 13.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第217図	5	土師器 杯	床面上3cm 1/4	口 稜	14 14.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第217図	6	土師器 高杯	床面上4cm 脚部のみ					細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部は外面がヘラ削り、内面はヘラ ナデ。	
第217図 PL.128	7	土師器 鉢	貯蔵穴底面上38cm 3/4	口 高	12.7 5.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面体部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、体部は上半が ナデ、下半がヘラ削り、底部は手持ちヘラ削り。内面体部 はヘラナデ後放射状ヘラ磨き。	
第217図	8	土師器 鉢	床直 口縁部片	口	15.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は器面磨滅のため整形不明。内面は 体部にヘラナデ。	
第217図 PL.128	9	土師器 有孔鉢	カマド床直 2/3	口 底	16.3 7.6	高 孔 11 1.9× 1.3		細砂粒/良好/浅黄	口縁部は折り返し。口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ、器 面磨滅のため単位不明。底部はヘラ削り。内面体部はヘラ ナデ。	
第217図	10	土師器 台付甗	埋没土 口縁部片	口	18			細砂粒/良好/灰黄	口縁部は横ナデ。	
第217図	11	土師器 台付甗	埋没土 口縁部片					細砂粒/良好/灰黄	口縁部は横ナデ。	
第217図 PL.128	12	土師器 甗	カマド床直 3/4	口 底	15 8.4	高 胴 17.5		細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部もヘラ削 りか。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第217図 PL.128	13	土師器 甗	床直 床面上3cm 3/4	口 底	16 8	高 胴 29.4 22		細砂粒・粗砂粒/ 良好/淡黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、上半は器面磨滅のため 単位不明。内面は胴部がヘラナデ。	
第217図	14	土師器 甗	床面上21cm 口縁部～ 胴部上位	口	22.4			細砂粒・褐粒/良 好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削りか、器面磨滅の ため単位不明。内面は胴部がヘラナデ、器面磨滅のため単 位不明。	
第217図 PL.128	15	石製品 石製模造品 (剣形)	カマド床面上8cm ほぼ完形	長 幅	(5.3) 1.7	厚 重 0.5 6.4		蛇紋岩//	孔径1.5mm。表面、裏面ともに三つの平坦な作出面で構成 される。それぞれの作出面には横方向の擦痕が著しい。	中世

3区13号竪穴住居

第219図 PL.128	1	土師器 杯	床面下 3/4	口 稜	11.1 10.3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第219図	2	灰釉陶器 長頸壺	床面下 頸部					微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法不明。	
第219図	3	灰釉陶器 長頸壺	床面下 胴部上位片					微砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転右回りか。施釉方法不明。	
第219図	4	土師器 甗	床面下 口縁部～胴部片	口	14.5			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第219図 PL.128	5	土師器 鞆羽口か	床面下 体部					細砂粒/良好/橙	高杯脚部を製作途中に用途変更か。外面はヘラ削りか、器 面磨滅のため不明。内面はヘラナデ。	
第219図 PL.128	6	礫石器 棒状礫	床面下 完形	長 幅	18.2 7.6	厚 重 5.0 906.7		粗粒輝石安山岩//	円礫を利用している。	江戸時代
第219図 PL.128	7	礫石器 棒状礫	床面下 完形	長 幅	16.7 7.3	厚 重 4.5 716.8		粗粒輝石安山岩//	円礫を利用している。上下端部に僅かに敲打の痕跡が認め られる。	
第219図 PL.128	8	礫石器 棒状礫	床面下 ほぼ完形	長 幅	13.9 4.9	厚 重 4.2 530.6		変質安山岩//	垂円礫を利用している。上端部に僅かに敲打の痕跡が認め られる。右側面に剥離痕が認められるが、敲打による剥落 と考えられる。	中世

3区14号竪穴住居

第220図	1	土師器 器台または 高杯	床直 脚部片	脚	17.8			細砂粒/良好/明赤 褐	脚部に透孔が3ヶ所。外面はヘラ磨きか。内面はハケ目後 ナデ。
-------	---	--------------------	-----------	---	------	--	--	----------------	-----------------------------------

3区14号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第220図	2	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	17		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後、 肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第220図	3	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部上 位	口	17		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6～7 本)。内面胴部はナデ。	
第220図 PL.129	4	土師器 甕	カマド燃焼面上 胴部～底部1/2	底 胴	8.2 19.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	底部へラ削り、胴部もへラ削り、中位より上位は器面磨滅 のため単位不明。内面はへラナデ。	
第220図	5	手捏ね 碗形	カマド掘り方 1/2				細砂粒/良好/明赤 褐	内外面ともナデ。	

3区15号竪穴住居

第222図 PL.129	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 稜	11.4 10.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへラ削り。	
第222図 PL.129	2	土師器 杯	床直 1/4	口 稜	11.7 11.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへラ削り。	
第222図 PL.129	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 稜	11.9 10		細砂粒/良好/橙	口唇端部に平坦面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(稜下) から底部は手持ちへラ削り。	
第222図	4	土師器 杯	埋没土 1/4	口	12.9		細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへラ削り、底 部は手持ちへラ削り。内面体部は斜放射状へラ磨き。	
第222図	5	土師器 杯	カマド燃焼面上 口縁部～体部片	口 稜	11.8 11		細砂粒/良好/橙	口唇端部に平坦面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(稜下) から底部は手持ちへラ削り。	
第222図	6	土師器 甕	カマド掘り方 胴部下位片	底	7.6		細砂粒/良好/橙	外面はへラ削り。内面は最下部がへラ削り以外はへラ磨き。	
第222図 PL.129	7	土師器 甕または甕	床直 口縁部～胴部片	口	21		細砂粒/良好/橙	外面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はへラ削り後 雑なへラ磨き。内面は胴部はへラ磨き。	
第222図	8	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部上 位1/2	口	14.1		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部と底部はへラ削り。内面は 底部から胴部がへラナデ。	
第222図	9	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	18.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り。内面は胴部が へラナデ。	
第222図	10	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部上 位				細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第222図	11	土師器 台付甕	床直7cm 口縁部～ 胴部上位	口	16.9		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)。 内面胴部はナデ。	
第222図	12	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)。 内面胴部はナデ。	
第222図 PL.129	13	土製品 土玉	床直 完形	長 径	2.1 2.3	孔 重	0.4 10.7	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。
第222図 PL.129	14	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	12.7 7.0	厚 重	4.1 540.0	石英閃緑岩//	円礫を利用している。
第222図 PL.129	15	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	18.0 6.1	厚 重	5.5 932.9	変質玄武岩//	円礫を利用している。下端部に敲打の痕跡が認められる。
第222図 PL.129	16	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	14.6 8.1	厚 重	5.2 897.1	粗粒輝石安山岩//	円礫を利用している。上下端部に僅かに敲打の痕跡が認め られる。
第222図 PL.129	17	礫石器 棒状礫	床直 ほぼ完形	長 幅	14.5 6.5	厚 重	5.9 100.4	変質玄武岩//	亜円礫を利用している。正面上部から上端部にかけて敲打 痕が認められる。下端部にも僅かに敲打の痕跡が残る。
第222図 PL.129	18	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	13.5 6.8	厚 重	4.1 586.8	粗粒輝石安山岩//	円礫を利用している。
第222図 PL.129	19	礫石器 棒状礫	床直 完形	長 幅	13.7 7.5	厚 重	5.1 988.8	変質安山岩//	亜円礫を利用している。

3区17号竪穴住居

第225図 PL.129	1	土師器 杯	床直8cm 完形	口 高	12.8 5.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がへラ削り、底 部は手持ちへラ削り。内面体部は斜放射状へラ磨き。
第225図 PL.129	2	土師器 杯	床直下 1/4	口 稜	12.8 12			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへラ削り、 器面磨滅のため単位不明。
第225図 PL.129	3	土師器 高杯	カマド床面上5～ 8cm 脚部一部欠	口 稜	12.2 11.6	脚 高	7.8 8.5	細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は口縁部が横ナデ、体部は器 面磨滅のため不明、脚部上半はへラ削り、下半は横ナデ。
第225図	4	土師器 高杯	床直 脚部1/2	脚	11			細砂粒/良好/橙	外面は上半がへラナデか、下半は横ナデ。内面は上半がへ ラナデ。
第225図 PL.129	5	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位1/2	口	16.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへラ削り、器面磨滅のた め単位不鮮明。内面は胴部がへラナデ。
第225図	6	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口 高	13.8 20	胴	19.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面は全体的にハケ目(1cmあたり5本)後、口唇部は横ナ デ、胴部下半は器面磨滅のため単位不明。内面は口縁部が ハケ目、胴部はへラナデ。
第225図 PL.129	7	礫石器 磨石	床直 完形	長 幅	13.8 12.0	厚 重	3.7 905.5	石英閃緑岩//	扁平な円礫を利用している。表面及び裏面の中央部に磨面 が認められる。縁辺部に炭化物の付着が著しい。

3区18号竪穴住居

第227図 PL.130	1	土師器 杯	カマド埋没土 口縁部～底部1/3	稜	13.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへラ削り。 内面底部に ススが付着
-----------------	---	----------	---------------------	---	------	--	--	----------	---



出土遺物観察表

3区18号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第227図 PL.130	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 稜	11.8 10.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	外面口縁部に ススが付着
第227図	3	土師器 甕	埋没土 胴部下位～底部1/3	底	6.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	外面胴部に 粘土付着
第227図	4	土師器 甕	埋没土 胴部下位～底部	底	8.8		細砂粒/良好/橙	底部はヘラ削り、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面は器面 剥離のため整形不明。	

3区19号竪穴住居

第229図 PL.130	1	土師器 器台	床直 上部～脚部1/2	脚	12.5		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部に上下2段各4ヶ所の透孔。外面はヘラ磨き。内面は 上半がヘラナデ、下半はヘラ磨き。		
第229図 PL.130	2	土師器 小型壺	床直 口縁部一部欠	口 底	7.2 5	高 8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部はナデ、胴部はヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は 底部から胴部にヘラナデ。		
第229図 PL.130	3	土師器 小型甕	床直 1/2	口 底	12.4 4	高 11.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面は全面にヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、底部から 胴部はハケ目(1cmあたり8本)		
第229図 PL.130	4	土師器 台付甕	床面下 口縁部～胴部 1/4	口	10		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後 肩に横位のハケ目。内面は胴部がヘラナデ。		
第229図 PL.130	5	土師器 台付甕	貯蔵穴埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	15.2		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後 肩に横位のハケ目。内面は胴部がヘラナデ。		
第229図	6	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部上 位1/3	口	15.9		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後 肩に横位のハケ目。内面は胴部がヘラナデ。		
第229図	7	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～胴部上 位片	口	16.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後 肩に横位のハケ目。内面は胴部がヘラナデ。		
第229図 PL.130	8	弥生土器 甕	床面上5cm 頸部～胴上半 2/3				//B	括れ部から体部下半にかけてRL縄文を横位帯状に多段施 文。	吉ヶ谷式	
第229図 PL.130	9	土製品 土錘	埋没土 完形	長 径	3.8 1	孔 重	0.3 3.3	微砂粒/良好/灰黄 褐	外面はナデ。	
第229図 PL.130	10	石製品 石製品	埋没土 完形	長 幅	7.6 2.9	厚 重	0.9 22.0	黒色頁岩//	裏面の全面に自然面を残す。その形状から円礫を利用して いる。剥片を素材として、縁辺部からの二次加工により整 形している。	

3区20号竪穴住居

第230図 PL.130	1	土師器 杯	床面上30cm 1/4	口 底	11 6.6	高	3.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第230図 PL.130	2	須恵器 椀	床面上25cm 1/2	口 底	11.8 5.2	高	3.6	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第230図	3	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第230図	4	土師器 甕	床面上7cm 口縁部～胴部1/2	口	14			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、胴部は器面磨滅のため不明。内面は頸部 にヘラナデ。	
第230図	5	土師器 甕	床面上7cm 胴部下位～ 底部1/2	底	8.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は器面剥離のため整形不明。	
第230図	6	土師器 甕	床面上24cm 胴部～底部	底	4.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り、内面はヘラナデ、器面磨滅のため 単位不明。	

3区22号竪穴住居

第232図 PL.130	1	土師器 杯	床直 1/3	口 稜	11.8 10.8	高	4.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第232図 PL.130	2	土師器 杯	床面上3cm 1/4	口 稜	12.9 12	高	5.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第232図	3	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	17			細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第232図	4	手捏ね 椀形?	埋没土 底部					細砂粒/良好/浅黄	内外面ともナデ。	
第232図	5	土師器 高杯	床面上27cm 脚部1/4	脚	14.8			細砂粒/良好/明赤 褐	脚部中に透孔が3ヶ所。外面はヘラ磨き、内面はヘラナ デ。	

3区23号竪穴住居

第233図 PL.130	1	土師器 鉢	埋没土 体部～底部2/3	底	6.8			細砂粒/良好/にぶ い褐	底部は手持ちヘラ削り、体部は指頭痕が残る。内面は横ナ デ。	
第233図 PL.130	2	須恵器 椀	床直 底部	底 台	5.6 5			細砂粒/酸化焰/に ぶい褐	ロクロ整形、回転右回り。底部回転糸切り後高台を貼付。	
第233図 PL.130	3	土師器 甕	床面上13cm 口縁部～ 胴部上位1/3	口	18			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面頸部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部 はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第233図	4	土師器 甕	床直 胴部～底部	底	4.6			細砂粒/良好/橙	底部はヘラ削りか、胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

3区24号竪穴住居

第234図 PL.131	1	土師器 杯	床面上3cm 2/3	口 稜	12.7 11.3	高	4.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
-----------------	---	----------	---------------	--------	--------------	---	-----	------------------	-----------------------------	--

3区24号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第234図	2	土師器 杯	床直 口縁部～底部片	口 稜	13.7 11.5			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第234図 PL.131	3	土師器 甕	床面上3cm 口縁部～胴部 1/3	口	20.9			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。
第234図	4	土師器 甕	床面上10cm 底部1/2	底	7.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

3区30号竪穴住居

第236図 PL.131	1	土師器 杯	床面上8cm 口縁部一部欠	口 稜	12.8 12.3	高	5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第236図 PL.131	2	土師器 杯	埋没土 1/2	口 稜	11.9 10	高	3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りか、 器面磨滅のため単位不明。	
第236図	3	土師器 杯	埋没土 1/4	口 最	10.6 11.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。 内面は斜放射状ヘラ磨き。	
第236図	4	土師器 高杯	床面上6cm 脚部片					細砂粒/良好/浅黄 橙	杯身部は脚部に接合。内面脚部に輪積痕が残る。外面はヘ ラ磨き、内面はヘラナデ。	
第236図 PL.131	5	土師器 甕	床直 胴部一部欠損	口 底	23.8 8.8	高	22.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第236図 PL.131	6	土師器 甕	床直 2/3	口 底	14.4 6	高 胴	17.4 16.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、頸部 下にナデ部分が残る。胴部と底部はヘラ削り。内面は底部 から胴部がヘラナデ。	
第236図 PL.131	7	土師器 甕	P2床面上4cm 口縁部～ 胴部一部欠	口 底	14.9 5.9	高 胴	32.8 20.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き、底 部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	成形時の歪 みが大きい
第236図	8	土師器 甕	床直 1/4	口 底	14.8 5.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部がヘラナデ。	
第236図	9	土師器 甕	床直 口縁部～ 胴部上位1/3	口	15.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第237図 PL.132	10	土師器 甕	P1床面上4cm 頸部～ 胴部一部欠	底 胴	8.5 21			細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶい 黄橙	底部はヘラ削り、胴部はヘラ磨き、器面磨滅部分があり。 内面はヘラナデ。	
第237図	11	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	15.8			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第237図	12	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	16.6			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)と 部分的に横位のハケ目。	
第237図 PL.131	13	鉄製品 刀子	埋没土 一部欠損	長 幅	12.5 1.5	厚 重	1.2 15.64	//	棟側に関を持ち刃側はなだらかに茎に移行する。刃の先端 は劣化破損する、茎は細く長い柄の木質等は見られない。	

3区31号竪穴住居

第238図 PL.132	1	鉄製品 鎌	床面上9cm 一部欠損	長 幅	7.7 2.1	厚 重	0.8 10.44	//	両側に深く腸裂りを持つ三角形の鉄鎌で茎との境を一周す る形で段を持つ、茎は1cm程で破損する。矢柄および取付 け部分の構造は確認できない。
-----------------	---	----------	----------------	--------	------------	--------	--------------	----	---

3区35号竪穴住居

第238図 PL.132	1	土師器 杯	カマド床直 1/4	口 稜	15.4 15.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 口唇部は大きく外反する。
第238図	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 稜	11.8 11			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第238図	3	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 稜	11.8 11			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第238図	4	土師器 杯	埋没土 1/4	口	19.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。

3区36号竪穴住居

第239図	1	土師器 高杯	床直 脚部片					細砂粒/良好/浅黄 褐	杯身底部と脚部の間に径1mmの孔あり。外面はヘラ削り、 内面はヘラナデ。
-------	---	-----------	-----------	--	--	--	--	----------------	---

3区38号竪穴住居

第241図 PL.132	1	土師器 高杯	床面下 2/3	口	16.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、 底部はヘラ削り、脚部はヘラ磨きか。内面は杯身部の底部 から口縁部下半と脚部がヘラナデ。
第241図 PL.132	2	土師器 高杯	床直 杯身部一部欠	口	17.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部底部はホゾ状突起で脚部と接合。杯身部口縁部は横 ナデ、底部はヘラ削り、器面磨滅のため単位不明。
第241図	3	土師器 高杯	床面下 脚部2/3					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部底部はホゾ状突起で脚部と接合。脚部上半はナデ、 下半にハケ目が残る。内面は上半がヘラナデ、下半は横ナ デ。
第241図	4	土師器 高杯	床面上4cm 脚部1/2	脚	14.2			細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶい 黄橙	脚部上半はヘラ磨きか。器面磨滅のため不鮮明、下半は横 ナデ。内面は上半がヘラナデ。
第241図	5	土師器 高杯	床直 脚部1/3					細砂粒/良好/明褐	脚部上半は縦位のヘラナデ、下半は横ナデ。内面は上半が 横位のヘラナデ。
第241図 PL.132	6	土師器 有孔鉢	床面上6cm 3/4	口 底	19.9 5.7	高 孔	13.1 2.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部上位にハケ目が残る。体部から底部 はヘラ削り。内面はヘラナデ。

出土遺物観察表

3区38号竪穴住居

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第241図 PL.132	7	土師器 小型壺	床面上8cm 完形	口 高	8.6 8.4	胴	7.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部上半はナデ、下半から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。	
第241図 PL.132	8	土師器 小型壺	床面上4cm 口縁部一部欠	口 高	9.4 10.5	胴	9.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部はナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部下半がヘラナデ、上半はナデ。	
第241図 PL.132	9	土師器 壺	床面下 口縁部欠	胴	13.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面胴部に輪積痕が残る。底部から胴部下半はヘラ削り、上半はナデ。内面はヘラナデ。	
第241図 PL.132	10	土師器 甕	床直 床面上7cm 口縁部～ 胴部下位	口 胴	14.6 26.3			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内面胴部に輪積痕が残る。口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はハケ目、器面磨滅のため不鮮明。内面胴部はヘラナデ。	
第241図 PL.132	11	礫石器 棒状礫	埋没土 ほぼ完形	長 幅	(7.3) 1.7	厚 重	0.8 15.0	変玄武岩//	小形の棒状の円礫を利用している。上端部方向からの剥離痕があり、上端部を敲打面として利用した可能性がある。	

3区28号土坑

第242図 PL.133	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 稜	12.8 11.2			細砂粒・褐粒/良 好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第242図 PL.133	2	土師器 器台	埋没土 脚部					細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が3ヶ所。外面はヘラ磨き、内面はヘラナデ。	
第242図	3	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	17.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。内面胴部はヘラナデ。	

3区61号土坑

第243図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口	16.8			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第243図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～頸部片	口	15.8			細砂粒/良好/浅黄	口縁部は横ナデ、頸部はヘラ削りか。	

3区64号土坑

第243図	1	土師器 皿	埋没土 口縁部～底部片	口 底	10.8 8.8			細砂粒/良好/橙	口縁部横ナデ、底部はヘラ削り。	
第243図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部片	口	15			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部横ナデ。	

3区65号土坑

第244図	1	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	18			細砂粒/良好/灰黄	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
-------	---	----------	----------------	---	----	--	--	-----------	-----------------------------	--

3区77号土坑

第244図	1	土師器 甕	底面上5cm 口縁部片	口	17.6			細砂粒/良好/浅黄	内面に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ。	
第244図	2	土師器 甕	底面上18cm 胴部～底部1/2	底 胴	6.4 20.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面に輪積痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面はハケ目(1cmあたり4本)後、一部にナデ。	

3区78号土坑

第244図 PL.133	1	土師器 高杯	底面上29cm 3/4	口 脚	18.6 14.2	高	14.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部は横ナデ後放射状ヘラ磨き、底部はヘラナデか、脚部もヘラ磨き。内面は杯身部口縁部に放射状ヘラ磨き、脚部上半にヘラナデ。	
第244図 PL.133	2	土師器 甕	底面上28cm 口縁部～胴部 1/3	口 胴	17.8 30			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面はハケ目(1cmあたり4～5本)後、口縁部上半に横ナデ、胴部の一部にヘラナデ。内面もハケ目後口縁部は横ナデ、胴部の一部にヘラナデ。	
第244図 PL.133	3	土師器 甕?	床面上30cm 胴部～底部	底	5			細砂粒/良好/灰黄	内面黒色処理。底部は手持ちヘラ削り、胴部はハケ目(1cmあたり5本)。内面は底部から胴部下位にヘラナデ、その上位はハケ目。	

3区81号土坑

第245図 PL.133	1	土師器 杯	床面上4cm 完形	口 稜	12.8 12.2	高	5.2	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第245図	2	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部 1/4					細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第245図	3	土師器 甕	床面上31cm 胴部下位～底部	底	7			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部は器面磨滅のため不明、胴部はヘラ削り。内面はヘラナデか。	
第245図 PL.133	4	土製品 土錘	埋没土 完形	長 径	5.5 3	孔 重	0.6 43.8	微砂粒/良好/明黄 褐	外面はヘラナデ。	

3区85号土坑

第245図 PL.133	1	土師器 台付甕	埋没土 脚部片	脚	8.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部端部は内側に折り返し。脚部上位にハケ目、中位・下位はナデ。内面は上位にナデ。	
-----------------	---	------------	------------	---	-----	--	--	------------------	--	--

3区86号土坑

第246図	1	土師器 杯	埋没土 口縁部～底部片	口 稜	11.8 11			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	外面口縁部 の一部にス スが付着
-------	---	----------	----------------	--------	------------	--	--	----------	-----------------------------	------------------------

3区2号ピット

第246図	1	土師器 鉢	埋没土 口縁部～体部片	口	9			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部は木口の残るヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
-------	---	----------	----------------	---	---	--	--	------------------	---------------------------------	--

3区17号ピット

第247図 PL.133	1	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	18.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
-----------------	---	----------	---------------------	---	------	--	--	------------------	---------------------------------	--

3区15号溝

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第249図 PL.133	1	土師器 杯	埋没土 1/4	口 稜	13.6 14.2	高 5	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に斜放射状ヘラ磨き。	
第244図 PL.133	2	土師器 高杯	埋没土 脚部3/4				細砂粒/良好/明赤 褐	内面に輪積痕が残る。外面は上半がヘラナデ、下半は横ナデ。内面は上半がナデ。	

3区1号土器集積

第252図 PL.134	1	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部	口	20.6		細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。外面は放射状ヘラ磨き、内面は器面剥離のため不鮮明。	
第252図 PL.134	2	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～胴部	口 胴	17.2 24.6		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部上位は縦位のハケ目(1cmあたり6本)、中位は斜めのハケ目。内面胴部はナデ。	
第252図 PL.134	3	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	17.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後肩に横位のハケ目。内面胴部はナデ。	
第252図	4	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位	口	12		細砂粒/良好/浅黄	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6～7本)。	
第252図	5	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第252図	6	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位片				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。	
第252図	7	土師器 台付甕	埋没土 口縁部～頸部片				細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、頸部はハケ目。	

3区2号土器集積

第253図	1	土師器 杯	埋没土 1/3	口 底	12.2 7.8	高 2.8	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第253図	2	土師器 杯	埋没土 1/3	口 底	16.8 15		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第253図	3	土師器 杯	埋没土 1/3	口 稜	8.2 8.6	高 4.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第253図 PL.134	4	土師器 高杯	遺構確認面 2/3	口 脚	17.6 13.6	高 12.6	細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。器面磨滅のため整形不鮮明、脚部下 半にハケ目が残る。内面は脚部上半にヘラナデ。	
第253図 PL.134	5	土師器 高杯	遺構確認面 1/2	口 脚	21.2 17.6	高 18	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は口縁部が横ナデ、底部から 脚部上半はヘラ磨き、端部は横ナデ。内面は脚部上半がヘ ラナデ。	
第254図 PL.134	6	土師器 高杯	遺構確認面 3/4	口 脚	17.2 12	高 15.2	細砂粒/良好/浅黄 橙	杯身部と脚部は接合、脚部内面に輪積痕が残る。杯身部は 器面磨滅のため不明。脚部はヘラ磨き。内面は杯身部は口 縁部下半から底部にヘラナデ。脚部は上半がヘラナデ、下 半が横ナデ。	
第254図 PL.134	7	土師器 高杯	遺構確認面 1/3	口 脚	19.8 13.4	高 14.6	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は口縁部下半から底部にヘラ ナデ。脚部は器面磨滅。内面は杯身部口縁部にハケ目が残 る。脚部上半はヘラナデ。	
第254図 PL.135	8	土師器 高杯	遺構確認面 ほぼ完形	口 脚	17.3 16.4	高 15.2	細砂粒/良好/浅黄	杯身部はホゾ状突起にて脚部と接合。杯身部底部と脚部周 圍にハケ目が残る。内面は脚部上半がナデ、下半は横ナデ。	
第254図 PL.135	9	土師器 高杯	遺構確認面 3/4	口 脚	17.1 13.7	高 13.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄	杯身部と脚部は接合。杯身部底部にハケ目が残る。他は器 面磨滅のため不鮮明。内面は脚部上半がヘラナデ。	
第254図 PL.135	10	土師器 高杯	遺構確認面 2/3	口 脚	21.6 16.6	高 16.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄	杯身部と脚部は接合。杯身部底部にヘラナデ、脚部は上位 にヘラ磨き、中位にヘラ削り、下位は横ナデ。内面は脚部 上半にヘラナデ。	
第254図 PL.135	11	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部2/3	口	19.6		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、底部は器面磨滅のため不明。	
第254図	12	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部1/3	口	16.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、底部はヘラナデ。	
第254図	13	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部1/3	口	18.4		細砂粒/良好/橙	器面磨滅のため整形不鮮明、口縁部下位から底部にかけて ハケ目が残る。	
第254図	14	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部1/3	口	16		細砂粒/良好/にぶ い橙	口唇部は横ナデ口縁部から底部はヘラナデ。	
第254図	15	土師器 高杯	遺構確認面 脚部1/2				細砂粒/良好/明赤 褐	杯身部底部にホゾ状差込みで脚部と接合。脚部は上半が ヘラナデ、下半は横ナデ。内面は脚部がヘラナデ。	
第254図	16	土師器 高杯	遺構確認面 脚部1/2	脚	14.2		細砂粒/良好/橙	脚部上半は器面磨滅、下半にはハケ目が残る。内面は上半 がヘラナデ、下半はハケ目。	
第254図 PL.135	17	土師器 脚付鉢	遺構確認面 鉢身部	口	15.3 0		細砂粒/良好/浅黄 橙	身部と脚部は接合。身部は口縁部が横ナデ、体部と底部は ヘラ削り。	
第255図 PL.135	18	土師器 脚付甕	遺構確認面 2/3	脚	13.4		細砂粒/良好/浅黄 橙	甕身部と脚部は接合。甕身部胴部はハケ目(1cmあたり3 本)、脚部もハケ目、器面磨滅のため単位不明。内面はヘ ラナデ。	
第255図	19	土師器 台付甕	遺構確認面 胴部下位～脚部				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部と脚部は接合。胴部・脚部ともヘラ削り。内面は胴部 がヘラナデ、脚部はナデ。	
第255図 PL.135	20	土師器 壺	遺構確認面 口縁部欠	底	4		細砂粒/良好/にぶ い橙	底部から胴部はヘラ削り後胴部にヘラ磨き、頸部は横ナデ。 内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第255図 PL.135	21	土師器 壺	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位				細砂粒/良好/浅黄 橙	頸部に凸帯が貼付。口縁部はヘラナデ、頸部にはハケ目後 凸帯とその下部に刺突文、胴部はヘラ磨き。内面は口縁 部から頸部にヘラ磨き、胴部はヘラナデ。	



出土遺物観察表

3区2号土器集積

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第255図 PL.135	22	土師器 甕	遺構確認面 2/3	口 高	16.4 15.8	胴	17	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部は木口の残るヘラ削り。内面は底部から胴部がヘラナデ。
第255図 PL.136	23	土師器 甕	遺構確認面 1/2	口 高	13.8 20	胴	19.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面は全体的にハケ目(1cmあたり5本)後、口唇部は横ナデ、胴部下半は器面磨滅のため単位不明。内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。
第255図 PL.136	24	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～胴部片	口 胴	14.2 15.4			細砂粒/良好/にぶ い橙	外面胴部に輪積痕が残る。口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はヘラナデ、器面磨滅のため不鮮明。内面胴部はヘラナデ。
第255図	25	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	18.6			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ磨き。内面は頸部にヘラ磨き、胴部はヘラナデ。
第255図 PL.136	26	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～胴部	口 胴	16.6 25.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、一部にハケ目が残る。内面は胴部がヘラナデ。

3区遺構外の出土遺物

第256図 PL.136	1	土師器 杯	遺構確認面 2/3	口 稜	12.5 12.1	高	6	細砂粒/良好/橙	口唇端部に平坦面を持つ。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第256図	2	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口 稜	12.4 11.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口唇端部に平坦面を持つ。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第256図 PL.136	3	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口 稜	12.9 9.8			細砂粒/軟質/橙	口唇端部は平坦面を持つ。口縁部は横ナデ、体部(稜下)手持ちヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。
第256図	4	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部片	口 稜	12 10.5			細砂粒/良好/橙	器面剝離箇所が多く不鮮明。
第256図	5	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～体部片	口 稜	13 13			細砂粒/良好/明赤 褐	口唇端部は平坦面を持つ。口縁部は横ナデ、体部(稜下)手持ちヘラ削り。
第256図	6	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部片	口 稜	15 13.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第256図	7	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口	13.7			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面体部に斜放射状ヘラ磨き。
第256図 PL.136	8	土師器 器台	遺構確認面 3/4	口	8.4			細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が3ヶ所。受部は口唇部上半が横ナデ、下半はヘラ磨き。脚部はヘラナデ。内面は脚部がヘラナデ。
第256図	9	土師器 器台	遺構確認面 脚部1/3	脚	18.2			細砂粒/良好/橙	脚部に上下2段の透孔が3ヶ所。外面は器面磨滅のため不鮮明。内面はヘラナデか、器面磨滅のため単位不明。
第256図	10	土師器 器台	遺構確認面 脚部					細砂粒・褐粒/良 好/明赤褐	脚部に透孔が3ヶ所。内外面ともヘラナデ。
第256図	11	土師器 器台	遺構確認面 脚部					細砂粒/良好/橙	脚部に透孔が3ヶ所。外面は器面磨滅のため不鮮明。内面はヘラナデ。
第256図 PL.136	12	土師器 器台	遺構確認面 受部片					細砂粒/良好/橙	受部下部に凸帯、体部に三角形の透孔が3カ所。
第256図	13	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部1/2	口	23			細砂粒/良好/明赤 褐	杯身部と脚部は接合。口唇部は横ナデ、口縁部はナデ、底部はヘラ削り。
第256図	14	土師器 高杯	遺構確認面 口縁部片	口	16.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は放射状ヘラ磨き。内面は器面磨滅のため不明。
第256図	15	土師器 高杯	遺構確認面 杯身部下位～ 脚部					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。脚部はナデか。内面は上半がヘラナデ、下半は横ナデ。
第256図	16	土師器 卮	遺構確認面 頸部～底部	胴	11.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄	底部から胴部はヘラ削りか、器面磨滅のため単位不明。内面はヘラナデ。
第256図	17	土師器 小型壺	遺構確認面 胴部～底部	底 胴	3.2 10.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
第256図	18	土師器 小型壺	遺構確認面 胴部～底部	底 胴	5 14.7			細砂粒/良好/明赤 褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
第256図	19	土師器 小型壺	遺構確認面 胴部～底部	底	4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
第256図	20	土師器 壺	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	16			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ磨きか、器面磨滅のため単位不明。内面は胴部がヘラナデ。
第257図 PL.136	21	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	17			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり7本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデか。
第257図 PL.136	22	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	18.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はヘラナデ。
第257図 PL.136	23	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	15.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5～6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。
第257図 PL.136	24	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	18.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり6本)後、肩に横位のハケ目。内面胴部はヘラナデ。
第257図	25	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	10			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)後上位に横位のハケ目。
第257図	26	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部片	口	13.8			細砂粒/良好/浅黄	口縁部は横ナデ。



3区遺構外の出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第257図	27	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部片	口	15.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。	口唇部にス スが付着
第257図	28	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	9.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。	
第257図	29	土師器 台付甕	遺構確認面 脚部	脚	6.8		細砂粒/良好/明赤 褐	脚部は貼付、端部は内側に折り返し。外面はハケ目(1cm あたり5本)、内面はヘラナデ。	
第257図 PL.136	30	土師器 台付甕	遺構確認面 胴部下位～脚部	脚	9.3		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部は貼付、端部は内側に折り返し。胴部から脚部上位は ハケ目(1cmあたり5本)、内面脚部は上位がナデ、胴部は ヘラナデ。	
第257図 PL.136	31	土師器 小型甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部下位	口 胴	8 8.2		細砂粒/良好/浅黄 橙	内面胴部に輪積痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はハケ目 がかすかに残る。内面胴部はヘラナデ。	
第257図	32	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	15.7		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第257図	33	土師器 甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位	口	23.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。	
第257図 PL.136	34	土製品 土錘	遺構確認面 3/4	長 径	(4.3) 1.9	孔 0.4 (13.7)	微砂粒/良好/明黄 褐	外面はナデ。	
第257図 PL.136	35	土製品 土錘	遺構確認面 ほぼ完形	長 径	4.6 1.5	孔 0.7 9	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面はナデ。	
第257図 PL.136	36	土製品 土錘	遺構確認面 1/5	長 径	(2.2) 2.9	孔 0.3 (1.5)	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。	
第257図 PL.136	37	土製品 土錘	遺構確認面 1/2	長 径	(3.6) (1.8)	孔 (0.5) (5.5)	微砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はナデ。	

4区3号溝

第260図	1	土師器 杯	埋没土 1/3	口	10.8		細砂粒/良好/灰黄	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第260図	2	土師器 杯	埋没土 口縁部～体部片	口	14.6		細砂粒/良好/灰白	口縁部は横ナデ、体部はナデ。	
第260図 PL.137	3	土師器 高杯	埋没土 脚部	脚	8		細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。脚部は上半がヘラナデ、下半は横ナ デ。	
第260図	4	土師器 高杯	埋没土 脚部				細砂粒/良好/橙	杯身部底部はホゾ状突起を差し込むように脚部と接合。脚 部上半はヘラナデ、下半は横ナデ。	
第260図 PL.137	5	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位1/3	口	12.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第260図	6	土師器 甕	埋没土 口縁部～胴部片	口	12.6		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第260図	7	土師器 甕	埋没土 口縁部～ 胴部上位1/4	口	13.7		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部が ヘラナデ。	
第260図 PL.137	8	土師器 甕	埋没土 2/3	口 底	19.2 5	高 胴 31 22.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部がヘラナデ。	

4区遺構外の出土遺物

第264図	1	土師器 蓋	遺構確認面 摘み周辺	摘	4.7		細砂粒/良好/淡黄	内外面ともハケ目(1cmあたり5～6本)。	
第264図	2	土師器 杯	遺構確認面 1/4	口 稜	10.8 9.6		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第264図	3	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部	口 稜	12.2 11.2		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第264図	4	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部	口	12		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第264図	5	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～体部片	口	13.8		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。	
第264図	6	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部片	口	11.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半がナデ、下半がヘラ削り、底 部は手持ちヘラ削り。	
第264図	7	土師器 杯	遺構確認面 口縁部～底部片	口	11.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第264図	8	土師器 高杯	遺構確認面 脚部上位～ 杯身下位片				細砂粒/良好/橙	杯身部底部のホゾ状突起を脚部に差し込み接合。器面は磨 滅のため整形不鮮明。	
第264図	9	土師器 高杯	遺構確認面 脚部	脚	13.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	外面は上半がヘラ削りか、下半は横ナデ。内面は上半がヘ ラナデ。	
第264図	10	須恵器 杯	遺構確認面 口縁部～ 底部1/4	口 底	12.8 7	高 2.6	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は回転ヘラ削りか。	
第264図	11	土師器 短頸壺	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位1/4	口	11.6		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面は胴部がヘラナデ。	
第264図	12	土師器 甕	遺構確認面 胴部片				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部外面は4段の波状文、内面はヘラナデ。	

出土遺物観察表

4区遺構外の出土遺物

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値(cm/g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第264図 PL.137	13	須恵器 甕	遺構確認面 底部				細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	外面にはカキ目(不定方向)、内面は同心円状アテ具痕が残る。	
第264図 PL.137	14	礫石器 敲石	遺構確認面 2/3	長 幅	13.0 5.4	厚 重	4.8 479.2	砂岩//	上下端部に敲打の痕跡が集中する。上下端部はともに平坦な形態であり、敲打行為が連続したことにより平坦面が形成されたと判断される。

5区3号土坑

第266図	1	土師器 台付甕	埋没土 口縁部片	口	12			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ。	
-------	---	------------	-------------	---	----	--	--	-----------------	----------	--

5区遺構外の出土遺物

第267図	1	土師器 台付甕	遺構確認面 口縁部～ 胴部上位片	口	13			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6本)。内面胴部はナデ。	
第267図 PL.137	2	手捏ね 皿形	トレンチ 3/4	口 高	6.9 2.3			細砂粒/良好/褐灰	内外面ともナデ、体部に指頭痕が残る。	
第267図 PL.137	3	手捏ね 皿形	トレンチ 完形	口 高	4.3 1.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内外面ともナデ。	

1区遺構外の出土遺物

第268図 PL.137	1	縄文土器 深鉢	10土坑埋没土 口縁部片					//A	RL縄文を縦位施文し、口縁に1条の横位沈線文と以下に逆U字状の懸垂文を施す。外面やや風化、内面横磨き。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	-----------------	--	--	--	--	-----	---	--------

3区遺構外の出土遺物

第268図 PL.137	1	縄文土器 深鉢	遺構確認面 口縁部片					//A	半截竹管の集合沈線文を横位に施文。内外面やや風化。	諸磯b式
第268図 PL.137	2	縄文土器 深鉢	胴部片					//B	LR縄文を横位多段に施文。内外面やや風化。	諸磯b式
第268図 PL.137	3	縄文土器 深鉢	遺構確認面 口縁部片					//B	口縁にRL縄文を横位施文し、横位の隆帯文や沈線文を施す。内面横磨き。	加曾利E3式
第268図 PL.137	4	剥片石器 打製石斧	遺構確認面 4/5	長 幅	(9.4) 4.4	厚 重	1.7 81.3	黒色頁岩//	全体的に風化が著しい。周縁および全面に二次加工を施し整形している。正面と裏面の先端付近に摩滅部分が認められ、使用痕と判断される。上部欠損。	

5区遺構外の出土遺物

第268図 PL.137	1	縄文土器 深鉢	遺構確認面 胴部片					//B	RL縄文を横位多段に施文。内面やや風化。	加曾利E3式
-----------------	---	------------	--------------	--	--	--	--	-----	----------------------	--------